恋を忘れた男

Y．A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋を忘れた男

【Ｎコード】
Ｎ１１６３Ｇ

【作者名】
Ｙ．Ａ

【あらすじ】
これは、後の世に英雄と謳われたタクト・マイヤーズを支えた双璧の一人、アキオ・レイトン（オリキャラ）が、ムーンエンジェル隊との交流によって恋を思い出し、自分を取り戻して行く物語である。出生の秘密を抱えたアキオ・レイトンは、実の父親に命を狙われ、生き残る事だけを考えたために、人生の目的を完全に失っていた・・・・・。

プロローグ（前書き）

注意！

これは、オリキャラものなので、嫌いな方はスルーして下さい。
それと、若干？の設定変更等があるので、ツッコミは適度にお願いします。
あまり、虐めないでください。

プロローグ

地球で西暦が終了し、人類が全銀河系に進出する様になってから数万年……。

多くの星間国家が建設され、繁栄の真っ只中にあった人類は、突如発生した時空震クロノクェイクにより、宇宙への進出手段を完全に喪った。

そして、それから約二百年後、惑星トランスバールの衛星軌道上に現れた謎の天体《白き月》は、この惑星に住む人類に恩恵ギフトを授け、人類に再び宇宙へと向かう道を与えた。

以後四百年にわたり、王朝を建国したトランスバールはその版図を広げ、遂には百二十八の惑星を治める《トランスバール皇国》へと発展していった。

白き月は、人々に過去に失われた技術である《ロストテクノロジー》を授け、そこに代々住まう《月の聖女》は、民衆に崇められ続けていた。

一切の権力や戦力を持たず、代々女性が務める事となっている月の聖女は、代々のトランスバール皇王にロストテクノロジーを授け、それを授かった皇国は、それを利用して皇国の領土拡大を続けるというギブアンドテイクの関係が成立しており、両者の関係は非常に好調であった。

皇国が成立してから四百年が過ぎ、皇国の領土拡張政策は一時ストップしていたが、それは別に皇国の衰退や停滞を示すものではなかった。

拡大した領土の支配と統治が空洞化しないように、星間交通網や通信ネットワークなどの構築に重点を置いたり、設置したばかりの、治安維持用の辺境艦隊などの組織強化に務めていたからだ。

ただ、皇国の長き支配の影響により、権力者達の腐敗が問題になりつつはあったが……。

この物語は、とある辺境惑星のジャングルから始まる事となる……。

（皇国歴４１０年１２月、惑星サーヴァントのジャングル内）

「モルト伍長、距離２３０。三時の方向にお客さんが三人だ」

迷彩服に身を包んだ、二十代前半に見える長身の将校は、同じく隣に身を潜めている三十代後半のベテラン下士官に敵の存在を伝える。

「へえ、良く見分けましたね」

「いつまでも、お客さん扱いされたくないからな。それに、俺とて死にたくはない……。右を殺る」

「左を」

「じゃあ、私が真ん中だね。外すんじゃないよ、少佐殿」

そして、そのベテラン下士官の隣には、背はかなり高かったがスタイル抜群の、着飾ればかなりの美女になるであろう赤い髪の若い女性准士官がいて、彼女も同じ様に銃の照準を合わせ始めていた。

「神に祈れ。シュトーレン曹長」

「神ねぇ。いるのかね？　そんなものが……」

トランスバール皇国領の辺境にある、全地表の８０％がジャングルに覆われている惑星サーヴァントは、約三十年前にトランスバール皇国の支配下に入った。

現地の中央政府は、クロノクェイクによる多くの科学技術の喪失により宇宙への道を断たれ、その失政を問う各地の地方政府や反政府組織などとの内戦に明け暮れる日々を、実に六百年以上も送っていた。

生まれた頃から戦争が常に身近にあり、食えない奴は取りあえず軍人になる。

そういう環境に生まれた、この惑星の出身者であるフォルテ・シュトーレンは、幼い頃に反政府ゲリラの無差別攻撃で全ての家族を失い、自身も片目の視力の大半を失っていて、左目に付けているモノクル（片眼鏡）は、その時の名残りであった。

以後は孤児院にいたのだが、この星で人並みに食える職業といえばやはり軍人になる事であり、彼女もその掟に従っていた。

ただ、彼女がこの星の普通の人と違う所は、ある人物の引きがあったとはいえ、現地中央政府軍の軍学校ではなく、トランスバール皇国辺境軍学校に入学した事であった。

皇国は、自国のために働く人に対しては積極的に門戸を開いていたので、フォルテは辺境軍の運営する軍学校に入学し、卒業後一兵卒から血の滲むような努力をして曹長の地位を得ていた。

実は、皇国の他惑星の支配は、それほど縛りが厳しい物ではなかった。

各惑星間の通信と交通路の維持のためにかなりの戦力を派遣して

はいるのだが、現地の政治にはあまり関与しないのが原則であったからだ。

なので、サーヴァントの中央政府は、自身の権力が奪われる事はないと、喜び勇んで皇国の統治下に入ったのだが、皇国は、この惑星で六百年以上も続く内戦にもあまり介入はして来なかった。

内戦とは言っても、惑星間航路などにあまり影響がなかったからだ。

ただ、あまりに無関心なのも良くないと中央軍の幹部は考えたのか？

この地に、少数の軍事顧問団と、対ゲリラ部隊《ゴルゴーン隊》を派遣していた。

この地表の大部分がジャングルというサーヴァントでは、あまり最新の兵器というものが通用せず、小型火器装備が主体のゲリラ達を相手にするのに、彼らが適任であろうと考えられたからだ。

そしてフォルテも、曹長への昇進と引き換えにこの部隊へと配属され、故郷である惑星サーヴァントへと戻っていた。

多分、現地に詳しいという理由もあったのであろう。

そして、それから約一年、彼女はジャングルで敵のゲリラを殺し続けていた。

軍の学校で開花させた銃の腕前をもって……。

「右、沈黙」

「真ん中、沈黙」

「左、沈黙」

鬱蒼と木々が繁り、様々な動物が泣き声をあげるジャングル内に

三発の銃声が響き渡った。
追加の銃声がしないという事は、彼ら全員が一発で敵を仕留めたという事であり、とりあえずの戦闘はこれで終了したという事であった。

「少佐殿、外さなくなったね。褒めてあげるよ」

「そいつは、どうも。有り難くて涙が出るね」

フォルテは身長が１７５ｃｍもあり、口の悪い他の隊員などからは『兄さん』などと呼ばれていたが、気さくな性格で部下や同僚に慕われている女性であった。
この地に赴任した当初は新人隊員であった彼女も、今ではベテランと呼ぶに相応しい実力と貫禄を身に付けていた。
皇国中央軍のゴルゴーン隊派遣は、政治的には正しくはあった。
この内戦は、あくまでもサーヴァントの中央政府の問題であり、それに強硬に介入する事は、皇国の他惑星統治に悪い影響を及ぼす可能性があったからだ。
だが彼らは、なぜこの惑星の内戦が六百年以上も続いているのかを考慮すべきであったのだ。
確かに、ゴルゴーン隊は大きな戦果をあげていたのだが、その程度の戦力派遣では反政府ゲリラを一掃出来るはずもなく、逆に部隊は日々消耗を続け多くの被害者を出していたのだ。

「シュトーレン曹長」

「何だい？　モルト伍長」

「隣で、アーベスト軍曹とライル一等兵が……」

「そうかい……」

敵ゲリラの屍骸を確認していたモルト伍長が、自分の通信機に入ってきた情報を自分の上官に伝える。

「これで、当初からの生き残りは……」

フォルテは、またしても戦死してしまった部隊派遣当初からの同僚の死に表情を曇らせる。

始めは新人であった自分が、今ではこの小隊の指揮を執っている現状からして、この戦場が地獄そのものである事は誰にでもわかる事実であった。

一週間の平均損耗率が１５％の、地獄のサーヴァント戦線。

この一言が、この惑星の全てを物語っていたのだ。

「危ない！　伏せろ！」

「なっ！　少佐殿！」

突然の事であった。

フォルテに少佐と呼ばれている若い男が、彼女に銃を向けると、何の躊躇いも無く銃の引き金を引いたのだ。

フォルテが右頬と耳に銃弾の風圧の感触を感じた次の瞬間、後ろで人の倒れる音が聞こえ、彼女は瞬時に事態を察知する。

自分の後ろに敵がいて、それに自分が気が付いていなかったのをだ。

「助かったよ、少佐殿」

「偶然とはいえ、視界に入ったからな。でなければ、間に合わなか

ったさ」

「少佐殿！　ちょっと！」

フォルテが命を救われたお礼を例の少佐にしていると、先ほどと同じ様に死体の確認をしていたモルト伍長が、その若い少佐を手招きで呼び寄せる。

「どうしたんだ？　伍長」

「このゲリラの死体なんですがね。おかしいですぜ」

「何がおかしいんだい？　モルト伍長」

「いえね、シュトーレン曹長。どうもこいつは、この星の人間ではないようでして……。まあ、それなりの偽装はしているんですがね……」

ゴルゴーン隊でもかなりの古株であるモルト伍長は、すぐにその偽装を見破っていた。

「傭兵なのかい？」

「まさか。この星の内戦で、そんな連中は見た事がありませんや。それに、中央政府軍の懐具合ならいざ知らず、ゲリラ共の懐事情では……」

六百年以上も内戦を続けているサーヴァントに、他惑星の傭兵を雇う余裕など存在しなかった。

多分、中央政府であれば無理をすれば可能なのであろうが、ゲリ

ラ達の財政状況にそれを望むのは、かなり酷であろう。

「そうか……。奴は、俺が相当に邪魔らしいな……」

「少佐殿？」

それから二時間ほどで本日の戦闘は終了したのだが、先の少佐はそれから一言も口を利く事は無かった。

「少佐殿は、気難しいですね」

「そう言うな、モルト伍長。彼は、今までの腰掛けエリート達とは違う。ちゃんと我々のために、骨を折ってくれているじゃないか」

「だから、曹長殿が直々に銃を教えているので？」

「筋も良いからね」

戦闘終了後の夕刻、後方の仮設基地に下がったフォルテ達は、簡単な夕食を済ませて食後のコーヒーを楽しんでいたのだが、先の少佐は端っこで一人無言で焚き火の炎を見つめていた。

「お昼の件ですかね？」

「だろうな」

『今日、殺したゲリラの中に、この惑星外の人間がいる』

一時間ほど前に、フォルテは司令部に報告を行ったのだが、司令部からの返答は、『敵も戦力強化のために、傭兵を雇い始めたのであろう。以後、気を付けるように』という通達のみで終了していた。

「明らかに、無かった事にしたいようですね。上に連中は……」

「鍵を握るのは、レイトン少佐殿のみか……」

レイトン少佐は、フォルテ達にとって謎の人物であった。

経歴を見ると、トランスバール皇国中央軍士官学校を次席の成績で卒業していて、将来を嘱望されたエリートのはずであり、こんな場所に長居をするような人では決してなかった。

実は、この部隊に中央からエリートが派遣されてくる事もあるのだが、それは彼らが中央で出世をするための箔付けであり、普通は一ヶ月間ほど、サーヴァントの首都にある司令部で書類仕事をこなすだけであった。

『某大尉殿は、あのサーヴァント戦線に派遣され……』

表向きはそういう事になっていたが、彼らが前線に出るはずもなく、フォルテ達が彼らの顔を拝んだ事などは一度としてなかった。

ところが、レイトン少佐は違っていた。

彼は、『ゴルゴーン隊司令部付き』という、いまいち良くわからない役職で赴任して来て、常に自分達と同じく戦場で命を掛けていたからだ。

始めは、『高級士官のエリート様が、何しに来やがったんだ?』

という態度を示していた隊員達であったが、彼は今までのエリート連中とは一線を画していた。
彼は、わからない事があれば部下に頭を下げてでも教えを請い、常に最前線で命を掛けて戦った。
そしてゴルゴーン隊司令部付きという立場を生かして、最前線で苦労する隊員達のために、補給状況や待遇の改善等も積極的に行っていた。
上に睨まれる事も恐れずにだ。
おかげで彼は、最前線で戦う隊員達の絶大な信頼を得る事に成功していた。
それは無論、フォルテも同じであった。
でなければ、彼女が直接レイトンに銃を教えるはずもなかったからだ。

「少佐殿は、あまり自分の事を話しませんからね」

「私が、探りを入れてみようか？」

「そうですね。一応は、曹長殿も女ですからね」

「一応は、余計だっての！」

フォルテはもう一つコーヒーを淹れたカップを持つと、無言のまま焚き火の炎を見つめているレイトン少佐の正面に座った。

「少佐殿、邪魔するよ」

「かまわないさ」

「元気がないんだね。ほら、これでも飲みなよ」

フォルテがレイトン少佐にコーヒーを渡すと、彼はそれに一口だけ口を付ける。

「で？　何があったんだい？　あの時からおかしいよ。少佐殿は」

「そうかな？」

「一目瞭然だね。ねえ。何があったんだい？　世の中には、話せば楽になるって事もあるんじゃないのかい？」

「かもしれないな。だが世の中には、『知らぬが仏』という言葉もある」

レイトン少佐は、いつもの様にフォルテに寂しそうな笑みを浮かべる。

フォルテは、あまり恋愛等にかまけている時間の少ない人生を送っていたので良くわからないのだが、背も高く、軍の士官学校を優秀な成績で卒業していて、モデル顔負けの美男であるレイトン少佐に微笑まれたら、普通の女性は簡単に落ちてしまうのであろうと漠然と考えていた。

「……。確かに、少佐殿の言う通りかもね。でもさ。私も、あんたがただの嫌味なエリート殿ならこんな事は決してしなかったさ。『勝手に悩んでろ！』で終わるだろうしね。でもあんたは、他の連中とは違っていた。あんたは、私達の事を懸命に考えてくれた。私達のために、上に噛み付く事までしてくれた。だから……」

「これは、俺の独り言だ」

その一言で、フォルテはレイトンが大切な事を語ろうとしている事を理解する。
そしてそれを察したのか、二人の近くにいた多くの隊員達は、静かに自分達の寝床へと戻って行く。
皆、人生に苦労している連中ばかりなので、色々と察してくれたのであろう。

「実は、俺は、ある貴族の私生児なんだ……」

こうして、レイトンの長い話は始まるのであった。

アキオ・レイトンが生まれて最初に物心付いた頃、彼は自分が母一人子一人の生活である事に気が付いていた。
母は、とても美しい人であった。
何でも、幼くして両親を失い、孤児院を出て後、ある大貴族の家でメイドを務めていたらしい。
だが子供が出来てしまったので、彼女はその貴族の屋敷を出て、町中で一人で子供を育てていた。

「ここまで言えばわかるだろう?」

「ああ、その貴族様のお手が付いたわけだね」

「そういう事だ」

アキオは、小さい頃に自分の父親の事を母に良く訪ねていたのだが、母は、『とても立派な方よ』とだけしか教えてくれなかった。

だが、次第にアキオが大きくなってくると、その質問をする度に母が悲しい顔をしている事に気が付いたので、彼はその質問をする事自体を止めてしまっていた。

そして彼が十五歳になった頃、母を早く楽にするために、トランスバール中央士官学校への進学を決めていたアキオをある不幸が襲う。

母が、重病で倒れてしまったのだ。

『先生！　母の状態は？』

『ある手術で治るかもしれない』

『本当ですか？』

『だが、成功率は１０％を切る。それに、手術代も高額だ。当然、失敗すれば、残り少ない寿命を更に縮める事となろう』

『そんな……』

医師からの絶望的な答えを胸に仕舞い込み、アキオは平静さを装いながら自分の母を見舞いに行く。

『母さん。早く病気を治して、ピクニックにでも行こうよ』

『そうね。お弁当を一杯作ってね』

だが、アキオは自分の母の表情を見て、一瞬にして悟ってしまった。

母は、学はなかったがとても頭が良かった。

だから、自分の死期を悟ってしまったのであろう。

そして、それを自分の息子に悟られまいと、病人にもかかわらず満面の笑みを浮かべていたのだ。

アキオが今まで生きて来て、母のこんなに痛々しい笑顔を見たのは、これが始めてであった。

『あのね、母さん。こういう時には、やっぱり父さんに……』

『……』

母は、何も答えなかった。

アキオは、例え自分達親子を捨てた、名前も知らない一度も会った事のない父親でも、母の命を救う糧となればと藁にも縋る思いだったのだが、母はやはり父親の事を教えてくれなかったのだ。

そして、それから二ヵ月後、容態の急変した母は眠るように息を引き取ったのであった。

「……。少佐殿、あんた……」

「それからだ。俺は母の遺品を整理していて見つけたんだ。母の秘密の日記をな。そして、それに書いてあったさ。俺の父親の名前がな」

「そうかい……」

日記帳には、トランスバール本星に住む人なら誰もが知っている

ある大貴族の名前が書いてあった。

《シードル公爵家》。

皇族とも血縁関係にある、皇国が王朝を名乗っている頃からの有力な家臣で王家の信頼も厚く、皇国成立後、すぐに公爵に任じられた皇国有数の大貴族家である。

「現当主のフレスコは、正妻に跡取りが出来なくて悩んでいたらしい。それで、母に俺を産ませて外で育てさせていたわけだ」

だが、それから僅か二年後に状況は一変する。

何と、あれほど子供が出来ないで悩んでいた正妻に子供が出来たらしいのだ。

「母違いの弟って事だな。だが、俺の立場はそれで危うくなったわけだ」

「……」

「一応は、俺は長男だからな。だがフレスコは、名門貴族家出身の正妻が生んだ弟に跡を継がせたい。俺は、当然邪魔になる。だから士官学校卒業以来、こういう場所に良く回されるようになったんだ」

それでもアキオは、持ち前の能力と反骨精神でその苦境を乗り切って来た。

士官学校次席卒業のエリートが、誰も行きたがらない危険な赴任先で実績をあげ、その功績でアキオは出世を果たす。

すると、それが気に食わないフレスコは軍に圧力をかけ、彼を更に危険な任地へと追い込む。

彼の軍人生活は、それの繰り返しであったらしい。

「でも、まさか直接に刺客を送られるとはね。これには参ったよ……」

「少佐……」

「また、転任だな」

「どうしてだい？　あんた！　私達と上手くやって！」

「だからさ。シュトーレン曹長達に、迷惑は掛けられないさ」

「でも！」

「今日の上の態度を見ただろう？　あれは、明らかにフレスコの圧力が掛かっているんだろうな。『大した事はない』で知らぬ存ぜぬだった」

確かに、アキオの言う通りであった。

反政府ゲリラに、傭兵とはいえ、外部の戦力が参加しているという事はかなり由々しき事態なのだが、司令部は中央軍上層部に何を言われているのか？

その事を、話題にもしたくないという態度を取っていたのだ。

「戦友に迷惑はかけられん。それに、そろそろ来るだろな……」

それから一週間後、アキオの予感は的中する。

彼は第2方面軍通商護衛艦隊副司令の辞令を受け、再び転任する事となったのであった。

「少佐殿、元気でな」

「シュトーレン曹長……。ああ。准尉に昇進したんだっけ？　おめでとう。マイマスター（師匠）」

辞令を受け取ってから三日後、残務整理を終えたアキオは、休暇を取ってまで宇宙港に見送りに来てくれたフォルテと最後の挨拶をしていた。

階級は違ったが、同じ歳で三ヶ月も生死を共にして来た二人であった。

多分、普通の会社などでは三ヶ月は短いのであろうが、明日がわからない前線では、それは三年以上にに匹敵する日々となる。

フォルテは、アキオに銃の実戦的な使い方やサバイバルなどの戦闘術を教え、逆にアキオは、上に通り易い書類の書き方や、士官としての心構え、部隊の指揮の執り方などを教えた。

多分、恋人同士としては通用しないであろうが、二人は親友同士になっていたのだ。

「照れるじゃないか。それとね。私の事は名前で呼んでくれないかい？」

「そうだな、フォルテ。ちなみに、俺の事も名前で呼んでくれ」

「アキオ。あんた、死ぬんじゃないよ。生きてさえいれば、きっと

運は開けるさ」

「なあに、『憎まれっ子世にはばかる』ってやつさ。俺の殉職が先か、奴の老衰が先か。勿論、奴の老衰が先さ」

「元気そうで安心したよ。また今度ゆっくりと酒でも飲めると嬉しいんだけどね」

「機会はまたあるさ。実は、クリューニャ産の３４７年の赤をある場所に置いていてね」

「それを聞いたら死ねなくなったね。是非飲ませてくれよ」

「ああ、今度無事に会えたら絶対に」

二人は、宇宙港の待合ロビーで握手を交わしてから、それぞれのそれぞれの場所に向かって歩き始める。

「シュトーレン准尉殿、キスとかしませんので？」

「モルト軍曹、覗き見は良くないぞ」

フォルテが空港の出口に向かって歩いていくと、その途中で毎日のように顔を合わせている、同じく昇進したモルト軍曹に声をかけられる。

どうやら、彼も貴重な休日であったらしい。

「私は、カミさんと子供に渡すお土産を探しに街に出ていたんですけどね。何か、見慣れた二人がいたもんですから」

「デートだとでも思ったのか？」

「だといいなと」

「アキオ……。いや、レイトン少佐は、今は女どころじゃないからな」

常に危険な赴任先に回され、最近では暗殺の危険に曝される事もあるアキオは、あまり他人を近付けないようにしていた。

ただ、だからといって、彼が極端に冷たい人間というわけでもなかった。

むしろ、逆であった。

彼は基本的に優しい人間なので、自分の危険に他人を巻き込みたくなかったのだ。

そしてフォルテは、その事にかなり前から気が付いていた。

「良い男なんだけどね。まあ、時間が解決するさ」

「時間ですか？　でも、准尉殿のチャンスはここまでですぜ。あのジャングルしかない環境から出た少佐殿は、女にモテまくりですぜ。何しろ、俺が悔しくなるほどの美男子ですから」

「軍曹は、本当に口が悪いねえ……」

「唯一の取り柄ですから」

「それって、取り柄か？」

フォルテは、宇宙港から飛び立つ惑星間シャトルを眺めながら、親友の無事を密かに祈るのであった。

「えーーーと。首都星トランスバールを経由して、第２方面軍通商護衛艦隊司令部のある、惑星アルモスへと向かう便はと……」

内戦の惑星サーヴェントから、首都惑星トランスバールに到着したアキオは、腕にはめた携帯端末の情報を見ながら、惑星トランスバールの衛星軌道上にある星間宇宙ステーションの案内ロビーを一人歩いていた。

トランスバール皇国誕生から既に四百年以上。

百二十八もの惑星を支配する皇国は、首都星トランスバールを中心とした緻密な星間ネットワークを構築していた。

なので、今回のアキオのように支配宙域の端から端へと移動するには、一度トランスバールへと移動した方が、時間も手間も運賃も使わずに済むのであった。

「まあ、ここが吹き飛べば大打撃だけどな」

当然、アキオに未来を予言する能力などは無かったのだが、彼の冗談は、これから一年半後に実現する事になってしまう。

「さてと、首都星トランスバール発惑星アルモス着の１２６便は、１４７番ゲートで良いみたいだな……」

軍服姿で、旅行用のトランクを一つ持ったアキオが、中宇宙港のロビーを歩いていると、同じく新しい任地へと向かう途中の軍人達が、彼に奇異の視線をぶつけてくる。

「二十歳の少佐だからな。貴族と間違われているのかな?」

普通、軍人が新しい任地へと赴く時には、軍の船に便乗するという手を使う者が大半であったのだが、都合の良い船が期限までに出ない等の理由があると、軍から旅行代金を預かって民間の船で移動するという方法が用いられる。

ちなみにアキオは、いつも派遣される先が不便な僻地である事多い事と、軍内部の様々な勢力の都合によって、常に民間の便を使うという方法を取っていた。

「（フレスコに媚を売る幹部と、俺に一応は同情してくれる幹部の鍔迫り合いか……）」

アキオの出生の秘密は、本人が決して外に漏らさない主義であったので一応の秘密が保たれていたが、いくら優秀な成績で中央軍士官学校を卒業したとはいえ、普通の母子家庭出身のアキオが、表に裏に皇国の大貴族であるフレスコに様々な妨害を受けているという事情は、それなりに聡い軍人達に何かを気が付かせる原因となっていた。

『フレスコ公爵閣下に恩を売るチャンス』と考えてアキオを死地に赴かせる幹部と、『彼は何も悪い事をしてないのに、不憫でならない』と考え、そこから早く引き離そうとする幹部の鍔迫り合いが、彼の転任が多い理由ともなっていた。

そしてそれは、トランスバール皇国における、ある問題の縮図とも言えた。

民間人出身の軍幹部と、貴族階級出身の軍幹部の対立。

皇国がまだ王朝であった頃に、家臣として皇国の設立に功績のあった者や、皇国が拡大する過程において功績のあった者が、代々の皇王より貴族の位を授かっていたのだが、彼らの子や孫も優秀であるかといえばそれは違っていた。

だが、彼らは皇国の国家制度を支える基幹であり、長年皇国より多くの特権を受けている。

同じ士官学校を卒業した同期なのに、貴族出身の士官は早くに出世できたり、他の公職でも出世が早いなどかなりの優遇を得ていた。

特に軍人だと、士官学校卒業後五年以内で佐官という事も珍しくなかった。

勿論、それが皇国の統治制度の安定に寄与してもいていたのだが、民間出身で優秀なのにも関わらず、昇進や待遇で差別をされている者達からしたら、文句の一言でも言いたい気分であろう。

一つ例えを出すと、アキオを例外として、彼と同期で士官学校を卒業した軍人達の中で一番出世しているのは、成績はビリから数えた方が早かった伯爵家三男のタクト・マイヤーズで中佐、一方民間人出身で主席のレスター・クールダラスが大尉と、やはり露骨なまでの差別を受けていたのだ。

なので、退役大将である事を理由に権力を乱用して無意味な圧力を加えてくるフレスコ公爵や、彼に恩を売って貴族社会で優位に立ちたい貴族階級出身の軍幹部などに反感を覚える民間出身の軍幹部達は、表向きは彼らに逆らわないように見せながら、アキオを影に日なたにかばっていた。

でなければ、彼の命は当に無くなっていたであろう。

その点、まだ彼にツキはあったのだ。

「あの、軍人さんですよね？」

「ええ」

シャトルへの搭乗手続きを済ませたアキオが、自分の搭乗チケットに記載された座席に座っていると、隣の空いた席に一人の少女が座ってきて、彼女に話しかけられる。

「あの……。私、トランスバールの士官学校に通っていまして」

「へえ。後輩なんだね」

歳の頃は、十五～六歳くらいであろうか？
桃色の髪に花をあしらったカチューシャを付け、ほんわかとしたまるで春の日差しのような笑みを浮かべた、とてもこれから軍人になるようには見えない女の子に、アキオは話しかけられる。

「見たところ、とてもお若いように見えますけど、もう少佐さんなんですね」

「ちょっとした運かな？」

実は、第二方面軍通商護衛艦隊副司令に着任と同時に、中佐へと昇進する事になっているのだが、それを目の前の少女に自慢しても意味がなかろうとアキオは考えていた。
それに、これで自分が同期の出世頭になるわけでもなかった。
もう既に中佐であるタクト・マイヤーズが、同じ方面軍のクリオム星系駐留艦隊司令に任命され、それと同時に大佐へと昇進する事になっていたからだ。

「へえ、運なんですか。実は、私も運が良いって良く周りから言わ

れるんですよ」

少女は、聞きもしないのに自分の事を語り始める。
学校の教師を目指し皇国師範学校に願書を送ったはずが、なぜか通常では起こり得ない郵送事故によってトランスバール士官学校に誤配された挙句、何故か士官学校の入学試験の受験資格を手に入れ、強運により見事試験に合格してしまった事。
その後、なぜか落第もせずに、波乱の学校生活を送っている事などをだ。

「でも、自分には向いていないような気がして……」

教師志望の少女が軍の学校に通っているのだ。
普通なら違和感を覚えて当然であろうと、アキオは考えていた。

「軍人なんて仕事は、クビにならなければオーケー程度に考えた方が良い。えーーーと……」

「あっ！　申し遅れました。私。ミルフィーユ・桜葉候補生です」

「アキオ・レイトン少佐だ」

「あの。レイトン少佐は……」

「そんなに固くならないで。ミルフィーユさん」

「ですが……」

「俺は、少し規格外れの軍人でね。それに、移動中も軍務とはいえ俺は一人。名前で呼んでくれて良いさ」

アキオは、昇進は早いが、辺境のどさ回りばかりで中央のお堅い雰囲気に慣れていなかった。
それに、派遣される部隊なども、階級よりも実力優先な場所や、形式通りにやっていたら戦死などという場所ばかりだったので、あまりそういう事が気にならなかったのだ。

「はい、アキオさん」

「そうそう。それで、オーケー」

その後、アキオも士官学校の頃の話を、ミルフィーユに語り始める。

「母子家庭だったからね。まあ。極貧というわけでもなかったけど、アルバイトとかをしていたね。勿論、学校には内緒でね。でも、ルフト校長にはバレバレで目を瞑って貰ったけどね」

「どんなアルバイトをしていたんですか？」

「モデル」

「凄ぉーーーい！」

ミルフィーユは、目をキラキラとさせながらアキオの話を聞いていた。

「といっても、士官学校のある地域から、少し外れた場所にあるデパートの服売り場とか、洋品店のチラシのモデルをね。休日に半日拘束で、三万ギャラくらい貰えたんだよ。月に二回もやれば、小遣

い程度にはなったね」

「へえ」

「ただ、ルフト校長に呼び出されて、現物のチラシをデスクの上に置かれた時にはビクビクものだったけど。そういえば、お元気なのかな？　ルフト校長は」

「はい。私も色々と良くして貰って」

トランスバール皇国軍准将にして、今は士官学校の校長を務めているルフトは、アキオが今まで見た中で一番優秀な軍人であった。ただ、彼も民間出身者なので、昇進はかなり遅めであった。

「ところで、ミルフィーユさんは冬休みを兼ねて旅行にでも？」

「アキオさん。私にさん付けなんて必要ないですよ。それに、友人はみんな、私の事をミルフィーって呼ぶんです」

「そうなんだ。で？　ミルフィーは一人旅かい？」

「新年を実家で過ごすための、里帰りですよ」

彼女は首都星トランスバールではなく、近くの惑星の出身でシャトルを途中下車するらしい。

「俺は、辺境の惑星アルモスまでね。また左遷ぽいけど、色々な場所に行けるのは嬉しいかな？」

「それは、楽しそうですね。あっ！　そうだ！　お一ついかがです

か？」

アキオと話を続けていたミルフィーユは、彼にバスケットを差し出した。

「へえ、クッキーか。美味しそうだね。どこのお店で？」

「自分で焼いたんです」

「プロ顔負けだな。では、遠慮なく」

アキオは、子供の頃に母に手作りのお菓子を作って貰っていた過去をを思い出しながら、クッキーを一つ口に放り込む。

「美味しい。そういえば、昔、母がオヤツに良く作ってくれたな」

「アキオさんの母さんって、どんな人です？」

「料理が上手だったね。それに、優しかったし、綺麗だった……」

子供時代は決して豊かな生活ではなかったが、母はアキオに手作りのお菓子をオヤツに作ってくれ、食事も常に彼女の手作りであった。

だが、その母が既に天国へと旅立ってしまった今、外食等で適当に食事を済ませているアキオにとって、久々に味わう手作りのお菓子であったのだ。

「綺麗だった？」

「ああ、もう亡くなっていてね」

「すいません……」

「いいさ、病気だったからね。仕方がなかったのさ。それに、俺も謝らないとな……」

「えっ？　どうしてですか？」

アキオは、この少女に暗い顔は似合わないと思ったので、すぐに気にしないようにとフォローを入れる事にする。

それに、勧められたクッキーがあまりに美味しかったので、手が止まらずに一人で全部食べてしまい、自分も謝らなければならなかったのだ。

「美味しかったから、一人で全部食べちゃったよ。ごめん」

「いいえ、喜んで貰えて嬉しいです」

アキオは、ミルフィーユがまた笑顔に戻ったので安心する。

「そうだな。クッキーのお礼に……」

アキオは素早くメモに何かを書くと、それをミルフィーユに手渡す。

「俺の連絡先さ。何か困った事があったら連絡をくれ。特に定期試験問題の傾向と対策には、かなりの自信がある」

アキオは士官学校次席卒業の秀才であったが、実は主席のレスター・クールダラスほど勉学に明け暮れていたわけではなかった。

実は、士官学校の試験にはあるカラクリが存在していて、アキオはその事に早く気が付いたので、常に好成績を維持できていたのだ。

入学時は、民間出身者はかなりの狭き門を突破するために、懸命な努力をする事となる。

当然アキオも、その時は碌に睡眠も取らずに勉強をしたのだが、貴族の子弟はそれとなく問題範囲が軍の上層部から漏れるシステムになっていたので、彼らはそれなりの努力で試験に通ってしまう。

それに貴族枠も存在するので、本当に箸にも棒にも掛からないアホはそこで救われるシステムになっていた。

次に入学後であるが、そこでも貴族の子弟は優遇される事となる。

あまりに試験の点が低いと困るので、傾向の似通った問題が試験に多数出題されるのだ。

それに講師個人の癖等もあるので、アキオはそれを研究して効率よく勉強していたので、試験の成績はかなり良好であった。

それでも主席のレスター・クールダラスは開校以来の天才と噂されていて、他の生徒達からは一つも二つも抜けた存在であったのだが……。

「試験科目と、講師の名前さえ教えてくれれば、問題の六割近くは予想可能だ。少なくとも落第はしない。あとは本人の努力次第だね」

「わーーーい。ありがとうございます」

「あまり表立って人には話せないけどね」

「そうですね」

お互いが連絡先を交換した後、シャトル内に航宙会社からのアナウンスが流れ始める。

「本日は、当社の宇宙用シャトルをご利用頂き、まことにありがとうございます。ただ今当社では、特別キャンペーンとして、ギャラクシー宝クジを一口お客様にプレゼントしております。最高賞金額１０００億ギャラのチャンスを是非生かしてくださいませ」

「ギャラクシー宝クジ？」

アキオはそれほど世間に疎いという事もなかったのだが、やはり内戦の続く惑星サーヴァントにいたので、少し浦島太郎状態になっていた。

「はい。最近新しく始まった宝クジです。１から２００までの数字を１０個選んで、全部揃えば当たりです」

ミルフィーユは、ニコニコしながらアキオの質問に答えていたが、当選確率が天文学的数字のこの宝クジの悪どさに、アキオはただ呆れるばかりであった。

「えーーーと。どれにしようかな？　うん。決めた！」

アキオは、嬉しそうに１０個の数字をマークするミルフィーユを微笑ましく見つめながら、『その数字はありえないだろう！』とも思っていた。

何と、彼女は１から１０の部分を連続してマークしていたからだ。

「随分と思い切った事をするね」

「そうなんですか？　私って、実は宝クジを買うの初めてなんですよ」

「俺は数回あるけど、末等しか当たった事がないな（ああ、そうか。どうせ、当たるわけがないんだ。なら……）」

アキオは、外れクジをお守り代わりにでもしようと考えて、自分も1から10の数字をマークする。

「わあ。同じ数字ですね」

「もし当たったら、何か商売でも始めようかな？」

数時間後、シャトルは最初の目的地に到着してそこで二人は別れる。

「感じの良い娘だったな。きっと、あんな妹がいたら楽しいんだろうな」

そんな事を考えながら、アキオはシャトルの座席で一時の眠りに付くのであった。

（皇国歴411年1月、首都星トランスバール、士官学校講堂内）

「おはよう、ランファ。はい、これお土産」

「温泉まんじゅうねぇ……」

「年末年始は、家族で温泉旅行だったんだ」

年明けの新学期開始初日、実家から戻ってきたミルフィーユは、親友のランファ・フランボワーズに温泉旅行のお土産を渡していた。

「あんたねぇ。十六歳の女の子が、家族と温泉？　若い時間は貴重なんだから、良い男でも捜しなさいよ」

「良い男？」

「そうよ、イケメン君をゲットするのよ。あんたは、十分に可愛いんだから、チャンスは十分に……」

「はい、良い男」

ミルフィーユは、年末にシャトルで隣の席になったアキオの写真をランファに見せる。

実は、記念にという事で、ツーショットで写真を撮っていたのだ。

「嘘ぉ！　超イケメン！　ついでに若いの少佐！　あんた！　本当に里帰りしてたの？」

「シャトルで隣の席だったの」

「連絡先は？」

「教えて貰ったよ」

あっさりと答えるミルフィーユに、ランファの心の中でガーンという音が鳴り響く。

「あたしにも教えて！」

「えーーー！　アキオさんが、オーケーって言わないと駄目だよ」

「もう名前で呼んでるの！」

続けてもう一つ、ランファの心の中でガーンという音が鳴り響く。

「でも、彼も私の存在を知れば、お子様のミルフィーなんて」

「お子様は酷いよ。ランファ」

確かに、ランファは二つ年上でナイスバディーであったが、ミルフィーユは、自分は歳相応で標準体型だと思っていた。

「とにかく、良い男のデータ集めが最優先！　ここの卒業生ならデータライブラリーに……。行くわよ！　ミルフィー！」

「あっ！　待ってよ！　ランファ！」

ランファに引きずられるようにしてライブラリーに到着したミルフィーユは、ランファに情報端末の前に座らされて、そこで過去の卒業生のデータ検索の手伝いをさせられてしまう。

「あったよ、ランファ。アキオ・レントン。一月から中佐に昇進。第２方面軍通商護衛艦隊副司令。皇国軍中央士官学校３０８期生次

席卒業。へえ、アキオさんって凄いんだぁ」

ミルフィーユは、アキオのデータを見ながら素直に感心していた。

「うーーーん。民間出身だけど、昇進は早い。でも、辺境の場末の部隊に飛ばされているのか」

普通、軍のエリートといえば、首都星トランスバールを含む宙域をカバーする第1方面軍艦隊か、近衛艦隊に所属するのが決まりとなっていて、そこが出世の最短コースともなっていたのだ。

「通商護衛艦隊なんて、二線級の中古艦艇しかないボロ艦隊よ。だからなのかしら？」

これが、士官学校に通うエリートや、中央の高級将校のほぼ共通した認識であった。

広大な領域を支配する皇国は、各方面の治安維持のために方面軍や駐留艦隊を派遣していたのだが、とてもそれだけでは、多数発生する海賊等の討伐や、星間ネットワーク全ての護衛などが出来ようはずもなく、仕方なしに中央から予算と権限を貰って、下に方面軍への補給や、民間商船の護衛、海賊の討伐等を行う通商護衛艦隊を設立していた。

『たかが、海賊ごときに正規の艦艇を派遣出来るか！』

これが、正規艦隊に所属している中央出身のエリート軍人の本音であった。

一度退役した後に再改修を受けた軍艦や、高速商船に簡単な武装を施した仮設巡洋艦や仮設空母などを装備し、一部幹部将校を除き、大半が現地採用の兵員で運用されているこの艦隊は、正規艦隊より

一つ低く見られる事が多かった。
実は、ランファ自身も辺境の貧しい農業惑星出身なのだが、実はそういう境遇の軍人ほど近親憎悪の感情が出るのか、彼らを見下す度合いが強かったのだ。

「ランファ！　アキオさんに失礼だよ！」

「だって、通商護衛艦隊の司令なんて、退役間近の軍人の養老院代わりのポストなのよ。ほら。彼の上司も……」

ランファが、更にデータベースを詳細に検索すると、ディスプレイには、通商に護衛艦隊司令の経歴が表示されていた。

「ウォルコット・O・ヒューイ大佐。年齢は五十四歳。通商護衛艦隊司令への就任と同時に大佐に昇進。多分、退役寸前に准将にして貰って、後は天下り先でお茶でも飲みながら新聞でも読む生活が待っているわね」

ランファの言っている事はかなり辛辣であったが、そもそも、いくら士官学校を出ていてもそう簡単に将官になどなれないのが世間の常識であった。
ウォルコット大佐は、若い頃は《白き超新星の狼》の異名で呼ばれた有名な戦闘機のエースパイロットであったが、彼も民間出身であったので、そう簡単に昇進など出来なかったのだ。

「何か、興味なくしちゃった。ミルフィ、やっぱあんたにあげるわ」

「ほう、懐かしい奴の写真を見ておるの」

「ルフト校長！」

「あっ！　校長先生、おはようございます」

いきなり背後から声を掛けられた二人が後ろを振り向くと、そこには士官学校の校長であるルフト・ヴァイツェンが立っていた。

「アキオ・レイトンを知っているのかね？」

「はい、年末にお会いしました」

ミルフィーユは、年末にシャトルの席が隣同士なった事を話し始める。

「ほう、そうか。アキオも元気そうでなによりだな」

「あの若さで中佐なんて、凄いですよね」

「あいつとレスターは、私が教えた中でも最優秀といっても過言ではない男だからな」

ルフトがそう言いながら、ライブラリーの検索ページをめくると、そこには数人の若者が一緒に映った写真が現れる。

「うわぁ。この人も良い男」

「主席卒業のレスター・クールダラスだ。第2方面軍クリオム星系駐留艦隊副司令で、来月に少佐に昇進する予定だ」

「それで、この普通に見える先輩は誰なんですか？」

ランファは、写真の中心に位置している、レスターやアキオより背の低い若い男性の事をルフトに尋ねる。

「ああ。こいつは、伯爵家の三男でレスターの上官を務めているタクト・マイヤーズだ。第2方面軍クリオム星系駐留艦隊司令で大佐でもある」

「へえ。艦隊司令かぁ。でも……」

「そうだ。彼は貴族の子弟だからな。出世は早い。ただ……」

「ただ何です？」

「彼も私の生徒だったのだが、一番理解出来ない男だったな。多分、優秀だと思うのだが……」

ルフトは、自分のまるで掴みどころの無かった教え子の事を思い出していた。

「あっ！　もう次の講義の時間が！　ミルフィー！　急がないと！」

「えっ！　もうなの？　待ってよーーー！　ランファ！」

ルフトがそんな事を話していると、次の講義の時間が迫って来たのか、二人は駆け足でライブラリーを後にしてしまう。

「……。ウォルコット先輩、アキオをお願いします。彼は、まだ死ぬには若過ぎる……」

実は、ルフトは、アキオの出生の秘密を掴んでいた数少ない人物

であり、影ながら彼の命を守り続けていた。

今までは、危険な任地に送り込まれた後で、出来るだけ早く転任させる事でしかフレスコの魔の手から彼を守る手段がなかったのだが、ようやくにして、階級は下ながら士官学校の先輩であったウォルコットの下に彼を送り込む事に成功していたのだ。

後は、尊敬する先輩に彼を任せるのみであったが、ルフトは、自分の可愛い生徒の幸運をただ密かに祈り続けるのであった。

プロローグ（後書き）

あとがき

友人に勧められて、今さらゲームをプレイしています。
よって、更新は、ゲームプレイ→考える→書くという順番ですので、かなり遅くなると思います。
というか、こんな物、読む人いるんですかね？
自分でも、考え込んでしまいます。

第一話

（皇国歴４１１年1月初旬、惑星アルモス、皇国軍第2方面軍所属通商護衛艦隊司令本部）

「本日付けで副司令として着任しました。アキオ・レイトン中佐です」

「ここの司令を務めるウォルコットです。お若いのに、優秀だと伺っていますよ。私としては、大歓迎ですな」

「はあ……」

数日の移動の後、アキオは、転属先である惑星アルモスに到着し、そこの衛星軌道上にある宇宙船用ドッグ兼司令部に出頭していた。

通商護衛艦隊は、第二方面軍内の全ての星間ネットワークの護衛を行う部隊であったが、司令官が退役間近の大佐で、司令部も惑星アルモス駐留艦隊司令部ある場所に間借りをしている状態と、その待遇の悪さが容易に想像できた。

「レイトンさん。まあ時間は十分にありますので、焦らずに頑張りましょう」

「……」

アキオは、ウォルコット大佐という人物が読めなかった。

昔は、超の付く優秀な戦闘機パイロットであったらしいが、今では髭の良く似合う優しそうな初老の男性にしか見えない。

実は切れ者との噂もあったが、昼行灯とも言われていて、普通な

ら、初見でそれなりにその人物の判断が付くアキオも、彼については判断を保留せねばならなかった。

「ちなみに、あなたのデスクはあそこです。では、私はちょっと野暮用がありまして」

「……」

ウォルコット大佐は、呆れて一言も発せないアキオを放置してどこかに出かけてしまう。

「試されているのか？　本当に昼行灯なのか？」

それでも、アキオは自分のデスクに座って、早速にこの部隊の現状確認を開始する。

例えどんな場所に配置されても、そこでは常に全力で仕事をする。これが、アキオのポリシーであった。

今は、常に命の危険を感じている身分であったが、将来フレスコ公爵が老衰で死に、公爵位が腹違いの弟とやらに行けば、自分は安全な身分になれる。

そうなれば、母がいない今、好きな事を出来る身分になるのだ。

正直、今でも週に一回は、フレスコ公爵をこの手で縊り殺す事を考えていたのが、実際にはそんな事は出来ない事も理解できていたので、当面の目標は命を存える事と、第二の人生に向けて準備を怠らないの事の二点であった。

そこで、その時のために、自分のスキルを磨く事は悪い事ではないとの考えから、彼は常に一生懸命に任務をこなす事にしていたのだ。

「さてと、この部隊の現状は……」

アキオは、デスク上のパソコンを起動させ、軍人コードと網膜・指紋を登録してから様々な書類の閲覧を開始する。

この部隊の人員・幹部・装備・所有物資・予算など、ありとあらえる資料を閲覧し、おかしいと感じた部分や、疑問を感じた部分のメモを取っていく。

実は、これらの事は、着任当初におこなわなければ意味がない。なぜなら、人は環境に慣れる生き物であり、始めは違和感や非常識さを感じていても、時間が経つとすんなりと忘れてしまう事があったからだ。

「一部幹部のみが中央の人間だが、あまり出来の良い奴がいないな。まあ。優秀なら本艦隊か惑星駐留艦隊に配属されるからな。後は、優秀だが癖のある奴か、脛に傷のある奴……。使えればオーケーだな。うーーーん。現地採用兵で、使える奴の階級と待遇を上げて……。予算も、常に使い回されている点を突いて、方面軍艦隊の予備費から少し増額させるか。最悪、『動かないぞ！』と駄々を捏ねればいいんだからな……」

その日、アキオは一睡もしないで書類のチェックを行うのであった。

「第2方面軍司令部に行くのですか？　レイトンさん」

アキオが通商護衛艦隊副司令に就任してから一週間の時が流れた。彼はこの一週間、直接現場にも赴き、現場の人間の意見も聞きと、

睡眠時間を削ってまで忙しく働いていた。

「ええ。色々と出す書類や、提案事項などがありまして。通信で済ませれば良いのでしょうけど、直接赴くというのも上の年寄り連中には効果的でして……。おっと！　失礼しました」

アキオは、ウォルコット大佐も年寄りの類に入る事に気が付いて、すぐに謝罪の言葉を口にする。

「いえいえ。気になさらないでください。実際に、年寄りですしね。それと、私も一緒に行きますので」

「はあ？」

アキオは、第2方面軍艦隊司令部に出頭する許可をウォルコット大佐に求めにいったのだが、彼は何と自分も付きて行くと言ったのだ。

「向こうには、知り合いも多少いましてね。久しぶりに食事でもと思いまして」

「……」

この部隊に着任して一週間、アキオはまだウォルコット大佐という人物が理解出来ていなかった。

「しかし、ほぼ全ての提案が受け入れられるとは……」

そして、それから三日後、結果から言えばアキオの提案はほぼ全て受け入れられていた。

半分も通れば上等と考えていたアキオは、正直なところお驚きを隠せなかったのだが、第2方面軍艦隊司令部のお歴々の前で説明を行っているアキオの横には、常にニコニコを笑顔を絶やさないウォルコット大佐の姿があり、午前中には難色を示された提案も、彼らがウォルコット大佐と一緒に昼食に出かけたのち、午後には、一部修正を加えればオーケーになるなど、どう考えてもウォルコット大佐が裏で調整を行ったとしか思えない出来事が多数発生していた。

「レイトンさんは、頑張っていますからね。だから、私も安心してサボっていられるのですよ」

「……。あれだけ、裏で色々と動いてですか？」

「まさか。私は怠け者ですからね。偶然と違いますか？」

アキオは、この時、初めてウォルコット大佐の真の実力を知る事となった。

ルフトとは全くタイプが違うのだが、ルフト以外で初めて尊敬できる上官に出会ったのだ。

「偶然ですか……。わかりました。では、早速に通った提案に基き、現場の改善を行います」

「頑張ってくださいね」

この瞬間から、通商護衛艦隊は、効率的な組織として動き始めた。副司令のアキオが馬車馬のように働き、そのフォローと水面下での裏交渉や調整を、司令のウォルコット大佐が行うという役割分担が出来たからだ。

こうして、デスクでノンビリとお茶を啜っているウォルコット大佐に苦笑しつつも、アキオの通商護衛艦隊副司令としての任務が始まる。

「こんなに多くの人を、一度に昇進させるのですか？」

「ええ。私なりの査定で、使えると判断した人材です。各基地の基幹要員や、所属艦艇や艦隊の幹部に据えて、こちらの命令を確実に実行させます」

「予算の方は、大丈夫なんですか？」

「方面軍の連中、かなりの予備費を溜め込んでいましたからね。それに、連中は星間ネットワークの構築と、年に一度の大演習に備えての訓練にしか興味がないらしい。だから、未だに警備用の艦艇を送り込めていない宙路などがありますと言って、予算を奪い取ったのですよ」

「へえ、大したものですね」

実は、かなりの額の裏金がループされていたのをウォルコット大佐が知っていて、それを、『自分達が複数年で、正規の予算として

処理してさしあげます』と言って上に恩を売ったのは、何を隠そうウォルコット大佐自身であった。
最近、かなりの数の方面軍艦隊で、裏金の問題が露見していてマスコミ等に叩かれていたので、その提案が渡りに船である事を、ウォルコット大佐は知っていたのだ。

「組織を動かすのは人です。まずは、人をヤル気にさせます」

その他にも、中央の軍人と差別されていた年金や恩給なども、せめて軍属程度まではと交渉して、それを認めさせる事にも成功していた。
今までは、任務中に戦死や殉職しても、雀の涙ほどの一時金しか貰えなかった現地採用の兵士達は、大喜びで任務に邁進するようになる。

「随分と、戦力をここに集めるのですね」

「ええ。予算が潤沢な内に、成果をあげて上の心証を良くします。重要度の低い宙路から、監視以外の戦力を引き揚げ、再編成の後に、三ヶ月の戦闘訓練を行います」

「それで、この周辺の海賊達をですか？」

「はい。やるのであれば、一度に完全にです」

通商護衛艦隊は、数の上ではかなりの戦力を有していたが、広大な管轄宙域にバラして置いていたので、現状では、多数存在する海

賊達に攻勢をかける余裕がなかった。
そこで、一時の被害に目を瞑って、戦力を集中させて一気に殲滅する事にしたのだ。

「一度、大量に数を減らせば、次からはその宙域に展開する警戒戦力を減らせますし、また海賊が出ても、直衛艦隊や予備艦隊で十分に対応可能になりますから」

そして、それから三ヶ月、アキオは自ら通商護衛旗艦である仮設巡洋艦（クォス）の艦橋で、『死んだ方がマシ』と後に、兵士達から言われる程の猛訓練を実行していた。

「あの、レイトン副司令。ウォルコット司令は？」

「俺の、自分勝手な行動の始末をしている」

通商護衛艦隊所属に所属している艦艇の多くが、惑星アルモス周辺に集結して訓練をしている影響は、かなり出ていると思われたのだが、実際にはあまり苦情等は上がって来ていなかった。
多分、ウォルコット司令が色々と裏で動いているのであろう。
それと、警備の薄い宙域からの文句も意外と出ていなかった。
どうやらそれも、ウォルコット大佐が色々と動いているらしかった。

「後の安全な宙路のためです。数ヶ月だけ我慢してください」

アキオは知らなかったが、彼は、民間の船舶会社にそう説明して回っていたのだ。

「それでは、絶対に成功させないとマズいですね」

「そういう事だ。だが、木村艦長。焦るなよ」

木村艦長は、今年で四十二歳の妻子持ちの中年男性であった。
階級は少佐で、現地採用兵の中で優れた操艦技術を持っていたので、アキオが少尉から抜擢して旗艦の艦長に据えていた。
その他にも、士官学校を出ていないばかりに昇進が極端に遅かった優秀な連中を次々に昇進させていて、彼らはこの部隊の幹部候補生として、懸命に厳しい訓練を指揮していた。

「それに、明日には新しい旗艦が到着する」

「旧式ですけど、戦艦ってのが男の浪漫を誘いますね」

アキオは、追加の予算や物資の他に、一度退役してモスポール状態で保管されている旧式艦艇の譲渡も上に請求していて、それがようやく認められていた。
大半は、旧式の駆逐艦や突撃艦や巡洋艦であったが、一番の目玉商品として、二世代前の旧式高速戦艦（コンゴウ）が通商護衛艦隊の新しい旗艦として納品される事になっていた。

「装甲が薄いのが難点だけどな。火力はまあまあだし、速度はまだ一線級だし、通信設備は大幅に強化させている。旗艦としては、もってこいだ」

「では、明日を楽しみにして、アルモスに戻りましょうか？」

「そうだな。みんなには、明日に差し支えない程度に羽目を外せと伝えるか」

通商護衛艦隊所属の艦艇が、多数惑星アルモスに駐留している影響で、アルモスの経済は一時的にかなり潤っていた。
数万人の軍人や軍属が、現地でお金を落としていくからだ。
特にアキオは、訓練に参加している軍人達に出張手当を多めに支給していたので、彼らのサイフは自然と緩み、彼らを当てにした商売が成り立つ。
それと、多くの艦艇が厳しい訓練に参加している影響で、通常よりも多くの補修や整備を必要としている上に、新たに加わった艦艇の最終調整などの仕事が重なり、部隊の整備班の連中だけでは手が足りなくなっていたので、それらを技術力がある民間の業者に委託していたのだ。
結果、惑星アルモスは、一時的ではあるがこの宙域で一番経済成長の著しい惑星となっていた。

「さあ。今日の訓練は終了だ」

アキオの訓練中止命令で、多くの艦艇は惑星アルモスへと戻って行くのであった。

「レイトンさん。本当に、全滅させるのですか?」

「はい。最初は苛烈にしないと、海賊達に舐められます」

そして三ヶ月後、厳しい訓練を終えた通商護衛艦隊の面々は、第一次海賊討伐艦隊を惑星アルモスより発進させていた。
アキオが事前に金をバラ撒いて集めた情報により、大半の海賊の

根拠地と戦力が判明していたので、後は一つでも多く彼らの息の根を止める事が重要なのだが、ここでアキオはある一つの決断をしていた。

「海賊《暁の鷲》。比較的小規模な海賊です。投降を呼びかければ……」

「最終的なこちらの被害を抑えるためです。それに……」

「ウォルコット司令。レイトン副司令。海賊達は、降伏を拒否しました」

通信担当の兵士が、アキオ達に海賊からの返答を伝える。

「前任者の罪ですね。完全に舐められています。規模の小さな連中ですらこれですからね。大組織の連中には、もっと無駄でしょうね」

「だからなのですか？」

「降伏すればそれで良し。しなければ、皆殺し。我々は、恐れられてなんぼの軍事組織ですから」

「わかりました。許可しましょう」

いつもはノホホンとした表情のウォルコット大佐が、珍しく神妙な態度で作戦を許可する。

「作戦参謀。戦闘映像の記録を確実に頼む」

「了解しました」

「レイトンさん。映像の記録をですか？」

「明日のニュースで流すのですよ。新しい通商護衛艦隊は、海賊を一人も生かしておかないとアピールするためです」

そして、それから五時間後、海賊《暁の鷲》は、負傷して動けなくなっていた数人を除き、一人残さず殺され、一隻残らず沈められるという悲惨な最期を迎えるのであった。

「海賊《赤い鯱》から通信です！　降伏を受諾する！　殺さないでくれ！　以上です！」

「ほう、大したものですね」

「最初の一つを全滅させた効果ですよ。あまり戦闘が発生しなかったでしょう？」

最初の海賊の討伐開始から、二ヵ月の月日が流れた。

海賊《暁の鷲》を徹底的に壊滅し、それをこの宙域のマスメディアに流した効果は絶大で、それ以降多くの海賊達が、呆気ないほど簡単に降伏して来ていた。

「しかし、予想以上の効果でした。おかげで、第二次と第三次の討伐作戦を前倒しして実施していますし」

アキオの副司令就任から五ヶ月。
予定よりも大分早く、後一ヵ月で、管轄区域の海賊討伐作業はほぼ終了する予定であった。
本当は、一年ほどの期間を予定していたのだが、予定の半分で作戦が終了する事となる。

「木村少佐。第三次討伐作戦終了後、俺は陸にあがる」

「わかりました。副司令は、色々と仕事が溜っていますからね」

アキオは、今次作戦終了後に、規模の小さい遊撃艦隊を複数編成し、引き続き討ち漏らした海賊の討伐任務を継続させる事とした。
木村少佐を始めとする複数の有能な軍人を、遊撃艦隊の司令に任命し、ローテーションを組んで彼らを出撃させるのだ。

「その他にも、常駐警備艦艇の配置とかで忙しいからな」

「艦艇と人員も、大幅に増えますしね」

多くの海賊達が戦わずに降伏した過程で、通商護衛艦隊は多くの戦利品を手にしていた。
旧式ではあるが、軍艦や高速商船などの艦艇や、海賊が溜め込んでいた物資や、多くの捕虜達である。
艦艇は、部隊で使える物は改修や改装をして配備する事とし、使えない船は武装を取り外して格安で民間に放出する事とした。
次に物資も、被害者が認定された物については元の所有者に返還し、不明な物で使わない物は、同じく民間に格安で放出する。
最後に、一番処置に困ったのが、海賊達自身の身柄であった。
各惑星の刑務所から、受け入れを拒否されてしまったのだ。

何でも、数が多過ぎて刑務所の収容限界を超えてしまうらしい。
そこでアキオは、幹部などを除く比較的罪の軽い者達を、部隊で下働きさせる事にした。
刑務所での懲役刑の代わりに、衣食住を保障して小遣い程度の賃金を与え、同時に教育も行う。
ちゃんと働いていた者は、奉公期間が終わると無条件で部隊に入隊出来る。
こういう制度を、場当たり的に作ったのだ。
この制度は、元海賊達には非常に好評であった。
真面目に働けば再就職も可能で、部隊内で生活していれば1ギャラもお金を使わないで済み、小額ながらも家族などに仕送りが出来たからだ。
惑星内の刑務所に比べると、格段の待遇の違いらしい。
それに、誰も好き好んで海賊になどなりたかった者などほとんどおらず、貧しさから海賊の勧誘に引っ掛かった連中が多かったからだ。
それに、こちらにもメリットがあった。
宇宙船を操船可能な連中を、大量に安く確保出来たからだ。
こうして、通商護衛艦隊は、あまり予算を使わないで大幅に規模を拡大させる事に成功するのであった。

「うーーーん」

「おや？　どうなされましたか？　レイトン副司令」

「金がありません」

「お金ですか？」

アキオがこの艦隊に就任してから、七ヶ月の月日が流れた。
ウォルコットがいつものようにお茶を啜っていると、隣のデスクでは、アキオがパソコンの前で唸り声をあげていた。

「一時的な臨時予算のみで、予算規模が大幅に増えたわけでもないのに、人員や艦艇が大幅に増えましたからね。これから、最就役させた艦艇の維持費やら、無料奉公させている元海賊達の人件費やらでお金がないです」

「それは困りましたね。それで、どうされるのですか？　元海賊達の奉公期間が終わったら、諸々の社会的事情と説明して……」

「それをすると、彼らが再び社会不安の原因となってしまいます。それに、約束した事は確実に実行しないと」

惑星自身が貧しく、仕事がないから多くの若者が海賊になってしまい、海賊が横行するから、せっかく方面軍が構築した星間ネットワークが有効的に活用さず、民間の物流が少ないから惑星の経済はなかなか発展せずというのがこの宙域の現状であった。
なので、ここで一度断ち切った悪の連鎖を、また繋げるべきではないとアキオは考えていた。

「予算の方でしたら、少し上と折り合ってみます」

「ありがとうございます。ウォルコット司令。では、私も動こうと思います」

「あの。何をなさるので？」

「お金がないのなら、自分で稼ぐまでです」

「自分ですか？」

「アウトソーシング事業を展開します」

「はあ？」

ウォルコット大佐は、アキオの答えに首を傾げるのみであった。

「つまり、通商護衛艦隊で株式会社を経営するわけですか？」

「ええ。いまだに危険な宙路には、最精鋭の戦闘護衛部隊を。比較的安全な宙路には、民間警備会社の警備部隊を派遣します」

「それで、お金を取るのですか？　しかし、あのケチな民間船主達が払いますかね？」

「大丈夫です。我々が警備をする事によって、保険料が下がれば、我々を雇うメリットがあります。今までは、海賊達のおかげで保険

料がバカ高でしたから」

保険料が下がれば、運送している物資の値段が下がり、多くの人に売れるようになる。

多く売れれば、船主は大きな輸送船を購入するので、更に効率的に警備が可能となる。

一度の警備代金が同じなら、一度に多くの物を運んだ方が得だからだ。

「その警備会社の人員は、艦隊の軍人ですよね」

「ええ。ローテーションを組んで転籍を繰り返します。労災や事故が発生したら、その人は書類をいじって軍籍に戻す。すると、万が一の時の保障も万全」

「あくどいですね」

「私のお金ではありませんので。それに、定年後にまだ働きたい人や、軍という場所はどうもという人向けでもあります。多様な人材を確保出来るわけです」

「株式会社にするのですか？」

「民間の船主にも出資させます。失敗した時に、借金だと後々付いて回りますけど、株なら有限責任ですので」

「いやはや、とても軍人とは思えない思考能力ですね。レイトンさんは」

「株主優待制度で、警備代金の値引きありを謳えば、金集めは上手

く行きますよ。ただし、筆頭株主は我々ですけど」

思い付いたらすぐに実行のアキオは、すぐに必要な大量の書類を用意し、各惑星の政府や皇国の出先公共機関などに赴いて事業の許認可を取って来た。

同時に、ウォルコット大佐も各地で根回しを開始したので、新しい事業は意外と早く始まる事となった。

「あまり元の組織を弄らなかったから、大きな混乱も無く……」

「ヘンリー大尉！」

「違うだろうが！　俺は今は課長なんだよ！　おい！　杉本軍曹！　なんで軍服を着ているんだよ！　会社の制服に着替えろよ！」

「課長。俺。主任なんですけど……。それで、任務の内容なんですけど……」

「任務とか言うな！　今日のお客さんはだな……」

「……」

「まあ、最初ですからね。愛嬌ですよ。レイトンさん」

こうして、通商護衛艦隊が筆頭株主となって誕生した独立行政法人《総合宙路警備保障（株）》の誕生によって、ようやく通商護衛

艦隊の運営は安定し、アキオは超過密スケジュールから開放される事となったのであった。

「レイトン副司令。実は、困った問題が発生しまして……」

「困った問題？」

アキオがこの艦隊に就任してから、八ヵ月の月日が流れた。最初の、大改革の混乱を乗り切ったアキオは、かなりの仕事を自分が抜擢した幹部に任せる事が出来るようになったので、今ではそれなりに休暇などが取れるような身分になっていた。

そして、今日も休暇明けにいつものように出勤をしてみると、そこには珍しく困ったような顔をした木村少佐が待ち構えていたのだ。

「実は、またブラマンシュ財閥の連中なんです」

「規模がデカイからって、好き勝手な事を言っているのか？」

「ええ……」

何でも、中小のいくつかの船主達が合同で警備を要請して来たのだが、第2方面軍艦隊の推薦状とやらを持ったブラマンシュ財閥の

連中がいきなり割り込んで来て、自分達の都合を優先しろだとか、警備代金の値引きをしろだとか好き勝手な事を言っているらしい。
苦労人で、あまり表立って怒りの感情を露にしない木村少佐も、さすがに少しキレているように見える。

「株も購入しなかった癖に、要求だけは一人前か」

ブラマンシュ財閥は、総帥であるダルノー・ブラマンシュが一代で築き上げた、皇国領全域で主に運送業などを営む大企業であった。
当然、この宙域にも支社があるのだが、その活動は以前に多発していた海賊の影響か？意外と低調であった。

「昔は、海賊が横行していたから、危険と考えて活動が低調でだったんですどね。今では、この宙域の物資輸送を独占すべく、派手に活動中ですよ。どうやら、中央の軍幹部にも大分鼻薬を嗅がせているとか……」

「それで、第2方面軍の推薦状ね」

「それで、どうしますか？」

「どうもこうも、割り込みなんてしてくる下品な連中は、後回しに決まっている。値引きも絶対にするな。ああいう手合いは、一度許すとズルズルと要求を引きあげてくるぞ」

「しかし、大丈夫なのでしょうか？」

相手は巨大な財閥で、皇国の中央政府の重鎮とも関係が深かったので、木村少佐は心配でたまらないらしい。

「大丈夫さ。この宙域は、まだ危険な場所も多いからな。俺達がフォローしなければ、まだ海賊に被害を受ける可能性もあるんだよ。それにだ」

「それに、何です？」

「料金が高いと思うのなら、自前で警備を用意するんだな。何しろ、彼らは天下のブラマンシュ財閥様でいらっしゃる」

アキオは、ブラマンシュ財閥の要請を一蹴し、その日は何事もなく終了したのだが、翌日、アキオは思わぬ人物の来訪を受ける事となる。

「第2方面軍艦隊の補給参謀がか？」

「はい」

「何の用事だ？　ちゃんと、補給物資なら輸送しているぞ」

実は数ヶ月前から、通商護衛艦隊には、もう一つの任務が増えていた。

それは、第2方面軍に所属する各惑星の駐留艦隊や、日頃はいくつかの基地に分散して配置されている主力艦隊などに、各種の物資を補給する事であった。

中央艦隊の司令部の要員や、主力艦の艦長や幹部達などは、強烈

に中央での出世を願っている輩が多かったので、彼らは見てすぐにわかるような成果が出る任務を好む。

中央からの査察官が視察する大演習時や観艦式、星間ネットワーク構築など、あまり長居しない査察官が簡単に理解できる派手な任務をだ。

一方、構築したネットワークの維持・管理や、各惑星に駐留する駐留艦隊への補給・修理など、大切だが地味な任務は軽視され易かった。

そこでアキオは、第2方面軍艦隊の司令部に、これらの業務を引き受けますと交渉して、更なる予算と人員・艦艇の譲渡を受けていたのだ。

第2方面軍艦隊の司令部は、使える予算の全体額は減ったが、一部任務を譲渡した結果、彼らが好む任務に使える予算が増えたので、大満足であった。

最も、見た目はピカピカの主力艦を多数要する彼らであったが、通商護衛艦隊が機能しなくなれば、一ヶ月もしない内にただのクズ鉄艦隊に変わってしまうのだが……。

「それで、どのような用件でしょうか？」

「ふむ。私は、艦隊の補給参謀として、この方面軍はおろか宙域全体の補給・流通状態に危惧を抱いている」

「あの、具体的にお願いします」

アキオの執務室に通された五十歳前後の准将の話は、具体的な内容に欠け、アキオを困惑させていた。

「特に、各部隊や駐留艦隊への補給に、中小の会社を使うのは安全保障上いかがなものかと。それに、値段もいささか高いような気が

するしな」

「そうでしょうか？　私は、さほど高いとは思いませんが……。それに、民間企業ですからね。利益が出ないと会社の運営が成り立たないでしょう」

「だが、予算には限りがあるのだ。物資の輸送には、もっと値段を安く出来る大規模の……。そう。ブラマンシュ財閥のようなもっと規模の大きな……」

「（なるほどね。もう、圧力を掛けてきたのか）」

アキオは、瞬時にして大体の事情を察する。

つまりは、この補給参謀は、ブラマンシュ財閥の意向をわざわざ伝えに来たらしい。

「ヘス准将の意見には、参考にすべき点が多々あります。早速に、ウォルコット司令と相談してみたいと思います」

「それで、結果はいつ頃になるのかね？」

「急に、契約を切るというのも難しいですからね。来月の初めまでには……」

「そうか！　期待しているよ！」

どうやら、こうもすんなりと認められるとは思っていなかったらしく、補給参謀はアキオの返答に喜びの笑みを隠し切れないまま、執務室を後にするのであった。

「なるほど、お昼にそんな事があったのですか。しかし、いつものように正論で反論なさらなかったので？」

「そういえば、そうですな。いつものレイトンさんなら、徹底的に相手を論破しそうな感じですが」

その日の夜、アキオは、ウォルコット大佐や木村少佐と基地の外にある屋台で酒を飲みながら今日の話をしていた。

おでんに日本酒という少しオヤジ臭いラインナップであったが、アキオはある友人の影響で、この組み合わせが好きになっていたのだ。

「言い争う時間が、勿体ないですから。相談中って事で、早々に終了させました」

『いついつまでに相談しておく』と、何とも時間稼ぎな策であったが、それは致し方ないと考える事にする。

「うーーーん。まだ三週間近くあるんですよね。副司令。それで、何か策でも？」

「向こうがどう出てくるかだね。多分、今日のヘス准将は、警告なんだろう」

「まあ。あの方は、元々中央の補給畑出身なので、大企業であるブラマンシュ財閥には逆らえないでしょうな。あそこは、軍の重要な天下り先でもあるわけですし……」

ウォルコット大佐は、日本酒をコップで煽りながら、自分なりに調べた事を口にする。

ブラマンシュ財閥が一番力を入れている事業が運送業である関係で、ようやくに海賊の数が減った宙域のシェアが思い通りにならないと言うのは、面白くない事なのであろう。

「それで、次に連中はどんな手を打ってきますかね？」

「皇国全体で活動しているグローバル企業だからね。例えば、マスコミを利用して、『地元の一部運送業者と結託して税金を食い物にしている通称護衛艦隊の幹部達』とかそんな論調になるだろうね」

「『自由な価格競争を妨害する』ってやつですかい？」

「木村少佐。わかってるじゃないの」

「ですが、軍関係に物資を納入する業者は、一つに偏らせない。これは、常識ですぜ。それに、民間だって……」

アキオは、ブラマンシュ財団がこの地で積極的に商売に精を出す事は悪くないと思っていた。

あれだけの規模の企業が営業活動を行って、物資や資金をこの宙域に回すのだ。

長い目で見なくても、経済の発展に寄与するに違いない。

ただ、方法という物があって、地元の企業を全てなぎ払って、自分達でシェアを独占するという手法が宜しくなかったのだ。

「まあ。何にしても、明日から忙しくなるだろうな……」

アキオは、コップに半分ほど入った日本酒を飲み干すと、そんな事を口にするのであった。

「まあ、大体は想像付いたけどね……」

「どうやら、相談が終わるまで待ってくれなかったらしいですな」

「さすがに、そこまで甘くなかったか……」

翌日の朝、アキオが通商護衛艦隊司令部に出勤すると、そこに木村少佐が血相を変えた経理担当の士官と共に登場する。

「首都星トランスバール方面や、他の方面軍の管轄化にある企業からの、うち向けの物資が全部値上がりね……」

他所では、ブラマンシュ財閥はなりのシェアを占めていたので、こういう芸当も可能なのであろう。

「それと、これです」

次に、木村少佐が差し出したチラシには、『ブラマンシュ運送大拡大キャンペーン！』と銘打ってあった。

「安いね。でも、これじゃあ……」

「連中は、我々の警備費用の割引を受けられませんからね。多分、運べば運ぶだけ赤字です」

だが、ブラマンシュ財閥は、大企業だ。
ここで損をしても、他所の儲けを注ぎ込めば問題ないのであろう。

「体力勝負か。ちょっと辛いね」

「ええ。それで、地元の企業が軒並み倒れた後に、利益を得られるラインまで値上げするんでしょうね。それで、いかがなされます？」

「うーーーん……」

アキオが深く考え込んでると、そこにいつもと全く変わらないウォルコット大佐が入ってくる。

「おや？　何か悩み事ですか？」

多分、ウォルコット大佐を除く全幹部が悩みに悩んでるなか、彼だけはいつもと変わりがないようだ。

「実はですね……」

半ば呆れた木村少佐が、大体の事情を説明すると、ウォルコット大佐は急にこんな事を言い出す。

「一ヵ月保たせれば大丈夫ですよ」

「一ヵ月ですか？　あの。それは、どんな根拠があって……」

木村少佐は、ウォルコット大佐がキッパリと言い切ったので、その発言の根拠が気になってしまう。

「なぜならば、今回の一連の件に、ブラマンシュ財閥の総帥は一切絡んでいないからです」

「ブラマンシュの総帥が絡んでいない？」

「ええ。今回の一連のブラマンシュ財閥の動きは、この宙域を担当する責任者の暴走というわけですね。何しろ、彼はブラマンシュの一族に名を連ねる人物ですから」

アキオは、まだ実際には会った事がなかったが、資料で顔写真くらいは見た事があるブラマンシュ財閥側の責任者の軽薄そうな若者の顔を思い出す。

それと、頭に付いた動物のような耳は、あの一族の人間である最大の特徴であった。

「総帥の甥っ子らしいですね。まあ、力の程はゴニョゴニョなんですけど……」

「つまりは、ブラマンシュ財閥の威光におんぶに抱っこの、世間知らずの若造って事ですか？」

「ええ。それと、ここのところ総帥に色々と言われているらしいで

すね」

「成果を上げろとかですか？」

「まあ、そんなところらしいです」

それゆえの、あそこまで資金や圧力を利用した乱暴な手段なのであろう。

つまりは、相手もこちらと同じ様に追い詰められているのだ。

「さすがは、ウォルコット司令ですね。良く調べていますよ」

「なあに、ただのお茶飲み話の一環でしてね」

「それで、副司令はどうなされますので？」

「一ヵ月を足掻く！　生き残る！　相手に屈しない！」

アキオは、木村少佐の質問にキッパリとそう答え、自分のデスクの横のクローゼットを開け始める。

「お出かけですか？　レイトンさん」

「はい。私は、暫くは軍服を着ません。ウォルコット大佐、艦隊の業務を暫く宜しくお願いします」

「ええ。それは、構いませんが……」

クローゼットの中から私物のスーツを取り出したアキオは、その足で更衣室へと駆け込んだ。

こうして、通商護衛艦隊と総合宙路警備保障（株）と地元の運送会社の生き残りを賭けた戦いが始まる。

「これらのリストに載っている部品や物資を、同じくリストに載っているだけ欲しい。値段は、知っているはずだ。第４方面軍に実際に納めているわけだし」

「ええ。ですが、急にこれだけの量は……」

「何とか集めて欲しい。最初は、少しでも良い。追加で送ってくれれば絶対に買うから」

「……。わかりました」

まず、最初にアキオがした事は、バカ高になった必要な物資の調達を、ブラマンシュ財閥の息が掛かっていない企業に変える事であった。

既に、当初の数倍の規模に拡大している通商護衛艦隊とその周辺企業体は、毎日のように多くの予算と物資を消費していく。

なので、それらの物資を圧力を掛けて値上げさせたブラマンシュ財閥の手法は、こちらを陥れる手としては極めて有効であった。

連日の費用増が、ボディーブローのように効いてくるからだ。

そこで、同期で他の方面軍にいる連中から、ブラマンシュ財閥の息の掛かっていない取引先企業の名前を聞き出したアキオは、すぐにそこの担当者と交渉に入っていた。

「緊急なので、５％までの購入価格の増額を認めます。勿論、緊急事態が終了すれば、元の購入価格に戻しますが。ですが、御社とは、これからも長い付き合いになるかもしれません」

「本当ですか！」

「ええ。こういう緊急事態に、必要な物資を集めてくれる優秀な企業と、通商護衛艦隊はお付き合いをしていきたいですし……」

「頑張ります！」

アキオが、言葉を最後まで言い切らない内に、その会社の担当者は駆け足で、打ち合わせをしていた喫茶店から飛び出していく。

「おーーーおーーー、元気だねぇ。これで、十二社目と……」

勿論、同じ話を、ブラマンシュ財閥に息の掛かっていない企業全てに話しているアキオであった。

「レイトン中佐。我々地元の船主や、運送業者達をここまで呼び出した意図は何かね？」

「いくつかありますので、一つ一つ行きましょう」

次に、アキオは艦隊司令部に多くの艦隊や総合宙路警備保障（株）取引のある船主達や、運送業者達を呼び出していた。

「対ブラマンシュ財閥対策会議（仮）というところですね」

「ブラマンシュ財閥か……」

最近、形振り構わずに攻勢を仕掛けて来ているブラマンシュ財閥に脅威を感じている地元の中小の運送業者は、数多く存在していた。

「こちらも、正直困っています。外からしか調達出来ない物資が全て値上がりですから。そこで、これらのリストの中から手に入れられる物があったら、少量でもお願いします」

アキオは、印刷した資料を船主達に手渡す。

「うーーーん。さすがに、ちょっと特殊な物が多いからな……」

アキオも、彼らがこれらの物を手に入れられるとは思っていなかった。

ただ、自分達も危機に瀕している事を伝え、彼らと同調して行動する事を宣言し、連帯感を持たせるためであった。

「とにかくも、あの極端な値下げ商売には困っている」

「そうだな。今は損でも、我々が軒並み倒れた後に、自由に価格を設定すれば良いのだからな。やはり、大企業には勝てないのかもな……」

船主達は、ブラマンシュ財閥に怒りは覚えているようであったが、

打つ手なしといった表情を浮かべていた。

「私は軍人で、商売の経験はないのですが、自分なりの対抗策と言いますか……。助言と言いますか……。どうぞ、入って下さい」

アキオがそう言うと、部屋の中に数十人の様々な年齢の男女が入って来る。

「彼らは？」

「各惑星の郵政事業の担当者です。まあ。星によって民営化していたり、公の機関のままであったりと色々なんですけどね」

「それで、郵便と我々が何を話すのかね？」

「事業転換です。それと、ブラマンシュ財閥との住み分けで生き残りを図ろうと」

「住み分け？」

「はい。確かに、今はブラマンシュ財閥と我々は対立関係にあるわけですが、それも永遠というわけでもない」

「確かに、そうだな」

相手は、皇国中に事業を展開するブラマンシュ財閥であり、いつまでも対立を続けているわけにもいかなかった。

そもそも、対立になった原因が自分達の身を守るためであったので、身が守れれば、対立から協調へと持っていかなければならないのだ。

「それを見越しての住み分けですよ。軍への輸送は、今まで通りに企業を分散します」

例えば、方面軍が敵と呼ばれる勢力と戦争状態に移行した時、万が一にも敵勢力とブラマンシュ財閥が繋がっていたり、敵勢力がブラマンシュ財閥に集中して攻撃を仕掛けてきたら大変な事になってしまう。

それらを考慮しての分散策である。

ただ値段が安ければ良いという事でもないのだ。

「ですが、大規模の大型商船を使っての物資輸送では、勝ち目がありません。そこで、彼らとの提携が鍵になります」

アキオは、自分の横に立っている郵政事業の責任者達に目配せをする。

「小規模の緊急を有する輸送。個人向けの惑星間の宅配。通信販売会社との提携。皇国領の遠い惑星から、売れそうな特産品などの仕入れと販売を行っても良いかもしれません。珍しい物なら、新しい物好きな人や金持ちに高く売れます」

「つまり、生き残りたければ、ただの運送屋を止めろと？」

「そういう事です。取り合えず生き残ってください。生き残れれば、以前のように軍の仕事を頼みます。総合宙路警備保障（株）の株式を手放さなければ、警備料金を値引きします」

その他にも、アキオは複数の船主が提携して新しい会社を作る事や、後の開発等で好条件の宇宙港が作れそうな場所の用地や権利を

値段が安い内に取得しておく事など、複数の提案をしていく。

「幸いにして、この宙域の今のブラマンシュの責任者は、そういう事に疎い人物らしい。だから、責任者が有能な人物に変わる前に」

アキオの様々な提案は、その日の夕方まで続くのであった。

「ブラマンシュ財閥の連中と対立して一ヵ月か……。そろそろ、資金が心許なくなってきたな……」

「レイトン副司令。艦隊の予備費が底をつきました」

「総合宙路警備保障（株）の方も同様です」

「レイトン副司令の提案を地元企業に行わせるために、低利の融資制度を作りたいのですが、先立つ物がありません」

ブラマンシュ財閥との体力勝負は、もうそろそろウォルコット司令が予言していた一ヵ月を過ぎようとしていた。

正直なところ、どうにか一ヵ月持たせたのだが、やはり相手は皇国一と自他共に言われている巨大財閥であった。

アキオは、ほとんど軍服を着ないでギリギリに近い経費削減や、1ギャラでも安い物資の購入、地元企業の生き残り策の手伝いなどを行っていたが、肝心の資金が底を尽く寸前にまで追い込まれてい

た。
そして、その事を、今日も早朝から出勤して来たアキオに、複数の経理担当者が報告して来たのだ。
「金がないのか……」
アキオがデスクに突っ伏して苦悩していると、そこに、今日もひょうひょうとした表情をしたウォルコット司令が入ってくる。
こんな時でも、彼はいつもと全く変わりがなかった。
「おはようございます、レイトンさん。今日も頑張っていますね」
「いえ、万策尽きました」
「そんな事はないと思いますけどね。ほら、良く言うじゃないですか。『自分が苦しい時は、相手も苦しい』って」
「向こうには、有り余る資金があります。ですが、うちにはそんな物は……」
通商護衛艦隊と総合宙路警備保障（株）は、多少借金まみれになっても、お上が関わっているのでそう簡単には潰れない仕組みになっている。
ただ、自分達のクビが飛ばされるだけだ。
だが、ここで一緒に頑張ってきた地元企業が潰れてしまうと、自分が何のためにここまで努力して来たのかがわからなくなってしまう。
正直、それだけは絶対に避けたかった。
それに、彼らはブラマンシュ財閥の嫌がらせで資金繰りに苦しいだけで、それを除いての経営状態は決して悪くなかったのだ。

「お金、どこかにないかな？」

「ええと。出所を問わなければ、ないこともないです」

ウォルコット司令の言葉に、アキオは首を傾げてしまう。

ただ、いくら何でも、ヤミ金などから借りるわけにいかない事も事実であった。

「あの、ヤミ金とかは……」

「いえ、お金ならそこにありますよ」

ウォルコット司令は、アキオのスーツの内ポケットを指差す。

「あの。こんな事を言うのも何ですけど、軍人の給料くらいでは、《焼け石に水》にもなりませんよ」

「いえいえ。別に、あなたの給料に期待しているわけではありません。私だって、《雀の涙》なんですから」

「じゃあ、どこにお金があるんです？」

「レイトンさん。この前、ここに赴任する時に乗ったシャトルの話をしていたじゃないですか」

アキオは、そう言えばこの前ウォルコット司令と酒を一緒に飲んだ時に、そんな話をした事を思い出していた。

「その時に、キャンペーンの一環で買ったギャラクシー宝クジなん

ですけどね。まだ当選者が名乗り出ないって、ニュースになっていましたよ。しかし、当選番号が、１から１０なんて結構一杯買う人がいるのかと思ったら、当選者が二人だけって凄いですね。しかも、キャリーオーバーが貯まりに貯まっていて、一人１０００億ギャラですか」

アキオは、自分のサイフから取り出したギャラクシー宝クジをただ呆然と眺め続けていた。

「あっ！　お久しぶりです。アキオさん」

「元気だったかい？　ミルフィー」

あの宝クジが当たっている事を知り、暫く呆然としてしまっていたアキオは、何回も念入りに宝クジの番号を確認して、やはりクジが本当に当たっている事を知る。

当選賞金は１０００億ギャラで、あれほど悩んでいた資金の問題が一気に解決してしまったのだ。

ただ、アキオ個人がお金を貸すという手法には問題があるので、これは、総合宙路警備保障（株）の資本金の増額という形にする事にした。

つまり、追加で株式を発行する事にしたのだ。

これだと、会社の体力が増強し、こちらが中々潰れないでジレて

来ているはずのブラマンシュ財閥に、精神的な打撃を与えられる可能性が高かった。
ただ、念には念を入れるため、アキオは定期的に連絡を取りあっているミルフィーユに、テレビ電話で連絡を取っていた。

「試験は、大丈夫だったかい？」

「はい。この前に教えて貰った予想問題がほとんど出ましたから」

「……」

アキオは、あの宝クジを当ててしまったミルフィーユの運の強さにも驚いていたが、いくら講師陣の特徴を掴んで問題を予想しているとはいえ、その問題がほとんど当たっていたという運の良さにまた驚いていた。

「そうか。良かったね」

「でも、アキオさんって凄いんですね。あんなにピタリと試験問題を予想出来て」

いくら何でも、ほとんどの問題が当たるというのは出来過ぎなので、これは、やはり彼女の運が良いという事なのであろう。

「それでね。実は、ミルフィーにお願いがあって」

「お願いですか？」

「ああ」

「うわぁ。お願いって何かな？」

お願いなのにも関わらず、ミルフィーユは嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「……。実はね……」

アキオは、一部重要機密を除き、これまでの事情を全て正直に話す。

「お金が無いんですか。大変ですね」

「だからね。その。ミルフィーの持っているお金をね……」

「私の持っているお金じゃ全然足りませんよ」

どうやら、彼女も、例のギャラクシー宝クジに当たっている事をまだ知らなかったようなので、アキオはその事を彼女に説明する。

「あれ、当たってたんですね。それで、１０万ギャラくらいですか？　賞金？」

「いんや。１０００億ギャラだ」

「大金ですねぇーーー」

普通の人なら驚愕するのであろうが、彼女はやはりいつものままで、春のお日様のような笑みを浮かべていた。

多分、実感が沸かないという事情もあったのであろうが。

「それで、そのお金を貸せば良いんですか？」

「違う。総合宙路警備保障（株）の株式を追加発行するから、それで全部購入して欲しいんだ」

実質は借金と変わりなかったが、株式なら時価が上がってから売れば利益になるし、業績さえ良ければ年に一回は配当金が入ってくる。

それに、それならば利子を払う必要がないので、利子が会社の経営を圧迫する事もなかった。

ただ、事情を良く知らないミルフィーユを騙しているようで、アキオは少し罪の意識に苛まれていたが。

「すぐに賞金を貰って、株を買いますね」

「ありがとう、ミルフィー」

「そんな。頭なんて下げないでください」

「でもさ」

「だって、アキオさんは、自分のためだけに動いているわけじゃないんでしょう。だったら」

「本当、助かったよ」

こうして、半官半民の警備会社に、二人の大株主が誕生する事となる。

そしてこの瞬間、通商護衛艦隊ＶＳブラマンシュ財閥との経済戦争の結果は、通商護衛艦隊の判定勝ちとなったのであった。

「旦那様。あと二時間ほどで、惑星アルモスに到着いたしますが……」

「そうか……。しかし、オレガノの奴は何をやっているんだ！　普通では考えられない額の大赤字を出す！　既存のシェアの大半を失う！　いつまでも、一族の恩恵に預かれると思うなよ！」

アキオとミルフィーユが、大金で総合宙路警備保障（株）の追加発行株式を取得してから、更に一ヶ月の月日が流れていた。

資金に余裕が出来たアキオは、地元の船主達に低利で資金を貸し出して、小回りの利く新しい商売を開始させたりして、彼らに手堅く利益を上げさせる事に成功していた。

一方、ブラマンシュ財閥は、あまりパッとせずの状態に陥っていた。

軍に納品する物資を圧力を掛けて値上げした影響で、これらのシェアをほとんど失ってしまったのだ。

アキオが、早々にブラマンシュ財閥系列以外の業者に物資の調達をお願いしていたので、彼らは一ヵ月ほどで、長期に安定した数の物資を以前の価格で納品出来るようになり、わざわざブラマンシュ財閥の息の掛かった企業から、値段がバカ高い物資を購入する必要性がなくなっていたのだ。

次に、大規模輸送のシェアの大半を握る事には成功していたのだが、やはり、この宙域で警備なしは辛かったので、高い料金を払っ

て総合宙路警備保障（株）に警備をお願いしていたし、輸送先の惑星の港やステーションの港湾使用料などは、アキオにアドバイスを受けていた地元企業が早々と権利を取得していたので、それにも割り増し料金を払う羽目になっていた。

おかげで、いくら物資を運んでも運んでも、ほとんど儲けが出ず、逆に最初に行っていた値引きキャンペーンの影響で大幅な赤字が消えずと、この宙域のブラマンシュ財閥の責任者の無能を曝け出す結果となっていた。

「それで、お父様が惑星アルモスに赴くのは仕方がないとして、どうして私まで同行せねばならないのでしょうか？」

ブラマンシュ財閥当主専用宇宙船内の、豪華な内装が施された特別室内で、当主であるダルノー・ブラマンシュに対して一人の少女が不満を露にしていた。

身長は１３０センチにも満たなかったが、その話し方からすると、見た目よりも大人であるらしい水色の髪の少女の頭には、ブラマンシュ一族特有の動物のような耳が付いていた。

「ミント。お前は、この宙域で任務があるのであろう。そして、私にも大切な仕事がある。目的地が一緒であるならば、一緒に行くのも悪くあるまい。そうであろう？」

「良く仰いますわ。そのように工作なされた癖に……」

ダルノー・ブラマンシュの一人娘であるミント・ブラマンシュは現在十五歳で、今年《白き月》入りを志願して認められ、そこで見習い研究生として働いていた。

昔は皇国と対等の立場であった白き月であったが、それは現在の１３代目皇王ジェラールの時代に一変する。

彼は、突如白き月を軍隊で制圧して、直轄地としてしまったからだ。

そしてそれ以降、白き月は皇国の半軍半官の拠点となり、今では、ロストテノロジーを活用した軍事兵器の開発も行われていた。

現にミントも、紋章機と呼ばれる特殊な大型戦闘機の開発に関わっていて、そのパイロット候補生の一人でもあったのだ。

ところが先週、彼女は突然に直属の上司から第2方面軍司令部への簡単な用事を仰せつかった。

ハッキリ言って、任務の内容は子供の使いのようなもので、自分が行く必要など全くなかったのだが、あえて自分が指名された経緯を考えると、裏で自分の父親が動いている以外に考えられなかった。

そうでなくても、ミントは自立思考が強く、ブラマンシュ財閥総帥の一人娘として、敷かれたレールをただ歩く事を潔しとしない人物だ。

父親は、花嫁修業の一環として白き月入りを認めてくれていたが、ミントはこの機会を生かしてブラマンシュ財閥から自立する気でいる。

なので、今回の父親への同行は、あまり気分の良いものではなかった。

「通商護衛艦隊か。世間知らずのエリート将校かと思えば、意外と世間慣れしていて侮れない男だな。レイトン中佐は」

ダルノーは、何度も目を通した報告書に視線を送りながら、不機嫌そうな表情を崩そうともしなかった。

「みたいですわね。オレガノさんでは、荷が重過ぎるのではないのでしょうか？」

「それもあるが、相手が悪かったようだな。こちらも、堅物の軍人と、先入観を持ち過ぎて侮っていた部分があった」

「それで、挽回可能ですの？」

「大規模物資輸送のシェアの大半は掴んでいる」

「全然、利益が出ていませんけどね」

「オレガノのバカが！　最初から素直に株を買っていれば良かったんだ！」

だが、それは既に手遅れの状態であった。

総合宙路警備保障（株）の発行済みの株式の保有者リストを見ると、一位が通商護衛艦隊、同率二位にアキオとミルフィーユ、三位以下が地元の運送業者と船主なっていて、他に市場に出回っている株式は一切存在しなかった。

「念のために、私が潰れた会社の経営者から買い取っているが、数が非常に少ない。この程度では、警備料金の値引きすら受けられん」

「その潰れた会社は、受けられたのにですか？」

「そこが、レイトン中佐の侮れないところだ。値引きを受けられる最低株式取得数を、その会社の資本力と比例させていてな。規模の小さな会社は少数でも受けられるが、うちほどの大手はかなりの株式を集めないと値引きが受けられない。多分、今回の件で、少数の脱落企業からうちに株式が流れる事を見越しての規則なのだろうな」

「それでは、打つ手がないではありませんか」

ミントは、冷静に自分の父親に言いつつも、内心ではそのレイトン中佐という人物に興味を持ち始めていた。

何しろ、本職の商売人でもない軍人が、商売の事で父親を凹ませていたからだ。

「株式なら、直接本人から買えば良いのだ」

「本人からですか？」

「ああ、レイトン中佐からな」

そして、それから数時間後、ブラマンシュ親子は惑星アルモスへと到着するのであった。

「では、私は別便で、第2方面軍艦隊司令部に向かいますので」

宇宙港でミントと別れたダルノーは、そこに見慣れた人物が迎えに来ている事に気が付く。

今回の無駄な争いと大赤字の元凶である、この宙域の責任者兼甥のオレガノ・ブラマンシュであった。

「叔父さん！　聞いて下さいよ！　成り上がりの貧乏中佐風情が、栄光あるブラマンシュ財閥を！」

「まあ。落ち着け。オレガノ」

「ですが！」

ダルノーは、目の前のバカな甥を少し冷めた目で見ていた。

《成り上がり》

それは、一代でブラマンシュ財閥をここまで大きくしたダルノーが、周りから良く言われている事である。

ところが、この目の前の甥は、自分の一族を先祖代々の名門貴族か何かの家と勘違いしているらしい。

「レイトン中佐には、私が直接会って話をする」

「そうですか！　なら最低でも軍から追放すべきです！　我が一族に逆らった者の末路に相応しい最後を！」

「そうだな。それも、選択肢の一つだな。だが、その前にだ……」

ダルノーは、一枚の辞令をオレガノに手渡す。

「叔父さん。これは？」

「辞令だ。読んでみなさい」

ダルノーに促されたオレガノがその辞令を読むと、そこには、『厳冬惑星アバシリ極点出張所所長に任ずる』と書かれていた。

厳冬惑星アバシリは、年間平均気温マイナス２０℃の氷に覆われ

た惑星で、多くの魚類やクジラ類の宝庫であったが、住民は少数の先住民族達のみであった。

「これは、どういう？」

「お前も知っていよう。あの星で取れる黄金アザラシ毛皮が貴重品で、高く売れる事を。なので、お前には、この星の住民から毛皮を買い取って輸送する仕事を与える」

勿論、これは、世間一般でいうところの左遷人事というものであった。

出張所といっても、建物は寒さを凌ぐ民家に毛が生えた程度の物で、社員も所長しか存在しない、普通の人なら誰も行きたがらない場所だ。

「ですが、叔父さん……」

「何だ？　何か、文句でもあるのか？　せっかくチャンスを与えてやったのに、大赤字を出して格下の相手に押されっ放しのお前が！」

「ですが……」

「嫌なら、辞表を出して他所に転職するのだな」

それで、全ては終了となった。

オレガノは、ガックリと肩を落としながらその場を後にする。

「旦那様、お車の用意が出来ました」

「すまんな、ハンス。では、直接レイトン中佐の顔を拝みに行くと

するかな」

ダルノーは、執事の手配した車に乗って通商護衛艦隊司令部へと移動を開始するのであった。

「どうも、お久しぶりです。ダルノー総帥」

ダルノーが、通商護衛艦隊司令部に到着すると、そこにはウォルコット大佐が待ち構えていた。

「ふっ！　ウォツコット中佐……。いや、今は大佐だったな。私の来訪時刻は、既に承知済みという事か。相変わらず喰えない男だ」

以前から面識のあった二人はお互いに挨拶を交わしていたが、お互いの印象は決して良いものでは無いらしい。

周りには、緊迫した空気が流れていた。

「やはり、レイトン中佐に会われますか？」

「勿論。それが、最大の目的だからな」

「それで、彼をどうなさるのですか？　天下のブラマンシュ財閥をコケにした罪で潰すおつもりですか？　ならば、この老いぼれ。非才の身ながらあなたと刺し違えても……」

ウォルコット大佐は、後輩のルフトからアキオの出生の秘密の件も含めてその身柄の安全を懇願されていたので、もしダルノーが何かよからぬ事を考えているようであったら、その身に賭けてもアキオを守るつもりであった。

「勘違いしないで欲しい。私は、商売の話をしに来ただけだ」

「そうですか。ならば、こちらです」

意外とあっさりと納得したウォルコット司令は、ダルノーをアキオの執務室に案内した。

するとそこでは、スーツ姿のアキオがデスクに座って、大量の書類の整理を行っていた。

「軍服姿ではないのだな」

ダルノーは、目的のレイトン中佐が軍服姿でない事に少し驚いていた。

「ええ。このところ、ずっと総合宙路警備保障（株）専務としての仕事が忙しいですからね」

総合宙路警備保障（株）は、通商護衛艦隊がメインスポンサーの会社なので、ウォルコットやアキオなど多くの通商護衛艦隊幹部が役員として籍を置いていた。

ただ、日頃は軍務の方が忙しかったので、ほとんどの兼業者は多少の監査業務しか行っていなかった。

非常事態なので、今はアキオだけは例外であったが……。

「レイトンさん、あなたにお客様ですよ」

「お客さんですか？　どこの会社の方ですかね？」

ここの所、軍人よりも各企業の経営者や部門担当者と会う事の方が圧倒的に多かったアキオは、次の客もどこかの会社の人間だと思っていた。

「まあ。正解は正解なのですが……」

「どうも、レイトン中佐。我が甥が、大変にお世話になったらしいね」

「おや。これは、いきなりの本命が……」

「ダルノー・ブラマンシュだ」

アキオとダルノーは、お互いに不敵な笑みを浮かべるのであった。

「では、早速始めましょうか？」

「そうだな。君は、二足の草鞋。私も、総帥として忙しい身。無駄な話は時間の無駄だな」

二人は、応接室に移動してそこで話を始める。
始めは、アルモスの惑星駐屯艦隊司令部あるステーションに、場所を間借りするほど待遇の悪かった通商護衛艦隊司令部も、現在では独自の司令本部を確保するまでに規模を拡大させていた。

「なるぽど。あの腰の重い連中では出来ない芸当だな」

長年皇国で商売をしているダルノーは、対外戦争をほとんど経験した事がない皇国軍の欠点を熟知しているがゆえに、この海賊の横行する宙域への多額の投資を控えてきていた。
主力艦をプラモデルのように綺麗に整え、見栄えの良い大演習の結果だけに拘り、予算を沢山使う星間ネットワークの構築作業のみに集中する。
拡大した皇国の権威主義と官僚主義を理解しているがうえに、支配から時間が経ち、安定した宙域にのみ投資を重点的に行う安全策を取って来たブラマンシュ財閥であったのだ。

「中央はともかく、辺境の方面軍では少し法が緩い部分がありますからね。時間効率重視で、グレーゾーンを突き進みました」

「でなければ、この短期間で成果は出まい」

「それで、約２５００億ギャラですけど、いかがなされますか？」

「いきなり本題かね？」

「ええ。私の保有する株式を買い取れば、総合宙路警備保障（株）第二位の大株主です。警備代金の割引きがなれば、もっと船を運航可能なのでは？　それに、もっと販路を拡大したい惑星等もあるでしょうに」

「最初の2．5倍の値段かね。少し高くないかな?」

「市場に出回っていない株式ですが、ほぼ時価ですよ。正直、少しオマケしているくらいで」

あのブラマンシュ財閥の圧力を受けたのに、それを跳ね除けて増資に成功したという理由で、総合宙路警備保障（株）の株式時価は、日々高値を更新しているとの某証券会社からの報告であった。

「買わせていただこうかな」

「ありがとうございます」

その他にも、いくつかの口約束ではあるが、協定を定めて二人は話し合いを終えた。

軍への物資納品は、今は無理であるし以前ほどのシェアは回復できないであろうが、じきにブラマンシュ財閥も参加出来るようになる事。

これは、アキオ自身が、最初に非ブラマンシュ財閥系の企業に事前に説明をしていた。

『今は、ブラマンシュ財閥はほぼ排除されているが、相手は痩せても枯れてもブラマンシュ財閥なので、こちらも和解せねばならないし、彼らも失ったシェアを取り戻そうと必死になるであろう。だから、今の状態は一時的なものと考えて、引き時と守るべき最低ラインを誤らないように』

次に、地元の運送業者や船主に、大規模輸送が可能なブラマンシュ財閥と業務が被らないような事業を行うように指導を行っている

事などだ。

「しかし、君は軍人らしくない軍人だね」

「傍流ですので」

『中央士官学校次席卒業者が、良く言うよ……』とダルノーは思ったが、実際に話してみると実に興味深い若者であった。

少し前までは、手痛くやられた事に少し腹を立てていたのだが、今は、そんな事は全然気にならなくなっていたのだ。

「おっと！　もうこんな時間か。実は、第2艦隊の面々と夕食会があってね」

「それは、ご同情申し上げます」

「確かに、つまらんジイさんばかりだからな。そこで、一つお願いがあるのだが」

「お願いですか？」

「うむ。実は、私の一人娘が公務でここに来ているのだが、先の理由で、夕食に付き合ってられなくてな。それに、今日の件を文章に認めて契約を交わそうと思うので、彼女にその草案を持たせようと思うのだが」

「わかりました。私が、お嬢様をご案内しましょう」

「お願いするよ」

アキオの承諾の返事を聞いたダルノーは、内心でほくそ笑むのであった。

「旦那様、話し合いの方は上手く行きましたので？」

帰りの車の中で、ダルノーは執事の質問を受ける。

「ああ。しかし、やはり切れ者だな。レイトン中佐は」

「こちらの動きを読んでいましたか？」

「ああ。ほぼ完璧に読まれていて、文句の付けようもなかった」

「それは。それは」

歳は二十歳以上も上であったが、若い頃は有能な部下として、そして定年を迎えた現在では、有能な執事としてダルノーを支えているハンスは、ダルノーが家族以外で唯一本音を口に出来る男であった。

「なあ、ハンス。《成り上がり者》と《代々の名門》の違いがわかるか？」

「例えるならば、ブラマンシュ財閥が、ミントお嬢様の代かその次

で潰れれば成り上がり者として。五代以上続けば、代々の名門として歴史に名が残るのではないかと」

「さすがだな、ハンス」

「それで、ミントお嬢様をレイトン中佐に会わせるのですか？」

「まあ、軽い見合い程度の物だ。こういう言い方をすると、ミントに怒られそうだが、ミントが女の子で助かったよ。何しろ、有能な婿を入れられるからな」

「レイトン中佐は、その候補の一人ですか？」

「大本命だな。実際に会って気に入ったよ。あの男、私と直接会っても動揺一つ見せなかった。冷静なのに度胸もある。軍人なのに、思考も柔軟だ」

「では、身辺の調査の方を……」

「うむ。頼むぞ。ハンス」

ただ、ダルノーには一つだけ気になっている点があった。

それは、アキオが何か影のような物を引きずっているように感じたからだ。

「しかし、あの影は少し気になりますね」

「やはり、ハンスは気が付いたか」

「ええ、年の功というやつでして」

「あのウォルコットが、あそこまでして彼を庇う意図がわからない。まあ。有能であるから、気に入ってはいるのであろうが……」

「自分も、決定打とは思えません」

「まあ、調査の結果次第だろうな」

ダルノーは、車中で一人静かに思考の海へと沈んでいくのであった。

「おや、レイトンさん。めかし込んでどちらに?」

ダルノー・ブラマンシュとの手打ちを終えた日の夕方、ウォルコット大佐が執務室内に入ると、そこでは、早めに仕事を終えたアキオが、仕事用ではないスーツに着替えて、明るめの色のネクタイを鏡の前で結んでいるところであった。

「ブラマンシュのお嬢様を、夕食に案内するんですよ。半分仕事ですね」

「ほう、ミントさんのですか」

「へえ、良くご存知ですね」

「まあ、名前と顔くらいは……。彼女は確か、例の白き月で、研修生をしているはずです」

皇国の直轄地になった白き月は、最近軍事拠点としての色合いを徐々に強くしていた。

噂によると、最新のロストテクノロジーを利用した試作兵器の開発も熱心に行っているらしい。

なので、研究員とはいっても、彼女はれっきとした軍人の卵であった。

「身分的には、士官学校の生徒と同じようなものです。階級は准尉相当を貰っているようですな」

「エリートですね」

「あなたには、負けると思いますけど」

「まあ、プライベートなのでお気楽にいきますよ」

アキオは、ウォルコット大佐の見送りを受け、待ち合わせ場所へと向かうのであった。

「時間十分前か……」

待ち合わせ時間より少し早めに付いたアキオは、待ち合わせ場所である中央広場の噴水の前で、携帯メモリーを覗き込んでいた。

時刻は、終業時刻直後の夕方であり、宇宙港に隣接する形で作られた街中は、仕事を終え仲間同士で飲み会に繰り出す者、家族と待ち合わせて夕食に出かける者など、多くの人達で賑わっていた。

「あの。アキオ・レイトン中佐でいらっしゃいますか?」

突如、目の前に背の小さい水色の髪の美少女が現れ、アキオに質問をしてくる。

「はい。私が、アキオ・レイトンです。ミントお嬢様でいらっしゃいますか?」

「始めまして。私、ミント・ブラマンシュと申します」

これが、アキオとミントの最初の出会いであった。

「モカを一つ」

「ダージリンをお願いします」

待ち合わせ場所で出会った二人は、まずは自己紹介と仕事を終わ

らせるために、近くに喫茶店に入った。

「あの、レイトン中佐。こちらが、父から預かった契約書の草案ですわ」

ミントは、一枚の書類をアキオに差し出した。

「ありがとうございます。ミントお嬢様」

アキオは、ミントから受け取った書類に視線を移し、真剣な表情で内容の確認を始める。

「（見た目は、モデルのような方ですのね。それに、エリートでいらっしゃいますし）」

だが、それだけでは、ミントが男性に心魅かれるはずもなかった。小さい頃から、ブラマンシュ財閥総帥の一人娘であるミントには、多くの自称ボーイフレンドや、婚約者候補と呼ばれる男性が群がっていたからだ。

いくらアキオがイケメンでも、そんな男性はミントには珍しくもなかったのだ。

「やはり、一筋縄では行きませんな。お父上は」

アキオは、そう言うと書類を机の上に置き、文章の数箇所に線を引いて、その横に手書きで新しい文面を書いて行く。

「微妙な言い回しの変化で、ブラマンシュ財閥の優位にしようとしていますね。ひょっとして、試されているんですかね？　この訂正を受け入れるなら調印をしますと伝えてください」

「わかりましたわ」

「では、仕事も終わったので行きましょうか？」

「どこにですの？」

「夕飯にですよ。今日は、色々とあってお腹が空きました」

「あの、ここは？」

「ああ、焼肉屋です。実は、惑星アルモスは、畜産が主産業の惑星なんですけどね。今までは、流通と宣伝がネックで稼ぎが少なかった。今は、多少改善されましてね。軍基地近くに店を出す業者も増えました」

アキオがミントを連れて入った焼肉屋は、高級で個室で食べるというような店ではなく、周りのテーブル席は、仕事帰りの軍人達や家族連れで賑わう、極普通の大衆店であった。

「高級なお店ではありませんのね」

「ええ。でも、今さら高級フレンチやイタリアンなんて食べ飽きているでしょう？　それに、寿司・会席料理・高級中華なんかも」

「ええ」

確かに、アキオの言う通りであった。
今までに、男性の招待で食事を共にした事はかなりあったが、彼らは常にミシュランガイドに載っているような三ツ星のお店に自分を連れて行っていたからだ。

「それで、焼肉ですの？」

「一番の理由は、自分が食べたかったという事ですかね。何しろ、この二ヵ月ほど慣れない事をして疲れましたから」

アキオは、そう言いつつも、注文を聞きに来たウェイトレスに一通りの注文を行い、自分用の生ビールを大ジョッキで頼んでいた。

「ミントお嬢様は、何を飲まれますか？」

「私は、クリームソーダを」

やがて、注文した肉が運ばれて来て、アキオはそれを次々と熱された網へと乗せていく。
すると、肉の焼ける美味しそうな匂いが周囲に立ち込めていった。

「では、何で乾杯しましょうかね？　ミントお嬢様」

「二人の出会いを祝してで宜しいかと思いますわ」

ミントは、この今までに出会った事のないタイプの男性に興味を持ち始めていた。
『自分が食べたいから』という理由で、自分を焼肉屋に連れて来るような男性に、生まれて初めて出会ったからだ。

「ところで、ミントお嬢様は……」

「あの。その呼び方は止めてくださいませんか」

「一応は、初対面だからという理由なんですけどね」

「それに、丁寧な言葉使いもです。でなければ、私は白き月で働いている軍属ですので、中佐のあなたに丁寧な言葉遣いで接しないといけません」

「正確には所属が違いますし、今はプライベートの時間なので、それは必要ないのでは？」

「ですから、私にも丁寧な言葉使いは必要ありませんわ。ああ。私のは、いわば口癖なので」

「了解」

ミントは、アキオがこれらの事を本心から語っていると察して、少し安心した笑みを浮かべる。

ミントは相手の心が読めるので、今までに同じような事を言う男性も複数いたのだが、本心は全く違っていたという事を何度も経験していたからだ。

「それにしても、災難でしたわね」

「ああ、あのオレガノだっけ？　あのアホが担当者で正直助かったよ。並の能力の責任者だったら、資金力の差で白旗をあげるところだったさ」

アキオはミントに、ここ二ヵ月ほどの事を語って聞かせ始める。

「ですが、父は手打ちをする羽目になりました。今までが順調だったので、足をすくわれたのでしょう」

「何か、棘のある言い方だね。実の父上に向かって」

「私が白き月にいるのも、あの実家から自立するためですから」

どうやら、ミントは自分の父親や実家の事をあまり良く思っていないらしい。

「あの財閥を継げるって、一般庶民の俺からしたら、贅沢に感じるんだけどね」

「人から見れば、そうかもしれませんわね……っ！」

ミントは、そう言った次の瞬間、初めてアキオの悲しげな心の声を聞いた。

そして、すぐに理解してしまった。

貴族の私生児として生まれ、後に生まれてしまった弟に爵位を継がせたい父親のせいで、市井で密かに育てられた事を。

そして、弟が十六歳となり、自分が士官学校を卒業したその時から、実の父親に命を狙われている事を。

小さい頃は、その弟に万が一の事があったらという理由で生かされていたのだが、もう必要ないと判断されたのであろう。

彼は、ここに赴任して来るまで、何度も生命の危機に曝されていた。

「（そんな……。レイトン中佐に、そんな悲しい事情が……）」

表面上は、そんな事をおくびにも出さないアキオも、心の声までは隠し切れないようで、彼の自分の悲しい生まれを呪う声が、次々とミントの心の中に響いてくる。

「（私は、父の家を継げという言葉に反抗しているけど、レイトン中佐は、その血のせいで継ぎたくもないし継げない家のせいで実の父親に命を狙われている。何て、悲しい方……）」

ミントは、自分の実家への反抗など、ただの我侭の一種である事を悟ってしまう。

誰よりも恵まれた環境に生まれ、何不自由なく育てられた自分は、まだ自由に人生を選ぶ権利が存在していたが、アキオは、実の父親が死なない限り、自由に人生を生きる事すらままならないのだ。

「ミント、どうかしたのか？」

「いえ、何でもございませんわ。それよりも、焼けましてよ。お肉」

「おっと、急いで食べないとね」

ミントは、肉を美味しそうに食べるアキオを嬉しそうに眺めていた。

「それで、デザートはここだよ」

焼肉屋で食事を終えた二人は、次にある一軒のお店に移動する。
そこは、最新のショッピングモール内にある小綺麗なテナント店舗ながら、宇宙中の数千種類の駄菓子が置かれた隠れた人気スポットであった。
店内は、仕事帰りの軍人やサラリーマン、デート中の恋人達や家族連れなど、多くの人達で賑わっていた。

「まあ、こんなに駄菓子が一杯」

「知っているんだ。駄菓子」

「ええ、実は大好物ですわ」

アキオは、何となくではあるがわかるような気がした。
ミントの生まれの事を考えると、最高の材料を使い、最高の職人が作った高級なお菓子などは、もう既に食べ飽きているのであろう。
だから、新しい刺激である、こんな合成着色料バリバリの安っぽい駄菓子に心を魅かれてしまうのであろうと。

「アキオさんも、お好きなのですか？　駄菓子」

「子供の頃に、母に小遣いを貰って良く行ってたね。手作りのお菓子も多かったけど、どういうわけかこういうお菓子も捨てがたくてね」

「同感ですわ。でも、凄いお客さんですのね」

「これも、対ブラマンシュ財閥対策で、地元の船主にアドバイスを行って作らせた店舗でね。まあ、多角経営の一環なんだけどね。大

人でもこういうものは食べたいけど、子供の頃にあった駄菓子屋は、主人のじいさん・ばあさんが死んで閉店していたり、大人一人では非常に入り難いものがある。それを、解決するとこういう商売形態になるって事でね」

「大繁盛ですわね」

「二番手・三番手が出た時に、その商売の真価が決まる」

「確かに、父も良くそう言っていますわ」

ミントは、この軍人の枠に収まらない多才な才能を持つ、たまに少し寂しげな笑みを浮かべる男に、徐々に興味を持ちつつあった。そして、父が、自分をアキオに会わせた理由にも気が付いた。どうやら、父は、アキオを自分の婿候補と考えているらしい。多分、昨日までであったら迷惑な話と考えたであろうが、今ではそう悪くない話だともミントは思い始めていた。

ミントは、数年後に、アキオが自分の夫として隣に立っている光景を思い浮かべて少しニヤけてしまう。

「ミント、どうかしたのか？」

「いえ、何でもありませんわ」

「そうか。なら楽しもう。夜はまだ長い」

「はい」

ミントは、その日始めて父から紹介された男性とのデートを、心ゆくまで楽しんだのであった。

「レイトン中佐、また会おう」

「自分は軍人なので、またの縁があるかどうか」

そして次の日、アキオは無事に手打ちに成功したダルノー・ブラマンシュとミントを見送るために、宇宙港のロビーにいた。

「中佐は、商売人としての才能がある。官僚や政治家としても上手くやれそうだ。軍人としても、前線でも使え、後方支援にも秀でとオールマイティーだ。フレスコ・シードル公爵の若い頃に似ている……」

ダルノーが、《フレスコ》という単語を口にした瞬間、アキオの表情が一瞬鋭くなる。

「……。ご存知でしたか……」

「こういう身の上なのでな。色々と、普通の人では知りえない事も知る事になる」

ダルノーが、執事のハンスにアキオの身辺調査を依頼してから僅か半日で、彼はとても重要な情報を掴んできた。

『アキオは、私生児で認知はされていないが、フレスコ公爵の長

男である』という、下手に知れば命に関わる情報であった。

「あまり軽々しく口になさらない方が良いですよ。天寿を全うしたければ……」

アキオは、これまでの経緯から、ダルノーに警告めいた言葉を口にする。

「君が、あの男を憎むのは仕方がないだろうな。何しろ、命を狙われているのだからな。しかし、あの男も老いたものだな。昔は、トランスバール士官学校を主席で卒業し、僅か三十八歳で大将にまで進み、近衛艦隊司令長官、トランスバール皇国軍最高司令長官、軍務大臣を歴任した逸材であったのに……」

「らしいですね」

皮肉な事に、アキオ体を半分流れるフレスコ公爵の血が、アキオの軍人としての出世の速さと、今までに数度あった命の危機を救う原因の一つとなっていたのだ。

「その後、四十五歳で予備役に入り、様々な商売を始めて公爵家の資産を何百倍にも増やした。何をやらせても最高の結果を出す《最高の才人》。だが、彼には唯一の悩みがあった」

「六十歳を過ぎても、子供がいなかった」

「そうだ。だから、正妻を五度も変え。様々な女に手を出しと。彼は、宮廷内で噂されるほどの漁色家となった」

だが、それでも子供は生まれなかったらしい。

半ば自暴自棄になったフレスコは、何気なく支援していた孤児院にいた母に目を付けてメイドとして雇い入れてその彼女に手を出し、彼女はアキオを身篭った。

すると、フレスコ公爵は密かに母を外に出し、子供の存在を秘匿してしまう。

なぜなら、この頃になると親戚筋から養子を受け入れるという話も出ていたので、子供の存在を知られたら欲深い親戚に暗殺されてしまうかもしれないと、フレスコが真剣に心配したらしいのだ。

そして更に二年後、今度は正妻が子供を身篭り、それを聞いたフレスコは、この正妻の子こそ真の跡取りと考え、アキオを万が一の時の予備としてそのままにしておいた。

だが、その弟が十五歳となって士官学校に入学した年に、フレスコは自分の血を引くアキオを、シードル公爵家の脅威と考えるようになった。

もし、事情を知った親戚や、シードル公爵家の力を落としたい他家の連中が、アキオを担ぎ上げるような事になったら。

八十歳を過ぎ、半分耄碌したフレスコは本気でそう考え、半ば本能でアキオの抹殺を影から命令していた。

「《老いた麒麟は、駄馬にすら劣る》。フレスコの現在だな」

「ですが、脅威である事に違いはありません。私に、あまり関わらないように。では……」

アキオは、最後にこう挨拶をすると、二人の前から足早に立ち去る。

「亡くなった母親の育て方が良かったのだろうな。誰よりも優しいからこそ、最後の一線に人を近づけさせないのか……」

「ですわね」

「ミント、あの男は落とすのは難しいぞ」

「私は、別に！　アキオさんを落とそうだとか、そんな事は！」

ミントは、実の父に図星を突かれたのか？
珍しく、顔を真っ赤にして大きな声をあげていた。

「名前で呼んでいるのにか？」

「お友達の一人として、認めただけですわ」

ダルノーは、そう言いつつも顔を真っ赤にしたままの実の娘を微笑ましく見つめるのであった。
こうして、第2方面軍通商護衛艦隊とブラマンシュ財閥との手打ちは無事に終了し、双方がそれなりの利益を得る事に成功していた。
そして、ダルノーは娘の婿候補を見つける事に成功し、ミントは気になる男性を見つけ、今までは少し折り合いの悪かった親子の仲も少しだけ修復したのであった。

（数日後、アキオの私室内）

「という顛末でね。ミルフィーのおかげで助かったよ」

「いいえ。私は、何もしていませんから」

アキオは、既に普通のメール等でなく、ミルフィーユと映像付きの星間通信で定期的に連絡を取るようになっていた。

忙しい任務の合間を縫って、このお日様のような笑みを浮かべる少女と話をすると、心が癒されるような気がしたからだ。

一人っ子であるアキオにしたら、妹が出来たようなものなのであろう。

「資本主義では、スポンサーこそ最大の力ってね」

「あっ！　それよりも！　あの大金は、何なんですか？」

あのあと、アキオは自分の株をブラマンシュ財閥に売って得た利益の内、自分が出資した分１，０００億ギャラのみを自分の銀行の口座に入れ、残りを全てミルフィーユの銀行の口座に戻していた。

そして、株式も、万が一の時に委任状を書いて貰うという条件で、名義をそのままにしていた。

つまり、現在のミルフィーユは、時価２，５００億ギャラ程にまで高騰した総合宙路警備保障（株）の株式と、銀行預金残高１５００億２５６万３２１ギャラを有する、銀河有数の億万長者に成り上がっていたのだ。

「俺が、今回の件で利益を得ると色々とまずいからさ。だから、貸した分は返して貰ったけど、利益は協力者のミルフィーにってね」

「でも、あんな大金！」

「欲しかったんだろう？　高級鍋セット」

「ですけど！」

「俺は、汚職で捕まるのは勘弁だね」

「……。わかりました。預かっておきます」

「そうそう、それで良し」

「あっ！　それとこの前の試験で、私またトップだったんですよ。アキオさんに貰った想定問題が、また全部そのまま出ていて。アキオさんって、凄いですよね」

「まあね……」

アキオは、ミルフィーユの運の強さにただ驚くばかりであった。購入した宝クジは当たる、頼まれて買った株は時価が上がり続けている、貰った想定問題が全部試験に出る、ここまで来ると彼女の運の強さは、何か現代の科学でも解明出来ない、何か特別な物なのではないのか？

アキオは、漠然とそんな事を考え始めていた。

「それとですね。そろそろ、従兵訓練の希望調査がありまして」

「ああ、あれか」

それはトランスバール皇国に留まらず、多分多くの軍士官を養成する学校が行っている実習であった。

将来の軍幹部候補生たる士官学校の生徒が、一定の期間、軍の司令官や将軍の従兵を行い、軍という現場の空気に慣れる。

そういう制度であった。

「希望って、そんなに簡単に通るのか？　あれ」

「アキオさんって、どこに配置されました？」

「ああ。軍本部の人事部長をしていたハイネケン少将の下で、一ヵ月間、ずーーーっと、書類整理の手伝いと、各所へのお使いに終始していたな」

皆が皆、艦隊司令部や艦隊旗艦に行ける道理もなく、アキオなどは、『軍の空気に慣れるというよりも、会社の人事部に配属された気分だった』と後に語るほどの従兵経験であった。

「私、アキオさんの所に希望を出したんですよ」

「うち？」

「はい！」

ミルフィーユは嬉しそうにそう言うが、普通通商護衛艦隊に希望を出す士官候補生などはほぼ皆無で、彼女は非常に珍しい存在であった。

確かに、補給は軍隊が戦力を維持するにおいて一番重要な事であり、通商路の護衛は、軍本来の最大の目的のはずなのだが、やはり普通の軍人は、輸送艦や駆逐艦より巡洋艦や戦艦・正規空母へ、部署も、花形である砲撃・通信・航法などへと集中する事が多かったからだ。

「運が良ければ、ウォルコット司令の従兵に配属になるのかな？」

「アキオさんには、従兵は付かないんですか？」

中佐で副司令だが、通商護衛艦隊という半ば二線級部隊のが後ろに付くアキオに、これまで従兵がいた試しはなかった。

別に必要なかったし、考えてみればウォルコット司令にもいなかったので、自分には過ぎた物だと考えていたのだ。

それに、ここに配属されてからは大人しかったが、フレスコ公爵が自分を消しに来る可能性がまだ消えたわけでもなかったからだ。

なので、一緒にいる時間の多い従兵などがいたら、その従兵に迷惑を掛けてしまうかもしれない。

「万が一、配属されたら宜しくな。多分、難しいと思うけどね……」

「はい！」

しかし、この頃のアキオは、まだミルフィーユの強運を甘く見ていた節があった。

そして一週間後、アキオの元に二つのニュースが入る事となる。

一つは、惑星アルモスの首都近郊に一機の小型航空機が墜落して、その機内で、裏の世界ではかなり有名な暗殺者が事故死していた事と、もう一つは、トランスバール士官学校の方から、ミルフィーユ・桜葉士官候補生をウォルコット大佐の従兵実習生として送るので、一ヶ月間宜しくとの通達を受けた事であった。

第一話（後書き）

二話目です。
エオニアのクーデター前夜って感じですかね？

第二話

（皇国歴４１１年、１０月下旬、惑星アルモス、通商護衛艦隊司令本部内）

「あの。ウォルコット司令。これは？」

今年も、この季節というか時期がやって来ていた。

トランスバール皇国領内に十数ヶ所存在する士官学校から、多くの士官候補生達が、実習のために、各所の艦隊司令部や軍基地に従兵見習いとして移動するこの季節が。

アキオは士官学校卒業以来、常に鉛の弾が飛んで来るか、圧倒的優位に立つ反乱勢力と対峙するような場所にしか配属されていなかったので、この手の行事を経験した事がなかった。

いくら何でも、卒業前の候補生をそんな場所に配置するはずもなかったからだ。

そして、今回、初めてミルフィーユを従兵見習いとして受け入れる事になったのだが、そこでおかしな現象に巻き込まれる事になる。

「トランスバール士官学校から来ました。ミルフィーユ・桜葉候補生です。宜しくお願いします。レイトン副司令」

さすがに、周りの目があるので、アキオの目の前に立つミルフィーユは、丁寧に挨拶をする。

「センパール士官学校から来ました。烏丸ちとせです。レイトン中佐の武勇は、良く聞いています。宜しくご指導の程をお願いします」

そして、ミルフィーユの隣には、全く聞いていなかった、黒い髪を腰近くまで伸ばし、リボンを結んだ美少女が立っていた。

多分、年齢はミルフィーユと同じくらいであろう。

「なぜに、二人？」

実は、通商護衛部隊に派遣される予定であった候補生は、ミルフィーユ一人であり、しかも彼女は、本来はウォルコット司令の従兵見習いとして配属される予定であった。

ところが、昼行灯と周りに言われ、常に野暮用と称してどこかにフラりと出てしまう彼が、『従兵なんて、いらないですよ』と言って来たので、仕方なしにアキオが面倒を見る事になっていたのだ。

『ほら。私は、一人で外に出かける事が多いじゃないですか。だから、全然生徒さんのためにならないわけですよ』

一見、フラりと出かけてどこかでサボっているように見えるウォルコット司令は、腹芸・裏交渉・暗躍と、若い者にいきなり見せてもあまりためにならないであろう事を多くこなしていたので、それにはアキオも納得したのだが、今、自分の目の前にいるもう一人の全く聞いていない候補生には、さすがに面食らっていた。

正直、どうしたものかと思っていたからだ。

「ウォルコット司令。聞いてました？」

「おかしいですね。何かの書類上か、手続き上のミスなのでしょうか？」

アキオの隣の自分のデスクで、暢気にお茶を啜っていたウォルコット司令も、事情を全く知らないらしい。

「（しかも、センパール士官学校か……。きっと、堅物なんだろうな……）」

百二十八の有人惑星の他に、多くの人々が住まうステーションを多く所有するトランスバール皇国の軍事組織は、いくら平時とはいえその規模はかなりのものであった。

なので、軍人を養成する教育機関は領域内に多数存在し、首都星トランスバールにも複数が存在していた。

そしてその中でも、軍の高官を多数輩出しているのが、アキオが卒業し、ミルフィーユが所属しているトランスバール中央士官学校で、これには多くの貴族の子弟達も通っていたので、エリート学校ながらも少し柔らかい雰囲気を持つ学校であった。

そしてもう一つが、烏丸ちとせが通うセンパール士官学校であった。

ここはハッキリ言って、かなり厳しい学校であった。

民間出身の、代々軍人家系というような家の子弟が多く通い、入学試験時のエコ贔屓はゼロの完全実力主義で、貴族の子弟は優遇されるトランスバール中央士官学校に、何かとライバル心を燃やす。

そういう学校であった。

実はアキオは、この学校への入学も選択肢にしていたのだが、あまりにお堅い校風に半分引いてしまった過去があったのだ。

「しかし、君ほどのエリートがなぜここに？　自分で言うのも何だけど、ここの中央での評価は低い。ハッキリ言って、二線級部隊扱いだ」

中古艦艇・輸送船改造艦艇を装備し、第2方面軍艦隊と惑星駐留艦隊に補給を行い、通商路を護衛する。

地味ながらも重要な仕事だが、中央のエリート達の評価を期待出

来ない部隊であった。
特に、ちとせのようなエリート候補が、絶対に回されて来ない部署でもあった。

「いえ。亡くなった父は、軍における補給などの後方支援の重要さを良く口にしていました」

「なるほどね」

アキオは、ちとせの発言を少し冷めた目で見ていた。
実際、口の上手い軍幹部は、良く後方支援の大事さを口にするのだが、それと自分が実際に関わるのとは、全く別次元の話だったからだ。

「まあ。良いさ。ちょっと、手続きに不備があったようだが、我が艦隊への臨時配属を歓迎する。それでですね……」

「あっ！　そうだ！　私。野暮用がですね」

「あの。どちらかの娘をですね……」

「じゃあ、後は宜しくお願いしますね。レイトンさん、それとミルフィーユさんも。ちとせさんも頑張ってくださいね」

アキオの願いを知ってか知らずか？
ウォルコット司令は、残っていたお茶を一気に飲み干すと、足早に司令室から出て行ってしまう。

「元々、従兵なんていらないのに、二人って……」

突如実習生が二人に増え、しかもその教育をウォルコット司令に押し付けられてしまったアキオは、その場で溜息を吐いていた。

「わあい。何か楽しそうですね。ちとせさんも、宜しくお願いします」

「桜葉候補生、あなたは、軍人としての自覚が足りないのではなくて？」

「えへへ、良く言われるんですけどね」

「あなたね！」

アキオは、この全くタイプの違う二人の相性があまり宜しくない事を知り、一人頭を抱え込むのであった。

（翌日、午前六時、惑星アルモス周辺宙域、通商護衛艦隊（ヒ）第一打撃艦隊（エイ）旗艦艦艦内）

「総員！　起床！」

当番兵の通信と共に、この艦に所属する宿直兵を除く全兵員が、一斉にベッドから飛び起き、着替えと身支度を開始し、終了と同時に所属部署へと集合する。

これは、定期的に偵察や訓練を繰り返している、各任務艦隊の兵達に課せられた義務であった。

「十分以内に、全員の集合を確認。例の二人を除いてですが……」

「俺も久々だったから、ギリギリだったな」

「九分三十八秒です。新兵なら説教ですな」

《ヒエイ》艦長であるマッコリ少佐から報告を受けたアキオ自身も、集合時間にかなりギリギリであったが、既に全ての兵達が集まって自分の仕事を開始しているなか、アキオが連れて来ていたミルフィーユとちとせは、いまだにブリッジに姿を現していなかった。

「すいません！　遅れました！」

「烏丸准尉。十二分二十六秒。遅刻だな」

「すいませぇーーーん！　スカートを逆に履いちゃって！」

「桜葉准尉。十三分五秒。遅刻」

結局、実習生が二人来てしまった理由は、書類の転送ミスなど、通常ではありえないミスを、複数センパール士官学校側がしてしまったためであるらしい。

しかも、本来ちとせが派遣される予定であった場所は、惑星アルモスからかなりの遠方であったために、『二人になってしまったけど、宜しくね』という、軍総務部からの、少し殺意を覚える程の軽いお願いによって、二人を一斉に預かる事になっていたのだ。

「今日は大目に見るが、明日からの遅刻は、懲罰の対象になる。気を付けるように」

「副司令殿も、お気を付けて」

偉そうな事を言っていても、実はギリギリであったアキオも、マッコリ少佐に釘を刺されてしまう。

「マッコリ少佐は、きついな。桜葉准尉は第二砲塔に、烏丸准尉は第三砲塔に、後は砲術長の命令に従う事」

「「了解！」」

結局、二人の扱いに困ってしまったアキオは、司令本部での仕事を部下に任せると、二人を連れて宇宙に出る事にした。

最初から、お茶を汲ませたり、書類を整理させたり、伝書鳩のようにお使いに出すよりも、訓練でもさせて厳しさを実感させた方が、よっぽど後で役に立つと考えたからだ。

そこでアキオは、近々久しぶりに海賊討伐に向かう第一打撃艦隊旗艦ヒエイへと移動し、二人を通常の戦闘訓練に参加させていた。

第一打撃艦隊は、通商護衛艦隊にある艦艇の中でも、特に戦闘力が高い艦のみで構成された、精鋭中の精鋭艦隊であった。

前の総旗艦であった《コンゴウ》と同型艦である旧式高速戦艦ヒエイを旗艦に、旧式巡洋艦・仮装巡洋艦・護衛空母・旧式駆逐艦・魚雷艇・高速輸送船・工作船・病院船・偵察艦など、統一艦隊運動の難しい雑多な構成ながらも、それを過酷な訓練で克服していた。

だが、この艦隊の常時の司令官は、ヒエイの艦長と兼任であるマッコリ少佐となっていて、この艦隊の軍本部での扱いを、容易に想像できるというものであった。

「しかし、大丈夫ですかね？　あんな娘っ子で」

駆け足で、訓練を行う各砲塔へと移動する二人の背中を見ながら、マッコリ少佐はかなり失礼な事を言う。

元々叩き上げで昇進した彼からすると、彼女達はどうにも頼りない印象を覚えるようであった。

「一週間でシャッキリとするさ。それに、実戦時にはここで観戦させるからな。邪魔にはならないだろう」

実際、ここでの訓練の厳しさはかなり有名になっていて、士官学校で広く浅く学んでいる二人には、かなり厳しいものとなっていた。

それに、配属直後の新兵は、普通は最低でも一ヵ月は訓練しないと、使い物にならないのが常識であったからだ。

「さあ、訓練を始めるぞ。今回は、さすがに逃げられましたでは済まないからな」

「「「「「「了解！」」」」」」

こうして、アキオの号令の元、厳しい訓練がスタートしたのであった。

「ふえぇーーーーー。疲れたよぉーーー」

「……」

その日の、夕方まで続いた訓練は無事に終了し、ミルフィーユは『疲れた』を連発し、ちとせは、疲労感から自室の机に無言で突っ伏していた。

「大丈夫かい？　お二人さん」

「「レイトン中佐！」」

そこへ、三人分の食事のトレーを持ったアキオが登場する。

アキオは過去の経験から、二人が食堂に夕食を食べに行く気力もない事を察知して、自分の分を含めた食事を持って来ていたのだ。

「どうだ？　キツイだろう」

アキオは、二人の前に食事の入ったトレーをそっと置く。

「はい。疲れて立ち上がる気力がありません」

「大丈夫です。このくらいの事で！」

二人の返事は、性格を反映してなのか？　かなり両極端なものになっていた。

特にちとせは、自分が既に限界である事を知られまいと必死になって反論していた。

「そうか。では、夜の訓練をだな」

「「！！！！！！！」」

二人は、まだ訓練がある事を知って、ほぼ同時に絶望的な表情になる。

「嘘だよ。だが、君達と一緒に訓練をしていた連中を覚えているかい？」

「はい。私達と同年代で」

二等兵の階級章を付けた若い男女は、まるで二人をあざ笑うかのように訓練時にもテキパキと動き、昼飯時にも同僚と談笑しながら楽しそうに食事を行い、訓練終了時にもまだ余力を残しているように見えた。

そして、それを見たミルフィーユは素直に感心し、自分はかなり優秀であると自負していたちとせは、悔しさを顔に滲ませていた。

「半年以上も、やっているからな。慣れて当然だ。それに、夕食後は勉強するんだよ。彼らは」

「本当なんですか？」

「ああ。そろそろ、昇進試験があるからな。狭き門だが、受かれば伍長になれる。その後、軍曹・曹長・准尉と上に挑戦し続けるわけだ」

「凄いんですね」

「皆。家が貧しくて、学校に行けないのさ。だから、この制度を利用して我が艦隊に入隊するんだ。そして、給料を貯めながら訓練をして勉強をする。将来的に軍に残るも良し、民間の高等教育機関に行くも良し、民間企業に就職するも良しだ」

この青少年・少女教育制度は、アキオとウォルコット司令が提案し、積極的に動き回って実現した制度であった。

資金は、大半が通商護衛艦隊と総合宙路警備保障（株）が出していたが、第2方面軍艦隊や各惑星政府、それと制度に賛同した企業なども出資していた。

貧しさから、海賊などの不法行為に若者を参加させるのを防ぎ、通商護衛艦隊は優秀な人材を確保でき、ここから社会に出て成功した若者が、ちゃんと税金を納めてくれて軍が予算を確保できる。

そういう仕組みになっていたのだ。

「それと、見ただろう？　あの三等兵の階級章を付けた連中を」

「そういえば、不思議に思っていました。皇国軍に三等兵なんて階級は……」

机の上に置かれた食事を少しずつ口にしながら、ちとせが感じた疑問を口にする。

「連中は、元海賊なのさ。つまり、刑務所に入る代わりに、ここで働いているわけだ」

「えっ！　そうなんですか？」

「奉公期間が終われば、連中は、ここに正式に入れる権利を有する

ようになる。当然、昇進試験も受けられる。だから、彼らも勉強している」

「凄いですね」

「……」

ミルフィーユは、普通に素直に感心していたが、ちとせにとって、このレイトン中佐は驚愕に値する人物であった。

本来、ある方面軍の艦隊司令官の従兵として実習をする予定であったちとせは、手続きのミスとはいえ、こんな場末の部隊に回された事をかなり残念に思っていた。

性格的にそれを表に出さなかったし、自分の亡くなった父が、軍での補給の重要性を口にしていたのは事実だ。

それでも、彼女とて普通の人間であったので、どうしても正規艦艇を多数装備した正規艦隊に憧れてしまうのも事実であった。

ところが、この艦隊は、ちとせにとって驚きの連続であった。

昨晩に調べた予算規模から想像していたのとは全く違う、真の戦闘力を備えた精鋭部隊であったからだ。

方面軍の三分の一の予算規模にも関わらず、様々な知恵とアイデアを絞ってこれだけの規模の戦力を整えたアキオにちとせは素直に感心し、憧憬の念を抱き始めたのだ。

「おっと、もうこんな時間か。二人とも、早く寝るんだぞ」

アキオは、食事の終わったトレーを台車に乗せると、二人に早く寝るように忠告してから部屋を後にする。

「アキオさんの言う通りかな。疲れたから早く寝ましょう。ちとせ

さん」

「……」

「あの。ちとせさん？」

「桜葉准尉！　あなた！　レイトン中佐の事を馴れ馴れしく名前で呼んで！」

「えーーーっ！　だって、アキオさんが、任務時以外はそう呼べって」

「駄目です！　そんな事は許されません！」

「ふぇーーーん！　どうして？」

ミルフィーユとちとせが、これから仲良くなる事はあるのであろうか？

それだけが、唯一の不安材料であった。

ミルフィーユとちとせが、訓練を開始してから一週間の時が流れた。

どうにか、訓練に付いて行く事が出来るようになった二人は、こ

の日、見習い参謀として、第一打撃艦隊司令部の作戦会議に参加していた。

「そろそろ、海賊《暁のザリガニ》の根拠地とされるデブリ帯に到着するわけだが……」

「質問です！」

「何かね？　桜葉准尉」

「根拠地とされるって事は、完全にそこだと判明していないのですか？」

アキオに、『疑問に思った事があったら、遠慮なく質問する事』と言われていたミルフィーユは、会議の進行役であるマッコリ少佐に素直に質問をする。

「連中は、数箇所の拠点を転々としているうえに、我々が討伐艦隊を繰り出すと、どこかに逃げてしまうのだ」

「それは、つまりこちらの動きを察知されていると？」

「そうだ。烏丸准尉の言う通りだ、おかげで、木村少佐が二回、私も三回の討伐に失敗している。そこで、最後の切り札として、レイトン中佐に登場願ったわけだ」

「期待してくれるのは良いんだけど、そんな急にアイデアなんてね……」

過去に五回も派遣された艦隊であったが、別に木村少佐とマッコ

リ少佐も、戦力を無駄に遊ばせていたわけでもない。
ちゃんと、打てる手を全て打ってこの結果なのだ。
なので、アキオに指揮を執らせてみても、急に成功を収めるという類の話でもなかった。

「策はともかく、試してみるか」

そう言うと、アキオは二本の棒をちとせとミルフィーユに差し出す。

「ふえ？　これは？」

「クジですか？」

「そうだ、クジだ。引いてくれ」

二人がクジを引くと、棒の先に赤いマークが付いていたのは、珍しくちとせの方であった。
普段であれば、自らを凶運であると公言するミルフィーユが、実際に当たりを引いてしまうのが当たり前であったからだ。

「あの、当たりました」

実際に、ちとせは自分が当たりを引いた事に驚きながら、アキオに当たりクジを見せていた。

「では、烏丸准尉が海賊の逃走ルートを想定して作戦を提示するように」

「えーーーっ！　私がですか？　でも！」

「プロの木村少佐やマッコリ少佐が、複数回ミスしているんだ。烏丸准尉の一回の失敗など、笑えるレベルさ。駄目元で頑張るんだね」

「はい！　頑張ります！」

そして、翌日、ちとせ考案の作戦に従って第一打撃艦隊は移動を開始する。

「空振りかな？」

「ええ。いつも通りに」

ちとせは、士官学校で習った知識などを最大限に生かし、自分なりに懸命に作戦を立てたのだが、結果は空振りに終わっていた。海賊の、その影すら拝めなかったのだ。

「南から艦隊の半数が侵攻し、北の暗礁宙域との境目に気が付かれないように迂回させたもう半分の艦隊を伏せさせる。悪くない策だが……」

「実は、自分もやった事がありまして」

当然、作戦の精度は、経験豊富なマッコリ少佐の方が上であった。
だが、海賊を発見できなかった時点で、それはあまり意味のない事であったのだが……。

「申し訳ありません」

「謝る必要はないな」

アキオは、まるでちとせを責める素振りを見せなかった。
というか、『どうして、そんな事で謝るのだろう?』という表情をしていた。

「そうですね。烏丸准尉は、レイトン副司令の命令に従ってちゃんと作戦を立てた。だから、一番悪いのは、レイトン副司令です」

「マッコリ少佐は、意地悪だな」

「事実ですから」

同じく、マッコリ少佐もちとせには何も言わず、むしろアキオが責められて苦笑しているレベルであった。

「でも、艦隊の貴重な物資を、無駄に消耗してしまって……」

元々予算規模が小さく、アキオが懸命にやり繰りをしている艦隊なので、ちとせは貴重な物資を無駄にして申し訳なく思っていた。

「人が死んだわけでなし、烏丸准尉がこの失敗を次に生かせればプラスになるから、全く問題はない。気にするな」

「ありがとうございます」

ちとせは、顔を少し赤くさせながら、アキオを尊敬の眼差しで見つめていた。

「（あちゃーー。レイトン中佐も、罪な事を……）それで、次の桜葉准尉は、勝算のある作戦を立てられたのかね？」

「はい、マッコリ少佐。ズバっと、凄いのができちゃいました」

マッコリ少佐に質問されたミルフィーユは、一人自信満々の笑みを浮かべていた。

「デブリ帯の西、惑星ゴート管轄の物資中継ステーションにか？」

「いや、でもあそこは、ゴート中央政府管轄の施設で……」

ちとせ続いて、ミルフィーユの予想を聞いた艦隊の幹部達は、口々に懐疑的な意見を口にし始める。

それに、彼女はこうも言っているのだ。

『海賊は、ゴート中央政府とグルである』と。

これはなかなかに刺激的な意見であり、一つ間違えれば大変な問題に発展してしまうのだが、ミルフィーユは自分の説を決して曲げなかった。

「今までの討伐艦隊が失敗していた理由は、そこにあると私は思うのです。海賊は、北の暗礁宙域に逃げ込むから見つからないという事になっている。でも、実際には、ここに密かに逃げ込んでいる」

「東の、惑星ケルト駐留艦隊の探査範囲内という説はないのかね？」

「東だと、艦隊を隠せる拠点が存在しません。それに、デブリ等も少ないので、簡単に探知されてしまいます」

「だが、惑星ゴートにも、駐留艦隊は存在するのだ。彼らとて無能では……」

老齢の砲術士官がそこまで発言したところで、途中で席を外していたアキオが、資料を片手に会議に戻ってくる。

「桜葉准尉、ビンゴだ」

アキオが、机の上に持っていた資料を放り投げると、次の瞬間、幹部達の顔に動揺が走る。

「ステーション周辺を常に偵察している艦艇は、交代制のため僅か二隻のみ……」

惑星駐留艦隊は、予算の関係等で、常に全艦艇を遊弋させているわけではない。

当然、日頃の警戒は、多数の小型艦艇に頼る事になるのだが、問題のステーション周辺を偵察している艦艇は、常に一隻で日に一回交代するのみ。

つまり、この二隻分の軍人を買収すれば、海賊達は安全にステーションに逃げ込める計算になる。

「通りで、今まで影すら拝めなかったわけだ」

これまでに、三度の討伐に失敗していたマッコリ少佐は、怒りで体を震わせていた。

それはそうであろう。

まさか、味方に裏切られているとは思わなかったからだ。

「それで、具体的な作戦は？」

「はい、それはですね……」

こうして、ミルフィーユ考案の海賊捕捉作戦は、スタートする事となる。

「あーーー。こちらは、通商護衛艦隊のレイトン中佐だ。我々がここにいる理由は、当然理解できているよな？　完全玉砕か、降伏のみを君達は選べる。好きな方を選びたまえ」

ミルフィーユの立てた作戦は、とても単純なものであった。

ステルス機能を工作艦で強化した偵察艦を、例のステーション周辺に密かに忍び込ませ、第一打撃艦隊は一旦撤収するかのように見せかけ、一気に海賊の戻っていたデブリ帯に最大船速で侵攻を開始する。

すると、海賊達は焦ってステーションに逃げ込み、それを偵察艦に察知されるという仕組みになっていて、実際にそのように事が進み、海賊の逃げ込んだステーションは、第一打撃艦隊に幾重にも包囲されていた。

「このステーションは、ゴート中央政府の管轄化に……」

「海賊の逃げ込む映像ならあるぞ。見たいか？」

「今まで、駐留艦隊にそのような嫌疑を受けた事もなく……」

「あの買収した警備艇の乗員達は、全て逮捕されたぞ。そこでビームを撃たれて蒸発して死ぬか？」

「……。降伏します……」

こうして、ゴート中央政府とグルになっていた海賊《暁のザリガニ》は壊滅し、ゴート中央政府要員の大量逮捕と共に事件は幕を下ろすのであった。

「アキオさん、お茶とオヤツの時間ですよ」

「へえ、今日も、美味しそうじゃないか」

「今日は、レアチーズケーキにしました」

海賊《暁のザリガニ》が壊滅し、アキオ達がヒエイから下船して二週間、またいつもの業務に戻ったアキオは、溜った書類の整理をちとせとミルフィーユに手伝わせていた。

通商護衛艦隊副司令と総合宙路警備保障（株）専務を兼任するアキオは、時には軍服で、時にはスーツへと着る物を変えて様々な場所に出かけていたので、ミルフィーユとちとせも、それに合わせて着る物を替え、アキオの秘書のような事を行う日々に生活を変化させていた。

そして、その事によって多少の余裕ができたミルフィーユは、今日も趣味であるお菓子作りに精を出し、それをアキオに振舞う事を行っていた。

「ちとせも、食べるよね？」

「食べますけど、こんな事で良いのでしょうか？」

確かに、書類整理は面倒な仕事で、艦隊の激しい訓練などに比べると地味であったが、アキオは二人に渡す書類をわざわざ厳選して、内容を目に入れるように指導していた。

物資の流れや、資金の使い道、艦隊の人事案や、艦隊の新編成案や、偵察のローテーションの確認、再就役させた艦艇の訓練状況など、大まかな流れを掴むと、通商護衛艦隊の現状が良く理解できるようになっていて、これらの情報の把握は、将来二人が将校になった時に絶対に役に立つ物であった。

「訓練も大事だけどね。管理職は、色々とやらなければいけない事

も多い。書類は、管理職の天敵だ。そう思わないかい？　ちとせ」

「確かに、そうですね。アキオさん」

その真面目な性格ゆえに、始めはよそよそしかったちとせも、公の席を除いてアキオの事を名前で呼ぶようになっていた。

それと、始めはソリが合わないと思っていたミルフィーユとも、それなりに仲良くなったらしい。

どうやら、先日の海賊退治の折に、彼女がトランスバール士官学校主席に相応しい策を提示した事と、見た目とは違って、ちゃんと真面目に努力する性格である事を知ったからであった。

「このケーキ。美味しい」

「でしょう。実は、最高の材料を貰ったんだ」

ミルフィーユは、いくつかの強運の結果、総合宙路警備保障（株）の大株主になっていたので、気を使う各方面の人々から様々な贈り物を貰うようになっていた。

特に、彼女の趣味が料理とお菓子作りであると知られてからは、色々な高級食材が届くようになり、彼女は暇を見ては、それらで作ったお菓子などをアキオ達に振舞っていた。

「いやあ。実に、美味しそうなケーキですな」

三人でケーキとお茶を楽しんでいると、所用があって出かけていたウォルコット司令が、室内に入ってくる。

「あっ！　ウォルコット司令も、お一ついかがですか？」

「それは、ありがたいですね」

「はい。美味しいですよ」

ミルフィーユは、いつものようにニコニコしながら、ウォルコットにケーキの載った皿を差し出した。

「甘さ控えめで美味しいですな。ミルフィーユさん」

「ありがとうございます」

「ああ、そうだ。レイトンさん、実は来週のパーティーなんですけどね」

「料理と酒の手配なら、ちゃんと終わりましたよ」

来週のパーティーとは、毎年恒例となっている第2方面軍司令部主催のパーティーの事であった。

「それと、第2方面軍艦隊司令官のウォッカ中将から、去年よりも安い予算で豪勢なパーティーをありがとうとの事です」

「元々、あの予算で、十分に豪勢なパーティーを行えるのですよ。明らかに、第2方面軍艦隊補給部の手抜きです」

去年までのパーティーは、補給部が適当に予算を付けて一つの業者に準備を丸投げしていたので、予算のわりに質素なパーティーだと評価は最悪であった。

その業者が、利益を取り過ぎていたのだ。

そこで、今年からパーティーの準備を引き受けたアキオは、必要

な業者の手配を公開入札にして費用を抑え、料理や酒などの質も上げる事に成功していた。

「まあ。料理と酒はそれで良しとして、パーティーには、もう一つ重要な事がありまして……」

「重要な事ですか？」

「ええ。パーティーには、華が付き物でして」

ウォルコット司令の目線の先では、ミルフィーユとちとせが、美味しそうにケーキを食べていた。

「でも、それだけで、こんなに高いドレスを経費でなんて……」

オヤツタイム終了後、ミルフィーユとちとせは、ショッピングモール内の高級ブティックで来週のパーティーで着るドレスを選んでいた。

実習生とはいえ、男性比率が高い軍主催のパーティーで彼女達にお呼びがかからないわけが無かったからだ。

二人は、今までに入った事が無いレベルの高いお店でドレスを選んでいた。

「アキオさんが、第2方面軍艦隊のオジさんやおジイさん達を喜ば

せるためのドレスなら、値段は問わないって言っていたよ。それに、今回のドレス代って、第2方面軍艦隊の経費になるんだって」

「アキオさんって、そういう点は抜かりが無いのですね」

「そうだね。でも、『来週を、楽しみにしている』って言っていたから張り切らないとね」

話をしながら、二人は店員の勧める数点のドレスを次々に試着していく。

「（もっと、背中とかが開いている方が、アキオさんを刺激して……）」

日頃は、真面目そのもののちとせであったが、今は、新しいドレスを着て鏡で確認をしながら、あらぬ妄想に耽っていた。

「（今日の、ちとせは特に綺麗だな。とかアキオさんに言われて、えへっ。えへへへ……）」

「ねえ、ちとせ」

「何です？　ミルフィー」

「あのね、全部声に出てる」

「いっ！」

ちとせの妄想は、全てミルフィーユとブティックの店員に聞かれ、特にブティクの店員は、隅で笑いを堪えるのに必死であった。

「あのですね！　私は！」

「いいんじゃないのかな？　私は、お似合いだと思うけど」

「えっ？　でも、ミルフィーは？」

ちとせは、お互いを名前で呼び合う仲の良いアキオとミルフィーユに少し嫉妬していたのに、肝心のミルフィーユにそういう感情がない事に、驚きを隠せないでいた。

「多分、アキオさんも、私に恋愛感情を持っていないと思う。私は、あんなお兄さんがいたら嬉しいし、アキオさんは、私を実の妹のように可愛がってくれるから」

確かにミルフィーユの言う通りで、アキオも彼女を妹のように見ている節があった。

「だから、頑張ってね。ちとせ」

「うん……」

ミルフィーユに応援されて、ちとせは安堵と嬉しさで心が一杯になっていた。

もし、二人が付き合っていたらどうしようかと思っていたからだ。

「でも、ライバルは多いよ」

「そうなの？」

「ほら」

二人の視線の先では、若い女性店員二人が顔見知りのアキオについて話をしていた。

「でさ。この前、あのレイトン中佐が、新しいスーツを仕立てに来て寸法をしたんだけど、近くで見るともっと良い男なのよ。私、ドキドキしちゃった」

「いいな。私、その日はお休みだったのよ」

「でも、スーツを取りに来る日は、私がお休み。ねえ、リルル。お休み代わってくれない？」

「嫌よ。あっ！　そうだ！　スーツのポケットに連絡先をさ」

「いいね。それ」

「……」

「ねっ、危ないでしょう？」

「私。頑張ります」

ちとせは、アキオも行きつけであるブティクの若い女性店員達の話を聞き、もっと積極的に努力する事を誓うのであった。

「いやあ。去年とは比べ物にならない料理の良さと、酒のランクの高さ。実に、結構な事だな」

「……」

そして、週は変わり、毎年恒例となっている第2方面軍艦隊主催の慰労パーティーは、無事に豪勢にスタートしていた。

沢山の高級な料理と高いお酒。

流れるプロの楽団による演奏と、アキオが手配したパーティーは、参加者達に大好評であった。

「あれ？　レスターは、何か不満なのか？」

「毎年毎年、予算の無駄遣いだ。軍の任務に全く役に立っていない」

パーティー会場を一瞥しながら、レスターは文句を言っていたが、それでもパーティーに参加するところが任務に忠実であるレスターらしかった。

「相変わらず、真面目だよな、レスターは。こういうのは、レクリエーションの一環だから必要なんだよ」

クリオム星系駐留艦隊司令タクト・マイヤーズは、同じく副司令

のレスター・クールダラスが、パーティーにケチを付けている事に一応の反論を試みる。

「まだ予算の使い過ぎだ」

「そうかな？　でも、俺達の同期のレイトンが、大分予算を削減したじゃないか」

「あの男のやりそうな事だ。いつも、適当に折り合いを付けてグレーにしてしまう。犯罪者を艦隊で働かせたり、予算獲得のために、不可思議な民業圧迫企業を作ったり、ブラマンシュ財閥の悪を追求しないで、適当なところで手打ちをしてしまう。実に嘆かわしい事だ」

「でも、事態は良くなっているじゃないか」

「俺は、あんな邪道は認めない！」

アキオ・レイトンとタクト・マイヤーズ、レスター・クールダラスの仲を一言で言うなれば、『一応は、知り合い程度』という言葉が一番適当であった。

士官学校時代、学業はサッパリで、ナンパに精を出していたタクト。

常に勉学に集中していた、士官学校始まって以来と噂された主席のレスター。

効率良く、アルバイトなどもコッソリとしながら好成績を維持し、最終的に次席にまでなったアキオ。

あまり共通点のない三人であったが、なぜかタクトとレスターは親友同士で、タクトはアキオを羨ましいほど器用でマイペースな奴と評価し、アキオは、タクトを貴族にしてはマシな奴と評価してい

た。
　そしてレスターは、あまり勉学に打ち込んでいないように見えるアキオが好成績を取る事に危機感を抱き、アキオはレスターを、『優秀だけど、頭が硬過ぎて釘とか打てそう』と論評した事があった。
　ただ、三人は、共に恩師であるルフトを尊敬していた。

「それで、肝心のレイトンはどこにいるんだ？」

「惑星アルモスだろう。一番遠いからな。時間が掛かるんだろう」

　レスターの問いに、タクトはローストビーフを頬張りながら答える。
　ちなみに、タクトが食べている肉の産地は、アキオ達が駐留する惑星アルモスで、それすらレスターには、何かの癒着に見えて腹が立っていた。

「そうか」

「何だ？　実は、会いたくなったのか？」

「まさか。文句の一言でも、言ってやりたい気分なんだ」

「もうすく、二つも階級が上になる奴にか？」

　実は、これまでの功績を考慮して、アキオは大佐に昇進する事が確定していた。
　同時に、ウォルコットも准将へと昇進する事になっていたので、いまだに少佐のレスターは、あまり良い気持ちがしなかったのも事実であった。
　レスターとて、補給や通商路の護衛は重要と理解してはいたのだ

が、アキオの躍進のやり口が邪道だと考えていたのだ。

「同期なんだから、争いはなしで頼むよ」

「俺に争うつもりなどない。ただ、向こうの気持ちは知らないがな」

二人がそんな話をしていると、パーティー会場にざわめきが聞こえ始め、二人がざわめきのする方向に視線を向けると、そこには、噂をしていたアキオとウォルコットが、十数人の幹部達や、ドレス姿のミルフィーユとちとせを伴って登場していた。

「へえ、可愛い娘達じゃないか」

「どうせ、第2方面軍艦隊の首脳陣に、媚を売るつもりなんだろう」

「確か、士官学校の実習生だったよな？」

「ああ。うちに来たのは、役立たずの貴族のボンボンなのに、向こうは綺麗な女性士官候補生が二人。俺は興味はないが、明らかに差別されているな。実に嘆かわしい事だ」

「貴族のボンボンって……。俺も、一応は貴族なんだけど……」

「お前は、貴族にしてはマシな生き物だからな」

「お褒めのお言葉を、ありがとうよ」

実は、クリオム星系駐留艦隊にも実習生が来ていたのだが、試験の成績のみソコソコで、あまり使い物にならなそうなタイプだったので、今日は休暇を与えてここには連れて来なかったのだ。

「しかも、あいつは男だものな」

アキオとウォルコットは、ドレス姿のミルフィーユとちとせを第2方面軍艦隊の幹部達に紹介し、酒を注がせ、適当に世間話に付き合わせてから、他の参加者達へも挨拶を続ける。

そして暫くすると、今度はタクトとレスターの元に挨拶に現れていた。

「クリオム星系駐留艦隊司令タクト・マイヤーズ大佐と、副司令レスター・クールダラス少佐ですね。私、通商護衛艦隊司令のウォルコット大佐です」

老練なウォルコット司令は、柔らかい物腰でタクトとレイトンに丁寧に挨拶をする。

「同じく、副司令のアキオ・レイトン中佐です」

「久しぶりだな、レイトン」

「士官学校以来か？」

「そうだな。それに、出世したじゃないか。来月には同じ大佐になるし」

「お前さんの方が先任なんだ。有事の際には、俺の方が部下になる可能性が高い」

「そうか。だったら、心強いかもな」

タクトの本当に嬉しそうな表情に、レスターは一瞬顔を顰める。
レスターとアキオは、同じく優秀な参謀タイプの軍人であったが、同期の主席であったレスターが未だに少佐なのに、次席のアキオが大佐になる事が確定していて、それをレスターの親友であるタクトが素直に祝っているという光景は、正直なところ、レスターの神経をかなり逆撫でさせていた。

「ああ。そうだ。紹介するよ。うちに実習に来ている……」

「ミルフィーユ・桜葉准尉です」

「同じく、烏丸ちとせ准尉です」

「へえ、羨ましい限りだな。レイトン」

女好きのタクトは、自分のところにも綺麗な実習生が来れば良かったのにと、素直に思ったいた。

「我が部隊初の実習生らしいけどな。まあ、うちは下請け専門の何でも屋に近い部隊だから」

それでも、士官学校の生徒を実習に受け入れられるようになったという事は、通商護衛艦隊が、少しは上に認められつつある証拠でもあった。

「辺境の方面軍艦隊の管轄宙域ゆえに、法の整備状況が緩い事を利用して、己の成り上がりに利用するのか。相変わらずの野心家だな」

レスターのアキオへの一言は、かなり辛辣なものであった。

「ほう。昔から皮肉屋との噂があったが、嫌味まで言うようになったのか？」

「嫌味ではないさ。事実だからな」

「レスター・クールダラス少佐。久しぶりで悪いのだが、俺は一応上官なんだぞ」

「ほう。上官風を吹かせて、自分への批判を封じるのか」

アキオとレスター。

この久しぶりに会った二人の同期生達は、お互いに鋭い視線を送りながら睨み合いを始めていた。

別にアキオは、レスターに他意があるわけではない。

少し頭は固かったが、士官学校主席卒業の同期の星であり、それなりに尊敬できる人物であったからだ。

だが、レスターはアキオの活動の外側しか見ていなかったので、彼を軍の秩序と規律を乱し、引退寸前のウォルコット司令を影で操る野心家だと考えていた。

「別に、上官風を吹かせるつもりはない。ただ、実際に俺は上官だ」

「そう来るのか。レイトン中佐……。失礼する……」

レスターは、このパーティーの最大の目的である他の軍人達への挨拶に行くべく、その場を辞してしまう。

「すまないな。レイトン」

タクトは、自分の親友の無礼を素直に謝っていた。

アキオがタクトを評価するのは、この『謝る』がすぐに素直に出来るという点にあった。
実は貴族という人種は、いくら自分が悪くても、基本的には人に謝らない生き物であったからだ。

「あいつも、普通に感情のある人間という事だな。裏で何かできるようなタイプの奴でなし。気にしない事にするさ」

「そうか……。ところで、俺の名前は、タクト・マイヤーズっていうんだ。宜しくな。ミルフィーユ。ちとせ」

「「……はい？」」

女性二人は、すぐに話題を切り替えて自分達に挨拶をするタクトに目を点にさせていた。
まさか、大佐の地位にある軍人がここまでフランクだとは思わなかったからだ。

「ああ。そういえば、こういう奴だったよな」

タクトの女好きは、士官学校時代からあまり変わっていないようであった。

「それでは、そろそろダンスタイムの方に、移らさせていただきます」

司会進行を務める若い少尉の声に従って、パーティー会場の壇上に十数組の男女が集まる。

ただ、このパーティーの性格上、男女の数は圧倒的に男性優位となっていたので、ミルフィーユとちとせは、数人の将官や佐官クラスの軍人達と、順番に少しずつダンスを踊っていた。

「おや。取られちゃいましたね。レイトンさん」

壇上の光景を見ていたアキオは、ワイングラスを片手に持ったウォルコット司令に話しかけられる。

「えっ？　何がですか？」

「しかし、まあ。相変わらずの、お気のお使いようで」

「少しの時間、綺麗な美少女士官候補生と踊っただけで機嫌が良くなって、これからのお願いが通り易くなれば、儲けものって事ですよ」

アキオとレスターの能力や才能に、それほどの差があるわけではないが、唯一の差があるとすれば、こういう点にあるのであろうとウォルコットは思っていた。

母子家庭で、それなりに世間の荒波に揉まれているアキオは、レスターのように、『常に忠実に任務をこなしていれば、軍の上層部はちゃんと正当な評価を行ってくれる』と考えるほど、世の中を甘く考えていなかった。

なので、確実に仕事をこなしつつも、このようなパーティーの準備を積極的に行ったり、そこに綺麗な女性士官候補生を連れて来て彼らのご機嫌を伺ったり、通商護衛艦隊司令部に来た第2方面軍艦

隊や駐留艦隊司令部からの客人に少し高価なお茶やお菓子を振る舞い、食事の時間であれば、地元で評判のお店に案内しと、厳密に言えばワイロかもしれないが、ワイロというには小額の気遣いを常に欠かしていなかった。

真面目なレスターからすれば、アキオは『とんでもない輩』なのだが、第2方面軍の幹部達からすれば、『仕事も出来るし、気の利く若者』という評価に繋がり、それが、二つの階級差となって現れていた。

「レイトン中佐。ほれ、烏丸准尉を返すぞ」

一通り高官達がダンスを楽しんだ後、今度は、数少ない女性達に対して、多くの若い男性士官達がダンスを申し込むなか、第2方面軍艦隊司令のウォッカ中将は、ちとせを連れてアキオの前に現れる。

「烏丸准尉も、ジジイの相手ばかりでは早く老けてしまうかもしれないからの。レイトン中佐、相手をしてあげなさい」

「おや？　桜庭准尉は、どうしました？」

「ああ。あの娘なら……」

ウォッカ中将の視線の先には、タクトと楽しそうにダンスを踊っているミルフィーユの姿があった。

「マイヤーズの三男坊め。相変わらず手が早いの。親父や兄達とまったく同じじゃ」

「そうなんですか？」

「ああ。あの一族の女好きは、半ば本能に近い」

既に年齢は七十歳を越え、『トランスバール皇国軍の生き字引き』と評されるウォッカ中将は、平民出身ながら中将の地位にまで進み、この第2方面軍艦隊の司令を務めている有能な人物であった。

「ワシはもう歳だし、偉い奴がいつまでもいると若い者達が楽しめないじゃろうから、今日は帰らせて貰うが……」

ウォッカ中将は、アキオに近付くと、小さな声でこう囁いた。

「ウォルコットを、年明けに少将に引き上げる。賢明なお前さんなら、意味はわかろう？」

「ええ。通商護衛艦隊の現場を、任せられる人材を作っておけと？」

「そうじゃ。中央のバカ共も、ようやく気が付き始めたらしい。この手法を他の方面軍艦隊にも定着させ、それを首都星トランスバールと連結させて、星間ネットワークの活性化を図る。更に、それらの手法を用いて、皇国の領域の拡大を図る。そういう事じゃ」

これからのウォルコットとアキオは、その手法を他方面軍に普及させるために、色々と動く事になりそうであった。

ただ、アキオとてそう簡単にここを離れられないので、年明けに少将に昇進したウォルコットが各地に飛んで、様々な利害関係の調整等を含む折衝業務を行い、アキオが外から研修に来た人間に、自分達が行ってきた仕事のマニュアルを伝授していくという、役割分担になりそうであったが……。

「お前さんのおかげで、ワシもようやくに大将になれるらしいからの。どうじゃ？　お礼にワシの孫娘でも嫁に貰うか？」

「ええ……。まあ。その……」

「冗談じゃよ」

ウォッカ中将は、隣にいたちとせの表情が少し曇ったのを確認して、その話を簡単に引っ込めてしまう。

内戦はいくつか抱え込んでいたが、定時昇進以外には、基本的に海賊退治くらいしか昇進への功績ポイント稼ぎが存在しなかったトランスバール皇国では、今回の第2方面軍での星間ネットワークの活性化と治安状況の改善は、見た目の派手さはなかったが、徐々に中央の評価を得るようになっていたらしい。

そして、それを実際に行ったのはウォルコットとアキオであったが、その権限と予算を与えたのはウォッカ中将という事で、彼はこのほど二十年ぶりに昇進する事となっていた。

そもそも、市民出身者で大将になる人間というのがトランスバール皇国では稀で、それだけウォッカ中将は評価されているという事であった。

「ジーダマイアが、怒っておるらしいがな。まあ。くたばり損ないのワシに階級で並ばれて、腹も立っておろうが……」

シグルト・ジーダマイア大将は、ローム星系を中心とした第3方面軍を束ねる大将であった。

性格は、長い物に巻かれる性質で、弱い物や階級が下の者を見下し、皇族や高級貴族などの偉い人にはペコペコしと、非常にわかりやすい性格をしていたのだが、彼には、決して人が表立って触れな

い、ある後ろめたい過去があった。

《エオニアの反乱》。

それは、五年前に、現在のトランスバール皇王である１３代目皇王ジェラール・トランスバールに対して、廃皇子であったエオニアが叛旗を翻したという事件である。

実は、先代の第１２代皇王は、エオニアの実父であり、本来はエオニアが王位継承者であったのだが、エオニアが幼いころに皇王が崩御したため、皇王の実弟であるジェラール・トランスバールが１３代目の皇王になったという経緯があった。

多分、自分の次は、エオニアを皇王にするという約束で周りを納得させたのであろうが、ジェラールは自分の権力体制が固まると、それを反故にして自分の実子を王位継承者としたため、エオニアは廃皇子となってしまった。

皇国暦４０７年。

エオニアは、皇権の正統化を名目としてクーデターを起こし、その際に白き月の力を狙ったため、クーデターの鎮圧後は禁忌に触れたという罪状ですべての権限を剥奪され、一部の側近と共に皇国領外への追放処分となった。

これが、事件の粗筋なのだが、これに先のジーダマイア大将が関わってくる。

当時少将であった彼は、最初はエオニアに従い、彼を積極的に支援していたのだが、土壇場になって彼を裏切って、反乱の失敗の最大の功労者となっていた。

どうやら、彼は、最初からジェラールの指示で動いていたらしい。

だからなのであろう。

当初は反乱者であったのに、彼はこの功績で一気に大将へと昇進し、第３方面軍を任されるようになっていた。

「嫌いじゃろう？　あの手の男は」

「それを表に出すほど、子供ではありませんから。それに……」

「それに、何じゃ？」

「ああいう事で成り上がった男は、そこで終わる事が多い。ただ、それだけです」

「お前さんも、言う事がキツイの。では、そろそろワシは……。おっと！　忘れておったわ」

「？？？？？」

『まだ何かあるのか？』と、困惑するアキオの耳元で、ウォッカ中将は、辛うじて聞こえるレベルの小さな声でこう呟いた。

「フレスコの奴が、相当に焦っているらしい。この一ヵ月程で、五度もプロの暗殺者を現地入りさせたらしい」

「そうなのですか？　ですが……」

ここ数ヶ月、というかここに赴任して来てから、アキオは、あまり命の危険を感じた事がなかったので、裏でそんな大変な事になっている事に気が付いていなかった。

「一人は、宇宙港を出てスグに交通事故で再起不能。一人は、食事に寄った食堂で悪性の食中毒になって入院。焦って同時に二人派遣すれば、過去に因縁があったとかで、町の郊外で決闘をやらかして、相討ちになって死に。最後の一人は、隕石が直撃したらしい。しか

し、何ともという結末じゃの……」

せっかく凄腕の暗殺者を派遣したのに、まるでギャグ漫画のような結末に、ウォッカ中将も報告を受けたその場で噴き出してしまっていた。

「どうやら、俺は、まだ強運の女神様に見放されていないらしい……」

アキオは、楽しそうにタクトと話しているミルフィーユを眺めながら、そう呟くのであった。

「お嬢さん、一曲お願いします」

「はい、喜んで」

ウォッカ中将との話を終えたアキオは、ちとせにダンスを申し込み、二人はスローテンポの曲に合わせてダンスを踊り始める。

「アキオさんって、何でも出来るんですね」

「そうかな？」

「ええ、ダンスもお上手ですし」

「士官学校の生徒なら、普通に踊れるだろう。ちとせも上手じゃないか」

トランスバール皇国には、皇族や貴族などがいて、当然、社交界というものも存在していたので、将来の高級軍人候補である各士官学校の生徒には、テーブルマナーやダンスなどの習得が義務付けられていた。

「でも、お上手ですよ。あの……、アキオさん。一つ伺っても宜しいですか？」

ちとせは、少し顔を赤くさせながらアキオの顔を見上げる。

「何だい？　ちとせ」

「アキオさんは、このまま軍人として上を目指されるのですか？」

「うーーーん、実は何も考えていない」

十五歳の頃は、早く自立して母を楽にさせるのが目的であった。母の死後からここに来るまでは、実の父に殺されないように、常に前線で命を削るという矛盾した日々を送っていた。

だが、あのフレスコが死んだらどうなるのか？

まだ自分でも、判断が付かなかったのだ。

「将来的には、ご結婚とか……」

ちとせは、更に顔を赤くさせながら、勇気を振り絞って質問を続

ける。
今までの真面目一辺倒の彼女からしたら、これは清水の舞台から飛び降りるほどの決断だったのだ。

「結婚は、しないだろうな……。子供とかにも、興味はないな……。このまま一人で食い扶持を稼いで、一人でくたばる人生になるだろうな」

アキオがどんなに努力しても、この体の半分を流れているシードル家の血だけは、どうにもならなかった。
多分、現当主のフレスコが死ねば、当面の死の危機からは逃れられるはずであった。
そしてそうなれば、何も軍に留まらなければならない理由は存在しない。
民間で働いても良いわけだ。
だが、自分が結婚をして子供を作るとなれば、話は全く別となる。
生まれたその子と、その母親である自分の配偶者は、シードル公爵家の秩序を混乱させる元凶として、また命を狙われる事になるかもしれない。
だからアキオは、人生が終わるまで一人で生きていかなければならないのだ。
少なくとも、自分ではそう決めていた。

そして、その事情をちとせに言えないアキオは、先のような乱暴な口調で答えるしか術を持たなかった。

「そうですか……」

アキオとてバカではないので、ちとせの気持ちには気が付いていた。

だが、その優しさゆえにアキオが口にした拒絶の言葉に、ちとせは元気をなくしてしまうのであった。

「烏丸准尉、この予算表の決裁をウォルコット司令に」

「はい……」

パーティー終了後から三日、ちとせは極端に元気がなくなっていた。

仕事はちゃんとするのだが、それ以外では気が抜けたような感じで、心配したミルフィーユが懸命の慰めにも、あまり反応が芳しくない。

今日もちとせは、アキオの指示を小さな声で了承した後に、いつも司令部内をフラフラとふらつくウォルコット司令を探して歩き回っていた。

「おや？　今日も、あまり元気がないようですな。ちとせさん」

「ウォルコット司令？」

いつもは、なかなか見つからないウォルコット司令であったが、今日は珍しくすぐにちとせの前に現れる。

「やはり、レイトンさんの事ですかな？」

「いえ……、そんな事は……」

最近、多少柔らかくなったと評判のちとせではあったが、仕事中であったので、あまり自分の感情を表に出さないようにしているらしい。

ただ、ウォルコット司令の質問に否定的な返事をしているのだが、見た目でアキオの件で悩んでいるのはバレバレであったが。

「まあ、その。ここでは何ですから……」

「はあ？」

ウォルコット司令は、問答無用でちとせの手を引いて、いずこかへと移動するのであった。

「ここは？」

「私の秘密基地なんですよ。サボり用のですので、あまり褒められた話ではないのですが」

ウォルコット司令は、ちとせを司令部の隣のある倉庫の中へと連れて行った。

ただそこは、食料や補給物資専門という事もなく、何やら武器な

のか？　玩具なのか？　よくわからない代物が多数置かれていた。

「白き月からだけではなく、この宇宙には、多数のロストテクノロジーを利用した遺物が現存していまして、その回収を軍に頼む市民が多いのです。ただ、どうにも数が多いし、何に使うのかも良くわからない物も多い。結果、こうして調査待ちというか、倉庫の肥やしとなる物も多い。そして、ここには定時の巡回以外で人も来ません」

そう言いながら、ウォルコット司令は、持っていた缶ジュースをちとせに差し出した。

「レイトンさんなんですが、彼は、『自分は一人で生きていく』と語っていた。大方、そんなところでしょうか？」

「……、はい……」

珍しく、ウォルコット司令はストレートに質問をし、ちとせはそれに素直に答える。

「彼は優しいですね。でも、それは時に残酷なんですけど、いかんせん、彼はまだ二十一歳の若者でしかない。皆、その能力と階級の高さで、忘れているのでしょうが……」

ウォルコット司令はそこまで言うと、缶ジュースのフタを開け、一口だけ口を付ける。

「それと、彼にはある秘密がありましてね。私、彼の恩師であるルフト准将に、彼の事を頼まれているのですよ。そして、ルフト准将の上には、ウォッカ中将もいるのです」

治世が四百年以上も続いた皇国には、ある問題が浮上していた。
それは、皇族や貴族達が公職で優遇され過ぎて、一部組織で組織が動脈硬化を起こしていたのだ。
ただ、皇国自体は常に拡大・成長傾向にあったので、今はその事はあまり問題となっていなかったが、これから皇国が安定・停滞の時を迎えると、この件は、皇国にとって致命傷になるかもしれない。
そう考えた市民階級出身の軍人や、官僚、政治家達は、常に連絡を取りながらチャンスを伺っていて、その組織というか派閥の軍の責任者が、ウォッカ中将という事になっていたのだ。

基本的にこの組織は、情報収集と定時の連絡は欠かさなかったが、あまり能動的に動く事はしなかった。
なぜなら、皇族や貴族の力はまだ大きかったし、優れているがゆえに、市民出身ながらも立身出世を果たした彼らは、用心深い行動を常に心がけていたからだ。
例えば、軍人を目指す貴族達は、簡単に士官学校に入れ、簡単に将官になれ、簡単に軍の要職に順番に就けるシステムになっている。
だからこそ、彼らは優秀な部下である彼らに嫉妬の感情を燃やす。
大抵の貴族達は、『自分は貴族だから、凡庸なのに高い地位に就ける』という事情を理解しているので、優秀な市民出身の部下に嫉妬する事が多いのだ。
そして過去の歴史において、天才の足をすくうのは、凡人の嫉妬が多い事を理解している彼らは、連携を保ってはいたが、無理をする事は決してしなかった。

「そこでです。ウォッカ中将が、あの年のトランスバール士官学校卒業生であるレイトンさんを勧誘でもしようかと探りを入れたら、大変な事実がわかりましてね。まあ。あのウォッカ中将は、好々爺してますけど、意外に喰えない方でしてね」

ちとせは、目の前のウォルコット司令も、相当に喰えない人だと思っていたが、今はそれを口に出さないようにする。

「ちとせさんは、当然知っていますよね。フレスコ・シードル公爵閣下を」

「ええ。軍の要職を歴任した、一時代を築いた大貴族ですよね？」

「レイトンさんは、彼の子供なのですよ。私生児というやつですね」

あまりの衝撃の事実にちとせが驚いていると、ウォルコット司令は、知りうる限りの事情を次々に話して行く。

「ただ、その事にウォッカ中将が気が付いた時には、既に軍の人事部にフレスコ公爵の手が回っていましてね。レイトンさんは、卒業と同時に惑星ベタントの駐留艦隊に赴任しました。それも、あの高速魚雷艇の艦長としてね」

惑星ベタントは、その周りを多数の小惑星や岩塊が取り囲んで日の光が当たり難くて農業生産が小さく、かといって鉱物資源もさほどなくという、経済的に貧しい星であった。

そして、更に悪い事に、中央政府の悪政が数十年も続き、彼らに反抗する勢力が多数出現し、彼らは活動資金を得るために惑星の周りの岩塊群に潜んで海賊行為を行うという、最悪の治安状態の惑星であった。

「ちとせさんは、ご存知とは思うのですが、海賊退治とは言っても、あの岩塊の量です。通常の艦艇では、侵入した途端に身動きが取れなくなってしまう。過去に、無理をして侵入した巡洋艦と駆逐艦が、

まるで蟻に群がられるかのように沈められた事件もありました」

そこで、この星の駐留艦隊に、特殊な艦艇が多数導入される事となった。

《高速魚雷艇》という、この全長十メートルにも満たない小型宇宙船は、ロストテクノロジーの産物であるクロノ・ストリング・エンジンを装備できず、乗員も僅か二名のみであり、武装も近接戦闘用の機銃と小型ミサイルのみとなっていて、敵の小型宇宙船を発見次第、岩塊の中を潜り抜けて敵を撃破する、そういうコンセプトの船であった。

当然、敵勢力の小型宇宙船とさほど性能の差がなかったので、戦闘は常に消耗戦の様相を呈し、一週間に平均して五隻は戦没するという地獄の戦場であった。

「レイトンさんは、その船の機長というか艦長として、僅かな訓練の後に配属されました。多分、死に掛けた事もあったでしょう。ですが、生き延びて武勲を挙げて昇進しました」

そして腹を立てたフレスコが、次にアキオを派遣したのが、当時不穏な噂が流れていた惑星セルドリックであった。

「あの星の中央政府は、皇国に反抗的でしたからね。レイトンさんが、ここの駐留艦隊の下っ端参謀として派遣されて一週間もしない内に、艦隊は、中央政府軍が密かに準備していた秘匿艦隊に奇襲されました」

その時に、駐留艦隊旗艦巡洋艦マラヤのブリッジにいたアキオは、戦死したり重症となった司令や艦長や他の上官の代わりに、生き残った艦隊を指揮して、無事に逃走に成功。

体制を立て直して後、第４方面軍艦隊の応援が来るまで、敵秘匿

艦隊を翻弄し、圧倒的に劣勢な戦力で、巡洋艦二隻、駆逐艦六隻、それ以下の小型艦艇十六隻を沈め、少数のアキオの艦隊に拘って消耗した秘匿艦隊は、応援艦隊の前に呆気なく降伏するという最後を迎える。

「その前後も、数ヶ所の戦場を巡り、現在に至るというわけです」

「あの。どうして、そんな重要な事を私に？」

ちとせは、ウォルコット司令が、なぜ自分にこんな重大な事を語るのかが理解できなかった。

もし、自分が、裏切ってそのフレスコ公爵とやらに事情を話に行けば、アキオはおろかウォルコット司令達ですら苦境に陥ってしまうからだ。

「あなたの人柄を信じてです。ただ、それだけです。それと……」

「それと、何ですか？」

「誰でも良い。レイトンさんを支える存在が欲しい。ただそれだけです」

「アキオさんを支える存在ですか？」

ちとせは、誰よりも優秀でしっかりとしているアキオにそんな物が必要とも思えず、首を傾げてしまう。

「ええ。実は、最近気が付いたのですが、あの人は、将来に夢とか希望なんて持っていないのでは？　とね……」

「そうでしょうか？」

ただ、ちとせにも気になる点があった。

それは、先のパーティーの時に、『一人で食い扶持を稼いでくたばるだけ』とアキオが言った事であった。

「あの人は、最愛のただ一人の家族であった母親を病気で亡くし、その時にフレスコ公爵は、何の援助もしなかったそうです。そして、今度はシードル公爵家のためと称して、彼を謀殺しようとしている。多分、レイトンさんはこう思っているのでしょう。『あのジジイよりも、先にくたばれるか！』とね。だから、能力もあったのでしょうが、あの数度の地獄を生き延びた。でも、彼にはその先がないのです」

「先がない？」

「ええ。だから、表面的には誰とでも仲良くなるが、誰も隣に人を寄せ付けない。多分、フレスコ公爵の策に人を巻き込ませたくない、彼の優しさがそうさせているのでしょうが、心の奥底には暗い冷たい感情が潜んでいる。そんな感じがするのです」

ウォルコット司令は、まるで自分の実の息子を心配するかのようにアキオの事を語り続ける。

「心配なのですね」

「はい。私は、彼に返し切れない程の恩があります」

若い頃は、優秀な戦闘機のパイロットとして将来を期待されていたウォルコットは、何をどう間違えたのか？　つい最近までは、万

年中佐として各地の左遷先を点々とする日々を送っていた。
そんな時であった。
突然、後輩であるにも関わらず、二つも階級を抜かれてしまっていたルフトから、この通商護衛艦隊司令の職と大佐への昇進を条件に、極秘裏にアキオの件を任される事となった。
始めは、『このまま、退役間近にお情けで大佐にして貰ってから、侘しい老後を送るよりはマシであろう』と引き受けた役職であったが、下に付いたアキオは噂以上に優秀で、そのおかげで、来月には、自分はルフトを階級で抜いて少将にまでなれるらしい。

「万年中佐だった私が、最後に一花咲かせられそうなのは、間違いなくレイトンさんのおかげです。だから、私は彼を守ります。例え、フレスコ公爵に殺されても悔いはありません。私は独身で家族はいませんし、ここで死んでも将官として死ねますから。でも、彼はまだ若いので、普通に結婚して子供を作って欲しいですね。だから、ちとせさん。一回くらい彼に冷たくされた程度で諦めないでください」

どうやら、たまにウォルコット司令が所在不明になるのは、彼がアキオを守るために、色々と動いているからという事情も存在するらしい。
そして、司令のウォルコットが時折所在不明になっても、アキオが何も言わないのは、それに薄々と気が付いているからなのであろう。

「あのっ！　私は、別に！　そのっ！」

「そうなのですか？　では、彼の事は、ブラマンシュのお嬢様に頼むとしましょう」

「へっ？」

「実はですね。以前に……」

ウォルコット司令は、以前に通商護衛艦隊とブラマンシュ財閥が交易路の利害関係で揉めた時に、それをアキオが上手く纏めた件を話す。

「その時に、始めはブラマンシュ財閥の総帥であるダルノー氏は激怒していたんですけどね。何か、レイトンさんの事を、気に入ってしまったみたいですよ。それに、向こうのお嬢様も満更でもないようでして。ああ。それに、ブラマンシュ財閥の力があれば、問題も早期に解決という事もありますね」

先ほどとは一転して、ウォルコット司令は笑顔で話を続ける。

確かに、非公式ながら私生児のアキオがブラマンシュ財閥に婿に入り、弟がシードル公爵家を継ぐ事となれば、双方にとって悪い話でもなく、もし既に薨碌しているフレスコ現公爵が話を受け入れなくても、彼の死後に次期公爵が話を受け入れ、問題は呆気なく解決してしまう可能性も高かった。

「いやあ。もしそうなれば、実にめでたい事ですな」

ちとせは、すぐに悟ってしまう。

何の事はない。

先ほどの話を聞いて、ブラマンシュ財閥側にアキオの出生の秘密をそれとなく漏らしたのは、目の前のウォルコット司令自身なのだという事に。

「わかりました」

「はい？」

「私。絶対に負けません！　財閥のお嬢様が何ですか！　私は、私の方法でアキオさんの隣に立ちます！」

「それは良かった。是非に頑張ってください」

ウォルコットの思惑通りに、彼の話を聞いたちとせは、元気のなかった先ほどとは違い、気合を入れていた。

「それと、ウォルコット司令」

「何ですか？　ちとせさん」

「この書類に決裁のハンコをお願いします」

「ハンコですか？　えーーーと。持っていましたかね？」

「拇印でも結構ですよ。何でしたら、ナイフなどもお貸ししますけど」

「……」

ウォルコット司令は、ちとせを少しからかった事を後悔するのであった。

「そうか。三日後には、実習も終了か」

「はい。何だか寂しくなりますよね」

「私も、寂しいです」

いつものように業務を終わらせたアキオが司令部を後にしようとすると、急に元気になったちとせが、ミルフィーユを連れて来て、自分達を食事に連れて行くようにお願いして来たので、アキオは、町の中心部にある一軒の料理屋へと二人を連れて行っていた。

「うわぁ。ふぐちりですか？」

「冬の定番だな。これが、実に美味いんだ」

既に、人類が宇宙に進出して数万年。

地球にあった国家や人種などの壁は取り払われていたが、文字・文化などはそれとなく現存していた。

他の文化と融合したりして、原型を留めていない事も多いのであろうが、不思議と過去にあった日本という国の文化は、あまり形を変えないで、そのまま残っている事が多かった。

多分、多彩な料理など、残しやすい要素が多いからなのであろう。

髪の色が桃色であまり日本人に見えないミルフィーユの苗字である桜葉は、過去に日本人が使っていた苗字であり、アキオという名前も、日本人が良く使っていたらしい。

そして極めつけなのが、完全に日本人の名前である烏丸ちとせであり、彼女の実家は、代々続く古来の伝統を保つ家柄であるらしい。

「うちは、実家が全部和室ですので。それに、ご飯も普通に炊きますし」

「そういえば、うちもそうだったな。それに、母の名前もキョウコだったから、俺にアキオなんて名前を付けたんだろうし」

「アキオさんのお母さんって、どんな人だったんですか？」

ふぐちりが煮えるまで、先に出ていたふぐの刺身を食べながらミルフィーユが質問をする。

「黒い瞳に、黒い髪を腰まで伸ばしていてね。子供心に、綺麗な人だと思っていた。ああ。ちとせに少し似ているかも」

アキオの答えに、ちとせは、心の中でガッツポーズをする。

男の子供は、多かれ少なかれ母親の影響を受けるものなので、それに似ている部分がある自分は、まだその顔を知らないブラマンシュ財閥の娘より、優位に立てる可能性があったからだ。

「アキオさん。そろそろ煮えて来ましたよ」

「さて、食うか」

「そうですね」

「でも、こんなに高い物を奢って貰って……」

「給料日直後だからさ」

それに、アキオも、ミルフィーユの幸運の余波を受けてギャラクシー宝クジを当てていたので、何気に億万長者であったのだ。

「では、遠慮なく」

「いただきまーーーす！」

「ちょっと待った！」

「「「はい？」」」

アキオ達が、鍋の中身を小鉢に入れようとした瞬間、突然室内に、少しだけ見慣れた若い男が入ってくる。

「何でここにいるんだ？　マイヤーズ大佐」

「いやあ。俺、出張の帰りでさ。それで、こっちに寄ったら、お前らは、ここで飯を食べてるって言うし」

「駐留艦隊司令のお前さんが、出張？　普通、クールダラス少佐に任せるだろう」

「俺は、自分で動く人間だから」

多分、全ての仕事を副司令のレスターに押し付けて来たんだなとアキオは思ったのだが、別に自分の事でもなかったので、特に気にしない事にする。

「それで、何の用事で出張だったんだ？」

「さあ？　何だったかな？」

この一言で、アキオはタクトがここにサボりで来た事を悟るが、先のパーティーで因縁があったので、特にレスターが可哀想とも思わなかった。

「レイトン。お前は、サボるなとか怒らないの？」

「別に、俺が困るわけでなし、あのガチホモのレスターが苦労するだけだろう」

「えっ！　クールダルス少佐ってホモなんですか？」

ちとせが、驚きの声をあげる。

あのパーティーで会った、アキオとはタイプが違うが、かなりのイケメンであるレスターがホモという事実に、ミルフィーユもビックリした表情をしていた。

「レイトン。お前、根拠があるのか？　それ？」

「俺は、学生時代にはあいつと大して交流はなかったが、女性に興味がないと誰かに言った事実は知っている。そういえば、お前も人妻好きとか噂して、後で怒られたらしいな」

「ああ。でも、ホモはないと思うけどな」

「冗談だ」

「だと思ったよ」

実は、学生時代には大して交流がなかったのは、アキオとタクトも同様であった。
だが、こうして話してみると、二人は意外とウマが合うようであった。

「ところで、レイトンの方はどうなんだ？　お前も、浮いた話を聞いた事がないぞ。士官学校時代、バレンタインデーには、靴箱とかが大変だったらしいが」

「ちゃんと、お返しはしたさ。それに、今は忙しいからな。そういう話は後だ」

「ふーーーん。勿体ないのな」

「そうですよ。アキオさんは、色々と忙しいので、結婚とかは後の事なんです」

煮えた鍋の中身を、アキオの小鉢によそいながら、ちとせはタクトに牽制の言葉を送る。
変に仲良くなって、おかしな女でも紹介されたら大変な事になるからだ。

「俺は、そこまで話を進めていないけどね。ちとせは、レイトン狙いなのかい？」

「なっ！　何を・・・・・・」

タクトの反撃に、ちとせは小鉢を持ったまま顔を真っ赤にしてしまう。

「そういう話は後にして、まずは美味しいふぐちりを食べましょう。さあ。マイヤーズ大佐も、どうぞ」

ミルフィーユは、小鉢に煮えたふぐをよそってタクトにそっと手渡す。

「ミルフィー。俺の事は、名前でさ」

「そんな。大佐さんを、名前でなんて呼べませんよ」

ミルフィーユは、基本的に誰とでも仲良くなるし、誰にでも優しいので、男達の中には、勘違いをする人が多いらしい。

多分、タクトも、先のパーティーで出会ったミルフィーユが自分に惚れていると盛大に勘違いをしているらしいのだが、彼女にしたらタクトは、気を使うべき上官に過ぎなかった。

なぜなら、彼女は今、通商護衛艦隊で研修中の身だからだ。

「レイトンは、名前で呼んでもかい？」

「アキオさんは、頼りになるお兄さんですから」

「俺は、頼りにならないのかな？」

「ならんのと違うか？」

「レイトン、お前ね……」

「うぐぅぐぅーーー！　ふぎぃーーー！（ターゲットのレイトンは、隣にいるのにぃーーー！　体が動かない！）」

「店長！　大変です！　鷺の間のお客さんが、ふぐに当たって！」

「しっ！　ミヤちゃん。静かに！　そっと、病院に運んで、穏便に事を済ませるんだ！」

「ふぎぃぎぃーーー！（レイトンを殺さないと！）」

「お客さん！　入院費の事は心配せずに！」

「りぇいとん！（レイトン！）　きょろしゅ！（殺す！）」

アキオ達がふぐ料理を楽しんでいる隣の部屋では、アキオを暗殺すべく様子を伺っていたプロの殺し屋が、カモフラージュで注文したふぐ料理にあたって、生死の境を彷徨っていた。

これも、ミルフィーユの強運の賜物なのか？

ただ、この件に関しては、真相は全て闇の中という事になってしまったのだが……。

そして、もう一ヶ所でも……。

「ジン少尉！　タクトの奴は、どこに行ったんだ！？」

「あれ？　惑星アルモス方面に、出張じゃないんですか？　自分は、そう聞きましたが……」

クリオム星系駐留艦隊司令部内を、タクトを探して駆け回っていたレスターに、一人の若い少尉が事実を伝える。

「そんな話は初耳だ！　タクトの奴！　サボりやがって！」

「クールダラス副司令がいれば、大丈夫ですけどね。逆だと少し困りますけど」

ここの司令としてのタクトは、それなりに部下達には慕われていたが、通常の業務は、副司令のレスターに任せた方が良いという事になっていた。

「司令が、それでは困るんだ！」

「まあ。副司令は、大変かと存じますが、通常時は仕方が無いという事で……」

「俺の救いは、どこにあるんだよ！」

レスターは、全ての仕事を自分に押し付けていなくなった自分の上官兼親友に激怒するのであった。

第二話（後書き）

相当に設定をいじっている私……。
間違い探しの一環だと思って下さい。

第三話

（皇国歴４１２年１月初旬、首都星トランスバール、トランスバール士官学校講義室内）

「ふーーーん。それで、そのちとせって娘と、色々な事を経験して楽しかったというわけね。良かったじゃないのよ」

１２月の中旬に終了した従兵実習と、その後の定期テストと冬休みを終えたミルフィーユとランファは、放課後の講義室内でいつものように世間話をしていた。

「ランファは、どうだった？　実習」

「引退間近の将軍の、お茶の相手で終わり。しかも、毎日同じ話題でさ。一気に老け込んだ気分よ」

ランファは、残念そうな表情で語るが、実習の本来の目的は、軍の空気に慣れるというものであったので、大抵は、ランファのように大した経験をしないで終わる人の方が多かった。

ミルフィーユのように、様々な事を詰め合わせで経験できる方が珍しいのだ。

その点、実は何でも屋部隊である通商護衛艦隊は、この手の実習に向いているのかもしれない。

「そう言えば、アキオさんも、実習は下働きで終わったって言っていたし・・・・・・」

「ああ。あの似非エリートの？」

「アキオさんって、大佐さんになったんだよ。似非じゃないよ」

アキオを似非エリート扱いしたランファに対して、ミルフィーユは非難めいた事を口にする。

「それで、もう一人の大佐さんは、どうなの？」

ランファの言うもう一人の大佐とは、クリオム星系駐留艦隊司令タクト・マイヤーズの事であった。

「気さくそうな人だし、優しそうなんだけど、ちょっと頼りないかも・・・・・・」

「見た目も、７０点というところかしら？」

ランファは、ミルフィーユの持っていた写真を見ながらそんな事を口にする。

その写真とは、この前のパーティーで、アキオ、タクト、ミルフィーユ、ちとせの四人で撮った写真であった。

「私を満足させる超エリートの格好良い男は、いずこにいるのかしら？」

ランファが、そんな事を言っていると、講義室の中に士官学校の事務員の若い女性が入って来る。

「ミルフィーユ・桜葉士官候補生。ランファ・フランボワーズ士官候補生。至急校長室まで出頭を」

「「はい？」」

「ルフト校長が、お話があるそうです」

ミルフィーユとランファが校長室に行くと、二人はそこでルフトからある命令を下される。

「今度の休日に、白き月で、新型機動兵器の適正試験をですか？」

「ああ。休日にすまないが、これは全ての第一関門を突破した候補者達に命令が出ていてね」

「新兵器の適正ですか・・・・・・」

ランファは、いつの間に、自分達がそんなものを受けていたのであろうかと首を傾げてしまう。

「多少の身体データと脳波を密かに測定させて貰っていてね。君達に、《適正ありの可能性高し》という判定が出たのだよ」

「わかりました。私。頑張ります」

ミルフィーユは、『新兵器のパイロットになれるかもしれない』という事実を素直に喜んでいた。

正直なところ、今年の三月に士官学校を卒業して、見習い士官として任地に派遣されても、上手くやっていく自信がなかったからだ。

様々な幸運が重なって主席なのは結構だが、その事で変にプレッシャーを感じていたのかもしれなかった。

「ランファ君も良いかね？」

「はい。私には、適任でしょうから」

「だろうな」

勿論、士官学校でも戦闘訓練が行われていて、ランファはその中でも群を抜く存在であった。

特に格闘技の能力は、歴代の生徒達の中でもトップクラスの実力を有しており、肉体も頑強であったので、対G能力等が高いと有利な機動兵器のパイロットに、ランファはまさにうってつけであった。

「他にも、多数の候補者がいるが、あまり気張らないように」

「「了解！」」

ルフトの話はこれで終わり、二人は校長室をあとにするのであった。

そして、ちょうど同じ頃、アキオの私室でも・・・・・・。

「へえ。大佐ねえ。出世したねえ」

その日、決められた有給を消化すべく、休みを取っていたアキオは、久しぶりにフォルテと連絡を取っていた。

「俺は、ここで打ち止めだ。中尉のフォルテには、まだ先があるじゃないか」

表向き貴族階級出身でないアキオは、暫く昇進できない事になっていた。

市民階級出身で将官になるためには、最低でも四十歳になっていなければならないというのがトランスバール皇国軍の慣習であったが、実はそれすらも稀で、大抵はルフトやウォルコットのように、五十歳を過ぎてからというのが現実であったからだ。

「隋分と、長い先だねえ」

「フォルテなら、あと五年以内には佐官になれるさ。それで、次の赴任先は？」

「白き月で、新型機動兵器のテストパイロットをね。それと、既に決まっているパイロット達と、来週に選抜試験が行われて決められる、新人達の教育と指揮だってさ」

「なるほどね。そいつは、大任だな」

先に皇王ジェラールが武力を用いて皇国の直轄地にしてしまった白き月では、多くのロストテクノロジーを利用した兵器が開発中であるとの噂であった。

ただ、その中にいる職員達などは、以前の白き月の状態を考慮してなのか、大半が女性であるらしい。

多分、皇王ジェラールは、皇国にロストテクノロジーを授ける聖母と、それに付き従う軍属の技術者達である巫女の女性達というイメージを崩したくなかったのであろう。

「白き月を守る《ムーン・エンジェル隊》だってさ。自分でも、ちょっと蕁麻疹が出てくるね」

「そうか？　俺は、お似合いだと思うけどね」

「あんた程の良い男に言われると、気分が良いものだねえ」

あの地獄の惑星サーヴァントを出て改めて考えると、やはりアキオは良い男であった。

ただ、やはりフォルテにとっては、アキオは親友で恋人にはなり得ない存在であったのだが。

「それは良かった。あっ！　そうそう。一つ大切な事を忘れていたよ」

「何をだい？　アキオ」

「実は、俺の上司のウォルコット少将なんだけどね。今、任務で各地を転々としているんだけど、明日、そちらに用事があるそうなんだよ。でさ。ついでに、俺のフォルテへの栄転祝いを頼んでいるんだ」

フォルテは、久々に自分の親友の喰えない部分を再確認していた。

まず第一に、自分の話をさも興味深そうに聞いていたが、アキオは既にフォルテの新しい任地を知っていた。

第二に、孤児であったフォルテに軍の学校を紹介し、その他にも、物心両面で世話になっているウォルコット司令が自分の所に来る事を、かなり直前になって伝えて来るところだ。

「アキオ！　そういう事は、もっと早く伝えな！」

「おや。歴戦のフォルテさんにも、苦手な物がありましたか？」

「お前ねぇ・・・・・・」

子供の頃、環境が劣悪であった孤児院を昼間に抜け出し、喧嘩、窃盗、スリなどの悪事を繰り返していたフォルテは、たまたまサーヴァントの視察に訪れていたウォルコット司令のサイフをスリ損ね、そこから彼の庇護を受ける事となった。

ちゃんと学校に通わせて貰い、生活の面倒を見て貰い、誕生日やクリスマスにはいつもプレゼントが届く。

それは、幼き頃に家族を失ったフォルテにとって、夢のような日々であった。

そして、トランスバール皇国の軍人になるための学校に通いたいと言った時には、推薦状まで書いてくれた。

多分、苦手とは違う。

恩が有り過ぎて、会うと少しテレてしまうのだ。

「まあ。そういう事だからさ。お祝いは、結構奮発したんだぜ」

「酒なんだろうね？」

「近年の大傑作。パリューニュの３７６年の白と、シェテーゼの貴腐ワインをセットでね」

「ようし！　今までの無礼を許してやる」

銃の他に酒も好きなフォルテは、その滅多に口にできない貴重な酒の銘柄を聞いて、機嫌をすぐに直してしまう。

「それは、ありがたい。さて、今日はこの辺で・・・・・。ああ。ウォルコット司令に、こちらは順調だって伝えておいてくれ」

「あんたが面倒を見ていて、不調ってあるのかい？」

「時にあるんだよ。また連絡するよ」

「ああ。またな。アキオ」

フォルテが通信を切ると、ちょうどシャトルは白き月に到着する直前で、機内にその旨を伝えるアナウンスが流れていた。

「白き月の直衛部隊。《ムーンエンジェル隊》か・・・・・。私も、色々と頑張らないとね」

こうして、紆余曲折を経て、フォルテ・シュトーレンは中尉へと昇進し、初の女性のみの部隊を率いる事となるのであった。

新設される、新型機動兵器《紋章機》部隊ムーンエンジェル隊の隊長として白き月に着任したフォルテは、白き月の防衛を行っている直轄部隊司令官に着任の挨拶をした後、既に部隊への着任が内定している二人の部下を紹介される。

「あの・・・・・。カルドネ准将・・・・・」

「まあ。何だ。将来性のある若き優秀な彼女達を、ベテランの兵士でもあった君がだね・・・・・・」

「・・・・・・」

フォルテは、自分の目の前にいる二人の少女達のあまりの幼さに、指揮官としての前途を危ぶみ始める。

「最初は、大変だと思うがね。それも、時間が経てば・・・・・・」

「・・・・・・（時間が、たって！　あんたは、あと三ヶ月で退任だろうが！）」

フォルテは、目の前のもうすぐ退任してしまう司令官に心の中で悪態を突きながらも、すぐに気を取り直して自己紹介を開始する。

「フォルテ・シュトーレンだ。最近、中尉になったばかりでね。指揮官としての経験も浅いけど、一緒に頑張っていこう」

「ミント・ブラマンシュ准尉です。宜しくお願いします。シュトーレン中尉」

最初に、身長が１３０センチにも満たない、動物のような耳のある、水色の髪の少女がフォルテに挨拶をする。

どうやら、彼女は見た目とは違い、話し方からして子供ではない事にフォルテは気が付く。

「うん？　ブラマンシュ？　ああ。アキオが、言っていたブラマンシュのお嬢様か」

「まあ。アキオ・レイトン大佐をご存知なのですか？」

「戦友というやつでね」

先ほどのアキオとの会話の中で、ミントの事を聞いていたフォルテは、心の中で少しアキオに感謝する。

初めて接する部下に、共通の話題があるのとないのとでは、その後の馴染むスピードが全然違うからだ。

「それで、ブラマンシュ准尉は、いくつなんだ？」

「今度、十六歳になります」

「そうか・・・・・（しかし、こんな小さな華奢な体で大丈夫なのか？　その新型機動兵器とやらは・・・・・・）」

「ええ。重力制御のおかげでGが全くないので、大丈夫ですわ」

「えっ！」

どうやら、自分の考えは、目の前の少女に見透かされていたらしい。

自分が心の中で考えていた事を、ミントに先に答えられてしまい、フォルテは、驚きの声をあげてしまう。

ただ、それはフォルテの大きな誤解であるのだが・・・・・・。

「シュトーレン中尉。小さなバラには、棘がある事もありましてよ」

「・・・・・・」

このミントという少女は、見た目とは違い、かなり知性的で一筋縄では行かない性格であるらしい。
そして、精神的にも、かなり大人であるようだ。

「まあ。とりあえず宜しくな。で・・・・・・。隣の君は・・・・・・」

フォルテは、一旦収まりかけていた頭痛にまた苛まれ始める。
見た目は、まるで人形ように整った容姿の美少女であり、若草色の髪をポニーテールにして纏めていて、その上にはヘッドギアを付けている。
ただ、彼女も非常に背が小さく、しかも彼女は本当に実年齢が幼いらしい。
そして、感情をあまり表に出さないタイプなのか、その顔は無表情のままであった。

「ヴァニラ・H(アッシュ)です」

「・・・・・・」

フォルテが、それ以上何も語らない少女にどう接したものかと考えていると、突然ヴァニラの肩の上に一匹の小動物が乗っかってくる。

「ナノマシンの集合体です。大量に使う時のために、形式を与えて保持しています」

「ナノマシンかい。へえ。凄いんだね」

「そんな事は、ありません」

「・・・・・・」

それだけであった。

フォルテは、この話題を広げ難い部下その2と、先の強かな部下その1であるミントのみを紹介された事に不安を感じ、後ろにいるカルドネ准将の方へと顔を向けると、先ほどまではそこにいた彼は、既に煙のように消えていた。

「・・・・・・カルドネ准将？」

「あのお方は、定年までの残り三ヶ月を、無難に過ごす事しか考えておりませんから」

「詳しいな。ブラマンシュ准尉」

「ええ。数ヶ月もここにいますと、それなりに・・・・・・。それと、私の事は、ミントとお呼びくださいな」

フォルテは、旅の疲れもあったのであろうが、早く自分の部屋のベッドに潜り込んで眠ってしまいたい気分であった。

「どうも、お久しぶりですなあ。フォルテさん」

「中佐！　じゃなかった。少将になったんだって？　出世したじゃないか」

「あなたも、中尉ですか。お互いに偉くなったものです」

白き月に、ムーンエンジェル隊隊長として赴任してきたフォルテは、自分の部下が、子供のような少女二人のみという現実に参ってしまったが、お互いに自己紹介を終えた翌日から、気を取り直して正規の任務を開始した。

ただ、今までにフォルテがいた惑星サーヴァントと違い、ロストテクノロジーの原理や使用方法などを研究する軍直属の研究機関の色合いが強い白き月では、それほどの緊張感はないようで、今日もミントとヴァニラの案内で、（ヴァニラは、無言で付いて来ただけだが・・・・・）白き月の各所を案内されたのみであった。

そして、今日の任務はこれで終了という時間帯に、フォルテに客人が現れる。

先日、アキオが話していたウォルコット少将その人であった。

「おや？　ミントさんが、フォルテさんの部下になったのですね」

「あら。ウォルコット少将ではありませんか。お久しぶりでございます」

「本当、お久しぶりですな。ミントさん。それに、軍服姿もなかなかにお似合いで」

フォルテの隣にいたミントは、ウォルコット少将と顔見知りであったので、お互いに挨拶を交わす。

それと、ミントの着用している軍服の事であったが、実はトラン

スバール皇国軍では、かなり軍服に関する規律が緩かった。
将校であれば、階級章と一部の共通項目を満たしていれば改造等も自由で、現にフォルテも、一部軍服の改造を行っていた。
ミントも、軍服の上半身の胸元を青いリボンで飾り、スカートの色と形状も、かなり軍服からかけ離れていた。
そしてなりより、軍服の素材自体が、かなりの高級な素材で作られていた。
さすがは、金持ちの家の娘という事であろうか。
更に、フォルテの反対側の隣にいるヴァニラも、フリフリの付いた、昔で言うところのロリータファッションに近いスカートの付いた軍服を着用しと、それだけでこのムーンエンジェル隊がいかに特殊な部隊であるか、容易に想像が付くというものであった。
いくら軍服の改造が自由でも、正規の艦隊にいる将校でここまでしてしまう人間は、ほとんど存在しないからだ。
ただ、ヴァニラの改造軍服については、彼女の地の性格を考えると、誰かの仕業である事が容易に想像が付くのだが。

「あの・・・・・・。アキオさんなんですけど・・・・・・」

「おや？　定期的に、連絡を取られているのでは？」

「はい。ですが、あの方は、根を詰めすぎると言いますか・・・・・・。無理を、し過ぎると言いますか・・・・・・」

フォルテは、アキオの事を心配しながら顔を赤くさせているミントを見て、『してやったり』という顔をする。
あの理論派であるミントの唯一の欠点が、自分の親友であったからだ。

「大丈夫ですよ。レイトンさんは、ちゃんと人材を育てました。だ

から、前ほど無理はしてしません。それに、一応は、私もいますしね」

「よかった」

ウォルコット少将の答えに、ミントは心の底から安堵の声を漏らす。

「では。フォルテさん。参りましょうか？」

「仕事は、終わったのかい？」

「ええ。元々、大した用事でもありませんし。ここに来た最大の目的は、あなたに会うためですから」

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか。中佐。じゃなかった少将」

「アキオさんから、お祝いを預かっています。私も、多少は給料が上がりましたので、お祝いを奮発しましたし」

「じゃあ。私の部屋に行こうか。ミント。ヴァニラ。これで、解散だ」

フォルテは、ウォルコット少将と一緒に自分の部屋に向かって歩き出した。

「まあ。大人の男女ですのね」

「？？？？？」

ミントの感想に、その意味が理解できないヴァニラは、一人首を傾げるのであった。

「おお！　幻の芋焼酎《月の光》じゃないか。少将様ともなると、お祝いの中身が違うね」

「喜んで貰えてなによりです」

始めは、どこかのお店で飲もうと考えていたフォルテであったが、実は白き月の内部にそんな気の利いた場所は存在しなかった。

大きさは、衛星規模なのだが、多くの研究・生産区画と、まだ人の探索の入っていない立ち入り禁止区画が大半を占め、他の軍の基地と違って、民間業者の出入りが完全に禁止されていたからだ。

なので、フォルテは、自分の部屋にウォルコット少将を招待していた。

普通、大人の男女が部屋で二人となると、ミントのような想像をしてしまいがちだが、フォルテにとって、ウォルコット少将は父親代わりの存在で、ウォルコット少将にしても、フォルテは娘のような存在であったので、多分そんな間違いは起こらないであろうというのが、二人の共通した考えであった。

「では、早速に乾杯しますか？」

「そうだね。では、二人の昇進に！」

「「乾杯！」」

フォルテは、早速に貰ったワインの栓を開け、二人で乾杯をする。

「しかし、これから大変ですな。フォルテさんは」

「確かに大変だけど、少将とは大変の種類が違うだろう」

「ええ。ここ一年で、周辺の環境がガラリと変わりましたからね」

少将となったウォルコットは、ある任務のために各地を転々とする日々を送っていた。

それは、トランスバール皇国軍中央司令本部内にある、通商護衛艦隊司令部の権限強化を行うというものであった。

今までは、組織はあったのだが、各方面軍に適当に任せていた通商護衛艦隊の運用を一元化し、第2方面軍で初の設置が成された≪総合宙路警備保障（株）≫を、皇国領全域に展開するための下準備をウォルコット少将が行うのである。

勿論大変な仕事ではあるのだが、その任を成し遂げれば、ウォルコット少将は中央で要職に就く事が内定していた。

「大出世だね」

「別に、私は何もしていないんですけどね。レイトンさんのおかげで、『補給と通商護衛といえば、ウォルコット』という評価が一人歩きしていまして」

「なるほどね」

別に、ウォルコット少将が謙遜するほど、アキオばかりが働いているわけでもなかった。
ただ、二人は実務を効率良く最速で行うアキオと、長年の経験を生かしてアキオの脇を固め、彼の最速の走りをフォローするウォルコット少将という役割分担が出来上がっていたのだ。
多分、そのどちらが欠けていても、ここまで上手く行く事はなかったであろう。
まさに、両輪と呼ぶに相応しい二人であった。

そして、アキオ達の中央の評価が上がってきた原因の最たるものが、総合宙路警備保障（株）であった。
何しろこれがあれば、軍は天下り先が簡単に確保出来るし、ちょっとした不祥事を犯した軍人を一時的に転籍させて、ほとぼりを冷まさせるという手も使えるからだ。
不祥事といっても、だた自分のためだけに何かをしたとかではなく、組織のために仕方なしにという事も多々あるからだ。

「まあ。綺麗事だけではやっていけませんからね。軍という所は」

「それは、理解しているさ。それで、アキオは大丈夫なのかい？」

フォルテは、アキオの出生の秘密を本人から聞いていたので、最近のアキオの近況をウォルコットに尋ねる。

「ええ。もうここまで来ると、彼もレイトンさんに手を出し難いみたいですね。それに、昔は辣腕であった彼も年老いた。最初の内にレイトンさんを殺せていれば良かったのでしょうけど、失敗続きで軍部でも貴族社会でも、その影響力を減少させてしまったようです」

「あのジジイ、いくつだっけ？」

「八十六歳だそうです。いつ天国からお迎えが来るかわからない御仁に、もう必要以上に気を使う人もいないという事ですよ」

いくら、昔は皇国の要職を歴任した大貴族とはいえ、半分棺桶に足を突っ込んだ年寄りにこれ以上気を使う人もいないという事なのであろう。

それと、これも一部の人間しか知らない事であったが、密かにアキオを抹殺すべく、一流の殺し屋達を雇うために使用した資金と、その事にかまけ過ぎて、シードル公爵家の資産が色々と目減りしてしまった事実などから、フレスコは以前ほどの影響力を持てなくなっていたのだ。

これも、ミルフィーユの強運に逆らった者の運命なのであろうか？

「もう少しなんだね。アキオが開放されるのも・・・・・・」

「ただ、気になる事を言っていまして・・・・・・」

「気になる事？」

ウォルコット少将は、アキオが自分の体を流れている血に悩み、一人で生きて死んでいくと語った事をフォルテに話す。

「あいつ・・・・・・」

「その発言で、ショックを受けてしまった方もいまして・・・・・・」

「また、女絡みなのか？」

ウォルコットから、ちとせの事を聞いたフォルテは、自分の親友の罪深さに少し呆れていた。

「しかし、世の中ってのは上手くいかないんだね。少将が、どんなに頑張ってもまだ独身なのに、結婚・恋愛願望ゼロのアキオに、ちとせとかいう女とミントか？　何とも、ねえ・・・・・・」

「あの。フォルテさん。何もそこで、私の事を出さなくても・・・・・・」

「せっかく、偉くなったんだから、若い嫁さんでも探したらどうだい？　少将」

「そちらの方は、運命に委ねるとして、別に私はモテなかったわけではありませんよ。昔は、これでもですねえ・・・・・・」

「その話は、本当なのかい？」

フォルテは、半信半疑でウォルコット少将の顔を見る。

「そもそもですね。フォルテさんだって、私は、あなたが幼い時分から知っていますけど、浮いた話一つ聞いた事がありません。ボーイフレンドを紹介された事すらない」

「それはだねぇ。たまたま少将と会った時に、そういう人がいなくてだねぇ」

「本当ですか？」

「少将の方こそどうなんだい？」

「私の公私共に撃墜王であった頃の話を・・・・・・」

「嘘くさいよなぁ・・・・・」

お互いに憎まれ口を聞いていたが、長い付き合いの二人は、久しぶりに楽しいひと時を過ごしたのであった。

「いよいよ今日は、紋章機のテストパイロット選考会だ！　これで、ムーンエンジェル隊も・・・・・」

フォルテが、ムーンエンジェル隊の隊長に就任してから一週間、彼女は、既に自分専用の紋章機の試乗と調整を開始していた。

更に、これから各紋章機とのフォーメーションの確認や、実戦経験が皆無のミントやヴァニラに実戦的な訓練を施しと、隊長として動き始める事なり、その第一弾として、未だにパイロットが決まっていない三機の紋章機の、テストパイロット選考会が本日開かれる事となっていた。

「お子様比率が減って嬉しいですか？　フォルテさん」

「こら！　人の心の声を読むな！」

既に、ミントにテレパス能力がある事を知っているフォルテは、自分の心の声を読んだミントに文句を言う。

「まあ。言いたい事は色々とありますけど、六機ある紋章機の中で、ちゃんとパイロットがいて動くのが半分という事態はいただけませんわね」

紋章機は、全長が三十メートルから六十メートルの、一人乗りの宇宙用大型戦闘機であり、元々は白き月の内部から見つかった、ロストテクノロジーを利用した特殊兵器であった。

動力源としては、トランスバール皇国では一般的に宇宙船などに用いられているクロノ・ストリング・エンジンが使用されている。

ただ、この《超時空弦推進機関》と訳されるクロノ・ストリング・エンジンは、凄まじいエネルギーを放出することもあれば、次の瞬間にはピタリと放出をやめることもあり、アップダウンの差が激しく不安定であるために、エネルギー放出確率を収束させるために、通常は複数のエンジンを搭載できる大型艦船のみに活用されている。

本来、紋章機レベルの大きさの物には搭載できない物なのだが、それを可能にしたのは、H・A・L・O・（ヘイロゥ）システムと呼ばれるシステムであった。

《有機脳人工脳連接装置》と訳されるこの装置は、パイロットの頭の上にある《天使環》（エンジェルリング）によって、有史上最も発達した有機脳である人間の脳のエバネッセンス光子の様相を量子素子として光素子人工脳と有機的に連接し、多次元処理（マルチ・ディメンション・タスク）を実行可能とした超高速演算装置であった。

このシステムのお陰で、紋章機のコクピットは非常に簡単なものとなっていて、先に説明した天使環は、稼働中は発光現象を起こす。

だが、H・A・L・O・真価は、クロノ・ストリングのエネルギ

ー噴出の確率に干渉できることにある。
これにより、紋章機はパイロットのテンション次第でクロノ・ストリングから自由にエネルギーを取り出すことができ、紋章機を自在に動かす事が可能であった。
ただ、Ｈ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムは、パイロットのテンションに非常に敏感に反応するために、同じ機体でも状況によって能力の上下が激しく、軍という組織において重要な、平均的な戦力として計算するのが非常に難しく、Ｈ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムを稼働せさせるには特殊なテンションが必要なため、当該するシステムに適合するパイロット以外には動かすことすら出来ない（能力をすべて発揮できない）、等の欠点もあった。
つまり、高性能機ではあるが、非常に不安定で乗り手を選ぶという、普通の軍人であればあまり使いたくない実験的な類の兵器であったのだ。

「でなければ、私達に任される道理もありません」

「ヴァニラ。お前が、それを言うかね」

フォルテは、まだヴァニラが十二歳だと聞いて驚いたが、彼女の操縦する紋章機の特殊性を鑑みて、それも致し方のないと考えていた。

《ＧＡ－００５　ハーベスター》と呼ばれるヴァニラの紋章機は、戦場にナノマシンを散布して味方機の修復を素早く行うという、通常の兵器では考えられない特殊能力を有していたからだ。
だからこそ、フォルテは、ヴァニラをムーンエンジェル隊の戦力の要と考えていた。
いや、フォルテだけでなく、もしムーンエンジェル隊と戦う敵勢力が、一番初めに落とす事を考えるであろう機体は、間違いなくヴ

ァニラのハーベスターであったからだ。
いくら損傷を与えても、その都度ハーベスターに修復されてしまったら、勝てる戦いも勝てなくなってしまう。

「六機体制になれば、ヴァニラさんの護衛を行う機体を置くという事ですか？」

「ああ。少なくとも、私はそう考えている。多分、アキオも、そういう運用をすると思う」

「かもしれませんわね」

見た目は子供のようだが、頭が良く沈着冷静なミントを、フォルテは次第に参謀のように扱い、その意見を求める事が多くなっていた。
惑星サーヴァント時代に、アキオは良くベテランのモルト軍曹の意見を聞いていたので、フォルテも自然にそういう事が出来るようになっていたのだ。

「私のハッピートリガーは、重装甲・重武装で機動力が無いから護衛には向かない。ミントのトリックマスターは、これも特殊な機体だからな・・・・・」

フォルテが、現在懸命に調整を行っている《ＧＡ－００４ハッピートリガー》は、多数の火器を搭載した重攻撃タイプの機体で、その火力は正規の巡洋艦と撃ち合って勝てる程であった。
ただ、これはフォルテの趣味なのか？
彼女は武装のかなりの部分を、既に時代遅れとなりつつある実弾兵器に換装させていて、更に紋章機の特徴の一つである重力制御を活用した対Ｇ装置も、実戦時の緊張感と勘がそがれるという理由で

外させていた。

そして次に、ミントの操縦する《ＧＡ－００３トリックマスター》は、左右の弧を描くブームが印象的な機体で、このブームはレーダーアームと呼ばれ、ＥＣＭ発生装置やレーダーを内蔵し、これを使いトリックマスターは自在に走行方向を変えられた。

また、機体中央に装備されている稼働式の円盤型レーダーは、敵を照射し続けることによりアクティブホーミングのサポートをし、これらのレーダー類は、ミントのテレパス能力によって運用され、同時にミントのテレパス能力を増幅する。

そして、この機体の最大の特徴は、遠隔操作する砲台『フライヤー』を持つ事であった。

このフライヤーには、プラズマビーム砲が搭載されており、ミントはテレパス能力を用いて、この十九基装備されているフライヤーを一度に三基まで自在に操り、様々な方向から間接攻撃を行う。

分類でいけば、偵察・間接攻撃型と呼ぶべきであろうか？

ただ、この機体も、ハーベスターの護衛には向かないタイプの紋章機であった。

「では、どの機体をハーベスターの護衛に？」

「ＧＡ－００２は、近接戦闘用で前に出るから無理。となると、ＧＡ－００６が本命となるかな？」

実は、紋章機は、見つかった順に番号のみが付いていて、専属パイロットが名称を付けるという決まりになっていたので、他の三機にはまだ名称が付いていなかった。

ここで残りの機体を紹介しておくと、《ＧＡ－００２》は、装甲は薄いが六機の中では最高速度を誇り、その速度を生かして敵に切り込む近接戦闘タイプの機体であった。

最大の特徴は、左右に装備された電磁式ワイヤーアンカーで、これは敵を握り潰すために使われる。

《ＧＡ－００６》は、長距離攻撃を得意とする機体で、アウトレンジから一方的に攻撃をする戦法を取る、遠距離戦闘専用の機体だ。

懐に飛び込まれると弱いが、機体の左腕部にある盾状のパーツは大型の策敵レーダーで、右腕部にある筒状のパーツは高性能の遠距離照準装置と、とことん遠距離戦闘にこだわった装備をしていて、パワーよりテクニックで戦う機体であった。

「護衛に満点という機体は存在しないね。ＧＡ－００６で決まりかな？」

「あの。ＧＡ－００１が残っていますけど・・・・・・」

「ミント。お前が、そんな事を言うのかい？　あんな無茶な機体、使える奴が本当にいるとでも？」

白き月の内部から最初に見つかった紋章機《ＧＡ－００１》は、バランス重視の万能型の機体で　恐らくスペックのみを検証すれば最強の機体であった。

だが、この紋章機のプロトタイプと想像されるＧＡ－００１には、ある最大の欠点が存在した。

それは、クロノ・ストリングを僅か一基しか積んでいなかったのだ。

安定性より、最大性能を求めてという事らしいのだが、この不安定な機体をまともに動かす事ができる人間など、銀河のどこを探してもいないというのが、専門家の一致した意見であった。

「カルドネ准将も、次にここの司令になるルフト准将も匙を投げていたじゃないか」

装備としては存在するのに、現実には倉庫の肥やしにしかなっていないＧＡ－００１は、ハッキリ言って管理職の悩みの種にしかなっていなかった。

「ですが、午後らの選考会で、適応者が現れる可能性もありますし・・・・・・」

「奇跡に期待ってか？」

その数時間後、フォルテは真の奇跡を目の当たりにする事となる。

「あっ！　ちとせだ！　元気にしてた？」

「ミルフィーじゃないの。あなたも、テストを受けに来たのね」

「何か選ばれちゃって」

とある休日の午後、ここ白き月の一室には、多くの若い女性兵士達や士官学校の学生達が集合していた。

軍は、この紋章機と呼ばれる新兵器を一刻でも早く戦力化するために、少しでも可能性がありと判断された人間を、出来る限りテストに送り出していた。

「ミルフィー。その娘が、例の？」

「そうだよ。一緒に実習を受けたんだ」

「始めまして。センパール士官学校の烏丸ちとせです」

「ミルフィーユと同期のランファ・フランボワーズよ。よろしく」

二人が、お互いに自己紹介を終えた直後、室内に一人の老年の男性が入ってくる。

「おほん。私が、この白き月の防衛部隊の司令官であるカルドネ准将だ。今日は、休日や任務中にも関わらず、わざわざのご足労を感謝する。試験の内容は、事前に聞いていると思うのだが、要はこの白き月で開発された新型戦闘機の適正試験となっている。試験内容は、簡単なシミュレーションを動かして貰うだけなのだが、何か質問はあるかね？」

「あの。一つ宜しいでしょうか？」

一人の戦闘機パイロットと思われる女性少尉が、そっと手をあげる。

「ああ。どんなに些細な事でも構わないよ」

「あの。候補者を見渡したところ、戦闘機パイロットとしての訓練を受けていない者も多数見受けられるのですが、その新型戦闘機とやらは、そんなに簡単に乗れるものなのですか？」

確かに彼女の言う通りに、候補者には整備兵あり、歩兵あり、通

信兵などの艦内要員あり、ミルフィーユ達のように士官学校や各種軍事専門学校の学生ありと、通常多くの訓練期間を必要とする、戦闘機のパイロットの選抜試験にしてはおかしな部分が多数存在していた。

「この新型機の適正者に求められる者は、ただ一つ！　搭載されているH．A．L．O．システムに選ばれるか否かだけだ！」

その後のカルドネ准将の言葉を要約すると、既に軍人か、これから軍人になる人でH．A．L．O．システムにリンクさえ出来ればそれで良しで、もしリンクする人が民間人なら、軍にスカウトしたい気分だとまで語っていた。

「あの准将。既に、諦めの境地なのね」

「何でも、今までに数千人にテストを行って来ていて、合格者は僅か三人。そして、まだ乗り手の決まっていない紋章機が、三機も残っているだとかで・・・・・」

「ふーーーん。そうなんだ」

ちとせの説明を聞きながら、ランファがカルドネ准将の頭を見ると、そこにはかなりの苦労の跡が見受けられた。

もっとも、始めから頭が薄いという線も捨て切れなかったが。

「では、早速に試験を開始する」

説明を聞いた候補者達は、白き月の女性技術者の案内でシミュレーションルームへと移動し、そこで順番に三機のシミュレーターを動かし始める。

だが、やはりこの紋章機という機体は曲者なのか？
まともに動かせる候補者は、まだ現れていなかった。

「考えてみたら、私。戦闘機の操縦方法とか、全然知らないんだ」

「Ｈ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムのおかげで、さほど難しくないですよ。ただ動かすだけなら、そのレバーを操作するだけです。動かせたらの話ですけど・・・・・・」

ミルフィーユは、誰が搭乗しても一ミリも動かなかったＧＡ－００１用のシミュレーターに乗り込み、そこで担当者の説明を聞くが、既に何百回も同じ説明をしているうえに、今まで一度も動いた事のないシミュレーターなので、その口調は半ば投げやりであった。

「頑張ってください」

「はい」

完全に社交辞令になっている、担当者の起動成功を祈る言葉を聞きながら、ミルフィーユがレバーを入れようとした瞬間、隣のシミュレーターで人々の歓声が沸き起こる。

「テスト生ナンバー２６番。ランファ・フランボワーズ。ＧＡ－００２の適正ありと認める。合格！」

「まあ。これが、実力っしょ」

更に、隣でも・・・・・・。

「テスト生ナンバー１１番。烏丸ちとせ。ＧＡ－００６の適正あり

と認める。合格！」

「やりましたわ」

「ええっーーー！」

「知り合いですか？」

自分に縁のある二人が、次々と他の紋章機のシミュレーター起動に成功し、ミルフィーユは自分が置いてけぼりにでもされたかのような感覚に陥ってしまう。

「さあ。あなたも、動かしてみて」

「はい！」

「いやあ。本当にありがとう。これで、私の面子と老後の安泰が」

既に、ＧＡ－００２とＧＡ－００６のシミュレーターの起動に成功したランファとちとせは、テストを見学していたカルドネ准将に、心から感謝されていた。

たかがシミュレーターと素人は考えるであろうが、このＨ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムの実機が搭載されているシミュレーターをまともに動かせるのは、真の適応者のみであった。

「ええ。まあ。運良く・・・・・・（何か、身も蓋もないジイさんね）」

「選ばれた以上は、頑張りたいと思います」

「是非、頑張ってくれたまえ！」

そして、直後にＧＡ－００１のシミュレーターの方でも歓声が上がる。

「うわぁ！　何か、ビュンビュン飛ぶんですね。これ」

ミルフィーユが、シミュレーターのレバーを適当に動かすと、ＧＡ－００１は、仮想空間の宇宙を高速で自在に駆け巡って行く。

「動いた・・・・・・」

「本当に、動くんだ。これ・・・・・・」

製造以来、一回も動いた事のないＧＡ－００１専用シミュレーターの初起動を、研究員達は驚きの表情で見ていた。

「桜葉候補生！　最高！」

そして最後に、カルドネ准将は、年甲斐もなく子供のようにはしゃぎ回っていたと、このテストに参加していた某軍人が、後に回顧録で語る事となる。

（皇国歴４１２年３月中旬、《白き月》内部、紋章機専用格納庫内）

「さあ、今日の訓練はこれで終了だよ」

フォルテが今日の訓練終了を告げた瞬間、その部下である少女達は、それぞれに安堵を含んだ声をあげる。

「ばんざーーーい！」

「今日の夕食は、何を作ろうかな？」

「技術者の方と、打ち合わせをしなければ・・・・・・」

「もう少し、データの見直しをしないといけませんかしら？」

「・・・・・・」

紆余曲折を経て、六人の隊員がようやく選抜されたムーンエンジェル隊は、候補者の中で軍の士官学校に通っていたミルフィーユ、ランファ、ちとせの卒業と正式な配属をもって、ようやく全メンバーが揃っていた。

新米隊長であるフォルテは、自分を含む各隊員達に、まずは自分の搭乗する紋章機の特徴を掴み、その性能を限界ギリギリまで引き出せるようになるまで訓練に没頭するようにと指導を行い、命令を聞いたミルフィーユ達は、時間の許す限り過酷な訓練を続けていた。

その他にも、整備兵や技術者と相談しての、紋章機の細かな設定や武装の変更など、紋章機という新兵器を少しでも早く戦力化すべく様々な努力を続けていた。

「ああ。そうだ。今日はもう無理だが、明日の晩にみんなで夕飯でも一緒にどうだい？」

そして、それは、新米隊長であるフォルテも同様であった。

以前の上司がいきなり戦死したので問答無用でやらされた、しかも、部下達がムサいオッさんか兄ちゃんばかりであったサーヴァントと違って、年頃の少女達に自分も紋章機の操縦を習いながら、指揮官として統率を執るというのは実に骨の折れる作業であった。

正直、同じ年の親友は、よくやっていると感心してしまう。

それに、サーヴァントの連中は、力量さえ見せればそれなりに素直に従ってくれたのだが、女という生き物にはそれプラス何かが必要であり、その何かプラスを得るために、フォルテは部下達を食事に誘って、懸命にコミュニケーションを取ろうとしていた。

「ああ。それ。良いですね。でも、夕飯って・・・・・。せめて、ディナーって言ってくださいよ。フォルテさん」

腰まで伸ばした金髪、髪に付けた錘形のアクセサリー、露出度が高めのチャイナドレスに、将校用の軍服を上着として羽織ったランファが、不満そうな声を口にする。

つい二週間前程に、トランスバール士官学校を次席という優秀な成績で卒業した彼女は、早くにこの部隊の雰囲気に慣れていた。

そうでなければ、いくら規則範囲内とはいえ、上のような格好はしないであろう。

「ディナーなんて代物は、ここでは食べられないだろう」

「それも、そうですね。あーーーあ。どこかに、私を素敵なディナーに誘ってくれる良い男はいないかなぁ？」

「女ばかりだからな。ここは」

とは言いつつも、フォルテは、実はランファが意外と男性や恋愛に慣れていない事を知っていた。

見た目はスタイル抜群の美少女なのだが、恋愛物のドラマに見入り、少女漫画を読み漁ったりと、意外と恋愛に夢を見過ぎて実行に移せないタイプであったからだ。

「あの。フォルテさん。私が、何かを作りましょうか？」

「それは嬉しいけど、たまには他所で食べるのも悪くないだろう」

「それもそうですね」

同じく、トランスバール士官学校を様々な奇跡の結果、主席で卒業したミルフィーユが、フォルテの意見に同意する。

実は彼女も、軍服のタイトスカートが髪の色と一緒のピンク色と、意外と自分の好みを貫くタイプであった。

「ヴァニラは、何を食べたい？」

「美味しい物」

「・・・・・。そうか。そうか。美味しい物を食べような」

相変わらずボキャブラリーと表情が貧困なヴァニラであったが、

こちらの質問に素直に答えてくれるようになってくれたのは、フォルテには嬉しい出来事であった。

「それで、ミントは？」

「ええ。仲間同士の交流を深めるためですから。是非・・・・・・」

「ちとせは？」

「勿論、参加させていただきます」

「・・・・・・」

ミントとちとせは、お互いを見ないようにしながら、極めて冷静に大人の返事をする。

実は、ムーンエンジェル隊が六人体制になってから、フォルテが一番対応に苦慮しているのが、この二人の仲の悪さであった。

最初の紹介の挨拶では何も無かったのに、ある日を境に突然こういう事になってしまったのだ。

以来、訓練であろうが、ミィーティングであろうが、何をする時にも、この二人の冷たい関係は継続していてフォルテを困惑させていた。

「じゃあ。明日に、知り合いのコックに特別料理を注文するから」

フォルテは、明日の食事会が事態の解決に少しでも結びつく事を祈る他なかった。

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

「ねえ。フォルテさん（あの二人。何とかしてよ・・・・・・）」

「何だ？　ランファ（無理だっちゅうの！）」

そして、翌日の夜、碌に店もない環境なので、フォルテが軍の食堂で働いている知り合いのコックに頼み込んで料理を頼み、フォルテの部屋で開かれた食事会の雰囲気は、正直言ってかなり微妙であった。

一見すると、六人の雰囲気はかなり良いように見えるのだが、ミントとちとせは一番離れた場所に座って、お互いに一言も口を利こうとしなかったからだ。

「うわぁ。この料理。美味しいね。ちとせ」

「ええ」

「ミント。これ、美味しいよ」

「それは、良かったですわね。ミルフィーさん」

「・・・・・・」

ミルフィーユは、この一週間で更に険悪になった二人の仲を取り持とうと懸命であったが、それも無駄な努力でしかないらしい。
なぜなら、二人は碌に目も合わせないからだ。

「フォルテさぁーーーん！（何とかして！）」

「知るか！　おい！　お前ら！　いい加減にしろよ！」

今までは、二人を刺激しないように穏やかに解決策を模索していたフォルテであったが、遂にキレてしまったようで、その怒りの矛先をストレートにちとせとミントに向け始める。

「お前らな！　何でそんなに険悪なんだよ！？」

「プライベートな事ですので・・・・・」

「同じくですわ」

「だぁーーー！　いいから来い！」

フォルテは、自分のグラスに注がれていた酒を一気飲みしてから、二人を奥の寝室に連れて行く。

「とにかく！　話して貰うからな！」

「プライベートな事ですので・・・・・」

「私も、同意見ですわ」

「だぁーーー！　他の部隊ならいざ知らず！　紋章機にそんな理屈

は通用しない！」

ロストテクノロジーを利用して作られた紋章機にはH．A．L．O．システムが搭載されているのだが、実はこのシステムには、操縦者のテンションによって大きく左右されるという特徴を備えていた。

つまり、多少の個人差はあれ、ミントやちとせのような精神状態では紋章機は本来の性能を発揮せず、従来の旧式兵器にも劣る代物となってしまう可能性があったのだ。

「H．A．L．O．システムの仕組みを真に理解していたら、絶対に言えないセリフだよな」

「「・・・・・・・」」

「人生の先輩として聞こうじゃないか。秘密も厳守する。だから・・・・・」

「あの・・・・・・「私が、お話します・・・・・・」

ちとせの発言を遮るようにして、ミントが話を始めるのであった。

「ミント・ブラマンシュ少尉です。宜しくお願いします」

「烏丸ちとせ少尉です」

約三週間前に二人が始めて顔を合わせた時、表面的には、二人の関係はさほど悪いものではなかった。
真面目なちとせと理論派のミントだったので、特に表立って争う要因が無かったからだ。
ただ、表立ってという事のみであったが・・・・・・。

「あの。ちとせさん。何か?」

「いえ。何も・・・・・・・(この人が、ブラマンシュ財閥のお嬢様・・・・・・。アキオさんは、ロリコンなのでしょうか?)」

「そうですか・・・・・・・(ムカッ!)」

失礼だとは理解していたが、ちとせの心の声を読んだミントは、密かにちとせに対して激怒する。
だが、幼少の頃からこの手の事には慣れていたので、その事を表に出す事はしなかった。

「なあ。普通に聞くと、ちとせの方が悪いような・・・・・・」

「いくら名財閥の娘だからって、それだけでアキオさんを!」

「・・・・・・(アキオの奴! 私の隊長任務を妨害して! どうしてくれようか・・・・・・・)」

フォルテは、ここにいない自分の親友に後で制裁を加える事を決めながら、更にミントの話を聞く。

「極めつけは、一週間後に・・・・・・」

最初にそんな事はあったが、そこは女子高などではなく軍の一部隊であったので、二人は冷静に日々の任務に邁進して行く。

そして、二人が一緒に紋章機の訓練を始めて一週間後・・・・・・。

「おはよう。ちとせ。あれ？　そのリボン新しいやつ？」

「おはよう。ミルフィー。そうなの。アキオさんに、卒業のお祝いに貰ったの」

「へえ。綺麗なリボンだね」

「ミルフィーは、何を貰ったの？」

「特殊鋼で出来た包丁だよ。前から欲しかったんだ」

白き月内の食堂で、同じ実習先繋がりで仲の良いミルフィーユとちとせが、アキオから貰った卒業祝いの話をしていた。

「おはよう。ミルフィー。ちとせ。しかし、マメな男というか、女性に手が早いっていうか・・・・・・」

「「えっ？　アキオさんが、女性に手が早い？」」

二人の話を聞いて、アキオをプレイボーイ扱いしたランファに二人は、頭の上にクェッションマークを浮かべてしまう。

アキオは、誰もが認める美男子ではあったが、浮いた話など一つも存在しなかったからだ。

それに、ミルフィーユとちとせがお祝いを貰ったのは、二人を実習生として受け入れた縁があったからで、これはどちらかというと、気が利くという類のものであった。

「あら。皆さん。おはようございます。何のお話をされていましたの？」

そして、そこにミントが現れる。

「おはよう。ミント。ミルフィーとちとせが、あのプレーボーイにプレゼントを貰ったっていう話よ」

ランファの説明を聞きつつ、ミントはちとせの髪に結ばれたリボンが新しい物になっている事に気が付く。

「あら。綺麗なリボンですのね」

「アキオさんは、『安物だから気にするな』って仰ってくれて・・・・」

だが、ミントはそのリボンが決して安物ではない事に気が付いてしまう。

そもそも、あのアキオが、ミルフィーユとちとせへのプレゼント

の金額に差を付けるはずも無かった。

「（あのリボンは、惑星シルクラウンドの最高級シルクを使い、髪を傷めず、あらゆる環境でも痛まない特殊加工を施された逸品。下手なアクセサリーなど、足元にも及ばない高級品のはず・・・・・・）」

聞けば、自分達の隊長であるフォルテも、昇進兼ムーンエンジェル隊隊長への就任祝いを貰ったらしい。

白き月の研究員見習いで准尉相当官から、正式な軍人になって少尉へと昇進したミントは、自分のみが何も貰っていない事に大きなショックを受けてしまう。

だが、それは、二人の関係を考慮すればいたし方のない事であった。

数ヶ月とはいえ、生死を共にして親友同士となっているフォルテや、一ヶ月以上も実習生として面倒を見ていたミルフィーユやちとせと違い、僅か一日だけ一緒に食事に出かけたのみのミントが、お祝いを貰えるかどうかはかなり微妙な線であったからだ。

「それは、良かったですわね」

貰ったリボンの感触を嬉しそうに確認するちとせの表情を見て、ミントは、ちとせが女としてアキオに好意を抱いている事を再確認してしまう。

そして、それからミントはちとせに冷たい態度を取るようになり、自分がミントに嫌われている事を察したちとせが、ミントに隔意を抱くようになりというのが、ここ二週間ばかりの出来事の真相であった。

「まあ。その。何だ・・・・・。アキオは、ブラマンシュ財閥の関係者と必要以上に懇意になると、職務上で色々と困難をだな・・・・」

通商護衛艦隊副司令と、ブラマンシュ財閥の令嬢が必要以上に仲が良いと、それなりに勘ぐる連中が出てくるとの考えからの行動なのであろう。

フォルテは、自分なりの考えをミントに語る。

「私は私です！　ブラマンシュとは何の関係もありません！」

ミントは、それだけを言うと泣き始めてしまい、それを見て動揺したちとせは、今までの険悪な仲を忘れてミントを慰め始めてしまう。

どうやら、日頃からは想像もできないミントの態度に本当に驚いてしまったらしい。

「何か、あったんですか？」

「どうしたの？」

「・・・・・・」

ミントの泣き声に驚いたミルフィーユ達が、部屋に乱入して来ると、事態は更に混乱してしまう。

「だぁーーー！　入って来るな！」

「でも、ミントが泣いているじゃないですか。フォルテさん。それで、原因は何ですか？」

当事者でもなく、一番冷静なランファに理由を聞かれたフォルテは、渋々と事情を説明し始める。

「それなら、一番の責任者に責任を取って貰いましょうよ」

「おお！　ランファ！　ナイスアイデアだな！」

ランファの意見に、フォルテはすぐに飛びついた。

そもそも、こんな事になったのも、アキオのせいだと考えたからだ。

そして、フォルテがアキオの私室に通信を送ると、そこは留守であった。

「おかしいな？　最近は、さほど忙しくないのにな・・・・・・。確か、ウォルコット少将が戻っていたな。聞いてみるか・・・・・・」

「フォルテさん。そのウォルコット少将と怪しい？」

「えーーー！　そうなんだ！　知らなかった」

「大人の男と女です」

ランファ、ミルフィーユ、ヴァニラの会話に青筋を立てながら、フォルテがウォルコット司令の自室に通信を送ると、そこで彼は一

人でカップラーメンを啜っていた。

「なんだい。冴えないね。少将」

「いきなりそれは酷いと思うんですけどね。フォルテさん。それで、何の用事ですか？」

「アキオを探していてね。ちなみに、隠すと鼻の穴が三つになってしまうよ」

自分の部隊の人間関係を最悪にしてしまったアキオに、フォルテはかなり腹を立てていたので、既に愛用の銃をホルダーから抜いていた。

まさか、何万光年も先のウォルコットに当たるはずもないのだが、そのあまりの迫力に、ウォルコットは身の危険を感じてしまう。

「別に、隠さないですよ。今日は、空いている会議室内で懇親会だそうで・・・・・・」

ウォルコット司令の説明によると、アキオは軍の食堂から特別に料理を頼んで、他所から研修に来ている軍人達と懇親会をしているらしい。

「私達と同じ事をしているのか・・・・・・」

「ええ。実は、各方面軍の司令部と首都星トランスバールの総司令部内に、２４時間３６５日、おおまかな物資の流れと船舶の航行状態を監視するオペレートルームの設置・強化を行う事となりまして、各所から研修生が来ているのですよ。それで、その方々と交流をですね・・・・・・」

「少将は、参加しないのかい？」

「実は、私の本来の帰着が明日なので、参加しそびれまして・・・・・」

「そんなタマじゃないだろうが。少将は」

「でも、オペレーターの幹部候補生達なので、大半が若い女性士官で途中参加し難いんですよ」

その一言で、ヴァニラを除く全員の額に青筋が走る。

どうやら、この騒動の最大の原因が、暢気に若い女性と酒を飲んでいるという点が気に食わないらしい。

それと、ちとせやミントからしたら、これは浮気に近い行為なのであろう。

特に怒りの表情を露にしていた。

「あの野郎！　人がこんなに苦労しているのに、若い女と楽しそうに飯食って酒飲んでるのか？」

「許し難い男ね！」

「アキオさん！　不潔です！」

「私は、どこに感情を持っていけば良いのでしょうか？」

「許せません！」

怒りを露にする五人を見て焦ったのか？

ウォルコットは、速攻で通信を例の懇親会が行われている部屋に繋いでしまう。
すると、そこでは、両脇の若い女性士官から酒を注がれてご機嫌になっているアキオの姿が大きく映し出されていた。
日頃は冷静なアキオも、アルコールが入っているし、若い女性にお酒を注がれて嬉しくない道理もなかったらしい。

「レイトン大佐。もう一杯いかがですか？」

「悪いね。チコリ少尉」

「チコリ。ずるいよ！　私も注ぐ！　レイトン大佐。さあ。もう一杯どうぞ」

「おいおい。そんなに飲ませないでくれよ。明日も仕事があるんだぞ。クコ少尉」

「酔い潰れたら、私が介抱してあげますから」

「私も、介抱する！」

「「「「「私も！」」」」」

背も高く、エリートで、顔も良く、特定の恋人なども存在していないアキオは、研修に来ていた女性士官達に大人気であった。
彼女達は、このチャンスの逃すまいとアキオの周りに集まり、料理を取ったり、お酒を注いだりと、甲斐甲斐しく動いて自分をアピールしていた。

「「「「「ムカっ！」」」」」

ヴァニラを除く五人の怒りは更に増し、その中でもフォルテは、画面の向こうのアキオに届くはずもないのだが、ホルダーに差していた銃を構えながら静かな声で話しかける。

「やあ。アキオ。とても楽しそうな事をしているじゃないか」

「うん？　ゲッ！　フォルテ！・・・・・・・・・さん？」

両脇に若い女性士官を侍らせ、楽しそうに酒を飲んでいる所を、付き合っているわけではないが、他の女性に見られるのはあまり感心しない事に気が付いたアキオは、一転して冷や汗を流しながら画面の先のフォルテに挨拶をした。

そして、更に最悪な事に、フォルテの後ろに見知ったミルフィーユ、ミント、ちとせと、始めて見る二人の女性がいる事にも気が付いてしまう。

「やあ・・・・・・。ミルフィーも、ミントも、ちとせも元気そうだね・・・・・・・（若い女性士官を侍らせて楽しそうに酒を飲む俺・・・・・・。まずい！　誤解されているぞ！　俺！）」

時に、頭が良いというのも考え物であった。

「「「・・・・・・」」」

その三人にも冷ややかな目で見られているアキオは、その場を取り繕うために、初対面の二人の少女達に挨拶をしてみる。

「他のお二人さんも、初めまして」

「最低・・・・・・」

「ヴァニラ・H（アッシュ）です」

初対面のランファにも冷たい目で見られ、その手の事がわからないヴァニラは相変わらずであった。

「あの娘達が、ムーンエンジェル隊なんだぁ。可愛い」

「凄ぉーーーい！　本物だぁ」

この少し膠着した状況は、半分酒に酔っていて周りの空気が読めていなかった、アキオの両脇の女性士官の発言によって最終局面を迎えてしまう。

隣でプルプルと震えていたフォルテが、遂に爆発してしまったからだ。

「こらぁ！　アキオ！」

「ひゃい！」

久々に恐怖を感じたアキオは、思わずおかしな声で返事をしてしまう。

「私が、お前のせいでこんなに苦労しているのに、暢気に若い姉ちゃんと酒なんて飲みやがって！」

「それは、そっちも同じ・・・・・・」

アキオがボソっと言った言い訳は、更にフォルテの感情に火を付

ける。

「お前が、ミントを差別するからだろうが！　私は、初の隊長任務だから色々と大変なんだ。今日も、みんなでコミュニケーションを図ろうかと思っての宴会なのに、お前がそれを邪魔しやがって！　わかってるのかい？」

「あの・・・・・。何となく意味がわかりません」

危機を察知したのか、既に両脇の女性士官はアキオの隣にいなかった。

アキオは、この世の冷たさを感じながらも、フォルテに詳しい事情の説明を求める。

「いいかい！　良ぉーーーく聞くんだよ！」

「おんや？　レイトンのやつ。大変な事になってるな」

「ムーンエンジェル隊の隊長って、女傑なんですね。マイヤーズ大佐」

そして同じ宴会会場では、なぜか宴会に参加していたタクトが、若い綺麗な女性士官と、こめつきバッタの様に画面の向こうのフォルテに謝り続けるアキオを観察しながら酒を飲んでいた。

「俺の事は、タクトと呼んでくれって・・・えっ！　ミルフィーぃ

！」

「マイヤーズ大佐。相変わらずですね」

だが、運の悪い事に、タクトも自分の存在をミルフィーユに見付けられてしまい、彼女に冷たい視線で見られてしまう。

「あれ？　ミルフィーが、ムーンエンジェル隊に？」

「いましたよ。悪かったですか？」

いつもの、優しく、ほんわかとしたイメージのある彼女らしくない態度であった。

どうやら、一応は、タクトの事が気になってはいたらしい。

「いやね。レイトンが、どうしても宴会に参加してくれって言うからさ・・・・・」

「いつの間にか、聞き付けて参加していたよな。しかも、偶然にもこっちに出張だったんだろう？」

「レイトン！」

フォルテに謝る事のみに集中している様に見えたアキオであったが、濡れ衣を着せられるのは嫌だったらしく、タクトの宴会への参加経緯を冷静な声で説明する。

「やっぱり！　タクトさん！」

「ごめんなさい！」

「いいかい！　私の可愛い部下にちゃんと謝るんだよ！　それとね！」

「フォルテさんの仰る通りに・・・・・・」

その後、ムーンエンジェル隊隊長フォルテ・シュトーレンは、あのレイトン大佐に土下座をさせた女傑として、トランスバール皇国軍将校達に一目置かれる存在となり、更に五人の部下達にも、姉の様に慕われる存在へとなるのであった。

そして・・・・・・。

「それで？　タクトのバカは、どこに出張だって？」

「惑星アルモス方面です」

「あんのドバカが！　帰ったら説教だからな！」

全開と同じ手で仕事をサボられてしまったレスターは、この場にいない自分の上司兼親友に再び激怒するのであった。

第三話（後書き）

ゲームをプレイ中ですが、大まかな粗筋は変えずに、細かい改良をなるべく沢山行うというコンセプトで執筆しています。
アニメ版のウォルコット中佐を出していたり、ちとせの登場が早かったり（本来は、二作目から）などです。

第四話

（トランスバール皇国歴４１２年４月某日、惑星アルモス、通商護衛艦隊総司令部内）

「さて、そろそろお昼にしますか」

「ですな。ウォルコット司令」

「木村中佐は、何を食べます？」

「雷鳴軒のチャーシューメンが食べたいですね。マッコリ中佐は、どうする？」

「ターバンのランチカレーも、捨て難いがね」

とある日の正午、ここ通商護衛艦隊総司令部では、初老・中年の将官・佐官トリオが、暢気にお昼ご飯の相談をしていた。

今日は、たまたまスケジュールとシフトの関係で、三人が一斉にこの場にいたためだ。

艦隊は、順調に効率良く組織を構築しながら拡大を続けており、初期に教育を行った若い幹部達にも任せられる仕事が増えたので、こうして週に二～三回は、ノンビリと昼ご飯を食べられる様になっていた。

「間を取って、風流庵にしません？」

「それって、間を取ってますか？　私は、天ザルうどんとミニ親子丼で」

「私は、鴨セイロとミニカツ丼で」

どこをどう取ると、間を取っている事になるのか理解できなかったが、ウォルコット司令の意見に、木村中佐とマッコリ中佐はすぐに自分の食べたいメニューを決めてしまう。

素早い決断は、軍人としての重要なスキルでもあった。

「二人とも、まだ若いですね。私は、カレーうどんの大盛りとライス特盛にしますか。えーーーと。レイトンさんは、何を食べますか？」

通商護衛艦隊総司令部は日々拡大を続けているうえに、総合宙路警備保障（株）の本社もあったので、ここには数千人の人員に食事を提供できる各種店舗が、少し前から立て続けにオープンしていた。

他にも、彼らを見込んだ商売が次々と生まれていて、それが惑星アルモスの実経済にも波及する。

辺境の惑星だからこそという理由も存在するが、この軍主導の公共事業政策は、実に有効的に機能していた。

「かけそばを・・・・・」

「若いのに、小食ですな。副司令」

「今月は、ピンチなんだ」

「大佐なのに、夢も希望もない話ですな。しかも、副司令は独身じゃないですか」

「そうですよ。かみさんに、僅かなお小遣いを貰って生活している

我々と違って、優雅な独身貴族生活を満喫しているはずなのに・・・・・」

年齢は若いが、既に大佐であるアキオは、マッコリ中佐や木村中佐と遜色ない給料を貰っているはずであった。

「いやね。この前、フォルテやミント達を怒らせた代償にね・・・・・」

木村中佐とマッコリ中佐の苦言?に、アキオは最近の経済事情を説明し始める。

結局、あのあと、アキオはミントに正式に謝罪し、色々と高いお祝いを贈る羽目になっていた。

そしてその他にも、なぜかフォルテ達のお願いも聞く羽目となり、それらの出費が、今月のアキオのサイフ財政を破綻寸前にまで追い込んでいたのだ。

「あの娘っ子達ですか。いやあ。初めはどうなるかと思いましたけど、実に強かになってくれて良かった良かった」

実習生時代にミルフィーユとちとせの面倒を見ていたマッコリ中佐は、彼女達の成長を心から喜んでいた。

「俺には、最悪の結果になったけどね」

「女ってのは、年を取ると次第に強かになるもんですよ」

「最近、娘さんに冷たくされているマッコリ中佐の意見は、貴重だなあ」

「別に年頃なだけで、冷たくされているわけじゃないんですけどね・・・・・」

そうこうしている内に、ウォルコット司令が注文していたお昼ご飯が届き、全員でそれを食する事にする。

「ちくしょう。給料が出たら、肉を食うぞ！」

「副司令。金持ちじゃないですか」

木村中佐の言う通りに、ギャラクシー宝クジを当てたアキオは億万長者なので、彼がここまで困窮している理由が、皆には良くわからなかった。

「星を買ったからさ」

「「「星を！」」」

アキオの意外な一言に、ウォルコット司令達は驚きの声をあげる。

「惑星（サンタン）の隣にある《ウニ》をね」

「あんな、大気もなく、トゲ状の岩しかない星をですか？」

「だから、安かったんだよ。それで、何か資源がないか試削をさせているんだ」

アキオの説明に、木村中佐は『勿体ない』という顔をしていた。

惑星（ウニ）は、表面をトゲ状の岩に囲まれた名前通りの形状をした惑星であった。

水も大気もなく、ただ岩のみで、昔（サンタン）の中央政府が資源探索を行ったのだが、確か石灰しか取れないので採算に合わないと判断されて、放置されていたはずであった。

「また珍しく、無謀な賭けを・・・・・・」

同じく、マッコリ中佐も呆れている様であった。

「そうか？　ミルフィーに、いくつかの候補の中から選ばせたんだけど・・・・・・」

「あの幸運の娘っ子にですかい？」

アキオは、この前の騒ぎの時に、なぜか追加でミルフィーユに高級フライパンを贈る羽目になっていたので、その時に、いくつかの惑星のデータを見せて選んで貰ったのだ。

「最近、流行の《無人惑星買い》さ」

《無人惑星買い》とは、治世が長く続き、人口が急速に増加した事によって不足し始めた各種資源を得るために、人が住むに適さず、かと言って惑星改造も難しい様な惑星を一個丸まる買い取り、そこを掘って資源を得る一種の賭けに近い行為であった。

資源調査の入る前の惑星を一個購入するので、これは非常にリスクを伴う。

買った星に碌な資源がなくて大損をしたり破産する者もいるし、逆に貴重な資源が沢山出て一夜にして大金持ちになる者もいる。

そういう世界であった。

アキオは、一度探査の入った星という点が気になっていたが、そもそも探査費用込みで１，０００億ギャラで買える星ともなれば、

これが限界というものであった。
通常は、もう一つ二つ桁が上の金額で売り買いされる物だからだ。

「それにだ。あんな大金を常に持っていると、自分を保てるか不安でね。正直、大金過ぎてリアリティーもないし」

「ほう。若いのに感心ですな。ご褒美に特盛ライスを半分あげましょう」

「では、私は、ミニ親子丼のライスを少々」

「ミニカツ丼のタレご飯を少々」

「いや・・・・・。そんな炭水化物ばかり・・・・・」

今日のアキオのお昼ご飯は、かけそばと貰ったライスのみであった。
だが、その日の午後に、アキオは嬉しい知らせを受け取る事となる。
何と、あの惑星(ウニ)に、大量の資源の埋蔵が確認されたのだ。

『どうやら、前回の探査団は、厚い石灰の層に騙されたらしいですね。その下に、金・銀・プラチナ・ダイヤ・各種レアメタルの埋蔵を確認しました。量もハンパじゃないですね。ここら辺で、最大かもしれません』

『そりゃあ、凄いな』

アキオは、ミルフィーユにいくつかの惑星の資料を見せた時に、
『この惑星、ウニみたいですね。これが良いかも』と適当に答えて

いた彼女に感謝していた。

『付きましては、引き続き我が社に、掘削事業の依頼を・・・・・・』

『先の条件をちゃんと守れるのならな』

『はい。それは、もう間違いなく』

アキオは、掘削を委任する業者にいくつかの条件を出していた。

それは、掘削を行う際の人員を、サンタンで募集する事などであった。

あそこの中央政府が、一旦探索して何もなかった事になっている惑星が、究極のドル箱だったのだ。

何か因縁を付けられる可能性も否定できなかったし、それを避ける意味での現地雇用策であった。

それに、軍人で公人としてのアキオの立場から出たものでもあった。

雇用を増やし、社会不安を減少させ、法人税などの各種税収でサンタンの中央政府の基盤を強化させて、第2方面軍の仕事をやり易くする。

その他にも、アキオは業者側に、サンタンに金属加工コンビナートと、鉱石の受け入れ・金属の積み出し専用の宇宙港を建設する事を提案した。

『ですが、資金の方が、心許なく・・・・・・』

途中、現地の試削担当者から会社の社長に通信の相手が代わり、その社長が資金がない事をアキオに申し訳なさそうに語る。

この五十代前半の社長は、アキオが進めて来た一連の仕事で会社

を大きくする事に成功していたので、アキオを英雄視している部分があった。

それに、タイプ的にも、冒険心に豊み野心に溢れているというタイプではなく、実務能力はピカ一なのだが、自分の会社を一生懸命に守り、雇用している従業員達の生活を安定させるのが第一という守勢の達人であったので、あまり大量の借金をしたくないのが本音なのであろう。

二代目社長で変な苦労していないので、基本的には善人という部分をアキオは信用していた。

『では、こうしましょう。私が資本金を出して、新たなオーナー会社を設立します。そして、社長の会社を買い取って傘下に置きますので、あなたがそのオーナー会社の新しい雇われ社長になってください』

『宜しいのですか?』

社長は、自分に全ての実務を任せて、アキオがオーナーとしてリスクを背負う事を聞いて、思わず心配をしてしまう。

正直なところ、オーナー社長ではあったし、事業はそれなりに安定はしていたが、自身が事業規模程の収入を得ていなかった自分であったので、莫大な会社の売却代金を貰え、更に規模の大きい会社の雇われ社長の方が、旨味がある事は確実であったからだ。

『ですが、大変ですよ。惑星(ウニ)に多数の掘削基地を設置し、鉱石を惑星サンタンに効率良く運ぶ会社を設立し、サンタンに大規模な金属精錬コンビナートを設立し、鉱石の受け入れ、精錬した金属の積み出し専用の港を建設して管理する。他にも、業務は沢山あります』

『自分がオーナーでは、出来ない冒険ですからね。一生懸命にやら

せて貰います。ですが、資金の当てはありますので？』

『ええ。それは、大丈夫です』

アキオは、自信満々に答えるのであった。

『はい。いいですよ』

『いつも、悪いね』

『だって、アキオさん。私が冗談で選んだ星を、本当に買っちゃうから、申し訳なくて・・・・・・』

『・・・・・。資源があって良かった・・・・・・』

何気に大金持ちなミルフィーユは、今回も無条件に資金を貸してくれた。

どうやら、彼女も通帳に記載されている桁の大きな金額に、あまりリアリティーを感じていないらしい。

「さて、次だが・・・・・・」

アキオは、次にある人物へと初めて通信を繋いだ。

『ほう。君から連絡を入れてくるとはな』

『是非に、お頼みしたい事がありまして』

『あのドル箱を開ける資金を借りたいのかね?』

『おや、情報がお早いようで・・・・・・』

『伊達に、ブラマンシュ財閥の総帥を務めていないからな』

画面の先のダルノー・ブラマンシュは、さも当り前と言った表情をしていた。

『それで、事業計画の方はどうなのかね?』

『簡単な物ではありますが・・・・・・』

アキオは、事前に作製していた事情計画書をダルノーに送付する。

『ふむ。特に、不備は見受けられないな。さすがだな。レイトン大佐。しかし、この埋蔵量は凄いな。前回の探査団は、何をしていたのだろうな?』

計画書には、二百年掘り続けてもなくならない程の推定埋蔵量が記載されていた。

『君は、大金持ちになるな』

計画書には、資本金の割り当ても記載されていた。

惑星(ウニ)を担保に銀行から金を借り、各所から資金を集めて株式を発行する。

勿論、惑星(ウニ)と、それに関わる各企業を保有するオーナー会社の筆

頭株主は、アキオという事になっていた。

『私に、十五％も株式を持たせてくれるのか？　それに、ブラマンシュ側の役員二名の派遣を認めるのか』

『私の本業は軍人ですので。定期的に監査は行いますけど、業務に関わっている余裕は存在しません。社長は、実務派で誠実な方ですので、それを補佐する方をお願いします』

アキオは、ブラマンシュ財閥にかなりの業務を行わせる代わりに、それ相応の利益の分配を約束する。

『一蓮托生か・・・・・。良かろう。君の案に乗ろう』

最近、皇国領内では、新しい資源を有する惑星がなかなか見つかり難い状況が続き、人口増加による需要の増加などで、各種資源は値上がりを続けていた。

つまり、この新しい鉱山惑星の経営は、よほどのアホでない限り大きな利益を得る事のできる商売であったのだ。

断る方が勿体ないと、ダルノーは考えていた。

『ありがとうございます』

『しかし、アレだな。またこの娘なんだな』

ダルノーは、第三位の株主になる予定のミルフィーユの事を聞いてくる。

『彼女、私のお願いだと、景気良くお金を貸してくれますので』

『それで、素直にお金を貸すと、財産が倍々ゲームで増えるのか・・・・・。《わらしべ長者》を地で行っているんだな』

『ですね・・・・・・・』

さすがのダルノーも、ミルフィーユの幸運にはただ感心するしかなかった。

（トランスバール皇国歴４１２年４月下旬、某焼肉店にて）

「では、乾杯しましょうかね？」

「ですな。お姉さん！　ビール！　大ジョッキで！」

「俺も！」

月末の給料日直後の焼肉屋で、ウォルコット、木村、マッコリの初老・中年トリオは、次々に高い肉や大量の酒を注文していた。

「あの・・・・・・。何で、俺が年齢が倍以上のあなた達に奢らないといけないでしょうか？」

「私は、老後の資金に不安がありまして・・・・・・」

「「あんた。上官だから」」

「そうですか・・・・・・」

そして、三人の目の前には、不満で一杯のアキオの姿があった。

「あなたは、あと少しで銀河有数のお金持ちになるんですよ。ケチ臭い事は言わない事です」

ウォルコット司令の意見は、正しくはあった。

つい二週間ほど前に設立されたアキオがオーナーの会社は、完全に将来を約束されていたからだ。

結局、惑星（ウニ）は、表面のトゲの様な岩と、数百メートルの厚さがある石灰の層を剥がすと、様々な貴重な資源を含有する岩石の塊であった。

ただ、岩塊とは言っても、その大きさは惑星サンタンの数十倍であった。

各種資源の含有率も量も、銀河有数という事が判明し、一刻でも早く鉱石を掘り出そうと、雇われ社長も、かなりの資金を出したダルノーも目の色を変えているらしい。

他にも、これらの鉱石の精製を行う予定のサンタンでも、コンビナートの建設が急ピッチで進んでいた。

中央政府は、何もしないでも失業率を下げられて支持率を上げられ、税収も増えるので、特に文句はないらしい。

実は、惑星自体があまりに貧しかったので、自力で開発を行う余裕がなかったらしいのだ。

「でも、実際に鉱石を掘り出して、精製して金属にしないと金になりません。だから、俺は貧乏なんですけどね・・・・・」

所持するオーナー会社の株式は、毎日株価が値上がりしているらしいが、アキオは大して現金を持っていなかった。
全て、会社の運転資金として使ってしまったからだ。

「まあ。それは、時間が解決しますよ。副司令殿。お姉ちゃん！　カルビ六人前追加！」

それでも、マッコリ中佐は容赦なく肉の追加注文をかけていく。

「マッコリ中佐。俺をまた、かけそば生活に戻すつもりかい？」

「またライスをあげますよ」

「炭水化物のお礼が肉？　何かがおかしい・・・・・」

目の前で、貪るように肉を喰らうマッコリ中佐と木村中佐を見て、アキオは、中年家族あり中間管理職の悲哀を肌で感じていた。

「それとも、お礼にうちの娘でも嫁にしますか？」

「マッコリ中佐の娘って、何歳だったっけ？」

「十一歳です」

「犯罪じゃない」

マッコリ中佐のあまりに露骨な玉の輿作戦に、アキオは呆れるしかなかった。

「ちくしょう！　うちは息子しかいない！」

「やーーーい！　木村中佐。ざまあ！」

「十一歳じゃあ、結婚できないじゃないか！」

「婚約。婚約」

「本人の意思は！」

「レイトン大佐なら、大歓迎だってさ」

「良い男は、やっぱり得じゃねえか！」

「俺も、それを思った！」

肉を奪い合うように食いながら、木村中佐とマッコリ中佐は、レベルの低い口喧嘩を続けていた。

だが、この忙しくも楽しい日々は、この日をもって一旦終了となる。

トランスバール皇国に、とある脅威が近付いていた。

（翌日、第1方面軍管轄、惑星トリニティー周辺宙域）

「クロノ・ドライブゲートの状況は、至って静かなり。本日も異常なしと・・・・・・」

第1方面軍でも、有数の経済規模を誇る惑星トリニィテー近くの宙域は、常に安定していてデブリ等も少なかったので、クロノ・ドライブ（ワープ航法）の有数のスポットとして有名であった。

このクロノ・ドライブは、クロノスペースというワープ空間に侵入する事によって発動するのだが、クロノスペースは通常宇宙と重なる様に存在しているので、星間物質との衝突の危険を常に孕んでいた。

なので、ここには常に船舶の動きを観察する、無人・有人大型灯台や軍の艦艇が張り付いていた。

「定時報告の文面に変化なしですな。艦長」

「あっては困るのだがな。副長」

第1方面軍艦隊に所属する駆逐艦（タチバナ）の艦内では、艦長と初めとするクルー達が懸命に退屈と格闘をしている最中であった。

首都星トランスバールを含む、皇国領の中心部に存在する第1方面軍の管理宙域は、内戦や反動組織などがいる辺境とは違って、訓練時以外はほとんど暇という事が多かったからだ。

「五年前のエオニア廃太子の追放以来ですか。ここも、無事平穏で・・・・・」

「おいおい。エオニア様の事は、人前では禁句だぞ」

皇国において、最大の禁句とされる単語を口にした副長を艦長が

嗜める。
だが、五年前に発生したエオニア元皇太子による反乱行為は、その被害が少なかった事もあり、かなりの軍人や市民に同情的に見られていた。
元々血統から言えば、皇帝の座を簒奪したのは、現皇王のジェラール・トランスバール自身であったからだ。
ただ、それを公の場で口にする事は、その人物の人生を終わりにする行為であったが・・・・・・。

「しかし、本当に暇だな」

「ええ。通る船は、普通の輸送船ばかりで・・・・・・えっ！」

「どうした？」

「多数の大型艦艇が、大量にドライブアウトして来ます！」

レーダー担当の士官が、過去にない多数の大艦隊レベルの反応に大きな声を出す。

「何だ！　この数の艦艇は・・・・・・」

ブリッジ正面のレーダースクリーンには、多数の数え切れない程の光点が示され、その数は更に増大中であった。

「戦艦レベルの反応が多数！　第１方面軍艦隊全数を越える数です！」

「そんな！　どこの艦隊なんだ！」

駆逐艦（タチバナ）の艦長は、結局それを知る事はできなかった。
なぜなら、一番最初にワープアウトして来た高速戦艦の主砲によって、一撃で宇宙のチリに代えられてしまったからだ。
そして、副長は、自分が同情していた人物によって自身の命を奪われた事に、永遠に気が付く事はなかった。

「何ぃ！　謎の大規模の艦隊が、ここを目指していると？」

「はい。宙路上の無人砲台や、防御衛星を破壊しながら、ゆっくりと、静かに陣形を整えながらです」

ここ首都星トランスバール内にあるトランスバール皇国軍総司令部では、突如反応が消失した駆逐艦（タチバナ）に関する調査を始めた矢先に、そのタチバナを撃沈した大艦隊の存在を知る事となる。

「それで、敵艦隊の数は？」

「近衛艦隊と第1方面軍艦隊の全てを合わせた数の三倍です」

「それで、敵の戦力内容は？」

「実は、無人偵察機が、こんな映像を・・・・・」

情報参謀が差し出した敵艦隊の写真を見て、トランスバール皇国軍最高司令長官ハッセル・オイゲン大将は、驚愕の表情をする。

「色は黒いが、スパード級駆逐艦とバーメル級巡洋艦とザーフ級戦艦に見えるな・・・・・・」

「はい。多少の改造を施されているみたいですが・・・・・・」

オイゲン大将は、一枚の写真で絶望の淵に立たされる。
数で負けているなら、せめて質でという願いが全て打ち砕かれてしまったからだ。

「あの・・・・・・。ここは、一旦、退却を・・・・・・」

「どこに逃げると言うのかね?」

オイゲン大将は、物凄い表情で情報参謀を睨みつける。
だが、冷静な参謀はその表情に屈せず、自分の意見を述べた。

「ですから、一旦、他所の星系に退き、戦力を集めて再戦を・・・・・・」

「君の意見は、他の方面軍でなら有効であろうな。だが、皇都のある首都星トランスバールを守る第1方面軍では、通用しない。例え、勝ち目がなくても皇王の命がある限り、死地に赴くのが我らの務めだからだ。それに、あの近衛艦隊を率いる猪には通用すまい」

オイゲン大将の脳裏に、近衛艦隊を率いる皇王ジェラールの実弟でもあるザックス・トランスバール大将の無意味に豪快な笑顔が浮かんでくる。

猪突猛進・精神論最大重視の、皇族だから大将に昇進できたと揶揄される彼に、撤退の二文字は絶対に通用しないであろう。

「とにかく、第1方面軍・近衛の艦隊を全て最終防衛ラインに集結させろ。私は、宮中に参内してくる」

オイゲン大将は、部下達に迎撃の準備を命令すると、宮中へと車を走らせた。

「トランスバール皇国軍最高司令長官オイゲン大将のおなぁーーーりぃーーー」

この緊急時に、相変わらずの古めかしい宮中の作法に半ば呆れながら、オイゲン大将が護衛の宮内兵と共に玉座に向かうと、そこでは既に、猪が自信満々に勝利の予告をジェラールにしていた。

「皇王陛下。明日には、必ず勝利の報をもたらしましょう」

「それが、出来れば良いのですが・・・・・」

「うぬぬぅーーー！　臆したか！　オイゲン！」

自分の話に釘を刺されて激怒したザックス大将が、オイゲン大将を臆病者呼ばわりする。

「オイゲンよ。それ程に厳しいのか？」

「はい。数・質共に我らの劣勢ゆえに」

下級貴族出身で相当の苦労人であるオイゲン大将は、相手が皇王

でも、決して自分の意見を曲げなかった。

「そうか。勝てぬか・・・・・・」

「我が近衛艦隊は、腰抜けの第１方面軍艦隊とは違う！　あんな市民風情の指揮する弱腰艦隊とはな！」

オイゲン大将は、ザックス大将の何の根拠もない精神論と、市民階級出身者として初の第１方面軍艦隊司令となったホップス中将への侮蔑の言葉に露骨に眉を潜める。

「誰が指揮しようとも同じ事です。ランチェスターの法則を理解出来ているのであれば・・・・・・」

「兵の質が違う！　我が軍は、精鋭だぞ！」

「ここ数十年。ほぼ実戦経験が皆無の我が軍ですからな。向こうの艦隊を誰が率いているのかわからない以上・・・・・・」

オイゲン大将の言葉が終わらない内に、突然王宮に設置されたメインモニターに一人の男が映し出される。

「やはりな・・・・・・。エオニアか・・・・・・」

ジェラールは、敵艦隊の戦力を聞いてそれなりに想像していたらしい。

画面に映った自分の甥の顔を見ても、顔色一つ変えなかった。

「簒奪者ジェラールよ。覚悟は出来たのかな？」

画面に写った男は、五年前の反乱で辺境に追放されたエオニア・トランスバール廃太子その人であった。

「貴様ぁーーー！　本来ならば処刑されるべきところを、追放で許してくれた陛下の恩を忘れおってぇーーー！」

エオニアのもう一人の叔父であるザックス大将は、顔を紅潮させながら画面の向こうのエオニアに吼えていた。

だが、エオニアは、相変わらず余裕の表情を変えなかった。

「臭いな・・・・・」

「何だぁ？」

「臭い。前進するしか能のない汚い獣の臭いがする。どうやら、臭いはお前から出ているらしい」

エオニアは、自分のもう一人の叔父をまるで汚い動物でも見るかの様に見下していた。

「エオニアぁーーー！　貴様ぁーーー！」

「獣の言葉など、余は解せぬな」

「殺してやる！」

侮辱されたザックス大将は、皇王への挨拶すら忘れるほど激高し、駆け足で宇宙港へと駆け出した。

「あんな男が、近衛艦隊司令？　縁故人事も程々にしないとな。ジ

エラール」

「お前に、そんな事を言われる覚えはないな」

「逃げ出さないのかね？」

「余を見くびっているのか？」

「では、残り十数時間の人生を楽しむが良い」

エオニアがそこまで言うと、画面はプッツリと切れてしまった。

「陛下。やはり、ここは一度・・・・・・」

オイゲン大将は、ジェラールに首都星トランスバールからの脱出を進言する。

やはり、戦力差から考えて、ここは一度退くのが正しい判断であったからだ。

「決戦は、何時間後だ？」

「四時間ほどで、開始予定です」

「無理だな」

「ですが、万が一の可能性に・・・・・・」

「トランスバール皇国皇王がネズミのように逃げ回り、最後に小型宇宙船で生を終える？　そんな醜態を見せたくはないな。ここで、卿らの吉報を待っていよう」

「陛下の期待に答えましょう」

だが、オイゲン大将もジェラールも、自分の死はもはや避けられない事を自覚していた。

「ところで、白き月の事なのだが・・・・・・」

「ルフト准将ですか？」

オイゲン大将は、白き月の防衛司令官を務めているルフト・ヴァイツェンの顔を思い出す。

「そうだ。ルフトだ。実は、彼に伝言を頼みたい。口が堅く、優れた殺すに惜しい若者はいるかね？」

「はい。おります」

「では、その人物を、我が伝言と共に白き月へ」

ジェラールは、最後にそう締めくくるのであった。

「エリオス・シードル中尉はいるかね？」

「はい。オイゲン閣下。私は、ここに」

トランスバール皇国軍本部のある高層ビルに戻ったオイゲン大将は、自分の複数いる副官や従兵の中から、一人の若い将校を呼び出した。

「色々と、忙しいところを悪いな」

「いえ。私は、閣下の副官の一人ですので・・・・・」

突如現れた大艦隊を迎撃すべく、全ての軍人が慌しく働いているなか、その手伝いをしているシードルという若い中尉も例外ではなかったからだ。

エリオス・シードル中尉は、今年で二十歳になる軍内で将来を嘱望されている若者であった。

身長は百八十センチを超え、ブラウンの髪と瞳をした貴公子と呼ぶに相応しい身なりをしていて、トランスバール中央士官学校を三番の成績で卒業していた。

年次は、アキオやタクト達の二年下である。

そして更に、シードルという姓は、皇国の重鎮であるシードル公爵家との縁を連想させる。

そう、彼はアキオの弟であり、フレスコ・シードル公爵の表向きの一人息子であった。

「実は、白き月に向かって貰いたい。それに、いくつかの伝言と辞令を渡す」

「自分が、白き月にですか?」

「そうだ。シードル大尉」

「自分は、中尉ですが・・・・・・」

「先ほど、昼の十二時に昇進したのだよ。この忙しい状況下で辞令を渡す時間がなかった」

確かに、預かった書類には、自分の大尉への昇進辞令も含まれていた。

「ルフトは、今日の十二時で少将に、明日の十二時で中将にする。他にも、そのディスクには各方面軍の軍人達の昇進辞令が多数あるから失くすなよ。後で、恨まれるぞ」

エリオスは、この状況下で冗談を言いながら笑うオイゲン大将の事を少し心配してしまう。

「大尉。『この忙しい時に、軍人の昇進人事に感けてこの人は、大丈夫か？』と顔に書いてあるぞ」

「いえ・・・・・・。自分は、その・・・・・・」

オイゲン大将に図星を突かれて、エオリスは思わず口篭ってしまう。

「だが、必要な事なのだよ」

オイゲン大将は、周りを忙しく駆け回る他の軍人達に聞こえない様に小さな声で話し始める。

「多分、明日の今頃に、ここは残っていまい。私も、原子レベルに分解されているか、軍事法廷に引き出されて銃殺が関の山だな」

「閣下っ！」

エリオスは、思わず大きな声をあげてしまい、周りで忙しく働いている他の軍人達に注目されてしまう。

「いえ・・・・・・。大きな声をあげてすいません・・・・・・」

エリオスの謝罪で、再び軍人達は自分の仕事へと戻っていく。

「らしくないな。シードル大尉。だが、君も、わかっているのであろう？　これから発生する艦隊決戦の結末を」

「・・・・・・」

これより数時間後に行われる、一部軍高官のみに伝えられたエオニア廃太子が率いる黒い艦隊と、ザップス・ホップス両提督の率いる近衛・第1方面軍合同艦隊による決戦は、よほどの奇跡でも起きない限り後者の負けが確定していたからだ。

しかも、自分達は、他の方面軍の援軍が間に合わない状況で、更に増える可能性もある敵艦隊と戦わなければならない。

どう考えても、皇国軍の負けは確定しているのだ。

「陛下は、トランスバールから・・・・・・」

「シードル大尉。陛下の皇王としての性格がそれを許さない。理解したまえ。君の父上も、それに加担しているのだぞ」

そもそも、本来エオニアが跡を継ぐはずであった皇王の座を、エオニアの父親であった前皇王の急死を利用して王位を簒奪したのは

ジェラール自身であったので、彼はあまり民衆に受けの良くない皇王であった。

それに、自身の権力基盤を強化するために、かなりの貴族を甘やかし、それが皇国の政治状況の停滞と腐敗を引き起こす要因ともなっていたので、自身はかなり有能でありながらも、『功績と汚点のみが交互にあって、凡庸な王よりも少し性質が悪い』と後に評される要因となっていた。

そして、その時に、ジェラールの皇王即位のために貴族達の支持を取り纏めたのが、当時は既に全ての公職から引退していたフレスコ・シードル公爵であり、五年前のエオニアによる反乱劇の際にも、ジェラールの命を秘かに受け、色々と裏で暗躍して彼の辺境追放にも手を貸していた。

つまり、ジェラールがここで一度退いても、また民衆の支持を得られるかどうかは、かなり微妙であったのだ。

「わかるかな？　シードル大尉。首都星トランスバールには数十億の民衆がいる。だが、軍は、彼らに避難命令を出していない。情報をも秘匿している。何しろ、船がないからな。二個艦隊の出撃準備に、民間の船まで徴発している有り様だからだ。そして、我々が負けるとどうなるのか・・・・・・。私は、エオニアの性格を良く知っているが、彼は冷徹だ。多分、ここは焼き払われるであろう。あの時に、自分の従わなかった連中に対する報復と、見せしめのためにな・・・・・・」

オイゲン大将の語る未来は、皇国の滅亡を物語っていた。

それに、脱出できる当てもないのに、謎の大艦隊の来襲を市民達に告げたとて、それは混乱を助長させ、それによる被害を増やすだけであろう。

そして、この選択をしたオイゲン大将も、自分のみが逃げ出すつもりもなく、ここで最後の時を待つのだ。

「・・・・・・・」

「私なら、近衛艦隊で敵の足を止めて、その間に他の船で一人でも多くの人を逃すかな？　シードル大尉」

「はい・・・・・・」

エリオスは、またも自分の考えをオイゲン大将に見透かされてしまう。

「私とて、一応は大将なのでな。そのくらいの案は浮かぶのさ。だが、皇国で一番の権力者は、ジェラール陛下であり、陛下は決戦をお決めになられた。だから、決戦なのだ」

「そうですか・・・・・・。ところで、皇太子様以下のご子息達は・・・・・・」

エリオスは、ジェラールが駄目でも、せめて皇太子などの他の皇族の脱出を提案する。

「それと、貴族達には、伝えていないのでしょうか？」

「共に、見苦しいそうだ。セコセコと高貴な身分の者達が、民衆を置いて逃げること自体恥だと。それに、使える者達なら、何も言わなくても生き残る手を打つだろうともな」

実はジェラールは、自分の権力基盤の強化には役に立ったが、他では足を引っ張り続けた貴族達や、凡庸な息子達にうんざりとしていた部分があった。

特に、実の弟であるザックス大将が一番嫌いで、出撃を許可したのも『早く死ね！』という部分が大きかったのだ。

ただ、無能であったが故に、兄であった先代皇王に邪険にされていた彼を、軍部での地位を餌に、自分の皇王への即位支持に回らせたのもジェラール自身であったのだが・・・・・。

そして、それとは逆に、実力で大将にまでなったオイゲン大将の事はかなり気に入っていて、彼には親族に話していない様な秘密をいくつか打ち明けていた。

「（白き月で最終艤装を行っているエルシオールが完成し、それにシヴァ皇子を乗せて脱出させるまで、せいぜい派手にカモフラージュするさ。あのボンクラ貴族達も、間抜けな皇太子も、エオニアの気を引く餌となって貰う）」

オイゲン大将は、白き月の巫女シャトヤーンとジェラールの間に生まれ、秘かに養育されていたシヴァ皇子に皇国の未来を託す事にした。

どうやら、ジェラール自身もそう考えている節があるらしい。

でなければ、せめて実の息子達の中の一人くらいは、辺境に逃すくらいの算段はしたであろうから。

「では、最後に。なぜ、私を白き月に？」

エリオスは、時間が迫っていたので、最後の質問をオイゲン大将にする。

「私は、君に期待しているのだ。それだけさ」

オイゲン大将は、父親のフレスコ・シードル程の才はないが、温和で独善的でないエリオスに、死んで欲しくはないと願っていた。

「君は、画家になりたかったらしいな」

「ええ・・・・・・」

だが、それは、貴族の家に生まれたエリオスには叶わない夢であった。

「君に、空いている時間に書いて貰った私の自画像は、良く書けていたな。私は、名ばかりの貧しい貴族の家の生まれで絵の事は良くわからないが、あれは良く描けていた。絵なら、ジジイになって退役してからも描ける。だから、生き残りたまえ」

「閣下・・・・・・」

「白き月には、他にも女性将校や下士官を多数回す。彼女達の統率も任せる」

オイゲン大将は、部下に短時間にリストアップさせた数百名の女性軍人達に、白き月への早期移動命令を出していた。

事務官・経理官・医務官・技術者・整備士・補給担当官など、既に始まる寸前の艦隊決戦には役に立たないが、これから就役するエルシールの最終偽装や、艦の稼働・維持に必要な人材となる予定の、正にライトスタッフと呼ぶべき才媛達であった。

「さあ。行きたまえ。それと、ルフトに伝えてくれ。お前が、最善と思う行動を取れば良いと・・・・・・」

オイゲン大将は、自分と士官学校の同期であったルフト司令の能力を信じていた。

士官学校の成績はルフト司令の方が上であったのに、一応は貴族であった自分は大将になれて、市民出身のルフトはいまだに准将でしかない。

多分、これが皇国を一時滅ぼす遠因なのであろうと、オイゲン大将は思っていた。

「エリオス・シードル大尉。白き月へと向かいます」

エリオスは、こみ上げてくるものを我慢しつつ、精一杯の敬礼をしながら、中央司令室を後にする。

「まかせたぞ。シードル大尉。それと、兄に会えると良いな・・・・・」

オイゲン大将の最後の一言は、エリオスの耳には入らなかったらしい。

彼は一度も後ろを振り返らずに、白き月への移動を開始するのであった。

（四時間後、首都星トランスバール最終防衛ライン上、第１方面軍（ライト）旗艦艦内（ニング））

「いいか！　ホップス！　俺が、大将で上官なんだ！　全軍密集隊形にて、一気に敵の正面を食い破り、奥でコソコソ震えているエオニアの首を取る。この策で行くからな！」

「了解しております。ザックス閣下」

「そうだ！　市民風情のお前は、素直に私の命に従っておれば良いのだ！」

近年、エオニアの反乱事件以外大した戦闘もなく、その役割の大半が、内乱や内戦の鎮圧や海賊等の退治と、治安維持活動の方が多かったトランスバール皇国軍においても、万が一の事態に備えて作戦プランという物が作られていた。

それによると、首都星トランスバールに向けて敵の艦隊が侵攻して来た場合、この最終防衛ライン上に揃えられる限りの艦隊を用意し、近辺にある移動力の低い防衛衛星なども利用して敵の侵攻を防ぐ。

これならば、味方の1．5倍程度までの戦力ならばその意図を防げ、2倍までの戦力であれば、他方面軍艦隊の援軍まで持ちこたえる事が可能である。

そういう事になっていたので、ホップス中将は、例え先の3倍の戦力から、追加の偵察情報によって4倍にまで戦力比が増えてしまった敵艦隊と言えど、先の作戦案で行けば、援軍到来までの時間を稼ぎ切れる可能性がなくもないと考えていた。

だが、その案には一つの問題があった。

それは、近衛艦隊司令のザックスが大将であり、自分が中将でしかないという事であった。

実はオイゲン大将は、ホップスを急遽大将に昇進させる事も考えていたのだが、それでもザックス大将は先任で、上位指揮権を有する事に変わりがなかったので、諦めてしまったという裏の事情も存在していた。

そして、その上位指揮権を有するザックス大将は、市民階級出身ながらも僅か五十一歳で中将に昇進したホップス中将を、その部下

達の前で市民風情などと侮蔑し、第1方面軍艦隊の士気を落とす事に成功していた。

「しかし、何ですな。私も、貴族でありますから、こんな事は言いたくないのですが・・・・・」

第1方面軍艦隊参謀長のオイラート少将は、普通に常識人であったので、無駄に厳ついザックス大将の顔がメインスクリーンから消えた事に心から安堵し、彼の非常識さを半ば侮蔑するような口調になる。

「猪は、鍋の材料以外に使い道がないものだな」

「「「「「「はははははっ！」」」」」」

そして、典型的な船乗りであるホップス中将も、実はかなり口の悪い提督として有名であった。

表向き、ザックス大将に従順な振りをしつつも、部下達に対するリップサービスは忘れていないらしい。

《ライトニング》のブリッジ内に、多くの部下達の笑い声が響いた。

「しかし、あの猪。何を激高しているのやら・・・・・」

戦力比を考えれば、ここは時間稼ぎしか策がないのに、彼は一点突破戦法を取るらしい。

ホップス中将は、自分の上官が本当に士官学校を出たのか疑いたくなってしまう。

「皇王陛下の弟でなければ、伍長にもなれない御仁です」

「いいのか？　皇族批判は、十年以下の懲役ではなかったのか？」

「あんなカビの生えた法律・・・・・・。最後の逮捕者は、確か二百二年前だったはずです」

オイラート少将は伯爵家の次男ではあったが、軍人や政治家をキチンと能力で判断できる人物であった。

なので、無能なザックス大将を内心でバカにしていたし、市民階級出身のホップス中将を、その事で侮る様な真似もしなかった。

それどころか、尊敬もしていたのだ。

「それで、どう考える？　参謀長」

「装甲の厚い戦艦を外側に、守るべきは高速戦艦と巡洋艦、航続距離の長いタイプの駆逐艦ですな。それと、工作艦や病院船や艦隊に付随可能な輸送船を、護衛を付けて早く下げてしまいましょう」

「近衛艦隊にも進言しておくか・・・・・・」

「その位は、カノカ参謀長も察してくれるでしょう」

オイラート少将は、ザックス大将の突撃命令に逆らえない以上、第1方面軍艦隊の消耗を少しでも抑えるべきであると進言する。

それと、戦闘力自体はほとんどないが、艦隊の維持に必要な補助艦艇を無駄に失う事がない様に、策を行っておく事とする。

確かに、戦闘艦艇も重要なのだが、工作艦や病院船の方が時に最重要なのも事実だったからだ。

ただ、その事に、あのザックス大将が気が付く事は永遠にないであろう。

「ふう。参謀長が有能だと、俺の仕事がなくなるな」

「まさか。ザックス大将が、一秒でも早く戦死する事を祈り、その後、混乱した近衛艦隊を纏めてオイゲン大将の例の策を実施する下地を作るという大切な仕事があります」

「オイゲン大将も酷いよな。俺に、地獄に落ちろって言うのか」

「私も、同じ地獄ですよ」

「そうだな。同じ地獄仲間だよな」

ホップス中将は出撃前に、オイゲン大将から一通の極秘作戦指令書を受け取っていた。

それは、勝ちは見込めない以上可能な限り時間を稼ぎ、限界が来たら一隻でも一人でも多く外に逃すというものであった。

そのため、先に逃す予定の船をピックアップしておき、生き残っていたら逃す算段を付けなければならない。

それも、圧倒的に優勢な敵の攻勢下でだ。

多分、オイゲン大将は、それが可能なのはホップス中将だけと判断したのであろう。

「《タカチホ》のジンロ副司令を呼び出してくれ」

ホップスの命令により、ブリッジ正面のメインスクリーンには、突撃に向けて艦隊の隊形を整える事に謀殺されているジンロ少将が映し出される。

「ジンロ少将」

「ホップス司令。いかがなされましたか？」

男爵家の若き当主兼少将でもあるジンロは、作業の手を止めてホップス中将の方を見つめていた。

「君の指揮下にあるファラーメ級高速戦艦部隊は、最後の切り札に取っておく」

「なっ！　何でですか！　最新鋭の高速戦艦部隊を、ここで使わないでいつ使うんです！」

ファラーメ級高速戦艦は、ザーフ級戦艦の性能を全て上回るべく計画された、第二十七次主力艦隊整備計画の目玉とも呼ぶべき新造艦であった。

同型艦は、近衛艦隊にも同数配備されていて、幼稚なザックス大将は、嬉々としてその内の一隻である《トランスバール》を旗艦に任命していた。

「最終局面に使う予定なのだ。だから、それまで傷一つ付けるな」

ホップス中将は、ジンロ少将の高速戦艦部隊を辺境に逃すつもりでいた。

スピードもあるし、他の戦闘力の低い艦艇の護衛に最適だと思ったからだ。

それに、就役間近の最新鋭艦なので、有能な人材が多数配置されている。

後の戦力の建て直しには、最適だと思われた。

「イイチコ准将の第１巡洋艦戦隊の半数を、後方に下げる予定の補

給艦隊の護衛に回す。それと、艦載機を発進させた空母部隊もな。あんな物は、撃ち合いの役に立たないからな」

ジンロ少将は、この一隻でも多くの戦力が必要な時に、奇妙な行動を取るホップス中将に首を傾げていたが、すぐにその真意に気が付いてしまう。

「ホップス中将・・・・・・。了解いたしました」

ホップス中将が次々と策を講じている間に、二つの艦隊の突撃陣形への再編は進み、各種探査機器やそれを操作する担当員から大艦隊接近の報が次々に入ってくる。

「そろそろか・・・・・・。我が人生最後の決戦だ。精一杯やるさ」

ホップス中将の表情は、これまでにない程の厳しいものとなっていた。

（同時刻、正統トランスバール皇国軍（ゼル）艦隊総旗艦艦艦内）

「やはりな。所詮、猪は猪なのだ。すぐに徴発に乗って、自滅へと突き進む」

エオニア・トランスバールは、五年の月日を経て、多数の無人艦

隊と白き月と良く似た天体を引き連れて、再度首都星トランスバールへと侵攻していた。
多数の戦力を有する彼であったが、実は彼に従っている人物は意外と少数だ。
昔からの腹心で、自分が辺境に追放された際に付き添ってくれたシェリー・ブリストルを除けば、あとは利で釣った元軍人崩れや傭兵などが主体で、シェリー以外であまり信用できる様な連中は存在しなかったからだ。
それでも、これ程の戦力差があれば、自分達の勝ちは固いであろうと信じていた。

まずは、勝って首都星トランスバールを落とす。
そうすれば、自分に従う連中も出て来よう。
何しろ、自分は先代皇王の実の息子なのだから。

エオニアは、そんな事を考えていた。

「エオニア様。戦闘準備が整いました」

前線で艦隊の指揮を執っているシェリーから、報告が入ってくる。
エオニアは、彼女に一番の信を置いていた。
自分が追放される以前からの部下であり、自分の辺境追放時にも全てを捨てて付いて来てくれたからだ。
そして、彼女には左頬に切り傷があった。
過去に、ジェラールに打たれた時に付いた傷だ。
現在の医学を用いれば、その程度の傷は容易に消せるのだが、彼女はこの傷を忠誠の証として決して消そうとしなかった。
そんな彼女であるが、彼女も士官学校を優秀な成績で卒業した才媛であり、前線で闘将としても、後方で軍政を担当しても優秀であり、エオニアは、皇王の地位を回復させた後は、彼女に軍の全てを

任せる予定であった。

「それで、勝てそうか？」

エオニアは、画面の先のシェリーに勝算を問い質してみる。

「はい。ザックスは、猪ですので。それに、エオニア様の挑発で我を忘れている模様です」

ザックス大将の猪ぶりは、敵味方を問わずに有名なようであった。

「我が叔父の中に、獣がいる事は恥だな。早く紅蓮の業火に叩き込んでやれ」

「はい。ですが、副将のホップスは曲者です」

シェリーは、昔士官学校で切れ者の教官として有名であったホップス中将を決して侮らなかった。

「こちらに付いてくれれば、厚遇してやるのだがな」

「彼が、受け入れるとも思いません」

「ならば、名将に相応しい最後を与えてやれ」

「畏まりました。エオニア様」

シェリーがそう答えた瞬間に、ザップス・ホップス合同艦隊の突撃が初まり、遂に艦隊決戦がスタートする。

「臆するな！　一気に敵艦隊の防衛ラインを食い破ってエオニアを討つんだ！」

「そう都合よく行くものか・・・・・・。損害を防ぎ、生き残る事のみ考えろ。ザックスの目があるからちゃんと主砲は撃て。だが、後の事を考えて無駄遣いは避けるんだ」

二人の指揮官の命令は実に対照的であったが、それでも一つの生き物の様に纏まった艦隊は、敵無人艦隊の集中砲火に屈せずに両者の距離を縮めていく。

そして、それなりに犠牲を出しながらも、遂に敵前衛艦隊に食い付く事に成功した。

「ははははっ！　この艦隊を蹂躙するんだ！」

「一か八かの賭けなら、すぐに奥に進むべきなのに・・・・・・。やっぱりバカだな。こいつは・・・・・・」

シェリーの部下が指揮する前衛艦隊の総数は、ザックス大将の指揮する艦隊より少数であったので、次々にその数を減らしていく。

だが、その前衛艦隊を壊滅させても、中衛・後衛・予備とまだ多数の艦隊が残っていた。

しかも、エオニアの艦隊はほぼ無人で、いくら数を失っても、また生産すれば戦力を回復できる。

だが、近衛や第1方面軍艦隊の軍艦が一隻沈めば、それだけで時間と資金をかけて訓練した軍人を数百人から数千人も失う事となる。

どう考えても、分の悪い勝負であった。

「ふはははははっ！　脆い！　脆いぞ！　エオニア！」

「なるほどな。究極の人員不足を、艦の改造による性能アップと数の優位で補うのか。さすがだな。エオニア」

ホップス中将の脳裏に、冷徹な頭脳を持ち、自信に満ち溢れていた昔のエオニアの顔が浮かんで来る。

「よおし！　この艦隊は、ほぼ壊滅させた！　次に行くぞ！」

「ザックス閣下。一度、艦隊の補給と修理を行うべきかと」

「臆したか！　ホップス！　俺が司令官で、俺が突撃命令を出しているんだ！　わかっているな？」

「突撃に参加します・・・・・」

ホップス中将は、すぐに訪れるであろう破滅の時をただ待つ事しかできないでいた。

「敵の中衛艦隊に向けて突撃！」

だが、それは既に出来ない相談であった。

先の前衛艦隊を殲滅させた時に、少なくない損害を受け、レールガンの弾薬やミサイルやエネルギーも残り少なくなり、人員にも疲労の色が見え始めている。

更に、ザックス大将が目の前の小事に感けている間に、中衛艦隊を率いているシェリーがエオニアに予備艦隊の使用を具申し、それが認められた結果、傷付いたザックスとホップスの艦隊の目の前に、2倍の無傷の敵艦隊が待ち受けるという悪夢が展開されていた。

「終わったな・・・・・・」

「全軍突撃！」

既に勝ちを諦め、次の作戦の準備を進めているホップス中将を尻目に、ザックス大将は更なる無謀な突撃を開始する。

だが、2倍の数の敵艦隊による砲撃は、一方的に味方の戦力を奪うのみであった。

「戦艦撃沈（タイコロンガ）！　カクテル准将戦死！」

「第2巡洋艦（マイルズ）戦隊旗艦撃沈！　オスカー准将戦死！」

「近衛艦隊副司令ウィード少将戦死しました」

次々と入る絶望的な報告に、《トランスバール》のブリッジ内部はお通夜の様な空気に包まれた。

「カノカ！　どうなっておるのだ！」

ザックス大将は、参謀長のカノカに八つ当たりに近い怒鳴り声をあげる。

「攻勢限界点を超えたのです。やはり、ホップス副司令の助言通りに・・・・・・」

「あんな下賤な市民風情に！」

この最悪な状況下でも、ホップス中将を侮る発言を繰り返すザックス大将の態度に、ブリッジ内の軍人達は完全に呆れかえっていた。

「とにかくだ！　万が一の可能性にかけて最後の突撃を！」

「無理です！　お止めください！」

「やってみなければわからん！」

「敵戦艦群より、砲撃来ます！　レールガン！　直撃コースです！」

「回避だ！」

「無理です！」

索敵担当士官からの絶望的な報告の直後、既に防御フィールドのエネルギーが尽きかけていた《トランスバール》に数発のレールガンが突き刺さり、搭載していて高性能のクロノクロスエンジンを破壊してそのエネルギーを開放し、艦とそれに搭乗していた人員全てを原子レベルに分解してしまう。

結局、ザックス大将は自分の死を実感する事なく、ジェラールの血族として最初にその生を終焉させるのであった。

「近衛艦隊司令。ザックス大将が戦死！」

「そうか・・・・・・」

ザックス大将戦死の報に、ホップス中将は特に何も感じなかった。
どうせ、次は自分の番であったからだ。
だが、その人生を終える前に、どうしても成さねばならない事がある。
ただそれだけの事であった。

「全ての指揮を引き継ぐ。近衛艦隊で最上級者は？」

「第３巡洋艦戦隊のウリマス准将です」

「戦力を纏めて、防衛ライン上まで下がる様に伝えろ。それで、損害の方は？」

「既に、６割が戦闘不能だそうです」

「酷いな・・・・・・」

指揮官の薫陶宜しく、常に先頭に立って戦っていた近衛艦隊の戦力は既に壊滅状態であった。

「その後ろに俺達でも、既に三割の戦力が使えないからな。やはり、数の優位は恐ろしい」

無人艦隊の欠点として、命令伝達の遅れで、どうやっても訓練された軍人が操るよりも動きが遅くなるという欠点が存在していた。
だが、それは致命的な欠点とは言えず、やはり数の優位は絶対的なものとなっていた。

「戦艦を中心とした部隊で、敵の足を止めて後方で戦力を再編成する時間を稼ぐ。オイラト准将！」

「はい。御用でしょうか？」

《ライトニング》のメインスクリーンに、隻眼の四十歳くらいの軍人の顔が映し出される。
戦艦部隊を指揮する《隻眼の猛将》と呼ばれるオイラト准将であった。

「悪いが、先に死んでくれ」

ホップス中将は、付き合いの長いオイラト准将に簡潔に一言だけそう言った。

「いかほど稼げば宜しいので？」

「一時間だ」

「あの世で、一杯奢ってくださいよ」

「散財を、後で後悔するほど飲ませてやる」

「では、それを楽しみに」

オイラト准将は、比較的損傷の軽い戦艦部隊を率いて、シェリーの艦隊に立ち塞がった。

「岩塊や、撃沈された艦の残骸を上手く利用しろ！　一時間だ！軽く十倍以上の数がいるが、時間限定だからな」

結局、オイラト准将はホップス中将との約束を守り、六十三分間の時間を稼ぐ事に成功したが、その直後に自身の旗艦ごと壮絶な戦死を遂げるのであった。

「勝ち目がないのに、時間稼ぎか・・・・・」

「ですが、厄介な事になりました。ザックスを早めに殺してしまった私の失敗です」

オイラト准将の献身的な犠牲によって、後方で迎撃準備を整える事に成功したホップス中将は、本来の作戦通りに防御衛星と連動した防衛戦術を行おうとしていた。

だが、その中には一部の例外も存在していた。

「ジンロ少将。先に後方に下げた、艦載機がカラの空母部隊と補給部隊、それと一部巡洋艦と駆逐艦の部隊を引き連れて逃げろ。ああ。それと、近衛艦隊の残存二隻のファラーメ級高速戦艦も連れて行け」

「この一隻の戦力でも欲しい時にですか？」

スクリーンに映ったジンロ少将は、少し呆れた様な顔をしていた。

「多少戦力が増えたとて、結果は変わらん。だから、俺は明日の芽を残しておく事にする。ちなみに、これはオイゲン大将も承知というか、彼の命令なのだ」

ホップス中将は、オイゲン大将の命令で動いていた。

逃せる艦や軍人を、一隻でも一人でも多く。

これが命令であった。

なので、ホップス中将が使えると判断した人物や、艦艇を優先している。

空母の艦載機は、無人艦隊の放つ無人戦闘機によって壊滅状態であったが、辛うじて逃げ延びた少数のエースパイロットと、養成が非常に困難な空母の乗り組員を守るために、他にも、医務系の軍人が多数乗っている病院船や、艦を戦場で修理可能な工作艦とその人員、艦隊に随伴可能な高速輸送船など、後に絶対に必要となったり不足すると判断される艦艇やその乗員を優先していた。

「ホップス司令は、逃げませんので？」

「オイゲン大将も、動かせるだけの船を動かして秘かに貴族達にバレない様に、軍人や官僚を家族ごと逃しているらしい。だが、市民達はまだ何も知らない。わかるか？　彼らは税金を納め、皇国を支えてくれているのに、彼らを明日の国のために裏切るのだぞ。俺も、使える使えないだけで、一緒にここで生死を共にした連中をより分けたのだ。俺がおめおめと逃げ延びてどうなる？」

「ですが、ホップス中将ほどの逸材は・・・・・」

本来ならば最高司令長官になり、元帥号を授与されてもおかしくないほどの実力者であるホップス中将を、ジンロ少将は心から死なせるには惜しいと考えていた。

「なあに。俺も、五十歳過ぎのジジイだからな。明日の皇国は、若い人材に任せるとするさ」

「しかし、そんな連中は・・・・・・」

「いるな」

「誰なんです？」

「四年前のあの日。俺は、中央士官学校に特別講師として呼ばれていた」

ホップス中将の脳裏に、その日の事が浮かんでくる。

「人物が三人いたよ。カミソリの様に切れる主席の天才レスター・クールダラスと、才気で溢れていた次席のアキオ・レイトンをな・・・・・」

「確かに、彼らの評価は非常に高い。ですが、あと一人は？」

「タクト・マイヤーズだ」

「えっ！　あの女にだらしないマイヤーズ家の三男ですか？」

ジンロ少将は、タクトが士官学校の成績があまり良くない事を良

く知っていた。
　それに、貴族なので大佐になった事は知っていたが、あまり有能とは思えなかったのだ。

「前の二人は、才気が走り過ぎているからな。トップになるには難しい人物なのだよ。だが、マイヤーズは違う。奴には、生まれ付き将器とカリスマがある。これは、どんなに勉強しても訓練しても身に付くものではない。レイトンとレスターを、同時にちゃんと使いこなせるのは奴だけだろうな」

「そうなのですか？」

「死ぬ前の最後の予言だよ。当たっていたら、俺を賞賛してくれ。《ホップスの人物眼は、確かであった》とな」

「閣下・・・・・・」

「妻は去年に病死した。娘は、第2方面軍管轄化にある惑星に嫁いだ。息子は、第3方面軍で任務中だ。未練はないよ・・・・・・。さあ！　行け！　ジンロ少将！」

「最後に抵抗する小蝿の様なものだ。蹴散らせ！」

「最後の意地を見せてやる！　一隻でも多く道連れだ！」

シェリーは、時間を節約するために多数の戦力を一気に投入し、ホップス中将は既に最初の四分の一にまで減った戦力で命を掛けた抵抗を行う。
次々に、敵味方の艦が爆発し、多くのトランスバール皇国軍人達の命を奪っていく。

「あの敵に抜かれた防御衛星を自爆させろ！　巨大な地雷みたいなものだ」

ホップス中将の命により、損傷過多で武装が使えなくなった防御衛星が爆破される。
すると、その爆発は多くのシェリー指揮の軍艦を道連れにする。

「やるな！　教官殿！　だが、もはや衛星は残っておるまい！」

そして、四時間後、《ライトニング》以下僅か五隻となった艦隊は、絶対的多数の敵艦隊に包囲されていた。

「オイラート参謀長。《ライトニング》で、使えそうな武装はあるのかな？」

「いえ。一部の近接ミサイルのみです」

「艦をぶつければ、一隻くらい道連れにできるかな？」

「そいつは、豪気な事ですな」

この絶望的な戦況下にも関わらず、ホップス中将は余裕の笑顔を見せていた。
すると、メインスクリーンに意外な人物が映し出される。

「ホップス。最後の情けだ。我が軍門に下れ」

それは、この無人艦隊を指揮するエオニア・トランスバール本人であった。

「反逆者が、何の用事だ？　早く殺せ」

「相変わらずの口の悪さよ。あの猪のザックスと、この期に及んで、周りに気を使って奴に艦隊の指揮権を与えたジェラールに何の未練がある？」

「そういう問題ではないのだよ。俺はトランスバール皇国の軍人で、ジェラール陛下の命に従う義務があるのだ。だからこそ、給料が貰えるのだ」

「給料だと？　我が方に属すれば、そんなものはいくらでも・・・・・」

「俺は、まだトランスバール皇国軍に辞表を出していないから、受け入れられないな。二重軍籍は、慎まねばなるまい」

ホップス中将は、あくまでもエオニアの軍門に下る事を拒絶する。

「正統な王権を持つ余に組する事に、そこまで逆らう貴様の意図が理解できぬよ」

「お前が、正当な皇王とやらになるために何人の人が死んだ？　この惨状を、お前はどう考えるのだ？　確かに、お前は優秀だ。だが、人の心が理解できていない。何でも力押しで行けば、愚かな群衆は

英邁な自分に付いて来ると誤解している。だから、俺は、お前を正当な王とは認められない。例え、ここで朽ち果ててもな！」

ホップス中将は、命をかけてエオニアの行動を全否定した。

「そこまで言うからには、覚悟はできているのであろうな？」

「ふん！　本性を出したな。本当は、小心者の癖に！　俺は予言する！　お前は、一年と経たずに宇宙のチリとなる！　この俺と同様にな！」

「ホップスを殺せ！」

エオニアが砲撃を命令する前に、既に《ライトニング》は、最寄の艦隊に向けて最後の突撃を開始していた。

そして、多数の艦隊で少数の艦を取り囲んでいた事も仇となっていた。

同士討ちを避けるために砲の数を限定していたので、なかなか《ライトニング》に致命傷を与えられなかったのだ。

それと、残存していた一隻の巡洋艦と三隻の駆逐艦が、身代わりとなって砲撃を受けて次々と爆発していって、最後の時間を稼ぐ事に成功し、遂に《ライトニング》は、最寄の戦艦への突撃に成功した。

「簒奪者エオニア！　地獄で先に待っているからな！」

《ライトニング》は、目標にしていた戦艦とその隣の巡洋艦を巻き添えに大爆発を起こして沈没していった。

「余の情けを否定しおって！　全軍。進軍開始！　もう我らを阻む

者はいない！　ジェラールを討つのだ！」

「ジンロ少将。最終防衛ライン上の、最後の味方艦の反応が消えました」

ホップス中将の命を受け、辺境の第2方面への逃走を開始したジンロ少将は、索敵担当の士官から味方艦隊の全滅を告げられた。

「そうか・・・・・・。みんな。ホップス中将達に黙祷を・・・・・・」

多くの負傷者や、限界ギリギリまで沈んだ船を脱出した軍人達を乗せ、慌しい雰囲気に包まれた逃走艦隊であったが、彼らは一斉に黙祷を開始する。

「・・・・・・。エオニア！　お前など、既に皇族でも何でもない。この宇宙から消える瞬間まで、地べたに這いつくばっても俺は諦めないからな！」

ジンロ少将は、エオニア抹殺を誓いながら目に涙を浮かべていた。

「邪魔な物は、全て焼き払え」

かなりの数を減らしてしまったが、エオニアの率いる無人艦隊は、遂に首都星トランスバール衛星軌道上に達していた。

そして、エオニアの無慈悲な命令により、衛星軌道上の全ての施設や衛星が破壊され、戦艦群のビーム砲により皇都は一瞬の内に焼き払われ、それにより何の罪もない多くの民衆達が焼き払われていく。

それは、自分に従わなかったこと自体が罪とでも言わんばかりの、エオニアの虐殺劇であった。

「簒奪者め！　同族殺しめ！　永遠に呪われるが良いわ！」

ジェラールは、王城の玉座の間でエオニアを呪いながら死んで行く。

「お前の選択は、誤りだ。後で、自分の失策を後悔するが良い」

オイゲン大将も、軍本部の中央司令室内で、エオニアのミスを笑いながら死んで行く。

「後は、主だった皇族と貴族を捕らえて処刑するのみだな。あんな無能な寄生虫共は、新しいトランスバール皇国には必要ない。足を引っ張るだけだからな」

エオニアは、引き続きのこの宙域の掃討作戦をシェリーに指示しながら、自分の意見を語る。

「ところで、問題の白き月なのですが・・・・・・」

肝心の白き月であったが、これは巫女であるシャトヤーンの廻らせた特殊なバリアーによって全ての攻撃を阻まれ、エオニアには完全に手が出せない状況であった。

「しかも、オイゲンめ。最後に余計な事を・・・・・・」

オイゲン大将は、ギリギリまで白き月に女性軍人や女性官僚などを独断で逃していて、そんな彼女達はエオニアに徹底抗戦を誓い、かなり組織的に動いているらしい。

ただ、その行動が具体的にどんなものなのかは、エオニアには探る事ができないでいた。

「多分、シヴァを逃す算段をしているのであろうな」

「新しい旗頭としては、最適でしょう」

それは、他の方面軍の軍人や政治家達が、辺境に逃げたシヴァを新たな皇王としてエオニアの討伐を行うという、あまり喜ばしくないシナリオであった。

「そうだな。神輿は軽い方が良い。ジーダマイヤなどは、大喜びで

あろう」

エオニアは、五年前に自分を裏切ったジーダヤイヤ大将の事を思い出した。

「あの男は、エオニア様を抹殺しなければ、自分が生き残れませんから」

「だろうな。他の方面軍の骨のある軍人なら、投降も許そう。だが、あの男を許せるほど余は寛容ではない。必ず八つ裂きにしてしまうであろうな」

「ただ一つ気になる事が・・・・・・」

「あの逃走艦隊の事か・・・・・・」

シェリーは、首都星トランスバール周辺の征圧作業を行なっている最中で、実に多くの宇宙船を拿捕していた。

それには、多くの難民が乗り込んでいたのだが、中には軍人や官僚なども紛れ込んでいた。

どうやら、辺境に逃げ込んでエオニア討伐に参加するつもりでいたらしい。

しかも、彼らはどちらかというと逃げ遅れた少数派で、艦隊決戦のケリが付く前に、オイゲンの半ば強制的な命令によって多くの軍人や官僚が取りあえずの虎口を脱出する事に成功していたらしい。

更に、ホップス中将が命を掛けて逃した艦隊の行方も気になる所だ。

「逃走艦隊は、第2方面軍との合流ルートを取っております」

「ウォッカ中将・・・いや大将か。食えない老人だからな。奴がシヴァを担ぎ上げた時は、少々厄介な事になろう」

「討伐しますか？」

「いや。まずは、この宙域の安定化が最優先だ。感情に任せて皇都を焼いてしまったからな」

エオニアの最終目標は、自分が新しいトランスバール皇国皇王として全ての領土を統治下に置き、白き月のロストテクノロジーの力を持ってして、辺境宙域の平定を行って銀河系を統一し、新しい時代を作る事であった。

なので、ただ破壊するのみでなく、領土を統治するという事も必要であった。

「ですが、人材がいません。恐れながら、皇都を焼いてしまわれたので・・・・・」

「耳が痛いな。シェリー。まあ。さしあたって従順な連中を使って統治するかしかあるまい」

いくら強大な武力を持っていても、民衆の統治に失敗して滅んだ強国は、歴史上に数多くあった。

なので、エオニアも政治は重要視していたのだが、こればかりは、無人艦隊の様に簡単に行く事ではなかった。

「優秀な人材が欲しいな」

「申し訳ありません。エオニア様」

「シェリーは、優秀な軍人だ。だから、余は非常に助かっている」

「勿体なきお言葉」

「だが、政治は別物。他に、優秀な人材が必要となる。あのボンクラ共ではないな」

エオニアの視線の端では、首都星トランスバールからの逃走を試みてシェリーに捕まった、多くの貴族達や皇族の面々が、エオニアのロボット兵士や傭兵達によって次々に処刑場に引き出されていく。

そして、裁判もなく無慈悲に次々に家族ごと銃殺されていった。

「女は、余を憎んで余を殺す子供を作る可能性がある。子供は、余を憎みながら大人になり余を殺そうとするやもしれん。一族は皆殺しだ」

「子供だけは！　子供だけは！」

「妻に罪はないはずだ！」

貴族たちの悲鳴に近い懇願を、エオニアはまるで涼風でも浴びた様な涼しげな表情で聞いていた。

だが、彼らの願いは無視され、貴族達は次々と処刑されていく。

「ほぼ終わったのかな？」

「はい」

「それで、先の話だ。実は、目を付けている人物がいる」

「誰でしょうか？」

「それはだな・・・・・・。おい！　あの男を引き出せ！」

「はっ！　ただいま！」

エオニアの命令に従い、一人の傭兵が老人を引き出してくる。

「シェリー。見覚えはあるか？」

「まさか！　シードル公爵！」

いつもの高価な服装から一転して、普通の老人が着る様な服装をしていたフレスコ・シードル公爵は、執事と二人で皇都から他の地方都市に逃げる途中、皇都制圧部隊によって捕まっていた。

「彼を登用なさるので？」

「まさかな。あと数分の命しかないくたばり損ないに用などない。それに・・・・・・」

五年前、ジェラールの相談に乗って、ジーダマイヤ大将を動かして自分を陥れる様に助言したのは、この目の前のシードル公爵であった。

寧ろ、ジーダマイヤ大将よりも許せない人物であった。

「老いたな。シードル公爵」

「とっとと処刑せぬのか？　エオニア」

今年で八十六歳になるシードル公爵は、完全にただの老人となっていたが、それでも処刑を恐れた風でもなく、エオニアには毅然とした態度を取っていた。

「お前の息子は、実に優秀じゃないか。素直に跡取りにしていれば、シードル公爵家は安泰だったのにな」

「人の家の事に口を出すな。若造が」

フレスコは、皇族とはいえ反乱者であるエオニアに一欠けらの敬意も表さなかった。

まるで、汚物でも見るような顔をしていた。

「過去の才人も、子供の事では道を誤ったらしいな。平民で孤児のメイドに生ませた子供よりも、伯爵家令嬢の正妻の生んだ子を優先か。しかも、隠された長男を抹殺するために財力と権力を利用して法まで犯す。実に大した大貴族様だ」

「うるさい！　余計な事を言わずに早く殺せ！」

「殺すさ。だがな・・・・・・。シェリー。理解できたか？」

「まさか！　アキオ・レイトンをこちらに引き込むので？」

シェリーは、エオニアが欲しいと思っている人物が、アキオ・レイトン大佐である事に気が付いた。

「そうだ。彼の生い立ちを考えるに、こいつらに義理立てをする必要はなく、こちらに付いても誰も疑問を感じないからな。それに、奴は優秀だ。それも、超の付くな」

「・・・・・・」

シェリーは、エオニアが他人を手放しで褒めた事に驚きを隠せないでいた。

「嫉妬か？　シェリー」

「いえ・・・・・・」

「余は、お前の忠誠心と能力を疑った事などない。ただ、レイトンが後方で宰相として軍政と政治の面倒を見てくれれば、お前は艦隊の指揮に専心できよう。そうすれば、もっと上手く行くのだ」

エオニアは、シェリーとアキオを軍事と政治の要の人材とする新政権構想を語った。

「彼は、政治家としては素人ですが・・・・・・」

「奴には、人を見る目がある。だから、最適な人材をすぐに見つけられるし、見つけた人材に仕事を任せられる度量もある。だから、大丈夫だ」

「ふんっ！　見事なまでのお世辞だな。エオニア」

「そうかな？　昔の年老いて耄碌する前のお前がそうだったらしいじゃないか。昔、亡くなった父上が良く言っていたぞ。しかし、今はお前の耄碌ぶりに感謝だな。おかげで、レイトンをこちらに引き込める要因ともなっている」

「だから、お前は駄目なのだ。アキオが、トランスバール皇国を裏切る？　そんな事は、奴の性格からしてありえん！」

「ほう。殺そうとしている息子に、随分と高い評価ではないか」

「だから、奴が邪魔になったのだ。俺の手を逃れて、次第に大きくなっていく奴がな！　あいつが生き残ったら、復讐心にかられて、俺の死後にエリオスを殺すやもしれん！」

自分がアキオの抹殺を図ったからこそ、自分の死後に復讐でエリオスを殺すかもしれない。

それは、老人の妄想と貴族社会の暗部がミックスした、あながち嘘とも言えない未来予想図であった。

「そんなに、あのお坊ちゃまが大事か？　多少、才は立つらしいが、血筋だけのあいつが？」

エリオスは、決して血筋だけのお坊ちゃまではなかったのだが、エオニアはあまり彼に興味がなかった。

多分、自分に捕まっていたら躊躇なく処刑したであろう。

「うるさい！　あの子は、優しい子なのだ！　それに、エリザベートとの約束を違えるわけにはいかない！」

子が出来ないのを理由に五度も妻を変えたフレスコであったが、五度目の妻との生活は、フレスコにとって人生最後の安息の日々であった。

当時、前夫を病気で亡くし、フレスコと政略で結婚する事となったエリザベートは二十歳。

一方、子供が出来ないままに、四十歳を過ぎた四度目の妻を追い

出したフレスコが六十五歳。
愛情などあり得まいと考えていたフレスコであったが、エリザベートはフレスコに献身的に妻として仕えた。
『何が欲しい？』と聞くと、遊園地に行きたいと言うので生まれて初めて遊園地に行き、一緒にソフトクリームを食べてみたりもした。
普通の人から見れば、何の変哲もないありふれた日常なのであろうが、フレスコはどんな美女を抱いた時よりも、軍内での地位を極めた時よりも、商売で成功して大金を儲けた時よりも新鮮で楽しい日々であった。
そして、一年後にエリオスが生まれ、今度は三人で普通の親子の様な日常を過ごした。

子供の頃から英才教育を受け、母を早くに亡くしていたフレスコは、父の後妻をお手伝いに毛の生えた程度のものだと思っていたので、還暦を過ぎるまで、家族というものが良く理解できていなかったのだ。
なので、それ以来、一切他の女性に手を出さなくなり、家族との時間を大切にする様になっていた。
だが、その幸せな日々は、ある日をもって終わりを告げる。
なんと、自分の半分も生きていない妻が、病気で倒れてしまったのだ。

『あなた・・・・・・。エリオスの事を、お願いします・・・・・・』

エリオスが、士官学校に入学する直前の事であった。
もはや手の施しようもなく、ベッドに横たわる妻は、消え入る様な声で、自分の息子の将来をフレスコに頼みながら死んで行った。

『（アキオ・・・・・・。悪いが、死んで貰おうか・・・・・・・）』

そして、その瞬間から、フレスコは鬼となってエリオスの将来に邪魔になるであろうアキオの抹殺を心に誓う事となる。

「事情は調べさせて貰ったが、随分と自分勝手な話だな。余の事を、よくも悪し様に言えたものだ。余は、この国の将来を憂いて行動を起こした。だが、お前のは、くだらない個人的な感情に溺れた老人の自己満足に過ぎん。しかも、変に権力を持っているだけに性質が悪い」

エオニアは、フレスコの考えや行動をバッサリと切り捨てた。

「ふん！　誰が、お前に認め貰いたくてあんな行動を取るものか！　反逆者の分際で、よその家の事に口を出すな！　この痴れ者が！」

死を前にしても、フレスコは決して己の非を認めなかった。

「レイトンも、不幸な事だな。彼には何の罪もないのに、こんな耄碌ジジイに常に命を狙われていたのだからな」

いつも冷静で冷徹なエオニアにしては珍しく、アキオへの同情の気持ちを口にする。

「が・・・・・。お前の愚かな行為によって、余は有能な人材を

手に入れられ、敵となるシードル公爵家を潰す事ができるのだからな。お前に、感謝しなければいけないな」

「何だと！　どういう事だ！」

だが、エオニアはそんなに甘い男ではなかった。

彼は、この事すら自身の勝利に利用しようとしていたのだ。

驚きの声をあげるフレスコとは対照的に、エオニアは邪な笑みを浮かべていた。

「ある人物が、余を手伝ってくるそうだ。お前にも見覚えのある人物だぞ」

「・・・・・・。コニャック！　お前がどうして！」

それは、フレスコと一緒に捕まったフレスコの執事であった。

「どうした？　長年仕えてくれた執事に裏切られてショックだったのか？」

「・・・・・・・・・・・・」

フレスコは、もう一つの秘密を抱えていた。

だが、それをエオニアには悟られたくなかったのか、エオニアの挑発にも口を閉ざしたままであった。

「余に調べ漏らしがあるとでも思ったのか？　しかし、お前も先代のシードル公爵も、救い難き外道であったらしいな」

フレスコの前で無表情で無言で立つシードル公爵家の執事である

コニャックは、今年で九十歳になる老人であった。
年を取ったので杖こそ持っていたが、腰も曲がらず、見た目では七十歳前後にしか見えなかった。

「シードル公爵家に長年務めた有能なる執事コニャック。だが、彼の真の正体は、お前の母違いの兄でもある」

「・・・・・・」

フレスコの父親であった先代シードル公爵は、息子ほどではなかったが、四十歳を過ぎるまで子供に恵まれなかった。
そして、その事に焦った彼は、当時通っていた高級クラブのホステスに手を出し、彼女はコニャックを生む事となる。
だが、その四年後に、再婚した名門出身の正妻がフレスコを生み、事態は混乱の様相を呈し始める。

「親子して、同じ事をしていれば世話はないな。フレスコよ」

「・・・・・・」

フレスコの父親は、コニャックを秘かに始末しようかと思い悩むが、寸前のところでそれを中止し、コニャックをフレスコの影として教育する事を思い立つ。
以後、彼はシードル公爵家の命で様々な教育を受け、成人後には家宰や執事として、人には見せられないシードル公爵家の暗部の仕事に関わって行く事となる。
本来、次期シードル公爵として表の道を歩む予定であった彼は、母親の血筋のせいで、弟の影として人生を歩む事となった。
シードル公爵家躍進のために、どんなに汚い事でも率先して行い、後の争いの元となると判断されて結婚もさせて貰えなかった。

逃げ出せば、殺される事は確実であったので、ただ粛々とフレスコのために仕事をするしかなかった。
無能であればまだ救いがあったのだが、彼はフレスコに劣らぬ能力を有し、そのおかげでフレスコは《才人》と呼ばれるまでになっていた。
多分、フレスコ一人では、あそこまでの偉業は達成できなかったであろう。

「旦那様」

「何をしておるか！　コニャック！　早くワシを助けるんだ！」

恐怖で足が震えるのを我慢しながら、フレスコは自分の執事にいつもの様に叱責を入れる。
今は二人の立場が完全に逆転してしまったのだが、ここで弱みを見せるわけにはいかなかった。

「旦那様・・・・・。いやさ！　フレスコ！　誰に口を聞いているんだ？」

今まで無表情であったコニャックは、満面の笑みを浮かべながら持っていた杖でフレスコに打撃を加えていく。
どうやら、杖はフレスコの油断を誘うアイテムであったらしい。
コニャックは、杖などなくても力強く立って、その杖をフレスコに振るっていた。

「長かったな！　ほぼ一世紀だ！　物心が付いてから、チャンスがあったらと、それだけで生きて来たからな！」

コニャックの杖による打撃で、フレスコの体に次々に打撲痕や傷

ができ、血が滲んでくる。

「ほらほら。まだ死ぬなよ！」

「コニャックよ。一度中止して、余に計画を教えてくれぬかな？」

「そうでした。お見苦しい所をお見せして申し訳ありません」

「いや。構わぬ。そなたの長きに渡る恨み。わからなくもない」

「勿体なきお言葉です」

フレスコを杖で打つ事を中断したコニャックは、エオニアに対しても満面の笑みを浮かべていた。

「そこにいるカスの申す通り、現状でアキオを誘っても、彼はこちらには付きますまい。そこで、私めが一石二鳥の策を考えました」

「一石二鳥のか？」

「はい。まずは、私が生き延びたエリオスに合流します。エオニア様に捕まる前に、旦那様から逃げる様に言われたというシナリオです」

「ふむ。確かに、余は皇族や貴族とその家族しか処刑しておらぬが、そなたを逃がすかと言えばノーだからな」

エオニアは貴族や皇族達を捕まえた際に、その使用人や家臣などには興味がなかったので、すぐに開放していた。

ところが、コニャックは普通の使用人や執事とはわけが違った。

生まれの秘密を除いても、エオニアに捕まって生き残れる様な人物では無かったからだ。

「そして、エリオスを新しいシードル公爵にする手続きを始めますが、そこで問題が発生するのです」

「レイトンの存在」

「左様です。彼の存在が露呈したとエリオスに報告し、ある事ない事を吹き込みます。アキオがシードル公爵家を乗っ取るためにエオニア様と内通し、フレスコが捕まる様に策を張り巡らせたと」

「なるほど。しかし、それだけでは弱いな。ウォッカとて、バカではないのだ」

エオニアは、アキオの能力を評価して可愛がっているウォッカ大将の事を決して侮らなかった。

下手をすると、自分の足を掬いかねない人物であったからだ。

「確かに、証拠もない話です。ですが、それを信じる者がいれば良いのです」

「誰が信じるのだ？」

「第３方面軍・・・・・・」

「ジーダマイヤか！」

「はい。エオニア様が、首都星トランスバールを陥した事は、すぐに辺境にも知られましょう。となれば、エオニア様討伐の兵を挙げ

るのは必至。ですが、それには実質的なリーダーが必要です」

エオニア討伐の名目上のトップは、まだ確認されていない生き延びた皇族か皇家と血縁関係にある大貴族という線もあったが、実質上のリーダーとなれば、二人の候補があげられる。

それは、第2方面軍司令であるウォッカ大将と、第3方面軍司令であるジーダマイヤ大将の二人であった。

「二人は、水面下で熾烈な争いを始めるでしょう。そこに、ウォッカ大将の可愛がる高級士官が、実はエオニア様と通じていたという未確認情報が入ります」

「ジーダマイヤは、信じたいであろうな。ライバルのウォッカにダメージを与えられるからな」

「上手く逮捕させて、軍事裁判に掛け、有罪にして収監させます。後は、こちらが救い出せば・・・・・・」

「レイトンの事だ。シナリオは読んでおろう。だが、向こうに戻るわけにもいかない」

「そういう事にございます。そして、後に真実が伝わりますと・・・・・」

「あのジーダマイヤの事だ。エリオスに罪を被せるであろうな」

「この非常事態です。良くて降格、悪ければお取り潰しもありえる」

さすがは、フレスコに匹敵する才を持つコニャックであった。

こちらに有能な人材を引き込み、敵の足並みを乱れさせて力を落

とす事を同時に行える策を、エオニアに提示したのだから。

「それで、お前は褒美に何を望むのだ?」

「はい。一日だけシードル公爵家の当主にしていただきたい」

「それだけで良いのか?」

エオニアは、コニャックの願いがあまりにもささやかである事に疑問を感じてしまう。

「はい。そして、次の当主はアキオとするのが良いでしょう。後は、エオニア様が必要とするのであれば助言等をさせていただき、事が終わったら、リゾート惑星で余生を過ごしたく思います」

「そうか。一日の公爵位でプライドを回復させ、後はやっと訪れる安楽の日々か・・・・・・。願いを聞き遂げよう」

「感謝いたします」

「後は、シェリーに手筈を整えさせる。シェリー」

エオニアは、静かにコニャック達の話を聞いていたシェリーに新たな命令を下す。

「コニャック殿よ。すぐに、出発の準備を・・・・・・」

「畏まりました。ですが、その前に・・・・・・」

コニャックは、完全に青ざめた表情をしているフレスコの前に再

び立つ。

「というわけだ。秘密を知ったお前を生かしておけぬな」

コニャックは、フレスコに止めを刺すべく、杖を握り直した。

「お前は！　赤ん坊の頃から一緒に生活したエリオスを！」

「エリオスぅ？　ああ。奴は優しいよな」

「ならば！」

「だがな！　あの何も知らないで、のうのうと貴公子をしている奴を顔を見ると、反吐が出るんだよ。昔から、この手で絞め殺さない様に我慢するのが辛かったぜ！」

「この外道が！」

これが、フレスコの人生最後の言葉であった。

コニャックの正確無比な杖の一撃が、フレスコの目に突き刺さり、脳髄を直撃して完全に彼の生を奪ってしまったからだ。

フレスコのために、数人の人を殺した事もあるコニャックの見事な殺人術が、最後に自分の身に降りかかってきたのは、実に皮肉な事であった。

「お前に、外道呼ばわりされる覚えはないな。不肖の弟よ」

コニャックは、無表情のまま血糊と脳の一部が付いた杖をハンカチで拭い、汚れたハンカチをフレスコの方に投げ捨てる。

「エオニア様。艦内を汚してしまって、申し訳ありません」

「ゴミは、掃除して捨てれば良いだけの事だ。気にするな」

「では、我が工作の成果に期待してくださいませ」

こうして、野心を秘めたフレスコの元執事コニャックは、エリオスと合流するために、移動を開始するのであった。

エオニアの魔の手は、アキオにも迫ろうとしていた。

第五話

（エオニアの皇都制圧から三日後、惑星アルモス、通商護衛艦隊司令部内）

「皇都が、壊滅ですか・・・・・・」

「はい。確かな情報です」

「それで、陛下は？」

「生存が確認できません」

「つまり、崩御されたと見るべきですかね？」

「でしょうね。謎の艦隊が首都星トランスバールを襲撃。近衛艦隊と第１方面軍艦隊が合同で迎撃するも、敢えなく壊滅。後に皇都が砲撃されて壊滅。陛下は崩御した模様。主だった貴族や皇族の方々の無事も確認できません」

実は、首都星トランスバールの異変にいち早く気が付いていたのは、通商護衛艦隊であった。

通商護衛艦隊は、星間ネットワークの護衛と保持が任務であったので、そこを通行する商船や輸送船と親密であり、首都星トランスバール方面から来た商船などから情報を集め易い立場にある。

初めは、大規模な演習を行うので、商船の運航を一時見合わせるという通達が軍から出され、更にその訓練に商船を徴用するというおかしな命令が出され、指定された宙域に物資や軍人を運ぶと、今度は緊急避難訓練を行うと言われて、多数の人間を運ぶ羽目になっ

たという。
そして、その数時間後に、完全に第1方面との星間ネットワークが完全に分断され、向こうの様子がわからなくなったのだ。
「謎の艦隊ですか。しかし、近衛・第1と二つの艦隊を破るとは・・・・・。どこの敵なのでしょうか？」
まだ情報が断片的で数も少なかったので、アキオの疑問を満足させる様な答えは、いかにウォルコット司令でも出せるわけがなかった。
「ミルフィーや、ちとせや、ミントは大丈夫ですかね？」
「フォルテさんは、大丈夫なのでしょうか？」
二人は、首都星トランスバール周辺にいる知人や友人達の心配をし始める。
ただ、幸いにして、白き月が攻撃を受けたという情報はまだ入っていなかった。
「色々と心配は尽きないでしょうが、その件に付きましては、ウォッカ大将からの呼び出し命令が出ています」
今、第2方面軍を含む全辺境軍は、中央司令部という頭を失い、茫然自失という状況であろうと推察されるので、取りあえずは、これからの方針を策定せねばならなかった。
多分、この呼び出しは、そのためのものであろうと思われた。
「私もですか？」

「はい。勿論です。あなたは、ここのナンバー2ですからね」

アキオは、ウォルコット司令と共に、ウォッカ大将の元に出発する準備を開始する。

「木村中佐。マッコリ中佐。デフコンレベル5の緊急事態だ。動かせる人員と船は全部動かせ。それと、これから第1方面軍の管轄宙域から逃げてくる人や船が増えると予想される。迅速な保護と誘導を頼む」

「正規艦隊の援軍は、期待できるのですか?」

木村中佐が、アキオに正規艦隊の応援が来るのかを質問する。

本来の業務と平行して先の事を行うとなると、とてもではないが人手が足りないからだ。

「それを、ウォッカ大将に掛け合うつもりだ」

「もし、断られたら?」

マッコリ中佐が疑うのも仕方のない事であった。

『正規艦隊に所属する俺達がするレベルの任務ではないな。そんな事は、あのハンパ者の通商護衛艦隊に任せてしまえ』というのが、苛烈な中央志向を持つエリート将校の一般的な意見であったからだ。

「ジーダマイヤ大将じゃあるまいし、それはありえん」

「本当ですか?」

「もし、そんな底の浅い御仁なら、俺達から切って捨てる。二人と

も、暫く現場を頼む」

「「・・・・・・。了解」」

通商護衛艦隊の任務を二人の中佐に頼んだウォルコット司令とアキオは、急いで第2方面軍司令部へと移動を開始する。

「遅いな。レイトン准将」

「色々と引継ぎがあったのですよ。ところで、准将って？」

ウォルコット司令達が、第2方面軍司令部に到着すると、既にそこには、主だった軍人達がほとんど集合していた。

そして、アキオ達が到着する前に、ウォッカ大将は独自のルートを用いて、首都星トランスバール周辺で起こった出来事を把握していたらしい。

後から来たアキオとウォルコット司令に大体の事情を説明すると、時間が惜しいとばかりに、取りあえず決まった事を説明し始める。

「どうやら、中央の連中が大量にあの世に旅立ったらしい。当然、増えた仕事に比例しても幹部を増やさなければならないので、緊急に階級を上げて対処する事にする。幸いにして、ワシの独断でもなく、金も無いので給料は据え置きなのじゃが」

「酷い話ですな。ウォッカ大将」

「ウォルコット。お前も、中将だからな」

責任のみ重くなるという事実に、ウォルコット司令はガッカリとした表情をしていた。

「トイレが大だったので、遅れました！　すいません！」

「タクトのバカが・・・・・・」

そして、その場に最後の出席者であるタクトとレスターが入ってくる。

「嘘つけ！　どうせ、どこぞの女の尻でも追い掛けていたのであろう？」

「いやぁ。本当に、クソがデカくてですね」

遅刻した上に、しょうもない言い訳を始めるタクトであったが、ウォッカ大将を始め、ほとんどの出席者達はその事に怒ってはいなかった。

皇都壊滅という、最悪の情報からスタートした会議で全員が暗くなっていたので、少し皆の気が紛れたからだ。

「汚い話じゃのう。タクト。お前も、今日から准将だからな。近辺の四つの惑星の駐留艦隊を全て統括して貰う。多分、このゴタゴタで不貞の輩がまた動き始めるだろうから、容赦なく全滅させるのじゃぞ」

ウォッカ大将は、すぐに中央奪回の兵を挙げる事はしなかった。

まずは、自分の足場を固める事を優先したのだ。

そして、この混乱時に多発するであろう、海賊の活発な行動や、反政府組織の決起、各惑星の中央政府の分離・独立運動などを抑える事を優先するらしい。

「了解です」

「うちの艦隊も、必要に応じて出す。通商護衛艦隊との連携も上手くやれよ。それとな。レスターを借りるぞ。次席参謀として、暫く々色々と過労死寸前まで動いてもらう」

「えっーーー！　レスターをですか？」

今まで、仕事を丸投げしていたレスターがいなくなる。
それは、タクトにとって悪夢に近い出来事であった。

「命令とあれば」

だが、肝心のレスターは上官の命令に忠実であった。
別に理不尽な事でもないので、特に反論する事もしないらしい。

「レスターは、タクトと違って真面目じゃからの。期待しておるぞ」

そして、ウォッカ大将の口から、レスターが大佐になった事も告げられる。

「二階級もですか？」

「ああ。いきなりだと縁起が悪いから、昨日で中佐。今日で、大佐じゃ。何とも、アバウトな人事じゃのう・・・・・・」

「自分で言いますかね・・・・・・」

「タクトは、黙っとれ！」

ウォッカ大将はタクトを怒鳴り付けるが、実はウォッカ大将はタクトの事もかなり気に入っていた。
日頃、クソジジイ呼ばわりされても、なぜか腹が立たない不思議な魅力を持つ彼の才能に気が付いていたからだ。
でなければ、タクトを准将に昇進させる事もなかったはずだ。

「レスターがおると、お前は働かないからな。そんな余裕は、今はないのじゃ。それと、ウォルコット。レイトンを借りるぞ。主席参謀として、レスター同様にコキ使ってやる」

「私も、忙しくなりますね」

「お前も、レイトンに頼り過ぎなのじゃ。それで？　どうする？　レイトン」

今までは、会議の参加者達を和ませるためにお茶目な老人を演じていたウォッカ大将の表情が、真剣そのものに変わる。

「はい。まずは、星間ネットワークの再構築を行います」

アキオは、まずは皇国領の中央が空白となってしまった星間ネットワークの再構築を提案する。
事前に用意した資料には、ドーナツ状に再構築された星間ネットワークの省略図が掲載されていた。

「第1方面軍の管轄宙域の状況が不明なので、その他の方面軍と共同で、残りの領域の混乱の沈静化を図るべきです。正直、この国が、これからどうなるのか想像もつきません。ですが、我らのサラリーの元となる税金を収めている市民達の生活の安定を第一にまずは動く。このどさくさに、火事場泥棒的な連中が出るでしょう。ある工

業惑星では、食料の輸送がストップして食料不足による混乱が発生するやも知れない。難民が大量に押し寄せて、物資不足や、治安の悪化や、衛生状況の悪化で伝染病が発生するかも。とにかく、的確に素早く対処する。それも、他の方面軍と共同でです！　ここだけ安定しても、中央の奪還は不可能です！」

アキオの説明に、他の軍人達は納得したような表情をする。

それは、アキオがウォッカ大将に、『あなたが、実行責任者となって、他の方面軍も全て束ねてしまえ』と言っている事に気が付いたからだ。

それはつまり、ウォッカ大将が実質的な軍のトップに立つ事を意味した。

急げというのは、方面軍でもう一人存在する大将であるジーダマイヤ大将を出し抜く必要があったからだ。

「まずは、民衆を安心させて、事を起こすとしても、それからという事じゃな？」

「はい。そうすれば、軍事行動時の補給に難がなくなり、民衆の世論は、我々の味方です。何事にも順番というものがあります」

「忙しくなりそうじゃの」

「あの。ウォッカ大将。一つ宜しいでしょうか？」

「何かの？　サワー准将」

一人の准将が、静かに手をあげて質問をする。

「ウォッカ大将の方針には賛成なのですが、皇都を壊滅させた敵が、

勢いに乗じて他の方面軍を攻める可能性は考慮なさらないのですか？」

「それも考えられるかの。おい。レスター。どう考える？」

ウォッカ大将は、今度はレスターに話を振る。

「長期的に見れば、可能性はあると思います。ですが、今の所は心配しないで良いと思います。なぜなら、謎の敵艦隊がした事は、二つの艦隊を全滅させて、皇都を焼いたのみだからです。戦闘終了後の敵は、継続的な補給を求めるでしょうから、それなりの宙域を占領して支配しなければなりません。ですが、それには時間が掛かるし、補給も覚束ないのに更に戦線を広げる事は、自分の首を絞めるに等しい」

レスターの理論整然とした説明に、ウォッカ大将を始めとする全ての軍人が納得したように首を縦に振っていた。

さすがは、士官学校主席の天才であった。

「それと・・・・・・。この鉱山惑星であるファラメント。大規模物流中継点である惑星アンサントとその周りのステーション群、惑星ギラントの大規模艦船修理ドックと軍需物資倉庫群、その他にも・・・・・・」

レスターは、先ほどの星間ネットワーク再構築予定図を見ながら、いくつかの拠点を指差していく。

そこは、第1方面軍管轄化にはあるが、他方面軍との境界線に近い部分にある皇国の経済・軍事上の重要拠点であった。

「抑えろというのか？　レスター」

「それが、ベストです」

「ふむ。抑えよう。シュガー前主席参謀。シュナップス前次席参謀」

「はい」

「何でしょう？」

「一部の艦艇を分けて強行偵察艦隊を創設するから、うちとの境界線にある第1方面軍管轄化の重要拠点を押さえて来い。そして、そのまま前線司令部を構築。防御を固めつつ、中央の情報を集められるだけ集める事。わかったな？」

ウォッカ大将の、老練な人の使い方であった。

アキオとレスターを主席参謀と次席参謀に引き揚げる際に発生する前任者の嫉妬を、新たな拠点司令官と参謀長のポストで押さえ込んだからだ。

しかも、二人の階級も一つずつ上がる事になっていた。

「了解しました」

「必ずや、死守いたします」

「元々、うちの物ではないのじゃ。防衛が無理そうなら、戦力を温存して引き揚げろ。オイゲンやホップスの愚行を再現する事もなかろう」

ウォッカ大将は、ジェラールの命令に逆らえず無意味な艦隊決戦を行う羽目となり、多くの軍人と艦を失ったオイゲン大将やホップ

ス中将を、公式的には非難しなければいけない立場であった。
だが、この会議に参加している軍人達は、皆知っていた。
ウォッカ大将が、士官学校の教官や校長として軍に送り出した教え子達であるオイゲン大将やホップス中将の死が、悲しいはずがなかったのだ。

「一時の屈辱に耐えても、撤退すべきであったな。バカ者共が・・・・」

「閣下・・・・・・」

「シュガー少将。逃げてくる軍艦や軍人は、確実にこちらに送り出せ。再編作業を進めれば、我々の戦力も増大しよう。それと、レイトンとレスター」

「はい」

「何でしょう?」

「他の方面軍と司令と通信をして来る。お前達の基本方針を伝えて、それに従わせるためじゃ。多分、ジーダマイヤ以外は中将だから、素直に従うであろうな」

それに、いきなり上を失い、どうしようかと思案に暮れているはずであったので、年長者で階級が上のウォッカ大将に素直に従うであろうと考えられた。

「つまり、折衝の仕事が忙しいので、現場は我々に任せると?」

「レイトン。寝てる暇などありゃせぬぞ」

ウォッカ大将は、涼しい顔をしているアキオに意地悪そうな笑みを浮かべる。

「過労死する前に、コッソリと寝ます」

「おお。そうしてくれ。レスターも頼むぞ」

「ご期待に沿える様に努力します」

「ふむ」

二人の返事を、ウォッカ大将は上機嫌な態度で聞いていた。

「いやーーー。レイトンもレスターも、大変だよな。寝ている暇もないなんて。ウォッカ大将は老人だから、そんなに寝なくて大丈夫だけど、俺達は若いからさぁ」

同じく、昇進した見返りに仕事が増えたタクトであったが、彼は相変わらずであった。

「お前も忙しくなるのじゃ！　ちゃんと仕事をせい！」

「痛ぇ！」

ウォッカ大将はタクトの頭上に拳骨を落とすが、その表情はなぜかとても楽しそうであった。

「（タクトは、本当に不思議な奴だ。あれだけの暴言を吐いても、ウォッカ大将に本気で怒られずに気に入られたままだし、結局昇進

して、大きな仕事も任されている。それに、俺自身、タクトの部下になったとしても、特に不満もないしな）」

アキオは、タクトのなかなか表面に出ない指揮官としての才能に、徐々に気が付きつつあった。

（数日前、近衛・第1方面軍艦隊全滅直前、《白き月》内部）

「エリオス・シードル大尉です。ムーンエンジェル隊の噂は、かねがね聞いていますよ」

「白き月へようこそ。歓迎いたします。シードル大尉（よりにもよって、アキオの弟なのか。しかし、彼は知っているんだろうか？それによっては・・・・・）」

オイゲン大将の最後の命を受け、白き月に到着したエリオス・シードル大尉は、宇宙船ドックの通路でムーンエンジェル隊の隊長であるフォルテの出迎えを受けていた。

実は、ここの司令であるルフトは、突如大量に赴任してきた女性軍人達の対応に追われていて、後発組のエリオスにすぐに会える状態ではなかったのだ。

そこで、ルフト司令の命を受けたフォルテが、エリオスの出迎えと案内をする事になっていた。

「ルフト司令は、ご存知の通りに、先に赴任してきた連中の対応で忙しいそうです」

「そうですか。では、シュトーレン中尉。ここの案内を、宜しくお願いします」

「ええ。自分は、ルフト司令からそう言い遣っております」

フォルテは、上官で大貴族の御曹司であるエリオスに丁寧に接していた。

なぜなら、貴族という生き物の大半は、下々の者に丁寧に扱われるのが当たり前で、扱わなければその者が無礼であると本気で思っていたからだ。

そして、適当に扱われた事を根に持ち、その事で自分に何か嫌がらせをしてくかもしれない。

考え過ぎかもしれないが、それが一兵卒から苦労をして来たフォルテの処世術であった。

だが、エリオスは、フォルテが過去に会ったどんな貴族のよりも温和で、傲慢には程遠い人物であった。

「（雰囲気は、アキオに似てるかね？　ルックスは甲乙付け難く、同じく士官学校を優秀な成績で卒業しているか・・・・・・。やっぱり、血なのかね？）」

シードル公爵家の血縁者には、まだ二人にしか会った事しかなかったが、これが四百年以上の歴史を誇る大貴族家の血の力なのかと、フォルテは考えてしまう。

「シュトーレン中尉。どうかしましたか？」

「いえ。何でもないですよ。大尉」

「ならいいのですが」

エリオスは、本当に育ちが良い様で、他の人に慇懃な態度で接するという事がないらしい。

苦労知らずと言ってしまえばそれで終わりだが、自分の親友と因縁深い関係で、それだけであまり第一印象は良くなかったのだが、フォルテが彼を嫌うのは、かなり難しい事のようであった。

フォルテは、ルフト司令のスケジュールに空きが出来るまで、白き月の内部をエリオス案内し、予定の時間にルフト司令のいる司令室の前に到着していた。

「ありがとうございます。シュトーレン中尉」

「いえ。自分は、大した事は・・・・・・」

「あの？　自分の顔に何か付いていますか？」

「いえ・・・・・・。ただ知り合いに似ていまして・・・・・・。親友なのですが・・・・・・」

「へえ。そうなのですか。では、そろそろ時間なので」

エリオスは、階級が下のフォルテに丁寧にお礼を言ってからルフト司令のいる司令室に入っていく。

「エリオス・シードル大尉。着任の挨拶に参りました」

「ご苦労。シードル中尉。じゃなかったな。大尉に昇進したそうだな」

「ルフト閣下もそうですよ」

「らしいな・・・・・・」

ルフトは、エリオスから渡された二枚の昇進辞令に目を通しながら厳しい表情を崩さなかった。

「平時に、こんな無茶な昇進などあり得ないな。ましてや、私は市民出身。シードル大尉、説明を頼む。どうやら、外が騒がしいらしいが、何があったのかね？　正直ここにいると、少し世間に疎くなる傾向があるらしい」

エリオスは、今までのいきさつをルフト司令に説明する。

「そうか・・・・・・。一回は負けるな。皇国軍は・・・・・・」

それは、ルフト司令でなくても、それなりに想像力のある人間になら誰にでもわかる未来であった。

「私も初耳なのですが、ここに皇子が秘かに匿われて養育されているらしいと・・・・・・」

シヴァ皇子の事を知っている人間は、本当に少なかった。

いくら皇国の重鎮たるシードル家の跡取りといえど、そう簡単に知りえる事ではなく、エリオスもここに来る前にオイゲン大将からそれとなく聞いたのが最初であった。

「シヴァ皇子の事だな。無論、他言はしておるまいな？」

ルフト司令は、エリオスが秘密を漏洩していた時には、彼を躊躇無く殺すつもりでいた。

家柄など、関係ないと思っていた。

「やはり、皇子を辺境に逃すおつもりで？」

「そのために、エルシオールの第二次改装と出撃準備が急ピッチで進んでいる。正直、あの女性軍人達の応援は有り難い。それでも、外側と必要最低限部分だけでの出港となろう。外部は、航行しながら進める事とする」

「一つ、疑問に思っている事があります」

「中央士官学校を優秀な成績で卒業した君にでも、わからない事があるのかね？」

「世の中は、わからない事だらけですよ。それはそうと、オイゲン大将の予言が現実のものとなれば、この宙域は謎の艦隊の、いえ、エオニアの占領下に入ってしまいます。そうなれば、エルシオールとやらの脱出などは、至難の技となりましょう」

エリオスは、父やその存在を知らない兄に比べると、少し才能が劣ると後に言われる事が多かったが、それでも、優秀な士官である事に変わりはなかった。

「それについては、私なりに策がある。だから、君は、私の副官兼エルシオールの艤装委員長代理としての任を全うして欲しい。正直、私はここの司令としての任務が忙しくてな。エルシオールに手を回

し難い状態なのだ」

ルフトは、白き月の防衛司令官、エルシオールの艤装委員長、就役後の艦長、ムーンエンジェル隊隊長、白き月に残留する人員への引き継ぎ任務と、多忙を極めていたので、実は優秀なエリオスの赴任を歓迎していた。

だが、ルフト司令には、一つ気になっている点があった。

それは、エリオスが、アキオが自分の兄である事を知っているか？という点であった。

実は、この事を知っている人間は非常に少ない。

当事者を含めても、全宇宙で百名と存在しないであろうし、知っている人間は、それを簡単に口に漏らすはずもなかったからだ。

「（父親から聞いては・・・・・。まさかな。あの妖怪が、そんな不用意な事をするはずもない）では、シヴァ皇子とシャトヤーン様に挨拶に行こう」

「了解しました」

目の前の澄んだ目をしたエリオスを見て、ルフト司令は彼が兄の存在を知らない事を確信する。

そして、二人は、シャトヤーンとシヴァ皇子に謁見した。

「ルフト将軍。優秀な部下の方が出来て良かったですね」

「はい。この老骨に任務の兼任は厳しいので、助かりました」

「エリオス・シードル大尉です」

「ルフト将軍を助けてあげてください。シードル大尉」

白き月の謁見の間で、エリオスは神々しい美しさを持つシャトヤーンを見て、一度で良いから人物画を描いてみたいなどと不埒な事を考えてしまう。

「その方が、あの妖怪の息子なのか？」

八十歳を過ぎた今でも宮廷に出入りし、過去に数度白き月を訪れた事のあるフレスコを、シヴァ皇子は子供心に妖怪の様な老人だと思っていた。

実際に、フレスコの事を妖怪扱いしている皇国の貴族や軍人は、かなりの数にのぼった。

「妖怪ですか・・・・・。言い得て妙ですね。家では、普通の優しい父なのですが・・・・・」

エリオスは、まだ十歳程にしか見えないシヴァ皇子の正直な感想に、思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「その方は、若いし顔も良い。妖怪にならない様に気を付けろよ」

「心得ておきます」

シヴァ皇子は、子供の視線でフレスコを妖怪扱いしていたが、実際にその勘は非常に優れていた。

逆に、家でのフレスコを普通の父親であると思っているエリオスの方が、認識力が不足していると言われても仕方のない事であろう。

現実として、フレスコは家でも普通の父親を演じながら、隠された実の息子を謀殺すべく、色々と策を巡らせていたからだ。

「では、我々は任務に戻りますので」

「そうですか。色々と外が騒がしい様ですが、お体を壊さぬ様に」

「シャトヤーン様には、隠し事は出来ませぬな」

「それと、シードル大尉」

「はい」

シャトヤーンは、エリオスに近付くと、その端正な顔を優しげな笑みのままで見つめ始める。

「あなたには、思わぬ運命の流転が訪れるやもしれません。ですが・・・・・。あなたに縁のある方が、救いとなって現れるでしょう」

「運命の流転ですか？」

エリオスは、顔を近付けてきたシャトヤーンにドキドキしながらも、彼女の予言めいた発言を心に深く刻み付けるのであった。

「なあ。まずくないか？　あのシードル大尉は」

「そうですね。よりにもよって、あの家の方とは・・・・・」

「本人は、優しく真面目で優秀と評判ですが、その生まれに問題があると思いますわ」

どうやら、外の状況が少しおかしいらしい。

そんな噂は立っていたが、だからといって急に多くの転属者が来た以外に大きな変化もない白き月では、いつもの様にシミュレーターでの訓練を終えたムーンエンジェル隊の面々が、レストルームでの休憩と世間話に興じていた。

だが、本日は六人のメンバーが、フォルテ・ミント・ちとせ組と、ミルフィーユ・ランファ・ヴァニラ組とに別れるという少し奇妙な現象に見舞われていた。

アキオの出生の秘密を知っている者達と、知らない者達という非常に簡単な理由ではあったが、実はこの事は、あのルフト司令ですら把握していない事実であったのだ。

そして、実はフォルテもミントもちとせも、他にその事を知っている面子がムーンエンジェル隊にいる事を把握していなかった。

だが、この中に人の心の声を読めるミントがいた事で、状況は大きく変化し、以来三人は、秘密を共有する運命共同体となっていた。

「第一印象としては、何も知らないんだろうなって事だな。貴族として帝王学は受けているらしいけど、本人は超の付く程のお人好しに見えるし」

フォルテとしては、エリオスを嫌いになる理由も存在しないので、静観という立場を取りたいらしい。

「父も、同じ事を言っていました。遅くに出来た一人息子故に、その可愛がり方が尋常でないと。多分、貴族社会の裏の汚い部分など

知りもしないのでしょう」

ミントは、少し距離を置きたいらしい。

いくら、本人が何も知らないとはいえ、それではあまりにアキオが不憫だと感じたからだ。

「ですが、大貴族家ともなれば、綺麗事では済まされない事も多いはず・・・・・・」

ちとせの疑問は、最もな事であった。

「その点が、フレスコが、親としても貴族としても少しズレている。そういう事さ」

フォルテの結論に、ミントとちとせが納得したように頷くのであった。

「ねえ。ミルフィー。あの三人は、何の話をしているのかしら?」

「珍しい組み合わせだよね。でも、私もわからないな」

自分達以外に誰もいないレストルームの端にテーブルを移動させ、顔を限界まで付き合わせてコソコソと密談をしているフォルテ達を、ランファとミルフィーユとヴァニラは、まるで不思議な物でも見るかの様に観察していた。

「ねえ。ヴァニラは、何か聞いていない？」

「いいえ・・・・・・」

ミルフィーユの質問に、ヴァニラはいつもの様に簡潔に答える。

「その内に話してくれるでしょう。でさ。聞いた？　ミルフィー。さっきフォルテさんが、新しい人をルフト司令の元に案内していたんだけどね。それが何と、シードル公爵家の跡取り息子なのよ。顔良し、背も良し、家柄良しの超エリートで、超お金持ち。本当に王子様って存在するのね」

ランファは、目にハートのマークを浮かべながらエリオスの事を楽しそうに話していた。

「あはは・・・・・。頑張ってね。ランファ」

「ミルフィーは、あの似非エリートを落としちゃいなさいよ」

「アキオさんは、似非なんかじゃないよ」

「エリオス様に比べれば、雑草みたいなものよ」

「ブゥーーーーー」

ミルフィーユが不満そうな顔をしていると、レストルーム内にルフト司令に伴われたエリオスが入室して来る。

「君達の新しい上官を紹介しておこうと思ってな」

「エリオス・シードル大尉です」

「あーーーん。やっぱり、王子様は実在したわ。初めまして、ランファ・フランボワーズ少尉です」

ランファは、再び目にハートマークを浮かべながら一番最初にエリオスに挨拶をしていた。

そして、その後にフォルテ達も普通に挨拶をする。

「ミルフィーユ・桜葉少尉です。・・・・・・。アキオさんに雰囲気が似ている・・・・・・」

二人が兄弟である事を知らないミルフィーユは、一番最後にエリオスに挨拶しながら、ふとそんな事を漏らしていた。

「あんな雑草と、エリオス様を比べないでよ」

ランファは、自分の王子様であるエリオスとアキオが似ていると発言したミルフィーユに文句を言う。

「あの。桜葉少尉。アキオさんとは、アキオ・レイトン大佐の事ですか？」

エリオスの意外な一言に、ルフト、フォルテ、ミント、ちとせは、その動揺を隠す事に懸命になってしまう。

実は、エリオスは、アキオが自分の兄である事を知っているのではと疑ってしまったからだ。

「はい！　ご存知なのですか？」

「ええ。私が、中央士官学校に入学した時に、校内でその姿をお見かけした事があります。彼は最上級生で、颯爽と廊下を歩いてしました。それだけで絵になる不思議な方でしたね。そして、卒業後の活躍で、私と歳が二つしか違わないのにもう大佐にまでなっていて、中央でも評価が高かった。『レイトンに補佐されれば、犬でも元帥号を得られよう』とね。私が、一番尊敬する軍人です。だから、そんな方と雰囲気が似ているなんて言われてしまうと、嬉し過ぎて照れてしまいますね」

「エリオス様なら、すぐに追い抜けますから」

「それは、難しいと思いますよ。フランボワーズ少尉」

「エリオス様。私の事は、ランファと呼んでくださいね」

「・・・・・・・・・」

さすがのエリオスも、ランファには少し呆れている様子であった。

「「「「・・・・・・・・・」」」」

フォルテ達やルフト司令は、何も知らないエリオスが、純粋に軍人としてのアキオを尊敬している事に、逆にやるせない気持ちになって来る。

「（シャトヤーン様の予言は、当たっていたのだ。シードル大尉の運命の流転。それは、アキオが自分の実の兄である事を知った時点で始まり、どんな結末となるのかは神のみぞ知るか・・・・・。

運命とは、実に残酷な物なのだな・・・・・・）」

ルフト司令は、皇国の崩壊が目前に迫っている今の状況からして、その日はそう遠くない事を実感するのであった。

（皇都砲撃より一週間後、第2方面軍艦隊司令部内）

「ホップス中将は、明日の芽を残すべきだと、最終決戦時の戦力を削ってまで、私達を・・・・・・」

傷付いた船や多数の負傷者を抱えた逃走艦隊を指揮していたジンロ少将は、ようやくにして目的地へと到着し、そこでウォッカ大将にホップス中将の最後の言葉を伝えていた。

「あのバカが・・・・・・。なぜ、お前も逃げ出さぬ・・・・・・」

「自分が、それをしてはいけないのだと・・・・・・」

「最後に、らしくない事をしおって・・・・・・。ジンロ中将。ご苦労だったな。少し休んだ後に、艦隊の再編を行うが良い」

「了解しました。それで、今度の事なのですが・・・・・・」

第2方面軍艦隊司令部に到着したジンロ中将が周りを見渡すと、そこはまさに戦場と言っても過言ではない喧騒に包まれていた。

多くの軍人達が、己の職責を果たすために寝る暇を惜しんで駆けずり回っていたからだ。
全人口が数百億人を超えていた国の、中枢が破壊された混乱を治めるという事の難しさを、肌で直接感じるジンロ中将であった。

「若い連中は、どいつもこいつも目に隈が出来ていますね」

「若いという事は、実に素晴らしい事じゃの」

「ところで、シュガー主席参謀とシュナップス次席参謀は？」

ジンロは、この戦場の様な司令部に、自分の同期の友人や士官学校の先輩がいない事に気が付く。

「工業惑星トレントと鉱山惑星ファラメントを抑えに行っている。今のうちの花形は、もっと若造だぞ」

ウォッカ大将の視線の先には、少し痩せこけ目の下の隈が大変な事になっているアキオとレスターが、部下達に大きな声で命令を出していた。

「だから！　いちいちこちらにお伺いなど立てるな！　難民用の物資が少ないのなら、民間用の災害備蓄分を切り崩せ！　何ぃ！　向こうの政府がゴネている？　本当に災害になったら、こっちの備蓄を利子を付けて返してやると言ってやれ！」

「何もかにも足らん！　じゃんじゃん船を回して買い付けて来い！　でもな！　絶対に輸送船団の護衛戦力をケチるなよ！　海賊やら反政府勢力やら狩っても狩っても出て来ているからな！」

レスターとアキオはいくつもの仕事を抱え、てんてこ舞いの状態であった。
だが、さすがは有能と評価の高い二人であった。
多くの仕事を溜め込まない様に、次々と効率的に正確に処理していく。

「どうじゃ。うちの双璧の実力は」

ウォッカ大将は、ジンロ中将にアキオとレスターを自慢気に紹介する。

「ホップス中将の予言は正しかった・・・・・・」

「何？　ホップスのか？」

「ええ。人物が三人いると・・・・・・」

ジンロ中将は、ホップス中将との最後の会話の内容をウォッカ大将に話し始める。

「有能だが、才が立ち過ぎてトップに向かないか・・・・・・。確かに、そうじゃの・・・・・・」

ウォッカ大将は、二人の艦隊司令部召集を一時的なものと考えていた。
それは、有能だが若過ぎる二人への、心無い者達からの理不尽な非難や中傷を避けるためであった。
組織には多くの人が所属していて、それぞれが様々な思惑で動いている。
なので、いくら二人が優秀でも、それを喜ばない人は多数存在す

る。
　ウォッカ大将は、彼らの陰湿な攻撃で若い芽が摘まれる事を良しとしなかった。
　二人は、ウォッカ大将の予想通りに優秀で将来が期待できた。きっと、三十代後半から四十代で、大きな仕事を成し遂げてくれるであろうとウォッカ大将は信じていた。

「この任も、殺人的な忙しさゆえに、若い二人にという事で調整したからの」

　艦隊司令の自分は、陸に上がって他の艦隊司令部との折衝や政治的な行動をしているので忙しく、ナンバー2である参謀長も、各地の星間ネットワークの警護や、輸送船団の護衛や、海賊の討伐、難民の保護など、今までは通商護衛艦隊に一任していた任務に忙殺されている。
　この緊急事態で、通商護衛艦隊のみでは手に余る事態が発生していたからだ。
　そして、この司令部に残された実質上のナンバー1であるアキオとナンバー2であるレスターは、政治的な業務まで抱え込んでいた。
　勿論、この辺境にも立法・行政・司法機関の地方支部があったのだが、中央を失った彼らは軍人よりも脆く、何をするにも、一々、本来ならば立場が同じはずのこちらに、お伺いを立ててくる始末であった。
　おかげで仕事の能率は良かったのだが、それは逆に皇族と貴族が優遇され過ぎていて、中央集権が進み過ぎていた皇国の欠点を露呈する事となっていた。

「今は良い。だが、誰か旗頭が存在せぬとキツイの・・・・・・」

「すいません。そんな事を考えずに、私は・・・・・・」

自分達が逃げる事で精一杯だったジンロ中将は、ウォッカ大将に申し訳なさそうに謝る。

「戦力がなければ、旗頭もただの旗で終わるからの。ホップスとお前さんの判断は正しかったのじゃ」

皇都壊滅とその後の皇族・貴族狩りによって、皇国中央の支配者層は、ほぼ壊滅したと見られている。

後に、謎の艦隊の統率者が、五年前の反乱後に辺境に追放されていたエオニア廃太子である事がわかっていたので、彼が血筋的には正統に近い皇王候補である事は明白であったのだが、彼には大きな欠点が存在していた。

それは、彼が反乱者であるという事であった。

他にも、皇都を焼いて多くの罪もない人々を虐殺した罪は重かった。

「辺境にいる皇族の遠戚と、皇族と血縁の貴族では弱いの。それに、碌な奴がおらん」

「言いますな。ご老人」

男爵家当主でもあるジンロ中将は、ウォッカ大将の毒舌に苦笑いを浮かべる。

「お前は、優秀な艦隊司令官じゃからの。市民だの貴族だの皇族だの関係なくな。だから、ホップスは、お前さんを選んだのであろう。休養後に、艦隊の再編を急ぎ行ってくれ。中将として、ワシの艦隊副司令を務めて貰う。正直、ワシは政治向きの仕事が忙しいので、

実質的にここにある全ての艦隊を任せる。通商護衛艦隊司令のウォルコットと協力して事を進めてくれ」

「まずは、混乱の収拾と戦力を蓄えるべきと？」

「うむ」

ウォッカ大将は、ジンロ中将の答えに満足しながら首を縦に振る。

「しかし、私に使いこなせますかな？　あの双璧は・・・・・・」

「そうさの。取りあえず、あの二人のいがみ合いを押さえられればの・・・・・・」

ジンロがウォッカ大将の視線の先を見ると、そこでは何時もの様にいがみ合うアキオとレスターの姿があった。

どうやら、この光景は特に珍しいものでもないらしく、他の軍人達は、彼らを無視して普通にそれぞれの仕事をしていた。

「おい！　主席参謀殿！　この書類の数字は、おかしくないか？」

「ああ。間違えてるな。ハワード大尉に直して貰ってくれ」

「仕事が速い事は認めよう。だが、小さなケアレスミスが多いぞ！」

「五月蝿いな。次席参謀殿は！　今は一秒でも急ぐ大事な時だから、多少のミスは目を瞑れよ！　俺も平時なら、ちゃんとチェックしてるよ！」

多少のミスに目を瞑り、とにかく７０％の出来で良いから多くの

仕事を進めるアキオと、仕事に完璧さを求めるレスター。
二人は、事あるごとにいがみ合っていた。
だが、これが老練なウォッカ大将の人選の妙なのか、いがみ合う二人の組み合わせは、今までにない程の成果を生み出していた。
『レスターごときに！』『レイトンなどに！』。
お互いに、人の足を引っ張る事を潔しとする性格でなかったので、相手を追い抜こうと全力で仕事を進めていたからだ。

「お前が、そういう性格をしているから、何でも玉虫色に都合よく決めて真の改革だがな！」

「そんなに改革がしたかったら、向こうの反乱軍に行けよ！　お前の大好きな、杓子定規で機械的なまでに合理的にやらせてくれるかもな！」

「何だと！　この野郎！」

「俺は、一応上官なんだぞ！」

「・・・・・・・・・大丈夫ですか？　あの二人・・・・・・・・」

「大丈夫だと思うがの・・・・・・」

ジンロ中将とウォッカ大将は、少し不安になってしまうのであった。

（皇都壊滅より二週間後、白き月内部）

「もう我慢ならない！　ルフト司令に直談判に行く！」

「あっ！　私も行きます！　今、エリオス様が司令とお話をしているんですよ」

「この。色ボケランファが・・・・・・」

「あーーーっ！　それって酷いですよ。フォルテさん」

皇都壊滅より二週間、白き月は、巫女であるシャトヤーンの張り巡らした強力なフィールドによって、完璧にガードされていた。

だが、彼女達ムーンエンジェル隊の面々は、それを直に見てしまっていた。

謎の黒い艦隊が、首都星トランスバールに容赦ない砲撃を加えて行くところを・・・・・・。

地表に一つの爆発が起こる度に、そこでは数千から数万の命が無作為に奪われて行く。

男であろうが、女であろうが、年齢も容姿も身分も関係なく、それは、平等に引かれていくクジ引きの様であった。

ただ、賞品は死であったので、あまりありがたく無かったが・・・・・。

勿論、フォルテ達は訓練途上ではあったが、一応の練度に仕上がっていた紋章機による出撃をルフト司令に直訴したのだが、彼はそれを一蹴していた。

『エルシオールも完成していない現在、五機の紋章機だけで何が出来る？　今は、悔しいであろうが、耐えるしかないのだ』

フォルテは、ルフト司令の苦悩に満ちた表情を見て、それ以上何も言えなくなってしまった。

そして、暫くして、謎の艦隊のオーナーの正体と、この宙域で起こっている出来事を知る事となる。

皇族と主だった貴族達の処刑、自分に従わない軍人・官僚・政治家・企業のオーナー・市民達の処刑。

それは、エオニアによる恐怖政治の始まりであった。

「父の所在が行方不明です。多分、もう生きてはおりますまい」

「だが、あのシードル公爵だぞ」

ルフト司令は、老いて衰えたとはいっても、決してフレスコ・シードル公爵を侮る様な事はしなかった。

なぜなら彼は、ウォッカ大将を始めとする市民階級出身者の台頭を快く思っておらず、今までに、様々な妨害工作を受けていたからだ。

「いくら何でも、相手が悪過ぎます。私は、ほぼ諦めています」

白き月の司令官室内で、ルフト司令とエオリスは現状の確認と、これからの行動についての相談を行っていた。

「そうか。辛いな。シードル大尉」

「あの歳ですから・・・・・・。寿命だと思う事とします」

エリオスは、トランスバール皇国軍人と貴族としての立場を優先して、表面上は自分の父の死に動揺していない様に見えた。だが、ルフト司令は、彼が深い悲しみにある事を知る。

「それで、これからどうするのですか？」

「エルシオールは、ほぼ完成した。だから、後はシヴァ皇子を連れて逃げ出すだけだ。幸いにして、第2方面軍の受け入れ状態は、ほぼ完璧に近いらしい」

ルフト司令は、この様な状況下においても、独自の情報網と通信網を失っていなかった。

「第2方面軍ですか。確か・・・・・・」

「ジーダマイヤ大将のライバルと目される、ウォッカ大将の管轄宙域だ。皇都壊滅以降、戦力と星間ネットワークの再構築が一番進んでいるらしい。難民や、逃走した軍人と軍艦等の受け入れも順調で、他の方面軍も彼の指示に従っているらしい。最も、それが面白くないジーダマイヤ大将は、一人で無駄に足掻いているらしいがな」

ルフト司令は、予想よりも早く体勢の立て直しが進んでいる現状

に満足しているらしい。
これなら、安心してシヴァ皇子を逃せるからだ。

「ウォッカ大将ですか。さすがですね」

「私の士官学校時代に、主任教官だったお方だ。老練な軍人なのだよ。それに、下で若い連中も積極的に使っているらしい」

ルフト司令は、ウォッカ大将が、自分の生徒達を重要な任務に使っている事までもを掴んでいた。

「では、早くに逃げ出しますか？」

「例の囮の準備は万端かね？」

「はい。見た目は、ピカピカでお召し艦に見えますよ。それに、護衛も実に豪華っぽく作ってあります」

既にエオニアの制圧下に入った、この宙域からの脱出は非常に困難に思えたのだが、ルフト司令はその事に特に不安を感じてはいないらしい。
彼は、エリオスに命じて着々と準備を進めていた。

「後は、あれが起これば・・・・・・」

「更に、多くの犠牲が出ますね」

「早くに戦力を整えてエオニアを討つしか、この犠牲を減らす方法はない。そう考えて割り切るしかあるまい」

ルフト司令が自由に使える戦力の要は、ムーンエンジェル隊が使用している紋章機とエルシオールのみであり、これだけでは、エオニアの大艦隊と互角以上に戦えるはずもなかった。
大艦隊には、大艦隊で対応する。
これが、軍事の常識であったからだ。

「「ルフト司令！」」

そこまでルフト司令が話したところで、司令官室内にルフト司令に直談判に来たフォルテ達と、連絡将校が同時に入ってくる。

「これからの事なんですが・・・・・「惑星シャンパーニュにおいて、エオニアに反抗する市民達の暴動が発生！」

「やはり、起こったか・・・・・」

「他にも、惑星フリーダム、ニース、ロッテルダム、オークスなど、多くのエオニア制圧下の惑星で発生しています。更に、一部の市民や潜伏していた軍関係者達が、封印されていた軍の倉庫を襲撃。暴動参加者達に武器を配って・・・・・」

連絡将校の報告によると、第1方面軍管轄の中央宙域にある惑星の七割で、様々な種類の妨害活動や暴動や反乱が発生しているらしい。

「何だって！」

「そんな。無理ですわ」

フォルテとミントは、それらの行動の無意味さを知り、思わず大

声をあげてしまう。

「あの・・・・・・。ルフト司令。これは、やはり？」

「ああ。烏丸少尉の思う通りで、正解だと思うよ」

圧倒的多数の艦隊を引き連れて皇国中央部を制圧したエオニアは、後のルフト達の諜報活動によって、謎の移動天体と行動を共にしている事がわかっていた。

白き月に良く似ているが、色が黒い事から黒き月と呼ばれているこの天体は、巨大な軍事要塞と兵器生産工場を兼ねているらしく、エオニアに多くの艦隊を出した打ち出の小槌の正体は、どうやらこれであったらしい。

だが、エオニアには、圧倒的に不足している物があった。

それは、政治を見る人材であった。

黒き月のおかげで大艦隊は用意できたのだが、制圧後にその地域を治める人材が極端に不足していたのだ。

更に、感情に任せてなのか？

心理的効果を狙ってなのか？

皇都を砲撃した事が、後に悪影響となって現れていた。

それは、中央官庁や軍本部にいた、多くのこの巨大な皇国を支える官僚達を一気に失ってしまった事だ。

オイゲン大将が気を利かせて先に逃した連中はこの暴挙に怒り、辺境に逃れてウォッカ大将達への協力を誓っていたのでエオニアに付こうはずもなく、エオニアに擦り寄ってきた連中はあまり能力のない小物が多かった。

つまり、オイゲン大将が逃す価値も無いと判断したために、逃げ遅れた連中であったからだ。

結果、制圧した各惑星の政治や行政・司法などのサービスは低下

し、他の惑星からの物資の輸送はストップか大幅に遅れ、それが市民達の不満を呼び、遂に暴発したのだ。

勿論、エオニアとて、その事に気が付いていないはずもなかった。だが、ない袖は振れないのも事実であったので、それらの不満を、自分が持っている圧倒的な武力で抑えるしかなかったのだ。

「ウォッカ大将達が、今懸命に行っている事をエオニアはしなかった。全ては自分が勝利してからという事なのだろうな。だが、そこに、私はエオニアの限界を感じる。大義の前の小義と考えているのであろうな・・・・・・」

現在の辺境宙域の状態は、ウォッカ大将が早くに手を打ったおかげなのか、安定に向かって進んでいた。

第1方面軍管轄宙域で、エオニアの制圧下に入っていない拠点を全て抑え、ドーナツ状の星間ネットワークを再構築して、分割した艦隊で輸送船団の護衛を行って各惑星への物資の輸送をスムーズに行い、逃げてきた難民の保護と、軍人や軍艦などの再編成も順調に進んでいるらしい。

そして、それらの実務を行っているのが、自分の生徒であったアキオとレスターであったのだ。

ルフト司令は、自分の生徒達を誇らしく思っていた。

「アキオさん。頑張っているのですね」

ちとせは、自分の想い人の近況を聞いて、少しホッとした様な表情を浮かべていた。

「お父様が珍しく気に入っている方ですので、当然と言えば当然ですけど、やっぱり凄い方なのですね」

以前より少し関係の修復したミントとダルノー親子だったので、このエオニアの反乱で財閥が被った被害の事をミントは少し心配していたのだ。

だが、アキオが、混乱した状況の回復を行っている事を知って、ミントは安心していた。

なぜなら、物事を効率良く進めるアキオであれば、自分の仕事にダルノーを協力させるであろう事が容易に想像できたからだ。

確かに、中央部での財閥の損失はかなりのものであろうが、他の辺境地域での業務で一息つけるであろうし、今は収支ギリギリの価格で業務を受け持っても、ここで貸しを作っておけば、後で十分に取り戻せるからだ。

「きっと、アキオさんがそう提案して、お父様が、内心ウキウキしながら、表面上は渋そうな顔でそれを了承するのですわ。二人とも、商売の事になるとタヌキですから」

ミントは、アキオの事を嬉しそうに語り、たまたま視線があったちとせと火花を散らし始める。

二人は、あのフォルテがアキオを土下座させた事件以降、普通に話す様になっていたし、仲もかなり良くなっていた。

ただ、アキオの件だけは例外であるらしい。

「つまり、エルシオールで辺境へと脱出するけど、今がそのチャンスというわけなんだね？」

フォルテは、ルフト司令にこれからの行動の確認を始める。

「そうだ。エオニアは、暴動の鎮圧のために艦隊を分派する事となろう」

「すると、ここの監視が薄くなるわけだね」

「そこを紋章機で撃破後、囮を含めた数個の艦隊を放つ。本命はエルシオールだが、他に・・・・・・」

「エリオス様の用意した偽装無人艦隊ですよね」

ルフト司令の言葉を遮る様にして、エリオスの隣で目にハートマークを浮かべているランファが、エリオスの仕事を彼の代わりに自慢し始める。

エリオスの白き月到着以来、ランファはエリオスこそ自分の王子様だと考え、彼に積極的にアタックを始めていた。

だが、それは逆効果だったのかもしれない。

なぜなら、エリオスは、慎ましやかな女性が好みのタイプであったからだ。

「（ランファも、好きだねえ・・・・・・）」

フォルテは、ランファを呆れた様な表情で見つめる。

アキオの弟であるエリオスに対しては、ムーンエンジェル隊の面々の反応はかなり違っていた。

上官と部下という、オフィシャルのみの関係を絶対に崩さないフォルテと、内心では少し嫌いつつもフォルテと同じ対応を取っているちとせとミント。

ミルフィーユは基本的に誰にでも優しかったので、彼をたまにお茶に誘っていて、彼自身は温和な人物であったので、二人は少し友達の様な関係になっていた。

ヴァニラは誰にでも無口であったが、ミルフィーユのお茶会に参加して、少しは話をする関係らしい。

そして、最後にランファは前述の通りであった。

「とにかくだ。六時間後の出発を予定している。総員は、急ぎ準備を行うこと」

「「「「「「了解！」」」」」」

こうして、エルシオールとムーンエンジェル隊の脱出作戦がスタートする事となる。

「ルフト司令。シヴァ皇子の事を宜しくお願いします」

「この命に代えましても」

白き月にある巨大な宇宙港では、六つの偽装艦隊を含む多くの艦艇の出発準備が進んでいた。

紋章機の訓練用の標的として渡された旧式戦艦や旧式巡洋艦や旧式駆逐艦に修理と偽装を施し、皇族を護衛している艦隊の様に見せてそれぞれをバラバラに発進させ、それと一緒に、本命のエルシオールを発進させる。

そういう計画となっていた。

そして、エルシオールに乗り込むシヴァ皇子を見送りに来ていたシャトヤーンが、ルフトにシヴァ皇子の事を丁寧にお願いしていた。

「辺境では、反撃の準備が整っています。すぐに援軍を引き連れて戻ってまいります。安心して、お待ちください」

「はい。その事につきましては心配しておりません。ですが・・・・・」

シャトヤーンの視線は、エルシオールの副長として出発準備の指揮を執っているエリオスに向けられていた。

「シードル大尉ですか？」

「あの方に、最近影を感じるのです」

「影ですか？」

「とても優しい人で、純粋な心を持っていますが、それを誰かに利用されないかと・・・・・・」

シャトヤーンの心配している事は、少し的が広くてルフト司令にはすぐには対処できそうにもなかった。

「彼は、あのシードル公爵家の跡取りですからな」

「次男なのにですか？」

シャトヤーンは、周りに聞こえない様に小声でそっとルフトに囁いた。

「シャトヤーン様！　それを、どこで？」

「お声が大きいですよ。ルフト司令」

「すいません・・・・・・。しかし・・・・・・」

シャトヤーンは、どこから聞いて来たのか、既にアキオの存在を知っていた。

「どちらも素晴らしい若者です。身分や年齢を越えて、シヴァ皇子の良き友となれるやもしれません。才はありますが、陰謀で足を掬われる事もあるでしょう。守ってあげてください」

「はい。勿論です」

ルフト司令は、決してアキオの才能をだけを評価していたわけではなかった。

アキオは、基本的には誰にでも優しかったし、十五歳にして知った己の生まれの不幸に懸命に抗い、一生懸命に生きている姿勢に感心してもいたのだ。

ルフト司令は、決して死なせたくないと考えていた。

「では、そろそろ時間ですので」

「お早い帰還を、お待ちしています」

一時間後、首都星トランスバール周辺から多数の艦隊が、各方面に向かって出撃を開始した。

勿論、その目的は、各地で発生した暴動を鎮圧するためで、その事によって更に多くの命が失われる事は確実であり、その時が、ルフト司令達の逆転劇の第一歩となった事は、運命の皮肉としかいい

ようのない出来事であった。

「シュトーレン中尉。初陣だが、大丈夫かね？」

「訓練はバッチリさ。後は、実戦は慣れだからね」

フォルテは、エルシオールの格納庫内でルフト司令の問いに平常心で答えていた。

ジャンルは違えど、戦場での経験があったので、あまり緊張していなかったのだ。

「ミルフィー。大丈夫かい？」

「はい。大丈夫です」

「ちとせは？」

「命令があれば、いつでも行けます」

「二人とも、思ったほど緊張していないんだね」

「士官学校の実習で、アキオさんのところにいましたから」

「海賊退治に同行したんです」

二人は、見習い参謀として戦艦に乗り込み、アキオが躊躇なく敵

艦を沈める命令を出すところを目撃していた。
『戦場では、敵を殺さなければ、自分が敵に殺される』。
その現実を、肌で直接経験していたのだ。

「ミント。大丈夫か？」

「はい。大丈夫ですわ」

「ヴァニラは？」

「問題ありません」

「ランファは？」

「大丈夫ですよ。フォルテさん」

後ろの三人は、一見緊張していない様に見えたが、フォルテはその声が少し震えている事に気が付いた。

「（空元気も、元気の内か・・・・・・）訓練通りにやれば良いんだ。無事に突破して、仲間と合流するよ。アキオに会ったら、約束のクリューニャ産の３４７年の赤を飲ませて貰おうかね。それに、銃の腕を確認しないと。落ちていたら、また再訓練だ。あと、ウォルコット少将に何か奢って貰うか」

フォルテは、仲の良い友人や恩人との再会に期待してテンションを上げていた。
実は、紋章機を操縦する上で、このテンションは非常に重要な要素となる。
テンションが上がれば上がるほど、紋章機は同じ機体とは思えな

いほどに性能を上げて行くからだ。

「アキオさんや、マイヤーズ大佐に会えるといいな」

「アキオさん・・・・・・」

ミルフィーユとちとせも、同じ理由でテンションを上げ始める。

「アキオさんに、お父様の事を聞かないといけませんわね」

ミントも、同じ理由でテンションを上げ始める。

「出撃準備完了です」

ヴァニラは、いつもの通りであった。
良くも悪くも安定しているのが、ヴァニラであった。

「エリオス様ぁーーーっ！　応援してくださいね」

「・・・・・・。フランボワーズ少尉。健闘を祈る・・・・・・」

「ランファ・フランボワーズ頑張りまぁーーーす！」

ランファのお願いに、エルシオールのブリッジにいたエリオスが、乾いた笑みを浮かべながら応援のエールを送る。
軍人としての職務に忠実なエリオスは、ランファのテンションを下げて紋章機の性能を落とす様な真似は、決してしなかった。

「ナッツミルク少尉。外の艦隊の戦力は？」

「戦艦二隻、高速空母二隻、巡洋艦四隻、駆逐艦十六隻、突撃艦その他二十二隻です」

白き月所属の軍属から、エルシールの情報担当官に就任したココ・ナッツミルク少尉が、副長のエリオスに敵艦隊の数を報告する。

「二十分で片が付けば行けるな。ブルーベリー少尉。宇宙港の、クロノクロス射出口の担当官に通信を」

「了解しました。こちらエルシオール。クロノクロス射出口応答せよ！」

同じく、軍属から通信担当官に就任したアルモ・ブルーベリー少尉にエリオスが命令を下し、クロノクロス射出口の責任者である若い女性技術将校がスクリーンに映し出される。

「ナン技術中尉。何発撃てる？」

「二十四発行けます」

クロノクロス射出口とは、本来は艦船の射出効率を上げるために、白き月で開発されていた物であった。

名前の通りに、クロノクロスエンジンから取り出したエネルギーで艦船を高速射出させる物なのだが、あまりのスピードに、中の人間が死んでしまう可能性を指摘されてしまい、完全に失敗作と見做されていた。

だが、エリオスは、この失敗作の有効利用を思い付いていた。

紋章機の標的として置かれていた小型艦艇を砲弾として撃ち出し、敵の艦隊に少しでもダメージを与えようと考えたのだ。

「ムーンエンジェル隊へ。五分後に、シャトヤーン様が五分だけフィールドを解いてくださるので、最初に、二十四発の巨弾を撃ち出す。後に混乱する敵艦隊を二十分以内に壊滅。同時に出発したエルシオールに着艦後、偽装艦隊と共に韜晦行動に入る。わかったか？」

「了解だよ。副長殿」

「「「「「了解！」」」」」

「では、作戦開始！」

エリオスは、無言でエルシオールの艦長席で頷くルフト司令を確認してから作戦開始を宣言する。

「シードル大尉。白き月のシールド解除まで、あと一分！」

「ブルーベリー少尉。クロノクロス射出口に」

「こちら、クロノクルス射出口。射出準備完了。いつでも行けます！」

「ナン技術中尉。空母を狙え。艦載機にウロウロされると、時間を食うからな」

「了解です！」

そして一分後、突如、白き月の防御フィールドが解かれ、そこからオンボロ小型艦艇を砲弾とした二十四発の巨弾が射出され、白き月を警戒していた艦隊への直撃コースを取る。

不幸にして、留守を任されていた艦隊司令は、あまり有能とは言えない人物であり、彼はこの攻撃に対処する事ができなかった。

「回避ぃーーー！」

無人艦隊は、それを補うために多くの機器を積んでいたが、それらの高価な機材も、突然の攻撃には対処のしようがなかった。

砲弾は半数以上が外れたが、第一目標であった二隻の空母には見事に直撃し、空母は艦載機を発進する事もなく、大爆発を繰り返していく。

他にも、巡洋艦や駆逐艦にも直撃弾が出ていた。

「ナッツミルク少尉」

「はい！　空母二、巡洋艦一、駆逐艦四、その他四が沈みました」

「成功だ。ムーンエンジェル隊発進！」

そして十八分後、白き月を警戒していた艦隊は全滅し、エルシオールは味方との合流を目指して、単艦での逃避行に入るのであった。

「やはり、出たのか。エルシオールは」

「はい。エオニア様の予想通りに」

「そうか。出たのか。それは、上々だな。実は、このままシャトヤーンとシヴァは、老婆になるまで白き月を出ないのではないかと心配していたのだ」

白き月警戒艦隊の全滅より一時間後、自ら艦隊を率いて惑星シャンパーニュの暴徒をピンポイント砲撃で焼き殺していたエオニアは、その知らせに嬉しそうな表情を浮かべていた。

実は、これら一連の動きは、全てエオニアの計算通りであったのだ。

無論、人手がいないので占領地の統治が疎かになっている事は事実で、それはルフト司令にも知られてしまっていた。

だが、それを逆手に取って、エオニアはシヴァ皇子を外に引きずり出す事に成功していた。

実はシヴァ皇子は女で、シャトヤーンの実娘でもあるので、かなり高度な巫女としての資質を持っていて、それを知っていたエオニアは、秘かに彼女の身柄を狙っていたのだ。

「ですが、偽装艦隊をいくつも出されてしまいまして、どれが本命か現在分析中です」

その外にも、シェリーは、おかしな新兵器で艦隊が奇襲を受けた事などを報告する。

「意外と頭を使っているな。ルフトか？」

「その下に、例のシードル公爵の息子がいるそうです」

「エリオスとかいう若造か。意外と知恵が回るらしい。だが、余はやはりレイトンの方が欲しいな。シェリー。シヴァ皇子の追撃を、そなたに任せる。期待しておるぞ」

「はっ！　この命に代えましても」

こうして、エオニアの側近中の側近であるシェリーが、直々にシヴァ皇子追撃の指揮を執る事となるのであった。

「主席参謀を解任ですか？」

「次席参謀もですか？」

ルフト司令達の白き月脱出より三日後、いつもの様に一時間程の仮眠を取ってから司令部に出勤したアキオとレスターに、ウォッカ大将は現職の解任を告げる。

「クビですか？」

「いや。十分に働いて貰ったからの。そろそろ休まないと死ぬぞ。お前ら」

確かに、平均睡眠時間が二時間で、三週間近くの激務であったので、下手をすると過労死という事も十分にあり得る事態であった。

「一番大切な立ち上げを良く頑張ってくれたの。後は、後任でも大丈夫じゃろう。それに、他に頼みたい事があっての・・・・・・」

「どうも、過労死寸前のタクト・マイヤーズ。参りました」

「嘘付け！　全部、ジン中尉とかいう副官に任せきりにしおって！　あの若造、泣いておったぞ！」

ウォッカ大将は、目の下に隈を作っているアキオとレスターとは対照的に、元気一杯のタクトの頭上に拳骨を落としていた。

「でも、任務に滞りはなかったでしょう？　俺の人を見る目は確かなんだから」

「悔しいが事実じゃの。本当に、このバカ者が。金が無いのに、ジン中尉を昇進させなければならぬの。功績には報いなければなるまい」

皇国中央部の壊滅で一番ウォッカ大将が困った事は、お金が無いという事であった。

地方の税収のみで、過剰な戦力を養い、難民を養い、中央を奪還する。

まさに、自転車操業と言っても過言ではない状態であった。

「救国国債。集まりませんか？」

「いや、一次分は全て完売したよ。じゃが、あれは借金じゃからの。いつか返さなければならない」

アキオは、不足する財政を補うために、救国国債なる物を発行する事を提案し、それが認められていた。

この国債は、富裕層向けで実は利子がゼロであった。

だが、償還期限内は、持っている限りその金額分に掛かる各種税金がゼロになるので、非常に人気が出ていたのだ。

「第3みたいに、増税でもします？」

「昔から、バカじゃバカじゃと思っておったが、いよいよ本物じゃの。奴は」

情勢は、既にウォッカ大将が中央奪還の総大将という事に落ち着いていたのだが、ジーダマイヤ大将はそれを決して認める事はしなかった。

独自に兵器の生産と兵の募集を行い始め、不足する金を増税という形で補おうとして、管轄宙域内の経済・治安状態をかなり悪化させていたのだ。

「正直なところ、現在あそこを崩壊させると、我々全てがヤバくなるのでな。方針を転換さざるを得なくなった。ルフトが、遂に白き月を出たらしい。本来、うちに来る予定じゃったのだが、惑星ローム に向かわせる事とする」

現在のウォッカ大将が一番恐ろしいと感じている事は、エオニアの戦力よりも、自分がトップになれないと悟ったジーダマイヤ大将の暴走であった。

そこで、彼に表面上の中央奪還軍の指揮権を譲り、第3方面軍司令部のある惑星ロームにシヴァ皇子を行幸させて、住民の不満を解消させようという方針に転換したのだ。

そして、その方針をエルシオールで逃避行を続けているルフト司令に伝えるべく、迎えの艦隊を出す事にしたのだ。

「ファラーメ級の高速戦艦を、ジンロから借りる。他にも、航続距離の長い巡洋艦も出す。少しおかしな編成じゃが、仕方あるまい。レイトン。お前が、指揮を執れ」

「了解しました」

臨時以外では初の正規艦隊の指揮に、アキオは身が引き締まる思いであった。

「タクト。レスター。エルシオールを任せる。出迎え艦隊にルフトを引き取るぞ」

ジーダマイヤ大将に中央奪還軍の司令官を譲ってしまったウォッカ大将は、更に老練に動く事を要求される。

なので、軍政に通じていて、同じく老練なルフト中将を欲しての人事であるらしかった。

「つまり、我々は、エルシオールに到着するまで暇なのですね」

「レイトンの艦隊が、囮となってこちらに逃げてくるので、単艦で別行動を取るエルシオールが、安全だとでも思っておるのか？」

久しぶりの長期の休暇になると感じて嬉しそうにはしゃぐタクトに、ウォッカ大将が出来の悪い生徒を諭す様に語りかける。

「リスクが、二分の一になるだけですか」

「そういう事じゃ。レスター。それに、軍艦に余計な人手などないからの・・・・・・」

「あれ？　おかしいな？　休暇なんだよな。俺達」

「お前が、ちょこまかと、女性兵士にナンパをして、レイトンの怒りを買うから！」

ウォッカ大将からの命令を受けた翌日、アキオは高速戦艦（ヴァリエール）を旗艦に、巡洋艦八隻を加えた出迎え艦隊を慌しく出撃させていた。

この規模の艦隊の出発準備を、僅か一日で整えたアキオの力量はやはり本物であり、ウォッカ大将はますますアキオを信頼する様になったのだが、彼は今度は一睡もせずに出発する事となっていた。

出発後、究極の眠気に堪えながら、懸命にに指揮を執っていたアキオであったが、その彼の神経を逆撫でする出来事が発生していた。

それは、ゲストとしてこの船に乗り込んでいたタクトが、所構わず綺麗な女性兵士を見かけると、声をかけてしまう現場に遭遇したからだ。

多分、いつものアキオであれば、笑って許すレベルの事なのだが、同じ階級なのに十分に睡眠を取って、暢気に女性兵士に声をかけているタクトを見て何かがキレてしまったらしい。

アキオは、同じくゲストであるレスターにも共同責任を取らせて、艦内全ての便所掃除を罰として命じていた。

艦内の掃除は、普段はロボットに任せている事なので、これは本当の意味での罰であった。

「この艦の艦長とか軍人達は、固っ苦しい連中が多いよな。レイトンの案に賛同しちゃってさ」

「元々、近衛艦隊の軍人だからな。それよりも！　疲労困憊のレイトンを逆撫でする様な事を、タクトがするから！」

「へえ。嫌いな割には、良く理解しているじゃないか」

「俺がレイトンを嫌いな事には、変わりはない。だが、常識的に考えて、奴が怒るのは理解できるだろうが！」

レスターはタクトを怒鳴りつつも、モップを動かす手を緩めていなかった。

「でもさ。この艦のトイレって何箇所あるんだ？」

「二十五箇所だ」

「そんなにぃーーー！」

「居住性も考慮された最新鋭戦艦だからな。良かったな。タクト。

暫く退屈しないで済むぞ」

「二週間も、便所掃除かよ・・・・・・・」

「お前のせいで、ここに付きあわされている不幸な友人もいるのだがな・・・・・・」

こうして、エルシオールを出迎えるための艦隊は出撃し、タクト、レスター、アキオとムーンエンジェル隊は、後の歴史を変える再会と出会いを果たす事となる。

そして更に、エルシオールには、アキオの弟であるエリオスも同乗していた。

二人の兄弟の、これからの運命は？

まだ、物語は始まったばかりであった。

第五話（後書き）

やっと、本編に入りそうな所です。

第六話

（出迎え艦隊の出発より二週間後、エオニア艦隊制圧宙域内）

惑星アルモスから出発して二週間あまり、アキオの指揮する出迎え艦隊は、極秘裏にエオニア支配下の宙域への侵入に成功していた。

ルフト司令から極秘裏に暗号で送られていた、エルシオールとの合流予定地点に、時間内に到着する事に成功していた出迎え艦隊であったが、そこには、肝心のエルシオールは存在せず、替わりに、シェリーの命令を受けてエルシオール追撃艦隊の一隊を率いていたレゾムと鉢合せしてしまっていた。

「その艦隊の司令官に告げる！　我が名は、正統トランスバール皇国軍少佐レゾム・メア・ゾムである。早くに、皇国の正統なる支配者であるエオニア様に従え！　今の内であれば、陛下の温情も期待できよう」

「死ね！　カスが！」

「・・・・・・・・・・・・・」

偉そうに口上を述べたレゾムであったが、艦隊指揮で疲労困憊であったアキオは一言だけレゾムそう告げ、予想外の回答に、単純なレゾムは口をあんぐりと開けて無言で立ち尽くしていた。

「誰がカスだ！　名を名乗れ！」

だが、すぐに我に戻って、カス呼ばわりしたアキオに激怒する。

「トランスバール皇国准将。アキオ・レイトンだ」

「お前が、あのレイトン！」

意外と有名人であるアキオの登場にレゾムが驚いていると、後ろにいた情報参謀が、アキオにそっと一枚の紙切れを渡す。

それは、艦のコンピューターに入っている軍人名簿の検索結果であった。

「近衛艦隊（ヘイロー）所属突撃艦の副官で中尉。裏切らないと佐官になれないなんて寂しい奴」

アキオは、ストレスも溜っていたせいもあり、単純バカそうなレゾムを挑発する策に出る。

「うぬぬぅーーー！　言わせておけばぁーーー！」

心の奥底では、自分が裏切り者である事を自覚しているレゾムであったので、元々の性格もあったが、簡単にアキオの挑発に乗ってしまう。

そして次に、先ほど情報参謀が、また一枚の紙をそっとアキオに渡す。

「（巡洋艦四、駆逐艦十二か・・・・・・）」

アキオは、後ろに組んだ腕の指を動かして、後ろにいる艦長に矢つぎ早にモールス信号で命令を出していく。

レゾムが激怒している間に、アキオの艦隊は陣形を整え、臨戦隊形に移行していた。

「艦長。新造の高速戦艦の威力を見せて貰うぞ」

「了解しました」

《ヴァリエール》の艦長である四十代の大佐は、始めはアキオの事を運の良いだけの若造と侮っていたが、すぐにその考えを改める事となっていた。

僅か二週間の航海で彼の真の力量に触れ、年下ながらも真に尊敬できる上官だと理解したからだ。

「あの先頭の巡洋艦だ！　レゾムを撃て！　すぐに二階級特進にしてやるよ！　中尉殿！」

アキオは、レゾムを旧皇国軍時代の階級で呼びながら、主砲の一斉射を命令する。

「何ぃーーー！」

「戦場で、俺を口説く余裕があるのか？　レゾム中尉さん」

不意を付かれたレゾム艦隊旗艦の巡洋艦に、《ヴァリエール》の主砲が牙を向く。

「ええい！　私を守るのだ！」

無人艦隊は、レゾムの命令に忠実であった。

一隻の巡洋艦と二隻の駆逐艦が、レゾムの艦を守る様に前を出て、主砲弾の直撃を受けて大爆発を起こす。

「ちっ！　一撃でケリは付かなかったか。距離を置いて、砲撃戦に

入る！」

そして約二時間後、レゾム指揮の無人艦隊は、最初の三分の一の数にまで艦数を擦り減らされていた。

アキオは、無人艦隊相手に貴重な熟練軍人を失う愚を避けようと、《ヴァリエール》の射程距離ギリギリでの戦闘距離を維持し続けたからだ。

「やはり、時間がかかるな」

「それに、完全に無傷という事も無理ですね」

出迎え艦隊は、不用意に距離を縮めてしまった二隻の巡洋艦が被弾していて、十五名の戦死者と三十七名の負傷者を出していた。

「どのみち、エルシオールが来るまで、ここで待っている以外に策はないんだ。今のペースを崩すなよ」

「了解です」

だが、それから更に十分後に、状況は大きく変化する事となる。

レゾムに、追加の援軍が到着したからだ。

「敵の援軍です！　新たに、巡洋艦四、駆逐艦十二！」

「振り出しかよ・・・・・・」

それでも、アキオは諦めずに戦闘を続行する。

「なあ。レイトン。少し、やばくない？」

アキオの近くで戦闘を見学していたタクトが、アキオに暢気そうに話しかけてくる。
タクトは、肝が座っているのか？アキオの指揮振りに安心しているのか？今まで、特に何も発言していなかったのだ。
そして、更にその隣にいるレスターは、自分達がこの艦隊の中ではただのゲストである事を自覚していて、余計な口を出す事は越権行為に繋がると判断して、同じく一言も発していなかった。

「じゃあ。何か策をくれ。タクト」

「無いなあ」

「じゃあ。黙って、脱出の準備をしていろ」

「おい！　レイトン！　まさか！」

「最悪、お前とレスターが、エルシオールに拾われれば良いんだ。ルフト先生も、死なすわけにいかないからな。脱出艇の準備をしておけ」

アキオは、タクトとレスターを他の無傷の巡洋艦に逃すつもりでいた。
そして、単艦で離脱させて、独自にエルシオールを探させようとしていたのだ。

「タクト。行くぞ」

「レスター。ちょっと、ドライ過ぎない？」

タクトは、呆気なくアキオの提案を受け入れたレスターに抗議めいた事を言う。

「レイトン司令の任務の邪魔をするな。それに、俺達には俺達の任務があるんだ」

「レスターの言う通りだな。それに、まだ死んでたまるかい」

この日のアキオとレスターは、珍しく意見が一致していた。

それに、現状で実の父親であるフレスコの死が確認できない以上、まだアキオは死ぬつもりはなかった。

それこそが、アキオのここ数年の人生の最大の目標であったからだ。

「比較的、損傷の浅い艦は？」

アキオは、副司令を兼任している艦長に損傷の浅い巡洋艦の名前を聞く。

「巡洋艦（アクエリアス）です」

「ゲスト二人の、移乗準備を・・・・・・」

「レイトン司令！　レーダーに大型の戦闘機の反応があります！」

「機数は？」

アキオが命令を出そうとした瞬間、索敵担当の士官が最悪の報告をしてくる。

敵の戦闘機がウロウロしている状態で、脱出艇の発進は不可能で

あったからだ。

「一機です」

「偵察機か？」

一機という機数が、気になっていた。

敵にしては数が少な過ぎるし、偵察機など今更な感じがしたからだ。

アキオが考えを纏めていると、今度はその戦闘機らしき機体から通信が入ってくる。

「こちら、エルシオール所属、トリックマスターのパイロット、ミント・ブラマンシュ少尉です。交戦中の出迎え艦隊の司令官さん。応答してください」

敵地で出会った初の味方は、アキオの旧知のミントであった。

「司令！　エルシオールの所属機からです！」

「繋げ」

アキオは、まだ安心していなかった。

エルシオールには、高性能の大型戦闘機《紋章機》が搭載されていると聞いていたが、その性能はまだ未知数であった。

なので、最悪、ミントにタクトとレスターを託して、エルシオールを別行動で逃す策も検討していたのだ。

「出迎え艦隊司令、アキオ・レイトンだ。エルシオール。待ちかねたぞ」

「アキオさん！」

ヴァリエールのブリッジ内のメインスクリーンに、ミントの驚いた顔が大きく映し出される。

「ブラマンシュ少尉とやら！　レイトン司令に失礼だぞ！」

厳格な規律で支配されている軍内での任務中に、アキオを名前で呼んでしまったミントに、艦長が大きな声で注意をする。

「艦長。非常時だ。気にするな」

「ですが・・・・・・」

「俺は気にしていないし、今は時間が惜しい。ミント。元気だったかい？」

アキオは、ミントをしょげさせない様に、優しい声と笑顔で彼女に話しかける。

「はい。お会いしたかったですわ。レイトン司令」

ミントは見た目よりも大人で、周りの空気を読むのも上手かったので、また隣の艦長に怒鳴られないように、アキオを呼び慣れない苗字と役職で呼んでいた。

「苦戦していらっしゃるのですか？」

「ああ。時間の問題だな。荷物を二つ預けるから、俺達を置いて逃

げてくれないか？」

アキオは、隣にいるタクトとレスターに視線を送る。

「大丈夫ですわ。このくらいの艦隊でしたら。フォルテさん達も、すぐに駆け付けますし」

「本当に大丈夫なのか？」

「はい。ご安心くださいな。レイトン司令。トリックマスター。艦隊の援護に入ります」

既に、出迎え艦隊は三隻の脱落艦を出していた。

損傷が酷く、これ以上は戦闘に耐えられないと判断したアキオが、後方に下げさせたのだ。

結果、艦数の減った艦隊は、更なる苦戦をする事となっていた。

だが、ミントのトリックマスターの参戦で大きく戦況が変わった。

ミントは、トリックマスターが装備しているフライヤーを放出すると、敵艦隊の火器を集中して狙い始めたからだ。

「へえ。やるもんだね。艦長。火器を殺された艦に止めを」

「了解！」

アキオが指揮下の艦隊に攻撃命令を下すと、続いて、索敵担当士官が、五機の大型戦闘機の反応をアキオに報告する。

「ムーンエンジェル隊、全員集合ですわ」

メインスクリーン上のミントは、アキオに艶のある笑みを浮かべ

る。

そして、その後は、ムーンエンジェル隊の独断場であった。

ミルフィーユのラッキースターが、機体中央に装備されている大型ビームキャノンで駆逐艦を沈め、ランファのカンフーファイターが、巨大なアンカークローで駆逐艦を殴り付けて撃沈し、フォルテのハッピートリガーが、装備している火器を一斉に解放して巡洋艦を沈め、ヴァニラのハーベスターが、傷付いた仲間の回復のために戦場を自在に駆け回る。

そして、ちとせのシャープシューターが、ハーベスターの護衛を行いながら、自身の装備する超長距離レールガンで、接近する艦のエンジンを狙い撃ちしていた。

「凄いな。艦長」

「ええ。正直、小娘と侮っていましたが・・・・・・」

「ええい！　一時撤退だ！」

僅か十分ほどで、レゾムの艦隊は全滅寸前となり、レゾムは生き残っていた他の無人艦を盾に、戦場から離脱して行く。

「敵は、旗艦以外は全滅ですか・・・・・・」

「全部無人艦だ。また作れば戦力はすぐに回復する。だが、我々は・・・・・・」

アキオは、参謀の一人から艦隊の損害報告を受け取っていた。

巡洋艦は中破が三隻で、小破が四隻。

戦死者は五十七名で、負傷者は百五十六名に及ぶ。

この規模の艦隊決戦にしては少ない数字であったが、それでも五十七名だ。

艦隊司令であるアキオにとって、この五十七名は数字でしかないが、この五十七名の戦死者の家族や友人は、深い悲しみに暮れるであろう。

そして、この五十七名の熟練兵士達は、何年も訓練しないとまた作り出せないのだ。

「家族などいない俺が、替わってやりたい心境だ」

「まあ。そう仰いますな。エオニアとの決戦時に、無能なザックス司令の元で、多くの軍人達が無意味に死んで行きました。それに比べれば、あなたは、兵士達にありがたがられていますよ」

艦長は、有能ではあるが、まだ若く実戦後に感傷的になってしまうアキオを、好ましい人物だと思い始めていた。

それに、何事にも完璧な年下の上司よりも、何か欠点があった方が年上としては補佐のし甲斐がある。

そんな事を考えていた。

「レイトン。お前が死んだら、あのミントという娘が悲しむぞ」

戦闘時には大人しくしていたタクトが、横からレイトンをからかい始める。

「お前な・・・・・。急に喋り始めると、それか？」

「マイヤーズ准将の仰る通りですな。あの娘の目は、恋する女の目でしたな」

「艦長まで・・・・・・」

アキオがバツの悪い顔をしていると、前面にエルシオールが肉眼で確認できる様になり、今度はメインスクリーンに自分の恩師が映し出される。

「ルフト先生！」

「バカ！　ルフト司令だろうが！」

ルフトを、士官学校時代の様に先生と呼んだタクトを、レスターが嗜める。

「良い良い。私は、お前達の先生だからな。タクトは元気そうだな」

ルフト司令は、自分の教え子達に笑顔を浮かべていた。

「はい。それだけが、取り得でして」

「レスター。立派になったな」

「いえ。まだまだです」

「そして、アキオ・・・・・・」

「はい」

「良く、今まで頑張って来たな」

「はい・・・・・・」

ルフト司令は、この中で一番人生に苦労しているアキオに労いの言葉をかける。
そして、二人にしか通じないその言葉の真の意味は、ルフト司令がフレスコの死の情報を掴んだという意味でもあった。
「艦長。暫く、艦隊の任務を頼む。三人を、シヴァ皇子に謁見させる」
「了解しました」
こうして、三人は、エルシオールへの移動を開始するのであった。
「レイトン。先ほどの、ルフト先生の意味あり気な言葉は・・・・・・」
「余計な興味を持つと、寿命が縮むぞ」
エルシオールへと移動する連絡艇の中で、先ほどのルフトとアキオの会話に疑問を感じたレスターは、それをストレートにアキオにぶつけるが、アキオは冷たい目でレスター睨み付けた。
普段なら、アキオの事になるとムキになって問い詰めるレスターも、その冷たい視線に何も言う事ができないでいた。
「レイトンにだって、言いたくない秘密とかがあるんだよ。俺らに

もあるじゃないか。お互い様さ」

「俺には、そんなものはない！」

そんな話をしている内に、タクト達はエルシオールに到着し、そこでアキオは、旧知の人物達の出迎えを受ける事となる。

「アキオ。ちゃんと、生きていたかい？」

「俺よりも、白き月にいたフォルテの方が、ヤバいと思ったけどな」

「お互いに、悪運だけが強いんだね」

「言えてる」

アキオは、フォルテと握手をしながら再会を喜び、レスターは軍規の乱れを心配し、タクトは『あのナイスバディーの姉ちゃんは、レイトンとはそういう関係ではないな』などと奇妙な分析をしていた。

「アキオさん。お久しぶりです」

「ご無事で安心しました」

「ミルフィーも、ちとせも元気そうだね。おかげで助かったよ」

「俺も助かった。助かった」

「いたんですね。マイヤーズ大佐」

「それって、酷くない？　ミルフィー。それと、俺。一応准将になったから」

アキオは、ミルフィーユやちとせとも握手をして、妹分達との再会を喜び、レスターは軍規の乱れをまた心配し、タクトはミルフィーユの冷たい言葉に一人涙していた。

「ちゃんと、訓練の成果が出ていたじゃないか」

「まだまだです」

「あのおっかない姐さんに、そう言われているのかい？　あの姐さんに、俺も銃を習った事があるんだけど、それはそれは、厳しい先生でな・・・・・・」

「聞こえてるよ。アキオ」

「あっそう？」

ちとせは、少し顔を赤くさせながら、アキオとの再会を心から喜んでいた。

レスターは、この軍隊らしくない空気に完全に諦めの境地にいて、タクトは『ミルフィーは、俺に気があるから恥ずかしくてあんな態度を取っているんだ』などと、自分に都合の良いストーリーを考えていた。

ただ、それは間違いではないらしい。

ミルフィーユは、すぐにタクトの元へ移動して、話を始めていたからだ。

そしてちとせには、『本気で、レイトンに惚れているな』などと無意味な分析をしていた。

「なあ。以前に、タクトは亡くなった父親に似ているって・・・・・」

「見た目の感じだけですよ！　任務に対する姿勢や仕草は、完全にアキオさんに！」

ちとせは、アキオに、『ちとせは、タクトに惚れているのでは？』などと誤解される事を恐れて、必死に以前の話を否定し始める。

「タクト。お前。全否定されているぞ」

「いいんだ。俺には、ミルフィーがいるから」

「私、タクトさんと付き合っていませんけど」

「おっ！　始めて名前で呼んでくれたね！」

「しまった！」

ミルフィーユは、顔を真っ赤にして下を向いてしまう。

「ミント。見つけてくれて助かったよ」

「これも、任務の内ですわ」

「似合わないセリフ」

「もう。人がせっかく軍人らしい事を言っているのに、失礼ですわ」

「すまん。すまん。それと、お父上が本当に心配していたよ」

「そうですか」

ミントは、父親であるダルノーが自分の身を心配してくれている事を、心の中では素直に嬉しく思っていた。

『親が、子の心配をする』。

この当り前の事が、目の前のアキオには当てはまっていなかったからだ。

「ブラマンシュ財閥は、潰れますかしら？」

「潰れないさ。大損は、しているけどね」

エオニアの反乱によって、ダルノーが失った資産は相当の額にのぼるが、それでも、まだブラマンシュ財閥には天文学的な数字の資産が残っていた。

潰れるはずもない。

ミントはミントなりに、父親の心配をしていたのだ。

「えーーーと。直接対面は、初めてかな？　アキオ・レイントンです」

「ランファ・フランボワーズ少尉です。宜しく」

「ヴァニラ・アッシュです」

エリオス命のランファと、いつも無口なヴァニラは、タクトやレスターにも同じ様な態度を取っていた。

「さて、そろそろ、シヴァ皇子に接見に・・・・・・」

アキオ達が、それぞれにムーンエンジェル隊の面々との挨拶を終えると、そこにエリオスを伴ったルフト司令が現れる。

フォルテ、ちとせ、ミントは、ルフト司令に批難の視線を向けるが、常識的に考えて、エルシオールの副長を新しく司令職に就任する人物や客人に紹介しないはずもなく、ルフト司令とて苦渋の選択であったのだ。

「初めまして。エリオス・シードル大尉です」

「へえ。名門じゃないか。公爵様の息子だ。しかも、跡取りだからな」

伯爵家の三男で、実家とは少し疎遠なタクトは、エリオスを窮屈な家に生まれて可哀想な奴だと思いながら、フレンドリーに挨拶をしていた。

「マイヤーズ准将の噂は、かねがね」

「サボってばかりだって、噂だろう？」

「いえ。人使いの天才で、将の将たる器だと」

「なるほど。物は、言い様だな」

「五月蝿いよ。レスター」

せっかく、エリオスに褒められたのに、それをレスターに茶化されたタクトは、彼に抗議の声をあげる。

「そして、マイヤーズ司令を補佐する、切れ者のクールダラス大佐」

「褒めても何も出ないぞ。それに、君もなかなかに優秀だと噂になっている」

レスターは、エリオスの悪意のない褒め言葉に少し気を良くする。

「そして、艦隊を指揮するも良し、後方で兵站を担当するも良し、軍政を司るも良し、多才を誇る天才レイトン准将。僕は、あなたにお会いしたかった」

無邪気に笑顔を浮かべ、自分と握手をするエリオスを見ながら、アキオは、運命の神をただ呪うしか術を持たなかった。

「ルフト司令も、酷な事をするね」

「仕方がないさ。エルシオールの副長を客人に紹介しないなんて、どう考えてもおかしいじゃないか。先生は、内心で苦悩していたさ・・・・・・」

アキオ達はシヴァ皇子との謁見後、それぞれに自由行動を取っていた。

タクトは、エルシオールの女の子達と仲良くなる事に精を出してミルフィーユに怒られ、レスターは、エリオスとこれからの任務に

ついての情報交換を行っていた。
そして、過酷な任務が続いて疲労が溜っていたアキオは、ルフトに『ワシが先にヴァリエールに戻って指揮を執るから、明日の朝まで休んでいろ』と言われて、久しぶりの半休と取っていた。

アキオは、フォルテとの約束を果たすため、私物のトランクに忍ばせて来た高級ワインの栓を彼女の部屋で開けていたのだ。

「つまみは、チーズと生ハムしかないけどね」

「上等。上等。酒なんて、一ヵ月以上飲んでないから、楽しみだな」

「酒に餓えた男には、勿体ない銘柄だね」

「じゃあ、止めとくか」

「嘘だよ。早く栓を開けてくれ」

二人は、ワイングラスに赤い液体を注いで、乾杯をする。

「お互いの無事を祝して。乾杯」

「乾杯」

二人は、静かにグラスを合わせてからワインを口に含む。

「やっぱり、美味しいね。高いワインはさ」

「酒くらいは、拘るのさ」

二人は、それからお互いの近況を話し始め、次にシヴァ皇子との謁見についての話題に入る。

「どうだった？　シヴァ皇子は？」

「子供を守るのは、大人の責務だからな」

アキオは、特にシヴァ皇子についての感想を述べなかった。
父親であるシードル公爵に命を狙われていた影響で、特に皇国に対する忠誠心などは持っていなかったからだ。
多分、謁見したのが、先に崩御したジェラールであったら、内心で嫌悪していたかもしれない。
アキオにとって、ジェラールはフレスコの共犯という認識しか持っていなかったからだ。
少なくとも、フレスコの行動を黙認していた事は、決して許すつもりはなかった。
そして、アキオの見たシヴァ皇子は、自分なりに皇族としての責務を果たそうと懸命に背伸びをしていたが、まだまだ子供という感想を持っていた。
自分は、たまたま皇国に所属していて、生きるために、食い扶持を稼ぐために仕事をしている。
ただ、それだけであったのだ。

「良い皇王様になりそうかい？」

「誰が補佐するかだな。ルフト先生やウォッカ大将なら大丈夫さ。ジーダマイヤなら、籠の中の鳥で終わりさ」

それでも、政治上の力学の関係で、自分達はジーダマイヤ大将の元にシヴァ皇子を送り出さなければならない。

そう考えると、自分はの意外と罪深いのかな?などとアキオは考えていた。

「それで、遂に自由になったね」

フォルテは、フレスコ公爵の死を知っていて、それを自分の事の様に喜んでいた。

「さあね。まだ、あのお人好しのボンボンがいるからな」

アキオは、理性ではエリオス自身には何の罪のない事を理解していたが、感情では彼の事をあまり好きになれなかった。

「何も知らない彼は、アキオを本気で尊敬しているからね」

「迷惑だ。できるだけ関わり合いたくない。それが、お互いの幸せに繋がるさ」

それに、明日になれば、エルシオールは惑星ロームを目指して単独航行に入り、自分はルフト司令と共にウォッカ大将の元に戻る。それで、暫くは会う事はないはずであった。

「あんたが、新しい司令官なら大歓迎なのに。あのタクトって准将。大丈夫なのかい?」

フォルテは、先ほどエルシオール艦内の女の子に片っ端から声をかけているタクトを目撃していて、彼が新しい指揮官になる事に一抹の不安を感じていた。

「下にいるレスターは、切れ者だからな。それに、タクトは、士官

学校の成績などでは測れない将器を持っている。安心して指揮下に入れ」

「あんたの人物眼。たまに、狂いはないのかい？」

「さあ？」

「まあ。いいさ。私は、自分で見極めるだけさ・・・・・・」

その後も、二人は様々な事を話し、久々の再会を楽しむのであった。

「うぬぬぅーーー！　レイトンの若造めが！　虫ケラの様に殺してやるわ！」

数時間後、合流したシェリーに懇願して新たなる増援を受け取ったレゾムは、エルシオールと出迎え艦隊に急突進をかけていた。

「ルフト中将・・・・・・」

ヴァリエールのブリッジで、艦長がルフト司令の方を心配そうに見つめ始める。

「逆襲か・・・・・・。良し。こちらで敵を引き付けて、エルシオールを逃すぞ。敵の司令官が、先のレゾムならヴァリエールに拘るはず」

「レイトン司令が、挑発していましたからね。それで、肝心のレイトン司令はどうするんです？　連絡艇の類は・・・・・・。ほら・・・・・」

出迎え艦隊は、蝿の様に群がってくる無人戦闘機を近接火器で懸命に追い払っていた。

なので、エルシオールからアキオを呼び寄せる事はかなり困難であった。

「エルシオールに置いていく。緊急事態だ。仕方がない」

「ウォッカ大将に、怒られませんか？」

ウォッカ大将が、アキオを重用して可愛がっている事は周知の事実だったので、艦長はアキオを置いていく事を躊躇っていた。

「私が代わりに、老骨に鞭打って働くさ。若い力も重要かもしれないが、大人がちゃんと働かないとな」

「それも、そうですね」

艦隊の陣形を整え、レゾムの艦隊に反撃をしようとしたその時、ヴァリエールのメインスクリーンに寝起きなのが丸わかりのアキオの顔が映し出される。

訓練を受けているので、服装等に乱れはなかったのだが、髪に微妙に寝癖が付いているのを、ルフト司令と艦長は見逃してあげる事にする。

「すぐに戻ります！」

「死ぬぞ。アキオ」

既に戦闘が始まっているのに、連絡艇などで出たら確実にアキオを待っているのは死であった。

「ルフト司令！　ですが！」

「緊急事態だ。エルシオールに残れ」

「俺。無役ですよ。ここだと」

エルシオールの新体制は、司令兼艦長がタクトで、副司令がレスター。

そして、副長が以前のままでエリオスという事になっていて、アキオの正式な居場所などは存在しなかったのだ。

「たまには、骨休めでもしていろ。忙しければ、レスターが適当に仕事を割り降るさ。では、私は先に戻るからな。エルシオールも、所定のコースで目的地に向かう事」

「了解」

いつの間にかアキオの隣にいたタクトが、ルフトに了承の敬礼をしながら通信を切り、エルシオールは艦隊とは別行動を取り始める。

「なっ！　どちらにシヴァ皇子は！」

敵が二つに別れてしまったので、混乱したレゾムは、愚かにも戦力を割って二匹の兎を得ようとする。

だが、始めから逃げる事を前提としていた出迎え艦隊には、攻撃を薄くしてしまってそれを許す結果となり、エルシオールに向けた中途半端な戦力は、フォルテ達に各個撃破されてしまった。

「ええぃ！　俺は諦めないからな！」

「俺。どうしたらいいんだ？」

レゾムは、必ず任務を達成する事を心に誓い、アキオは、エルシオールに置き去りにされてしまった自分がこれからどうすれば良いのか、途方に暮れてしまうのであった。

「・・・・・。艦内の、荷物の整理でもしていろ」

「おいおい。レスター。相手は、お前の上官なんだぞ」

出迎え艦隊に置き去りにされ、晴れて無役となってしまったアキオは、タクトは非常時以外には仕事をあまりしない男なので、平時の実質上のナンバー1であるレスターに、これからの事にお伺いを立ててみる事にする、

すると、レスターは、冷静にアキオに荷物整理の命令を下し、それをタクト窘め始める。

「このエルシオールでのナンバー1はタクトで、ナンバー2が俺。そして、ナンバー3が、シードル大尉という事実に変わりはない。

レイトンは准将ではあるが、ここには本来いない事になっている人間なのだから、それは関係ないな。だが、宇宙船において、無駄に酸素と食料を浪費する人物は害でしかない。ちゃんと、労働をして貰わないと困る」

結局、アキオは、複数の艦で構成される司令部には必ず存在する主計・補給参謀という肩書きを一時的に貰い、艦内での任務に就く事となる。

「あれ？　アキオさんがいる。どうしたんですか？」

「寝過ごして、ルフト先生に置いていかれた」

アキオが、艦隊司令用の第一種軍服から、動き易いツナギに似た簡易作業着に着替え、それに階級章と参謀章の略章を取り付けて仕事に入ろうとすると、そこにレゾムの追っ手を全滅させてからエルシオールに帰艦して来たミルフィーユ達と顔を合わせた。

「では、暫く一緒なのですね」

「そういう事になるね」

「また色々と教えてください」

「レスターに怒られない程度なら」

ミントとちとせは、予想外のアキオの残留にとても嬉しそうな表情になる。

ただ、すぐにお互いが同じ事を考えている事を知って、熱い火花を散らし始める。

「（チャンスは、ものにさせていただきますわ）」

「（アキオさんは、絶対に譲りません！）」

「それで、アキオは何をしているんだい？」

今度は、フォルテがアキオに質問をする。

「主計参謀らしいけどね。まあ。要は、艦内の雑用係かな」

「あのレスターって男も、意外と度量が狭いんだね」

フォルテは、レスターに対して非難めいた感想を述べる。

「あいつの言っている事は正論だし、この状況がマズイのも事実だろう」

エルシオール艦内は、急いで出発準備を整えた影響なのか、通路にまで多くの物資の箱が多く積まれ、紋章機を整備する整備兵達は、一つ一つその箱に何の部品が入っているのかを、わざわざ開封して確認している有り様であった。

「戦闘が続くと、致命傷になるぞ。掃除・整頓の下手な軍人は三流って相場なんだよ。昔からね」

「じゃあ、その三流は、シードル大尉だね」

「ちょっと！　フォルテさん！　エリオス様は、三流なんかじゃないわよ！　准将！　こう言っては何ですけど、自分の指揮していた

艦隊に置き去りにされたあなたが、言える事なんですか？」

エリオスの事をフォルテに侮辱されて激怒したランファは、なぜかその矛先をアキオの方に向ける。

「耳の痛い話だね」

「今のあなたには、お似合いの仕事だと思いますよ。では・・・・・」

ランファは、皆を置いて先に一人で自室に戻ってしまう。

「俺。あの娘に、嫌われているのかな？」

「ランファは、アキオみたいなタイプの男性は、好みのはずなんだけどね」

フォルテは、ランファの態度に首を傾げてしまう。

「俺が？　でも、あの娘と付き合ったら、毎日喧嘩かもな。じゃあ。俺は、仕事があるから」

「まるで、韓信を、米蔵の管理人にした様な人事ですわね」

「確かにそうですね。もっと、アキオさん相応しい任務が・・・・・・」

アキオが仕事に戻ろうとすると、今度はミントとちとせが、レスターに対しての不満を口にし始める。

「ちとせ。ミント。この世には、ごく一部の例外の除いて、職業の貴賤なんて存在しないんだ。下らないとか、相応しくないとか、そんな事はないんだよ。下らないのは、それを決めている人間なのさ」

そう言い残すと、アキオは自分の任務に邁進すべく、新しい部下達に会いに行くのであった。

「・・・・・。あいつがいると、俺はなぜか調子が狂うんだ」

「有能だし、良い奴なんだから、気にせずに仕事を頼めば良いんだよ」

「タクトは、誰にでも押し付けるだろうが！」

「えーーーっ！　ちゃんと、人は見ているぜ」

タクト達のエルシオール赴任から二日後、エルシオールは単艦で、一時第2方面宙域にルートを取る様に見せかけてから、本命の惑星ロームへと航行を続けていた。

「朝食が豪勢になったな。レスター」

「物資の整理が進んだ影響だ。倉庫の奥や通路に放置されていた冷蔵ボックスの中身が整理されて、使える食材の種類が増えたそうだ」

「レイトンって、器用だよな」

タクトは、何をやらせてもちゃんと結果を出すアキオに素直に感心していた。

「ふん！　小賢しいだけだ」

不機嫌そうに朝食のウィンナー炒めにフォークを突き刺すレスターの横では、アキオが優雅に食事後のコーヒーを楽しんでいた。

あの碌に睡眠も取れなかった、主席参謀職や艦隊司令の激務から楽な仕事に移れたので、文句など出ようはずもなかった。

寧ろ、レスターに感謝していたくらいだ。

そして、そのアキオの涼しい表情を見たレスターの機嫌は、更に急降下して行く。

「アキオさんは、コーヒーがお好きなのですか？」

「紅茶も、日本茶も、好きだよ」

「では、明日は、今年のファーストフラッシュを淹れて差し上げますわ」

「実家から玄米茶とほうじ茶を貰ったので、それを淹れますね」

アキオの両隣りでは、ミントとちとせがいつもの様に火花を散らしていた。

他にも、ランファを除くムーンエンジェル隊の面々と、新たに部下になった主計課の女性兵士達に囲まれて、まるでハーレムを形成している様に見えた。

「ふんっ！　俺は、ブリッジに戻る！」

レスターはアキオの事が嫌いであったが、その事を仕事に影響させるほど、度量の狭い人物ではなかった。

数少ない士官学校出のエリオスは、軍属が多いエルシオールの乗組員達をどうにか動かして、ルフトに指定された時間までの出発に漕ぎ着けていたが、ただ必要な人と物を適当に積み込んだだけで、艦内の状況は燦々たる有り様であった。

そこで、一番暇で使えるアキオに、それを整理する仕事を割り振っただけに過ぎなかったのだ。

なのに艦内での評価は、『次席のレイトン准将に階級で抜かれた復讐でしょう』とか、『頭は切れるけど、度量の狭い男よね』とか的外れな意見ばかりあった。

「じゃあ。俺は、向こうに行くから」

「女が、沢山いるからな」

「レスター君。正解！」

「・・・・・・」

食べかけの朝食の載ったトレーを返却口に戻したレスターは、不機嫌そのものと言った表情で食堂を出て行ってしまう。

「お前は、至るところでハーレムを形成するよな。レイトン」

「タクト。他に言う事はないのか？」

タクトのあまりにストレートな物言いに、アキオは少し呆れてしまう。

「レイトンは、背も高いし顔も良いからな。あれ？　でも、お前って、シードル大尉と雰囲気が似てなくない？」

ちゃっかりと女の子達の中心の席に座り、ヴァニラに淹れて貰ったコーヒーの香りを楽しみながら、タクトは一部の人達を驚かせる発言をする。

「「「っ！」」」

「偶然だろう」

「そうか。偶然か。それで、仕事はしなくて良いのか？」

アキオの呆気ない返事に、すぐにタクトは話題を変えてしまう。ただ、自分の一言で顔色を変えた人物が、フォルテとミントとちとせである事を見逃してはいなかったが・・・・・。

「少なくとも、タクトよりは働いてるから」

「お前は、働き者だからな」

「それに、今日は俺は休み」

「えっ！　休みなんてあるの？」

「お前は、毎日あるよな」

「いやあ。それほどでも」

「褒めてねえよ。と言うかなだな。上が休まなきゃ、下も休み辛い。そういうものだろう？」

「そうかな？」

「お前は、そんな事は関係ないからな」

「任せてくれよ」

アキオとタクトの掛け合い漫才を、フォルテ達や主計課の女性兵士達は面白そうに見学していた。

「でも、艦内はちゃんと綺麗になっていて、倉庫もキチンと整理されている。なのに、休みは増えている。どういうカラクリなんだ？」

「どうもこうも。ちゃんと、整理したから休みが増えたんだよ」

今までは、何がどこにあるのかわからなかったり、あっても、取り出すのに時間や人手が掛かるから、無意味に手間が掛かっていたのだ。

そこで、様々な物資を、種類や使用頻度によって倉庫を分けて保管し、細かい物は棚に入れて番号をふったのだ。

そして、入り口の端末で、簡単に検索出来る様にした。

他にも、取り出した数を端末に入れると、残数が明快にわかる様になっていて、数が少なくなった物資が出ると、補給警報が出るようになっていた。

「それを、お前が一人で？」

「そういう命令を出したの。俺が全部やっていたら、二日じゃ終わらないよ」

アキオは、それぞれの仕事の責任者を任命して責任の所在を明確にし、人員のローテーションを組みなおして、レスターに出す書類を作製しただけだ。

それでも、エルシオールの出港以降、緊急事態というただ漠然とした理由で、無駄に長時間ダラダラと働いていた主計課の女性軍属達は、定期的に休みを取れる様になっていた。

なので、今日が非番の彼女達は、アキオと一緒に朝食を取っていたのだ。

「随分と、簡単な事なんだな」

「ああ。簡単な事だ。でも、上が命令しないと誰もやらない。だから、組織には管理職って生き物が存在するんだよ」

「なるほどね」

タクトは、アキオが一言で言うほど簡単ではない事に気が付いていた。

エリオスは基本的に優しい人間であったし、レスターも傲慢というには程遠い人物だ。

それでも、プロの軍人として訓練を受けているので、部下には軍人の態度で接してしまう。

だが、このエルシオールの乗り組員達の半数以上が、元々は白き月に所属する軍属であったので、その対応に慣れていないのであろう。

エリオスや、彼と一緒に白き月に逃げてきたプロの軍人達や、レ

スターに萎縮している女性兵士達を多く見かける事が多かったのだ。
だが、タクトは、アキオが彼女達に、『自分は会社の上司ですよ』程度のプレッシャーしか与えない様に常に気を使っている場面を目撃していた。
彼が第一種正装の軍服を脱いだ理由の一つには、そういう物もあったのであろう。

「（そういう部分が、レスターとの階級差なんだろうな）」

レスターとアキオ。
偶然とはいえ、タクトは、この二人が部下にいる幸運を実感していた。

「休みなら、協力して欲しい事があるんだけどね」

「ナンパの手伝いならお断りだぞ」

「違うよ。シヴァ皇子の事だよ」

「聞きましょう」

アキオは、休日をタクト仕事の手伝いに当てる事とするのであった。

「シヴァ皇子が、何も召し上がってくれなくて・・・・・・」

それは、定期的にシヴァ皇子の食事やおやつを作っているミルフィーユの大きな悩みであった。

「極限まで、餓えさせたら？」

「アキオさん！」

「空腹は、最高の調味料って言うじゃないか」

アキオは、基本的にあまり皇族や貴族の類が好きではない。

だから、シヴァ皇子が飯を食わない程度の事が、さほど重要とは思えなかった。

まさか飢え死にするまで、十歳の子供が食事を拒絶するとも思えなかったので、あまり深刻に考えていなかったのだ。

「無理矢理に、食べさせるわけにもいかずか。好きな物とかは試した？」

「はい。色々と手を変え品を変え・・・・・・」

「我侭な神輿だなあ・・・・・・」

それは、アキオの本音であった。

まだ十歳の子供でしかないシヴァ皇子が、エオニア討伐後に皇王の座に即位しても、それは象徴としての役割しか期待できない。

だが、愚鈍な大人の皇王よりは、民衆の同情を買い易いので、皇国の安定には寄与し易い。

そういう考えで、アキオはシヴァ皇子に接していた。

「お前ねえ。そう思っても、普通は口には出さないぞ」

「伯爵家の三男坊のお前さんに言うのも何だけど、貴族の方がよっぽど道具扱いしているだろうが」

ウォッカ大将の下で、エオニアに制圧された宙域以外の皇国領域の安定に身を削っていたアキオは、自分勝手で、バカな貴族と沢山接していた。

『我が領地の奪還を今すぐ頼む。明日には、艦隊を出撃させてくれ』

『金がなくてな。すぐに用立ててくれないか？　何しろ、私は伯爵だからな。難民への援助？　民衆など虫と同じなのじゃ。放っておけば、また涌いて増えるものさ』

『うちの息子を、新皇王候補として旗頭にしないか？　我が家は三代前に、三代前の皇王の娘を嫁にしている。言わば、皇族とは遠戚関係にあっての』

『うちは、二代前に先々代の皇王の三男を婿に入れている！　うちこそ適任じゃ！』

「・・・・・・。酷い話だな」

アキオの話に、タクトやミルフィーユの表情は曇ってしまう。

「レスターだと、キレる可能性があるからな。全部、俺が処理したんだよ。だからさ。月の聖母様だか巫女だか知らないけど、離れ離れになって寂しいから飯を食わない？　なら、その飯は難民の子供に回すから、テメエは餓えて死ね。神輿の代わりなんて、探せばいくらでもいるんだよってのが、俺の本音だね」

実は、皮肉屋で何でも白黒ハッキリ付けたがるレスターを、アキオは物凄く羨んでいた。

なぜなら、そういう仕事をしていても、彼は自分の一個下の階級までちゃんと出世しているからだ。

「その伯爵に、金なんて工面したくないさ。決まっているだろう。だが、断ったとして、お金欲しさに彼がエオニアに通じて、その地位を利用してこちらの情報を集めて流したら？　無意味な人死にが増えるかもしれない。綺麗事で済む世界じゃないんだ」

今までの激務で、ストレスが溜っていたのであろう。

アキオは、全てを吐き出すかの様に自分の意見を大声で話し始める。

「せっかくの休暇が惜しくなった。ミルフィー。シヴァ皇子に皆と同じ食事を出せ。一切の差別をするな。それで食わないのなら、放っておけ」

「えっーーー！　同じ食事！」

ミルフィーユは、驚きの声をあげる。

なぜなら、今までは、ミルフィーユと専門の調理師が、交代で調理を担当していたからだ。

「この国難に、一人だけ特別食なんて贅沢だ。皇子専門の調理師なら、美味しい物が食べられそうだ。皆に出して、士気の維持に務めた方が懸命だ。ミルフィーの作ったケーキやデザートも、皆でおやつに食べた方が、多くに人を幸せに出来る。だから、シヴァ皇子には、同じ食事を出してそう説明しろ。怒られたら、俺の名前を出しても構わん。十歳にもなって俺の考えが理解できないのなら、そんな皇子、敬うに値しない」

アキオはそう言い残すと、タクトとミルフィーユを置いて、フラフラと散歩に出かけてしまうのであった。

「時に、昼寝で時間を潰すのも良い事だな」

アキオは、エルシオールの中にある、銀河展望公園の緑地で寝転んで時間を潰していた。

途中、自家菜園らしき場所で、熟していたトマトを一個失敬したのはご愛嬌であろう。

持ち主に問い詰められたら、後で何か奢れば大丈夫などと考えていたアキオであった。

「うん。なかなかに美味」

「おい！　作物泥棒！」

上から声がしたので、そちらに視線を向けると、そこには、高そうな皇族特有の衣装を着た青い髪の少年が、アキオを見下ろしていた。

それは、二日前に謁見をしたシヴァ皇子その人であった。

「これはこれは。シヴァ皇子様ともあろう高貴なお方が、この様な場所に・・・・・・」

「無礼者が、心にもない事を言うな！」

「臣には、覚えがありませんな」

アキオは、激高したシヴァの追求を涼やかな顔で否定する。

いくら皇子でも、子供は子供。

それに、皇国に対して粘着質な忠誠心を持っていないアキオは、シヴァ皇子に危険がなければそれで良しと考え、一切彼に媚びなかった。

時間の無駄と考えていたのだ。

「タクトとの会話。全て聞いたぞ」

だが、アキオの毒舌は、全てタクトから漏れていたらしい。

シヴァ皇子は、怒りの表情を崩さなかった。

「全てですか？（タクトの野郎。全部、押し付けやがったな）」

タクトは、『アキオなら何とかするだろう』と断言して、シヴァ皇子に先ほどの件を全て報告してしまっていたのだ。

「余が神輿とは、無礼な物言いよな」
「打ち首にでもしますか？」
「口も減らぬ」
「自分としましては、これでも結構皇国に貢献しているのですよ」
「らしいな。故に、増長したのか？」
「増長ですか？　一度してみたいですね」
「埒が明かぬな。それで、余の食事を、皆と同じしろと言ったらしいな」
シヴァ皇子は、アキオに話をはぐらかされている事に気が付き、すぐに本題に入る事にする。
「言いました。このエルシオールの物資も人員も、無限ではないのです。ならば、人々を統べる者として、航行中くらいは臣下と苦労を共にする事も良いのではないかと思いまして。それに・・・・・・」
「それに、何だ？」
「別に食べないのなら、何でも良いではないですか」
「ハッキリと言ってくれるな」

シヴァ皇子は、当初の怒りが少し薄れてきてしまう。
自分に、ここまで本音で接する男を始めて見たからだ。

「あなたは、現在のところ、最有力の皇王候補です。ならば、ちゃんと食事くらいは取って、健康を維持していただきたいですな」

「神輿なのにか？」

「神輿だからです。どんなに優秀な名君でも、傀儡の王でも、それは神輿なのです。多くの民衆に支えられたね。だから、その神輿が食事も取らずに痩せ細っていたら、民衆に大きな不安を与えるでしょう」

「王は神輿・・・・・」

「それに、あなたの王としての真価は、あと十年はしないと出ないでしょうね。何しろ、あなたはまだ子供でいらっしゃる」

「それは、認めよう」

「白き月では、シャトヤーン様の保護がありました。でも、外の連中は、子供のあなたを利用しようとするでしょう。純粋にエオニアを討って、皇国を取り戻すという目的で動いている連中は、極少数です。あとは、この混乱を己の権力の増大に繋げ様とする連中や、下手をするとあなたをエオニアに売ろうとする輩もいるかもしれない。だから、食事くらいは取って健康でいてください。これは、最低限の条件なのです」

アキオは、シヴァ皇子を諭すように自分の意見を述べる。

「余は、王としてまだ未熟だ。知識も経験もない」

その存在を隠され、白き月で育てられていた幼い皇子が、急に唯一の皇族の生き残りとして、最有力の皇王候補となったのだ。

不安を感じない方が、おかしいのだ。

それに気が付いたアキオは、彼にプレッシャーを与えない様に自分の考えを述べる。

「でしょうな。十歳で名君なんてあり得ません。私なら、年齢詐称を疑います。私の十歳の頃なんて、母親にお小遣いを貰って、駄菓子屋で駄菓子を買う事しか考えていませんでした。それに比べれば、十分に立派だと思いますが・・・・・。それに、今のあなたは、能力のある者を信用して仕事を任せれば良いのです。知識がなければ、持っている者を見つけて使えば良い。経験なら、ルフト中将とかウォッカ大将が、佃煮にして売るくらい持っています」

「師匠や上官に、失礼な物言いよな」

「内緒ですよ」

「内緒にしてやらなくもないが・・・・・・」

「それは、ありがたい事です」

アキオの顔を見ながら、シヴァ皇子は少し意地悪な笑顔を浮かべる。

「余の家庭教師となれ」

「自分がですか？」

「余に気を使って綺麗事しか教えない男よりも、お前のような男が家庭教師の方が、将来のためになろう。それに、クールダラス副司令が言っていたぞ。『レイトンは、暇人です』とな」

「左様ですか・・・・・・（あんの野郎！　覚えてろよ！）」

アキオは、心の中でレスターに悪態を突くのであった。

「昨日、お勧めした本ですが・・・・・・」

「読んだぞ」

「なら、結構です」

「細かい内容の確認とかは、しないのか？」

「大体、書いてあることを覚えていれば良いのです。あなたは、受験生やコンピューターではないのですから。後で必要になったら、詳しく調べなおせば宜しい」

「そんな物なのか？」

「ええ。そんな物です」

以前の、白き月でシャトヤーンや他の女官達に受けていた教育と違って、アキオはかなり変わった家庭教師であった。
午前中は主計参謀としての業務を行い、ほぼ二日に一度、午後になってから、シヴァ皇子の俄か家庭教師としての仕事に励む。
これが、アキオの最近の主なスケジュールとなっていた。

「自分は、正規の教師の資格を持っておりませんので、勉強などは教えません」

最初にそう宣言したアキオは、本当に何も教えてくれなかった。
数冊の本をシヴァ皇子に薦め、あとは世間話をするだけであった。

「皇都にあった和菓子屋《霧乃》は、どうなりましたのやら・・・・・。あそこの安倍川餅は、絶品でしたのに・・・・・・」

アキオは、おやつのショートケーキを食べながら、下らない事を言っていた。

「この一大事に、暢気な男よな。お前は」

同じく、ミルフィーユ特製のショートケーキを食べながら、シヴァ皇子が文句を言う。
シヴァ皇子は、ちゃんと食事を取る様になっていた。
多分、色々と周りに言えなかった不安が、少し解消されたからであろう。
そして、その事実を、アキオはほくそ笑んで確認していた。
なぜなら、『この国難に艦内の乗組員達と同じ食事を取る、若いながらも立派なシヴァ皇子』という情報を、後にウォッカ大将に伝えようと考えていたからだ。
きっと、ウォッカ大将ならば有効に活用するであろう。

「そうでしょうか？　普通の市民が、エオニアの理不尽な無差別攻撃で、命と普段の生活を壊されたのです。先日の演説では、さも立派な事を言っている様に感じましたが、信用なりませんね」

そして、この世間話が意外と曲者であった。

アキオは、たまにそれにシヴァ皇子への質問と、自分がいち市民やいち軍人として持っている疑問を織り交ぜて来るからだ。

「だが、父上が、正当な王権を奪ったのも事実だ」

シヴァ皇子は、あまり自分を構ってくれなかったジェラールを好きではないらしい。

更に、この件に対しては、エオニアの正当性を認めているらしい。

「なら、艦隊撃滅後に、彼らだけを捕らえて処刑すれば宜しい。砲撃されたこの国の中枢である皇都の機能回復には、莫大な資金と手間がかかります。そんな事も本当に理解できていない男なら、皇王たる資格はありませんな」

「復讐ではないのか？　王権を奪った者達や、それに同調した者達への・・・・・・」

「（へえ。意外と、物事を良く見ているんだな。良い皇王様になるかもしれないな）なるほど。それは、非常に興味深い意見ですね」

アキオは、シヴァ皇子に皇王としての才がある事を確認し、少し安心する。

もし駄目なら、どうウォッカ大将に報告しようかと思っていたからだ。

「珍しく褒めるのだな。実は、一つ聞きたい事があったのだ。お前がもしエオニアの元にいたら、どうやってこの国を獲る？」

実は、シヴァ皇子の質問は、かなり不謹慎なものであった。

なぜなら、アキオの出生を知る者であれば、誰もが一度は考えてしまう事だからだ。

「はい。辺境に国を興して、ジェラール陛下の老衰を待つでしょうね。それから、新皇王の反体制派を利用して、中央に時間をかけて整備した軍を進めます」

だが、アキオは、そんな事は億尾にも出さずシヴァ皇子の質問に正直に答える。

多分、これが他の人の質問なら、彼は適当に幼稚な意見を言うだけであったろう。

「黒き月が、あってもか？」

《黒き月》。

それは、白き月と対を成す、エオニアが大量に用意した艦隊を生産した、無人の軍事要塞の事であった。

名もなき辺境を彷徨う内にこの黒き月を見つけたエオニアは、僅かな期間で皇都を陥すまでの戦力を用意できたのだ。

「黒き月があってもです。確かに、大量の兵器は整えられましょうが、人材が極端に不足している故に、後の占領地域の統治に失敗しています。これが良くありません。時間をかけて国を興していれば、そこから人材を連れて来れる」

「統治か・・・・・・」

「はい。戦争になれば、確かに軍人や一部民間人への犠牲は避けられません。犠牲になった者達やその家族・友人の悲しみは深い。ですが、他の、何の犠牲もなかった人達はどうでしょうか？　彼らの一番の関心事は、より良い生活です。それが、現在の皇国によっての結果だろうと、新たな支配者によっての結果だろうが、どちらでも良い。侵略者でも、善政を敷けば後で評価されます。そういうものなのです」

「そこに、正義はないのか？」

シヴァ皇子は、否定される事はわかっていたが、子供じみた正義論をアキオにぶつけてみる。

「ありますよ。その侵略者は、善政を敷いているじゃないですか。彼は正義です」

「しかし、犠牲者がいるではないか」

「はい。いますね。しかし、全員を幸せに出来る政治など、絶対に存在しません。それを目標に、最大限の努力をするのみなのです。時に、小を切り捨てて大を取る選択をする事もあります。その時、統治者は、多くの人を救えて良かったと感じるでしょうが、一方で切り捨てられた方は堪らない。それが、統治者と民衆の間にある永遠のテーマだと私は考えます。それに、我が軍が中央の奪還を目指せば、敵にも味方にも死人は出ます。ですが、あなたは選択せねばならない。エオニアを討つ事を」

アキオは、自分なりの政治論をシヴァ皇子に説明する。

「それは、辛い選択だな」

「ですが、何もしなければ、人々はもっと困りますし、少数の方を選ぶ統治者などは論外です。適切な時期に正しい選択して、それを迷わず進め、その結果を全て受け入れる。これが、私なりに考えた良き支配者の条件です」

「・・・・・・。なるほど。お前の意見は参考になった。しかし、統治者とは、大変なものなのだな」

「故に、それなりに贅沢な生活が送れます。善政が敷けていれば、少しくらいご馳走を食おうと、高い酒を飲もうと、美女を数人妾にしようと文句は出ないものなのです」

難しい話が続いていたので、アキオはまた話を下らない方向に逸らした。

「女には、興味はないな」

「私の経験から申し上げますと、もう二～三年もすれば・・・・・・」

「もし、余が、男に興味があると申したら?」

シヴァ皇子には、ある重大な秘密があったのだが、それにアキオが気が付くかどうかを試してみる事にする。

「それでも構いませんが、後のために、お世継ぎくらいはお設け下さいませ」

だが、さすがのアキオでも、それには気が付かなかった様だ。

「余はまだ子供だからな。それで、大人のレイトンは、結婚しないのか？」

自分には、人を喰った様な態度と発言で接するアキオに慣れてきたシヴァ皇子は、今度は逆に彼を困らせる様な質問をする。

アキオが、シヴァ皇子にこの様な態度を取る理由。

それは、あまり立身出世や自己保身に興味が無かったからだ。

アキオは、フレスコやその取り巻きに殺される事を潔しとせずに動いていたので、それに関する部分では非常に慎重であったが、その他の部分では意外と無謀な事をする事があったのだ。

「予定は、皆無ですね」

「恋人も、おらぬのか？」

「いません」

いないと言うよりは、する気が無いという方が正解であったが、それをシヴァ皇子に話すつもりは無かった。

「そなたは、あのシードル大尉と同じで、女性の関心を得やすそうに見えるがな」

「彼は、モテるでしょうな。何しろ、新公爵様でいらっしゃる」

貴族に大きな権力が与えられている皇国において、シードル公爵家程の大家の当主が不在という事実は、決して許される事ではなか

った。
そこで、状況が落ち着いたら、シヴァ皇子がエリオスのシードル公爵家の新当主就任を公の場で承認し、中央奪還への決意を語らせるというイベントが密かに惑星ロームで計画されていた。
勿論、その下らないイベントの準備をしているのは、ジーダマイヤ大将であった。

「そなたも、なかなかに資産家だと聞いたが」

「実感は、ゼロですけどね」

アキオが賭けで購入し、そこに莫大な資源が眠ってる事が確認された惑星ウニでは、今、急ピッチで開発が進んでいた。
特に、今度のエオニアの反乱で、中央での資産と市場を失ったブラマンシュ財閥が気合を入れて開発をしているらしく、既に最初に掘り出された資源が、隣の惑星サンタンで精製され、それが市場に出回るまでに事業は進んでいた。

辺境軍が、戦力を整えるにも、戦力の元となる経済を立て直すにも必要と判断されたこの新鉱山惑星は、軍の協力もあって順調に開発が進んでいた。

「口は悪いが、忠臣よな。そなたは。後で、貴族に任命しようか？」

「自分は、気楽な市民でいるのが好きなんですけどね」

こうして、今日のアキオの家庭教師の時間は、無事に終了するのであった。
そして、シヴァ皇子は、この親しい人には少し口の悪いアキオをえらく気に入り、彼を不定期ではあるが、呼び寄せる事を自身の習

慣とするのであった。

「なあ。アキオ。一つ頼まれてくれないか？」

そして、翌日の午後、暇を持て余していたアキオは、フォルテからお願いをされる。

「銃の的なら嫌だ」

「銃の的みたいな仕事なんだけどね。シミュレーションの敵役さ」

惑星ロームを目指して航行中のエルシオールでは、その整備の面倒さや部品供給への不安から、紋章機を使った訓練が減少する傾向にあった。

ただ、それで練度を落しても意味がないので、通常はシミュレーション機材を使った訓練が多く行われていた。

「敵役に、色々な考えを持った人物を当てる。機械の様に、似たパターンばかりだと、皆。天狗になってしまうからね」

それは、実戦経験のあるフォルテならではの意見であった。

既に、三回目のレゾムの追撃を撃退し、シミュレーションでも満点に近い成績をあげているムーン・エンジェル隊の面々に少し慢心

が見られるらしいので、その鼻を少しへし折って欲しいとのフォルテのお願いであった。

「俺。シミュレーションの成績は、あまり良くないよ。レスターにお願いしたら？」

実は、士官学校時代のアキオは、その成績に反比例して、シミュレーションを使った演習の成績がいまいちであった。

「あれだけ見事に、艦隊を指揮していた人間がかい？」

「擬似空間だと、現場の空気が読み難い。だから、苦手なんだよ」

ところが、現場では違うらしい。

中尉時代に、惑星セルドリックで緊急に艦隊の指揮を執って大戦果を挙げていたし、先日も出迎え艦隊を巧みに指揮して、レゾムの艦隊をかなり討ち減らしているからだ。

「実戦経験後だから、今度は大丈夫だと思うけどね」

「駄目元で、やってみますか・・・・・・」

「自分の艦隊に置き去りにされた准将が、敵役ですか？　正直なところ、楽勝ですね」

「やれやれ。フランボワーズ少尉の厳しいこと」

アキオとフォルテがシミュレーションルームに入ると、ランファの口から最初に出た言葉がそれであった。

「ランファ。上官に失礼だよ」

「フォルテさんだって、タメ口じゃないですか。それに、うちの司令官さんは、フレンドリーなのが好きなんですよ」

エルシオール艦長兼ムーエンジェル隊司令タクト・マイヤーズは、軍隊特有の堅苦しい雰囲気を好まない人物で、部下達には自分の事は名前で呼び、階級や役職などは付けないようにと常に釘を刺して回っている程の人物であった。

「確かに、タクトはそうだったよな。じゃあ、俺もそれに見習うか。ランファちゃん。お手柔らかに」

「・・・・・っ！」

アキオに挑発されて、顔色を変えたランファは、駆け足でシミュレーション用の簡易コックピットに座り、自機であるカンフーファイターの微調整を開始する。

「ランファ。落ち着きなよ。見え見えの心理戦じゃないか。前に、レゾムが引っ掛かっていたろう」

「嫌ですね。フォルテさん。私が、落ち着いていないとでも？」

「そうは言っていないけどね」

だが、ランファがいつもよりも熱くなっている事に、フォルテはすぐに気が付いていた。

「ランファ。どうして、そんなにアキオさんに喰って掛かるの？」

「なぜか、気に入らないからよ！」

ミルフィーユの質問に、ランファが簡潔に答えた直後にシミュレーションマシンが作動し、周囲は宇宙空間に包まれる。

「マップナンバー、Ｂ－２５８。エルシオールに進撃する敵艦隊の阻止と撃滅が今回の任務だ。気を抜くんじゃないよ！」

「「「「「了解！」」」」」

ムーンエンジェル隊の隊長であるフォルテの号令で、ミルフィーユ達はレーダーに映っている敵艦隊の迎撃に向かう。

「へえ。エオニア軍の特徴でもある黒い艦隊か。外見も性能も、ちゃんと測定値内にあるな」

エルシオールに積み込まれた最新のシミュレーションマシンは、過去に戦闘を行った敵の外見や性能を素早く分析し、それを敵としても味方としても使用する事が可能であった。

敵の司令官役を引き受けたアキオは、自軍の戦力を把握すると、素早く戦隊を組み直し始める。

「士官学校次席のエリート様は、大して変わり映えのしない陣形をお選びなんですね」

確かにランファの言う通りで、一見するとアキオの艦隊の陣形は、士官学校の教科書通りの基本的なものであった。

「シンプルイズベストさ。エルシオールに攻撃をかける」

アキオは、紋章機の後方にいるエルシオールに攻撃を仕掛けるべく、前衛の戦力を進撃させる。

「気にはなるが、それぞれに割り当てた敵を撃破！」

「「「「了解！」」」」

フォルテの命令で、ミルフィーユ達はそれぞれが得意の戦法や必殺技で駆逐艦や突撃艦や戦闘機をいつもの様に破壊して行く。

だが、それは本当にいつもと同じで、アキオが特に変わった戦法で意表をつく様な事はなかった。

「フォルテさん。おかしくありませんか？」

「おかしいが、アキオの意図が掴めない」

ミントは、自分の疑問をフォルテにぶつけてみるのだが、アキオの意図が掴めない以上、取りあえずは目前の敵を攻撃する以外に策はなかった。

そして、十分程で、アキオの戦力は二割ほど撃ち減らされ、それと同時にムーンエンジェル隊は、自分達が敵に包囲されている事に気が付く。

「目前の敵を撃つ様に仕向け、それに集中している間に、私達を分断して包囲体制にまで持っていくのかい。やるね。アキオ」

少し時間をかければ、突破は十分に可能であったが、後方のエルシオールに向けて数隻の突撃艦部隊による突進が始まっていたので、あまり時間を掛けるわけにはいかない。

だが、フォルテのハッピートリガーは、二隻のザーフ級戦艦に集中的に攻撃を受けていて、いくら火力が強力なハッピートリガーでも、この状況にはかなり辛いものがあった。

他にも、ランファのカンフーファイターは、中距離から数方向の巡洋艦の砲撃を受けて時間を稼がれて、得意の接近戦に持って行かれないようにされていた。

ミントのトリックマスターは、フライヤーに集中しようとすると、数機の戦闘機が邪魔に入り、それを排除しようとすると、その戦闘機は逃走を始め、またフライヤーに集中しようとすると、接近してきて邪魔をするという、嫌らしいフェイントを繰り返されていた。

だが、本当に一番苦戦していたのは、遠距離戦闘には強いが、懐に入り込まれると弱いちとせのシャープシューターで、彼女は数十機の戦闘機部隊に集中的に攻撃を喰らっていた。

「私を最初に!?」

「悪いな。ちとせ。ヴァニラのハーベスターが、最重要目標なのでな」

アキオは、ハーベスターを早期に撃墜すべく、その護衛や援護に入る事が多いちとせのシャープシューターに攻撃を集中する。

「ちとせさん。回復を・・・・・・」

「させるか！」

アキオは、自軍の戦闘機の大半をシャープシューターへの攻撃と、ハーベスターの包囲・追撃に使っていたので、ハーベスターはシャープシューターに接近する事ができないでいた。

ちとせは、懸命に迫りくる戦闘機を撃ち落していくが、無人戦闘機群は武装を撃ちっ放しにしながら、最後に特攻をかける事すら躊躇しなかった。

始めは、シャープシューターのシールドで懸命に防御していたちとせであったが、遂に戦闘不能状態へと陥ってしまう。

更に、残ったほとんどの戦闘機群は、本来の第一目標であるハーベスターに攻撃を集中し始め、ヴァニラはひたすら逃げ続けるしか生き残る術がなくなっていた。

「ええい！　旗艦は、後方の戦艦！　《ストライクバースト》！」

苦戦している戦況を一気にひっくり返すべく、フォルテは少し後方にいたザーフ級戦艦をアキオの旗艦であると判断し、それに向けて全ての武装を開放した。

さすがの戦艦もこれは堪らなかったらしく、誘爆を繰り返しながらその存在を崩壊させていく。

「おかしい。旗艦なら、敵部隊に大きな混乱が・・・・・・。しまった！」

「必ず、後方の戦艦に司令官が乗っているとでも？　まだまだ甘いよ。フォルテ」

「ええい！　旗艦は、巡洋艦か？　それとも、駆逐艦か？」

「教えてくれる敵がいるとでも？」

「クソっ！」

大半が無人艦艇であるエオニア軍の軍艦には、迅速で正確なリモートコントロールが行える様に、索敵・通信機器がかなり強化されていた。

つまり、どんな小型艦艇でも、艦隊指揮を柔軟に行えるのだ。

そして、戦艦を撃破するのに、ほぼ全てのエネルギーと弾薬を使い切ったフォルテは、一度後方に下がって補給を行う必要があった。

「（アキオに、してやられたか・・・・・）。ランファ！　ミルフィー！」

「私も、自分で精一杯なんですよ！」

「ふえーーーん！　敵が多過ぎます！」

ランファは、数箇所からの嫌らしい時間稼ぎの遠・中距離砲撃によって、得意の接近戦を行う頻度を落されて、思ったほど敵の数を減らせず、万能機であるラッキースターを操っていて、神懸り的な強運をアキオに警戒されているミルフィーユは、一番多くの敵に囲まれていた。

アキオの見事なまでの敵情分析と、巧みな戦力配置の妙であった。

今までの、多少の士官教育を受けていたので敵役に任命された白き月の軍属達とは比べ物にならない、本物の教育を受けた軍人の力量であった。

「（戦況は、こちらが有利だ。だが。それでも戦力は半数近くにまで減っている。やはり、恐るべき兵器だな。紋章機は・・・・・）

」

エルシオールに止めを刺すべく、もうかなりの近距離にまで接近していた数隻の突撃艦のレーダー反応を見ながら、ムーンエンジェル隊の強さに内心で恐怖を感じていた。

「（無人艦艇だから、使い捨てにも出来よう。だが、もしこれが有人艦隊なら、俺は勝っていると言えるのか？）」

それでも、突撃艦戦隊は、エルシオールを射程距離に入れようとしている状態であった。

更に、それを現時点で防げる紋章機は一機も存在せず、勝負はアキオの勝ちとなるであろう。

いくら高性能の紋章機とはいえ、母艦であるエルシオールを失ってしまったら修理も補給も出来ず、宇宙の孤児になってしまうからだ。

「フォルテさん！」

「間に合わないんだよ！　ランファこそ！」

「無理ですよーーー！」

フォルテは、エルシオールの近くに移動していたが、肝心の弾薬の補給は間に合いそうになかった。

体を張って止めるという策も考えたのだが、突撃艦と紋章機では質量に差があり過ぎて、上手くいかないであろう。

フォルテは、アキオが無人艦艇のみの艦隊ゆえに、戦力を使い潰す事を躊躇していない事に気が付いていたからだ。

「ミルフィー！」

「ええと・・・・・。ええい！　一か八かのぉーーー！　《ハイパーキャノン》！」

自分を包囲していた敵の半数以上を仕留めていたミルフィーユは、その突撃艦戦隊に向けて、自分の必殺技を発射した。

「おいおい！　そんな遠距離からじゃあ！」

「ミルフィーのバカぁ！」

「えーーーっ！　酷いよ。ランファ」

だが、この一撃で、戦況は全てひっくり返ってしまった。

突撃艦戦隊には当たらなかったハイパーキャノンであったが、その前に、とある一隻の駆逐艦の艦橋部分を掠っていて、シミュレーターは中にいた司令官の戦死を宣言したからだ。

『司令官戦死。以後の無人艦隊は、人工知能によって行動します』

「えっ！　俺が戦死？」

旗艦がバレない様に、とある駆逐艦戦隊の三番艦に座上していたアキオの呆気ない戦死により、動きが緩慢となった戦闘機部隊から、ミントが脱出に成功。

フォルテの弾薬補給終了まで、突撃艦戦隊の猛攻をフライヤーで防ぎ切り、後に復帰したフォルテによって突撃艦戦隊は全滅。

後は、半数を切っていた艦隊が全滅するまで、二十分と掛からなかった。

つまり、勝負は、ムーンエンジェル隊の逆転勝利となったのだ。

「負けたな。戦場での、無意識の一発の恐ろしさか」

「でも、あれでは、私達の勝ちとは・・・・・・」

ミルフィーユは、自分で負けを確信していたので、この判定には納得がいかないらしい。

アキオに、非常に申し訳なさそうな表情を向けてて、フォルテ達も決して納得していないらしく、同じく複雑な表情をしていた。

「ミルフィー。そんな顔をするな。どんな手を使っても、どんな偶然があっても勝ちは勝ち、負けは負け。戦争とは、そういうものなんだから」

「ですけど・・・・・・」

「勝負は水物なのさ。約束通りに、好きな物を奢るから、元気を出しな。ほら。行くぞ」

「あっ！　はい！」

アキオは、ミルフィーユの手を引きながらティーラウンジへと移動を始め、それに残りの面々も付いて行く。

「好きな物を頼んでいいよ」

「何にしようかね？」

「酒は、駄目だよ」

「頼むか！」

甘い物があまり得意ではないフォルテは、日本茶と手焼き煎餅を頼んでいたが、他の面々は普通にケーキやパフェなどのデザートを注文していた。

「女の子に何かを奢ると、スイーツな感じで良いね。男だと、昼飯パート2って感じだからな。でも・・・・・・」

「ちなみに、女の子じゃないのが一人いるとか抜かすと、鼻の穴が三つになるかもしれないよ」

「嫌だなあ。フォルテさん。友人である僕が、そんな暴言を吐くとでも？」

「思わないけどさ。念を押したまでさ」

銃のホルダーに片手を置いたフォルテに恐怖しながら、アキオは、自分で注文した安倍川餅を食べながらほうじ茶を飲んでいた。

「アキオさんは、安倍川餅がお好きなのですか？」

「好きなのかな？　亡くなった母が、良くおやつに作ってくれたから、メニューにあるとつい頼んでしまうんだよね」

「そうなのですか（和菓子なら、私の得意分野。自室に招待できる口実が・・・・・・）」

「今度、ご馳走しますわ（最高の材料を手に入れれば、私の勝利は

確実。なぜなら、私は、罪深きお金持ちの家の生まれだから・・・・・）」

アキオの両脇の席を独占というか、他の人を絶対に座らせないミントとちとせは、また対決の火花を散らしていた。

「お母さんの手作りねえ。准将って、意外とマザコンなんですね」

今までの経緯からして、ティーラウンジに付いて来ないのでは？と思われていたランファであったが、チームワークを考慮してなのか、特に何も言わずに付いて来て、一番大きいフルーツパフェを遠慮なく頼み、遠慮なくアキオに厳しい一言をぶつけていた。

「ランファさん！　いくらなんでも失礼です！」

「そうですわ！　アキオさんに謝ってください！」

「だって、事実じゃないの」

ちとせとミントは、ランファに謝るように詰め寄るが、ランファは一切聞く耳を持たなかった。

「まあ。事実なんだろうね」

「認めるんですね」

「物心付いた頃から、母一人子一人だったからね。それに、亡くなってまだ六年。最近は、思い出す事も少なくなったけどね・・・・・」

「あの・・・・・。お写真とかは持っているのですか？」

「一枚だけね。ほら」

アキオは、持っている携帯端末に入れた写真をちとせに見せる。それは、ジュニアハイスクールの入学時に、親子で撮った写真であった。

「綺麗な人ですね」

ちとせは、自分と同じ黒髪をしたアキオの母親の写真をうっとりと眺めていた。

「自慢だったんだ。でも、亡くなる直前は病気で痩せ衰えてね。可哀想だから、その頃の写真は全て始末したんだ」

ちとせは、アキオは完全に母親似であると確信しながら、他の面々にも写真を回し始める。

「遺伝子ってのは、偉大だよね」

「他に言う事はないのか？　フォルテ」

「いいじゃないか。母親似で、人生勝ち組なんだからさ」

アキオは、一旦しんみりとし始めた雰囲気を軽口で上手く吹き飛ばしたフォルテに素直に感心していた。

「そうですよね。私も、こんな美人になれるといいなぁ」

「ミルフィーなら大丈夫さ！　可愛いし、料理も上手だからさ！」

「えっ？」

突然、どこからか現れたタクトに、ミルフィーユは驚きを隠せないでいた。

「どっから沸いたんだい？　司令官殿」

「人をゴキブリみたいに言わないでくれよ。フォルテ」

「すまないね。司令官殿」

「それと、俺だけじゃないんだな。これが」

「今日の演習は、なかなかに面白かったですね。レイトン准将」

「エリオス様ぁ！　エリオス様も、ご休憩ですか？」

タクトの隣にはエリオスがいて、彼にお熱のランファが黄色い声をあげていた。

正直、非常に珍しい組み合わせであった。

「負け戦さ」

「でも、ムーンエンジェル隊をあそこまで追い詰めたのは、あなただけでしたよ」

「そうなのかい？」

「ええ。私も、敵役をやった事がありますが、あそこまではとても・・・・・・」

以前に、エリオスも、シミュレーションの敵役をした事があるらしい。

「そういえば、アキオと同じ様な戦法を使っていたね」

フォルテは、エリオスとの模擬訓練の内容を思い出していた。

「考えは似ています。でも、それを、タイミング良く正確に行う腕と経験がなかったんです」

エリオスは、あのフレスコの息子で、士官学校を三位という優秀な成績で卒業していたので、十分に才能を持っていた。

ただ、アキオが二歳年上で、その分余計に経験を積んでいた事と、アキオが辺境の危険な任地を転々としていたのに対して、次期公爵として戦死や殉職など絶対にさせられないエリオスが、任地を軍本部と第1方面軍艦隊と近衛艦隊にみに限定されていた点が大きかったのであろう。

一度の実戦経験は、数年の訓練に勝る時がある。

だから、アキオは強いのだと、エリオスは気が付いていた。

「エリオス様。ご一緒にお茶でもいかがですか?」

「フランボワーズ少尉。エリオス様ってのは、ちょっと止めてほしいのだけど・・・・・・」

「だって、エリオス様は、新公爵様でいらっしゃるから」

「軍内で、爵位は関係ないですよ」

「（建前はね。坊ちゃま！）」

アキオは、偶然とはいえエリオスを顔を合わせてしまい、内心で舌打ちをしていた。

何も知らない彼は、アキオを純粋に尊敬しているらしいのだが、アキオにとっては、それは迷惑でしかなかったからだ。

「オヤツタイムか。俺も、何か注文しようかな？」

「奢らないぞ」

「レイトンのケチ」

「お前は、貴族だろうが。なら、お茶代くらい出せよ」

「俺は、軍の給料だけで生活している貧乏貴族なのに」

その後、タクトとエリオスも加わって表面上はとても盛り上がっていたのだが、アキオは、内心の居心地の悪さを解決する事ができなかった。

「やれやれ。表にはこの不快感は出なかったらしいな。助かった」

ティータイム終了後、アキオは一人トイレの洗面所の前で自分の顔の確認をしていた。

行き所のない怒りを秘めた、日頃は決して他人には見せない冷たい表情。

アキオとて、エリオスには何の罪もない事は理解できていた。

だが、アキオは機械ではなく感情を秘めた人間なので、彼のせいで今まで何でも死線を掻い潜っていた事を思うと、冷静ではいられなかったのだ。

「一度でいいから、この手で思いっきりぶん殴ってやりたいな」

勿論、そんな事は出来ないので、アキオはトイレの固い壁を力一杯殴り付けてその感情を押さえ付ける。

手の皮膚は破れ、そこから血が出始めていたが、高揚する気分のためか痛みは一切感じなかった。

アキオは、持っていたハンカチで血を拭うと、トイレから出る事にする。

「大丈夫ですか？　アキオさん」

「ミントか・・・・・・」

外では、アキオの行動を予想していたのか、ミントが待ち構えていた。

「大丈夫って、何が？」

「あら。お忘れですか？　私。人の心が読めますのよ。先ほどは、相当に荒れていましたわね」

「筒抜けか・・・・・・」

どうやら、先ほどの、エリオスに向けていた暗い感情を全てミントに読まれてしまっていたらしい。

「狭量だよな。俺は・・・・・・。あいつに、何の罪もない事はわかっているんだ。でも、あいつと直に接すると、沸き上がる物が抑えられない」

いつもは、顔を合わせない様に努力しているのだが、今日の様な不可抗力はたまに存在いていて、その度にアキオは心を曇らせていたのだ。

「私は、当然だと思います。それよりも、その怪我を治療しないと・・・・・・」

ミントは、怪我をしたアキオの手に、自分のハンカチを巻き始める。

「治療？　自然に治るさ」

「駄目ですわ。ちゃんと、医務室で治療しないと」

小さいミントに引っ張られる様にして、アキオは医務室へと移動する。

「あら。珍しい。准将殿が、何の用事かしら？」

「・・・・・・・・・」

医務室では、軍属の医者から正式に軍医になったケーラが、ヴァニラに淹れて貰ったコーヒーを飲みながら、彼女に編物を教えていた。

「腕の怪我なのですが・・・・・・」

「喧嘩でもしたの？」

「・・・・・・」

「まあ、いいわ。ヴァニラ。治療してあげなさい（自傷行為かしら？　らしくないわね）」

ほとんどの外傷を、ナノマシンを有するヴァニラが治療してしまうので、ケーラは検査やカウンセリングに長けた医師になっていた。

なので、アキオがなぜ自分で何かを殴り付けて怪我をしたのかを、ケーラは特に問わない事にした。

どうせ、聞いても話さないであろうし、話さないという事は何か深い事情があると判断してからだ。

「はい」

「すまないね」

「いいえ。治療します」

編物を中断したヴァニラは、ケーラの代わりにアキオの前に座る

と、ハンカチを巻いた腕を取り、傷口に手をかざし始める。
　すると、ヴァニラの手が光り始め、それと同時にアキオ手の傷が徐々に塞がっていく。

「実際に見ると、凄いものだね」

「いいえ。大した事では・・・・・・・」

「シミュレーションの時・・・・・・・」

「はい・・・・・・」

　アキオの言葉に、ヴァニラは思わず身構えてしまう。
　いくらシミュレーションとはいえ、集中的にアキオに狙われていたからだ。

「集中して狙った理由はそれさ。ヴァニラ。君は、物凄い能力を持っている。戦場で、壊れた兵器が短時間で直る。プロの軍人である俺には、一番の脅威に感じたんだ。だから、集中して狙った」

「はい」

「でも、こうして人を治療する事も出来る。多くの人を殺してきた血生臭い俺よりも、何十倍も何百倍も素晴らしい能力だ。壊すのは、簡単だ。ただ引き金を引けばいい。でも、再生させる事や治す事は、とても難しくて尊い事なんだよ。だから、君は優しくて素晴らしい」

　完全に傷の塞がった手の甲を見ながら、アキオはヴァニラを笑顔で見つめていた。

「あの・・・・・。レイトン准将は、シードル大尉が嫌いなのですか？」

人の心が読めるミントや、事情を知っているフォルテやちとせ以外には、絶対に気が付かれない様に振舞っているつもりであったが、ヴァニラには完全に気が付かれていたらしい。

彼女は、核心を突く質問をしてくる。

「気が付かれないと思ったんだけどね・・・・・・」

「答えて欲しいです」

「詳しい事情は、君に害を成す可能性があるから言えない。彼自身を嫌いだとは思いたくないんだ。俺は、彼の血が嫌いだ。でも、その血が自分にも流れていて、俺はこの血を憎悪している」

「アキオさん！」

詳しくは話せないとは言いながらも、ヴァニラに呆気なく最大の秘密を話してしまったアキオに、ミントは抗議の声をあげる。

「いいさ。ヴァニラは、不用意に人に話すような事はしないさ。それに・・・・・・」

アキオは、ケーラの方にも視線を送る。

「医者には、守秘義務があるからね。患者の秘密は守らせて貰うわ」

「さすがは、ケーラ先生。では、この怪我の事は内密に」

そう言い残すと、アキオは素早く医務室を後にする。

「ミント。あなたたは、知っているわね？」

「ええ」

ケーラの問いにミントは短く答え、すぐにアキオを追うためにミントも医務室をあとにするのであった。

「アキオさん。待っていてくれたのですか？」

「まあ。普通の礼儀としてね・・・・・・」

ミントが医務室を出ると、すぐ横の廊下でアキオが待っていた。

「血まみれのハンカチを、返さないといけないしね」

「私を、どこの家の娘だと思っているのですか？　ハンカチくらい、何枚でも買えますわ」

「でも、俺の気分的にね」

「では、私の好きなハンカチを買ってくださいな」

二人で宇宙コンビニに向かうと、そこでは先客のミルフィーユが、一本五百ギャラのクジ引きをしているところであった。

「また金色の玉ですね。これって・・・・・・・」

「はい・・・・・・。一等賞です・・・・・・・（こいつ。これで四回連続で・・・・・・・）」

当然、上の等級を引けば引くほど、得になるシステムであったので、コンビニの店員は、ミルフィーユの強運ぶりに血の涙を流していた。

「あっ！　ミントとアキオさんだ」

「相変わらず、ツイているんだな」

「えへへ。凄いでしょう」

「凄いね。そうだ。俺も、引いてみるか」

だが、アキオがクジ引き機のレバーを回すと、そこからは白い玉が飛び出した。

「末等のポケットティッシュです」

「普通は、こんなものだな」

「ですよね」

コンビニの店員とアキオは、この結果に納得した様な表情になる。

「それじゃあ。私は、シヴァ皇子にデザートを作るので」

先にミルフィーユはコンビニを出たので、アキオとミントは二人きりでコンビニ内で、目的の物を探し始める。

エルシオールに一軒しかないこのコンビニは、コンビニとは思えない充実した品揃えを誇っていた。

「これなんてどうかな？」

「あら。フローラルピンクですか？」

「少女趣味過ぎて嫌い？」

「いいえ。良くおわかりになりましたね。私の好きな色が」

「勘だけどね。じゃあ。これを、代わりにね」

アキオは、プレゼントである事を店員に言って、購入したハンカチを包装して貰い、それから銀河展望公園のベンチに移動する。

「買った店の前で渡すってのも、何だからね。はい。ミント。ありがとう」

「ありがとうございます。嬉しいですわ」

「安物だけどね」

「あら。私が、値段の大小で一喜一憂すると思いまして？」

「思わない」

銀河一の財閥の一人娘であるミントは、高額なプレゼントを貰う事に慣れていたので、高級ブランドのハンカチを貰っても大喜びしない事は確実であった。

ただ、想い人であるアキオからのプレゼントが嬉しかったのだ。

「すまないね。ミント」

「あら。何がですか？」

「俺は、当に気が付いているんだ。ミントの気持ちも、ちとせの気持ちもね・・・・・・」

「そうですか・・・・・・」

ミントは、貰ったハンカチの包みを大事そうに膝の上に乗せながら、顔を赤らめて下を向いていた。

「俺は、正直なところわからないんだよ。恋愛とかそういう事が。見知った知識で、それなりに女性をエスコートする自信はある。でも、十五歳の頃から、貧乏士官候補生として生きるのに精一杯だった。卒業後には、フレスコの魔の手から逃れて生き残る事に精一杯だった。ジュニアハイスクールの頃に、初恋の同級生と家まで一緒に帰って、途中でアイスクリームを買って食べながら話をしたくらい。その程度なのさ。それからは、恋にときめくよりも、死の恐怖に心臓を高鳴らせ、今日を生き延びた事に感謝する日々。ウォルコット中将と組むまでは、そういう生活だったんだ・・・・・・」

そして、それに巻き込まれて死んだ部下や上官もいた。

自分と組まなければ、死なないで済んだのかもしれないのだ。
それを考えると、自分が人並みの幸せを得ても良いのであろうか？
暇になると、たまにアキオは考え込んでしまうのだ。

「でも、フレスコ・シードル公爵の死は、ほぼ確実だとか・・・・・・」

「息子がいる」

「あの方がですか？　あんな善人は、珍しいと思いますが・・・・・・」

「善人だから危険なんだよ。あの規模の大公爵家だ。余計な口を挟む連中がいて、そいつが奴を唆すかもしれない。油断はできないよ」

ここ数年、常に自分の生を疑って生きて来た、アキオらしい慎重さであった。

「そうですか。では、私は、アキオさんが納得するまで待ちますわ」

「待つ？」

「ええ。あなたが、安心して普通の生活を送れる日まで、女性にまた恋心を抱ける様になるまで、それが、私かどうかは、まだわかりませんけど」

「・・・・・・・・」

アキオの周りには多くの綺麗な女性がいたが、恋愛対象として見ている人物はまだ皆無であった。

「ですが。私は、今日始めてブラマンシュの家に生まれて良かったと感じていますわ。だって、その力で、あなたを守って差し上げられるから。お父様は、アキオさんを気に入っていますから、安心して婿にいらしてください」

「えっ！　婿？」

「では、私はこれで」

ミントにプロポーズに近い告白を受けたアキオは、嬉しそうに自室に戻るミントを見送りながら、一人ベンチで硬直していた。

そして、近くの茂みでは・・・・・・。

「アキオさんとエリオスさんが、兄弟？」

「なるほど。ルフト先生との思わせ振りな会話にあんな秘密が・・・・・」

たまたまデザート作りに必要な食材を自家菜園に採りに来ていたミルフィーユと、それを手伝っていたタクトは、とんでもなく重大な秘密を聞いてしまう。

どうやら、今回のミルフィーユの強運は、アキオにとっては良くない方向に働いていた。

「確かに、公言すると命が危ないかもな・・・・・・」

貴族の生まれゆえに、貴族社会のダークな部分を心得ているタクトが、秘密にするもの仕方がないと言った顔をする。

「ミントには、話してもですか？」

「実家が実家だから、知っていたんだろう」

「でも、私にも話して欲しかったな・・・・・・」

「ミルフィーの身を案じてだと思うよ。あいつ。ミルフィーの事を、実の妹の様に可愛がっているから」

シヴァ皇子を、惑星ロームまで無事に届けるために始まったエルシオールの逃避行はまだ始まったばかりであった。

そして、エリオス・アキオの兄弟の運命がどうなるのか？

それは、まだ誰にもわからなかった。

第七話

「そうですか・・・・・・。ミントに、そんな話を・・・・・・」

「ミントに話して、ちとせに話さないなんておかしいからな」

「でも、嬉しいです。アキオさんが、正直に自分の心情を話してくれて」

ミントと銀河展望公園で話をした翌日の午後、同じく昼までに仕事を終えたアキオは、ちとせの自主訓練に付き合っていた。

専用の胴衣に着替えて、急造の弓道場で二人は弓を引いていたのだ。

「私も、アキオさんが好きです。ミントに譲りたくない。これが、私の正直な気持ちです」

「そうか・・・・・・。でも、俺のどこが良いんだろう?」

「アキオさんは、優しいですから」

自分で精一杯の癖に、戦友やそれに関係する人達のために懸命に働くことを厭わない。

自分では気が付いていなかったが、アキオは多くの経験や実力のある叩き上げの下士官や将校にとても人気があった。

なぜなら、実力があれば、自分の出来る範囲で彼らを引き上げる事を躊躇しなかったからだ。

渋る上層部に、緩急自在の策を用いて自分の目的を達成する。

時にかなり際どい手を使うので、それがレスターに嫌われていた

が、最終的に成果をあげているので、中央での評判は最近かなり良い。
これが、アキオ・レイトンという軍人であった。

「和弓か。ちとせは、胴衣が似合うんだね」

「アキオさんも、似合っていますよ」

「そうかな？」

アキオは、弓を力いっぱい引いてから、的に狙いを付けて矢を放つ。
すると、矢は端ではあるが、一応は的に命中していた。

「アキオさん。経験があるのですか？」

「士官学校時代に、体育の実習で二時間ほどね」

「それで、的に当たるなんて凄いですね」

次に、ちとせが弓を引いて矢を放つと、矢は的の真ん中に見事に命中した。

「上手いな」

「いえ。まだまだです。アキオさん。胴衣の紐が、解けてますよ」

ちとせは、顔を赤くさせながら、アキオの解けた胴衣の紐を結び始める。

「実は、洋弓なら、実戦で使っていた事があるんだ」

「洋弓をですか？」

「クロスボウだね。和弓だと、障害物の多いジャングルでは引き難いから」

アキオが、フォルテと一緒に戦っていた惑星サーヴァントで、一時銃が戦場で使えない事態が発生していた。

それは、現地の原始部族を、ゲリラ達が味方に引きずり込んだからだ。

狩猟採集生活を送る彼らは、現地のジャングルに巧みに溶け込み、猛毒を仕込んだ吹き矢でこちらを攻撃を仕掛けて来た。

それに反撃をしようとこちらが銃を用意すると、嗅覚の鋭い彼らは、火薬の臭いを嗅ぎ分けて姿をくらませてしまうのだ。

おかげで、多くの戦友が吹き矢の毒が理由で戦死していた。

「その毒がまた厄介でね。植物が原料の彼らが狩猟に使う毒で、ジャングルの奥地で自生しているらしいんだけど、俺達には採集不可能。場所がわからないし、わかってもゲリラの勢力圏だからね。成分の分析を行うも、未知の成分が検出されて、手持ちの解毒剤ではあまり効果がない。おかげで、多くの仲間が戦死したよ」

結局、その数が少ない原始部族の戦闘可能人員を減らすために、こちらも毒を仕込んだ洋弓で戦う事となった。

原始部族が多くの犠牲を出し、中央政府の停戦案を受け入れるまで一ヶ月、アキオは、フォルテ達と多くの敵をクロソボウで射殺していた。

「フォルテさんもですか？」

「銃は名人なんだけど、洋弓は下手だったな。フォルテは・・・・・・」

それでも、毒を仕込んだ矢で、当たれば良しと考えられていたので、特に問題とはならなかったが。

「実はこの後、そのフォルテさんに銃を習う事になっています」

「俺もそう。前より下手になってたら、怒られるんだけどね」

その後、一時間ほど弓を引き続けた二人は、揃ってフォルテのいる射撃場に向かう。

「フォルテさん。今日も、宜しくお願いします」

「自信ないです。最近、忙しくて・・・・・・」

「何だってぇーーー！」

「多分、大丈夫なのではないかと・・・・・・」

だが、意外にも、アキオ腕はほとんど落ちていなかった。的のど真ん中より少しズレた位置に、次々と銃弾が命中していく。

「僅かに、ど真ん中に行かないな」

「発射時に、微妙に腕の軸がズレているからさ」

「なるほどね」

フォルテのアドバイスを受けたアキオは、次からはど真ん中に銃弾を命中させ始める。

「アキオさんって、器用ですよね」

「こんなに上達の早い人間も珍しい」

ちとせは、アキオの器用さに素直に感心し、フォルテも、もう教える事はないと言った顔をしていた。

「それで、次は？」

「ランファさんに、軍隊式格闘技の訓練を」

「練習熱心だな」

更に、一時間ほどの射撃訓練の後、二人はランファのいるトレーニングルームへと移動する。

すると、ランファは先に体を温めるために、サンドバックに強烈な打撃を繰り返していた。

「うへぇ。鋭い攻撃」

「あら。准将もいらしてたんですね」

「いらしてたんですよ」

アキオは、ランファに喰って掛かられたり、挑発される事が多かったので、彼女に気を使う事を止めていた。

それに、あのエリオスにお熱という点も気に入らなかった。
ハッキリと言えば、権力や財力のある男に媚びる《嫌な女》だと思っていたのだ。

「ちとせの付き合いでね」

「そうですか・・・・・・。あっ！　そうだ！　准将。私と一勝負しません？」

「えっ！　俺が？」

「自信がないのなら、断っても良いですよ。准将が、少尉風情にボコボコにされたら、周りの視線も痛いでしょうし」

明らかな挑発であった。
どうやら、ランファは、先日のシミュレーション訓練で碌に活躍できなかった事を根に持っているらしい。

「俺。頭脳労働者なんだけどね。誰かさんと違って」

「っ！　そうですか・・・・・・」

アキオも、負けじとランファを挑発しに入る。

「では、少しだけ付き合いますか」

アキオは、早速にランファと同じ道着に着替えてから、試合場の中央で対峙を始める。

「十分勝負で、急所攻撃以外は有効。これで、良いですか？」

「いいよ。じゃあ、早速に始めますか」

ランファとアキオが模擬戦をすると聞いて、多くのギャラリーが駆け付け、トレーニングルームは珍しく人で溢れ返っていた。

「負けると大恥ですね。准将（エリオス様並のイケメンなのに、なぜかムカつくのよね。この男・・・・・・）」

「実力差から言って、俺が負けて当然。ランファちゃんこそ、油断して大恥をかかないようにね」

「行くわよ！」

またアキオに、《ちゃん》付けで呼ばれて激高したランファは、アキオに次々とパンチや蹴りを繰り出し始める。

だが、その攻撃は、常にギリギリのところでアキオにかわされ続けていた。

「逃げてばかりでは勝てませんよ！　准将！」

「当たらない攻撃ばかり繰り出して疲れない？」

「怪我をしても、恨まないでくださいね！」

ランファは、更に攻撃の手数を増やしていくが、攻撃は一向に当たる気配を見せなかった。

「フォルテさん。これは？」

試合を見学に来ていたミントは、隣のフォルテに説明を求める。

「動体視力が抜群に良いんだね。アキオは。正直なところ、格闘技では、アキオがランファに勝てるわけがない。攻撃をかわし続けてチャンスを待つしかないんだ」

アキオは、基本的な軍隊式格闘技の訓練は士官学校時代に受けていたし、銃やナイフを用いた実戦式戦闘術の訓練も、フォルテや任地の担当官から受けていた。

だが、ランファの様に達人クラスかと問われれば、答えはノーであった。

《一流の中》《A＋》くらいの実力であろう。

《S》のランファと素手で一対一でやって、勝てるはずがなかったのだ。

「さっきから、全然攻撃してませんね！」

「そんな隙ないだろう」

模擬戦は、ランファの鋭い連続攻撃をアキオがかわし続けるという展開のまま、遂に残り一分を切ってしまうが、ここで状況を一変させる出来事が発生する。

この模擬戦の事を嗅ぎつけたミルフィーユが、タクトと一緒にトレーニングルームに姿を現したからだ。

「へえ。凄い観客だな」

「アキオさぁーーーん！　ランファーーーっ！　やっと、仲良しさんになったんだねぇーーー！」

「へっ？」

「んなわけないでしょうがぁーーー！」

今まではいがみ合っていて碌に口も利かなかったが、一緒に訓練や模擬戦をするまでに仲良くなった。

そう考えたミルフィーユの天然発言にアキオは唖然とし、ランファは試合中にも関わらず力一杯否定する。

「ランファ。テレちゃって」

「違うっての！」

「隙あり！」

「しまった！」

当然の如く、ランファには、いつもならばあり得ないほどの隙ができ、それをチャンスと考えたアキオは、ランファの懐に入り込み、そのまま一本背負いの要領で彼女を投げ飛ばしてしまう。

「うっ！」

辛うじて受身は取れたランファであったが、彼女の喉元にはアキオの手刀が添えられていた。

つまり、実戦であれば喉をかき切られて終わり。

ランファの負けであった。

「悪いね。フランボワーズ少尉」

「・・・・・・。また、勝負してください」

「普通にやって、俺に勝ち目があるとは思えないな」

「・・・・・・・・・」

卑怯とか汚いと言うのは、簡単な事であった。

だが、それを言ってしまえば、試合中に隙を作ったランファ自身が惨めになるだけだ。

そう考えた彼女は、言い訳がましい事を何も言わずにトレーニングルームをあとにする。

「意外と芯の強い女なのかもな」

続いて、アキオがシャワーを浴びるためにトレーニングルームを出て、最後に、大勢の観客がまるで潮が引く様にいなくなっていく。

「私も、訓練でもしてみましょうかしら?」

「銃でも習ったらどうだい?」

「教えてくださいますか? フォルテさん」

「私は、厳しい先生だよ」

「望むところですわ」

「・・・・・・・・・。あの。私の訓練って、どうなっています?」

トレーニングルーム内には、一人置いてけぼりを喰らったちとせが、呆然と立ち尽くすのであった。

そして・・・・・・。

「弓に銃に格闘技。久しぶりに体を動かしたな。俺」

服を全て脱ぎ、タオルを腰に巻いてシャワーへと直行したアキオは、そこで意外な人物と顔を合わせる事になる。

同じく、シャワーを終えて、タオルを巻いていたランファと視線が合ってしまったのだ。

「あの・・・・・・。准将？」

「えっ！　いたの？」

「乙女の柔肌を、この男は・・・・・・」

ランファは、怒りのボルテージを徐々にあげていく。

「張り紙くらい・・・・・・」

「あんたこそ！　人がいるのか確認くらいしろ！　烈風千烈脚！」

「ぬぁーーー！（下の毛も金髪・・・・・・）」

ランファの必殺の蹴り技をくらい、シャワールームの壁に叩き付

けられて意識を失う直前、アキオは偶然に見えてしまったある部分の事を考えていた。

「ランファ。アキオに限って、わざとはあり得ないんだから、やり過ぎだよ」

その後、気絶したアキオは、騒ぎを聞き付けて現れたフォルテ達によって医務室に運ばれ、再びヴァニラの治療を受ける事となっていた。

ただ、ナノマシンでは、脳震盪までは治療できなかったので、彼は医務室のベッドで意識を失ったままであった。

「そんな事、わからないじゃないですか。こいつも、男で野獣だった。そういう事じゃないんですか？」

「准将閣下を、こいつ扱い・・・・・・。エルシオール以外なら、懲罰ものですね」

「何よ！　文句あるの？　ちとせ！　こいつこそ、セクハラで軍法会議ものよ！」

ちとせは、ランファの上官侮辱罪はすぐに成立すると考えたが、アキオのセクハラが、軍法会議で立件されるとは思わなかった。

偶然の要素が、あまりにも強過ぎたからだ。

「私も、やり過ぎだと思います」

「あんたなら、見られても責任を取って貰えて、万々歳でしょうけどね！」

「私は！」

「怪我人がいるのに、そんな下らない言い争いは止めてください。アキオさん。大丈夫ですか？」

ミントは、ベッドで意識を失ったままのアキオの額に濡らしたタオルを載せながら、懸命に看護を続けていた。

「それに、見られたって事なら、アキオこそ不幸だったね」

タオルを腰に巻いただけの状態でランファの必殺技を喰らったアキオは、フォルテ達が駆け付けた時には完全に全裸で、全員が顔を真っ赤にしながら医務室に運んでいたからだ。

「男は、いいのよ！」

「男女平等ではないかと思いますが・・・・・」

アキオの額に載せていた濡れタオルを絞り直してまた額に載せながら、ミントがポツリと漏らした。

さり気なく男をサポートする、家庭的な出来た女性。

策士であるミントは、このコンセプトで甲斐甲斐しく意識を失っているアキオの世話をし、出遅れたちとせの顔に青筋を浮かばせていた。

「ううっ・・・・・・」

「アキオさん。大丈夫ですか？」

アキオは、意識を覚醒し始めていたが、まだ夢と現実の区別が付いていなかったのであろう。

とんでもない事を、口にしてしまう。

「あの女・・・・・・・。下も、金髪・・・・・・・」

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

アキオを除く全員が、後ろからのただならぬ気配の高まりを感じて後ろを向くと、そこにいるランファは、今までに見た事がないほどの憤怒の表情を浮かべていた。

「なあ。ランファ。落ち着けよ」

「相手は、怪我人ですし・・・・・・」

「まだ完全に覚醒しているわけでも・・・・・・」

フォルテやミントやちとせの取り成しは、全くランファの耳に入らず、遂にランファの感情のダムは崩壊の時を迎える。

「目を覚まさない内に、強制的に記憶を消す！　無理なら、その存在自体をを消すわ！」

「ランファ！　落ち着け！」

「上官の殺害は、銃殺刑ですわよ！」

「駄目です！　アキオさん！　逃げてください！」

「ねえ。ヴァニラ。下も金髪って？」

「私にも、わかりません・・・・・・」

フォルテ達が、懸命にランファを押さえ込んでいる横で、天然のミルフィーユとその手の知識が皆無のヴァニラは、二人で首を傾げるのであった。

「さあ。酒を出しな」

「もうこれしかないけどね」

軍内において、アルコールの管理は非常に厳重だ。

個人での持ち込みは絶対に禁止で、艦内でも非番の者に限られた量のみが提供され、その種類も貧弱であった。
それに、非常時ともなれば、すぐにアルコール分解剤を飲まされて酔いの余韻すら楽しめない。
そういうルールになっていた。
ただ、世の中の規則というものは、半ば破られるために存在しているらしい。
いつの時代でも、アルコールを忘れられない者が、密かにアルコールを艦内に持ち込むために涙ぐましい努力を続け、ある者は失敗し、ある者は成功する。

実は、アキオには、困った悪癖が存在していた。
それは、彼が自前でアルコールを艦内に持ち込む名人であったという事だ。

「私物を極端に減らし、限界ギリギリまでトランクに詰め込んだ酒も、残り一本と少々。後は、食堂やコンビにのの不味くて薄いビールと、安っぽいサワーのみ。あの人工的に合成されたリカーの不味いこと。不味いこと」

「あんな甘ったるい酒。おでんに合う通りもない」

残り少なくなった純米焼酎を、二つの小さいコップに注ぎ、食堂で注文したおでんを肴に、フォルテとアキオは、残り少ない酒をアキオの私室で楽しんでいた。
ムーエンジェル隊の中で唯一の二十歳超えのフォルテと、同い年のアキオは同じ酒好きであったし、フォルテは、サーヴァント戦線時代からアキオの悪癖を知っていて、彼がエルシオールに酒を持ち込まない筈がない事を知っていたので、二人は夜にコソコソと酒を一緒に飲む事が多かった。

「おや？　もうないのかい？　最後の一本を出しな」

「補給の当てはないんだけどね・・・・・・」

「飲んでから考えるのが、酒飲みの宿命なんだよ」

「わかったよ。では、最後の一本！　七十年熟成の最高級ブランデー《〇ポレオン》をここに！」

「そんな高い酒を、どうやって手に入れたんだい？」

「勿論、買ったんだよ。自前で」

トランスバール皇国軍の高級将校の給料は、一般のサラリーマンよりはかなり高額だが、その責任や仕事量に比べると薄給という評価が一般的とされていた。

ここ数年で次々に昇進を重ね、独身で養う必要のある家族もおらず、無料の官舎住まいで、忙しくて外にあまり遊びに出る事もなかったアキオは、給料のかなりの部分を酒に費やしていた。

「相場だと、五十万ギャラくらいだっけ？」

「一ヶ月の給料が、三分の二も飛んだ」

「准将ともなれば、そのくらいは貰えるんだね」

「いや。あのクーデター以来、昇進はあっても昇給はない。それだけで、エオニアは罪深い存在だな」

アキオにとってのエオニアの印象の大半は、自分を超過勤務地獄に追い込んだ酷い奴というものでしかなかった。

「そりゃあ。難儀な事だねえ。じゃあ、せめてその酒を楽しもうかね」

「この酒に氷は邪道。ちゃんと、冷蔵庫で・・・・・・」

だが、アキオが、私室に備え付けてある小型冷蔵庫を開けると、なぜかそこには何も入っていなかった。

「・・・・・・。あれ？　おかしいな？」

「どうしたんだい？　早くあの至福の液体を！」

だが、何度冷蔵庫を開けても、中に入れたはずの酒瓶は見当たらなかった。

「ない・・・・・・。なぁーーーい！」

「ないで済む問題かぁーーー！」

「持ち主が、一番ショックなんじゃーーー！」

フォルテとアキオの不毛な言い争いは、その後十分ほど続くのであった。

「とにかく落ち着くべきだな」

「そうだね。で？　他の場所に仕舞ったという事は？」

「念のために調べてみるか・・・・・・」

不毛な言い争いに疲れたフォルテとアキオは、部屋中を捜索してみたが、やはり酒瓶は見つからなかった。

「見つからないな・・・・・・」

「なあ。アキオ」

「何だよ？」

「エッチな本とかディスクはないのかい？」

「この非常時に、マジで殺すぞ！」

あと数日、飲めるはずだった酒を紛失して、アキオはかなり機嫌が悪かった。

「若いのに、淡白なんだねえ・・・・・・」

「そんな、簡単に見つかる場所に仕舞うか！」

「じゃあ。やっぱりあるんだね。安心したよ」

「お前は、俺の母親か！」

アキオはフォルテの、『言わなくてもわかっているよ』的な態度に少しカチンと来ていた。

「おっと、話が逸れたね。でも、これはとても厄介じゃないかい？」

「そうだな。元々非合法のブツゆえに、盗難の事実を公にできない」

特に、あの真面目一直線のレスターにバレたら、大変な事になるであろうと、アキオとフォルテは思っていた。

「犯人は、大喜びであの酒を独り占めか・・・・・・」

「・・・・・・」

アキオとフォルテに沸々と怒りがこみ上げてくる。

「「絶対に、許せん！」」

二人は、酒瓶を取り戻す事を心に誓うのであった。

「でも、『酒瓶を知りませんか？』と聞くのは、無理だしな。正直なところ・・・・・・」

「だよねえ・・・・・・」

翌日の朝、たった二人でどうやって酒瓶を探そうかと考えながら食堂に向かうと、そこではランファが、みんなに《マダム・ギャブレーの星占い》を見てあげていた。

ランファは、自分で占いをする程の占い好きであった。

「異性運は最悪。好きでもない男性につきまとまれて、大迷惑。特に、予期せぬ出会いにご用心」

「えーーーっ！　最悪ぅ」

ミルフィーユが最悪の結果に、ガックリと肩を落していた。

「占いなんて、当たらん。当たらん」

「何ですって！」

自分の好きな物をアキオに否定されて、ランファは声を荒げてしまう。

「事実だ。当たるも八卦当たらぬも八卦。こんな物に惑わされる時間が惜しい」

男と女の差なのか？

理性派と感情派の差なのか？

アキオは、占いを全く信じない性質であった。

「マダム・ギャブレーの占いは、当たるって評判なのよ！」

「占いより、心理学の達人なんだろう」

占いなど全く信じないアキオは、自分なりの占いの種明かしをしながらランファと睨み合いを始める。

「まあまあ。二人とも、落ち着いて。それじゃあ、私も見て貰おうかな？」

「ええ・・・・・・」

アキオとの対峙を止めたランファは、フォルテの占い結果を見始める。

「異性運は、上昇傾向にあり。旧知の遠方の男性との再会に鍵があり」

「ふーーーん。なあ。アキオ。この旧知の遠方の男性って・・・・・・」

「偶然だ。偶然」

この占いが事実だとすれば、それはウォルコット中将が当てはまるはずであった。

「フォルテさん。そういう人がいるんだ」

「あれがかい？　あれは、年上過ぎだろう」

フォルテは、『それは、絶対にない』と首を横に振り続ける。
他にも、ミントとちとせが、『異性運は、停滞中。ライバルの存在が大きいも、焦りは禁物』という結果が出ていた。

「「（当たっている・・・・・・）」」

ミントとちとせが、恒例となっている火花の飛ばし合いをしていると、そっとアキオとフォルテにコーヒーのカップを差し出したヴァニラの出番となる。

「異性運は、上昇中。今は何もありませんが、後に王子様があなたを迎えに来るでしょう。白馬には乗っていませんが・・・・・・」

「ありえるか！　そんな占い！」

「当たるのよ！」

「じゃあ、ランファはどうなんだよ！」

紆余曲折の末、アキオはランファを呼び捨てで呼ぶ様になっていた。
一応は、タクトの呼びかけに答えたという形だ。
そして、ランファも、アキオと完全にタメ口を聞く様になっていた。
多分、敬うに値しないと考えているのであろう。
少なくとも、アキオはそう考えていた。

「異性運は、僅かではあるが上昇中。一番あり得ないと思っている人と急接近・・・・・・」

ランファが、一番あり得ないと思っている男。
それは、今、罵り合いをしていたアキオその人であった。

「珍しく当たったな。占い」

「えっ？」

アキオの意外な一言に、ランファは驚きの声をあげる。

「それで、レスターとは、いつ式を挙げる？」

アキオは、意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「嫌よ！　あんな、顔は良いけど、無愛想な男！」

「じゃあ、当たってないな」

「私には、エリオス様がいるのよ！」

ランファは、あり得ない想像をしながら目にハートマークを浮かべていた。

「おいおい。新公爵様だぞ。多分、他の貴族家の令嬢とかが、ダース単位で婚約者候補になっているって」

アキオは、一応はランファの事を気遣って早く夢から覚める様に諭すのだが、今のランファにはそれは逆効果であった。

「エリオス様は、そんな事はしないわ！」

居た堪れなくなったランファは、ティーラウンジを飛び出して行ってしまう。

「アキオさん。言い過ぎですよ」

アキオは、ミルフィーユに釘を刺されてしまう。

「事実さ。それに、シードル大尉って、ランファに明らかに興味がないよな」

「確かに、そうですけど・・・・・・」

ランファは、自分の王子様だと思っているエリオスに、常に積極的にアタックを掛けていたが、肝心のエリオス自身が、そういうタイプの女性が好きではないのであろう。

そのアタックは、全くの無駄に終わっていた。

「それで、俺の分の占いは？」

「ええとですね『異性運は、上昇傾向。思わぬ異性と急接近。落し物は見つかるも、深い悲しみに・・・・・・』」

「やっぱり、当てにならん！　行くぞ！　フォルテ！」

「あいよ」

二人は、例の酒瓶を探すためにティールームを後にする。

「えーーーとですね。タクトさんが、『他人から誤解を受けやすい

星の配置です。日ごろの言動には気をつけましょう。積極的な行動で、彼の心をゲット』です。それで、レスターさんが、『異性運は、停滞中。相手の好意に気が付かず、無駄に時を過ごす事になるでしょう』となっています」

「なあ。ミルフィー。その占いって・・・・・・」

「女性用ですよ」

「あっそう・・・・・・。だってさ。レスター」

「俺は、無愛想？　フランブワーズ少尉に、そこまで嫌がられている？　別に、彼女に気があるとかそういう事じゃないぞ。とういか、レイトンは、遂に俺を無視・・・・・・・・？」

隣のテーブルで、朝食後のコーヒーを飲んでいたレスターは、一人懸命に何かと戦い続けるのであった。

「うわっ！　何だ！」

「攻撃を受けた？　奇襲か！」

例の酒瓶を探すべく艦内を移動していたアキオとフォルテは、突然の衝撃に思わず体のバランスを崩してしまう。

『エルシオールに、ミサイルの直撃を確認！　格納庫のあるDブロックです！』

「出撃だ！」

フォルテは、アキオを置いて格納庫へと走り始める。

「俺は、どうするんだ？」

主計参謀という仮初めの肩書きを持つアキオは、取り合えずエルシオールのブリッジへと向かうが、今までのここ数度の戦闘で、アキオに出番があった試しがなかった。

「被害箇所に人員を！　はい。俺の仕事終わり」

「・・・・・。頭にくるが、文句も言えない・・・・・・」

客人であるアキオにこの仕事を割り振ったレスターは、顔を半分引き攣らせていた。

肝心の敵は、僅か二機のシルス高速戦闘機であった。

多分、エルシオールには脅威とはならないであろうが、奇襲で手際よくミサイルを命中させた点などを考慮すると、パイロットはかなりの手練である事が予想させる。

そして、その僅かニ機の戦闘機の放ったミサイルは、エルシオールに予想以上の被害を与えていた。

「格納庫にダメージ？　ラッキースターとカンフーファイター以外は、出撃不能？　どうする？　タクト」

「相手は同じ二機。ミルフィーとランファなら大丈夫さ。二人とも、頼む」

レスターの問いに、タクトは躊躇なく紋章機二機のみの出撃を命令する。

タクトは、普段は艦内をフラ付いていて碌に書類に判も押さない男であったが、戦機を見るのがとても巧みで戦術眼にも優れていた。でなければ、いくら親友とはいえ、切れ者とかカミソリと称されたレスターが、素直に下にいる通りもなかったからだ。

「「了解！」」

「ミルフィーユ・桜葉。ラッキースター。行きまぁーーーす！」

「ランファ・フランボワーズ。カンフーファイター。行くわよ」

ミルフィーユとランファが出撃すると、そこには既に二機のシルス高速戦闘機が待ち構えていた。

「やあ。始めまして。僕のマイハニー。ミルフィー」

「へっ？」

「ぬぉーーー！　俺のライバルはどこだぁーーー！」

「絶叫バカ・・・・・・？」

その二機のシルス高速戦闘機は有人で、そこにはかなり痛い系の人達がパイロットとして搭乗していた。

「マイハニー。君があまりに遅いから、僕は待ちくたびれてしまったよ」

「いきなり人の事を、マイハニーなんて呼ばないでください！」

「だって、他に呼びようがないじゃないか」

「そもそも！　あなたは、誰なんです！」

いくら、ムーンエンジェル隊一のお人好しと言われているミルフィーユでも、この男には腹が据えかねたらしい。

かなり大きな声で、怒鳴っていた。

「君のその怒っている声も、またラブリーだね。おっと、君の永遠の恋人となる僕の自己紹介がまだだったね。僕の名前は、カミュ。カミュ・Ｏ・ラフロイグと言うんだ。まるで宇宙を駆け抜ける風の様な名前だろう？」

「宇宙に、風は吹きませんけど・・・・・・」

「ミルフィー。突っ込むところが違うから・・・・・・」

ミルフィーユは、逆に半分呆れ顔のランファに突っ込まれていた。

「僕は、愛する君の事を理解しようと、懸命に君の情報を集めたのに・・・・・・。まず、士官学校時代の事だ。戦術論の講義で、担当講師に圧倒的多数の敵艦隊に包囲された時の対処を聞かれ、多くの生徒達が困っている中で、『手作りのお菓子を振舞います』と真顔で答えて皆の注目を集めていたよね」

「そんな事も、あったわね・・・・・・」

同じ問題で、一点突破を主張したランファが、過去の事を思い出すように話す。

「だって！　他の人の、どんな陣形や戦術に関する意見も否定されたから・・・・・。味方は、甘い物で頭を落ち着かせて、敵さんは、またお菓子が食べたいから攻撃を止めてくれるかもしれないし・・・・・・」

士官学校を主席で卒業したとは思えないミルフィーユの天然な意見に、同じ士官学校組のタクト、アキオ、レスター、エリオスは、下を向いて懸命のこみ上げてくるものを耐えていた。

「もう一つあるよ。マイハニー。『私の夢。桜花幼稚園年長桜組ミルフィーユ・桜葉。私は、大きくなったら、宇宙船になりたいです。多くの人を乗せて、動物園の星、博物館の星、遊園地の星と宇宙の色々な星を旅したいです。　終わり。』可愛いよ。僕のマイハニー。君はどういうわけか、遠足の日になると、怪我をしたり、トラブルに巻き込まれて、行けなくなってしまう。だから、こんな可愛い夢を持つ様になったんだね」

「ミルフィー。そもそも、人は宇宙船にはなれないじゃないの・・・・・」

「だって、先生が、叶う叶わないは問わないって言うから！」

ミルフィーユは、呆れ顔のランファに懸命に言い訳をしていた。

「俺は、可愛い夢だと思うけどね。それに、子供の頃って、誰だっ

てそんなものだろう？」

「タクトさん・・・・・・」

敵と対峙中にも関わらず、ラッキースターとエルシオールのモニターを通じて、二人は恋人同士の様な雰囲気を作っていた。

「僕を差し置いて、マイハニーといちゃいちゃしないでくれたまえ。全然美しくないタクト・マイヤーズ司令」

タクトに、ミルフィーユとの話中に割って入られたカミュは、顔に青筋を浮かべていた。

「煩いな。変態ストーカーの癖して」

「それは、誰の事を言っているのかな？」

「自分以外に該当者がいると思っていたら、心療内科への通院を勧めるけど」

タクトの容赦ない言葉による攻撃に、カミュは青筋の数を増やしていくが、すぐに気を取り直して本題に入る。

「まあ。とにかくだ。僕の今日の最大の目標は、マイハニーに大切な事を伝える事なんだ。マイハニーミルフィー。君は本当に可愛いね。可愛過ぎて、今にも殺してしまいたい気分だよ。でも、我慢。我慢。今日は、マイハニーとの始めての顔合わせ。初めての時は、大切にしないとね」

「・・・・・・・・・。いやぁーーー！」

「気持ちは理解できる・・・・・・」

「「同じく・・・・・・」」

顔合わせと称して、ラッキースターのスクリーンには、相手のパイロットが映し出されていた。

枯れない様にコーティングされた赤い宇宙バラを指先で躍らせた長髪の男は、名をカミュ・O・ラフロイグといい、エオニアが大金で雇った傭兵集団ヘルハウンズ隊のリーダー的存在であった。

彼は、あらゆる戦局に対応できる優れた戦闘機の操縦技術を持っているのだが、究極のナルシストで、男性用とも軍服とも思えない様なドレスを着用していた。

しかも、ミルフィーユに異常に執着しているらしい。

タクトは、心からミルフィーユに同情し、それにレスターとアキオも賛同していた。

「僕は、ミルフィーのそんな声は聞きたくないな。出来れば、断末魔の美しい声をね！」

「っ！」

ミルフィーユとカミュは、一対一のドッグファイトに突入する。

「ランファ！　殺すぅーーー！」

次に、カンフーファイターのモニターには、やたらと気合の入った叫び声を上げる巨体の男が映し出されていた。

彼の名は、ギネス・スタウトと言い、鍛え上げられた筋肉をもつ巨躯の男で、戦闘機では敵に喰らい付いてゆくような接近戦を得意

としている。
そんな彼の喜びは強い敵と戦う事であり、彼の理論ではそんな強敵を《強敵》と書いて《とも》と呼ぶらしい。
だが、少年漫画なら後の共闘もありえたが、彼は過去に何人もの《とも》を容赦なく殺していた。

「良かったな。ランファ。お友達が出来て」

「アキオ！　覚えてなさいよ！」

ランファとギネスも、ドッグファイトに入ったのだが、今日は本当に顔見せ程度であったらしい。
シムス高速戦闘機のシールドエネルギーの残量が尽きかけると、二機は呆気なく撤退してしまう。

「うーーーん。何かが腑に落ちないな」

「仕込まれたと思うのか？　タクト」

「ただ、それが、何なのかがわからない」

エルシオールの艦長席で、タクトは一人思案に暮れるのであった。

「レスターの報告だと、先のミサイルの被弾箇所には、何もなかっ

たそうだ」

「そりゃあ、ないだろう。すぐに隔壁閉鎖されるから」

「細菌兵器や毒ガスも感知されずだ」

タクトとアキオは、奇襲の後始末に奔走するレスターとエリオスを放置して、ティーラウンジへと向かっていた。

すると、そこに血相を変えたランファが駆け込んでくる。

「この！　盗撮男が！」

「危なっ！　俺を殴り殺すつもりか！」

ランファのいきなりのパンチをかわしたアキオは、彼女に文句を言う。

「あんた！　私のシャワーを覗いたでしょう！」

「へっ？」

タクトとアキオは、ランファにティーラウンジへと連れて行かれ、そこで更なる追求を受ける。

「戦闘後にシャワーを浴びていたら、シャッターの音がしたのよ！」

容疑者として四人の男が挙がったのだが、レスターとエリオスはずっとブリッジに詰めていたし、ランファとしては、前の二人がそんな事をするはずがないと確信していたので、容疑はタクトとアキオに向けられる事となっていた。

「五分前のアリバイは？」

「レイトンと話をしながら、通路を歩いていた」

「同じく。タクトと」

「つまり、アリバイは無しなのね？」

確かに、通路では誰とも会わなかったので、アリバイがないと言えばないのかもしれなかった。

だが、そこまで疑われて、頭に来ない人間がいない事も事実であった。

「あるじゃないか。ランファさん。脳味噌働いてますか？」

盗撮犯扱いされて頭にきたアキオは、お茶ら気ながら指で自分の頭を指し、ランファを挑発する行動に出る。

「共犯という線は、捨て切れないわ！」

「俺も、共犯なの？」

「タクトさんは、そんな事はしないと思います」

「ミルフィー。ありがとう。あんなカミュとかいう変態ナルシストに狙われて大変なのに、俺の事を気遣ってくれて・・・・・・」

「タクトさん・・・・・・」

二人は、ランファすら近づけないほどの、ピンク色のオーラに包まれてしまう。
どうやらこの二人は、いつの間にかこういう関係になっていたらしい。

「じゃあ、タクトは無罪ね」

「そんなんで、無罪確定なのか？　おかしくないか？」

「あんた。彼女がいないじゃないの。つまり、盗撮がバレても悲しませる女性がいないわね」

「さっきから言わせておけば！　そもそも、犯罪者になってまで見る程の物か？　自意識過剰もいい加減にしろよ！」

「何ですってぇーーー！」

「わかったよ！　俺が犯人を見つけてやる！」

アキオは、駆け足でティーラウンジを飛び出すのであった。

「手伝うよ。アキオ」

「サンキュー。フォルテ（別行動だ。例のブツを捜索する大儀名分

が出来たのは良いが、俺の近くにはな・・・・・・）」

勢い良く飛び出したアキオであったが、彼は冷静さをまだ保っていた。

例の盗まれた酒瓶を探す口実が出来て、喜びを隠すのに必死だったからだ。

だが、一つ予想外の事態が発生していた。

それは、自分の近くを、追いかけて来たランファが離れなかったという事だ。

「何で、付いて来るんだよ！」

「証拠隠滅の可能性があるから」

「俺は、どんな極悪人だ！」

「あんた。知恵は回るから」

今更、俺は准将なんだからタメ口は止めろとか、そういう無粋な事を言うつもりはなかった。

ただ、アキオはランファと話していると、感情を表に出し易くなってしまう。

人前であんなに怒鳴ったのは、何年振りであろうか。

そんな事を考えていた。

「私は、他を回るよ」

「サンクス」

例の酒瓶を探すという第二の目的をフォルテに任せ、アキオは艦

内で次々に捜査を続けて行く。
　すると、他にも奇妙な現象が、多数発生していた。
「リッキー・カート君の写真返して」
「俺が取るとでも？」
　格納庫では、整備班長のクレーターが大切にしている美少年アイドルリッキー・カートンの生写真を失くして大騒ぎをしていた。
「ヴァニラの編んでいたマフラーの毛糸が失くなったのよ。准将。知らない？」
「ここもか・・・・・」
　医務室では、ヴァニラがケーラに習って編んでいたマフラーの毛糸がなくなっていた。
「金銭的には、大した物が少ない。侵入者による離反工作か？」
「大げさねえ」
「だが、俺達は実際に動き回っている。何かをするなら・・・・・・」
「あっーーー！　無い！」
「何が？」
　既に大多数の場所の捜索が終わり、ランファが自分の私室に戻る

と、今度は、彼女のサイフに付いていた、打出の小槌のお守りがなくなっていた。

「やっぱり、誰かいるんだ」

「俺を疑わないのか？」

「一緒にいたのに、どうやって私の部屋にあったサイフに手が出せるのよ」

「確かに」

だが、捜査は完全に行き詰っていた。
艦内に、不審者の姿が確認できなかったからだ。

「全然わからないな」

だが、次に偶然廊下で出会ったレスターが、アキオにとんでもない事を口走り始める。

「おい。レイトン。お前、シヴァ皇子の家庭教師の時間ではないのか？」

「いや、明日の予定だけど」

「さっき、ティーラウンジで会った時に・・・・・・。というか、お前。ずっと、フランボワーズ少尉といたか？」

「ああ」

「あの時は、一人で・・・「しまった！」」

アキオとレスターが、敵の本当に目的に気が付いた瞬間、艦内の明かりが一斉に消えてしまう。

「意図的な停電か！　レイトン！　シヴァ皇子の元へ行くぞ！」

「おうさ！」

日頃は仲が悪かったが、そこは非常時であったので、二人は一斉にシヴァ皇子のいる部屋へと走り始める。

だが、それに付いて行けない人物が、約一名存在していた。

「待ってよぉーーー！」

意外にも、暗い場所が苦手なランファが床にへたり込んでいたのだ。

「日頃は、威勢がいい癖に・・・・・」

「誰にだって、苦手な物はあるわよ」

「正論だな。しゃあない。時間短縮だ（可愛いところがあるじゃないか）」

アキオは、ランファを負ぶると、猛スピードでレスターを追いかけ始める。

「ねえ。重くない？」

「ああ。負傷した巨漢のオッさんに比べればな」

サーヴァントで背負った筋骨隆々の負傷兵に比べると、ランファは綿の様に軽かった。

『いくら格闘技に秀でていても、女の子に変わりはないんだな』

などとアキオは考えていた。

「そう・・・・・・（広い背中・・・・・・。安心できて、全然嫌じゃない）」

「近道だ！」

ランファを負ぶったアキオは、近道をするために銀河展望公園を横切るルートを選択する。

すると、真っ暗な公園内の茂みから、小さな人影が飛び出して二人の進路を塞ぐ。

「誰だ！」

「レイトン。私だ。シヴァだ」

「ご無事でしたか」

アキオは、シヴァ皇子の無事に安堵する。

「お前の偽者が現れてな。逃げて来たのだ」

何でも、シヴァ皇子は、『家庭教師の時間です』と言いながら現れたアキオに不信感を感じて逃げて来たらしい。

「良くおわかりになりましたね」

「嫌味なほどに礼儀正しくて、一分の隙もなく余に丁寧な口を利いていたからな。一瞬で偽者と見破った」

「左様ですか・・・・・・」

逆に口調が丁寧だったからという理由で、アキオの偽者をシヴァ皇子が見破ったという事実に、アキオの背中のランファは笑いを堪え切れないでいた。

「ところで、デート中だったのか？」

「なぜ、そうお考えです？」

「フランボワーズ少尉を背負っているからだ」

「「違います！」」

二人は、まるで反発する磁石の様に一瞬で離れてしまう。

そして、停電は直り、艦内は再び元の明るさを取り戻した。

「おーーーい！　レイトン！」

「おーーーい！　レイトン！」

「げっ！　レスターが二人！」

「レイトン。どっちが偽者なのだ？」

一難去って、また一難。
今度は、それぞれに別方向からレスターが二人も現れるという奇妙な現象に見舞われていた。

「どうするのだ？　レイトン」

「皇子の安全のため、両方射殺するか・・・・・・」

アキオは、そう言いながら、構えた銃の安全ロックの解除をする。

「「レイトン。あとで覚えていろよ・・・・・・」」

だが、二人のレスターは全く同じ返事を同じタイミングでアキオに文句を言い、アキオの策は失敗に終わってしまう。

「しかし、本当に困った・・・・・・」

「偽者は、あっちよ！」

アキオの横で注意深く二人のレスターを観察していたランファは、偽者に気が付いたらしい。
右側のレスターに蹴りを入れると、一瞬でそれは破壊された無人偵察ロボット《ブローブ》へと姿を変える。

「光学迷彩装備のブローブだったのか・・・・・・。でも、何でわかったんだ？」

「影の長さよ。クールダラス副司令の身長と、ブローブ本体の影の長さの差。それを、観察していたの」

「なるほどね」

後にブローブの残骸から、ランファのお守りと生写真と毛糸が発見され、直後に誘拐したシヴァ皇子を運ぶ予定だった無人艦隊もムーンエンジェル隊に呆気なく始末され、事件は完全に解決するのであった。

そして・・・・・・。

「占いが当たっていますね。一番あり得ないと思っていたランファさんとアキオさんの急接近」

「確かに、これは警戒すべきですわ」

取りあえずは、普通に話すまでに関係が修復したアキオとランファを見て、ちとせとミントは危機感を募らせるのであった。

「ふぁーーー。結局は、酒瓶は見つからずか・・・・・・」

「なあ。アキオ。あのブローブが、持っていなかったのかい?」

「考えてみたら、酒瓶がなくなったのは、ブローブの侵入前の事なんだよね」

「そういえば、そうだった・・・・・・。ああ。幻の○ポレオン。飲みたかった・・・・・・」

偽者騒動の翌日の午後、ティールームの端の席で、フォルテとアキオは、結局見つからなかった酒瓶の事を話していた。
すると、そこに自作のおやつを持ったミルフィーユが入ってくる。

「みさなん。今日は、沢山ありますからね」

今日のケーキは、リキュール漬けのドライフルーツを大量に生地に練りこんだパウンドケーキであった。

「あら。今日は、大人の味ですのね」

「俺は、甘い物があまり得意ではないのだが。これはイケるな」

ミントや珍しくおやつを食べに来たレスターにも、パウンドケーキは好評であった。

「アキオさんと、フォルテさんもどうぞ」

「「ありがとう」」

二人は、切り分けられて皿に載せられたパウンドケーキの匂いを嗅いだ瞬間に、顔色を変える。

「（おい！　アキオ！　これ！）」

「（この芳醇な香り・・・・・・。確かに、〇ポレオンの・・・・・・。しまった！）」

アキオは、今になって事の真相を思い出していた。

それは、先週のこと。
ミルフィーユは、自分のお菓子作りのために、専用の小型冷蔵庫を厨房に常設していた。
ところが、その小型冷蔵庫の冷凍機能が壊れてしまったらしい。
そこで、アキオが、小型冷蔵庫の交換をミルフィーユに提案していたのだ。
アキオとしては、酒さえ冷やせれば良く、氷は厨房の製氷マシンから拝借してくれれば良い。
そう考えて、冷蔵庫を交換していた。
ところが、どう間違えたのか、アキオは酒瓶を冷蔵庫に入れたままミルフィーユに渡し、ミルフィーユは、それを製菓用のリキュールと間違えてケーキ作りに使ってしまったらしい。
軍内に、酒を持ち込める唯一の例外。
それは、《みりん》と《料理酒》の類であった。

「あの。ミルフィー」

「はい」

「このドライフルーツを漬けたリキュールは？」

「全部使ってしまいました」

満面の笑みを浮かべながら答えるミルフィーユに、アキオとフォルテは絶望の淵に落とされる。

「さいですか・・・・・。フォルテ。美味しいよ。これ」

「ああ。最高の味と香りだね」

二人は、〇ポレオンの風味を涙を流しながら味わっていた。

「気に入って貰えて良かったです。お替わりもありますよ。食べますか？」

「「食べる！」」

それから数日、アキオとフォルテは、ノーアルコールの健康的な生活を送る事となるのであった。

第七話（後書き）

今、一作目のミルフィーユパートをクリアしました。
なるべく、早くに続きを書こうと思います。
ただ、えらく変形させてるので、時間を食っていますけど・・・・・。
全くゲームと同じでは、書く意味が無い様な気がしまして。

第八話

「えーーーと。生鮮食料品、嗜好品、生活雑貨、化粧品等々が不足と……。ちとせ。そっちは？」

「エルシオールと紋章機の、武器弾薬・エネルギーパック・予備装甲板・消耗部品・予備部品等に不足はありません。当分は、大丈夫です」

「シードル大尉め！　本当に、必要最低限の物資しか積まなかったな！」

エルシオールの臨時主計参謀であるアキオは、日々の日課である各種物資の在庫状況の確認を、お手伝いとして付いて来たちとせと一緒に行っていた。

軍艦という物は、大きくなればなるほど人員も増え、日々多くの物資を消費する存在だ。

特にエルシオールは巨大な船で、多くの軍属や軍人達を乗せていて、女性の構成比率が異常に高かった。

古来より、女性とは、服だ化粧だスイーツだと様々な嗜好品を多数消費する生き物であり、それが無くなれば、躊躇なく男に不満を漏らす生き物である。

なので、現在現存する物資のみでも、特に飢えの危険性などはなかったのだが、これが理由で、彼女達に士気を落とされては堪らないと考えたアキオは、最初の物資搭載量比率を考えたエリオスに文句を言っていた。

「誰がどれだけ乗るか？　それを考えて、物資の種類と量を決めるべきなんだ。急いで積み込み優先の割には、イエローゾーンの紋章

機の部品もあるし……」

紋章機という、高性能ではあるが整備に手間の掛かる搭載機を抱えたエルシオールなので、エリオスはかなり多くの関連物資を大量に積み込んでいた。

ところが、その構成比率のバランスはいまいちで、紋章機専用の物は十分にあったが、一部の軍用共通規格部品などの充足率がイエローゾーンに達していたりと、アキオ視点では、五十五点しか与えられない仕事ぶりとなっていた。

どうやら、どこででも手に入ると考えたらしいが、実際には手に入っていなかったので、これはエリオスの手落ちと思われても仕方が無いであろう。

「まだ二～三回の戦闘に耐えられると思いますが……」

「その間に、絶対に次の補給が受けられる保証は？」

「あの……。その……」

確かに、エオニアの支配宙域と味方支配宙域の間を、定期的にクロノドライブを行って進んでいるエルシールに補給の目処は立っていなかった。

それに、シェリーのシヴァ皇子捕獲作戦は未だに進行中で、レゾムを始めとする彼女の部下達が、時折奇襲を掛けてくる状況は続いていたので、アキオは、もう少し各種物資が欲しいと切に願っていたのだ。

「すまん。ちとせは、何も悪くないのに……」

「いえ。いいんです。私も、将校として、もっと大局的に物を考え

ないといけないんですよね……」

いくら白き月の守護部隊という特殊な存在であるムーンエンジェル隊とはいえ、彼女達は若くして将校の地位にある。

無論、ちゃんと教育を受けたからなのだが、例えば四十歳の彼女達の父親の様な年の軍曹は、軍務中は彼女達を常に上官として敬い、命令を受ければそれを拒否できない立場にある。

『軍隊とは、そういう場所なのだ』と言ってしまえばそれまでなのだが、そういう怖い面があるからこそ、将校は将校としての責任を果たすべきだとアキオは考え、そう思われる様に行動していた。

「どこかで、物資を調達するか」

「どこかって、この近辺に惑星なんてありましたっけ？」

「そういえば、無いんだよな……」

有人惑星やステーションの周辺を航行すると、エオニアのスパイに通報される可能性があったし、なるべく効率的なルートを模索した結果、エルシオールはかなり孤独な航行を続ける羽目になっていた。

「タクトに相談するか」

「では、そろそろ時間なので、お昼ご飯にしましょう」

「そうだな。腹が減っては、何とやらだな」

「はい」

残存物資量の調査を終えたアキオは、ちとせと一緒に食堂へ向かうのであった。

「メニューが貧弱になったな」

「使える食材の数が減ったそうですから」

アキオは、食堂の《本日のランチ》の張り紙を見ながら、ちとせの作ってくれたお昼ご飯を食べていた。

梅干入りのおにぎり、ワカメの味噌汁、ほうれん草の御浸し、サバの味噌煮と、ちとせの家では良く作っていたメニューであった。

ただ、このメニューには、食材不足の影響がモロに出ていて、保存の効く米と海苔と梅干しでおにぎりを、味噌と乾燥ワカメで味噌汁を、ほうれん草は、唯一例外で銀河展望公園の一角で作られている自家菜園の物を、サバミソは缶詰という内訳になっていた。

「おにぎりか。懐かしいな」

「お口に合うと良いのですが」

「うん。美味しい」

「良かった……」

少し遅れての昼食をちとせと二人で取り、そのメニューはちとせの手作りであったので、周りの人達には二人は恋人同士の様に見ら

れ、その中の一部は、ちとせを非常に恨めしそうに見つめていた。
アキオの部下達の中には、彼に私的な好意を持っている人物が数名いたからだ。

「コンビニのおにぎりは、まあまあなんだけど、手作りを食べてしまうとね」

「やはり、亡くなられたお母様が？」

「名前が、キョウコだったからね。ちとせと同じご先祖だったのかもしれない」

そんな話をしながら昼食を終えた二人は、ティーラウンジへと移動する。
すると、そこでは、ランファがミルフィーユに喰ってかかっていた。

「ミルフィーが、遠慮なしに取るから、私の分が無くなっちゃったでしょ！」

「でも、全部食べたかったし……」

「子供みたいな事を言わないでよ！」

「なあ。どうしたんだ？」

アキオは、近くにいたミントに事の真相を尋ねる。

「バターと生クリームが不足して、今日の分のケーキが最後だったのですが、ミルフィーさんが、全部自分の皿に盛ってしまいまして

……」

それで、自分の分のデザートが無くなってしまったランファが、激怒してしまったらしい。

「なあ……「ミルフィー。それは、良くないんじゃないか？」」

アキオがミルフィーユに注意しようとすると、そこに、実戦時以外は万年暇男であるタクト・ヤイヤーズ司令が現れて、ミルフィーユを諭し始める。

「物資が不足しているんだ。同じ仲間同士、足りなくても分け合って、次の補給を待つ。それが、生死を共にする仲間ってものじゃないか」

「タクトさん……。そうですね。ランファ。ごめんね。二人で分けよう」

「私も大人気なかったわ。タクト。たまには、良い事言うじゃないの」

「いつも言ってるけどね」

「いつもは行動が伴わないから、そう聞こえないのよ」

士官学校の同期で、ムーンエンジェル隊の中でも一番仲の良い二人は、一つの皿に載ったミニケーキを平等に分けて食べ始める。

「それで、主計参謀のアキオは、この事態をどう考えているのかしら？」

「といいますと？」

「明日から、分けるケーキすら作れない、この状況をよ！」

ランファは、ミニケーキを食べながら、今度はその怒りの矛先をアキオへと変える。

「調達先があれば、可能な限り素早く手に入れるけどね」

「無責任ね」

「俺は、タクトの部下だからな。タクトの命令がないと動けないの。それに、この禄に惑星すらない宙域のどこで物資を調達せよと、ランファさんは仰るので？　ここには、宇宙コンビニの支店などもございませんが」

「ああ言えば、こう言う。本当に、口の減らない男ね！」

「相変わらず、口の減らない女だな！」

アキオとランファは、ティールームのど真ん中で睨み合いを始めてしまう。

先の事件で、少し仲の良くなった二人ではあったが、些細な事で口喧嘩をするのは以前と変わりがなかった。

「あの。ケーキは無理ですけど、こんな物で良かったら……」

真面目で優秀な軍人であるちとせは、同時に古来の伝統を守る奥ゆかしい女性でもあった。

先のお昼ご飯に続き、数種類の手作りのお菓子を差し出す。

「そうか！　もち米と小豆と大豆は、まだ沢山あるんだよな。みたらし団子に、おはぎに、安倍川餅か。俺。安倍川餅が大好物なんだ」

「お口に合うと良いのですが……」

「美味しいじゃないか。凄いな。ちとせは」

安倍川餅を食べながら、アキオはちとせの料理の腕前に感心していた。

「いえ。それほどの事では……」

「本当に美味しい。ちとせ、後で作り方を教えて」

ムーンエンジェル隊のご飯係との呼び声高いミルフィーユも、ちとせの作った和菓子の味に素直に感心していた。

「和菓子か。私は、甘さ控えめでこっちの方が良いかも」

フォルテは、珍しく二本目の団子に手を出していた。

「美味しいじゃない。でも、今度は、辛い団子も作って欲しいわね」

「ランファが、ドバドバと唐辛子を使うから、もうストックがない。こんな事は、軍人生活で始めての事だ……」

ランファスペシャルと称し、様々なメニューを千倍の辛さにしてしまう彼女のせいで、エルシオールの要補給物資に唐辛子が入って

いるという異常事態が発生していた。
普通の船で、こんな物が不足する事など滅多になかったからだ。

「何よ！　文句あるっての？」

「そんなに辛くしたら、何を食っても一緒だろうが！　物資が勿体無いんだよ！」

「わかるわよ！」

「わかるわけないだろうが！」

「ミントさん。お口に合いませんでしたか？（やはり、アキオさんの幼少の頃と、私の実家の食生活は、良く似ているようですね。『男性は、胃袋で落す』。本当に、昔に母が言った通りになるとは……）」

再び対峙を始めるアキオとランファの傍で、ちとせはミントにだけわかるように勝ち誇った笑みを浮かべる。

「いいえ。とても、美味しいですわ（悔しいですが、教わらない事には、私には和菓子の類は……。これは、早くに物資を調達するべきですね）」

ミントは、自分の勝ち目のない分野からの離脱を図るべく、タクトに物資の購入を進言しようと決意する。

「でも、あれだな。こんなに美味しい和菓子が作れるほどの物資があるなら、補給の必要は……」

「タクト……、バカが……」

ちとせの作ったおはぎを食べながら、タクトはこの艦の女性の大半を怒らせる発言をしてしまう。

「タクトさん！　私は、ケーキが作れない生活なんて嫌です！」

お菓子作りが趣味でもあるミルフィーユは、珍しく大きな声でタクトに不満を述べていた。

「それに、お気に入りのメーカーのボディーソープとシャンプーが、品切れなのよ！」

「司令官殿。おでんのネタが売っていないなんて、私は嫌だからね。それに、銃の弾薬！　これがないと話にならない」

「駄菓子の種類も、非常に貧弱になりましたわ。それに、お気に入りの惑星シフォン製の茶葉も切れましたし……」

「私も、ケーキは食べたいです」

続けて、ランファ、フォルテ、ミント、ちとせにも、タクトは詰め寄られてしまう。

「ウーデット社の機械オイルと、リッキー・カート君の新曲！」

「今年の新色の毛糸と、超抗生物質！」

「夏物の服！」

「新発売の恋愛小説！」

「善処します……」

「「「「「「「「「「善処なんてヌルい（です）！　早急に補給を！」」」」」」」」」」

他にもタクトは、整備班長のクレーターや、医務室のケーラや、他の女性軍属達に囲まれ、必要な物資の補給を強く懇願されてしまうのであった。

「タクトは、バカだなあ。女性は、色々と物入りな存在なんだよ」

「補給を、考慮するしかないのか……。それで、レイトンは、何をしているんだ？」

逃げる様にティーラウンジを脱出したタクトは、エルシオールの倉庫内に逃げ込み、そこで何かの集計作業のような事を行っているアキオ、ミント、ちとせを発見する。

「必要な物資の種類と量の計算ですわ。アキオさんのお手伝いです」

「それと、一般的な相場を調べています」

アキオは、手伝ってくれるミントとちとせを使って、物資を効率

良く購入する準備を行っていた。
今は購入出来るのかわからなかったが、後にあった時に備えて準備をしているのだ。

「でも、どこから購入するんだ？」

「タクトさん。このクロノ・ドライブを抜けると、未確定宙域であるアストラル星系に出ます。そこで、ブラマンシュ財閥の支部に交渉してはいかがでしょうか？」

アストラル星系は、一応はエオニア軍の支配下にあった。
クーデター当初に無人艦隊が襲撃し、駐留艦隊が撤退してしまったからだ。
ただ、人材不足のエオニア軍の占領統治は、無人艦隊を貼り付けておくだけで、実質的は各惑星の政治は、現地の政府に丸投げの状態らしい。
なので、ミントが持っているブラマンシュ財閥専用暗号コードで通信すれば、商機を逃したくない彼らがすぐに駆け付けてくれるはずだと、ミントはタクトに説明した。

「ミントの実家か。いやあ。地獄に仏とはこの事かな？」

「ですが、タクトさん。ブラマンシュの人間に油断しない方が宜しいかと……」

「生き馬の目を抜く商売人って事？」

「はい。過去にアキオさんも、相当苦労されていましたから」

「噂には聞いていたんだ。レイトンが、ブラマンシュの総帥を凹ま

せた事があるって。俺としては、そんな男が補給担当って事だけで安心だけどね」

「タクトは暢気だよなぁ。今のエルシオールの状況からして、吹っ掛けられる可能性だってあるのに……」

自分達の星系を占領しているエオニア軍を欺き、極秘裏にエルシオールに補給物資を売るのだ。

普通なら、当然の如く高額の代金を提示されるはずであった。

「確かに、それはあるかもな」

「シャトヤーン様から預かった金塊の量ならば、十分にお釣りは来ると思いますが……」

ちとせとしては、また補給をしなければいけない状況になるやも知れないので、なるべく節約をしたいというのが自分の意見であった。

「それで、タクトとしてはどの線まで譲るんだ？」

アキオとしては、多少高額でも仕方ないと思っていた。

変に金をケチって、後で物資が無くて泣きを見る様な真似をしたくなかったからだ。

ただ、物には限度があったので、その辺の匙加減をタクトに聞いてみたのだ。

「うーーーん……。そうだ！　おい。レイトン」

「何だ？」

「ちょっと、お耳を拝借」

「はあ？」

タクトは、ブラマンシュ側との交渉の席に、アキオをミントを連れて行く事を決め、倉庫をあとにするのであった。

「タクト、確かランデブーポイントは、ここで良かったんだよな？」

「レスターも、確認したじゃないか」

「だが、船が見えないぞ」

クロノドライブ終了後、ブラマンシュ財閥側の指定したポイントに向かったエルシオールであったが、そこに他の宇宙船の反応は一切無かった。

「遅れているのかね？」

「まさか。商売人が商談の席に遅れるなんて、よっぽどの事がない限り……」

「レーダーに反応あり！　輸送船団と思われる反応がありますが、何かに追われている模様です！」

商談に同行すべく、エルシオールのブリッジにいたミントの言葉を遮る様にして、アルモの切羽詰った口調の報告が入ってくる。
どうやら、ブラマンシュ財閥の輸送船団は、敵の無人艦隊に追撃を受けている最中らしい。

「補給の妨害は、一番楽で効果的な戦術ですからね」

「シードル大尉の言う通りだな。エンジェル隊……」

「「「「「了解！」」」」」

タクトが、格納庫に待機していたエンジェル隊の面々に攻撃命令を下そうとした瞬間、ミントは格納庫に向かって走り出し、彼女が到着するや否や、フォルテ達は宇宙空間に紋章機で飛び出していた。

「私のお菓子の材料！　特に、無塩バターとベーキングパウダー！」

「メルポワの化粧水！　他にも、ボディーソープにパックに！」

「私の銃の弾薬とおでんダネ！」

「私の大好きな麩菓子と○ナマヨーグルトが、あの船団には積まれているのです。絶対に落とさせませんわ！」

「ナノマシン……」

「予備の弓の弦と和三盆のお砂糖！（これがあれば、更にアキオさんを……）」

誰が何を欲しているのかが丸分かりであったが、ムーンエンジェル隊の今日のテンションは、今までで最高の状態にあった。

「守る物があるって、凄いんですね……」

「女とは、恐ろしい生き物だな……」

「あの……、君達……。人命を最優先でね……」

エリオスとレスターが唖然とするなか、彼女達の気迫に押されたタクトは、どうにか自分の意見を口にする事がきでた。

「物資と船が無事なら、人員も無事だろう。そう深く考えなさんな。司令官殿！」

だが、すぐにフォルテに反論されてしまう。

更に……。

「それよりも！　今度発売された、《アニーズ》の年越しライブのメモリーとリッキー君の新曲！　ついでに、高性能機械オイル……」

整備班長であるクレーターが、エスシオールのブリッジのメインスクリーンに割り込んでくる。

あの偵察型プローブによる偽者事件の後、アイドルグループである《アニーズ》のリッキー・カート君のファンである事が知られてしまった彼女は、艦内の同士を集めてファンクラブを結成するまでに至っていて、《アニーズファンクラブエルシオール支部長》の肩書きを名乗るまでに弾けてしまっていた。

最も、この件が理由で、彼女達の連帯感は非常に上がっているらしいのだが。

「機械オイルは、アニーズの下かよ……」

「クールダラス副司令！　せっかくの高性能オイルも、私達の腕と士気が低ければ無駄になります！」

「「「「そうですよ！」」」」

余計な事を言ったレスターに、クレーターと他の整備班員達からの非難の声が飛ぶが、その間にもムーンエンジェル隊は、最高速度で輸送船団の護衛に向かっていた。

「あれ？　この敵艦隊には……？」

「どうかしましたか？　アキオさん」

「あの右端の五つの光点は、先の電波が見えてしまっていた連中の高速戦闘機では？」

今まで無言でレーダー画面を見つめていたアキオは、ココモの問いに静かに答える。

「確かに、先の二機の反応と、速度とエネルギー量が一致しますね」

「厄介ではないのかな？」

「ええ」

あれだけの腕を誇る連中が一気に輸送船団撃滅に向かえば、エルシオールは物資を補給できずに、更なる物資の欠乏状態に陥るので、

アキオは危機感を抱き始めていたのだ。

「大丈夫だろう」

だが、アキオの心配を他所に、タクトは余裕そのものと言った表情をしていた。

「根拠があるのか？」

「あるよ。多分、普通の敵なら輸送船団を狙うと思うけど、あの連中は、ミルフィー達に変に拘っているみたいだからね。ミルフィー達が出た以上、優先順位が上なのはミルフィー達だろう」

確かに、タクトの言う通りであった。

五つの光点は、紋章機に劣らないスピードでミルフィーユ達の迎撃へと向かっていた。

「それにさ。あのハイテンションのミルフィー達が相手なんだぜ。正直、敵に同情したくなるね」

「バカだな。あいつら……」

「確かに……」

レスターとエリオスにもバカにされたヘルハウンド隊は、数分後に更なる赤っ恥をかく事になるのであった。

「やあ。マイハニー……」

「今日は、あなたの相手をしてあげる時間がないんです！」

初顔合わせを済ませ、これがミルフィーユとの二度目の対決となるヘルハウンド隊のカミュであったが、彼はミルフィーユのあまりに冷たい一言に顔を半分引き攣らせていた。

「僕よりも、何か大切な物でもあるのかい？　マイハニー」

「あります！　無塩バターとベーキングパウダーです！」

「僕って、脂肪分と炭水化物よりも下……？」

「そういう事で！　ハイパーキャノン！」

ラッキースターの一撃で、愛機を墜落寸前にまで追い込まれたカミュは、呆気ないほど簡単に退却してしまう。

「ぬぉーーー！　我が強敵（とも）！　ランファよ！」

「あんたが《とも》なら、メルポワの化粧水は、かけがえの無い親友よ！」

「ちょっと！　それは酷いぞぉーーー！」

「五月蝿いわね！　アンカークロー！」

「ぬわぁーーー！　今日は引き分けだからなぁーーー！」

同じく、今日が二度目の対決となるランファとギネスであったが、彼もカンフーファイターの一撃で撤退する羽目になってしまう。

「やあ。始めまして。成り上がりのミント・ブラマンシュさん」

「あら？　どちら様でしょうかしら？」

前の二人とは違い、今日がムーンエンジェル隊と初対面であるリセルヴァ・キアンティは、自称名門貴族家の出で、ヘルハウンド隊の参謀役を務める男であった。

いつもは頭が良く冷静で戦術眼にも優れていたのだが、お金持ちであるミントを非常に嫌っているらしく、ミントに対しては平常心を保てないらしい。

本来ならば、輸送船団の殲滅を主張すべき立場のはずなのだが、彼が真っ先にミントに向かうという失態を犯していた。

「私を成り上がりと仰る方は、二通りあります。一つは、家が名門なのに経済的に貧しいお方。もう一つは、その家すら無くなってしまい、過去の栄光に拘り過ぎていらっしゃるお方。あなたは、多分後者なのでしょうね。だって、エオニアの元で傭兵などしていらっしゃるから」

「ミント・ブラマンシューーー！」

ミントの容赦の無い言葉に、リセルヴァは我を忘れてトリックマスターに攻撃を仕かけるのだが、それは戦闘を早く終わらせようとするミントの作戦でもあった。

「あんず飴と○ナマヨーグルトが私を呼んでおりますの。フライヤーダンス！」

「僕は、駄菓子以下なのかぁーーー！」

カミュやギネスに遅れること数十秒、愛機の損傷が限界にまで達したリセルヴァも撤退を始める。

「フォルテ・シュトーレンだな……」

「だったら、どうなんだい？」

「殺す！」

フォルテに拘っているレッド・アイは、顔から胸あたりまで切られたような傷が特徴の極端に無口な男であった。

彼も日頃は冷静なのだが、フォルテの事になると感情が高ぶってしまうらしい。

「悪いけど、急ぐから。ストライクバースト！」

「なっ！」

僅か一撃で、レッド・アイの愛機は戦闘不能となり、彼も僅か数十秒での撤退となってしまっていた。

「やあ。ヴァニラ・アッシュ。僕の名前は……」

「興味ない……」

ヘルハンド隊最後の一人であるベルモット・マティンは、分厚いレンズの眼鏡とハチマキが特徴の、元々はメカニックが専門の兵士であった。

「そんな減らず口を叩けなく……」

「邪魔……」

早くナノマシンを補給したいヴァニラは、畳み掛けるように攻撃を行い、ベルモットの愛機もすぐに戦闘不能となってしまう。

「まあ。今日は、お前の実力のほどを……」

「負け惜しみ……」

「覚えてろよぉーーー！　ヴァニラ・アッシュ！」

ベルモットは、半ば絶叫しながら退却していく。

「普段は大人しい娘ほど、言う時には言うものなんだな」

「言えてる……」

「タクトさん。輸送船団に迫っていた艦隊の足止めに成功しました」

タクトとアキオが、ヴァニラの有無を言わせない一言に驚いていると、そこに、ヘルハウンズ隊からはノーマークであったちとせから通信が入ってくる。

彼女は、タクトの命令通りに輸送船団と敵艦隊の間に割って入り、近付いてくる敵軍艦の機関部を次々と狙撃していたのだ。

本来、無人艦隊に詳細な命令を下す役割を与えられたヘルハウンド隊がアレだったので、元々大した数でなかった敵艦隊は、ちとせのシャープスター一機に完全に足を止められていた。

「ちとせ。ご苦労さん」

「でも、私に拘っている方は、いらっしゃらないのですね……」

「寧ろ、幸運じゃないか」

アキオ個人の意見としては、あんな連中に付き纏われない方が幸せでは？と思ってしまうのだが、ちとせはムーンエンジェル隊の中で一人疎外感を感じているらしい。

「でも、アキオさん。私だけ、仲間外れの様な気がして……」

「ちとせ。いいなぁ……」

「私なんて、アレよ！　アレ！　何だったら、いつでも代わってあげるわよ！」

「そうだね。あんなストーカーの様な連中」

「ちとせさんは、むしろ幸運だと思いますが……」

「ミントさんの仰る通りだと思います」

逆に、ミルフィーユ達は普通に戦えるちとせの事を羨ましく思っていた。

「おっと、そうだ！　輸送船団の損害の方なんだけど……」

「全艦無事の様です。それと……」

「それと何だ？」

タクトは、輸送船団の無事を報告したココが、次に言いかけた事が気になって仕方がなかった。

「輸送船団の方から、あの無人艦の所有権は誰にあるのかと……」

ちとせの攻撃によって、機関部に重大なダメージを受けた敵無人艦は、操作を行うヘルハウンド隊もいなくなっていた影響で、宇宙空間をフワフワと漂っている状態であった。

さすがに、クロノクロスエンジンが爆発した艦はバラバラになってしまったが、エンジン本体は無事で、エネルギー動力部の破損で動けなくなっている艦が数隻存在していたのだ。

「どうも！　始めまして！　私。ブラマンシュ財閥アストラル星系支部長のヴィンセントと申します。この度は、我が輸送船団をお守りいただきお礼の言葉もございません」

エルシオールのメインスクリーンには、常に笑顔を絶やさない中年の男性が映し出され、タクト達に丁寧にお礼を述べていた。

「ところで、あの無人艦隊の件なのですが……」

「遺棄兵器の類ですからね。本来は、皇国軍に所有権があるのですが……」

だが、エルシオールにそんな物に構っている時間があるはずもなく、あれはこのままにするか、砲撃で使えなくするのが常識的な判断と言えた。

「当方にお任せ願えませんでしょうか？」

「武装でもするつもりなのか？」

今まで静かに話を聞いていたアキオは、ヴィンセント支部長に疑いの目を向ける。

第2方面で、海賊退治を数多くこなして来たアキオは、ブラマンシュ財閥が独自に武装する事を潔しとしなかった。

特に、このアストラル星系は、あの無人駐留艦隊が全滅した影響で、また所属未確定状態に陥ってしまうので、ヴィンセント支部長

が野心を抱けば、それが全く不可能とも言えない状態になっていたからだ。

「滅相もございません。私は純粋に商売人ですので、あれを修理して軍に販売いたそうかと考えている次第です」

現在のトランスバール皇国軍は、一隻でも多くの軍艦を必要としているので、きっと高く買ってくれるであろうと、アキオは考えていた。

修理代だけで新型の軍艦を手に入れられるので、少々値引きしても大儲けであるし、あの艦は従来の皇国軍艦艇の改造品でもあるので、艦内には、皇国軍の艦艇にも使える新しい機械やシステムなど、金の成る木が装備されている可能性もあった。

しかも、これは元はエオニア軍の持ち物なので、勝手に特許を取って大儲けしても誰からも文句が出ない。

なので、ヴィンセントにしたら、喉から手が出るほど欲しい物なのであろう。

「タクト、どうする？」

「許可する。ただし、おかしな事を考えると、後に海賊キラーのレイトンに討伐される事だけは覚えておいてくれ」

「レイトン准将のご高名はかねがね。私達、民間業者の守護神様でいらっしゃいますから」

第2方面の海賊の活動を、今までで最低レベルにまで引き落とした通商護衛艦隊副司令アキオ・レイトンは、トランスバール皇国領内の海賊達から悪鬼の如く恐れられ、民間の船主達からは神の如く拝まれている人物であった。

「じゃあ。お安くしてね」

「それとこれとは、話が別でございまして」

「やっぱり……」

「だよなあ」

タクトとアキオは、ブラマンシュ財閥幹部の強かさにただ呆れるばかりであった。

「まずは、お近づきの印に、クレーラー社製の最新型宇宙ヨットを……」

エルシオールの司令官室に現れたヴィンセント支部長が、まず最初にした事。

それは、タクトに対する賄賂攻勢であった。

非常時ゆえにあまり問題となる事もなく、司令であるタクトを丸め込めば、うるさ型のレスターとアキオの文句も出ない。

そう考えたヴィンセント支部長の、強かな先制攻撃であった。

それと、この場にはダルノーの一人娘であるミントも同席していて、この事は事前にヴィンセント支部長にも伝えていたのだが、彼は最初に軽く会釈をした程度で、特に気にもしていない様子であっ

た。

「うーーーん。脱出艇の予備になるかな？　非番時に、乗って遊んでも良いし」

「では、次に、リゾート惑星タイラントにあるアウスレーゼカントリークラブのゴルフ会員権をどうぞ。これは、値上がりが期待できる一品でして……」

「退役後に、ゴルフ三昧ってのも悪くないかな？」

「次に、現在の抽象画の巨匠。レクモクの巨大絵画です。これも、後の値上がりが期待できる一品でして……」

「俺には、理解不能な作風だな。でも、司令室に飾ると見栄えがするかな？」

タクトは遠慮無く全ての賄賂を受け取り、レスターは不機嫌そうな表情を崩さず、アキオは特に表情を変えなかった。

ヴィンセント支部長は、逆にアキオに対する警戒心を強める。

ブラマンシュ財閥の総帥であるダルノーに正面から噛み付いて、社会的に抹殺されずに生き延びた男なのだ。

ブラマンシュ財閥の人間として、警戒して当たり前の事であった。

「それでは、早速に商談の方を……」

「レイトンに任せるよ」

あまり商売に詳しくないタクトは、交渉をアキオに丸投げしてしまう。

「必要な物のリストは、先ほど送ったはずだが？」

「はい。承っております。それで、こちらが見積もりとなります」

アキオがヴィンセントから貰った見積書を無言で眺めていたので、気になったレスターがそれを覗き込むと、そこには信じられない額の請求額が記されていた。

「おい！　いくら何でも、高過ぎだぞ！」

「クールダラス副司令。他に、補給の当てはありますので？」

笑顔を絶やさぬまま、ヴィンセント支部長はレスターに鋭い質問をする。

「いや……。それは……」

レスターは、思わず口篭ってしまう。

確かにここで補給を逃すと、次に危機的な状況に追い込まれるのは間違いなくエルシオールの方で、それをヴィンセント支部長に見破られて、完全に足元を見られている状態であったからだ。

「ヴィンセントさん。この金額はあまりに……」

「お嬢様は、口を出さないでいただきたい」

「っ！」

アキオの隣にいたミントが、ヴィンセントに苦言を呈するが、ヴィンセント支部長はそれを一蹴してしまった。
彼のまさかの反応に、ミントは驚きを隠せないでいた。

「おや。私が総帥の関心を買うために、安い金額を提示するとでも思われたのですかな？　このヴィンセントは、痩せても枯れてもブラマンシュ財閥のこの星系の責任者なのです。ブラマンシュの星系支部の責任者ともなれば、そこいらの企業のオーナーとは比べ物にならない程の待遇を得られますが、その責任も重大な物となります。いくらお嬢様のいる船とはいえ、この他所の星系との星間ネットワークが絶たれた状態で、定価で物資をお分けする事などできようはずもございません。それに、ミントお嬢様は総帥の一人娘なれど、今は財閥に席のある人間ではございません。余計な口を出さないでいただきたいですな」

ヴィンセント支部長の正論に、ミント本人はおろか、彼女を同席させる事で交渉を有利に持っていこうとしたタクトとレスターも驚きを隠せないでいた。

「秘密裏に船を出してくれた手間賃を考えて、定価の二倍までなら認めるが」

「レイトン准将とも思えない無知さ加減ですな。この状況で、物資をケチって餓死なさるおつもりですかな？」

エルシオール側で唯一冷静なアキオは、さも当たり前と言った表情で値下げ交渉を開始するが、それすらもヴィンセント支部長に一蹴されてしまう。
どうやら、ヴィンセント支部長は、物資の値段を一ギャラでも下げるつもりはないらしい。

「ちょっと阿漕な気もするけどね。ヴァンセントさん。それで、タクト。どうするんだ？」

「物資は購入しなければな……。問題は、値段なんだけど……」

「確かに、高いよな」

「だが、背に腹は替えられないとも言うな」

「しかしな……」

アキオとタクトの会話を聞いて、ヴィンセント支部長は己の勝ちを確信した。

賄賂を受け取ったタクトが上官として、アキオに『買ってしまえ』と圧力をかけているように感じたからだ。

「一割の値引きなら認めましょう」

ヴィンセント支部長は、遂に最後の切り札を切った。

これは、要は比較論の話であった。

購入先が一つしか存在せず、その一つの購入先が非常に高い金額を提示している状態で客が悩んでいるところに、ギリギリで値引きを提案する。

値引き額は大した事がなくても、その追い詰められていた客には大きな救いに感じられて購入を決断する。

元からこういう作戦だったのだ。

「いかがなされます？」

「うーーーん……」

アキオが長考していると、不意に胸元の通信機から着信音が入る。

「レイトンだ」

「アルモです。先ほど、聞いていたお客さんから通信が入っています」

「こちらにお通ししてあげて」

「了解です」

通信を入れて来たのは、ブリッジにいるアルモであった。

どうやら、ブラマンシュ財閥の船以外に、他の船が現れたらしい。

「レイトン准将。これは……？」

「物資は買うさ。だが、この宙域で物を売れる連中は、ブラマンシュ財閥の他にもいるって事でね。俺の顔の広さを忘れたのかな？ヴィンセントさん」

「そういえば、そうでしたね……」

ブラマンシュ財閥以外に、エルシオールに売る物資を持っている連中は他にもいた。

ただ、彼らは会社の規模が小さかったので、数社で合同で船を出すのに時間がかかっていたのだ。

実は、『ブラマンシュ財閥の他に、当ては無いのかな？』と密かにタクトに聞かれていたアキオは、通商護衛艦隊絡みで付き合いの

ある数社の担当者に密かに暗号で連絡を入れていたのだ。

「ちなみに、先ほどの条件で、彼らはオーケーだそうだけどね」

「値引きに応じましょう。レイトン准将……」

ヴィンセント支部長は、アキオの強かさを直接肌で感じたのであった。

「してやられたか……」

交渉が無事に纏まり、物資の搬入作業の進んでいるなか、ヴィンセント支部長は一人ホールの自販機の端で部下達の様子を眺めていた。

エルシオールに物資を納品するだけでなく、単独航行で様々な物が不足している乗組員達に直接物を売るべく、部下達が臨時の店舗を開いていたからだ。

本、音楽データ、服、アクセサリー、化粧品、ゲームなど様々な物が飛ぶように売れて行き、その売り上げはバカに出来ない金額であった。

それに、他の会社の担当者と共同で店舗を出している事も、好結果となって現れていた。

お手ごろな値段の物が沢山あると、相乗効果でサイフの紐が緩みやすくなるのが商売の心理であったからだ。

「ヴィンセントさん。休憩ですか?」

「レイトン准将ですか……」

「商売繁盛じゃないですか」

「あなたには、してやられましたけどね」

「お詫びに、コーヒーでも奢りましょう」

「奢られましょう」

アキオは、自販機でカップのコーヒーを二つ購入して一つをヴィンセント支部長に渡す。

「他の会社の連中の船が現れたので、思わず気が動転して忘れていましたよ。彼らだけで、エリシオールの注文に答えられるだけの物資を用意出来ようはずも無いことをね」

ヴァンセント支部長がそれに気が付いたのは、既に値引きを認めてしまった後の事であった。

何の事はない。

アキオは、最初から全ての会社から物資を買う事にしていたのだ。

「ブラマンシュから七割で、他は三割ですか……。この星系のシェアまでご存知でしたか……」

「護衛船団を組む過程で知った知識ですよ」

「さすがですね。あなたは、噂どおりの方だ。しかし、不思議ですね。あなたほどの方が、なぜマイヤーズ司令の下に？」

実は、ヴィンセント支部長は、最初にエルシオールから通信を受けた時に、その司令であるタクト・マイヤーズに関する知識を持っていなかった。

そして、急遽調べたタクトの経歴を見て、半ば納得する事となる。

タクトが、貴族出身の高級将校であったからだ。

一般市民出身で、己の実力のみで出世したヴィンセント支部長にしたら、少なくとも尊敬には値しない相手であるボンクラ貴族の司令。

これなら、吹っ掛けても大丈夫だと感じたのだ。

後に、アキオ・レイトン准将が下にいる事を知ったのだが、タクトを黙らせれば大丈夫だと思い、賄賂攻勢に出て確かな手応えを感じた。

だが、どうやらタクト・マイヤーズも、なかなかに喰えない人物であるらしい。

そう感じたヴィンセントであった。

「偶然が重なってですよ。それに、俺が提案する前に、タクトに耳打ちされましてね。『他の会社の担当者と連絡は取れないのか？』ってね」

「なるほど、そうでしたか。確かにあなたなら、色々な会社の担当者の暗号コードを知っているはずだ」

そこまで話したことろで、そこにミントが現れる。

「これは、ミントお嬢様。先ほどは、無礼の数々を……」

ヴィンセント支部長は、商売人ではあったが、決して悪人ではなかった。
なので、商売の話が終われば、無礼な口を利いたミントに素直に謝るくらいの度量は持っていたのだ。

「いいえ。ヴィンセントさんの仰った事は正しい事ですから」

「実は、申し訳ついでではないのですが、先ほど総帥にお嬢様の無事をお伝えしたところ、メッセージを預かっておりまして」

「まあ。そうでしたの」

ミントは、ヴィンセント支部長から差し出されたメモリーを受け取った。

「総帥は、公人としての立場がお強い方です。ですが、一人の父親として、真剣にお嬢様の事を心配しておられました。では、私は撤収の準備がございますので……」

ヴィンセント支部長はコーヒーを飲み干すと、カップを屑篭に捨ててからホールを後にする。

「ミント。意外そうな顔をしているね」

「ええ……」

「ヴィンセント支部長が、ミントに媚びなかったからかい？」

「はい」

ミントは、父親からのメッセージが入ったメモリーを見つめながら、アキオの問いに答える。

「ミントに擦り寄って媚びる必要がないからね。彼は、ダルノー氏の人を見る目が確かなら、その能力だけで出世できる人物なんだよ」

「でも、アキオさんに、してやられていましたけど……」

「定価の二倍なんだぜ。元から、彼の勝ちは決まっているんだよ。あの値上げ分は、取れれば儲け程度の物なんだよ。それに、あの動けない敵無人艦を数隻無料で手に入れている。他の小さな会社では、曳航する事すら不可能な代物だ」

正に、きつねと狸の化かしあい。

交渉術に長けたヴィンセント支部長とアキオの、大人の勝負そのものであった。

「シャトヤーン様から貰った金塊は、有効に活用しないとね」

「そうでしたの。でも、私。タクトさんの事は見損ないましたけど……」

次にミントは、素直に賄賂を貰っていたタクトを批判し始める。

「いや。あいつが、俗物のボンクラ高級将校を演じてくれていたから、俺は自由に動けたんだけどね」

その他にも、アキオは、先にタクトの方が他の会社と連絡を取れないかとアキオに相談した事実を告げる。

「まあ。そうでしたの」

「タクトは、器が大きい男だ。少なくとも、俺はそう感じている」

ミントは、アキオにそこまで言わせるタクトの事を見直し始める。

そもそも、タクトが本当のただのボンクラ将校ならば、アキオがエルシオールの実権を握って、彼を傀儡にするくらいの事はやってのけるはずだ。

ムーンエンジェル隊の隊長であるフォルテはアキオの親友で、彼の指揮官としての力量を信頼しているし、あくまでも臨時の主計参謀なので、普段はあまり仕事をしていない様に見えても、実はちゃんと必要な物資を切らさない様に部下達を動かしていたので、クレーターやケーラなども、アキオの事をかなり信頼する様になっていた。

「さて、仕事も終わった事だし、買い物でもするか」

「そうですわね」

二人が仮設店舗に移動すると、そこには意外な人物がフォルテやタクトと共にいた。

「シヴァ皇子。お買い物ですか？」

「そうだ。余も時に退屈を紛らわすために、こうして普通に買い物をする事もあるのだ」

「それで、私がその護衛ってわけさ」

シヴァ皇子は、フォルテを引き連れて各店舗の品物を見て回って

いた。

「タクトは？」

「シヴァ皇子にチェスをお勧めしてね」

確かに、シヴァ皇子は、その手にチェス版と駒を入れた箱を持っていた。

「今度、余と勝負する事になっているのだ。レイトン、そなたのチェスの腕前は？」

「普通ですかね？」

「そなたも、余と勝負するのだぞ」

「負けた腹いせに、打ち首は嫌ですよ」

「相変わらずの減らず口よな。そもそも、そなたが勝てる保障があるのか？」

「さあ？　こればかりは、実際にやってみない事には」

「レイトンが、負けた時に言う言い訳が楽しみよな」

「シヴァ皇子も、相当にお口が悪いようで……」

「家庭教師の影響であろうな」

こうして、エルシオールは無事に物資の補給に成功し、惑星ロー

ムに向けての旅を続ける事になるのであった。
そして、その日の夜中……。

「アキオ。ベッド以外に、部屋に隙間がないじゃないか」

「業務用のワインセラーだからな。場所を食うのは、仕方がない事なんだ」

数日のノンアルコール生活で、少し禁断症状が出始めたフォルテは、アキオの呼び出しで彼の私室に来ていた。
だが、アキオの部屋の空きスペースには、巨大な立方体の箱が置かれ、入り口からベッドまでの僅かな隙間以外に余分な空間は一切存在していなかった。

「ベッドの上に座れ」

「あのね。一応は、私は女なんだよ」

「恩のあるウォルコット中将に対して、不義は働かない主義だ」

「あんたも、勘違いしているね。私と中将に限って、そんな事はないってのに。しかし、いつの間にこんな物を……」

あの補給時の間隙を縫って、業者にこれだけの巨大な箱を密かに持ち込ませたアキオの力量に、フォルテは素直に感心していた。

「小さい会社だが、担当者が口の堅い男なのさ。だから、この部屋の中でこれを組み立てさせ、中に詰め込める限りの酒瓶を詰め込ませた。これで、数ヶ月は酒に困る事はないだろう」

さすがのフォルテも、アキオの酒に関する横紙破りにただ呆れるばかりであった。

「酒飲みに一番必要な物は、酒なのさ」

「そりゃあ、至言だね。でも、ベッド以外にスペースが無いじゃないか」

「そんな事は、些細な事だ。酒飲みには……」

母の死以来、あまり普段の生活に興味の無いアキオの部屋は常に殺風景だったので、ベッドさえ使えれば特に問題ないと考えていた。

「はいはい。わかったよ。じゃあ。乾杯と行こうかね？」

アキオは、ワインセラーから取り出した一本の白ワインの栓を開け、それを用意した二つのグラスに注ぎ始める。

「いいね。この芳醇な香り」

「食堂の薄いビールやサワーなんて、酒じゃねえ！　アルコール度数１０度以下の酒なんて飲めるか！　乾杯！」

「言えてる！　乾杯！」

「へえ。随分と高い酒を飲んでいるんだな。レイトン」

「俺の数少ない楽しみの一つだからな……って！　タクト！」

「何ぃ！」

二人がグラスを合わせた直後に、部屋の入り口の方から声が聞こえ、アキオとフォルテがそちらに視線を向けると、そこには宝物を見つけた子供のような笑顔を浮かべたタクトが立っていた。

「フォルテ！　部屋の鍵！」

「いやさ。一応は、私も女のわけだし……」

フォルテは、少し顔を赤くさせながらドアにロックを掛けなかった理由を答える。

「今までは、ロックを掛けていたじゃないか！」

「ベッドの上で、酒を飲むってシチュエーションがね……」

「キャラじゃないぞ」

「口の奥に、もう一つ口が必要かい？　アキオ」

「ふごっ！　いりましぇん……」

フォルテは、自分に失礼な事を言ったアキオの口に、ワインの代わりにホルダーから素早く取り出した銃を突っ込む。

「しょれよりも！」

「ああ。タクトだね。消すかい？」

正に、アルコールの魔力であった。

フォルテは、アキオの口に突っ込んでいた銃を引き抜くと、今度はタクトを照準に入れる。

「酒如きとは言えないけど、それだけで上官を殺すのか？」

「レスターにバレてごらん。最低でも没収。下手をすると、宇宙空間にポイだよ」

クソ真面目で規則に五月蠅いレスターなので、フォルテの予想は決して間違っていないとアキオは思い始めていた。

「よし。殺そう」

アキオも、自分のホルダーから銃を抜くと、その照準をタクトへと合わせた。

「こらっ！　そんな事で、司令官を殺すんじゃない！」

「だって、お前。秘密を見たじゃないか」

「その秘密、俺が漏らさないと言ったら？」

「「タクト（司令官殿）故に、信用ならない！」」

二人は一斉に、照準を合わせた銃の引き金に指を掛ける。

「ギャクにしては、笑えないぞ！　というか！　普通は、俺を共犯にするとか、そういう線で行かないか！？」

「ああ、その手があったね」

フォルテは、ベッドに備え付けてある棚からもう一つのグラスを取り出し、それに先ほどの白ワインの残りを注ぐ。

「心して飲めよ。ルイ・ブラモンドの３７８年産だからな」

「お前。そんな高い酒。俺の実家でも、新年かクリスマスくらいしか……」

タクトは、アキオの酒道楽ぶりに呆れながら、グラスの中の液体を口の中に入れる。

すると、口の中に芳醇な香りが広がり、タクトを至福のひと時へと導いた。

「やっぱり、高い酒は旨いなぁ」

「だろ？」

「いいかい、司令官殿。レスターに漏らしたら！」

「没収されたら俺も嫌だから、絶対に言わないよ」

こうして、エルシオールとその乗組員達は、無事に欲しい物資の補給を完了し、アキオとフォルテの酒飲み同盟に、一人の新しい仲間が加わるのであった。

第九話

「レイトン！　チェックだ！」

「またか。押されてるな。ここは、一時逃げを打つしか……」

「甘い甘い！　またチェック！」

「うーーーん」

アストラル星系で、ブラマンシュ財閥や他の会社から物資の購入に成功したエルシオールは、目的地である惑星ロームを目指し、再びクロノドライブを繰り返す日々を送っていた。

ここ数日は、珍しく敵の襲撃も無く時間が空いていたので、タクトは先にシヴァ皇子と約束したチェスの勝負を行っていた。

同じく、シヴァ皇子に勝負を挑まれたアキオと共に、チェスで数度対戦を行ったのだが、結果はシヴァ皇子の惨敗であった。

同じ年頃の子供には絶対に負けない腕前を持つシヴァ皇子であったが、チェスが大得意なタクトや、何をやらせてもすぐに人並み以上に上手くなってしまう大人のアキオに敵うはずもなく、今度は二人に惨敗したシヴァ皇子の命令で、タクトとアキオが対戦をする事になったのだ。

「攻めるタクトさんに、守るアキオさんですか？」

シヴァ皇子におやつのケーキと紅茶を持って来たミルフィーユは、目の前で展開される白熱した戦いを、実に興味深そうに眺めていた。

「チェスの腕前では、タクトに軍配が上がりそうだな」

「そりゃあ、そうですよ。でないと、俺がレイトンに勝てる部分がありませんもの」

「確かに、顔も背も頭脳も口の悪さも、レイトンに軍配が上がるからな」

「最後のは、全然褒めていない様な……」

更に逃げを打ちながら、アキオはブツブツと文句を言っていた。

「シヴァ皇子。そこまでハッキリ言わなくても……」

そしてタクトは、容赦なく駒を動かしながらも、その目からさめざめと涙を流していた。

「シヴァ皇子！　いくら何でも酷過ぎます！　タクトさんは、これまで一生懸命に！」

「ミルフィー、拙いって……」

ミルフィーユが、シヴァ皇子に大きな声で文句を言い始めたので、それをタクトが小声で止めに入る。

自分の部下兼想い人が、シヴァ皇子の不興を買って、打ち首にでもされたら堪らないからだ。

「愛されている様だな。タクト・ヤイヤーズ司令官」

「いや……、その……」

「あっ！　あのですね！　皇子！　私とタクトさんは、別に！」

シヴァ皇子にからかわれた二人は、顔を真っ赤にしながら下を向いてしまう。

「シヴァ皇子。この苦戦中の臣めにチャンスをお与え下さいまして、感謝の言葉もございません。チェック！　反撃だ！　タクト！」

タクトの精神的動揺を突くかの様に、アキオは突然の攻勢に出る。

「嘘っ！　そんな鋭い手を、いつの間に！」

「久々のチェスだったからな。実戦の勘を取り戻すのに、時間が掛かったよ」

「本当……。鋭い手だな……」

だが、アキオの攻勢は、僅か数手で終了となってしまう。

遂にタクトが、アキオを追い詰めてしまったからだ。

「チェックメイト！　もう逃げは打てないぜ。レイトン」

「……駄目だ、降参だ。あーーーあ。負けてしまったな」

完全に打つ手を無くしてしまったアキオは、そのまま両手を挙げて降参のポーズを取る。

「なかなかに良い勝負であった。余もまだまだ精進しないと、レイトンやタクトには勝てそうにもないな。レイトン。今度の家庭教師の時間に、余にチェスを教えてくれ」

「了解しました。ところで、チェスの先生はタクトでなくて宜しいので？」

「そなたを倒せないと、タクトは更に高い壁であろうからな。先にそなたを倒す事とする」

「倒せる事を、臣として心から祈っております」

「そなたは、本当に可愛くない男よな」

「……」

皇国の皇子とはいえ、僅か十歳の子供に可愛くないと言われて、アキオは開いた口が塞がらなくなり、それをシヴァ皇子が楽しそうに見つめるのであった。

「あの、レイトン准将」

「どうしたんだ？」

シヴァ皇子とのチェスの勝負を終えたアキオが、エルシオールの艦内を歩いていると、部下の若い女性軍属に声を掛けられる。

「実は、倉庫の方から変な臭いがするんです」

「変な臭い？」

「はい。でも、一人で見に行くのは不安で……」

「そうだな。変なガスでも出ていたら事だからな。俺が行こう」

「ありがとうございます」

アキオが倉庫の入り口に来ると、先ほどの話通りにシンナー系統の臭いが中から漏れていた。

「この前買った物資で、あんな臭いの物があったかな？」

そんな事を考えながら倉庫に入ると、そこでは意外な人物が何かを床に広げて作業をいていた。

「ランファ？」

「あら。アキオじゃないの」

「じゃないのじゃないよ。お前。何をしているんだ？　シンナーの様な臭いがするって苦情が出ているぞ」

「何って、古い靴のリフォームをしているのよ」

ランファは、倉庫の端の床に、沢山の古い靴とその修理を行うための道具類を広げていた。

「塗料や接着剤の臭いだったのか……。ていうか、新しい靴くらい

買えよ」

「バカね。私はこの古い靴を材料に、普通のお店では売っていない靴を作っているのよ。あの銀河中を感動の渦に巻いた感動の名作ドラマ《ガラスのシンデレラ》。その最後のシーンで、ヒロインの履いていた靴を忠実に再現するのよ」

ランファは、いくつかの靴のパーツをバラし、それを赤いハイヒールに取り付ける作業を行いながら、アキオに説明を続けていた。

「そんなドラマは、知らん」

本当にそのドアマの事を知らなかったアキオは、ただ一言だけ簡潔に答える。

「何ですって！　あのトランスバール皇国全域の平均視聴率が、３０％を超えた感動の超名作を知らない？　あんた！　非国民よ！」

「視聴率が３０％なら、見ていない奴の方が多いだろう」

たかが恋愛ドラマ如きを見ていない程度で非国民扱いされたアキオは、すぐにランファに反撃を開始する。

他の女性なら、『今度、見てみようかな？』程度で終わらせてしまうアキオのだが、なぜかランファが相手だと、意地になって反論したくなってしまうのだ。

「何回も再放送されているし、全話収録のメモリー集もヒットしているから、見ていない人の方が少ないわよ！　アキオ。あんたは、どこの田舎者よ！」

「そんな嘘くさいドラマ。まともな男が、見るものか。それに、任地が辺境の危ない場所が多かった影響で、本当に知らないし見ていない」

テレビは、たまにニュースを見る程度であったアキオが、若い女性が見る様なドラマを見ているはずもなかった。

それに辺境では、貧しくてテレビすら見られない人も多かったし、そもそも放映すらしてない場所も多かったのだ。

「本当。つまらない男ね」

「あのな。ランファ。貴族でもない僅か二十二歳の俺が、なぜタクトと同じ准将になれたと思う？　それに相応する厳しい日々を送っていたからだ。だから、そんな作り物のドラマに感動するものか」

第2方面軍でウォルコット司令の下に就くまで、常に死と隣り合わせの生活を送っていた自分なので、そんな作り物に感動するはずもなかった。

それと、恋愛ドラマなのが良くなかった。

《恋を忘れてしまった男》であるアキオが、余計に興味を持つ事は不可能であったからだ。

「私だって、ドラマが作り物だって事くらい理解しているわよ。でも、そういう物に感動できない人間になったり、生活を送るのは嫌よ」

「そうかも知れないな……」

「だから、たまにはそういう物を見なさいよ。貸してあげるから」

そう言いながら、靴の細かいパーツの接着を続けているランファであったが、手先の器用さがさほどでもないのか、意外と梃子摺っている様子であった。

「貸しな」

「出来るの？」

「多分」

アキオは、床に置かれた資料通りに素早く部品を接着し、塗料や蛍光剤の塗装を終え、完成した靴を台の上に置いた。

「あとは、乾燥させるのみだな」

「上手いのね。アキオ」

「小学生時代、ジュニアハイスクール時代と、常に図工・美術・技術は5だった」

「意外。もっと、ガリ勉なのかと思っていた」

「士官学校の入学試験に挑戦すると決めた時まで、あまり勉強なんてした事がなかったんだ」

完成した靴が乾くまでの間、アキオは自分の子供の頃の事をランファに話し始める。

貧しくはあったが、楽しかった母と二人きりの生活。

自分の面倒を見るため、外に働きに出ずに、得意であった洋裁の内職で自分を育ててくれた母。

毎日、近所の子供達と遊んで腹を空かせていた自分に、手作りのお菓子や食事を作ってくれた母。
たまの日曜日には、近くの森や山へお弁当を持ってピクニックに出かけ、年に数回は、遊園地や動物園に連れ行ってくれた母。
思えば、人生で一番充実していた日々の様に感じる。
そしてこんな話を、ミントでもなく、ちとせでもなく、ランファに話している自分にも少し驚いてもいた。

「いいお母さんだったのね」

「ああ。でも、母は、俺が親孝行する前に逝ってしまった……」

既に入院していた母に士官学校への入学を伝えると、『軍人さんになるの？　危険じゃないの？』と、まずはその事を心配されてしまった。
『トランスバール皇国軍は、一部の紛争地域を除けば、訓練と演習だけで戦争になんて縁がないから』と言うと、今度は、『入学金と授業料の事は心配しないでね』などと言って来た。
自分は、明日をも知れぬ病人なのにだ。
士官学校の入学金は無料で、在学中は僅かではあるが給料が出る事を伝えると、『アキオは、親孝行なのね』と自分に笑顔を向けて来た。
だが、その頃には、既に母には死が間近まで迫っている状態であった。

「全然、親孝行でも何でもない、駄目な息子なんだけどな……」

「そんな事はないわ。お母さんは、安心して天国に旅立ったと思う」

「どうなんだろうな？　俺は、あの世とか天国は信じない性質なん

だけど」

「人が慰めてあげてんだから、そこは素直にありがとうって言っておきなさいよ」

「それもそうだな。ランファ、ありがとうな」

アキオは、台の上で乾かしていた靴を箱に詰め、それをランファに渡しながら笑顔でお礼を言う。

「そうよ。人は、素直が一番よ」

口ではそう言っていたが、ランファは内心ではかなりドキドキしていた。

人によっては口が悪い部分もあったが、アキオは基本的に優しかった。

自分の親友であるミルフィーユを妹の様に可愛がり、アキオを慕うミントやちとせにも優しく、ヴァニラの事をそれとなく気にかけ、フォルテとは親友同士でもあるアキオ。

ランファは、既に知っていたアキオの過去の経歴と、今聞いた子供の頃の話を合わせ、彼の優しさが本当の優しさである事を知った。

『自分が苦労している人が他人に優しいのなら、その優しさは本当の優しさだ』

士官学校に入学する前に、自分の父親に言われた事を想い出していたのだ。

「さて、片付けも終わったし、そろそろ茶でも飲みに行こうかな？」

「今日は、奢ってあげるわ」

「すまんね。少尉殿」

「今日は、靴のお礼を兼ねてよ。明日からは、美しい少尉に奢りなさい。准将閣下」

軽口を叩き合いながら、倉庫を出ようとした二人であったが、あるアクシデントが二人を襲う。

「えーーーと。パウダーシュガーは……。えーーーっ！　この一番下段のコンテナなんだ。仕方がないな。重力スイッチをオフに……」

お菓子の材料を探しに来たミルフィーユが、他に人がいるかどうかを確認しないまま、倉庫内の重力スイッチをオフにしてしまう。

この時代、多くの宇宙船の倉庫で、フォークリフトを用いる事なく必要な物資をコンテナから取り出す一番簡単な手段であった。

ただし、他に人がいるのかの確認は、必ずするのが決まりであったが……。

「ちょっと！　ミルフィー！　私達がいるのよ！」

急に重力が無くなった倉庫内でランファは宙に浮き、先ほどの靴を入れた箱を両腕に抱えながら、ミルフィーユに文句を言っていた。

「ミルフィー。ちゃんと、確認しないと駄目だよ」

だが、それに反してアキオの方は、過去に無重力下での訓練を受けていたので、バランス良く宙に浮きながらミルフィーユを軽く窘める程度であった。

「アキオ！　あんた。ミルフィーに甘い！」

「そうかな？」

過去に色々と彼女の幸運に助けられているアキオは、少しミルフィーユに甘く、それをランファに窘められていた。

「ランファとアキオさん？　逢引ですか？」

そして当の本人は、二人の争いを知ってか知らずか？
いつもの通りに、天然な発言をしていた。

「んなわけないでしょうが！　一緒に倉庫の整理をしていたのよ！」

靴のリフォームを手伝って貰っていた事をミルフィーユに話すと、更に誤解されると思ったランファは、咄嗟に嘘を付く。

「そうそう。紋章機の修理に必要な物を、一緒に探していたんだよ」

同じく、ミルフィーユの誤解を恐れたアキオも同じ嘘を付いたので、ミルフィーユは二人の嘘に気が付かなかった。

「へえ。そうだったんですか」

「とにかく、床にそっと降りるから、重力メーターのスイッチを少しづつ入れて……」

だが、運命の神は気まぐれであった。
ミルフィーユの強運（凶運）と連鎖してなのか？

突然、倉庫内でコンテナを固定していたワイヤーが切れ、数個のコンテナが宙を浮き始める。

「危ないな。ミルフィー。俺の部下達を呼んで来てくれるかい？」

「わかりました！」

ミルフィーユは、アキオの命令を実行するために、倉庫の外に向かって走り出した。

「本当っ！　あんたって！　ミルフィーに甘いんだから！」

「その議論は後にしてくれ。まずは……」

アキオは、ランファの手を引きながらコンテナが宙に浮いている場所からの離脱を開始する。

「無重力状態とはいえ、あんな重量級のコンテナと接触すると、大怪我をする可能性があるからな」

「その意見には、賛同するわ」

ところが、急にまた別のコンテナを固定していたワイヤーが切れ、二人は別の場所に逃げる羽目となる。

更に……。

「あっ！　私の靴！」

「後にしろよ！」

「嫌よ。壊れたらどうするのよ！」

アキオに手を引かれた拍子に、靴を入れた箱を離してしまったランファがそれを取るために予想外の動きをしたので、アキオはバランスを崩してその場をクルクルと回転してしまう。

「ほら見ろ！　急にランファが動く……」

アキオの言葉は、そこで止まってしまった。

靴の入った箱の確保には成功していたが、同じくバランスを崩してクルクルと宙を回っていたランファと正面衝突してしまったからだ。

「「（この唇に感じる柔らかい感触は……）」」

唇と唇が重なり完全にキスをしている状態の二人は、あまりの出来事に三十秒近くも硬直して動けないでいた。

そして、ようやくに二人が離れた瞬間に、ミルフィーユが数人の助っ人と共に倉庫に戻って来たのであった。

「とにかく！　ここは、緊急会議よ！」

倉庫内の片付けをミルフィーユとアキオの部下達に任せたランファは、アキオの手を引きながら、猛スピードで自分の部屋に戻って

いた。

「あの……。お茶は？　確か、奢ってくれるって……」

ティーラウンジで、お茶を奢って貰う約束を反故にされたアキオは、自分なりに精一杯の抗議を行う。

ただ、この場合は、どう考えてもティーラウンジに行けるはずもなかった。

もしその場にミントがいれば、二人が偶然にしてもキスをしてしまった事実を読まれてしまう可能性があったからだ。

「この非常事態に、あんたは！　お茶なら、私が淹れてあげるわよ！」

自室にアキオを招きいれたランファは、急いで二つの茶碗にお茶を淹れる。

この際、自分の部屋に男性云々という事は気にしない事にしたらしい。

「ランファ。お前……。ドクダミ茶なんて、単独で淹れるなよ……」

「五月蝿いわね！　消毒よ！　消毒！」

ランファは、アキオの目の前でうがいを数回繰り返す。

「それは、男として微妙にショックだな。そもそも、あれは事故なんだからノーカウントだろう」

「まあ。それは、そうなんだけど……。ところで、アキオは、まさかファーストキスとかそういう事はないわよね？」

「当たり前だろうが……」

「ちなみに、いくつの時？」

「何で、そんな事をランファに……「話しなさい！」」

「はい！」

アキオは、ランファの気迫に押されて、自分のファーストキスの経験を語る羽目となる。

「十五歳で、ジュニアハイスクール三年の時だよ。同じクラスで近所に住んでいた娘でね。俺の初恋の娘だったよ」

思えば、アキオが恋をしたと胸を張って言えるのは、その時だけであった。

他の同級生達に見つからない様に待ち合わせをして、たわいもない話をしながら家までの道を二人で帰る。

手を繋ぎたかったが、お互いに恥ずかしくてそれが出来なかった。

お互いに好きだとわかっていたが、告白も出来なかった。

そして、士官学校入学が決まり、ジュニアハイスクール卒業式直前に母が亡くなり、二人で帰る時間が無くなった。

母の死後、自分の出生の秘密を知り、一人で生きていく事を決意したアキオは、子供の頃からの交友関係を全て切るために、母と住んでいたアパートを引き払い、士官学校の寮へと荷物を送った。

卒業式の当日、アキオは暫く顔を合わせていなかった彼女と最後の顔合わせをした。

卒業式終了後、校舎の裏で、アキオはただ一言だけ言った。

『ごめん』と……。

十五歳の少年にも重い現実なのだ。

十五歳の少女には、もっと重い現実となるであろうと思ったアキオは、一言だけ彼女にそう言ってその場を立ち去ろうとした。

すると、彼女は無言で自分に唇を合わせて来た。

二人の最初で最後となるであろう拙いキスは、僅か十秒ほどで終わり、二人は今現在まで何の連絡も取っていない。

そんな話を、アキオはランファに話せる部分だけ話した。

「意外ね……。もっと、遊び人かと思った」

「勝手にそう思っていろ。まあ。そういう事だから、お互いに事故ってことでケリだからな。ご馳走さん」

ランファは今年で十九歳になるし、見た目はスタイル抜群の美少女であったので、恋愛経験くらいいくつもあるであろう。

そう思ったアキオは、茶碗に残ったドクダミ茶を飲み干すと、ランファの部屋を後にする。

「もう。あれが、私のファーストキスだってのに……。あのバカ……」

一人部屋に残されたランファは、アキオに製作を手伝って貰った靴の箱を眺めながら複雑な表情で呟くのであった。

『味方からの通信が入りました。それも、軍用暗号で合流命令だそうです』

つい先ほど、倉庫で物資の整理の仕事を手伝っていたアキオは、エルシオールの副長であるエリオスから報告と呼び出しを受け、ブリッジでの相談に参加する事となった。

「レイトン。何か意見はあるか？」

命令なので仕方がないのだが、アキオは、この呼び出しに応じた事を後悔する事となる。

なぜなら、エリオスもタクトも困惑した表情をしていて、レスターも表には出していなかったが、ほぼ同じ状況であったからだ。

アキオは、この船の中ではエリオスよりも権限の低い臨時の主計参謀という職にある。

これは、ドタバタと白き月を離れたエルシオールに、補給担当の責任者が存在していなかったから取られた処置であり、第２方面軍で正規艦隊への補給を一手に引き受ける通商護衛艦隊の現場を取り仕切っているアキオに、皆が期待したから取られた処置であるとも言えた。

アキオは、配属された軍人や軍属達を素早く組織し、物資の種類や残量を把握し、それを必要な時に必要な量をすぐに搬出できる環境を整えた。

これは、普通の人からしたら驚異的な能力なのであろうが、アキオからしたら余技程度の事であり、他の仕事をレスターに与えられないで時間が余ったアキオは、ムーンエンジェル隊の面々との自己訓練や、余暇や、シヴァ皇子の臨時の家庭教師で時間を潰していた。

ただ、この事でアキオに特に不満があるわけでない。
今までの忙しさが尋常ではなかったし、忙しい時は忙しいなりに、暇なら暇なりに動くのがアキオ・レイトンという軍人であったからだ。

「レスター・クールダルス副司令。なぜ、俺に聞くんだ？」

「お前が、参謀の一人だからだ」

レスターの、『何、当たり前の事を聞いているんだ？』という態度に、アキオは静かに腹を立てていた。
今までの数度の戦闘では、参謀の一人としてブリッジに集合はしていたのだが、そんな意見を聞かれたこともなく、ただ戦闘時にエルシオールが被弾した際のダメージコントロール要員に必要な資材を渡す人員の配置しか仕事がなかった。
それを今になって、自分で処理できている時は嫌いだから雑務だけを行わせ、無理だと感じるとアキオの能力を利用しようとする姿勢が嫌だったのだ。

「物資に不足はない。自由にしろ」

「俺は、この味方からの通信の真偽とこれからの行動について聞いているんだ」

「だから、どう動いても暫くは物資は大丈夫だ」

「レイトン！　貴様！」

アキオのその職責から一歩も外に出ない姿勢に、レスターは珍し

く怒鳴り声をあげた。

「三人もガン首を並べて、自分の意見もないのか？　シードル大尉。君は、どう思っているんだ？」

アキオは、最初に内心で一番嫌っているエリオスに質問をする。この何も事情を知らないで、時間があれば無邪気に自分に仕事の事を聞きに来るお坊ちゃまから最初に片付けようと思ったからだ。

「味方からの暗号は、敵の罠の可能性があります。行くべきでないと思います」

「だが、この暗号コードは、確実に味方の物だぞ」

レスターが、エリオスの意見に反論する。

真面目で軍の命令に忠実なレスターにとって、集合宙域に行かないという選択肢はあり得ないらしい。

「本星が、エオニアの手に落ちています。暗号コードも敵に渡ったと考えるべきでは？　それに、先の桜葉少尉に付き纏った敵の事もあります。彼は、彼女の細かなプラーベートな事まで知っていた。敵の情報収集能力を侮るべきではありません」

やはり、士官学校三位卒業の実力は伊達ではないらしい。

エリオスは、罠の危険性を口にする。

だが、彼の限界はここまでであった。

タクト達よりも年齢が若く経験が少なかったので、だからこの先にどうするという意見が言えなかったのだ。

「暗号コードの調符の改定もキチンと成されているし、正式な命令

文章でもある。ここは、集合場所に行くべきだろう」

それでも、二人はちゃんと自分の意見を持っていた。
どうやら問題なのは、司令官であるタクトの方らしい。
アキオが視線を向けると、タクトは非常に困惑した表情をしていた。

「（ちっ！　ここで悩んだ顔を部下に見せるな！）」

アキオは、内心でタクトに舌打をしていた。
別に、司令官が悩んでいけないなどという事もない。
ただ、それは表に出してはいけないのだ。
司令官が苦悩すれば、それは部下達に不安や不信となって伝染病の様に広がり、士気に多大な影響を与える。
そして、それは部下達の動きを鈍らせ、時に勝てるはずだった戦いを落す事にもなりかねない。
なので、司令官は常に平常心を保っている様に、時には余裕の表情を見せ掛けでも良いからする。
少なくとも、アキオはそう心がけていた。

ただ、これは非常にハードルの高い条件でもあった。
士官学校卒業以来、多くの実戦や修羅場を経験しているアキオには可能な事であったが、まださほど実戦に慣れていないタクトやレスターやエリオスには厳しかったのだ。

「（今までは、紋章機の圧倒的な性能で何とかなっていたからな。だが、今回はわからない。暗号通りにその宙域に移動すると、敵が多数で待ち受けている可能性も否定できない。タクト。ここは司令官としての踏ん張りどころだぞ）」

まだ経験は少ないが、絶対にタクトは自分よりも優れた指揮官になる。

アキオは、そう信じてもいた。

「レイトン。意見を聞かせてくれないか？　お前が、司令系統の秩序を乱さない様に気を使っている事は理解しているつもりだ。だが、今は緊急事態だ。使える物は全て使いたい。そして、勿論それには、お前の経験や知識も含まれている」

タクトは、いつになく真面目な表情でアキオに助言を求めた。

アキオが、レスターの質問に答えなかった理由はそこにもあった。

アキオはタクトと同じ准将なのに、ここでの席順は大尉でナンバー3のエリオスよりも下であった。

なので、アキオが一回でも変に出しゃばると、それ以降エルシオールの乗組員達が先の三人を飛び越えてアキオに指示を仰ぐ危険性があったからだ。

そして、それが実際に起これば、エルシオールは軍艦として機能しなくなってしまうであろう。

だから、アキオは、物資関係の仕事以外に一切手を出さなかったのだ。

「あくまでも俺の意見だからな」

「ああ。それで構わない」

「暗号の件は、シードル大尉と同意見だな。敵に漏れている可能性がある。忘れたのか？　レスター。ウォッカ大将の下にいる時に最初に俺達がした事を。調符の改定なんて簡単な物じゃなくて、根本的に暗号を変えたじゃないか」

「確かに、そうだな。だが、第3方面軍は、その新暗号を使っていない」

第3方面軍がその新暗号を使っていないのは、その作業をウォッカ大将が主導権を取った事に、ジーダマイヤ大将が反発していたからだ。

それに、管理がおざなりになる事がわかっていて、新暗号を第3方面軍に渡す事をウォッカ大将が嫌がったという事情も存在する。

あの短い時間で苦労して作った暗号なのだ。

適当に扱われては困るというのが、ウォッカ大将や他の方面軍の司令官の意見であった。

「味方からの通信である事には、間違いはないと思う。ただ、敵に落ちた暗号を使い続けてる点がバカだな。『僕はここにいます。攻撃してください』と敵に教えている様なものだ。俺は、味方の艦隊の残骸と敵が待ち受ける未来を予想する。逆に味方によって敵が撃退されているかもしれないけどな」

「それで？」

「無視して惑星ロームまで単独行動を取るか、待ち受ける敵を討つか、上手くかわして逃げて味方艦隊との合流を図るか。それは、司令官殿の決断一つだな」

その後、味方艦隊との合流の噂を聞いたムーンエンジェル隊の乱入によってこの話し合いは幕を閉じ、タクトは味方艦隊との合流を目指すとい方針を明らかにした。

これは、迂回ルートを取ってもクロノドライブを行うルートにさほど変わりがなく、敵が大戦力ならどうせ見つかってしまう事と、指揮下にはなかったが、上官であるジーダマイヤ大将の命令を無視

するのは如何がなものかというレスターやエリオスの言をタクトが受け入れたからであった。
それと、長時間の単独航行でミルフィーユ達に不安が募っていたという事情も存在した。
パイロット達のテンションが重要な紋章機において、この不安要素は無視できず、彼女達の不安を取り除くための味方との合流をタクトは遂に決断をしたのであった。

ただ、この先にどうなるのかは誰にもわからない。
エルシオール首脳部の不安は晴れないまま、合流宙域に向けてのクロノドライブはスタートするのであった。

「それで？　敵は、待ち受けているのかね？」

「いるな」

別に、アキオが先の話し合いの事を漏らしたわけではない。
実戦経験豊富なフォルテが、それとなく勘付きアキオに聞いただけであった。

「アキオ。判断の根拠を示しな」

「あらゆる状況証拠がそれを物語っている。それと、俺の経験と勘

からだ」

先ほどの首脳会議終了後、アキオはフォルテと食堂で昼食を食べながら話をしていた。

ちなみに、メニューはおでん定食であった。

さすがに、飲み物は冷たい麦茶であったが……。

「あんたの勘は鋭いからね」

「おかげ様で、今までくたばらずに生きている」

「あんたは、悪運も強いからね。それで、肝心の司令官殿はどうなんだい？」

「まだタクトを名前で呼ばないんだな」

「いまいち頼りなくてね」

ルフト司令に代わりムーンエンジェル隊の新司令になったタクトは、ほぼ全てのエルシオール乗組員達からの信頼を得る事に成功していた。

唯一の例外は、アキオの目の前でおでんを食べているフォルテであろう。

ムーンエンジェル隊唯一の大人の女性で、実戦経験がある彼女は、タクトの事を少し頼りない男だと思っていた。

「こうなると、イレギュラーで俺がエルシオールに残った事が仇となったな……」

「そうだね。悪いが、アキオが司令官の方が、私にはシックリと来

るね」

フォルテは、老練で経験豊富な前司令のルフト司令の事は信頼していた。
それと、過去に共に激戦を潜り抜けたアキオの事もだ。
そして、今、そのアキオがお客さん扱いでエルシオールにいる。
運命とはいえ、これが今はマイナス要素となって働いていた。

「やはり、認められないのか？」

「そこまで意固地でもないんだけどね。目の前に一流の男がいるのに、未完の大器に期待するほど夢見る少女じゃないのさ」

フォルテは、ムーンエンジェル隊の隊長で最上級者でもある。
故に、あの少女達に対して責任があるのだ。
だからこそ、他の隊員達がタクトを信頼しても、一歩後ろに下がって彼を見る必要があった。

「それよりも、逆に私がアキオに聞きたい事があるね」

「何だ？」

「あんたは、なぜ司令官殿を信じている？　誰がどう考えても、あんたの方が優秀じゃないか」

それは、フォルテにだけでなく、実はかなり多くの部下達に聞かれている事であった。
タクトは気さくであったが、実戦時には鋭い戦術眼を見せる男だったので、それなりに尊敬されていた。
だが、アキオはタクトと同じ年なのに、貴族階級であるタクトと

階級を並べ、その実績はタクトの比ではない。

『タクト・マイヤーズ司令よりも、アキオ・レイトン司令の方が安心なのでは？』

これは、多くの人達が口には絶対に出さないが心の中で思っている事実であった。

「なぜって……。なぜなんだろうな？」

「おいおい。アキオ」

「それも、勘だよ。勘。俺は、あいつには表面上の能力だけで図れない何かがあると信じている。だから、あいつの下で特に文句はないんだよ。それに……」

「それに？」

「この体制を決めたのは、ルフト中将なんだ。俺達はそれに従う義務がある。軍人は、その置かれた立場と職責の中で最大限の努力をする。そういうものだろう？」

いくらアキオが優秀でも、それを理由にタクトを引き摺り下ろす選択肢などあり得ない。

なぜなら、それをしてしまったら、そこは軍隊では無くなってしまうからだ。

ここは、荒くれ者揃いの海賊のアジトではないのだ。

「だから、フォルテ。タクトを信じるんだ。多分、この試練を乗り越えれば、タクトは、お前が認める事が出来る司令官になれる」

「だといいけどね。まあ。もう少し長い目で見るとしようかね？」

「レイトン。すまないな……」

ちょうどその頃、同じく食事に来たタクトは二人の会話を聞いてしまい、アキオに密かに感謝の言葉を述べるのであった。

「全員に話す事がある！」

クロノドライブ終了三十分前、タクトはムーンエンジェル隊の面々とアキオを呼び出していた。

「話って何だい？　司令官殿」

「実はだな……」

タクトは、フォルテ達に正直に今の状況を話す。

すると、既に知っているはずのフォルテも厳しい表情となり、ミルフィーユ達も不安を隠せないでいた。

「そこで、エルシオールは今から第一種警戒態勢に入り、エンジェル隊のみんなには、紋章機での待機を命令する」

「それで、勝てるの？」

ランファが、不安そうな表情で尋ねてくる。

「勝つ必要なんてない」

「ちょっと！　タクト！」

「良く考えてみてくれ。俺達の目的って何だ？」

「シヴァ皇子を、惑星ロームまで無事にお連れする事ですわ」

タクトの問いに、この中では比較的冷静なミントが答える。

「そうだ。シヴァ皇子を、惑星ロームまでお届けする事だ。それに、今まではこちらの消耗を狙ってか、戦力の分析を行っていたのか、敵は戦力を小出しにする傾向があった」

「今回は、違うかも知れない……」

「そうだ。ヴァニラの言う通りだ。そこで、作戦のあらましを今から伝えておく。クロノドライブ終了後、味方艦隊の確認を素早く行い、最速で次のクロノドライブを行う。敵がいようといまいとその速度を遅くする事はあり得ない。敵が襲ってきたら、火の粉を振り払うだけ。敵の撃沈に拘るな。足を止める事を最優先にしろ。エース気取りで敵の撃破数を誇るな。止めを刺す暇があったら、エルシ

オールに迫る次の敵の足を止めろ。火力を少しでも削れ」

タクトの語る作戦方針に、フォルテ達は沈黙したままであった。

「それと、レイトン」

「何だ？　タクト」

「エルシオールの武器管制を全て任せる。臨時の砲術参謀を兼任して貰う」

「了解だ」

アキオは、一言だけ了承の返事をする。

「おい！　タクト！」

レスターは、その案に反対であった。

別にアキオが嫌いだから、重要な仕事をさせたくないというわけではない。

彼が活躍する事で、部下達にタクトの司令官としての資質が更に疑われる事を防ぎたかったのだ。

レスターは、タクトの司令官としての資質を疑っていなかったが、ブリッジ要員であるココやアルモは少し疑っていたし、フォルテやちとせやミントにも少しその傾向が見られた。

なので、レスターは自分が嫌われてでも、指揮系統の乱れを防ぎたかったのだ。

「レスター。ここに使える男がいるんだ。司令官として、仕事を任せる事は当たり前じゃないか。お前の危惧は理解しているさ。正直、

俺も危惧していた事だ。だけど、レイトンにもっと仕事を任せる様に、司令官として命令を出すべきだったんだ」

「タクト、お前……」

「使いこなしてみせるさ。《切れ者のレスター》と《多才のレイトン》をな。あのウォッカのジイさんしか出来なかった最高の贅沢だしな。それに、最強のムーンエンジェル隊もいる。敵を全滅させるわけでもない。逃げ延びれば勝ち。あれ？　そう考えると、意外といけるかもしれないな」

タクトはいつもの能天気な顔に戻ってしまったが、その態度にフォルテを除く全員が安心した様な表情になる。

司令官が不安を感じているとそれが部下に伝染するが、その逆もまた然りなのだ。

「最後に一ついいかい？　司令官殿」

「何だい？　フォルテ」

「あんたは、敵さんが来ると思うのかい？」

「ああ来るだろうな」

「その根拠は？」

「俺のさほどでもない勘だ」

「そうかい。じゃあ、紋章機の中で待機していないとね」

特に追求などもせずにフォルテは納得し、エルシオールは第一種警戒態勢に入るのであった。

「あの。クールダラス副司令」

「何だ？　ココ」

「アキオさんって、凄いんですね」

「ああ。奴は、多才を誇る天才だからな」

レスターは、アキオの事が好きではなかったが、その能力は認めていた。

なので、ココの話に素直に返事をする。

ただ、その顔は非常に不機嫌であったが。

「だから、司令官が中途半端にボンクラだと上手く行かない。奴に嫉妬するからな」

老練なウォルコット中将やウォッカ大将は、アキオにフリーハンドを与えて責任のみ取るという手法で、彼を上手く使いこなしていた。

だが、中途半端にボンクラだと、『彼にその功績を奪われてしまうのでは？』などと考えて彼を上手く使いこなせなかった。

「中途半端にですか？」

「ああ。完全にボンクラならその方が楽なんだ。あいつに全部任せて、いつの間にか自分の功績になっているからな」

現に、そうやって出世した軍人が数人いる事を、レスターは資料で知っていた。

「でも、タクトさんなら大丈夫そうですね」

「多分な。始めは少し遠慮していたらしいが、今ではとことん利用するつもりらしい。ドンと構えて精々こき使ってやればいいんだ」

「何か、毒がありますね……」

「俺は、奴が嫌いだからな」

「そういう事は、俺のいないところで言え」

レスターとココが話をしている近くで、アキオは予備の席に座って端末を開き、そこにエルシオールの火器管制プログラムを呼び出して、細かな調整を行っていた。

「早い……」

隣の席でその作業を観察していたアルモが、驚きの声をあげる。

「アルモ。俺から君に望む事は、エルシオールに一番接近している敵艦の情報を素早くトレースして伝える事だ。特に、突撃艦・小型ミサイル艦・駆逐艦の類は絶対に漏らさないでくれ」

「小型艦艇ばかりですね」

「戦艦なら、エルシオールの機動力で振り切れる。巡洋艦も、一隻ならさほど脅威にはならない。撃ち合っている間に距離を置けるからな。だが、小型艦艇には機動力とミサイルや光子魚雷という必殺の武装が存在するからな。それに、向こうさんは無人艦だ。最悪、エルシオールにぶつけても懐は痛まない」

アキオはアルモに説明をしながら簡易シミュレーターを呼び出し、それを使って砲撃の練習を開始する。

エルシオールには巡洋艦クラスの武装が施されているが、これは巨大な艦体の各所に散っていて、火力を一点に集中する事がかなり難しい状態となっていた。

元々、儀礼艦という戦場に出るはずもない船なので、武装はお飾り程度と考えられていたからだ。

ところが、アキオは、まるで華麗にピアノを弾くかの様に指を動かし、シミュレーターのレーダー画面に映し出された駆逐艦に砲火を集中し、一撃で致命傷を与えてしまう。

他にも、接近する三つの標的に、同時に効率良くけん制のための砲火を撃ったりと、かなり器用にシミュレーターをこなしていた。

「お上手なんですね」

「まあね……」

「やはり、惑星セルドリックで？」

アルモが偶然知っていた惑星セルドリックの動乱は、トランスバール皇国軍にとって、あまり触れられたくない類の事件であった。

なぜなら、アキオが大きな戦果をあげたのは事実であったが、緊急避難的行動とはいえ、非常時における指揮権の継承が大きく逸脱された戦いであったからだ。

「そうだ」

惑星セルドリックで、駐留艦隊の下っ端の参謀職にあったアキオは、当時反抗的であった中央政府を恫喝するために観艦式を行う予定の駐留艦隊旗艦マラヤの艦橋の中にいた。

だが、当時の中央政府の解答は、戦闘開始という悲劇的なものであった。

敵秘匿艦隊に奇襲を受けたアキオは、被弾の衝撃で床に叩き付けられ一瞬意識を失いかけた。

だが、ここで意識を失えば死ぬと判断し、額を流れる血を無視して艦内の状況把握に努める事となる。

「艦長は、首がおかしな方向に曲がっていた。司令と副司令は、機材に頭をぶつけていて意識がなかった。副長は……」

彼は、その状況で狂った様に笑っていた。

つまり、体は生きていたが、心が死んでいる状態だったのだ。

「だから、他の巡洋艦の艦長に指揮権を継承する様に通信を入れたんだ。何しろ、当時の俺は大尉だったからな」

ところが、少佐であるその巡洋艦の艦長も、他の駆逐艦の艦長も、自分の艦の指揮で手一杯という解答を寄越して来る。

「最初が奇襲で全滅かと思ったら、意外と敵の艦隊も間抜けでね。実戦経験が無くて、砲戦距離を誤っていたらしい。《マラヤ》も、シールドのおかげで艦隊首脳部以外はほぼ無傷だった。だから、欲が出たんだろうな。『自分は生き残れる』って。となると、艦隊の指揮なんて御免蒙りたい。そういう事らしい」

仕方なしに、アキオが臨時で指揮を執る事となった。

広域通信用のインカムを頭に付けて、臨時の指揮権継承を全艦隊に宣言し、同じく負傷して動けないでいた砲術担当員の席に座って、見よう見真似で敵にけん制の砲撃を加えながら、体制を立て直すために逃走に入る。

ようやくに逃走に成功したが、その後の第４方面軍司令部との通信は駐留艦隊を絶望の淵へと追いやった。

『援軍を出すから、それまでその場に踏み止まるように』

現場の事など少しも考えない、自分達の面子のみに拘った最悪の命令であった。

「みんな。ガッカリしてな。次席指揮官であった巡洋艦マレー艦長の少佐が、先ほど辣腕を見せたレイトンに任せるって宣言してしまったんだよ」

結果、名前だけ借りてアキオが《マラヤ》の艦橋で指揮を執る事となった。

頭を打って意識が無かった司令が遂に帰らぬ人となり、副司令も重篤で動かせる様な状態になく、更に砲術担当士官も重傷で入院中

だったので、アキオはその席に座りながら命がけで指揮を執った。
常に居場所変え、敵の弱い部分を狙って奇襲を行い、攻められた時には巧みに相手を十字砲火に引きずり込んで損害を与える。
補給物資を得るために、中央政府に反抗する商人と極秘裏に連絡を取って待ち合わせをするという危険な事も行った。
危機意識に欠けた第４方面軍から主力艦隊が駆けつけた時には、戦没艦こそ無かったものの、既に駐留艦隊はボロボロの状態であった。
だが、敵はもっと疲弊していて、彼らは大戦力であった援軍に一戦もせずに降伏する事となる。

「ところが、実質的に俺が指揮を採っていた事が問題になった。指揮権継承順位がどうの、軍法がどうのってね」

結局、名目上の司令官代理がいたから特に問題なしとされたが、アキオの功績は実質これでチャラとなった。
ただ、昇進だけはして、そこから地獄のサーヴァント戦線に送られる事となった。
先のアキオに指揮を丸投げした少佐は、中佐に昇進して新しい駐留艦隊副司令となり、反逆したセルドリックの中央政府は、事件に関係した責任者達が公職から永久追放され、皇国に従順な要人に全て切り替わる。
これが、大きな混乱を嫌うジェラール陛下の裁定であった。
勿論、その後ろにはあの老人がいたのだが、それは人には話せない事実である。

「あの……。アキオさん」

「心配するな。船など正面から撃ち合っている限り、そうは沈まないものさ。そもそも、紋章機が近づけさせないだろうし、タクトは

司令官として堅実で簡潔な生き残り策を示した。後は、俺達が動揺せずに確実に動けるか。それだけなんだ」

十分後、エルシオールはクロノドライブを抜け、暗号に記された味方艦隊との合流宙域へと向かう事になる。

「この残骸は……」

「いや！　この宙域は、軍の演習に使われている場所でもある！　標的用の廃棄艦艇の残骸かもしれない！　アルモ！　調べてくれ」

「了解！」

合流予定宙域に少し遅れて到着したエルシオールであったが、タクト達はそこで衝撃的な光景を見る事となる。

小惑星の破片と共に漂う多数の艦艇や戦闘機の残骸。

レスターは、この宙域が軍の訓練に使われていた事を思い出し、アルモに詳細な分析を命令する。

「古い艦の残骸もありますが、最近の物もあります。まだ、燻っているクロノクロスエンジンの反応も……」

「やはり待ち伏せか！　次のクロノドライブポイントに全速力で向

かえ！」

「多数の艦艇の反応！　これは！　敵です！」

アルモが制御しているレーダースクリーンには、多数の艦艇による反応が示さる。

「こんなに沢山……」

「落ち着け。アルモ。俺達は、振り切って逃げるだけだ。今は、少しでも詳細なデータを集めろ」

「はい」

隣の席のアキオに声を掛けられたアルモは、気を取り直して敵艦隊のデータ収集を開始する。

アキオの言っている事は作戦の確認に過ぎなかったのだが、その落ち着いた口調がアルモに鎮静剤の様に効いていた。

「ココ。何をしているんだ。クロノドライブポイントに向けて全速力だ」

「はい！」

続けてタクトがココに命令を出すと、今度は敵の旗艦と思しき船から通信が入ってくる。

「タクトさん」

「繋いでくれ。だが、エルシオールの速度は落すな」

タクトの命令でココが通信を繋ぐと、メインスクリーン一杯に若い女性軍人が映し出される。
それは、エルシオール追撃艦隊司令シェリー・ブリストルその人であった。

「突然の通信で失礼します。私は、正統トランスバール皇国軍エルシオール追撃艦隊司令シェリー・ブリストルです。諸君らのこれまでの奮闘に敬意を示すと共に、話し合いたい事があって通信を入れました」

あの年で中尉にしかなれずに、皇国軍を裏切った野蛮で単純なレゾムや、技量はあるが頭の線が何本か切れているヘルハウンズ隊とは違い、シェリーは、軍人としても人間としても格の違いを見せていた。

「へえ。正統トランスバール皇国って、あなたみたいな美人提督がいるんですね」

「あら。お褒めの言葉をありがとう」

「タクトさん！　どうせ、私は美人じゃないですよ！」

「ごめんよ、ミルフィー。でも、可愛さは君の方が上だって！」

タクトは、動揺を見せない様にシェリーにお世辞を言ってみたのだが、それを紋章機内で待機中のミルフィーユに聞かれて彼女の機嫌を損ねていた。

「タクト、痴話喧嘩は後でやれ。それで？　エオニア元皇太子殿下

の側近中の側近であるシェリー元少将閣下は、我々に何の話があるんだ？」

別の通信機でミルフィーユに懸命に謝っているタクトを放置して、代わりにレスターがシェリーと話を始める。

ちなみに、先ほどから姿が見えない副長のエリオスは、サブブリッジへと移動していて、そこでエルシオールのダメージコントロールの任に就いていた。

「タクト・マイヤーズを支える双璧の一人、《カミソリレスター》《切れ者レスター》の異名を持つレスター・クールダラス副司令か……」

お互いにお互いの情報は既に知れ渡っていた。

シェリーは、実はタトク達の士官学校の先輩に当たる人物であり、将来を嘱望されたエリートであったが、エオアニの側近である事が災いし、共に辺境へと追放されていた人物であった。

「こちらも色々と忙しくて大変なのですよ。お話は手短に願います」

「そうでしたね。なら、簡潔に伝えます。降伏してシヴァ皇子をこちらに渡して貰いたい。降伏してくれれば命の保障は勿論。エオニア陛下に仕える気があるのなら、その取次ぎを行います。クールダラス副司令。いかがかな？」

シェリーの口調は丁寧であったが、その後ろには圧倒的多数の艦隊が控えていた。

つまり、ここで降伏しないと嬲り殺しだと言っているに等しかった。

「だとさ。タクト。どうする？」

レスターは、まだミルフィーユに謝っているタクトに話を振る。

「この埋め合わせは、後でするからさ。ああ。悪いけど、お断りさせていただきます」

ミルフィーユに謝る事に懸命で、シェリーの話を聞いていない様に見えたタクトは、実はちゃんと話を聞いていてすぐに断りの返事を入れる。

「残念ですね。では、こちらは攻撃に入りたいと思いますが……」

シェリーは、タクトの前にある席に座って懸命に端末をいじっているアキオの方に視線を向ける。

「（この状況で、私に注目すらしないのか。バカなのか肝が据わっているのか……。いや！　彼は、やはり油断ならない！）」

シェリーが始めて見る実物のアキオ・レイトンは、正式な第一種正装すら着ていなかった。

整備員や補給担当の軍人や軍属の着るツナギを着て、胸と肩に階級章と参謀章をおざなりに付けいるだけだ。

だが、それが理由で、彼が無能だとはシェリーは考えなかった。

「（あの男。こちらを見ていない様で、私を詳細に観察している。やはり、油断ならない）アキオ・レイトン准将。あなたも、彼らと同意見なのかな？」

突然の事であった。

シェリーは、アキオへと先程の話を振る。

「降伏ですか？　ですが、私には何の権限もないですよ。シェリー閣下」

シェリーは見逃さなかった。

一見すると、『何で俺に聞くの』という表情をしていたアキオが、僅かに『待ってました』という感情を一瞬だけ表に出した事を。

「あなたは、《多才のレイトン》と呼ばれている有名人です。そんなあなたの意見を、マイヤーズ司令は無視できるでしょうか？」

「出来ますよ。彼は司令で、俺は参謀で部下。決定権は司令であるタクトにある」

「そうですか。駄目ですか」

「今回は、縁が無かったという事で」

まるで見合いを断るかの様に、アキオはシェリーの降伏勧告を断ってしまう。

だが、シェリーはかなり有能な人物であるらしい。

勝利に完璧を期すために、最後にアキオに揺さぶりを掛けてくる。

「私には、あなたがそこにいる理由が理解できません。誰よりも有能なのに、その才を傲慢な貴族達や軍の高級将校に利用されている。エオニア様の元に来れば、その能力に見合う待遇を受けられるのに。正直に言いましょう。エオニア様は、あなたを非常に高く買っておられる。ゆえに、こちらへの合流をいつでも歓迎するそうです」

最後にそれだけを言うと、シェリーは通信を切ってしまう。

「へえ。敵にも認められる才能か。凄いなレイトンは（エオニアは、レイトンの出生の秘密を知っているな……）」

表面上はおどけて言うタクトであったが、内心ではなかり動揺していた。

もし、先程シェリーがアキオの出生の秘密を暴露していたら、大変な事になっていたからだ。

「宰相にでもしてくれるのかね？」

「だったら行くのか？」

「まさか。あんなお友達が少なそうな所」

エオニアの勢力は、戦力は持っていたが無人艦隊が主体だったので意外に人員が少なかった。

それを揶揄してのアキオのジョークであった。

「ほらほら。敵さんが迫っているぞ。それに、俺が本当に裏切るとでも思っているのか？」

アキオがタクトに視線を向けると、彼は無言で首を縦に振ったので、今度はフォルテ達に通信を入れる。

「フォルテ。上等のジュースを冷やして待っているからな」

「……。本当に上等なのかい？」

「ああ。上等だ」

二人の会話に、タクトは苦笑してしまう。
アキオの言う上等なジュースとは、勿論上等な酒の事であったからだ。

「ミント」

「はい……」

「惑星ロームにある衛星都市ファーゴは、有名な観光スポットだそうだ」

「はい」

「休暇を取って、観光にゴーだ！」

「はい！」

「ちとせ！　一緒に行くぞ」

「はい。お供させていただきます」

「ちょっと！　私は、おいてけぼりなの？」

「割り勘だよ」

「あんたケチね！」

「今月は、ピンチなんだよ！」

「常にピンチなんじゃないの？」

「いやあ。ランファさん程では」

アキオは、次々とムーンエンジェル隊の面々と話をして行く。

「ヴァニラ。美味しいケーキバイキングの店に行こう」

「……。はい」

「あの。アキオさん。私は？」

「タクトに連れてって貰いな。それとな。ミルフィー」

「はい？」

「タクトの軽口にいちいち怒るなよ。女としての器を疑われるぞ」

「でも……」

「こいつに、二股なんで器用な真似は絶対に無理。俺が、保障する。さあ。元気出して行くぞ！　みんな！」

「「「「「「おーーーっ！」」」」」」

その後、エルシオールは、最高速度を維持したまま敵の増援が現れるギリギリのタイミングでクロノドライブポイントへの移動に成功する。

ムーンエンジェル隊は、タクトの命令通りにエルシオールの護衛

に徹底し、敵艦の機関部や火器の破壊に特化した攻撃を続け、アキオは、エルシオールの火器で紋章機の撃ち漏らした敵艦へのけん制砲撃に終始する。

「タクト・マイヤーズ。やはり、やるわね」

指揮下の艦隊の半数を行動不能にされたシェリーは、苦笑いを浮かべていた。

いくら大量に用意できる無人艦隊とはいえ、傷付いた船をそのまま放置する事など出来ようはずもなく、傷付いた船一隻を修理可能な施設に移動させるとなると、それに最低でも一隻の無傷の船を付けなければならない。

損傷艦ばかりで沈没艦がほとんどない事が、シェリーの行動を逆に縛ってしまったのだ。

「でも、これくらいの事は想定済みなのよ。次のクロノドライブ終了宙域で、絶望を味わうといいわ」

そこには、エオニアの率いる本体と今回の戦闘いでは間に合わなかった増援部隊も集結する予定であった。

「次は完全にチェックメイト。早めに降伏する事ね」

シェリーは、後方に下げる損傷艦艇とそれを牽引する無傷の艦艇を選抜した後、エルシオールを追う様にしてクロノドライブを開始するのであった。

「まずいな。タクト」

「ああ。後門の増援に追われる様にして行ったクロノドライブ。あれの追撃もあるだろうし、待ち伏せしている戦力もあるんだろうな」

第一ラウンドはどうにか潜り抜けたが、次のラウンドはもっと厳しい戦闘になりそうだ。

そう考えているエルシオールの首脳部であった。

エリオスとレスターに艦内の業務を任せたタクトは、アキオと一緒に司令官室の奥のタクトの個室でお茶を飲んでいた。

「それと、お前の事もある」

「俺が、裏切るとでも?」

「いや。思わん。だが、敵さんはお前の出生の事を知っているらしいな」

「そういうお前は、どこでその話しを?」

アキオにとっては、エオニア達がその話を知っている事よりも、タクトが知っている事の方が驚きであった。

「お前ね。ああいう話は、周囲に人の有無を確認してから話せよ」

「次からそうするよ」

アキオは、珍しくタクトに正論を吐かれていた。

「しかし、お前が貴族の息子ね。実は、俺よりもそう見える？」

「抜かせ。でも、そうか……。なら、俺も覚悟を決めないといけないな」

エオニアがその事を知っているとなれば、それはすなわちその情報を味方の妨害工作に使う可能性があるという事だ。

そして、それによって被害を受けるのは、自分がお世話になったウォッカ大将やウォルコット中将達であろう。

そして、それには、勿論タクト達も含まれる事となる。

「タクト。この戦いを切り抜けた後に、俺に何かがあったら俺を切り捨てろ」

「唐突だな」

「唐突だが、切り捨てろ」

「だが、それでは、ミントやちとせが悲しまないか？」

「俺に恋をする資格など無い。あの二人は、俺の事なんて忘れた方がいいんだ」

タクトは、アキオの顔を見ながら彼に同情してしまう。

内緒だが、あの老練なシードル公爵の能力を遺伝的に受け継いでいて、その能力を生かして周囲の尊敬を集めているのに、肝心のアキオは、全くその事に嬉しさを感じていないからだ。

一瞬でも、彼の能力に嫉妬した自分を嫌悪してしまう。

「とにかくだ。何かがあったら、俺を切り捨てるんだ」

それだけを最後に言うと、アキオはブリッジへと戻って行く。

「切り捨てる？　いや！　そんな事が出来るか！　お前はもう俺達の大切な仲間なんだぞ！」

タクトは、一人自室で叫ぶのであった。

（同時刻、エオニア艦隊索敵エリア外宙域）

「ほう。予想以上の大戦力ですな」

「ええ。シヴァ皇子のお出迎えと、媚を売るためでしょうね」

「ジーダマイヤ大将。張り切ってますな」

「今まで、ウォッカ大将に遅れを取っていましたからね」

第2方面軍より、ジーダマイヤ大将への援軍として、ルフト中将が指揮がする艦隊が出発し、無事にジーダマイヤ大将指揮下の艦隊との合流に成功していた。

他にも、補給を担当するウォルコット中将指揮の高速輸送艦艦隊が付随して補給や修理を行う事になっているのだが、その艦隊はか

なり貧弱な物となっていた。

「ウォルコット先輩。《サクラメント》に戻らなくて宜しいので？」

「副司令の木村大佐の仕事を奪ってしまう事になるので、暫くここにいますよ」

派遣艦隊（タカオ）旗艦巡洋艦のブリッジで、ルフト中将とウォルコット中将の話は続いていた。

「ルフト司令。ジーダマイヤ大将から通信が入っています」

「繋いでくれ」

「ほう。やはり、ウォッカはいないのだな」

ブリッジのメインスクリーンに、あまりアップでは鑑賞したくないジーダマイヤ大将と、その腰巾着の参謀長の汚い顔が映し出される。

「年のせいか、腰が痛いとの事で、私が代理を承りまして」

勿論、それは嘘であった。

『あのバカと直接顔を合わせる時間が惜しい。ワシは忙しいのじゃ』

これが、ウォッカ大将の本音であった。

「艦隊の数も少ないな」

旧式巡洋艦と旧式駆逐艦が主体のルフトの艦隊は、かなり貧弱な陣容となっていた。

ウォルコット中将の高速輸送艦隊も同様で、隻数は護衛の旧式駆逐艦隊を合わせても僅か二十隻となっていて、副司令の木村大佐に指揮を任せても問題なかったのだ。

「お言葉ながら、惑星ロームの宇宙港に大勢で押しかけても、迷惑をかけてしまうだけであろうとの、ウォッカ大将の意見でございまして……」

口調は丁寧であったが、ルフト中将は、『お前が無能で宇宙港の拡大工事をちゃんとしてないから、大規模な艦隊なんて送れません』と言っているに等しかった。

現に、第2方面軍では、各軍事拠点や基地のある惑星で宇宙港の臨時拡張工事を行っていて、そこには他方面から多数の艦艇が密かに集まっていた。

更に、それも全てというわけではない。

そもそも、いくつもの方面軍の艦隊を同時収容できる宇宙港などを整備していたら、いくら時間や費用があっても足りるものではない。

敵の戦力を分散するためにも、進撃は同時に複数方向からというのがウォッカ大将の戦略であった。

ジーダマイヤ大将としては、なるべく多くの艦艇を呼び寄せ、彼らにシヴァ皇子を擁した事を大々的に宣言して己の権勢を宣伝するという目的があるらしいのだが、そんな下らない事に時間を物資と資金と手間をかけたくないのが、ウォッカ大将の本音であった。

惑星ロームに集まっているのは、シヴァ皇子に早く謁見して媚を売りたい貴族出身の将校達や、所領を奪われている貴族達そのものが多かったのだ。

それに反して、密かにウォッカ大将の元に集まっていたのは、下

級貴族出身や市民階級出身の実力のある者達が多かった。

「シヴァ皇子が惑星ロームにいらっしゃるのに、不遜な男だな。ウォッカは」

「シヴァ皇子のお守りは、精鋭たる第3方面軍にお任せしたいとのウォッカ大将のお言葉でして……」

「ふん！　物は言い様よな。お前達には、後の敵艦隊掃討作戦での先鋒を命じる。命を掛けて戦えよ」

ジーダマイヤ大将が最後にそれだけを命令すると、通信は切れてしまう。

「オンボロ艦隊と練成途上の新兵で十分。本音を言うと、それも勿体無い。ウォッカ大将の言う事に賛成と言う気分ですな」

ジーダマイヤ大将とウォッカ大将による主導権争いは、ウォッカ大将が譲る形で表面上はジーダマイヤ大将の勝ちとなっていた。

だが、大半の軍人達の支持はウォッカ大将に集まっていたので、ジーダマイヤ大将は戦場でそれらの戦力を使い潰そうと考えているらしい。

「姑息な手だな。それに……」

「それに何です？」

「もうエオニアに勝ったつもりでいるらしい。戦後の主導権を握るためにおかしな工作を行っている」

「みたいですなあ」

「それと、まだ勝ってもいないのに、貴重な味方を使い潰そうとするその神経が理解できない」

「きっと、彼の頭の中では、完全勝利のお花畑が広がっているのでしょうな……」

「先輩も、言う時は言いますな」

シヴァ皇子を迎えるために艦隊は、目的宙域に向けて全速力で航行するのであった。

そして、第3方面軍艦隊旗艦戦艦ベルリン艦内では……。

「ウォッカのジジィめ！　姑息な戦力温存策を！」

「まあ、宜しいではありませんか。それも、後に閣下の手足となって働く重要な戦力となるのですから」

「それもそうだな。その戦力をわざわざ集めてくれているのだからな。逆にウォッカには感謝しないといけないのかもな」

「そうお考えなさいませ」

ベルリンのブリッジには、一人の軍服を着ていない老人がいて、ジーダマイヤ大将と話をしていた。
誰であろう、それはシェリーの手引きで惑星ロームに到着したシードル公爵の執事長コニャックその人であった。

「ところで、あの話は本当なのであろうな？」

「はい。間違いございません。私がウォッカではなく、苦労してジーダマイヤ閣下と合流したのは、この件をきちんと裁ける御仁は閣下しかいないと考えたからです」

二人は、エオニアの反乱事件前からの顔見知りであった。
コニャックは、密使としてジーダマイヤ大将にジェラールやシードル公爵の意向を伝えていたからだ。

「レイトン准将が、エオニアに通じている。もし、間違いなら大変な事になるのだぞ」

「状況証拠ながら、証拠はございます。それに、何とか生き延びた私が証人です。旦那様の無念を晴らすため、恥を偲んで逃げて来たのです。この上は、レイトンと刺し違えてでも！」

自分で手を下しておきながら、その事は億尾にも出さず、コニャックは主人を殺された哀れな執事を演じ続けていた。

「そうか。レイトンは黒か」

ジーダマイヤ大将は、嬉しそうな笑みを浮かべる。
もしそれが本当ならば、レイトンを重用していたウォッカ大将の監督責任を問え、彼に大打撃を与えられるからだ。

「左様でございます。レイトンめが行ってきた全ての事を変えねばなりませんからな。情報漏洩がある様では、勝てる戦いも勝てません」

一時期主席参謀をしていたアキオの仕事の成果を全て変更するとなると膨大な時間と手間がかかり、その損害は莫大な物となる。

そして、その責任は、全て任命者であるウォッカ大将にあった。

その事を考えると、ジーダマイヤ大将は笑いが止まらなくなって来る。

「そうか。そうか。レイトンがな。コニャックよ。そなたの無念。私が晴らしてやろう。それに、シードル公爵家の跡取りでもあるエリオスにも悪いようにはせん」

「閣下のご温情に感謝いたします（やはり、こいつは大バカ者よ。精々、こちらの都合通りに動いてくれよ）」

コニャックは、ジーダマイヤ大将に丁寧に頭を下げながら、彼の事をバカにし続けるのであった。

「うわぁ。凄ぇ数の艦隊だな」

「船と宇宙空間が7対3でやんの」

クロノドライブ後のエルシオールを待ち受けていたのは、更に数を増やした敵無人艦隊であった。

恐怖を通り越して、半ば呆れ顔のタクトとアキオは、お互いに正直に感想を述べていた。

「タクトさん。早く移動しないと……」

「そうだったな。次のクロノドライブポイントに向けて全速力だ」

ココの言う通りであった。

早く移動しないと、エルシオールに続けてクロノドライブを開始したシェリーの艦隊に挟み撃ちにされてしまうからだ。

「また敵艦から通信です！」

「繋いでくれ。時間稼ぎにはなる」

ココが通信を繋ぐと、そこには長身・長髪の美丈夫が映し出されていた。

この反乱劇の首謀者エオニア・トランスバールその人であった。

「始めまして。タクト・マイヤーズ司令官。余は、正統トランスバール皇国皇王エオニア・トランスバールだ」

「これはご丁寧に。エオニア元皇太子殿下」

「やはり、そなたは余の予想通りの男よな。そして、アキオ・レイ

トン准将」

「エオニア閣下。下っ端の私の事は無視して、うちの司令官との会話をどうぞ」

アキオは、エオニアを無視しつつも、端末のキーを操作する手を止めなかった。

「この絶望的な状況下でも、生に縋り付くのか。そなたも、余の予想通りの男よ。レイトン。余の元に来い！　そして、その能力をいかんなく発揮せよ！　宰相の地位をもって報いよう！」

「「「「宰相！」」」」

タクト、レスター、アルモ、ココは驚きの声をあげてしまう。

「では聞くが、逆に出来ないと思う根拠はあるのかな？　地位がその能力に余るとでも？」

「いや……。それは……」

タクトは、アキオならば宰相も出来るであろうと思っていた。

それと、エオニアの人物眼の確かさも驚いていた。

「それで、返事は？」

「お断りさせていただきますよ」

「理由を聞こうか」

エオニアは特に怒るでなく、その理由を問い質して来る。

「私一人で何が出来ます？　シェリー閣下は有能な軍人ですが、他に誰がいます？　負け馬に乗るのは、自分としては御免蒙りたいですな」

アキオは、正義云々などの青臭い事を言わなかった。

エオニア側が人材不足で負けると断言し、逆にエオニアを感心させていた。

エオニア自身、人材の件は何とかしなければならないと思っていたからだ。

「それは、一理あるな。だが、人材の問題は、お前が来ればかなり解決する問題でもあるのだよ」

「そうでしょうか？」

「お前は、自分の能力を過小評価し過ぎだ。お前がこちらに付けば、多くの軍人や惑星政府の離反が期待できる。それも、辺境でのな」

「「（ちっ！　確かにそうだ！）」」

タクトとレスターは、同時に同じ危惧を抱く。

アキオの今までの功績を考慮すると、決して笑えるレベルの話ではなかった。

今まで辺境で中央のエリート達に不当に扱われていた現地採用の軍人や軍属達で、アキオに引き上げられた連中は、彼を英雄視している節がある。

それに、通商護衛艦隊副司令として、多くの企業や各惑星の政府関係者にも知己が多い。

もし、彼らが雪崩を打って裏切れば、ウォッカ大将やジーダマイヤ大将の中央奪還など絵に描いた餅となってしまうのだ。
自分達の足元が覚束なければ、艦隊の出撃など不可能となるであろうから。

「それで、こちらに来てくれるのかな？」

「まさか。そんなつもりは、毛頭ありませんな」

アキオは、きっぱりと断った。

「そうか。残念だな。だが、これだけは覚えておくが良い。もし、お前にその気があるのなら、いつでも迎え入れる用意があるという事を」

「正気ですか？　これから、我々を討つつもりのあなたが」

「お前こそ、余を野蛮人の様に言わないで欲しいな。それに、知っているのであろう？　余が、シヴァの保護を願っている事を。そう。余の唯一の親族となってしまった可愛い従兄弟であるシヴァ。惑星ロームに行ってしまえば、俗物の貴族や軍人達に利用されるだけになってしまう可哀想そうなシヴァ。だからこそ、余は彼を無事に保護しなければならないのだ。故に、お前達が生き残れる可能性はゼロではない」

「他の親族は、自分で殺しておいて良く言うよ……」

タクトは、かなり辛らつな言葉をエオニアに吐くが、彼はそれを無視してしまう。

「（タクトの言う通りだ。なぜ、エオニアはシヴァ皇子に拘る？寧ろ、殺してしまう方が楽なはずなのに……）」

レスターの疑問を他所に、再び戦闘は始まる。

逃げるエルシオールに追うエオニア。

途中、エオニアは、増援として現れたシェリーとレゾムに艦隊の指揮を任せて退いてしまったが、戦況は圧倒的にエルシオールの不利であった。

「敵が多過ぎます！」

「振り払え！　最後の一秒まで絶対に諦めるな！」

タクトは、声を枯らしながらも懸命に指揮を執る。

「アキオさん！　三時の方向！　駆逐艦です！」

アルモは、素早くアキオに敵接近の報を告げる。

「ちっ！　間に合わん！　ちとせ！　足を止めろ！」

「はい！」

アキオの急報を受けたシャープシューターの攻撃で、その駆逐艦の機関部に攻撃が加えられ、辛うじて間に合ったエルシオールの砲撃がそれに止めを刺す。

「ヴァニラ！　敵への攻撃は必要ない！　ナノマシンでの紋章機の修理に専念しろ！　どのみち、護衛を回せない！　絶対に落とされるな！」

アキオの懸念通りにムーンエンジェル隊のデータを集めていた敵は、ハーベスターに攻撃を集中して来る。
タクトは、ヴァニラに敵への攻撃を禁じ、自分の身を守る事に専念させる。

「ランファ！　敵への深追いは禁止だ！」

「でもっ！」

「その突撃艦は、もうエルシオールの脅威ならない！　定められたエリアに侵入した敵にのみ攻撃を仕掛けろ！」

接近戦専用で、この手の戦いで一番使い難いカンフーファイターを操るランファは、どうやってもたまに敵を深追いしてしまう傾向があった。
タクトは、粘り強くランファへ深追い禁止命令を出す。

「フォルテ！　正面の巡洋艦をぶちのめせ！」

「あいよ。司令官殿。私好みのお仕事だね」

エルシオールの正面に立ちはだかった巡洋艦は、ハッピートリガーの攻撃によって呆気なく爆散してしまう。

「よし！　今の内に弾薬を補給するんだ！」

「了解！」

「クレーター班長！」

「了解。司令官さん！　ハッピートリガーが戻って来るわよ！　一分で終わらせる！　武装パックの予備を準備して！」

「「「「「了解！」」」」」

「副長！　Ｄ－３ブロックに被弾です！」

「被害は？」

「軽微です！　エアーの流失も止まりました！」

「六班を回せ！　念のために補強を行う！」

ムーンエンジェル隊だけだはなかった。

様々な部署の様々な人達が、生き残るために懸命に努力をしていた。

そのおかげで、今の所はエルシオールは大きな被害を受けていなかったし、敵の被害は、かなり深刻なレベルに達していた。

だが、それにも関わらず、エルシオールの限界は刻一刻と迫っていたのであった。

「意外としぶといわね」

「シェリー様。既に、損害が二割に達していますが……」

前線で攻撃を仕かけているレゾムからの報告は、かなり深刻であった。

さっきの三倍以上の戦力で攻撃を仕かけているのに、全くエルシオールの足が落ちる気配がなかったからだ。

更に、紋章機が一機も落せていないのも痛い事であった。

「なまじ標的が一隻だから、一度に攻撃できる船の数が制限される。ホップスの時と同じね……」

「なら安心ですな。ホップスは、敗北しましたからな。攻撃の手を緩めなければ、じきにエルシオールは……」

シェリーは、暢気な通信を入れてくるレゾムに内心で舌打をする。

彼女は、この猪武者が嫌いであった。

多分、ザックスよりはまともなのであろうが、あれが元々最悪なので、比べる事すら無意味であった。

「（エオニア様が、レイトンを欲する理由が良く理解できる。どいつもこいつも、こうバカばかりでは……）」

腕は立つが、指揮官としては全く役に立たないヘルハウンズ隊の面々や、（リセルヴァはかなりの戦略眼を持っていたが、シェリー

は彼のエオニアすら見下している姿勢を危険視していた）戦場で自分の上官である艦長を殺害して降伏して来たレゾムなど、本来佐官にすらしたくないバカが多数存在していたのだ。

それでも、人員不足であるエオニア軍は、この無能者達をそれなりに遇さねばならない。

それでも、戦場で使うならまだ問題はさほど深刻でなかった。

無人艦主体の艦隊なので、彼らは座って適当に命令を出していれば、それなりの戦闘力を発揮できるからだ。

問題となっているのが、占領している各惑星やステーションの統治であった。

あの物資の供給不足から発生した暴動を力でねじ伏せたエオニアは、恐ろしいほど占領下の市民達に人気がなかった。

圧倒的な戦力と、従わねば殺すという姿勢で批判を抑えている状態なのだ。

だが、そんな恐怖政治が長く続こうはずもない。

人は良くも悪くも慣れる生き物だ。

恐怖に慣れた市民達が、死か自由かと覚悟を決めてこちらに刃向かって来た場合、皇国は修復困難なダメージを受け、エオニアの皇国拡大の夢は、本当の夢物語となってしまうであろう。

「（私が政治を行うという選択肢もあるが、それでは、軍を統率する人材がいなくなる。やはり、あの男は必要なのだ）」

「シェリー様。敵は、少し弱って来たようです。ここは一気に！」

レゾムの能天気な発言を聞き、シェリーの機嫌は更に急降下したしまう。

確かに戦力は必要だし、自分達は、それを過分な程に持っている。

だが、それだけでは国は治まらない。

シェリーの苦悩は、まだ終わりそうになかった。

「ちょっと、損傷が深刻だね。司令官殿！」

「一分待て！　今、ハーベスターが、ナノマシンを補給中なんだ！」

「私も、エネルギーと弾薬を補給しないと危険です」

「一度に二機は、効率が落ちるから駄目！」

「タクト！　数が多くて押さえ切れないわよ！」

「私も限界ですわ。それに、落とされたフライヤーの補給をしないと……」

既に、限界といえる状況にエルシオールは追い込まれていた。
致命的な損害はないが、それは時間の問題だったからだ。

「「タクト！」」

レスターとアキオが同時に声をあげた。

「（降伏もやむなしなのか？　お前達は、そう考えているのか？）」

指揮官として、タクトは大きな迷いの中にいた。
単艦でここまで奮闘して来たのだ。

ここで降伏しても決して恥でなく、無駄に散る命を救えるかもしれない。
シヴァ皇子にしても、ここで命さえ落さなければ、後でチャンスが訪れるかもしれない。
そんな事を考え始めていたのだ。
だが……。

「（いいな。お前達は、冷静で頭が良くて。でも、俺にその選択肢は選べないよ）みんな！　もう少しだけ頑張ってくれ！　俺達は非常に厳しい状況に置かれている！　それでも、もう少しだけ頑張れるはずだ！　俺達はシヴァ皇子を擁している。だから、絶対に味方の艦隊が近くにいるはずなんだ！」

レスターやアキオだけでない。
大半の人達が降伏もやむなしと考えていた時、タクトは唯一諦めなかった。
声を張り上げて最後の踏ん張りを主張する。

「タクト。お前……。そうだな。クレーター班長。アッシュ少尉の補給は？」

「終わったわ」

「アッシュ少尉。攻撃禁止命令を暫く解く。ブラマンシュ少尉の補給が終了するまでだ」

「了解」

レスターは、早速に少ない戦力のやりくりを始める。

「タクト。エルシオールのレールガンの砲身を駄目にしていいか？
まだ命数は残っているが、これから間髪いれずに撃つから、すぐ駄目になるぞ」

「そんな物は、後で交換出来る。許可するよ」

「さて、贅沢に実弾を使うぞ！」

「ちゃんと当てろよ」

「レスターよりは上手だよ」

「抜かせ！」

アキオは、日頃は仲の悪いレスターと軽口を叩き合いながらも、次々に砲撃を加えていく。

「タクトさん。貴重なフライヤーを壊して宜しいでしょうか？」

「許可する。まだ予備はある」

「感謝いたしますわ。では、補給終了後に」

ミントは、残り一基となったフライヤーを近くにいた突撃艦の推進部に突入させる。
すると、その突撃艦は、隣の同型艦を巻き込んで大爆発を起す。

「高いミサイルになっちなったな……」

「ごめんなさい。アキオさん」

「まあいいや。俺達の金でなし。早く補給に戻りな」

「はい！」

「そうか！　その手があったのね！」

「ちょっと！　ランファさん！　アンカークローは！」

「必殺！　片道アンカークロー！」

クレーター班長の制止は間に合わなかった。

ランファは、エルシオール正面にいた巡洋艦めがけてアンカークローを最高速度で撃ち出した。

それも、全く戻ってくる事が期待できない速度でだ。

アンカークローは、その標的の巡洋艦を貫くと、更に後ろの駆逐艦を二隻貫き、最後に後方のザーフ級戦艦のクロノ・ストリング・エンジンに飛び込んでその使命を終了させる。

「大戦果！　補給に戻るわよ！」

「あーーー。アンカークローの予備は、もう一基しかないのに……」

貴重なアンカークローを壊されてしまったクレーター班長は、人目も憚らずにさめざめと涙を流していた。

「私も、頑張らなければいけませんね」

「ちとせ。座標ＴＸ６８７の戦艦のエンジンを狙えるか？」

「ギリギリですけど、行けます！」

ちとせは、アキオの命令で指定座標上に陣取っている戦艦のエンジンを狙撃し、その戦艦の動きを止める事に成功する。

「バカな！　あんな遠距離から！」

「圧倒的な戦力を持っているのに、不用意に近づくからだ」

その戦艦は、レゾムの旗艦であった。

低速でしか動けなくなったレゾムの戦艦は、後方に置いてけぼりにされて、上官であるシェリーの青筋を一つ増やす。

「良くわかったな。レイトン」

「勝手に命令して済まなかったな。まあ、経験と勘だな」

「この非常時だ。仕方ないさ」

レゾムの脱落は、その指揮下の艦隊の動きを少し鈍らせてしまい、エルシオールは一息つく事に成功する。

「みんな。凄いな」

「ミルフィー。私達も行くよ。前方の新型と思われる戦闘母艦だ。火力を束ねて一気に落す」

「了解！」

時間的な余裕ができたフォルテは、ミルフィーユと共同で前方の

戦力の要である戦闘母艦に火力を集中させ、それを沈める事に成功する。

「やりました。フォルテさん！」

「ああ。司令官殿」

「これでまた一息つけるな」

前方には規模は小さかったが小惑星帯があり、そこに逃げ込めばまた少し時間が稼げるはずであった。

だが、その必要ななかったようだ。

なぜなら、急に敵の左翼の艦隊に多数の火線と火球が広がったからだ。

「敵の左翼艦隊をクロスファイヤーにて殲滅後、エルシオールに合流するぞ」

敵左翼艦隊を砲撃する規模の大きな艦隊と小さな艦隊。

その小さな艦隊の司令であるルフト・ヴァイツェン中将は、指揮下の艦隊を巧みに機動させながら砲撃を行う。

「敵の増援か！」

「レゾム。一旦退却する」

「ですが！」

「間が悪い。このまま戦うと損害が大きくなる」

自身の劣勢を悟ると、シェリーはなるべく損害を出さないように艦隊を退却させる。

「今回は見逃してあげるわ。エルシオール。でもね。あの艦隊には、私とエオニア様が仕込んだ埋伏の毒がある。そして、あなた達は大切な仲間を失うのよ」

シェリーにとって、今回の敗戦も想定済みであり、彼女は特に悔しがる様子も無く冷静に艦隊を撤退させるのであった。

「助かったか……」

「ああ。助かったな」

エルシオールの目の前には、多数の味方艦隊がいた。

タクトの最後の粘りは、決して無駄ではなかったのだ。

「みんな。ご苦労だった」

タクトが、各員に労いの言葉をかけると、そこに意外な人物が通信を入れて来る。

「フォルテか」

「そうだよ。タクト」

「あれ？　俺の事を名前で？」

タクトは、フォルテが自分の事を名前で呼んでいる事に気が付く。

「認めてやるさ。我らがタクト・マイヤーズ司令官」

今までは、タクトを司令官としての資質を疑い、アキオが司令の方が良いという態度を崩さなかったフォルテが、遂にタクトの事を認めたのだ。

「なぜ認めた？」

「いやね。あのひと踏ん張りを主張したからかな？　あの時、私もアキオも、『降伏した方が良いかも』って思っていたんだよ。なまじ経験があるとね。『ここで限界かも』って見切ってしまうんだよ。でも、あんたは諦めなかった。諦めなかったから味方の増援が間に合った。その判断をしたあんたを、私は司令官として認める事にしたんだ」

「そうか……」

タクトが嬉しそうな表情を浮かべてると、今度は味方艦隊から通信が入ってくる。

「よう。タクト。元気そうじゃな」

「ルフト先生！」

通信の主は、小さめの艦隊を率いているルフト・ヴァイツェン中将であった。

「タクト。お前、士官学校時代の癖が抜けておらんの」

「ご無事だったのですね」

「当たり前じゃろうが！　アキオの率いていた艦隊は、高性能の新型艦ばかりで乗員の練度も最高。逃げ切れないはずがない」

その他にも、早々にシヴァ皇子が乗船している艦がエルシオールである事が敵にバレてしまったので、敵の追撃はほとんどなく、順調に第2方面宙域に撤退できたらしい。

「レスターも、元気そうだし……。アキオ。お前、くつろいでおるの……」

「ルフト司令。そんな、格好だけで判断しないで下さいよ。これでも、ちゃんと人並に苦労してますって」

予備のオペレーター席で砲撃管制を行っていたアキオは、ルフト中将に一応は抗議の声をあげる。

エルシオールに置いてけぼりにされて以来、一度も第一種軍装に袖を通していないアキオは、略章がなければ全く将官に見えなかった。

「早く、その格好を何とかせい！（アキオらしいわ。司令はタクト

なのに、アキオが同じ第一種軍装だとタクトが見た目で勝てなくなってしまうからの。まあ、本人は、その方が気が楽だとか言っておるのであろうが……）」

さり気なくそういう配慮がきでるアキオだからこそ、ルフト中将はアキオの才能を認めていたのだ。

「次の行き先が決まったら、着替えますって」

「それでは、すぐに着替えて下さい。レイトンさん」

「ウォルコット司令ですか？　いたんですね……」

「久しぶりなのに、それはないと思いますよ。レイトンさん」

次にスクリーンに映し出されたのは、アキオの元直属の上司であるウォルコット・O・ヒューイ中将であった。

だが、ウォルコットはアキオに、『いたんですね』と言われても仕方のない状態にいた。

ルフト指揮下の補給艦隊の司令官であるウォルコット中将が、総旗艦にいてもいい道理がなかったからだ。

「あっ！　ウォルコット司令だ。お久しぶりです」

「ご無沙汰しております」

「ご壮健でなによりですわ」

「ミルフィーユさんも、ちとせさんも、ミントさんもお元気そうでなりよりです」

ウォルコット中将は、ニコニコしながらミルフィーユ達に挨拶をしていた。

「一応、私もいるんだけどね。中将閣下」

「フォルテさんに限って、戦死とか元気がないとかあり得ないので、ちょっと後回しにしたんですよ」

「言ってくれるね」

「フォルテさん。再会の感動は後程と言う事にして、レイトンさん。早く戻って来て下さいね」

「へっ？　俺の所属って、今は第2方面軍中央司令部じゃないんですか？」

エオニアのクーデター後に、アキオはレスターと共に第2方面軍の中央司令部に移籍して、様々な任務を行っていた。

なので、今は、ウォルコット中将の直属の部下というわけでもかなった。

「ウォッカ大将からの伝言です。『来たる中央進撃時に、ウォルコットとお前に後方の兵站を全て任せる』とのこと事です」

シーダマイヤ大将が、シヴァ皇子を惑星ロームに迎え入れた後に、遂に首都星トランスバールを含む中央奪還作戦が行われる予定となっていた。

ほぼ全ての方面から中央に向けて艦隊が発進し、敵を分散の後に本命の艦隊がエオニアの本隊を突くのだ。

そして、この大作戦で重要となるのは、広大な宙域に展開する大部隊に補給を行う補給部隊の存在だ。
過去の歴史を紐解くと、補給に失敗して壊滅した大軍は後を絶たない状態であったので、それをウォルコットとアキオ（実質的な実務者はアキオと見られていた）に任せるという事は、ウォッカ大将がいかにアキオの能力を買っているかの表れとも言えよう。

「凄いんだな。レイトンって」

「タクト。お前も中央奪還作戦では、艦隊を預けられる身なんだぞ」

「そうだったな……」

タクトのムーンエンジェル隊司令の任は、シヴァ皇子が惑星ロームに到着するまでの間のものであった。
多分、エルシオールは惑星ロームに残され、ムーンエンジェル隊もシヴァ皇子の護衛の任に就く事となるであろう。

「そうか……。みんな。離れ離れになっちまうんだな」

タクトがしみじみと感傷に耽っていると、そこにある人物から通信が入ってくる。
この味方艦隊の大部分を占めている第3方面軍艦隊の司令を務める、シグルト・ジーダマイヤ大将からであった。

「君が単艦で敵中を突破した、英雄タクト・マイヤーズ准将かな？」

「いえ。自分は、英雄などでは……」

「若いのに謙虚で素晴らしい事だな。これからも、准将には私の有

能な部下として働いて貰いたい」

「彼も、シーダマイヤ閣下の部下として働ける事を栄光に思うでしょう」

タクトは、傲岸不遜なジーダマイヤと、その隣の腰巾着の参謀長のおべっかに、ついさっきまでの感動が一気に冷めて行く感覚を味わっていた。

「（タクト。気にするな。名目上だけでも、ウォッカ大将の上に立てている今の内に、自分の勢力を増やしたいだけなのだから。そもそも、俺達は第2方面軍所属なんだぞ）」

「（レスター。しかしだな……）」

ウォッカ大将に、名目だけながらも中央奪還作戦の総司令を譲って貰った今、ジーダマイヤ大将はウォッカ大将を出し抜くために、様々な策を実行中であった。

「クールダラス副司令。何か文句でもあるのかね？」

「いえ。特には……」

「ふんっ！　つまらん男だな！」

ジーダマイヤ大将が、タクトを持ち上げてレスターを嫌う理由はただ一つ。

タクトは貴族出身であり、レスターは市民出身であるという理由からであった。

自身も伯爵であり、ウォッカ大将の支持基盤が下級貴族と市民出

身の軍人という事もあって、ジーダマイヤ大将は貴族階級出身の軍人を優遇していたのだ。

「さて、無事にシヴァ皇子をお迎えできた事は非常に喜ばしいのだが、私には、一つ片付けなければならない事があってね」

「それは、何でしょうか？」

「実は、ある人物の告発によって判明したのだが、エルシオールにエオニアに通じている人物がいるのだよ」

「はあ？」

タクトは、わけがわからなかった。

今までのエルシオールの状況から考えて、そんな人物などいようはずもなかったからだ。

「証拠も、証人もあるのだ。アキオ・レイトン元准将！　貴様を反逆と情報漏洩の罪で逮捕する！　優秀な貴様なら理解しておろうが、反逆罪は銃殺だ。覚悟しておくのだな」

ジーダマイヤ大将の突然の逮捕宣言に、タクトとレスターだけでなく、他の全ての関係者にも衝撃が走る。

「これより、エルシオールにＭＰを派遣する。レイトン。ジタバタして晩節を汚す事のないようにな！」

「……（フレスコの亡霊か……。どうやら、俺の悪運もここに尽きたらしいな）」

高笑いをするジーダマイヤ大将を見ながら、アキオは己の人生の最後を悟り始めるのであった。

第十話

（数時間後、エルシオール艦内司令官室内）

「タクト！　どういう事か説明して貰おうか！」

ジーダマイヤ大将の宣言通りに、エルシオールには数人のＭＰ（憲兵隊）が派遣され、そのままアキオを連行して行った。

『シヴァ皇子と反逆者を、一緒にしておく事など出来ない』とのジーダマイヤ大将の言で、臨時軍事法廷の開廷まで旗艦（ベルリン）の懲罰室に収容される事となったからだ。

そして、それを黙って見ている事しか出来なかったタクトに、フォルテが今までのないほどの怒気を発して詰め寄っていた。

「シュトーレン中尉。俺達は軍人なんだ。軍の命令は絶対で・・・・・」

「アキオは、第2方面軍所属！　ジーダマイヤと、あの憲兵達は第3方面軍所属！　管轄の違う軍人を、許可も無く勝手に裁ける軍法があるってのかい！」

レスターの言い訳めいた発言に、フォルテは厳しく切り込んだ。

それも、極めて理論的にだ。

フォルテは叩き上げの軍人であったが、決してバカではなかったし、寧ろこの手の知識は自分の身を守る道具でもあったので、非常に詳しかったのだ。

「フォルテさんの仰る通りですわ。管轄の違う軍人を逮捕して軍事

法廷にかけるには、中央の裁可が必要なはず。今回の逮捕は違法なはずです」

同じく、フォルテと共にタクトに詰め寄っていたミントが、今回の逮捕劇のおかしさを指摘する。

クーデター騒ぎで中央は潰滅状態であったが、その業務を第3方面軍が引き継いだなどという話は、聞いた事がなかったからだ。

つまり、アキオの逮捕は、ジーダマイヤ大将の独断という事になる。

そして、その事に文句を言わずに手を拱いていたタクトとレスターに彼女達の非難が集中していた。

「失礼ですが、クールダラス副司令がそれをご存知ないとは思えません。そんなに、アキオさんがお邪魔だったのですか？」

ちとせが、ここまで人を悪辣に非難するのは初めての事であった。

アキオとレスターの仲があまり良くない事を、エルシオールの乗組員で知らない人はいない。

なので、ちとせは、知恵の回るレスターが今回の件を利用して、嫌いなアキオを消去しようとしていると考えていた。

勿論、正常の精神状態でそんな考えに及ぶはずもないので、彼女がいかにショックを受けているかという事であろう。

「ちとせ。それは、言い過ぎだよ」

「ミルフィー。あなた。あれだけ、アキオさんにお世話になっていたのに！」

ちとせがミルフィーユに詰め寄ろうとすると、不意に軍服の袖を誰かに引っ張られる。

「ヴァニラ・・・・・・」

「駄目です。ちとせさん。止めてください」

「でも！」

ヴァニラが悲しそうな目でミルフィーユを見たので、ちとせも視線を向けると、彼女は目に涙を溜めていた。

ヴァニラもミルフィーユも、悲しかったのであろう。

アキオ一人が抜けただけで、エルシオールが真っ二つに割れてしまったからだ。

「みんな。やめようよ。今、アキオさんの味方は、エルシオールにしかいないのに・・・・・・。喧嘩なんてしていたら、アキオさんを救えなくなっちゃうよ・・・・・・」

それだけを言うと、ミルフィーユは泣き出してしまった。

「ミルフィー。あなた・・・・・・」

確かに、ミルフィーユの言う通りであった。

この大半が第3方面軍の艦隊で占められている味方艦隊内に、アキオの味方はほとんど存在しない。

ボスであるジーダマイヤ大将が、アキオを逮捕してしまったからだ。

個人的にアキオが可哀想だと思っても、ジーダマイヤ大将に睨まれてまでアキオを庇う軍人など絶対にいないであろう。

それが、軍隊に限らず組織というものであった。

「ミルフィー。俺の意見を代弁してくれてありがとうな。実は、前回の戦いの前に、俺はレイトンに言われていた事があったんだ。『俺に何かがあったら、俺を切り捨てろ』。エオニアに引き抜きの言葉をかけられた時から、やつは危機感を抱いていたらしい」

「タクト。それで、あんたは素直に見捨てるのかい？」

フォルテは、タクトに対して厳しい表情を崩していなかった。
もし、タクトが使えないのなら、ルフト中将かウォルコット中将の元に駆け込もうと考えていたからだ。
もしそれで、ムーンエンジェル隊やエルシオールの面々が割れても、それは仕方がないと考えていた。

「見捨てるものか！　一緒にあの敵の大包囲網を突破した仲間なんだぞ！　他の誰が見捨てても、俺は絶対に見捨てない！」

「タクトさん・・・・・・」

ミルフィーユは　泣くのを止めてタクトを尊敬の眼差しで見始める。

「いいのかい？　伯爵家の三男坊さんが、ジーダマイヤ伯爵様に逆らって」

伯爵位を持つ貴族で、階級が大将のジーダマイヤ大将に表立って逆らう事の大変さを理解しているフォルテは、タクトに一番気になっている事を質問する。
いくら実家とは疎遠とはいえ、タクトも貴族の一員である事を知っていたからだ。
これからのタクトの行動が、マイヤーズ伯爵家とジーダマイヤ伯

爵家の争いの口火となってしまう可能性もあったのだから。

「俺は、実家を勘当も当然の身だからな。別に、実家がどうなろうと関係ないね。俺が継ぐ家でもないし」

「なるほどね。継ぐ家じゃないから関係ないか。わかった。信用しよう」

「では、十分後に、クシラルームに集合だ。秘密対策会議を行う」

「クジラルームですか？」

タクトの言った意外な集合場所にミルフィーユは、首を傾げてしまう。

「ここには、シードル大尉が来るかもしれないからな。先程の騒ぎを忘れたのかい？　今回の件では、彼は敵に回る。だから、彼に情報を絶対に漏らせないんだ」

タクト達は、先程のアキオの逮捕劇の事を思い出し始める。

「アキオ・レイトン准将。貴官を逮捕する」

「元准将ではないのかな？」

「あれは、ジーダマイヤ閣下の勇み足だ。有罪が決まるまでは、貴官は准将のまま。これが、軍法だ」

エルシオールには、アキオを逮捕するために派遣された軍の法務官と二名のＭＰが派遣されていた。

職務に忠実な彼らは、正規の執行状をアキオに見せると、その手に手錠を掛ける。

アキオは、特に抵抗するでなく素直に逮捕に応じていた。

「手錠は酷いと思います！」

「少尉。軍法で、容疑者に手錠を掛ける事は違法でも何でもない。准将。裁判までは、《ベルリン》の懲罰室へと収容させていただきます」

ココの非難を、法務官は正論で封じる。

「飯が不味そうだな」

「ご安心を。我々も、同じく豚の餌ですから」

ジーダマイヤ大将が、意図的にウォッカ大将がアキオ達に再構築させたの星間ネットワークの使用を制限していたので、軍の尉官や佐官クラスでも、市民階級出身者は碌な食事にありつけていなかった。

「向こうのルフト中将の艦隊は、毎日生野菜が食べられるそうで？」

「そういう補給網を構築したからな。士気の維持のためにだ」

「うちは、冷凍野菜が切れたらビタミン剤ですよ。上が無能だと、下はそれ以上に苦労するのが軍というものです。では、ご同行を」

そして、エルシオールのサブブリッジに詰めていたエリオス・シードル大尉は、意外な人物との再会を果たしていた。

それは、自分が赤ん坊の頃からシードル公爵家に仕えている、執事のコニャックであった。

「お坊ちゃま！」

「コニャックじゃないか！　無事だったんだな！」

「はい。旦那様が、私を逃がしてくれまして・・・・・・。『老い先短い自分よりも、経験不足のエリオスに仕えてくれ』と・・・・・・。でも、旦那様は・・・・・・」

コニャックは、主人を殺された哀れな執事の芝居を上手に続けていた。

「そうか・・・・・・。やっぱり、父は駄目だったのか・・・・・・。でも、コニャックが生きていてくれて嬉しいよ。でも、どうしてここに？」

「はい。エオニアに通じていたレイトン准将。彼の逮捕を見届けるためです。このコニャック。レイトンめの死に様を見届けない限り、あの世の旦那様の元へは行けません」

コニャックは、涙ながらに事情を説明する。

「僕は、レイトン准将の逮捕に疑問を感じるのだが・・・・・・。それに、レイトン准将の逮捕と父の死に何の関係が？」

エルシオールに乗船以来、エリオスはアキオがエオニアに通じている素振りを一切感じなかった。

そして、アキオの内通と、自分の父の死との関係も理解できなかった。

「それは、彼が狡猾な男だからです。それに、私が亡き旦那様から聞いていたのです。彼の生まれの事とその母親の事を・・・・・・」

コニャックは、あまり人を疑わないエリオスに事実とは異なった嘘を話し始める。

「あれの母親は、旦那様が寄付をしていた孤児院の出で、就職先がなくて困っていたので、旦那様が屋敷のメイドの職を紹介したのです・・・・・・」

その後も、コニャックの嘘で塗り固められた話は続く。

本当は、正妻に子供が出来ないので、適当に女を物色していたフレスコが強引に雇い入れたのが真実であった。

この際、話が嘘か本当かは問題ない。

エリオスが信じるかどうかであった。

「あの女は、恩を仇で返しました。子供が出来なくて困っている旦那様を一度だけ誘惑し、どこの誰かも知らぬ男の子を宿して来て、それを旦那様の子供だから認知しろと迫って来たのです。そこで、このコニャックめが独断で外に出して、生活費を送っておりました」

正確には、フレスコが強引に関係を迫り、懐妊した彼女を他の親戚から目から遠ざけるために外に出したのが真相であった。

それに、生活の面倒といっても、『下賤の女に大金は不要』と雀の涙ほどの金額しか送らず、それもエリオスが生まれてからは完全に途絶えていた。

当然、彼女が死病に掛かった際にも、見舞いの言葉一つかけていなかった。

「ところが、あの女は、常に自分の待遇に不満を感じていたようです。自分の息子に、シードル公爵家を乗っ取る様に遺言を残し、彼はその遺言を実行すべく軍の士官学校に・・・・・・」

エリオスは、あまりの衝撃に言葉が出なかった。

「ですが、エリオス様がいる限り、シードル公爵家の乗っ取りは出来ない。そこで、クーデターを起したエオニアに情報を流し、それが原因で旦那様は捕らえられてしまいました」

歴史のある公爵家ともなれば、有事の際の逃げ道は確保していて当然であった。

軍で昇進を重ねていたアキオが、その職権を乱用してルートを突き止め、それをエオニアに報告していたらしいとコニャックの話は続く。

「そんな・・・・・。あのレイトン准将が・・・・・・」

自分の尊敬している軍人が、自分の父を死なせたという事実に、エリオスは顔を真っ青にしていた。

だが、勿論それは嘘で、その嘘を簡単に信じたエリオスをコニャ

クは内心でバカにしていたが。

「そして、この度の中央奪還作戦時に奴は裏切り、エオニア側に走る事となるでしょう。恩賞は、向こうでの要職就任と、シードル公爵家当主への就任です」

エリオスは大きな迷いの中にあった。

確かに、アキオはエオニアにその能力を買われている。

あの戦闘時に、『宰相にしてやるからこちらに来い』などと言われる男はそうはいないはずだ。

少なくとも、他の軍人では聞いた事がなかった。

「それは、事実なのだな？」

「はい。事実でございます」

エオリスは、見た目は真摯な目をしているコニャックを信じる事にした。

生まれながらに、自分とその父に仕えている有能な執事であるコニャックが、嘘を付くはずがないと思ったからだ。

才能はあるが、アキオほど世間に揉まれていない、貴族のお坊ちゃまであるエリオスの、ここが限界であった。

世間知らずの彼は、生まれた環境もあって他人の悪意に慣れていなかったのだ。

「お坊ちゃま。いえ、旦那様。皇国の重鎮たるシードル公爵家の当主には、公人としての義務が付き纏います。ことは旦那様の仇討ちの話だけではないのです。私は、レイトンの裏切りを確信しております。そして、それが事実となれば、中央奪還作戦は失敗して多くの戦力を失い、次の機会がいつになるか予想も付きません。下手を

すると、シヴァ皇子に危害が及ぶやもしれません。尊敬する上官だったと聞いておりますが、ここは・・・・・・」

コニャックは、畳み掛ける様に説得を続ける。

父の仇討ちという感情論と、新公爵としての義務としての公人論と、両面からエリオスを攻め立てるコニャックは、やはり尋常な男ではなかった。

「わかったよ。コニャック。僕は、鬼となってレイトンを銃殺刑に追い込もう。父の仇を討ち、トランスバール皇国を安寧に導くために」

「ご立派でございます。このコニャック。微力ながらもお手伝いをさせていただきます」

「頼りにしているよ」

「ありがたきお言葉です（相変わらずの、度し難いお人好しだな。ジーダマイヤ共々、精々、ワシの掌で踊ると良いわ）」

恭しくエリオスに頭を下げながら、コニャックは心の中で高笑いを続けるのであった。

そして、格納庫へと向かう通路内で、話を終えたエリオス主従と連行中のアキオ達が顔を合わせる。

「あなたには、失望しました。レイトン元准将」

「失望？　お前が勝手に、子猫の様に付き纏っていただけじゃないか」

絶体絶命のピンチではあったが、アキオは心から喜んでいた。
あのうざったいエリオスと、初めて本音で口を利けたからだ。

「あなたの生まれの事は聞きました。僕の父の弱みに付け込んだ最低の売女っ！」

生まれて初めての汚い言葉であったが、エリオスはそれを最後まで言う事が出来なかった。
なぜなら、エリオスは、アキオの手錠を掛けた両腕で力一杯殴られていたからだ。
エリオスは、通路の壁に叩き付けられ、口の中を盛大に切ってしまう。

「レイトン准将！　暴行の罪もプラスされますよ！」

「有罪ならどうせ死刑だ。ならば最後に、この世間知らずで鼻持ちならないクソガキを殴れた方が精神的にプラスとも言える」

「ここ一番で暴力ですか。多分、あなたの本性なのでしょうね」

「旦那様。大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ」

エリオスは、コニャックに大事のない事を告げると、そのまま血の混じった唾をアキオの顔に吐きかける。

「父親を殺された仇に対する憎悪の目か。苦労知らずのお前の、偽りの優しさの仮面が剥がれたな」

アキオの言う通りであった。
今の一部始終を遠巻きに見つめていたエルシオールの乗組員達は、始めて見る怒りに我を忘れたエリオスに恐怖を感じていた。

「ジーダマイヤ大将に会って、軍事法廷の日時を聞いてくるとしよう。そして、その日がお前の命日となるのだ。殺された父の苦しみを味わうが良い」

最後のに捨て台詞を吐くと、エリオスはコニャックを連れて通信室へと向かうのであった。

「確かに、タクトの言う通りだね」

「では、十分後に集合だ。いいか？　信用できる人物以外に絶対に情報を漏らすなよ」

タクトは、ミルフィーユ達に念を押してから集まりを一時解散させるのであった。

「あれ？　ルフト中将とウォルコット中将がいるね」

「俺が呼んだんだよ。正直、情報不足で打つ手が思いつかなかったからな」

クジラルームの砂浜に集合したフォルテは、そこに最初に自分が頼ろうと思っていた二人がいる事に気が付く。

「それは正しい判断じゃの。タクト。お前は准将ではあるが、まだ二十代の若造でもある。汚い権力闘争や謀略には長けておるまい」

「ですが、長けているからこそ、アキオさんを捨てて自分の保身を図るという事もありえますわね」

ミントの辛らつな言葉に、ルフト中将は思わず苦笑いを浮かべてしまう。

そして、それと同時に、この目の前の少女がいかにアキオの事を心配しているかも悟っていた。

「今回の件は、ワシにも晴天の霹靂でな。まさか、ジーダマイヤがそこまで焦っているとは思わなかったのだ」

「焦っているのですか？」

「そうじゃ。後に行われる中央奪還作戦の主導権は、名目上はジーダマイヤが握っているが、実情はウォッカ大将が握っておる。そこで・・・・・」

「レイトンさんを有罪に出来れば、ウォッカ大将の任命責任を問え

て、彼を引き摺り下ろせるかもしれない。そういう事なんでしょうね」

ルフト中将の説明に続ける様に、ウォルコット中将が大体の事情を説明する。

現在、ジーダマイヤ大将が中央奪還軍の名目的な総大将に内定していて、シヴァ皇子を根拠地に出迎える役割を担っているが、他の戦力の大部分は、ウォッカ大将の手に握られていた。

一方、ジーダマイヤ大将の持ってる戦力は、第3方面軍の艦隊だけで、それすらも再構築された星間ネットワークを上手く活用できていないという理由で、いつウォッカ大将側に寝返られるかわからない状態であった。

「つまり、アキオを軍事法廷で有罪に追い込めれば、それで奴らは目的を達成するんだね？」

「そうです。事実なんて、どうでも良いんですよ」

自分が主導権を握るためのただの内輪揉めで、更に性質の悪い事に、それだけのために、無実の人間を銃口の前に立たせようとしている。

この事実に、タクト達は不快感を隠せないでいた。

「あの。一つ宜しいでしょうか？」

「何かな？　烏丸少尉」

「《火のない所に煙は立たない》と言います。アキオさんの反逆の話は、どこから沸いたのでしょう？」

ウォッカ大将を引き摺り下ろす方法は、何もアキオ関連の事だけではないので、どうしてジーダマイヤ大将がその件を利用しようとしたのか、それさえわかればアキオを救えるかもしれない。

そう考えて、ちとせは質問をしていた。

「それはじゃの・・・・・・「あのエリオスの横にいた老人。あれは、シードル公爵家の裏の裏まで知り尽くし、影で汚れ仕事に手を染めて来た、エオニアに捕まっても無事に逃げられる身分の男ではない影の執事長コニャックじゃ。彼がどうやって第3方面に逃げて来たのか。非常に気になる所じゃの」」

ルフト中将の言葉を遮る様にして、アロハシャツにカンカン帽にサングラス姿の七十歳を超えると思われる老人と、二十代後半に見える長身の美男子がちとせの質問に答えながら入ってくる。

「なっ！　ウォッカ大将とジンロ中将！」

「いつの間に、エルシオールに？」

まさかいるはずのない人物の来訪に、ルフト中将とウォルコット中将は驚きの声をあげる。

「まだまだじゃの。ルフト。実は、輸送船の一隻に機関部の下士官として乗り込んでいたのじゃ」

「ちなみに、私は護衛駆逐艦の下士官として乗り込んでいました」

「あの・・・・・・。教えてくれても宜しかったのでは？」

「ウォルコット。《敵を騙すには、まず味方から》と言うではない

か」

一見好々爺しているウォッカ大将は、カラカラと笑いながらウォルコット中将を窘めていた。

「本当にお人が悪い。それで、ウォッカ大将は、この件を見越していたので？」

「まさか。あのジーダマイヤのバカの度が過ぎているので、そろそろ引き摺り下ろす算段をしようかと思っての隠密行じゃったのだが・・・・・・」

二人は、ギリギリのところでジーダマイヤ大将の元に姿を現し、第3方面軍の下級貴族や市民出身の将校に渡りを付けるつもりであった。

反エオニア戦力の一本化を図り、勝利を確実のものとする。

そのために、ジーダマイヤ大将が失脚しても構わないと考えていたのだ。

元々、ジーダマイヤ大将の勢力は少数派になっていたし、綺麗事を言っている余裕も存在しなかったからだ。

「まさか、エオニアの離間の策に、簡単に引っかかるとは思わなかったと？」

「そうじゃ。さすがは、《切れ物レスター》じゃの」

ウォッカ大将はニコニコしながら、レスターの見識を褒めていた。

「ところで、どうしてここにクールダラス副司令が？」

ちとせの刺すような視線が、レスターに向けられる。

「そうだね。クールダラス副司令。ここでの話は忘れてくれないかね」

フォルテも、ちとせの意見に賛同する。

この二人は、レスターが好意的中立の立場に立ってくれればそれで上等だと思っていた。

下手にアキオを救うための対策会議に参加していると、『何か良からぬ事を考えているのでは?』と勘ぐってしまうのだ。

「私も、同意見ですわ。クールダラス副司令は、席を外された方が宜しいかと・・・・・・」

ミントも、ちとせの意見に賛同してしまう。

「レイトンめ。戻ってきたら、お説教じゃの」

「どういう事ですか?」

「それはの。ブラマンシュのお嬢さんよ。レイトンが、貴重な戦力であるムーンエンジェル隊を真っ二つに割ってしまったからじゃ。あ奴にしては、珍しい失敗じゃ。だから、戻って来たらお説教なのじゃ」

ウォッカ大将は、アキオがここに戻って来たら説教をする事を断言した。

つまり、絶対に彼を救い出すと皆に宣言したのだ。

「それと、レスターが、本当にレイトンを追い落とす事を画策する

とでも？　性格的に、そんな事は絶対にあり得んの。何しろ、こいつは超の付く真面目君じゃからの」

ウォッカ大将は、またカラカラと笑いながらレスターの肩をバンバンと叩き続ける。

「レスター。本音を話さないと、みんなは納得しないと思うぞ」

タクトは、レスターに自分の考えを話すように説得する。

「・・・・・。俺は、レイトンの事が嫌いだ。これは、事実だ。だが、奴は能力的には、トランスバール皇国に必要な人間なんだ。それを、ジーダマイヤ大将は、己のためだけに無実の罪で裁こうとしている。俺は、トランスバール皇国軍人として、それを無視できん。それだけだ」

レスターらしい生真面目な解答に、フォルテ達は初めて納得してような顔をする。

「そうか。人間としてのレイトンは嫌いなのか。じゃが、レイトンは、お前が羨ましいと言っていたぞ」

「どういう事です？」

「奴は、生まれで苦労していてな。生き残るために、時には己を殺し、相手に妥協し、搦め手を使ってでも出世する必要があったのじゃ。だから、『自分の信念を突き通しても、俺の一個下の階級にまで出世しているレスターが羨ましい』と言っておったぞ」

「レイトンが、俺を羨ましいと・・・・・」

ウォッカ大将の語る意外な事実に、レスターは驚きを隠せないでいた。

「今更、隠しても無駄じゃから話すとしようかの。レイトンの出生の秘密を。中には、知っておる連中もいるようじゃが・・・・・・」

ウォッカ大将は、ここに集まったメンバーにアキオの出生の秘密を話し始める。

「レイトンが、シードル前公爵の息子・・・・・・」

「シードル大尉を跡継ぎにするために、実の父親に命を狙われていた？」

「そんな事って・・・・・・」

衝撃の事実に、ココやアルモ。

それに、冷静なレスターですら動揺を隠せないでいた。

「あいつは、生き残るために軍内でその才能を発揮し、出世する必用があったのじゃ。だから、懸命に任務をこなして出世を果たした。能力もあったからの。近年は老醜を晒していたが、レイトンの父親であるフレスコは若い頃は天才じゃった。ワシも、若い頃は尊敬していた・・・・・・」

『能力があるから、フレスコに殺させるのは惜しい』

事情を知る軍の有力者達に、そう思わせるための活躍。

そんな話を聞いていると、皆は、『アキオは、一体何のために生

きているのだろう?』と感じずにはいられなかった。

「なあ。レスター」

「何だ?　タクト」

「あいつに、士官学校時代の親友っていたっけか?」

「いや。人当たりは良かったが、変に人を寄せ付けない奴だった」

タクトとレスターは、アキオの士官学校時代の様子を思い出していた。

あまり人には嫌われていなかったが、特に仲の良い友人もいなかった。

あの当時はとても不思議であったが、今ならばその理由が納得できる。

『自分の血の因縁に、人を巻き込まない』

そういう信念で、アキオは常に動いていたのだ。

「ついでに言うと、十五歳以前の交友関係も絶っておるし、亡くなった母親が孤児であった影響で親戚もおらん」

「じゃあ。フォルテって、実は人格者なのかな?」

タクトの一言で、皆の視線がフォルテに集まる。

唯一、アキオと親友付き合いをしているのは、過去の戦友であるフォルテだけであったからだ。

「似た者同士だったのかもね・・・・・。でも、私にはウォルコット中将がいて、あいつには誰もいなかった。そろそろ一人が限界になっていたのかもね・・・・・・」

だから、アキオはフォルテに自分の事を語ったのであろう。

何かに縋り付きたかったのかもしれないと、フォルテは考えていた。

「では、そろそろ時間が惜しいので、レイトンを救うための策を検討するとしようかの。じゃが、その前に・・・・・・」

ウォッカ大将の刺す様な視線が、クジラルームに作られた人工の砂浜に植えられたヤシの木の方に向く。

「隠れても無駄じゃぞ。それと、人の命が掛かっておる。下手な真似をすると、色々と行動の自由を奪わなければならんの」

ウォッカ大将の発言に賛同してか、フォルテは持っていた銃をヤシの木の方に向ける。

「ちょっと！　待って下さいよ！」

そこには、肩に子クジラを乗せたクジラルームの管理人クロミエ・クワルクがいた。

そして・・・・・・。

「「「「「「「「「「ランファ！」」」」」」」」」」

敢えてこの集まりに呼んでいなかったランファ・フランボワーズがその隣に立っていた。

「クロミエ。《好奇心は猫をも殺す》という言葉を知っているか？」

「ええ。非常に深い言葉ですよね」

レスターの鋭い質問に、クロミエはしれっとした表情で答える。

性格は温和で気さくでありながら、時に喰えない部分を発揮する不思議な少年であった。

「『僕も、混ぜて欲しいかな？』って思ったんですよ。実は、宇宙クジラの意思も同じでして」

「宇宙クジラのか？」

「はい」

クロミエの言葉に、タクトは首を傾げていた。

アキオは、最初の挨拶の時にここを訪れてクロミエと挨拶をしていたが、それ以降は、一切クジラルームに近づいていなかったからだ。

今にして思うと、宇宙クジラに心を読まれたくなかったのかもしれない。

「宇宙クジラは、知っていましたよ。レイトン准将の心の闇を。でも、それは誰かが晴らせる闇であるとも言っています。だから、僕にその手伝いをして欲しいと」

「そうか。同志が増える事を心から歓迎するよ」

タクトは、笑顔でクロミエの参加を歓迎する。

「クロミエは、歓迎するさ」

「ですが、ランファさんは・・・・・・」

「遠慮して欲しいですわね」

フォルテ、ちとせ、ミントの鋭い視線がランファに突き刺さる。

ランファのエリオスを王子様扱いして媚を売る光景と、アキオと口喧嘩をしている光景は、エルシオールの半ば名物となっていたからだ。

この秘密会議をエリオスに漏らされると、更に状況が厳しくなる事は確実であったので、フォルテ達はランファにこの集まりを秘密にしていたのだ。

「そんな目で見ないでよ！　それに、どうして私を仲間外れにするのよ！」

ランファは、フォルテ達に抗議の声をあげる。

多分、自分だけ仲間外れにされたので怒っているのであろう。

「エリオスに、情報が漏れるのはまずいからだ」

「今までの事を考えると、当たり前の判断だと思いますが・・・・・・」

「ちとせさんの仰る通りですわね」

三人の答えは、かなり辛らつなものであった。

「なあ。ランファ。俺は、君が情報を漏らすとは考えていない。でも、レイトンのために動くとも考えられない。君は、今、何をしたいんだ？」

タクトは、真面目な表情でランファに質問をする。

「私だって、今回の件はおかしいと思っているわよ。それに・・・・・」

「それに？」

「ああもう！　正直に言うわよ！　確かに、私はシードル大尉を王子様扱いしていたわよ！　変な夢を追っていたわよ！　でも、彼のあの顔を見てしまったら・・・・・・」

多くのエルシオールの乗組員達が見た、アキオに憎悪の表情を向けるエリオスの姿。

それを見た乗組員達は、ある一つの真実を悟っていた。

『いくら表面上は優しくても、シードル大尉も所詮は貴族。何かがあれば、その本性を現すのであろう』と。

ランファも、そう感じた内の一人であった。

「そうかい。疑って悪かったね。それと、ランファもようやく大人になった様だね」

フォルテは、表情を崩しながらランファの肩を叩き始める。

彼女のこういうサッパリとした部分は、きっと美徳の一つなのだろうなと、タクトは思っていた。

「フォルテさん。私は、もう大人なんですけどね・・・・・」

「少女マンガと恋愛ドラマを卒業しない事にはですわ」

「ミント。あんた。人の事を言えるの？」

「私は、創作と現実の区別は付いておりますのよ」

ミントは、強く決心していた。

自分はアキオの事が好きで、その彼を救うために手段は選ばない事を。

そして、救い出した彼の人生に安寧を与えられるのは、自分だけであると自負してもいた。

今までは嫌っていた実家であったが、その力を用いれば、いくらシードル公爵家といえども簡単に手は出せなかったからだ。

それに、自分の父親であるダルノーは、アキオの事をとても気に入っている。

婿に来るならば、きっと大歓迎するであろう。

多分、世間では政略結婚と言われるのであろうが、ミントとしては政略結婚大歓迎であったのだ。

「ランファさん。疑ってしまってすみませんでした」

ちとせは、素直にランファに謝る。

ちとせは、ミントの様に実家に力があるわけでもない。

父親を殉職で亡くした、軍人家系の家の一人娘でしかなかった。

それでも、アキオをミントに譲る気は更々なかった。

あの楽しかった一ヶ月の従兵実習の後、今までは真面目過ぎて融通が利かないと、センパール士官学校の同級生達にまで言われていた自分が、ある教官に、『烏丸候補生。君は、少し角が取れていい感じになったな。どうやら、実習先が良かったらしい。軍人として

も人間としても非常に結構な事だ』と褒められるまでになっていた。
だから、尊敬すべき上官であり、初めて本当に好きになったアキオの傍にずっと立っていたかった。
どんな危険や妨害があっても、命を落す危険があってでも、その気持ちに変わりはなかった。

「では、今日はここまでかの。明日の会合で、集めた情報を元に対策を考えるとしよう。では、解散じゃ」

あまり長時間、大人数が集まる危険性を考慮したウォッカ大将の命令で会合は解散となり、各々で出来る限りに情報を集める事となったのであった。

「あーーー。ジーダマイヤ大将閣下は、軍事法廷の開設準備と、次の作戦の準備で忙しいのだ。お前ら如き市民風情の尉官に会っている時間はない。反逆者との接見は、短時間だが認めるとの仰せだ。ありがたく思うのだな」

数時間後、フォルテ達は、アキオの収容されている旗艦（ベルリン）へと移動し、ジーダマイア大将に接見の許可を取っていた。

「反逆者ですか？　まだ有罪と決まっていないのに？」

「軍事法廷だぞ。ほぼ有罪は決まりだろう。そもそも、市民風情が

二十二歳で准将というのがおかしい。きっと、汚い手を使ってなのであろうな。裏切り者として処刑という最後は、奴に相応しいのかもしれん」

応対に出た副官は、典型的な貴族出身の傲慢な若者であった。歳はアキオよりも少し上らしいのだが、階級章を見ると中佐でしかなく、アキオが逮捕されて『ざまあ見ろ！』と思っている事がバレバレの態度を取っていた。

「接見の許可を与えていただきありがとうございます。ジーダマイヤ大将閣下に、ムーンエンジェル隊隊長のフォルテ・シュトーレンが感謝していたとお伝え下さい」

「ふむ」

フォルテの丁寧な感謝の言葉に、副官は短く返事をする。後ろのミルフィーユやランファは、副官の態度に憤りを隠せないでいるらしいが、フォルテは彼女達を抑えつつ丁寧にお礼を述べる。苦労人のフォルテとしては、ここで変に彼の機嫌を損なって、接見を許可されない事の方が怖かったのだ。

「フォルテさん！　何なんです？　あいつは！」

艦内の通路で、ランファはかなり激高していた。

「貴族出身の高級将校様って奴さ。私もアキオも、嫌と言うほど相手にしていたけどね」

そして、次に臨時の独房になっている懲罰室の入り口でもひと悶着発生する。

ミルフィーユとちとせとミントが一緒に作ってきた差し入れを、警備兵に突っ返されてしまったからだ。

「ただの食事なんです。駄目なんですか？」

「少尉殿。勘弁して下さい。規則は規則ですので・・・・・」

警備兵である中年の伍長は、ミルフィーユに申し訳なさそうに頭を下げる。

「ミルフィー。伍長には、伍長の責任があるんだよ。責めるのはおよし。万が一の事態に備えて、伍長は警備をしているんだから」

「ご察しいただき感謝いたします。面会は十分までとなっています」

面会は、懲罰室のドアに付いている小さな鉄格子付きの窓越しでしか許可されなかった。

フォルテが中を覗くと、アキオは支給された昼食を一口だけ食べて、すぐにフォークを放り投げているところであった。

「よう。アキオ。食事の最中だったのかい？」

「食事？　ああ。この餌の事か？　こりゃあ。食うに値しない。明後日の軍事法廷終了まで断食させていただくよ」

確かに、トレーに載せられた食事は、あまり美味しそうに見えなかった。

以前なら、栄養補給と諦めて食べていたレベルの食事であったが、エルシオールでの食事に慣れてしまったら食べられなくなってしまったのだ。

「必用な栄養は取れるんだ。取れないと軍の衛生法に引っかかるからな。でも、それだけで食材は最低ランクだ」

「補給部隊を統率していたアキオらしい意見だね」

現在の第3方面の状況は、全ての辺境軍の中でも最悪と言っていい状態にあった。

対立するウォッカ大将の再構築した星間ネットワークを意図的に活用していないので経済が停滞し、物資の流通量の不足と難民の流入で治安の悪化と物価の高騰を招いている状態なのに、ジーダマイヤ大将が各惑星政府を軍事力で恫喝して、増税を行っていたからだ。

「レイトン准将の仰る通りですな。食材の購入予算が以前と同じなので、最低ランクの食材を調理人が苦労して料理している。そういう状態なのです。更に、貴族様達が良くないですね。自分達だけ臨時の予算を組んで旨い物を食べている。これでは、士気は維持できませんよ。下の連中は、『レイトン准将が、第2方面軍ではなくてこっちに転属してくれれば良かったのに』と口々に言っています。おっと、これは、暇な警備兵の独り言です」

フォルテは、少し安心していた。

アキオの下士官や兵達からの支持は本物らしく、彼が軍事法廷の前に暗殺や毒殺される危険性はかなり薄いと判断できたからだ。

「こっちだと、俺は大人しくしていたかもな。そもそも、あのジーダマイヤが、俺にフリーハンドを与える程の大器には見えない」

警備兵の言葉に対応するかの様に、アキオは自分の意見を述べる。

「そうなのかい？」

「俺は、そう思っている」

フォルテの問いに、アキオは短く答える。

ジーダマイヤ大将は、五年前のエオニアの反乱事件の経緯から、謀略に長けた狡猾な人物と見られる事が多かった。

だが、ウォッカ大将やアキオは、彼をそれほど評価していなかった。

裏にいた前皇王であるジェラールや、フレスコの言うがままに動いていた傀儡で、貴族の癖に下衆で俗物という評価しかしていなかったのだ。

「それで、アキオは何か策を考えているのかい？」

「無駄だ。軍事法廷の開設準備はアレがしているし、裁判官を含めた弁護側の人員が、全てジーダマイヤの息が掛かった連中なんだ。一応足掻いてみるが、多分俺の有罪は避けられないだろうな」

「確かに、全てがアキオが有罪って線で動いているらしいね」

思えば、おかしな事ばかりであった。

エルシオールでアキオを逮捕した際に、本来行われるべき部屋の捜索が行われなかった。

証拠は、ここに逃げ延びてきたフレスコの執事であるコニャックの証言のみで十分という判断が下ったらしい。

それと、裁判終了の翌日には、この近辺の宙域に駐留しているエオニア艦隊の討伐を行う事が決まっているので、裁判に時間を掛けている暇がないとのジーダマイヤ大将の意見が不自然であった。

ならば、もっと事情を調べてから後で裁判を行うとか、他にいく

らでも手があったからだ。

「そういえば、シードル大尉が嫌がる皆を使って、臨時の裁判室を作っています」

次に、ちとせが鉄格子越しにアキオに話しかけ、それをミントが羨ましそうに見つめていた。

こういう時に、背が低いと損だと感じてしまうミントであった。

「アキオさんが、血が繋がっていないのにシードル公爵の息子を詐称して家の乗っ取りを図っていた。その嘘を信じて疑っていない様子です」

「俺の生まれの事を知っている人は非常に少ない。だから、ジーダマイヤはその嘘で押し通すつもりらしいな。いやはや、嘘も百万回つけば事実となりか・・・・・。こりゃあ、ＤＮＡ鑑定も認められないだろうな・・・・・・」

ここに来て、アキオは自分の生まれの秘密を隠す必用が無くなっていた。

というか、アキオが、フレスコ・シードル公爵の息子である事を詐称しているというのが前提の反逆罪であったので、ＤＮＡ鑑定などもっての他であったのだ。

さっさと手駒を使って裁判を行ってアキオを有罪に追い込み、ウォッカ大将にも責任を取らせて、自分の優位を全軍に認めさせる。

かなり強引ではあるが、一度上に立ってしまえば表立って文句を言う奴も少なくなるであろう。

そういう判断であった。

「逆に、ジーダマイヤが追い込まれているとも言える。《窮鼠猫を

噛む》かな？」

「《無理が通れば、道理が引っ込む》の間違いではないですか？」

「かもしれないな」

「そろそろお時間です」

やがて十分間の面会時間は終了し、フォルテ達は後ろ髪を引かれる想いで懲罰室を後にする。

「フォルテ。忙しいのにすまないな」

「実は、意外と暇なんだよね。シードル大尉がアレで、全体的に艦内の業務が動いていないからさ」

先ほどのクジラルームでの秘密の会合の終了後、レスターはかなり激怒していた。

シードル大尉が、勝手に執事のコニャックやジーダマイヤ大将から送られてきた将校達を引き連れて艦内を闊歩し、他の軍艦ではスペースに余裕がなかったのか、臨時の法廷室の準備を艦内の乗組員達を使って行っていたからだ。

おかげで、艦内のかなりの作業がストップを余儀なくされていた。

軍事裁判の翌日に、近辺宙域にいるエオニア艦隊の討伐作戦が控えているのにだ。

「レスターなら、怒るだろうな」

「そりゃあそうさ。文句を言ったら、『皇国の基幹に関わる重要な事なので、市民は黙っていてください』だもの。怒らないはずはな

いさ」

時に、感情は冷静な判断力を失わせる効果がある。
現在のシードル大尉の状態であった。

「バカな奴だな。シードル大尉は」

「そうだね。感情で我を忘れたせいで、今までの信用が全ておじゃんだ。後で顔を青くすればいいさ」

「そうだな。まあ。俺は、本番で少し足掻いてみる事にするよ。ミルフィー。差し入れを感謝するよ。もっとも、食えれば最高だったんだけどね」

「アキオさん。絶対に諦めないで下さいね」

そう言いながら、ミルフィーユは持って来たバスケットと水筒を警備兵に手渡していた。
一種の賄賂と考えられなくはなかったが、ただのご飯なので特に問題になる事もないであろう。

「（あの娘。意外と抜け目がないんだよな）ミント。そんな顔をするな。まだ有罪と決まったわけでもないんだ」

「ですが・・・・・」

「ちとせ。お前さんもだ。ほら。ヴァニラ。暗くなるな。笑え笑え」

アキオの言葉に、ムーンエンジェル隊の面々は無理矢理に笑顔を浮かべながらその場を後にする。

「いい娘達ですね」

「そうだな。伍長」

「へえ。これは、ご馳走だな。食材も良いし、とても美味しそうだ」

アキオの代わりに差し入れを貰った伍長は、ランチボックスの蓋を開けながら嬉しそうに言う。

どうやら、本当に彼らの食料事情は深刻な状態になっているらしい。

「ですが・・・・・・」

「ですが、何だ？　伍長」

「量が多いですね・・・・・・」

確かに、そのファミリー用のランチボックスには優に五人前を超える大量のオニギリとおかずが詰め込まれていた。

「口の堅い同僚を誘うか・・・・・・。それと、准将殿」

「何だ？　伍長」

「少し食べますか？　全部俺達が食べた事にしますので」

こうして、アキオは軍事法廷開始までの時間を、懲罰室で過ごす事となるのであった。

「コニャックが怪しい事は、簡単にわかったのじゃが・・・・・・」

「彼が、皇国を裏切る理由がわかりませんね」

「想像力の欠如じゃの。ウォルコット」

「ご老人。人の事が言えるのですか？」

「ワシは、色々とツテを使って密かに調べさせておるよ。まだ何もわからないがの」

「軍事法廷は、明後日なのですが・・・・・・」

「ルフト。そういうお主も、自分のツテから何も探れなかったではないか」

翌日のお昼頃、昨日と同じメンバーがとある空き部屋に集まって対策会議を始めたのだが、その具体策はなかなか見つかっていなかった。

ジーダマイヤ大将は、適当な状況証拠と怪しげな証人のみでアキオを裁こうとしているのだが、それを止める自分達にも、『コニャックは怪しい』というあやふやな情報しかない。

某二時間ドラマの警察の捜査会議の様に、ホワイトボードに関係者達の写真を貼ってマジックで矢印等を引いてみたのだが、わから

ないものはわからないという結論に達していた。

「別に、裏切っていないと思いますけどね」

「ジンロ中将は、どうしてそう考えるのかの？」

「ただの権力闘争ですから。私は、自分が貴族だからわかるのですよ。軍の主導権を握りたいジーダマイヤと、エリオスに公爵位を継がせたいコニャックの意図が一致したので、共に共犯関係にあるのだと・・・・・。まあ。そういう事ですかね」

今年で三十五歳になったジンロ中将は男爵位を持つ貴族であったが、現在では有力なウォッカ大将のシンパとなっていた。

自身が有能な軍人である事と、比較的新しい時期に爵位を与えられた新興貴族で、古い貴族社会の伝統を重んじるジーダマイヤ大将側の貴族達と折り合いが悪いという事情が存在していたからだ。

それと、所領が辺境に存在するという事情もあった。

別に、それほど焦って中央を取り戻す必用が無かったのだ。

変に焦って失敗するより、適切なタイミングを図るというウォッカ大将の意見にも賛同していた。

「ただ・・・・・・」

「ただ。何じゃい？」

「コニャックの帰還は怪しい。これは、ご老人と同じ意見です。彼は、うちの屋敷のＹシャツへのアイロン掛けが得意な執事とはわけが違います」

「上手く話が纏まらないの・・・・・・」

絶対に生還不能な状態からの奇跡の生還をした怪しい執事。
それを、内心では疑いつつも自分のために利用するジーダマイヤ大将。
だが、それに関する証拠は一切無く、多分埋伏の毒であろうコニャックがアキオの有罪後に、シードル公爵家の執事としてどんな暗躍を行うのか。
想像しただけで寒気がしてくるウォッカ大将達であった。

「あっ！　そうだ！　レスター。あの書類を見せてくれよ」

「ああ。レイトンの軍事裁判開始のお知らせか」

レスターは、ジーダマイヤ大将から送られて来た書類をみんなに見せる。

「明後日の午後十時に、エルシオール艦内の特設法廷で開始。有罪後の処刑は、シヴァ皇子の御前を血で汚す事は良くないので、ここから三十光年離れた惑星サンサの刑務所内の敷地で行うか・・・・・。嫌な書類だな。レイトンの有罪が既に決まっているかのようだ」

レスターの呟きに、全員が賛同する。

「シナリオは見えたがの」

「ですね」

「途中で、レイトンがエオニアの息の掛かった連中に強奪される。さすがのレイトンも、生き残るためにエオニアに協力せざるを得ない状態となる。ウォッカ大将が責任を取らされ、失脚はあり得ない

が、勢力を落としてジーダマイヤ大将と戦力を二分する事となり、無事に新シードル公爵となったエリオスにますます信用される様になったコニャックが両陣営を引っ掻き回す。そうこうしている内に、レイトンを臣下にしたエオニアが我々を各個撃破する」

「「「「「「「「「「・・・・・・」」」」」」」」」」

タクトの未来予想に、全員が黙り込んでしまう。

味方なら大変に頼もしいアキオが、敵に回ればどんなに恐ろしいか。

考えるだけでも、身震いがしたからだ。

「もしそうなったら悪夢じゃの。多分、勝てるとは思うが・・・・・・」

「損害がバカに出来ませんか？　ですが、うちの通商護衛艦隊は、多分機能しなくなりますよ。ミルフィーユさん。木村副司令がここに挨拶に来ない理由がわかりますか？」

「ええと・・・・・・。任務が忙しいから？」

ミルフィーユの答えに、ウォルコット中将は静かに首を横に振る。

「違いますよ。怒っているんです。彼は、一年前までは叩き上げの万年少尉でした。辺境軍所属で、士官学校を出ていないから出世できなかったのですよ。実力は十分にあるのにです」

「確かに、彼は優れた司令官だ。マッコリ大佐と共に双璧と呼ぶに相応しい実力を持っている」

ジンロ中将が一番驚いた事は、辺境の補給部隊と内心で少し侮っていた通商護衛艦隊の、幹部クラスの人員の能力の高さと、艦隊自体の練度の高さであった。

特に、上から二十位までの入る幹部達は、近衛艦隊でも十分にやっていける実力を持っているであろう。

若い尉官や准士官クラスの人員も士気が高く、自己研鑽を怠っていない。

使用する装備は、ほとんどが中古品であるにも関わらず、常に最高の状態に整備されていたし、訓練時の艦隊機動も一流の部隊と呼ぶに相応しい練度を誇っていた。

あれだけ、雑多な艦を多数扱っているにも関わらずだ。

「少なくとも、三割が。いえ・・・・・・。半分はレイトンさんに付く可能性があります・・・・・・」

それは、悪夢でしかなかった。

エオニアが大量に配備している最新の無人艦隊に彼らが分散して配置され、それをシェリーやアキオが後方から指揮を執る。

今までは、人員が少ないゆえの無人艦艇で、どうしても多少命令後にタイムラグを起している状態だから勝てる部分が存在していたのに、それが無くなってしまうからだ。

「みんな、彼がその実力を認め、追加で教育し、権限と待遇を与えたのです。一応は私が司令官ですけど、その私ですらおこぼれで中佐から中将なのですよ。彼に誘われて裏切らないと言える保障はありませんね」

「それと、戦闘に勝った後の占領政策も、レイトンなら上手くやるじゃろうからな」

ウォッカ大将は、ウォルコット中将の不謹慎な発言に特に怒る事も無く自分の意見を述べる。
事実なので、怒っても仕方がないと考えたからだ。

「うーーーん。レイトンが敵になる事は防ぎたいけど、問題なのはコニャックが七十年以上も仕えていたシードル公爵家を裏切る理由だよな。それがわかれば、彼が実はこっちを裏切っている事が公となるかもしれないし・・・・・・。ところで、コニャックって、待遇が悪かったとか？　それで、好条件でエオニアに・・・・・・」

「いや。金銭的には、かなりの物を貰っておる。その代わり、汚れ役で色々と激務なのじゃが・・・・・・」

誰もが一番最初に考える、金銭的な理由での裏切りを口にしたタクトであったが、ウォッカ大将はそれをキッパリと否定した。

「わかんないなぁ。あのシードル公爵家の陰の部分を任されている有能で信頼されている執事が、自分の主人を裏切る理由が」

多分、有罪となって護送されていたアキオがエオニアに奪われても、コニャックは、『偶然の出来事』だと言って自分の関与を誤魔化してしまうであろう。
そして、そのまま彼は、獅子身中の虫となってこちらに残る続ける。
後の歴史は、シグルト・ジーダマイヤとエリオス・シードルを、国を滅ぼしたか滅ぼしかけた愚か者の代名詞として記す事となろう。
だが、困った事に、それはまだ推論の域を脱していなかった。
決定的な何かが不足していたからだ。
全員が思案の海に沈んで黙り込んでいると、一人の少女がそっと手をあげた。

強運の女神ミルフィーユ・桜葉少尉だ。

「実は、一つ気になる事があるんですけど・・・・・・」

「この際だ。どんな些細な事でも歓迎するぞ。お譲ちゃん」

ウォッカ大将は、自分の孫娘よりも年下のミルフィーユを怖がらせない様に、笑みを浮かべながら彼女の発言を促した。

「実は、あの写真を見ていて感じたんです。アキオさんとシードル大尉は髪や瞳の色は違うけど、顔の輪郭や目元が良く似ていますよね？」

「まあ。母違いとはいえ、兄弟じゃからの」

「それでですね。隣のコニャックという執事の人と、フレスコ・シードル前公爵も、目元とか耳の形とか似てますよね？」

「「「「「「「「「！！！」」」」」」」」」

ミルフィーユの何気ない一言に、ウォッカ、ルフト、ウォルコット、ジンロ、タクト、レスターの目がカッと見開かれる。

「そういえば、似ているな」

「確かに・・・・・・」

全員が、ミルフィーユの指摘に納得の表情を浮かべる。

「待てよ！　聞いた事があるぞ！」

「どうしたのじゃ？　ジンロ中将」

「昔、亡くなった祖父に聞いた事があるんです。先に亡くなったフレスコ・シードル公爵には、幼い頃に死んだ兄がいたらしいという噂を・・・・・・」

ジンロ中将の話によると、フレスコ公爵には父親が他所の女に生ませた庶子の兄がいたのだが、その子供は小さい頃に病気で亡くなっているというものであった。

「母親が水商売の女だったので、消されたって噂もありましたね。弟なら良かったんでしょうが、フレスコ公爵の兄だって話ですから、跡継ぎの問題とか色々とあるんでしょうが・・・・・・」

昔の貴族と違い、皇国では爵位の継承は、遺言でも存在しない限り長子継承が基本となっていた。

妾に産ませたからとか、血筋の関係で駄目ですという話は存在しなったのだ。

そして、この決まりこそが、アキオの運命を変えたと言っても過言では無かった。

「ジンロ中将さん。あんまり気分の良くない話だね」

「フォルテさんの仰る通りですわ」

「すまんな。お嬢様方」

ジンロ中将は、フォルテとミントに素直に謝罪する。

「だが、爵位継承で醜い争いをする輩など沢山いるからな。特に、シードル公爵家ともなれば、皇族との血縁関係もある重鎮中の重鎮で、資産も莫大な物となっている。俺の様に、領地と財産がささやかな新興男爵家とはわけが違うんだ」

「ようやく話が見えて来ましたね。実は、死んでいなかった先代シードル公爵の兄、その兄は、表で注目を浴び続けた弟の蔭として能力を発揮するも、その存在すら明かす事は許されなかった・・・・・」

「復讐か・・・・・。成功すれば、エオニアにアキオが渡り、自分もそれで功績を得られよう。失敗しても・・・・・・」

どちらにしても、この先、シードル公爵家には碌な事が待っていない。

下手をすれば、御家取り潰しという事態も有り得た。

ウォルコット中将とルフト中将は、今回の件が、コニャックの残りの人生を全て賭けた復讐劇である事に気が付いたのだ。

「となれば、時間がないので、ワシは独自に情報を探るとしようかの。行くぞ。ジンロ中将」

「ウォッカ大将。どちらに行かれるのですか？」

「ちょっと、第3方面軍艦隊の知り合いの所にの。レスター。明後日の裁判、出来る限りの時間引き延ばし策で行け。どうせ、向こうにレイトンを裁ける決定的証拠などあろうはずもないからの」

レスターの質問に、ウォッカ大将は、まるで軽く近所に探索にでも出かけるかのように答える。

「第3方面軍艦隊ですか？　だって、あそこは・・・・・・」

「ジーダマイヤに内緒で会える向こうの将官など、向こうに何人でもおる。貴族で顔の広いジンロ中将もおるしの。じゃあ、頑張れよ。若人達」

ウォッカ大将は何食わぬ顔で連絡艇を用意し、そのまま第3方面軍艦隊へと出発してしまった。

「ふぇーーー。相変わらず、妖怪のようなジジイだったよな？」

「タクト。失礼だぞ」

レスターが、暴言を吐いたタクトを窘める。

「その程度の事で怒る方ではないですよ。何しろ、私やルフト中将が生まれた頃には任官していた御仁ですから」

ウォルコット中将は、自分が任官した頃からお世話になっている大先輩の事を良く心得ていた。

「初めて会ったけど、《トランスバール皇国軍の生き字引》ってあだ名は伊達じゃなかったんだね」

「軍内部に潜む妖怪だって、貴族連中は言いますけどね」

さすがのフォルテも、ウォッカ大将が相手ではいつもの強気も出なかったらしい。

ウォッカ大将にしたら、ミルフィーユもフォルテもお嬢ちゃん扱

いだったからだ。

「でも、ミルフィーは、良く気が付いたよな。フレスコとコニャックの顔が似ている事に」

「えへへ。実は、ちょっとお話が長くて眠くなったので、あの写真で何か遊べないかなって思って、それで間違い探しをしている内にですね」

間違い探しで二人の顔が似ている事に気が付き、それが原因で事件の核心を掴むまでに至った。

相変わらずの彼女の強運に、全員が唖然としてしまう。

「おほん！　それで、レスター。わかっておると思うが・・・・・・」

「お任せを。ルフト中将。相手が軍事法廷を起こした事を後悔するくらいの引き伸ばし策を実施しますので」

ルフト中将に、レスターは胸を張って自信満々に答える。

アキオを裁く臨時軍事法廷は、明後日に迫っていた。

そして、ちょうど同じ頃、私室で休憩を取っていたコニャックは・・・・・・。

「この薬も効果が無くって来たな。我が命ある間に、復讐は成せるのだろうか・・・・・・？　いや！　絶対に復讐は成就させるのだ！　シードル公爵家を滅ぼすのだ！　・・・・・・・・・・・・・・。

母上。どうか、この哀れなマイウスを見守りください」

心臓の奥から響いてくる針を刺すような痛みと戦いながら、コニャックは古いロケットの中に入れた若い女性の写真を見つめ続けるのであった。

（翌日、エルシオール会議室《臨時軍事法廷》内）

この軍事法廷で、ジーダマイヤ大将は一番最初に重大な間違いを犯していた。

それは、レスター・クールダラスをアキオの弁護人として認めてしまった事であった。

同じ若きエリートながらも、その仲の悪さが知られていた二人だ。

ジーダマイヤ大将は、レスターから自分がアキオの弁護人になりたいと告げられた時、出世競争をしているライバルを蹴落としたいのであろうと下衆な勘繰りをしてしまい、喜んで弁護人の交代を認めてしまったのだ。

ところが、軍法をほとんど暗記しているレスターは、今回の軍事法廷の法的不備を一つ一つ丁寧に指摘し、それに裁判官達や陪審員達が振り回されるという事態に陥っていた。

「臨時軍事法廷設立には、中央の裁可が必要だったはずです。各方面軍が、勝手に軍艦内で法廷を設立して軍人を裁くと、軍閥化の第一歩に繋がると、皇国暦２８９年に・・・・・」

「中央が潰滅した現在、我々が中央の軍務を代行している。問題は無い！」

ジーダマイヤ大将の息が掛かった裁判官がそれを退け、次に罪状の確認と認否が行われる。

「アキオ・レイトン准将。罪を認めるか？」

「全くの事実無根です。私が反逆をしているなどと考えた人は、よほど想像力に長けた人物なのでしょうな」

アキオは、裁判長と告発側の席に立っているエリオスとコニャックに挑発的な視線を送る。

「口を慎みたまえ！」

「先ほどの弁護人の質問に、ちゃんと法的根拠を示さなかったあなたがですか？」

「現在の我々が、中央の代理を務めている事は事実だ！」

「他の方面軍司令の許可も得ないでですか？」

「我々、第3方面軍でシヴァ皇子をお預かりするのだ！　我々こそが！」

激高した裁判官は、すぐに自分の発言で周りが凍り付いた事に気が付く。

自分達が、シヴァ皇子を利用して他の方面軍よりも優位に立とう

としている事を認めてしまったからだ。

「・・・・・・・・・」

「検察側の証拠提示は宜しいので？」

続いて、ジーダマイヤ大将の息の掛かった軍人から、アキオがエオニアと通じていた証拠が提示される。

ところが、その全てに明確な根拠が存在しなかった。

だたの状況証拠でしかなかったからだ。

「先の戦闘前に、エオニアから直接に宰相になれとの誘いを・・・・・」

「本当に、レイトン准将とエオニアが通じていたら、裏で言うべき類の発言ですな。寧ろ、そう思わせるための離間の策ではないかと思いますが・・・・・・」

「逆に、それを考えての表の発言という事は無いのかね？」

「そもそも、レイトン准将が、シードル公爵家の乗っ取りを謀るのに、エオニアに通じる理由がわかりません」

「本当に、血が繋がっていないからだろう？　裏切りの功績で新しい家を貰うつもりなのだろう」

「ＤＮＡ鑑定は、したのですか？」

「前シードル公爵のＤＮＡデータが存在しない・・・・・・」

「嘘ですな。皇国血統情報局のデータバンクを照会すれば、すぐに判明するはずです。おっと、中央が潰滅した云々は通じませんよ。惑星ロームに支局が存在するはずだ。すぐに調べれば宜しい」

レスターの指摘で、検察側の軍人はジーダマイヤ大将に視線を送るが、彼が首を横に振ったので、ＤＮＡ鑑定は行わない事となった。

レスターは、これによりジーダマイヤ大将が事実を全て知った上での今回の暴挙である事を悟る。

「それと、もう一つ。シードル家執事のコニャック氏にお尋ねしたい。あなたこそ、どうやってエオニアから逃れて来たのです？　あなたこそが、実はエオニアと通じているのでは？」

「・・・・・・。若い方は、意見が中々に過激ですな。答えは否です」

コニャックは激高するでなく、静かにレスターの意見を否定する。

「それに、私がなぜ一世紀近くもお世話になっているシードル公爵家を裏切ると仰るので？」

「噂を聞きましてね。実はあなたが、前シードル公爵の実の兄であるという噂です。母親の身分が低かったがために、死んだ事にされて執事としてシードル公爵家に仕えている。その彼が、長年の怨念を晴らすべく今回の謀略を行った。実に、筋が通っています」

レスターの推論に、法廷内は騒然となった。

どうやら、この事実はジーダマイヤ大将すら掴んでいなかったらしい。

それと、コニャックの隣にいるエリオスも驚愕の表情を浮かべて

いた。

「それこそ、何も証拠が無い。ＤＮＡ鑑定のデータでもありますので？」

コニャックは、自信満々にレスターに反論を開始する。

この法廷は、ジーダマイヤ大将が仕切っているので、自分のＤＮＡ鑑定など絶対に認められないからだ。

ジーダマイヤ大将が強引にアキオを有罪とし、処刑のために護送する途上で彼を奪う。

自分は、もう少しこの場に留まって引っかき回そうと考えていたのだが、安全策を取ってその時に逃げた方が良いだろう。

勿論、これだけの事を許したエリオスが破滅する事は間違いない。

確実に、自分の復讐は成るのだ。

「ＤＮＡ鑑定を要望します」

「時間が無い。認められない」

「そんな理由で、当然の権利すら認めないのか！　そんな無法がまかり通る！　本来、方面軍司令部からも独立している軍法務官であるお前達が、誰の顔色を伺って裁判をしているんだ！」

「裁判長！　暴言を吐いた弁護人の退廷を要求します！」

ところが、裁判長はレスターの退廷命令を出さなかった。

なぜなら、顔色を伺ったジーダマイヤ大将の表情が、法廷の設置された会議室の入り口を向いたまま凍り付いていたからだ。

「よう、ジーダマイヤ大将。何やら、ワシの目の届かない所で、楽

しそうな事をしておるらしいの」

「ウォッカ・・・・・・」

ジーダマイヤ大将は、予想だにしなかったライバルの登場に顔色を真っ青にするのであった。

「裁判長。証拠を提示して宜しいかの」

「認めます・・・・・・」

完全に役者が違っていたのと、肝心のジーダマイヤ大将が呆然としていて役に立たなかったので、ウォッカ大将の要求はすんなりと認められていた。

「まずは、二件のＤＮＡデータからじゃ。最初は、レイトン准将とシードル大尉のじゃな」

二件のＤＮＡデータは、法廷内のスクリーンに大きく表示される。

「データ標本は、艦内で拾った髪の毛からじゃ。新しい髪じゃから、結果も鮮明に出ておるの」

そのデータからわかる事はただ一つ。
それは、アキオとエリオスが、９９と小数点の後ろに９が二百億個％の確率で、正真正銘の兄弟であるという事だ。

「コニャック！」

「お坊ちゃま。落ち着かれなさいませ」

衝撃の事実に、驚きを隠せないエリオスを侮蔑しながらも、コニャックは彼に落ち着くように言う。

「次に、コニャックよ。おぬしと前シードル公爵のＤＮＡデータじゃ。そなた。ワシと違って、ハゲていなかった事が仇となったの。髪を拾わせて貰ったぞ」

続いてのデータも、二人が異母兄弟である事と告げていた。

「それで？　ウォッカ大将は、何を仰りたいのですか？　確かに、私はフレスコ様とは異母兄弟の間柄です。ですが、この役割分担は、お互いに納得しての事。待遇面で、私は過分な物を頂戴している。それなのに、シードル公爵家を裏切る理由が存在しませんな」

「（さすがじゃの・・・・・）」

ウォッカ大将は、素直に感心していた。
コニャックは、自分の不利を素早く察すると、その事実を素直に認めていた。
だが、認めたのは、自分がフレスコと兄弟である事だけ。
あとは、『だから、何なんです？』という態度を崩さなかった。

「では、もう一つ聞こう。そなた、エオニアと面識は？」

「無いです。追放前に、宮廷内でお見かけした程度で」

「反乱後は？　エオニアに逃がされたのでは？」

「まさか、捕まったのは旦那様だけです。私は、旦那様に逃がしていただいたのです」

「そうか。では、新たな証人を認めて欲しいのじゃが」

「証人を認めます」

続いて、裁判長は新しい証人の証言を認める。
すると、法廷内に一人の若い女性が入ってくる。

「お嬢さん。元の職業を教えて貰えるかの」

「ソルティードッグ伯爵家のメイドでした」

「伯爵は、いかがなされたのかな？」

「旦那様は、御家族ごとエオニアに処刑されました。自分は、ただのメイドという事で解放され、ここの近くの惑星にある実家に戻っておりました」

これも、ミルフィーユの強運の賜物かもしれない。
ＤＮＡ解析しか証拠を探し出せないでいたウォッカ大将に、同じく証拠集めのために近くの惑星に移動していたジンロ中将から、顔見知りのメイドに会って、しかも彼女はエオニアと会った事がある

と報告を受けたからだ。
そして、彼女は当たりであった。
以前に、ジンロ中将がソルティードッグ伯爵家のパーティーに招かれた際に、自分に給仕を行ってくれたメイドであったらしい。

「ところで、そこの彼の顔を見た事は？」

「あります」

メイドは、きっぱりとコニャックを見たと証言した。

「どこでかの？」

「エオニアが接収した宮殿でです。部下らしき顔に傷のある若い女性と廊下を一緒に歩いておいででした」

「間違いないかの？」

「はい。間違いありません」

「のう。コニャック殿。事前にフレスコ公爵に逃されたあんたが、どうしてフレスコ公爵が処刑されたと思われる場所に、エオニアの部下と一緒にいたのかの？」

「その女性が嘘を付いているのでは？　軍内部で妖怪と恐れられているあなただ。そのくらいの謀略は、朝飯前なのでは？」

コニャックは、それでも全く動揺する気配を見せなかった。

「お嬢さん。他に、その光景を目撃した人数は？」

「最低でも、五十人ほどはいたかと。全て、使用人やメイドで処刑を間逃れた人達です」

「全員を証人として呼ぼうかの？」

「・・・・・・・・・」

「コニャック！　どういう事なんだ？　お前は、父に逃げろといわれたから「ちっ！　うるさい！　クソガキが！」」

そこまでであった。

コニャックは、自分にしつこく質問をして来るエリオスを付き飛ばすと、九十歳を超えているとは思えない程の素早いスピードでアキオの後ろに回り、その首筋に隠していたナイフを押し当てた。

「やれやれだ。本当に臨時軍事法廷なんだな。武器検査が徹底していない。それと、俺を人質にしても無駄だぞ。我が伯父上」

初めて知る衝撃の事実であったが、アキオは特に動揺すら見せないで、コニャックに話しかけていた。

「我が甥よ。悪いが、このままエオニアの元まで行く」

「無理だろうな」

「やって見なければ・・・・・「フォルテ！」」

「あいよ！」

貴族の存在する社会とうい物は、どこか古臭い物だ。
フォルテの近く席で記録を取っている速記係のデスクの上には、高級そうな万年筆が置いてあった。
自動記録装置が壊れた際の予備という事らしい。
フォルテは、それを素早くコニャックの方に投函する。
すると万年筆は、ナイフを持っているコニャックの右腕の甲に突き刺さった。

「うぐっ！」

僅か一瞬の隙であったが、それだけで十分であった。
アキオは、肘撃ちをして素早くコニャックから離れると、彼の腕を掴み、そのまま床に押し付ける。

「大人しく、捕まるんだな」

コニャックは、全く抵抗しなかった。
いや、したくても出来なかったのだ。
若い頃から酷使され続けた肉体。
年上の自分が、フレスコよりも長生き出来る可能性はかなり低い。
それでも、コニャックは懸命に努力し続けた。
最近では、時おり発生する心臓発作を抑えるべく、普通の医師ならば絶対に処方しない強力な薬剤ににも手を出し、その効き目すら最近は無くなりかけていた。
それでも、彼は生き続けた。
その強靭な精神力と、復讐を完遂させようとする意思の強さによってだ。
だが、自分の企みが終了した今、彼の心臓停止まで僅かな時間しか残されていなかった。

「大丈夫か？　伯父上」

アキオは、コニャックの様子がおかしい事に気が付き、すぐに彼を戒めを解いて楽な姿勢にさせる。

「成功しても、失敗してもどちらでも良かった・・・・・・」

「どっちにしても、シードル公爵家は終わりだから？」

「そうだ、我が冷静なる甥よ・・・・・・」

確かに、執事の嘘に惑わされ、これだけの大騒ぎを起こしたエリオスに明るい未来など待っていようはずもない。

良くて、降格。

悪くすると、時期が悪いだけに御家取り潰しの可能性もあった。

それと、今は呆然としているジーダマイヤ大将が、自分が助かるためにエリオスを一緒になって追い落とす可能性すらあったからだ。

元々、利用しているだけのエリオスだ。

自分が助かり次のチャンスを狙えるようにするために、エリオスを切り捨てる可能性が大であった。

「一つ願いを聞いてくれないか・・・・・・？」

「聞ける範囲で頼む」

アキオは、コニャックを恨む気になれなかった。

確かに、陥れられそうになったのは事実だが、自分を殺そうとはしていない。

エオニアの元に送るつもりであったからだ。

そう考えると、実の父親より優しい存在とも言えた。

「ワシの遺髪とこのロケットを、トランスバールの首都郊外にある、母の墓に・・・・・・」

コニャックが、自分の首のかけられたロケットを開けると、そこには黒い髪の綺麗な女性の写真が貼ってあった。

「母は、孤児でな。生きるために高級クラブで働いていた。そして、そこで、あの男の父親と出会った・・・・・・・」

「俺と似たり寄ったりか・・・・・・。願いを聞き遂げよう。時間は少しかかるだろうが・・・・・・」

「ありがとう。俺の二の舞にはなるなよ。我が甥よ・・・・・・。母さん・・・・・・。マイウスは、あなたの元へ・・・・・・」

その言葉を最後に、コニャックの体は完全に動かなくなってしまう。

「二の舞になるな・・・・・・。か・・・・・・」

次第に冷たくなってくるコニャックの遺体の腕を組ませてから、アキオは静かに立ち上がる。

すると、視線の先では呆然としたエリオスが、先の恐慌状態から立ち直ったジーダマイヤ大将と腰巾着の参謀長に叱責されていた。

「シードル大尉。とんでもない事をしでかしてくれたな。君は、自分の執事一人満足に管理できないのかね？」

「左様ですぞ。それに、無罪のレイトン准将まで巻き込んで。もし、

彼が処刑でもされたらどうするつもりだったのですか！」

「知ってて手を貸していた癖に、良く言うよ」

「タクト。それは事実だが、もっと小さな声で言え」

タクトとレスターは、かなり大きな声で皮肉を口にするが、それは二人には聞こえなかったらしい。

「とにかくだ！　シヴァ皇子には細かい事情を説明をする事となろう。厳罰を覚悟するのだな！」

いまだ、呆然としたままのエリオスを放置し、今度は二人は笑顔を浮かべながらアキオに接近して来る。

「無能な弟のために、災難だったな。レイトン准将」

「いえ。終わった事ですから」

アキオは、ジーダマイヤ大将に冷静に返事を返していた。
だが、タクトとレスターにはわかっていた。
アキオが、とてつもない怒りをその心の内に秘めている事を。

「ところで、レイトン准将。いや、新シードル公爵殿」

「はて、どういう事ですか？」

「あんな世間知らずで無能な男に、皇国の重鎮たる公爵の地位など任せておけないと考えていてね」

「はい。ジーダマイヤ閣下が、あなたの新公爵就任に力を貸すという事でして」

簡単な事であった。

誰が見ても優秀なアキオを自分の派閥に引き込むためのおべっかであった。

それに、アキオは市民出身の実力のある士官や下士官に絶大な人気のある。

引き込みに成功すれば、ここで付いたケチを挽回できるとジーダマイヤ大将は考えたのだ。

「自分は、母親の身分が低いですし・・・・・・」

「だが、君は長男だ。それに、貴族と言えど実力本位という事に変わりは無い」

「良く言うよ。あのバカ大将は・・・・・・」

「フォルテさん。聞こえてしまいますわ」

同じく、軍事裁判を傍聴していたフォルテとミントも、タクトとレスターのように皮肉を口にする。

「今回のエオニアの反乱での、皇国のダメージは大きい。復興に、成り上がりのウォッカ大将などではなく、我ら尊き貴族の力を結集して・・・・・・」

そろそろ限界のアキオが、後ろにいるウォッカ大将の方に視線を向けると、彼はニヤニヤしながら無言で口を動かした。

『作戦が控えておるからな。あまり怪我をさせるなよ』

「了解しました」

「どうしたのかね？　レイトン准将。そうか。直属の上司が気になるのだな。なら、うちに来たまえ。少将に昇進・・・いや、中将が良いな。我が第3方面軍艦隊副司令として、存分にその能力を・・・・」

「ジーダマイヤ閣下。私にとても良い提案があるのです。ちょっと、お耳を拝借」

「そうか！　良い策があるのか！」

その後の事は一切他言無用とされ、後年どの公式文書などを閲覧してもその事実は記載されていなかった。

ただ、後に報告を受けたシヴァ皇子は、『ジーダマイヤ大将も年には勝てないらしい。艦内の廊下を歩く時は、床に躓いて鼻の骨や頬骨を骨折しないように注意すべきだ』と語っていたらしいので、大体の想像は付くというものであろう。

そして、軍事法廷はアキオの無罪判決によって幕を閉じたのであった。

（数時間後、エルシオール宇宙葬専用発射口前）

エルシオールには、今まで一度も使った事が無い設備が存在した。
皇国軍では、戦死したり病死した軍人は、遺髪を採取して専用の棺に納め宇宙に射出する事となっていた。
射出された棺は設定された方向に向かい、大体は恒星の重力に捕まって消滅する。
これが、宇宙の軍人や船員の定めであった。
儀礼艦であるエルシオールでは、過去に戦死した人員が存在しない。
故に、この部屋は、いつもは封印されている。
そして今日、初めてこの設備が使われる事となっていた。
アキオが、一人で先程亡くなったコニャックを棺に詰めて射出する事となっていたのだ。

コニャックは犯罪者で、丁重に葬儀を行う必要も無かったので、次の軍事作戦を控えていた第3方面軍艦隊が持て余していた所を、アキオが自分で密葬を行うと申し出て、それに向こうが乗るという形になっていたのだ。

「花はさほど用意できなかったな。お詫びにレミューの高級ウィスキーを進呈しよう。飲んでくれ。伯父上」

棺には、僅かな花束とウィスキーの瓶しか入っていなかった。
元々、コニャックがあまり私物を持っていなかったのと、急な事で花をあまり準備できなかったのだ。

「さて、そろそろ・・・・・」

「「アキオさん」」

「ミルフィーとヴァニラか。どうしたんだ?」

そこには、沢山の造花を抱えた二人がいた。

「ちゃんと、お供えをしないと可哀想ですよ」

「造花を作りました」

「ありがとうな。二人とも。でも、どうしてだ?」

ミルフィーユなどは、特にコニャックの事を怒っていた口なので、アキオは彼女が来るとは思わなかったのだ。

「でも、詳しい事情を聞いたら可哀想になって・・・・・。それに、ようやくお母さんの所へ還れるんですよ。綺麗に飾ってあげないと」

ここ数日しか顔を見ていない悪人なのに、その生い立ちに同情して造花を作って来るミルフィーユの優しさに、アキオは少し心が癒されたような気がした。

「そうか。ありがとう。それで、ヴァニラもなのかい?」

「はい。死んだ人に罪はありませんから」

そう言いながら、ヴァニラも自分で作った造花を次々に棺に納めていく。

日頃は無口で、一緒にいてもあまり会話の無い二人であったが、アキオは更にヴァニラの優しさに気が付いたような気がした。

「みんなにも、お礼を言ってくださいね。短い時間で二人でこんなに造花を作れるはずないですから」

「それで、代表して二人が？」

「はい。副司令が、『あまり大人数で、ガヤガヤと行くものでない』と仰ったので」

確かにこの葬儀の性格上、あまり大勢に参加されても嬉しくは無かった。

アキオは、レスターが意外と人の感情の機微に敏感な事を知る。

ただし、オペレーターのアルモの気持ちには全く気が付いていないので、女性関係では全く駄目駄目であったが。

「よし。これで、綺麗になったな。コニャック・・・いや、マイウス・シェーンベルグ」

これが、彼の本名であった。

戸籍上のコニャックという名前は、マイウスが死んだと見せかけるためにシードル公爵家が用意した、孤児院で病死した子供の遺体に付いていた名前であった。

「射出する」

コニャックの遺体を乗せた棺は、近くの恒星を目指して射出され、それを眺めながら三人は静かに手を合わせる。

「（シードル公爵家の血の因縁か・・・・・。だた、俺にもその呪われた血が流れているんだ。俺は、やはり・・・・・）」

アキオは、心の奥に陰鬱とした気持ちを抱えながら、コニャックの葬儀を終えるのであった。

葬儀終了後、アキオは一人ホールの自販機でコーヒーを買って飲んでいた。
エルシオール艦内は、先の臨時軍事法廷の後始末で忙しかった。
ジーダマイヤが逃げるようにエルシオールを去り、エリオスは自室に篭って出てこない。
アキオが休暇で動かない今、この状況で後片付けの指揮を執れるのは、レスターしか存在しなかった。

アキオが自販機前のベンチに座り、カップの中の琥珀色の液体を眺めていると、後ろに人の気配を感じる。

「アキオさん・・・・・」

「ちとせか・・・・・」

そこには、ちとせが立っていた。
コニャックの葬儀の時は、遠慮して出席しなかったのだが、居ても立ってもいられなかったようだ。
アキオの元に駆け付けていた。

「あの・・・・・」

「どうしたんだい？　ちとせ。ああ。さっきは、造花をありがとう

な」

アキオは、お礼を言う時にはちとせと目を合わせたが、すぐにまた彼女に背を向けてしまう。

正直、色々な事があり過ぎて一人にして欲しかったからだ。

ミントはそれを察して、アキオを放って置く事にしたらしい。

だが、ちとせはアキオを放って置けなかった。

そして、この対応の違いが将来にどう影響するのかは、神のみぞ知るであった。

「アキオさん」

「すまんな。色々とあり過ぎて、俺も自分の感情の落ち着き先が良くわからないんだ。《多才のレイトン》か・・・・・・。俺はわからなくなったよ。確かに、通商護衛艦隊の連中やエルシオールの皆といると楽しいんだ。でも、俺は何のために生まれて来たんだろう？　俺って、実はその能力しか価値が無い・・・・・・！」

アキオは、最後まで自分の言葉を言う事が出来なかった。

急に後ろからちとせに抱き付かれ、女の子特有の体の柔らかさと、その長い髪から仄かに流れるシャンプーの甘い香りを感じていたからだ。

「ちとせ・・・・・・」

「御心中はお察しいたします。でも、そんな悲しい事を仰らないでください。それに、あなたは能力だけの人ではありません。私の知っているあなたは、自分の事はおいてもみんなに優しい人です」

「・・・・・・・・・」

「それに、エオニア側に裏切れば楽なはずなのに、それを絶対にしなかった。あなたは、まだ人生に未練がある。生きる目的も絶対に見つかります。そして・・・・・・」

ちとせは、アキオの正面に回ると、その額にそっと唇を数秒当てる。

「私もお付き合いします。私は、ずっとあなたの横に立っていたい。あなたを愛しています」

清水の舞台から飛び降りる覚悟で自分の想いを告白したちとせは、すぐにホールから走り去ってしまう。

「生きる目的か・・・・・・」

自分がちとせの想いに答えられるのかは、まだわからない。
それでも、自分の暗い感情を少し晴らしてくれた彼女に、アキオはただ感謝するのであった。

「災難だったな。レイトン」

「まあな」

ホールを出たアキオが自室へと戻る通路を歩いていると、そこで書類を大量に抱えたレスターと出くわした。
彼は、エリオスが使い物にならなくなった現在、日頃はムーエン

ジェル隊との良好な関係を構築すべく、同じくあまり仕事をしないタクトの分と合わせて、三人分の仕事を抱え込む事となっていた。

「レスター」

「何だ？　俺は、色々と忙しいのだが」

ただ、やはり二人の以前の関係を考慮すると、その会話は非常にぎこちないものとなっていた。

「色々とすまなかったな。助かったよ」

「どうした？　急に」

内心で、レスターはとても驚いていた。
あの仲の悪いアキオが、自分に素直にお礼を言うとは思わなかったからだ。

「時間の引き延ばしが無かったら、俺は有罪になっていたからな」

「俺は、皇国軍人としての職務に忠実だっただけだ」

そこで素直に喜ばないのが、レスターらしいと言えばらしかった。

「それでも、助かったよ。ありがとう」

「ああ・・・・・・」

レスターは、恥ずかしそうにそう返事するのみであった。

「後で、お礼に一杯奢ってやる」

「・・・・・・。俺は、高い酒しか飲まないからな」

これが、後に英雄タクト・マイヤーズの双璧と称される二人が、初めて友情を構築した瞬間であった。

「ねえ。アルモ。新たな男同士の友情の誕生よ」

「ココ。覗きは良くないと思うけど・・・・・・」

そんな二人のやり取りを、物陰から観察している者達がいた。実は、その手の話が大好物なココと、それにつき合わされているアルモであった。

「バカね。二人の友情は、後のあなたのためでもあるのよ」

「私のため？」

「ハッキリと言うわ。クールダラス副司令は、あまり恋愛事に興味が無い。いえ、全く興味が無いのよ。だから、天地がひっくり返ってもアルモの気持ちに気が付くはずがない」

「事実だけに、余計ショックだわ・・・・・・」

アルモは、ことある事にレスターに積極的にアプローチをかけて

いたが、その努力は全くの無駄に終わっていた。

「そこで、レイトン准将に相談するのよ。あの人なら、いい知恵が出せるかもしれない」

「確かに・・・・・・」

「というわけだから、二人の関係の推移をしっかりと観察しないと・・・・・・」

「自分の欲望に忠実とも言うわね」

こうして、レントン准将の出生の秘密を巡るひと騒動が、幕を閉じたのであった。

第十話（後書き）

溜めていたストックが残り僅か。
次の更新は時間が掛かりそう。
更新速度が速い人って凄いと感じます。

第十一話

（翌日、エオニア艦隊掃討作戦宙域、エルシオール担当区画内）

アキオの軍事裁判があった翌日、以前から準備はされていた、周辺宙域に展開するエオニア艦隊に対する掃討作戦が慌しく開始されていた。

「第3方面軍の精鋭諸君！　エルシオールやルフト中将に負ける事のない奮戦を期待する！」

ジーダマイヤ大将の半ば絶叫に近い奮戦の言葉と共に、近隣の星系に陣取っていたエオニア艦隊に向けて、味方艦隊の攻撃が開始される。

「焦っているな。ジーダマイヤ大将は」

「《策士策に溺れる》だな。あんなバカな事をしなければ、シヴァ皇子の不興を買う事も無かったし、本来なら、我々を前線に出して後方で楽をする予定じゃったのだろう」

エルシオールのメインスクリーンには、巡洋艦艦隊を率いて後方にいるルフト中将が映し出されていた。

本来ならば、この作戦で先鋒として使われる予定であった彼であったが、昨日の茶番劇の影響で、急遽予備戦力として後方に下げられていたのだ。

アキオ・レイトン准将の誤認逮捕劇で、ジーダマイヤ大将の影響力はかなり低下していた。

責任のかなりの部分をエリオス・シードル大尉に押し付ける事には成功していたのだが、自身の影響力の低下と相まって、それを汚いと感じた第3方面軍の将兵達がウォッカ大将側へと鞍替えをしてしまったからだ。

結果、彼は目に見える戦果を欲していた。

そのため、本来先鋒であったルフト中将指揮の艦隊は後方へと下げられ、旗艦（ベルリン）を含む第3方面軍主力艦隊が、エオニア艦隊と真正面から戦う事となっていた。

「ワシは、楽なものじゃよ。後ろで待機しておれば良い」

よほどの事が無い限り、ルフト中将の艦隊に出番は無さそうであった。

「タクトはどうするんだ？　一応、フリーハンドを与えられているが」

レスターは、タクトにこの作戦でどう動くかを問う。

紋章機を出撃させて、敵を撃破だけで済ますレベルの話では無かったからだ。

「そうだな。レイトンはどう思うんだ？」

エルシオールのブリッジには、本来いるべき男に姿が無かった。

副長であるエリオス・シードル大尉である。

彼は、昨日の事件の衝撃的な結末以降、茫然自失のまま自室に閉じこもり、今日も体調不良を理由に任務を休んでいたからだ。

軍事作戦中なので不謹慎ではあったが、あんな事があったのに元気に任務をこなされても困るので、副司令であるレスターはエリオスの言を素直に受け入れていた。

正直な所、《市民風情》とまで言われた男と一緒に任務を行っても腹が立つだけなので、ありがたいとまで感じていたのだ。

ところが、彼の抜けた穴という物は確実に存在する。

そこで、レスターは急遽その任務を、一番時間的に余裕のあるアキオに任せる事にした。

今回の一連の騒動で、あまりアキオに含む所が無くなっていたので、素直に頼めた事も大きい。

「参加せずって解答は、ウォッカ大将をガッカリさせるぞ。タクト」

「政治的に動けってやつね。だけどな。別に、俺は出世に興味は無いし、エルシオールとシヴァ皇子を守らなければいけないしな」

「こんな後方に、敵が来るとも思えん」

「紋章機は、出すか・・・・・・」

約五分後、タトクの呼び出しに従って、ムーンエンジェル隊の面々が集合する。

「敵艦を一艦も落すなって？」

「そうだ。損傷のみを与えて、止めは今回の主役さん達に任せるんだ」

タクトの伝える作戦内容に、フォルテは少し納得の行かない表情をしていた。

「理由をお聞かせ願えますか」

同じく集合していたミントが、ちらりとアキオの方に視線を送る。
あの後、アキオはコニャックへの造花を作ってくれた全員にお礼を言って回っていたのだが、自分はちとせの様に思い切った行動が出来ないでいた。
一方のちとせは、我ながら思い切った事をしたと、ティーラウンジで顔を真っ赤にさせながら机に突っ伏していたかのにだ。
勿論、その様子はすぐにミルフィーユに見付かって、彼女に洗いざらい吐かされ、そこから『レイトン准将争奪戦は、ちとせの一歩リード』という噂が艦内を駆け巡ったのだが・・・・・。

「ウォッカ大将が、ジーダマイヤ大将の引き降ろしを工作している。でも、まだ時間が掛かるらしい。そこで、今回は彼に花を持たせる事にした」

「逆なのでは？　ここで功を譲ったら、彼が返り咲いてしまう可能性は？」

「無いな。どの道、彼の権力者としての人生はもうすぐ終わる。だけど、あまり追い詰めてエオニア側の新しい策に嵌るのも防ぎたい。そこで、バランスを取っての今回の作戦となる。言うなれば、《最後の花道》という事かな？」

ミントは、作戦の意図を説明するアキオを表情を見て、少し安心する。
昨日、あんな事があったので、落ち込んでいるのはないかと心配していたからだ。
ただ、艦内の《ちとせリード》という噂は気に入らなかったが。

「それに、第3方面軍艦隊の消耗を抑えるという目的もある。今回

勝てても戦力を大きく減らせば、後の作戦がやり難くなるからな。第3方面軍にいる将兵の大半は、ジーダマイヤー大将の野望なんて関係ない普通の市民出身者だからな。少しでも、生かして帰してあげたい」

続けてレスターがもう一つの目的を発言し、それに皆が納得した様な表情を浮かべる。

「では、作戦開始まで、紋章機内にて待機だ」

「しかし、何だねぇ。アキオは、本物の王子様になっちまったんだね」

格納庫へと続く通路を歩きながら、フォルテは急にそんな事を話し始める。

「王子様ですか？」

「そうだよ。ミルフィー。今回の件で、エリオスにはケチが付けちまったからね。彼の新公爵への正規な叙任は、惑星ロームで行われる事となっていた。元々、長子継承が基本の貴族位だ。アキオにお鉢が回って来る事も十分に有り得る。それに、叙任を正式に承認するのは皇王の役割でね。ジェラール陛下が崩御した今現在、その役割は・・・・・・」

「シヴァ皇子という事ですよね。フォルテさん」

「ランファ。新しい王子様だ。アタックするかい？」

「まさか、所詮はアキオじゃないですか」

言葉では否定したが、態度までは誤魔化せない。

フォルテは女の勘で、ランファもアキオに好意を持っていると感じていた。

ただ、今までの経緯から、素直に言えないだけだと感じたのだ。

恋愛に慣れているようで本当は全く慣れていない二人は、実は、『意外とお似合いなのでは？』とフォルテは思っていた。

他にも、自分の想いを正式に本人に告げたちとせと、誰が見てもアキオの事が好きなミントと、自分の親友のモテぶりに心から感心していた。

「ミルフィーには、タクトがいるからね。でも、正直な所、ミルフィーがアキオでなくて、タクトを選んだ理由がわからないね」

今では完全に司令官としてタクトを認めているフォルテであったが、男としては、完全にアキオやレスターの方が上だと感じている事も事実であったからだ。

「私も良くわからないんです。でも、タクトさんといると楽しいし、心が落ち着くし・・・・・・。それに・・・・・・」

「それに、何だい？」

「アキオさんは、時間が掛かると思います。あの人は、矛盾の塊なんです。絶対に死にたくないから懸命に努力をする部分と、どこか自分をこの世界に不要な人間と考えていて、自分の納得する死に場

所を求めている部分とが攻めぎ合って生きているんです。だから、その矛盾を断ち切れる人こそが、彼の隣に立つのに相応しい人だと私は思うんです。私には、とても無理ですよ」

日頃は天然のミルフィーユとは思えない、冷静な分析であった。

「なるほどね」

「だから、ミントも、ちとせも、ランファも頑張らないとね」

「ミルフィー！　私を入れるんじゃない！」

「ミルフィーさんの仰る通りですわね」

「私は、決して負けません」

それから十分後、この宙域に陣取っていたエオニア艦隊との戦闘が始まり、敵は呆気ないほど簡単に撤退してしまう。

ジーダマイヤ大将は、この結果を受けて、またその尊大な自尊心を回復させる事に成功するのだが、敵のあまりに呆気ない撤退にタクト達は新たな疑念を背負い込む事となったのであった。

それと今回、唯一間違えて敵艦を沈めてしまったミルフィーユは、他の五人にティールームでケーキとお茶を奢る羽目に陥ったのであった。

（戦闘終了後、エルシオール《謁見の間》内）

「此度の件は、災難であったな。レイトン」

「どうにか、生き永らえる事に成功しました」

作戦終了後、シヴァ皇子にその詳細を伝える役割をタクトから任されたのは、アキオであった。

他に用件があるからと、事前にお付の侍女からタクトに託されていたからだ。

実は、今回のアキオの逮捕劇で一番怒りを露にしていたのは、シヴァ皇子であった。

ジーダマイヤ大将を直に呼んで逮捕を撤回させるとまで息巻いていたのだが、それを止めたのはタクトであった。

『ここで、シヴァ皇子が逮捕を取り止めよと言えば、彼は確かに無罪となりましょう。でも、それでは彼の将来に禍根を残す事となります。彼の生まれを考えれば、彼がエオニアに通じても不思議は無いと考える人は、少なくないからです。ですから、ここでハッキリと本当に彼が無罪である事を公の席で認めさせるべきです』

『タクトよ。自信はあるのか？　レイトンを絶対に無罪にする自信が』

『あります。そのために、我々は懸命に動いているのです』

タクトはそう言ってシヴァ皇子を説得し、それに納得したシヴァ

皇子は、軍事法廷終了まで一切口を出さなかったという事情が存在していた。
アキオが、簡潔に今回の作戦における敵と味方の状況を伝えると、今度はシヴァの方から話を振ってくる。

「ところで、余がそなたを呼んだ理由は理解できておろうな」

「大よそは・・・・・」

「では、命令する。新シードル公爵となって、余のために働いてくれ」

「後ろの命令は了承しますが、前の命令はご勘弁願いたい」

「アキオ！　お前！」

そこに、たまたま自分なりの戦闘詳報を報告に来たルフト中将がいて、彼は顔を真っ青にさせていた。
現時点で、一番皇王の地位に近いシヴァ皇子の命令を、自分の教え子があっさりと断ってしまったからだ。

「どうしてだ？」

「別に貴族でなくとも、皇国に仕える事は可能ですし、現に今も皇国軍軍人として公職におりますれば」

「そなたは、本当に変わっておるの。貴族になれるチャンスなのに」

シヴァ皇子は、過去に数度目撃した事があった。
それは、故ジェラール陛下に新たに貴族に任命された連中が、嬉

しそうに白き月を案内されている光景をだ。
なので、まさかアキオが、貴族への叙任命令を断るとは思わなかったのだ。

「それに、そなたはあの妖怪の長男だ。余が強制的に公爵にする事も可能だ」

「私に、父親などいません。本当に父親なら、実の息子の命を狙うはずなど無いからです。私には、母親しかいないのです」

「レイトン。そなた・・・・・・」

詳しい事情は、事前にルフト中将から受けていたとはいえ、あまりに悲しい現実であった。
自分は、実の父親であるジェラールに半ば無視されていたが、命などは決して狙われなかった。
ところが、シードル公爵家では二代続けて起こった悲劇であり、コニャックはその存在を完全に消されてから、シードル公爵家のために身を削って働くためになり、アキオは危険な任地にたらい回しにされるか、フレスコが送って来た刺客などから懸命に身を守る日々であったらしい。
皇国の成立以来、いくつかの貴族家で繰り返されて来た悲劇であったが、人伝に聞くのと実際の被害者を見るのとでは大きな違いがった。

「それと、私はこのレイトンの姓に誇りを持っています。孤児院の前で捨てられていた母が、戸籍を作る際に孤児院から与えられた便宜上の姓ですが、母亡き今、唯一の血縁者である私は、この姓を捨てるつもりはないのです」

「詮無き事を言ったな。今まで通りの働きを期待する」

「シヴァ皇子のご配慮に、感謝します」

アキオは、シヴァ皇子の前で片膝を付き、華麗に恭しく頭を下げた。

その様子は、元の容姿が整っているので、実に絵になる光景であった。

「レイトン。元の毒舌に戻れ。余はつまらん」

「はい。それに、あんな傾きかけた公爵家など、継ぐだけ時間と労力の無駄です」

シヴァ皇子がアキオを気に入っている理由の一つに、彼が他の家臣では期待できない、本音の話や、自分への批判や、耳に痛い忠言を言ってくれる事にあった。

「そんなに苦しいのか？　シードル公爵家は？」

前シードル公爵が恐ろしい勢いで資産を倍増させ、皇国貴族一の金持ち家と評判であったので、シヴァ皇子はアキオの言が信じられないでいた。

「多額の資産が中央に偏っていた結果、今回のクーデター騒ぎが収まるまでそれを取り戻す手段がございません。それと、辺境にも中々に資産を持っていますが、それを管理・運用していたコニャックが死にました。本来なら、あの若造が自分で動くか、信用出来る人物に業務を委託するべきなのでしょうが、それすらしないで自室に引き篭もっております。無責任ですな」

「なら、そなたが継げと言いたい所なのだがな」

「私も、自分の会社を持っておりますれば。今は人に任せていますが、後に自分でやらねばならない事もあります。引き受けられません」

アキオがギャラクシー宝クジの賞金で購入した惑星（ウニ）の資源開発は、実は皇国にもかなりの利益をもたらしていた。

中央に軍を進めるべく、それなりの現金が欲しい亡命政府のために相場の半額の現金で資源を売っていたからだ。

残りの半額は、免税効果のある救国国債を発行して払われていたが、その国債をアキオが手放さない限りは、亡命政府は資源を売るだけで常に現金を手に入れられる環境にあった。

アキオは貴族では無いが、ちゃんと皇国に貢献していたのだ。

勿論、もはや共同経営者と言っても過言ではない、ダルノー・ブラマンシュと相談して決めた打算ありの貢献ではあったが。

「そうか。では、そなたに無理は言えないな。それで、今回の件でのエリオス・シードル公爵への処分なのだが・・・・・」

シヴァ皇子は、始めは御家取り潰しが適当だと思っていたのだが、今では降格して伯爵にするのが妥当では無いかと考えていた。

「今回の騒動で掛かった費用の請求だけで宜しいかと」

「甘くないか？」

「あの小癪なジーダマイヤ大将が、お咎め無しですから・・・・・」

「そなたは、あのエリオスに怒っておらぬのか？」

「私人としては、殴り殺したい心境ですが、公人である自分にそれは出来ません。それに、今でさえ財政的に厳しいのです。爵位を下げなくても、彼は地獄を味わう事となる・・・・・・」

エルシールが航行中で情報が途絶しているという理由もあったが、エリオスは、自分の家の仕事を一切せずに自室に篭っていた。

多分、惑星ロームで、大幅な債務超過状態に陥ったシードル公爵家の惨状に驚く事となるであろう。

「シードル公爵家は、巨大な生き物なのです。常に誰かが世話をしなければならない。昨日までは、コニャックが一分の隙も無く行っていた様ですが、明日からはどうなりますやら・・・・・・」

「心配か？」

「ええ。公爵位を、売る羽目にならない事を祈りますれば」

「爵位は、皇王がその個人と子孫に授けた物で、売り買いできる代物ではない」

「ところが、抜け道がございますれば・・・・・・。公爵位は、無理ですけど・・・・・・」

良く下級貴族が、爵位を売る相手を養子にして後継者に指名する事は良くあった。

ただ、公爵位は皇族と血縁が無いと任じられないので、その抜け道が使えなかったのだが。

「そうか。では、余もシードル公爵家は放置する事とする。破産しても、生き残ってもな」

「それで結構だと思います」

その後二人は、色々な話をしたり、チェスの勝負で午後の時間を潰すのであった。

（同時刻、銀河中央公園の緑地内）

「全てが終わったらしい。それも、僕の愚かな行動のせいで・・・・・」

そして、もう一方の事件の当事者であるエリオスは、一人公園内の緑地に座り込んでいた。

始めは、とても嬉しかった。

なぜなら、自分には兄がいたからだ。

それも、自分が一番尊敬している軍人であった。

正直な所、亡くなった父には悪かったが、公爵家を継ぐ事には全く興味が無かった。

兄がいるとわかったのだから、彼が跡を継ぎ、自分が補佐を行いながら一枚でも多くの絵を描きたかったのだ。

だが、それは非常に甘い考えであった。
そもそも、普通の人は、余暇や睡眠や収入や娯楽を削りながら絵を続けるものなのだ。
そういう甘い部分が、自分はやはり貴族という事なのであろう。

それに、その可能性を永遠に封じてしまったのも自分だ。
自分が赤ん坊の頃から仕えていたコニャックの嘘を見抜けず、そのまま兄に吐いた取り返しの付かない暴言。
後に、詳しい事情を聞くと、悪いのは完全に自分の父であった。
あの、老けていて祖父に見えたが、家ではとても優しかった父の裏の顔。
何不自由なく育てられた、温室育ちの自分は何一つ察する事が出来なかったのだ。

そして、これから起こる事も容易に想像できた。
公爵家の事を、年老いた父とコニャックに全て任せていたのだ。
エオニアのクーデターで失った、取り戻せるかどうかもわからない資産の事を考えると頭が痛い。
暫くは、辺境の資産のみで家の財政を回していかねばならない。
シードル公爵家は、その資産も膨大であったが、その維持費も多額なのだ。
資産の運用がストップし、手持ちの現金が少なくなれば破産までさほど時間は掛からない。
中央に預けてある有価証券や現金はここには無く、多分銀行もお金を貸してくれないであろう。
破産後に買い叩き、自分で管理したり転売するだけで利益が上がるのだ。
自分達も、エオニアのクーデターで損失を被っているので、他者を食い殺しても自分が生き残ろうとするに違いない。
他の貴族達も、それに乗っかる形となるのであろう。

辣腕であった父は、多分多くの貴族の恨みを買っているであろうから・・・・・・。

それに、公式的にはお咎め無しで、あの無駄であった臨時軍事法廷で掛かった費用を払えば済む問題であったが、シードル公爵家の権威が下がったのは事実だ。

多分、その影響は、これから目に見えて現れるであろう。

現に、今日自分の部屋からここに来るまでに、自分は誰とも話をしなかった。

通路ですれ違う部下達は、一応は敬礼を返すのだが、明らかに自分とは係わり合いになりたくないと言った表情をしていた。

兄を追及する過程で、あんな醜態を見せてしまったのだ。

それも、致し方の無い事であった。

「有給なんて、一度も使った事は無いんだ。この際、パっと使うか」

副長の任務も、多分クールダラス副司令が兄に頼んでいるのであろう。

自分よりも、才能も経験もある兄の事だ。

きっと、上手くやっているに違いない。

そう考えたエリオスは、持参したスケッチブックを開き、デッサンのモデルを探し始める。

「おや？　彼女は？」

それは、ヴァニラであった。

彼女は、『生き物でも飼ってみたら？』と言うタクトの勧めでクロミエから宇宙ウサギを貰い、早速それをこの緑地内で散歩させていたのだ。

「彼女で良いかな？　モデルは」

エリオスは、久しぶりにスケッチを開始する。
モデルであるヴァニラを確認しながら、一心不乱にエンピツをスケッチブックの紙面に走らせていると、これからの事など、もうどうでも良くなって来るのだ。
多分、人は無責任だと思うであろう。
だが、それも思う人の都合でしかない。
自分が生まれ育った家が、影であんな事をしていたのだ。
それも、自分の与り知らぬ所で。

「（いい機会だ。滅んでしまえばいいんだ）」

エリオスは、そう考えていた。
四百年の歴史がある、皇国の重鎮だか何だか知らなかったが、そんな事は自分に関係無いのだ。
身一つになって、左遷されて、左遷先で人々に白い目で見られながら絵を描く。
それで良いのだ。
死んだ後に、自分の描いた絵が評価でもされれば、それは本望という物だ。
過去の偉大な絵描き達は、実生活で恵まれた人はほとんど存在しなかった。
皆、極貧の中で懸命に絵を描き残し、それが死後に評価されたのだ。
そう考えると、自分にも絵描きの才能があるのかもしれない。
そう考えながら絵を描いていると、いつの間にか宇宙ウサギを抱えたヴァニラが自分を見下ろしていた。

「アッシュ少尉か。すまないね。勝手にモデルにしてしまって」

「いえ・・・・・。あの。お上手ですね」

「一応、絵描き志望なのさ。でも、いいのかい？　僕に話かけたりして」

全く事実無根などころか、自分の父親に命を狙われていた実の兄を銃殺刑にしようとしたエリオスに話し掛ける人など、一人もいなかったからだ。

特に、フォルテ、ミント、ちとせの三人は、禄に顔すら合わせなくなっていた。

「あれは、あのコニャックという執事の方が悪かったからです」

ヴァニラは、コニャックに同情して造花を作りはしたが、彼のした事は悪い事であると認識していた。

「でもね。アッシュ少尉。コニャックは、僕や父を恨んでも仕方の無い人生を送っていたんだ」

実の弟の影として、人生の全てを犠牲にしたコニャック。

確かに、彼には莫大な額の報酬が渡されていた。

だが、彼は結婚する事も、子供を作る事も禁止されていた。

つまり、彼が貰って財産とした報酬は、全てまたシードル公爵家に戻って来るのだ。

こんなに悪辣な事は無いであろうと、エリオスは考えていた。

「それでも、アキオさんを無実の罪で告発しました」

「僕も、コニャックの嘘を信じて一緒に告発したさ。とんだ道化だ

ったけどね。そして、その報いを今受けている。僕は、実の兄ともう口を利く事すら出来なくなったんだ。多分、兄はエルシオールに来て以来、僕を内心で嫌悪していたはずだ。それでも、我慢して僕と普通に接してくれた。その頃なら、もしかしたらと今も考える。でも、もう無理なのさ・・・・・・」

ヴァニラは、《ウギウギ》と命名した宇宙ウサギを抱えたまま、エリオスの隣にちょこんと座り、エリオスの話を懸命に聞いていた。

そういえば、以前にアキオは、自分に『エリオス自身に罪は無いが、その血を嫌悪している』と言っていた事を思い出していた。

「シードル大尉が・・・「エリオスで良いよ。アッシュ少尉」」

「私も、ヴァニラでいいです」

「ありがとう。ヴァニラ」

「はい。エリオスさん」

エリオスは、初めてエルシオールの乗組員を名前で呼んでいた。

司令であるタクトは常にそうだったのだが、自分はどこか軍人として不自然だと感じて、それに逆らっていたからだ。

「間違いは、誰にでもあります。でも、間違いは生きてさえいれば直せるはずです」

「普通ならそうかもしれない。でも、この件で兄に一分の罪も無く、僕に全ての罪があるんだ。そう簡単に行かないさ。惑星ロームに着いたら、転任を願い出るつもりだ。辺境の惑星で、空き時間に絵でも描くさ・・・・・・」

全てを失ったが、自分には絵がある。
それだけが、救いであると考えるエリオスであった。

「そんな気持ちで、ちゃんとした絵が描けるとは思いません」

「えっ？」

その声はあまり大きく無かったが、ヴァニラの言葉はエリオスの心の奥に突き刺さった。
確かに、彼女の言う通りであったからだ。
公園の緑地を走るヴァニラをモデルに描いた絵は、普通の人にはわかり難かったが、今までの自分では考えられないほどに、下手で線が荒れていたからだ。

「最初から駄目だと決め付けて、現実から逃げている今のエリオスさんに、他人はおろか、自分すら納得させる絵が描けるとは思えません」

今のエリオスには、耳に痛い言葉であった。
だが、それを理由に彼女を怒鳴ろうとは思えなかった。

「すいません。子供の私が・・・・・・」

「いいんだ。ヴァニラの言っている事は事実だから。そうだね。もう少しここで頑張ってみようかな。転任さえ無ければね・・・・・・」

大貴族ゆえに、今回の件で罰は無かった。
それどころか、惑星ローム到着後には、自分は少佐へと昇進する

らしい。
先に軍本部から白き月へと向かう際の昇進は臨時で、今回は定期昇進であったからだ。
それと、今回の件でミソが付いた自分を、引き取ってくれる任地があるのかという点も疑問であった。
それればかりは、惑星ロームに到着しなければわからなかったからだ。

「ありがとう。ヴァニラ。今、僕に忠告をしてくれる人なんて、君くらいのものさ。でも、どうしてなんだい？」

「実のお兄さんが生きているんです。兄弟は、仲良くした方が良いと思ったからです。私には、そんな人は・・・・・・」

「ヴァニラ・・・・・・」

エリオスは、ヴァニラの生い立ちを思い出していた。
惑星エルダートで、身寄りのない赤ん坊だったところをシスター・バレルに拾われ、以後彼女に養われたヴァニラには、老衰で亡くなった彼女以外に肉親など一人も存在しなかった。

「わかったよ。間に合うのかは、自分でもわからない。でも、もう一度足掻いてみるよ」

「私に手伝える事があれば・・・・・・」

「そうだな。たまに、絵のモデルになってくれるかい？」

「はい」

エリオスは、その日の夕方から任務に復帰する事をレスターに願い出る。

『市民風情』と言われて、エリオスに腹は立てていたが、レスターは自分の感情と仕事を混同させる人物でもなかったので、復帰はすぐに認められる事となった。

『吐いた暴言と、それによって失った信頼は任務で返すしかない』。

エリオスは、そう考えてただ黙々と任務をこなし始めるのであった。

（翌日の午後、ティーラウンジ内）

「というわけで、あのボンボン貴族が、我々のヴァニラちゃんと！」

「それで、俺にどうしろと？」

エリオスの副官任務復帰により、再び時間の空いたアキオは、また空いた時間を優雅に楽しんでいた。

今日は、シヴァ皇子の家庭教師の任も無かったので、ティーラウンジで優雅にコーヒーを飲んでいたのだ。

するとそこに、《ヴァニラちゃん親衛隊》の幹部である中尉が、駆け込んで来ていた。

「なあ。タルト中尉よ。俺が、一秒でもあの男と関わり合いたくない事情は理解してくれるよな？」

「それは、勿論です。ですが、我々のヴァニラちゃんが！」

「奴は、ヴァニラに何かをしたのか？」

「いえ。話をしたり、絵のモデルを頼んだりです」

「それだけか・・・・・・。なら、監視の強化のみに留めるしかないな・・・・・・」

「そんな！　事務局長殿！」

いつの間にか、《ヴァニラちゃん親衛隊》の事務局長に据えられていたアキオは、色々と目の前のタルト中尉に言いたい事があったのだが、それをすると長くなってしまうので、早速に問題を解決してしまう事にする。

「勿論、ヴァニラに害をもたらそうとしたら、即刻取り押さえるんだ。その際に、多少の暴力も構わない。何しろ、それは正当防衛だからな」

「事務局長の案で行きます」

タルト中尉は、ヴァニラの監視ローテーションを作成すべく、その場を駆け足で去って行く。

「文句の一つでも言うと思ったけどね」

アキオの正面の席には、意外な人物が一緒にいた。
それは、ランファ・フランボワーズであった。
彼女は、あの事件以前も以後もアキオへの態度を一切変えなかったので、フォルテやミルフィーユと同等くらいにお茶に誘いやすい人物となっていたのだ。

「あの男は、育ちの良いボンボンだからな。そういう奴は、意外とその手の野蛮な事はしないものなのさ」

「その点は、信用しているのね」

「俺がそう思っているだけだ。俺があの男を信用？　ありえんな」

「おや。意外なツーショットだねぇ」

そこに、フォルテを始めとして、ヴァニラを除くムーンエンジェル隊の面々が集合する。

「たまたま一緒になっただけよ」

「本当ですかしら？」

ミントは、ランファに疑いの目を向ける。
実は、ランファは、徐々にアキオに魅かれ始めているのではないかと思っていたからだ。
ところが、ミントは、ランファの心の声を読む事が出来ないでいた。
実は、故郷の星で武術を習っていた彼女は、その武術の極意である《無心》を習得していたので、肝心な部分を決してミントに読ま

せなかったからだ。

「私の理想はもっと高いのよ。たかがアキオ風情にあり得ない。あり得ない」

「本人を前に、酷い女だよな」

「「・・・・・・」」

二人はいつもと全く同じであったが、ミントとちとせは、ランファを警戒する様になり、アキオの争奪戦は四つ巴の状態に突入する事となるのであった。

「あの・・・・・・。私達は、もう惑星ロームに到着したんですよね？」

「到着はしたけどね。宇宙港が一杯な上に、エオニアの間諜を防ぐために上陸手続きに時間が掛かるとかで、我々は暫く待機なのさ」

更に三日後の午前中、エリオスは空き時間を利用して銀河中央公園の緑地内でヴァニラをモデルに絵を描いていた。

「でも、戦力の大半は、第3方面軍です」

「普通は、本拠地に全艦隊集合なんて事はあり得ないのさ。だから、港の収容能力を超えてしまっている」

それに、普通は奇襲を考慮して、ほぼ全ての戦力を集めたりなどしない。

数箇所に分散して、集合宙域で待ち合わせをしてから進撃となるからだ。

勿論、そんな常識すら知らないほど、ジーダマイヤ大将は無能では無かったが、未だに権力に未練のある彼は、惑星ロームの衛星軌道上にある《衛星都市ファーゴ》で多くの貴族達を招いたダンスパーティーを執り行うと宣言していた。

シヴァ皇子も参加する事となっているダンスパーティーに参加したい貴族は多数いて、それは宇宙港を更に混雑させる原因となっていたのだ。

「ダンスパーティーか。貴族には社交界は必要な物だから、それは仕方が無いとして、時期が微妙だな」

「エリオスさんは、参加されるのですか？」

「一応、公爵家の人間としては、参加しないといけないんだろうけどね・・・・・・」

ところが、エリオスには困った問題が発生していた。

それは、パーティーに必須のパートナーの存在であった。

公爵家の人間が、一人でパーティーに参加するなど決してあり得ないので、絶対に必用な物なのだが、あれだけの不祥事を起こした自分に付き合うパートナーなど、絶対に存在しないと断言できたからだ。

「昔なら、それこそダース単位でパートナー候補がいたんだろうけどね。面倒臭いから、病気で欠席って事にしようかな？　兄ならモテモテだから、いくらでもパートナーが・・・「シードル大尉！」」

話をしていたエリオスとヴァニラが正面を向くと、そこには無表情のアキオが立っていた。

あの事件以来、二人は一言も口を利いていなかった。

エリオスは、それなりに努力をしてみたのだが、自分を見つめるアキオの全く隙の無い無表情な態度に、幾度もその意図を挫かれていたからだ。

正直、蔑みの言葉をぶつけられたり、怒鳴られた方がまだマシと思える程のアキオの無表情さであった。

「貴官は、何か勘違いをしている。君に、兄など存在しない。俺にも、弟なんて存在しない」

「・・・・・・」

「わかったかね？」

またアキオの無表情な顔に怯みそうになるエリオスであったが、ふと気が付くと、隣にいるヴァニラが自分の手を強く握り締めていた。

「（ヴァニラ。ここで怯んだり、逃げては駄目という事なのかい？　そうだね。ここで認めたり、引いたりしたら、永遠にそのままなんだよね。わかったよ）」

エリオスは、返事の代わりにヴァニラの手を少し強く握り締める。

「いいえ。あたなは、僕の兄さんです」

その一言は、アキオの表情に少し変化を与えた。

怒りで少し顔が歪んで来たのだ。

「もう一度言う。俺に、弟はいない。君にも、兄はいない」

「いいえ。あなたは、僕の兄さんです。あなたがどう思おうと勝手ですが、人の考えにケチを付けないでいただきたい。それに、裁判でウォッカ大将が提示したＤＮＡ鑑定によって・・・・・・」

次の瞬間であった。

アキオは、エリオスの胸倉を掴みあげると、今までに誰にも見せた事の無い憤怒の表情でエリオスを睨み付けていた。

「俺自身が、そう言っているんだ！」

「ですから、兄さんがどう思うおうと、僕はあなたが兄さんだと思って・・・・・・」

「否定しろ！」

「兄さん。そんな無茶を言わないでください」

「五月蝿い！」

激高したアキオは、先日と同じ様にエリオスを殴り飛ばす。

「兄さん。いくら殴られても、僕は自分の意見を曲げるつもりは無いんです。それに、この程度の暴力で僕の意見が変えるとでも？」

「後悔するなよ」

アキオの表情は、これまでに無いほど厳しい物となっていた。

そして約十分後、二人は以前にアキオとランファが勝負したトレーニングルームに来ていた。

表向きは、二人で軍隊格闘技の模擬訓練を行うため。

実際には、お互いが自分の意見のみを相手に認めさせるために、決闘を行うためであった。

「急所攻撃以外は、全て有効。いいな？」

「それで、時間はどうしますか？」

「時間？　どちらかが倒れるまでだ！」

「ちょっと！　急にどうしたのよ！」

空いた時間でトレーニングをしていたランファは、急に来て決闘を始めようとしている二人に驚いていた。

「フランボワーズ少尉。審判をお願いします」

「えっ？」

「審判なんていらん！　どちらかが倒れるまでだ！」

「ちょっと！」

事情が良く呑み込めないランファを放置して、二人の決闘はスタートする。

「ヴァニラ！　事情を話しなさいよ！」

「はい。実は・・・・・・」

ヴァニラがランファに詳細な事情を話している間に、二人は主に軍隊格闘技を使用した戦いを始めていた。

エリオスは、基本に忠実な技を多彩に繰り出し、アキオはそれに実戦での経験や、戦場でフォルテを始めとする同僚達に教わった他の技を織り交ぜた物を使う。

ほぼ同じ体格で、運動神経や動体視力がほぼ同等の二人は、始めは互角に近い戦いを行っていた。

「本当にいるのね。天才の家系って」

戦いを見学していたランファが感心するが、実は二人には決定的な差があった。

二年年長で、実戦経験豊富なアキオが、徐々にエリオスを押し始めたのだ。

少しずつ一撃を貰う間隔が狭まって行くエリオスのガードが徐々に下がって行き、遂に致命的な一撃が炸裂する。

エリオスの顎にアキオの回し蹴りが綺麗に入り、彼は倒れたまま動かなくなってしまう。

「勝負あったな」

「ううっ・・・・・・」

エリオスは、口から血の混じった唾を吐きながら、その場に突っ伏していた。

「では、もう一度聞こう。俺に、弟などいない。勿論お前に、兄など存在しない。認めるか？」

「・・・・・・・・・・」

「認めるか？」

アキオは、構えを崩さないまま、エリオスに先程と同じ質問をする。

つまり、認めなければ、次の攻撃もあるという事であった。

「認めない・・・・・・。あなたは、僕の兄さんだ・・・・・・」

残った気力を振り絞ってエリオスがそう宣言した瞬間、ランファは、今までに感じた事が無いほどの殺気をアキオから感じた。

「身の程知らずの、世間知らずのボンボンめ！　殺してやる！」

それは、フレスコ・シードル公爵の死が確認された時から始まっていた。

憎しみの対象である実の父の死は、最初はアキオに安堵感をもたらした。

だが、その後は、自分の感情を持って行く場所が無くなっていた。

先に死んだ、事情を良く知りつつもそれに加担したと思われるコ

ニャックは、その生い立ちがあまりに自分に似ていたために、恨む事が出来ないでいた。
　となれば、後は目の前にいる弟しか残っていなかった。

「俺にも、やはりあの男の血が流れているらしいな。お前は何も知らなかったし、恨むのは筋違いだとわかってもいる。でも、俺はお前を殺したくてウズウズしているんだ」

「兄さん・・・・・・」

「だが、公爵様を殺すわけにはいかないからな。あくまでも、建前はだがな！」

　日頃は冷静なアキオであったが、今彼は目の前に倒れている実の弟を見て、邪な考えが浮かんでいた。
　相手はシヴァ皇子の心象を極端に悪くした没落寸前の貴族であり、自分は一応は貴族の血を引いている、シヴァ皇子お気に入りの軍人であった。
　ならば、今ここでこの男を殺しても、構わないのではないか？
　表向きは、実戦形式での軍隊格闘戦での過失で、これは年に一度は報告される良くある事故だ。
　中には、故意に部下や上官を殺傷する者もいるらしいが、それを実証するのは非常に困難であった。
　状況的に、自分は確実に疑われるでろうが、エリオスに忠義立てして自分を告発する人物など皆無であろう。
　多分、軍での昇進はストップするであろうが、元々軍は自分が生き残るためにいたフィールドにしか過ぎず、辞めてしまっても特に問題は無かった。

「（殺してやる！）」

それは、皮肉にも、フレスコ・シードルが死の直前にエオニアに語っていた懸念そのものであった。

「最後にもう一度聞こう。お前に、兄はいない。俺にも、弟はいない。認めるか？」

「何度聞かれても一緒です。あなたは、僕の兄さんだ」

「そうか・・・・・・。本当に、これで最後だ」

アキオは、躊躇すること無くエリオスに止めの一撃を刺そうと接近を開始する。

それは、訓練などでは無く、明らかにエリオスの殺害を狙った一撃であった。

「俺の血の因縁を、今晴らす！」

「駄目です！」

ところがそこに、ある人物の邪魔が入る。

エリオスの目の前で、ヴァニラが両手を広げてアキオの攻撃を身をもって阻止したからだ。

「邪魔をするな。ヴァニラ」

「いけません！」

「これは、訓練なんだぞ。そして、勝負でもある。奴が考えを改めない以上・・・・・・「殺すんですか？」」

「・・・・・。訓練の結果、そういう事も有り得るな。だが、それは事故だ。あくまでもな。それに、なぜ止めるなら、もっと前に止めない？　始めから勝負などしなければ良い。『俺とそいつは赤の他人』。素直に認めてお互いが関わらなければ良い。君がそいつに余計な事を言うから、寝た子を起こす様な事をするから、無駄な衝突が発生した。結果、そいつは不幸な事故で死ぬかもしれない。違うかな？　ヴァニラ」

エリオスに対する殺意をヴァニラに見抜かれたアキオは、日頃からは考えられないほどの悪意に満ちた言葉をヴァニラにぶつけた。

「勝負なら、もう付いています。アキオさんは、エリオスさんを倒したにも関わらず、エリオスさんは、自分の意見を曲げませんでした。エリオスさんの勝ちです」

「そんな屁理屈を、俺が認めるとでも？」

「事実です」

「・・・・・。交渉決裂だな」

アキオは一旦後ろに下がると、今度はヴァニラには到底追えない速度でエリオスへの攻撃を再開する。

ヴァニラが阻止に入るのならば、それをかわせば良いだけの事なのだ。

そして、アキオにはそれが可能な敏捷性があった。

「駄目です！」

「アッシュ少尉。訓練不足だな（人の事は言えないけどな）」

二回目のヴァニラの阻止は、アキオが簡単なフェイントを行う事で簡単に無力化されてしまい、もはやアキオとエリオスの間には、数メートル程の距離しか残っていなかった。

「（もうすぐだ！　訓練時にたまたま急所に入っただけの事故だ！それに、もうお前に気を掛ける貴族や軍幹部なんていないんだ！何しろ俺は、《多才のレイトン》だからな！　それに、お前がこんな勝負を挑んでくるから！）」

あと一秒と掛からずに全ての決着が付く。

そう考えたアキオは狂喜の笑顔を浮かべていたが、その攻撃は残り時間コンマ一秒以下のところで呆気なく阻止されてしまう。

今まで、静かに勝負を観察していたランファが、アキオをも上回る速度で二人の間に割って入り、アキオに強烈なビンタをかましたからだ。

「なっ！」

まさか自分の渾身の一撃を阻止されるとは思わなかったアキオは、その一撃で、憑き物が落ちたかの様にいつもの表情に戻ってしまい、その場に呆然と立ち尽くしてしまう。

「何をしているのよ？」

「・・・・・・」

「何をしているのかって聞いているのよ！」

ランファの叫びに近い問いに、アキオは答える事が出来ずに無言で棒立ちになっていた。

「あんた！　自分の父親のした事が許せないんでしょう！　なら、何でその男と同じ事をしようとしているのよ！　復讐？　そんな事をしても何もならない事は、あのコニャックの件で明らかでしょう！　あんた、頭が良い癖にそんな事もわからないの！」

「それは・・・・・・」

「あんたが、そっちに落ちるのは勝手よ！　でも、それにフォルテさんやミルフィーやミントやちとせを巻き込まないで！」

「巻き込む・・・・・・」

「あんたが、シードル大尉を事故に見せかけて殺して、それをシヴァ皇子やウォッカ大将に庇って貰っても、あんたの生い立ちを知っているミルフィー達は、あんたを嫌ったりしないわよ！　でもね！　それにあの子達を巻き込まないで！　あの子達の気持ちを利用しないで！」

ランファの言葉が、アキオの心に深く突き刺さる。

確かに、彼女の言う通りであった。

それ程の事をしても、『自分なら、罪に問われない』、『ミルフィー達は俺の事情を察して、絶対に責めたりしない』、そう心の奥で考えている自分がいた事も確かであったからだ。

「それでも・・・・・・」

「何よ？」

「そいつは、痩せても枯れても公爵だ。じきに勢力を取り戻して俺を殺しに来るかも・・・・・・。そいつがそう思っていなくても、気を利かせた部下が・・・・・・・」

「アキオ。あんた・・・・・・」

ランファは、アキオが震えている事に気が付く。

実は、今回の件で追い詰められていたのはアキオの方であったのだ。

これ程の不祥事を起こしても、決して潰れる事の無いシードル公爵家。

なら潰す事をシヴァ皇子に提案すれば良かったのだろうが、エオニアの離間策に嵌る貴族を出さない様に、公人してのアキオはそれを提案できなかった。

息を吹き返したシードル公爵家が、邪魔な自分を殺しに来るかもしれない。

それらの要素と、実の兄との関係修復を切に願うエリオスとの感情的対立が、アキオの今回の暴走の原因であったのだ。

「ならば、兄さんが跡を継げばいい・・・・・・。コニャックが死ぬまで、僕はあの家の事では、常に蚊帳の外に置かれていたんだ。そもそも、僕には向いていないんだ・・・・・・」

「甘ったれた事を言わないで！」

床に這い蹲ったままのエリオスが、家の跡継ぎをアキオに譲ると宣言した瞬間、今度はエリオスがランファに怒鳴られる。

「あんた！　アキオの弟なんでしょう！　だったら、兄さんの気持

ちを理解しなさいよ！　アキオが、シードルの苗字なんて継ぎたいと本当に考えると思う？」

ランファの言う通りであった。

今まで命を狙われていた家なのだ。

そんな家の名跡など、継ぐくらいなら死んだ方がマシと目の前の兄は考えているのであろう。

「あんたが、立派な新シードル公爵になりなさい！　そうすれば、アキオは安心できる！　普通に人生を送る事ができる！　それが出来なければ、あんたの《兄さん》なんてセリフ、一生絵に描いた餅でしかないわ！」

「フランボワーズ少尉・・・・・」

立場的にも財政的にも厳しい公爵家を、自分の力で復興させる。

多分、その道は困難を極めると予想される。

それに、出来る事なら軍を辞めたくなかったし、ここからも離れたく無かった。

出世などはどうでも良い。

常に敵に追われて厳しい状況であったが、エルシオールの事は最後まで見届けたかったのだ。

「大丈夫ですか？」

「色々と済まない。ヴァニラ」

そんな事を考えながらエリオスが何とか立ち上がると、ヴァニラはさり気なくエリオスの体を支える。

「ヴァニラ。ナノマシンで治療してあげなさい」

「はい」

そして、ランファがアキオの方に視線を向けると、既にアキオはトレーニングルームの出口に向かって歩いていた。

「ちょっと！　アキオ！」

「ヴァニラ。すまなかったな。・・・・・・それと・・・・・・、シードル大尉も・・・・・・」

「アキオ。あんた・・・・・・。ねえ。一つ聞いてもいい？」

「何だ？　ランファ」

「さっきの質問は、もういいの？」

「ああ。シードル大尉がどう思おうと、俺が知った事では無いからな」

後ろ向きのままでランファの質問に答えたアキオは、そのままトレーニングルームを後にする。

「駄目でしたか・・・・・・」

兄弟の仲直りを切に願っていたヴァニラは、結局何も変わらなかった事に少し落ち込んでいた。

「あら。そうでもないわよ」

「そうでしょうか？」

「だって、少し前なら全否定だったじゃないの。でも、今は知った事では無いと言っていたわ。それにアキオも、『弟なんていない』って言わなかったわ。一歩前進したのよ」

二人の、真の関係修復には長い時間が掛かるであろう。

だが、今日の事でその第一歩が始まり、その第一歩を歩ませたのは、小さな一人の少女とその同僚の女性であった。

「フランボワーズ少尉。色々とありがとう」

「あら、エリオス。ここでのルールを忘れていない？」

「ありがとう。ランファ」

「後で何か奢りなさい。新公爵様」

こうして、ランファとエリオスは親友として新たな関係を構築する事となるのであった。

（翌日、エルシオール艦内、エリオスの私室内）

「うーーーん。これは、予想以上に厳しいな」

翌日、副官としての任務を終えたエリオスは、惑星ローム経由で入手した、シードル公爵家の大まかな財政状況報告書を見て、一人唸っていた。

中央を奪還しなければ永遠にバランスシートに組み込めない多くの資産と、常に出て行く大量の出費のおかげでシードル公爵家の財政は完全に火の車であった。

「ここ数年の、この極端な銀行預金の流失は・・・・・・。兄さんを殺すために費用か・・・・・・」

しかも、裏の世界では超一流で、多くの依頼金を必要とする彼らであったが、その成果は、アキオ自身による妨害とミルフィーユの強運に巻き込まれて完全に無駄に終わっていた。

依頼金は全額を払わなくても、半額を払って成果無しで、返還も犯罪者相手では期待できない状況だったからだ。

それに、老いというものは恐ろしいもので、一部投資や事業での赤字や、債務の焦げ付きなどの問題も発生していた。

「とにかく、当座をしのげる現金が欲しい。しかし・・・・・・」

銀行から金を借りようにも、その担保は中央にあった。

正直、辺境にある資産では、大した額を借りられないのだ。

「他に、当ては・・・・・・。あった！　コニャックの財産！」

コニャックは、有能な代わりに多額の給料を取る執事長であった。

更に、彼には一切の親族が存在せず、彼の死後その財産は全てシ

ードル公爵家に戻されるという遺言書が作成されていたのだ。
エリオスは、彼が自分の伯父である事を知る前までは、『彼の家族の一員みたいなもの』という甘っちょろい幻想を抱いていたほどであった。

「コニャックは、衣食住を屋敷の中で済ませていたし、その生活ぶりは非常に質素だった。かなりの額の財産があるはず」

非情だとは思ったが、これも生きている自分や兄のためであった。どんな手段を用いても、シードル公爵家を安定させて兄の危機感を取り除かねばならない。

「コニャックには悪いが、使わせて貰おう」

ところが数時間後、エリオスはそこで衝撃の事実を知る事となった。

(衛星都市ファーゴ、ブラマンシュ財閥ファーゴ支社内)

「いきなりお呼び立てして、申し訳ございません」

「いえ。あの会社の事は、あまり放置できませんから」

いまだに入港手続きの不備で上陸を許可されていなかったエルシ

オールの乗組員達であったが、突如アキオは、自分の会社を任せているブラマンシュ財閥側からの出向役員に呼び出しを受けていた。
そこで、アキオは数名の同行者と一緒に、衛星都市ファーゴの中にあるブラマンシュ財閥の支社へと出かけていたのだ。

「会社の経営が、思わしくないのですか？」

「ミントお嬢様。我々は、あの会社から多額の利益を受けているのです。そんな無責任な事はいたしません」

今回のクーデターで多額の損失を被っているブラマンシュ財閥にとって、アキオの会社は既に生命線の一つとも言えた。
なので、アキオをガッカリとさせる様な真似を、あのダルノー・ブラマンシュが許すはずも無かったのだ。

「確かに、経営状況は悪くないな。ところで・・・・・・」

件の役員から報告書を貰ってそれを読んでいたアキオは、そこから大小合わせて十数箇所の疑問点や、数字のおかしい部分を指摘していた。

「確かに、すぐに改めさせて新しい報告書を送ります（やはり、油断ならないお方だ。それに、何と優秀な・・・・・・。あの総帥が、ミント様の婿にと望まれるはずだ）」

「頼みます」

アキオの同行者その１であるミントは、役員の心の声を聞いて嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「実は報告書の件もあったのですが、他にも用件がございまして。それが、例のコニャック氏の顧問弁護士の方がお見えなのです」

役員が内線をある場所に繋ぐと、室内にノックの音が鳴り、そこに中年の眼鏡を掛けた男性が入室して来る。

「コニャック氏の財産の管理をしております。弁護士のノザワです」

「我が伯父の顧問弁護士が、私にどのような用件です？」

「実は、彼の死の一週間ほど前、彼は新しい遺言状を認めて私に新たに預けたのです。そして彼は死に、この遺言状の内容に沿って私は動く事となります。それで、肝心の遺言状の中身なんですが、『財産の全額をアキオ・レイトンに相続させるものとする』と書かれておりまして」

「私がですか？」

予想もしなかった出来事に、アキオはただ驚くばかりであった。

「あなたはコニャック氏の甥ですので、特におかしな点はございません。それに、遺言状自体も法的に完璧な物でして」

次に、アキオはその財産目録を見る事となるが、その中身はアキオを更に驚かせるものとなる。

「いくら有能な執事長でも、この額は異常だ！」

続けて、役員とミントも、アキオにその目録を見せて貰ったのだが、その額のあまりの大きさに何も言う事ができなかった。

「どうして、彼はこんな大金を?」

「理由は二つございます。一つは、彼が貰った給料をほとんど使わずに、様々な手段を用いて増やしていた事。もう一つは、シードル公爵家の節税対策に使われていた事です。以前の遺言書では、死後に財産はシードル公爵家にという事でしたので」

多額の税金が掛かる資産を、シードル公爵家の節税会社などを通して、コニャックの持つ複数のダミー会社の口座やコニャック自身の個人口座に移動させる。

もし、彼が死んでも、その資産はシードル公爵家に還元される。

実に巧妙な手段であった。

ところが、彼は最後の最後で、シードル公爵家に手痛いしっぺ返しを行ったらしい。

結果、大量の現金などか、エリオスでは無くアキオに相続される事となった。

「私は、あなたの存在もその財産の事も知らなかった。自分でポケットに入れても、シードル公爵家に戻して、新しい仕事を貰う事も出来たのに。どうしてです?」

「私は、プロを自覚しております。私は、コニャック氏の顧問弁護士なのです。なので、依頼人でも無いシードル公爵家に媚を売るつもりはございません」

あまりあの一族に関連する人物を信用していないアキオは、かなり失礼な質問をしたのだが、このノザワという弁護士は特に気にもせずアキオの質問に答えていた。

「それで、相続なされますか？」

「断る理由は無いですね。委任状を書くので、手続きの方をお願いします。それと、今の現状が現状です。私の資産を管理する顧問弁護士に就任していただきたい。それと、ご存知でしょうが・・・・・」

「あの会社の監査役ですか？」

「はい」

アキオは、このノザワという弁護士をアキオの会社の監査役に据える事とした。

これから中央奪還作戦に赴く自分にあの会社の面倒を見ている時間は無かったので、ノザワを役員連中の重石として残して行く事にしたのだ。

自分は、ダルノー・ブラマンシュと個人的に親しかったが、仕事の話となればこれは別であったからだ。

「後で、細かい契約条項を送ります。それと、与えられた職責に伴う多少の役得には目を瞑ります。ですが、度を過ぎますと・・・・・」

「その辺の匙加減は、総帥の下で学んでおりますのでおまかせを（さすがは、あのシードル公爵の息子なだけはあるのだな）」

『人は、ただ清いだけでは生きて行けない』。

その部分を若いながらも心得ているアキオに、役員はただ感心するばかりであった。

「お待たせ」

「いえ。それほどの時間は、経っていませんから」

「遅いわよ。買い物の時間が無くなっちゃうじゃないのよ」

ミントと一緒にブラマンシュ財閥ファーゴ支社を出たアキオは、自分達を待っていたちとせとランファと合流していた。

今回、アキオに付いて来たのはこの三人であった。

ミントは、アキオが会う自分の会社の役員が、ブラマンシュ財閥から出向して来た人物だったので、居た方が有利と自分で考えたため、ちとせは珍しく自分で立候補したため、ランファは先のエリオスとの件でのお礼を兼ねてという事になっていた。

「オマケで付いて来た癖に、一番偉そうなのな」

「とにかく、今日はアキオの驕りね」

「あまり高いのは無しだぞ」

「ケチ臭い男ね」

「ケチで悪かったな！」

買い物自体はそれほど高い物は買わなかったが、数が膨大であったし、途中の休憩でのお茶代や食事代も考慮するとかなりの高額になっていたが、アキオは特に文句も言わずスマートにカードでお金を払っていた。

「（やっぱり、こいつって王子様よね。元々、見た目は最高だし、ちょっと口は悪いけど、優しいし・・・・・・）」

ランファは買い物の間中、アキオの両脇から離れないミントとちとせの気持ちが痛いほど理解できていた。

アキオが店に入ると、若い女性店員が必ずすぐに駆け寄って来るからだ。

中には、自分の連絡先を渡そうとする猛者もいて、それが二人を余計に警戒させているらしい。

「だからって・・・・・・。ここは、無いと思うけど・・・・・・」

結果、昼食前の最後の買い物先は、男が足をあまり踏み入れたく無いランジェリーショップとなっていた。

「恥ずかしいので、待っていてくださいね」

「ミントさんと同じ意見です」

「じゃあ、なぜに俺を付き合わせる？」

アキオの疑問に答えてくれる人は存在せず、仕方無しに付き合わされた不幸な男専門の待機スペースに移動すると、そこには意外な人物が所在無さげに椅子に座っていた。

第2方面軍通商護衛艦隊司令、ウォルコット中将であった。

「ウォルコット司令。何をしているんですか？」

「やあ。レイトンさん。先日は、色々と大変でしたな。多分、レイトンさんと同じだと思います。ただの付き添いですな」

「誰のです？」

「彼氏いない暦を更新中のフォルテさんです」

本人に聞かれたら殺されそうなセリフを、ウォルコット司令は平気な顔で言っていた。

「フォルテも、こっちに来ていたのか」

上陸手続きに時間が掛かり過ぎてストレスを感じたフォルテは、先に手続きを終了させてファーゴ内で休暇を取っていたウォルコット中将を呼び出して、彼に買い物の荷物持ちをさせているらしい。

「我が親友ながら、ドSですね」

「あなたは、まだ若いですから恋人の同伴という線で周りは大目に見てくれますけど、私は非常に辛いですね」

五十歳を超えた男性が、若い女性向けのランジェリーショップの待ち合いスペースに座らされているという事実は、かなり残酷であると言えた。

「でも、フォルテも、こんな場所で下着なんて買うんですね」

「一応！　若い女性ですから」

一応という部分がかなり誇張されていたが、確かに彼女は二十二歳の若い女性であった。

「下着の色は、黒とか紫とかですかね？」

「その線は、濃厚ですね。それと、ガーターベルトとかが死ぬほど似合いそうです」

「確かに、似合いそうだ。逆に、ちとせは白が似合いそうです」

「いいですよね。ちとせさんを見ていますと、実に初々しくて。フォルテさんにも、あんな時代が・・・・・・。無かったですね・・・・・」

ウォルコット中将は、過去のフォルテの事を思い出していたが、あまりそういう部分は彼女には存在しなかったらしい。

すぐに思い出す事を止めていた。

「フォルテは、スタイル抜群の美女ですけど、精神にオッさんが宿っていますから」

「それは、非常に的確な表現ですな」

「ほう。随分と盛り上がっている様だね。お二人さん」

「「フォルテ・・・・・・さん？」」

二人の目の前には、買い物を終えたフォルテが阿修羅の如き形相

で仁王立ちしていた。

「ふーん。テイクアウトも可能なのな。ヴァニラに何か買って帰ろうかな？」

四人は沢山の店を回って買い物を楽しんでから、予約していたレストランで遅めの昼食を取っていた。

ちなみに、先程のフォルテに対する失礼の負債は、後で払わされる事となっていた。

ウォルコット中将の方は、アキオ達の近くの席でフォルテに食事と高いワインを奢っていて、突如降って沸いた高額の出費に血の涙を流していた。

「ミルフィーにはいいの？」

「ミルフィーは、タクトに嬉しそうにご飯を作っているから、食い物の土産はかえって失礼だ。何か別の物を探す」

「あんた。マメよねぇ・・・・・・」

ランファは、アキオのマメさに思わず感心してしまう。

多分、そういう部分も女性にモテる要素の一つなのであろうが、肝心のアキオが恋愛をする気がまだ無い事が、相手の女性にとっての不幸であった。

「それで、アキオさんは、明後日のダンスパーティーには参加なさいますの？」

ミントは、エリオスがパートナー不在で参加を諦めているダンスパーティーへの参加の有無をアキオに尋ねる。

「参加はするが、俺はシヴァ皇子の護衛役だからな」

「では、パートナーの方は？」

「厳密に言うと、シヴァ皇子？」

「そうなのですか。残念ですね。私達は、参加命令が出ているので、軍の経費でドレスを購入する事になっているのですが・・・・・・」

アキオのパートナーになれない。
ちとせは残念ではあったが、少し安心もしていた。
もし、ミントがパートナーに選ばれてしまったら？
それが、一番の不安だったのだ。
それに、今はアキオの心が落ち着くまで、気長に彼を見守れば良いとも考えていた。

「ダンスのお誘いは受けて貰えるのですか？」

「それは、勿論」

「私の誘いも、受けていただけますわよね？」

「若いレディーの誘いは断りません」

アキオは、ちとせとミントのダンスの誘いに了承の返事をする。

「それで、ランファも誘った方が良いの？」

「華麗な私のダンスパートナーなんて、アキオ以外に腐るほどいるわよ」

「へいへい。それは、ごもっともで」

「（そこで引かないで、私を誘いなさいよ！）」

昼食後のランファは、エルシオールに戻るまで少し不機嫌であった。

「クールダラス副司令。一隻の連絡艇が、エルシオールへの着艦許可を求めています」

同時刻、エルシオールのブリッジで当直任務に就いていたレスターは、アルモから上の内容の報告を受けていた。

「誰かの許可なり、許可証なりは？」

「それが、ウォッカ大将の書簡を預かっているそうです」

軍事裁判の翌日には、中央奪還作戦の主力艦隊の準備を行うために第2方面へと帰還したウォッカ大将であったので、その人物がそんな物を持っている事がレスターには驚きであった。

「それで、誰なんだ？　その人物は？」

「元シードル公爵家副執事長のベルツェルと名乗っています」

「またあの家絡みか・・・・・・」

レスターは、そのベルツェルなる人物がどんな人物か知らなかったが、せっかく沈静化したシードル公爵家関連での事で、また騒ぎを起こして欲しく無かった。

現に昨日も、アキオがエリオスを本気で殺そうとする不祥事が発生したばかりだ。

事件は公にはならなかったが、その件を聞いたレスターは非公式ながらアキオに注意せざるを得なかった。

特にアキオに含む部分の無くなっていたレスターであったが、もしエリオスが死ねば、大変な不祥事に発展した可能性があったからだ。

冷静になったアキオは、素直にレスターに謝罪したが、あの家の事では、合理的で自己保身能力に長けたアキオがそこまで暴走してしまうのだ。

正直、彼は招きたくない客人であった。

「繋いでくれ。アルモ」

「はい。通信を繋ぎます」

メンスクリーンには、ロマンスグレーのいかにも執事といった趣

の五十歳代に見える男性が映し出される。

「元シードル公爵家副執事長のベルツェルと申します」

「元執事殿が、どの様な用件でしょう？」

「フレスコ・シードル公爵が鬼籍に入り、元上司のコニャックが復讐に身を焦がして自滅いたしました。私はウォッカ大将の依頼を受け、シードル公爵家を建て直す役割を仰せつかりました」

「なぜエルシオールに直接来る？　シードル大尉に会うのであれば、明日の彼の上陸後に会えばいいはずだ。それでなくても、あの家のせいでエルシオールは多大な迷惑を被っている。ウォッカ大将の書簡が無ければ、早急に断りの返事を入れていたはずだ」

今までの経緯から、レスターはシードル公爵家の事を『何様のつもりなんだ！』と感じるまでになっていた。

皇国の重鎮だか、天才の家系だか知らないが、これだけの犯罪や不祥事を犯して取り潰されない事に腹を立てていたのだ。

「耳に痛い言葉にございます。ですが、ウォッカ大将は早急に公爵家を立て直し、シヴァ皇子を支えて欲しいとの事でして・・・・・」

実はウォッカ大将も、シードル公爵家の事は見捨てるつもりでいたらしい。

ところが、ルフト中将が白き月を脱出する際にシャトヤーンから言われていた事を聞き、考えを変えていたのだ。

「邪魔はしないが、レイトンを刺激しないでくれ。俺から言える事

はそれだけだ。それに、我々の任務の邪魔は・・・・・・」

「その辺は、ご心配なく。私も皇国軍予備役少将ですので、軍務の事はそれなりに理解しているつもりです」

「（おいおい。あの家の執事ってのは、どうなっているんだ？）」

レスターは新たなるイレギュラーの発生に、少し胃の痛くなる思いであった。

第十一話（後書き）

次の更新は遅くなりそうです。

第十二話

「お坊ちゃま！　いえ、新しい旦那様でしたな」

「ベルツェルじゃないか！　どうしてここに？」

「シードル公爵家滅亡の危機にございますれば、一度は解雇されたこの身なれど、居ても立ってもいられなくなりました。そこに丁度、ウォッカ大将からの依頼を受けまして・・・・・・」

好々爺した外見からは想像できないほどの策略家であるウォッカ大将は、ルフト中将がシャトヤーンからエリオスの事を頼まれていたという事情もあったが、ジーダマイヤ大将が見捨てたシードル公爵家の再建に協力し、それをシヴァ皇子の権力基盤の強化に利用しようと考えていた。

「いや、僕の方こそすまなかった。父とコニャックに対立をして辞めたという事情のみ知らされていたが、その理由は、兄さんの事だったんだね」

「はい。コニャックを追求したところ、アキオ様を暗殺する費用だとかで、無駄に不透明な支出を繰り返しておりましたからな。それに、反対意見を述べましたところ、逆に亡くなった旦那様に、『出て行け！』と言われてしまいました・・・・・・」

「父も、老いて衰えていたんだね・・・・・・」

本来、それだけの支出をして、辺境にいる軍人一人殺せないはずもない。

軍内の反フレスコ派の活動もあったが、コニャックがわざと費用ばかり浪費して暗殺を成功させないように、色々とコントロールしていたのであろう。

老いた父は、かなり前からコニャックの掌で踊っていたのだ。

「でも、正直なところ、ベルツェルが戻って来てくれるとは思わなかったよ。自分で言うのも何だけど、今のシードル公爵家は沈む直前の豪華客船だからね。排水量が多いゆえに、沈むのも早いはずだ」

「ですが、建て直しに成功すれば、また豪華客船です」

「成功する保証もない」

「旦那様が信じないでどうなされます？　それに、私は絶対に諦めませんぞ」

「そうだね。これは、僕が絶対に成功させなければならないんだ。兄さんに対して背負った、多大な負債を返すためにも・・・・・」

自分が無知で不甲斐無いために、自分は兄に殺意を抱かれるまでに嫌われ、家も破産寸前になったのだ。

これは、一生を掛けて行う、自分の大切な仕事であった。

「世の人々は、アキオ様こそ新シードル公爵に相応しいと考えている方が多いみたいですな」

「僕が、一番にそう思っているよ。でも、兄さんは・・・・・」

「世間の人がどう考えようと、私はエリオス様こそが、新シードル公爵に相応しいと考えております。エリオス様は、私が亡くなった

旦那様に屋敷を追い出された直後に、まとまったお金を退職金として送って下さいました」

根が優しいエリオスは、一度自分の父に逆らっただけで屋敷を解雇されたヴェルツェルに、退職金として自分の貯金を全て送っていた。

『父もじきに考え直してくれると思うし、それが無理なら、僕の代になったら是非に戻って来て欲しい』

ベルツェルはその時の恩を忘れず、エリオスに仕える事を決意していたのだ。

「このベルツェル。あの時の恩は忘れておりません。残りの人生は、シードル公爵家の建て直しと、自分の後継者を育てる事に費やしたいと考えております」

コニャックは有能な人物であったが、一つの欠点があった。

それは極端な秘密主義者で、自分の後進を育てる事を一切しなかった事だ。

別に、コニャックにその能力が無かったわけではない。

シードル公爵家の滅亡を切に願う彼が、家を存続させるための行為を行うはずも無く、それに誰も気が付かなかっただけの事なのだ。

「ありがとう。ベルツェル。本当に嬉しいよ」

全てに見放されたと思った自分であったが、ヴァニラやベルツェルの様に自分を見捨てずに支えてくれる人もいる。

エリオスは、そんな人が一人でもいる限り、全力で努力して行こうと決意する。

「それで、自分も色々とここに来る前に動いてみましたが、当座の運営資金が極端に不足しています」

「この帳簿に嘘は無いんだね」

コニャック作成の裏帳簿であったが、これが表沙汰になる頃には自分はこの世に居ない事を悟っていたかのような、バカ正直なまでのシードル公爵家滅亡報告書と呼ぶに相応しい一品であった。

「ウォッカ大将は、貸してくれないだろうね？」

「はい。大規模な艦隊動員を準備しておりますれば」

ウォッカ大将は、そこまで甘い人物ではない。

支援は、あくまでも精神的な部分と、ベルツェルのような人材的な部分に留まっていた。

艦隊を動かせば、それこそ毎秒単位でお金が消えて行くのだ。

自分になど1ギャラとて貸してくれるはずはなかった。

「それで駄目なら、自分を支援する有能な下級貴族に、シードル公爵家の遺産が切り分けられるだけです。どっちに転んでも、あの老人に不利益はございません」

「だろうね。兄さんは彼のお気に入りだけど、僕は嫌われているから・・・・・・」

自分と同じく市井の生まれで、身一つで幾度もの死の危険を潜り抜けて輝いたアキオだからこそ、ウォッカ大将は多大の信を置いているのだ。

ただ家柄だけの自分とは違うと、エリオスは考えていた。

「そう悲観なされない事です。アキオ様もエリオス様も、才能にさほどの違いはございませんから。二年間の経験の違い。私は、そう考えております。資金の方は、私に策がございます。ですが、エリオス様が直接動くと、かえって不利です。ここは、このベルツェルめにお任せを」

「わかった。ベルツェル任せるよ」

「それで、次の懸案事項でございます。おい。入りなさい」

「失礼いたします」

ベルツェルの合図で、エリオスの部屋にメイド服を着た妙齢の美女が入ってくる。

「妻のカマラです」

「確か、十年ほど前に会った記憶があるんだけど・・・・・・。あの。おいつくでしたっけ？　カマラさんは」

その頃に、確かベルツェルの五歳下だと聞いたはずであったのだが、その頃からまるで見た目が変わっていなかった。

「エリオス様。お久しぶりでございますが、あまり女性の年齢を聞くのは宜しくないと思いますが・・・・・・」

「すいません。カマラさん。あなたがあまりに変わらないので・・・・・。でも、ベルツェル。今のシードル家に、新しいメイドを雇

う金など・・・・・・」

「妻は、子供達が独立し、いささか時間を持て余していましたので連れて参りました。給金は、シードル公爵家の建て直しに成功してからで結構でございます」

「お金の問題もあるけど、軍人である僕にメイドなど不要だ。屋敷に戻ってからなら必要かもしれないけど・・・・・・」

ベルツェルだけで、レスターの機嫌はかなり悪かったのだ。

それにメイドがいる事がわかったら、更に彼の機嫌は急降下するであろう。

「我々は、ウォッカ大将に臨時の軍属に任じられておりますれば、クールダラス副司令も文句は言えますまい。それに、エリオス様。今のあなたに必要な事は、開き直る事です。あなたは良くも悪くも公爵で、世間はそのようにあなた様を見ます。ならば、公爵に相応しい毅然とした態度を取ってください。傲慢になれとは申しませんが、弱気は禁物でございます」

海兵隊で師団を率いていた頃に、ベルツェルは部下達に一度も弱気を見せた事は無かった。

不思議なもので、トップが弱気を見せるとすぐにそれが部下に伝染してしまい、時に重大な失敗を招く事があったからだ。

なのでベルツェルは、エリオスに、してしまった事をいつまでも悔やまないようにと進言していた。

「それは、わかったけど。もう一つの懸念って何だい？　ベルツェル」

エリオスは、もう一つの懸念の内容をベルツェルに尋ねる。

「エリオス様。明後日のダンスパーティーのパートナーはお決まりでしょうか？」

「いるわけがない。欠席しようかと思って・・・・・・」

「それは、絶対にいけません！」

「ベルツェル。本当に、パートナーがいないんだよ」

以前には、いくつかの貴族の家の令嬢を婚約者候補にしていたエリオスであったが、エオニアの反乱以降半数が連絡不能となり、残りの半数も、先の事件のせいで完全に無視されている状態であった。貴族に限らず、人とはそういう生き物であった。

「パートナー不在では、かえって恥をかく。今回は、諦めよう。ベルツェル」

「いいえ。今回こそが重要なのです。ここで、あなたが威風堂々とパーティー出席し、将来の婚約者候補を高価なドレスとアクセサリーで綺麗に着飾る事が、シードル公爵家の復活を世に示す最大の手段なるのです。ここで欠席などしたら、本当に沈没してしまいますぞ」

一般庶民から見れば、実に無駄に見える事であったが、こういった無駄も社交界では必要な事であった。

「艦内にいないのですか？　独身の女性の方は」

「祖父・父と続いた悪行のツケだよ。惨めに捨てられる可能性が大なのに、僕に近付く道理が無い」

コニャック・アキオの母親と、ここ二代のシードル公爵家当主は、身分が低いだけで、若い女性にあれほどの酷い仕打ちを行ったのだ。

今のエルシオール艦内で、自分にちゃんと話しかけてくれる女性は、ランファとヴァニラくらいであった。

「それなりに話すお方とかは・・・・・・」

「ランファは・・・・・・。駄目だろうな・・・・・・」

エリオスは、日頃は口喧嘩ばかりしているが、実はランファが自分の兄をかなり気にしている事を知っていた。

「本当に、いませんので？」

「うーーーん（後は、ヴァニラなんだが・・・・・・）」

正直エリオスは、あの優しい純粋な少女をあまりこちらの世界に引きずり込みたく無かった。

ところが、これが運命なのであろうか？

再びエリオスの部屋のドアがノックされ、そこにヴァニラが入って来たのだ。

「エリオスさん。約束の時間です」

「（そういえば、そうだった・・・・・・）」

実は、絵のモデルをヴァニラに頼んでいたのだが、予定外の来客

のせいで、その事をすっかりと忘れていたのだ。

「おお！　実に可愛らしいお嬢様ではありませんか」

「いやね。彼女は・・・・・・」

「始めまして。私、エリオス様の執事を務めております。ベルツェルと申します。そして、隣が妻のカマラでございます」

「ヴァニラ・アッシュ少尉です」

「お若いのに、少尉の重責ご苦労様です」

「いえ・・・・・・」

「また、それをひけらかさない、奥ゆかしい所が女性の鏡と申しましょうか・・・・・・」

いきなりの執事とメイドの登場に驚いているヴァニラを、ベルツェルとカマラは、まるで新しい獲物を発見したかのような笑顔で話しかけるのであった。

「始めまして。アキオ様。シードル公爵家執事長のベルツェルです」

エルシオールのティールームの空気は、一瞬にして氷付いた。
エリオスとの打ち合わせを行ったベルツェルは、その後はカマラを伴って艦内中の人間に挨拶を行っていたのだが、最後に衛星都市ファーゴから戻って来ていたアキオに挨拶をした瞬間、彼は愛用の銃をホルスターから取り出し、ベルツェルの前で露骨にエネルギーの残量を調べ始めたからだ。
ファーゴで購入したデザートやお土産を開いての楽しいお茶会が、一瞬にして台無しとなった瞬間であった。

「アキオ・レイトン准将だ。おっと、これ以上近寄らないでくれ」

「アキオ様。理由をお聞かせ願いたい」

「あんたの接近をこれ以上許すと、俺はあんたに首を引きちぎられるかもしれないからだ」

「どうして、そうお考えです？」

「あんたの身のこなしは、明らかにプロのそれだからだ。それに、フォルテとランファがあんたを警戒している。あんた。軍人上がりだな？」

「さすがでございますな。アキオ様」

ベルツェルは、アキオを若い頃のフレスコ・シードルに匹敵するかそれ以上の人物だと値踏みしていた。

「アキオ。その男。海兵上がりだ。間違い無く」

「懐に入れたら、その瞬間に俺の命日だな」

フォルテは、ベルツェルの正体を知っていた。

市民出身ながら、僅か三十八歳で少将の地位にまで登りつめて、海兵隊第一師団長に任命された、その世界ではかなりの有名人であったからだ。

トランスバール皇国における海兵隊の役割は、まだ人類が地球にのみ生存していた頃と全く同じであった。

厳しい選考と訓練を潜り抜けた精鋭達が、一番初めに敵の抵抗を粉砕して橋頭堡を確保し、本隊の到着まで拠点を確保する。

それに加えて、皇国のそれは、対反政府組織・対ゲリラ用の訓練まで受けていたので、そこに元師団長ともなれば、あのランファですら警戒するほどの、究極の戦闘マシーンでもあったのだ。

もっとも、ベルツェルの出世が早かったのには、ちゃんと原因があった。

血生臭い戦闘部隊の師団長などを務める貴族が、ほとんど存在しなかったからだ。

それに、無能な艦隊司令なら、軍艦のブリッジの提督席で重石になっていればいいし、事務方も、革張りの高級な椅子で踏ん反り返っていても、有能な部下に任せれば問題はない。

ところが、銃弾飛び交う最前線で使えない海兵隊師団長など、部隊の全滅を招く恐れがあったので、この手の部隊の幹部は、市民出身者が大半を占めていたのだ。

「ベルツェル予備役少将閣下さん。あんた。あの家の執事をしていたのか」

「左様にございます。これからもエリオス様共々宜しくお願いしたします」

元海兵とは思えない柔らかい物腰のベルツェルは、ムーンエンジェル隊の面々に丁寧に頭を下げていた。

「それで、アキオ様」

「あんたに、様付けで呼ばれる覚えは無い」

「あなた様は、爵位こそエリオス様に譲られましたが、正統なるシードル公爵家の一族なれば・・・・・・」

「それで、金が無いから、俺を夜中に縊り殺して財産を奪う算段か？」

今や、巨大な資源惑星とその周辺企業体のオーナーであり、更に巨額のコニャックの財産を相続したアキオは、最盛期のシードル公爵家以上の資産家となっていた。

もしアキオが謎の死を遂げると、その財産はエリオスの元に行く事となり、それによってシードル公爵家は簡単に復活に成功する事となるからだ。

「そんな無駄な事はいたしません。多分、あなたは、新しい遺言状を認めているはずで、あなたを殺しても、私に殺人の前科が付くだけとなるでしょうから。それに、私を派遣したのはウォッカ大将です。もしそんな事をすれば、本当にシードル公爵家は終わりです（フレスコ様。あなたや私を含め、公爵家の大人達は本当に罪深い事をしました。これほど利発なお方が、我々に関しては猜疑心の鬼となるのです。我々がこのお方に信用されるには、どれほどの努力が必要な事か・・・・・・）」

「まあいいさ。俺には、関係の無い事だからな。俺に後ろと利き腕

の方に立たないでさえいてくれれば、それで良い。それと、任務の邪魔も勘弁だな」

「かしこまりました。それと、少し大切なお話がございまして・・・・」

お願いがあると言って、丁寧に頭を下げるベルツェルを、アキオは厄介な奴が来たと思いながら見つめるのであった。

「なあ。レイトン。どうして、俺の部屋でそんな重要な話を？」

「俺の部屋は、客人を迎え入れる環境に無いからな」

「確かにな・・・・・・」

あの部屋の大部分を占める、業務用ワインセラーを人に見せるわけもいかなかったので、アキオとベルツェルとの話し合いは、タクトの私室もある司令官室で行われる事となった。

「それに、二人きりになって、殺されても嫌だし」

「ベルツェルさんって、そんなに強いのか？」

「タクトなら、一秒とかからずにこの世とオサラバだな」

「そうは見えないけどね」

武術や格闘技などの戦闘技能がゼロに近いタクトには、長身ではあるが細身のベルツェルは、あまり強そうには見えなかった。

ところが、それこそが大きな間違いであった。

見た目が筋骨隆々の大男など、実はその鎧の様な筋肉が俊敏性を落とし、実際には大した事が無かったりするのだ。

ボディービルダーが、意外と見かけ倒しなのと同じ事であった。

「始めまして。マイヤーズ司令官殿。あなた様のご活躍の噂はかねがね」

「俺は、お飾り司令官ですからね。レスターやレイトンがいないと、駄目司令官なんですよ」

ベルツェルは、タクトの事を決して無能な男だとは思わず、逆にかなり有能な人物だと感じていた。

切れ者だが癖のあるレスター・クールダラスとアキオ・レイトンを一緒に部下にして、ちゃんと使いこなしていたからだ。

多分、自分では二人を完璧に使いこなせないであろうと、ベルツェルは思っていた。

「それで、用件とは？」

「多少の資金を都合していただきたいのです」

「断る」

「即答でございますな」

「ああ。即答だ。理由もちゃんとあるぞ。一つに、返って来る可能性の低い金を貸すほど、俺はお人好しじゃない。それに、俺が喜んで金を借すほど、あんた達に世話になったわけでも無い。寧ろ、こちらが賠償金を貰いたいくらいだ」

「これは、なかなかにお厳しい。法定利息はお支払いいたしますし、担保の方も準備いたしますが・・・・・・」

ベルツェルは、アキオの返答に特に怒るでなく、笑顔を浮かべながら交渉を続けていた。

「あの程度の担保で、借りられる金額はたかが知れているな。それで、いくら借りたいんだ？」

ベルツェルは、その金額を書いた紙をアキオに見せるが、アキオはお話にならないと言った表情をしながら、首を横に振っていた。

「ギリギリ勉強して、三分の一が限界だな」

「中央の資産も、担保として差し出しますが・・・・・・」

「まだ戻って来ていない資産を担保に？　正気か？」

「奪還作戦が、間近に迫っておりますれば・・・・・・」

「ベルツェルさん。あんたは、市民出身で四十歳前に将官に出世した逸材なんだろう？　だったら、立てた作戦が成功する事を前提に動く事が、どれだけ危険なのか理解しているよな？」

軍の士官は、常に最悪の事態を想定して動き、その最悪を少しでも小さくする事に全力を尽くし、次の機会を失う事が無い様に動くべし。
九十九敗しても、次の百戦目を勝利を得られる様に動くべし。
これは、士官学校校長時代にウォッカ大将が新入生達に述べた訓辞であった。

「ふーーーむ。困りましたな。他に、担保がございません」

「さっきの金額で我慢する事だね」

「それですと、焼け石に水となってしまいます。それならば、借りない方がマシなのです」

軍事の事だけでなく、経済や財政にも詳しいベルツェルは、辺境の残り少ない資産を担保に小額の金を借りただけでは、シードル公爵家の寿命を僅かに伸ばすだけの効果しかない事を、他の誰よりも理解していたのだ。

「一つ俺の納得する担保ならあるな」

「それは、どのような物でしょうか？」

「ベルツェルさんは、絶対に認めないと思うけどね」

「是非に聞かせていただきたいものですな」

「それはだね・・・・・・」

それから約三十分後、二人は正式に、資金の借り入れ契約書にサ

インをし、シードル公爵家は取りあえずの破産を間逃れたのであった。

（翌日、衛星都市ファーゴ、ショッピングモール内）

「アキオさん。それで、担保って何なんです？」

翌日、アキオとタクトは、ヴァニラを除くムーンエンジェル隊の面々とパーティーで着用するドレスを購入するために、とあるブティックの店内にいた。

オーソドックスなドレスに身を包んだミルフィーユが、昨日の事を聞いて来たので、アキオはそれを正直に話していた。

「シードル大尉の体」

「えっ！　それって？」

「内臓・網膜・皮膚・骨・血液など使える部分は全部。ミルフィー。知っているか？　金を切るとな、そこから赤い液体が流れるんだぜ」

「冗談・・・・・ですよね？」

「本気だよ。俺は」

各々が、それぞれにドレスを試着している横で、アキオは浪速の商人の様な顔をしながら、ミルフィーユの質問に答えていた。

「つまり、そのくらい本気でやれという事ですわ。アキオさん。似合っていますか？」

店員の勧めたドレスを試着したミントが、アキオの前でクルリと回転して全身を見せる。

「いいね。綺麗だ」

「ありがとうございます」

ミントが軽く頬を染めたのを見て、フォルテは自分の親友の凄さを再確認していた。

ミントは、テレパス能力で人の心が読めてしまうので、あまり人と本音で接したり、話をしたりという事が無く、その外見や年齢以上に大人っぽい態度を取る事が多かった。

それが、アキオの前だけでは、普通の恋する少女になってしまうのだ。

「ちとせも、似合っているな。綺麗だ」

ちとせも、ミントと競う様にアキオにドレス姿を見せていた。

あの例の告白以降、ちとせは特に何かをしたりはしていなかった。

ただ、見かけとは違って心に深い闇を抱えるアキオを気長に見守り、最後に自分を選んで貰えればよい。

自分の気持ちを伝えた以上、焦りは禁物であろう。

そう考えていたのだ。

それに、ちとせもミントも、自分がライバルに負けるとは思っていなかった。
むしろ唯一の懸念は、日頃は口喧嘩ばかりだが、最近普通に友人付き合いをしているランファの方であった。

「パーティーでは、髪留めを替えるつもりなんです」

「そうか・・・・・・」

フォルテは、ちとせの策士ぶりに素直に感心していた。
『伊達に、士官学校は出ていない』と素直に感心していたのだ。
早くに母を亡くしたアキオは、実は少しマザコン気味であり、その母は黒い髪を腰まで伸ばしていた。
なので、アキオはちとせの髪に少し拘っていた。
でなければ、ちとせの士官学校卒業のお祝いに、リボンなど送るはずは無いのだから。

「ところで、フォルテさんは、パートナー候補がいなくなってしまって残念でしたね」

「ランファ。それは、ウォルコット中将の事かい？　別に、私達はそういう関係じゃ無いんだけどね」

実は、先のエオニア艦隊撃退後に、ウォッカ大将、ジンロ中将、ウォルコット中将の三人は、ルフト中将指揮下の巡洋艦艦隊を除く全ての戦力と共に、第2方面へと一時帰還していた。
後日の中央奪還作戦に備えて、全戦力を動員するためである。

「じゃあ、パートナー不在で参加ですか」

「ランファ。人の事を言えるのかい？」

「私は、世の多くのイケメンのために、フリーを貫くんですよ」

「物は言い様だな・・・・・・」

「うっさいわね！　アキオは！」

その後、本命のドレスを選ぶという事で、アキオとタクトは店の表に出されてしまう。

「そういえば、ヴァニラはここにいないな？」

「ベルツェルさ」

「あのエリオスの執事のか？」

アキオの返答に、タクトが驚きの声をあげる。

「ヴァニラに必死に頭を下げて、シードル大尉のパートナーになって貰ったらしい。それで、新公爵様のパートナーに相応しいドレスを選ぶために、嫁さんのメイドと一緒に買い物中だってさ」

結局、ベルツェルの必死のお願いを、ヴァニラは断れなかったらしい。

いくつかの仕事を抱えて色々と忙しいエリオスに代わって、ベルツェルとカマラは、ヴァニラを連れて買い物に出かけていた。

「あれ？　でも、この店では会わなかったな」

「プライドだけは一人前の大貴族様は、こんな庶民向けのお店には行かないそうだ。いきつけの、超ＶＩＰ御用達のお店があるらしい」

「お前から金を借りているのに、暢気なものだな」

「お飾りの大貴族様には、必要経費なのさ。お前も伯爵家の息子なんだから、知っているだろうに・・・・・。まあ。あれだな。ヴァニラも、割の良いバイトだと思えばいい」

タクトは、目の前の友人を複雑な心境で見つめていた。

アキオは頭が良いので、上の様な事情をすぐに察する事が出来るが、そのアキオでも、目の前にシードル公爵家の関係者がいると、時に暴走する事もあった。

レスターから、それとなくアキオが訓練に乗じてエリオスを殺そうとしたと聞いた時、物凄い衝撃を受けた事を覚えている。

これほどの男でも、深い闇に足を囚われ我を忘れる事があるのだと。

「早くドレスを選んで、昼飯に行こうぜ」

「タクト。それを俺に言っても無駄だ」

「タクトさん。アキオさん。お待たせしました」

二人が話をしていると、ちょうどそこにドレスの注文を終えたミルフィーユ達が現れる。

「どんなドレスにしたんだい？　ミルフィー」

「えへへ。内緒です。明日を楽しみにしていてください」

タクトは、ダンスパーティーのパートナーをミルフィーユにしていたので、彼女がどんなドレスを選んだのか、非常に気になるらしい。

「俺も、楽しみにしている」

「駄目ですよ。アキオさんは、他にそれを言う人がいるじゃないですか」

「普通の好奇心でも？」

「駄目です」

「了解」

最近のミルフィーユは、友人であるミントやちとせに気を使って、アキオとあらぬ噂が立たない様に気を使っていた。

自分は、タクト事が好きであったし、友人であるちとせやミントを悲しませたく無かったからだ。

「アキオって、本当にミルフィーに弱いんだから・・・・・」

ランファは、相変わらずミルフィーユに弱いアキオに文句を言う。

「まあ、宜しいでは無いですか。それで、お昼はどこに出かけますの？」

ミントはそんな話よりも、これからどこに昼食に出かけるのかの方が気になっていたのだ。

「じゃん！　ここです！」

アキオは、一冊の雑誌を取り出して派手にページをめくる。

すると、そこには、《ファーゴウォーカー今月の特集。B級グルメ有名店舗特集》の記事が掲載されていた。

「お勧めはここ。美味しいお好み焼きともんじゃ焼きを食わせる・・・・・」

「えーーーっ！　せっかくの休暇の昼食が、もんじゃ焼きなの？」

「じゃあ、ランファは留守番と・・・・・・」

「行かないとは、言っていないでしょうが！」

「ランファって、お好み焼きをちゃんと返せるのか？　ミルフィーとか、ちとせとかなら大丈夫そうだけど・・・・・・」

「アキオよりは、マシだと思うわよ」

「言ったな。じゃあ、勝負するか？」

「受けて立ってやろうじゃないの！」

アキオとランファは、先頭に立って目的のお店へ皆を案内し始める。

「アキオとランファか。意外と仲が良いじゃないか」

「でも、フォルテさん。あの二人は、常に喧嘩ばかりですよ」

「《喧嘩するほど仲が良い》ってね。昔の人は言ったものなのさ」

フォルテは、ミルフィーユに二人が意外と相性が良い理由を説明し始める。

そして、その様子を見たミントとちとせは、少し危機感を感じ始めるのであった。

「ヴァニラ様。とてもお似合いですぞ」

そして翌日のパーティー当日、ヴァニラは、昨日注文した特注のドレスをカマラの手伝いで着替え、それをベルツェルやエリオスに披露していた。

「本当、綺麗ですね。私達には息子達しかいないから、ドレスなんて着せる機会がございませんでしたので」

純白のドレスに身を包んだヴァニラは、元が非常に綺麗だったので、神々しいまでに美しかった。

それに、行きつけのお店とやらの店主のドレスやアクセサリーのチョイスも良かったらしい。

その辺は、さすがはプロというべきであった。

『これは、将来がとても楽しみな、大変にお美しいお嬢様ですな。では、精一杯コーディネートさせていただきます』

プロである店主は、ヴァニラの美しさが際立つ様に、あまり派手な色や装飾の施されたドレスを選ばなかった。

シンプルではあるが、シードル公爵のパートナーに相応しい最高の素材と技術で作られたドレスと、それに合うシンプルなデザインのアクセサリーに止めたのだ。

最後にカマラが、髪を纏めて薄く化粧を施してヴァニラの準備は終了する。

「ほら、旦那様」

「ああ。ヴァニラ。今日は、本当にありがとう」

少し顔を赤らめながらヴァニラにお礼を言うエリオスは、公爵ではあったが現役の軍人でもあったので、特に服などを新調せず、第一種軍装を新しい物に替えただけで、いつものままであった。

「旦那様。人生の先輩から言わせていただければ、普通は最初に、ヴァニラ様の美しさを褒めるべきかと・・・・・・」

「とても綺麗だ。絵に描きたくなるくらいに」

「これが、旦那様の最高の褒め言葉にございますれば・・・・・・」

「いえ・・・・・」

ヴァニラは生まれて初めて、こんなに高いドレスやアクセサリーを身に着けてダンスパーティーに出席するので、少し緊張している

ようであった。

「ヴァニラ様。昨日、お教えした通りです。後は、パーティーを楽しんでいらしてください」

昨日ベルツェルは、ヴァニラにダンスの踊り方や、簡単なマナーなどを伝授していた。

ヴァニラは、あのシードル公爵（今回は、様々な要因が絡んでの事だが・・・・・）のパートナーなので、色々と注目される事が多いであろうと考えての事であった。

「はい。あのベルツェルさん」

「どうかなされましたか？　ヴァニラ様」

「どうして、私を様付けで？」

ヴァニラは、ベルツェルに様付けで呼ばれて、昨日から少し面食らっていたのだ。

「ヴァニラ様は、旦那様のパートナーにございますれば、このベルツェルは、旦那様と同等の扱いをする。そういう事にございます。此度の縁が今回限りとなるのか？　今後も続くのか？　それは誰にもわかりません。ですが、今の私にとっては、ヴァニラ様は旦那様と同等にございますれば」

「それに、やっぱり貰えません。こんなに高いドレスを・・・・・」

ヴァニラは、他のムーエンジェル隊の面々が行ったのとは違う、

皇族・貴族御用達のオーダーメイドドレスの専門店でドレスを購入していた。

更に、ミルフィーユ達のドレスの代金は、今回は第3方面軍に経費として請求できたが、ヴァニラのドレスは値段が値段であったし、公爵が経費でドレスを買うなんて事は絶対に出来なかったので、シードル公爵家の負担となっていたからだ。

そしてその値段は、一介の少尉であるヴァニラの年収に匹敵するかそれ以上の物であり、しかもそれは、お礼としてヴァニラに進呈される事となっていた。

「オーダーメイドのドレスなので、他のお方は着れません。遠慮なさらずに貰ってくださいませ。それと、次の機会がございますれば、またそれを着て旦那様を助けていただきたいのです」

「はい。出来る限りは」

「ありがとうございます。ヴァニラ様。では、パーティーを楽しんで来てくださいませ」

ベルツェルとカマラの見送りを受けながら、エリオスとヴァニラはパーティー会場への移動を開始するのであった。

「では、参るぞ。レイトン」

「はい」

エリオスとヴァニラがパーティー会場に出かけた直後、今度はシヴァ皇子が御付の侍女とアキオを伴って、パーティー会場に出かけようとしていた。

「お互いに、パートナーはいないがな」

「この時期に、シヴァ皇子がパートナーを連れている。非常に、政治的に不利でございますれば」

「あの軍高官や貴族共を、期待させて操れという事か？」

「左様にございます」

まだ幼いシヴァ皇子は、普通に考えれば将来結婚して世継ぎを作り、その子は確実に次期皇王となる。

では、その結婚相手は誰になるのか？

もし自分の娘や親族ならば、その利益は計り知れない。

娘を持つ貴族や軍高官達は、知らず知らずの内にシヴァ皇子を支持する事となっていた。

なぜならば、後に自分の娘を紹介しなければならないからだ。

「そしてそなたも、なかなかに使い道がある」

「おおっ！　シヴァ皇子は、この臣を道具として利用なさるおつもりで？」

「何を、今さら白々しい。どうせ、余の言う事など聞かぬ癖に・・・・・」

実はアキオも、今回のパーティーに参加している連中の注目の的となっていた。

先日の騒ぎで、アキオの出生が広く知れ渡ってしまったからだ。

それと、シヴァ皇子が事態の沈静化のため、次期シードル公爵をエリオスと正式に認定したために、シードル公爵家の長男であるアキオの存在は完全にフリーとなっている。

婿に迎え入れるのに、最適な存在となっていたのだ。

「そなたへの期待も、十分に利用できる。そうであろう？」

「自分は、トランスバール皇国を支配するやんごとなきお方達の火種なのですがね」

「それについては、もう解決済みだ」

非嫡出子とはいえ、皇族と血縁関係にあるシードル公爵家の家の者を婿に迎え入れられれば、やはりそれは貴族達にとっては大きなメリットとなるからだ。

それに、アキオには血だけで無く十分な能力も持っている。

更に、美男子であったので、当の娘達からも文句が出ないという超優良物件であった。

だが、シヴァ皇子は、アキオがこちらの都合で動くとは思っていなかった。

もし結婚するにしても、自分の好きな女性と結婚してしまうであろうし、別にそこまでしなくても、自分が次期皇王として暴君にでもならなければ、絶対に裏切る様な男でも無いと考えていたからだ。

「レイトン准将。うちの娘と、一曲踊っていただけないでしょうか？」

パーティー会場に到着したアキオは、シヴァ皇子と一緒に忙しい時間を過ごす事となった。
シヴァ皇子に少しでも取り入ろうと媚を売る父親である貴族と、その隣のアキオに自分をアピールしたい娘という構図となっていたからだ。

「シヴァ皇子」

「何だ？　レイトン」

「今日は、ダンスを約束していたレディーもいますので、これにて・・・・・・」

「そうか。では、行くが良い」

ちょうどタイミングの良い所で、アキオはシヴァ皇子の元を辞して、パーティー会場内を歩き始める。

「よう、ミルフィー。あれ？　タクトは？」

「もう少しで来ると思います」

ムーンエンジェル隊司令のタクトは、それなりに挨拶回りなどで忙しいらしい。
そして、そのパートナーであるミルフィーユも、若い軍の士官連中や貴族達を適当にあしらってから、ここに避難して来ていた。

「そうか。ところで、一曲いかがですか？　お嬢さん」

「はい」

アキオはミルフィーユの手を取ると、ゆっくりとスローテンポでダンスを始める。

「ああ。疲れた」

「シヴァ皇子を放って置いて大丈夫なんですか？」

「ちゃんとプロの護衛もいるし、俺の役割も終わったさ」

アキオの今回の役割は、シヴァ皇子の有能で忠実な家臣を演じる事であった。

シードル公爵家の血を継ぐアキオが、誰と結婚するか？

アキオは、『シヴァ皇子の許しも得ませんと・・・・・・』などと言って、言葉をはぐらかす事に終始していた。

つまり、それに関する決定権の大部分を、シヴァ皇子が持っていると思わせる事に成功していたのだ。

つまり、シヴァ皇子に嫌われれば、アキオを婿に入れられないという事を意味していた。

「権力の世界って、色々と大変なんですね」

パーティー会場の端で、アキオはミルフィーユとダンスを踊りながら小声で事情を説明する。

「まあね。でも、俺は貴族のご令嬢なんて勘弁さ」

「（じゃあ、誰なんです？　ミントですか？　ちとせですか？）」

ミルフィーユは、出かかった言葉を辛うじて押し込める事に成功していた。

最近、皆はアキオがようやくに血の呪縛から解放されたと喜んでいたが、ミルフィーユはまだアキオが抱えている闇は深いと思っていた。

母を失ってからの七年という歳月は、それだけ長かったという事なのだ。

「アキオさん。私は、タクトさんの所に行きますから、ちゃんと、ミントとちとせの相手をしてあげないと駄目ですよ」

「それは、勿論」

「他の女性への浮気は、絶対に駄目ですよ。じゃあ、私はこれで・・・・」

タクトを探しに行ったミルフィーユを見送りながら、アキオは思わず苦笑してしまう。

ミルフィーユは、ミントとちとせがアキオ事を本気で好きな事を知っているので、アキオが他の女性と仲良くしない様に釘を刺して行ったのだ。

「よう。アキオも、こっちが本命かい？」

アキオがさらに移動すると、カクテルなどの酒を提供する特設スポットで一人ワインを楽しんでいるフォルテを発見する。

「いい酒を置いているらしいな」

「そりゃあ、ジーダマイヤ大将主催のパーティーだからね。無駄に

見栄を張っているさ」

確かに、アキオの見立てでも、酒のラインナップは非常に充実していた。

「おっ！　いいワインだ」

「だろう？」

「でも、飲酒ばかりだと、非常に外からの目が痛いな。一曲どうだい？　綺麗なレディー」

「言ってて、恥ずかしくないかい？」

「ちょっと、蕁麻疹が・・・・・・」

それでも、二人は手を取り合ってダンスの輪に入り、中心部分で優雅にダンスを踊り始める。

着飾ればかなりの美女で、身長もアキオと釣り合っていたので、フォルテは多くの人の注目を集めていた。

「あの淑女は？」

「ムーンエンジェル隊の隊長らしいぞ」

「もしかして、レイトン准将と？」

外の声を拾ったフォルテは、笑いを抑えるのに必死であった。

「客観的に見て、アキオがいい男なのはわかるんだけどね。私は、

友情しか抱けないね」

新品の第一種軍装に身を包んだアキオは、多くの若い女性の注目の的であった。

「俺も、そうだ。フォルテは、いい女なんだけどな。友情しか抱けない」

「じゃあ、待ちくたびれている娘達の元に行きな。これでも、私は隊員に愛される隊長だからね」

曲の終了と同時に、フォルテに背中を押されたアキオは、そこでミントと顔を合わせる。

「ミント。ブラマンシュのお嬢様は大変だな」

「ええ。人は生まれる家を選べませんから」

「言えてる」

ブラマンシュ財閥の令嬢であるミントは、多くの若い軍人や貴族の跡取り息子達の相手で忙しい時間を送っていたらしい。

少し疲れた表情を、アキオに見せていた。

「じゃあ、少し休むか？」

「いいえ。一曲付き合ってくださいな」

ミントは、実はあまりダンスが好きではない。

それは、自分の身長が原因であった。

１３０センチにも満たない自分が、１７０センチは確実に超えている男性を相手にすると、どうしても不恰好に見えてしまうからだ。
特に、アキオの身長は１８５センチもあり、これはかなりのハンデであったが、それでもミントは好きな男性と一緒に踊りたかった。
他の人がどう評価しようと、関係なかったのだ。

「随分と、お忙しいようですね？」

「みんな。俺をシードル公爵家の者として見るからな。俺は、レイトンなのに・・・・・・」

「仕方がありませんわ。お互いに、難儀な家に生まれた者の宿命です」

ミントは、ダンスを続けていても、自分があまり疲れていない事に気が付く。
どうやら、アキオがミントに気を使って、かなり無理な体勢を取っているようであった。

「アキオさん。大丈夫ですか？」

「どうかしたんだい？　ミント。まあ、俺のダンスは下手だからな」

そんな筈は無かった。
先程、普通の身長の女性と踊っている時には、周りの人達が惚れ惚れするほどの、綺麗なダンスを披露していたアキオなのだ。

「そうですか・・・・・」

「ああ。俺が、下手なんだ」

ミントは、これ以上の質問を止めてしまう。
曲の終了まであと僅かで、彼のその行為を無にしたくなかったからだ。
そして、少しでもこの短い至福の時間を楽しむべく、アキオにその身を委ねるのであった。

「ちとせ。大丈夫か？」

「アキオさん。はい・・・・・・」

ちとせも、かなり疲れているようであった。
シヴァ皇子を連れて、敵中を突破して来たムーンエンジェル隊の隊員であったので、多くの人達から話を聞かれたり、ダンスの誘いを受けていたからだ。
それに、ちとせは軍人の家の生まれで、あまり社交界に慣れていない。
ダンスなどの基本的な部分は士官学校で教育を受けていたが、訓練と実地が違うのは、どこの世界でも同じ事であった。

「俺も、慣れなくてな・・・・・・」

近くにいた給仕からフルーツジュースを貰ったアキオは、それをそっとちとせに手渡す。
士官学校卒業以来、辺境での任務が多かったアキオは、実はあまりパーティーの部類に出た事が無かった。

「そうでしょうか？」

ちとせには、アキオがどこの誰よりも優雅に振舞っている様に見えた。

自分の身贔屓もあったのであろうが、他の伯爵家の跡取りや、期待の若手高級将校よりも、はるかに本物の貴公子に見えていたのだ。

「昔からさ。本人は、意外とテンパっているんだ。でも、周囲には、余裕があるように見える」

次の曲が始まると、アキオはちとせにそっと手を差し出し、二人はお互いに手を取り合ってダンスを始める。

「俺は、普通の母子家庭の家の息子なのさ」

「では、私と同じですね？」

「ああ。同じさ」

ちとせも、アキオとのダンスを精一杯楽しむのであった。

「兄さんは、大人気だね」

「はい」

エリオスとヴァニラは、ようやくゆっくり出来るようになっていた。

大きな不祥事を起こそうとも、一応は公爵という事なのであろう。
それと、ベルツェルがパーティーへの出席を強硬に主張した理由も良く理解できた。
取り合えず、生き残りに成功したと判断されたエリオスは、それなりの数の、以前に交友があった貴族達に話しかけられる事が多かったのだ。
特に男爵や子爵などの、小身の貴族が自分の娘を紹介する事が多くなっていた。
皇国では、爵位を継ぐのは男性だけとなっていたので、娘はその家に男子がいない時に婿を迎え入れる時に使うか、自分の家に利益をもたらす他家に嫁がせる事が基本となっていたからだ。
結果、本来ならば、大身である公爵家に娘を嫁がせる事など到底不可能な連中が、多く擦り寄って来ていた。

「ヴァニラ。大丈夫？」

「はい・・・・・・」

「本当にすまない。こんな虚栄の場所に連れて来てしまって」

会場の端の誰にも話を聞かれない場所で、エリオスは本心からヴァニラに謝っていた。

『エリオス様は、シードル公爵の若い時分にそっくりでございますな』

『エリオス様が次期当主となれば、シードル公爵家はますます繁栄される事でしょうな』

昔は、父や母と一緒にパーティーに参加していたので、多くの貴族達に気を遣われ、おべっかを遣われる日々であった。
その頃は、世間知らずの子供であったし、悪口を言われるよりはマシ。
いや、悪くない気持ちでいた事は確かであった。
だが、こうして一度落ちてみると、それがどんなに無意味であったのかが良く理解できる。
自分を褒めていた連中の大半は、今度は自分の兄におべっかを遣い、娘を紹介している。
そして小身の連中は、今なら公爵家と縁戚関係になれると、自分の娘のアピールに必死であった。

「（でもね・・・・・・）」

貴族の娘は、大半は綺麗ではあった。
綺麗に着飾るし、金を払ってその道のプロに頼んでいるので、メイクや髪のセットも完璧だ。
ところが、彼女達は、今まで生死を共にして来たムーンエンジェル隊の面々に比べると、あまり綺麗には見えなかった。
以前はそんな事を感じなかったのだが、今ではそれを強く感じるのだ。
上手く言えないが、きっと内側から輝く物を一切持っていないからなのであろう。
そう考えると、実に納得がいくのだ。

「あんな連中と付き合うのも仕事の内。兄さんは、その辺のあしらいも一流で、実に羨ましいよ・・・・・」

まるで流れる様に、多くの貴族達に挨拶をしているアキオを眺め

ながらエリオスは静かにワイングラスを傾けていた。

「あの。エリオスさん」

「何だい？　ヴァニラ」

「もっと、色々な方と話をしなくても良いのですか？」

エリオスは、無理矢理にパートナーにしてしまった自分に気を遣ってくれるヴァニラの優しさに、思わず嬉しくなってしまう。

「今日は、復活第一弾の顔見せだからね。もう、これで良いのさ」

「そうですか」

「それにね・・・・・・」

「はい」

「目の前に、こんなに綺麗なレディーがいるんだ。他に移動するだけ労力の無駄なのさ。さあ。ラストダンスの時間だよ。勿論、お相手しれくるよね？　ヴァニラ」

「・・・・・・はい・・・・・・」

本当は、こういう場所は苦手なヴァニラであったが、エリオスの笑顔に思わず差し出された手を取ってしまうのであった。

「なるほど、強運か？　凶運か？　というところが微妙なんだな・・・・・」

同じく、タクトにエスコートされていたミルフィーユにアクシデントが発生していた。

それは、彼女のドレスのスカートの形を形成していた、最新型のロストテクノロジーを用いたペチコートがいきなり煙を噴き出したのだ。

普通に考えて、そんな物がいきなり煙を噴くはずはない。

そういう世間の確率を無視した運勢の持ち主という事なのであろう。

それに、タクトが素早く機転を利かせてドレスの焦げた部分を上手く取り外し、二人は楽しそうにラストダンスを踊っていた。

やはり、二人はお似合いのカップルだったのだ。

「ふう・・・・・・」

心配だったので様子を観察していたアキオは、ラストダンスを踊り始めた二人を見届けると、視界の端でエリオスのリードでヴァニラが楽しそうにダンスを踊っている光景を確認してから、素早くダンスホールから抜け出し、大きな窓のある休憩用のスペースへと移動する。

「あら？　貴公子様は、ラストダンスのパートナーがいないの？」

すると、そこには意外な人物がいた。
大きな窓に映る大きな月を眺めながら、休憩用の椅子に腰掛ているランファであった。

「人の事が言えるのか？」

「私ほどの美女になると、男性同士で大きな争いが発生するから遠慮したのよ」

「良く言うよ。でも、良く似合っているじゃないか。そのドレス」

シックな赤いドレスを着て、それに合わせて髪を纏めたランファは、どこに出しても文句が出ないほどの美女になっていた。

「あんたもね。ふーーーん。やっぱりね」

「何がだよ？」

「アキオの第一種軍装姿は、久しぶりって事よ。いつもは、タクトに気を遣ってあのツナギ姿なんでしょう？」

アキオが、エルシオール艦内では常に作業着姿だった理由。
それは、突然のアクシデントでエルシオールに残留した自分が、タクトよりも司令官に見えないようにという配慮からであった。

「パっと見で言うと、どう見てもアキオの方が司令官に見えるからね」

アキオは、その事に気が付いているランファが士官学校次席の才媛である事を思い出し、それに納得していた。

「《人は見た目が九割》。昔の有名な本のタイトルさ」

世間に苦労しているアキオらしい本音であった。

良く《人は中身が重要》などと言う人がいるが、それは長く付き合ってでの事だ。

初対面の人物は、やはり最初の見た目でその人物の事を判別してしまうものだからだ。

「アキオも、見た目は貴公子ね。ちょっと、口は悪いけど」

「それ、褒めてるのか？」

「褒めているわよ。私にしたら」

そんな話をしている内に、ダンスホールから流れて来るラストダンスの楽曲も中盤へと差し掛かって来る。

「踊らないの？」

「今日の俺には、パートナーがいないからな」

「・・・・・・（嘘付き・・・・・・）」

ミントやちとせだけではなく、アキオは多くの女性を惹き付ける魅力を持っているし、表面上では女性のあしらいもなかなかな物に見える。

ところが、アキオ本人に、《最後の一歩を詰める》というつもりが全く見受けられなかった。

ランファは、アキオの心の闇が、他人が考える以上の物である事

を理解してしまう。

「しょうがないわね。ここは、一番波風が立たないランファ様がお相手してあげるわよ」

「また、大きく出たな」

「せっかくのダンスパーティーで、ラストダンスを踊らないのは不幸よ。それに、他に見ている人がいるでなし」

「それもそうだな。そこのお美しいお嬢さん。一曲お相手願えませんか？」

「ええ。喜んで」

アキオは優雅にランファの手を取ると、二人以外に誰も居ないスペースでラストダンスを踊り始める。

「やっぱり、上手ね」

「ランファも、なかなかに・・・・・・」

双方、見た目が美男・美女であり、運動神経もリズム感も一流であったので、二人のダンスは他のどのパーティー参加者達よりも様になっていた。

更に、薄暗いスペースを照らす月光がアクセントとなって、それはまさに幻想的とまでいえる光景となっていたのだ。

「へえ。あの二人がね。やっぱり、お似合いなんじゃないか」

踊っている当事者達だけで、他に見物人はいないと思われたラストダンスであったが、実はそれを目撃していた人物がいた。
やはりパートナーが不在で、休憩のために外に出ていたフォルテであった。
彼女は、納得のいった様な笑みを浮かべながら、一人手に持っているワイングラスを傾けるのであった。

「何事だ！」

「急に、どうしたのよ！」

二人のラストダンスが終了した直後であった。
突然、ダンスホールに大きな衝撃音が鳴り、地響きと揺れが連続して発生する。

「非常事態だな」

「ええ」

これが緊急事態である事を悟ったアキオは、急いでシヴァ皇子の元へ向かって走り始める。

「遅いぞ！　ランファ！」

「仕方が無いでしょう！」

「それもそうか・・・・・・」

アキオが、ドレス姿のためにいつもより機動性に欠けるランファの手を引きながらシヴァ皇子のいる場所へと移動すると、そこでは既に十数名の護衛兵を連れたエオニアと、ジーダマイヤ大将や、ルフト中将や、タクトや、エリオスや、その他のムーンエンジェル隊の面々に守られたシヴァ皇子が対決している場面であった。

「役者は揃ったようだな」

エオニアの言葉と同時に、アキオとランファはシヴァ皇子をエオニアから庇う体勢に入る。

「アキオ。タクトと同じく、お楽しみだったのかな？」

「ルフト司令・・・・・・」

どうやら、ここに着く直前まで二人が手を繋いでいた事を、ルフト中将に見られてしまっていたらしい。

そして更に・・・・・・。

「後で、色々とご説明願いますわ」

「右に同じです」

ラストダンス時に不在だっただけでなく、あろう事か一番警戒しているランファと手を繋いで登場したアキオに、ちとせのミントの鋭い視線が突き刺さる。

そのあまりのプレッシャーに、アキオとランファの背中はチリチリと焼けている様な感覚に見舞われる。

「ふっ。さて、この極めて厳しい警戒態勢下に、余がここに現れた理由を聞きたいかね？」

「いえ。シヴァ皇子が目的なのでしょう。エオニア元皇太子」

いつもはボケている様に見えて、実はタクトはかなり冷静な戦術家としての面を持っていたし、チェスの腕前から察するに、人の思考や心理を読む事にも長けていた。

「さすがだな。タクト・マイヤーズよ。なら、話は早い。シヴァ皇子を連れて余の元に来い。厚遇を約束しよう」

「自分がですか？　もう少し、人を見る目を養われてはいかがです？　エオニア元皇太子」

タクトは、レスターやアキオがいつも傍にいる関係で、自分の事をあまり有能な軍人だとは思っていなかった。

なので、なぜ自分がエオニアに勧誘されるのかが良く理解できなかったのだ。

「それは、謙遜だな。タクト・マイヤーズ。余が欲して止まないレイトンや、有能なレスター・クールダラスが、特に何の疑問を感じずにお前の下にいる。お前は、自分が考えている以上に優秀な男なのだよ」

「そこまで評価していただき感謝いたしますが、答えはノーです」

タクトはすぐにエオニアに断りの返事をし、エオニアもタクトが自分の元に来るとは思っていなかったのであろう、それ以上の勧誘を止めてしまう。

「レイトン。そなた。まだ、そこにいるのか？　正直、余には解せぬが、これが最後のチャンスだ。そこにいるシヴァを連れて余の元に来い。宰相に・・・「ふざけるんじゃないわよ！」」

「ランファ。お前・・・・・・」

次のエオニアの言葉をランファが大きな声で遮ったので、その行為に、アキオを始めとして周囲が驚きを隠せないでいた。

「あんたが、汚い手で陥れようとした相手をまた勧誘？　皇族だか、貴族だか知らないけど、何様のつもりなのよ！」

「おい。フランボワーズ少尉」

ルフト中将は、思わずランファを窘めようとしてしまう。

確かに、先日のエオニアの謀略には、ルフト中将も腹を立てていたのだが、それと皇族・貴族批判は全くの別物であったからだ。

それに、この場には、今日はまだ大人しいがジーダマイヤ大将もいるのだ。

後に、どんな因縁を付けられるのかわからなかった。

「ほう。女だてらに、なかなか肝が座っているではないか。だがな、ランファ・フランボワーズ少尉とやら。これは余とシヴァを担ぎ上げた連中の、皇国の覇権を賭けた戦いなのだよ。汚いだとか、卑怯だとかは、結局、負け犬の遠吠えにしか過ぎない。違うかな？」

「・・・・・・」

極めて冷徹なマキャベリストとしての面を見せるエオニアに、ランファは一言も反論する事が出来なかった。

野垂れ死にを期待されて辺境に追放され、そこで辛酸を舐めたエオニアらしい意見であるとも言えよう。

勝てば新たな国を築く英雄で、負ければ歴史に名の残る大悪人。

今回のクーデター劇は、エオニアが自分の命をチップにした盛大な賭けでもあったのだ。

「レイトン。そなたは、一生命の危険を抱えながら生きていくのか？　そこのエリオスとか言う若者、運良く家を永らえたは良いが、すぐに喉元の熱さを忘れてそなたを殺しに来るぞ。自分よりも優れた兄が、家を継がずに在野に居る。貴族や皇族にとって、これほどの恐怖が他にあると思うのか？」

「僕は、そんな事はしない！」

エオニアの言葉に、今まで静観していたエリオスが強く反論する。

「今は、そうであろうな。だが、五年後は？　十年後はどうだ？　お前の父親は、老いてから衰えて愚行に走った。それを、お前がしないという保障はあるのか？」

「・・・・・・っ！」

エオニアの反論に、エリオスは何も言えずに黙ってしまうが、すぐに自分の手を強く握る者の存在を感じる。

隣にいるヴァニラであった。

「（ヴァニラ・・・・・。そうだね。ここで引いたら駄目なんだよね。ここで引くようなら、また兄さんに疑われるだけの状態に戻ってしまう。僕は、また君に救われたらしい・・・・・）エオニア廃太子殿。あなたは、何か勘違いをしているらしい」

「っ！」

「そこにいるレイトン准将は、血縁的には私の兄ではあるが、彼が公爵位の継承を拒否し、新しいシードル公爵が私となった事で、完全にこの件ではケリが着いているのだ。その件について、あなたにとやかく言われる覚えは無い！」

エオニアは、驚きの表情を崩せなかった。

才能はそこそこあるが、兄のアキオほどでは無く、大した経験も苦労していないエリオスを、『苦労知らずの小僧で、生かす価値も無い』と判断していたのに、今の彼の体からは、公爵としての威厳やオーラが沸き上がるのを感じたからだ。

「隣の俗物よりはマシという事かな？」

エオニアの言う俗物とは、自分の姿を見てまだ狼狽しているシーダマイヤ大将の事であった。

「抜かせ！　エオニア！　この反逆者が！」

俗物扱いされたジーダマイヤ大将は、エオニアに対し懸命に虚勢を張っていた。

元々、見た目ほど気が強いわけでも無い男なのだ。

「五年前・・・・・」

「はあ？」

「『エオニア様。新しい皇国の歴史のために、このジーダマイヤ。全てを賭けましょう』。こう抜かしていたな。お前は。騙された余も若かったが、お前の二枚舌は相変わらずらしいな」

「うぬぬぅ・・・・・・」

当然の如く、エオニアはこのパーティーの様子をちゃんと観察していた。

先のアキオの事件で大きく権威を失墜したジーダマイヤ大将は、腰巾着の参謀長と共に、パーティーの間中、懸命にシヴァ皇子に媚を売っていた。

「お前は、既に主流派ではない。余が倒さねばならないのは、ウォッカが準備している中央奪還軍で、枝のお前はついでに過ぎない。だが・・・・・・」

「だが、何だ？　この反逆者が！」

「ここは、各個撃破で行かせて貰うとしよう。それに、ここの大将はお前で、揃っている部下達も階級ばかり高くて使えない奴等ばかり。みじめに降伏でもされたら、処理に手間が掛かるからな。正直なところ、新しい皇国では、お前達に与える酸素すら惜しいのだ」

「貴様ぁーーー！」

激高するジーダマイヤ大将を、エオニアはまるで汚物でも見るかの様に観察していた。

元々この二人は、過去の経緯から、どちらかが死ぬか、両方死ぬかしか選択肢は存在していなかったのだ。

それと、エオニアがここを襲撃した理由として、実はウォッカ大将の正確な所在が不明という事情も存在していた。

ここ数日で、中央の奪還を目指す全ての辺境軍艦隊の進発準備が始まっていたのだが、ウォッカ大将の姿は、彼のホームである第2方面軍では確認されていなかった。

それに、もし第2方面に艦隊を進めても、彼は異常なまでの警戒網を敷いていたので逃げられる可能性があったし、第2方面がフェイクで他の方面軍から本命が発進するという可能性も否定できない。

戦力はかなり優勢であったが、少し手詰まり感のあったエオニアは、ウォッカ大将の出方を伺うべく、各方面軍に対応する戦力を配置して後、この方面に黒き月を含む自分の艦隊を秘かに進撃させていた。

勿論、シヴァ皇子の件もあったのだが。

「それで、返事を聞かせて貰おうかな？　レイトン」

エオニアは、もうジーダマイヤ大将に興味が無くなったらしく、今度はアキオに先ほどの質問の答えを聞く。

「エオニア閣下。あなたは、非才の身であるこの私を宰相にと仰るので？」

「何度も言うが、お前が非才なら、この皇国にいる連中の大半は動物以下だと余は思うのだがな。それで、返答は？」

「お断りします」

アキオの、完全なる拒否解答であった。

特に大きな声でも無かったのだが、それに込められた意思は確固たる物であると、それを聞いていたエオニアとシヴァ皇子は感じていた。

「やはり、わからないな。なぜ、お前はそこまでその場所に拘るのだ？　レイトン。実の父に命を狙われ、弟に陥れられ。余と新しい皇国を築けば、それから永遠に解放されるというのに」

「果たして、本当にそうでしょうか？」

「何？」

「今のあなたは、人材に困っていらっしゃる。だから、私如きをスカウトなされようとする。ですが、私一人が来たところで、あなたの負けは変わらないでしょう。もしあなたの下に付けば、私も足掻くので、万が一という事も無きにしもあらずですが、問題はその後です。天下を取った者が行う次の行動。それは、自分の権力を脅かす功臣を排除する事です。《狡兎死して良狗煮られる》ですよ。つまり、どちらでも一緒なのです。ならば、私は勝つ方に付きます」

正に、本音であった。

全くの嘘偽りの無い、普通ならば語る事すら憚られる本音なのだが、フレスコ前公爵の死後、さほど出世に興味の無いアキオは、シヴァ皇子にすら媚びるという行為を行っていなかったのだ。

「やはり、お前は面白い男だな。そうか。余の元には来ないか。実に残念だ」

エオニアは、アキオの回答を寧ろ面白そうに聞いているかの様でもあった。

「ならば最後に、お前に問うとするか。我が可愛き従兄弟シヴァよ」

最後に、エオニアは自分の様子を観察しているシヴァ皇子に視線を向ける。

「久しぶりだな。シヴァ」

「余は、そなたとは初対面のはずだ」

「余が追放される五年前に、一度幼きお前に会っているのだがな」

「記憶に無いな。寧ろ、無くて正解だ。では、改めて紹介させていただくとしよう。余の名前は、シヴァ・トランスバール。現在、唯一の皇王継承者候補だ。なぜ唯一となってのかは、今さら聞くまでも無いと思うが・・・・・」

共に、皇国の次期皇王を自称する者同士で、一人称に《余》を使うようになった者同士であった。

現在、トランスバール皇国領域内で、この一人称を正式に使える者は、トランスバール皇国皇王ただ一人であったからだ。

「ふっ。その心意気や良し。だが、幼いお前に何が出来るというのだ？　精々、その俗物共に利用されるのみではないか。シヴァ。余の庇護下に入れ。共に協力して、新しい皇国を築こうではないか」

エオニアは、再びジーダマイヤ大将を俗物呼ばわりしてから、シヴァ皇子に自分の元に来るように説得を開始する。

「くどい！　余は、お前の元になど行かぬ！」

「傀儡にされるとわかってか？」

「お前の元で、余が傀儡にされない保障も無いな。それに、素早く艦隊を出せる打出の小槌を得た程度で、勝った気になっているお前になど付いても未来は無いからな」

「シヴァ・・・・・。お前・・・・・・」

エオニアは、シヴァ皇子の言葉が誰の影響を受けての事か、すぐにそれを察していた。

『人無くして国は動かず、その人を使いこなせてこそ一流の君主』

これは、あまりシヴァ皇子に物を教えない家庭教師が常に口にしている唯一の教えでもあった。

「そうか。残念だ。本当は、成長したお前の姿を見てみたかったのだがな」

「余も、お前が中年になった姿を見てみたかったのだが、お互いにそれは無理らしい」

シヴァ皇子は、躊躇う事無く、エオニアに対し持っていた銃を向ける。

「ほう。お前に撃てるのかな？」

「ここでお前を撃てば、犠牲を少なくして事が解決できるからな。これは、人を統べる立場にある者の責務だ」

シヴァ皇子はエオニアに向けてレーザー銃を撃つが、なぜか放たれたレーザーは、エオニアの体を通り抜けてしまう。

「まさか！　当たったはずなのに・・・・・・」

「まだ幼いな。シヴァよ。余が、本当にこの場に姿を現すとでも？　では、最後までの一時を存分に味わうが良い」

エオニアとその警護兵達は、どうやらホログラフ映像であったらしく、エオニアの最後の言葉と共にその場から姿をかき消してしまう。

そして、その直後、パーティー会場は更なる衝撃と揺れに脅かされるようになる。

「この揺れは・・・・・・。宇宙港が、襲撃を受けているのか！」

「ジーダマイヤ閣下！　大変です！　ファーゴの外縁に、多数のエオニア艦隊が出現！　砲撃を繰り返しております！」

「ええい！　警護の艦隊は何をしていた！　レーダーや偵察部隊は！」

突然のエオニア艦隊の出現に、ジーダマイヤ大将や参謀長は完全に舞い上がり、適切な対応が取れないでいた。

「駄目だな。こりゃあ。仕方が無い。エルシオールに行くか」

「でも、行ったところで」

意外と冷静に対応策を考えるタクトであったが、現時点でエルシオール他多数の艦隊を係留している複数の宇宙港は、エオニア艦隊の攻撃の影響でまともに機能していなかった。
正直なところ、出港できるかすら不明で、その事をフォルテに指摘されていたのだ。

「おい！　タクト！」

「おお！　レスターじゃないか！」

だが、救いの神はすぐに現れた。
パーティーには不参加で、エルシオールで留守番をしていたレスターが連絡艇でタクト達を迎えに来たからだ。

「さすがは、我が副司令殿だな。実に、ナイスタイミングだ」

「でもさ。エルシオールは、出港できるのかい？」

タクトは手放しでレスターを褒めていたが、フォルテは、自分達が港に停泊しているエルシオールが、すぐに出港可能なのかが気になっていた。

「アルモとココには、何かがあったらすぐに出港するように言ってある。大丈夫だ。さあ。連絡艇まで急ぐぞ」

「あいよ。了解」

レスターの返答に納得したフォルテ達は、すぐに近くの宇宙港に向けて走り始める。

「さあ。シヴァ皇子も、御付の方も急いで！」

「すまないな。タクト」

「いえいえ」

緊急事態だったので、タクトは近くにいたシヴァ皇子とその御付の召使の女性にも、エルシオールに避難するように進言する。

なぜなら、普通こういう時に一番最初に動かなければならないジーダマイヤ大将が、全くの役立たずであったからだ。

「急ぐぞ！　みんな！」

ところが、避難の過程で、どうしても足の遅い者が二人存在していた。

ロングスカートのドレスを着ていて背の低いヴァニラとミントであった。

「ヴァニラ。緊急事態だからさ。えーーーと。その・・・・・・」

「はい」

エリオスは急いでヴァニラを背負い、全速力で走り始める。

「わお。エリオスって、大胆」

「あのね。ランファ。これは、非常事態でさ・・・・・・」

ランファに茶化されたエリオスは懸命に言い訳を始めるが、肝心の背負われたヴァニラが少し顔を赤くしていたので、全く無意味に

なっていた。

そして・・・・・・。

「ミント。急ごう」

「はい・・・・・・（やりましたわ。この際、背が低くてラッキーでしたわね）」

アキオはミントを背負い、ミントはアキオの広い背中の上で至福の一時を過ごしていた。

現時点でミントを背負う候補者は他にレスターがいたのだが、彼はこの手の機転があまり利かないので、こういう事になっていたのだ。

「色々と大変だな。レイトン」

「本来ならば、シヴァ皇子を背負うべきなのでしょうが、皇子はなかなかに足がお早い」

それなりに自己鍛錬をしていて、女性でもないので（公式的には）ドレスも着ていないシヴァ皇子は、かなり素早くアキオの隣を走っていた。

「いや。それは、遠慮させて貰おう。それに、その怨嗟の視線が二倍に増えてしまうであろうからな」

「「・・・・・・」」

アキオとミントは、シヴァ皇子の走っている反対側から何か冷た

い突き刺さる様なプレッシャーを感じていた。
表面上は笑みを浮かべながら走っているちとせであったが、彼女からは計り知れない威圧感が出ていたのだ。

「さあ。急ぎましょう（はあ・・・・・・。ミントが羨ましい・・・・・）」

そして数分後、タクト達はレスターが連絡艇を置いて来た宇宙港のゲートに到着する。

「ミント。悪いけど、ここで」

「えっ？」

アキオは、素早く丁寧にミントを降ろすと、一人連絡艇には搭乗しなかった。

「レイトン。お前、何を？」

「この緊急事態に、俺までエルシオールに搭乗しても意味が無いからな。ちょっと、指揮権の剥奪をしに行って来る」

連絡艇の隣には、発進準備が整ったものの、指揮官が不在でまだ発進していない一隻のザーフ級戦艦が係留されていた。
多分、分艦隊の旗艦であろうその戦艦は、司令官やその幕僚達がパーティーに出席していたために、発進を躊躇っているらしい。
この非常事態に、動きを止めたままであった。

「お前。恐ろしい事を、サラリと言うな」

まるで、散歩にでも出かけるかのような態度で、軍法破りを口にするアキオに、タクトはただ呆れるばかりであった。

「緊急事態だからな。それに、連中も、ここに閉じこもったまま死にたくなかろう」

それに、同じパーティー会場にいたにも関わらず、ここに姿を現さないという事は、その司令官に何かがあったと考えるべきであろう。

なぜなら、先ほどから続いている砲撃で、ファーゴの一部施設に被害が出ているらしく、エアーの流失警報があちこちで出ていたからだ。

「なるべく早くに戦力を纏めて、避難する民間船の援護に回る。エルシオールは・・・・・・。任せるさ。司令官殿」

「わかったよ。レイトン。死ぬなよ」

「勝手に殺すなよ。じゃあな」

アキオは、手を挙げながら隣の戦艦に向かうアキオの後ろ姿を見つめながら、漠然とした不安を感じずにはいられなかった。

だが、その不安が何であるのかは、今のタクトにはまだわからなかった。

「ええい！　バルサミコ少将とブルーハワイ准将は？」

「それが、パーティー会場に、問い合わせているのですが・・・・・・」

「艦長や、貴族の若手士官達もか？」

「同じく、連絡不能です。どうも、それどころでは無いらしく・・・・・・」

「俺達に、穴倉で死ねというのか！」

アキオが向かったザーフ級戦艦パスカルのブリッジでは、中年の副長が一人叫んでいた。

この惑星ロームを母港とする第３方面軍の四分の一の戦力を指揮する第四分艦隊の旗艦であるパスカルには、司令官や参謀連中を始めとして、実に多くの貴族出身の将校達が乗り込んでいた。

そして、その連中の全てが、例のダンスパーティーに参加しているという、もし上官がウォッカ大将ならば処分確定の不祥事を行っていたのだ。

正直なところ、市民階級出身で叩き上げて少佐となり、この艦の副長となった自分さえいれば、この艦は正常に運用可能であった。

貴族出身の艦長はお飾り程度の実力しか無かったし、他の士官連中にしても、付けられているナンバー２の連中が優秀だったので、別にいなくても構わなかったのだ。

そもそも、軍艦という物は、戦闘時の乗組員の戦死や戦傷を見越して余剰の人員を乗せているので、何の問題も無かった。

「それを知っての、この暴挙か・・・・・。これだから、貴族共は！」

普通ならば、半分は残るのが決まりなのだ。

現にルフト中将の艦隊にはきちんと副司令がいて、その副司令が素早く指揮下の艦隊を発進させたらしく、そのルフト中将もファーゴの中央管制室で懸命に現状の把握に務めているらしい。

ところが、自分の上官や部下達は、『シヴァ皇子にお目通りをするチャンスだから』という理由で、誰一人として艦に残留しなかったのだ。

「皇国軍の将来が心配だな」

「ウォッカ大将がいるから、大丈夫と違いますか？」

副長に、通信担当の士官がかなり際どい発言をする。

ここ第3方面軍で、ウォッカ大将の話題は、口にするだけでも危険な行為であったからだ。

「貴族連中は、いませんからね」

「盗聴器があるかもしれないぞ」

「まさか」

そんな話をしていると、突然ブリッジに一人の若い将校が入ってくる。

「現時点で、この艦の最高責任者は誰だ？」

「何だ？　若造が何の・・・・・っ！　准将閣下！　失礼しました！」

ベテランである、自分らしからぬミスであった。

入って来たのが、自分の息子ほどの年齢の若造であったので、まさかその人物が、上官だとは思わなかったのだ。

「時間が、一秒でも惜しい。貴官が、現時点におけるこの艦の最高責任者か？」

「はい。ザーフ級戦艦パスカルの副長、アイウッド少佐です」

「レイトン准将だ。早速だが、船を出してくれ。外で、戦力をかき集めて反撃に出る」

本当に早速だったので、アイウッド少佐は驚いてしまう。

更に目の前の人物が、《あの》レイトン准将だった事と、彼に決められた指揮権を無視して出港するように命令されたからだ。

「無理です」

「俺に、指揮権が無いからか？」

「よくおわかりで」

アイウッド少佐自身の考えとしては、一秒でも早く出港したい気分であったが、いくら傲慢なだけで無能な上官達だったとしても、彼らを差し置いて出港するなど、軍人として絶対に出来なかったのだ。

「軍法の第２３条３項の補足に、非常事態時に指揮官が不在の場合の指揮権の継承手順があったと思ったが」

「バルサミコ少将達の、戦死及び軍務継続が不可能なほどの負傷が確認されておりません。この船が第四分艦隊の旗艦である以上、それが確認できない限り認められません」

「・・・・・・（正論だな。だが、今は非常事態なんだがな）」

アキオの見立てでは、アイウッド少佐はかなり有能な軍人であった。

だが、市民出身という事で昇進が遅く、貴族出身の上官の尻拭いに毎日奔走しているのであろう。

貴族出身者の昇進が早い皇国軍では、比較的良く見られる光景であると共に、無能な上官ゆえに、副官でしかない自分が勝手に動いて、後で彼らに処分される事を恐れているのだ。

「少佐の言っている事は正論だが、ここは柔軟に行こうとは思わないのか？　杓子定規に決まりを守って、ここで焼け死ぬのも面白くないだろう？」

「決まりですから。軍という物も、世間という物も、杓子定規で理不尽な部分があるんですよ。それは、レイトン准将が一番良くご存知なのでは？」

「厳しい一言だな・・・・・・」

アキオの出生の秘密と先の事件の顛末は、シヴァ皇子の命令で緘口令が敷かれていたが、それはあまり意味を成していなかった。

軍内部で、それなりの情報源を持っている人物なら、簡単に知り得る情報であったのだ。
それに、シヴァ皇子が情報が漏れる事を半ば意図していたという事もある。
秘密だから色々と問題になるのであって、当事者同士であるアキオとエリオスがお互いに納得している事が世間に漏れても、さして問題ないと考えていたからだ。

「では、協力してくれないのかな？」

「決まりですからね」

アイウッド少佐は、ブリッジに詰めている他の乗組員達の視線で身の縮む思いであった。
何しろ緊急事態だったので、誰だって一秒でも早く出港したかったからだ。
誰しも港で待機したまま、敵艦隊の砲撃で焼かれたくなどなかったのだ。

「そうか。お邪魔したな」

「なっ！」

アイウッド少佐は、アキオがあまりにも呆気なく諦めてしまったので、驚きのあまりちゃんとした言葉を発する事が出来なかった。

「そこは、もっと粘りませんか？　普通」

「言っただろう。一秒でも惜しいと。他にも船はあるだろうから、そこに行けば済む問題だしな」

確かにこの港には、他にも数隻の戦艦や巡洋艦や駆逐艦が置いてあった。
多分、バルサミコ少将を内心で小バカにしている、自分と同期のカムイ少佐などは、喜んでそれに参加するであろう。

「（おいおい。そんな目で俺を見ないでくれよ）」

アイウッド少佐は、他の乗組員達の視線がとても痛かった。
今、自分は究極の選択を強いられていた。
杓子定規に軍の決まりに従って、かなりの確率でこの艦を自分の棺おけにするのと、後の軍法会議を覚悟して、この目の前の若造と一緒に横紙破りをするかだ。

「邪魔したな。少佐。俺は、次の艦に・・・・・・」

「パスカルの発進には、どれほどかかる?」

アキオがブリッジを後にしようとしたその時、覚悟を決めたアイウッド少佐は、自分の部下に艦の状況を尋ねる。

「命令さえあれば、すぐにでも行けます」

「指揮官不在のため、この場において最上級者であるレイトン准将に指揮を委ねる事とする。以上だ」

アイウッド少佐は、それ以上何も言わなくなった。
つまりは、アキオの命令待ちという事らしい。
いきなりで、ほとんどの人員を知らない艦を統率する。
この難しい課題を、アイウッド少佐はアキオに託したのだ。

もし、世間の風評とは逆にアキオが使えなければ、傀儡の指揮官にして、自分がこの艦の統率を行おうと思っていたのだ。
どうせ、軍法破りをするのだから、無駄死には避けたかった。

「すぐに出せるのなら、急いで出してくれ。緊急事態だからな。バカ丁寧にやらなくていい。不必要なシーケンスは全部すっ飛ばせ。スピードが最優先だ」

「了解しました！」

アキオは、アイウッド少佐が使える人物だと思っていたので、艦の運用については完全に丸投げする予定であった。
この非常事態に、あれやこれや把握しようとしたら命がいくつあっても足りないからだ。

「第四分艦隊旗艦パルカルだ！　中央管制室！　緊急発進するからな！」

「中央管制室だ。外が同じ出方をした軍艦と、ファーゴから脱出する民間人を乗せた船で混乱している。衝突しないようにしてくれ！」

どうやら、中央管制室の方もかなり混乱しているらしい。
第四分艦隊の指揮者が変わった事を、気にも止めていないようだ。
というか、気が付いていないと思われた。

「了解した！　戦艦パルカル！　発進！」

アキオの発進命令でパスカルが緊急発進すると、外は大きく混乱していた。
遠距離から多数のエオニア艦隊に砲撃を受け、指揮官の不在であ

たふたしている内に、港ごと砲撃を受けて爆散する軍艦の火球やら、外に出てはみたものの、残存の戦力すら上手く纏められない戦隊やら、どこに逃げて良いのかわからなくて、他の船の進路を妨害して更に混乱する民間船など、大混乱していたのだ。

「これは、いかんな・・・・・。索敵担当！　エオニア艦隊の動向は？」

アキオは、近くにいた索敵担当の士官に簡潔に質問をする。

「遠距離砲撃に終始しています」

「接近の可能性は？」

「現在は、その兆候は見られません」

「引き続き、エオニア艦隊の動向に注目しろ。それと、その隣の予備の探知機器を動かせる奴を呼び出せ。複数の作業を平行して行う。一人では不可能だ」

「呼び出します」

「二分以内だ」

「無理です。五分はかかります」

「走ってくれば、問題なかろう。それとも、怪我でもしているのか？」

「いえ。機関部にいるので、新しい軍服に着替えなければいけませ

ん」

「はあ？」

アキオは、最初この目の前の若い士官が何を言いたいのかが理解できなかった。

「汚れた軍服でブリッジに入ると、司令がその・・・・・・」

「ちっ！」

確かに、軍法の補足に、軍服は常に清潔な物を着用する事と記載されていて、近衛艦隊やエリート達が幹部を務める艦では厳しいという話を聞いていた。

特に、貴族出身の将校にその傾向が強いらしい。

タクトは、見苦しくなければ全く問題にしなかったが、『皇国軍の将校たるものは、常にエレガントでなければならない』と、毎日服装検査を行う司令官や艦長も存在するのも事実だったのだ。

「緊急事態だ！　すぐに呼び出せ！　俺は、そんな事は気にしない！　それに、新しい軍服に着替えても、砲撃で焼かれれば一緒じゃないか！」

「わかりました」

「次！　通信担当！」

下らない話で予想外に時間を食ってしまったので、アキオは珍しく不機嫌な態度を隠さないまま、通信担当の士官に話しかける。

「はい！」

「第四分艦隊は、敵エオニア艦隊の砲火を避けるためにポイントＲ３５６に集合せよ。広域に通常文で構わん」

「えっ！　でも、暗号にしないと・・・・・・」

「お互いに索敵可能な位置にいて、暗号を組む意味があるのか？言っただろう？　時間優先だと。それと、空いている通信機を全て動かせ。混乱している民間船の誘導をするんだ。時計回りと反時計回り経由で、惑星ロームの裏側に逃がせ。いいか、短時間で逃がせる船を優先するんだ。同時に砲火の中心部いる船は、近いほうの逃げ道に誘導する。次に、艦隊所属の工作船と病院船もロームの裏側に回せ。どうせ、戦闘では役に立たないんだ。エオニア艦隊の遠距離砲火で失うよりも、後で役立たせた方がいい」

素早く適切な命令を下すアキオに、アイウッド少佐は珍しく感心していた。

噂では、《多才のレイトン》と呼ばれるほどの男であったが、実際に目にしないとわからない事も多かったからだ。

「副長。どれほど集合可能だ？」

「我が艦が呼び水となりました。次々に出港しています」

「最初に赤信号を渡った甲斐があったな」

「ええ・・・・・・」

だが、戦況はあまり宜しくは無かった。

敵の奇襲を受けているのに、多くの指揮官や幹部が不在で大きく混乱し、いまだに出撃すらできていない部隊が多数存在していたからだ。

それに、そんな事はお構い無しに出港して砲撃を受けて沈んだり、損傷を受けて動けなくなった民間船からの救難信号が入ったり、隔壁に大きな損傷を受けて、エアーの流失が止まらないブロックが徐々に増えていくファーゴ各所からの、半ば悲鳴に近い助けを求める声など、事態は良くなるばかりか、徐々に悪化の一途を辿っていた。

「こりゃあ、いけませんな」

「ジーダマイヤ大将は、何をしているんだ?」

「さあ? 私が聞きたいくらいです」

その後、出来る限りの事をしたアキオであったが、結果だけを言えば最悪の状況であった。

多数のエオニア艦隊の砲撃を受けて、大きく損傷したファーゴでは多くの市民が死傷していた。

特に、エアーの流失が抑えられないブロックでは、その中の人が窒息死するか、宇宙に放り出されて死ぬかという悲惨な結末を迎えていたのだ。

「血の粛清か、新しき国を作る際の人柱か。やはり、どこか歪なお人だ」

「エオニア廃太子の事ですか?」

アイウッド少佐は、アキオのエオニア評を聞いて少し安心していた。

先の事件が、完全な冤罪である事は大きく広まっていたのだが、この不利な戦況下で、アキオがエオニアに投降する可能性も視野に入れていたからだ。

「ああ。そうだ。それで、戦力は集まったのか？」

「八割ほどですが、無事に」

「上等だな。隊列を整えてから、エオニア艦隊への砲撃を開始する」

アキオは、やっと集結を完了した第四分艦隊に砲撃命令を下す。

全てではなかったが、港を墓標にした船もあるのであろうと思っていた。

もっとも、それを確認する手段は現時点では無かったが・・・・・。

「砲撃をですか？」

「そうだ。こちらが纏まって砲撃を開始すれば、今ファーゴに向けて撃たれているビームやミサイルの一部を吸収できるからな」

「ですが！」

「怖いのか？」

「っ！」

怖いなどとは、口が裂けても言えなかった。

いくらアキオより自分の方が階級が下でも、自分の方が遥かに長く軍隊で飯を食っていたからだ。

だが、よくよく考えてみると、自分にほとんど実戦経験が無かった。
訓練などはテキパキとこなし、ベテランの貫禄を見せ付けていた自分であったが、実戦経験は、圧倒的に優位な立場でのいくつかの海賊退治程度しかした事が無かったのだ。
現に、この近辺にいる味方艦隊は、初めての奇襲攻撃に動揺してまともに動いている船の方が少なかった。

「索敵エリアに存在するエオニア艦隊に向けて、砲撃を開始します！」

アイウッド少佐は、自分の半分ほどの年齢の若造であるアキオが、涼やかな顔をしながら指揮を執っている事に気が付いていた。
先ほどは少し機嫌が悪かったのだが、それはどちらかと言うと、この事態にオタオタして足を引っ張っている自分達への苛立ちという部分が強かったらしい。
やはり、実戦経験は良くも悪くも人を変えてしまうものなのだと、アイウッド少佐は考えていた。

「（年齢なんて、関係ないのか・・・・・・。この艦の連中は、俺が懸命に教育したのだがな・・・・・・）レイトン准将」

「何だ？　副長」

「艦隊の位置を、天井方面に１５ほど移動させる許可を。このままだと、こちらを狙うエオニア艦隊の火線に、民間船を巻き込む可能性があります」

「さすがは、ベテランだな。思い付きもしなかった。副長の言う通りにしてくれ」

「了解です（嘘付け！　俺が言わなかったら、直前で命令するつもりだった癖に・・・・・。一応、俺は合格という事ですか？　レイトン准将閣下）」

アイウッド少佐は、この間の前の若造を値踏みしているつもりでいたが、実は自分の方が値踏みされている事に気が付くのであった。

（ほぼ同時刻、エルシオールブリッジ内）」

「タクト！　すぐに船をファーゴに戻せ！」

「できません！」

エオニア艦隊の奇襲から逃れ、無事にエルシオールに到着したタクト達であったが、出港後に外部から見たファーゴの様子に全員が気持ちを暗くさせていた。

どうやら、ジーダマイヤ大将は、この奇襲攻撃に的確に対処できなかったらしい。

迎撃戦力を纏める事すら儘ならず、無意味に混乱を広げているだけであった。

「余は、このトランスバール皇国に責任のある立場なのだ！　エルシオールを使って、一人でも多くの・・・・・」

「できません！」

タクトは、珍しく強い口調でシヴァ皇子に反対に意見を述べる。

「理由を聞こうか」

シヴァ皇子は、以前ほど自分の意見を強硬に通そうとしなかった。
それが、いかに覚悟がいる事なのかを、家庭教師の時間にアキオから聞いていたからだ。

「ここで、エルシオールを救援に差し向ければ、数十人や数百人は救えましょう。ですが、エオニア艦隊の攻勢は、まだ始まったばかりなのです。ここで、紋章機を擁する我らが前線に立たなくてどうしますか？」

「・・・・・・」

「小手先の人助けなど、人を統べる立場にある人が行うべきではありません！　救援に向かうように命令を下せば良いのです！」

「タクト・マイヤーズ司令。そなたの言っている事は正論だ。だが、余は誰にその命令を下せば良いのだ？」

「それは・・・・・・」

今度は、タクトがシヴァ皇子の質問の答えに窮してしまう。
ジーダマイヤ大将の不手際のせいで、この戦場ですぐに動ける戦力は、まだ自分達だけであったからだ。

「ココ。他の連中は、どうなっているんだ？」

「いまだに混乱から脱していません。下手に色々と命令を下すと、かえって混乱を助長する可能性が・・・・・・」

「階級ばかり高くて、何も役に立たない男だな」

このシヴァ皇子の一言で、ジーダマイヤ大将の政治的な命運は完全に尽きた。

そもそも、始めから気に入らない男であった。

下らない手を使って、自分を自身の根城である惑星ロームまで呼び寄せて利用しようとしたり、自身が政治的に優位に立つために、ライバルであるウオッカ大将の前を走る事をしないで足を引っ張ろうとし、そのために自分のお気に入りであるアキオを冤罪で裁こうともした。

更に、惑星ロームに到着してからも不手際は続いていた。

必要も無いパーティーのために、収容能力を超えた軍艦を収容して、軍基地や軍港を無意味にオーバーワークにさせて、エオニア艦隊の奇襲すら許している。

アキオから、『国の統治者たる者は、とにかく沢山の人と接して、その人物を良く見て下さい』と言われたので、パーティーの際に話をしてみたのだが、下らないおべっかばかりで、時間の無駄であった事がわかっただけであった。

ウォッカ大将、ジンロ中将、ルフト中将、ウォルコット中将、タクト、レスター、アキオ。

新しい皇国軍の核となるのは、これらの人材であろうと思っていた。

また、政治的な人材は、これからの宿題であろうと思っていた。

「あれ？」

「どうしたんだ？　ココ」

「ポイントＲ３７１に一部の艦艇が終結、エオニア艦隊に向けて砲撃を開始しました！」

それは、素早くアキオが纏めた第四分艦隊であった。

少ない戦力であったが、巧みに回避行動を取りつつ、エオニア艦隊の弱点を狙ってピンポイントで砲撃を行っていた。

「上手いな。あいつ」

「レイトンだろう。さして、驚くに値しないさ」

今では、アキオに含む部分の無くなったレスターは、アキオの艦隊指揮能力の高さを素直に感心していた。

「第３方面軍第四分艦隊旗艦パルカルから通信です！」

「ココ。メインスクリーンに映してくれ」

タクトの命令で、ココが通信映像をメインスクリーンに映すと、そこには予想通りの人物がいた。

第一種軍装が、自分よりも遥かに似合っているアキオ・レイトン准将その人であったのだ。

「さすがだな。お前が元気だから、エオニア艦隊の砲撃がかなり分散されて、民間船の避難と他の戦力の集結が早まっている」

「この大惨事で、功労者なんていないな。それよりも、シヴァ皇子

はご無事なのだろうな？」

「余は、ここにいるぞ」

「ご無事で安心しました」

メインスクリーン上のアキオは、シヴァ皇子に対し恭しく頭を下げていて、それをタクトは苦笑しながら見つめていた。

アキオは、家庭教師の時間などでシヴァ皇子と一緒にいる時は、かなり毒舌だったりするのだが、公式の場では、彼はその容姿の良さと、立ち振る舞いの華麗さから、途端にシヴァ皇子の忠実な家臣となってしまうのだ。

「余は軽い神輿ゆえに、逃げるのが早いのだ」

ちょっと前までは、神輿扱いされると激怒するシヴァ皇子であったが、今では軽く嫌味を言えるほどまでに図太くなっていた。

「それは、大変に上場でございます。遥か昔、人類の故郷である地球にあった日本という国を統一しかけたノブナガ・オダという人物は、次の機会を得るために、躊躇する事なく負けた戦場から逃げ出したそうでございます」

「見習えと？」

「はい。戦など周到に準備していても、勝てる時は勝てますし、負ける時は負けるものです。問題は、負けた時に再起不能にならない事ですから」

「なるほどな。それで、ファーゴへの救援は可能か？」

「無理ですな」

アキオの後ろでは、通信中の指揮を任されたアイウッド少佐が大声で各艦に矢継ぎ早に命令を出していた。

「そうか・・・・・・」

シヴァ皇子が、懸命にファーゴいる市民達への救援方法を考えていると、そこにもう一つ通信映像が割り込んでくる。

各被害箇所の応急処置を指示しながら、ようやくに中央管制室に到着したルフト中将であった。

「タクトは、無事か？」

「ええ。現在、エルシオールにいますから。それと、各紋章機の発進準備も完了しています」

「そうか。さすがだな。タクトは。おおっ！　シヴァ皇子もご無事でなりよりです」

エルシオールのブリッジ内にシヴァ皇子の姿を確認したルフト中将は安堵の表情を浮かべていた。

「それは良いのだが、第四分艦隊以外の戦力はどうなっておるのだ？」

「それにつきましては、ジーダマイヤ大将が旗艦ベルリンへと到着なされたので、すぐに応戦に出るそうです。我が艦隊は、さほどの規模ではないので、現在、避難する民間船の誘導や、ファーゴでの

救援活動に就いております」

隻数が僅か十隻程度で、旧式艦艇が多いルフト中将の艦隊は、エオニア艦隊との直接交戦を避け、木村副司令指揮の元、避難する民間船の支援や、ファーゴ外壁での救援活動に終始していた。

「遅いな。レイトンに比べると」

シヴァ皇子は、ジーダマイヤ大将の対応の遅さに苛立つばかりであった。

「それよりも、シヴァ皇子には他に船を回しますので、早目に他の惑星に避難していただきたく・・・・・・」

「余は、エルシオールに残るぞ」

「ですが・・・・・・」

「現時点で、一番安全な船だと思うがな」

確かに、シヴァ皇子の言う通りであった。

ルフト中将の艦隊は、一番大きい船で巡洋艦であったし、それもかなり旧式の部類に属する船であった。

となると、残りはアキオが臨時に指揮を執っている第四分艦隊か、ジーダマイヤ大将指揮下の残りの第3方面軍艦隊となるのだが、アキオは既にエオニア艦隊に猛然と反撃を開始していたし、ジーダマイヤ大将は語るまでもないであろう。

となると、やはり一番安全な船は、自然とエルシオールに固定されてしまうのだ。

「わかりました。シヴァ皇子の思うままに。では、私は色々とやらねばならない事が多いですので・・・・・・」

結局、ジーダマイヤ大将とその側近を除くと、無事に自分の船にたどり着けた高級将校はさほど多くなかったらしい。

そこで、急遽、軍基地の司令部要員を船に回して指揮を執らせるため、中央管制室などのコントロールをルフト中将に任せるという事態に陥っていた。

これは、本来であればあり得ない話なのだが、『元は白き月の防衛司令官であるルフト中将は、現在どこの部隊にも所属していないはずだ』というジーダマイヤ大将の言によって、この決定はなされていた。

「アキオ。生きておるか？」

「ええ。エオニア艦隊のビームとミサイルが、涼風のようですよ」

一旦、エルシオールと通信を切ったルフト中将は、次にアキオの座上するパスカルへと通信を入れる。

第3方面軍で唯一まともにエオニア艦隊と撃ち合っている第四分艦隊は、苛烈な反撃を食らっててんてこ舞いの状態にあった。

「じゃが、意外と損害が少ないの」

「お互いに、遠距離砲撃に終始していますからね。時間稼ぎです」

数の差が圧倒的だったので、アキオは決して無理をしなかった。

それに、一定の時間さえ稼げれば、次の展開が訪れる事は確実であったからだ。

「さすがだな。第四分艦隊の精鋭諸君・・・・・・っ！　レイトン！　貴様！」

次に通信を入れて来たのは、ようやくに戦力を纏める事に成功したジーダマイヤ大将であった。

だが、彼は第四分艦隊の指揮官が、子飼いのバルサミコ少将でなくてアキオであった事を知らなかったらしい。

その表情は、全て驚きで占められていた。

「バルサミコ少将以下、艦隊司令要員が不在だったので、急遽指揮を執らせていただきました。責任は、全て自分にありますので、後の処罰は私だけに・・・・・・」

恭しく頭を下げるアキオに、ジーダマイヤ大将は内心で歯軋りしていた。

いくら自分が悪かったとはいえ、先日の事件で目の前の若造に顔の骨が折れるまで徹底的に殴らたからだ。

好印象など、持てようはずもなかった。

だが、その件で自分がアキオを処罰する事などは、まず不可能であった。

それは、シヴァ皇子が自分の怪我を、エルシオール艦内での転倒事故だと公式に発表してしまったので、それに異を唱えれば、自分もアキオを冤罪で処刑しようとした件で責任を取らされてしまうからであった。

「また指揮権を混乱させおったな！　この戦闘後に覚悟しておくがよい！」

「まあ。待て」

ジーダマイヤ大将は、激高する自分の参謀長を止めに入った。

「ですが、閣下！」

「今は、平時とは違う。緊急事態なのだ。多少の臨機応変さを心掛けねば、エオニアには勝てないからな。しかし、さすがだな。レイトン准将」

「いえ。自分は戦力を纏めただけですので」

ジーダマイヤ大将は、ウォッカ大将にはバカにされていたが、一応は大将にまでなっているので、そこそこは計算の出来る男であった。

本来であれば、港で無為に失われた戦力をアキオが纏めてくれたのだ。

それに対して、文句を言っても仕方がないと考えていた。

寧ろ、褒めて利用すべきだと考えていたのだ。

そもそも、アキオは自分の将来のライバルたり得なかった。

いくら後にシヴァ皇子に不問とされたとはいえ、アキオは自分に大怪我をさせている。

これは、軍という組織において、後に絶対に不利になる条件であった。

というか、アキオ自身が、既に軍内部での栄達に興味が無いという事の証明でもあろう。

昇進や栄達に興味が無いから、感情を優先させて自分を殴った。

普通なら、我慢してこれを借しにするはずだからだ。

それに、聞けば、彼は運命の気紛れによってかなりの資産家であると聞く。

多分、二十代で将官として退役し、そのまま実業家としての道を歩むのであろう。

そう考えると、これ以上敵に回しても仕方がない人物でもあった。

「多少、損害を受けているらしいな」

「まだ大丈夫ですが」

「エルシオールには、シヴァ皇子がいらっしゃる。援護せよ。私は残りの戦力でエオニア艦隊を殲滅する」

「了解しました（戦術家としては、普通なのか・・・・・・）」

ジーダマイヤ大将は、アキオが指揮する第四分艦隊にエルシオールの護衛を命ずると、残り全ての戦力で反撃を開始する。

他にも、いくつかの星系から援軍を得ていたので、ファーゴを砲撃するエオニア艦隊より数において優勢であったし、ジーダマイヤ大将の子飼いの幹部達にもそれなりに人材はいたので、戦況はかなり優勢であった。

「何だ。ちゃんと、普通に指揮を執れるじゃないか」

「そりゃあ、艦隊司令部には人材がいますからね（この人より上は、いないだろうけど・・・・・）」

第四分艦隊を、エルシオールの近くに移動させるようにアイウッド少佐に命令すると、二人は暢気にジーダマイヤ大将の戦いを見物していた。

「でも、意外でしたね。我々も、攻撃に加わるものだとばかり」

「俺やルフト中将が、これ以上戦果をあげるとヤバいからな。それ

よりも、少佐にこそ悪い事をしたな」

「いえ。生き残れれば勝ちですから」

最近、失態続きのジーダマイヤ大将としては、ここで良い所をシヴァ皇子に見せておかないとという事なのであろう。

だから、ルフト中将には地味な中央管制室に、アキオは後方でシヴァ皇子のいるエルシオールの護衛という役割分担となっていた。

「レイトン准将。エルシオールが見えました」

「エルシオールを取り囲むように、輪形陣を組め。細かい配置は、アイウッド少佐に任せるよ」

「了解です。陣形は、ハの１２でいい。駆逐艦バーモントのいない所は、駆逐艦ヘンリーを、巡洋艦ハリモンドがいない所は、同じく巡洋艦スマトラを入れろ。多少、不恰好だが仕方がないな」

旗艦の副長で少佐でしかないアイウッド少佐であったが、やはり彼は艦隊の業務をかなり熟知していた。

つまり、それだけ、ここの司令部の人員は無能揃いだったという事であろう。

ジーダマイヤ大将は、使える人材を自分の中心に置き過ぎているようであった。

「配置完了しました」

「早いな」

「まあ。その辺は、大人の事情という事でして・・・・・。とこ

ろで、あれが例の紋章機ですか。噂では、パイロットは全員美少女だそうで？」

「噂ねえ・・・・・・」

フォルテが美少女かどうかは、非常に微妙というかそれは無かったが、彼女も間違いなく美女ではあったので、アイウッド少佐の聞いた噂は別に間違いではなかった。

「軍隊ってのは、潤いが少ないですからね。この手の話題は広がり易いんですよ」

そんな話をしている内に、フォルテ達は既に出撃していて、エルシオールの直衛任務に就いているようであった。

「こちらは、ムーンエンジェル隊隊長のフォルテ・シュトーレン中尉です。レイトン准将閣下。エルシオールの直衛任務、ご苦労とのシヴァ皇子からの伝言です」

アキオがふとブリッジの外を見ると、そこにはハッピートリガーが目視可能な距離にいて、彼女は律儀にこちらに通信を入れて来ていた。

「第四分艦隊司令代理のレイトンだ。ムーンエンジェル隊と共に戦える事を嬉しく思う。というか、今更だな。お互い新鮮味も無くなったしな」

「何だい。一応は、上官殿に気を使ったのに」

アキオは、事前にアイウッド少佐達に一言言い渡していた。

それは、紋章機がパイロット達のテンションによって性能が左右されるので、エルシオール流のやり方を見ても、決して彼女達にケチを付けたり、上官風や先輩風を吹かせて説教などをしないようにという物であった。

「それよりも、英気を養っておけよ。次があるからな」

「ジーダマイヤ大将が戦っているのは、やっぱり前衛程度の戦力かね？」

ジーダマイヤ大将の艦隊に比べると数が貧弱な、ファーゴを奇襲したエオニア艦隊は、ジーダマイヤ大将の積極的な攻勢の前に、次々にその数を減らしていた。

「えっーーー！　まだ、敵さんは来るんですか？」

「敵さんって・・・・・・」

続けて通信を入れて来たミルフィーユの全く軍人らしくない言動に、アイウッド少佐は開いた口が塞がらない状況になっていた。

「多分、来るな。だから、疲れないように待っているんだよ」

「はーーーい。了解です」

「ちょっと、ミルフィー。あんた。軍人としての自覚に欠けるわよ。少しは自重しなさい。へえ。意外と似合っているじゃないの。ちゃんと指揮官って感じするわよ。アキオ」

「まさか、ランファに褒められるとはね。雪でも降らないといいけ

ど」

「あんたねえ。素直に褒めているんだから、喜んでおきなさいよ」

「アキオって・・・・・・。上官を、名前で呼び捨て・・・・・・」

「ああ。エルシオールでは、標準仕様だな」

アイウッド少佐は、今までに自分が軍人として築き上げてきた何かが、急速に崩れていくような感覚に見舞われていた。

「アキオさん。ご無事でしたか？」

続いて、ヴァニラがハーベスターから通信を入れて来る。

「ああ。ピンピンとしているよ」

「良かったです」

「あの・・・・・・。あの子は、何歳なんですか？」

「十二歳だ」

「俺の息子よりも、年下なのか・・・・・・」

アイウッド少佐は、世の中には聞かない方が幸せな事もあるという事をその肌で直接感じていた。

「アキオさん。ご無事で何よりですわ」

「ミント。調子はどう？」

「はい。おかげ様で、絶好調です」

最近、アキオ争奪戦でランファやちとせに遅れを取っている事を自覚していたミントは、先ほどアキオにおんぶされてかなりご機嫌であった。

本当は、お姫様抱っこの方が良かったのだが、それは贅沢を言い過ぎであろうとも思っていた。

「アキオさん」

「やあ。ちとせ・・・・・・さん」

最後に通信を送って来たちとせは、表面上は普通に笑顔を浮かべていた。

ただ、その背後からはアキオが言葉に詰まるほどの暗黒色のオーラが噴き出していた。

どうやら、先ほどミントをおぶった事にかなり腹を立てているらしい。

「えーーーと・・・・・・。調子は？」

「はい。おかげ様で」

ちとせが、シャープシューターの超長距離レールガンを発射すると、それはジーダマイヤ艦隊と交戦中のエオニア艦隊の戦艦の機関部に直撃し、その戦艦は一瞬にして爆散してしまう。

どうやら、彼女は別の意味で、ハイテンションな状態にあるようであった。

「あんな遠距離から・・・・・・。ところで、彼女達がムーエンエンジェル隊なのですね？」

「そういう事になるね」

「では・・・・・・」

「彼女達が、常に最高のコンディションで戦えるように心のケアまでバッチリと行う。これが、ムーエンジェル隊の司令官に求められる才能だ」

「（そんなの、無理に決まっている。俺は、最近年頃の娘にすら避けられているのに・・・・・・）私は、地道に艦隊任務で頑張ります」

あんな大変そうな任務は、女好きと評判のタクト・マイヤーズと、今、目の前にいる若者に任せてしまおう。

そう考えるアイウッド少佐であった。

「ファーゴを砲撃していたエオニア軍艦隊は、ほぼ全滅しました！　いえ！　訂正します！　また後方より多数の艦隊出現！　更に、五つの高エネルギー反応！　速い！」

「シムス高速戦闘機ではないのか？」

「エネルギー量、スピード共に、大きくそれを上回っています！

この反応パターンは、寧ろ紋章機に近い！」

「出やがったな。この忙しい時に・・・・・・」

ジーダマイヤ大将の攻勢により、一旦は全滅したエオニア軍艦隊であったが、エオニアは間断無く次の戦力を投入して来た。

更に、新手の戦力には、紋章機に似たエネルギー反応を持つ敵すらいる。

戦況は混迷を極めるが、戦いは始まったばかり。

果たして、タクト達は生き残る事ができるのであろうか？

それは、まだ誰にもわからない。

第十三話

（エオニア旗艦ゼルブリッジ内）

「ほう。ジーダマイヤめ。意外と粘るじゃないか」

「お兄様。何を見ているの？」

「昔の知り合いの奮闘ぶりをだよ。ノア。最後の足掻きとも言うがね」

まだトランスバール皇国軍側に探知されていなかったが、新手の艦隊の後方には、一つの巨大な人工天体がその存在感を誇示するかのように遊弋していた。

《黒き月》。

それは、いつの時代に作られたのか定かではなかったが、白き月と対の存在である事が、一部では知られている物であった。

この巨大な、無人の軍事工廠を兼ねた人工天体は、極端に付き従っている人間の少ないエオニアにクーデターを決意させた打出の小槌であり、彼の自信の根源とも言えた。

「お兄様。もっと、戦力を出さなくていいの？」

黒き月では、戦闘艦艇が続々と生産されている状態なので、エオニア達にはあまり戦力を惜しむという考えは無い。

例えば、こちらが五隻の無人艦を失ったとしても、向こうが一隻の訓練された軍人を乗せた船を失えば、損害率の差で自分達の方が圧倒的に優位であったからだ。

「あの豚が、連勝して幸福の絶頂にいる所を一気に落す。余を愚弄した下衆と、それに従う雑魚達に相応しい最後だと思わないかい？　ノア」

「それもそうね。お兄様」

エオニア旗艦ゼルのブリッジ内で、エオニアは一人の少女と話をしていた。

この見た目が十歳ほどにしか見えない金髪の少女は、実はこの黒き月の管理者であった。

白き月を管理するシャトヤーンと同等の存在と思われるノアであったが、シャトヤーンがクローン技術の応用による代替りを、一定周期で行っているのに対し、ノアは黒き月の定期的なメンテナンス時以外は常にコールドスリープを行っていたので、一度も代替りせずに、数百年前から幼い外見のままであった。

五年前の反乱失敗後、シェリーなどの僅かな側近達と共に名も無き星を彷徨っていたエオニアは、偶然この黒き月を見つけ、その施設内でコールドスリープをしていたノアと出会っていた。

そして、不思議な事に、ノアは自分を目覚めさせたエオニアを《お兄様》と呼んで無条件に力を貸してくれたのだ。

『これを幸運と呼ばずに、何を幸運と呼ぶのか？　いや、これは自分がこの宇宙を治めるようにという神の啓示なのだ』

そう悟ったエオニアは、黒き月で多数製造された無人艦隊を率いて、自分の故国であるトランスバール皇国に侵攻していた。

「まあ良い。あの豚には、もう少し命の猶予を与えるとしよう。と

ころで、ノアは新しい玩具を作ったそうだね？」

「ええ。エルシオールに遊びに行って、ちょっと紋章機見て来たの。それでね。近くにいたお兄さんに、『紋章機を頂戴』って言ったんだけど、断られちゃった」

「ほう。お兄さんか。誰だったのかな？」

「多分、タクトという人だと思うよ。お兄様」

エオニアは、黒き月を頂点とするロストテクノロジーを管理するノアの能力にただ驚くばかりであった。

原理は不明で多少の制限はあったが、ノアは好きな場所に自分の分身のような存在を送り、そこで五感を働かせて偵察を行ったり、そこにいる人物とコミュニケーションを取ったりする事が可能であったからだ。

ノアは、今までに大きな戦果を挙げている紋章機に大きな興味を抱き、その情報を集めに行く過程で、偶然に会ったタクトと多少の話をしたらしい。

「タクト・マイヤーズは、どうだった？」

「わからない。優しそうだけど、あまり有能に見えないし。顔も、お兄様の方が確実に上よ」

「お世辞でも嬉しいな。ノア。それで、その新しい紋章機を試したいのだろう？」

「ええ。でも、新しい分、こちらの方が性能が良いはずだから、圧勝だと思う。操縦するあの部品達が、多少劣っていてもね」

「ノア。あまり彼らに、そんな事を直接言ってはいけないよ」

「下らないプライドを刺激するから？」

「そんな所さ。聞こえるか？　ヘル・ハウンズ隊」

ダークエンジェルと呼称される事が決まった、黒き月側の紋章機の発進準備を行っているカミュ達にエオニアが通信を入れると、彼らは誰が見てもわかるほどにご機嫌であった。

「これは、エオニア様。我々に結構な機体をお与えいただき、感謝の言葉もございません」

画面の向こうに映し出されたヘル・ハウンズ隊隊長であるカミュは、エオニアに対し恭しく頭を下げていた。

「諸君らの奮戦に期待しよう」

「この機体さえあれば！」

ギネスは、このダークエンジェルさえあれば、今まで惨敗続きのランファに一泡吹かせられると大喜びであった。

「今までは、ムーンエンジェル隊の紋章機に、性能差で押されていたからね。これで、互角以上に戦えるね。（それに今まで気が付かないお前は、やはり上に立つ資格は無いよ！　エオニア！）」

野心家であるリセルヴァは、内心でエオニアに悪態をつきつつも、ダークエンジェルの高性能ぶりを高く評価していた。

「新しい剣は、上々だ」

元々無表情で寡黙なレッド・アイは、この一言しか口にしなかったが、自分達の新しい剣であるダークエンジェルを気に入ったらしい。

「これさえあれば、ムーン・エンジェル隊なんてイチコロだね。ヴァニラ・アッシュの慌てふためく顔が目に浮かぶようだよ。

ベルモット・マティンは、自信満々にライバルであるヴァニラに対する勝利宣言を行っていた。

「では、その力を存分に示すが良い」

「「「「了解！」」」」

黒き月の管理者であるノアから新しき剣を得たヘル・ハウンズ隊は、遥か後方にいるムーンエンジェル隊に向かって全速力で出撃するのであった。

「「「「またか。あのストーカーども・・・・・」」」」

奇しくも、同じ船と違う船にいるタクト、レスター、エリオス、アキオは、ほぼ同じタイムングで同じセリフを口にしていた。

後方より、紋章機に匹敵するエネルギー反応とスピードを持つ大型戦闘機クラスの反応が五つという事で、すぐに『あの連中ではないのか？』と思ったのだ？

「アルモ。その五つの反応は、ジーダマイヤ艦隊への攻撃に向かったのか？」

「いえ。真っ直ぐに、こちらに向かって来ます」

「やはり、あの連中か・・・・・・」

タクトは、もしヘル・ハウンズ隊が、エオニア艦隊と交戦中のジーダマイヤ艦隊への攻撃を意図していたのなら、ムーンエンジェル隊をその阻止に向かわせようと思ったのだが、それは自分の杞憂であったらしい。

それとも、そのエネルギー反応からして明らかに新型兵器を渡されたと思う彼らは、最初にライバルであり最高性能の兵器である紋章機を有する自分達に対峙するように命令されているのか？

それとも、エルシオールにシヴァ皇子がいると確信しての、殺害及び捕縛命令を受けているのか？

いや、逆にアキオが臨時に指揮権を掌握した第四分艦隊の行動を見て、シヴァ皇子がエルシオールにいると思われたのかもしれない。

どちらにしても、タクトはアキオに文句など言うつもりもなかった。

そんな事は、隠していてもエオニアにはすぐにバレてしまうであろうし、何しろ、あれだけの戦力を次々に繰り出す連中なのだ。

この宙域からの撤退を完全に確認できない限り、シヴァ皇子を乗

せたこのエルシオールを単艦にする事など絶対に出来なかった。
そして、それと同時にこんな事も考えていた。
もし、今は後方にいるエルシオールに危機が迫った場合、アキオは躊躇する事無く自分と第四分艦隊を盾にして自分達を逃すであろうと。
アキオは、皇族や貴族の大半を嫌っていたが、唯一の例外が自分とその横にいるシヴァ皇子であった。
始めは、シヴァ皇子を皇国の新しい旗頭に相応しい人物か値踏みしている部分もあったし、かなり毒舌でぞんざいな口を聞く事もあったので内心ハラハラしていたのだが、今では、シヴァ皇子の一番のお気に入りの家臣であろうと断言できた。
先代の故ジェラール皇王時代ではあり得ない、媚びないゆえに気に入られた非常に稀有な存在こそが、アキオという人物であったのだ。

「ムーンエンジェル隊のみんな。あの五機の大型戦闘機を、エルシオールに近づけさせるな！」

「「「「「了解！」」」」」

「アルモ。敵大型戦闘機のデータ収集を怠るなよ」

「了解です」

タクトの命令により、ミルフィーユ達はヘル・ハウンズ隊の迎撃に向かうのだが、その戦闘はまたもや一方的な展開となるのであった。

「やあ。マイスイートハニー。ミルフィー」

「いい加減にしないと、警察を呼びますよ！」

「あのね。ミルフィー。それは、無理だから」

「だって、ランファ！」

「早目にお引取り願いなさい。私も、そこの絶叫バカを早めに追っ払うから」

「誰が、バカだぁーーー！」

「あんたは、存在自体がギャグなのよ！」

ミルフィーユは、コックピット内に映る無意味に宇宙バラを加えて自分にポーズを取るカミュに生理的嫌悪感を感じていた。

カミュは、見た目は非常に美男子なのだが、その偏執的でナルシストっぽい言動でかなり損をしている部分があったのだ。

一方、同じく自分を執拗に狙うギネスと対峙したランファも、彼のしつこさにそろそろ我慢の限界が訪れていた。

「（同じ美男子でも、クールダラス副司令は、クールで知的系。エリオスさんは、芸術家肌だけど優男系。アキオさんは、いつもは優しいけど、ここぞという時にはとても頼りになって、でも少し影があって・・・・・）私の周りには、優しくて格好良い男の人が沢山いるから、あなたなんてお呼びじゃないんです！　ハイパーキャノン！」

そこには、なぜは自分の想い人であるタクトは入っていなかったが、それとこれとは別という事らしい。
女性という生き物は、実に複雑であった。

「くっ！　損傷が大き過ぎる！　今日は、ダークエンジェルの性能テストが主目的だから無理は禁物だね。撤退だ。ミルフィー。僕以外の男に殺されないでくれよ」

「二度と来ないでください！」

「ぬぅぉーーー！　撤退だぁーーー！」

「あんたは、五月蝿いだけなのよ！」

紋章機の過去の戦闘データを元に、その性能を上回るように作られたダークエンジェルであったが、実戦では呆気ないほど簡単に敗退する羽目となっていた。
というか、タトク、レスター、アキオ、エリオスなどの普通に教育を受けた軍人であれば、最初からわかっていた事なのだ。
まず第一に、いくら多少性能が上でも、ヘル・ハウンズ隊は五機でムーンエンジェル隊は六機で戦っていて、性能差を数で補えた事。
第二に、特に自分を付け狙う敵がおらず、常にフリーハンドを握っているのが一番遠距離戦闘に長けたちとせであったので、ヘル・ハウンズ隊はミルフィーユ達と対峙する前に、彼女の遠距離砲撃で損傷を受けていた事。
第三に、ミルフィーユ達は各々の個性に合わせた様々なタイプの紋章機を運用していたが、彼らは全て同一機であるダークエンジェルを操縦していて、更に今日がダークエンジェルを用いた初の実戦であった事。

最後に、ヘル・ハウンズ隊は各々がムーエンジェル隊の誰か一人に異常に拘っているので、目標に集中し過ぎて連携など絶対にしなかった事など。
誰がどう考えても、ヘル・ハウンズ隊に勝ちはあり得なかったのだ。

「成り上がりの癖に！」

「では、お聞きしますが、リセルヴァさんの本名をお聞かせ願えますか？」

「そんな物を聞いてどうするんだ？　ミント・ブラマンシュ」

「ブラマンシュ財閥の情報力を用いて、リセルヴァさんがどこの偉大な貴族様だったのか、それとも皇族のご落胤なのか調べて差し上げますわ」

「無用な事だ。僕が、高貴な家の生まれである事は確かだからな」

「なら、ご自身の出自を明らかにされても問題は無いかと思われますが。もしかして、過去に多数いらした経歴詐称とか・・・・・・」

「抜かせ！　成り上がりの癖に！」

「まあ。図星だったのですね。とても、お可哀想な人」

「ミント。言う事がキツイわね」

「でも、紋章機の状態は最高みたいだよ。ランファ」

既に、カミュとギネスを退けているミルフィーユとランファは、ミントとリセルヴァのやり取りを冷や汗を流しながら見ていた。

「ちっ！　今日は、ダークエンジェルの調子を確認するだけだからな・・・・・・」

「それを、世間では負け惜しみと言うのですわ」

「覚えてろよぉーーー！　ミント・ブラマンシュ！」

リセルアヴァは、捨て台詞を吐きながら撤退を開始する。

「本調子では無いのか・・・・・・」

「あんたと言い、仲間たちと言い、連携とか、もう少し何とかならないのかね？」

「撤退する・・・・・・」

必要な言葉以外、あまり話さないレッド・アイもこれ以上自分のダークエンジェルを傷付けたくなかったのか、呆気ないほど簡単に引き揚げてしまう。

「ヴァニラ・アッシュ！　このダークエンジェルさえあれば、お前なんて補給も修理も出来ないただの役立たずさ！」

ヘル・ハウンズ隊の最後の一人であるベルモットは、ヴァニラを集中的に狙って攻撃を繰り返すが、その攻撃はヴァニラに余裕を持ってかわされていた。

初めての綺麗なドレスとアクセサリー、エリオスの優しい言葉と

エスコート、更にミントと同じようにエルシオールへの避難時に彼に背負われたヴァニラは、今幸福の絶頂にいて、ハーバスターは今までに無い最高性能を発揮していた。

「うざい・・・・・」

「覚えてろよぉーーー！　ヴァニラ・アッシュ！」

ヴァルモットも、どこかの悪役のような捨て台詞を吐きながら撤退してしまう。

「ムーンエンジェル隊のみんな。ご苦労様」

タクトは、ヘル・ハウンズ隊の撤退によって一時的に静かになった宙域で、ムーンエンジェル隊の面々に労いの言葉をかける。

だが、エオニアの次の一手まで、大した時間は残されていなかった。

「ふはははは！　エオニア恐れるに足らず！　これで、我が艦隊の三連勝ではないか！」

「これも、ジーダマイヤ閣下のご威光のおかげかと」

「このまま艦隊をトランスバール本星に向け、エオニアの首を獲っ

てくれるわ！」

先日の掃討戦、衛星都市ファーゴを奇襲した艦隊、次に現れたエオニア艦隊と、これで対エオニア戦三連勝目のジーダマイヤ大将は、今幸福の絶頂にいた。

エオニアのクーダター以降、ムーンエンジェル隊を除き、これほどの戦果を挙げた軍人は、自分以外には存在しなかったからだ。

ジーダマイヤとて、それなりの能力を持つ軍人であったので、ライバルであるウォッカ大将の裏方仕事の重要さは理解している。

だが実際に、軍人達の仕事を評価するのはまだ幼いシヴァ皇子で、子供の彼に後方支援や裏方仕事の重要さを教えても、まだ理解できないであろうと考えていたし、子供という物は敵を粉砕する軍艦を格好良く思うものだ。

それに、子供だけではない。

自分達は何もしない癖に、このクーデター騒ぎが早く終結する事を願っている市民達も、ほぼ同等だと思っていた。

《愚民》。

そう、彼らは愚民なのだ。

愚かな民と書く愚民達は、見た目の華麗さや目先の利益に囚われ、大切な事や物を失う可哀想な連中なのだ。

だからこそ、選ばれし貴族階級出身である自分達が導いてやらねばならない。

彼らが、道を誤らないようにだ。

「エオニアの首さえ獲れば良いのだ。いくら、ウォッカ達が戦力の整備や補給の確保を適切に行っても、そんな事は市民には理解できない。愚民達は、『エオニア艦隊が、ジーダマイヤ艦隊の猛攻によって潰滅！』の新聞記事に大喜びし、私を一番上に引き上げてくれる。裏で動くウォッカなど、陰謀家扱いされて人気など出ようはずもない」

「ジーダマイヤ閣下の慧眼には、いつも驚かされます」

この参謀長も、そろそろ潮時だとジーダマイヤ大将は思っていた。従順なので重用していたが、自分が次のステップに上がる際には不要になる人物しかなく、年齢も年齢だったので、エオニアを討った後には、適当に美田を与えて引退させようと考えていた。

エオニアを討ち、その功を持ってまずは宰相の地位に就く。

それから、まだ幼いシヴァ皇子と自分の孫娘を結婚させれば、自分はシヴァ皇子の外戚として力を振るう事が出来る。

自分が、皇国の実質上の支配者となれるのだ。

そんな未来予想図を描いているジーダマイヤ大将であったが、それは僅かな時間で破られる事となる。

「前方に、巨大なエネルギー反応！　そして、それを取り囲むように多数の艦隊反応を確認！　数が多過ぎて数え切れません！」

半ば絶叫に近い声で報告を行う索敵担当士官の声に反応して、ジーダマイヤ大将が前方を見ると、そこには白き月を越える大きさの人工天体と、それを取り囲む圧倒的多数の無人艦隊が目視可能な距離にまで接近していた。

「さて、チェックメイトだな。ジーダマイヤ」

「あらあら。あんなに慌てちゃって」

いきなり現れた多数の敵軍に、ジーダマイヤ艦隊は大きく混乱していた。
圧倒的な数の差があるうえに、二度の連戦で軍人達が疲弊し、艦自体のエネルギー量と弾薬残量も、残りがかなり少なくなっていたからだ。
更に、焦った彼らは、相次いで旗艦ベルリンに次の命令を請うが、それらは全てエオニア達に筒抜けであった。

「ノア。もはや目障でしかないカス共を消してくれるかい？」

「任せて。お兄様」

エオニアの隣にいたノアは、そこから急に消え、次の瞬間には、黒き月の中心部にあるコアと呼ばれる赤い制御クリスタルの内部にまで移動していた。
そして、移動を終了させたノアが片手をジーダマイヤ大将座上のベルリンへと向けると、黒き月は自身が装備している高出力エネルギー砲の発射準備に入る。

「敵巨大人工天体より、高出力のエネルギー反応を確認！　出力は更に増大中です！」

「狙われているのは・・・・・・」

アルモの報告を受けたタクトは、最後まで言葉を発する事が出来なかった。
それよりも早く発射体勢を整えたノアが、黒き月の高出力エネルギー砲を発射したからだ。

「回避！」

「クールダラス副司令！　敵の標的は、エルシオールではありません！」

「らしいな・・・・・・」

レスターの視線の先には、第３方面軍旗艦ベルリンとその周辺の艦艇十数隻を一瞬の内に蒸発させ、大損害を受けて混乱しているファーゴに巨大な風穴を開け、惑星ロームの地表を広範囲に渡って砕き外見を変えてしまった、黒き月の高出力エネルギー砲の禍々しい姿が見えていた。

「これほどまでに、圧倒的とはな・・・・・・」

「タクト。どうするんだ？」

さすがのタクトとレスターも、これには大きなショックを受け、珍しく次の指示が遅れる要因となってしまう。

「エオニアは、何を考えているんだ？　必要以上に、市民達の犠牲を増やして・・・・・・」

「タクトさん。こんな事って・・・・・・」

「やってくれるわね！」

「逆らう者は、《全て死》なのではないですか？　フォルテさん」

「そんな・・・・・・。沢山の人達が・・・・・・」

「許されざる暴挙です！」

さすがのムーンエンジェル隊にも、目の前の惨劇にかなり動揺しているようであった。

しかも、彼女達は、前に同じくエオニアに無残に焼かれた首都星トランスバールの惨状を直に目撃しているのだ。

二度目の惨劇を防げなかったショックは大きかった。

「（ミルフィー達の動揺が大きい。だが、我々は生き残らねばならない）ムーンエンジェル隊のみんな！　二度目の発射を防ぐべく、黒き月への攻撃を！」

「待て！」

タクトが、エルシオールとムーンエンジェル隊への黒き月への攻撃命令を下そうとしたその時、ブリッジのメインスクリーンには、厳しい表情をしたアキオの姿が映し出されていた。

「敵人工天体より発射された高出力エネルギー砲は、ジーダマイヤ艦隊を直撃しました！」

「やはり、第一目標は、ジーダマイヤ大将だったか・・・・・・」

黒き月より高出力エネルギー砲が発射された直後、エルシオール

と同じく、第四分艦隊旗艦パルカルにも大きな動揺が広がっていた。
一番のベテランであるアイウッド少佐も、他の連中と同じであったのだが、彼は意地でもそれを表に出すまいと決意していた。
なぜなら、自分の隣にいるアキオが、全く動揺を見せていなかったからだ。

「なぜ、そうお考えです？」

「二度も丁寧に囮を蒔いたからだ。それらを撃破して幸福の絶頂にいるが、戦力は多少疲弊しているジーダマイヤ大将を一気に屠る。実に、意地の悪いやり方だ」

「そうですね。それと、実際にファーゴが奇襲されているのですから、反撃をしないわけにもいかない」

「副長は、話が早くて助かるな。つまり、これらは全て圧倒的戦力を持つエオニアが用意した、彼しか戦略的勝利を得られない、我々にとっては死のフィールドなんだ」

アキオの言う通りに、戦況は最悪であった。
同じ最悪でも、まだ先程の方がまだマシだったのだが、今では最悪すら通り越して、絶望的とも言えるであろう。

「それで、いかがなされます？」

「逃げるしかない。少しでも、戦力を持って」

「出来ますか？」

「いや、無理だ」

確かに、アキオの言う通りであった。
この惑星ローム周辺を掌握していたジーダマイヤ大将は、その幕僚達と蒸発して消滅し、大穴を開けられて放棄する以外に策は無いファーゴの中央管制室に詰めていたルフト中将は、現在連絡不能な状況となっている。
更に、ロームの裏側に退避中の民間船や損傷した軍艦は、今では退却の足手まといでしか無かったからだ。

「ところで、主を失った第3方面軍艦隊はどうなっている?」

「それが、第二分艦隊のニュクマム少将と、第三分艦隊のナンプラー少将がお互いの優先権を譲らず・・・・・・」

「バカか！　ただ指揮権の継承順位に従えば良いだけじゃないか！」

「先任はニョクマム少将なのですが、彼は男爵でしかなく、ナンプラー少将は子爵との事でして・・・・・・」

「軍内部で、貴族の階級を持ち込むか？　普通？」

つまり、現時点での第3方面軍は、全く当てになら無いどころか、逆に邪魔でしかない存在であった。

「仕方が無い。エルシオールを逃がす事に全力を傾ける」

「そうですね。シヴァ皇子さえ、脱出に成功すれば・・・・・・」

第3方面軍が全滅しても、まだこちらにはウォッカ大将が掌握している他の方面軍艦隊が多数残っていて、それらを用いればまだ勝

利の可能性は十分に残されていた。
　となると、ここで一番重要となるのは、唯一の皇王継承者候補であるシヴァ皇子の身柄であった。

「では、エルシオールに・・・・・・」

「エルシオールと紋章機は、反撃に出る模様！」

「タクトのバカ野郎が！　エルシオールに通信を入れろ！」

「レイトン准将・・・・・・」

　索敵担当士官の報告が入った瞬間、アイウッド少佐は、激高するアキオの表情を初めて拝む事となったのであった。

「レイトン。どうしたんだ？」

「エルシオールは、この宙域を撤退だ。紋章機は、そのままエルシオールの護衛に就け。巡洋艦二隻を、護衛として貸す」

　、再びエルシオールに通信を入れたアキオは、厳しい表情のままタクトに一言だけこう告げる。
　実際のところ、アキオにエルシオールの指揮権は無かったのだが、アキオのあまりに厳しい表情の前に、レスターですら反論する事が

出来ないでいた。

「だが、ルフト先生や、残された他のみんなは・・・・・・」

「なあ。タクト。俺を失望させないでくれよ」

「レイトン。お前・・・・・・」

タクトは、アキオの考えが手に取るようにわかっていた。

この戦いは、既に自分達の完敗で、今は次の戦いで勝利を得るために、少しでも早く撤退すべきだと言う事を。

だが、現状を考えると、他の戦力の退却は非常に難しい状況となっている。

ならば、自分達が、一番最初に逃がさなければならない者。

それは、皇国の象徴であり、唯一の皇王候補であるシヴァ皇子だという事だ。

そして、それを成すために、他の全てを犠牲にするとアキオは言っているのだ。

「タクト。お前は、シヴァ皇子を守るムーンエンジェル隊の司令官で皇国軍准将でもある。当然、与えられた地位に見合う義務を課せられる。わかるな？」

アキオは、指揮下に置いた第四分艦隊から二隻の巡洋艦を抽出すると、それらにエルシオールの護衛を命じた。

次に、エルシオールを中心とした輪形陣を解き、黒き月のある方向を正面にして偃月の陣形を形成する。

「なぜに、偃月なんです？」

「適当だ。あの黒き月に有効な陣形など、一つも無いからな。陣形を密集させ過ぎると、あの高出力エネルギー砲で一網打尽。離し過ぎると、多数の無人艦隊の砲撃で各個撃破。とにかく、一秒でも時間を稼ぐしかない。運が良ければ、俺達も撤退できるかもな」

「まさか」

「では、命令を拒否して逃げるか？」

「それが、出来れば良いのでしょうが・・・・・・」

アイウッド少佐は、未だに残存戦力を纏められない第3方面軍に、半ば嘲笑を込めた視線を送る。

ジーダマイヤ大将が直接指揮していた第一分艦隊の残存戦力は、誰を指揮官と仰げば良いのかわからずに右往左往し、残り二つの分艦隊は、各司令官同士が自分こそが次席司令官であるとして譲らず、敵を前にしていがみ合っている。

まさか、ここまで無能だとは思わなかったアイウッド少佐であった。

「アキオ！　あんた！　残るって言うのかい？」

「フォルテか。お前は、ムーンエンジェル隊を統率して、エルシオールの撤退を支援しろ」

「バカな事を言うんじゃないよ！」

「バカ？　シュトーレン中尉。君は、誰にそんな口を利いているのかね？」

普段とは違い、軍内での階級差で相手を黙らせて冷徹な表情を崩さないアキオに、フォルテは今の彼がプロの軍人として動いている事を悟る。

そう。

それは、過去の惑星サーヴァントで、ゲリラを銃で狙撃している時と全く同じ表情であったのだ。

「アキオ。あんた・・・・・・。（本気なんだね・・・）いえ。レイトン准将。失礼いたしました」

フォルテは、普通の軍人に戻り、アキオに敬礼をしながら自らの無礼を詫びる。

「一つだけ聞こう。君はなぜ、ムーンエンジェル隊の中で唯一の中尉だと思っている？」

「それは、自分がムーンエンジェル隊の隊長だからです」

「なら、シュトーレン中尉は、中尉としての責任を持て。桜葉少尉達を指揮して、エルシオールを無事にここから逃がすんだ」

「了解しました」

「それと、フォルテ。俺の部屋の机の引き出しに遺言状が入っている。万が一の時は、遺漏無く実行してくれ。以上だ」

「ちょっと！　アキオ！」

フォルテは、アキオからの通信がプツリと切れてしまったハッピートリガーのスクリーンを前に、暫し呆然としてしまいそうになる

が、そんな時間的な余裕は一切存在しなかった。
アキオの行動に不審を抱いたミルフィーユ達が、フォルテに通信を入れて来たからだ。

「フォルテさん。アキオさんは・・・・・・」

「アキオは、エルシオールの撤退支援のために残留する」

ミルフィーユの質問に答えるフォルテの表情には、苦悩が浮かんでいた。

「そんな・・・・・・」

「無茶です！」

「ミント。ちとせ。わかっているね？　私達は、軍人なんだよ」

フォルテは、極当たり前の一言で、ミントとちとせに先に釘を刺していた。
ここでアキオに通信を入れて喚く事なら、そこら辺にいる普通の子供にでも出来る事で、もし今のアキオにそんな事をすれば、彼女達がアキオに失望されてしまうかのしれない。
そんな事になれば、逆に二人が可哀想だと考えたフォルテは、二人に通信を入れさせないように釘を刺しておいたのだ。

それと、フォルテはミルフィーユとヴァニラが意外と芯が強い事に驚いていた。
止めの高出力エネルギー砲を受けて、もはや放棄する以外に道が無いファーゴや、地表に戦略級の攻撃を喰らって大きな被害を受けただけで無く、巻き上がった粉塵でこれから数十年規模の気候と環

境の悪化が避けられずに、復興に膨大な時間が掛かるであろう惑星ロームの惨状。
実戦経験のある自分でも動揺を隠し切れないのに、普通の十代の小娘である二人なら、卒倒しかねない光景だ。
だが、ショックは大きいであろうが、二人は絶対に喚く事はしなかった。

「（タクトとシードル少佐。共に、女を見る目はあるという事か・・・・・）ムーンエンジェル隊。エルシオールの撤退を支援するよ！」

フォルテは心を鬼にして、現宙域よりの撤退を開始するのであった。

（同時刻、第四分艦隊旗艦パスカルブリッジ内）

「それでいい」

「しかし、レイトン准将も、なかなかに貧乏クジですな」

アイウッド少佐は、このいきなり乱入して来た若者に好意を抱くようになっていた。
以前のバカ司令官とは比べ物にならないほどに優秀であったという点もあったが、意外と生きるのに不器用で、仲間想いである点を見る事が出来たからだ。

「司令官の生存すら不明で、こんな若造に扱き使われている副官達も、なかなかに貧乏クジだと思うけどな」

「准将も、なかなかに口が悪いですな」

「生まれつきだ。全艦。戦闘準備！　目標は、黒き月と呼称される人工天体だ！」

アキオが、攻撃命令を下した瞬間であった。

今度は、別の人物が通信を入れて来る。

「レイトン。そなた。本当に残るのか？」

「「「「「なっ！　シヴァ皇子！」」」」」

今までは、タクトの邪魔をしてはいけないと考えたのか？

静かにしていたシヴァ皇子が、アキオに直接通信を入れて来たのだ。

勿論、シヴァ皇子を始めて見るアイウッド少佐達は、突然の事に驚きの声をあげていた。

「別に、残るのが主目的ではありません。エルシオールの撤退が完了したら、我々も逃げ出します」

アキオは、隙があれば本当に第四分艦隊と、他の足に損傷を受けていない軍艦を引き連れて逃げ出すつもりでいたが、今の時点では、それが出来る可能性はかなり低いと考えていた。

「色々と言いたい事はある。だが、無駄な発言で時間を無駄にしたく無いので言わない。ただ、一つだけ命令する。余は、まだそなた

にチェスで勝てた事が無い。勝ち逃げは、余が絶対に許さん。生きて帰れ。それだけだ」

シヴァ皇子は、本当にそれだけを言うと通信を切ってしまう。

「へえ。レイトン准将は、本当にシヴァ皇子のお気に入りの家臣だったんですね。噂通りだ」

「その噂の詳しい内容は、聞かない方が幸せなんだろうな？」

「ええ」

ちょっと前から、有能ながらも貴族連中の中では腫れ物扱いだったアキオが、なぜかシヴァ皇子に気に入られていて、結局、彼は前シードル公爵の息子であった。

当然、様々なやっかみや中傷が出るのが、この世の道理でもあった。

「ですが、命を掛ける価値が出ました。ジーダマイヤ閣下の戦死で、我々は冷や飯食いに転落かと思ったら、ここにレントン准将がいらっしゃる。この艦隊の士気を保つのに、非常に役に立つわけだ」

それはすなわち、『もし生き残ったら、自分達を引き上げてくれ』というアイウッド少佐達の正直な欲望であった。

アキオは、程度はあったがこの手の欲望は嫌いではない。

寧ろ、綺麗事ばかり並べ立てる貴族連中の方が、よほど腹の中が汚いという事実を、過去の経験から知っていたからだ。

それに、この生還が難しい状況下で、艦隊のスタッフを効率的に動かすのに有効な処方箋でもあった。

それに、司令官が無能だったからなのであろう。
この艦のスタッフは、なかなかに優秀な人材が集められている。
特に、このアイウッド少佐は、今ルフト中将が不在の巡洋艦艦隊の指揮を執っている木村大佐に、決して劣る人物ではない。
今までは、決して口にしなかったであろう欲を、ここぞという時に出して、部下達に《将来への期待》という餌をぶら下げた。
つまり、彼は人を使う才能があるという事だ。
アキオは、生き残ったら、ウォッカ大将に彼を推薦しておこうと考えていた。

「黒き月を、有効射程距離に収めました！」

「全砲門を開け！　一斉射だ！」

「交互撃ちはなさらないので？」

「焼け石に水だな。一度に全砲門の火力を叩き付けても、可能性は万に一つも無いのに、半数なら余計に可能性が無い」

あれだけの質量を持つ人工天体に、一個分艦隊の攻撃など涼風に等しいのであろう。
こちらの攻撃は、黒き月のシールドによって全て弾かれていた。

「他の味方艦隊は、どうなっている？」

「結局、お互いが主導権を譲らなかったので、二つに分裂して黒き月を攻撃しています」

「応援の他惑星の駐留艦隊は？」

「そちらも、纏める司令官がいないので、個々に攻撃をしています」

「かえって、好都合か・・・・・・」

元々、エルシオールにいるシヴァ皇子を逃がす時間稼ぎが、一番の目的だったのだ。

バラバラに攻撃をしてくれた方が、エオニアがこちらを全滅させるのに時間が掛かる可能性が高い。

そこまで冷徹にアキオは考えていた。

特に知り合いでもない同僚達の死を悲しむほど、アキオはお人好しでも、感傷的でも無かったからだ。

「だが、腑に落ちない点もある。エオニア側の攻撃が全く無い・・・・」

「確かに、それは不気味ですね」

ジーダマイヤ大将の戦死後、こちらに全く攻撃をして来ないエオニアに、アキオはかつてない不安を感じ始めるのであった。

「お兄様。まだ、攻撃をしなくてもいいの？」

「エオニア様。無人艦隊の一部に、損害が発生しつつあります」

エオニア旗艦ゼルのブリッジで、エオニアは一人敵艦隊の動きを興味深そうに観察していたが、そこに黒き月をコントロールしているノアと、周囲に展開させている無人艦隊を統率するシェリーから同時に通信が入って来る。

「二人とも、敵の動きをどう考える？」

「この状況下で、無駄なお山の大将争いで時間を浪費した挙句に、バラバラに攻撃して来るなんて、無能な部品達ね」

「「・・・・・・」」

ノアの回答を、エオニアとシェリーは複雑な思いで聞いていた。黒き月の管理者であるノアは、自分を人間とは思っていないらしく、良くエオニアを除く人間を部品扱いする事が多かったからだ。だが、エオニアもシェリーも、それに対して彼女に文句を言う事は出来なかった。

辺境に追放された自分達が、僅か五年という歳月でクーデターを起こせたのは、間違いなく彼女の功績に寄るところが大きかったからだ。

変に説教めいた事を言って彼女の機嫌を損ねたら、そこで自分達の大望は終了してしまう。

そんな事は、決してあってはならなかった。

「ところが、この展開を読みつつ、自分の目的を達しようとしている奴がいる」

気を取り直したエオアニは、シェリーとノアに自分の意見を述べる。

「エオニア様。あの、少し離れた位置にいる分艦隊ですか？」

「そうだ。小癪にも、エルシオールを逃がそうとしている、あの艦隊だ。そして、あの艦隊の指揮官は、間違いなく・・・・・・」

「レイトンですか？」

「ああ。間違いない。余には、なぜかわかってしまうのだよ」

シェリーは、エオニアが本当にアキオという人物を欲している事を理解してしまう。

欲しいという欲求が強いからこそ、実際に確認したわけでもないのに、その艦隊の司令官が、アキオである事がわかってしまうのであろう。

それと、シェリーがあの艦隊を調べた結果、本来の司令官であるバルサミコ少将では、あんなに素早い行動が取れる度胸と能力が無い事は明白で、この緊急事態に、指揮官の交代があったと考えるのが自然であった。

「（やはり、油断ならないな。レイトン。そして・・・・・・）」

シェリーは、極度の自信家では無かったが、それでも現時点でエオニアに一番頼りにされている部下である事を自認していたので、少しアキオに嫉妬していた。

ところが、シェリーは、エオニア自身も嫉妬の感情を抱いている事に気が付いていた。

実は、エオニアは、シヴァ皇子に嫉妬しているのだ。

この状況下で、あれほどの男がシヴァ皇子を逃がすために、自分の身を賭してこちらに向かって来る。

シヴァ皇子の価値を、次世代の白き月の聖母としてや、自分が皇

国を治める上でのマスコットとして利用する事しか考えていないエオニアとしたら、統治者としての能力は遥かに上のはずの自分がアキオに選ばれなかった事実は、決して認めたくないであろうから・・・・・。

「ノア」

「なあに？　お兄様」

「どんな攻撃を考えているのかな？　ノアは」

「あの部品達が使っている船のクロノ・ストリング・エンジンが、突然停止するの。でも、通信機や探知機器はそのまま。目や耳が無事なのに、動けないままこちらの攻撃を受け続けて次々に沈んでしまうの」

「それは、面白そうだね」

外見が十歳前後の少女であるノアであったが、彼女の本性はかなり残酷であった。

というか、普通の人間としての感情を持っていないのであろう。

エオニアは、表面上はノアに賛同していたが、時にノアが見せる残酷さを、内心ではかなり警戒していた。

自分が皇国の覇権を握り、ある程度の基盤を築いたら、彼女をキッチリとコントロールしなければと考えていたのだ。

「ふふふっ。また沢山の悲鳴が聞こえそうね」

黒き月のコアである赤いクリスタルの内部にいるノアが、再び片手をかざすと、そこから黒い衝撃波が発生する。

その衝撃波は、威力は微弱であったが、黒き月を攻撃していた第3方面軍艦隊には致命傷となるダメージを与えていた。
突如、全ての艦の主力動力機であるクロノ・ストリング・エンジンが止まってしまったからだ。

「レイトン准将！　全ての味方艦のクロノ・ストリング・エンジンが停止しました！」

「どうりで、反撃もして来ないで余裕だったわけだな・・・・・・」

トランスバール皇国では、白き月の来訪以来、全ての宇宙船の動力源がクロノ・ストリング・エンジンであったので、この黒き月の攻撃は致命傷であった。

「エルシオールと紋章機は？」

「同じく、機関部が停止しています」

幸い、通信機や探知機器の類は無事であったので、アキオはすぐにエルシオールと紋章機の様子を探らせるが、同じクロノ・ストリング・エンジンを搭載しているので、後方で停止したままの状態であった。

「まずいな」

「ええ。嬲り殺しですね」

目と耳が無事なまま、動けない状態で敵に一方的に攻撃を受ける。
誰が考えたのかはわからないが、非常に残酷なやり口であった。

「降伏勧告とかは、ありますかね？」

「無いだろう。そんな事をするくらいなら、最初からファーゴに穴を開けない。俺達は、他の連中への見せしめなんだから」

旧皇国の支配者階級である貴族の生き残りの大半をここで抹殺し、それを持って己の支配を正当化をアピールしつつ、自分に逆らう者は、こういう悲惨な最期を迎えるという事を他の星系の市民達に伝える。

アキオは、今回のエオニアの遠征の目的をそう捉えていたので、自分達が捕虜になれるとは考えていなかった。

「それで、どうします？」

パスカルの通信機には、他の艦からの救援要請が雪崩のように舞い込んでいたが、自分の身すらままならないのに、他の連中を助ける余裕など存在しなかった。

「第四分艦隊の精鋭諸君！　この程度でうろたえるな！」

このピンチに、アキオは特に難しい事は言わなかった。

ただ、大きな声で指揮下の艦に通信を入れて、彼らの動揺を抑える事に成功する。

「補機のエネルギーを使うぞ」

「ですが、推進剤を数秒間、二～三回も吹かせばそれで終わりです」

主機であるクロノ・ストリング・エンジンは使えなかったが、そのクロノ・ストリング・エンジンの余剰エネルギーを蓄電している

補機は、あの黒き月の攻撃を影響を受けていなかった。
だが、その残量で出来る事はたかが知れていた。

「幸いにして、偃月の陣だからな。エルシオールが攻撃を受けないように、最初の一吹きで黒き月との直線上に移動し、次の一吹きで両脇の艦を後ろに下げ、戦艦を一番前方に出して盾になる。後は、一秒でも生き残れるように神に祈る」

「戦艦が、一番前ですか？」

「装甲が厚いからな」

元々、偃月の陣なので、旗艦パルカルを含む戦艦は、全て一番前の中心部にあった。
そこで、一番装甲の厚い戦艦がエルシオールの盾となり、戦艦が沈んだら巡洋艦と駆逐艦でエルシオールを一秒でも長く守る。
もはや、策とも言えないレベルの最後の足掻きであったが、他の艦隊の連中のように、悲鳴に近い救援要請をするよりはマシだとアキオは考えていた。

「エオニア艦隊及び、黒き月より多数のミサイルとビームが来ます！」

ちょうど艦隊の小移動が終了した頃、エオニア艦隊や黒き月からの攻撃が始まり、多数のビームやレールガンやミサイルが浴びせかけられる。

「副長。応急処置を行うエネルギーが無い。被弾したブロックは、閉鎖だけして人員を退避させろ。それと、艦の環境維持に不必要な部署にいる人員は、艦の中央部に退避だ。勿論、この命令は全ての

艦に徹底させるように」

指揮官のせいで落ち着きを取り戻していた第四分艦隊は、臨終までにもう少しの猶予があったが、他の艦隊は末期的な状況に陥っていた。

戦死したジーダマイヤ大将が、エオニアの抹殺を狙っていたために第四分艦隊よりも黒き月の近距離にいた事と、数が多かったので、集中的に攻撃を喰らっていたからだ。

「戦艦アクオスが撃沈されました。ニョクマム少将以下幕僚の脱出を確認できず。同じく戦死したものと思われます」

「戦艦ユタが撃沈されました。ナンプラー少将以下幕僚の脱出を確認できません。同じく戦死したものと・・・・・・」

黒き月から近距離で停止状態の第3方面軍艦隊や惑星駐留艦隊は、次々と艦が致命的な損傷を受けて沈んでいく。

だが、程度の差こそあれ、それはアキオの指揮する第四分艦隊も同様であった。

「そうか・・・・・・」

だが、ニョクマム少将達に同情している暇など、アキオ達には無かった。

次は自分達でないと、誰かが保障してくれたわけでも無いからだ。

現に、複数回被弾しているパルカルは、既に中破判定を受けられる程の損傷を受けていた。

「エルシオールは？」

「まだ小破状態ですが、依然として動けず」

「艦隊の損害は？」

「駆逐艦三隻と巡洋艦一隻が沈みました」

「そうか・・・・・・。済まない事をしたな・・・・・・」

アキオは、自分の指揮のせいで戦死したであろう、沈んだ艦の乗組員達に心の中で謝罪していた。

「あまりお気になさらない事です。あなたが、この艦隊を指揮していなかったら、我々はあそこで無意味に嬲り殺しにされるか、港ごと爆死だったのですから」

アイウッド少佐は、今ではアキオにこの艦隊の指揮を委ねて正解であったと思っていた。

この世に絶対の正解が存在しない以上、損害が三割程度のこの艦隊と、既に半数近くの船が沈んでいるその他の艦隊のどちらにいた方が幸せか？

子供にでもわかる答えであった。

「それに、ムーンエンジェル隊やエルシオールには若い女性が一杯乗っているんでしょう？　世は男女平等を謳っていますがね。やはり、男は女を守るものですよ」

「顔に似合わず、意外とフェミニストなんだな。副長は」

「顔の事は、言わないでくださいよ」

この絶望的な状況下でも、パスカルの乗組員達はまだ全ての希望を失っていなかったが、アキオ達に残された時間は、もうさほど存在しないのも事実であった。

「アキオ・・・・・・。あんた・・・・・・・」

アキオが身を呈しても守ろうとしたエルシオールと紋章機は、同じく黒き月よりの黒い波動によって、その主機であるクロノ・ストリング・エンジンを停止させられて、宇宙空間を彷徨う事となっていた。

だが、他の前方の出ていた艦隊とは違い、自分達はあまり目立った損傷を受けていなかった。

それも、そのはずだ。

アキオは、自分の指揮する艦隊を、残り少ないエネルギーを使って移動させ、エルシオールの前に立ち塞がったからだ。

「頼む！　動いてくれ！　ハッピートリガー！」

フォルテは、珍しく感情的になっていた。

自分達の盾となっているアキオの艦隊は、当然防御フィールドを張るエネルギーなど残っていなかったので、一方的に攻撃を受けて次々に損傷・撃沈されていくからだ。

更に、アキオは自分の座上する艦を含めて一番装甲の厚い戦艦を一番前に出していた。

つい数十分前に指揮権を掌握した艦隊に、『盾になって死ね』と

命令する以上、アキオは自分が後方に下がるつもりなど全く無いらしい。
一番前方に位置する旗艦パルカルは、どの艦よりも損傷が激しかった。

「お願い！　動いてよ！」

「動きなさいよ！　カンフーファイター！」

「アキオさん！　動いて！　せめて、フライヤーだけでも！」

「ナノマシンすら使えないなんて・・・・・・」

「どうしてです！　レールガンすら使えないなんて・・・・・・」

ミルフィーユ達は、自分達なりに懸命にアキオを救おうと、紋章機の再起動を試みるが、それは無駄な努力に終わっていた。
軍艦よりも小型で、動力に補機を積んでいない紋章機は、クロノ・ストリング・エンジン停止の影響をモロに受けていたからだ。

「そんな・・・・・・。このまま、アキオさんも私達もここで・・・・・」

この絶望的な状況に、ミルフィーユ達の心の中に諦めの感情が広がっていく。
だが、この状況でもまだ全てを諦めていない人物がいた。

「タクト。このままでは、本当にヤバイいぞ。シヴァ皇子のシャトルでの脱出を提案する」

エルシオールのブリッジ内では、やはりミルフィーユ達と同じように諦めの気持ちが広がっていた。

ムーンエンジェル隊の副司令であるレスターも、もはやこの艦は沈む物と仮定していて、その前にシヴァ皇子を搭載シャトルに乗せて脱出させる事をタクトに提案していた。

「余は、これ以上は逃げぬぞ！」

「ですが、戦況は最悪です。それに、レイトンの決死の覚悟を無駄にするつもりですか？　あなたが生き残って、他の方面軍の戦力を束ねて首都星トランスバールを奪還する。レイトンは、あなたがそれを行ってくれると信じて命を張っているのです。そんな彼の決死の覚悟を無駄にしないでください！」

「クールダラス副司令・・・・・・」

レスターは、心を鬼にしてシヴァ皇子への説得を開始する。

始めの頃は、自他共に認めるほど仲が悪いレスターとアキオであったが、今ではお互いに、共にタクトを支える同志だと思っている二人だ。

それに、もしアキオと自分の立場が逆であったら、自分もアキオと同じ事をしたであろう。

そう考えると、余計にここでシヴァ皇子を死なせるわけにはいかないと考えたのだ。

「わかった。シャトルに移動しよう・・・・・・」

「待て。レスター」

それは、レスターにとっては意外な一言であった。

まさか、今まで静かに戦況を観察していたタクトが、シヴァ皇子の脱出にストップを掛けるとは思わなかったからだ。

「しかし、タクト・・・・・・」

「ここで逃げて、本当に次で勝てるのか？　臨終を先延ばしにしているだけなのではないのか？」

後世の歴史家達は、英雄タクト・マイヤーズの事を『巨大な棍棒』と著す事が多かった。

士官学校をビリから数えた方が早い順位で卒業し、学科は常に赤点ギリギリだったので、書類の整理なども遅く常に部下に頼りきり、運動神経も並であったので、銃を撃たせれば的に当たれば喜ぶ程度の実力で、格闘訓練を行えばすぐに根をあげてしまうし、戦闘機など操縦適正はほぼゼロと判定され、艦の操作に特に長けている訳でもない。

ただ、タクトはそのチェスの腕前から解る通りに、非常に優れた戦術・戦略家であった。

というか、それにしか長けていなかったのだ。

ところが、彼には不思議な魅力と生まれ持った将器があった。

別に、タクトに下にいなくても、軍人として十分に名を成したであろう人物二人が、常にタクトの下で喜んで働いていた事からもそれは容易に想像できた。

二つ名通りに、『カミソリ』と称される事の多いレスターと、何でも器用にこなす事から、後に『万能ツール』と称されたアキオの事であった。

「確かに、今の総合戦力では、我らの方が少し上かもしれない。だが、敵の戦力の性格を考慮すると、ここで下手に逃げる事は明日の惨敗を招く可能性がある。シヴァ皇子。確かに、レイトンの言う通りにここで逃げるのも一手です。多分、大半の優秀な軍人は、ここで逃げる事を提案するでしょう」

タクトは、ここであの黒き月に一矢でも報いておかないと、次で味方は大苦戦すると考えていた。

あのクロノ・ストリング・エンジンを封じる攻撃に対抗する手段を獲得しなければ、残された味方の戦力は無意味に沈められて行くだけだし、あの無尽蔵に軍艦を製造する黒き月を持つ敵は、簡単に戦力を増やしてしまう。

しかも、敵は無人艦隊を主力としているので、こちらにように人を訓練する必要は無い。

ただ、今までに集めた戦闘データを、新しい艦のコンピューターにフィードバックするだけだ。

エオニア軍の戦術コンピューターは、長期間訓練された軍人の判断力には勝てないが、その差は圧倒的というわけでもなく、こちらは戦闘を行えば行うほど一定数の軍人達に損害を出して行き、向こうは収集した戦闘データを、製造した無人戦闘艦艇のコンピューターにコピーをするだけで、ある程度の経験を積んだに等しい戦力を手に入れられる。

クーデター以降、必死に戦力の建て直しを行って来たウォッカ大将達には悪かったが、今は自分達の方が圧倒的に不利な状況にあるとタクトは考えていたのだ。

「だが、この状況で何が出来るというのだ？　タクト。世の中は、そう都合良く行かない事が多い。そして、それを一番理解しているレイトンは、自分を犠牲にしても俺達に逃げる事を命令し、更に自

分の身を盾にしている」

アキオのいない今だからこそ、自分はタクトの友人であるからこそ、今は嫌われても耳に痛い事を言わねばと考えるレスターであった。

「いや。まだ、諦めては駄目だ。レスター。俺達の使っているエルシオールや紋章機の特徴を覚えているか？」

「ロストテクノロジーを用いた、最新鋭の・・・・・・」

「違う！　紋章機の性能は、パイロットのテンションに左右されるだ！　みんな！　聞いてくれ！」

タクトは、ココに命令してミルフィーユ達へ通信を送り始める。

「ここで諦めてどうする！　確かに、今の戦況は最悪だ！　だが、ここで諦めては駄目だ！　今、この戦況下で我々が全力を尽くさないでどうする？　自分を信じるんだ！　絶対に諦めるな！」

タクトは、自身を含むムーンエンジェル隊のメンバー全員に、半ば絶叫に近い声で、絶対に諦めないようにと命令する。

「「（おいおい。まあ。それは、正しいのかもしれないが・・・・・）」」

奇しくも、違う場所にいたアキオとレスターは、同時に同じ感想を口にしてしまう。

無駄に頭の良い二人は、士気の向上にはなったであろうタクトの必死の気持ちを一部しか認めなかった。

いくら戦況が苦しくても、精神論を唱える事の危険性は過去の歴史を見ても明らかであったからだ。

ところが、実際に通信を受けてミルフィーユ達は、別の感想を抱いたようであった。

「そうだね。ここでクヨクヨしても、意味が無いからね。最後まで足掻かせていただくとしようかね。エオニア！」

意外にも、一番早くタクトの意見に賛同したのは、最初はタクトをムーンエンジェル隊の指揮官として認めていなかったフォルテであった。

「さすがは、フォルテ。実に思い切りの良い女っぷりだな」

「私を口説かなくて、今さら後悔かい？　タクト」

「かもな」

タクトは、メインスクリーン上に映るフォルテに不敵な笑みを浮かべていた。

「タクトさん。私、頑張ります！」

「確かにタクトの言う通りよね。やっぱり、主人公にはピンチって奴が必要じゃない」

続けて、ミルフィーユとランファも元気を取り戻す。

「私といたしましては、あの方を諦めるわけにはまいりませんので」

「私もです！　アキオさんは、必ずこの手で！」

「ミントもちとせも、その意気だ。ここで、レイトンを救って貸しを作っておきな」

「「はい！」」

タクトの少し意地の悪い助言にミントとちとせは、嬉しそうに返事をする。

「タクトさん・・・・・・。私は、まだ諦めません」

「そうだ。ヴァニラ。エリオスは、まだ諦めていないよ」

動力源すら確保できないエルシオール艦内で、エリオスは自身が先頭に立って艦内の応急処置に走り回っていた。

艦内のダメージコントロールの全てを任されているエリオスは、埃まみれ、油まみれになりながら、懸命に手作業で艦内の火災の消化や、被弾した箇所の応急修理などを手作業で行っていた。

「（だが、人だけが、気力を取り戻しても・・・・・・）」

これらのやり取りを聞いていたアキオは、特に反論はしなかった。

確かに、ここで黒き月に対する何らかの方策を探らねばならない事も確かであったが、それは一旦引いてからでも出来るかもしれないし、逆に圧倒的な戦力を持つエオニアには、その撤退に掛かった時間すら致命傷になるかもしれない。

正直なところ、アキオは迷っていたのだ。

ところが、その僅か数秒の迷いの間に状況が大きく動いた。

突然、索敵担当の士官から報告が入ったのだ。

「レイトン准将！　後方のエルシオールと紋章機から、高出力のエネルギー反応！　凄い・・・・・・。今までとは比べ物にならないエネルギー量です！」

アキオ以下、パルカルのブリッジにいる軍人達は、一つの奇跡を目の当たりにしていた。

この全てのクロノ・ストリング・エンジン搭載艦が動かない状況下で、エルシオールと紋章機のみが白く輝きながら、機関部を再始動させていたからだ。

更に、モニター上の紋章機の両脇から、何かが生えて来るのが確認できた。

「レイトン准将。あれって・・・・・・」

「純白の羽？」

「凄い。まるで、本当の天使みたいだ・・・・・・」

ブリッジ内の乗組員達は、次々と起こる奇跡にただ驚くばかりであった。

「レイトン准将。ムーンエンジェル隊って、本当に天使なんですね」

「確かにな・・・・・・」

アキオは、子供の頃に見たアニメに出ていた天使と同じ様な羽を生やし、完全復活を超えて新しく生まれ変わったかのような姿を見せる紋章機を目の当たりにして、アイウッド少佐の意見に思わず賛

同してしまうのであった。

「タクトさん。エルシオールのシステムの書き換えが終了したみたいです」

「凄いな。本当に、奇跡ってあるんだな」

タクトの絶対に諦めない気持ちは、普通なら、『ドラマじゃあるまいし、そんなに都合良く行くものか』と言われて終わってしまうレベルの物であった。

だが、今回はそれが状況を一変させた。

タクトの言葉に心を動かされたミルフィーユ達の感情の変化が、パイロットのテンションを元に動くH.A.L.O.システムに作用し、それに反応したエルシオールと紋章機に搭載されていたロストテクノロジーが何らかの反応を起こしたらしい。

白き月より皇国にもたらされたロクトテクノロジーは、未だにその多くが研究段階にあり、実用段階にはあるがブラックボックスを多く抱えているがために起きた奇跡とも言えた。

「タクトさん。いきなり紋章機が動くようになりました。ラッキースター。行けます！」

「何か、白く光ったり、羽が生えたりで忙しいけど行けそう。カンフーファイターもオーケーよ」

「機動力もパワーも、今までとは比べ物になりませんわね。トリッ

クマスターも行けますわ」

「タクト。ハッピートリガーも、いつでも反撃可能だよ。さあ。攻撃命令を！」

「ハーベスター。良好です」

「シャープシューターも、絶好調です！」

エルシオールと同じような現象は、各紋章機でも発生したらしい。いきなり、パイロットの意思とは無関係に起動を開始し、勝手に各部分のシステムプログラムが書き換えられ、今までを上回る性能を発揮し始めたとの事であった。

「ムーンエンジェル隊のみんな！　早速、反撃だ！」

「「「「「了解！」」」」」

完全復活を遂げたムーンエンジェル隊は、一直線に黒き月への攻撃を開始するのであった。

「まさか、ノアのフィールドを破るとはな・・・・・・」

「ノア様のフィールド内で、クロノ・ストリング・エンジン搭載兵

器が動くなんて・・・・・・」

第３方面軍とタクト達に完全に王手を掛けていたエオニアは、目前で発生した奇跡にただ驚くしかなかった。

完全に動きを止めた紋章機が、再起動したばかりでなく羽が生えて性能を増すという、通常であればあり得ない出来事を目撃したからだ。

「エオニア様。いかがなされますか？」

「一旦引こう」

「ですが、相手はたかが六機の紋章機です」

「あれは、白き月より生み出されたロクトテクノロジーの塊だ。用心に越した事は無い。それに、一番の目的も達成している。いらぬ欲で、無用な損害を出したくない」

個人的にも恨みのあったジーダマイヤ大将と、彼が掌握していた第３方面軍の根拠地であった惑星ロームと衛星都市ファーゴを完全に破壊し、第３方面軍艦隊も、半数の戦力を使用不能にしたのだ。

特に後者は、軍事の常識で言えば全滅に等しい損害であり、残った戦力の再編成と、破壊されたロームとファーゴの救援活動等の手間を考えれば、彼らが暫く動けない事は明白で、十分に戦略的勝利を得たと考えて良いであろう。

「わかりました。一部の無人艦隊を盾として残し、生まれ変わった紋章機の性能を測ると同時に、黒き月と残りの艦隊を下げます」

「満点だ。シェリー」

やはり、人間で頼りになる部下はシェリーだけだとエオニアが考えていると、盾として残した無人艦隊と紋章機との交戦が始まる。
だが、無人艦隊はパワーアップした紋章機の敵では無かったらしい。
恐ろしい速度で、次々と撃破されていく。

「やはりな。黒き月と同じく、ロストテクノロジーを司る白き月から生まれた物だけの事はある。後方で、一旦体勢を整えるぞ」

エオニアは、信頼する部下であるシェリーに後方への退避を命じると、再び戦況を注意深く観察し始めるのであった。

「レイトン准将。助かりましたね」

「ああ」

今の戦艦パスカルは、完全に大破状態であった。
奇跡的にブリッジには被弾していなかったが、多数の被弾により多くの損害が発生していて、その応急処置も主機であるクロノ・ストリング・エンジンの停止でままならない状況であったからだ。

「負傷者は？」

「意外と少ないですね。それと、この艦に限りですが、死者がゼロ

ってのは珍しい」

主機が動かないので、どうせ碌な応急処置など不可能と考えて早目に乗組員達を避難させた効果であった。

さすがに、艦内の火災は致命的だったので、それだけは消火剤で消火させるか、僅かに残された電力で火災ブロックを隔離後、エアロックを解放して火を消すという荒業を行っていたが。

「しかし、物凄い性能ですね。新しい紋章機は」

「以前よりも、更に凄いな・・・・・・」

エオニア艦隊の砲撃が届かなくなったので、安全になったパスカルでは、ひと段落着いたアキオ達が、あっという間に自分達を抜いて、エオニア艦隊に攻撃をかけるミルフィーユ達の戦いぶりに感嘆の声をあげていた。

「しかし、ミルフィー達といい、タクトといい。本当に、やってくれるよ」

「レイトン准将・・・・・・」

アイウッド少佐は、そう言いながら嬉しそうな笑みを浮かべるアキオを、まるで不思議な物でも見るかのような表情で見つめていた。

今までは、厳しい表情のアキオしか見た事が無かったので、『そんな顔も出来るんだな』と、アイウッド少佐は思ったのだ。

「副長は、さっき俺にそっと聞いたよな？　どうして、俺がタクトの下にいるのかを」

それは、アキオが良く聞かれる質問の第一位であった。
アクシデントがあったとはいえ、レスターからの何の法的根拠も無い命令で、自分からエルシオールの臨時補給参謀などという役職に就いているアキオが、他所の軍人や貴族達などからしたらとても不思議に見えるらしい。
以前なら、その能力を用いてタクトを傀儡にしてしまえば良いと考えられ、今では、アキオは公爵家の人間なので、先任とはいえ伯爵家の三男でしかないタクトの風下に立つ必要など無いと、アイウッド少佐などは考えてしまうからだ。
内心では貴族を嫌っているが、そういう部分は貴族偏重社会に長年慣らされているアイウッド少佐であった。

「マイヤーズ准将とあなたでは、やはりあなたの方が優秀だと考える人は多いですからね」

「普通はな。だが、こう考えられないか？　あの絶望的な状況下で、あんな臭いセリフを、それも本気で言える男がタクトだ。副長なら、言えるか？　あんな恥ずかしいセリフを、あの状況で？」

「いえ。絶対に言えません」

無能な貴族出身の将校の尻拭いに徹し、常にリアルな現実と向き合って来たアイウッド少佐には、絶対に出来ない芸当であった。

「そうだ。言えない。俺も、副長も、タクトの下にいるレスターも、絶対に言えない。でも、あいつは本気でそれが言えて、そのおかげで戦況が変わった。おかげで、俺達は命拾いをした。だから、俺は一生あいつの下で特に文句は無いんだ」

「確かに、そう言われるとそうかもしれません」

アイウッド少佐が、アキオにそこまで言わせてしまうタクトの事を見直すと同時に、今度は、今までは完全に停止状態であったパルカル以下、味方の艦のクロノ・ストリング・エンジンが再起動を始める。

どうやら、黒き月が後方に下がった事により、例のフィールドの範囲を抜けた事が原因であるらしい。

「副長。旗艦を変えるぞ」

「確かに、パスカルでは色々と難しいですからね」

沈没の危険は無かったが、応急処置を終えないと碌に動かす事すら不可能なパスカルでは、艦隊旗艦としての用を成さない事は、既に誰の目から見ても明らかであった。

「おい。通信士。えーーーと。バルト中尉だったな」

「はい」

自分より二つほど年下の若い士官に、アキオは声をかける。

「旗艦を、巡洋艦アルトリンゲンに移す。前方にいた戦艦で、普通に動ける船は皆無だからな」

多少、遠距離にあったとはいえ、一番前方で多くの砲撃を受けた第四分艦隊の戦艦群は、大きく傷付いていた。

正直なところ、爆沈した船が無かったのが奇跡だったのだ。

「了解しました。アルトリンゲンに、受け入れ準備を行わせます」

「それと、アイウッド少佐を借りるぞ。臨時の艦隊副司令に使う」

「ですが、この艦で応急の指揮を執る艦長代理がいなくなっては・・・・・」

「君がやれ」

「えっ！　自分がですか？」

まさか、自分が艦長代理に指名されるとは思わなかったバルト中尉は、上官の命令を聞き直すという、軍人としては大失態を演じてしまう。

だが、アキオはそんな事は気にも止めずに、話を続けていた。

「もう、流れ弾くらいしか飛んで来ないからな。応急修理を指揮してそれを済ませたら、同じく戦闘に耐えられない損傷艦を纏めて、ロームの裏側に逃げ出せ。後の事は、巡洋艦隊を率いる木村大佐がいるから、彼の指示に従え」

「ですが・・・・・」

士官学校を卒業したばかりの自分に、そんな大きな任務が勤まるのかが不安なバルト中尉は、思わず返事を躊躇ってしまう。

「誰にだって、始めての時はあるさ。要は、ここぞという時に一歩踏み出す事が重要で、大ピンチイコール大チャンスなのは、俺を見ればわかるよな？　気張れよ。中尉。頑張れば、バルト少佐も夢じゃないぞ」

「はい！　頑張ります！」

それからのアキオは、素早かった。

巡洋艦アルトリンゲンに移乗すると同時に、戦闘に耐えられる戦力を纏めて、大きく混乱した第３方面軍のいる宙域へと移動。

全ての将官を失って混乱している第３方面軍残存艦隊の指揮権を強引に奪取し、同じく、損傷した艦を後ろに下げさせてから動ける戦力を纏めた後、ミルフィーユ達を支援すべく、一気に反撃に出たからだ。

「我らを救ったエンジェル達を、むざむざと敵に討たせるな！　援護の砲撃を絶やすな！」

これにより、エオニアが盾として残した無人艦隊は、僅かな時間で全滅する事となる。

だが、やはり世の中とは色々とままならない事が多いらしい。

パワーアップしたと思われていた紋章機の羽が急に消えてしまい、性能が以前と同じくらいにまで落ちてしまったからだ。

「あれれ？」

「何よ。時間限定って事かしら？」

ミルフィーユとランファが、元の性能に戻ってしまった紋章機にガッカリしていると、そこにタクトからの通信が入って来る。

「ムーンエンジェル隊のみんな。どうやら、俺達は最大のピンチを脱したらしい。そこで、一度様子を見るために、惑星ロームの裏側にいる味方と合流しようと思うんだ」

「タクトさん。こういう場面で、勢いを殺すのは良くないと思うのですが」

「そうですね。チャンスは、生かせる時に生かす物だと思います」

「紋章機の謎のパワーアップが時間限定で、これからも使えるのかがわからないと来ている。一度、情報を纏めないと行けないし、他の味方がアレではね・・・・・・」

珍しく強気な意見を出すミントとちとせであったが、タクトはその意見に賛同しなかった。

地表を大きく抉られた惑星ロームと、大穴を開けられて放棄する以外に道が無い衛星都市ファーゴの救援活動や、半数以上の艦が撃沈・損傷状態の第3方面軍艦隊の戦力の再編成など、時間と人手がいくらでも欲しいこの状況下に、これ以上の攻勢は不可能とタクトは考えたからだ。

「それに、ルフト中将から連絡が無い。ファーゴの中央管制室にいたとしたら、あの強烈なエネルギー砲を喰らったんだ。戦死された可能性もある・・・・・・」

「「「「「アキオ（さん）！」」」」」

そこに、割り込むようにしてアキオが通信を入れて来るが、その内容はあまり好ましい物では無かった。

「レイトン。無事なのか？」

「ああ。悪運の強さが、俺の取り得だからな」

残存戦力による中距離射撃で、ムーンエンジェル隊の援護を行っていたアキオは、現在は、この混乱した状況の把握をアイウッド少佐に命じている所であった。

「お前は、取り得が一杯あって羨ましいな。ところで、本当にルフト先生とは連絡が付かないのか？」

「ああ。俺は、エルシオールに通信が入っていないかと、こうして連絡してみたのだが・・・・・・」

タクトの前にムーンエンジェル隊の司令官であった、ルフト中将行方不明の報に、タクト達の気持ちは一気に沈んでしまう。

「ジーダマイヤ大将め！　ファーゴの中央管制室の管理を、外様のルフト中将に押し付けやがって！　都合の良い時だけ、臨機応変かよ！」

自分達の恩師が行方不明との報に、レスターはいつもの毒舌ぶりを発揮していた。

「それでだ。ルフト中将がおらず、ジーダマイヤ大将は既にこの世におらず、他の将官も行方不明者が多数いてというこの状況で、誰がこの混乱した現場の指揮を執るかなんだ」

「えっ！　他に将官がいないのか？」

「いない。ロームの裏側で、臨時に指揮執っている木村巡洋艦隊副司令は大佐だからな。他でも、佐官は大量にいるが、将官という者がいないらしい」

「つまり、俺かお前って事？」

どうやら、ルフト中将行方不明の報を悲しむ暇すら今のタクトとアキオには残されていないらしい。

ジーダマイヤ大将が、多数の参謀達を道連れにあの世に旅立ったツケは、今二十二歳の若者二人に新たな試練を与えつつあった。

「そうか。仕方が無いな。今は亡きルフト先生をガッカリさせるわけにも行かないからな」

現状で将官が二人しか存在しない以上、どちらかがこの宙域にある全ての戦力を統括し、それに付随する様々な業務を行うべきだとタクトは考えていた。

「（この手の任務は、レイトンに任せるのが一番だな）」

「頼むぞ！　タクト・マイヤーズ第３方面軍臨時司令！」

ところが、タクトはそんな面倒臭い事は自分でやりたくなかったし、アキオは、自分がナンバー１になるのがあまり好きではなかった。

結果、お互いが、相手に臨時司令の仕事を押し付けようとする事態になっていた。

「レイトンが、臨時司令だろう。ここは」

「タクトは、先任だからな。お前に、任せるよ」

クーデアー直後に、同時に昇進したと思われている二人であったが、実は僅かな差で、タクトが先任という事になっていた。

その時は、タクトの方が貴族という事で優遇されていた事と、今のような万が一の事態の時に、指揮権の継承を問題なく行うために順位が付けられていたためであった。

「お前。公爵の一族じゃないか！」

「軍内で、貴族の階級は関係無い。俺は、あくまでもエルシオール内でナンバー3の男だ」

「面倒だなあ。レスターを、臨時の参謀長にして押し付けるか・・・・」

「タクト。お前な・・・・・・」

タクトの身も蓋も無い意見に、レスターは後ろで顔を引き攣らせていた。

「こらっ！　お前ら。人を勝手に殺した挙句に、責任を押し付け合うな！」

タクトとアキオが、お互いに責任を押し付け合っていると、そこに、行方不明だと思われていたルフト中将から通信が入って来る。

「ルフト先生。ご無事でなによりです」

「良く言うわ。この不肖の弟子が」

ルフト中将は、タクトにブツブツと文句を言いつつも、その表情は少し嬉しそうであった。

「正直なところ、自分は最悪の事態を覚悟していましたが・・・・・」

「レスターなら、そうであろうな。実は、あの強力なエネルギー波で、ファーゴの中央管制室の機能が全て停止してしまってな。通信すら覚束なくて、私の生存を伝えるのが遅くなってしまったのだよ」

他にも、全ての動力が死んだファーゴからの脱出に手間取り、今になってようやくこちらに通信を入れられるようになったとの、ルフト中将の話であった。

「こうなると、エルシオールに准将二人と、大佐一人と、少佐が一人いてとても助かったの」

エオニア艦隊と黒き月から攻撃を受けないように、惑星ロームの裏側で退避させた艦艇の修理と、艦隊の再編成と、被災した民間人の救援等を行っている木村大佐は、あまりの忙しさに猫の手も借りたい状況であるらしい。

他にも、これからの事を相談せねばならないし、時間は一秒でも惜しい状態であった。

「本当は、パーティー直後に、新人事を発表する予定じゃったのだが、この状況では保留という事になだろうな」

実は、その新人事では、タクトとアキオがエルシオールを離れる事になっていた。

タクトは、中央へと侵攻する艦隊のどれかを任される予定であったし、アキオも、後方の全補給艦隊の統括か、ジンロ中将が指揮する本艦隊の参謀長への就任が有力視されていたからだ。

「アキオさんとタクトさんが、エルシオールからいなくなっちゃうんですか？」

タクトとアキオはいなくなるという話を聞いたミルフィーユは、落胆した態度を見せていた。

「本当の予定ではの。じゃが、この惨状で状況が変わった」

実は、ウォッカ大将は、第3方面軍の消耗をある程度は折込済みであったのだが、今の状況はそれを上回る状態にあった。

だが、ルフト中将の見立てでは、ウォッカ大将はこれをチャンスと捕らえて動くであろうと予想していた。

確かに、黒き月は大きな脅威であったのだが、それはまだ確定とまでは言えなくても、エルシオールと紋章機の力で抑えられる目処は付いている。

それと、もう一つ。

ウォッカ大将の消息が掴めないで焦っていたエオニアが、自ら黒き月を率いて第3方面に侵攻した。

これは、チェスでいうところの、キングを敵陣に侵攻させたに等しい大きなミスであった。

いくら黒き月が強大でも、黒き月は決して動かすべきではない。

少なくとも、自分やウォッカ大将では決してしない。

なので、この宙域の情報を得たウォッカ大将は、絶対に動くであろう。

ルフト中将はそう考え、自分も生き残りの戦力をなるべく早く纏めて参戦すべきだと考えていた。

「第3方面軍で、使える戦力を纏めてワシが指揮を執る。それと、補給や治安維持を行う護衛艦隊はあるらしいので、それを木村大佐

に一時的の任せる事としよう。それでだ。アキオ、レスター」

「はあ・・・・・・」

「やっぱり・・・・・・」

レスターとアキオは、少しどころかかなり嫌な予感を感じていた。
デジャブというのであろうか？
何か、自分達が扱き使われるような気がしたのだ。

「人手が全く足りん。タクトとシードル少佐にエルシオールとシヴァ皇子の事を任せ、お前達には、ワシの臨時の参謀としてだな・・・・」

「「嫌な予感が当たったよ・・・・・・」」

レスターとアキオは、過去の経験からこの手の任務にタクトが指名されるとは思っていなかった。
戦時に恐るべき戦術・戦略眼を見せるタクトであったが、彼はこの手の実務が不得手だったからだ。
上にいればいるほど実力を発揮する。
いや、上にいないと役に立たないとも言えるタクトであった。

「とにかく、一秒でも惜しい。今すぐワシの元に出頭するように」

「「了解」」

こうして、エオアニ軍との睨み合いが続くなか、アキオとレスターは、休む間も無くルフト中将の下で働く羽目になるのであった。

（エオニア艦隊との戦闘終了から約半日後、第2方面某暗礁宙域内）

「ほう。エオニアの奴は、ついに我慢できなくなったらしいの」

そこは、近隣に普通の惑星はおろか恒星すら存在しない、小さな岩塊や小惑星が充満した暗黒の宙域であった。

普段は、民間船は勿論の事、軍艦ですら碌に近付かないこの宙域に、ある一隻の船が小惑星に隠れるように存在していた。

その船は軍艦であり、情報収集・統括艦という軍の戦備法で言うところの、《その他の雑多な艦艇》に分類される船であった。

艦名はホークアイと言い、元は多くの金持ちを乗せて観光地を回る高速豪華客船《アマテラス号》であったのだが、このクーデター時に暢気に旅行になど出かける人などおらず、宇宙港に係留されていたところを、ウォッカ大将の目に留まって徴発・改良された船であった。

なぜこの船が徴発されたのかと言うと、何かと忙しい金持ちを素早く観光地に届けるのが目的のこの船は、軍の正規巡洋艦に匹敵するほどの速度を出せ、乗客の金持ちが、様々な業務の打ち合わせを素早く行えるように充実した通信機器や搭載され、乗客の金持ちの安全を守るために、最低限の武装と、最新鋭の防御フィールド発生装置と探知機器が搭載されと。

僅かな改良で、トランスバール皇国領域内の全ての軍艦を指揮す

るに相応しい旗艦に改良可能であったからだ。

「ウォッカ大将。では、遂に作戦スタートですか？」

客船時代に、ダンスパーティーを行うために作られた大型ホールには多数の機材が置かれ、そこでは多くの若い軍人達が書類を持って走り回ったり、他の宙域にいる味方との打ち合わせや命令の伝達を行っていて、ホールの天井からは複数の通信用の大型スクリーンが吊るされていた。

そして、その中の一つには、クーデター時に近衛・第1方面軍艦隊の生き残りと、第2方面軍艦隊からなる主力艦隊を率いるジンロ中将の姿が映し出されていた。

「そういう事じゃ。エオニアが、自分の身と黒き月を、愚かにも第3方面軍に移動させおったからの」

「彼も、所詮は人の子だったという事ですか？」

「ほう。なぜ、そう考える？」

「五年前のクーデター失敗の原因の一つである、ジーダマイヤ大将の身柄が目の前にあって、今ならそれを簡単に討てて、コソコソ隠れ回るご老人の反応を探れるかもしれない。更に、シヴァ皇子の身柄も確保できるかもしれない。ウォッカ大将。あなたは、本当に恐ろしい・・・・・」

ジンロ中将は、こう考えていた。

黒き月という、無人の軍事工廠を兼ねた人工天体を所有するエオニアが、そこで得た多数の艦隊を用いて次に何を行うのか？

それは、他の方面への侵攻と、そこを防衛する戦力の撃破であろ

うと考えていた。
　となると、エオニアの侵攻が防げない今、どこをエオニアに攻撃させれば自分達が一番得をするのか？
　答えはとても簡単で、一人自分が皇国の主導権を握るために他との協調を否定している、ジーダマイヤ大将率いる第３方面軍であった。

「のう。ジンロ中将。二人きりで話をせんか？」

「はあ・・・・・・」

　その後、ウォッカ大将は、自分の私室に通信を繋がせ、そこでジンロ中将との話を再開する。

「ほぼお前さんの考えている通りじゃよ。エオニアは、ジーダマイヤとシヴァ皇子に、ワシの予想通りに喰い付いた。結果、一時間後に、ワシは全ての辺境軍とおぬしの艦隊に、中央への進撃命令を出す事となる」

「シヴァ皇子まで囮にするのですか・・・・・・。ですが、シヴァ皇子には皇王としての器量があるかもしれない。だって、そうじゃないですか。あのレイトンが、特に文句も言わずに家庭教師までしているんですよ」

　ジンロ中将は、シヴァ皇子まで囮としてしまうウォッカ大将に少し批判的な口調となる。

「ワシも、シヴァ皇子には次期皇王たる資格があると思う」

「では、なぜです？」

『なぜ、シヴァ皇子を囮にしたのです?』と、ジンロ中将の目は言っていた。

「囮にしなければ、ジーダマイヤだけでは、エオニアは喰い付か無いかもしれないと考えたからじゃ。それに、レイトンを残した。奴なら、タクトやレスターと協力して、何とかしてくれると信じていた。だた、色々と誤算があったのも事実じゃ」

ウォッカ大将の予想では、エオニアに攻撃を受けてもタクト達がエルシオールにシヴァ皇子を乗せてとっとと逃げて来るであろうと思っていたのだが、結果は、自身の予想を遥かに超える惨劇となっていた。

まさか、黒き月にあのような未知の兵器が搭載されているとは思わなかったし、惑星ロームとファーゴの住民をほど皆殺しにするほど、エオニアが暗い怨念を背負っているとまでは予想できなかったからだ。

完全に自分のミスであるのだが、それを悔やんで歩みを止めるわけにも行かなかったし、そこまで自分は初心でも無い。

良くも悪くも半世紀以上も軍にいる自分は、軍の司令官がどう効率的に動いても、犠牲が出る事を防げない事が多い事を知っていたし、出た結果に対しては、責任を負わねばならない事も知っていたからだ。

「(情勢が落ち着いたら、ワシも、そろそろ進退を考えねばなるまいな)」

何の因果か、半世紀以上も在籍する羽目になった軍という職場であったが、最後にとてつもなく大きな仕事を経験できたし、正直なところ疲れたというのが本音でもあった。

だから、この件にケリを付けて落ち着いたら退役して、どこかのリゾート惑星でノンビリと余生を過ごそう。

そう考えるウォッカ大将であった。

「確かに、エオニアはどこか狂っている。防衛戦力だけを撃破して、ロームとファーゴを占領すれば済む問題ですからね。エオニアは、大きな力を手に入れてその力に酔っている。彼に、皇国の未来は託せません。彼は、間違いなく暴君となるでしょうから・・・・・・」

優秀ながらも、少し真面目なジンロ中将らしい意見であった。

「力に酔っているか・・・・・。もしくは、力に振り回されているのかも知れないの。それと、一つ気になった事もある。第3方面での戦闘詳報を呼んだのじゃが、レイトンは己の命を粗末にし過ぎる・・・・・・」

ウォッカ大将が改装を命じたホークアイは、中央奪還艦隊の旗艦に相応しい能力を有していた。

攻撃力は、弱小の海賊連中にしか通じないレベルでしか保持していなかったが、その足の速さと、目と耳の良さで、僅か半日後の第3方面での詳細な戦闘データが入手できたからだ。

「あの場面でなら、私でも同じ事をしましたが」

「ワシも同じ事をしたと思うよ。じゃが、ワシは何か引っ掛かる物を感じるのじゃ・・・・・・」

ウォッカ大将は、己の血の因縁に決着を着けたアキオが、あまり生に執着しなくなっているのでは?と考えていた。

「つまり、生き残る目的が消滅した現在、レイトン自身が生かす価値があると思う相手なら、躊躇う事無く、己の命を差し出してしまうと？」

思えば、ジンロ中将にも思い当たる節があった。

あのアキオに濡れ衣が着せられた時、タクト達は誰よりもアキオの事を心配し、彼の無実を晴らそうと懸命に動いていた。

つまり、彼らは、あの短時間で本当の仲間同士になっていたのだろうと。

となると、アキオが自分の身を犠牲にして彼らを守るという選択肢も十分にありえ、それが先ほどあったという事なのであろう。

「ワシは、そう考えておる」

「なら、余計にレイトンをエルシオールに置くのは危険なのでは？」

ジンロ中将としては、アキオをエルシオールに置いたままで彼を失ってしまうよりも、自分の手元に置いておきたいと考えていた。

「ジンロ中将も、レイトンが欲しいのか？」

「ええ。副司令か参謀長に欲しかったですね」

「有能じゃからかの？」

「それも十分にありますけど、彼は運が良い」

普通の人ならば、鼻で笑ってしまうレベルの話であったが、実は軍人ほど、縁起を担ぐ存在はこの世に存在しなかった。

その昔、人類がまだ地球という惑星にだけ生存していた頃、とあ

る国家間の戦争で、一人の老軍人が主力艦隊の司令に推薦された事があった。

その時、その国の君主が、『なぜ、あの男なのだ?』と尋ねると、元は軍人であった大臣は、『彼は、とても運の良い男でございますから』と答えたらしい。

実際、彼はその戦争中に、旗艦のブリッジ内で敵艦の砲撃を喰らったにも関わらず全くの無傷であった事など、能力のみならずその運の良さを実証したとの事であった。

「アドミラルトウゴウか・・・・・・」

「ええ。士官学校卒業以降、レイトンは、いつ死んでもおかしくない状況で、様々な要因に助けられて生き残りました。私は、彼の能力と幸運が欲しい」

これから、強大な戦力を持つエオニア軍との戦いに赴くジンロ中将の、本音の声であった。

「まあ。わからんでもないがの。実は、ウォルコットも、『レイトンさんを返してくださいよ』と五月蝿いのじゃ」

実は、正式には、アキオはまだ第2方面軍通称護衛艦隊副司令のままであり、それを承知しているウォルコット中将は、ことある毎にウォッカ大将に、アキオを返して欲しいと懇願していたのだ。

「それを、エルシオールに、臨時の参謀で押し込めたままですからね。周りからは、『勿体無い』って意見ばかりですよ」

確かに、たかが六機の大型試作戦闘機しか搭載しない儀礼艦に、二人の准将と、大佐のレスターと、若いながらもなかなかに優秀と

評判のシードル少佐がいるので、普通の軍人であれば勿体無いと考えるのは当たり前の事であった。

「シヴァ皇子を、ジーダマイヤの元に送ったからの。だから、余計にレイトンを残そうと思ったのじゃ」

アキオが、ジーダマイヤ大将に濡れ衣を着せられそうになった時に、本当は、ウォッカ大将はアキオを連れて帰るつもりであった。

そうでなくても、中央奪還に向けての艦隊を用意している関係で、猫の手も借りたいほどの忙しさであったからだ。

だが、色々と悩んだ挙句、ウォッカ大将はアキオをそのままにしていた。

まるで、今日の惨劇を予想していたかのように。

「ワシは、別に予言者ではない。ただ、あの三人なら何とかしてくれそうな予感があったから、レイトンをエルシオールから引き抜かずにシヴァ皇子を託したのじゃ」

それが、公人として出来るウォッカ大将の優しさの限界であった。

確かに、タクト・レスター・アキオの事は気に入っていたし、特にアキオは、自分の孫の婿にしようと考えるほどの人物であったが、彼らが戦争をする軍人である以上、常に全く弾の届かない安全な場所に置いておく事など絶対に不可能であった。

それに、過度のえこ贔屓は、かえって本人達のためにならない事もだ。

「それに、こういう事は心の問題じゃからの。今のレイトンは、どこにいても同じ事をしてしまう可能性が高い。じゃが、ひょっとすると、エルシオールの連中がレイトンを引き戻してくれるかもしれない」

「そうかもしれませんね」

「じゃが、あそこのお嬢ちゃん達は、レイトン狙いの者達が多いからの。その点は、実に複雑なのじゃが・・・・・・」

「はあ・・・・・。って！　本当に、ご自分の孫を嫁にやるつもりなんですか？」

「ワシには二十七人の孫がいて、全員が女じゃからの。候補は多数おるぞ。ちなみに、ジンロ中将には、今年二十七歳で商社に勤めているリンダなどをお勧めしようかと思っておる。ジンロ中将も、もう三十路も後半に差しかかるわけじゃし、そろそろ身を固めた方がの・・・・・・」

ウォッカ大将の、エオニアを倒して皇国を勝利に導くために、冷徹なマキャベリストとして行動する面と、アキオの事を真剣に心配する好々爺としての面の両方を見たジンロ中将は、人間という存在がいかに矛盾した物であるかを悟り、少し複雑な気持ちになってしまうのであった。

そして、それから一時間後、ウォッカ大将は全ての辺境軍の司令官に向けて中央奪還のための艦隊の発進を命令し、遂に戦局は最終局面を迎えるのであった。

「さてと、ウォッカ大将の進撃命令も下った事ですし、私は私の仕事を始めるとしましょうか」

ウォッカ大将から中央への進撃命令が下された直後、同じく第２方面で通商護衛艦隊を率いるウォルコット中将は、旗艦（キリシマ）のブリッジ内で、副司令のマッコリ大佐と話をしていた。

「『全方面軍の通商護衛艦隊を統括して、中央奪還艦隊への補給を確実に行うべし』ですか。言うは容易く、行うは難しですな」

広大な領域に広がる複数の護衛艦隊の情報をリアルタイムで把握し、中央へと進撃する艦隊の足を引っ張らないように、正確な時間に正確な量の物資を補給する。

やりがいはあるが、かなりの困難を極める任務であった。

「それに、それと平行して、あなたの発進を見送らねばならないわけです。あのご老人も、本当に人使いが荒いですな」

「言えてますね。でも、私が抜けても大丈夫でしょう。何しろ、ここにはレイトン副司令が育てた人材がいますから」

昔は、ウォルコット中将、アキオ、木村大佐、マッコリ大佐の誰かがいないとまともに動かなかった通商護衛艦隊であったが、今ではその下の佐官や尉官が育っていたので、こうして二人が無駄話をしていても特に困った事態は発生していなかった。

それと、もう十分もすると、マッコリ大佐は臨時に編成された秘匿艦隊を率いて、中央へと進撃する事になっていた。

「ゼロ艦隊ですか・・・・・。艦隊と呼ぶのもおこがましい気が

しますけどね・・・・・・」

初の大規模艦隊の司令官なれる喜びは、マッコリ大佐には微塵も存在しなかった。

なぜなら、この艦隊は規模こそ大きかったが、まともな戦力を有していなかったからだ。

皇国が宇宙船にクロノ・ストリング・エンジンを搭載するようになってから、『まあ、後で使うかもしれないし』というノリでモスポール処理されて保存されていた、様々な雑多な艦艇をとりあえず動けるように修理して配備しただけであったからだ。

しかも、これらの艦艇は全て無人であった。

エオニア軍が、無人艦艇を用いているのをヒントに、それらのボロ船を旗艦（コンゴウ）のブリッジ内に増設された操作盤で動かせるようにしただけであったのだ。

「三世代前のアルゲルト級巡洋艦に、四世代前のユキカゼ級駆逐艦ですか。うわぁ、五世代前のアーカンソー級の戦艦だ。良く動きましたね。これ」

マッコリ大佐は、今まで図鑑か博物館でしか見たことが無いビンテージ物の軍艦達に感嘆の声をあげていた。

「まあ。動けばオーケーという事で」

実際に、修理した艦艇をこの宙域に移動させる際に、一割強の船が脱落してしまった件を踏まえても、この艦隊がまともな戦力になるとは誰も考えていなかった。

「完全なる囮です。敵に見つかって、粉砕されても腹は痛みませんからね」

「だって、これって、弾薬すら搭載していないんですよね？」

「ええ。弾薬やエネルギーやミサイルって高いですから。基本は体当たりで、全滅したらコンゴウだけで逃げ出すって作戦です」

足の速い巡洋艦や旧式高速戦艦を旗艦とし、その艦内に無人艦隊を操作する操作盤を増設し、それで各辺境軍が死蔵していたオンボロ艦艇をミサイル代わりに敵の艦隊にぶつける。

実に、費用対効率に優れた作戦であった。

「それでウォルコット司令は、私にはどこまでの成果を望みます？」

この全ての辺境軍から発進した無人オンボロ艦隊は、多分全てが首都星トランスバール周辺宙域に辿り着けないであろうと考えられていた。

元々、費用と手間がさほど掛かっていなかったので、そこまで期待されていなかったのだ。

対応に出たエオニア軍艦隊をなるべく損傷させて、できるだけ長時間足を止められれば良し程度に考えられていたからだ。

「もし、中央での最終決戦時に、横合いからこのボロが敵艦隊に体当たりをかましたら・・・・・・。そんな事を考えてしまう、欲深い私がいます」

「では、この航路からの侵攻を許可願いたい」

マッコリ大佐は操艦のプロであったので、ウォルコット中将に対して危険宙域を連続して横切る航路プランを示した。

だが、下手をすると、何の戦果も得られずに全滅してしまう可能

性すらある航路であった。

「成功すれば、エオニア軍の虚を突けます。それと、もしかすると、この艦隊をレイトン副司令に預けられるかも・・・・・・」

『全戦力を中央に向けて進撃させよ！』

ウォッカ大将は、補給と治安維持を行っている戦力を除き、全ての正規艦隊に中央への進撃命令を下していた。

勿論、失敗すれば後が無いのは確実であったが、万が一の事を考えて後方に予備戦力を残せるほど弱い相手でもない。

いや、逆に時間を置けば置くほど、自分達が不利になっていく可能性があったので、これは渾身の作戦であった。

となると、勿論、強力な紋章機を要するエルシオールも中央へと進撃する事となる可能性は高く、そこでアキオに再会できるかもしれないと、マッコリ大佐は考えていたのだ。

「確かに、レイトンさんに預けると、何かしでかしてくれそうですね」

「でしょう？」

「では、許可しましょう。マッコリ大佐ほどの操艦技術を持ってくれば、分の悪い勝負でもありませんしね」

「それでは、行ってまいります！」

こうして、ウォッカ大将は最後の勝負を挑むべく、貯めに貯めた戦力を中央に向けて進撃させた。

果たして、エオニアの隙を突いた事が吉と出るのか？凶と出るのか？

それは、まだ誰にもわからなかった。

第十三話（後書き）

今回は、時間がかかったな・・・・・・。
次は、会社の命令でフォークリフトと玉掛けの講習を受けるので、大分先になると思います。
うわぁ。
大変そうだなあ・・・・・・。

第十四話

「なあ。レスター。眠くないか？」

「そりゃあ、眠いに決まっている。また、『七十二時間働いてますか？』を地で行ってるんだからな」

エオニアが率いる黒き月と無人艦隊の攻撃を受けて壊滅的な被害を受けた第3方面軍は、その際に方面軍司令官であるジーダマイヤ大将と多くの幕僚を失って、その機能を完全に喪失させていた。

更に、その本拠地である惑星ロームは、黒き月の高エネルギー砲の直撃をモロに喰らって外見が変わるほどの被害を受け、衛星都市ファーゴも、その被害の大きさから完全に放棄される事が決定されていた。

わざわざ修理するよりも、新しく作り直した方が手間が掛からないという、調査に入った専門家からの報告があったからだ。

それに、無理をして修理をするとなると、そこで新たな問題に直面する事となる。

内部のエアーが完全に抜けているので、宇宙空間に放り出された人達を除く多くの人達が内部で窒息死していて、その死体を全て片付けなければならなかったからだ。

そして、それは惑星ロームでも同じ事で、一応は救援部隊を地表に降ろしているのだが、地表での生存者はほとんどいないとの報告であった。

「だが、俺達だけでやっていて良かったよ」

アキオは、ムーンエンジェル隊に、自分達が臨時で行っている任務を一切行わせなかった。

『エルシオールと紋章機を、一刻も早く元の状態に戻しておいてくれ』

そう命令して、主に休養を取らせていたのだ。

理由は、簡単だ。

まだ、黒き月と多数のエオニア艦隊との睨み合いが続いていて、彼らに対抗しうる戦力がエルシオールと紋章機だけである以上、彼女達を専門外の任務で、下手に消耗させるわけにいかなかったからだ。

それに、紋章機がパイロットのテンションによって性能が変わる以上、下手に救援活動などをさせて、精神的なトラウマを負わせるわけにはいかなかったからだ。

多分、フォルテを除けば、ミルフィー達は人の死体など見た事も無いのであろうから。

「そうだな。軍人の死傷者だけで二万人以上、それに民間人の死者を合わせると推定で数億人だ。正直なところ、数字が凄すぎてリアリティーがゼロだな」

それでも、まだアキオとレスターはマシであろう。

なぜなら、二人は臨時で第3方面軍艦隊の旗艦になっている、戦艦ラインの艦内に設置された第3方面軍臨時司令室内で、部下達から数字の報告を受けているだけだからだ。

実際に、救援活動を行っている軍人達は、目の前で直接に悲惨な光景を目撃するのであろうから。

「宇宙で窒息するというのは、最悪な死に方でな・・・・・・」

「見た事があるのか？　レイトン？」

「ああ・・・・・・」

その昔、アキオが辺境で任務に就いていた頃、所属する部隊に向けて、とある民間船から救援要請が入った事があった。

何でも、酸素製造装置と、空気清浄装置の致命的な故障という最悪な状態に陥っていて、彼らは半ば悲鳴に近い声をあげていたのだ。

その船の残存酸素量は残り二時間分ほどで、普通に救援に行けば五時間は掛かるという絶望的な状況下に、アキオ達は懸命に努力して四時間後に現場に到着したのだが、その努力は実らなかった。

彼らは、船内で全員が窒息死していたのだ。

「艦内は地獄だったな。どうやら、残り人数が減れば自分に行く酸素が増える事に気が付いたらしくてな。銃だナイフだと、仲間達で殺し合いを始めて、艦内は血の海だったさ」

「・・・・・・」

他にも、船員の私室でタンスの引き出しが全て開けられていて、そこで部屋の主が顔を突っ込んで死んでいたりと、滑稽なのか？悲劇なのか？判断できかねる状況もアキオは目撃していた。

「タンスの引き出しに、酸素が仕舞ってあると思ったんだろうな。酸欠で冷静さを失ったんだろう。他にも、コックらしい男が、厨房の冷蔵庫を開けて顔を突っ込んだまま死んでいたよ・・・・・・」

「それは、悲惨だったな。生存者は、ゼロか？」

「ああ・・・・・・」

実は、それは嘘であった。

一人だけで緊急用の酸素パックを独占して、自分の部屋にロックをかけて閉じこもっていた男がいたのだ。

その男は、貴族の家の者であった。

船員達がまだ冷静で、懸命に救援要請をしている内に、ちゃっかりと自分の分の酸素を確保し、争いを避けるように自分の部屋に隠れていたのだ。

『おお！　救援ごくろう！　このように、はしたない市民達は、みな自滅して死んでしまってな。さあ。私を助けてくれ！　褒美は十分に取らせよう。何しろ、私は貴族・・・・・」

その男は、最後まで言葉を発する事が出来なかった。

アキオが、持っていたエネルギー銃でその男を射殺したからだ。

そしてアキオは、そのまま彼が船内で仲間に殺されていたと報告した。

後で良く良く考えると、かなり軽率な行動であったと思うのだが、士官学校を出てからまだ一年ほどしか経っていない、まだ若造であったアキオは、その身勝手な貴族に前フレスコ公爵の姿を重ね合わせてしまい、半ば反射的に銃を撃ってしまったのだ。

だが、その事実は、永遠に封印される事となった。

遭難した船の船員同士が、残りの酸素を巡って醜い殺し合いをして全滅した事を遺族に伝えるのは可哀想だと思った救援に来た駆逐艦の艦長が、その民間船の物理的な始末を命じ、『民間船は酸素不足で混乱している内に、侵入した暗礁宙域で小惑星にぶつかって大破したため遺体の収容が極めて困難であり、その場で船を処分して帰還する事とする』という嘘の報告書をでっち上げて、関係者だけの秘密という事にしたからだ。

「・・・・・・」

「どうしたんだ？　レイトン」

「いや、何でもない・・・・・。それよりも、黒き月とエオニア艦隊の動向の方が気になるな・・・・・・」

お互いを探知可能な距離で睨み合いを続けている両者であったが、あれからは一切の戦闘行為が発生していなかった。

総合的な戦力では、圧倒的にエオニア側の方が有利なのだが、彼らも、あの不思議な発光現象の後に羽が生えてパワーアップした紋章機を脅威と感じ、下手に手を出すと危険だと考えたのであろう。

たまに無人偵察機らしき物を飛ばして来たが、それ以上の事はせずに沈黙を保っていた。

「相変わらず、動きはゼロらしい。損傷した艦艇を黒き月に収容して修理しているだけだ」

前で通信機の端末をいじっている士官から報告を受けたレスターがアキオにその事を話していると、そこに第３方面軍の臨時司令官を務めているルフト中将が入って来る。

「アキオ。レスター。ご苦労じゃな」

「ええ。本当に、ご苦労ですよ」

「いい加減に、眠らせて貰えませんかね？」

若い二人の仕事ぶりに満足してるのか？

笑顔を絶やさないルフト中将に、また目の下に深刻な隈を作った

レスターとアキオが恨めしそうな表情を向ける。
もっとも、二人は本当にルフト中将に他意があるわけでない。
自分達を信頼して重要な任務を与えてくれた恩師の顔に泥を塗るまいと懸命に働いた結果だったので、陰鬱どころかかなりハイテンションな状態にあったからだ。
ただ、二人ともここ三日ばかり寝ていなかったので、徹夜明けのハイテンション状態であったという理由も存在していたが・・・・・。

「実は、第3方面軍司令部や艦隊の生き残りで、使えそうな連中のピックアップが終了しての。一時間後に、新司令部を発足させる事となった。ウォッカ大将の命令で司令官はワシじゃが、他の連中は大幅に若返っておる。それと・・・・・・」

「貴族が、大幅に減っている」

「そういう事じゃの」

これが、トランスバール皇国中興の祖と呼ばれるシヴァ・トランスバール皇王の政治体制が決定付けられた瞬間であった。
発端は、エオニアが起こしたクーデターによって多くの貴族達が殺されてしまった結果、半ばなし崩し的に行われた事であったのだが、今までは、ほぼ貴族階級に集中されていた政治と軍事の権限が、身分を問わずに優秀な者へと任されるようになり、貴族出身者と市民出身者の差が少なくなる社会の始まりでもあった。

「しかし、皮肉な話ですよね。貴族達の天国であったこの社会に大打撃を与えたのは、その親玉の一族に属していたエオニアであったとは」

ほぼ的を得ているが、レスターらしいと言えばらしい毒舌でもあった。

「確かに、レスターの言う通りじゃの」

「私は、エオニアの行動に特に疑問を感じませんけどね」

「どうしてかの？　アキオ」

「エオニアの目指している物は、絶対的な権力を持つ皇王を頂点とする完璧な中央集権国家ですから。今の貴族がその下で支える封建制度的な皇王制度など、エオニアには自分の理想を引っ張る障害でしかないと考えていると思います。だから、彼は過去の恨みもあったのでしょうが、貴族など邪魔でしかないと思っていた。だから、惨たらしく殺す事も躊躇しない」

「「・・・・・・」」

ルフト中将とレスターは、アキオの鋭い観察眼に反論する術すら持たなかった。

「ですが、彼も所詮は同じ穴の狢です。自分の絶対権力を分割する貴族は嫌いだが、その心根は同じで、市民など放っておけば勝手に増殖して税を納める話すネズミ程度にしか考えていない。だから、ロームやファーゴで躊躇い無く虐殺を行えるわけです。彼は危険な男です」

後年、引退して自伝を書く事になったルフト元帥（元帥号に退役や予備役は存在しないため）が、あるフリージャーナリストの取材でこう答えた事があった。

『アキオ・レイトンとエオニア・トランスバールは、一度として直接に顔を合わせる事は無かったし、決定的に考えの違う二人は、決して味方同士となる事は無かった。だが、二人はとても良く似ていたと思う。同じ尊き血筋に生まれ、類まれなる能力を有しながら、その尊き血の世界では生きる事が出来なかった。だからなのであろう。二人は敵対しながらも、お互いの考えが手に取るようにわかっていた。歴史にもしは禁句なのだが、もしアキオが早くにエオニアの下に馳せ参じた場合、あなたは私ではなくて、人臣位を極めて引退したアキオをインタビューしていたかもしれない』

そのジャーナリストは、ルフト元帥があまりに真面目な表情でその話をするので、全く反論できなかったらしい。

「確かに、エオニアは危険だ。だから、ウォッカ大将は、エオニアがここにいる事を好機と捉えて、全ての軍勢を中央に侵攻させた。準備は万端じゃが、これは一度しか行えない。失敗したら最後の賭けじゃ」

今から二日前に、ウォッカ大将は以前から懸命に準備していた大軍を一気に中央へと侵攻させていた。

以前には、『次の戦いの事も考えて』と若い部下達に話していたウォッカ大将であったが、今回はそのセオリーは通じないと彼は考

えていた。
相手であるエオニアが、己の命をチップに背水の陣で臨む以上、自分だけが余力を残して戦う事など決して出来ないと考えていたからだ。
それと、ウォッカ大将は、今回のクーデター劇をなるべく早期に鎮圧しなければならないと考えていた。
軍人としては珍しく、経済が理解できるウォッカ大将は、これ以上この国の騒乱が長引けば、トランスバール皇国の経済が持たずに自己崩壊し、更に犠牲者が増えると考えていたからだ。
確かに、トランスバール本星や惑星ロームの市民の直接の犠牲は痛かったが、このまま自分の国の資源と資金と人材を食い潰すだけの内戦が継続されれば、更に多くの餓死者が出たり、トランスバール皇国を脱するために独立戦争を挑んで来たり、皇国恭順派との内戦に突入して、死者や難民を増やす惑星政府が出ると考えていたからだ。
いや、むしろその間接的な損害の方が、長続きすれば深刻であるとウォッカ大将は考えていた。

「全方面からの方面軍艦隊と、囮の無人艦隊の投入。レイトンが基本案を作成したやつだったよな？」

クーデター直後に、ウォッカ大将の下で主席参謀を務めていたアキオは、自分の上官から中央奪還作戦の素案を作っておくようにと命令されていた。
そこでアキオは、圧倒的な戦力を持つエオニア軍の直衛戦力をなるべく分散させて減らし、少しでも戦力差を狭めてから決戦に挑めるこの案をウォッカ大将に提出し、それが採用されての今回の作戦であったのだ。

「特に、奇をてらわずか。さすがだな。アキオ」

「向こうは、十分に承知だと思いますけどね」

アキオは、エオニアがこの程度の策を読めないとは到底考えていなかった。

それに、向こうには、エオニアの懐刀であるシェリーという掛け値無しに優秀な軍人がいる。

なので、自分達が優位だとは絶対に考えられなかったのだ。

「だが、有効な対抗策が打てない策だ。下手に各方面艦隊への対抗戦力を減らすと、それが逆に撃破されて、エオニアは我々に包囲される事となる。だから、必然的にエオニア本人が抱える戦力が減るという寸法になる」

「だが、向こうは資源さえあれば、いくらでも艦艇を作れる。だから、短期決戦なのでしょう？」

「少なくとも、ウォッカ大将はそうお考えのようじゃの」

レスターの質問に、ルフト中将はそうに答える。

それと今は語らなかったが、そのエオニアが勝手に収奪して無人艦艇の材料としている各種資源は、皇国の大切な資産であり、それを無尽蔵に消費されては、後の皇国経済の破綻の原因となってしまうであろう。

それでなくても、耐久消耗材でしかない軍艦などは、作っても富の還元がなされるわけでもない軍需品の類なので、作り過ぎれば作り過ぎるほど、皇国の経済にとって致命的な要因となってしまう可能性があったのだ。

「おっと、難しい話も大切なのじゃが、今日もそろそろ時間じゃの」

ルフト中将の一言で、アキオ達を始めとする全てのブリッジ要員達が、正面の大型スクリーンの方に視線を向けた。
すると、このにはシヴァ皇子の姿が映し出されていた。

「精鋭なるトランスバール皇国第3方面軍の諸君。今日も引き続き、エオニア軍と対峙中にも関わらず、戦力の建て直しや、惑星ロームや衛星都市ファーゴへ市民達への献身的な救援活動に、余は頭が下がる思いだ。ただ一言、感謝の言葉を述べたい。感謝する」

これも、アキオがシヴァ皇子に献策をして行わせている事の一つであった。
今まではその存在を隠される事が多く、まだその姿すら実際に見た事が無い人が多いシヴァ皇子を積極的に表に出し、彼の王位継承の正当性を印象付けるための、一種の宣伝工作の類であった。
シヴァ皇子本人が、懸命に艦隊の再編作業や市民への救援活動を行う軍人達に感謝の言葉を述べる。
他にも、被災した市民達の元へシヴァ皇子が直接赴いてそこで救援物資を手渡したり、彼らの陳情を聞いたり、活躍が著しい軍人に直接感状を渡したりと、実はシヴァ皇子は意外と忙しい日々を送っていたのだ。

『何とも、姑息な手に感じるが・・・・・』

最初にアキオが建策をした時に、シヴァ皇子はこう答えていた。

『確かに、臣もなかなかに姑息な手だと感じますが、効果がある以上、それをお勧めするのが臣の務めではないかと・・・・・』

古来より、この手の策は多くの為政者が行って来た、完全に手垢

の付いた手法であった。
だが、逆に言えば、効果があるからこそ手垢が付いても使い古されて来たとも考えられたのだ。

『シヴァ皇子は、将来は皇王陛下となるわけですから、今までのように部屋に閉じ篭りきりというわけにも参りません。公務などで表に出る事も多くなりますから、今の内に多くの人と接し、その人の考えや不満などを聞きだせるようになって下さい』

『簡単に言ってくれる。余と直接接して本音を言える男など、余は今目の前にいる男と、タクトくらいしか思い付かない』

目の前の男とは、勿論アキオの事であった。

『人々の不満や不安をそれとなく聞き分け、それを政治に生かす事が出来れば、シヴァ皇子は歴史に名の残る名君となるでしょう。臣は、期待しておりますので』

『余の家庭教師は、やはり厳しい男であったな。そうだな。余が為政者となる以上、やらねばならない事に好き嫌いなど言えるわけが無かったのだな。よかろう。せいぜい、道化を演じてやろう』

『ちなみに、映像映りだけが名君で、実際は暗君という方も過去には多くいましたよ』

『お前の毒舌は、今日も冴え渡っているな』

このようなやり取りの後、シヴァ皇子は上のようなことを行ってからそれを映像として記録させて、トランスバール皇国の全領域に発信するという事を行っていた。

その他にも、以前からアキオの策で、エルシオールでの逃走中に、全ての乗組員達と同じ食事を取っている事や、戦闘中にはブリッジに残って、部下達の戦いぶりを見守っている事が多いなどという情報が伝わっていて、それらがあまり市民達に人気の無いエオニアとは逆に、『幼いながらも、王としての才能と品格を備えたシヴァ皇子』という好評価に繋がっていた。

「それと、もう一つ。遂に一昨日、余の命を受けたウォッカ大将が、全ての戦力を首都星トランスバールに向けて進発させた。決戦は間近であるが、正義は簒奪者であり大量虐殺者であるエオニアには欠片も存在せず、そんなエオニオに我らが負けるはずもない。トランスバール皇国の市民諸君！　暫しの間だけ我慢して欲しい。そして、皇国解放の折には、国家再建のために余に力を貸して欲しい。共に、住みよい新しい皇国を作ろうではないか」

シヴァ皇子の演説が終了すると、それを聞いていた市民や軍人から歓声があがったのであろう。

通信機に、多数の声が入って来る。

「なあ。レイトン」

「何だ？　レスター」

「この演説の中身は、お前が考えたのか？」

「いや。俺はシヴァ皇子に、自分の言葉でお話しするようにと進言した。名君の条件に、演説が上手いというのもあるし、作って貰った原稿を読みながら演説しているトップなど、つまらないから誰も支持しないからな」

レスターは、内心でアキオの事を凄い男だと思っていた。
アキオは、シヴァ皇子の自他共に認める忠臣であったが、決してシヴァ皇子に甘い事などは言わなかったし、時に主君に対し厳しい課題を与える事もある。
だが、幼いながらもその課題をこなすシヴァ皇子を、アキオは決して裏切らないし、先日はシヴァ皇子を逃がそうと己の命までを張った。
そんな男が身近にいれば、おべんちゃらだけであったジーダマイヤ大将など、シヴァ皇子には霞んで見えてしまうのであろうと思っていた。

「しかし、いつシヴァ皇子は、ウォッカ大将に進撃命令など出したんだ？」

「ああ。それなら、アキオが臨時軍事法廷で無為の時間を過ごしていた時じゃ。『全てを任せるので、中央を早期に奪還せよ！』という命令を直接に受け、実筆の勅令書まで貰っておる」

あの軍事法廷騒ぎの時も、ウォッカ大将は一秒の無駄も無く動いていて、その際にアキオが太鼓判を押したシヴァ皇子と謁見し、彼は現在の皇国の軍事・経済・治安状況・市民生活への影響など、多くの最新情報を隠す事無く全て報告し、計画している中央奪還作戦の内容についても詳細に説明を行っていた。
その際に、シヴァ皇子は大人でも理解が難しい話を根気良く聞き、逆にいくつかの質問まで行ってそれに納得したのか、ウォッカ大将に全ての権限を与えていたのだ。

「ジーダマイヤ大将は、その時から道化だったのか・・・・・」

「まあ、そういう事じゃ」

そこまで話したところで、ブリッジの中に十数人の軍人が入って来て、同時にルフト中将達三人に対し敬礼を行う。
最年長者でも五十歳に達しない、元は佐官や尉官クラスの将校であった彼らが、ルフト中将の下で新たに幕僚団を構成する第3方面軍と艦隊の司令部要員達であった。
以前は大半が貴族だったのだが、今は完全に実力優位で選んでいたので、貴族出身者は数えるほどしか存在しなかった。

「任命式を行う時間が惜しいので、これは後で執り行う事とする。それと、現時刻を持って、アキオ・レイトン准将とレスター・クールダラス大佐の任を解くものとする」

同時に、ルフト中将はアキオとレスターにエルシオールに戻る許可を与える。

「ようやく、エルシオールに戻れるか」

「そうだな」

辛かった任務を終え、ようやくエルシオールに戻れる事を喜ぶアキオとレスターに二人の軍人が話しかけてくる。
それは、先日にアキオがさんざんに扱き使ったアイウッド少佐と、いきなり大きな仕事を任せたバルト中尉であった。

「レイトン准将。目の下の隈が深刻なレベルにありますけど、大丈夫ですか?」

「ああ。アイウッド大佐か。だから、これから寝るんだよ」

「そうですか。寝られるんですか。羨ましいですな」

臨時昇進で大佐となり、更に第3方面軍副司令としてルフト中将を支える事となったアイウッド大佐の目の下にも、かなり深刻なレベルの隈が発生していた。

「大佐になれたんだから、良しとしないと」

「給料は、以前のままだそうです。シヴァ皇子から感状を貰えたのが唯一の成果ですな」

実は、アキオが唯一シヴァ皇子に個人的にお願いした事があった。

それは、一番最初にアイウッド大佐にシヴァ皇子が感状を渡す事であった。

この緊急事態なので、臨時昇進は行えても給料が良くなるわけでもないし、休暇など暫くは無いと考えた方が良い状態であったので、せめて士気を上げるためにと、アキオがお願いをしていたのだ。

それと、今は不問というかもう問題視されないであろうと考えられていたが、アイウッド大佐には第四分艦隊の指揮権継承の件で借りがあった。

彼があくまでも軍規に拘っていたら、アキオ達はファーゴで屍を晒す事になったかもしれなかったので、せめて感状くらいはと思ってのお願いであったのだ。

『随分と、ささやかなお願いなのだな』

『ささやかではありませんよ。アイウッド大佐は、軍法会議覚悟で私の命を救ってくれたのですから』

『では、一番最初に余が直接に感状を渡すとしよう』

このようなやり取りの後、アイウッド大佐は一番でシヴァ皇子に直接感情を貰い、更には感謝の言葉を贈られるという名誉を賜っていた。

『感状一つで、こんなに効果があるのだな』

『ええ。ですから、あまり乱発すると価値が落ちますが、効果的な手段であると臣は考えます。何しろ、この国家窮乏の時に金を使いません』

『そうだな。レイトンの言う通りだ。確かに、紙代とインク代しか掛からないな』

二人は、謁見室の中で笑い合っていたのを御付のメイドに目撃されていた。

「それと、バルト中尉・・・・・・。じゃなくて、少佐か」

「戦死でも無いのに、二階級特進なんて何か奇妙ですよね」

「正確には、昨日付けで一階級、今日付けで一階級だから特進じゃない」

「そういえば、俺もその手だったよな・・・・・・」

自分もそうであった事を思い出すレスターを他所に、今回のクーデター劇の特徴の一つとして、クーデターの首謀者であるエオニア

が、自身が皇族出身者なのに同じ皇族やそれを支える貴族階級の人間を目の敵にしているという点にあった。
自分を追放したジェラールの共犯者と考えているのか？新しい皇国の支配体制に邪魔だと考えているのか？
とにかく、彼は戦場でも支配地でも、捕まえた貴族達に容赦しなかった。
極一部の使えると判断した連中以外は、一族郎党皆殺しが当たり前で、その中には赤ん坊すら含まれているらしい。
結果、軍や政府の幹部に多数いた貴族が大幅に減り、その穴を埋めるために、多くの出世は遅かったが能力のある市民出身の人材を次々に昇進させて使うという手を用いて、今回の大損失の穴を埋めていたのだ。

「バルト少佐。通信参謀だって？」

「ええ。多少の不安が無い事も無いんですけどね」

「悩む前に動け。俺から言える事はそれだけだよ」

「はい！　色々とありがとうございました！」

アキオは、バルト少佐に色気のある敬礼を返すと、レスターやルフト中将と一緒にエルシオールへと戻る事にする。
実は、シヴァ皇子が、これからの事で相談したい事があると連絡を入れて来たからだ。
アキオとレスターは、新しい第3方面軍司令部の軍人達と任務の引継ぎを行ってから、急ぎ足でエルシオールへと帰還するのであった。
実に、三日ぶりの事であった。

（同時刻、エオニア級旗艦ゼル、ブリッジ内）

「エオニア様。これからの作戦行動なのですが」

「ウォッカのジジイめ。色々と嫌らしく動きおって。だが、まだ余の想定の範囲内ではあるな」

「お兄様。全部壊しちゃうつもりなんでしょう？」

シェリー、エオニア、ノアの三人は、他には誰もいないブリッジの中で、全無人艦隊や無人偵察機から次々に入ってくる情報の整理と分析を行っていた。

「シェリーよ。各方面軍に対応するために残してあった戦力は、ちゃんと足りているのか？」

「ええ。ですが、第2方面を除く全ての対応艦隊が、予想外の損害を受けたらしく・・・・・・」

「予想外の？」

「こちらと同じ手です。無人艦隊を用いての自爆・特攻です。ですが、向こうはスクラップ寸前のボロ船ばかりで、失っても奴らの腹は痛みません」

シェリーは、エオニアに詳しく状況を説明し始める。

最初に、各方面からかなり大規模の敵艦隊が侵入して来たので、それを迎撃するために残していた無人艦隊を動かして攻撃を開始すると、それらは碌に弾薬すら積んでいないボロ船主体の無人艦隊で、こちらの攻撃で、呆気ないほどに簡単に次々と沈んで行ってしまう。だが、そこで変に気を抜くと、思わぬしっぺ返しを喰らう事となる。

どうやら、敵の無人艦隊の中に、コントロール専用の有人艦が存在するらしく、その艦の操作で全ての生き残った無人艦がこちらに体当たりをかまして来るのだ。

結果、数だけは立派であった敵の無人艦隊は全滅し、唯一残った有人艦は戦闘のどさくさに紛れて逃げ出してしまうのだが、戦場には大量のエネルギーと弾薬を消耗した、１５％～２５％の損害を受けた味方艦隊のみが残るという結末になっていた。

「更に・・・・・・」

「まだあるのか？」

「戦闘終了後に、損傷艦の分離と艦隊の再編成を行っている時を見計らって、敵の本命の艦隊が攻撃を・・・・・・」

ところが、その艦隊の攻撃は、半ば通り魔的な物であるらしい。一撃離脱で最大限の火力を叩き付けると、戦場から一気に下がって行ってしまうらしいのだ。

そして、また補給を始めるとこちらの邪魔をして、追撃をかけると損害を出さないように逃げてしまう。

こちらの物資ばかりを無駄に消費させる厭らしい作戦であった。

「シェリー。ちょっと、セコイ手ね」

今までは、静かに話を聞いていたノアが、人を小バカにしたような表情をしながら、敵の態度を嘲笑う。

「ですが、ノア様。こちらの弱点を的確に突いての動きです」

「そうね。部品にしては健闘しているけど」

シェリーは、内心でノアに舌打ちをしながら、実は自分達がかなり危うい場所にいる事を悟っていた。

常に黒き月が最速で戦闘艦艇を量産し、それを無人で操る事が可能なエオニア軍の最大の弱点は、ずばり補給にあった。

元々、人材が少ないという事もあって、食料や生活必需品にはほとんど困らないのだが、問題は就役後に航行や戦闘を行う戦闘艦艇の方にあった。

実は、宇宙空間を航行する船は、カタログスペック以上に痛みの進行が早く、そのために頻繁に修理と補給を必要としている。

経済性優先の民間船と違い、性能重視の軍艦には特にその傾向が強く、そのために軍隊における補給部隊の規模は、なかり大きな物となっていた。

近年、一部の内戦やテロ以外に実戦経験が無いトランスバール皇国軍では、次第に補給の重要性が薄まりつつあったのだが、それでも、抱えている補給部隊の規模はそれなりの物であったし、ここ一年ほどでそれを劇的に改良した人物が存在していた。

アキオ・レイトン准将とウォルコット・O・ヒューイ中将の名コンビである。

エオニアがクーデターを起こす前に、この二人が軍の補給と通商護衛を行う部隊を統率していた事を天佑と呼ぶ歴史家は多く、正面戦力では圧倒的に優位であったエオニア軍が戦に破れてしまった最大の原因を、トランスバール皇国軍のロジスティック体制の優秀だ

と指摘する専門家はかなり多かった。

「確かに、軍艦は黒き月で沢山作れますし、武器弾薬・エネルギー・交換部品等も同じです。ですが、それを遠く離れた艦隊に運ぶ手段が乏しいのです」

「もう。シェリーったら大げさなのね。あなたに言われたから、無人の高速輸送艦と工作艦を作ってあげたのに」

「私は、護衛を付ける事を口が酸っぱくなるほど申し上げましたが、あなたはそれを無視して送り出し、かなりの数の船が破壊もしくは、拿捕されてしまいましたね」

シェリーは、目の前のノアを少し困った事をする子供を見るような表情で見つめていた。

確かに、いきなり敵地に移動して偵察をしたり、黒き月を自在に操って敵を瞬時に粉砕したり、出会ってから僅かな期間で、こちらが提供したトランスバール皇国軍の軍艦の設計図を参考に、その改良型である無人艦艇を多数建造したりと、ノアは人間離れした圧倒的な能力を有している。

ところが、このように少し幼い部分というか、人間を相手にする時に必要な何かを持っていないような、まるで目の前の少女が最優秀なチェスゲームのＡＩコンピューターのように見えるシェリーであったのだ。

「それに、現地の工廠は使えないの？」

「使えますが、危険です」

確かに、ここで生産した物資を目的の艦隊に届ける事は、非効率

ながらも何とか出来る事は確認された。
ところが、物資は届いただけでは役に立たない。
船から降ろして必要なところに運び、そこで適切に使わなければ意味が無いのだ。
勿論、ノアは無人輸送船と工作船にロボットは積んでいたが、実はロボットだけでは効率的な動きは難しく、そこには現場を仕切る人間の優秀な指揮官が必要であった。
ところが、エオニア軍には、そういった人材はほとんど存在しなかった。
大抵が、実戦部隊で燻っていた連中や傭兵崩れなので、補給という専門知識を持った者がほとんど存在しなかったのだ。
それに、いたとしても、あまり優秀な人物は存在しなかった。
トランスバール本星制圧前に、ホップス中将とオイゲン大将が辺境に逃がしてしまったからだ。
そして、更に深刻であったのが、その事にノアが全く危機感を感じていない事にあった。
人間を部品扱いする彼女からしたら、その人物の個人的な能力などは考慮するに値せず、適切に部署に配置すれば機械の部品のように動くと考えている節があったからだ。

「意図的にサボタージュをする可能性がありますので」

「家族を殺すって言えばいいじゃない」

「多分、工廠を出て数日後に艦が動かなくなるとか、下手をすると爆発するとか、そう言った工作が想定されます」

シェリーは、子供のような容姿でサラリと恐ろしい事を平然と口走るノアに、次第に警戒心を隠せなくなっていた。
確かに、彼女は自分達がクーデターを起こす際に戦力を提供して

くれた恩人ではあったが、最近では何を考えているのかわからなくなっていたからだ。

「人間って、意外と面倒なのね」

「ですが、新国家建設のためには、適切に統治を行う必要があります」

「従順なのを除いて、全部殺しちゃえば良いのに」

「ノア様！」

「まあ。二人とも、待て」

さすがに、これ以上の論争は危険と感じたのか？

二人の様子を観察していたエオニアが、間に割って入ってくる。

「ここで言い争っていても、何の解決にもならない。それで、シェリーはどう考えているのかね？」

「中央に戻るべきです」

シェリーの答えは、とても簡単な物であった。

ウォッカ大将が中央の奪還を意図している以上、一度でもそれを防いでしまえば、敵の正面戦力はそれで限界であり、後は悠々と敵を降伏に導ける。

つまり、短期決戦で一気に敵の戦力を粉砕しようと考えていたのだ。

「皮肉な事に、ウォッカも考えも我々と同じですが」

「ウォッカは、内戦による皇国経済の疲弊を恐れているのだ。共に、ただ資源と資金と人材を食い潰す無駄な行為だからな」

「でも、新しい国家建設には必要な事なのよね。お兄様」

「ああ、そうだよ。ノア」

エオニアは、ノアの機嫌を損ねないように笑顔を浮かべながら彼女に話しかけていた。

「ところで、ノア様にお聞きしたい事があるのですが」

「何かしら？」

「第3方面軍の再建に借り出されている、レイトンの所在です」

シェリーの発したレイトンという単語に、エオニアは意外そうな顔をしていた。

エオニアは、シェリーがアキオの事を少し優秀な軍人程度という評価しか下していないと思っていたからだ。

「あのタクトよりも格好良いお兄さんは、エルシオールに戻ったわよ」

敵味方問わずに、各所に好きに移動して偵察を行えるノアは、既にアキオをレスターがエルシオールに戻っている事を掴んでいた。

「なら、なるべく早くに中央に戻るべきです」

「ほう。なぜ、そう考えるのだ？」

エオニアは、珍しく自分の意見を強硬に通そうとするシェリーを、興味深げに見つめていた。

「敵が決戦を考えている以上、エルシオールと紋章機は有力な主力兵器と位置付けられるでしょう。何しろ、あの不思議な発光現象でパワーアップを果たして、ノア様のフィールドを破ったのですから、ですが、その効果は限定的な物であるらしく、あれから彼らが攻勢に出た事はありません」

「確かに、シェリーの言う通りだな。我々が敵に新たな攻勢を掛ける事も無く、ここで様子見をしている原因にもなっている」

「そこで、次に彼らが何を考えるか？　それは、エルシオールと紋章機の出自を考えれば、おのずと想像が付きます」

シェリーは、黒き月と対の存在であるとされている白き月が作り出したロストテクノロジーの塊であるエルシオールと紋章機が、そのパワーアップを完璧なものとするために、今一度、最終決戦前に白き月に戻るものだと考えていた。

「そうね。同じ、ロストノロジーの源だと思われているからね。でも、所詮は最後の無駄な足掻きに過ぎないわ。そんなパワーアップモドキで、私達を倒せるはずがないもの」

ノアは、一度は謎の発光現象にしてやられたが、次は絶対にそんな手には引っ掛からないと考えていた。

なので、エルシオールが白き月に戻りたければ勝手に戻れば良いと考えていた。

「ノア様には、絶対に自信がおありなのでしょうが、凡人である私は念には念を入れたいのです。エオニア様。私に一部の戦力をお貸しいただきたい。エルシオールの足を止め、我々が先に白き月に到着するようにしたいのです」

「だが、それは物理的に難しくないか？　それに、相手はあのエルシオールだ。下手な戦力でぶつかれば、逆にこちらが敗北する事となろう」

黒き月は、その巨大な質量にも関わらず、自力航行が可能でクロノ・ドライブすら可能であったが、やはりその質量の大きさが影響し、軍艦としてはさほど高速でもないエルシオールよりも遅い速度でしか航行できなかった。

それと、エオニアは心配していたのだ。

そうでなくても、自分の周りで使える人材は非常に限られているので、大切な部下であるシェリーを、ただの足止め作戦で失う愚を犯したくなかったのだ。

「エオニア様。多少の戦力は使い潰してしまうでしょうが、別に、この作戦で勝つ必要は無いのです。敵の足を止めさえすれば良い。そうお考えになって、お気軽に命令なされれば良いのです」

「そうか。だが、くれぐれも言っておく。無理をするくらいなら一旦退け。わかったな？」

「お心遣い感謝いたします。では・・・・・・」

いつもは、こんな事をわざわざ言わないエオニアであったが、どういうわけか、今日は何となしに胸騒ぎを感じての、シェリーに対する言葉であった。

だが、エオニアは、遠ざかるシェリーの背中を見つめながら漠然とした不安を感じずにはいられないのであった。

「「ただいま」」

「あっ！　アキオさん。クールダラス副司令。おかえりなさい」

早期のエルシオールへの帰還命令をシヴァ皇子から受けたアキオとレスターは、共に来るようにと言われたルフト中将を伴い、三日ぶりにエルシオールへと戻っていた。

「クールダラス副司令。お疲れではないのですか？」

「いや、大丈夫だ」

その時、ちょうどブリッジにいたココは、平等に二人に挨拶をしていたが、レスターの憔悴ぶりに動揺したアルモは、アキオとルフト中将を蚊帳の外に置いて、レスターだけを真剣に心配していた。

「でも、目の下の隈とかが凄いですよ。ちゃんと、寝てました？」

「いや、三日ほど寝てないが・・・・・」

「駄目じゃないですか！　健康管理も軍人の重要な任務の一つですよ！」

「いや、まあ、そうなんだが・・・・・・」

アルモのあまりの剣幕に、レスターは珍しくタジタジとなっていた。

「（ルフト先生。俺も、寝てないんですけどね・・・・・・）」

「（そこは、あの娘の気持ちを察してやれ。それに、アキオだって・・・・・・）」

アルモに完全に無視された形のアキオとルフト中将は、小声で不満を述べていた。

「アキオさん！」

「心配しましたよ！」

ルフト中将の言葉通りに、ちとせとミントが駆け足で現れ、まるで競い合うようにしてアキオの目前に立ち、我先にと話しかけていた。

「シヴァ皇子のお話が終わったら、休んでくださいね」

「ミントの言う通りですよ（本当は、膝枕をしてあげたいのですが・・・・・・って！　私は、何を考えて！）」

「（アキオの奴も、なかなかに罪深いのう・・・・・・）」

少しでも、アキオと沢山話そうとするためか？

顔をニコニコとさせながらも、お互いに相手を外側に押しやろうとするミントとちとせをルフト中将が呆れ顔で見ていると、今度はそこにタクトとシヴァ皇子が入ってくる。
更に、残りのムーンエンジェル隊のメンバーと、整備班長のクレータも一緒に入って来た。

「よし。これで、全員が揃ったな。シヴァ皇子」

「ああ。レイトン准将。クールダラス副司令。共に、ご苦労であったな」

「本当に、ご苦労だったです」

「らしいな。二人とも、目の下に隈が見えるぞ」

シヴァ皇子は、つかつかとアキオの前に移動すると、そのまま両手でアキオの顔を持って、自分の顔の前に引き寄せる。

「ふむ。確かにそうだな。クールダラス副司令、そなたと、せっかくの色男が台無しだな。話はすぐに終わらせる故に、すぐに休むと良い」

「あっ！　あの・・・・・・。シヴァ皇子？」

「アキオさんは、その・・・・・・」

ミントとちとせは、半ば恐慌状態であった。
後にシヴァ皇子は、自分が女性である事を公表したのだが、今の時点ではまだ男だと思われていたので、実は男色の気があるシヴァ皇子が、アキオを餌食にしようとしているのでは？と思ってしまっ

たからだ。

「安心しろ。別に、取って食べるわけではないからな」

「それで、お話とは？」

「ふむ・・・・・・」

シヴァ皇子は、タクト達の前でこんな話を始める。

それは、今の状態で黒き月との最終決戦に臨めば、確実に負けるのは自分達であろうという未来予想であった。

「ですが、あの発光現象さえあれば・・・・・・」

「あれは、一時的にリミッターが外れたに過ぎない。それに、二度もあの極限状態まで自分達を追い込んでリミッターを解除し、いつ効果が切れるかもわからないパワーアップ状態の残り時間を気にしながら戦って、本当にエオニアに勝てるとでも？」

あの現場にいなかったがために、少し甘い予測を立てたルフト中将にシヴァ皇子が厳しい反論を展開する。

「つまり、あの時の発光現象は、極限までに追い込まれた我々の心の力が、リミッターに勝ったがために起こったと？」

「そういう事だ。元々、エルシオールと紋章機には、まだ研究段階で完全にブラックボックス化している部分が多いのだ。当然、使用するに当たり、その部分にリミッターを掛ける事となる。いきなり、作動でもされたら事だからな」

タクトの問いに答えるようにして、シヴァ皇子の話はここで終わり、それからの話は、専門家であるクレータ班長に引き継がれる。

「シャトヤーン様以下、代々の白き月の聖母によりもたらされたロストテクノロジーですが、その研究は、二百年以上の歳月を持ってしてもまだ途上状態にあり、そのために我ら白き月の巫女達が存在するわけです。勿論、クロノ・ストリング・エンジンや　H．A．L．O．（ヘイロゥ）システム　など、実用に至った物も多数存在しますが、それらとて実用可能になっただけで、まだ原理が不明な部分も多いのです」

更にクレータ班長の話は続き、その実用に邪魔だと思われてリミッターを掛けられていた部分が、あの最大のピンチの時にその真の力を発揮して、そのおかげで自分達は助かったのだが、その助かった安堵感は、逆にリミッターを復活させるキーともなってしまい、パワーアップが時間限定の物となってしまった要因にもなっているとの事であった。

「同性能で安定して使うための安全装置であるリミッターを解除しなければ、黒き月以下、エオニア軍には勝てないという事か・・・・・」

「そういう事です。そして、そのリミッターを解除できるのは・・・・・」

「シャトヤーン様か・・・・・・・」

つまり、タクト達はエルシオールをエオニアよりも早く、白き月へと向ける必要性があった。

「ですが、一つ心配な事があります」

「それは、何だ？　レイトン」

「白き月は、まだ機能しているのですか？」

「これっ！　アキオ！」

アキオの身も蓋もない質問に、今までは静かに話を聞いていたルフト中将が珍しく声を荒げてしまう。

皇国の象徴にして、市民達の崇拝の対象である白き月とシャトヤーンに万が一の事があったなど、口にするだけ不敬であったからだ。

「ですが、我らもエルシオール単艦で、敵の勢力圏の真っ只中に入らないといけないのです。エオニア艦隊襲来時の首都星トランスバールの惨状は聞いています。普通なら、心配しますよね？」

「お前は、相変わらずの遠慮無しだな。大丈夫だ。先の黒き月の強力な防御フィールドは見たであろう？　あれと同じ物をシャトヤーン様は白き月に展開可能なのだ」

「ならば安心ですな」

シヴァ皇子の返答を聞いたアキオは、安堵の表情を浮かべながらそれ以上の質問を止めてしまう。

「確かにシヴァ皇子の言う通りだな。いつリミッターが外れてくれるのかを期待しながら、敵と戦うわけにはいかないからな。エルシオールの進路を白き月へと向けよう」

タクトの決断により、エルシオールはトランスバール本星の隣にある白き月へと進路を取る事となったのだが、その際にタクトはアキオとレスターに一つだけ厳命した事があった。

「二人とも、絶対に仮眠を取っておけよ」

タクトは、黒き月よりもエルシオールの足の方が速い以上、絶対に敵の妨害行為があると予想していた。

そしてその際には、絶対に二人の力が必要な事も理解していたので、まずはその睡眠不足の状況を早く改善するように命令したのだ。

一刻一秒を争う戦闘時に、寝不足で判断を誤る事の恐ろしさをタクトは良く理解していたからだ。

「わかったよ。本当に眠いから、仮眠を取らせて貰うよ」

そう言い残すと、アキオは自分の部屋へと移動を開始するが、自分の部屋の前で意外な人物が待っている事に気が付く。

「何だ、ランファか・・・・・・」

それは、エルシオールに戻って来た時には、簡単な挨拶程度しか交さなかったランファであった。

「どうしたんだ？　ランファ」

「どうして、命を粗末にするの？」

「言っている事の意味がわからない」

本当は、誰よりも理解していた。

多分、ランファの言いたい事は、あのエルシオールと紋章機の機能が停止した際に、自分の乗っていた戦艦を最後の推進力を使ってエルシオールの前に移動させ、最前線で盾となった事を言っているのであろう。

「あんな危険な事をして！」

「だが、最も効率的な手であるし、俺は軍人だからな。現に、パスカルの乗組員で反対した奴は・・・・・・」

「そんな事を、言っているんじゃないわよ！　どうして、みんなで助かる手を考えないのよ！」

「あるか！　そんなに都合の良い手が！」

アキオは、ランファが相手だとどうしても感情的になってしまう自分を少し嫌悪しつつも、その怒気を孕んだ声を止める事はしなかった。

それに、あの時の自分の判断は、決して間違っていないと思っていたからだ。

「タクトは、内心で苦悩していたわよ」

「だろうな・・・・・」

仲間を犠牲にして自分達が生き残る選択肢など、誰もが好き好んで選ぶわけではない。

だが、あの状況下では、タクトはエルシオールを預かる責任者としても、シヴァ皇子をエルシオールに乗せている軍人としても、自分の行動を黙認し、見捨てる選択肢を選ぶ事も視野に入れなければ

ならないとアキオは考えていた。
ところが、結果としてタクトは別の道を選び、それは上手く行って自分達の周りでは犠牲者は存在しなかった。
だが、それはただの結果でしかないし、例えタクトがどの選択肢を選んだとしても、惑星ロームと衛星都市ファーゴの犠牲者の数は減る事は無かったであろうから・・・・・。

「あの時、タクトは逃げないという道を選び、更に仲間に犠牲を出さないようにと決めて動いた。それは、いいんだ。何しろ、あいつはムーン・エンジェル隊の司令官だからな」

「・・・・・」

「でもな。俺やレスターは、それでは駄目なんだよ。あの能天気男の下で、時に皆に嫌われても現実的な選択肢を選ぶ必要がある事もある。それに、良くそんな能天気な事が言えるな。トランスバール中央士官学校次席のランファ・フランボワーズ少尉殿！」

「っ！」

確かに、アキオの言う通りであった。
貧しい実家の家計を支えるために軍人となった自分であったが、正直なところムーンエンジェル隊に配属された影響なのか、最近は軍人としてはかなり甘い考えを抱くようになっていたらしい。
皇国のお膝元の白き月で、紋章機と呼ばれる最新鋭兵器のテストと実用化に明け暮れていた日々はそれなりに大変ではあったのだが、少なくとも訓練以外で死ぬ事は有り得なかった。
だが、自分の目の前にいる男は違う。
自分達の隊長であるフォルテと同じく、多くの死線を潜り抜けた経験を持つ数少ない軍人であったからだ。

「それに、実際に多くの人は死んでいる」

この一言は、ムーンエンジェル隊に対する最高の皮肉であった。

クーデター後、シヴァ皇子を連れて多くの実戦を潜り抜けて来たランファ達であったが、実は自分達は人を殺した事がない。

一人か二人しかいない指揮官に率いられた無人艦隊の撃破しかした事が無く、更にその司令官は常に逃亡に成功しているので、エルシオールに人員的な被害が出ていない以上、お互いに戦死者を出していなかったからだ。

ところが、アキオは違う。

常に敵意を持った軍人やゲリラ達と戦い、それを殺して生き延びているし、味方にも犠牲を出している事が多い。

明らかに、自分達とは違うのだ。

それに、自分達が失念している事もあった。

今回の戦いでは、エルシオールの人員に被害は出ていないが、その他の軍人や民間人達には多くの被害が出ていて、アキオが指揮した第四分艦隊も同様で、更に彼らが身を呈してエルシオールを守らなかったら、エルシオールにも犠牲者が出ていたかもしれなかったのだ。

「確かに、甘いわね。私達は・・・・・・」

「ああ。甘いな。だが、言い過ぎたな」

「急にどうしたの？」

ランファは、急に表情を崩したアオキの顔を不思議そうに見つめていた。

「別に、戦場で命を張っているからといって、自分が特別に偉いわけではないんだよな。失念してたよ。それに、俺達には俺達の。タクト達には、タクト達の仕事があるんだよ」

「人それぞれに、与えられた役割があるって事？」

「そうだ。ランファ達は、エルシオールとシヴァ皇子を守りながら白き月へと向かい皇国軍を勝利に導く。俺達は、その下地を作る。どちらが偉いとか、偉くないとかそういう事ではない。まあ。運命みたいなものだ」

「そうね・・・・・・」

アキオの意見にそれとなく納得したランファであったが、実は一つだけ気になっていた事があった。

それは、今までは実の父親をやきもきさせようと、自分が生き残る事に極端に拘っていたアキオが、ここに来て自分の命に拘らなくなっていた事についてだ。

もしかしたら、アキオはもう自分が人生で成す事を全て終えたと思っていて、後は死に方だけの問題であると考えているのかもしれなかったからだ。

「悪い。ランファ。さすがに、眠くなってきた」

「ええ・・・・・・。おやすみ」

「ああ。おやすみ」

まるで倒れ込むように自分の部屋に入るアキオの背中を見つめながら、ランファはアキオ本人に聞こえないであろう事を理解しつつ

も、こんな事を小さな声で言い始める。

「アキオ。あんたは、他所の人間なんかじゃなくて、もうムーンエンジェル隊の正式な一員なのよ。タクトだって当然そう思っているし、それに違和感を感じている人なんていないわ。だから、自分をイレギュラーの人間なんて思わないで。自分が犠牲になれば、一番効率が良いとか考えないで。あんたが死んだら、みんな悲しむわよ」

誰に聞かせるでなく、独り言のようにそう言うと、ランファは自分の紋章機の調整のために格納庫へと急いで移動を開始するのであった。

「マイヤーズ司令！　前方に複数の艦影を確認！」

「数は？」

「駆逐艦クラスが四隻と、巡洋艦クラスが一隻です！」

アキオが仮眠を始めてから数時間後、白き月へと移動を開始したエルシオールは前方に複数の敵とおぼしき艦影を確認していた。

「やはりな・・・・・・」

「遅れてすまん！」

「右に同じく！」

タクトが一人思考の海に沈んでいると、そこに叩き起こされたレスターとアキオが駆け込んでくる。

「なあに。まだ、慌てる事はないさ。それよりも、レイトン。髪に寝癖が付いてるぜ」

「後で直す」

「軍人らしからぬセリフだな。レイトン。厳しい上官だと、お説教の場面だぞ」

アキオの適当な返答に、レスターは呆れ顔で文句を言っていた。

軍人は、常に身奇麗にする。

もはや語るまでもない常識であったが、アキオは急がしい日々が続くと、それをたまに忘れてしまう事がある。

その辺に全く隙の無いレスターからすれば、『天才なんだから、忘れるなよ』と言いたくもなるのだが、なぜかそれを忘れてしまうのがアキオという人物であった。

実は、過去に良く回されていた辺境などでは、意外とそういう部分に無頓着な軍人が多くいて、あまり注意をされなかったという理由もあったのだが・・・。

「敵襲かい？　タクト」

「ああ」

そしてそこに、各紋章機の調整と整備を終えて自室で休憩をして

したフォルテ達がブリッジ内に雪崩れ込んでくる。

「でも、数が少ないですよね」

「後ろに本命がいるんじゃないの？」

ミルフィーユは、今までとは違い敵の数が少ない事を不審に思っていたのだが、ランファは、探知できた敵はまだ極一部であろうと予想していた。

「偵察部隊でしょうか？　あっ！　アキオさん。髪に寝癖が付いていますよ」

「そう考えると、自然なのかもしれませんわね（ムカっ！）」

ミントとちとせは、この少数の敵を強行偵察部隊だと思ったらしいが、タクト、レスター、アキオ、エリオスの四人は他の可能性を頭に入れていた。

そしてそれと同時に、ちとせはアキオの乱れた髪を自分の櫛で丁寧にすいていく。

「終わりました」

「ありがとう。ちとせ。悪いね、色々と不良軍人で」

「いえ」

アキオがちとせにお礼を言うと、彼女は顔を赤くさせながらそれに答え、ミントはその光景を羨ましそうに見ていた。

「時間稼ぎですか？」

「僕はそう考えるね。でも、ヴァニラは鋭いね」

エリオスは、正式に士官学校に行っていないにも関わらず、ムーンエンジェル隊の中で一番始めに敵の意図を見抜いたヴァニラの頭の良さに素直に感心していた。

「エリオス。それじゃあ、私達はバカって事なの？」

「それは、被害妄想じゃないかい？　ランファ・・・・・・」

以前の一件以来、ランファに頭が上がらないエリオスは、彼女の追求で背中に冷や汗をかいていた。

「でも、普通は強行偵察だと考えるのが一般的よ」

ランファの意見に、ヴァニラを除くムーンエンジェル隊の全員が賛同していた。

「まあ、普通に考えればね。でも、敵はエオニアの艦隊だから、彼らには彼らなりの戦略というものがあるんだよ。そうですよね？兄さん」

「・・・・・。ふんっ！　敵はこう考えていると思う。最終決戦に向けて、皇国軍で最高性能を持つ紋章機とエルシオールの更なるパワーアップは是非にも防ぎたい。となれば、敵が行う事は一つ。なるべく少ない犠牲と労力を持ってこちらの足を止め、先に黒き月が白き月へと向かえるようにする。ただそれだけだ」

今までのように、エリオスに《兄さん》と呼ばれても喰って掛かるような事はしなくなったアキオであったが、やはり少し不愉快なのか、エリオスが、《兄さん》と言ったタイミングで顔を反らしてしまうアキオであった。

「でも、それなら何で戦力があんなに少ないのよ。戦力を集中させた方が、エルシオールの足を止めやすいじゃない」

ランファは、士官学校で基本として習った戦力集中の原則を、敵が破っていると考えているタクト達に反論を展開する。

「いや、多分全部の戦力を集めても、エルシオールにはかなわないレベルの戦力しか有していないのだろう」

「それっておかしくない？　なら、もっと戦力を集めてこちらに挑むのが普通じゃないの」

「それは、エルシオールを撃破する際には重要な事だな。でも、考えてみるんだ。ランファ。敵は、白き月でのパワーアップを試みる我々の行動の阻止が一番重要な目標あって、今無理に我々を撃破する必要は無い。最後の決戦で下せば良いと考えている」

タクトはそこまで説明すると、そのままアキオの方に視線を向ける。

「おいおい。俺に何を言えと？」

「いやあ。説明するのが面倒になってさ」

「それは、レスターに振れ。俺は、エルシオールでは下っ端なんだ」

思わぬ事故でエルシオールへと乗り込む事になったアキオは、本来は惑星ロームでエルシオールを降りて他の任務に就くはずであった。

最大の候補としては、ジンロ中将が統率している最大の戦力を擁する主力艦隊の参謀長か、全ての味方艦隊の補給業務を統括しているウォルコット中将の下に就く事が有力視されていたのだが、それは先の惑星ロームに対するエオニア艦隊の奇襲によって全て白紙状態となっていた。

更に、ウォッカ大将には何か考えがあるらしく、その後の人事はタクト達を含めて全て未定という事になっていて、アキオ達はそのままエルシオール乗り込む事となっていたのだ。

「俺は、色々と忙しい」

既に敵の意図に気付き、それに対応するためにアルモと作業に入っていたレスターは、アキオの要求を呆気ないほど簡単に切り捨てる。

「タクトが、こんな細かい作業をするとは思えないからな。おい！　タクト！　敵艦隊への対応！」

レスターは、話す事に夢中になっていて次第に接近する敵艦隊の事を忘れている節のあるタクトに注意を促す。

「わかったよ、レスター。じゃあ、数も少ない事だし、適当に沈めて来てくれ」

「了解」

「ああ。それと」

「何だい？　タクト」

「紋章機は、全機を出さないでくれ。割り振りは任せるけど、長期戦になりそうな気配だから、上手くローテーションを組んでくれよ」

「はあ？」

タクトの意図が読めないフォルテは、思わず首を傾げてしまうのであった。

「トリックマスター。最後の駆逐艦を撃沈しました」

「同じく、シャープシューター。敵巡洋艦の狙撃に成功。艦の撃沈を確認」

エルシオールのブリッジの正面スクリーンにミントとちとせの姿が映り、二人は敵の小艦隊を撃破した報告をタクトに行っていた。

既に、最初の敵の小規模艦隊出現から半日、エルシオールは完全に敵艦隊に足止めを喰らっていた。

「これで六度目。でも、今回は全滅させられただけマシね」

突然、ブリッジの正面スクリーンにカンフーファイターで格納庫に待機中のランファから通信が入ってくる。

「そりゃそうだ。敵の意図は、保持している戦力で一秒でも俺達の足を長く止める事なんだから」

「こっちが出撃した途端にコソコソと逃げ出して！　嫌らしいにもほどがあるわ！」

ランファは、いつまで経っても好転しない戦況にイライラとしていた。

なぜなら、先ほどから敵を探知したら紋章機で二機ずつに分かれて迎撃し、一定時間稼動させた紋章機はすぐに整備を行うというローテーションを繰り返していたのだが、敵の小規模艦隊はこちらが出撃すると素早く探知範囲外に逃げ込んでしまうので、敵の数をあまり減らせていなかったからだ。

「でも、紋章機の欠点を上手く突いた時間稼ぎの策ではあるねぇ。そう思うだろう？　タクト。アキオ」

続けてフォルテがスクリーンに割って入るが、確かに彼女の言う事は正しかった。

紋章機は高性能ではあるが、一機一機がプロトタイプで試作機に近い物であり、その修理と整備には膨大な手間と時間を要した。

皇国軍で一般的に配備されているシムス高速戦闘機ですら、一機に付き十数人の整備士を必要とし、一時間稼動させるとその三倍の整備時間が掛かるだから、当然と言えば当然と言えよう。

元々、兵器というものは民生品と違い修理やら整備に手間が掛かるものなのだ。

「空振りでも何でも、動かしたら決められた整備が必要だからな。それだけで時間稼ぎとなる」

「恐ろしいほどに狡猾な敵だね。アキオは誰だと思う？」

「シェリーだ。彼女以外にありえない」

アキオは、エルシオールの足を止めている艦隊の司令官をシェリーであると断定していた。

「あの単純なレゾムや、軍人失格のヘル・ハウンズ隊にこんな芸当は出来ない」

「確かにね」

フォルテを含む全員が、アキオの考えに賛同していた。

卑怯だの、軍人らしくないだの、そういう周りの評価を一切気にせず、己の目的を達成するために一切の無駄なく戦力を駒として動かす。

今までの大量の戦力をぶつけてくる戦いとは違い、タクト達は、シェリーが使う初めての戦法に戸惑いを隠せないでいた。

「それで、どうするのよ？　このまま敵に感心しながら時間を潰せっての？」

「アキオさん。このまま惑星ブラマンシュへと向かうクロノ・ドライブポイントへと向かうべきなのでは？」

更に、トリックマスターで帰艦したミントが、アキオ達の話に割って入って来る。

実は、エルシオールは白き月へと向かう前に、物資の補給とまだ終わっていない艦本体の修理等を、白き月への経路上にあるブラマンシュ財閥の本拠地である惑星ブラマンシュで行う予定があった。
あの惨劇で、多くの避難民達や損傷した第3方面軍艦隊などが多くの物資を必要としていたので、エルシオールの方は最低限の修理だけを行い、後はブラマンシュ財閥頼みという事になっていたのだ。

「それをすると、クロノ・ドライブポイント突入寸前の最高のタイミングで攻撃を仕掛けられる可能性がある」

「紋章機を外に出しておけば良いじゃない」

ランファは、単独でクロノ・ドライブが可能な紋章機をエルシオールの護衛として出す事を提案する。

「一時しのぎにはなるな」

「えっ？」

「だからだ。それで一旦振り切っても、惑星ブラマンシュでの補給を妨害される可能性がある。白き月に到着後にもそれが無いとは絶対に言えないな。何しろ、首都星トランスバール周辺宙域は、エオニアの勢力圏なんだからな。それに、あんな細切れの嫌がらせに近い攻撃を何日もずっと受けてみろ。エオニアとの最終決戦時には、俺達はクタクタだな。下手をするとエルシオールの修理すら完璧に終わっていない可能性もあるし、紋章機の稼働率もガタ落ちになっているかもしれない。シェリーがずっと張り付いている間はな」

アキオの意見に、ランファを含む全員が黙り込んでしまう。
こちらは、敵を全滅させるか少なくとも頭を討つ必要があるのに、

敵はただこちらを妨害して付かず離れずを繰り返せば良い。
いや、実際には《言うは易しで行うは難き》なのだが、優秀な軍人であるシェリーには決して不可能な事では無く、その彼女にそういう戦いを仕掛けられたエルシオールは、今までに無い種類の危機に陥っていた。

「それで、これからどうするの？」

「勿論、頭を討つさ。そうすれば、残りの自動操縦の艦は、こちらに攻撃を仕掛けてくるか撤退する可能性が高いからな。基本的にああいう心理作戦を含んだ指揮は、人間の、それも優秀な司令官にしか出来ないものだからな」

「それで、どこにいるのよ？　そのシェリーは」

ランファの言う事は最もであった。
惑星ブラマンシュへと向かうクロノ・ドライブポイントに到達するまでのこの宙域には、多数の小惑星や岩塊群が存在し、他にも死滅してブラックホールになる直前の恒星やら、まだ現役の恒星からの恒星風が吹き荒れてこちらの探知機器の性能をかなり低下させていたからだ。
この状態で、シェリーが座上していると思われる旗艦の位置を判別する事はかなり困難であると言えた。

「それを、アルモとレスターに任せているんだよ」

タクトの言葉によって全員がレスターとアルモが作業をしている方に視線を向けると、そこでは二人が懸命に様々なデータを照合して敵旗艦の位置の特定を行っていた。

「レスター。どうだ？」

「お気楽に言ってくれるな。四箇所までは絞り込めたよ」

レスターと一緒に仕事が出来てご機嫌なアルモの奮闘のおかげもあってか、レスターの作業はタクトやアキオの想定よりもかなり早く終了していた。

「クールダラス副司令。ちょっと、遅くない？」

「言ってくれるな。ランファ。お前がやったら、確実に一日は掛かるはずだぞ」

周辺の宙域の様々な状況から、今までに襲来した小艦隊の侵入位置・方向・数、更には皇国軍のライブラリーに残っていたシェリーの人物像から、士官学校時代の成績表や戦術シミュレーション教習での傾向まで、レスターはアルモを助手として集められる限りのデータを元にシェリーのいる場所を分析していた。

「単に、戦術論の問題では無い。その人物の性格や思考・行動の癖を見抜き、一番可能性のある宙域を予想する。そういう事だ」

レスターは、アルモから新たに受け取ったデータを見ながらランファに反論する。

それに、敵対勢力や危険人物のプロファイリングは、本来は首都星トランスバールにあった軍本部内のかなり大規模な部署が行っていた事だったので、二人でやればそれなりに時間が掛かるのは仕方の無い事であった。

というか、レスターだからこれだけの時間で終わらせたとも言えたのだ。

「なあ。レイトン。お前は、この結果をどう思う？」

タクトは、レスターから受け取った書類を暫く見てから、それをアキオにも回す。

「俺も、これ以上は絞れない。後はお前の判断だな」

「四箇所だから、四機の紋章機を向かわせるって事？」

「エルシオールを、たった二機の護衛のみで放置できないな」

ランファの意見を、アキオは即座に否定する。

なぜなら、確かにシェリー持っているの戦力ではムーンエンジェル隊の撃破は難しいが、エルシオールだけならそれは造作もない事であったからだ。

元々儀礼艦で武装も少ないし、装甲はかなりの物だがスピードはそれほどでもなく、更に軍艦としては余分なスペースが多いのでダメージコントロールが難しい艦であったからだ。

そもそも、副長のエリオスが最近戦闘時に常にブリッジにいないのは、それを見越して現場に待機しているからであり、丸裸とは言わないが、たった二機の紋章機の護衛で敵の攻撃を待ち構えるなど、タクトやアキオからしたら論外という他は無かった。

「二機だ。確率は半分。駄目ならもう一度やり直す」

タクトは、素早く決断した。

これは、シェリーというエオニア配下の名将と自分との知恵を尽くした命を掛けた遣り取りで、決断を遅らせる事は自分の敗北の確率を上げる行為である事に気が付いてたからだ。

「それで、その機体を向かわせるんだ？」

元より、タクトの作戦に異議の無いレスターは、一番の懸案事項であるシェリーの潜んでいると思われる宙域へと向ける紋章機の種類を尋ねていた。

「ミルフィーとランファの二人に任せる。ラッキースターとカンフーファイターはスピードがあるから、不測の事態があった時でも素早く対応可能だからな」

「わざわざの御指名に感謝するわ。タクト」

タクトから直接指名を受けたランファは、仰せつかった重要な任務に気分を高揚させていた。

ところが、もう一方の当事者であるミルフィーユからは、何も返事が聞こえてこなかった。

「どうしたんだい？　ミルフィー」

「ミルフィー。柄にも無く緊張しているの？」

フォルテとランファの呼びかけにもミルフィーは全く反応せず、ラッキースターのコックピット内で顔を俯かせたままであった。

「どうしたんだい？　ミルフィー」

このままでは埒が明かなかったので、アキオは優しく声をかけてみる事にする。

「私。自信が無いです・・・・・・」

ミルフィーユは顔を俯かせたまま、消え入りそうな声で自分の意見を述べる。

「大丈夫だよ。確率は二分の一でも、失敗したらやり直せる。それに、向かわせる宙域はこちらで指定するから、間違っていたらタクトの責任なんだから」

「おいおい。俺の責任かよ」

「お前が、司令官だからな。当然だ」

「司令官は辛いよな」

「その分、日頃はサボっているんだから、こういう時くらい責任を取れ」

アキオの発言に対してタクトが文句を言うが、隣にいたレスターはタクトに対して全く優しくなく、逆にアキオの発言を支持してしまう有様であった。

そして、そのおかしな遣り取りを聞いていたフォルテ達の顔に笑顔が浮かび始めるが、肝心のミルフィーユの表情は暗いままであった。

「でも、私は強運というか凶運の持ち主で、最近はそれ程でも無いけど、もし今回で何か大変な事が起こったら・・・・・・」

確かにミルフィーユの言う通りで、彼女の特殊な運勢が今回に限り凶運に傾けば大変な事になってしまうのは事実であったが、実は

アキオがエルシオールに乗り込んでからは、その運勢があまり凶運に傾く事が少なかったので（唯一の例外が、アキオとフォルテが高級ブランデーを喪失した事件であった）、ミルフィーユを除く全員がその事を忘れていた。
だが、唯一アキオは、ミルフィーユの落ち込んでいる理由を彼女の運勢の問題だとは考えていなかった。

「ちょっと、話をしないか？　ミルフィー」

「なっ！　お前っ！」

アキオの突然の提案に、タクトが驚きの声をあげる。
なぜなら、普通こういう時にミルフィーユと話をするのは、恋人である自分であると思っていたからだ。

「アキオさん。それは、タクトさんのお仕事では？」

「そうです。タクトさんに任せるべきです！」

自分の想い人の意外な発言に、ちとせとミントも同様に抗議の声をあげる。

「だが、この問題は、俺とフォルテにしか解決できないぞ。いや、その可能性があるだけで、解決すら不可能かもしれないけど・・・・・」

「そう言えば、そうだったね・・・・・・」

フォルテも、アキオの言わんとしている事が理解できたらしく、そのまま納得したような表情のまま黙り込んでしまった。

「レイトンとフォルテの共通事項か・・・・・・。わからないな」

「とにかく、少し時間をくれ。ミルフィー。お茶でも飲みに行こう」

「はい・・・・・・」

スクリーン越しのミルフィーユから了承の返事を貰ったアキオは、そのままフラリとブリッジを退室してしまう。

「しかし、二人の共通事項とは何なのだ?」

「私には、わかりました」

レスターですら思い付かない疑問にフォルテを除く全員が悩んでいると、それにいち早く気が付いた人物がいた。

それは、エリオス・シードル少佐であった。

「エリオスさん。二人の共通点とは何なのですか?」

「それはだね。ヴァニラ。二人は、皇国軍将兵の中でも数の少ない実戦経験者で、実際に人を殺してその手を血に染めているという事だよ。そして、マイヤーズ司令の作戦を実行すると、ミルフィーとランファはシェリーを殺してその手を血に染める事となる。そういう事ですよね? フォルテさん」

エリオスはヴェニラの質問に答えつつ、フォルテに自分の考えを述べる。

「さすがだね。アキオの弟君は。そうさ。ミルフィーは、気が付い

てしまったのさ。今までみたいに無人艦を沈めるだけの戦いとは違って、今回の作戦では、人を殺さなければならないという事にね」

「ですが！　私もミルフィーも、アキオさんの下で従兵実習をした時に！」

ちとせは、以前に自分とミルフィーユが従兵実習の時に商船を襲う海賊達を実際に退治した時の事を語る。

「旗艦のブリッジの中で観察していただけだろう。実際に命令を下したのはアキオ。引き金を引いたのはアキオの部下で、その責任は指揮官であるアキオにある。そして、惑星サーヴァントのジャングルで、まだ未熟だったアキオに実戦的な銃の使い方を教えたのは私で、人の殺し方を教えたのも私だ」

日頃は、ムーンエンジェル隊の隊長としてや、隊員達の頼れる姉としてみんなの前で明るく振舞っているフォルテであったが、彼女も自分の故郷の惑星で、自分の肉親を殺したゲリラ達を殺していてという過去が存在していた。

更に、アキオなどは艦隊の臨時司令官として反乱勢力の有人艦を複数沈めていたし、小型艦艇を操縦して敵の同種の船を沈めてもいる。

多分、皇国軍でも有数の、実際に自分の手を血で染めた男であろう。

「タクト。ミルフィーとランファに命令を出したのは間違いではないんだよ。でもね。それを実行すると、彼女達は始めて人を殺す事となる。例え、それがシェリー一人でも、ゼロとイチは全く違うものなんだよ。それで、あんたはそれにどうフォローするつもりなんだい？」

フォルテの問いに、タクトは完全に言葉を詰まらせてしまう。
確かにフォルテの言う通りで、自分は実際に人を殺した事がない。
いや、実際にはあるのだが、それはエオニアが反乱を起こした直後に、活動を活発化させた複数の海賊の討伐命令を惑星駐留軍司令部内で下しただけで、正直なところ全く人を殺した実感が沸かないものであった。
そして、それはレスターも同様であった。
その頭脳から参謀的な役割を求められ易い彼は、意外にも実際に自分の手を血で染めた経験が無かったのだ。

「笑ってくれても構わないが、今の俺には何も出来ないな。後で、普通にミルフィーを慰めるとするか」

「いいね。タクト。こういう事を聞いても、物怖じしない部分が司令官殿だねぇ」

フォルテは、タクトに笑みを浮かべながら作戦開始の時を待つ事にしたのだが、それに文句のある人間も一人いたようであった。

「ちょっと！　何で、ミルフィーばかり優遇するんです？　私だって、シェリーを討つ可能性があるんですよ！」

「そういえば、そうだったね」

ランファを除く全員が、多分例の強運の関係でシェリーを討つのはミルフィーユの方であると思っていたので、ランファの方に気を掛ける人間が誰もいなかったのだ.

「ランファは、二歳も年上だからさぁ。まあ、そこは人生経験の差

で？　それに、後でアキオに慰めて貰えばいいじゃないか」

「そこで、どうしてアキオが出て来るんです！　私は、あいつになんて慰めて貰わなくても！」

「（嘘ですね・・・・・・）」

「（嘘ですわね）」

既に、ランファはアキオ争奪戦のライバルであると思っているちとせとミントは、心の中でそう考えながらランファをジト目で見つめ続けるのであった。

「アキオさん・・・・・・」

「ココアでも飲むかい？」

「はい・・・・・・」

エルシオール内にあるティールームで、アキオは呼び付けたミルフィーユに自分で淹れたココアを振舞っていた。

「大人の味ですね。甘さ控え目で」

「和菓子でも何でも、俺は甘さ控え目が好きなんだよ」

同じく、自分の淹れたココアを飲みながら、アキオは今回の件には全く関係ない自分の味の好みを語り始める。

「実は、シェリーさんを殺してしまうかもって事にはあまり抵抗が無いんです。私」

「実際に目の前で死ぬわけじゃないからな。血が流れるわけでもない。ただ、乗っている艦が爆沈するだけだ」

「やっぱり、わかっちゃうんですね」

「まあ、経験済みだからさ・・・・・・」

アキオは実際にゲリラを銃で射殺したり、その体にナイフを突き立てて殺した経験もあったが、その他は敵の乗っている軍艦や小型戦闘艇を撃沈した事の方が多い男であった。

そして実際に、初めて自分の目の前で相手が血を流して冷たくなって死んで行った時には、かなり動揺した経験があったのだが、敵の軍艦を沈めた時には、実際に人が死ぬ場面を見たわけではないので、あまり動揺しなかった事を覚えていたのだ。

「あの。シェリーさんって、エオニアさんの事を愛していますよね？　女性として」

「それは、考えた事が無かったな」

アキオは、ミルフィーユの女性ならではの視点に少し驚いていた。

「だって、エオニアさんのためにあんなに一生懸命に働いて、女の人なのに顔の傷を忠誠の証だからって消さないで、エオニアさんのために、あんなに沢山の人を・・・・・・」

「だから、可哀想で討てないのかい？」

「それは・・・・・・」

アキオの問いに、ミルフィーユはココアのカップを持ったまま言葉を噤んでしまう。

「これは、俺の予想の範疇を超えない意見だけど、シェリーは心のどこかで討たれたいと思っているのかもな」

「えっ？」

「彼女は、エオニアに忠誠は誓っているが、その行動を見ると普通の優秀な軍人にしか見えない。エオニアと違って、特に歪んでいる部分が見出せないんだ。それなのに、自分が忠誠を誓ったエオニアの命令であれだけの罪の無い人達を虐殺している。新しい国家創りという大儀のためだと内心では思っても、実はその罪の重さに苛まれているのかもしれない」

仮説の域を出なかったが、アキオはシェリーがどこか自分の生を諦めている部分があるのではと考えていた。

でなければ、彼女ほどの一級の将帥が、こんな足止め作戦に参加するはずもないと考えていたからだ。

「もし、俺がエオニア軍にいたら、もっとスマートな作戦を提示す

る。多分、多くの軍人が死ぬのは一緒だが、なるべく一般市民に犠牲を出さない作戦を提示して、それが受け入れられなければ強硬に食い下がると思う。でも、彼女はそれが出来なかった。よくよく考えると、ミルフィーの言っていた説は正しいのかもしれない。《盲愛》、《偏愛》。上手く言葉は見つからないけど、そういう類の物かもしれない」

「そんな・・・・・・」

「エオニアのために、その身を焦がして死んでいく。それが、今の彼女の望みなのかもな」

アキオは、もう既にシェリーが生き残る術は、自分達を全て討ってこのクーデターに勝利するしかないと考えていた。

例え説得に成功してこちらに投降したとしても、あれだけの人達を虐殺した罪が消えるはずもなく、確実に軍事法廷で死刑に処されるからであった。

それに、アキオ達とて負けるつもりは更々無かったので、となれば後はシェリーを討つしか策は無かったのだ。

「ここで討つのも情けと知れ！」

「アキオさん」

ミルフィーユは、アキオの強い感情込めた声に驚いてしまう。

「ここでシェリーが生き残れば、これから補給を行う惑星ブラマンシュにも被害が出る。あそこも、警察レベルの警備隊は保持しているが、宇宙空間にある軍艦には歯が立たない。当然、大きな犠牲が出る。でも、シェリーはプロの軍人だから、補給中の我々を必ず狙

ってくる。手抜きは絶対にあり得ない。エオニアのためにもな」

それは、士官学校で教育を受けたミルフィーユにもわかっている事実であった。

それでも、自分の女としての部分を隠し、エオニアのために懸命にエルシオールの足止めをしようとしているシェリーを見ていると、少し決心が鈍ってしまうのも事実であったのだ。

だが、これ以上の躊躇は、今度は自分の仲間達の死を誘発する事態にもなりかねない。

ミルフィーユは、心を鬼にして彼女を討つ決心をする。

「私。行きます！」

「そんなに気張るなよ。ランファが討つかもしれないし、他の誰かが討つかもしれない。それに、絶対に討てるという保障も無いんだ」

アキオが笑顔でミルフィーユの肩をそっと叩くと、彼女はそれに反応して笑みを浮かべながらティールームを後にして行く。

「ミルフィーは、あんたの言う事だと良く聞くわね」

「信頼されているのかな？」

ミルフィーユがティールームを出た後、アキオの前に姿を現したのは、同じくシェリーを殺す可能性のあるランファであった。

「でしょうね。タクトとは種類が違うけど、あの娘にとってはあんたも大切な人なのよ」

友達のようであり、兄妹のようであり、でも恋人同士では無い不

思議な関係の二人は、あのシャトルでの運命の出会い以降その縁を徐々に強くしていった。

特に、今までにミルフィーユの幸運に助けられる事が多かったアキオは、彼女を《幸運の女神》だと思っていたし、天真爛漫な彼女に心が救われる事が多かったのだ。

「そうか。だが、ランファは大丈夫なのか？」

「私？　私をお子様のミルフィーユと同じにしないでよ。軍人になる時に覚悟はしているわよ」

「そうか・・・・・・」

アキオは納得した表情をしたが、同時にこんな事も話し始める。

「俺が始めて人を殺した時は、夜に眠れなくてな。夢に殺した奴が出てくるんだ。額に銃痕のある男が血塗れで俺に恨み言を言うんだよ・・・・・・」

「アキオ・・・・・・」

ランファは、見た目以上の修羅場を潜り抜けてきたアキオが、普通の人と同じように人を殺した罪悪感で心を曇らせている事を知る。

「だから、もしそうなったら仲間を頼れよ。俺みたいに一人で抱え込むと・・・・・・意味の無い事を言ったな」

そこまで言うと、次の作戦準備のためにティールームを後したアキオをランファは複雑な表情で見つめるのであった。

「作戦開始！」

全ての準備が整って後、遂にタクトの号令でシェリーを討つ作戦が始まる。

「タクトよ。本当に、これでシェリーとやらを討てるのか？」

「まあ、見ていてください。シヴァ皇子」

今までの経緯に業を煮やしたのか？

先ほどまでは、自室で待機していたシヴァ皇子も作戦の推移を見守るべく、エルシオールのブリッジに詰めていた。

「タクトさん、ラッキースター。ミルフィーユ・桜葉、行きまーーす！」

「同じく、カンフーファイター。ランファ・フランボワーズ、行くわよ」

タクトの合図と同時に、エルシオールからラッキースターとカンフーファイターが、レスターが推定した宙域に向けて全速力で発進する。

「エルシオールは、全速力で惑星ブラマンシュ方面のクロノ・ドライブポイントに向けて発進だ」

「了解です！」

タクトの次の命令により、エルシオールは全速力でクロノ・ドライブポイントへと移動を開始する。

これは、勿論シェリーを誘い出すためでもあった。

「二分の一の確率か」

「本当に潜んでいて討てれば、物凄く楽ですけどね」

「それは、虫が良過ぎるのか？」

「まだわかりませんね」

シヴァ皇子の質問に、タクトはバカ正直に答えていた。

「だが、一つ疑問に思う事がある。敵にもこちらの動きを悟られているのでは？」

「いえ。手持ちの探査機器の性能にさして違いが無く、更にこの周辺宙域の環境を考えると、お互いが相手の場所を予想しながら動いていると思います」

恒星風が吹き荒れ、白色巨星が崩壊してブラックホールが出来かけ、更に多数の小惑星と岩塊が漂うこの宙域は、全く索敵に向かない場所であり、それはシェリーも同じ事であった。

「お互いに手探りなのか」

「マイヤーズ司令！　敵艦と思しき反応を確認！　右後方！　Ｙ２３８！」

突然、索敵を担当しているアルモから敵艦発見の報告が入る。

「右後ろか。それで、数は？」

「駆逐艦クラスが４・・・８・・・巡洋艦クラスも確認！　続いて、高速戦艦の反応もあります！」

「高速戦艦か？」

「はい。これは、敵の司令官が良く使用する艦です！」

アルモは、次々に更新される情報を矢継ぎ早にタクトに伝え続ける。

「全ての船で一点特攻か。賭けに出たな」

レスターは、想定の中には入っていたが一番可能性が低いであろうと思っていた作戦を取ったシェリーの食えなさに苦笑いを浮かべていた。

「敵の正確な数と陣形を教えてくれ」

アキオは、アルモにシェリー艦隊の詳細な報告を求める。

「駆逐艦９、巡洋艦３、高速突撃艦２、高速戦艦２です！　陣形は矢印型です！」

「鋒矢の陣か・・・・・・」

アキオがレーダーで敵艦隊の陣形を確認すると、地上の戦いとは違って立体的に、しかも各艦の射線を遮らないように巧みに艦艇が配置されていた。

残存する艦艇のみで、一点であるエリシオールに強烈な一撃を食らわせて沈める。

最悪、艦隊が全滅しても艦をぶつけて沈めても良いという、シェリーにとってはかなり戦略的ハードルの低い作戦であった。

多分、この倍の戦力を揃えられていたら、エルシオールは撃沈の憂き目に遭っていたであろう。

ただ、倍の艦を連れて来れなかったのは、エオニアがウォッカ大将に戦略で押されたからという理由もあったので、この作戦に万が一は存在しなかったのだが。

「レイトン。防げるのか？」

「多分、大丈夫です」

タクトは、既にミルフィーユとランファにエルシオールに戻るように命令を出していたし、シェリー艦隊には四機の紋章機が出る事になっている。

多分、何かが起こらなければ負けるという事は無いであろう。

「シェリー殿。やっぱり、何かを急いでいるな。タクト、エルシオールの火器コントロールを貸してくれ。後方になるべく砲を向けておくよ」

「そんな数門の砲を準備して、使う事があるのかな？」

「窮鼠猫を噛むのさ。見ての通り、シェリーは必死だ。必死な人間が命を賭けると、時に予想外の事が起こる」

「ええい！　意外としぶといね！　ミルフィーとランファはまだ戻らないのかい？」

「少し距離が離れてしまいましたから」

エルシオールの右後方から一点突破を図るシェリー艦隊は、フォルテの指揮する四機の紋章機によって次第に数を減らして行ったが、戦況はまだ予断を許せる状態ではなかった。

「フォルテさん。敵艦隊の先頭がもうすぐでエルシオールを射程距離に収めます！」

シャープシューターで次々に敵艦を狙撃していたちとせは、予想以上に強固な敵に次第に危機感を募らせていた。

「もう少し耐えれば、ミルフィーとランファが戻る。それまで、耐えてくれ」

フォルテは、エルシオールの後方に設置されている火砲が火を噴き始めた事を確認しながら、ちとせ達にもう少し踏ん張るように命令する。

あの距離にしては照準がかなり正確なところからして、コントロールは自分の親友が行っているのであろう。

「二人が戻れば、あの艦隊の攻勢にも限界が来る。ヴァニラ」

「はい」

「エルシオールが傷付いたら、即座に応急処置だ。わかったかい？」

「はい。任せてください」

今回は初手から攻撃に参加しているヴァニラは、フォルテの命令に素直に答える。

「やはり、紋章機四機の守りを突破するのは、厳しいものがあるな」

鋒矢の陣の真ん中に位置する高速戦艦で指揮を執るシェリーは、やはり手強い紋章機を腕を組みながら見つめていた。

「だが、まだ二機の紋章機が戻っていない。これは、チャンスだな」

既に先頭の巡洋艦は、エルシオールへの砲撃を開始していて、逆にエルシオールの方も後方の火砲で応戦している状態であった。

ただ、一つ気になるのはまだこちらの砲撃はエルシオールに命中する気配が無いのに、逆にエルシオールからの少数の砲撃はかなり際どい位置に命中している事であった。

「レイトンか・・・・・・」

思えば、自分はこの男とタクト・マイヤーズにはかなり邪魔をされてきた。
特に、レイトンには個人的に腹を立てていた。
自分が絶対の忠誠を誓うエオニア様が、直接にこちらに来るように声を掛けているのに、彼は、老練な大貴族や高級軍人の人形でしかない未熟なシヴァ皇子に忠誠を誓い、絶対に彼を裏切る事はしなかった。

「私と同じはずなのだがな」

自分は、エオニア様に一番信頼されている部下であると自認していたし、レイトンも、シヴァ皇子の一番のお気に入りの家臣であると聞く。
だが、自分とレイトンには決定的な差があった。
それは、レイトンはシヴァ皇子のために耳に痛い事を忠告する事もあるらしい。
宮廷にいるオベンチャラだけの妄臣とは一味も二味も違うらしいのだ。
だが、それに比べて自分はどうなのであろうか?
新しい皇国のためと称して多数の人の命を奪い、その事に対してエオニア様を諫める事ができなかった。
多分、レイトンならば、『効率が悪いです』とか『税金を納めてくれる市民は、皇国の有用な財産です』などと言って、エオニア様を上手く諫めるのであろう。
だが、自分にはそれが出来なかった。
彼ほどの才能が無かったし、自分は女でレイトンは男であったからという事もあった。

「女か・・・・・・」

認めたくは無いが、多分自分は女としてエオニア様を愛しているのかも知れなかった。

「だが、私がそれを口にする事は無い。ただ、エオニア様の勝利のために」

ところが、シェリーの願いも虚しく、レーダーには戻って来た二機の紋章機が表示される。

「くっ！　もう戻って来たのか！」

「ランファ。良かったね。間に合ったよ」

「喜んでないで、敵を一隻でも減らすのよ」

「わかってるって」

攻勢の限界であった。

当たるか当たらないかは別として、せっかくエルシオールを射程圏内に収めたのに、更に二機の紋章機が加わった事により、艦隊の被害が加速度的に増加し始めたからだ。

「残存六隻っ！　なばら、こうする！」

シェリーが手元のコンソールのスイッチを押すと、いきなり残り四隻にまで減っていた駆逐艦が爆発し、それらにとどめを刺そうとしていたラッキースター、ハッピートリガー、カンフーファイター、ハーベスターを爆風で吹き飛ばす事に成功する。

「まさか、自爆時の爆風を使って私達を吹き飛ばすなんて！」

フォルテはシェリーの奇策に驚くと同時に、自分達がシェリーに抜かれた事に気が付く。

「ちとせ！　ミント！　敵の残存数は？」

いまだに爆炎のせいで視界が回復しないフォルテは、少し離れた位置にいるちとせとミントにシェリーの居場所を尋ねる。

「真っ直ぐにエルシオールに向かっていますわ。高速戦艦が二隻」

ミントは、味方の艦を自爆させて自分達の目を眩ますという奇策を行ったシェリーが、残存艦艇でエルシオールに特攻をかけようとしている事に気が付く。

「みんな！　追いかけて沈めるんだ！」

「「「「了解！」」」」

フォルテは、体勢を立て直したミルフィーユ達に敵艦の撃沈命令を下す。

同じく、エルシオールからも可能な限りの武器で応戦している様子が目撃されていた。

戦いは、大きな山場を迎えていた。

「あのシェリーという女は、やるな」

エルシオールのブリッジに詰めていたシヴァ皇子は、ボロボロになりながらも、鬼気迫る勢いでエルシオールに迫ってくるシェリーに心から賛辞を贈っていた。

「余も見習いたいものだな」

「それは、止めていただきたい」

シヴァ皇子の言葉を止めたのは、迫り来る敵艦にエルシオールの火器で対応しているアキオであった。

「どうしてだ？」

「確かに、あの戦力で我々にここまで善戦しているのですから、シェリーは優れた将なのでしょう。ですが、次期皇王たるあなたが、あれを真似してはいけません」

あまり大きな声では無かったが、アキオの強い意志の篭った声にシヴェ皇子は反論する気持ちさえ無くしていた。

「優れた将なのに駄目なのか？」

「はい。優れた将だからこそ、シヴァ皇子は真似をしてはいけないのです」

「そうか。駄目なのか」

「シヴァ皇子は、王であらせられますからな。あの優秀なシェリー

が奇策を用いないでも勝てる土壌を作る方に全力を傾けるか、戦いの場に出たとしても、あんな奇策は使ってはいけません。戦場に出る前に、勝てる算段を付けてから出陣してください」

「戦略のみを考えよと？」

「細かい戦術は、部下に任せるものです」

アキオは、シヴァ皇子に話しをしながらも決して砲撃の手を休めないでいた。

更に、最初は思わぬ手で出し抜かれたフォルテ達であったが、冷静に追撃を掛けられたら、シェリーに勝ち目があるわけが無かった。

後方にスラスターを打ち抜かれてまずは一隻が脱落し、もう一隻もほぼ全ての武装が潰され、完全に足が止まっている状態であった。

「総員退艦状態ですね。フォルテさん」

「まあね。でも、シェリーは退艦なんてしないと思うけどね」

フォルテがミルフィーユと話をしていると、スクリーンに沈み行く高速戦艦のブリッジの中にいるシェリーの姿が映し出される。

「さすがね。タクト・マイヤーズ。そして、アキオ・レイトン」

退艦などする気が全く無いシェリーは、機材が壊れてスパークを発しているブルッジの中で何かが吹っ切れたような笑みを浮かべながら敵将であるタクト達を賞賛していた。

「違うな。あんたが焦って自爆しただけだよ」

タクトの回答に、シェリーは自分が尋常ならざる能力の男と戦っていた事を再認識する事となった。

「こちらとしては、最終決戦であんたがエオニア艦隊の半分を指揮していた方が怖かったんだよ。なのに、どうしてこんな無茶を？」

「・・・・・・」

シェリーは、何も答えなかった。

「俺は、脱出すると思ったけどな」

「ふっ。レイトンか。だが、お前が素直に私の脱出を許すのか？多分、お前の事だ。エルシオールの火砲で躊躇無く撃ち落すのだろう？」

シェリーは、例え自分がシャトルなどで脱出しても、アキオが自分を討つ事に躊躇いなど感じない事を理解していた。

「正解だ。俺は、お前を逃がすほど甘くない」

同じ、生きるか死ぬかの世界にいた血生臭い軍人同士であるアキオの正直な答えに、シェリーは逆に好感を覚えていた。

「エオニア様のお考えは正しかったのだな。お前がこちらにいればな・・・・・。だが、それは絶対にあり得ない事でもあったな。さて、そろそろこの船も沈む事だし、この辺で通信を終わらせていただくとする。さらばだ！　エルシオールの諸君！」

シェリーが通信を切った瞬間、彼女の座上していた高速戦艦は、

大爆発を起しながら沈んで行く。
彼女の最後の声は聞こえなかったが、アキオは多分エオニア名前を口にしたのであろうなと、何となしに感じるのであった。

「結局、誰がシェリーの討ったのかね？」

「さあな。誰でも無いかもしれないし、俺達全員かもしれない。この世の事象全てに、明確な解答なんて無いのかもしれないし、いらないのかも知れないな」

シェリーとの戦闘終了後、アキオは食堂の端の席でフォルテとビールを飲みながら話しをしていた。
アキオは、普段はビールなど飲まないのだが、ノンアルコールで酒風の飲み物はこれしか無かったので、仕方が無かったのだ。

「普通の軍人なら、エオニア軍の最高幹部を討ち取った功績を誇るんだけ、この部隊は特殊だからね・・・・・」

「それは、言えてるな」

結局、シェリーを殺す覚悟を決めたミルフィーユがシェリーに直接手を下す事は無かった。
勿論、ランファもそうであったし、他のみんなも同じ。
シェリーの乗っていた高速戦艦は、満遍なく全ての紋章機と僅かにエルシオールからの砲撃を食らって沈黙。

その後、シェリーは脱出をしないで宇宙のチリとなっていた。
なので、シェリーを討ったという感覚を強く覚えた者は誰もいなかったのだ。

「シェリーが、女としてエオニアを見ていたか・・・・・。ミルフィーは、たまに鋭い指摘をするね」

そのミルフィーユは、今頃はタクトと楽しく話しでもしているはずであった。
それと、ヴァニラもエリオスと一緒にいる。
この前、クロミエから貰った宇宙ウサギの寿命が尽きて死んでしまったので、エリオスに慰めて貰っているらしい。
何でも、彼は思い出が残るようにと死んだウサギを絵をヴァニラのために描いているらしいが、そんな事を素で出来る彼は、実はプレイボーイなのかもしれないなどと思ってしまうフォルテであった。
多分、目の前の親友には敵わないであろうが。

「アキオも、早く行っておやりよ。どうせ、ここではノンアルコールのビールしか飲めないんだからさ」

フォルテは、ムーンエンジェル隊の隊長としてと、彼女達の姉的な立場から、アキオに近くのテーブルでこちらを観察しているミントとちとせの元に行くようにと促す。

「紋章機を円滑に運用できるように、彼女達の心のケアをちゃんとしないとね」

「それは、タクトの役目じゃないか？」

「タクトは、勿論司令官として信用されているけどね。女ってのは、

他にも必要な物があるのさ」

「理論的には理解できるんだがなぁ」

そう言いながら、ミントとちとせの元に行くアキオを、フォルテは複雑な表情で見ていた。

これだけあの二人に好意を寄せられているにも関わらず、自分の親友はいまいち恋愛の事が良くわかっていない。

頭が良いから理論的には理解しているのだが、感情が全く追い付いていないのだ。

食堂の真ん中に近いテーブルで三人が楽しそうに話をしていると、そこにランファが現れてまたアキオと下らない口喧嘩をしているが、あの二人の喧嘩は別に深刻な理由で発生するわけではない。

実は、意外と不器用な二人なりの、コミュニケーションの手段であったのだ。

「あの氷の王子様を溶かす女は、誰なんだろうねえ？」

フォルテは、残っていたノンアルコールビールを飲み干してから一人そう呟くのであった。

「ダルノー会長。エルシオールの修理と補給に感謝いたします」

「なあに。私は、冷静に損得で君達が勝つと判断して、恩を売っているだけだよ」

シェリーとの戦いから半日後、エルシオールは無事に惑星ブラマンシュに到着し、そこで船の修理と補給を受けていた。

タクトは、便宜を図ってくれたブラマンシュ財閥当主のダルノーへのお礼を兼ねて、アキオを連れて挨拶に訪れていたのだ。

「では、私はこれで。細かい事はレイトンに任せていますから」

タクトは、ダルノーにそう告げてから、アキオを置いてエルシオールに戻ってしまう。

「やれやれだな。私からは、何もありませんね。さすがは、軍相手の商売が長くていらっしゃる。手際が良くて、文句の付けようがない」

「君にも、大変に世話になっているからな。あの鉱山惑星が無かったら、我々の被害はもっと拡大していた」

ブラマンシュ財閥の運営は別に慈善事業では無いので、常に利益を上げなければその巨体を維持できないで倒れてしまう。

だから、その利益を提供しているアキオに、ダルノーは心から感謝していたのだ。

「人は霞を食べて生きて行けませんし、会社は従業員とその家族に対して責任がありますからね」

「だが、その事をミントには理解して貰えなくてな・・・・・」

その重責から常に公人として動く事を要求される父と、その父を異質と思う娘。

ダルノーとミントの対立を簡単に説明すると、こういう結論に達してた。

「彼女はまだ若いんですよ。だから、その内に理解すると思いますよ。今でも、少しずつ歩み寄っているじゃありませんか」

それに、アキオは結局はミントがこの財閥を継がねばならないと思っている人物の一人であった。

これだけの規模の財閥を、いきなり他人の手に委ねるのは危険であると思っていたからだ。

特に、ブラマンシュ財閥はダルノー氏が一代で築き上げた財閥なので、他の歴史のある財閥や企業のように雇われ会長や社長に任せるのは危険な部分が多過ぎたのだ。

そして、そのアキオの考えは、人の心の声が読めるダルノーの頭の中にも入って来る。

「なら、君が継げ」

「私が、ですか？」

「君がミントと結婚して継げばよい。そうすれば、私は安心して引退できる」

「まだ、老け込む歳でもないでしょうに」

「私とミントは、人の心が読める。ハッキリと言えば、これは反則に近い能力だ。反則に近い能力だからこそ、私はこの財閥をトランスバール皇国一にする事が出来たとも言える。だが、こんな事を続

けていてはこの財閥は長くない。だから、純粋な能力では私が逆立ちしても勝てない君にこの財閥を託したいのだ」

ダルノー氏の言葉を神妙に聞くアキオであったが、即答は難しい状態であった。

「まあ、数年後にそう考えてくれればいいさ。それに、君が必ずミントを選ぶとも限らないからな。だた、そうなったら私に反対する理由など無いという事だ」

「心の隅に留めておきます。では」

アキオは、一礼するとダルノーのいる部屋を出て、エルシオールへと戻って行く。

「やれやれは、こちらだ。誰よりも優秀な癖に、こういう話題には一切欲を出さないで。もう少し、欲を出せばもっと良い男になるというのに・・・・・・」

ダルノーは、一人会長室で呟くのであった。

「では、エルシオールは白き月に向けて発進だ！」

「エルシオール発進します！」

修理と補給を終了させたエルシオールは惑星ブラマンシュを出発し、遂に白き月への進路を取る事となった。
ブラマンシュ財閥が調べた最新の情報では、現地には特に障害となる敵戦力の駐留は認められておらず、どうやらエオニアは最後の決戦に黒き月の戦力を全て注ぎ込む腹であるらしい。

「最終決戦か・・・・・・」

アキオは、迫り来る最終決戦の事を考えながら、一人静かに宇宙を眺めるのであった。

第十四話（後書き）

色々と忙しい上に苦戦して遅れました。
次も時間が掛かりそうです。

第十五話

「もう少しで、やっと白き月に到着か」

悲劇に見舞われた惑星ロームから、単艦で敵勢力圏を横断してシェリーの執拗な妨害を粉砕して彼女を討ち、惑星ブラマンシュでの修理と補給を終えたエルシオールは、ようやくにして首都星トランスバールの衛星軌道上にある人工天体《白き月》まであと少しという宙域に到着していた。

「大した日数じゃなかったけど、精神的に疲れたよなぁ」

「そういうセリフは、ちゃんと仕事をしている奴が言う台詞だ」

いかにも苦労した風な事を言うタクトに、レスターが隣からいつのもように毒舌を吐いていた。

もっとも、別に彼自身がタクトに対して他意があるわけではなかった。

タクトが、ムーンエンジェル隊メンバーの精神状態の安定のために、艦内をフラフラとしている事はいつもの事であって、その事はレスターも十分に承知していたし、任務に忠実なレスターがいつも遊んでいるタクトに毒舌を吐くのも、この艦の中では当たり前の半分ネタのような行為であったからだ。

「俺、戦闘の時はちゃんと働いているぜ」

「悲しいかな。軍という場所では、直接の戦闘行為が評価され易い環境にあるんだが、一番重要なのは日頃の積み重ねなんだよな。≪百年兵を養うのは、ただこれ平和のため≫なんだよ。わかったかい

？　タクト君」

惑星ブラマンシュで大量の補給物資が手に入ったので、その整理業務を行っていたアキオは、いつものツナギ姿でブリッジの中に入って来てタクトにそう発言する。

「ご苦労さんだな。相変わらず」

「いや、潰滅した艦隊の参謀職に比べれば、さほどの事は無いさ」

タクトは、自分の親友の凄さを再確認すると共に、多分自分の親友はこの手の仕事が一番好きなんだろうなとも思っていた。

ゆえあって、多くの実戦をこなしてきたアキオであったが、本当はこの手の任務の方が好きなのは誰が見てもわかったし、実は意外と実線経験の無い軍人ほど、勇ましい事を言って戦場で無駄に無駄に命を落す事を、惑星ロームで散々に見せられていたからだ。

「俺にはとても真似できないな。ところで、レイトン。さっきの言葉って、誰の言葉なんだ？」

「俺やちとせと同じ民族の遠い祖先がまだ地球にいた頃に、彼らのいた地域の偉い軍人さんが言った言葉だよ」

「ふーーーん。お前って、やっぱり博識なのな」

「イソロク・ヤマモトか？」

「レスターは、その上を行くな」

タクトは、その言葉を誰が言ったのかまで知っているレスターに

感心していた。
　士官学校主席のレスターや次席のアキオと違い、タクトはあまり役に立たない事は覚えないし、碌に講義を聴いていなかったからだ。
「士官学校の戦史の授業で出たぞ。勿論、試験にもな」
「レイトンも、レスターも凄いな。俺なんて、士官学校時代の試験の内容なんて覚えてもいないからな」
「お前は、三日前の書類の内容ですら怪しいからな」
「いやーーーっ。期限に間に合うように出そうとは思うんだよ。でも、なぜか忘れちゃってさ」
「お前な……」
『別に、普段は遊んでいても構わないから、最低限必要な書類にサインくらいはしろよ！』とレスターが思っていると、そこにムーンエンジェル隊の面々とエリオスが入って来る。
「クールダラス副司令、これが艦内の修理状況の最終チェック表です」
「さすがに早いな。タクト、エリオスを見習えよ」
　レスターは、エリオスの提出した書類に不備が無い事を確認すると、またいつものようにタクトに毒舌攻撃をしていた。
「だってさ、エリオスって、士官学校三位卒業の天才だぜ。真似なんて不可能だって」

「そういえば、タクトさんは士官学校の卒業順位ってどのくらいなんですか？」

「ミルフィー。それは、聞かないでくれ」

ミルフィーユの質問に、タクトはさめざめと涙を流しながら念を押してお願いしていた。

今更言うまでも無いが、タクトの士官学校の成績はかなり悪かった。

ほとんどの教科が落第寸前で、もし彼が貴族でなかったら決して将官にはなれなかったであろう成績であった。

「ミルフィー、そんな事を聞いちゃ可哀想よ。タクトは、普段はバカなんから」

「バカは、無いと思うんだよな……」

タクトは、ランファの発言を聞いて流す涙の量を増やす羽目になっていて、隣にいるミルフィーユに懸命に慰められていた。

「でも、エルシオールの人達って凄いですよね。クールダラス副司令が中央士官学校主席で、アキオさんが次席。それに、ミルフィーは実は士官学校主席ですし、ランファさんも次席ですから」

タクトのために話題を切り替えたちとせは、エルシオールに乗っている人員の凄さを改めて強調していた。

「ちとせ。あんたも、確かセンパール士官学校の主席だったよね？」

「はい」

最近、『色ボケしているでは？』と評判のちとせであったが、彼女も間違いなくエリートと呼ばれる人種の一人であった。

それに、アキオの事になると少しおかしくなる面があったが、普段の彼女は、日々の努力を欠かさない優秀な軍人であったのだ。

「でも、不思議だよな」

「何がです？　タクトさん」

「ミルフィーが、士官学校主席だっていう事実が」

「「「「「「「「「「「「確かに……」」」」」」」」」」」」

タクト達やフォルテ達だけでなく、ブリッジで作業をしているアルモやココも、ミルフィーユの方にタイミング良く視線を送っていた。

「ミルフィーは、軍隊格闘技の実技試験の時になると、相手が下痢で動けなかったりとか、色々と不思議な事が起こるのよねぇ……」

「ランファは、着ていた道着のズボンの紐が切れて……「それを、バラすな！」」

軍隊格闘技の主席を決める実技試験の決勝戦で、運だけで勝ち上がった（ほとんど不戦勝だった）ミルフィーユに余裕を持って当たったランファは、試合開始と共に道着のズボンの紐が切れてズボンがずり落ちてパンツが丸出しになるというトラブルに襲われ、逃げるように試合場を降りて敗北するという悲劇を味わっていた。

他にも、艦隊シミュレーション試験では、対戦相手に数億分の一の確率でしか発生しない不利な状況が頻発して、普通に攻め込んだミルフィーユに膝を屈したりと、様々な奇跡が起こっていたのだ。

「オマケに、こいつ。筆記試験のヤマを全教科全て当てるし。私の徹夜の苦労って何なのよ。一体」

「……（スマン。それは、俺だ……）」

アキオは、珍しくランファに心の中で謝っていた。

アキオとしては、『ミルフィーが落第しないように』と思って教えたヤマだったのだが、彼女が絡むとそれが試験問題その物になってしまったのだ。

「だが、士官学校の卒業順位なんて、一つの目安でしか無いからな」

「それを、主席のレスターが言っても説得力に欠けないか？」

「うるさいんだよ、タクトは！　そもそも、この中で一番偉いお前が一番バカなんだから、あながち間違いでも無いだろう？」

レスターはタクトをバカ呼ばわりしていたが、実際にはタクトの戦略眼の素晴らしさは、自分には絶対に真似ができないと思っていた。

それに、アキオの万能さもだ。

この出来ない事を探すのが難しい天才を見ていると、最初は嫉妬していた部分もあったが、今では笑うしかないとさえ思うレスターであったのだ。

「ところで、アキオさんの下の三位の人ってどんな人なのですか？」

大した理由は無かったが、それとなく興味が出たのでミントは士官学校三位卒業のエリート軍人について聞いてみる。

「ハイネケンか……。レスター、お前は覚えているか？」

「ああ、嫌な奴だったな」

レスターとアキオの脳裏には、自分達に対して嫌みったらしい言葉を吐く金髪碧眼の男の姿が残っていた。

「嫌な人なのですか？」

「ヘル・ハウンズ隊のリセルヴァと同じさ。没落貴族の孫で、失われた名誉を取り戻すために士官学校に入ってはみたけれどってやつさ」

タクトも、ハイネケンの事は良く覚えていた。

『無能な癖に、貴族として優遇されやがって！』という視線を向けられた事があったからだ。

しかも、彼の嫌な所は、表立ってそれをやると貴族優遇の皇国内では色々と不利になると考えて、コッソリとそれを行う所にあった。

「上にクールダラス副司令とアキオさんがいたんですね」

ミントは、その人に少し同情していた。

多分、この二人がいなければ普通に主席レベルの秀才であったはずなのに、相手が士官学校創設以来の天才と呼ばれたレスターと、大天才の再来と呼ばれたアキオがいたために、全く目立たないという悲運を味わっていたのだから。

「でも、行方不明なんだろう？」

「ほぼ戦死扱いらしい。エオニア艦隊襲来時に、第一艦隊で巡洋艦の艦長だったらしいからな」

その人物の今の状況を話すレスターとアキオであったが、それからすぐに白き月が視界に入り、ミント自身もすぐにその人物の事を忘れてしまったのだが、後にアキオ達は意外な場所でその人物との再会を果たす事になるのであった。

「シェリー。どうして、あんな無茶を……」

黒き月の内部で、エオニアは自分の腹心中の腹心であるシェリーの戦死報告に心を曇らせていた。

「エオニア様。私にお任せくだされば、ウォッカの艦隊やエルシオールなどは一撃で粉砕ですぞ！」

エオニアは、スクリーンの向こうで豪快に笑いながら、根拠の無い自信に満ち溢れているレゾムに対して内心で中で舌打ちをしていた。

彼はもっかの所、中央に侵攻してくる艦隊の中で最大の戦力を有

するジンロ中将の主力艦隊を討つべく、首都星トランスバール周辺の味方戦力をかき集めて迎撃準備を行っていた。
皇国軍ではただの中尉止まりで、貰った戦力で相手を押し潰すしか能の無い、戦略も戦術もへったくれもない大バカ者だが、エオニアは現時点ではこのバカを使うしかなかった。
こんなバカでも、他の傭兵出身の連中よりはマシであったし、紋章機に対抗する戦力であるダークエンジェルを駆使するヘル・ハウンズ隊を無人艦隊に回すわけにはいかなかったからだ。
もっとも、あの癖のあるヘル・ハウンズ隊に艦隊指揮など務まるはずもなかったのだが。

「ジンロの艦隊は数も多いし、兵士の訓練も行き届いている。それに、補給等にも難は見受けられない。油断する事なく迎撃せよ」

「お任せください」

レゾムは胸を張って答えると、そのまま通信は切ってしまう。

「時間さえ稼げれば良い。余の有する戦力でエルシオールを最初に討ち、その後に各個撃破すれば良いだけの事だ。それなのに、あんな無謀な事で命を落とすとはな……」

エオニアは、辺境追放以前から自分の腹心であったシェリーの死を心から悲しんでいた。
能力も申し分なく、自分の辺境追放にも付いて来るほど忠誠に厚かった部下だけに悲しみは大きかったのだ。

「お兄様。そんなに悲しいのなら、私がシェリーを作ってあげようか？」

「ノア。それは、不可能なんだよ」

エオニアは、初めてノアに対して強い憤りを感じていたが、今はそれを表にする事ができなかった。

今、彼女の機嫌を損ねたら、自分は再び宇宙の放浪者となってしまうからだ。

「大丈夫よ。シェリーの思考パターンをデータに入れるから。それに、外見もそっくりにしてあげる」

「ノア。それは、シェリーの姿をした他の何かでしかないんだ。だから、余はそんな物はいらない」

「お兄様がそう言うのなら、シェリーの代わりは作らないわ」

ノアの見当違いの発言を聞きながら、エオニアは改めて自分の置かれた立場の悪さを感じていた。

今までは、信頼できる人間の家臣であったシェリーがいたから良かったのだが、今ではそんな物は存在せず、自分はコンピューターが指揮する艦隊に己の運命を委ねなければならない。

無論、並みの軍人に比べればコンピューターの方が優秀なのだが、ここぞという時の咄嗟の判断やヒラメキなど、コンピューターが逆立ちしても人間には勝てない分野も一部存在するのだ。

そして、これから自分が戦う相手は、それが顕著に現れている人物であった。

タクト・マイヤーズ、レスター・クールダラス、アキオ・レイトンの三人で、侮れば死を迎えるのは自分の方であった。

「この三人は手強い。だから、なるべく戦力を増強しておいてくれないか？　ノア」

「お兄様も心配性なんだから。いいわ。パーフェクトゲームで潰してあげる」

エオニアは、ノアに出来る限りの準備をお願いしてから（命令とは言えない）、ある人物を呼び出す事にする。

「ギュンター・ハイネケン准将、入ります」

「ふむ」

エオニアの前で、第一種軍装に身を包んだ金髪碧眼で長身の若い男性が恭しく片膝を付いてから頭を下げる。

彼の名前はギュンター・ハイネケンと言い、彼はタクトやレスターやアキオと同じ士官学校の同期で、卒業順位三位の秀才であった。

エオニア艦隊が首都星トランスバールに侵攻した際には、少佐として第１方面軍艦隊で巡洋艦の艦長を務めていて、その際に巡洋艦二隻と駆逐艦二隻を沈める戦功を立てるも、艦を沈められてシャトルで脱出しようとしたところをエオニア軍に捕らえられる羽目となっていた。

そして、その際に彼はトランスバール皇国軍を裏切って、エオニア側に付いている。

彼は、皇国を恨んでいたからだ。

「お前を准将にした意味はわかるな？」

「はい。タクト・マイヤーズを討てと？」

「それと、レスター・クールダラスとアキオ・レイトンもだ」

エオニアは、もうアキオを自分の陣営に引き抜こうとは考えていなかった。
今までは、その絶対に裏切らない芯の強さを気に入っていたのだが、シェリーを討った人物ともなれば別だ。

《可愛さ余って、憎さ百倍》

アキオの首を獲ってシェリーの墓前に捧げる事こそが、彼女の忠誠に報いる手段だと考えていたのだ。

「シェリーに預ける予定だった艦隊をお前に全て預ける。だから、勝て。勝てばハイネケン伯爵家の再興を認め、戦後軍の全てをお前に任せる」

エオニアは、もしギュンターがアキオを討てる力量があれば、軍の全ても任せても問題ないと考えていた。

「必ずや任務を全ういたします。では、早速に準備に取り掛かりますので」

「ハイネケン」

「はい」

「使えなければ処分する。わかったな？」

「はい」

冷徹な支配者としての表情を見せるエオニアに対して、動揺する事なく答えるギュンターは、祖父の時代に貴族位を時の皇王に取り

上げられて市民階級に落された家の跡取り息子であった。

子供の頃の父親からの話を総合すると、祖父は貴族としてはかなりの人格者で優しい人物であったらしい。

とある大貴族に娘を妾として差し出せと言われて困っていた市民のためにその大貴族を諫めてあらぬ罪を背負わされて貴族位を取り上げられ、優しい祖父は三百年続いた家を廃絶させられたショックで病気となり、そのまま帰らぬ人となったらしい。

『祖父は、大バカ者だな』

ギュンターは、子供心にそう思っていたし、その話しを悔しそうに話し、『祖父が余計な事をしなければ、俺は貴族だったのに……』と毎晩酒を飲みながら愚痴をこぼす父親も大嫌いであった。

父親は、若い頃は無くした貴族位を取り戻すために懸命に努力して士官学校にまで行ったらしいのだが、そこでは当然家を取り潰された件で貴族出身の同級生や先輩達に虐められ、士官学校を卒業後、配属された先でも同様の経験をしたために軍を辞めてしまい、ギュンターが生まれた頃には普通の民間企業に勤めるようになっていた。

『意気地なしが！』

それが、物心が付き世間の事がわかるようになったギュンターの実の父親に対する感想であった。

『お前が、ハイネケン伯爵家の栄光を取り戻すのだ！』

更に、このバカな父親は、自分が出来なかった事を息子である自分に押し付けるつもりらしい。

ハイネケンは、幼い頃から厳しい英才教育を受ける事となり、そ

の成果もあって無事に士官学校に入学する事となった。

『ギュンター。主席だ！　主席を取るんだ！』

既に自分の息子が過去の栄光を取り戻す事にしか興味が無くなっていた父親は、ギュンターに士官学校で主席を取る事を要求し、それなりに自信のあったギュンターは、内心では自分の父親を唾棄しつつもそれを了承したのだが、彼には大きな壁が立ち塞がる事となった。

レスター・クールダラスとアキオ・レイトンという二人の天才であった。

『わかっているのか、ギュンター！　あの二人は、たかが市民なんだぞ！　高貴な家の生まれのお前が負けるなど、絶対にあり得ない事なんだ！』

十八歳にもなった息子の学業成績にしつこく口を挟んでくる父親を心の中で罵りつつも、ギュンターは次第に二人に対して負の感情を増幅させていく。

特に、常日頃努力を欠かさないレスターよりも、普段あまり努力しているようには見えず、それでいてレスターに次ぐ好成績を維持しているアキオの方への憎しみを強めていった。

自分でも、その感情は理不尽であるとは思っていたのだが、理性と感情は全くの別物であったからだ。

だが、その自分の感情が間違いで無かった事をギュンターは最近になって知る。

それは、アキオがシードル公爵家の人間である事を知ったからだ。

『レイトンが、あの天才の息子か……。ならば、奴の首には千金の価値があるな』

ギュンターとてバカでは無いので、隠された大貴族の息子であったアキオがどれだけ苦労したかは理解していた。

だが、その努力が認められて、今ではシヴァ皇子のお気に入りの家臣になっている事が気に入らなかった。

自分ではまだ掴めていない栄光を掴み、更にはシードル公爵家を継ぐ事を否定したという噂も聞く。

何とも、鼻に付く話であった。

うざったい父親を避ける意味で始めた貴族への道であったが、その自分にとっては宝石のような貴重な物を、まるで邪魔な物のように否定する自分の同期の男アキオ・レイトン。

とにかく腹が立って仕方が無かった。

理屈では無く、感情レベルの話であった。

『では、俺がお前を討って、その放り投げた貴族なってやる。地獄の底で後悔するんだな』

普通に士官学校を出た成績優秀な若造が簡単に貴族になれるほど、この国の身分制度は流動的では無い。

だから、それを失った祖父は愚か者で、容易く夢を放棄してそれを息子に押し付ける父親も愚か者。

ならば、その愚か者の一族の自分が、反逆者に付いて博打に打って出るのは悪くない。

ギュンターはそう考えていた。

そういえば、先日に休暇で久しぶりに実家に帰った事があり、自分がエオニアに付いた事を話すと、父親は顔を真っ赤にさせて激怒していた。

皇国の理不尽な決定で貴族位を奪われたのに、その皇国に逆らう事など絶対に許せない父親を、ギュンターは侮蔑の目で見つめながらこう語る。

『テメぇだけ安全な場所にいて、ピーチクパーチク吼えるんじゃねえよ！　お前の言う通りに努力してやってるんだ！　賭けに成功すれば貴族なんだから、その位のリスクは背負えよ！』

このまま殺してやろうかとも思ったが、それは後でも出来るし、万が一にも自分が破れたら、このバカな男は反逆者の父親として世間から後ろ指を指される事となる。

そう考えると笑いが止まらなかったので、ギュンターは父親を放置する事にしたのだ。

『まあ、負けてやるつもりは無いけどな。レイトン、お前は俺の栄光のために死ね！』

意を決したギュンターは、黒き月の無人の通路を歩きながら自分の指揮する艦隊の旗艦へと向かうのであった。

「シヴァ皇子、白き月からの応答がありません」

惑星ロームを出てから三日、ようやくに白き月へと到着したエルシオールであったが、その表面はかなり強力なフィールドで覆われているらしく、通信担当士官であるアルモの呼びかけにも全く応じない状態であった。

「何もかも遮断する不可侵のフィールドだからこそ、これまでエオニア軍に攻め落とされずにいたのだ。フィールドの解除方法は、余はシャトヤーン様から聞いている。だが、秘法ゆえに他人には見せられない。部屋に戻らせて貰おう」

その後、十分ほどで白き月のフィールドは消え、エルシオールは無事に白き月の内部へと誘導されて行ったのだが、その際にココやアルモなどの白き月の巫女達は不信気な表情を浮かべていた。

「どうしたんだ？　アルモもココも」

「はい。実は、私達でもこの区画に入ったのは初めてなんです」

「いつもは、侵入禁止に指定されているエリアなので……」

タクトの質問に答える、アルモとココの表情は暗いままであった。なぜなら、そのエルシオールが初めて係留された区画には、多数の明らかに軍事用と思われる無人工作機器や、クレーン、部品やパーツなどが置かれ、軍港や軍事工廠そのものと言った様相を見せていたからだ。

「侵入禁止の区画に、こんな高性能な軍事施設があるなんて……」

ロストテクノロジーを民生用として活用する研究を行っていたアルモやココは、次第に端末に流れてくるこの侵入禁止区画の情報に信じられないと言った表情のままであった。

「これだけの設備があれば、エルシオールの修理と改修は早まりそうだな。それに、戦後の復興にも役に立つ」

エルシオールの運用をしている人員の多数が巫女達であった影響で、初めて知る白き月の軍事的側面に辺りは静まり返っていたのだが、そこで唯一喜びの声をあげた人物がいた。

それは、自他共に認める補給のスペシャリストであるアキオであった。

「アキオさんは、この設備を戦後も使うつもりなんですか！」

「使えればそれに越した事は無いな。特に軍艦の生産・修理用の工廠は使い道があるな。もっとも、俺が直接やるわけではないが、ウォッカ大将に進言する価値はある」

アキオの返答に、アルモは『信じられない』と言った表情をしていた。

ロストテクノロジーを多くの人達の生活に役立てるために、この白き月で巫女と呼ばれる技術者をしているアルモ達にとって、これらの設備は禁忌に近いものであったし、それを今はともかく戦後にも活用するなど、決してあってはならない事であったからだ。

「これだけの設備を遊ばせるなんて勿体無い。ここで消耗させた軍の再建を行って、余力の出た在来の軍用ドックで統一規格の輸送船を建造するか……」

抗議の声をあげるアルモを一瞥してから、アキオはウォッカ大将にあげる報告書の文面を考えていた。

まだケリは付いていないが、内戦では民間や軍に多くの損害が発生していて、戦後に急いで復興を行う必要性がある。

まずは、潰滅した軍本部の再編と、戦力の回復をいち早く図らねばならない。

軍は外敵と戦うだけでなく、領域内の治安維持や反抗的な惑星政

府に睨みを利かせる存在でないといけないからだ。
そしてそれが出来なければ、分断された星間ネットワークの復活すらままならず、それは市民達の生活に多くの制約を課す事となるであろう。
そこで、ここの設備を使って軍艦や軍生品の製造を行い、余力の出た他の軍用の設備で民間用の輸送船などを建造する。
ここは無人でも稼動する工廠なので、多くのコストを削減可能で、削減した分の予算を他の復興費用に回す事も十分に可能だ。
これは、軍主導の公共投資策で辺境の開発を行った経験のあるアキオならではの建策であった。
そして、その事を知っているからこそ、エオニアはアキオを宰相に欲していたのだ。

「ですが、軍事施設です！」

アキオは、アルモが怒る理由を何となくは理解はしていた。
それは、多くの民間人などに見られる、軍という物を一律に嫌う風潮と同じようなものなのであろう。
そして、自分が研究をしていた場所に、こんな野蛮で物騒な場所が隠されていた。
更に、それを自分が活用すると発言した。
アルモとしては、文句の一つも言いたくて当然なのだ。

「使える物は有効活用する。これは、俺の主義でね」

アキオは、自分が所属はしているが、基本的に軍という組織が嫌いであった。
だが、だからと言ってそれを不必要に嫌ったり、不要論を唱える事はしない主義であった。
軍という組織は、最低限必要な必要悪だと割り切っていたからだ。

そして自分の役割は、この暴走すると危険な必要悪を、世間様の役に立つように動かす事であると考えていた。
アキオは、良くも悪くもリアリストであったのだ。

「アキオさんって、冷徹な軍人さんなんですね」

アルモは、先日にも躊躇い無くシェリーを殺すと宣言し、今日も軍事施設を積極的に的に活用すると宣言したアキオを、半ば非難の視線で見るようになっていた。

「それは、違います！」

ところが、そのアルモの発言に素早く反論したのは、たまたまブリッジに上がって来たちとせであった。

「アキオさんは、そんな冷徹な人ではありません！」

それは、ちとせには絶対に譲れないものであった。
あの従兵実習で行った第2方面軍は、ようやくに星間ネットワークが構築されていたが、まだ海賊が横行して経済的にもかなり貧しい宙域であった。
中央で普通の生活を送っていたちとせやミルフィーユには、実際に見るまでその事を実感できないでいたのだ。
ところが、これでも状況は大分緩和されたとの話であった。

『うちには、昼行灯だけど物分りの良い司令殿と切れ者の副司令殿がいるからな』

通商護衛艦隊の兵士達は、口先だけでなく実際に行動して状況を改善したウォルコット中将とアキオに感謝の言葉を述べていた。

確かに軍という大きな力を使っての事だったので、中央にいる自称リベラルな軍官僚や一部マスコミなどは二人を批判的に書く人が多かったのだが、実際に現地で生活している人達にはそんな事は関係無かった。

彼らは、実際に状況を良くした二人に感謝していたからだ。

「力は、決して悪ではありません。逆に、力が無くて実行されない綺麗事の方がよっぽど性質が悪いです。それに、アキオさんは軍人だから、軍からというアプローチでしか動けなかったんです」

それほど強い口調では無かったが、ちとせはアルモに明確に反論を述べ始める。

「ちとせさん……」

アルモは、自分に反論したちとせと見つめ合ってしまい、その場に重苦しい空気が流れてしまうが、それを緩和したのはやはりベテランのフォルテであった。

「最終決戦前だから、重苦しくなりたいのはわかるけどさ。もっと軽く考えた方がいいんじゃないの？　私は、士官学校なんて大層な場所は出ていないから理論的には言えないんだけど、《バカとハサミは使いよう》ての？　ああ！　もっと簡単に言うと、包丁をバカに渡すと人を刺すかもしれないけど、ミルフィーに渡せば美味しい料理が出てくるだろう。そういう事なんじゃないの？」

フォルテの巧妙な例えに、ブリッジの中の重苦しい雰囲気にヒビが入る。

「おっ！　上手い例えだねぇ。さすがは、フォルテだ」

「タクト。こういう時は、司令官のあんたが収めるのが筋なんじゃないの？」

「ほら。俺って、ボキャブラリーが貧困だからさぁ」

「それが、士官学校を出た軍人が言うセリフかい？」

「俺は、レイトンやレスターに比べたら、可哀想なくらいの落ちこぼれだからなぁ」

「確かにねぇ……」

「少しは、フォローしようとか思わないか？」

二人の掛け合いで、あの重苦しかった雰囲気は既に払底され、いつのも陽気な雰囲気に戻っていた。

これこそが、後にマイヤーズ流と呼ばれるようになった、彼独自の組織運営のやり方であった。

「マイヤーズ司令、シャトヤーン様からの通信です。謁見の間でぜひお会いしたいと」

そこに、この白き月の聖母であるシャトヤーンから面会を要求する通信が入って来る。

「じゃあ、最低限の人員を残して謁見の間とやらに行くか。アルモ、ココ。案内を頼むよ」

タクトの命令で、タクト達は謁見の間へと移動を始めるが、その

際にアルモは、アキオの近くに来て小さな声で謝罪の言葉を述べる。

「アキオさん……。あの……、すいません」

「いや、いいんだ。君の言っている事は間違いではないから。実際に力を振るっている人で、自分は正しいと思っていはいても、実際にはハタ迷惑な人もいるから、いやむしろそっちの方が多いかもしれない。だから、実際に力を振るう人は、口やかましく言われるくらいの方がいい」

小はジーダマイヤ大将で、大はエオニア。

彼らは、自分達が絶対に正しいと信じて行動し、そのために多くの犠牲者を出している。

そして、それはアキオも同じであった。

今までに、自分が行ってきた事は絶対に正しいのか？

自分は神では無いので判断が付かなかったし、将来に自分が大きな過ちを犯すかもしれない。

そして前者二人には、その行動を諌める人間がいなかった。

まだアルモに批判されるだけ、自分が恵まれていると感じたのだ。

「そういう事だから、気にするな。俺は、気にしていないさ」

そこで、二人の話は途切れてしまった。

なぜなら、アルモが自分の想い人にちょっかいを掛けていると思ったミントとちとせが、アキオの両脇をガッチリと固めてしまったからだ。

「アルモさんは、クールダラス副司令の元へどうぞ」

「アキオさんは、シャトヤーン様とお会いするのは初めてなんです

か？」

「初めてだよ。月の聖母様だっけか？　映像で見る限りは、お美しい人みたいだ」

「「……」」

二人から発するオーラの影響で思わず後ずさりしたアルモに、今度はココが話しかけてくる。

「アルモは、アキオさんに乗り換えたの？」

「違うけど。というか、そんな無謀な事はしないわよ。でも、クールダラス副司令と同じくらい良い男よね」

「それについては、賛同するわ」

『早目に唾を付けておけば良かったか』などと不謹慎な事を考えてしまうアルモとココであったが、その肝心のアキオは、ミントとちとせの前で不用意にシャトヤーンの事を褒めてお尻を抓られる羽目になっていた。

実に複雑なのは女心であった。

「いやあ、遂に月の聖母たるシャトヤーン様との面会かぁ。緊張するよなぁ」

「お前が緊張？　そんな事あってたまるか」

「レスターの意見に同意だな」

「余に言わせると、レイトンも緊張とは無縁だがな」

シヴァ皇子を先頭に、白き月の中心部にある謁見の間に到着した一同は、そこで始めて月の聖母と呼ばれるシャトヤーンと面会する事となった。

月の巫女としたここで働いていたアルモとココや、ムーンエンジェル隊としてここを防衛していたフォルテ達や、エオニア軍の侵攻時にここに異動して来たエリオスは既に面会済みであったので、本当に彼女と初めて会うのは、タクト、アキオ、レスターの三人だけであった。

「シャトヤーン様、ご無事でなによりです」

シヴァ皇子の言葉遣いが、このトランスバール皇国における彼女の実質的な立場を良く表していた。

故ジェラール皇王によって皇国の直轄地にされてはいても、代々の聖母達がトランスバール皇国にロストテクノロジーを無償で与える姿勢は、他の世俗的な貴族や政治家達とは一線を画しているように市民達には見られていたので、半ば神聖視され一部では崇拝の対象としてまで見られていたのだ。

「長い旅路をご苦労様でした。マイヤーズ司令、シヴァ皇子を良くぞ守ってくださいました」

シャトヤーンは、タクトだけなく他の全員に等しく丁寧に直接言葉を掛けていた。
その姿は正に神々しく、アキオは、どうして代々の皇王に人気が無くて、彼女達に市民達の人気が集まるかを直接肌で理解していた。
「シャトヤーン様、エルシオールへの修理と補給に感謝したします」
「もうすぐ、あの《黒き月》がこの宙域に到着し、そこで最後の決戦となるでしょう。そして、勝った方が負けた方を吸収して究極の兵器となる。古来よりそういう決まりになっているのです」
シャトヤーンは、《白き月》と《黒き月》の由来について話し始める。
黒き月は、『不確定要素を徹底的に排除し、常に安定した戦力を生み出す』ために。
白き月は、『あらゆる不確定要素を取り入れることで無限の可能性を生み出す』ために。
生物の進化と同じく、お互いを敵視し、競い合う事でお互いの技術を高めるという任務が与えられていて、最終的に勝利した月の思想を基幹として融合して究極の兵器が完成する予定であったとの事であった。
ただし、その建造時期が時空震前（クロノ・クェイク）であった事から、双方の月が何を敵として認識していたのかまでは不明であるらしく、取りあえずの敵はエオニアと黒き月という事に落ち着いていた。
「今でもかなり劣勢なのに、融合なんてされてしまったら余計に勝ち目は無いな」
リアリストのレスターは、シャトヤーンの話を聞いて顔を歪ませ

ていた。
いまだに味方の増援が現れない以上、唯一の頼りである白き月まで無くなってしまったら余計に勝ち目が無いと考えたからだ。

「そこで、今まで封印されていたロストテクノロジーである《クロノ・ブレイク・キャノン》を現在急ピッチで取り付け中です」

シャトヤーンは、月の巫女であるアルモ達に、今までは立ち入り禁止区画になっていた兵器製造工場に保管されているエルシオール専用の大型艦首砲であるクロノ・ブレイク・キャノンの説明書の入った電子メモリーをアルモとココに手渡す。

「やはり、白き月には兵器製造工場があったのですね」

アルモは、クロノ・ブレイク・キャノンのカタログスペックに驚きを隠せないまま、自分が仕えるシャトヤーンに白き月の真実を尋ねる。

「今までは、過ぎたる力として封印して来ましたが、今はその力を使うしかありません。あの無尽蔵に兵器を製造する黒き月に皇国を支配されてしまえば、この世は絶望に覆われてしまうでしょうから」

その後、タクト達はエオニア軍と黒き月がこちらに現れる時刻をシャトヤーンから聞き、その時間ギリギリまでエルシオールの修理・改修と、前に一時的にリミッターが外れてパワーアップした紋章機のパワーアップの恒久化作業を進める事となった。
そして、各々が謁見の間を出て最後の休憩に入ろうとしたその時、シャトヤーンはアキオだけを呼び止める。

「アキオ・レイトン准将。私は、あなたとお話をしたいと思ってい

ました」

シャトヤーンは、アキオに聖母と呼ばれるに相応しい笑みを浮かべていた。

「シヴァ皇子に、色々と教えていただいたそうですね」

「反面教師ですよ」

シャトヤーンは、先ほどシヴァ皇子が自分にアキオを、『これが、私の口の悪い家庭教師です』と笑いながら紹介していた事を思い出していて、その際に、シヴァ皇子がアキオを物凄く信頼しているのだと理解でいていた。

「あなたを、兄のように見ているのかもしれませんね。シヴァ皇子はお父上はお忙しい身でしたし、辛うじて家族と呼べる存在は私だけでしたから……」

シャトヤーンは、悲しそうな表情を浮かべながらシヴァ皇子がここで暮らしていた時の事を話す。

「では、ご自分で名乗られてはいかがですか？　あなたが、シヴァ皇子の母親であると」

アキオの顔は、穏やかな笑みを浮かべたままであったが、その発言はシャトヤーンに大きな衝撃を与えるものであった。

シヴァ皇子の実母は、身分の低い市民階級の女性であるというのが皇国の公式見解となっていて、実際にシヴァ皇子の母親がシャトヤーンである事を知っているのは、本当に極限られた人達だけであったからだ。

「良くご存知でしたね」

アキオが、そんな大切な事を周りに簡単に話すはずがないと思ったシャトヤーンは、彼の話を全く否定しなかった。

それに否定した所で、それが嘘である事がすぐにバレてしまうと思ったからだ。

「聞いたわけではありません。様々な状況から、そう考えただけです」

アキオも、あのシードル公爵の私生児として生まれていたので、その辺の感覚に優れている部分があった。

間違いであれば大変な不敬に当たる行為なのに、それを断定して話すという事は、十分な確信を持っているという事なのであろう。

「一般市民出身の女性が母親だとして、どうしてシヴァ皇子がここであなたに養育されるのです？　ちょっと考えれば、誰にでもわかる事ですよ」

普通ならば、そういう子供は口の堅い信頼できる人物の家で養育されるか、監視付きで市井で育てられるのが普通であったからだ。

「エオニアのシヴァ皇子への拘りぶりが、尋常ではありませんでしたからね。だたの皇族なら、エオニアがそこまで拘りますか？　叔父や他の親戚を虫ケラのように殺した彼がですよ。それに、シヴァ

皇子は、この白き月に張られたフィールドを解く方法をあなたから聞いたと仰っていました。果たして、そんな大切な事を一皇族とはいえ簡単に話すでしょうか？　この白き月の聖母たるあなたが。多分、エオニアは聖母の血を引くシヴァ皇子が欲しかったのでしょうね。戦後、自分の行った行為の正当性を確保するために」

「そこまで理解していたのですか……」

シャトヤーンは、アキオが間違いなくあの老人の血を引いている事を理解していた。

近年耄碌していた部分があったのは確かであったが、故ジェラール皇王のアドバイザーとしての能力は、シャトヤーンにこの白き月を無血開城させるほどであったからだ。

そして、そのせいで気まぐれを起こしたジェラールに己の体を差し出す羽目となり、シヴァ皇子を身篭る事となっていた。

「私は、正直に名乗られた方が良いと思います。本人同士の問題なので、強制は出来ませんが……」

「シヴァ皇子を、気遣ってくれているのですね」

「まあ、自分に被る部分がありますから……」

シャトヤーンは、少し気恥ずかしそうに語るアキオの事を信用できる人物だと思っていた。

彼の出生の事は知っていた。

同じく、権力者の気まぐれと欲望の結果世に生まれ、そのせいで多くの苦労を重ねている。

シヴァ皇子は、この白き月に閉じ込められその存在を秘匿されていた。

そして、目の前の若者は、後に自分の父親に命まで狙われる事となった。

だからなのであろう。

アキオは、何だかんだ言ってもシヴァ皇子を決して裏切らずに、今日まで忠誠を尽くしていた。

「世間様は、私の人生の方に同情するでしょうが、私はシヴァ皇子に同情します。私は、十五歳の時に母を亡くしました。でもね。想い出は残っているんです。十五年間の母親との思い出が。だから、その後の苦労を乗り越えられた。でも、シヴァ皇子にはそれがありません。あの年齢で、多くの責任を負う立場となった彼を支える何かがあれば良いと思うのは、私だけなのでしょうか？」

「……」

シャトヤーンは、アキオの問いに言葉をつぐんでしまう。

正直な話、名乗れるものならいつでも名乗りたかったのだが、今までは周囲の政治的な環境がそれを許さなかったのだ。

故ジェラールが、本来の皇統を無視して皇太子であったエオニアを廃嫡し、自分が皇王位に就いた結果、彼とその息子達は他人の簒奪に異常なまでに臆病になっていた。

そんな中で、白き月の聖母であるシャトヤーンとジェラールの間に子供が生まれた。

自分が母親である事を公にすれば、兄であるはずのジェラールの息子達に命を狙われるかもしれない。

そうでなくても、彼らは愚鈍で臆病であったからだ。

当時のシャトヤーンはそう考えてジェラールと謀り、涙を飲んでそれを秘する事にしたのだ。

「ですが、今はそれを秘して有利になるとも思えません。むしろ、

皇王としての正当性が増すのですから、私は時期を見て発表した方が良いと思います」

「そうですね。状況が落ち着いたら、シヴァ皇子に全てを話す事となるでしょう。その際に、あなたが同席していただけるとありがたいのですが……」

「残念ですが、それは保障できません」

「どうしてですか？」

「私が、軍人だからです。勿論、私に死ぬつもりはありませんが、最後の決戦で絶対に生き残れるという保障はありません。だから……」

シャトヤーンは、この目の前の若者が自分で言っているほど生に執着していない事を理解する。

誰よりも多才で優く、多くの人や仲間達の信頼を得ていても、彼はどこか自分を蚊帳の外に置いている部分があり、自分が本当に安心していられる場所を見つけられていないのだと。

「（あなたは、十五歳の頃にお母様を亡くされてから、実は一歩も前に出ていないのですね）」

そして拙い事に、最近アキオは一つの間違った救いというか目標を見出してしまっていた。

先の惑星ファーゴでの戦い方に見られるような、自分の身を犠牲にしても、自分が好きな空間であるエルシオールを守ろうとしている事だ。

この一ヶ月にも満たない期間ではあったが、近年で一番楽しく心

癒された場所を守るために、アキオは決して命を惜しまないであろう。

そして、もしそれで命を落としても、そうする事で自分の記憶がエルシオールのみんなの心の中に残ればいい。

そう考えている事に、シャトヤーンは気が付いてしまったのだ。

「（ですが……）」

それに対して、シャトヤーンが自ら動く時間的余裕は残されていなかった。

それに、その事に気が付いている者も、多分自分くらいであろう。

なぜなら、彼は装う事にも長けていたからだ。

いや、それで自分すら誤魔化している可能性があった。

「あなたには、まだ長い人生があります。そんな事を言っては……」

シャトヤーンは、それ以上の事をアキオに言う事が出来なかった。

なぜなら、白き月の外に多数の艦影を発見という報告があったからだ。

「そんな。まだ、一日以上の余裕があったはず……」

「いえ、敵ではないでしょう」

アキオは、その艦隊の正体を知っているらしく、その表情は全く動揺していなかった。

そして、その艦隊がアキオの素晴らしき死への衝動を更に加速する事になろうとは、シャトヤーン自身も気が付かなかったのであった。

「レイトン副司令！　お久しぶりです！」

「おおっ！　やっぱり、マッコリ大佐か」

「ご存知だったのでですか？」

「おいおい、中央侵攻作戦の素案を練ったのは誰だと思っているんだ？」

白き月を覆いつくす数百隻の艦隊の正体は、大分前にウォッカ大将とウォルコット中将の命令を受けて進発していた、例のオンボロ無人艦隊である通称《ゼロ艦隊》であった。

「数だけは凄いな」

「聞いて下さいよ。この一週間、碌に寝ないで進撃して、脱落艦は僅か八隻だったんです」

アキオに見出されるまでは、操艦一筋二十年以上のベテランであったマッコリ大佐は、僅かな仮眠のみで危険宙域ギリギリの航路を綱渡り的な操艦術で突破し、エオニア軍に気が付かれないまま無事に到着する事に成功していた。

「あっ！　マッコリ少佐だ」

「お久しぶりです」

アキオが、白き月内部の通信室でコンゴウのブリッジにいるマッコリ大佐と話していると、そこに顔見知りであるミルフィーユとちとせを含むムーンエンジェル隊の面々が入って来る。

「桜葉少尉。俺も、一応大佐になったんだけどな」

「すいません」

「まあ、前と変わらないで安心したよ。桜葉少尉！　第三砲塔の定時報告を開始！」

「はっ！　弾薬数異常無し！　砲身・射撃装置に異常無し！　人員に欠員無し！　以上、全て異常無しです！」

従兵実習の際に、当時少佐だったマッコリ大佐に鍛えられたミルフィーユは、いつもでは考えられないキリっとした態度で敬礼を行っていた。

「よしよし、思ったよりは鈍っていないみたいだな」

「マッコリ大佐、ちとせにはしなくていいんですか？」

「ああ、烏丸少尉は、もたついたのは最初だけで、あとは優等生だったからな」

「それって、差別ですよーーー」

口ではそうは言ったが、マッコリ大佐はこの少し天然の少尉殿を

気に入っていた。
訓練時の点呼の際は常にギリギリで、たまに速いと思ったらスカートを逆に穿いていたりと話題にこと欠かない実習生であったが、彼女がいると、その場の雰囲気はいつも良かった事を思い出していたからだ。
軍の訓練なので厳しくやらねばならないのだが、時折り彼女のかますボケが張り詰めすぎた空気を緩める、半ば清涼剤のような働きをしていたからだ。
それに、重要な所では鋭い意見を言ったりと、決してただのバカではないと気が付いていたのだ。

「ところで、今さらなので外のオンボロ達はいいんですけど、コンゴウの整備などをして貰えるとありがたいんですよ。副司令殿」

「ああ、そうだな」

アキオは、外にある軍艦をひと目見ただけで、その使用方法をすぐに理解していた。
とにかくオンボロで、微妙な操船など怪しい船が多数あったので、フィールドと機関部の出力を最高にして敵にぶつけるしか使い道無かったのだ。
所謂、少しだけ高価な大型ミサイルと言った感じであった。

「今までの減価償却分を考えると、普通のミサイルよりも格安かもな」

「ちゃんと整備をすれば、まだ使える船もあるんですけどね」

「あんまり後生大事に使っていても、民間の設備投資が鈍るだけだ。後でジャンク屋に残骸をクズ鉄として回収させるさ」

その後、アキオはコンゴウをエルシオールの隣のドックに誘導して貰い、そこで修理の監督を行っていた。
最終決戦に備えて、疲労困憊のマッコリ大佐を休ませるためであった。

「あれだけの艦を一度に操作するというのは、実に困難でしたよ」

危険宙域を、一週間近く碌に寝ないで通り抜けて来たマッコリ大佐は、目の下のに大きな隈を作っていて、それは以前の自分を思い出させるものがあった。

「コンゴウの他の連中は？」

「奴らは、交代で休憩を取らせていたから大丈夫です。本当、艦長とか司令官って損ですよね」

軍において、軍艦の艦長や艦隊司令官ほど割りに合わない商売はない。
副長や副司令に代わって休憩を取れば良いと考える人は多いし、実際にそれは行われているのだが、軍務規定には二十四時間勤務と書かれてしまっているものであったからだ。
例え休んでいても、何かがあればすぐに対応せねばならないし、それを考えると休んでいても実際には休んでいない感覚に見舞われる事となる。
貴族出身の駄目軍人などは、大抵は優秀な副官が付けられるのでサボる者が多いのだが、普通の真面目な艦長や司令官であれば、後でボヤきの一つでも出る責任だけ重大な職務であった。

「ウチの司令官殿は、お気楽だけどな」

「らしいですね。でも、副司令が文句も言わないで一緒にいるんだ。という事は、ですか？」

「あいつは、あれでいいんだよ。おっと、時間が勿体無いな。仮眠を取って来い」

「了解です」

マッコリ大佐は、コンゴウに十数名の整備士達が乗り込んだ事を確認してから、指定された仮眠室へと歩き始めていた。

実はコンゴウは、外部の修理だけでなく、あの多数の無人艦を効率的にコントロールする装置を泥縄式に搭載する事となっていた。

何でも、Ｈ．Ａ．Ｌ．Ｏ．（ヘイロゥ）システムの技術を用いた、多次元認識システムと思考フェイズコンピューターを組み込んだ操作装置らしいが、一応は誰にでも使えるという触れ込みの装置であった。

「ただし、場所を取るので、戦艦クラス以上の艦でないと装置を置く場所が無く、しかも操作は複数で行う必要があります」

いきなりアキオの後ろから話しかけて来たのは、エルシオールの整備班長であるクレーター女史であった。

「泥縄的に働かせてすまないね」

「いえ、戦力は多いに越した事はありませんから」

アルモより年長という事で、クレーターは彼女ほど兵器という物に嫌悪感を抱いておらず、エルシオールとコンゴウへの作業を黙々

と行っているようであった。

「それにですね。長年技術畑にいますと、民生品と軍事品に大した差なんて無い事に気が付くんですよ」

「お互い擦り切れてるね。それに、俺はあのクロノ・ブレイク・キャノンにも大して驚かなかった。所詮、ただの高威力の砲だからな」

「そうですね。威力は認めますけど、チャージに時間が掛かり過ぎる事が難点です」

アキオは、どうして彼女達がアイドルのファンクラブなどに入っているのかが理解できたような気がした。

多分、趣味の時間くらいは現実の世界から離れて夢の世界へという事なのであろう。

アキオが酒に拘るのと、理屈はそう変わらないらしい。

「俺がエオニアなら、無人の艦隊を囮にして先に撃たせるな。後は、次の発射が来るまでにエルシオールを沈めればいい。最悪、味方と敵を混戦状態に持ち込めば普通の神経をしている司令官なら撃てない。あれば有用だが、万能というわけではない」

クレーターは、『もし敵がその策を使うなら、我々は負けてしまうのでは?』と不安になってしまう。

「そのための、無人艦隊さ。一隻でも多くエオニア艦隊を沈めればいい。敵が小細工を弄するための原資を一隻でも多く沈める」

クレーターは、このいつもツナギを着てエルシオール内で補給作業に従事しているアキオの本質に、先日の惑星ファーゴでの時と合

わせて始めて気が付いたような気がした。
常に陽気で、どんな時にも絶対に諦めない意思の強さを持つタクト・マイヤーズと、いざ戦闘になると、いかなる策を用いても勝利か生き残りを貪欲に欲するアキオ・レイトン。

《陰と陽》

エルシオールは、この二人の微妙なバランスによって支えられているのかも知れないのだと。
多分、タクトの言う様に綺麗事だけではやって行けない事はタクト自身も十分に理解していて、アキオが時折り泥を被っている事を申し訳ないと思っているのであろう。
だが、それを絶対に口にしてはいけないし、それを億尾にも出してはいけない。
ムーンエンジェル隊の正式な人員では無いアキオだからこそ出来る究極の支援であり、その事を十分に把握しているレスターは、だから何も口を出さない。
そういう事になっているのだ。

クレーターは、自分の目の前にいる年下の上官についてこう評価していた。

「あの、一つ宜しいですか？」

「そんなに堅苦しい口調でなくても、普通に聞けばいい。ムーンエンジェル隊とはそういう場所なんだろう？」

「レイトン准将は、この艦で出撃なさるおつもりですか？」

「ああ、コンゴウ自体の操艦をマッコリ大佐に任せて、あの操作盤

の方を担当しようと思う」

それは、どう考えても危険な任務であった。

あの圧倒的なエオニア艦隊を相手に、紋章機の護衛を受けられるエルシオールでは無くて、二世代も前もオンボロ戦艦とクズ鉄直前の動くだけの無人艦だけで戦う。

多分、かなりの確率でコンゴウは沈んでしまうであろうとクレーターは考えていた。

「危険ですね」

「ああ。だが、俺がやるのが適任だ。それに……」

「それに、何ですか？」

「俺自身、そんなに悲観してはいないんだ。クレーター班長は、俺の事情は知っていると思うけど、俺は今まで自分が生き残るためだけに足掻いて来た。以前の任地での事や、第2方面軍での事云々は、別に自分のためだけにやった事ではない。人の役に立っていれば、そう消される事も無いかな？ってくらいの考えだったんだと思う。決して、俺が善人だったからではないんだ……」

「レイトン准将……」

「でも、エルシオールで、俺は初めて人のために働いていたような気がした。それが、俺の人生の目的かどうかは知らない。でも、ここでの一ヶ月あまりの事は、今まで生きて来て一番楽しかったような気がする。だから、ここで命を落す事があっても、特に後悔は無いんだよ」

クレーターは、どうしてミルフィーユ達にではなくて、自分にこんな話をしたのかを今理解していた。
とても、これからエオニア軍と戦う彼女達に言える内容では無く、更にアキオ自身が死んでしまっても、後にその考えが彼女達に伝わり易いと考えた人物が自分だったのであろう。

つまり、これは遺言であったのだ。

「最後の最後で、辛気臭い話で悪かったね。後があったら、その埋め合わせはするよ」

そう言いながら、多くの女性を簡単に虜にしてしまいそうな笑みを浮かべるアキオに、クレーターはその埋め合わせをお願いする事にした。

「では、ミルフィーユさん達とお話をして来てください。ここでの監督作業は、私でも可能ですから」

「……。わかった。クレーター班長の言う通りにするよ」

そう言い残してから、無人工廠のオペレートルームから出たアキオの背中を見送りながら、クレーターはムーンエンジェル隊の誰かが彼の心を救ってくれる事を祈るのみであった。

「何だ、また射撃練習か」

「悪かったね。私は、これが一番落ち着くんだよ」

白き月の内部をうろつくアキオが一番最初に顔を合わせたのは、射撃練習に勤しむ親友のフォルテであった。

「あんたこそ、監督業務は大丈夫なのかい？」

「代わって貰ったのさ」

「そうかい。じゃあ、アキオもやるかい？」

アキオはフォルテから銃を受け取ると、そのまま射撃の勝負を始める。

「十発勝負だ」

「今日は、勝たせて貰うぞ」

「師匠に勝つなんて、十年速いと思うけどね」

お互いに十発を的に向けて発射し、結果は僅差でフォルテの勝利となっていた。

「やっぱり、勝てないな。マイマスター（師匠）」

「師匠と言われるほど、もう差は無いんだけどね。でも、いつもより成績がいいね。迷いが無くなったみたいだ。まあ、アキオは迷いをそう表立って見せる男でもないけどね」

確かに、アキオにはもう迷いなど存在しなかった。
コンゴウに乗って、一隻でも多くエオニア軍の軍艦を沈めてタクト達の勝利に貢献し、そのためには命すら惜しまない。
だが、その考えを銃によってフォルテに見透かされてしまったようだ。

「止めないのか？」

「止めて、あんたが言う事を聞くとも思えない」

短い間ではあったが、お互いに命を預けていた関係だ。
だから、余計に止めても無駄な事はフォルテにはわかってしまっていたのだ。

「それに、死なない可能性だってあるのに」

「それもそうだね。でも、一つだけ私のお願いを聞いておくれよ」

「親友の願いだ。聞きましょう」

「多分、あんたの事だから、勝ちの公算ってのも多少はあるんだろう？　だったら、それが上手く行ったら、絶対に早まった真似だけはしないでくれ」

「わかった。俺とて、好き好んで死にたいわけじゃないからな」

「じゃあ、良い子にご褒美をあげよう」

そう言うと、フォルテはアキオに抱き付き、そのまま頬に自分の唇を押し当てた。

「おっと、勘違いしないでおくれよ、これは、あくまでも友情の印なんだから」

「だろうな。でないと、俺がウォルコット中将に怒られる」

フォルテは、今回はアキオの発言に特に反論はしなかった。

「ウォルコット中将は、この決戦に間に合うかね？」

「間に合う。途中参戦でも絶対に間に合う」

アキオは、自分の上官の実力を誰よりも理解していた。

補給部門の統括者として、今回の中央侵攻作戦の補給を全て請け負っている彼であったが、多分ウォッカ大将から渡された戦力の中から、特に足の速い艦で艦隊を編成して必ずここに乗り込んで来ると思っていたのだ。

もっとも、そのおかげで木村大佐辺りは苦労していそうだが。

「じゃあ、アキオも死ねないね」

「原隊復帰をしないと怒られるからな」

その後、アキオはフォルテの元を去り、次の場所へと向かう。

「あっ！　アキオさんだ」

「レイトン、仕事は終わったのか？」

射撃場の近くのティーラウンジでは、ミルフィーユがタクトと一緒に話をしながらお茶を飲んでいた。

「交代した」

「ふーーーん、そうなんだ」

仕事をサボるという事にかけては右に出る者がいないと自負するタクトは、大切な監督作業を他人に任せて休みに来たアキオを、思惑あり気な視線で見つめていた。

「あの。アキオさんは、この戦い勝てると思いますか？」

ミルフィーユは、アキオにいきなりストレートに質問をぶつけていた。

「勝てる。少なくとも、負けるつもりは無い」

アキオの心の中では、冷静な軍人としての自分が勝率三割ほどを予想していたのだが、それでも負ける事は無いであろうと思っていた。

それは、目の前の男がそう易々と負けるとは思わなかったし、彼には幸運の天使であるミルフィーユが付いていたからだ。

「タクトさんとアキオさんが勝てるって言うなら、勝てますよね」

ミルフィーユは、いつもと変わらないお日様のような笑顔を浮かべていた。

「そうそう、《笑う角には福来る》さ」

「へえ、そんな言葉があるんですか」

「昔、母に教えて貰ったのさ」

「でも、アキオさんは大丈夫なんですか？」

「俺が？」

「だって、エオニアさんは、アキオさんに拘っているから」

アキオは、今さらながらミルフィーユのたまに物事の核心を突く部分に驚いていた。

確かに、エオニアはアキオに拘っている。

でなければ、あんなに熱心にアキオを勧誘したり、罠に嵌めてまで自軍に引き込もうとはしなかったであろう。

「似た者同士だと思われているからな」

「えーーー。全然、違いますよ」

ミルフィーユはそう言ってくれたが、アキオは自分ではエオニアとは似た者同士だと思っていた。

同じく、この国の暗部に裏切られた者同士。

ただ、その後に道を外したか、踏み止まったかの違いだけであると考えていたのだ。

「でも、以前ほど俺に拘らないさ」

「どうしてですか？」

「俺達が、シェリーを殺したからな。あの股肱の忠臣を討ってしまったんだ。奴は、俺達を許すまい」

アキオは、二人が直接に顔を合わせる機会は永遠に失われたと思っていた。

そして、最後は必ずどちらかが死体になるであろうともだ。

「レイトン、色々とすまないな」

一言だけであったが、アキオはタクトがどのくらい自分に感謝しているのかを理解していた。

エオニアは、アキオとタクトを同じくらい警戒していたのだが、彼はアキオならば自分の側に引き込めると考え、そのために余計な労力を多数使う羽目となっていた。

なので、どれだけ自分が自由に動けてエオニア軍出し抜けたのかを一番に理解していたのだ。

そして、最後の決戦でもエオニアは、アキオに関心を向けないわけが無かった。

戦術によっては、表面上は無視するかもしれないが、エオニアも普通に感情を持つ人間で、絶対にアキオに対して心穏やかではいられず、その心の乱れは自分達を有利にするとタクトは理解していた。

そして、その事がアキオを危険に曝す事もだ。

「そう思ったら、今度からは書類の期限くらい守れよ。レスターが泣くぞ」

「あいつが、泣くとは思えないけどな」

タクトの返事に、アキオは苦笑するだけであった。

「じゃあ、邪魔するのは何だから、俺は失礼させていただく」

二人の元を去った後、アキオが白き月の内部の緑地公園を歩いていると、そこにはエリオスとヴァニラがいた。

正直なところ、あまり話をしたくない奴が一人いるのだが、それは仕方がないと諦めて声を掛ける事にする。

「ヴァニラ、何をしているんだ？」

「アキオさん。はい、実は亡くなったウギウギを埋葬していたのです」

ヴァニラは、タクトの勧めで宇宙ウサギを飼っていたのだが、寿命の短い宇宙ウサギはすぐに死んでしまい、それをこの緑地に埋葬していたとの事であった。

「エリオスさんに、墓碑を書いて貰いました」

確かに、公園の端の盛り上がった土の上には木製のプレートが刺さっていて、そこには《ウギウギここに眠る》の文字と即興で書かれた宇宙アサギの絵が書いてあった。

「器用な事で」

「あの兄さん……」

あの軍事法廷事件とその後の様々な事件の結果、二人の関係は最

悪の状態からは脱していた。
ただ、『では、二人の関係は修復に向かっているか?』と言えば、実はそうではなかった。
アキオが、ただ上手く弟をかわす術を身に着けただけと言うのが正しいのであろう。
エリオスに、《兄さん》と呼ばれても特に何も感じないようになったし、お金を貸した件では、『破産したらケツの毛まで抜いて、宇宙中に大恥をかかせられるし、上手く返済できれば利息が儲かるからそれで良い』と考えて精神の逃げ場を作っていたのだ。
それとアキオは、エリオスの謝罪から逃げ続けていた。
人は良く、『誠意を持って謝れば、必ず許して貰える』と言う事が多いのだが、果たして本当にそうなのか?とアキオは考えていた。
例えば、今の時点でエオニアが誠意を持って、今回のクーデターの犠牲者の遺族に謝るとする。
すると、彼ら全員がエオニアを許すのであろうか?
それは絶対に無いと、アキオは考えていた。
それに、エリオスが謝る内容には、多分あの老人の罪も混じっているのであろう。
少なくとも、アキオはそう考えていた。
母に無理矢理子供を作らせ、孤立無援で市井に放り出し、病気になった際にも援助一つ寄越さず、最後にその息子である自分の命まで狙って来た。
そんな大罪が、この目の前の若造の謝罪一つで消えるはずもないのだ。
多分、謝って貰っても、余計に腹が立つだけであろう。
なのでアキオは、エリオスとは最低限の会話と付き合いしかしていなかった。
兄さんと呼ばれても何も言わないのは、自分にとって限界ギリギリの譲歩であったのだ。

「何か用事か？　シードル少佐」

「いえ……、何も……」

エリオスは、またアキオに謝れなかった事を内心で悔やむだけであった。

「ヴェニラは、また宇宙ウサギを飼い始めたんだって？」

「はい、ウギウギの分まで可愛がろうと思います」

ヴァニラは、ウギウギの死を乗り越え、クロミエから新しい宇宙ウサギを貰って可愛がっている事を嬉しそうに話し始める。

過去に、老衰で亡くなった育て親であるシスターバレルの死にどこか責任を感じ、死について敏感になっていた彼女は、同じく寿命で亡くなったウギウギの死を、エリオスを始めとする周りの人達の励ましで乗り越えていたのだ。

「そうか、ウギウギは幸せだったんだな」

「そうなのですか？」

「宇宙ウサギの寿命は、人より遙かに短い。でも、彼らはそれに気が付かないし、それを嘆いたりしない。ただ、その与えられた時を懸命に生きるだけだ。でも、その時間をヴァニラに可愛がって貰えたのなら、ウギウギは幸せだったさ」

アキオはそこまで言うと、その場を立ち去ろうとする。

これ以上長居して、エリオスと話すのを避けたかったからだ。

「それに、人も同じさ。生まれてすぐに死ぬ奴もいるし、百年以上生きる奴もいる。肝心なのは、その決められた人生をどう生きるかだ……」

誰かに、語ったものなのか？

それとも、独り言なのか？

小さな声でそう呟きながら、ヴァニラ達の元を立ち去るアキオをエリオスはただ見送るしか術を持たなかった。

「あの。お話をしないで良かったのですか？」

「今の兄さんに土下座をして謝ったり、明るく話しかけてもただ兄さんを怒らせるだけだよ。世間の人は僕を非難するかもしれないけど、どんなに遠回りでも僕が最初にしないといけない事は、僕が立派なシードル公爵になる事。それしか無いんだ」

ヴァニラは、そう述べるエリオスが少し寂しそうな顔をしている事に気が付く。

「それよりも、ヴァニラにお願いしたい事があるんだ」

「何でしょうか？」

「あれだけの強力な敵と戦わねばならない時に、こんな事を頼むのは心苦しいんだけど、兄さんに少し注意して欲しいんだ」

「そのくらいなら、大丈夫です。でも、どうして？」

「さっきの兄さんが、僕には危うく見えたからだよ」

ヴェニラは、今すぐにでもアキオの所へ行ってエリオスがどれほど心配しているのかを教えてあげたかったのだが、それはエリオス自身が望まない事も理解していた。
エリオスに、点数稼ぎをする意図などはまるで無かったからだ。

「僕に紋章機が動かせたらね。シムス高速戦闘機でもいいんだけど……」

だが、士官学校の実技教習以来、操縦桿を握った事すらないエリオスにはそれは不可能であった。
それに、そんな素人が戦場に出てもすぐに撃墜されてしまうであろうし、エリオスにはエルシオールのダメージコントロール責任者としての任務もあったからだ。

「あの、私にどれだけの事ができるかはわかりませんが、あまり悩み過ぎないでください」

「ヴァニラ、本当にありがとう」

エリオスに両手を握られたヴァニラは、顔をほんのりと赤くさせながらその手を握り返すのであった。

「あら、お一人なのですか？」

「お一人だよ」

ヴァニラ達の元を離れたあと、自販機のある休憩コーナーでコーヒーを飲んでいたアキオは、そこを通りかかったミントに話しかけられる。

「ここにも一人の女がいますわよ」

「本当だ、麗しの美少女がいるね」

「美女ではございませんの？」

「美女ってのは、二十歳を過ぎてからなんだよ。でも、美少女だと簡単に美女になれるからね」

「褒め言葉だと受け取っておきますわ」

自販機の前にあるベンチに座りってコーヒーの入ったカップを眺めていたアキオの隣に、ミントはそっと座っていた。

「アキオさんは、コンゴウで指揮を執られるとか？」

「ああ、例の操作盤の方を担当するんだ」

「あのマッコリ大佐さんにお任せしないのですか？」

「コンゴウ自体の操艦を任せる。何しろ、彼は操艦のプロだからな。ただ、あの操作盤は俺の方が上手く扱えるだろうな」

例の操作盤は、Ｈ．Ａ．Ｌ．Ｏ．（ヘイロゥ）システムの一部を

利用したシミュレーターのような物だったので、士官学校に行っていない中年のマッコリ大佐より、シミュレーターの経験があるアキオの方が上手く取り扱えるはずであった。

「そうですか」

ミントは、本当は危険だからアキオにエルシオールに残って欲しいと考えていた。

でも、それは絶対に言っては行けないのだとも考えていた。

アキオが自分だけ安全な場所にいて、部下達を危険に曝すなど絶対にありえないからであった。

それに、そんな事を言えば、自分がアキオに嫌悪されてしまうであろうとも思っていた。

「（それだけは、絶対に嫌ですわ。でも……）」

「この戦いが終わったら……」

ミントの迷いを予想したかのように、アキオはいきなり将来の事を話し始める。

「一度、長い休みを取ろうと思うんだ。士官学校卒業から四年以上、色々とあったから……」

確かに、アキオの言う通りであった。

ミントの知っている範囲でも、これほど波乱万丈な人生を送っている人など他には誰もいなかった。

「特に何もしないで、普通に生活をしてみたい。別に、人生の目的を見つけるとかそんな大仰な事じゃないんだ」

ミントは、アキオの言わんとしている事が理解できていた。
この約四年間、士官学校時代も含めると六年以上、常に全力で疾走していたアキオはとにかく疲れていて、それは彼の心身を蝕んでいた。
そこで、それに気が付いたアキオは、もしこの危険な賭けを乗り越えられたら、これからの人生について一度真剣に考えてみようと思っていたのだ。

「アキオさんは、悪い人ですわね」

「いきなり、悪人宣言かい？」

「ええ、私の気持ちを理解なさっているはずですのに……（それと、ちとせさんとランファさんも……）」

他のライバルに塩を送るほどお人好しで無いと思っているミントは、ちとせとランファの事を口の奥にしまってから、自分の感情をストレートに口にした。

「それについては、すまないとしか言えない」

アキオは、それを始めは自分に対する枷なのだと思っていた。
前までは、自分と人生を共に歩むと、のちに大きな災厄に巻き込まれてしまう可能性があったので、それだけは絶対にしてはならないと、自分で自分を律して来ていたのだと。
だが、その状況をほぼ脱したはずの今でも、自分の心のどこかに戸惑いが残っていた。
怯えなのだろうか？
怠惰なのだろうか？

それは、自分でもわからなかった。

「あの家の事なんて関係ない。どんな危険があっても、それを排除してこの女性と人生を共に歩んで行きたい。そういう人にまだ巡り合えていないと、俺は思っているのかもしれない。その点、タクトは天才的だよな。羨ましくなる」

タクトは、レスターや自分に比べてもさほど美男子というわけでもない。

それでも、彼はミルフィーユに対して誰よりも懸命で真摯で誠実であった。

だから、彼女もタクトを選んだのであろう。

それを考えると、まだ自分にはそういう人を選ぶ資格は無いのだと思うアキオであった。

「わかりましたわ。では、あなたが、私を選びたくて仕方が無い状態にしてさしあげますわ。これから、どんなに時間が掛かってもです。だから、無茶をなさらないでくださいね」

その後、ミントは自分からアキオに手を絡ませてから、その短い一時を過ごすのであった。

「そろそろ、コンゴウに戻るかな」

ミントと別れたアキオが、コンゴウの係留されているドックまで

の通路を歩いていると、前方にちとせが立っていた。

「何だ、そこにいたのか。結構、探したんだけどね」

自分がこれからする事を考えると、二度と会えなくなるかもしれないと思ったアキオは、残された時間になるべく多くの人と会っておこうと思ったのだが、ちとせとランファには会う事ができないでいた。

ちなみに、レスターもそうだったのだが、彼の場合はいちいち顔を合わせてどうこう言うのも気恥ずかしかったので、会えなかった事は気にしない事にしていた。

どうせ、通信等でいくらでも話すであろうと考えていたからだ。

「あの……。私は古風な女ですし、軍人ですから……」

そう言うと、彼女はアキオに向けてこれまで見たことが無いほど綺麗な敬礼を行う。

「アキオ・レイトン准将の武運長久を祈っています」

「ありがとう。多分、日頃の悪運の強さから言うと、大丈夫だと思うんだけどね。じゃあ……」

アキオが返答の敬礼をに行ってから、ちとせと別れて足を進めようとすると、いきなり後ろから彼女に抱き付かれてしまう。

「ちとせ……」

「本当は、こんな危険な事は止めてくださいと言いたいんです。でも……」

いくら数だけは揃えたとはいえ、黒き月で作られたばかりの最新鋭艦隊と、スクラップ寸前のボロ船ばかりの艦隊。

誰が考えても勝てる可能性などはゼロに近く、要は一隻でも多くエオニア艦隊を道連れにする事が目的であったからだ。

当然、それをコントロールするアキオ達が生き残れる可能性はかなり低い。

アキオの性分からすれば、コントロール艦だけが残っても、それを指揮して少しでも自軍を優位にするようにと動くであろうし、もしそうなれば、二世代も前の旧式高速戦艦であるコンゴウが生き残る可能性は更に低くなるであろう。

「軍人は、与えられた戦力で全力を尽くさないとな。俺がエルシオールにいても、さして役に立たないんだよ。せいぜい、細かいアドバイスをするか、火器のコントロールをするくらいだ。今まではそれで良かったと思うけど、今回だけは俺はそれは容認できない」

アキオは、そのまま後ろを振り返ると、ちとせをそっと包み込むように抱き寄せる。

「ごめん。ちとせは、自分の気持ちを正直に話してくれているのに。でも、この戦いが終わったら、俺は十五歳の頃から半ば見失っていた人生を考え直せると思うんだ。それと、もう少しズル賢く生きて行けると思う。だから……」

「いえ、今はそれだけで十分です。でも、ミントさんにもランファさんにも私は負けたくありません」

「ランファが？　そりゃあ、無いのと違う？」

「（気が付いていないんですか。この人は……）」

ちとせは、自分の想い人が表面上はプレーボーイに見られていても、実は男女の恋愛感情に意外と鈍い事に、今になって気が付くのであった。

「遅いわよ」

「まだ、時間は十分にあるさ。それに、ランファと待ち合わせていたわけでもないだろう？」

ちとせと別れ、補給と修理の完了したコンゴウに乗り込もうとしたアキオは、そこにまた誰かが待ち受けている事に気が付く。

それは、今まで会えないでいたランファであった。

「プレイボーイ君は、色々と忙しかったみたいね」

「俺が、プレイボーイねぇ……」

アオキは、それは絶対に無いと思い、ランファに戸惑いの態度を見せていた。

「とにかく、死ぬんじゃないわよ」

「さあな。戦ってのは生き物だからな」

アキオは、簡単に本音を語ってしまった自分にだた驚いてしまう。危険な任務に赴く自分を心から心配するムーンエンジェル隊の、特に自分に恋愛感情を向けるミントとちとせには口が裂けても言えなかった、死の可能性を呆気なくランファという女性に言えてしまう事に対してだ。

「あんたね。タクトがどれだけ苦労しているか知っているの？　紋章機なのよ。H．A．L．O．（ヘイロゥ）システムなのよ。あんたが惨たらしく死ぬと、みんながショックを受けて戦力とかがガタ落ちなわけよ。特に、ミントとかちとせが使い物にならなくなっちゃうでしょう。だから、みっともないほどに生に縋り付きなさい。今までと同じように」

ランファは、色気も何も無い、極めてオフィシャルな理由でアキオに死なない様に説教をしているが、その顔にはかなりの割合で紅が差していた。

「そうだな。極めてオフィシャルな理由があるなら、《多才のレイトン》としては、生き残らないと行けないな」

「そうよ。変に死なれると、後味が悪いじゃないの」

アキオとランファの会話は、いつものように色気も何も無いものであったが、不思議と心が軽くなっていたアキオであった。

「それで、副司令はどの娘がターゲットなんです？」

「いやだねぇ。妻子持ちは、何でもそういう風に捉えちゃって」

「いえね。純粋に好奇心からの質問なんです」

コンゴウに乗り込んだアキオは、予想通りに最後の乗船者となっていて、その大きな要因であるムーンエンジェル隊のメンバーとのやり取りを知っているマッコリ大佐から、上のような質問をされる羽目になっていた。

「これが終わったら、ジックリ考えるよ」

「女泣かせですねぇ……。ああ、特に問題な無いですよ。装置の試験も既に終了していますし。コンゴウの出港と陣形の編成は我々でやりますから、副司令は時間まで操作盤の練習をしていてください」

いつもは、どこにでもいる中年のオジさんと言った外見のマッコリ大佐であったが、彼はやはりプロフェッショナルで、アキオがいない間に仮眠を終わらせ、ほとんどの準備を終えてしまっていた。

「任せてすまないね」

「そう思ったら、それを本番で上手く使いこなしてくださいよ」

それから数時間、マッコリ大佐が無人オンボロ艦隊の陣形を整えている間に、アキオは例の操作盤の練習を他の若い軍人達と一緒に行っていた。

「うわっ！　またやられた！　レイトン准将は、お上手ですね」

練習モードで対戦をしてアキオに負けてしまった若い男性士官が、すぐに装置を使いこなしてしまったアキオに賞賛の声を送る。

「無人艦は武装を積んでいない。ぶつけるか、なるべく近くで自爆させないと敵を倒せないからな」

「レイトン准将！　予定時刻二十分前ですが、敵艦隊と巨大質量物体の反応を確認しました！　エオニア軍のものと思われます！」

コンゴウの索敵担当士官から、半ば悲鳴近い報告が入って来る。黒き月のそのあまりの大きさと、艦隊の数の多さに驚いてしまっているらしい。

「なあに、いきなり全ては出さないさ」

アキオの予想通りであった。

エオニア軍は黒き月を後方に置くと、そのまま二つの艦隊をエルシオールとアキオのゼロ艦隊に対峙させる。

「どちらかが、エオニア指揮の艦隊という事かな？」

「だろうな」

エルシオールに通信を入れたアキオは、スクリーンに映ったレスターと冷静に戦力分析を開始していた。

「続けて、五機の大型戦闘機の反応を確認！」

「またあの連中か……」

エルシオールと対峙している艦隊旗艦らしき艦から、例のダークエンジェルに乗ったヘル・ハウンズ隊も出撃し、その報を受けてエルシオールを発進したフォルテ達と対峙を始める。

「いよいよ、最後の戦いってわけか」

コンゴウの無人艦隊操作盤の前で、アキオは敵の大戦力を前に改めて覚悟を決めるのであった。

第十五話（後書き）

最近、なかなか時間が取れなくて執筆のペースが落ちています。
次の更新はかなり遅れるかも……。

第十六話

エルシオールとエオニア艦隊が戦いを始める少し前、第2方面から首都星トランスバールを目指して進発したジンロ中将率いる主力艦隊は、同じく大戦力を有するレゾム艦隊との艦隊決戦を終了させていた。

「ぬぉーーー！　撤退だぁーーー！」

「逃がすか！　レゾムを討て！」

敗北から敗走へと移行するレゾム艦隊に、ジンロは容赦の無い追撃をかけていた。

基本的に、司令官によるコントロールが前提の無人艦隊だったので、何より司令官を撃つ事が先決であったからだ。

「レゾム！　自らがしでかした事の責任を取って貰うぞ！　お前如き、軍籍剥奪で銃殺にしても、全く釣り合いが取れないがな！」

「抜かせ！　エオニア様の理想を理解できない、既得権益に縛られた貴族の癖に！」

「ああ、俺は貴族さ。市民達に評判最悪な、皇国の腐敗の象徴でもある貴族さ。だがな！」

「だが、何だ！」

「これだけは言える！　俺は、お前よりはまだマシな部類の人間である事と、ホップス元帥の仇であるお前とエオニアは絶対に殺すと

いう事をだ！」

その後もジンロ中将の追撃は続き、レゾムは他の艦を全て犠牲にしてまた自分だけで逃走してしまったのだが、少なくともこれで首都星トランスバールへの障害が無くなった事だけは事実であった。

「負傷者と損傷艦は後方に下げろ！　すぐに進撃を開始する！　（マイヤーズ、レイトン。エオニアは、俺の獲物なんだ。取って置いてくれよ。まあ、無理かも知れないがな……）」

部下達への命令を絶やさないようにしながら、ジンロ中将は一人呟くのであった。

「木村大佐は、各方面軍への補給を完璧にこなしているようですね」

「ウォルコット司令が、押し付けましたからね……」

「そんな事はないですよ。ただ、将来の事を見据えているんですよ。私の現役の期間は、さほど残っていませんから」

ジンロ中将が、レゾム艦隊を殲滅させて再進撃を開始したのと同じ頃、同じく秘かに艦隊を率いて首都星トランスバールを目指すウォルコット中将は、旗艦（ヒュウガ）の艦長とそんな話をしていた。

「レイトン准将がいます。ああ。でも、あれほどの人がここに残る

はずは無いですね。きっと、中央で要職に就くはずだ」

「いえ、それはないですね」

艦長の意見を、ウォルコットはすぐに否定してしまう。

「どうしてですか？　あんなに優秀な方なのに」

「優秀だからだけでは、顕職や要職に就けないんです。本人の意思という物があります」

ウォルコット中将は、もう生き残るために我武者羅に頑張らなくても良いアキオが、好き好んで軍や政府の要職に就くとは思っていなかった。

多分、戦後は自分が自由に生きる道を模索するであろうと、ウォルコットは考えていたのだ。

「勿体無い話ですね」

「勿体無いですけど、レイトンさんにはレイトンさんの道があります。でも、暫く休んだら案外ひょっこりと戻って来るかもしれません。あの人には、かけがえのない仲間達が出来たようですから」

ところが、同時にウォルコットは、アキオに対して何か影の様な物も感じていた。

あれだけ悪運も強かったアキオが、この戦いであっさりと戦死してしまうのでは？

根拠は限りなくゼロに近かったのだが、昔の戦闘機乗りとしての勘がそんな事を感じていたのだ。

「（とはいえ、私に出来る事は、この艦隊を最後の決戦に間に合わせる事くらいです。フォルテさん、どうか年寄りの杞憂が、だたの杞憂で終わるように祈っていてください）」

ウォルコット中将は、艦長に最高速度での進撃を命令すると、そのまま正面を静かに見つめ続けるのであった。

「主力艦隊から通信です！『ワレ、レゾムキカノカンタイヲゲキメツシ、コレヨリシュトセイトランスバールヘトムカウ』以上です！」

同じく、居場所を第2方面軍暗礁宙域内からかなり前進させていたウォッカ大将座乗の、情報収集・統括艦兼旗艦のホークアイの司令官室内で、その部屋の主は通信担当士官の報告を聞きながら一人不敵な笑みを浮かべていた。

「ジンロ中将、お主はエオニアを自分で討ちたいらしいの」

「続けて、ウォルット中将指揮の第十三独立艦隊より通信です！『ワレ、イッサイノテイコウヲウケズニ、九ワリノコウテイヲスルム。コレヨリ、シュトセイトランスバールヘトムカウ』以上です！」

「お前もか、ウォルコット。レイトンが心配なのじゃな」

続けて二つの艦隊から、首都星トランスバールへの進撃報告が出たのでウォッカ大将は、ご機嫌な笑顔を浮かべていた。
正直なところ、どちらか一つが辿り着ければ上等だと思っていたからだ。
それに、既にエオニアには全滅の判定をされていた第3方面軍も、戦力を立て直したルフト中将が進撃を再開させていたので、少なくともエオニア軍に完全な遅れを取る事は無くなっていた。

「出来る限りの事はしたよ。あとは、勝つか負けるか。天は、どちらに勝利を与えてくださるか……」

裏方としてやれる限りの事をした老人は、司令官室のソファーに深く座り、あとは結果を待つだけとなっていた。

「タクト・マイヤーズ司令はいるか?」

それは、意外な一言であった。
エオニア軍と、エルシオールぐらいしか主戦力はいなかったがトランスバール皇国軍が戦力を展開して一触即発となった瞬間に、エルシオールとコンゴウのメインスクリーンに、これで何度目かになる敵将エオニア・トランスバールの姿が映し出されていたからだ。

「これは、お元気そうでなによりですね。エオニア元皇太子殿」

「この戦力差で、そこまで減らず口を叩くか。さすがだな。タクト・マイヤーズ」

エオニアは、タクトに対して不適な笑みを浮かべながら余裕たっぷりの態度を見せ付けていた。

だが、アキオもタクトも、見た目ほどにエオニアが優位性を感じているとは思っていなかった。

なぜなら、本当に精神に余裕があったのなら、そのまま何も言わずに攻撃を仕掛けるであろうからだ。

普通は逆に考えがちだが、何か心の中に不安な部分があるからこそ、相手が狼狽したり動揺している部分を見て自分を安心させようとするのが人という生き物であったからだ。

「タクト。高貴なるエオニア様が、下賤なお前さんに用事だとさ」

「レスター。俺って、一応は貴族だぜ」

この二言だけであったが、目配せも交えた会話で二人は今成さねばならない事をお互いに理解していた。

それは、時間稼ぎであった。

一秒でも多くの時間を稼ぎ、ここに到着するであろう味方艦隊を一隻でも増やして、味方の勝率をコンマ一秒でも高める。

そのために、レスターはタクトに道化になってでも時間を稼げと心の中で願い、同じくタクトはそれを心の中で了承していた。

そして、それをアキオにもと望む二人であったのだ。

「今回は、スカウトはなさらないのですか？　そうでなくとも人材が減って色々と大変でしょうに」

「ほう、今さら命乞いかね？」

「いいえ、以前は驚くほどに熱心でいらっしゃいましたから。成果は無かったらしいですけど」

「まあ、どうしてもと言うのであれば、使ってやらぬ事も無いがな」

「いえ、あなたに使われるなど真っ平ごめんですね」

タクトは、普通の小悪党であれば激怒しそうな言葉を多用してエオニアとの会話を引き伸ばそうとしていた。

ここまで無礼な言葉を繋げれば、すぐ表情に現れるのが普通なのだが、そこはこれだけの戦乱を起こした男という事なのであろう。

その顔には苦笑の類ではあったが、笑みまで浮かんでいた。

「ところで、シヴァはいるのかな?」

「ここにいるぞ!」

エルシオールでは出撃せずに、白き月にシャトヤーンと残ったシヴァ皇子は、エオニアの呼びかけにすぐに対応していた。

「シヴァよ。もう一度だけチャンスをやる。シャトヤーンと共にこちらに来い。共に、新しきトランスバール皇国を目指そうではないか。あのジェラール以下代々の無能な皇王が携わった、ロストテクノロジーを一部の者達だけで独占し、皇国に無意味な停滞を招く事になったこの現状をどう考える? 我々はもっと大きく羽ばたける。ロストテクノロジーを用いて皇国を拡大させ、それで得た更なる富をもって市民達に還元する。これのどこが愚策だというのか?」

エオニアは、シヴァ皇子に再び自分の考えを述べ始める。

そしてその考えは、字面だけで言えば決して悪くないものであったので、タクトはまだ幼いシヴァ皇子がそれに惑わされるのではないかと心配になってしまう。

「ほう。お前でも、市民達の事が気になるらしいな」

「どういう事かな？　シヴァ」

「では、聞こう。それなら、なぜあのクーデターで首都星トランスバールを砲撃した？」

「知れたことよ。余の理想を理解できない連中を一掃しただけの事」

「ならば、王宮だけを破壊すれば良かっただけの事。下手に軍本部と官庁街を砲撃したのはまずかったな。それに、市街地にもだ。おかげでその後の占領統治に失敗し、それを力で無理矢理抑え込んでいる」

エオニアは、シヴァ皇子の批判を心中では心穏やかに聞けないでいた。

あの子供のシヴァ皇子が、ここまで自分に言う。

そして、その知恵を与えた人物の検討が付いていたからだ。

エオニアは、沈黙を守っているアキオの事をなるべく気にしないように、コンゴウのブリッジを映しているスクリーンから視線を逸らす。

「それに、惑星ロームと衛星都市ファーゴでも無用な殺生をしたな。そのお前のより良い皇国とやらの建設には、あと何億人の命が必要なのだ？　それとも何十億人か？　そんな大勢の人達の命を犠牲にして領域だけを広げて、お前はその広さを一人で喜ぶのか？　だと

したら、とんだ道化だな」

シヴァ皇子の辛らつな批判に、エオニアは反論の余裕すら失っていた。

「お前は、要は自分を追放した者達に仕返しをしたかっただけあろう？　たまたまそんな便利な玩具を手に入れたばかりに、その玩具の大きさに、手がふら付いて振り回されている哀れな子供にしか過ぎない。違うか？」

シヴァ皇子の言う便利な玩具とは、勿論《黒き月》の事であった。いくら彼でも、あの黒き月の力が無ければ、こうも簡単にクーデターを実行できなかったであろうから。

「この力を侮るのか？　シヴァよ」

「その悪しき力自身は侮っていない。だが、それを利用していると思っていて、実はその力に使われているお前など、恐れるに足らない」

「クッ！　言ってくれるな！」

エオニアは、珍しく声を荒げていた。

それは、最近自分でも少し自覚していただけに、他人に言われて余計に腹を立てていたからだ。

「レイトン、どうやら余計な知恵を授けたらしいな」

シヴァ皇子の口撃に気が滅入ったエオニアは、今度はアキオに話しかけていた。

シヴァ皇子に余計な入れ知恵をした事を、なじりたくなっていたからだ。

「余計な知恵でですか？」

「そうだ。まだ子供のシヴァに都合の良い事を吹き込む。さすがは、あの老人の子供と言うわけだな」

「まあ、否定はしませんよ。ですが、人を教育できるのは人だけです。なら、どんな天才も凡人も人の影響を大きく受けてる。違いますか？　そして、あなたはいい歳をして、何の影響を受けているのでしょうね？　そこの後ろにある黒い天体ですか？　人が物に利用される。本末転倒ですね」

それは、決定的に今のエオニアには言っていけない事であった。自分でも薄々勘付いているだけに、余計に性質が悪かったのだ。

「もう、わかった。余とお前は、絶対に相容れないという事なのだな」

「最初から言っておりますのに」

「その首、今は亡きシェリーへの褒美として貰うぞ」

「エオニア閣下、この首は安くないですよ。逆に私にその首をかき切られない様に」

お互いに宣戦布告の言葉を交わしたアキオとエオニアは、それでスクリーンを切ってしまうが、次に通信を入れて来たのはタクト達にとって意外な人物であった。

「よう、久しいな。士官学校同期の諸君達」

「お前は……。ギュンター・ハイネケンか！」

レスターは、トランスバール皇国軍第一種軍装に身を包んだ金髪の男性の正体にすぐに気が付く。

そして、彼が二つに分かれているエオニア艦隊のどちらかを指揮している事にもすぐに勘付いていた。

「これはこれは、主席卒業のレスター・クールダラス大佐じゃないですか。おっと、申し遅れましたが、このたび正統トランスバール皇国軍准将になったギュンター・ハイネケンです」

圧倒的に優勢な戦力を持つギュンターは、嫌味ったらしくレスターに向けて挨拶と敬礼をしていた。

「なあ、あいつ誰だっけ？」

ところが、タクトの一言でギュンターの顔に朱が差し始める。

どうやら、タクトの発言はギュンターの機嫌を著しく悪くしてしまったらしい。

「ほら、同期の……」

「ああ、いたなぁ。そんなやつ」

勿論、タクトがギュンターの事を覚えていないわけがない。

何しろ、一日前には話題に上っていた人物であったからだ。

わざと記憶が薄い振りをしているのだ。

ただ、実際にも大した印象と記憶が無かったのも事実であったのだが。

「ふんっ！　落第ギリギリの血筋だけのバカ貴族らしいな。ところで……」

ギュンターは、今度は静かに様子を観察していたアキオへと視線を向ける。

エオニアと決定的に決裂したアキオを自分が討つ事を宣言し、その功績を後に高く印象付けようとしたからだ。

「お前の首を持って、我が栄光を取り戻す事としよう」

「まあ、頑張ってくれや。ところで、お前さんって元は少佐だったよな？」

「お前達が討ったシェリー閣下の後釜だよ。まあ、他の連中に比べても俺の力量は際立っているからな」

ギュンターは、ダークエンジェルを駆使しているヘル・ハウンズ隊に半ば嘲笑し哀れんでいた。

あんな傭兵崩れの大型戦闘機のパイロット達など、使い捨ての駒だと思っていたからだ。

准将と言う地位を貰った自分こそが、エオニア軍のナンバー2である。

そう考えていたのだ。

「そうか、三階級特進か。それは良かったな」

「レイトン、お前は何を言っているんだ？」

「今の内に、将官としての気分を味わっておけ。どうせ、後で反逆罪で軍籍剥奪になるんだからな」

「お前こそ、あとで吠え面かくなよ！」

アキオは、目の前で憤慨するギュンターを見て、彼が当面の自分の敵である事を確信するのであった。

そして、紋章機の方にも今までに数度対戦している自称ライバル達から通信が入っていた。

「やあ、マイハニー。どうやら、僕に討たれるために今まで生き延びてくれたらしいね」

「いやぁーーー！」

ダークエンジェルのリーダーであるカミュの元気な姿に、ミルフィーユは心の底から嫌そうな声をあげていた。

「ランファ・フランボワーズ！　お前は俺に討たれて、俺の心の中で生きて行くのだ！」

「そんな暑苦しそうな所で生きて行きたくないわよ！　あんたこそ、私に討たれて三時間で忘れられなさい！」

ランファは、相変わらず無駄に元気なギネスにかなり酷い事を言っていたが、今までの経緯を知っているタクト達は、全くギネスに同情していなかった。

「ミント・ブラマンシュか。今までは、ダークエンジェルが不完全

だったから遅れを取っていたけれど、今度こそお前を討つ！」

「頑張ってくださいましね。あのギュンターさんですか？　後ろから追い抜かれたら大変ですからね」

自称名家の出身で、過去の栄光を取り戻す事が目標のリセルヴァと、本当に没落した家の再興を願うギュンター。

リセルヴァは、ギュンターの事を、『エオニアを追い落として後、使えるのであれば伯爵位くらいは認めてやるよ』思って見下していた。

一方ギュンターの方も、元傭兵で戦闘機パイロットで使い捨ての駒程度にしか使えないリセルヴァを、『経歴詐称の、口だけ坊や』と侮っていたので、双方は出会って僅かで決定的に仲が悪くなっていた。

そこで、それが容易に想像できたミントは、リセルヴァを逆上させて早くに自滅させようと企んでいたのだ。

「（彼らに、時間をかけているわけにはいきません！）」

ミントは、アキオを始めとする仲間達のために鬼になる覚悟をする。

「ふふふっ！　ヴァニラ・アッシュ！　今度こそ僕に討たれて死ぬんだね！」

「うざい……」

他にも沢山やる事のあるヴァニラも、目の前に敵に容赦しない事を決める。

「新たに改良されたダークエンジェルのこの力……。とくと味わうが良い」

「おや？　今日はいやに饒舌だね。でも、戦場で慣れない事はしない方がいいよ。映画とかでも、そういう奴は確実に死ぬからね」

フォルテは、レッド・アイとのドッグファイトを始め、ミルフィーユ達は多分これで最後となるであろう、ヘル・ハウンズ隊との戦いを始めるのであった。

「というわけで、ちとせに大きな負担が行ってしまうけど……」

「大丈夫ですよ。タクトさん」

エオニア軍は、大きく二つに別れていた。

その中の三分の二という戦力を貰い、数だけは沢山あるアキオのゼロ艦隊と交戦を開始したギュンターと、ヘル・ハウンズ隊と戦いを始めたミルフィーユ達。

そして、残り三分の一の艦隊を持ってエルシオールに攻撃を開始するエオニアとそれを懸命に阻止するちとせのシャープシューター。

戦いの最初の段階は、タクト達が圧倒的に不利な状況に置かれていた。

「クロノ・ブレイク・キャノンの準備は？」

「やはり、チャージに時間がかかります」

アルモは、タクトの質問にすぐに答える。

「どうせ、暫く撃てないんだ。今の内に調整とチャージを完璧に仕上げてくれ」

「了解です。クレーター班長に伝えます」

アルモは、タクトの命令をエルシオールの先頭部で、クロノ・ブレイク・キャノンの調整を行っているクレータ班長に伝える。

「それで、レイトンの方は？」

「コンゴウは、無傷です。回避が巧みですね」

「あいつは、優秀な軍人だからな。人を見る目があるんだよ」

レスターは、アキオの部下であるマッコリ大佐の評判は良く聞いていた。

操艦のプロで、木村大佐と共に通商護衛艦隊の双璧と呼ばれていたからだ。

「でも、クールダラス副司令もお上手ですね」

今回の決戦では、レスターが急遽エルシオールの舵を取っていた。

日頃は、副司令の任務が忙しくてそんな事はしないのだが、実はレスターは士官学校時代に操艦の成績も非常に優秀だったので、タクトに命令されて今回だけ舵を取っていたのだ。

「それよりも、大丈夫なんですか？　アキオさんは？」

ゼロ艦隊は、艦隊の真ん中にコンゴウを置いてギュンター指揮の艦隊に全速力で特攻をかけていた。

勿論、ギュンターもバケツの水をひっくり返した様な激しい砲撃を繰り返していたので、次々とゼロ艦隊の船は沈んで行き、それを見たココが不安になってしまったのだ。

「大丈夫さ。今の三分の一が到達すれば、レイトンの勝ちなんだから」

タクトは、アキオがギュンターに負けるなど微塵も思っていなかった。

「副司令、損害率はどうです？」

「６．７％だね。まだまだ大丈夫」

コンゴウのブリッジでは、マッコリ大佐が懸命にコンゴウの操艦を行い、その後ろではアキオが四名の若い士官を使って無人艦隊の操作を行っていた。

「ベークル大尉、敵の砲撃周期は？」

「以前、変化無しです！　戦艦の主砲は、１８．２５秒で、その他

の兵装も変化無し。巡洋艦、駆逐艦、突撃艦にも変化無し。戦闘母艦の対艦ミサイルの発射周期に変化あり！　マイナスコンマ０．５０秒！」

「回避プログラムのデータリンク番号を一つずらせ。それと、デニュシュ中尉！　左１２番集団の位置の修正だ！　Ｘにマイナス５０、Ｙにプラス１５」

「了解です！」

「サフラン大尉！　敵旗艦の特定はできたか？」

「中央右側の戦闘母艦の確率が７５％です」

「多分、それだな。バジル中尉、右側の艦の位置を全てＸにマイナス７５だ」

「了解です！」

操舵をしているマッコリ大佐の後ろでは、アキオを入れて五人の軍人が、軍本部会議室の巨大なテーブル状のマップ位の大きさのディスプレイを見ながら、懸命に艦隊の操作を行っていた。

アキオは、あまりに数が多いので一隻一隻を操作する事を諦め、艦隊を三十個ほどの集団に分割して番号を振り、その集団毎に操作を行う事としていた。

敵の艦の種類とその各武装の性能を把握し、コンピューター制御ゆえに周期がある程度一定している事を利用して、大まかな回避プログラムを数十個ランダムに使用して、被害の連鎖を防ぐようにしている。

他にも、沈んでいく艦に無事な艦が巻き込まれない様にするなど、

被害をゼロにするのではなくギュンターの艦隊を全滅させられる程度の数を残すように動くという方針でアキオは目まぐるしく部下達に指示を飛ばしていた。

「X758、Y267！　敵突撃艦、来ます！」

「左8の戦艦を迎撃に回せ！　それと横腹に駆逐艦を準備！」

左側からコンゴウを目指してやって来た突撃艦は、目の前に出て来た戦艦にその標的を変更。

光子魚雷で正面の戦艦を撃沈をする際に速度を落としていたせいで、横から回り込んで来た駆逐艦に体当たりをされて撃沈する。

「戦艦が囮ですか」

「高速でぶつかるから、駆逐艦で十分だ。それよりも、戦艦は装甲が厚くて沈むのが遅いから囮に使える。どんな船でも、砲撃や攻撃の際には全速力など不可能だからな。その分、敵の足が遅くなって特攻を許す事となる」

確かに、ギュンターの艦隊は、微速後退を続けながらの砲撃に終始していた。

なぜなら、速度を上げるとその分砲撃の精度が低下してしまうからで、その結果アキオの艦隊は犠牲を損害を徐々に増やしてはいたが、次第に距離を詰めている状態であった。

「エオニアの艦隊と合流しませんね」

「それをしたら、エオニアに失望される事くらい理解しているだろう？」

マッコリ大佐と話をしつつも、アキオは次第にギュンターの艦隊をその掌の中に収めつつあった。

「そんな！　また勝てないとは！」

「今度こそ、覚悟してください！」

そして、ミルフィーユ達とカミュ達の戦いも佳境を迎えていた。

この決戦に向けてリミッターを完全に除去した紋章機と、それなりの改良を加えられただけダークエンジェルでは、元々勝負にならなかったのだ。

ミルフィーユのラッキースターは、徐々にカミュのダークエンジェルに損傷を与えて行く。

「ちくしょう！　ランファ・フランボワーズ！」

「ええぃ！　エオニアめ！　ちゃんと、改良をしていなかったな！」

「性能差が、大き過ぎるよ！」

「まずいな」

他のヘル・ハウンズ隊のメンバーも、それぞれに相手に押されてダークエンジェルへの損傷を増やしている状態であった。

「一旦、退くぞ！」

「「「「了解！」」」」

遂に、カミュは決断した。

これ以上ダークエンジェルの損傷度が増して、撤退不可能になる前に先に後方に退避する事にしたのだ。

腕の差はともかく、機体の性能差だけは自分達ではどうにもならない。

そこの所を黒き月にいるノアに直談判して、新しい戦力を貰う方に考えを切り替えたのだ。

「というわけだ。みんな、引くぞ」

「そうだね。エオニアを、置いて行く事になるが……」

リセルヴァは、エルシオールとエオニアが相打ちにでもなってくれた方が都合が良かったので、カミュの意見に一番に賛同をする。

他にも、特に反対というメンバーはいなかったので、ヘル・ハンズ隊は、ミルフィーユ達との戦闘を放棄して後方への撤退を開始した。

「あっ！　逃げた！」

「卑怯者！」

ミルフィーユとランファは相手を追おうとするが、それを止めたのはリーダーであるフォルテであった。

「待つんだ。ちとせが一人で苦戦しているんだ。そっちの援護の方が先だよ」

たった一人で、エルシオールにエオニア艦隊を近付けさせない様に奮戦しているちとせであったが、そろそろ限界の様であった。

クロノ・ブレイク・キャノンの最終調整とチャージをしている関係で、下手に被弾をさせるわけにいかなかったから、余計にちとせに負担が掛かっていたからだ。

「というわけだ。あんな連中は放置して、ちとせを助けに行くよ」

「「「「了解！」」」」

最終決戦の第一幕は、ミルフィーユ達がヘル・ハウンズ隊を退けて、タクト達の勝ちとなった。

「ふん。やはり、使えない連中だな」

エルシオールにあと一息という所で、先に撤退してしまったヘル・ハウンズ隊への、エオニアの評価はその一言だけであった。

先に、エオニアがトランスバール皇国へのクーデターを意図した際に、その腕の良さから鳴り物入りで参加を歓迎した彼らであったが、実際には、エルシオールと紋章機の当て馬程度にしか役に立っていなかった。

腕の良い戦闘機乗りではあったのだが、自軍には多少性能は落ちても無人操縦で運用可能な戦闘機部隊はあった。

いや、むしろ無人戦闘機部隊を運用している時に彼らを一緒に使うと、かえって部隊の戦闘効率が落ちてしまうのだ。
腕は良くても、元傭兵でスタンドプレーが目立つ彼らと、大部隊で運用する事が前提の無人戦闘機部隊の戦術コンピューターとの相性が最悪であったからだ。

「お兄様、部品がこっちに逃げてくるわ」

黒き月にいるノアが、レーダーでぶざまに敗走して来るヘル・ハウンズ隊を捉えていた。

「それで、彼らは何と？」

「負けたのは、ノアが作ったダークエンジェルの性能が悪いからなんだって」

「なら、彼らの望みを適えてあげればいいじゃないか。高性能のダークエンジェルを与えてやればいい」

「でもね。それをすると、お兄様があまり好きではない本当の部品になっちゃうの」

「別に構わないさ。シェリーやレイトンではあるまいし、あの役立たず達は、部品にした方が役に立つ」

「わかったわ」

ノアが、笑みを浮かべたまま通信を切ると、エオニアは再びその視線を前方へと向けていた。
どうやら、ノアが何かイタズラを考えたらしいが、被害を受ける

のはあの役立たずの五人組だったので、別に心も痛まなかったからだ。
個人戦闘力ばかり高くて、戦術能力も戦略能力も無く、組織運用能力も政治力も無い。
かと言って、忠誠心が高いわけでも無いのはリセルヴァを見れば明らかで、明らかに戦後には不要な人材であった。

「余の新しい皇国には不要な人材だな。最後に役に立ったら、名誉くらいはくれてやるとしよう」

それ以後、エオニアはカミュ達の事を記憶の外に追いやり、再びエルシオールとの戦闘に没頭する。
アキオ・レイトンだけでも頭が痛いのに、タクト・マイヤーズという希代の用兵家まで敵に回しているのだ。
これ以上の余所見は禁物と考えるエオニアであった。

「おい！　聞こえるか！」

そしてちょうど同じ頃、戦っていたミルフィーユ達から逃げ出したばかりでなく、後方にいるエオニア艦隊まで置き去りにして逃走を続けているカミュ達は、黒き月にいるノアに対して居丈高に通信を入れていた。

「あら、逃げてきたの？」

「性能差があり過ぎるからね。何とかして欲しいものだよ」

カミュに続き、リセルヴァも同じ様な態度でノアに通信を入れる。
外見が十歳前後の少女であったノアをは、ヘル・ハウンズ隊の面々は以前から舐めている節があった。
いくらあの黒き月の管理者とはいえ、どう見ても子供にしか見えないので当然と言えば当然であったし、彼らは実はダークエンジェルを受けたった際などの数回しか彼女と直接顔を合わせておらず、エオニアとの微妙な関係を良く掴んでいなかったからであった。
そして、彼らはその代償を自らの身で払う事となる。

「安心して。すぐに最強にしてあげるから、力を一杯あげるわ。でも……。あなた達本人には、永遠に確認できないけどね」

そこでノアの話は終了し、そこからカミュ達は不可思議な体験をする事となる。
飛行中のダークエンジェルの、コックピット内のモニター類の全てにノアの顔が映り、座席の後ろから数本のコード類がまるで蛇の様に飛び出し、そのままカミュ達の後頭部、脳髄の部分に突き刺さったからだ。

「お前！　急に何を！　……。ククククククっ！　力だ！　力が湧き出て来た！」

損傷中のダークエンジェルを、黒き月まで戻さずにパワーアップさせてから戦場に復帰させる。
この一見すると不可能に思える事を実施するために、ノアは以前に惑星ロームで紋章機が見せた急激なパワーアップを真似する事にした。
だた、ミルフィーユ達が《諦めない気持ち》を糧に紋章機のリミッターを外したのとは違い、ノアはカミュ達の《飽くなき力の探求

≫の感情を利用する事にした。
そして、それだけでは足りないと感じたノアは、カミュ達をダークエンジェルの生体コンピューターにする事を思い付いていた。

「うぉーーー！　力だぁーーー！」

「ふふふっ、今度こそ」

「力だ。力が湧き出て来た」

「これこそが、究極のパワーアップなのか」

カミュと同じく、ヘル・ハウンズ隊の他のメンバーの後頭部にも数本のコードが突き刺さり、彼らは今までに経験した事の無いパワーが湧き上がって来る事を確認する。
だが、その代償は大きかった。
彼らは、そのままダークエンジェルの生体コンピューターとして取り込まれてしまったのだ。
ダークエンジェルは、次第にその外見すら変化させていく。
人間だから必要であったキャノピーや、他の部分が装甲に覆われ、エンジンノズルから出る推進剤の量が増えてスピードもアップして、今までで最高の性能アップを果たしていた。

「しかも、死を恐れない最強の戦士だ。いや、伝説のバーサーカーなのかもしれないな」

エルシオールと紋章機との砲撃戦を行っていたエオニアは、ようやくに戻って来たダークエンジェルを一瞥してから、その視線を左側に向けていた。
紋章機はダークエンジェルとの戦闘に、エルシオールは単艦では

防御力に難があるので少し後方にある。
　となれば、エオニアの相手はギュンターの艦隊と交戦をしているアキオの艦隊という事になっていた。

「やはり、ギュンターでは荷が重かったか。無様な」

　エオニアは、次第に指揮下の艦隊の数を減らしていくギュンターに悪態をつくのであった。

「なぜだ！　なぜ、こんなオンボロ艦隊で！」

　シェリーが座乗していた高速戦艦と同型艦を旗艦に、アキオの艦隊と戦っていたギュンターの艦隊は、今全滅の危機を迎えていた。

「どうしてだ！　あんなスクラップ寸前のボロ船で！」

　最初は、景気良く無人艦艇を撃沈していたギュンターであったが、沈めても沈めても全滅しない、数だけはある敵無人艦隊に次第に恐怖感を抱くようになり、遂には自分の持つ戦力が僅かである事を知って半ば恐慌状態に陥っていた。

「残存数は、八隻のみだと！　クソっ！　どうしてだ！　俺は、士官学校三位卒業の天才なんだぞ！」

　次第に自分の指揮する軍艦が減っていく恐怖と戦いながら、ギュ

ンターは正面スクリーンに映り始めたコンゴウを真正面から見つめていた。

「ギュンター。お前、運が無かったな」

ギュンターの叫びがコンゴウの通信機に入って来たわけではなかったが、アキオはそれに答えるように、一人呟くようにして語っていた。

「元々、お前に勝利は無かったのさ。例え、この艦隊をレスターやタクトが指揮していてもな」

アキオは、言葉を続けながら残存するギュンターの艦隊に駆逐艦を突撃させ、また一隻を沈める事に成功する。

「俺の艦隊は、潰して使う事が前提で、全滅しても腹が痛まない艦隊。一方、お前は一隻でも多く残してエオニアの援護の回る必要があった。俺の勝利のハードルは低くて、お前の勝利のハードルは高い。いや、高いと思って動いて自滅したんだな」

「では、副司令ならどう動きました？」

コンゴウの操舵を行っているマッコリ大佐が、大きく舵を取りながらアキオに質問をする。

「艦隊を紡錘型にしてから、コンゴウに突進させる。犠牲は出るが、コンゴウさえ討てばあとは本当にスクラップだからな」

また一隻の巡洋艦が爆発したのを確認しながら、アキオはマッコリ大佐の質問に答えていた。

「でも、それだと半分以上の艦が沈むと思いますけど」

「沈むが、目的は達成する。それに、半分以下とはいえ戦力は残っているんだ。エオニアへの援護は可能だし、元々全部無人艦なんだから、後方からの補給も可能だ。ギュンターは、計算を誤ったんだよ」

アキオが目配せをすると、もう既に三隻にまで減らされたギュンター艦隊に、複数の駆逐艦や巡洋艦を突入させる。

途中で二隻は沈められてしまったが、最初にその敵の数の多さから無茶をして砲撃をしていたツケが今になって出ていて、これ以上の戦果は望めない状況となっていた。

「ギュンター、俺が命をチップを張るのはお前じゃない。エオニアが待っている」

アキオは、ムーンエンジェル隊への対応を、既に人間は無くなっていたカミュ達に任せて自分達へと向かってくるエオニアに対し、静かな闘志を燃やすのであった

「これより、目標を排除する」

「これは……」

ヴァニラは、先ほど自分達が撃退したダークエンジェルが多少の外見と性能の変化だけでなく、何か根本的な物が変わってしまった事を悟ってしまう。

「タクトさん」

「どうしたんだ？　ヴァニラ」

「もうあそこからは、本来の人間の魂の波動が感じられません」

「どういう事です？」

タクトは、詳細な説明をクロノ・ブレイク・キャノンの調整をしているクレーターに求める。

「あのダークエンジェルには、人間の生命反応はありますが、ただそれだけという事ですよ。考えても見てください。修理もしないダークエンジェルが変化してパワーアップをして戻って来た。何か普通では考えられない事をしている」

更に、普段は医務室で待機しているケーラーからも通信が入る。

「多分、生体コンピューターにされてしまったのね。人間の脳は、

それでけで優秀なコンピューターなのよ。それを、ダークエンジェルに取り込み、自己保存の本能のみで戦わせる。過去の経験もデータとして使えるから、最高の性能を発揮すると思うわ」

冷静に説明をするケーラであったが、その心の中は人の命を冒涜するエオニアに対しての怒りで満ちているようであった。

「先生、ちなみに元には？」

「無理よ」

ケーラは、タクトの質問にキッパリと答える。

「みんな、あんな連中でも、一応は知り合いだったからな。辛いのはわかる。だが、ここで討ってやるのも情けと知れ！」

「「「「「了解！」」」」」

奇しくも、その際にタクトが言ったセルフは、先日にシェリーと戦った際に、アキオがミルフィーユに言ったセルフと全く同じ物であった。

「目標ハッケン、コレヨリ排除スル……」

既に完全にダークエンジェルに体を乗っ取られてしまったカミュ達は、まるで現行のＡＴＭの機械音声と同じ様な喋り方をしながらミルフィーユ達との戦闘を開始していた。

「ええいっ！」

ところが、ミルフィーユ達は彼らに思わぬ苦戦をする事となる。いくら武装を撃ち込んでも、彼らは最低限の機動でそれをかわして逆撃をかけて来る事が多かったからだ。

「まずいな……」

さしあたっての敵がいなくなったエルシオールの操艦が一息ついていたレスターは、ミルフィーユ達を苦境に追いやるダークエンジェルに危機感を抱いていた。

「なあ、レスター」

「そうだ。もう人間じゃないんだ。死を恐れない怪我を恐れない。だから、人間のパイロットではあり得ないギリギリの所で攻撃をかわして反撃に出る。そういう事だ」

それに、ダークエンジェルの事だけでは無かった。

アキオの指揮するゼロ艦隊は、その戦力をほとんど使い潰しながらもギュンターの艦隊を全滅寸前にまで追い詰めていたが、それに気が付いたエオニアは、自分の艦隊をアキオに対して差し向けていたのだ。

「早くダークエンジェルを何とかしないと、レイトンが死ぬぞ」

レスターだけでなく、タクトやミルフィーユ達も次第に焦燥感を募らせていたが、今の時点でアキオに回せる戦力は一切存在しなかった。

「そんな……。俺は、天才なんだぞ！　ハイネケン伯爵家当主なんだぞ！」

そして、もう一方の戦場という舞台では、一人の俳優の役割が終了しようとしていた。

既に一隻の駆逐艦に突入されて、総員退艦命令のアナウンスが鳴り響くギュンターの戦闘母艦の正面に、敵であるコンゴウの姿が大きく映し出されていたからだ。

「俺が、レイトン如きに！　市民のレスター如きに！　血筋だけのタクト如きに！」

既に我を忘れた状態であるギュンターは、自分だけしか信じていない、まるで根拠の無い士官学校の同期生批判を次々に始める。

士官学校時代から今まで、睡眠時間や休暇すら削って懸命に努力した自分を、いつもあざ笑うかのうように成績で抜いてたアキオ。

特に勉強をしているように見えなかったのに、なぜか試験では冷静に試験問題を予想して高得点を稼いでいたのだ。

レスターは、『試験範囲を、全て暗記しているのでは？』と言われるほどであったし、貴族で落ちこぼれだったタクトは、『レスタ

ーって凄いよね。俺なんて、赤点ギリギリだぜ』が常に口癖だった。
悔しかった。
そう、悔しかったのだ。
自分が少佐止まりなのに、こんな連中が大佐やら准将になっている。
こんな不公平な世界は、是正されるべきであった。
タクト・マイヤーズなど、佐官にすらなる資格は無いのだ。
記憶力だけのレスターなど、少佐がせいぜいの男だ。
そして、アキオ・レイトン。
こいつこそ、皇国に仇成す毒虫であった。
さも、能力だけで出世しているように見せかけて、実は大貴族の庶子で、今ではシヴァ皇子の一番のお気に入りと言われるまでに出世している。
こんな三文ドラマのような茶番を、誰が認めると言うのか？
少なくとも、自分だけは絶対に認められなかった。

「ふざけるな！　アキオ・レイトン！　お前に生きている資格など無いのだ！　お前みたいな男！　お前など！」

ギュンターは聞こえていないにも関わらず、目前のコンゴウにいるアキオに向かって、支離滅裂な言葉を繰り返していた。
彼は、もう精神が完全に壊れてしまっていたのだ。
だが、ギュンターが何かを言えたのはそこまでであった。
ゼロ艦隊内で唯一フル武装であったコンゴウが主砲を斉射し、同じく唯一残ったギュンター戦闘母艦に止めを刺したからだ。

「ちくしょう！　ちくしょう！　ちくしょう！」

最後の捨て台詞を吐きながら、ギュンターはコンゴウのビームで体の細胞一つ残さずに焼き尽くされてしまう。

「死んだか、ギュンター」

「哀れな方ですな」

誘爆を繰り返し、次第に火球へと変化していくギュンターの旗艦を見ながら、アキオとマッコリ大佐は悲しそうな顔をしていた。

だが、いつまでも悲しんでいるわけにはいかなかった。

なぜなら、もうすぐエオニアの本艦隊が、有効射程圏内に入るからであった。

「残存艦数は？」

「１０．７％ですけど、コンゴウ以外に弾薬は積んでいませんし、損傷艦も多いです。突撃も、するだけ無駄ですね。辿り着くまでに全滅してしまいますから」

数はギュンターの艦隊よりも少なかったが、こちらは艦数が十分の一にまで減っていたので、苦戦は必至であった。

というよりも、勝ち目など全く無く、あとはどれだけ保たせるのかが問題となっていたのだ。

「エルシオールが、クロノ・ブレイク・キャノンの発射準備をしている事を勘付かせるな。艦隊を密集隊形に再編成する。艦前部の防御フィールドを強化して、各艦の回避も個艦別に、それも手動に切り替える。一秒でも長く保たせれば、それだけタクト達が有利になる。ここが正念場だ。諸君らの更なる奮戦に期待する」

アキオの命令により、コンゴウの乗組員達の気持ちは更に引き締まる。

そして数十秒後、エオニア艦隊は陣形を整え、もっとも効率が良くて激しい砲撃をアキオの艦隊にぶつけて来る。

「最初の斉射で、七隻の艦が撃沈されました！」

「駄目です！　回避の間に合わない艦が続出中です！」

「やりますね。エオニア元皇太子閣下は」

ギュンターとは違う巧みな艦隊指揮に、マッコリ大佐は心の底から賞賛の声をあげていた。

「希代の名将だからな」

「じゃあ、なぜ誘いに乗らなかったんです？」

「名将イコール名君とは限らないからだ」

アキオの回答に、マッコリ大佐や他の士官達は笑っていたが、引き続き行われているエオニア艦隊の斉射で、次々に艦は沈んで行く。

「半数が、行動不能か撃沈です！」

「もう少し耐えろ。第一段階はそこで終わる」

そして数分後、アキオの予想通りにエオニア艦隊の激しい斉射は終了し、その砲撃は絶える事は無かったが、全体の量はかなり減少していた。

「第一段階ですか」

「人を試すような事をする。本当に、意地の悪い人だ」

アキオが一人ぼやいていると、ブリッジのメインスクリーンにエオニアの姿が映し出される。

「やはり、この程度の事では死なないか」

最初の斉射は、半ばエオニアの賭けであったのだ。

あの並の指揮官なら既に戦死している斉射で、もしアキオが早くに討てたら、ダークエンジェルに苦戦している紋章機を出し抜いてエルシオールが討てる。

そう考えたのだが、やはりそこまで自分が見込んだ男は甘く無かったらしい。

だが、エオニアはギュンターとは違って、斉射は繰り返しても余力は残していて、今の多少緩慢になった射撃でも十分にアキオを討てる算段を付けていた。

アキオの戦死は、時間の問題であったのだ。

「これは、エオニア閣下。私の死に顔に興味でもありますか？」

「最後の情けだ。降れ」

絶対に殺すつもりだったのに、なぜかアキオ本人の顔を見た瞬間に、無意識の内にこのセリフが出てしまうエオニアであった。

「駄目ですよ。上に立つ者がブレてしまっては。シェリー殿を討ったのは私ですし、そんな者を重用してはいけません」

エオニアは、敵将であるアキオに諭される形となったが、特に表

情を変えず、そのままアキオの目を見据えていた。

「詮無い事を言ったな」

「それに、私としては負けるつもりなど毛頭無いのですよ」

それは、アキオの精一杯の強がりであった。
この状況で勝ちを拾える者など神しかいないと、コンゴウにいる全員が思っていたからだ。

「そうか、なら名将に相応しい死を与えてやろう。もう少し、お前と早く会えていたらな」

その言葉を最後にエオニアからの通信は切れ、更にエオニア艦隊の砲撃は続いて行く。
そして遂に、艦隊は全滅寸前にまで追い詰められていた。

「残存数は、十一隻です！」

「総員、退艦用意！」

もはや限界である事は誰にでもわかっていたので、異論を唱える者は一人も存在しなかった。
だが、次の言葉に全員が絶句してしまう。

「俺は残る」

「副司令！」

マッコリ大佐は、いつもでは考えられないほどの大声をあげる。

「誰かが残らないと、乗員達の脱出が難しい。それと、残り十一隻にでも出来る事はある。一秒でも長くエオニアに喰い付いて、時間を稼ぐ事が肝要だ。となると、誰かが残らないと話にならない」

「なら、自分が！」

一番の年長者であるマッコリ大佐は、自分が残る事を提案する。

「俺とマッコリ大佐で残るか」

「……。わかりました」

マッコリ大佐は、出来ればアキオにも退艦して欲しかったのだが、それは絶対に言ってはいけないと思っていた。

いくら歳が二十歳も下の若者でも、アキオは自分の上官なのだ。

その彼に、部下より先に艦を降りてくれなどとは口が裂けても言えなかった。

「最後に、中年のおっさんと一緒とはね。美女艦長とかが良かったかな」

「言ってくれますね。自分だって、美女司令とかの方が……」

マッコリ大佐は、最後まで言葉を話す事が出来なかった。

アキオが、フレンドリーな態度でマッコリ大佐の肩に手を置くと同時に、鳩尾に鋭いパンチを入れたからであった。

「シャンパーニュ大尉」

アキオは意識を失ったマッコリ大佐の身柄を副長に委ねると、同時に命令を下す。

「コンゴウの真後ろに、こういう時の事を考えて駆逐艦（ピレネー）が置いてあるんだよな？」

「はい」

「なら、それで脱出しろ。俺が出来る限り援護するから」

「わかりました。どうせ、残っても死で、逃げるのに失敗しても死ですよね？」

「俺が、確実に逃がす。何しろ、これが最後の仕事だからな」

「しかし、どうして……」

どうしてとは、マッコリ大佐の事であった。

「本人の意思など関係ない。粗大ゴミ亭主でも、娘に無視される父親でも、いないよりいた方が良いからさ。俺には、家族なんていないからな……」

その後、すぐに脱出の準備は整えられ、コンゴウを出発したシャトル無事に後方の駆逐艦（ピレネー）に到着。

更に、アキオの援護のもと、無事にエオニア艦隊の有効射程距離圏外への脱出に成功する。

そして、コンゴウ以下八隻にまで減った艦隊は、ただひたすらエオニア艦隊からの砲撃をかわし、耐えていた。

「ほう、部下を逃がして一人で奮戦するのか。そのオンボロ戦艦で」

「コンゴウは、ミルフィーユと並ぶ俺のラッキーレディーなんですよ。まあ、ちょっと年増ですけどね」

「艦数が減って、コントロールが容易くなったら被弾数が減ったか。さすがだな、レイトン」

「エオニア閣下、私の生き死になど、戦況に関係無いのですよ。あなたは、負ける。根拠はありません。でも、あなたは負けるのです」

通信など一切繋がっていないのに、二人の会話はまるでテレパシーのように繋がる。

そしてこの絶望的な状況下で、アキオはエオニアに対し最後の抵抗を試みていたが、この混乱した戦況下でアキオは本当に戦死してしまうのか、それとも奇跡の女神に救われるのかは、まだ誰にも予想できなかった。

最後の戦いは、中盤へと移行していた。

第十七話

「くっ！　何で落ちないの！」

「敵ノ精神状態ファンテイ。性能ガ低下」

「あのギネスがこんなに冷静？　ありえないわ！」

「ランファ・フランボワーズヲ討ツ」

「私の挑発が効かないなんて！」

「ミント・ブラマンシュヲ殺ス」

「ハーベスターハ、一番攻撃力ガ低イガナノマシン散布機能ガアリ危険。最初ニ潰ス」

「駄目です、なかなか攻撃が当たりません」

「フォルテ・シュトーレン、実戦経験ガ多ク、指揮能力アリ。危険ダ」

「はん！　生体コンピューターになったら、かえって口数が増えたね！」

ミルフィーユ達が、今までとは様子が違うダークエンジェルとの戦いに苦戦していると、クロノ・ブレイク・キャノンの発射準備をしているエルシオールに、衝撃的な報告が入って来る。

「コンゴウが、総員退艦？」

「はい。艦隊の残数は既に六隻です。致し方無いかと」

「いや、それはこっちも想定済みだ。それよりも……」

タクトが、アキオ達の安否を調べようとしたその時、無事に脱出を果たした駆逐艦（ピレネー）から通信が入って来る。

「コンゴウの副長であった、シャンパーニュ大尉です」

「レイトンは、どうしたんだ？」

「それが……」

シャンパーニュ大尉は、先ほど起こった出来事を全て簡潔にタクトに話す。

「レイトン、お前は……」

アキオが、コンゴウに残って最後の抵抗を試みている。

この事実は、エルシオールにいるタクト達のみならず、ダークエ

ンジェルと戦闘中のミルフィーユ達にも衝撃を与えた。

「あのバカ！　あれほど言ったのに！」

フォルテは、その顔に苦悩の表情を浮かべながら、アキオに対して悪態をついていた。

「アキオさん……。タクトさん！　アキオさんを助けに行かないと！」

ミルフィーユは、タクトにアキオを助ける事を提案するが、その意見はレスターによって否定されてしまう。

現時点で味方の増援は一隻も登場せず、既に死に体のゼロ艦隊を助けに行くとすれば、唯一手の空いているシャープシューターという事になるのであろうが、今から助けに行っても既にゼロ艦隊は全滅していて、次はエルシオールがエオニア艦隊の標的となる可能の方が高く、その護衛戦力であるシャープシューターを手放すわけにはいかなかったのだ。

「駄目だ。そんな事をしたらエルシオールが危険になる。そして、そんな事態をレイトンが喜ぶはずも無い……」

「クールダラス副司令！　あなたは、そんなにアキオさんの事が嫌いなのですか！」

今までは常に冷静であったミントが、リセルヴァとの戦闘中にも関わらず珍しく怒気を孕んだ声で通信を入れて来る。

最近はあまりそういう事は無くなっていたが、最初の頃のアキオとレスターの仲の悪さはとにかく本物で、ミントはいまだにレスターがアキオの事を嫌っていて、それで援軍を送らないものだと思っ

ていたのだ。

「ミント、レスターにそんな気は無いよ」

「ですが！」

ミントは、タクトの話すら信じられずに一人怒声をあげていた。

ミントからすれば、今一秒が過ぎる度にアキオの命が徐々に奪われて行く感覚に襲われていて、その心の闇がダークエンジェルとの戦闘を逆に長引かせ、悪循環に陥っていた。

「ミント、止めて」

「ミルフィーさん……」

ミントに声をかけたのは、同じくカミュとの戦闘で精一杯のはずのミルフィーユであった。

「ミントがそんな事を言ったら、アキオさんが悲しむから。アキオさんは、たった一ヶ月ほどしかいなかったエルシオールが大好きだったんだよ。だから、あんなに一生懸命頑張っているんだよ」

「ミルフィーさん……」

「お願いだから、アキオさんを悲しませないで」

ミルフィーユとて、本当はアキオを助けに行きたかったのだが、今の状態で助けに行ってもアキオがそれを受け入れない事を重々承知していた。

「それに、助けには行けるらしいな」

「本当ですか？」

「ああ、さすがは歴戦の隊長殿だ。決着が着く」

唐突に声を入れて来たのはレスターであった。

ミントやミルフィーユが、実戦経験の少なさから大切な人の救助に行けない事に焦っている間に、敢えて感覚を研ぎ澄ませて友の事を忘れ、目の前の相手に集中していた効果が現れていたのだ。

フォルテのハッピートリガーと対峙しているレッド・アイのダークエンジェルは既に慢心創痍の状態であった。

ひたすらに精神を集中させて、焦らずに徐々にダメージを蓄積させていった成果であった。

「悪いね、レッド・アイ。友達が、待っているんだ」

「トモダチ……」

「ああ。あんたも、戦場が長いからわかっているだろう？　短い期間だったけど、お互いに背中を任せ合った仲間。かけがえのない親友。今、手を伸ばせばまだ救えるかもしれない。だから、悪いけど死んでくれ」

「オ前ヲ、タオス」

ハッピートリガーとダークエンジェルは、お互いに最後の一発となるであろう、レールガンを発射する。

既に慢心創痍であったダークエンジェルの攻撃は、ハッピートリガーを僅かにかすって外れて行ったが、逆にハッピートリガーの一

撃は、ダークエンジェルのクロノ・クロス・エンジンの中枢部を直撃し、ダークエンジェルは徐々にクロノ・クロス・エンジンの爆発に巻き込まれて行く。

「トモ……、トモカ……」

既に生体コンピューターにされてしまった彼に感情が残っていたのかは不明であったが、最後のその一言だけを言い残して、この世から完全に消滅する。

「勝ったか……。おい！　ちとせ！」

「はい！」

勝利の余韻に浸る暇も無く、フォルテは今までエルシオールの護衛に徹していたちとせに通信を入れる。

「ちとせのシャープシューターの方が足が速い！　私がエルシオールの護衛に入るから任せる！　アキオに、一生返せない借りを作っておくんだね！」

「はい！」

ミントは、この時ほど運命の皮肉というものを感じた事は無かった。

一緒にアキオを取り合っていたちとせに、アキオ救出の出番が回ってくる。

アキオの救援が間に合えば何よりも嬉しいのだが、それを自分でする事が出来ない。

何とも、もどかしい気持ちになっていた。

だが、更なる運命の流転がフォルテ達を待ちかまえていた。

「シャープシューターハ、接近センニヨワイ！」

ちとせのシャープシューターがアキオの救援に向かおうと、ランファとギネスが戦っている宙域を通りかかと、今まではランファのみに拘っていたギネスが、いきなりその標的をちとせへと変更したのだ。

どうやら、生体コンピューターへと姿を変えたギネスが、冷静に戦術的な判断をして、同じ格闘戦が得意なランファよりも、遠距離戦闘に特化したちとせに標的を変更したらしい。

お互いに接近戦闘重視の二人は、以前からなかなか決着が着かない事が多く、その情報をギネスの脳から得たダークエンジェルの戦術コンピューターが、比較的討ち易いちとせに目標を変更しただけの事であった。

「えっ！　せっかくのチャンスが！」

思わず本音が出たちとせであったが、フォルテはあくまでも冷静であり、すぐに次の判断をしていた。

「ランファ、あんたのカンフーファターが一番足が速い。アキオの首に縄を付けても引っ張ってきな」

「ランファさん、私はそう言われると、本当に首に縄を付けて引っ張って来ますよ」

「いいさ、生きてさえいれば」

「一生、私達の生活用品を補給させてやるわ！」

ランファは、カンフーファイターの速度を最高速度にまで上げてから、アキオの居るコンゴウへと移動を開始するのであった。

「Aブロックの第2、4、6～12の隔壁閉鎖。Bブロックの第1～8、12の隔壁閉鎖。Cブロックの5とDブロックの3と7を除く隔壁を全て閉鎖。こりゃあ、もう駄目だな……」

コンゴウのブリッジで、艦内状況を示すコンピューターを使ってダメージコントロールを行っているアキオは、もうこの船が大してもたない事を悟っていた。

ダメージコントロール用のスクリーンに艦の状態が表示されているのだが、全てのブロックが赤く染まり、危険・乗員退避の警報が鳴り続け、いつ沈んでもおかしくない状態にあったからだ。

「やはり、無謀な策だったな。だが、時間は稼げた」

標的が少ないのと、後のムーンエンジェル隊とエルシオールとの決戦に備えて砲撃を減らしているエオニア艦隊を見ながら、アキオは自分が賭けに勝った事を知る。

既に、ダークエンジェルの内の一機がフォルテに討たれ、続けてもう二人が討たれようとしていたからだ。

「そんなに家の名が欲しければ、墓標に刻んで差し上げますわ！」

「ソンナ……」

互角の戦いという緊迫状態が解かれ、かつてリセルヴァであった生体コンピューターの操作するダークエンジェルに、ミントの三方向からのフライヤーの遠隔砲撃が突き刺さり、そのまま大爆発を起こす。

「すいません、あなたを救う手立てがありません。せめて、安らかな死を……」

「へへへッ、ヴァニラ・アュシュ！」

続けて、ベルモットのダークエンジェルもヴァニラによって討たれ、最初は互角と思われたムーンエンジェル隊とヘル・ハウンズ隊の戦いは、次第にムーンエンジェル隊の有利となって行く。

「五対二カ……」

「私達には、まだやらないといけない事があるんです！　せめて安らかな眠りを！」

完全に不利となったヘル・ハウンズ隊であったが、今までのようにカミュは撤退の命令は出さなかった。

ダークエンジェルの戦術プログラムには、ムーンエンジェル隊とエルシオールの撃破の二つが絶対条件として書き込まれていて、もしそれが不可能なら、可能な限り時間を稼いでその場を死守せよという命令が出ていたからだ。

今までは、戦況に応じて逃げる事も可能であった、プロの傭兵集団であるヘル・ハウンズ隊は、完全な使い捨ての駒として、その命

を終えようとしていた。

「もう、私に付き纏わないでください！」

「ミルフィー、それは結構惨いよ」

「ココデ倒サレルカ……。ダークエンジェルの機能、完全ニ停止……」

フォルテのツッコミが終わるのと同時に、カミュのダークエンジェルは、ラッキースターの大口径ビームに貫かれて、その場で爆散してしまう。

「哀れですね。ですが！」

生体コンピューターとなり、完全に感情が消えているはずのヘル・ハウンズ隊最後の生き残りであるギネスは、ちとせのシャープシューターから出ている強烈なオーラのせいで、完全に逃げ腰の状態にあった。

今にも命を落としそうな想い人を自分が直接救って、他のライバルよりも一歩も二歩も有利な立場になるチャンスを、目の前のギネスのせいでふいにしてしまったからだ。

「人として生きる事が叶わなくなったその体、時に討つ事も情けとなるでしょう。フェイタルアロー！」

シャープシューターの特殊兵装である長距離レールガンによる超長距離狙撃フェイタルアロー。

これは、本来超遠距離用の特殊武装で、近距離だとかえって命中率が落ちる事が多いのだが、今回は正確にギネスのダークエンジェ

ルの中心部を貫き、盛大な爆発の華を暗黒の宇宙空間に咲かせる事となる。

「これで、終わりです」

「ちとせ、凄ぉーーーい」

「凄いです」

「そうですわね（ギネスさん、人の恋路を邪魔するからですよ）

驚異的な技量を見せたちとせに、いまいちそういう事に疎いミルフィーユと、基本的に子供なヴァニラは素直に感心していたが、ミントはちとせの考えている事にいち早く気が付いていた。

なぜなら、自分もほぼ同じ事を考えていたからだ。

「（ちとせを、本気で怒らせるのは止めておくか……）みんな！遂に大ボスの登場だよ！」

ダークエンジェル隊を全滅させたフォルテ達であったが、まだ戦いは終わっていなかった。

なぜなら、その前方にアキオのゼロ艦隊を倒したエオニア艦隊が多数展開していたからだ。

彼は、誘爆を続けるコンゴウに止めを刺す時間を惜しみ（どうせ、沈むので問題はないと思っていた）、後方の黒い月から更に援軍を得て、エルシオールの前に立ち塞がる。

「ヘル・ハウンズ隊も初めて役に立ったか。時間稼ぎご苦労だったな」

エルシオールのメインスクリーンにエオニアの余裕に満ちた表情とその発言が流れる。
表面上、エオニアの表情には、使い捨てにしたヘル・ハウンズ隊の面々に対して何も感じていないように見えた。

「余裕だから、レイトンに止めを刺さなかったので？」

「タクト・マイヤーズ、お前らしくもないな。あの一人で運用している古い戦艦で、ダメージコントロールをすればどうなるのか？お前が理解していないはずもない」

つまり、艦内の誘爆を防ぐために通路の隔壁を閉じてしまうので、ブリッジにいるアキオに脱出の手段は無いという事を意味していた。

「人生の最後に、数分間人生を振り返る余裕を与えてやったのだがな。あの老害の子に生まれて人生に苦労した奴へと送る最後の余の優しさだよ」

「その余裕は、あなたを確実に滅ぼしますよ」

タクトは、先ほどのヘル・ハウンズ隊の事といい、今のアキオの事といい、エオニアという人間に対して失望感しか感じていなかった。
タクトは、気が付いてしまったのだ。
シェリーと言う忠臣を失ってしまったエオニアが、もはや誰も人間を信用していない事を。
そして、そんな人間を新たな統治者にする国は、結果的に大きな悲劇を迎える事もだ。

「言うな、タクト・マイヤーズ」

「あなたは、危険な人間です。レイトンに頼れない今、俺は必ずあなたを打つ！」

一息つく暇もなくタクト達は、増援を迎えてその数を大幅に増やしたエオニア艦隊との最後の死闘に入るのであった。

「全ての隔壁閉鎖か……。脱出用のシャトルがあるが、格納庫までの緊急ルートまで塞いでしまったからな」

全ての警報が赤く鳴り響くコンゴウのブリッジで、アキオは艦長席に深く座りながら、最後の時を一人待っていた。

「五分持つのかね？」

出来る限りの事を全てやり尽くしたと感じているアキオは、目を瞑ってからこれまでの人生の事を考えていた。

母一人子一人の生活ながらも、楽しかった十五歳までの生活。

母が病死し、その死後に発覚した出生の秘密。

秘かに力を蓄えるように過ごした士官学校での日々。

卒業後、意図的に危険の多い任地にたらい回しにされ、時には実の父親が送った刺客と戦いながらも、懸命に生にしがみ付く毎日。

ようやく訪れた、通商護衛艦隊での忙しいながらも安泰で人々に感謝されるようになった日々。

まるでお日様のような、妹のようなミルフィーユとの出会いや、

ムーエンエンジェル隊との短くも楽しかった日々、士官学校同期の知人二人との友情の構築など、最後に来てかなり負債分は取り戻せたと感じていた。

「《多才のレイトン》の呼び名も、時には考えものだしな」

それに、今のこの時に充足感すら感じているアキオが、生にしがみ付く理由も見つけられなかった。

良くも悪くも、その特殊な出生や軍内での功績で目立つアオキが、これから平穏な日々を送れるとも思わず、過去の歴史においても、若い頃に才能のあった人間が老後に醜態を曝す事例を良く知ってもいた。

認めたくは無いが、自分はあのフレスコ公爵の実の息子なのだ。

ならば、ここで潔く朽ちるのも良いかもしれない。

後世の人は、若くして散った自分に幻想を抱いてくれるであろうから。

そんな事を考えつつ、アキオは艦長席の横のボックスを開ける。

中身は空っぽであったが、それはフェイクであった。

実は、ボックスは二重底になっていて、中には保冷材を入れて良く冷やしてあるシャンパンの瓶が入っていた。

アキオの悪い癖である、酒の持ち込み行為であった。

「歴代の最大傑作である、三百五十六年物のネオドンペニリオンの限定仕込み品。現存品がわずか十二本だけの超貴重品だが、末期の酒くらいは気張らないとな」

最後に高い酒くらい飲んでも、それにこれから死ぬ人間に軍規違反など関係ない。

そう思ったアキオは、秘かに酒瓶をコンゴウに持ち込んでいた。

生き残ったら後で秘かに回収して飲めば良いと考え、備えあれば憂い無しを実行して、今十分に役に立っている状態であった。

「さて、栓を抜くとするか」

今にも爆沈しそうな艦のブルッジで、アキオがのん気にシャンパンの栓を抜こうとすると、メインスクリーンに一人の女性の顔が映し出される。

先ほどフォルテに命令されて、アキオを救出に来たランファであった。

彼女のカンフーファイターは、驚異的な速度でコンゴウに到着して、そのブリッジの前で機体を停止させていた。

「人生最後に見る女がランファなのか。まあ、見た目は良いから悪くは無いか」

「何を戯言を言っているのよ。早く脱出するわよ」

「無理だな。ダメージコントロールの関係で、全ての通路やら緊急脱出路の隔壁を永久閉鎖しているから」

ランファは、普通なら懸命に生を模索するであろうアキオが、まるで悟りを開いたような表情でコンゴウの艦長席に座っている事に、大きな違和感を感じ始めていた。

「あんた、もしかして死ぬ気なの？」

「結果としてそうなっただけだ。今にも艦は沈むが、脱出の手段は無い。仕方が無いじゃないか」

「あんたねえ！　ちょっとは足掻きなさいよ！」

「無駄な事をするよりは、最後の一時を静かに待った方が良い」

多分、昔の実の父親に命を狙われていた時なら、地に這い蹲っても生き残ろうとしたであろうが、今のアキオに足掻くという言葉は無いようであった。

それどころか、急に真剣な表情になってから、自分に意見して来たランファに厳しい口調をぶつけ始める。

「お前こそ、ここに何をしに来たんだ？　俺が何のためにギュンターを討ち、エオニアに時間を稼がせたと思っているんだ！　カンフーファイター一機で、エオニア軍の軍艦を何隻沈められると思っているんだ！　俺なんて無視して、エオニア軍を討て！」

「うるさいわね！　タクトの命令よ！」

「却下だ！　俺など無視して、すぐにエオニア艦隊を討て！」

アキオは敢えて厳しい口調で、珍しく階級を盾にランファに強引に命令するが、彼女はそこで引くような女ではなかった。

「あんたこそ、最後に呆けたんじゃないの？　ここにいる味方戦力全ての上位指揮官はタクトよ。いくら同階級でも、先任に逆らっても良いわけ？」

見た目ではわからない事が多いが、実は士官学校を次席で出ているエリート士官のランファらしい一言であった。

相手は名うての理論家であったので、同じく理論で先の暴言を否定してしまったのだ。

「救出に間に合わなかった。それで、良いだろう」

完全に死ぬ覚悟を決めていたのに、それをランファに邪魔され、しかも向こうに理論的に言い返されてバツが悪くなったアキオは、まるで子供のような事を言い始める。

「間に合わなかったからそれで良いって……。バカなんじゃないの！　そんなガキの使いのような事を、フォルテさんに言えると思ってるの？　それに、みんながどれだけ心配してると思ってるの？　あんたは、ミントやちとせに面と向かってそんな事が言えるの？」

スクリーンに映ったランファは、一人激高しながらアキオを怒鳴り付けていた。

「うるさい！　俺は、もうここで終わりなんだ！」

「んなわけが無いでしょうが！　アンカークロー！」

脱出路が無ければ作れば良い。

そう考えたランファは、かなり強引な手を使う。

カンフーファイターのアンカークローを細かく操作して、コンゴウのブリッジ上部天井に穴を開け、空気が本格的に漏れる前にカンフーファイターの搭乗口を強引に押し込む。

その間、僅か数秒であったが、上部に開いた穴から宇宙空間に吸い出されそうになったアキオは、シャンパンの瓶を咄嗟に胸元にしまい、艦長用のシートにしがみ付く羽目になっていた。

「上等ね。上手く行ったわ」

「俺を殺す気か！　このバカ女！」

何食わぬ顔で、ブリッジの天井をぶち抜いたカンフーファイターから降りてきたランファに、珍しくアキオが感情的に喰ってかかる。

今までに、相当な危険を潜り抜けて来たアキオであったが、ここまでの無茶をやらかす女は初めてであったからだ。

現に、開けた穴とカンフーファイターの接地面には微小な隙間があるらしく、ブリッジ内にはエアー警報が鳴り響いていた。

「文句でもあるの！　臨機応変に動いただけでしょう？　それに、死ぬつもりだったんでしょう？」

「お前に殺されるのは御免蒙る！」

「結果的に成功したから問題ナシね。じゃあ、行くわよ。特別にこのランファ様が、カンフーファイターに乗せてあげるから」

ランファは、いつ沈んでもおかしくないコンゴウから素早く脱出しようとするが、アキオの方は全くその身を動かそうとはしなかった。

「どうしたのよ？　早く行くわよ」

「必要ない」

「意味が解らないわ」

「俺を助ける必要なんて無いんだ！　時間が勿体無いから早くタクト達の元へ戻れ！」

あのエオニアとの戦いで、このコンゴウが致命傷を受けて脱出すら困難である事がわかった時、アキオは既に自分の命を諦め、最後の瞬間を静かに迎えようとしていた。

もうやれるだけの事はやったと感じるアキオに、しぶとく脱出手段を探そうとする気など一欠けらも無く、ただ好きな酒でも飲もうと酒の栓を抜いた時に、いきなりランファが雪崩れ込んで来て、機嫌を悪くしていた。

せっかくの綺麗な死を、ランファに邪魔されたような気分になったからだ。

理論的で理性的で合理的で優しいアキオは、それ自体が偽りの性格と言うわけではなかったが、十五歳以前には我侭を言って母親を困らせた事もあったし、感情的な発言を繰り返して周囲に呆れられた事もあり、その部分を死に際して隠す必要が無いと感じての暴言であった。

もしくは、ミルフィーユやミントやちとせには見せた事の無い、ランファだけに見せる心の奥の感情を今曝け出しているのかもしれなかった。

「あんた！　バカなんじゃないの！　かえって時間が勿体無いから早く乗りなさいよ！」

「うるさい！　うるさい！　うるさい！　俺は、ここに残る！」

まるで子供のように感情的な発言を繰り返すアキオに、ランファは今考え付いた事を言い返す事にする。

「そんなに、死んだお母さんの元に行きたいの」

まるで心臓に何かが突き刺さったかのような感覚を感じたアキオ

は、その場に両膝を付いてガックリとうな垂れてしまう。

「図星？」

「そんな事は無い……」

弱々しい声で反論するアキオであったが、ランファは彼が本音を言っているようにはどうしても見えなかった。

どうやら、アキオが心の奥に自分すら誤魔化して隠していた願望を、自分が暴いてしまったらしい。

母親の死後、生き残るためだけに足掻いて来たアオキは、自分の父親が死んだ事を確認した時に、自分の生きる意義を見失っていたのだ。

友達が増えても、シヴァ皇子の信頼を得ても、上官に認められようと、お金持ちになろうとも。

嬉しい事には間違いは無かったが、どこか心の隅で感じている空虚な感情。

士官学校在籍当時からたまに感じていたこの感情の正体に、アキオは今になって気が付いていた。

小さい頃から常に二人一緒で、二人でいる事が当たり前の事であった母親に会えない悲しさ。

その大きな闇を七年経っても埋めきれていなかったアキオは、無神論者にも関わらず、今ここで死ねば母親にあの世に会えると無意識に考え、無理に生にしがみ付く事を止めていた。

「（アキオが、ここまで暗い感情を背負っていたなんて……）」

ランファは、以前にミルフィーユが言っていた事を思い出していた。

『アキオさんは、時間がかかると思う』

始めは良く意味がわからなかったのだが、今では普段は天然でも、ときに鋭い事のあるミルフィーユの凄さを再確認するランファであった。

「そんなにお母さんに会いたいわけ？」

「だから、違うって！」

自分が究極のマザコンだと思われたくないアキオは、懸命にランファの発言を否定する。

だが、ランファは更にアキオの心を追い詰める発言をする。

「でもね！　そんな若さで半ば自殺みたいにあの世に行っても、あんたのお母さんは、決してあんたを出迎えてなんてくれないわよ！　親不孝者扱いされて、追い返されるのがせいぜいね！」

「だから、俺はあの世なんて信じてないし、死んだ人間に会えるわけなんて！」

「じゃあ、何で救助を拒むのよ！　屁理屈を捏ねるのも大概にしなさい！　正直に言ってあげるわ！　誰よりも恵まれて生まれて来た癖に、ウジウジと、『お母さん！　お母さん！』ってうるさいのよ！　いい年の男がみっともない！」

「お前に、何がわかるって言うんだ？」

ランファは、アキオにこれまで見た事の無いほどの鋭い表情で睨み付けられる。

だが、ここで引いたら負けだと考えたランファは、アキオを睨み返しながら更に言葉を続ける。

「人の事なんてわからないわよ！　わかったなんて言う方が偽善よ！　でも、あんたが、死んだ人間にいつまでも引きずられてウジウジしているのはわかるのよ！」

「死んだ人間に、引きずられている……」

「そうよ！　どうせ、ここで死ねば、綺麗な死に様だとか考えてんじゃないの？　人間、死んだらそれで終わりなのよ！　いい加減に目を覚ましなさい！　あんた、天才なんでしょう！」

時間が勿体無いと感じたランファは、ショック療法でアキオの頬に強烈なビンタを入れる。

すると、冷静になったアキオは静かにこんな事を話し始める。

「わかっていたさ……。わかって……。ここで死んでも、意味なんて何も無い事くらい。それでも、縋りたかったんだ。死後の世界なんて実在しないかもしれないけど、もし死んでみたら、あの世で母が待っているかもしれない。俺は、別に軍人になんてなりたく無かった。ただ、母を早く生活の苦労から救ってあげたかった。それが、母が急死して出生の秘密を知り、士官学校卒業後に実の父親に命を狙われている事を知った。ただ『死にたくない！』この一心で、決まったレールの上を自分の意思など関係なく歩いていたんだ」

「そうなの……」

「二十二歳で准将になった。巨大な会社のオーナーになった。普通の人なら、望んでもまず手に入らない最高のご馳走なのに、俺は何か満たされない物を感じていた。普通で良かったんだと思う。母と普通に生活をして、将来は結婚して生まれた子供が母に遊んで貰って……。それだけあれば、俺は……、俺はただ普通に生きたかったんだ！」

ランファに言いたい事を全て吐き出したアキオは、その後まるで感情の糸が切れたように嗚咽をあげ、ランファの胸に顔を埋めてなき始める。

大の男が真剣に泣く様を初めて見たランファは、最初は動揺していたが、すぐに子供をあやすようにアキオの頭を撫で続ける。

その間は僅か三十秒ほどであったが、まるで数時間にも感じられる一時であった。

「すまん、色々と取り乱した」

完全に死を吹っ切ったアキオは、顔をハンカチで拭いてからランファと目配せをすると、素早くカンフーファイターに乗り込み、急いでコンゴウから離脱をして距離を置く。

紋章機の一人用のシートはそれなりに余裕があり、二人は多少くっつく事にはなったが、隣り同士で座る事が可能であった。

ランファは、たまにアキオと体が触れ合う事を多少意識していると、今までは懸命に撃沈から耐えるようにのたうち回っていたコンゴウであったが、まるでアキオ達が脱出したのを確認して安心したかのように、一気に機関部から巨大な爆発を起こして漆黒の宇宙空間に大きな花火のような火の輪を広げる。

「世話になったな、コンゴウ。色々とありがとう。お前は、ミルフィーユと並ぶ俺のラッキーレディーだったよ」

アキオは、爆発したコンゴウが漆黒の宇宙空間に消えるまで、一人丁寧に敬礼を続けていた。

そして、それを間近で見ていたランファは、一人顔を赤くさせながら胸をドキドキとさせていた。

やはり、アキオはミントとちとせが惚れるだけあって、昔で言うところのイケメンであったからだ。

「どうしたんだ？　ランファ」

「別に、何でも無いわよ！　それよりも、さっきの事は秘密にしておいてあげるけど、後で何か奢りなさいよね」

まさか、アキオの横顔に見とれていたなどとは言えないランファは、先ほどアキオが自分の胸に縋って泣いた件を切り出して、それを誤魔化そうとする。

「それを暴露して、誰かが信じてくれるといいがな」

「ふんっ！　調子は元に戻ったようね！　じゃあ、飛ばすわよ！」

アキオが、女性の胸に縋って泣いた。

こんな事実を信じる人が皆無である事を、誰よりも理解していたのはアキオ本人であり、ランファの借り一つ発言をサラリとかわしたアキオを見て、ランファはアキオの調子が元に戻った事を知る。

「死の誘惑から引き戻してくれた事には感謝している。後で、高級

フレンチのフルコースだろうが、中華の満漢全席だろうが奢ってやるさ」

「オーケー、日頃のダイエット分をまとめて食べてあげるわ！」

ランファは、カンフーファイターを一気に加速させると、そのままエオニア艦隊とムーエンジェル隊が戦っている戦場の近くにまで移動をする。

「このまま合流するわ」

「いや、別の策で行こう」

特にやる事が無かったので、クロノ・ブレイク・キャノンの発射準備を行っているエルシオールの位置と、エオニア軍艦隊と前線で戦闘を行っている各紋章機の位置関係をレーダー等で確認していたアキオは、ここでランファがフォルテ達に加わって単純な攻撃力を増やすよりも、もっと有効な作戦を思い立っていた。

「別の策？」

「ここで、フォルテ達に加わって正面突破力を増すよりも、別の方向から崩した方がフォルテ達の有利になる」

冷静な戦術指揮官である、アキオらしい作戦であった。

ランファが抜けていても、さほど苦戦しているようにも見えないフォルテ達であったが、戦況はこう着状態と言った感じであった。

エオニアが繰り出す無人艦艇を次々と撃沈していくフォルテ達であったが、とにかく数が多いのでエオニア軍はまだ押されてはいない。

ムーンエンジェル隊が力尽きるか、それともエオニア軍が息切れをするのか、戦況はその微妙な狭間の上に成り立っている状態であった。

「ちょうど、フォルテ達とぶつかっている、常に補充されている小型艦艇を主力とした艦隊はわかるな？」

「ええ」

「その少し後方に、一隻の大型戦闘母艦が存在する。一見、この艦は遊兵となっている印象を受けるが、これは後方にいるエオニアの旗艦との戦術リンク通信を繋ぐ重要な役割りを担っている。この艦をピンポイントで撃沈する」

「マジで？」

いくら比較的警戒されていないカンフーファイターであっても、敵艦隊のいる敵味方の砲火が降り注ぐ戦場を横から潜り抜けて真ん中にいる戦闘母艦一隻を沈めるなど、狂気の沙汰だと感じるランファであった。

「大丈夫だ。あの戦闘母艦は、連絡役というか多分、無人艦だからエオニアの細かい命令を中継する役割りを担っているんだろうな。直接戦闘している艦隊より少し後方にいる。一気にあの艦を目指しても、意外と砲火は少ないよ。まあ、シムス高速戦闘機なら、十機で突っ込んでも一分以内で全機蜂の巣だが」

「紋章機なら大丈夫って事？」

「特に、一番高速なカンフーファイターならな。それとも、次の安

全策で行くか？」

「誰に物を言っているのよ！　あんたの出迎えで戦功が不足していたからちょうどいいわ！　舌を噛むんじゃないわよ！」

ランファは、最高速度でカンフーファイターを敵艦隊の横合いから侵入させる。

すると、カンフーファイターに気が付いた近辺の艦からの砲撃や対空火器、果ては戦線で交戦中のエルシオールや紋章機の火器まで飛び込んでくる戦場を、カンフーファイターはアクロバットな飛行で速度を落とさずにすり抜けて行く。

「フォルテさんに、攻撃中止をお願いしないの？」

「それでエルシオールに危険が及んだら本末転倒だ。このまま行け！」

「だろうと思ったわよ！」

カンフーファイターの三百六十度スクリーンから、大量のビームやレーザーや機銃の閃光弾が自分に向かって来るような感覚を覚える戦場を、今までのタイムレコードを塗り替える勢いで駆け抜けていくランファであったが、ふと横を見るとアキオは何かを考えているようではったが、まるで動揺した風には見えなかった。

「怖くないの？」

「怖くないと言えば嘘になるが、慣れている。紋章機はGがないから楽でいいな」

士官学校卒業後に、辺境の惑星で小型戦闘艇に乗って実戦を経験していたアキオは、紋章機にGがなくて体が楽な事に感心していた。

「フォルテさんは、Gがないと不自然だからってキャンセラーを切っているわ」

「あいつらしいな」

「目標に到着したわよ」

二人の眼前には、目標にしていた巨大な戦闘母艦の勇姿が映し出されていた。

「これを落とすの？」

「メインスラスターの下後方から侵入すれば、火器が弱いはずだ」

「調べてたの？」

「そういうのが、士官様の仕事だからな」

アキオに言われた通りに後方にあるメインスラスターの下部後方から機体を侵入させるランファであったが、自艦の危機を感じた戦闘母艦の戦術コンピューターは、通常に艦ではあり得ないほどの濃密な火器をカンフーファイターに向かって撃ち続ける。

「どこの火器が弱いのよ！」

「シムス高速戦闘機なら……「聞き飽きたわよ！」」

それでも、特に損傷しなかったカンフーファイターは戦闘母艦の懐に潜り込む事に成功し、そこからアキオに指定されたポイントに向かってアンカークローを発射。
出来た破孔に、今まで使わないで満タン状態であったミサイルやビームを叩き付ける。
すると、内部のクロノ・クロス・エンジン搭載の機関部を破壊され、誘爆を開始した戦闘母艦は、僅か十数秒でその存在を完全に崩壊させ、戦場に一際大きな爆発の華を咲かせる。

「ランファがやったのかい？」

前線で、エオニア艦隊から次々と送られて来る駆逐艦や突撃艦を迎撃していたフォルテは、後方の戦闘母艦がいきなり大爆発を起こして撃沈した事を確認していた。

「らしいですけど、アキオさんはどうなったのでしょうか？」

アキオの事が心配で堪らないミントは、フライヤーを駆使して駆逐艦を沈めながら、フォルテにアキオの消息を尋ねていた。

「ランファが、あんな所にいるって事は……「間に合わなかったのですか！」」

フォルテの答えを遮るように、ちとせが悲鳴に近い声をあげる。
あんな味方の砲火に当たる可能性のある進路を単騎で突撃するような無茶は、紋章機一の最速機であるカンフーファイターを操るランファの特権だと、ちとせは思っていたからだ。

「いや、違うね。これは、アキオの策だね」

「「あんな無謀な行為をですか？」」

ミントとちとせのアキオに対するイメージは、彼は理論肌で合理的な作戦を好む知将という物であった。

「一見すると無謀だからさ。冷静に、敵艦隊の配置・各艦の武装の位置・カンフーファイターの性能などを見抜いての勝算のある賭けをしている。あいつは、０．１％でも勝率を上げる事に拘るが、成功の目が低いからと言って、作戦を躊躇する臆病者でもないからね」

親友としてのアキオを良く理解しているフォルテだからこそ気が付いた、アキオの突貫策であったが、それに気が付かないでいるミントとちとせを見て、まだ二人がアキオを落とせる日は遠いと思うフォルテであった。

「まあ、何してもこれで戦いの目が変わるね」

フォルテの予感は、数分後に現実の物となる。

戦闘開始から、クロノ・ブレイク・キャノンの発射を悟られないように強力なジャミングを行っているエルシオールの影響で、前線への攻撃命令の中継を先に沈んだ戦闘母艦に依存していたエオニア軍は、急速に艦隊の運用能力を落とし、次第にフォルテ達に押される事となる。

「いいね？　ここは一気に畳み掛けるよ」

更に、戦闘母艦を撃沈後に、戦場の反対側へと突き抜けたカンフーファイターがフォルテ達と合流を果たす。

「お待たせ」

「ランファ、えらい無茶をやったねぇ」

「アキオの奴が、とんでもない作戦を考えたんですよ」

「でも、上手く行っただろう？　あの戦闘母艦は、戦術リンクシステム中継の要だったらしいね。エオニア軍が崩れ始めたよ」

他にも、なぜか黒い月から援軍が送られて来ないエオニア艦隊は、遂に戦力の均衡を崩して数を減らす速度が上昇し、最後には後退を余儀なくされる事となる。

「ところで、アキオさんは無事なのですか？」

「そうです！　問題はアキオさんの安否です！」

主に二人の強烈な要求により、ランファはカンフーファイターのコックピット内の映像を関係者全員に送る事となる。

「アキオさん、無事で良かったですね」

「また悪運の賜物さ。どうやら、心配をかけてしまったらしいな」

「アキオさん、無事で良かったです。エリオスさんが心配していました」

「心配かけてすまなかったな、ヴァニラ。まあ、後ろの奴の発言は話半分に聞いておくさ」

アキオは、自分が無事な事に心から喜んでいるミルフィーユには

いつもの笑顔を向けていたし、ヴァニラにも素直に心配をかけた事を謝っていた。
後ろのエリオスの件に対しては、完全否定をしなかっただけ状況は改善したと考えても良いであろう。
少なくとも、ヴァニラはそう考えていた。

「アキオさん！　これは、どういう事ですか！」

「アキオさん！　真剣に心配していたのに、それは酷いです！」

ところが、ミントとちとせは不機嫌な態度を崩さなかった。
それは、二人では狭いカンフーファイターのパイロットシートに、ランファとアキオが、まるで仲の良い恋人同士のように座っていたからだ。
そうするしか無かったという事情を踏まえると、それは明らかに二人の誤解なのだが、実際に目撃してしまうと怒りが止まらなくなってしまう二人であった。

「あんた達ねぇ……。勘違いも甚だしいわよ」

「ランファさんは、黙っていてください！」

「そうです！　黙っていてください！」

ミントとちとせのあまりの迫力に、ランファは珍しく黙り込んでしまう。
確かに、アキオと二人でくっ付いて座っているのは事実なのだから。

「わざとじゃないんだし、緊急事態なんだから、後で償って貰いな

！　それよりも、前方の敵だよ！」

「わかりましたわ。アキオさん、後で相応の償いをして貰いますからね」

「ミントさんと同じくです」

「フォルテ、適当に人任せで事を収めるな」

「時間が無いのは事実だし、心配かけた迷惑料だね。まあ、せいぜい派手に搾り取られるが良いさ」

フォルテの言葉に、ガックリと肩を落とすアキオであったが、その間にも次々に無人艦が沈んで行き、エオニア軍は徐々に後退を余儀なくされていた。

そして、遂にエルシオールから待ちかねていた通信が入って来る。

「クロノ・ブレイク・キャノンの発射準備が完了した。これより、エオニア旗艦を照準に収めるべく移動を開始する。生き残ったは良いが、色々と大変だな。レイトン」

「お前まで……。早く照準を合わせろ」

エルシオールは、前方の紋章機にエオニア軍残存艦隊の掃討を命じながら全速力で前進し、その射程圏内にエオニアの座乗する旗艦を標的に収めようとする。

そして、それを止める手段は、既にエオニアには残されていなかった。

「情けをかけた結果がこれか！　タクト・マイヤーズ、お前の言った事は正しかったな」

後方で、旗艦エオニア級戦艦ゼルを含めて僅か十隻ほどまで撃ち減らされたエオニアは、一人で先ほどのタクトの言葉を思い出していた。

『最後の数分を、アキオに与えてやる』

下らない情けを与えて止めを刺さなかった結果、アキオは無事に救出され、その命令を受けた紋章機の一機が、前線の無人艦隊に自分の命令を伝えていた戦闘母艦を一撃で粉砕した。

その結果、前線の指揮は、事前に組み込まれていた既に陳腐化していた艦隊運動へと切り替わり、エルシオール側でも研究がされていたその陳腐な艦隊運動によって柔軟性が低下した前線艦隊は、あっという間に全滅してしまう。

明らかに、自分の甘さが生んだ手痛いミスであった。

『こちらの最大の弱点を針の一刺しで突くか。さすがだな、レイトン』

それでも、その直後にはまだ余裕のあったエオニアであった。

なぜなら、現在所持している艦隊だけでエルシオールを撃てると考えるほど、自分は楽天家でもなく、すぐに黒き月から追加の援軍が来るはずであったからだ。

どのみち、あのエルシオールと紋章機は消耗させてから討ち取るしか無いと考えていたからだ。

ところが、事前の打ち合わせと違い、黒い月からの援軍は一切到着していなかった。

「ノア！　どういう事だ！　早く、追加の援軍を送れ！」

ところが、今までであればすぐにこちらの呼び掛けに答えたノアが、全く通信に応じなかった。

焦ったエオニアは、全速後退を行いながらひとまず黒い月へと撤退を開始する。

「通信妨害か？　まあ、良い。黒き月にさえ辿り着ければ……」

ところが、既にエオニア旗艦をクロノ・ブレイク・キャノンの射程圏内に収めたエルシオールは、司令官であるタクトの発射命令を待つだけであった。

「クロノ・ブレイク・キャノンの発射準備完了です！」

「ココ、エネルギーの充填率は？」

「現在９５％！　今、１００％を超えました！」

エルシオールのブリッジで、タクトはココからクロノ・ブレイク・キャノンの発射準備状況の報告を受けていた。

「アルモ、エオニア旗艦を見失うなよ」

「大丈夫です！　今撃てば、１００％逃れられません！」

「そうか……」

タクトは、すぐにでも発射命令を出そうとしていたが、一つ躊躇している事があった。

それは、軍人としての自分が、まだ人を殺す事に慣れていないという事であった。

先に、シェリーを殺す命令を下したとは言っても、あれはかなりアキオに助けられている部分があった。

自分と同じ年の友人は、見かけによらず多数の修羅場を潜っていたので、こういう際には一切の躊躇い無く発射命令を下すであろうし、それを非常に羨ましく思うタクトであった。

「タクト」

「わかっているさ」

付き合いが長い事もあって、タクトの隣りにいるレスターは、タクトが躊躇している内容に気が付いていた。

だが、ここでのレスターの役割りは、タクトにすぐにハッキリと命令を出させる事であった。

「あいつだって、別に好きで人を殺しているわけではないさ」

「それは、理解している。あいつが、本当はそんな事を好き好んでやっていない事もな」

「わかっているなら良い」

タクトは、覚悟を決めると初めて直接人を殺す命令をエルシオールの艦内に下す。

「クロノ・ブレイク・キャノン発射準備！　標的は、エオニア旗艦ゼル！」

「クロノ・ブレイク・キャノンいつでも行けます！」

「クロノ・ブレイク・キャノン発射！」

タクトの命令によって発射されたクロノ・ブレイク・キャノンの白い光は一直線に、エオニア旗艦へと向かうのであった。

「高エネルギー反応だと！」

エオニアは、突然の事態に信じられないと言った表情をしていた。

確かに、徐々にエルシオールに追い付かれつつはあったが、あの艦の、いやこの皇国に存在する全ての軍艦に、あの距離から自分を打てる武器など存在しない。

あるとすれば、あの惑星ロームと衛星都市ファーゴを潰滅に追いやった黒き月の高エネルギー砲だけのはずであった。

だが、現実にはエルシオールの長距離エネルギー兵器の白い光は、

自分のいる艦とその周りの護衛艦隊を完全に捉え、すぐにも自分の体ごと完全に消滅させようとしていた。

「まさか、この私が敗れるというのか？」

クロノ・ブレイク・キャノンの光がエオニアをその座上している艦ごと包んで、その身を完全に消滅させるのに僅か数秒。

だが、エオニアの脳はその最後に数秒を実際の時間以上に長く感じさせていた。

「ほら見ろ、レイトン。お前が、手を貸さないからこうなる。同じ高貴なる家に生まれたにも関わらず、その主流から外れた同士。お前さえ、手を貸してくれれば……。それに、余が後でお前を粛清する？　ありえないとは断言すまい。だが、将来独裁者となったシヴァがお前を粛清しない根拠がどこにある？　そこにいる事に何の意義があるのだ？　バカ者めが……」

それが、最後の言葉であった。

エオニアは、誰に言い残すでなく、独り言をそこまで言うと、そのままクロノ・ブレイク・キャノンのエネルギー波にその身を焼かれ、永遠に意識を失うのであった。

「エオニア旗艦とその護衛艦隊は、全艦消滅です」

アルモの報告を受けて、タクト達エルオシール組が安堵の表情を

浮かべていたその頃、同じくクロノ・ブレイク・キャノンに巻き込まれないように退避行動を行っていたフォルテ達も、エオニアが完全に消滅する所を目撃していた。

「悪の巨魁の最後だね」

「悪い事をした報いなのでしょうか？」

「あの方のせいで、多くの犠牲者が出た事は確かです」

「悪は、必ず滅ぶのです」

「この戦乱の全ての犠牲者に安らかな来世を」

ランファを除くムーンエンジェル隊の面々が、消滅したエオニアへの感想を述べていたが、アキオの隣りいるランファは、彼が珍しく独り言を言っている事に気が付いていた。

ランファは、その発言に興味深そうに耳を傾ける。

「エオニア閣下、あなたは道を誤りましたね。そして、それを引き止め諌めてくれる人が最後まで現れなかった。私も、何回か道を誤りかけました。でも、私にはそれを引き止め諌めてくれる人がいた」

アキオが生に縋る日々の連続で精神が擦り切れる前に、自分の元に引き寄せてくれたルフト中将やウォルコット中将、先ほどの安易な死の誘惑をバッサリと断ち切ったランファと、アキオには重要な場面で道を誤らずに済んだ幸運があったが、エオニアにはそんな人は存在しなかった。

彼が唯一心を許したシェリーは、彼の望むままにしか動く事が出来ずに、臣下として一番大切な、耳に痛い忠告をする事ができなか

った。
　結果、アキオは生き残り、エオニアはその短い人生を終わらせる事となった。
　ランファは、アキオの独り言からちょっとした事で人の人生が変わってしまう事に気が付く。

「その差が、出たのでしょうか？　結果、あなたは死んで、私は生き残った。似た者同士のはずなのに、人生とはわからないものです。ですが、閣下。私はあなたに感謝をしている部分もあったのです。この非才な私を宰相にと仰ってくださった。もしあなたが私をクーデター軍の幹部などではなく、辺境に新しい国を作りたいから力を貸してくれと仰っていれば、私は一兵士・一国民としてでもあなたに力を貸したでしょうに。それが残念でなりません。ですが、それは所詮仮定の話です。あなたは、未来永劫多くの人を殺した大量殺人者として歴史に名を残し、誰もあなたの事を褒めてなどくれないでしょう。ですから、そんなあなたに私から唯一出来る事です。心安らかな眠りを……」

　アキオは、消滅したエオニア旗艦のあった方向に向けて、丁寧な敬礼を始める。
　いつもは、アキオがかなりぞんざいな敬礼で済ます事が多い事を知っているランファは、先ほどのコンゴウの時といい、アキオが実は誰よりも凛とした綺麗で洗練された敬礼が出来る事を知った。
　そして、その敬礼した姿を、ランファは将来決して忘れる事が無かったのであった。

「ムーンエンジェル隊のみんな、本当にご苦労だった」

「おい、まだ黒き月が残っているんだぞ」

エオニアの戦死が完全に確認されたエルシオールの艦内から、タクトが上機嫌でフォルテ達に通信を入れて来る。

一応、副司令の義務としてレスターが、まだ仕事が残っているとタクトを諫めるのだが、いくら強力な無人工廠兼軍事拠点とはいえ、黒き月は無人であり、『エオニアが死んだから、もしかしたら、無傷で接収出来るのでは?』などと、甘い考えを抱くようになっていた。

ところが、そんな甘い考えを一切否定するかのような通信が入って来る。

「エオニアを討ったのか。意外とやるな。人間達よ」

その容姿は、以前にタクトが艦内で見かけた事がある金髪の十歳前後の少女のままであったが、黒き月の管理人であるノアは以前の外見と年相応の声から、野太い中年男性の声へとなっていて、それだけでタクト達に新たな警戒をさせる事となった。

「タクトさん！　黒き月が、白き月へと急速に接近中です！」

「更に、黒き月より出現する無人艦艇が増大中！　凄い！　先ほどのエオニア艦隊の三倍以上の数です！」

ココとアルモの報告に、タクト達に緊張が再び走る。

「あの男を倒した程度で喜んで貰っては困るな。タクト・マイヤー

ズ司令。さあ、最後の戦いを始めようではないか。もっとも、ちゃんとした戦いになれば良いがな」

黒き月の管理人の擬似人格に過ぎないはずのノアは、自分の主人であるエオニアが死んでも何一つ動揺する事無く、逆に使えなくなったガラクタを処分できた程度の認識とういか、思考パターンしか持っていないようであった。

「ご主人様を失って、気落ちするかと思ったがな」

「この黒き月の管理人たるこの私が、あの程度の人間を失って気落ちする？　そもそも、私はそんな感情を持ち合わせておらぬ。しかし、人間という生き物は興味深い。あの男は、人間にしては出来た方であったが、それでもこの擬似インターフェイスの子供の声と容姿に簡単に騙されるのだからな」

クーデターが信頼していた部下の裏切りで失敗し、僅かな側近数名と辺境を彷徨ったエオニアは、多分人間の、それも男や自分よりも年上の人間を信じられなくなっていたのであろう。

そして、それを見抜いて擬似インターフェイスの姿を少女にした黒き月の管理人に、タクトは底意地の悪さを感じていた。

「まあ、そのおかげで白き月と合流できたのだから、一応は感謝しないといけないのかな？」

「そんな心配は無用だ！　このガラクタが！」

余裕綽々の態度を見せるノアに、反論を入れて来たのはカンフーファイターにランファと同乗しているアキオであった。

「人間様に作られた分際で、創造主に逆らってどうするんだ！　このガラクタ！」

「私が、ガラクタ？」

「そうだ、破壊ばかりして使い物にならない欠陥品だ。お前の機能をストップさせてから、使える部分は回収して戦後の皇国の復興に役立ててやるからな！」

アキオは、ノアの格好をした黒き月に管理人に対して腹を立てていた。

確かに、エオニアは道を間違えた極悪人であったが、自分がクーデターの首謀者である事を否定せずに、むしろ自分が正統なトランスバール皇国の王である事を主張していた。

絶対に、後ろに隠れるような真似はしなかったのだ。

ところが、ノアはエオニアに協力しているかのように見せかけて、実は自分がこの惨劇の首謀者であった。

ただ白き月と合流するだけのために、数億人を殺して反省どころか自分が間違っているとも思っていない。

しかも、ノアは人間ではない。

ならば、徹底的に破壊すべきだと考えるアオキであった。

「そうだな、手下に見せかけて実は大ボスってのが気に喰わないな」

タクトも、アキオに賛同の意見を述べる。

「なら、私を破壊するが良い。ただし、出来たらの話だ」

ノアは、タクト達を挑発すると、内部に溜め込んでいた艦隊を吐き出しながら白き月に接近し、そのまま本来の目的である二つの月

に融合を開始する。

「シャトヤーン様！　シヴァ様！」

「マイヤーズ司令、六百年の差が出ました。このままですと、私達白き月の方が、黒き月に吸収されてしまいます」

この六百年間、白き月を捜し求めながら常に進化と成長を続けていた黒き月は、完全に大きさとパワーと技術の質で白き月を上回っていて、もしこの二つの月が完全に融合するとなると、それは黒き月を主体とする癒合になるはずであった。

白き月は、首都星トランスバールに留まって進化を怠っていた影響で、黒き月と一対一で対抗する能力を無くていて、次第に黒き月に引き寄せられようとしていた。

「これで良い。二つの月が一つとなり、これで究極の兵器が完成するのだ」

「タクト・マイヤーズ司令！」

「何でしょうか？　殿下」

「このままだと、白き月が黒き月に吸収されてしまう。その前に、黒き月をコントロールするコアを破壊するのだ。コアは見ればわかる。赤い色をしたクリスタル状の物体だ」

「了解です！」

ところが、事はそう簡単に進まなかった。

先ほどのエオニア艦隊の数倍規模の艦隊と数十基の巨大攻撃衛星

が、黒き月とエルシオールの間を遮るように存在していたからだ。

「とは言え、厳しいな」

「紋章機を潜り込ませるか？」

「エルシオールのクロノ・ブレイク・キャノンでないと、コアは破壊できそうにない」

タクトとレスターはシヴァ皇子に与えられた課題に困り張ててしまうが、カンフーファイターに乗っているアキオも、効果的な策を考え付けないで困っていた。

「あんなの突破できるの？」

「紋章機だけなら可能だが、エルシオールのクロノ・ブレイク・キャノンが、黒き月のコアを射程圏内に収めないと意味が無い」

「そんな……」

「何とかしてエルシオールの侵入路を見つけないと……」

アキオが、カンフーファイターの戦術情報システムを立ち上げてから、エルシオールの侵入経路を懸命に計算するが、結果はどこから侵入させても五分と持たずにエルシオールが撃沈という結果が出ていた。

「駄目なの？」

「攻撃衛星はいいんだ。動かないから、侵入時に邪魔なやつだけ先

に紋章機で排除すれば良い。だが、この多数の無人艦隊が曲者だ」

「でも、やるしか無いんでしょう？」

「そうだな」

ここで手をこまねいて見ていると、白き月が黒き月に吸収されてしまうので、ここは一か八かで前進するしか手は無かった。

「時間が惜しい！　紋章機は、エルシオールの脅威となる敵だけを素早く無力化してくれ！　撃沈には拘るな！」

「この前の、アキオさんの作戦ですね」

「そうなんだけど、あの時よりかなり分が悪いからなぁ……」

ミルフィーユの疑問に答えながらも、タクトがエルシオールに前進命令を下そうとしたその時、戦場に一つの変化が現れる。

突然、エルシオールの横合いから大量の長距離大型ミサイル、大口径ビーム、レールガンなどが攻撃衛星と敵無人艦隊に降り注ぎ、かなりまとまった数の艦を一度に撃沈してしまう。

更に、別の方向からも同じくビームやミサイル等が降り注ぎ、敵は一時的にかなり混乱する事となる。

「援軍か！」

「正解だ！　タクト・マイヤーズ准将！」

それは、先のアキオの軍事法廷の際に面識のあった、ジンロ中将であった。

彼は、近衛・第1方面軍艦隊の生き残りと、第2方面軍艦隊の一部高速艦艇を混成した大部隊でレゾムの艦隊を一蹴した後、そのまま首都星トランスバールを目指していて、今ちょうど到着した所であった。

「ジンロ中将ですか？」

「残念ながら、間に合わなかったようだな。エオニアは既に冥府に旅立ったか……」

『エオニアを、この手で！』と考えていたジンロ中将は、一瞬寂しそうな表情をするが、すぐに元の表情に戻って優秀な司令官として動く事にする。

「敵の無人艦隊は俺が引き受けるから、お前はあのデカブツを目指せ」

「大丈夫ですか？」

「誰に口を利いているんだ？　若造が、生意気に俺の心配など十年速い！」

「十年で済むんですね」

「減らず口を！　それに、援軍は俺だけじゃないからな」

ちょうど同じタイミングで、ウォルコット中将の指揮する第十三独立艦隊が戦場に到着し、艦砲のクロスファイヤーでジンロ中将の開けた穴を更に広げて行く。

確かに、数の上では有利な無人艦隊であったが、搭載されている

戦術プログラムは、突然の奇襲に対処が完全に遅れている状態であった。
やはりこういう部分では、優秀な将官の判断力の方が勝るものなのだ。

「レイトンさん、生きてますか？」

「まあ、何とか」

「おや、珍しい所にいますね」

カンフーファイターから降りる時間が無かったアキオは、ランファの隣りで第十三独立艦隊旗艦ヒュウガのブリッジで指揮を執るウォルコット中将と話を始める。

「若い女性と密着ですか？　羨ましいですね」

「久しぶりに会って、第一声がそれですか？」

「元気ならそれで宜しいじゃないですか。おっと、フォルテさんも元気ですか？」

「私は、二番目かい？」

「重要な方を後回しにしたと思ってください」

相変わらずなウォルコット中将の言葉に、フォルテは半分苦笑しながら久しぶりの会話を楽しんでいた。
何だかんだ言っても、この二人はとても仲が良かったのだ。

「というわけで、私も援護しますので、黒き月へと急いでください」

こうして、ジンロ中将とウォルコット中将の援軍を得たタクト達は、紋章機を先頭に、攻撃衛星が進路を邪魔する黒き月へと突撃を開始する。

これで本当に最後と思われる戦いは、最大の山場を迎えようとしていた。

第十七話（後書き）

久々の投稿です。

第十八話（第一部完結）

「これが最後の戦いだ！　みんな、気合を入れてくれ！」

「「「「「了解！」」」」」

タクトの気合の入った掛け声によって、紋章機部隊を先頭にエルシオールは、一路黒き月へと突入を開始する。

今までは、先に討たれたエオニアがクーデターに利用しているだけだと思われていた黒き月とその管理人が、実は逆にエオニアを利用して、遙か昔に離れ離れになっていた白き月との融合を果たすべく、今回の戦乱を起こしていた。

その事を知ったタクト達は、シヴァ皇子に言われた黒き月のコアを破壊すべく、急ぎ突入を開始するのであったが、数百年の停滞でもはや単独で黒き月に対抗できない白き月は、今にも吸収されようとしていた。

そして、ムーンエジェル隊とエルシオールを阻む、黒き月が放出した数十基にも及ぶ攻撃衛星がその中間に配置され、更に先ほどエオニアが擁していた艦隊の数倍規模の無人艦隊が、その死角を埋めるように遊弋していた。

「ウォルコット司令、動かない攻撃衛星は、エルシオールに任せてしまいましょう。あれに既存艦艇でぶつかるのは犠牲を増やすだけです」

「そうですな。あの莫大な軍事予算を食い尽した、首都星トランスバールを守る最終防衛ライン上に置かれたデカブツの改良版らしいですからね。下手な艦隊だと全滅です」

エオニアの首都星トランスバール侵攻時に、指揮下の無人艦艇を多数撃沈した、トランスバール皇国軍の攻撃衛星のデータを回収した黒き月は、その改良版を大量に生産してから自らの守りに使用していた。

「我々を囮にして、無人艦隊を釣り上げてからクロスファイヤーで撃滅。それを繰り返すしか無い」

既に、数度その戦法を駆使して多くの無人艦艇を沈めていた両名であったが、沈めても沈めてもキリが無いというのが現実であった。

それに、向こうは失った艦をまた生産すれば戦力は補充できるが、こちらは艦が傷付いただけで訓練済みの兵士を失う事となり、その差は歴然の物となっていた。

「攻撃衛星に構うほどの余裕はありませんよ。それに、任せて大丈夫みたいですね」

フォルテ達はそれぞれに役割分担をして、エルシオールの進路上にいる攻撃衛星の攻撃を行っていた。

スピードでランファが敵の火器の照準を惑わし、遠距離狙撃が得意なちとせと、フライヤーで遠隔攻撃が可能なミントが、先の攻撃衛星の目ぼしい兵装を潰して行き、それにミルフィーユとフォルテが大火力で止めを刺し、損傷した紋章機の修復と攻撃の補助をヴァニラが担当する。

エルシオールの進路上の攻撃衛星は次々と排除されていき、無人艦隊さえ援軍に来なければ、ジンロ中将やウォルコット中将が助けに行く必要な無いようであった。

「逆に、こちらが辛いですね」

「言えてます。数が多過ぎなんですよ」

まだ沈んだ艦は無かったが、次々に入る損傷報告に二人は困ったような表情をしていた。

だが、今の時点で、エルシオールに助けを求めるわけにはいかなかった。

本当に助けてなど貰ったら本末転倒な結果になってしまうし、現時点でエルシオールがこちらに助けに来たら、それはすなわち作戦の失敗を意味したからだ。

「ルフト中将の第3方面軍艦隊、来ませんかね？」

ところが、ウォルコット中将の予想に反して、第3方面軍は間に合った。

二人が苦戦していた敵艦隊の横合いから、奇襲となる一斉射撃を行い、二人に一時体勢を立て直す余裕を与えたからだ。

「無理なんじゃないですか？　あの損害を立て直して、この戦いに間に合わせるのは……」

「やあ、ジンロ中将に、ウォルコット先輩。どうやら、間に合ったようですな」

以前よりも大分数を減らし、中には修理が完了していない艦もあったが、戦場に姿を現した第3方面軍艦隊は、敵無人艦隊に対して容赦の無い砲撃を加えていく。

そして、その登場を予想できなかった敵無人艦隊は、想定外の方向から砲撃を受けて多くの損害を出す事となった。

「ここで押し込まないと、苦戦必至ですか……」

「木村大佐、砲撃続行です」

「標的が多過ぎて、迷ってしまいますね」

続けて、ジンロ中将とウォルコット中将も、指揮下の艦隊に砲撃を再開するように命令し、多くの敵艦が爆沈して行くのだが、やはりいくら沈めてもその数は一向に減る気配が無かった。

逆に損傷して後退する艦や、運悪く沈んでしまった艦の報告がポツポツと入って来る。

「時間稼ぎだけで精一杯じゃの。タクト、レスター、アキオ。後は任せたぞ」

艦隊の指揮を続行しながら、ルフト中将は自分の教え子達に全てを託すのであった。

「間に合ったのか！　ルフト先生は！」

「司令だと何度言えばわかるんだ。だが、これで時間が稼げるな。ありがたい」

黒き月へと全速力で移動中のエルシオールの艦内では、タクトとレスターが、真剣な面持ちでレーダースクリーンを食い入るように

見つめていた。
ジンロ中将、ウォルコット中将、ルフト中将指揮の三艦隊が、数に勝り常に援軍を補給されてしまう無人艦隊の押し返される前に、エルシオールが黒き月に到着し、そのコアにクロノ・ブレイク・キャノンを発射しなければならないからであった。
艦内の戦術コンピューターが示した勝算は、４７．７９％で、ほぼフィフティーフィフティーと言える状態であった。
「微妙な数値だな」
「これなら、勝てませんかね？」
レスターに答えるようにして、現在艦内をダメージコントロールのために駆け回っているエリオスから通信が入って来る。
「エリオスか。艦内の状態はどうだ？」
「まだ被弾してないですから良好ですよ」
「なら、なぜ駆け回っている」
「被弾してから駆け回るのを、最低限にするために準備しています」
「兄貴の薫陶か？」
この容姿は似ているが、心はいまだすれ違ったままの兄弟は、まだあまり口は利かないし、たまに顔を合わせても目すら合わせない事もあった。
たまに話す事があっても、任務についての事が大半で、稀に他の

事を話すにしても、ヴァニラかランファがいないとそれすら侭ならない。

一時期は、お互いがお互いを殺そうとまでしていた関係なので仕方が無いのだが、この兄弟が本当の兄弟になる日が来るのはいつなのであろうか？

ふと、そんな事を考えるレスターであった。

「兄さんは、私に何かを教えてなんてくれませんよ」

「そうか……」

「仕方の無い事です。それに、いつまでもこの状態は続かないと私は思っているのです。だから、今は自分に出来る事をしている」

確かに、二人の准将と一人の大佐がエルシオール一艦に詰めている影響で、少佐になったばかりのエリオスにはあまり華々しい仕事は回って来なかった。

クーデター前なら、あのシードル公爵家の跡取りであるエリオスであったので、近衛艦隊か第1方面軍の参謀か、軍本部で係長クラスの待遇で任務をこなしているはずなのだが、今の彼はエルシオールの副長でしかない。

多分、昔であれば心の中で文句の一つでも言っていたかもしれなかったが、自分の兄はエリートにも関わらず、どんな場所に回されても表面上は愚痴一つ言わずに懸命に任務をこなし、名声を挙げてきた。

見習わないといけないし、シードル公爵の爵位は本来はアキオの物であったのに、彼はシヴァ皇子の勧めを蹴ってまで自分を新しいシードル公爵に押し上げてくれた。

多分アキオ自身が、そんな自分の呪われた血を思い出す、血塗られた爵位などいらないと考えての事なのであろうが、無官のままで

いれば将来、力を付けたエリオスに害される危険もあったので、まさか断るとは思わなかったエリオスであった。

『心の片隅のどこかで、エリオスさんの事を信じているんだと思います。いえ、信じたいのだと思います。いくら、今まで交流が無かったとしても、一度無実の罪で殺されかけたとしても、この宇宙で唯一の兄弟ですから』

ヴァニラに諭される言われたエリオスは、それ以来どんなに兄に罵られようと、怒鳴られようと、前に進もうと思うようになっていた。

勿論、あれ以来、理性的なアキオがエリオスを怒鳴ったり怒ったりする事は一切無かったが、任務においての注意事項や過去の失敗の経験談などくらいは話してくれるようになっていた。

『一度、完全に壊れてしまいかけた仲だから。時間はかかると思います』

最近、エリオスには良く話すようになったヴァニラ事を思い出していると、目前に黒き月が見えて来る。

遂にエルシオールは、もう少しで黒き月のコアを直撃できる位置にまで進撃する事に成功していたのだ。

「よし！　このまま、一気にコアの位置まで！」

タクトは半ば勝利を確認するが、ここで思わぬアクシデントに見舞われる。

現在、エルシオールの侵攻位置上の攻撃衛星は、フォルテ達の奮闘によってほぼ取り除かれた状態にあったが、少し離れた位置にある攻撃衛星は全く排除されていない状態にあった。

そこまでの時間と戦力が無かったからだ。

攻撃衛星は、反応を捉えているエルシオールへの攻撃を続けていたが、距離が遠くて命中しなかったり、防御フィールドに弾かれている状態であった。

ところが、本来なら奇跡に近い確率でしか命中しないはずの、遠距離からの大型レールガンの一撃がエルシオール機関部付近に着弾し、これは防御フィールドで弾かれるはずであった。

だが、先に違う攻撃衛星からの奇跡に近い命中したビームを防いでいた影響で、ダメージの許容量を超えた防御フィールドが消滅して、そのまま機関部に命中。

威力はかなり減殺されていたが、エルシオールの機関部は一時的に停止する事となる。

「クロノ・ブレイク……っ！　何事だ！」

黒き月に止めの一撃を加えようとしたタクトは、いきなり発生した衝撃に、思わず体のバランスを崩してしまいそうになる。

「機関部に、敵攻撃衛星のレールガンが命中！」

「そんなバカな！」

「エルシオールのコンピューターの予測によると、その確率は三億分の一です」

機関部が停止し、エリオスが部下達を引き連れて整備班の応援に向かうとの報告が入ったエルシオールのブリッジ内に、僅かな時間沈黙が走る。

勝てると思ったこの状況での、この奇跡的な確率で起こった不運。

タクトは、絶対に考えないようにしていたが、ココやアルモなどレスターを除くブリッジ内の全員が、前方で奮戦している、ラッキースターに搭乗しているミルフィーユの方へと視線を送る。

「やはり……、なのでしょうか？」

「おい！　戦闘中に不謹慎な発言をするな！　エリオス！」

「防御フィールドで威力が殺されているレールガンだったので、物理的な損害はほぼありません。ですが、着弾のショックで制御プログラムが全部飛んでしまって……」

この状況の原因をミルフィーユに求めたココをレスターが一喝すると、すぐにエリオスと回線を繋いで現状の報告を行わせる。

他の軍人ならいざ知らず、人の運程度で戦争の結果が変わるとは思っていないレスターは、冷静に機関部の再始動をエリオスに命じ、彼はそれを懸命に試みていた。

「クレータ班長！　もう一度プログラムを入れると、何分かかりますか？」

「五分は確実に」

「まずいですね……」

機関部で作業をするクレーター班長とエリオスには、お互いに苦悩の表情が浮かんでいた。

この目まぐるしく状況が変化する戦場で、五分間の停滞はそのまま死に直結していた。
この敵味方多数の戦力がひしめく戦場で、動けないエルシオールなど、ただの的でしかなかったからだ。

「とにかく、エルシオールへの被弾をなるべく防がないとな」

「アキオ、それってもしかしたら……」

「正解だ、ランファ。紋章機の防御フィールドを前面に最強レベルで展開して、敵攻撃衛星からの攻撃を暫らく引き受る」

「それしかねいねぇ……」

「ですかね？」

ランファとフォルテがアキオの提案を受け入れた事により、紋章機全機は、エルシオールの盾となって攻撃衛星からの攻撃を防ぐ事となる。

「これで、フライヤーは終わりです」

「私も、アンカークローがボロボロよ。後で、クレーター班長に怒られるわね」

過去に貴重で高価なカンフーファイターのアンカークローを戦闘中に喪失したランファは、あとでえらい剣幕で整備班長のクレーターに怒られていた。

「仕方がないさ。今のエルシオールを被弾させるわけにはいかない」

僅かな被弾でも、もしクロノ・ブレイク・キャノン関係の箇所を破壊されれば、トランスバール皇国軍の勝利の可能性はほぼゼロになってしまうので、例え紋章機を使い潰してでもこの攻撃を受け止める必要があり、ミントはフライヤーを、ランファはアンカークローを犠牲にして、エルシオールへの被弾を懸命に防いでいた。

「紋章機を、少しでも保たせるためには！」

ちとせは、得意の超長距離射撃で、敵の打ち出したミサイルやレールガンを撃ち抜くという名人芸を見せていた。

勿論、先のミントとランファの件を含めても、こんな芸当はシムス高速戦闘機では絶対に不可能であり、白き月でシャトヤーンにリミッターを解除して貰った紋章機ならではの、非常識な戦法であった。

だが、無理が祟る事は事実であり、紋章機は次々と行動不能に陥って行く。

「くっ！　トリックマスターが機動停止です！」

「ハーベスター、停止」

「私も駄目だ。これ以上の無茶はできないね」

「すいません、私も行動不能になりました」

損害過多で四機の紋章機が行動不能となり、残りはランファのカンフーファイターとミルフィーユのラッキースターだけになってし

まう。
　ところが、先ほどからミルフィーユの様子が少しおかしかった。
　ラッキースターはほぼ無傷にも関わらず、全く動かない状態で、エルシオールの盾としては機能していないようであった。

「ミルフィー、私達だけになっちゃったわよ！　ねえ、聞いているの？」

「やっぱり、私がいるから……」

「はあっ？」

　カンフーファイターの通信機に入って来る、小さく落ち込んだミルフィーユの声に、ランファは事情が良く飲み込めないでいた。

「私がいるから、本当は勝てた戦いを……」

「アキオ、どういう事なの？」

「（くそっ！　そういう事か！）」

　アキオは、ミルフィーユの落ち込んでいる理由に心当たりがあった。
　理論上はほぼ動かないとされているラッキースターを、この銀河で唯一動かせるミルフィーユには、強運というか凶運のスキルがあり、彼女がいると、時として確率的にまずあり得ない奇跡が発生する事が多い。
　そして、それは良い方向にも悪い方向にも発動し、どちらが起こるのかは完全にランダムで運任せな部分があった。
　ミルフィーユは、この大切な場面であり得ない被弾をしてしまっ

たエルシオールを見て、自分の責任だと思い落ち込んでしまっているようであった。

「ミルフィー！　動きなさいよ！」

「だって……」

「まだ、負けたわけじゃないんだから動きなさい！」

「でも……」

「そうだな、ここで動かないでどうするんだ。ミルフィー」

「えっ！」

ランファは、思わず耳を疑っていた。

まさか、あのミルフィーユに甘い事で有名なアキオが、硬い口調で彼女を諭すとは思わなかったからだ。

「ミルフィー、君は軍人で将校だ。それに、司令官のタクトから戦闘停止命令も受けていない。なら、動ける限り全力で出来る事をしなければ駄目だ」

「アキオさん……」

「強運か凶運かは知らないが、君の運勢程度で戦場の流れが変わってたまるか！　確率９９．９９％が起こらないのも、一兆分の一％が起こるのも戦場だと知れ！　そして、軍人としての真価が出るのは、それが起こってしまった後だ！　子供のように喚くだけなら、そのままラッキースターを降りるんだな！　俺が乗る！」

「ちょっと、アキオに操縦できるはずが！」

まさか、適性も無いアキオに紋章機が操縦できるはずもないと考えたランファは、彼にそれが無謀な挑戦である事を伝えるが、アキオはそれを無視して話を続ける。

「それでも、試す！　一兆分の一、一京分の一でも、可能性があればやる！」

アキオは、以前はかなり死と隣り合わせの運が作用している部分もある生活を送っていた。

今では、良く悪運が強いと揶揄する事が多かったが、アキオは別段人より運が良いわけではない。

良くて普通で、下手をすると人より運が悪い可能性もあった。

だが、アキオは生き残るために懸命に努力をして、悪運を自分の身に引き寄せて今までを生き延びてきた。

本当に悪運かはわからないが、現にアキオはこの場にいるし、そのアキオからしたら、今の状況を自分の凶運のせいにして動かないミルフィーユは許せないのであろう。

珍しくというか、初めて彼女に強い口調で当たっていた。

「レイトンの言う通りだよ。ミルフィー」

「タクトさん」

そこに、エルシオールの再起動を指揮しているタクトから通信が入って来る。

「レイトンは、俺達より経験者だからね。運だけで戦争に勝ったり

負けたりなんて、そんな事は信じたく無いんだよ。いや、実際に悪運・凶運・幸運・不運はあるのかもしれない。でも、それを最終的に呼び寄せるのは、その人の日頃の行いだと思うんだ。そして、レイトンはそれを誰よりも知っているんだ」

タクトの、優しい口調ではあったがしっかりとした意見に、ミルフィーユは萎えかけていた気力を取り戻しつつあった。

「ミルフィー、君なら出来るさ」

「はいっ！　タクトさん！」

タクトの励ましによって元気になったミルフィーユは、ラッキースターを再起動させると、そのまま機首の大型ビーム砲を発射し、それを鞭のようにしならせながら、エルシオールに迫っていた大量のミサイル・レールガンなどを振り払うように落として行く。

「凄いな。エネルギー保存と物理的法則を無視していないか？」

「あの子の強運の賜物よ」

「俺らは、限界が来てドボンだけどな」

ミルフィーユが立ち直るまでの間に、一人で奮戦していたランファは、カンフーファイターへのダメージが限界を超え、他の紋章機と同じくその場で動けなくなっていた。

勿論、それに同乗しているアキオも同じ状態であった。

「ランファ！」

「もうあんただけよ！　頑張りなさい！」

だが、ミルフィーユにも限界が訪れていた。

距離は離れていたが、攻撃衛星と黒き月本体からの攻撃を、エルシオールと既に行動不能になっていた他の紋章機に当てないように奮戦する事が可能な時間など、さして長い物では無かったからだ。

ラッキースターの攻撃によって、数基の攻撃衛星が沈黙し、黒き月に設置された武装のかなりを削り取るという無双を成し遂げたミルフィールではあったが、次第に迫って来る限界に焦りを感じるようになっていた。

「プログラムの再起動は？」

「駄目です！　あと二分！」

「そんなに保つか！」

さすがのレスターでも駄目かと思われたその時、ブリッジのメインスクリーンに、気合を入れた表情のミルフィーユの顔がアップで映し出される。

「まだです！　奇跡は、私が起こします！　お願い！　今この瞬間だけでいい！　私を幸運の女神にして！」

ミルフィーユは、大きな声で叫ぶとラッキースターをエルシオールの前方へと全力で飛ばし始める。

すると、シャトヤーンの封印解除によって生えていたラッキースターの羽が眩いばかりの光を放ち、羽ばたきの度に落ちる羽毛がエルシオール全体を包む。

「エリオスさん！」

「どうかしましたか？　クレーター班長」

「クロノ・ストリング・エンジンの、起動プログラムの高速ダウンロードが開始されました。速い！　あと七秒で終了」

「どうしてです！」

「わからないです！　更に、クロノ・ブレイク・キャノンのエネルギー充填率のデータが復旧しました充填率９９．９９％！」

「一度エンジンが落ちたのにですか？　奇跡だ……」

本来羽など生えるはずもない兵器に羽が生え、その羽ばたきによって発生した羽毛に包まれたエルシオールは、一瞬の内にクロノ・ストリング・エンジンを復旧させ、一時エンジンを停止させていたために、大幅に減っていると思われたクロノ・ブレイク・キャノンのエネルギー充填率を、一瞬の内に回復させていた。

まさに、奇跡と呼ぶに相応しい出来事であった。

「タクトさん！」

「よし、あとは任せてくれ！　ココ！」

「クロノ・ブレイク・キャノン！　エネルギー充填率１０５％！照準は黒き月のコアで固定終了！　いつもで行けます！」

「これで終わりにするぞ！　クロノ・ブレイク・キャノン！　発射！」

タクトが発射命令を下すと、エルシオールから本日二回目となるクロノ・ブレイク・キャノンのエネルギーの奔流が発射され、それは正確に黒き月のコアに直撃をする。

「なぜ、あの状態で打てるのだ」

黒き月の管理人は、もはや自分が助からない事を冷静に瞬時に悟っていた。

コアを守る防御フィールドのエネルギー量と、エルシオールの発射したクロノ・ブレイク・キャノンのエネルギー量が比べ物にならない事に気が付いたからだ。

「白き月の愚か者めが。我らが、お互いに自己進化し融合する理由すら忘れおって。その中途な力で、後で苦労するがいい……」

黒き月の管理人がそこまで語った瞬間に、黒き月のコアは限界を超えた防御フィールドの消滅と同時に砕け散り、更にまだ威力を残したクロノ・ブレイク・キャノンが、黒き月の他の部分を徐々に侵食して破壊を広げて行く。

そして数秒後、大爆発を起こした黒き月は、そのほとんどが残骸と化してしまう。

「やったか！」

「黒き月のエネルギー反応が消失しました！　完全に機能を停止したものと思われます」

「やったぞ！」

アルモの報告を受けたタクトが喜びの声をあげると、それに少し遅れてから、エルシオールの艦内と、他の戦いに参加していた味方艦隊の将兵達から歓声が響く。

黒き月の消滅後によって、倒しても倒してもキリが無かった攻撃衛星と無人艦艇の動きが一気に停止したからだ。

「やったな。おい！　攻撃停止だ！」

「攻撃中止です。回収すればまだ使える新品の船を無駄に壊さないように」

「ウォルコット先輩は、しっかりしていますな」

「補給のウォルコットですからね」

ジンロ中将、ウォルコット中将、ルフト中将の三名は、それぞれに動きの止まった敵艦隊への攻撃命令を停止させていた。

ただ、常に中央で要職に就いていたジンロ中将は、これ以上の砲撃は弾薬が勿体ないからという理由がメインであり、通商護衛艦隊で予算と物資の遣り繰りに苦労していたウォルコット中将と、どちらかと言えば軍政家として有名なルフト中将は、この動きを止めた無人艦隊を回収して使えば、新規艦艇の建造費を押さえられて復興予算が増えると踏んでの、早期の攻撃中止命令であった。

「ですが、これからがもっと大変なんですよ」

ウォルコット中将の言う通りであった。

首都星トランスバールを有し、トランスバール皇国の中心部にあるこの宙域を、いつまでも無人艦隊や攻撃衛星の残骸や遺棄兵器などで充満させていては、迅速な経済活動の回復や、治安維持の面に

置いても色々と問題が発生してしまうからだ。
それに、肝心の首都星トランスバールの占領、占領後の軍政、エオニア派の軍人や政治家の逮捕、被災者や難民の救援など、むしろこれからの方がやる事が多いのが現実であった。

「ウォッカ大将から、追加で戦力を貰わないと厳しいですな」

「あのご老人の事ですから、もう動いていると思いますけど」

結局、三中将の指揮する艦隊の将兵達が喜んでいたのは、ほんの僅かな時間だけであった。
あとは、いまだにエオニア軍の占領状態にあるとされている、首都星トルランスバールを奪還するための特別陸戦隊の編成や、自軍の死者の搬送や負傷者の治療、戦場に放棄された宙路を塞いでいる残骸や、動かない敵無人艦艇の回収など、細々と動き始めていたからだ。
むしろ、本番はこれからであった。
戦って勝ってそれですぐに終了というほど、軍や政府は甘い場所ではなかったからだ。

「みんな、働き者だよなぁ」

「お前なぁ……。しかし、俺らはどうにも動けない」

やはり無理が祟ったのか、クロノ・ブレイク・キャノン発射後のエルシオールは、機関部の出力を大幅に落としていて、その修理と先に活動を停止させていた紋章機の回収など、とても三中将の艦隊を助ける余裕など存在しなかった。
元々儀礼艦で、省力化が進んでいて乗組員が少なかったので、人海戦術に頼る事になるこの手の任務には不向きなエルシオールであ

ったからだ。
それに、今回はアキオとレスターを貸せという命令も来ていなかった。
さすがに三つも艦隊があって、それなりに人材も充実していたので、ジンロ中将達は、二人が周りから嫉妬を受けやすくなるような事は慎んだらしい。
それとアキオに関しては、先ほどの命を張った行動が既に三中将に漏れていたので、またここで無茶をさせてもという結論にも至ったようだ。

「タクトさん……。私……、やり……」

「ミルフィー！　大丈夫か！」

それに、最後の最後で奇跡を起こしたミルフィーユが、ラッキースターのコックピットの中で気を失ってしまったらしく、タクトの心の中は、今は自分の恋人の事で誠一杯の状態であった。

「ただ今、戻りました」

「おお、ご苦労だったな」

「実際には、何も出来なかったですけどね。桜葉少尉の奇跡が勝因ですよ」

機関部の修理を、専門家であるクレーター班長以下の整備班に任せて戻って来たエリオスにレスターが声をかけるが、彼は自分は何も出来なかったと話していたが、安堵したような表情を浮かべていた。

「ベルツェルを持っていかれたな」

「ええ、彼はプロですからね」

三中将は、エルシオールに対してここで意外な人物のレンタルを要請して来た。

元海兵隊師団長で、今はエリオスの執事を務めるベルツェルを、臨時の首都星トランスバール占領軍司令官として貸して欲しいとエリオスに通告して来たのだ。

事前の偵察によると、既にエオアニ軍にいた傭兵主体の少数の兵達は逃げ散り、戦力の要であったロボット兵士達も活動を停止しているらしいが、艦隊にいる余剰人員で構成された特別陸戦隊だけで、戦地の占領と治安の回復はなかなかに難しい状況らしく、過去に多数の反政府軍を拠点を占領し、その周辺の町などの軍政を行った事のあるベルツェルに白羽の矢が立ったらしい。

その手の専門家を乗せた援軍を待つという手もあるのだが、現在の統治者不在の首都星トランスバールでは、一部市民による生活物資確保のための暴動なども発生していて、一刻の猶予もならないというのが現実であった。

「彼は、引き受けたのか？」

「『自分は、引退した人間だから』と一度は断ったらしいですけどね。私が、命令しました」

「ほう、どうしてだ？」

「新政権に恩を売れるからです」

自分の執事であるベルツェルに、首都星トランスバールの占領と

軍政を行わせて、早期に混乱を回復させてシヴァ皇子とウォッカ大将に恩を売る。
いまだ財政を立て直し中のシードル公爵家にとって、またとない功績となるであろうと考えて、彼に命令を下したエリオスであった。

「そういう部分は兄弟だな。実に、兄貴に良く似ているよ」

「まだまだですけどね」

レスターとエリオスが話をしている間に各紋章機が回収され、コックピットの中で気絶したミルフィーユが心配なタクトは、一目散に格納庫へと走って行く。

「タクトのやつ、許可くらい取れよ」

「それだけ心配なんですよ。では、私も行きますので」

「どいつもこいつも……。まあ、いいさ。今のエルシオールでは、修理の監督くらいしか仕事は無いからな」

レスターは、エリオスがヴァニラの元へ行く事にすぐに気が付いたが、それを快く送り出せるようになっていた。
ただ、他人のその手の事には多少敏感になったレスターではあったが、自分の事になるとまだまだ先は長いようであった。

「（私にも、声くらいかけて欲しいです）」

アルモの少し潤んだ瞳に気が付かないまま、一人黙々と真面目に修理の監督を行うレスターであった。

「終わったな」

外は、いまだに三艦隊が戦場跡の掃除と戦況の把握に努めていて、同時にエリオスからレンタルしたベルツェル臨時先遣占領司令官（臨時で現役復帰したため）指揮下の陸戦・治安維持部隊を臨時で首都星トランスバールに降ろすなど、色々と忙しくて勝ちを祝っている状態ではなかったが、全ての紋章機と艦自体が修理中のエルシオール艦内では、平穏な空気が広がっていた。

他に手段が無かったので、外の作業を手伝わずに済んだからだ。

「タクトは、医務室に運ばれたミルフィーの付き添いで、アレはヴァニラ達とお茶でも飲んでいるのかね？」

一人自室で静かに考え事をしているアキオは、長かった今日の事を振り返りながら、一人ベッドに上に座って考え事をしていた。

確か、ミルフィーユを除くムーンエンジェル隊の面々は、ティールームで今日の事を思い出しながら休憩をしているはずであった。

本当は、アキオもミントとちとせに誘われたのだが、そこにはアキオがアレと呼ぶエリオスがいて、まだ心情的に参加する気持ちを持てないでいた。

皇国軍将官としての理性と、シヴァ皇子即位後の皇国の統治体制の安定を考えてと、ウォッカ大将がまだ使えると判断したのでそれを受け入れてのシードル公爵家の存続と、なぜかエリオスを庇うヴ

ァニラのせいで彼をどうこうはしていないが、実際のところ、あの弟の事は良くわからないというのが本音であった。

いっそ、あの時に感情に任せて殺せていたらそれも運命だったのだろうが、そこまでした自分があの父親と何が違うのかとも考えていたし、だからと言って、彼と仲良く兄弟付き合いなど出来るはずもない。

これは、母の死と同じく、一生をかけて解決する問題なのであろうとアキオは考えていた。

それと、部屋に篭ったのには、もう一つ個人的な理由があった。

「あの時は、飲めなかったからな」

コンゴウのブリッジの中で、最後に飲もうと思っていたシャンパンを急いで自室の巨大冷蔵庫に入れたアキオは、秘かにそれが冷えるのを待っていたのだ。

結局、死を覚悟した自分は生き残り、誰よりも生と権力を渇望していたエオニアは、不運にも宇宙の塵と成り果てた。

戦いの前に、『暫く、長い休暇でも取って』と言っていたし、正直なところここ数年の忙しい日々で色々と疲れている部分もある。

多分、一応の状況が落ち着けば、自分にも叙勲やら昇進やらの伝達が来ると思われるが、今のアキオは別段それが欲しいわけではない。

早めに退役願いを出して、軍を抜けてしまおうと考えていた。

「旅にでも出るか。定期的に会社の数字くらいは見ないと行けないから、ブラマンシュ会長には連絡先を教えないとな」

これからの事を考えながら、冷蔵庫に入れたシャンパンを取り出し、一人で栓を抜こうとしたアキオに意外な珍客が現れる。

それは、ティールームを秘かに抜け出して来たランファであった。

「アキオ。あんた、その酒って軍規違反じゃないの？」

「お前こそ、いきなり男の部屋に入るなよ」

「万が一、あんたに襲われても返り討ちよ。というか、その巨大冷蔵庫は何？」

ランファは、始めて見るアキオの巨大冷蔵庫とデスクとベッドだけの部屋に驚いていたが、実際に冷蔵庫の中を開けてみて、中に酒瓶とツマミしか入っていない事にはもっと驚いていた。

「ご覧の通りに、その冷蔵庫の中には酒しか入っていない。例外としてツマミもあるが」

「確信的な軍規違反ね……」

「フォルテとタクトは知っているぞ。何しろ、共犯者だからな」

黙っていれば定期的に高い酒が飲めるので、前記の二人は暇さえあればこの部屋に訪れて、秘密の酒盛りに参加していた。

「どうして、私にバラしたの？」

「お前が、勝手に部屋に入って来るからだ」

「ロックすれば良かったじゃない」

「そう言われるとそうだな」

何となしに一人になっていたが、誰かと話をしたかったのかもしれない。
そんな事を考えながら、アキオは高級シャンパンの栓を抜き、用意したグラスに丁寧に酒を注ぎ始める。
グラスの数は二つだった。

「私にもくれるの？」

「軍規違反の共犯になる覚悟があったら飲め。それとも、まだ二十歳前だから飲んだ事がないとか？」

「まさか。へえ、でも綺麗な色をしたお酒ね。乾杯の音頭は？」

「乾杯なんてするのか？」

「せっかくの高そうなお酒じゃない」

「高そうなんじゃなくて高いんだ」

「どのくらいするの？」

「前に、これを所持していた資産家が破産して、この酒がオークションに出た事がある。落札価格は、２５０万ギャラだった」

「嘘っ！」

アキオの口から出たとんでもない金額に、ランファは本当に手に持ったグラスに入った酒を飲んで良いのか不安になってしまう。

「俺は、別のツテで半額ほどで入手したけどな。それに、酒なんて飲んでナンボなんだ。さっきは、人生最後の酒だと思っていたが、ランファのおかげで次の人生を繋ぐ酒になった。遠慮しないで飲め」

それに、今この酒瓶の栓を抜こうとした瞬間に現れたのが、自分を生に引き戻したランファであった。

先ほどのコンゴウ艦内での件といい、この酒はランファに飲まれたがっているはずだ。

酒に関しては、少しオカルト的な思考をするアキオであった。

「次の人生？　アキオは、軍を辞めるの？」

「一時的にかな？　とにかく疲れたから、半年ほど休んで考えてみる事にする。ランファは？」

「私は、軍人を辞めるつもりはないわ。実家への仕送りもあるし」

ランファは、どうしてなのかは良くかわらなかったが、実はミルフィーユにもほとんど話した事が無い、自分の実家の事をアキオに話し始める。

辺境の貧しい農業惑星で、貧乏子沢山の家に生まれたランファは、とにかくこの貧しい故郷を早くに出たかった。

それに、故郷の惑星では大半の人間が義務教育を受けると、そのまま農民となり、女性は若くして嫁に行くのが習慣であったので、そういうのが嫌で余計にドラマの恋愛に憧れる部分があるらしい。

だが、一部に例外はあった。

惑星政府が、主であるトランスバール皇国に媚を売るためと、中央での一定の影響力を保持するために、優秀な人材を一人でも多く中央に送り出そうと考えて、全市民が六歳の頃に知能テストを受ける事になっていたのだ。

これで優秀な成績をあげると、学費が無料になったり奨学金が貰えたりするので、ランファの故郷の惑星では、自分の子供がその選抜に選ばれる事は名誉とされ、ランファは見事にそれを獲得し、その後は優秀な成績で中央士官学校に入学。

見事に次席で卒業というのが、今までの彼女の経歴であった。

「上を目指すのか？」

「どうなのかしら？　でも、佐官になるには軍大学に行くか、上級昇進試験に合格しないといけないけど」

トランスバール皇国軍では、士官学校卒業後に大尉にまでなった後に、一つの人生の区切りを迎える事となる。

それは、現場の上司の推薦と入学試験を受けて、一年間の軍大学生活を送るか、いきなり本番で上級昇進試験を受けて合格するかのどちらかをクリアーしないと、まず中佐以上にはなれないので、それを受けるか否かを、自分で決めないといけなかったからだ。

ただ、絶対に上の条件をクリアーしないと中佐以上になれないという事はない。

圧倒的な功績や戦果をあげた者は普通に昇進していたし、この戦乱で昇進を乱発した結果、いつの間にか偉くなった者もいる。

アキオの下にいる木村大佐やマッコリ大佐は、実際に功績はあげていたが、更にアキオが上手く作成した海賊退治の経過報告書によって昇進した部類の軍人達であったし、またこの皇国の常で、貴族なら大して勉強しなくても軍大学には普通に入れたし、上級昇進試験の問題もそれとなく漏れるシステムになっていた。

ちなみに、アキオは一発合格組であった。

「今度の功績で中尉にはなれるさ。皇国軍の英雄殿を、一階級の昇

進と、原材料いくらなんだ?的な勲章の授与だけで誤魔化せる。なんと、国家とはケチくさい存在なんだろうな?」

「あんたの毒舌は相変わらずね。私は、軍人の仕事は続けるけど、やっぱり結婚に憧れるわね。それで、休日に旦那と子供とピクニックに出かけるのよ」

「女性ってのは、誰しもそういうものなのか?」

「アキオには無いの? 結婚願望は?」

「一生一人で居ようとはもう思わないが、男なんて三十歳前に結婚すればいいんじゃないのか?」

「あんたねえ……。そんな事を言っていると、ミントとちとせに呪い殺されるわよ」

「呪い殺されるって……。俺は、暫く人生をコースアウトするからな。もう少ししたら考えてみるよ」

「そう」

まだそういう事は考えられないと言うアキオに、なぜか心から安堵してしまうランファであった。

「じゃあ、私のエリート街道まっしぐら祈願と、アキオの新しい人生を祝して乾杯!」

「乾杯!」

あまり色気のある会話ではあったが、二人はお互いがお互いの事を長時間話し合う時間を初めて持つ事に成功していた。

アキオとランファ。

この二人が、運命のカップルとなるのかはまだわからなかったが、ランファがミントとちとせとほぼ同位置に立った事が証明された瞬間ではあった。

「このお酒、美味しいわね」

「栓をしても味が落ちるからな。一気に飲み干すのが酒飲みの決まりだ」

「じゃあ、私もお代わり」

二人は、高級シャンパン一瓶を二人でそのまま全部飲んでしまったのだが、数時間後にそれが原因で激怒した人物がいた。

空の酒瓶を見つけたフォルテであった。

「アキオ！　お前、こんな一生に一度飲めるか飲めないかという酒の栓を開ける時に、私を呼ばないとはどういう事なんだい！」

「こらっ！　俺の首を絞めるな！　一応、上官なんだぞ！」

「同じ酒飲みの仁義として、許せないね！　それで、誰と飲んだんだい？」

「ランファだよ！　まあ、一応のお礼を兼ねて……」

アキオは、末期の酒にと考えていた物を、自分の救出に来たランファに差し出して何が悪いと言った趣旨の発言をする。

「あんな二十歳前ガキには、後でビックパフェでも奢っておけば良かっただろうに！　あーーーっ！　三百五十六年物のネオドンペニリオンの限定仕込み品！」

「悪かったよ。後で別のを見繕うよ」

「じゃあ、同年代のネオブルゴーニュの貴腐の赤。あれを開けてくれ」

「俺も、半分飲むからな……」

この件で、アキオはフォルテに貴重なコレクションを一本開封する約束をしてしまうのであった。

「ようレイトン。お前も、シヴァ皇子との謁見か？」

「まあな」

黒き月の破壊から二週間後、ようやくに首都星トランスバールとその周辺宙域が落ち着き、軍官民揃っての復興が始まろうとしていた。

ベルツェル少将指揮の臨時治安維持部隊の任務も、ウォッカ大将の用意した部隊と交代して、彼もようやくに元のシードル公爵家の

執事へと戻り、彼は今は中央にあるシードル公爵家の資産状況の把握に精一杯の状態であった。

他にも、軍人達はエルシオール組を除けば目が回るほどの忙しさであったし、シヴァ皇子も国民に向けての演説やら、沢山空いてしまっている各役職への任命やら、功績のあった者に対する昇進やら叙勲で忙しく、更に数週間後には正式にトランスバール皇王への就任の儀式が待ち受けていた。

そして今日は、軍を退役するために色々と準備をしていたアキオと、エルシオールで待機状態のタクトが、一週間ぶりに白き月の内部で再会を果たしていた。

「どうだった？」

「普通に昇進と勲章の授与さ」

トランスバール皇国に侵攻したエオニアを打ち、彼の力の源泉でもあった黒き月を破壊した。

タクトの功績は、トランスバール皇国軍の他の誰よりも抜きん出ていて、しかも彼は三男坊ではあったが皇国貴族でもあった。

エオニアの粛清で大幅に数を減らした貴族ではあったが、安定した皇国の運営にはまだ一定数の貴族が必要であったので、まだ二十二歳でしかないタクトを少将にする事に、周囲から特に反論は出なかったとの事であった。

なぜなら、この世は常に英雄を欲しているからだ。

「同期の星君、これからも頑張れよ」

「給料と年金の額が上がるからな。邪魔にはならないから貰っておくさ。それに、お前も昇進なんじゃないのか？」

「さあな？　おっと、俺の謁見の時間だな」

シヴァ皇子のお付の兵に呼び出されたアキオは、そのまま謁見の間に入る。

以前に、白き月の聖母であるシャトヤーンと初めて謁見した部屋であった。

首都星トランスバールの王宮と、その周りの官庁街や市街地がエオニア軍の砲撃で破壊されてしまったので、臨時に白き月の内部を仮の王宮としていたからだ。

「アキオ・レイトン准将、入ります」

「アキオ、久しぶりだな」

謁見の間に入るや否や、アキオに声をかけてきたのは恩師であるルフト退役大将であった。

彼は、ウォッカ大将から皇国宰相へと推薦され、それを泣く泣く引き受ける事となっていた。

『どうせワシがやっても、良くて二～三年じゃろうからな。本当は、すぐにでも退役して、リゾート惑星に買った小さな別荘で、読書と音楽と酒と釣りに興じたいのじゃがな。リゾート惑星じゃから、孫やひ孫も休みに遊びに来るであろうし』

皇国奪還という大きな仕事をやり遂げたウォッカ大将は、これを機にキッパリと現役を引退するつもりであった。

今まで完全に傍流にいた自分が、最後の最後で歴史に残る大活躍をしたので、本人はもう大満足していたからだ。

ところが、今回のクーデター劇で多くの上の人材の大半を失って

しまった結果、平民出身者初の宰相に推薦されるという話を噂で聞いた彼は、それを避けるべく先にルフト中将を大将に昇進させて後、すぐに退役させてから強引に宰相にしてしまう。

勿論、ルフト退役大将は断ったのだが、『七十歳を超えたジジイに、面倒な仕事をさせるな！』とウォッカ大将に怒鳴られ、渋々これを引き受ける事となっていた。

ただ、ルフト退役大将は、『皇国の復興事業の方が忙しいので、軍事の事は任せます』と言って、ウォッカ大将を軍務大臣に強引に命じていた。

引退するつもりであったウォッカ大将は、『しまった！』と思ったのだが、自分が宰相にしたルフト退役大将は、皇国では皇王の次に偉い人物なので逆らうわけにはいなかった。

年齢とキャリアの関係で、逆らう事も十分に可能ではあったが、まさか自分から皇国の秩序を乱すわけにはいかなかったからだ。

『すぐに、後任に譲るからの』

ウォッカ大将は、ジンロ大将かウォルコット大将を自分の後任にするために教育を行う事とし、ジンロ大将を近衛艦隊司令兼トランスバール皇国軍最高司令長官に、ウォルコット大将を今度新設される、各正規艦隊と同格扱いされるの通商護衛艦隊の司令に任じていた。

アキオが第2方面軍で拡大させた通商護衛艦隊を参考に、トランスバール皇国全域の通商路護衛、海賊退治、各惑星政府の力の及ばない宙域における治安維持などを迅速に行う組織であった。

ちなみに、第2方面軍の担当は昇進した木村准将が担当し、同じく昇進したマッコリ准将は、ウォルコット大将の補佐に入るために中央に転任となった。

他にも、アキオが集めて育てた沢山の人材が中央に上がっている。

暫くしてから、口の悪いある貴族が、『アキオ・レイトンの軍閥の誕生だと』揶揄していたが、それは考え過ぎというものであった。
他の方面軍が、半ば下働きの要素のあるこれらの任務を行う部隊の育成を怠り、発足当初に十分な数の専門知識を持つ軍人を送り込めなかっただけなのだから。

「アキオ、退役は考え直してくれないか？　いや、退役しても良い。お前が、私の補佐をしてくれれば」

ルフトは、アキオが四十歳くらいになるまで自分の下で仕事をさせてから、一人適当な人間を挟んで、アキオを皇国の宰相にしてしまうつもりであった。
あのエオニアが欲しただけあって、アキオは軍人だけでなく政治家としての才能も有していたからだ。
だが、アキオはそれを断り、軍を一時退役して一人旅に出る事になっていた。

「自分探しか？　じゃが、そんな物は……」

「いえ、普通に長期休暇です。長くて半年ですよ」

「では！」

「会社の経営もあるので、適当に閉職を希望します」

アキオの答えに、ルフト宰相はガックリと肩を落としていた。
だが、ルフト宰相はこれ以上何も言えなかった。
過去の経歴を考えると、エオニア側に付いて自分達を破滅に追いやっても文句の言えない人物が、理性で踏み止まって自分達に全力で力を貸してくれたのだ。

ここで、無茶を言うのは酷だとルフト宰相は思っていた。
現にこの件に関しては、ウォッカ大将もウォルコット大将も何も言っていなかった。

「シヴァ皇子が、お会いになられるそうです」

とそこに、シヴァ皇子の侍女を勤める女性が現れ、アキオにシヴァ皇子の用意が整った事を伝える。
実は今回、シヴァ皇子はアキオとの謁見である条件を出していた。
通常なら、必ず宰相であるルフトが横に控えるのは常であったし、多数の衛兵も付くのだが、シヴァ皇子はなぜか二人きりでの謁見を希望していて、さらにその時の話の内容を秘密にすると宣言したからだ。

「粗相の無いようにな」

「手打ちにされない程度には、礼儀を弁えますが」

「お前は何をしても卒が無いが、たまに怖い事を言ったりしたりするからの」

心配そうなルフト宰相を背に、シヴァ皇子の待つ謁見の間に入ると、そこではシヴァ皇子がアキオを待ち構えていた。

「レイトン！　いや、アキオ！　お前、この前に死のうとしたな？」

シヴァ皇子の一言目は、先日アキオが沈み行くコンゴウに残った件の追及であった。

「いきなりですね。人間、誰しも一時の迷いはあるものです」

「人には、何が何でも生き残るように言っておいて、自分が潔すぎるのは考え物だな。以後、気を付けるように」

「はい、二度といたしませんので」

これは多分、シヴァ皇子の素の性格というか優しさから出た言葉であり、死んだエオニアなどに言わせれば、『甘い！』と言われるかもしれなかったが、アキオは、エオニアではなくシヴァ皇子を選んだ事を心から良かったと思っていた。

能力はあるが、合理的で冷静過ぎるエオニアと、能力はまだ未知数で、時に感情を露にし過ぎたり青臭い理想論を言う事はあったが、臣下に優しい部分を見せるシヴァ皇子。

明確な根拠を示せと言われると難しかったが、アキオはシヴァ皇子の方が皇王に向いていると、今では思うようになっていた。

確かに、国を統治するのに綺麗事だけでは済まない話も沢山あるのだが、それは家臣が被れば良い事であって、一番上にいる皇王が優しい事に何ら不都合は存在しなかったからだ。

「その件は、それで終了だ。ところで、そなたは一時軍を退役するらしいな？」

「はい、久々の長期休暇です」

「だから、昇進を断るのか？」

「いえ、その件と昇進を断った件に関連はありませんよ」

アキオが、少将への昇進を断った理由は他にあった。

それは、以前に故ジーダマイヤ大将によって無実の罪に陥れられ、

その疑いが晴れた時に彼を容赦なく殴り飛ばした件であった。

「あれは、ジーダマイヤ大将に責があったと思うが……」

シヴァ皇子は、ジーダマイヤ大将の怪我をエルシオール艦内での転倒事故だと自分で発表していたので、まさかそんな理由でアキオがこれからの昇進を断るとは思わなかったのだ。

「責任がどうこうでは無いのです。堅苦しい話ですが、軍という組織を運営するにおいて、どんな理由があろうとも、私のした事は不祥事なのです。それに、本来あった事がシヴァ皇子のおかげでチャラになった。これは、為政者としては不平等な事をしています。本来は、私の罪も裁かれなければならない。だから、私はもう昇進できないのです」

あれだけ皇国に貢献したシードル公爵の落胤であるアキオ・レイトン准将でも、法律に触れる事をすれば罰せられる。

この罰とは、表立って罰してはいないが、アキオがなぜか昇進できなければ、それなりに聡い人物ならそれとなく気が付くであろう。

「お前は、真面目なのか不真面目なのか良くわからない時があるな。だが、お前が昇進を拒む理由は他にもあるな？」

シヴァ皇子はこれ以上は語らなかったが、アキオはシヴァ皇子が察してくれた事だけは理解していた。

それは、自分が人臣位を極める事にまるで興味が無い事と、一生タクトの下の階級で甘んじるという事であった。

「あの男は、本当に不思議な男だ。お前ほどの男が、出世を断ってでも下にいたがるとは。どうしてだ？」

「簡単な事ですよ。あそこにいると楽しいからですよ。私にとっては、宰相になるよりもあそこに居た方が楽しいからです。それに、貴族や皇族や大臣や最高司令官や宰相なんて、本当は孤独で責任ばかり重くてつまらない物なのです。更に、そう感じない人には適正が無い事が多い。世の中上手くいかないものです」

「そうか……」

「ですが、私はシヴァ皇子の、いや数日後には陛下ですか。私は、あなたの一生の家臣ではありますので。これはという時には力をお貸しいたしましょう。微力ではありますが」

それと、もう一つアキオが皇国で顕職に就く事をしない理由があった。

それは、一人の天才によって上手く運営されていた組織は、劣化が早いという考えによってだ。

別に傲慢でもなく、アキオは自分をあの本当は父親とは認めたくない男と同じく、天才の類だと思っていた。

だが、天才が上手く運営していた組織を秀才と凡人が引き継ぐと上手く行かない事が多く、むしろ長い目で見ると逆に害悪になる事が多かったからだ。

「私の存在は、イレギュラーですから。生まれなどを考えると、特にそう思います」

シヴァ皇子は、アキオの話を聞きながら彼の目を見ていた。

そして、『歴史に残る天才とは、こういう人物の事を指すのかもしれない』と思いつつ、以前にエオニアに言われた、権力者の功臣粛清を避ける一つの手段がこれなのだと悟っていた。

平気で皇子である自分に毒を吐く癖に、実はこういう細かい部分で慎重な性格をしているアキオは、まだ心の中に闇を持っていて、それは一生をかけて解決する問題なのであろう。
少なくとも、シヴァ皇子はそう考えていた。

「たまに、余の前に顔を出す事を忘れるなよ。とは言っても，余は暴君になる予定だからな。手が足りなければ、遠慮なく使わせて貰うが」

「これは、実にお厳しい事で」

「さて、まさか勲章は断らないであろうから、これは後で適当に授与する事として、余からアキオに特別に恩賞を与える事としよう」

「恩賞ですか？」

いつの間にか、シヴァ皇子に名前で呼ばれている事に気が付くアキオであったが、それよりも特別な恩賞の事が気になっていた。

「世界で一つしか無い物を与えよう。目を瞑って、膝を落とすがよい」

「ここで粛清して、英雄として銅像にするとか？」

「被害妄想も甚だしいな」

「冗談です」

シヴァ皇子の言う通りに、膝を落としてから目を瞑ったアキオに次第にシヴァ皇子の気配が近付いてくる。

何をくれるのか皆目見当がつかないアキオであったが、解答はすぐに提示された。

首に手を回されたかと思うと、そのまま唇に柔らかい感触と、あの年代特有の高めの体温と、ほのかに良い香りを感じたアキオであった。

アキオは、シヴァ皇子にキスをされていたのだ。

「（えっ！）」

同じ男性にキスをされたと思ったアキオは、最初はさすがに混乱していたが、別に同性愛者でもないのに、なぜか嫌な感情を一切抱かなかった事に疑問を感じていた。

「よし、目を開けるがいい」

時間にして十秒ほどのキスの時間は終わり、アキオが目を開けると、そこには少し顔を赤くさせたシヴァ皇子が立っていた。

「余のファーストキスだ。これを胸に仕舞って、一生の誉れとするがいい」

「確かに、胸に仕舞っておかないと色々と後で面倒になりそうな事ですね」

「相変わらずの毒舌だな。実はな、公表するまではまだ秘密だが、余は一応は女だからな」

「そうだったんですか？」

シヴァ皇子は、アキオにぐいっと近付くと、そのままそう宣言す

る。

確かに、これから結婚をして跡継ぎを生む事となる、シヴァ皇子（皇女）のファーストキスの相手がアキオである事が公になったら、色々と面倒な事が起こるはずであった。

つまりは、アキオに恩賞は与えたが、それを知っているのは二人だけの秘密にするという事であった。

「今日は、愉快な日だな。まさか、アキオのそんなに驚いた顔が見られるとは」

「シヴァ皇女も、なかなかにお人が悪い」

「お前に言わせると、『女皇の方が、大衆の受けと人気を得やすい』というやつだな。なかなかに楽しい一時であったが、まだ予定も詰まっている。暫しの休暇を楽しむがいい」

アキオの、長いようで短かったシヴァ皇女との謁見は、これで終了となるのであった。

「アキオさん、考え直してくれませんか？」

「そうですわ。中央がお嫌なら、私達と一緒に」

シヴァ皇子との謁見の翌日、奇跡的に破壊を間逃れた首都星トランスバールの王宮近郊の宇宙船専用空港で、私服姿のアキオはちとせとミントに退役を踏み留まるように懇願されていた。

「ちとせ、ミント。何回も同じ事を言わないの」

「ランファさんは、寂しくないんですか？」

「別に、今生の別れでもあるまいし……」

軍本部に退役願いを出し、官舎の荷物とエルシオール艦内の酒入りの冷蔵庫も見事なほど内密に運び出したアキオは、古い旅行カバン一つだけを持って、そのまま特に目的の無い旅に出るつもりであった。

カバンの中に高性能のノートパソコンを入れて、定期的に自分がオーナーをしている会社の報告書を受けて、それに大まかな指示や疑問に感じた事への対処を求めるメールを送る。

こちらから連絡するまでは、アキオの居場所を知っているのはダルノー・ブラマンシュ会長だけという徹底ぶりであった。

そして、その事を聞いたミントは、昨日珍しくダルノーに対して通信を送っていた。

『勿論、私には、アキオさんの居場所を教えてくれないのでしょうね？』

『当然だ。それは、私を信じてくれた彼に対する、信義に劣る行為だ』

アキオは、自分が細かく会社の面倒を見れないので、その部分を、会社に役員を複数派遣しているダルノー会長に一任するつもりであった。

相手は、トランスバール皇国一の財閥の当主なので、普通の人は、乗っ取りを考えてそんな事はお願いしないものなのだが、逆にアキオは、『そんな事をしても、ダルノー会長が世間の評判を落とすだけ』と考えて、迷いもしないで彼に一任するという大胆さを見せていた。

『お前は勘違いをしているようだが、商人にも商人なりの仁義や信義があるものなのだ。彼は、私に一定の利益を保障してくれた。おかげで、今回の戦乱で被った被害を回復するための原資が出来て、再建の段階で人を切らずに済むようになった。彼は、私の面目を保ってくれたのだ。そんな彼の会社を乗っ取りでもしたら、私は人間としても終わってしまうな』

『そうですか……』

自分の父親が商売の鬼である事を知っているミントは、先に出た危惧を抱いていたのだが、ダルノーはそれをきっぱりと否定していた、

『なればこそだ。いくら娘のお前にでも、レイトン准将の居場所は教えられないな』

『そう仰ると思いましたわ』

『ただ、メールを届けるくらいの職権乱用は許されよう』

『お父様』

ダルノーとしては、アキオとミントが結婚してくれれば、それは御の字というか大歓迎であった。
アキオを二代目の当主に据えて、ミントとの間に生まれた子供を三代目にすれば、ブラマンシュ財閥はあと半世紀は健在だと思ったからだ。

『ところが、一つ問題があります』

『何だ？　それは？』

『実は……』

それは、以前にアキオがシヴァ皇子にシードル公爵家を継がないか？　と言われた時であった。
彼は、自分のレイトンという姓を誇りにしていて、絶対に捨てる気は無いと話していたのを、後にタクトから聞いたからであった。

『彼は、婿には来ません。私は、どうしたら良いのでしょうか？』

ミントとからすれば、ブラマンシュの姓よりもアキオの方が上だと自分の父親に宣言したに等しかった。
ところが、ダルノー会長も年の功とでも言うべきか？
逆に、こんな事を口にしていた。

『なら、ミドルネームにレイトンを入れれば済む話だな。それよりも、落とせるのか？　彼を』

『力技ですわね』

『レイトンの名前は残っているし、問題はなかろう』

アキオが、権力や財力の靡くような男でない事は十分に承知していたダルノー会長であったので、前述のミントの悩みなど悩みにも値せず、あとはミントの女としての器にかけるしかなかったからだ。

『落とせるのかではないのです！　落とすのです！』

珍しく強気で発言する自分の娘にダルノーは満足気に頷き、このすれ違いの多かった親子は、また少しその関係を修復させるのであった。

「ならば、私はあなたをお待ちいたしますわ」

ミントは、アキオに対して萎らしい女を演出するのだが、実は彼女が父親の線から連絡は取れる事に気が付いていたので、その横で一人青筋を立てていた。

「あの、アキオさん。お便りくらいはくださいね」

「観光地の絵葉書とかになってしまうそうだな」

「それで十分です。それと、これが私のアドレスです」

隣りのミントにしてやったりという表情を一瞬だけ向けてから、ちとせはアキオにメールアドレスを書いた紙を渡していた。

これは、今までのちとせからしたら、考えられないほど大胆な行動であった。

ここで大人しくしていたら生涯に禍根を残すと考え、清水の舞台

から飛び降りる覚悟で積極的に動いたちとせであった。

「「（また同じスタートラインですか……）」」

ミントとちとせ双方がガックリとしていると、そこにレスターがヴァニラとベルツェルを連れて現れる。

「いいな、お休みか」

「お前がこんなに休んだら気が狂う。違うか？」

「そうだな。時にお前が羨ましくなる」

レスターの、生真面目で仕事の鬼な部分を良く理解しているアキオであった。

それと、アキオのその切り替えの早い部分を正直に羨ましいというレスター。

もう既に二人の間に、対立は一切存在しなかった。

「辺境探査だったよな？」

「ああ、鬼が出るか？　蛇が出るか？　実に、興味があるところだ」

レスターは、エルシオールを旗艦とする、トランスバール皇国の辺境領域から、更に外の宙域を探索する調査団の司令に就任する事が内定していた。

あのエオニアが逃げ込み、黒き月を見つけた場所に何が存在するのか？

それを探るために、半年の期間をかけて徹底的に調査するようにルフト宰相から命令を受けていたのだ。

そしてその調査団には、ナノマシンによる修理と治療という特殊能力が使えるヴァニラが、ハーベスターと共に参加する事になっていた。

更に、アキオの機嫌が悪くなるので言わなかったが、エリオスも副司令兼エルシオール艦長として同行する事になっていた。

「あのバカは、公爵家の再建を人任せか」

「先代様も、若い頃は公務優先でしたので。公爵家の財産管理は、私が一任されております」

ところが、そんな事はアキオには当にお見通しであり、それにフォローを入れたのは、シードル公爵家の執事長であるベルツェルであった。

「返済さえ滞らなければ、特に文句はないけどな」

アキオからすれば、仕方なしに貸したお金であったので、もし返済が滞るようであったら、ダルノー会長にケツの毛まで毟り取るようにお願いをしていた。

他に、難民救済や今回の戦乱で発生した孤児への支援など、皇国の安定のためとはいえ、『こいつらに貸さなければ、もっと使えるお金は増えていた』と考えていたので、一度でも返済が遅れたら、強硬処置を取るつもりのアキオであったのだ。

「アキオさん、お元気で」

「ヴァニラも、あまり無理をしては駄目だよ」

「はい……」

「どうかしたかい？　ヴァニラ」

「いえ……」

『エリオスさんと仲良くして欲しいです』という言葉を、直前まで出してから引っ込めるヴァニラであった。

現に今日も、エリオスは任務が忙しかったという理由もあったのだが、『僕の顔を見ても、兄さんの機嫌が悪くなるだけだから』という理由で見送りには参加していなかったからだ。

確かにそれは事実ではあったのだが、この兄弟の溝は思ったよりも深いと考えるヴァニラであった。

「アキオ、ウォルコット大将が泣いてたよ。普通、休むのは自分だろうってさ」

「顕職に就いたんだから、忙しいのは当たり前だって」

「それはそうなんだけどね。それに、あんたが参加していないのが少し不満らしいよ」

正規の宇宙艦隊と同格の組織にまで規模が拡大した通商護衛艦隊のトップという顕職に就いたウォルコット大将は、やはり今日の見送りには参加できなかった。

あの膨大な仕事の量に、珍しく毎日てんてこ舞いしているとのフォルテからの話であった。

「ご愁傷様です」

「酷い元部下だねぇ……」

「でも、せっかくの悪運なんだから、事故とかでポックリと逝かないようにね」

「それが、これから自由になる人間に言うセリフか？」

最後に、ランファから毒の篭った言葉を貰うアキオであったが、これは彼女なりの、気恥ずかしさを隠すための言葉である事にフォルテだけは気が付いていた。

「しかし、寂しくなるねぇ」

「そうですわね。ミルフィーさんも、軍を辞めましたし……」

実は、ミルフィーユもアキオと同じく軍を辞めていた。

あの最後の最後で、エルシオールの足が止まって誰もが駄目だと思ったその時、『もう二度とあの強運が使えなくてもいいから、今だけ私を幸運の女神に！』という彼女の願いが天に通じて、エルシオールは奇跡の再起動を起こし、戦いに勝利する事ができた。

ところが、その直後に気絶したミルフィーユが目を覚ますと、彼女はあの強運を一切失って普通の女の子になっていて、試しに搭乗したラッキースターも稼動しなくなっていた。

そこで、彼女はこれからの人生を考え直すために、一度軍を退役して知り合いの経営するケーキ屋でアルバイトをする事となり、先ほどみんなとのお別れを済ませて、指定のシャトルに乗り込んだばかりであった。

『アキオさんは、ずっと旅行なんですか？』

『どれくらいで飽きるかによって変わるなぁ』

『どこかで落ち着いたら、連絡をくださいね。必ず遊びに行きますから』

ミルフィーユの衝撃発言に、ミントとちとせは顔を引き攣らせていたが、実は、ここにはいないタクトも実は秘かに軍を辞めていて、ミルフィーユと一緒に行くために彼女と合流をしていた。という事は、ミルフィーユがアキオの元に遊びに行くとなると、それにはタクトも付いて来るという事であり、そんな色っぽい事は絶対に起こらないであろう。

大戦の英雄である彼が軍を抜けた事が世間に知られると、色々とマスコミなどに追いかけ回されて大変だと思った上層部が、タクトの退役を隠したために、フォルテ達ですらそれを知らなかったのだ。

「じゃあ、俺はこれで」

アキオは、ベルツェルを除く全員と握手を交わしてから自分の搭乗するシャトルの手続きへと向かう。

「しかし、本当に戻って来るのかねぇ」

アキオは、このまま一生モラトリアムを続行してしまうのではないのか？

不安になったフォルテが、ふと感じていた不安を口にしてしまう。

「それは、無いな」

「へえ、えらく自信があるみたいだね。副司令殿は」

フォルテの不安を即座に否定したのは、他でもないあのレスターであった。

「あいつは休む時には休むが、基本的には俺と同じだからな」

「同じ？」

「ああ、仕事の虫なのさ」

アキオは、特に調べもしないで適当にチケットを購入した、ある有名観光地行きのシャトルに乗り込んでいた。

あの戦乱からまだ大して時間は経っていなかったが、今ではほとんどの観光地のホテルなどが営業を再開し、その客を運ぶシャトルなども物資を運ぶ輸送船と共に稼動を開始していた。

「温泉にでも行くか」

アキオは、機内サービスの新聞を読みながらこれからの休暇の事を考えていたが、その彼を監視する一人の人物の視線には気が付いていなかった。

その人物は、普通のスーツ姿のどこにでもいるようなビジネスマンのようであったが、彼は秘かに所持している小型の通信機で誰かに通信を送っていた。

「やはり、レイトンは予備役に入るみたいですね」

「それは、好都合だ。あの男がいると、あの計画が非常にやり難くなるからな」

「消しますか？」

「止めておけ。失敗して変に勘繰られると、現役に戻ってしまう可能性があるからな。我が真・正統トランスバール皇国軍こそが、エオニア様亡き今、その大望を成就する唯一の存在なのだからな。精々今の内に休んで、後で吼え面をかくがいいさ」

その通信相手の正体は不明であったが、そう長くない先にトランスバール皇国は新たな戦乱に巻き込まれる可能性が高く、それを知らないままアキオは久しぶりの長期休暇に入るのであった。

第十八話（第一部完結）（後書き）

第二部は、大分遅れると思います……。

第二部　プロローグ

「ようし……、もう少しだ……」

その惑星は、最近は停滞気味ではあったが、次第に版図を広げて開発を進めているトランスバール皇国に属する惑星としては異色の存在であった。

開けた大都市など一つもなく、大きな交通手段と言えば、ただ一つの宇宙港と併設された小型飛行機の発着場だけで、後は環境に配慮するために販売されている、バッテリー式の自動車か農業用のトラクターやコンバインのみであった。

この惑星ロハスは、現代の便利な生活ではなく、昔ながらのスローライフを送る人達のためにわざと開発されなかった惑星であり、そのほとんど手付かずの大自然と、そこに生活している人達が住むログハウスのみが点々と存在する田舎の惑星であった。

人々は、ここで自分の希望やそのレベルに応じて、自分に出来るスローライフを送る事となる。

完全自給自足で、電気・ガス・水道・ネット・通信機などを一切否定する本格派から、一部自分の食べる物を作って優雅に自然を楽しむ、定年退職した人などが第二の人生を送るパターンまで。

ここでは、個人が好きに生活の仕方を選択して、近所の人達と助け合いながら暮らす事が普通の、一般社会からは少しかけ離れた生活を送る場所であった。

そして、その手付かずの森の中にある湖の畔では、一人の若い男が、草の茂みに隠れながら古い火薬式の散弾銃の照準を合わせていて、その先では数匹の鴨が水面で餌を探していた。

男は、鴨猟をしていたのだ。

「もう少し……、もう少し……」

男は、鴨が有効射程距離内に入って来るのを、気配を消して根気良く待っていた。

すると、待った甲斐があったのか、獲物達は男の思惑通りにこちらに近付いて来て、次の瞬間に森の中に銃声が二発鳴り響いた。

「よしっ！」

男は、湖の畔に置いてあるボートで、水面に浮かんだ撃たれた鴨を回収しに向かう。

「おっ！　大猟じゃないか！」

運良く三匹の鴨を仕留める事に成功した男は、獲物を回収すると、また元の位置に戻って新しい獲物が来るのを待ち始める。

結局、もう一度射撃のチャンスに恵まれた男は、合計五匹もの鴨を手に入れる事に成功していた。

そして夕方となり、男が家への道を歩いていると、反対側から数人の年配の男性達が歩いて来る。

彼らは、男と同じ猟友会に入っている猟師達であった。

「レイトンさん、今日はどうだったね？」

「大猟ですよ。そちらは？」

男は自分で撃った獲物を見せ、そのままそのうち二匹を先頭にいる年配の猟師に渡す。

「おっ！　悪いね。こちらは、大物の猪が二匹も罠にかかっていてね。バラしたら、後で美味しい部分を持って行くよ」

「何か、催促したみたいで悪いですね」

この星での生活は、別に純然たる経済活動ではなく、他の人よりも利益をとか、他の人を出し抜いてでも自分がというような事はなく、お互いが持ちつ持たれつの生活であった。

それに、この星では若い男の人は数が少なく、大半が昔は優秀なビジネスマンであったとか、官僚や政治家をしていたとか、会社を経営していたとかであった。

そういう人達が、『子供も大きくなったし、定年を迎えたので第二の人生を』というケースで移住する事が多く、あまりケチ臭い事を言う人はほとんどいなかった。

ここでは、その人が出来る限りで食糧などを確保して、それを物々交換や、時にはお裾分けで近所の人達に分けてという生活が普通となっていたからだ。

「レイトンさんは、うちのカミさんのお気に入りだからな」

「そうさな。俺も若い頃は、レイトンさんかそれ以上の男前だったんだけどな」

「嘘付け！　お前が何歳に若返っても、男前になんてなるもんかい！」

その男とは、アキオ・レイトンの事であった。

あのエオニアの乱と呼ばれた、トランスバール皇国の屋台骨をへし折り、皇国を滅亡寸前にまで追いやった廃太子エオニアのクーデターを、ムーンエンジェル隊やタクト・マイヤーズ達と鎮圧したアキオは、その後軍を退役し、始めの数週間は温泉に浸かったり観光地を巡ったりと普通に休暇を楽しんでいたのだが、やはり生来の貧乏性が発動してすぐに飽きてしまい、これからどうしようかと思っていた所に、この惑星ロハスを紹介するパンフレット見つけて、そこで一軒のログハウスを借りていた。

期間は長くても一年もいないという事もあって、アキオは畑などは短期間で出来る葉物野菜などを、全く見よう見真似で近所の住民達に教わりながら栽培し、他にも森で食べられそうな食材の採集から、元軍人で銃の扱いに長けている事を利用しての猟友会への入会となっていた。

他にも、ここでは食事の支度や掃除や洗濯など、とにかく自分の事は自分でしなければならず、そちらは近所の年配の奥さん達に習いながら徐々に習得していって、どうにか一人で生活できるようにまで進歩していた。

そしてその際に、若くて容姿に恵まれているアキオは、近所の奥様方の絶大な人気を得る事に成功して、この地に早期に溶け込む事に成功していた。

実は、家事など全くして来なかったアキオには初めての経験であり、誰かを指揮する事も、誰かの命令を遂行する事もなく、ただ自分が生きるために働くという行為を、次第に気に入っていくアキオであった。

「レイトンさんが鴨を撃つと、成果が違うからなぁ。それに、あの凶悪な巨大熊まで撃ってしまうし」

今までに、軍人として人間を撃った事もあるアキオは、その腕前を遺憾なく発揮し、今まではあまり数を獲れなかった鴨を近所の人達に多数提供したり、近辺の住民に迷惑をかけていた巨大な熊を退治したりと、これでなかなかに重宝される住民となっていた。

それと、ここにはアキオにとってもう一つ良い点があった。

それは、ここでは自分で過去を話すのは自由だが、人に色々と聞くのは禁止と言う暗黙のルールが存在していた事だ。

彼らは、自分の事を話す人は多かったが、アキオに過去の事を聞くという事は絶対にしなかった。

それがルールといえばルールだったのだが、彼らとてこんな生活はしていても、元はそれなりの社会人であった影響でニュースや新聞くらいは取っていて、当然アキオの正体も知っているはずであったが、それを聞かないでそっと受け入れてくれたのだ。

「ところで、今日は随分と頑張ったみたいだね」

「ええ。十日後に、友人が来るんですよ」

アキオは、家に接続しているパソコンで会社の数字を定期的に見ていたので、業務の関係でダルノー会長に私信を送る事が多く、その際にミントからのメールを受け取る事が多かった。

それと、ちとせも丁寧に手紙を書いて送ってくれたので、それに返事を書く事が多くなっていた。

手紙など、あまり今まで書かなかったアキオであったが、こういう生活になると夜は意外と暇なので、色々と手紙の文面を考えると良い時間潰しになったのだ。

そしてその中に、ミルフィーユからの私信も入っていて、近日にタクトと一緒に休みを取って遊びに行く旨が記載されていた。

「レイトンさんのコレかい？」

年配の猟師の一人が、ニヤニヤと笑いながら小指を立てる。

「まさか、友人ですよ」

「女性じゃないのかい？」

「女性とその彼氏ですから、期待通りの展開にはならないですよ」

この地に来てから五ヶ月あまり、アキオの居場所は既にムーンエンジェル隊の面々や、過去の上司達には知られていたが、彼らがここに遊びに来る時間はどうやら存在しないようであった。

ここのところ、皇国の復興のために各種資源を輸送している船団が謎の艦隊に襲われていて、その捜索と輸送船団の護衛でそれどころではない状態になっているらしい。

実は、アキオは新聞でその事を知ったのだが、おかげでウォルコット大将、木村准将、マッコリ准将などは目が回るほど忙しいらしく、レスターとヴァニラが辺境探査からまだ帰還してない現在、残りのムーンエンジェル隊のメンバーは、個々に分かれて、謎の艦隊の探索と輸送船団の護衛に駆り出されている状態であった。

そんな事情があったので、ここに遊びに来れる人物は限られていて、それは偶然にもこの近くの星で、知り合いのケーキ屋でアルバイトをしているミルフィーユと、軍の紹介で警備会社に勤務しているタクトの二人であった。

「十日後か。その鴨が熟成されて、一番美味しくなっている時期だよな」

「ええ」

銃の腕は良かったのだが、撃った獲物の肉は熟成させないと美味しくならない事を知らなかったアキオは、最初は新鮮な方が美味しいと思って、撃った鴨の肉をその日の内に調理していて、それを目の前の年配の猟師達に笑われた事があった。

撃った鴨は、軒先に吊るして十日ほど経った頃が一番美味しいので、ミルフィーユやタクトのために鴨を撃ちに行ったアキオであった。

「早く軒先に吊るしておきますよ」

「それがいいな。じゃあ、後で猪の肉を届けるから」

年配の猟師達と別れたアキオは、自分の住むログハウスへと帰宅し、自分の夕食の準備を始める。

今のアキオは、久々に充足した日々を過ごしていた。

「アキオさん！　お久しぶりです！」

「やあ、レイトン。久しぶり」

「二人とも、元気そうだな」

それから十日後、予定通りにタクトとミルフィーユが遊びに来る

事になっていたので、アキオは自分の家から車で一時間ほどの空港まで二人を迎えに行っていた。
　すると、以前と全く変わらない私服姿の二人が、アキオを空港のロビーで待っていた。

「先に俺の家に行くか」

「そうだな」

　アキオは、車に二人を乗せるとそのまま家へと全速力で走り始める。

「随分と、ナチュラルな生活を送っているんだな」

　タクトは一旦周囲の自然を見渡してから、車を運転しているアキオに話しかける。
　まさか、ここまで未開の惑星だとは思わなかったようだ。

「観光旅行ってのは、意外と飽きるのが早くてな。同じような観光地ばかりだし。それで、偶然にここを見つけてな。そちらは？」

「私は、知り合いのケーキ屋さんでアルバイトをしているんです」

「似合っているなぁ」

　前から、『エンジェル隊のご飯係』と言われていたミルフィーユであったので、まるで違和感を感じなかったアキオであった。
　それに、彼女のデザート作りの腕が優れている事は良く知っていた。
　あの超高級ブランデーをケーキの材料にされてしまった事は、今

となっては笑える話であった。

「俺は、軍のコネで警備会社で椅子を温めている」

「気を付けろよ。昨今のマスコミは、天下りに対して厳しいからな」

とは言っても、タクトの就職先の警備会社は、アキオが以前に立ち上げた総合宙路警備保障（株）の関連会社であり、紆余曲折を経てそこの大株主となったミルフィーユの彼氏に文句など言わないであろうし、そもそもタクトは先の戦乱の英雄であったので、なおさら何も言われるはずはなかった。

「それで、早速に有給を消化しているわけだ」

「そいつは結構だな。俺は毎日が休みのようであり、仕事のようであり……」

アキオは一時間ほど車を飛ばして、自分のログハウスに到着する。

「へえ、畑なんてやってんだな」

「ハーブとか、葉物だけだよ。凄い人は、米とか小麦とか作るんだ」

二人を家に入れると、中の様子を見たミルフィーユは一人感心していた。

綺麗に掃除された室内や、山や森から採集して保存したり、別の食材に加工されていたり、強めの酒に漬け込まれたりした瓶に入った食材や、燻製にされて吊るされた肉やマスと思われる魚など、アキオが本当に器用に家事をこなして生きている事を確認したからであった。

「アキオさん、凄いですね」

「近所の奥さん達に習ってようやくさ。さあ、出かけるか」

「えっ？　お茶とか出してくれないの？」

「昼飯もお茶も現地でさ」

アキオは、テーブルの上に置かれたピクニックセットと釣り道具を抱えると、また二人を車に乗せて近くの湖まで移動する。

「お茶は、紅茶を魔法瓶に入れているから」

アキオは、到着した湖の畔で釣り道具を用意しながら、二人に魔法瓶に入った紅茶を差し出す。

「ミルクとか砂糖は？」

「お前は、お子ちゃまか……。ロシアンティーだから、この瓶に入ったジャムを入れてくれ。ちなみに、これも森で取った山イチゴが原料の自家製さ」

他にも、雑穀入りのクッキーや、同じく雑穀入りのパンで作ったサンドイッチなどを昼食として二人に提供する。

「この卵、味が濃いですね」

「鴨の卵を獲って来たんだ。ここでは、鶏が少ないからさ」

他にも、猪の肉で作ったハムや、他の人が畑で作っている物を分けて貰ったレタスやトマトなどがサインドイッチの具材として使われ、この湖で釣ったと思われるワカサギのフライがおかずとして添えられていた。

「お前、本当に器用だよな。良いお婿さんになれると思うぜ」

「主夫にでもなろうかね？」

その後、お茶と食事を終えた三人は、アキオの用意した釣り道具を使ってマス釣りを始める。

「ノルマは、一人一匹ね」

「何だよ、そのノルマって？」

「夜は、鴨のローストをメインにする予定なんだけど、もう一品欲しいじゃないか。そこで、マスのムニエルの材料をここで調達するわけだ」

「釣れなかったら？」

「燻製にしたマスがあるけど、ムニエルだから生のマスの方が美味しいんだよ。ああ、釣り過ぎても構わないよ。燻製にするか、近所にお裾分けするし」

「わあ、面白そうですね」

アキオが初心者のミルフィーユに釣りの指導をしながら、三人でマス釣りを始める。

「あっ！　かかった！」

「慎重にな、ミルフィー。　おっ！　俺もだ！」

「俺もだ。へえ、魚影が濃いんだな」

それなりの量のマスを釣った三人は家に戻り、早速夕飯の準備を始める。

先ほど釣ったマスの内臓を抜いて下ごしらえをしてから、余った分は燻製を作る機械にセットして、これはタクトが番をする事になった。

「悪いな。客人に手伝わせて」

「見張っているだけだしな」

マスのムニエルと鴨のローストの準備を始めるアキオであったが、これにこういう作業は手伝いたくて仕方がないミルフィーユがすぐに手伝いを始める。

すると、普段のアキオでは絶対に無理な手際の良さで料理が作られていく。

「ミルフィーは、さすがだな……」

「今のアキオさんは、間違いなくフォルテさんより腕が上ですよ」

「あいつの料理は、微妙だからなぁ……」

その昔、ジャングルの惑星で一緒に戦っていた時、急に休日とな

ったフォルテが、アキオとその他の同僚や部下達に料理を作る事となった。

『鬼のかく乱』と言ったある一人の中年の伍長は、暫く地面でタンコブを作って眠っていたが、出来上がった料理は判断に迷う代物であった。

不味くはないのだが、美味いかと言われると微妙な物だったからだ。

それに、酒のツマミと兼用可能な物しか作れないという欠点も存在していて、あまり好んで食べたいとは正直思わなかったアキオであった。

「レイトンは、上達が早くて羨ましいよなぁ」

「お前、ミルフィーの家事を手伝った事あるのか？」

「実は、無いんだ」

「最近の男は、家事くらい出来ないと結婚できないらしいぞ」

アキオは、どこかの雑誌でオールドミスの評論家が言っていた事を思い出す。

「たまにそう思って手伝おうとするんだけど、ミルフィーに怒られちゃうからさ」

そんな話をしながら作業をしている内に全ての料理は完成し、テーブルの上には色々な種類の料理が並んでいた。

「丸ごと焼いてある鴨って、ご馳走なイメージだよなぁ」

「ここでは、むしろ鶏の入手の方が難しいからな」

アキオは、テーブルの上のローストされた鴨を切り分け、同時に専用の機械で骨の髄の部分を絞り、鴨の血で作ったソースを混ぜて肉の上にかける。

「血と骨髄のソースねぇ。美味いのか？」

「お前、一応は貴族なんだから、フランス料理くらいは食べた事あるんだろう？」

既にフランスという国は完全に消滅していたが、ワインや料理などの文化は依然として残っていて、フランス料理はやはり貴族が食べる事の多い高級料理であった。

血と骨髄のソースは、もう名前の資料が残っていないほど古い伝統のあるお店の定番のメニューであり、この星では鴨の入手が容易という事もあって、比較的良く食べられる事の多い料理であった。

「この料理は初めてだな。おっ！　美味しいじゃん」

「本当だ。やっぱり、ミルフィーが作ると一味違うんだな。精進しないとな」

「そんな事ないですよ。でも、材料が良いから美味しいですね」

三人は手作りの料理に舌鼓を打ち、更にアキオが自分で作ったワインをグラスに注いで飲み始める。

ここに来たばかりの時に、酒も自分で確保しなければいけない事を知って、最初は物々交換で手に入れていたのだが、急いで山ブドウを獲って自分でワインを作っていたのだ。

「まだ若い味だけど、自分で作ると結構イケルような気がするんだ」

「私は高いワインとか良くわからないから、こっちの方が美味しいです」

「ミルフィーは、もう少し大人にならないとわからないかな？」

「ぷぅーーー！　子供扱いは禁止ですよ。アキオさん」

「悪い悪い」

食事とお酒を堪能した三人は、後片付けをしてからデザートを楽しみながら紅茶を楽しんでいた。

「紅茶は、一杯あるんですね」

「ここから少し離れた場所に住んでいる人が作っているんだ。それと、そのタルトは近所の奥さんの差し入れ」

「レイトンは、年齢を問わずに女性にモテるな」

「何とでも言え。ここの住民は、助け合いの精神なんだよ」

タクトにからかわれたアキオは、デザートのタルトを頬張りながら、少しムキになって反論する。

「でも、このタルトは美味しいですね。中身のフルーツも変わっているし」

野イチゴ、山ブドウ、渋柿、イチジク、ザクロ、野生種のミカンなど、山林で獲れた多くのフルーツが加工されて、タルトの材料になっていた。

「俺には良くかわらないけど、そのまま食べても美味しくないから、お菓子の材料にするにはちょうど良いんだってさ」

「そうですね。甘味は砂糖で調整できるから、むしろ酸味とか苦味がある方が味に深みが出るんですよ。アップルパイも、そのまま食べるリンゴよりも、紅玉って言う昔の品種を使った方が美味しいですし」

「料理に関しては博識だなぁ。ミルフィーは」

「ケーキ屋さん勤務ですから」

ケーキ屋に勤めているミルフィーユは、まだ在籍期間が短いのでアルバイト扱いではあったが、考案した新作のケーキの売れ行きが上々らしく、そろそろ社員にならないかと誘われているらしい。

「それは良かったな」

「でも、まだわからないですよ。人生は長いですから。ところで、アキオさんはこれからどうするんですか？」

「今は結構楽しいし、癒されているような気がするけど、このままって事はないだろうな。六十歳過ぎてリタイアしてから、またここに戻って来たいのは事実だけど」

ミルフィーユのストレートな質問に、アキオは紅茶を一口飲んで

から答える。

鉱物惑星一個と、その隣りの惑星にある金属精錬・加工工場とその販売会社を傘下に入れている持ち株会社のオーナーであるアキオは、膨大な資産を持ち多くの従業員に対して責任がある。

なので、いつまでもこのままというわけにも行かない。

それは十分承知していたのだが、では何をするのか？　という迷いを抱いているのも確かであった。

軍に戻るという選択肢もあったが、アキオは自分から進んで何度も命を落としかけ、理不尽な目にも遭った軍に戻るつもりはなかった。

世間では、資源を輸送している輸送船団に対する襲撃・収奪事件が発生していたが、目の前のタクトが軍に戻らないという事は、まだ事態はそれほど深刻ではないという事なのであろう。

それに、今は無事に女皇として即位している、シヴァ陛下の命令を受けたわけでもない。

『もう少し、このままでも』と考えているアキオであった。

「ブラマンシュ会長のように、企業経営者の道にでも進むか？」

「アキオさんって、やり手の経営者って感じもしますしね」

実はアキオは、以前にミルフィーユから預かった、あの大金の入った口座の管理をまだ任されていた。

『持っていてもあまり実感がわかないし、人生が狂いそうだから』という理由で預かって、アキオが資産運用をしていたのだが、その資産は戦後の復興特需の恩恵を受けている企業の債権や株式などに運用されていて、また雪だるま式に彼女の資産を増やす結果となっていた。

ミルフィーユは、『別に無くなってもいいですよ』などと気楽な

事を言って、自分はアルバイトで稼いだお金で生活していたが、欲の無い人間ほどお金は増える傾向にあるらしい。
その気になれば、数万店舗もチェーン店展開が可能なお菓子屋の開業資金と、暫くの運転資金分の資産を所持している事になっていた。

「独立でもしたら？」

「そういうのは、もう少しちゃんと考えてからにします」

「ところで、ビックリしたよな」

「急に何だ？」

「ほら、シヴァ皇子だと思っていたら、彼女だったという……」

アキオは暫くテレビは見ていなかったが、新聞でシヴァ陛下が自分が女皇であると明かした記事を読んではいた。
だが、以前に二人きりの時にそれを明かされていたので、タクトほど驚くに値しない出来事だと思っていたのだ。

「ああ、あれね」

「お前、まさか知ってたとか？」

「そんなわけがあるか。しかし、あの年代の少年・少女は見分けが付き難いな」

本人から二人きりの時に教わったし、その時にキスまでされた事は、アキオが一生胸にしまって墓場に持って行く秘密だったので、

その辺は上手く誤魔化すアキオであった。

「シヴァ陛下が男でも女でも、きっとこの国を良くしてくれますよ」

「そうそう。ルフト宰相閣下もいる事だし」

「お前が軍を辞めると聞いて、残念そうにしていたけどな」

ルフト宰相は、タクトの戦時の指揮官としての器を全く疑っていなかったが、逆に平時の軍官僚としての能力を全く信じていなかった。

もしもの時に頭に据えれば絶大な力を発揮するので、それまでは、適当にデスクにでも座ってお茶でも飲んでいればいいと思っていたのだ。

逆にアキオとレスターは、平時の軍でも非常に使い勝手の良い人材であったが、こちらは以前にウォッカ大将が評した通りにキレ過ぎて一番上に立つのに適さない人材であった。

それでも下に置いてこんなに役に立つ人材もいなかったので、アキオが軍を一時辞めると聞いて、とても残念そうな顔をしていた事をタクトは思い出していた。

レスターを辺境探索に送り出してしまったので、余計にそう感じていたのだ。

「俺の時は、何も言われなかったけどな」

「お前は有事には大変に有能だが、平時にはただの軽い神輿だからな」

「じゃあ、俺の出番は一生ないかもな」

日常の書類整理などの仕事はサッパリなタクトを、アキオは軽い神輿扱いしていたが、これはアキオがタクトを本当に認めているからこそ言える、親愛の情の篭った本音であった。
それにアキオは、この程度でタクトが怒るほど器の小さい男だともこれっぽっちも思っていなかった。

「だといいがな。レスターの辺境調査の結果次第だと思う。皇国が仮想敵国を抱えて、しかもその相手が好戦的な連中ならあるいは……。こんな堅苦しい話は明日からなしだな」

「そうですね」

「それに、今の俺達は軍人じゃないからな」

何しろ、テレビもラジオもない田舎の惑星のロッジだったので、話題の途切れた三人は早めに就寝してしまい、翌日に備える事にする。
次の日の朝、早めに目を覚ました三人は軽めの朝食を取ると、そのままアキオの誘導で、ログハウス近くの森の中へと出かけていた。

「キノコ狩りを行いたいと思います」

「なあ。一杯生えてるけど、どれが食えるんだ?」

アキオの宣言でキノコを採る事になったのだが、タクトは、辺り一面に多数生えているキノコのどれが食べられるかが全くわからなかった。

「面倒だから、適当に取って持って来い」

「アキオさん、これはどうですか？」

「うーーーん、食べられない事もないけど、あまり美味しくないキノコだよ」

アキオは、ミルフィーユの持って来たキノコを、電子図鑑で照合しながら素早く鑑定して返事をする。

「便利な図鑑ですね」

「これが無いと、素人の俺にはキノコは無理だから」

それでも間違える事が多いので、獲ったキノコは近所のキノコ獲り名人に見せてから食べるのが、この近辺の住民達の常識となっていた。

「なあ、レイトン。これは？」

「うーーーん、食べられない事もないけど、少量で笑い上戸になって、量が過ぎると笑い死にする」

「ワライタケなのか。これ……って！　食えないじゃないか！」

「そんなケバケバしい色のキノコを持って来るなよ」

「色は関係ないと聞いたぞ」

「ケバイので食えるのは少ない。色が地味だから大丈夫だって毒キノコに手を出すやつがいるから、そんな話が出たんだよ」

三人は、大量に生えているキノコの中から食べられる物を探して次々と籠の中に入れていく。

「あれは食えるぞ。天然のナメコタケだから」

「うわぁ。今日は、キノコ汁ですね」

「イノシシの肉も貰って熟成させているから、豪勢なキノコ汁が出来るな」

このような感じで、その後数日間、三人は惑星ロハスでの生活を満喫していた。

「慎重に行けよ」

「任せろって」

タクトはアキオと一緒に鴨狩りに出かけ、慎重の待ち続けた獲物に向けて銃を撃つが、それは全然惜しくもない場所に着弾してしまい、鴨達があざ笑うように飛んで行ってしまう。

「お前、下手だなぁ。フォルテにバレると、お説教レベルだぞ」

「フォルテが、俺の銃の腕に期待なんてしてないから」

「自分でそこまで言うか？」

ミルフィーユは、近所の奥さん達に料理を教えたり教わったりしていた。

「レイトンさん、こんなに可愛いお嫁さんがいて良かったわね」

「えっ！　あの、私は……」

「この娘には、別にちゃんとした恋人がいますけど」

ミルフィーユに新作ケーキの作り方を教わっていた近所の年配の奥さん達が、様子を見に来たアキオをからかうのだが、肝心のアキオは冷静に反論して、アキオの奥さん扱いされたミルフィーユの方が逆に頬を赤く染めてしまう。

「レイトンさんは、元が十分過ぎるくらい良いんだから、もっと頑張らないと」

「そうよね」

「あのですね……」

年齢が倍以上も上の奥さん達に早く結婚するように言われたアキオは、対応に苦慮している状態であった。

「うちの孫娘でも紹介しようかね？」

「それもいいね」

「駄目ですよ。アキオさんには、ちゃんとした恋人候補が三人もいるんですから」

「おや、こんな所で鴨を撃ってる場合じゃないんだね。レイトンさんは」

将来、自分はどんな道に進むのか？

今アキオが迷っているのは、別に職業の事だけではなかった。

士官学校入学時から、人に迷惑をかけないように人と適度に距離を置いて生きて来たアキオは、口では結婚するなどとは言っていたが、人と恋をするとはどういう事なのか？　結婚とは何なのか？　自分に子供が出来るとは？　などど色々と考える事が最近多くなっていたのだ。

天才家系に生まれたアキオの考え過ぎるという欠点もあったのであろうが、もう一つ悩んでいた事があった。

それは、あの老いてからおかしくなり、実の息子すら始末しようとしたシードル公爵と自分が、同じ道を歩まない保障がどこにあるのか？

最近、色々と考える時間が増えたばかりに、たまにそんな事を考えてしまうアキオであった。

「レナ星系で、輸送船が複数行方不明ですか……」

アキオが、タクトやミルフィーユとモラトリアムな日々を過ごしていたその時、最近徐々に復興を遂げて来ている首都星トランスバールにあるトランスバール皇国軍護衛艦隊総司令部、通称《通称護衛艦隊本部》のあるビルの一室で、テレビのニュースを見ながら唸っている初老の男性がいた。

ここの主である、ウォルコット・Ｏ・ヒューイ大将である。

彼は、トランスバール皇国軍最高司令官兼近衛艦隊司令のジンロ大将とほぼ同等の権力を有し、共に軍務大臣であるウォッカ大将の後継者と目されている人物であった。

思えば、数年ほど前までは将官になれるのかも怪しかった自分が、大出世をして今では多くの部下を扱う身となっている。

『人生何があるかわからない』とは良く言った物だが、その揺り戻しであろうか？

現在、彼は究極に多忙な日々を送る事となっていた。

クデーターが発生し、内乱で荒れた国家の復興を行っている最中なので、忙しいのは当たり前と言えば当たり前であったが、広大な宇宙に広がる多くの惑星やステーションの現状の把握から、破壊された各種インフラや、施設の復興を行うために必要な資源や物資と、人々が普通に生活を送るために必要な生活物資などを輸送するのに必要な星間ネットワークの再構築とその安全の確保など。

本来であれば、ただ修復と警備だけを行い、あとは民間の船会社が商売をするだけであったが、今回の内乱に乗じて海賊などが蜂起したり、エオニアが雇っていた傭兵達が、敗戦のどさくさに紛れて軍の装備を強奪してから離脱して海賊になったりと、せっかくの物資や資源が強奪でもされると、復興に遅れをもたらす要因にもなりかねなかったので、現在では輸送船団が組まれている航路も数多く存在していた。

内乱後なので、人も船も圧倒的に不足している中での護送船団方式なので、ウォルコット大将はそのローテーションを組むのに四苦八苦している状態で、彼の中ではまだ戦争は全然終了していなかった。

当然、船も人手も全く足りずに正規艦隊から応援を貰っている状態であったが、それでも、昔のように嫌な顔はされなくなり、正規軍の軍人達にも少しは通商護衛の重大さが伝わった事だけは唯一良かった点でもあった。

ただ、それでも全く手は足りていなかった。

中央の復興と、反乱時に辺境に逃れた人達が中央へ戻るための引越し需要、辺境で発生している再開発需要など、むしろ戦前よりも荷が増えている状態で、それに伴って船腹が完全に不足していたからだ。

モスボール処理されていた軍民問わずに古いが使える船を現役に戻したり、エオニア軍から鹵獲した船を修理・再就役させて使ったり。

しかも、先の戦乱で熟練した船乗りが多く死んでしまったために、軍や皇国政府が軍民問わずに船乗りの訓練学校を増やしている状態であったが、それでも全然人手は足りず、訓練内容の効率化や実地訓練を実際の業務や任務内に行わせたり、新しく就役させる船のオートメーション化をエオニア軍から奪った技術で進めて、少ない人員で船を動かせるようにしたりと、現在トランスバール皇国軍で暇な人間など一人もいない状態であった。

ところが、それらの努力をあざ笑うかのような事件が、最近多く発生するようになっていた。

どこからか謎の強奪船団が現れて、多くの輸送船団を襲うようになったのだ。

勿論、護衛は付いているのだが、敵はそれなりの規模らしく、返り討ちにあう護衛艦隊が増える結果となっていた。

いつどこに現れるかも不明な艦隊に、正規の大艦隊をぶつけるのはかなり難しく、かと言って前のように輸送船を単独で航行させるほどまだ皇国の航路は安定してもいない。

現に、『軍の護衛など当てにならない！』と大言を吐いて、単独で船を出してそのまま戻って来なかった例もあったので、最近では休暇はおろか、碌に官舎にも戻れない生活を送っているウォルコット大将であった。

「失礼します」

「それで、どうですか？」

最近、レナ星系で頻発している輸送船行方不明事件のニュース映像が終わると同時に、一人の中年男性が入って来る。

護衛艦隊総司令部の参謀長をしているマッコリ少将であった。

彼は、先月に今の地位に任命されて、同時に少将への昇進を果たしていた。

前任者があまりの激務で倒れてしまったからであり、しかも、『大将の参謀長は、少将でないといけない』という変な慣習から、≪棚から牡丹餅≫的に昇進してしまったからだ。

ただ、この件に関しては、あまり羨ましいと思う人は存在しなかった。

マッコリ少将の目には、誰が見てもわかるほどの隈が浮かんでいたからだ。

「間違いなく、強奪船団の仕業ですね」

「船と物資はともかく、船乗りの損失が痛いですね」

民間の船会社の船員であったが、彼らベテラン船員の損失は痛かった。

その気になれば、短い訓練期間で軍人に転用可能で、そうでなくとも軍に物資の輸送を行う徴発も可能な貴重な数百人を失ってしまったからだ。

強奪船団の手口からして、行方不明になった彼らが生きているとは考え難く、証拠隠滅のために殺されてしまったと考えるのが正解であろう。

現在、皇国全体は復興ブームで盛り上がっている状態ではあったが、まだ戦争は終わっていなかったのだ。

「レイトンさんに、戻って来て欲しいですね」

「１２０％で賛同ですね。最近、全然家に帰れないですし。ますます孤立する父親ですよ」

勿論、通常時の軍であれば、こんなに極端に忙しい事はない。

忙しさで軍人を追い詰めて精神に変調をきたしたり、ストレスで自殺でもされると困るので、この時代の軍人は定期的に休暇を取るようにと軍法に正式に記載されていたからだ。

ただし、現状でこの二人が休暇を取れる保障はまるでなかった。

「とにかく、強奪艦隊の出現パターンがまるで掴めないので、全く対応が不可能なんです。一度博打を打って見事に外れましたしね」

限りある戦力を分散させれば強奪艦隊に撃ち負かされるし、マッコリ少将の言うように、過去の出現パターンを計算してヤマを張って見事に透かされた経験もあったので、現状では早期通報システムの整備と、護衛船団の大型化を行うしか策がない状況ではあった。

「紋章機がもっとあれば……」

「あんな規格外の物を、そう簡単には増やせませんよ」

実は、唯一強奪艦隊に対抗しうる手段が存在していた。

それは、先のエオニア戦役でデビューして大活躍をした紋章機の存在であった。

紋章機一機と小規模の艦隊で強奪艦隊にぶつかると、神出鬼没さと犯行スピードが頼りの強奪艦隊は、普通に損害を出しながら逃げてしまうからなのだが、現在パイロットがいないために使用不可能なラッキースターと、エルシオールの辺境探索任務に同行しているハーベスターを除いて、使える紋章機はたったの四機しかなく、おかげで彼女達は居候をする艦隊にお姫様扱いされながら、宇宙中を駆け回っている状態であった。

だが、皇国の広大な領域や毛細血管のように張り巡らされた航路を考えると、まるで数が足りていないのが現状であった。

「それでも、我々は仕事をするしかありませんしね」

「そうですね。それに……」

いくら捕まらない強奪艦隊が相手とはいえ、ここで退くわけにもいかなかった。

皇国という人間の体が、健康を維持して成長していくには、物資という血液を必要量輸送しなければならず、それが出来なければ皇国は体を腐らせて滅ぶだけである。

ハッキリと言えば、非常に地味で根気が必要な仕事の割に、世間に評価される事などまずない仕事ではあったが、それでも絶対に必要な仕事ではあった。

それに、この組織をアキオと組んで立ち上げたウォルコット大将としては、絶対に退くつもりもなかった。

「私は万年中佐で、あなたは万年少尉だったんです。失う物なんて何もありませんよ」

「ですね。護衛艦隊の強化と、行動パターンの分析を急がせます。となると、現場にいるキムラ准将が羨ましい……」

「そうですね。同じ忙しいなら、現場の方が面白いですし」

二人は、『この前、船に乗ったのはいつだったかな?』などと考えながら、それぞれの任務に没頭する。

だが、それでも強奪艦隊の被害は一向に収まる気配を見せなかった。

「囮を出すって?」

「はい。敵の大好物を吊るして、それを襲わせます」

ウォルコット大将とマッコリ少将は、地道に仕事を続けていたが、強奪船団の被害は一向に収まる気配がなかった。

むしろ、奪われた物資や資源を使って敵が強化されている節があり、現在では、『その強化された戦力が、どこで作られているのか?』という方面にも戦力を割いて捜査を行わねばならない状況にま

で追い詰められていた。
それに、最近では軍に対する世論も芳しくなかった。
復興は順調なものの、定期的に発生する被害に新聞やテレビなどの論調も厳しい。
女皇であり、世論対策を兼ねて良くテレビに顔を出すシヴァ陛下は人気が高いのだが、どうやら軍へのお目こぼしはさほどでもないようであった。

それと、やはり船員に直接被害が出ているのが良くないらしい。
戦争は終わったはずなのに、家族が行方不明になった事実を素直に冷静に受け止められる遺族など少ないからだ。
そこでウォルコット大将は、軍務大臣であるウォッカ大将と相談をし、大規模な輸送船団を囮として強奪艦隊を殲滅する作戦を立てていた。

「久しぶりに呼び出されたと思ったら、随分と物騒な話になっているんだね」

ウォルコット大将とマッコリ少将のいる司令室には、他に四人の若い女性軍人がいた。
皇国の若き英雄、現代の戦乙女との呼び声の高いムーン・エンジェル隊の面々である。
現在、ムーン・エンジェル隊は完全にバラけて戦っているので、実質隊は活動休止状態であったが、今日は珍しくほぼ全員が揃っている状態であった。

「このまま同窓会って感じでもないか」

「ランファさん、これは重要な作戦会議ですのよ」

「わかってるって」

「つまり、現在使える紋章機を全て集中させて一気に殲滅すると？」

以前と全く変わらない様子のランファに、同じく元気そうなミント、地の性格が生真面目なちとせと、それを満足そうに眺めているフォルテと、退役しているミルフィーユと辺境調査に同行しているヴァニラを除く全員が、ウォルコット大将の前でいつものやり取りを続けていた。

「大規模な艦隊を動員させると、勘付かれて出てこない可能性もありますから。紋章機なら、輸送船改造の軽空母に搭載すれば、敵も艦載機までは透視できないでしょう」

多くの物資と資源を搭載した大規模輸送船団に付いている護衛が少ないのをラッキーと考えた敵が襲いかかると、軽空母から四機の紋章機が発進して、一気に敵を叩くというのがウォルコット大将の作戦であった。

「ただ、ヴェニラさんのハーベスターが無いので、無茶は禁物ですよ」

ナノマシンによる修復能力を持つハーベスターは、ムーン・エンジェル隊の肝とも呼べる存在であったが、生憎彼女は現在エルシオールに乗って辺境調査に参加しているので、この場にはいなかった。

勿論、その司令官であるレスターと、エルシオール艦長であるエリオスも同じであった。

「残念なことに、今回の事件で辺境探査は中止となったそうですけど」

「そうかい。じゃあ、ヴァニラは戻って来るんだね？」

「ええ。ただ、今回の作戦開始には間に合わないと思われますので、その辺は勘弁と言う事でして。軽空母（ヒヨウ）を紋章機が運用できるように現在急ピッチで改装しています」

「それはおかしくないかい？」

フォルテの疑問は、もっともな物であった。

急を要する物資の輸送の護衛任務ではなく、強奪艦隊を釣るための餌である輸送船団の護衛なので、普通は今すぐにも輸送しなければいけない物資を積む事は無いと思われたし、そもそも空船でも何の問題も無いわけだ。

ならば、ヴァニラの到着を待った方が作戦の成功率も上がるはずなのは、他の三人も気が付いていた。

「数日くらい待てばいいのに」

「そうですわね。ランファさんのおっしゃる通りですわ」

「敵の目を欺くために戦闘艦の数を減らす以上は、空母に搭載する紋章機の数は増やした方がいいと思います」

「普通は、君達の意見の方が正常なのだがな……」

「まあ、偉い人には偉い人の事情ってのがあるんですよ」

マッコリ少将のボヤキを静止するように、ウォルコット大将が今回の作戦の裏事情を説明し始める。

事の起こりは、先の内乱の勲功論証とシヴァ陛下による、新しい役職の任命に端を発していた。

クーデターが発生した際に、エオニアに捕まった中央の貴族達は家族ごと根こそぎ殺されたわけなのだが、それでトランスバール皇国の貴族が全滅したわけではなく、運良く逃げおおせた者や、本当に用心深くて逃げおおせた者、辺境に所領があって難を逃れた者や、中央の家族は全滅したが一族の誰かが生き残った者。

これは、主に軍人や地方政府などに出向中の貴族の子弟に多かったが、それなりの数がいたのと、いくら新しい皇国を目指すとは言っても、いきなり貴族をゼロにするわけにもいかなかったので、彼らを呼び寄せてその能力に合った役職に任命する事となった。

ところが彼らからすれば、いくら功や能力があるとはいえ、市民風情が自分達の風上に立つのは気分が良くなかった。

彼らは、元は中央の貴族達から遠ざけられていた過去も忘れ、今が躍進するチャンスとばかりに派閥を作り、市民出身であるルフト宰相やウォッカ大将などの落ち度を探して蹴落とす事に夢中になっていると、まあどこにでもある話であった。

「喉元過ぎればってやつかい？　呆れ果てて何も言えないね」

「それで、その落ち度が強奪船団に対する軍の対応という事ですか？」

「そういう事のようですね。いまだに殲滅できないなんて、無能も良い所だって意見なのでしょう」

ただ、今の状況を冷静に分析しても、他の誰かが軍のトップならすぐに解決するような案件とも思えないと感じるミントであった。

そして、それと同じように考えているウォルコット大将でもあった。

「最近、貴族連中の突き上げが五月蝿くてな。マスコミに情報をリークするバカまでいるんだ。そこで、一日でも早くって事になってな。例の強奪艦隊の規模を考えると、紋章機なら四機で十分という戦力分析の結果もある」

マッコリ少将はそう説明していたが、フォルテ達にはルフト宰相も、ウォッカ大将も、ウォルコット大将も、本当ならヴァニラの到着を待ちたいであろう事が容易に想像できた。

「まあいいさ。命令は命令だしね」

「本当に申し訳ないです。後で埋め合わせはしますから」

「高く付くよ」

フォルテ達は、自分達に謝るウォルコット大将を見て、政治の難しさを実感していた。

自分の意見を１００％通す。

空絵事と空想とワイドショーの論評であれば誰にでも言える事が、あの軍で妖怪と言われているウォッカ大将にもなかなか出来ない。

自分の若い親友が、一人でどれほどの苦労を背負って市民出身者ながらも将官にまで上り詰めたのか。

ふと、そんな事を考えてしまっていたのだ。

「そうですね。こういう時に、レイトンさんが欲しいですね」

「大将、私の考えている事を読まないでくれよ」

フォルテは、ウォルコット大将の事を階級で呼ぶ事が多いのだが、

つい数年前までは永遠に中佐だと思っていた彼が、今では大将にまでなっていて、その呼び方はなかなかに目まぐるしい物があった。
そして、そんな二人のやり取りを見ていた他の面子は、この所は忙しくて碌に会っていない二人が、非常に深い絆で結ばれている事に気が付く。
下世話な話をすれば、『出来てるんじゃないのか？』とまで思っていた。

「アキオさんは、今は休んでいますわ。それで、護衛艦隊の指揮官はどなたですか？」

「そうです。アキオさんは、今やっと穏やかな日々を送っているんです。本人が戻ると言わない以上は、強引に引き戻しては駄目なんです」

ミントとちとせは、定期的にアキオと連絡を取っていたが、久々の休みを満喫している彼を、ウォルコット大将が強引に現役復帰させるのではないのかと疑いの視線を向け始める。

「そんな、おっかない顔で見ないでくださいよ。せっかくの美人さんが台無しですよ。それで、司令官なんですけど……」

ところが、この作戦。
もう一つ制約に縛られていた。
護衛艦隊の司令官を、正規軍から臨時で借り入れる事になっていたのだ。

「正直な話、うちは猫の手も借りたい状態でして。それに、私やマッコリ少将が行くわけにもいかないんですよ。ここでの仕事がありますからね」

つまり、護衛艦隊のお手伝いで同じ忙しくはあるのだが、まだ比較的手の空いている正規軍から指揮官を回すという事になっていて、しかもまだ裏事情が存在していた。

「貴族出身の司令官かい？」

「勿論、派閥とか関係なくて能力のある人を頼みましたよ。でなければ、ジンロ大将がウォッカ大将に怒られてしまいますし、そもそも、ウォッカ大将が許可を出すわけもありませんし」

それでも、裏の事情が簡単に読めてしまうフォルテであった。

つまり、貴族派が自分達への攻撃材料にしている強奪船団の討伐作戦の指揮を貴族出身の司令官に任せてしまい、成功すれば功績を譲って恩を売った事に、失敗しても同じ穴のムジナなので攻撃が止むであろうと、いかにも老練なウォッカ大将の考えそうな策であった。

「大将、この借りは高く付くよ」

「覚悟してますよ」

一通り話を終えたフォルテ達が、その足でトランスバール軌道上にある白き月へと向かうと、修理ドッグを擁する区画では紋章機を搭載可能なように軽空母を改装している最中であった。

「へえ、意外と大がかりなんですね。フォルテさん」

「紋章機は、シムス高速戦闘機とは違って大型だし、一機一機の外見がまるで違うからね。艦内に紋章機を係留するアームから、整備・

修理用のマニピレーターまで、四種類のパターンを用意して配置しないといけないんだよ」

ランファとフォルテは、改装作業が続いている空母を興味深そうに見学していた。

「それに、部品や武器・弾薬の種類も豊富ですしね」

「今にして思えば、エルシオールって特殊な船だったんですね」

「ほう。小娘ばかりだと思っていたら、意外と普通の軍人なんだな」

改装作業を見学していた四人の後ろから、いきなり若い男性の声が聞こえたので振り返ると、そこには将官用の皇国軍第一種軍装に身を包んだ若い将校が立っていた。

身長は、１８０ｃｍほどであろうか？

体型は普通で、いかにも育ちの良さそうな顔をしていて、フォルテ達は、この人物が例の護衛艦隊の指揮官である可能性が高いと思っていたが、その人物の顔にどこか見覚えがあるような感覚にも見舞われていた。

「どこかで会ったような記憶があるのか？」

その若い将官は、ふてぶてしいまでの笑みを浮かべながら、フォルテ達に声をかける。

「ええと……。まあ、そんな感じです。デジャブとでも言うのでしょうか？　少将殿」

いきなりの軍の上官の登場に、一番最初に反応したフォルテが、

その若い将官の階級章を確認しながら臨機応変に言葉を返す。
四人の中で、一番軍人としての経験があるのは伊達では無いようだ。

「ムーン・エンジェル隊隊長、フォルテ・シュトーレン大尉か……」

「はい、ムーン・エンジェル隊隊長、フォルテ・シュトーレン大尉です」

「そうか。後は、ランファ・フランボワーズ中尉と、ミント・ブラマンシュ中尉と、烏丸ちとせ中尉だな。どうやら、噂ほどはチャラチャラしていないらしい」

「いきなり、あんたは！「よさないか！　ランファ！」」

その若い将官の挑戦的な態度に、ランファは思わず声を荒げてしまうのだが、それを止めたのはフォルテであった。
この司令官は、その若さで少将という事は確実に貴族出身者であり、その手の人間を怒らせると後が大変な事をフォルテは誰よりも経験し、理解していたからだ。
ここは、タクトの指揮していたムーン・エンジェル隊とは違うのだ。

「ムーン・エンジェル隊のあだ名を教えてやる。世間では《戦乙女≫らしいが、軍のある派閥では、《妖怪のコスプレコンパニオン》だ」

これは、最終的に市民出身者のウォッカ大将に皇国奪還の功績を奪われてしまった貴族達から出た、半ばやっかみに近い呼び名であった。

皇国中興の祖と呼ばれるであろうシヴァ陛下、それを支える老練な忠臣であるルフト宰相とウォッカ大将、優秀な軍司令官であるジンロ大将とウォルコット大将、若年ながらも皇国軍で一番の功績を挙げた若き英雄タクト・マイヤーズ少将と、その双璧と呼ばれるレスター・クールダラス准将とアキオ・レイトン准将、そして紋章機を翔って大活躍をした現代の戦乙女ムーン・エンジェル隊。

概ね世間の評価はこうなっていて、それに嫉妬する貴族達が影でそう呼んでいたのだ。

ちなみに、妖怪とはウォッカ大将の事を揶揄する呼び方であった。

「戦前は、ジーダマイヤに尻尾を振る事しか能が無く、今は負け犬同士で寄せ集まってキャンキャン吼える事しか出来ない連中の陰口だが、それでも貴族なのでそれなりに力はある。困った事だ」

フォルテ達は、この若い将官の意図が良く理解できなかった。

能力のある指揮官は送るが、貴族であると聞いていたので、まさか目の前で身内批判をするとは思わなかったからだ。

ただ、優秀そうなのはわかるが、どうも自分が貴族である事を忌諱しているわけでもないらしい。

その態度と口調は、貴族そのものと言った感じであった。

「何を言いたかったのかと言うと、君達は常に見られているという事だ。功績も広がるのが早いはずだが、悪名も広がるのが早い。何しろ、バカ貴族達が粗捜しに必死だからな。だから、軍人として恥ずかしくない行動を求める。言っておくが、俺は弟のように甘くはないぞ。あれは、貴族でありながら貴族を捨てたバカ者で、たまたま時運に乗って功績を得たに過ぎない。もう一度言うが、俺は弟ほど甘くない！」

フォルテ達は、ようやくにしてその若い将官に対して感じていた既視感の正体を掴んでいた。

彼は、その容姿がタクト・マイヤーズに良く似ていたのだ。

「おっと、紹介が遅れたな。俺の名前は、クレッシェンド・マイヤーズだ。タクトの兄と言った方が君達には通りが良いのかな？」

「タクトの兄貴……」

こうして、新しい指揮官を迎えての強奪艦隊殲滅作戦はスタートするのであったが、その指揮官となったタクトの兄にフォルテ達は大きく感情を揺るがす事となるのであった。

第二部　第一話

「明日のトランスバール標準時１０：００に改装作業が終了する予定の軽空母ヒヨウは、その足で惑星シャンタンに集結中の輸送船団と護衛艦隊に合流する。なお、輸送船団は、最近輸送船の行方不明事件が相次ぎ、物資の不足が懸念されるレナ星系へ一気に物資を送るために、急遽編成された船団だと言う設定だ」

タクト・マイヤーズの兄であるクレッシェンド・マイヤーズと衝撃的な出会いをしたフォルテ達は、その後白き月の内部にある空き部屋でこれからの予定を、護衛艦隊司令である彼自身から聞いていた。

「それと、輸送船の荷の中身だが、レアメタル類と加工金属類が一番多くなっている。なぜなら、最新の強奪艦隊に対する分析結果によると、その手の物資が一番狙われているからだ」

「つまり、強奪艦隊は己の戦力を増すための材料を主に狙っていると？」

「簡単に言うと、シュトーレン大尉の言う通りだな」

状況説明をするクレッシェンド・マイヤーズに視線を送って秘かにその人物像の解析を試みるフォルテ達であったが、その結果は微妙という他はなかった。

背はタクトよりも高く、体も良く見るとかなり鍛えられていて、顔もタクトよりもシャープな感じで、見た目はタクトよりも女性にモテるタイプであろうとは思うのだが、ではフォルテ達が彼に惚れ

たり付き合いたいと思うのか？　と言えば、答えはノーであった。

彼は、自分が貴族でありながら、他の無能な貴族に対して容赦のない批判をする。

だが、だからと言って、彼が貴族である事を恥じているわけでも、それを忌諱しているわけでもない。

貴族は貴族として振舞うのが当たり前で、それに外れている貴族など貴族に値しない人間なので、それを批判する事に何の躊躇いも持っていないのだ。

彼にとって、下らない派閥闘争で軍や皇国の足を引っ張る貴族連中は基本的にゴミに近い人種であり、皇国内において重要な地位を得たければ、正当な努力をする事こそが皇王陛下に対する忠誠の証であると考えていた。

それに、貴族出身者は市民出身者よりも遙かに優位なスタートラインに立っているので、努力するのは当たり前だと思っていたのだ。

恵まれた家に生まれた以上は、普通の人の何倍も努力をしなければならない。

つまり、彼は自分に厳しい人間なのだ。

ただ、その厳しさを彼は無意識に周りに強要する部分があるらしい。

フォルテは、彼の言動からその事を鋭く掴んでいて、そういう部分が、彼が非常に付き合い難い人間に見えるのであろうと思っていた。

「惑星シャンタンで輸送船団の編成を行って後、惑星ロハス宙域を経由してからレナ星系へと至る。全行程は五日ほどだな。その間に敵が来れば、作戦は成功だ」

敵の強奪艦隊が護衛艦隊の少なさから組し易いと思って輸送船団

襲撃をすると、ヒヨウから四機の紋章機が発進して攻撃を開始する。
今までに伝えられている規模の艦隊であれば、ひとたまりも無いはずであった。

「司令官殿は、今回の作戦が成功するとお思いですか？」

作戦概要を聞いたフォルテは、クレッシェンドに一番基本的な質問をする。
彼女とて、うら若き十代の女の子達を預かっているので、あまり無謀な事はさせたくなかったからだ。
もし、あまりに部下に無茶を強要するような人物であったら大変だと思い、少し探りを入れてみたのだ。

「正直な意見としては五分五分だな。作戦自体は悪くないと思うが、一部泥縄的な部分が成功率を下げていると思う。下らない政治闘争の賜物だが、君達が噂通りの力を発揮すれば失敗は無いだろう」

「はあ……」

フォルテ達は、クレッシェンドが有能な指揮官であるという印象は抱いていたが、自分達とは性格的な部分で合わなそうであるとは思っていた。
部下の疑問には正直に答えるのだが、どこか自分達を下に見ている傾向があり、フォルテはタクトもこの兄に相当苦労したのであろうなと勝手に思っていた。
作戦の成功確率が半々だと言っている癖に、ムーン・エンジェル隊がちゃんと実力を発揮できれば勝てると発言する。
と言う事は、クレッシェンドは周囲の噂から想定されるムーン・エンジェル隊の能力を眉唾的に見ているとも取れ、こういう部分が弟であるタクトとは大分違うようであった。

彼は、いかなる時でも、自分の部下を信用しないなんて事は絶対にしなかったからだ。
甘いと言えば甘いのだが、信用しようとしなかろうと軍人に与えられる戦力に変化がわるわけではない。
ならば、まずは信用するという部分で、クレッシェンドはどこか司令官として向いていないような気のするフォルテであった。
そもそも、疑って対策を練るのは参謀や副司令の仕事であり、レスターは実にその部分が上手い軍人でもあったが、クレッシェンドも同じようなタイプの指揮官に見えているフォルテであった。

ただ、この件に関してはクレッシェンドにも同情すべき部分がある。
彼は、エオニア戦役の際に、ウォッカ大将の下でほぼ作戦参謀としてしか動いていなかった。
以前も、参謀などに任命される事が多かったので、あまり司令官としての経験が無かったのだ。
つまり、好き好んで辺境惑星の防衛艦隊司令になったり、当時ルフト中将にエルシオールを預けられたタクトとは違い、逆にエリートであったらこそ艦隊司令としての経験が不足していた。

「惑星ロハスですか……。アキオさんが……」

作戦で通過する惑星に、自分の想い人がいる。
そんな理由から、ふと独り言を言ってしまったミントであったが、すぐにしまったと思って口を閉じてしまう。
ここは、前のムーン・エンジェル隊とは違うし、そもそも司令官であったタクトもいないのだ。
当然、仲間内で名前で呼び合うなどという慣習は絶対にあり得ず、余計な事を言って、目の前にいる厳しい上官の印象を悪くするのは避けようと思っていた。

「ほう。アキオ・レイトンは、そんな場所で隠棲していたのか」

ところが、意外にもクレッシェンドはミントの独り言に興味を示し始める。

「興味がおありなのですか？」

「あれほど、他人の興味を魅く人間もいないと思うがな」

有名な大貴族の庶子で、その事を理由に実の父に狙われつつも、それを跳ね除けてシヴァ陛下から絶大な信頼を得ている。

確かに、他人の興味を魅かないわけが無いのだが、ミントやちとせからすれば、アキオが、またこんな灰汁の強い貴族から嫉妬の目で見られてしまって可哀想だとしか言いようがなかった。

「実に惜しい事だな」

「惜しいのですか？」

「あれほどの人材を貴族嫌いにしてしまったシードル公爵は、最後の最後で晩節を汚したな。その息子は、輪をかけて愚か者だが……」

クレッシェンドは貴族ではあったが、極めて冷静な理性と能力を倫理観を兼ね備えた人間であるらしい。

なので、公爵と言う皇族に次ぐ高い爵位を持った人物が、あろう事か爵位継承権の理を曲げようとして、先に身分の低い女に生ませた庶子を殺そうとして違法行為に手を染めたり、挙句の果てに自分の執事に裏切られて命を落とすなど、お話にならないレベルの愚か者にしか見えなかったのだ。

更に、その息子であるエリオスが、その執事に裏切られている事にも気が付かないで、優秀な軍人であるアキオを無実の罪で処罰しようとするなど、クレッシェンドから言わせれば、エオニアに対する利敵行為以外の何物でもないと思っていた。

たまたま未遂で終わったから良いものの、もし本当に処刑してしまったり、それから逃れるためにエオニアの元に逃亡でもされたら大変な事になっていたからだ。

しかも、そんな大バカ者が、運良くまだ公爵として生き残っている。

当時の政治状況的には仕方が無い事には気が付いているクレッシェンドであったが、またバカな事をしなければ良いがと思ってしまうのだ。

「あのエリオスとか言う、新シードル公爵はお話にならん。公式の場以外では、話をするにも値しない男だ」

ここまで公式に公爵であるエリオスを批判して大丈夫なのかと思うフォルテであったが、実は全く大丈夫であった。

クレッシェンドの貴族批判は、かなり前から周囲には認知されている言動であり、しかも次期マイヤーズ伯爵家当主となるクレッシェンドは、かなり宮廷内での序列が上の人間であった。

今まではそうでもなかったのだが、エオニアの貴族殺しで上が根こそぎ消えたのと、元々伯爵家なのに、何かの間違いで所領が辺境にあったり、同じく任務も辺境が多かったマイヤーズ伯爵家が、シードル公爵家に対抗可能なまでになっただけの事であった。

昔から、代々優秀な当主に恵まれるマイヤーズ伯爵家ではあったのだが、どうもその家系には口が悪い人間が多く生まれるらしく、そのせいで中央の宮廷では嫌われる存在であったらしい。

そこで、辺境ではあるが実入りが大きい領地を昔の皇王から貰い、しかもそれを真面目に経営していたので、その経済力は意外と侮れない物があった。

それでも、最盛期のシードル公爵家と比べれば数分の一程度ではあったが、現在シードル公爵家が財政を立て直し中である事や、現当主のエリオスが軍務で辺境に赴いている事などで、勝手にマイヤーズ伯爵家を反市民貴族が作る派閥の首領に祭り上げる動きが宮廷ではあるらしい。

良く手紙で父の愚痴を聞くクレッシェンドからすれば、とても忌々しい話ではあった。

そして、多少は生まれた家の環境のせいもあると思うのだが、傲慢というか、高飛車な部分もあるクレッシェンドは、貴族としての誇りを誰よりも大切にしていた。

昔で言うところのノブレス・オブリージュ、『高貴なる者の義務』というやつである。

これは、父親の教育の成果でもあり、特に家の跡取りでもあるクレッシェンドは他の二人の弟よりも余計にという事情があったのだが、そのせいで実の弟であるタクトと対立をする事が多くなっていた。

貴族家の跡取りである兄とは違い、自由に生きられる三男のタクトは、子供の頃から非常にマーペースに生きる子供であった。

一応は、万が一の際の予備扱いとして幼い頃から家庭教師などを付けられる事が多かったのだが、常に父親の期待に答えるべく優秀な成績を収める二人の兄と競う事もなく、負けて悔しいと思う事もない。

何をやっても中の下以下であったが、屋敷にいた年配の庭師に教わった将棋・碁・チェスなどの腕前は、近隣の大会で大人に混じっ

ても優勝するまでの腕前になっていた。
だが、そんな物に秀でていても、父親であるマイヤーズ伯爵が喜ぶはずもない。
チェスをする貴族は多かったが、それは趣味や遊びの範囲の事であり、『そんな物をする時間があったら勉強しろ！』と良く父に怒鳴られるのだが、肝心のタクト本人は飄々とした物であった。
そして、親のコネを使って首都星トランスバールにある中央士官学校に入学。
二人の兄は実力で入試に合格して上位で卒業したが、タクトはギリギリの成績で入学し、学生時代も、噂によれば女の子に声をかける事ばかりに夢中になっていて、しかもナンパに成功した女の子とのデート費用を工面すべく、子供の頃のようにチェスの大会で賞金を稼いでいたらしい。
そして予想通りに、卒業成績はビリから数えた方が早かった。

この事実に、マイヤーズ伯爵はコメカミの血管がブチ切れるのではないかと思うほど大激怒したらしいが、それでも卒業後に軍で頑張ってくれるのならと思い直し、見事にまたコメカミの血管がブチ切れるのではないかと思うほど激怒していた。

せっかくのエリートコースを捨てて、辺境の第2方面で星間ネットワークの構築作業という半ば閉職に、自ら望んで就任してしまったからだ。
しかも士官学校入学以来、タクトは実家に一度も顔を出していない。
タクトからすれば、家を継ぐ身でもないし、実は自分達兄弟を生んだ母は亡くなっていて、子供の頃に五月蝿い父親や兄達から守ってくれた彼女がおらず、更に変な若い後妻がいる実家になど死んでも帰るつもりなど無かった。
タクトからすれば、もう自由に生きさせてくれという心の声で願

うのだが、それに気が付くほど彼の父や兄は優しくはなかったのだ。

実は、エオニアの反乱直前には、マイヤーズ伯爵もクレッシェンドも半ば諦めていた部分もあったのだが、ここで思わぬ運命の変遷が起こってしまう。

あの落ちこぼれの三男が、皇国の英雄と呼ばれるほどの活躍をして、あのシヴァ陛下の覚えもめでたい存在になったからだ。

だが、また彼らの期待は裏切られる事となる。

今度こそ、中央で要職に就くと思っていたタクトが、あろう事か勝手に軍を退役してしまったのだ。

三度、マイヤーズ伯爵のコメカミの血管はブチ切れる寸前であった。

以上のような経緯から、クレッシェンドは弟のタクトの事を聞くと、精神が穏やかではいられなくなっていた。

「俺は、あのバカな弟とは違う。真面目に指揮を執るので、前の流儀を持ち込まないように」

クレッシェンドは再びフォルテ達に釘を刺すと、その足でヒヨウの艦長以下クルー達とのミィーティングに参加すべく、部屋をあとにしていた。

彼は、やはり真面目な軍人であった。

「やれやれ。早く終わって欲しいものだね」

「あの方は、本当にタクトさんの弟なんですか?」

「ちとせの疑問ももっともだが、普通そんな嘘は付かないだろう」

クレッシェンドの話しを真剣に聞くあまり、冷めてしまったお茶を飲みながら、フォルテ達はクレッシェンドをネタに話を続ける。

クレッシェンドは、タクトよりも表面上のスペックは上であったが、きっと親に期待されて懸命に努力したのに、自分の下だと思っていた弟に軍の階級で並ばれ、しかも現在の皇王であるシヴァの信頼度においては足元にも及ばない存在である。

しかも、タクトが自分に対して血の滲むような努力の結果として、自分を追い抜いていれば納得もしたのであろうが、彼のタクトに対する印象は、ただのチェスが上手い怠け者でしかない。

そして、そんな男が部下にしていたムーン・エンジェル隊のメンバーを指揮する事になった。

色々と複雑な感情を抱えているのであろうと、フォルテ達は思っていた。

「あのウォッカのジイさんが送り出した男だからね。軍の指揮官としては、優秀なんじゃないのかい？」

「でも、中途半端な男よね」

「ですわね」

「そうですね」

ランファの容赦ないクレッシェンド評に、フォルテは苦笑するしかなかった。

確かに、将器や戦略眼やカリスマではタクトに及ばないであろうし、参謀としての能力や冷静さや戦術眼や頭脳などでもレスターには勝てないであろうし、あの完璧超人であるアキオに彼が勝てる要素を探す方が難しい事であった。

勿論、クレッシェンドとて決して無能というわけではない。
かなり優秀な部類に入る人間ではあったが、比較対象が悪すぎたらしい。
そして、そんな男が三人も固まっている環境にいたフォルテ達も、自然と男に対するハードルが上昇していたのだ。

「あくまでも臨時編成の艦隊で、司令官も他所からの臨時司令官なんだ。早く終わらせてエルシオールに帰れば済む話さ」

結局、紋章機をエルシオール以外の艦で使うと手間とコストの面で大きな問題が発生するという結論に至り、今回の作戦で強奪船団を討伐後は、辺境探査を中止して帰還途中のエルシオールで紋章機をまとめて管理する事になっていた。
皇国復興の立役者である紋章機は、多少予算がかかっても広告的な面も含めて現役である事が望ましいという意見が大半であったからだ。
ただ、既存の船に専用の収容・整備・補給用のスペースと専用機材を増設し、特殊な武装や部品などを調達して専用の整備員を置くと異常なまでにコストが増大するので、まとめて管理をするのが金がかからないで良いという結論に至っていた。
これからは、エルシオールのみで紋章機を運用する事が決定していたのだ。

「でも、惑星ロハスですか。アキオさんに会えると、もっと良いんでしょうけど……」

「通り過ぎるだけですから、無理でしょうね」

そんな事を話しながら、残念そうな表情を隠しもしないミントとちとせとは対照的に、ランファはさして寂しそうな顔を見せていな

い事に、フォルテは一人心の中で疑問を感じていた。
出会ってから、最初は喧嘩ばかりであった二人だが、フォルテはランファがアキオの事を気にしている事に気が付いている数少ない人間であったからだ。

「しょうがないじゃない。任務よ任務。しかし、そんな田舎の惑星で生活して良く飽きないわね。アキオの癖に」

辺境にある、農業が主産業の惑星出身であるランファからすれば、ロハスだかスローライフだか知らないが、好き好んでそんな生活をする人の気が知れなかった。
ランファから言わせれば、田舎なんて不便で住みずらい場所でしかなかったからだ。

「隣りの芝生は青いのさ。自分がした事がない生活を楽しそうに感じる。だから、ランファは都会の生活が好きなんだろう？　ちなみに、私もどちらかと言えばそうだね」

フォルテも、内戦が続いている未開の惑星出身なので、ランファの気持ちが良くわかる。
それに、故郷にも特に旅愁を感じる事もなかった。

『多分、かなりのおばあさんにならないと感じないと思いますよ』

少し前に、アキオの話をしている時にウォルコット大将に言われた事を思い出すフォルテであった。

「さて、私達も紋章機のチェックに入ろうかね。どうやら、あの司令官殿は厳しい男のようだしね」

フォルテに促されたランファ達は、先に届いている紋章機のチェックを行うべく、格納庫兼駐機スペースへと移動を開始するのであった。

「なあ、タクト。これで滞在四日目だけど、そんなに休んで大丈夫なのか？」

「有給は、全部消化予定さ」

「お前はな」

タクトが椅子を温めている警備会社は、軍人の再就職先に使われる事の多い会社であったし、そもそもその会社を作ったのは第2方面で通商護衛艦隊副司令をしていたアキオだったので、タクトなどそこに在籍さえしていれば何の問題も無かったのだが、ミルフィーユの勤めているケーキ屋はそうもいかないはずなので、その点だけが心配なアキオであった。

「私は、何だかんだ言ってもアルバイトですから。それに、ここで作り方を教わったお菓子やタルトのレピシをメールで店長に送ったら、大喜びでしたよ。もう少し休んでも問題ないそうです」

「芸は身を助けるだな。さてと、俺は米と小麦を貰いに行くか」

二人がいても生活のペースをまるで変えないアキオは、人数が増えて減りの早い食物を補充すべく、家に置いていあるマスの燻製やイノシシの肉などをカバンに詰め始める。

「本当に、物々交換なんですね」

「向こうは、田んぼと畑の管理で狩りや釣りに出る時間が少ないからね。という事なので、タクトとミルフィーは魚でも釣りに行ってくれよ」

「任せてくれよ」

「今日も一杯釣りますね」

アキオは、自分の車を湖へと釣りに出かける二人に貸し出し、自分は少し歩いた先の近所の家から車を借りて、少し離れた農家へと穀物類を貰いに出かける。

誰か人がいるのも珍しい道を車で走っていると、不意に視界に一人の若い女性が見える。

彼女は、アオキに対して手をあげていた。

「珍しいな。ヒッチハイクなんて……」

アキオが車を彼女の横に止めてから助手席のドアを開けると、すぐにその若い女性は乗り込んでくる。

その若い女性は、白い肌に黒い長い髪と紫色の瞳が特徴の、少し変わった雰囲気ではあったが、とても美しい女性であった。

「どこまで行きたいんです？」

「空港に行きたいんです」

「少し遠回りになるけど、時間はあるから送るよ」

アキオは、先に彼女を空港に送ってしまおうと思い、そのまま彼女の目的地である空港へと車を走らせ始める。

「助かりました」

「誰かを訪ねて来たんですか？」

「ええ」

「でも、帰りも送って貰わないと。ここでのヒッチハイクは無謀ですよ。滅多に車なんて通らないし」

「みたいですね」

この惑星の他の住民のように機能性に優れた服装ではなく、どこか垢抜けた感じの彼女は、やはりこの星の住民ではないようであった。

この星で若い女性の住民がいれば、すぐに噂になって入って来るであろうし、彼女の美しさであれば余計にそうであるからだ。

アキオは、少し違和感を感じつつもその女性との話を続ける。

「私としては、ちょうど良かったんですよ」

「目的が、俺だからですか？」

「やはり、あなたは噂通りの人物ですね」

アキオが彼女に違和感を感じた理由は、別に難しい事ではない。こんな山奥の獣道で、この星の住民でもない若い女性が一人で立っているのは不自然であったからだ。

普通なら、遊びに行った先の住民に送って貰うのが当たり前であったからだ。

「そんな登場の仕方は、相手を能力を探る指針にもなりませんよ」

「そんなつもりはないですよ。私は、ただあなたを上司の命令によってスカウトしに来ただけです」

「スカウトですか。それって、どこの組織なんです？」

「真・正統トランスバール皇国軍と言えば、あなたなら理解できるはずです」

「エオニアの亡霊か……」

最初からそんな組織に加わる気も無かったアキオは、早速一言目に自分を勧誘した女性に対して身も蓋もない毒舌を吐いていた。

「残党が生きていたんですね」

「我ら正統トランスバール皇国軍は、その指導者であるエオニア閣下を失いましたが、その志をレゾム閣下が引き継ぎました」

「レゾムって、あの　レゾム・メア・ゾム元中尉？」

「はい」

アキオは、エルシオールを迎えに行く艦隊を指揮していた時に、レゾムの艦隊と交戦した過去を思い出していた。

エオニアから授けられた艦隊の多さに胡坐をかいて、単純な策ばかりを弄していた。

アキオやタクトに言わせれば、小艦艇の艦長程度がお似合いの男であり、とてもエオニアの跡を継いでどうにか出来るような人物ではなかったはずだ。

「閣下は、あなたをナンバー2として迎え入れるそうです」

「本気ですか？」

「どうして、そう思うのです？　あなたは、あのエオニア閣下がその能力を認めていた人間です。エオニア閣下の後継者たるレゾム様が、あなたを欲する事に私は疑問は感じませんが……」

「正直に言わせて貰えば、俺とタクトは恨まれていると思ったけどね」

過去に数回、レゾムと艦隊戦を行った経験のあるアキオであったが、その際にレゾムの事をボロカスに罵倒した経験があるので、まさかこの女性が暗殺ではなくて引き抜きの話をするとは思わなかったのだ。

「私は、あなたが引き抜きに応じるとは思わないですけど」

「正解ですね」

その一言だけで、レゾムがアキオを引き抜きたいという話は二度と出なくなる。

このレゾムの副官を名乗る女性の、あくまでも自分は上官の命令で交渉に来ただけで、別に結果には拘らないという態度に、アキオは大きな疑問を抱き始めていた。

「レディーだからですかね？　意外と淡白なんですね」

「優秀な人材が多くいれば必ず成功するという保障もないと思うのですよ、私は。それに、いくら優秀でも獅子身中の虫を置くのはどうも。それと……」

「エオニアの誘いに乗らなかった俺が、レゾム如きの誘いに乗るとも思えない？」

「その辺は、想像に任せます」

アキオは、他にも気になった事があったのだが、正面の視界には宇宙港が見えていた。

二人のお話の時間は、これで終わりであった。

「到着です」

「わざわざすいませんね。皇国にとっての反逆者である私を捕らえないで送っていただいて」

「俺は今は軍人じゃないし、あなたの言う事が本当だという保障もないし、今の俺はほぼ丸腰なのでね。無料働きと命を危険に曝す事はなるべくしないでおくさ」

アキオの運転する車は、そのまま静かに宇宙港施設の入り口の前に止まる。

「俺が現役に戻ってから戦場で会ったら見逃さないけど」

「あなたの言葉、心得ておきましょう」

女性は、アキオに送って貰ったお礼を述べながら車から降りて、空港の建物の中へと歩いて行く。

「ところで……」

「はい？　何でしょうか？」

急にアキオに声をかけられて、後ろを振り返った女性に、アキオは不意にこんな質問をする。

「レゾムは、あなたにとっての軽い神輿でしょうかね？」

「まさか、私はレゾム閣下の忠実な副官ですよ」

「あなたほどの優秀な方がですか？　世の中には奇妙な事が沢山あるんですね」

「いえ、私にさしたる実力など……。では……」

その女性、レゾムの副官であるネフューリアは、自分達の敵となる人物の鋭さに内心で動揺しながら惑星ロハスを後にするのであった。

「やれやれだ。休暇は、これで終わりかもな」

ネフューリアを空港に送った後、最初の目的である食糧の物々交換を済ませたアキオは、先に自分の家に戻って釣ったマスを捌いていたミルフィーユと、その手伝いをしていたタクトに先ほどの出来事を話す。

「新しい敵ねぇ……。だけど、今の俺達に……」

「大変だ！　レイトンさん！」

アキオの小屋の中に、突然近所に住む年配の漁師仲間が飛び込んで来る。

「どうしたんです？」

「惑星の上でドンパチやっているんだよ！　落下物があるかもしれないから、緊急避難命令が出ている！」

いくら現代生活を捨てるために集まった人達とはいえ、当然有事の際には決められた場所への避難をするように義務付けられている。

特に、惑星上宙で艦隊間戦闘が発生した場合には、沈んだ軍艦が落下して来る可能性があったので、シェルターへの避難は必須とさ

れていた。
大半は大気圏で燃え尽きるから心配ないのだが、稀にそのまま航行不能になった軍艦が丸ごと落ちてくる事もあったので、避難命令はかなり徹底されている部分があった。

「ところで、そのシェルターってどこにあるんですか？」

「空港の近く」

「遠いなぁ……」

タクトの言う通りであったが、この惑星はとにかく人が点在して住んでいるので、ある意味仕方がない部分も存在していた。
僅か数千人の住民のために、そんなに沢山のシェルターを作る予算などあるはずもないのだから。
それに、こういう場所に住んでいる人達は、もしそういう事態になっても半分諦められる潔さを持ってもいた。
まあ、大半が年寄りだという理由もあったのだが……。

「車を出すぞ」

アキオの運転で、近所と言うには遠い他の住民達を乗せた車は、無事に空港の近くにあるシェルターへと到着して避難に成功する。
途中、上空を眺めるとうっすらと大型宇宙用艦船の集団と戦闘の際に発生する火線の光が確認きでた。

「どこの艦隊なんだろう？」

「さあな。元軍人でしかない俺達には、そんな情報は入らないだろうし」

シェルターに入ったタクトが、設置されている情報端末のスイッチを入れて詳しい情報を得ようとするが、端末にはただ戦闘避難警報の表示がされているだけであった。

「噂の強奪船団かな？」

「大方そんなものだろうな」

「でも、随分と戦闘の規模が大きいですよね」

これでも士官学校を出ているミルフィーユが、先ほど見た上空での戦闘の光の数を参考に意見を言う。

確かに彼女の言う通りで、この惑星の上空ではかなり大規模な戦闘が行われているようであった。

「残骸とかが落ちて来ないといいんだがな」

「そうだな。この星の自然環境に良く無い」

他に打つ手の無いタクトとアキオは、そのまま腕を組んで居眠りを始めてしまい、同じく避難して来た人達はその度胸の良さに驚いていた。

そして、ミルフィーユも早く戦闘が終了する事をただ祈るのみであった。

「駆逐艦イソカゼ！　損傷大で航行不能です！」

「総員退艦命令を出せ！　ムーン・エンジェル隊はどうなっている？」

「予想以上の戦果を挙げてはいますが……」

一方、上空の輸送船団は、突如現れた敵強奪艦隊の強襲に遭って大損害を出していた。

元々、どこで襲われても対応可能なように動いていたし、皇国内部の派閥争いの産物によって決定されたとはいえ、護衛艦隊の戦力を持ってすれば撃退は容易いと思われた敵強奪艦隊は、今までとは比べ物にならない数の艦隊を繰り出していて、その結果、護衛艦隊旗艦である軽空母ヒヨウのブリッジには半ば悲鳴に近い報告が続々と入っていた。

「噂に違わぬ戦乙女達か……。こっちの見通しが甘いだけじゃないか！」

クレッシェンド・マイヤーズは、指揮官専用シートの横にある情報端末を力一杯拳で殴り付けていた。

確かに、ムーン・エンエジェル隊は敵強奪艦隊の半数と互角以上に渡り合っていたが、もう半分によって輸送船団と自分の艦隊は大攻勢を受けていた。

輸送船は、撃沈はされていなかったが、機関部に攻撃を受けて次々と停止する羽目になり、護衛艦隊は既に三割の艦が戦闘不能になっている。

軍事の定義で言えば全滅に近い損害に、さすがのクレッシェンド・マイヤーズも半分自信を無くしかけていた。

「ムーン・エンジェル隊に頼るしかない。紋章機の修理と補給を唯一行えるこの艦を落とさせるな」

「司令、それは、つまり……」

「他の艦を盾にしても、この船を守るんだ」

どう考えても辛い選択であった。

この状況で、強奪船団に唯一対抗可能な紋章機ではあったが、紋章機とて無限に機動可能というわけでもない。

エネルギーや弾薬が切れてしまえば、ただの金属の塊となってしまうからであり、だからこそその紋章機に補給を行える旗艦ヒヨウは沈む事は許されなかった。

だが、このクレッシェンド・マイヤーズの苦渋の選択を後に責める人間は多いであろう事は、クレッシェンド本人でも気が付いていた。

『貴族様が、自分の身が可愛いから他の小さい船を犠牲にした』

こう言われる事は確実であった。

それでなくても、エオニア戦役後の情報公開で市民に対する貴族への感情は悪化していて、クレッシェンドは下手をすると懲罰で退役という事態も覚悟しないといけなくなっていた。

多分、そうなっても痛くない人材として、今回自分は司令官に選ばれたのであろうと思うクレッシェンドであった。

「あのジジイは、相当に食えないらしいな」

「市民出身者の多い派閥に考慮というやつですね。レイトン准将が

潔く身を引いた理由が良くわかりますよ」

同じ貴族出身の参謀長が、クレッシェンドに追随するような意見を言う。

「あのジジイ。軍法会議になったら、逆に護衛艦隊算定を間違えた件で告発してやる」

その口調は貴族とは思えないほど汚かったが、それでもクレッシェンドは自分が出来る限りの対策を次々に施していく。

次第に戦況は膠着状態となっていくが、それでも自分達の負けは時間の問題となりつつあった。

「輸送船団を見捨てて行くという選択肢が無いのが辛いですね」

「それをしたら、俺達は軍人でなくなってしまうからな」

もう既にエオニアによる内乱は終結しているので、長く忘れられていた部分もあったが、宇宙軍本来の目的である星間ネットワークとそこを通る輸送船の護衛を放棄して逃げたら、自分達は確実にクビになるはずであった。

特に、あのウォッカ大将が許してくれるはずもなかった。

「きゃーーー！」

「ちとせ！」

そして、彼らを更なる不幸が襲う。

強奪艦隊と戦闘中の烏丸ちとせ中尉のシャープシューターが、予想外の方向から敵艦の狙撃を受け、そのまま惑星ロハスに墜落して

行く様子を直接確認してしまったからだ。
シャープシューターは体制こそ崩していなかったが、惑星ロハスの重力に捕まって大気摩擦で真っ赤に染まりながら降下していく。

「シュトーレン大尉！　烏丸中尉は大丈夫なのか？」

「紋章機ですので、パイロットに怪我はないと思います」

フォルテは、クレッシェンドが意外と部下思いなのか、それとも貴重な戦力である紋章機が一機欠けた事でショックを受けているのかが、判断が付きかねなかったが、それでも彼女が無事であろう事を告げる。

紋章機は、シムス高速戦闘機などとは比較にならないほど耐久性や安全装置関連が充実していた。
そうでなくても乗り手を選ぶ機体なので、その貴重なパイロットを失うわけにはいかなかったからだ。
それに紋章機には、大気圏突入・離脱能力もあるし、重力下での稼動も十分に可能なので、あとは早く戻って来る事を期待するしかないフォルテであった。
だが、彼女はそこで思わぬ人物との再会を果たす事となる。

「何だ？」

「タクト、沈められた船の残骸が落下した可能性があるな」

再びシェルターに避難したタクト達であったが、彼らはシェルター内にも響き渡る大きな衝撃音を聞く事となる。
基本的に宇宙艦艇の部類はクロノ・クロス・エンジン搭載で、既に核物質関連を使用した機関部を搭載している船は天然記念物物であった影響で、放射能汚染などの心配はなかったのだが、それでも他のエオニア戦役の際でも平和そのものであったここの住民達は、お互いに顔を合わせて心配そうな顔をしていた。

「レイトンさん、大丈夫かな？　ワシは、元美術館勤務で荒事は経験がなくてな」

近くにいた近所に住む老人の不安そうな表情を見たアキオは、少し外の様子を見てみようと決心する。
人は何も情報がなくて閉じ込められると、極度に不安に駆られてしまう生き物であり、それを解消するためであった。

「レイトン、いいのか？」

「『残骸が落ちただけで、シェルターには何の影響もないし、ここに落ちてくる可能性は天文学的数字だ』と外の状況を見てから言うだけで人は落ち着くものなのさ」

タクトに小声で説明してから、アキオはシェルターの入り口を開けて外に出る事を皆に継げる。
すると、他にも一緒に様子を見に行きたいと手をあげる人達が数人いた。

「俺は、元警察官だからな。一緒に行くぞ」

「私は、元消防署員だ」

「ワシはこれでも元軍人でな。最終階級は大佐止まりで、レイトンさんには勝てないけどな」

「ああ、俺も行くわ」

タクトも立候補して、五人で耐圧扉の堅いドアレバーを懸命に回し始めるのだが、不意にアキオはこんな事を言い始める。

「やっぱり、気が付かれていたんですか」

「そりゃあ、貴族様のご落胤で、准将閣下で、銀河有数の金持ちで、イケメンでと、マスコミの話題には事欠かない人だからね。それにここの住民には、他にも元有名な舞台役者とか、政治家だったとか意外と多いからね。いちいち気にしない人が多いんだよ。この惑星ロハスの住民はね」

「へえ、凄いんだな」

元軍人であったという老人の話に、タクトは素直に感心していたが、アキオは一つ気になった事を尋ねてみる。

「ちなみに、こいつは少将閣下ですけど」

アキオは、タクトが皇国の英雄と呼ばれ、自分よりも階級が上である事を周囲に教えるのだが、周囲の人達の反応は鈍いものであった。

「そう言われると、そんな事が新聞に書かれていたような……」

「いや、皇国の英雄で軍人だって聞いたから、ワシはもっと厳つい人物なのかと……」

「このお兄さんは、優しそうだけど普通だからのぉ……」

ここ数日タクトと直接顔を合わせていた老人達は、どうやら本気でタクトの正体に気が付いていなかったらしい。

報道でのイメージと本人の容姿にギャップがある事を口にしていた。

「いいんだ……。俺は、レスターやレイトンみたいにイケメンとかじゃないし……」

「タクトさんは、私にとってはイケメンですから」

「こんなに可愛い彼女がいるのなら、十分に勝ち組だから気にせんでくれ」

「そうじゃの、それだけで名将の資格ありじゃ」

ショックを受けたタクトはミルフィーユに慰められていたが、肝心の老人達は《柳に風》といった風でドアノブを回し続けていた。

「少し遅れたな。タクト！　ちかくに落ちているのか？」

数名でシェルターを出たアキオ達は、その場でラジオを付けながらシェルター周囲の探索を行う。
元警察官の意見で、万が一にも救助を必要としている軍人がいるかもれいないという事で、早くに落下した物の正体を知りたかったのだ。

「衝撃音からして、それほど離れていないはず……。あったぞ！」

アキオは、シェルター近くの森の木を数本なぎ倒して落下している物体を発見したのだが、それは過去に見覚えのある物であった。

「紋章機……。しかも、シャープシューターか……」

アキオは、タクト達を大声で呼んでから、シャープシューターによじ登ってコックピットハッチの強制排除を試みる。
パイロットであるちとせが自分で出て来ないという事は、下手をすると負傷している可能性もあったからだ。

「えっ？　シャープシューター？　レイトン！　大丈夫なのか？」

「通常の体制で着陸はしている。自動姿勢制御用と緊急着陸用のプログラムが働いたらしいな」

紋章機には、パイロットと機体の保護のためにこの手の安全装置が沢山装備されていて、つまりそれだけ貴重だと言う事であった。
他に替わりのあるシムス高速戦闘機には、こんな装置は付いていないのだから。

「よし、開いたな」

コックピットハッチが無事に開き、アキオが中の様子を確認すると、シートの上にちとせが意識を失った状態で座っていた。
半年ぶりに見る彼女は、やはり黒くて長い美しい髪を持つ少女であり、とりあえずは外見上は何の怪我もしていないようであった。

「ちとせは、大丈夫なのか？」

「予想外の一撃で体制を崩してしまって、そのまま惑星ロハスの重力に捕まった。多分、大気圏突入の余波で気を失ってしまったのだろう。でも、安全装置のおかげで無事に着陸した。そんなところかな？」

様子を見に来たタクトにアキオが状況を説明しているのだが、彼女が目を覚ますにはもう少し時間が必要なようであった。

「王子様のキスととかで起きるかな？　レイトン、やってみな」

「お前ねぇ……。自分の願望を口にするなよ」

「ちとせは、お前のキスなら大喜びだと思うけどな」

「タクトさん！　そんな冗談を言っている場合じゃないでしょう！」

「イテテテッ！　ミルフィー、冗談だから！」

「冗談でキスとか言わないでください！　女の子にとっては、大切なものなんですから！」

バカみたいな事を言い始めたタクトのお尻を、いつの間にか二人の傍にいたミルフィーユが思いっきり抓り、タクトはつい情けない

声をあげてしまう。
　すると、シャープシューターを取り囲んでいた老人達にまでそれを聞かれてしまい、その原因を知られてからかわれてしまう事となる。

「お兄ちゃん、今から彼女さんの尻に敷かれているのかい？」

「こりゃあ、先が思いやられるのぉ」

「まあ、嫁さんの強い夫婦の方が上手く行くもんだて」

　タクトは、老人達にからかわれながらつねられた尻を摩っていた。

「アキオさん。ちとせ、頭とか打ってないですよね？」

「ああ、大丈夫だな。気を失ってるだけだよ。ちとせ、大丈夫か？」

　ミルフィーユの心配を取り除くために、アキオはコックピットシートで気を失っているちとせの外部の様子を確認してから、優しい声で彼女に声をかけ始める。
　本当はもう少し寝かせてあげたい所なのだが、遙か上空の戦闘がどうなっているのかを確認したかったからだ。

「ちとせ」

「イケメンだと、女の子の名前とか呼んでも様になるよなぁ」

「タクト。お前、邪魔！」

　再びしょうもない発言で茶々を入れるタクトに、アキオが文句を

言う。

「ちとせ」

次に、ちとせの肩に手を置いて、体を優しく揺さぶり始めると、ようやくに彼女は意識を取り戻したようであった。

「あれ？　私は、戦闘中に敵艦の砲撃を受けて……」

「ちとせ、どうやら無事のようだな。良かったよ」

「へっ？　あれ？　ここは？」

「惑星ロハスさ。シャープシューターがここに緊急着陸したんだよ」

気を失っていたせいで、目を覚ましたばかりのちとせはまだ完全に状況が掴めていないようであった。

それと、自分に声をかけているのがアキオである事にもだ。

「そうだったんですか……。って、あれ？　惑星ロハスといえば、アキオさんがいて……、アキオさん！」

ちとせは、自分を起こした男がアキオである事に気が付き、目をパチクリとさせて驚いていた。

「上の戦闘の影響で避難したシェルターの近くに、偶然シャープシューターが着陸して来てね。怪我とかしてないか？　ちとせ」

「はい……」

「そうか、なら良かった。ところで……」

「アキオさん！」

ちとせの無事を喜んでいたアキオであったが、今度はアキオが驚く番となる。

久しぶりに想い人に会えて嬉しかったのか、ちとせがいきなりアキオに抱き付いてのだ。

ちとせの突然の行動に、アキオは驚いてしまう。

「アキオさん、お会いしたかったです！」

「あのな、ちとせ……」

ただ、アキオとしては周りの状況を良く見て欲しかった。

シャープシューターの周囲には、アキオだけでなくて他にもギャラリーが複数いたからだ。

「ちとせ、大胆……」

「レイトンは、やっぱり女殺しだよなぁ……」

いつもでは絶対に考えられないちとせの行動に、ミルフィーユとタクトは正直に自分の感想を述べていた。

そして……。

「レイトンさんには、あんなに可愛い彼女さんがいたのか。いやぁ、若いとは素晴らしい事じゃの」

「うちの孫娘との見合いは無理かのぉ……」

「うちのバアさんも、若い頃はあの子に負けないくらいに可愛かった……、と思うのじゃ」

「本当か？」

ちとせがアキオに抱き付く光景は、一緒に救助作業をしていた数名の老人達に全て目撃される事となり、彼らは良いものを見れたと素直に喜んでいた。

「アキオさん、これは？」

「えーーーと、俺のご近所さん」

ちとせ、あまりの恥かしさに顔を真っ赤に染め、そのまま恥かしさのあまり下に俯いてしまうのであった。

「それで、状況は？」

ようやく通常の状態に戻ったちとせに、冷静な軍人の顔に戻ったアキオとタクトが遙か上空で行われている戦闘の詳細を尋ねる。

戦闘中であったうえに、周りに人が複数いる状態で久しぶりに会えたとはいえアキオに抱き付いてしまった彼女は、まだ少し顔を赤くさせたまま戦況を説明していた。

「予想を超える規模の強奪艦隊から攻撃を受けて、ジリジリと護衛艦隊は後退を続けています。輸送艦隊の被害はさほどでもないです。沈んだ船はまだ一隻もありません」

「そりゃそうだろうな。あいつらは、輸送船を沈める事が目標じゃない。その中身の強奪が目標なんだから」

実際多くの輸送船が、機関部を破壊されてその場に漂流している状態であるらしい。

邪魔な護衛艦隊を始末してから物資の強奪を行うのが一番スマートな方法であろうとアキオとタクトは思っていた。

「私は、戦場に戻らないと」

「そうか、武運長久を願っているよ」

「アキオさん！　久しぶりにちとせに会ったのに、それは酷いですよ！」

「でもさ、ミルフィー。この状況じゃ、俺達には何も出来ないぜ」

ちとせを手伝う事もしないアキオに、ミルフィーは珍しく不満を口にするのだが、それに異を唱えたのはタクトであった。

アキオ達三人は今は軍人ではなかったし、独自の戦力を持っているわけでもなく、ここで手伝える事など何もないというのが実情であった。

一瞬、この状況でタクトとアキオが艦隊の指揮を執ればと考えてしまうミルフィーユであったが、それはいくら何でも現在指揮を執っている司令官に失礼であるし、そもそもタクトとアキオがその艦

隊の指揮を執る法的根拠すら存在せず、今は静かにシェルターに篭って大人しくしているのがベストであったからだ。

「後で召集されるかもな」

「ああ」

タクトとアキオが将来の可能性について話していると、突然シャープシューターの通信機の場面に見慣れた女性の姿が映る。

それは、ムーン・エンジェル隊の隊長であるフォルテ・シュトーレン大尉であった。

「ちとせ、現在の状況を説明してくれって！　アキオとタクトかい？」

「フォルテさーーーん。私もいますよ」

「ミルフィーも元気そうだね。だが、そんな話をしている暇はない」

上はかなり切羽詰まった状況らしく、フォルテは碌に挨拶もしないままちとせが無事である事を確認し、そのままシャープシューターで大気圏を離脱して攻撃を続行する命令を伝える。

「急いでくれ」

「じゃあ、俺達はこれで」

救助も無事に終了という事でそのままシェルターに戻ろうとするアキオ達であったが、突然シャープシューターの通信機の画面が切り替わり、そこにはアキオにはあまり見覚えのない若い男性司令官

の姿が映し出される。

「げっ！　兄貴か！」

「ふん！　穀潰しの弟か」

ちとせから、上空に展開する艦隊の司令官が自分の兄である事を知らされていなかったタクトは、久しぶりに会った実の兄に対して天敵にでも会ったかのような顔をしていた。

「時間が無い。上にあがって来い」

兄クレッシェンドの言葉は、単純明快であった。

彼は、タクト達に上にあがって来るように命令する。

「何の意味があるんだよ。それよりも、法的根拠はあるのか？　俺はまだ予備役のままだぞ」

タクトがここまで常識論を展開するのは珍しい事であったが、それほど目の前の兄が苦手でなるべく一緒にいたくないのは、アキオやミルフィーユから見ても明らかであった。

「紋章機は、パイロットのテンションで性能が左右する。これは事実だな？」

「ああ」

タクトは、クレッシェンドの質問にただ一言答える。

「なら、お前とレイトン予備役准将は上がって来い。このままだと

護衛艦隊は全滅する」

クレッシェンドは、皇国でもかなり優秀な部類に入る軍司令官であったが、優秀であるがゆえに今のままでは自分達が負ける事も理解していた。

そこで、彼はタクトに紋章機部隊の指揮を執らせる事を提案する。

「俺では、まだ彼女達とのコミュニケーションが不足しているからな」

「わかった。指揮を執ろう」

「その代わり、艦隊の指揮権は渡さないがな」

アキオは、マイヤーズ伯爵家の次期当主だと聞いた事があるクレッシェンドが紋章機部隊の指揮権を弟のタクトに譲渡した事に驚いていた。

普通、この手の貴族はプライドが高いので、貴族の名誉だとはほざいて無謀な抗戦をして部下を巻き込むか、高貴な身分である自分は明日の皇国に必要な人間だとほざいて自分だけ逃げ出す事が多かったからだ。

「始めましてだな。レイトン予備役准将」

「以前に、顔を合わせて敬礼くらいはした記憶がありますが……」

それは、アキオが士官学校を卒業して辺境に送られる時の事であった。

軍用の宇宙港のターミナルで、アキオ・レイトン少尉はその直言癖と毒舌癖ゆえに第４方面軍の参謀として飛ばされる事になったク

レッシェンド・マイヤーズ少佐とお互いに敬礼を交わしたのを思い出していた。

「あの時は、何も話さなかったな」

「ですね」

「まあ、後で追々は話す事もあるだろう。上にあがってくればな」

「同じく、自分は予備役で現役の将官ではありませんし、現役復帰には所定の手続きが必要であります」

「それは、タクト共々問題はない。それと、ミルフィーユ・桜葉中尉もな」

「えっ！　私もですか？」

以前の凶運を無くして、紋章機を操縦できなくなった自分までが呼ばれるとは思わなかったミルフィーユは思わず上官にタメ口を利いてしまう。

「ここに三枚の命令書がある。お前達への現役復帰の命令書だな。ちなみに、サインの主はシヴァ陛下なので拒否は許されるわけがない。文句があるなら、辺境で自給自足の生活でも送るんだな」

アキオとタクトは、このタイミングは偶然だと思われたが、自分達の現役復帰が完全に決められていたのを知ってしまう。

多分、この任務の帰りにでも半ば拉致同然で連れ去られる予定だったのであろうが、タクトとミルフィーユは惑星ロハスにいて、しかもその周辺宙域で敵の襲撃を受けと、クレッシェンドも予想外の

アクシデントが発生したのであろう。

「わかりました」

アキオは、シャープシューターの様子を一緒に見にシェルター外に出ていた近所の老人達に頭を下げて挨拶をする。

「短い間でしたが、お世話になりました」

「いや、ワシらも結構助けられたさ。それに、この星ではお互い様なのさ」

「そうそう。しかし、レイトンさんがいなくなると、奥さん達が悲しむだろうな」

「お前さん、良い男だからの」

現役の頃はそれぞれに第一線にいたと思われる老人達は、好々爺しながらアキオの挨拶に答えていた。

「半年か。その年齢で隠棲をするのも変じゃから、ちょうど良かったのかもな」

「そうじゃの。あとは休みに遊びに来るか、ワシらのように現役を引退してからここに来い。お前さんは、まだここに腰を据えるには早過ぎる」

「それに、まだ枯れる歳でもあるまいて。頑張ってくれよ」

「はい、全力をもって」

「孫娘を紹介できなんだは、残念じゃったの」

老人達は、アキオが小屋に置いている荷物は後で送る旨を伝えてからミルフィーユとタクトにも挨拶をし、三人はちとせの操縦するシャープシューターで素早く惑星ロハスの大気圏から離脱して護衛艦隊旗艦軽空母ヒヨウへと移動する。

シャープシューターは、簡単な整備と補給を受けた後にヒヨウを発進し、三人はそのままヒヨウのブリッジでクレッシェンドとの対面を果たす。

「時間が無い。現状で何か良い策はないか？」

クレッシェンドは、既にかなり大胆な策を採っていた。

まずは、輸送船団に張り付いていた護衛を全てヒヨウに合流させ、護衛の無くなった輸送船は機関部を閉鎖して現宙域で停止、乗組員達は艦内の安全な場所に退避させていた。

すると、例の強奪船団は輸送船の停止と無力化を理解したのか、輸送船団への攻撃を停止し、ヒヨウ以下護衛船団への攻撃を強化する。

だが、それを紋章機部隊が交代で補給と簡単な整備を行いながら阻止するという状態になっていた。

「輸送船団は停止ですか」

「動かなければ、脅威を感じないのであろうな。それに、後で荷を奪うので沈めるのは好ましくない」

それとクレッシェンドは、もう一つの事実に気が付いていた。

この数はなかなかに揃った強奪艦隊が、思ったほどの実力を発揮

していない理由。
　それは、先のエオニアの乱で使用された無人艦によって編成されていたという事にだ。

「護衛放棄で、軍法会議にかけられるかもしれませんよ」

「なら、その場で叩えてやるさ。『お前らが、護衛艦の数を減らしたからだろうが！』とな」

　軍という組織の上層部が、どうしても官僚的になってしまう事を承知している、アキオならではの実も蓋もない指摘であったが、対するクレッシェンドも、口の悪さでは負けていなかったようだ。

「そのお覚悟がおありなら、一つ策がない事もないですね。なあ、タクト」

「無い事もないけど、後で保険屋とかがうるさくないかね？」

「その辺は緊急処置だったという事で、『政府で補填するから、保険料を上げないでね』って交渉すれば良いさ」

　アキオとタクトの会話を聞いたクレッシェンドは、二人が実行しようとしている策に気が付く。
　それは、この船団を発進させる前に、輸送船に積まれた物資の一覧表にちゃんと目を通していたからこそ気が付けた物であった。
　この時代、ワープ航行を行うある大きさ以上の艦船には、全てクロノ・クロス・エンジンが搭載されていたが、それを搭載できない艦船や航空機などの機関部には、重ヘリウムを使う核融合エンジンが使用されていて、その燃料である重ヘリウムを搭載している輸送船が数隻存在していた。

「まさか、ぶつけて爆発させるのか？」

「ちょっと極小の太陽の完成ですね。多少、着火の手間はかかりますけど」

「中型から小型艦船機関部用の重ヘリウムは高いんだぞ。知っているのか？」

「そんな事をレイトンに言うと、《釈迦に説法》だぜ。兄貴」

自他共に認める補給のプロフェッショナルで、数多の輸送会社を含む企業とコネのあるアキオに、補給物資の値段を言うだけ野暮だと思うタクトであった。

「わかった。その策で行く。幸いにして、あの無人強奪艦隊をコントロールしている指揮官の能力は低いらしいし」

クレッシェンドは、重ヘリウムを搭載している船の船員に退艦命令を出し、彼らの乗る脱出用のシャトルを駆逐艦に回収させてから、そのまま後方に下げさせる。

同時に、自動航行プログラムに従った輸送船は、最高速度で敵強奪艦隊の中心部に向かって突撃を始めていた。

「やはり、無人艦艇か……」

戦闘中に、輸送船とはいえ大型艦艇が自分に突っ込んで来る。普通の指揮官なら、邪魔になるので撃沈するのが当然であった。だが、コンピューターによって制御されている無人艦艇は恐怖を感じない。

それに、『輸送船は後で物資を奪うので、足を止めて撃沈しない』という命令に忠実なのだ。
彼らは、火器を使わないで突進する数隻の輸送船を、まるで闘牛のようにかわしてから、横や後ろから機関部に対して微細な攻撃を行いその足を止める事に成功する。

「待ってましただな。砲撃開始！」

勿論、クレッシェンドが砲撃命令を下したのは、無人となった重ヘリウム搭載の輸送船の方であった。
シールドが切ってある輸送船の装甲を味方護衛艦隊のビームが貫き、それと同時に、特殊な周波数を利用して送信した輸送船の自爆コントロールが作動してクロノ・クロス・エンジンが自爆・崩壊し、砲撃のビームと合わせた膨大な熱で重ヘリウムが着火する。

「本当、太陽だな」

タクトの言う通りに、敵強奪艦隊の真ん中に数個の太陽に似た火球が出現して、周囲の敵無人艦艇を巻き込んで誘爆していく。
その光景は、残酷ではあったがとても美しい物でもあった。

「敵強奪艦隊の九割が消滅しました」

「では、残敵掃討に入ろうか」

戦力の大半を失った敵強奪艦隊は、その立場が狩る者から狩られる者へと変わる。
補給と臨時の整備を終えた紋章機と、生き残った護衛艦隊による砲撃によって彼らが永らえた時間は、ほんの数分だけであった。

「まあ、こうすれば簡単に倒せたんだけどな」

「普通は、躊躇いますか？」

「そりゃあな」

敵強奪艦隊が全滅した後、クレッシェンドはヒヨウのブリッジで残存した艦隊の指揮を執りながらアキオとな話をしていたが、護衛艦隊は半分にまでその隻数を減らしてしまい、更に機関部を撃ち抜かれてその場に動けなくなっている数十隻の輸送船の後始末や、取り残された船員達の救助などを考えると、普通の司令官なら頭が痛くなってくる光景であった。

「戦死を避けられただけで上等だな」

「生きていてこその華ですとも」

一方、アキオやタクトの方は、クレッシェンドほど深刻な顔や態度は取っていなかった。

いきなり現役復帰だとは言われても、彼らは正式にクレッシェンドの部下となったわけではない。

緊急避難的にヒヨウに乗り込み、その場で意見を求められたに過ぎなかったからだ。

そして、その意見を実際に実行したクレッシェンドとしては、心の隅では考えていたが、輸送船を犠牲にするという部分に後ろめたさを感じて躊躇っていた物を、二人に背中を押されて実行可能になったという部分も存在していた。

メンタルな部分ではあったが、これに引き摺られて過去に大失態を犯した軍人は数知れなかったので、クレッシェンドが二人に意見を言わせた事は結果的に正しい事ではあった。

「救援艦隊が来るまでは、ここで船の応急処置を行いながら待つしかないな」

「敵の増援があるとマズイよなぁ。その辺は、上層部は考えなかったのかな？」

「お前にしては、まともな事を言うものだな」

「俺も、一応は将官なんだぜ」

クレッシェンドの半分冗談の混じった嫌味に、タクトは普通に反論を行う。

どうやら、この兄弟はお互いが一緒に長時間いると場が保ち難くなるだけで、別に憎しみ合っているとか嫌悪し合っているというわけでもないようであった。

「タクト、ミルフィーは？」

「なぜかミルフィーも軍に復帰したんだけど、する事がなくて暇だからって厨房に行った」

現在、ヒヨウを含めた残存艦艇内では、戦闘終了後に配る食事の準備が行われていた。

だが、負傷者などが多数出て食事の準備を行う人材に支障をきたしたり、損傷で厨房が使用不能になった艦も数隻あり、それらの分も含めてヒヨウの厨房は戦場のような忙しさであるらしい。

そこで、それならばという事で、ミルフィーユは厨房に手伝いに行ってしまったとのタクトの話であった。

「間違ってはいないか。適材適所だな」

ミルフィーユの行動に、クレッシェンドは褒めもしなかったが文句も言わなかった。

彼としても、現在紋章機を動かせず、そもそもここにラッキースターも無い状態で彼女に出来る事といえば、この種の仕事しか無い事に気が付いていたからだ。

「それに、女の子の作った食事も悪くないだろうしな」

普段は、厳格なのに毒舌といまいち掴み所のないクレッシェンドであったが、それでも、以前にウォッカ大将が、『マイヤーズ伯爵家の男達の女好きは、代々の遺伝』と言わしめただけあって、クレッシェンドもそのくらいの事は言う人物である事にアキオは気が付く。

「ところで、手伝って貰うぞ」

「混乱している輸送船団の方に向かいます」

「助かる」

「俺は、援軍で来る連中のまとめかな？」

「サボるなよ」

「お礼くらい言っても、罰は当たらないと思うけどな」

「お前は、俺の愚弟だからな。そんな物は不要だ」

アキオは、今の時点で一番面倒な仕事である機関部の応急修理を行っている輸送船団の監督業務を、タクトはこれから五月雨式に来るであろう周辺惑星からの援軍のまとめをクレッシェンドに依頼される。

「軍服を貸そう。ところで、レイトン……」

クレッシェンドが何かを言おうとしたその時、ブリッジに飛び込んで来た複数の人物がいた。

敵強奪艦隊に止めを刺したフォルテ達ムーン・エンジェル隊の面々であった。

彼女達は、特に先ほど思わず再会の抱擁をしてしまったちとせに対抗心を燃やすミントは、ここにアキオがいる事を知って大急ぎで先頭で姿を現していた。

「ブラマンシュ中尉、ごくろうだった」

「ミント、久しぶりだな」

ところが、マイヤーズ兄弟の姿などミントの視界には入っていなかった。

ミントは、すぐにアキオの元に向かってしまい、二人の声かけは完全な空振りに終わってしまう。

「アキオさん、お久しぶりです」

「ミントも元気そうでなによりだな」

「はい、おかげさまで……」

ミントの視線に入っていないマイヤーズ兄弟であったが、ここで悲しむと負けだと感じたのか、すぐに気を取り直して後続で入って来たフォルテやランファと挨拶を交わす。

「ミントに関しては、大目に見てやってくれないかね？」

「ああ、すぐに察したさ」

意外と男女の機微に敏感で、弟のタクトのようにフランクな会話も出来るクレッシェンドにフォルテは少し驚きつつも、『やっぱり、兄弟なんだな』と感じていた。

それに、クレッシェンドは弟のタクトとは違い、任務中に女性に声をかける事はない。

非番の時や、次期マイヤーズ伯爵としての付き合いの席で見かけた綺麗な女性に声をかける事が好きであったのだ。

「ところで、マイヤーズ司令」

「どうした？　ブラマンシュ中尉」

ミントは、突然クレッシェンドに声をかける。

「アキオさんのお手伝いですが、少し待っていただけますか？」

「一時間くらいならな」

「十分ですわ。さあ、行きましょう。アキオさん」

ミントは、そのままアキオの手を引っ張ってブリッジを出て行こうとするが、それに待ったをかけた人物がいた。
何となく、アキオをミントに取られてしまったちとせであった。

「公私混同です！」

ちとせは、ミントが勝手にアキオと二人きりの時間を作ろうとしている思って、それに割って入ったのだ。

「ちとせさんは、気にならなかったのですか？」

「何がです？」

「アキオのさんの髪型です」

実は、先ほどクレッシェンドが言おうとしたのも、彼の髪型についてであった。
自分の下で働いて貰う際に、惑星ロハスでの地元の狩人のような格好をしているアキオに、服装は軍服を貸す事で決着していたのだが、その半年間全く切っていないボサボサの髪型をどうにかして貰いたかったのだ。

「将官としてのケジメは付けて欲しいな。正直、見苦しい」

「タクトさんは、久しぶりに会って何も言わなかったのですか？」

突然、ミントの標的にされたタクトであったが、彼はその程度の事ではまるで動揺せずに自分の意見を述べる。

「レイトンは、髪型とか関係なくイケメンだしな。それに、そういう事は女性陣が言った方が効果的だし」

「と言うわけなので、私がアキオさんの髪を切らせていただきます」

そう言うと、ミントはアキオを散髪の出来る場所に連れて行こうとするのだが、その時になってようやく、アキオは最後のエンジェル隊メンバーであるランファと会話を交わす事となる。

「うわっ！　浮浪者？」

「ランファ、半年ぶりに会って最初に言う事がそれか？」

アキオは、久々に聞いたランファの毒舌に思わず苦笑してしまう。

「こんなムサい男が、私の近くに立つ事は許されないわ。これでも参考にしてカットして貰いなさいよ」

ランファは、なぜか持っていた男性用ファッション誌をアキオに渡すのだが、それには付箋が付いていて、今話題の人気俳優の特集記事になっていた。

「雑誌持って美容院とか、一番恥かしいシチュエーションだな。しかも、ランファの趣味丸出し。ミーハーも良い所だな」

「そういう生意気なセリフは、ちゃんと定期的に髪を切ってから言いなさい。ミント、参考にするのよ」

「わかりましたわ」

ミントは、先ほどのモニター越しの映像だけでアキオに散髪が必要な事に気が付き、いつの間にか雑誌を準備していたランファを手強いライバルだと感じていた。
彼女は、自分やちとせには絶対にアキオへの好意の言葉は口にしない。
だが、その行動を見れば一目瞭然であり、これからまた厳しい戦いの日々の始まりを感じてしまうミントであった。

勿論、新たな敵との戦いも含まれているのだが、これはタクト達トップ三人の優秀さから、あまり気になっていなかったミントであった。

「本当に、一度も髪を切っていないのですね」

「ヒゲはちゃんと剃ってたさ」

アキオを連れてブリッジを出たミントは、無人の食堂へと移動して端の席にアキオを座らせ、自分もどこかから借りて来た台の上に乗って櫛で髪を梳かし始める。
ちなみに、厨房の方では手伝いのミルフィーユを含む調理人達が懸命に食事を作っている最中で、あまりの忙しさに誰もアキオ達に気が付いていないようであった。

それと、アキオの髪を切るミントの除いたムーン・エンジェル隊の面々は、交代で偵察と警戒を兼ねた哨戒飛行に出なければならず、

この場には来ない事になっていた。

「ここで切るのか？」

「はい、ここには掃除ロボットがありますから」

ミントは、丁寧に器用にアキオの髪を少しずつ切り落としていき、落ちた髪は床に置いてある掃除ロボによってすぐに回収されていく。

「左右同じ長さだ。上手だな」

「このくらいなら普通ですわ。それよりも、ちゃんと散髪くらいには行かないと」

とは言いつつも、ミントはアキオとの二人だけの時間を楽しんでいた。

「惑星ロハスには、床屋すらなかったからね。面倒だから放置していた」

ミントは、相変わらずのアキオのランダムな無頓着さに少し呆れていた。

アキオは、士官学校卒業以来、転属が多かったためにあまり私物を持っていないし、私服の類もあまり持っていない。

必要最低限の物と、スーツと私服が数着程度とジャージくらいであろう。

それと、高い酒は趣味なのでそれなりに持っていて、かなりの量をレンタルセラーにストックしているが、若い癖に車も持っていない。

そもそも、官舎住まいが常であったので退役後に官舎を出たのだ

が、官舎以外の自宅住所すら保持していなかった。
銀河有数の金持ちの癖に、根無し草であったのだ。
そして、風呂やシャワーは毎日じゃないと嫌な癖に、ヒゲは仕方なしに剃るが、散髪に行くのは億劫だと感じる。
どこかアンバランスで、子供のような行動パターンを有しているアキオであった。

「しょうがないですわね。せっかくの男前が台無しですのに」

ミントは、ハサミでアキオの髪を切りながら至福の時間を過ごしていた。

「戻っていらっしゃって嬉しいですわ」

「強奪船団の事件から覚悟はしていたよ」

有事の際にはシヴァ陛下に呼び戻すと言われていたアキオであったので、最近世間を賑わせていた強奪船団の補足殲滅に皇国軍が失敗し続けている現在、すぐに呼び出しがかかる事は十分に予想はしていた。

「ご専門でいらっしゃいますから」

「どうなのかな？　前に相手にしていた海賊達とは、基本的に何かが違うような気がするよ」

「無人艦隊だからですか？」

「エオニアは死んだんだけどね」

それでも、彼の反乱に参加していた数少ない人間の中で、まだ指名手配中の人物は何人か存在している。
他にも、皇国が把握してない人物がいる可能性も高く、彼らがテロリストして活動する可能性は十分に存在していたからだ。

「見えない敵というのは、とてもやり難いものさ」

「そうですわね。また厳しい戦いが始まりそうです。でも……」

「でも？」

「アキオさんがまた戻って来てくださった事は、とても嬉しかったですわ」

ミントはアキオの髪を切りながら、その後も色々な話を続けるのであった。

「やっと、元に戻りましたわね」

髪を切り、シャワーを浴びて借り物の第一種軍装に身を包んだアキオは、やっと以前の姿に戻っていた。

「でも、前の格好も良かったと思うんだけどな」

「ミルフィーが、最初に会った時に髪くらい切ってあげたら良かっ

たのよ」

ヒヨウのパイロット専用のブリーフィングルームで、アキオはミントに切って貰った髪型をランファ達に披露させられていて、生憎とフォルテとちとせは当番で哨戒飛行を続けていたが、そこに食事を持ったミルフィーユとタクトも現れ、アキオの髪についての話になる。

「それが、あの惑星ロハスの自然の中だと全然違和感なくて。それに、私がそれをしたら三人に怒られそうだし」

持って来た食事を配りながら、ミルフィーユはランファ、ミントと意味あり気に顔を合わせる。

三人の最後の一人は、今ここにいないちとせの事であった。

「ミルフィー、私はアキオが見っともないって思ったから忠告しただけなのよ」

そうは言いつつも、ミントはランファの持参した男性用ファッション誌で特集を組まれていた人気俳優の髪型を参考にアキオの髪を切っていた。

ちょうど、現在軍人役でドラマに出演していたので短めの髪型であったのと、今の若い男性の間で流行している髪型だったので、大いに参考になっていたのだ。

それに、女性であるランファが男性用ファッション誌を持っている必要などなく、慌てて購買で購入していたのをフォルテだけは目撃していた。

「何にしても、また俺達は一緒に戦う事になってしまったな」

無人艦艇によって構成されている、資源や物資を搭載した輸送船を襲い、数の少ない護衛艦隊なら逆に倒してしまうほどの実力を有した強奪艦隊。
タクトは、また自分達が戦争の表舞台へと引っ張り出された事を知る。
だが、また前と同じメンバーでやれるのなら悪くはないと思ってもいた。

「それにしても、周りは動けない輸送船ばかり。援軍が早く来ないかね？」

機関部の応急修理を全力で行っている各輸送船の管理はアキオに任せるとして、もし敵の第二派が来た時に備えて援軍くらいは欲しいと思うタクトであった。
クレッシェンドの率いていた護衛艦隊がほぼ半減というか、元より大した隻数を持っていなかった事もあって、早く援軍が欲しい状態であった。

「お前さんの兄貴は、俺に輸送船の管理を任せて自分は残存戦力の編成に力を入れたいらしいな。兄弟仲良くな」

アキオは、タクトとクレッシェンドがどんな風にブリッジ内に一緒にいるのかを想像して意地悪そうな笑みを浮かべていた。
自分の所ほどではなかったが、マイヤーズ兄弟もそれなりに事情を抱えていたのだ。

「俺に輸送船を担当させるのが、普通だと思うんだけどな」

「輸送船の船員ってのは、軍人とも違う少し独特の空気があるんだよ。マイヤーズ司令は、経験の無いタクトに不安を感じたんだろう

な。万が一って事もあるからな」

輸送船に乗船している民間船の船員達は、ほぼ軍人と同じ危険を背中に宇宙中を自分の腕一本で駆け巡る連中であり、それにプライドと誇りを持っている人間が非常に多かった。

スキルの関係で元軍人の比率も高かったのだが、だからこそ彼らは逆に軍人の裏の部分も全て知り尽くしていて、心のどこかでは、『軍人とて人間で、都合と命の危険があれば自分達を置いて逃げる』と考えていた。

なので、今回の作戦で誤解を受けている可能性もあって、だからこそクレッシェンドは合理的にアキオに輸送船の方の対策を一任していたのだ。

「じゃあ、俺は仕事に行くから」

ミルフィーユの作った食事を平らげたアキオは、そのまま格納庫へと向かい、そこに置かれたシャトルで一隻の駆逐艦へと移動を開始する。

輸送船に隊列や作業手順を出すために、ようやく残った護衛艦隊から抽出された貴重な一隻であった。

そして、タクトも一緒に部屋を出てブリッジへと移動していた。

「ミント、そろそろ交代の時間よね？」

「はい」

同じく食事を終えた二人は、現在哨戒飛行を続けているフォルテやちとせと交代すべく、同じく格納庫へと向かい、暫くしてからブリーフィングルームにはフォルテとちとせが哨戒飛行から戻って来

る。

「食事、ありますよ」

「ミルフィーの飯かい。久しぶりだねぇ」

「私、何となく復帰してますけど、主計将校扱いらしいですよ」

ヒヨウの厨房で食事の支度を手伝っているミルフィーユは、『もしかしたら、また紋章機をラッキースターを動かせるようになるかもしれない』という理由で、多分エルシオールに配属されるであろう事が確実視されていた。

それと、やはり急遽改造した軽空母では運用が面倒な紋章機のプラットホームはエルシオールが最適だという結論が軍上層部で出ていて、他のムーン・エンジェル隊のメンバーもまたエルシオールに移動する可能性が高くなっていたのだ。

「エルシオールですか？　でも、あの船は辺境調査に向かっていましたよね？」

「こんなご時勢だからね。もう呼び戻されているらしいよ」

そんなフォルテの発言の僅か三十分後、アキオは、『海賊キラー』としての知名度を生かして、癖のある船員達を上手く指揮して輸送船の応急修理を監督していて、周辺には次第に近隣の惑星などから派遣された救援艦隊の姿がチラホラと見えるようになっていた。

そしてそれらの艦隊の指揮権を調整し、再びの襲撃に備えて編成を組み始めるタクトとクレッシェンドであった。

「エルシオールって、いつ来るんでしょうかね？」

「帰還命令はかなり早めに出ていたらしいから、すぐにどこかの停泊地に姿を現すと思うけどね。でも、こちらに来るのは少し先だと思うよ」

ミルフィーユにお替わりの皿を出しながら、フォルテが質問に答える。

「エルシオール合流はともかく、私がアキオさんの髪を切ってあげたかったです」

惑星ロハスにシャープシューターを緊急着陸させたために、アキオとの偶然の再会を果たしたちとせであったが、その時は色々な事があってアキオの髪型に気が付く事ができなかったばかりに、彼を髪を散髪する権利をミントに奪われてしまい、少し悔しそうではあった。

「男ってのは、ちょっとだらしない方がモテるんだね」

フォルテは、自分の周りにはそういう男性の方が多いような気がしていた。

ミルフィーユにご飯を作って貰う事の多いタクトも少し抜けている部分があったし、アキオは基本的に教われば何でも出来たが、どこか私生活が駄目なハイスクール生のような部分がある。

エリオスに関しては、あれはなかりお坊ちゃまな部分があって、彼が家事をする姿とかは想像できなかった。

逆に、仕事一筋のレスターはまるで女性に縁が無いというか、縁を持たないようにしているというか、まるで女性からの好意に気が

付かないという特異なスキルの持ち主であったが。

それと、一瞬ウォルコット大将の事を思い出してしまったのは、他の人には絶対に秘密であった。

「でも、アキオさんは大分家事とか出来るようになっていましたよ。ご飯とかも上手に作っていましたし」

「何ぃ！　それはまずいな」

ミルフィーユから、アキオが惑星ロハスにいた頃の話を聞いて、少し料理の腕でも磨こうかと考えてしまうフォルテであった。

『ミルフィー、フォルテ、ちとせ。エルシオールだ』

そして十数分、今度はブリッジ詰めているタクトから内線で通信が入り、モニターを外部に切り替えるとそこには半年ぶりに見るエルシオールの悠然とした姿が映し出される。

「ムーン・エンジェル隊復活の人材と駒は揃ったか」

「兄貴？」

「多分、ウォルコット大将かジンロ大将が、この宙域に向かうよう

に命令を出したんだろうな」

「じゃあ、俺はエルシオールに向かおうかな？」

「ほう、俺といるのがそんなに苦痛か？　穀潰しの愚弟の癖に」

タクトとクレッシェンドが、視界に入ったエルシオールを見ながら言葉の応酬を続けていると、そこにエルシオールから通信が入る。

そこには、辺境探査団の司令であるレスターと、エルシオールの艦長であるエリオスが映っていた。

「辺境探査隊司令レスター・クールダルスです。ジンロ大将の命令により、急遽こちらに参上しました」

「ご苦労だったな、クールダルス司令」

レスターとクレッシェンドは、お互いに社交辞令の域を出ないレベルでの挨拶を交わしてから、極めて事務的にお互いの状況とこれからの行動についての話を行う。

クレッシェンドは、レスターの後ろにエリオスの姿を確認していたが、全く彼を評価していないクレッシェンドは特に言葉を交さなかった。

「とりあえずは、護衛艦隊の指揮下に入ってくれ。紋章機を全てエルシオールに送るので、修理と補給の続きと交代での哨戒飛行の指示をお願いしたい。ところで、レイトンとは？」

「はい、簡単に状況の確認をしました。レイトン准将は、輸送船団の修理監督と陣形の再編成で暫くは動けないでしょうね」

優秀な軍人であり、公私のケジメはキッチリと着けるレスターは、既にアキオとの情報交換を終えている事をクレッシェンドに報告する。

「それと、隣の愚弟をそちらに送る。エルシオールは任せたぞ」

「了解です、マイヤーズ少将。タクト・マイヤーズ司令、エルシオールでお待ちしています」

レスターの言うマイヤーズ少将とは、前がクレッシェンドの事で、後ろがタクトの事であったが、よくよく考えると二人とも現在は少将なので、少しややこしいなと考えるクレッシェンドであった。

「レスター、随分と畏まっているんだな」

「ここは、エルシオールじゃないんだぞ。早く来て指揮を執れ」

「わかったよ」

「タクト、よくお前みたいなのが少将になれたな……」

こうして、紆余曲折を経て、タクト、ミルフィーユ、アキオの三名は軍に復帰を果たし、そこに辺境調査を中止して帰還したエルシオールも無事に合流に成功する。

そしてそれから三日間、輸送船団が何とか動き出せるようになるまで、彼らは久々の再会を喜び、同時に敵に備えて警戒を行っていたのだが、結局第二派以降の敵強奪艦隊は出現しなかった。

ただ、現れなかったのはここだけで、周辺宙域の数箇所で輸送船団が襲われ船ごと荷を奪われる失態を皇国軍は犯してしまう。

新しい敵との戦いは、始まったばかりであった。

第二部　第二話（前半）

「何だとぉーーー！　負けたとはどういう事なんだ！」

惑星ロハス周辺宙域で行われた、囮の輸送船団を守る皇国軍護衛艦隊と、謎の強奪艦隊との決戦は、数に勝る強奪艦隊が半ば捨て身の皇国軍護衛艦隊の奇策に敗れるという結果に終わり、その報告を聞いた強奪艦隊の司令官は、戻って来たばかりの副官の女性に怒鳴り付けるように声を荒げていた。

司令官の名前はレゾム・メア・ゾムと言い、以前は皇国軍中尉でしかなかった叩き上げとは言ってもさほど優秀ではない、威勢とそれなりの貫禄だけは持っている中年男性であった。

先のエオニア戦役では、自分の上司である突撃艦艦長であった上官を殺害してエオニア軍に投降し、あまり人材がいなかったという理由からそれなりに遇されていた人物であった。

エオニアの敗北後に、他のエオニアに付いた傭兵や軍人や官僚や政治家などが次々と捕縛され、裁判にかけられていくなか、彼だけはどさくさに紛れて数隻の無人艦艇と共に逃走。

秘かに数箇所の暗礁宙域に拠点を建造して、官憲の目を誤魔化しながら強奪船団を指揮して物資を奪い、少しずつ力を蓄えている状態であった。

相手の虚を突き、決して同じ場所で犯行を繰り返さなかった彼は次第に戦力を増していくのだが、今回初めて敗北を喫した事により、不機嫌そうな表情を、先ほど戻って来たばかりの副官であるネフューリアに隠そうともしなかったのだ。

「ネフューリア！　どうして、ロハスに派遣した艦隊は敗れたのだ！」

「どうやら、窮鼠猫を噛んだようです」

ネフューリアは、レゾムに戦いの詳細な報告を行う。

中盤まではかなり有利に敵を追い込んでいたものの、向こうの艦隊司令が三名の人間を回収した所から状況が変わってしまう。

重ヘリウムを搭載した輸送船を、全て巨大な爆弾代わりにしてこちらの艦隊近くで爆発させ、おかげで味方戦力が一気に潰滅してしまったという報告をネフューリアはレゾムにする。

「三名の人間？」

「元ムーン・エンジェル隊司令タクト・マイヤーズ少将と、元ムーン・エンジェル隊隊員ミルフィーユ・桜葉中尉。そして、アキオ・レイトン准将です」

「ネフューリア。引き抜きには、失敗したというわけだな？」

「はい、まるで取り付く島もありませんでした」

レゾムはそれほど頭の良い男ではなかったが、それでも行動力はなかなかのものであったので、このような半ばゲリラ的な強奪船団の規模拡大と運営には適している人間であった。

それと、この強奪船団に不足している物が何なのかも理解していて、それがエオニアが直接軍を率いていた頃と同じく人材である事にも気が付いていた。

特に、偶然に自分の副官となったネフューリアにかなりの部分を

任せている、軍官僚や参謀としての役割をこなす人材、強いて言えばアキオのような人材が欲しいと思い、貴重な時間を割いてネフューリアを勧誘に向かわせていたのだ。

ただ、彼には不足している物があった。

部下を魅き付ける魅力、カリスマ、将器、言い方は様々であったが、あのエオニアの勧誘にもまるで耳を傾けなかったアキオがレゾムの勧誘に引っかかるはずもなく、彼は見事に彼にフラれる結果となっていた。

「トランスバール皇国の正当な支配者たる、ワシの好意を無にしおって！」

レゾムとしては、以前に自分を散々に扱き下ろした相手を、寛大にも部下として受け入れる度量がある自分という構図を予想していたらしいのだが、それはあくまでもレゾムだけの予想であり、アキオが彼の思惑通りに動く補償もなかった。

「閣下の理想の高さを、理解できなかったようですね」

「浅き利に釣られる、愚かな若造めが！」

レゾムは、自分の勧誘を断ったアキオの悪口を言い、ネフューリアもそれに賛同するような態度を取る。

だが、彼女の心の奥底にある真の考えを理解しているのは、現時点ではまだ彼女自身だけであり、今の彼女はレゾムの優秀な副官兼参謀であった。

「まあ、良いわ。我が大望の過程で、その首を生贄とするだけの事だ」

味方にならないのであれば、敵として討つ。
ある意味、とてもシンプルな考えをしているレゾムではあった。

「それに、惑星ロハス方面では戦力を失いましたが、他の四箇所の襲撃は見事に成功しました。初期の予想よりも多くの物資が集まっております。作戦は、全体的には成功です」

「エオニア陛下を討ったほどの男達だ。次からは、もっと慎重に対応すべきか」

作戦は全体的には成功であったが、それでも差し向けた一個艦隊が全滅という無視できない被害も発生している。
レゾムは、まだ自分達が名乗りを挙げるには少し早いと感じているようであった。

「閣下の深謀に、このネフューリアは感服いたしました」

ネフューリアのお世辞によって再び気分を良くしたレゾムは、彼女の思惑通りに次の作戦の話を始める。

「通常の航路は、さすがに暫くは無理そうだな」

「はい、少し時間を置く事が肝要かと。それで、次の作戦なのですが……」

レゾムは、ネフューリアが集めた最新の情報に基づく新たな作戦案に、先ほどの怒りも忘れてダボハゼのように飛び付いていた。
レゾムの副官にして、優秀な参謀としても働くネフューリアであり、つまり、それほどここは人手が不足しているという事の証拠で

もあったのだ。
ただどういうわけか、ネフューリアはあまり人手を増やす事に良い顔をしない。
機密の漏洩を主な理由とはしていたが、どちらかと言うと人を増やす事に熱心なのはレゾムの方であった。

「皇国軍のキャンペーン中を狙います」

ネフューリアは、数日後に皇国軍が行うキャンペーンを利用して次の行動に出る作戦をレゾムに提案する。

「キャンペーンだと？」

「はい。何でも、軍の人気上昇と世論の支持を得るための物だと」

この時代でも、軍や警察の存在は必要悪としては認められていたが、普通の市民にとっては、出来ればなるべく少ない方が良い代物でもあった。
エオニアの起こした反乱が終了して軍の改革が断行され、通商路や海賊退治を専門とする即効性の高い護衛艦隊総司令部が発足して宇宙艦隊と同格となった今、次第に巻き起こる正規艦隊削減論に危機感を感じた軍上層部は、皇国軍のイメージアップを謀るべく、広報部を巻き込んでおかしな事を始めようとしていた。

「一日艦隊司令とか、一日艦長とかだそうです」

「まだ戦乱が終わって半年だぞ！」

さすがのレゾムでも、この時期にそんな事をのん気に延期や中止もしない行う皇国軍に呆れ果てていた。

「逆に予定を中止すると、市民達への動揺が大きいと考えたようです」

大声をあげたレゾムに、ネフューリアは集めた軍内部の最新事情を伝える。

いくら強奪艦隊が世間を騒がせているとはいえ、それを理由に以前から計画されていた行事を中止すれば、それだけで世間の動揺と、強奪艦隊に翻弄されている皇国軍への批判にも繋がりかねないと皇国軍上層部は考えたらしい。

結果として、皇国軍のイメージアップキャンペーンはそのまま予定通りに行われる事になっていた。

「その油断を突くわけだな？」

「はい。幸いにして、例のエルシオールにも、一日ムーン・エンジェル隊司令として芸能人が派遣されるそうです」

冷静にいつもと同じようにネフューリアが事情を説明していると、それだけでこの行事のバカらしさが伝わって来るようであった。

いくら優秀な複数の人間に運営されている組織でも、内部の一部のバカによって引き摺られて、おかしな事をしてしまう事がある。

それと、あのウォッカ大将が中止しないというだけで、強奪艦隊への対応に苦慮している皇国軍の、世論への配慮が良くわかるというものであった。

「素人を懐に抱えたエルシオールを討つのだな？」

それと、その一日司令も一緒に討ってしまえば、それだけで皇国軍へのイメージはガタ落ちになり、レゾム達の活動を有利にするは

ずであった。

「はい。後の脅威となる物は、早めに討っておくに限ります」

どの道、暫くは奪った物資を使っての艦隊の整備と補強を行わねばならないので、先の理由と合わせて物資強奪の頻度は下げる必要があった。

それに、ネフューリアの情報によれば、例の自分達への囮にした輸送船団への対処が終わると、エルシオールは大した護衛も付けずに行動する事が決まっているらしい。

ならば、討つのも容易いと考えるレゾムとネフューリアであった。

「ネフューリアよ。エルシオールを討つ戦力の編成と派遣を任せる」

「了解しました」

ネフューリアは、レゾムに対して深々と頭を下げるが、その目の奥と表情には底の知れない物が潜み、それにまるで気が付かないままのレゾムであった。

「それでは、我々は当初の目的地である惑星レダに向かいます。マイヤーズ司令、色々とお世話になりました」

「襲撃はほぼ無いと思われるが、警戒だけは怠らないでくれ」

「了解！」

惑星ロハスで行われた戦闘より三日後、エルシオールは無事に応急修理を終えた輸送船団を送り出していた。

皇国軍総司令部からの命令で、応援に来た艦隊を主体とした護衛艦隊が再編成され、彼らが主体となって輸送船団の護衛を行う事が決定したために、後から来たエルシオールはそのままロハス周辺宙域で待機をする事になっていた。

「エルシオールに何をさせるつもりなんだろう？」

エルシオールのブリッジのスクリーン越しに、輸送船団の民間側の責任者と、新しく編成された護衛艦隊の司令と挨拶を交わしたタクトは、上からの不可解な命令に一人首を捻ったいた。

「お前、いつからそんなに働き者になったんだ？」

「レスター、相変わらずの口の悪さだな」

「なあに、レイトンやお前には負けるさ」

手元の端末で書類を決裁しながら、レスターがタクトに話しかけてくる。

三日前の再会以降、レスターも色々と雑務に追われて忙しい日々を送っていた。

「それって、褒めているのか？」

「勿論、褒めているさ」

「何とも、疑わしい事だね。ところで、その肝心のレイトンは？あいつ、もう輸送船団の管理から外れたんだろう？」

レスターと同じく、この三日間久しぶりに忙しい日々を送っていたアキオであったが、目の前のスクリーンに再び発進をした輸送船団の映像が写っている以上、彼はお役御免となっているはずであった。

「お前の兄貴に呼ばれているんじゃないのか？」

「そういえば、何で兄貴は残っているんだ？」

本当であれば、あの輸送船団を護衛する護衛艦隊の司令として一緒に出発する予定であったクレッシェンド・マイヤーズ少将は、なぜか上からの命令によって、軽空母ヒヨウと、軽巡洋艦オオイとキタカミと、駆逐艦四隻以下の残存戦力と共に、この場に残る事が決定していた。

「エルシオールの護衛なのかね？」

「まあ、そんな所だろうな」

「兄貴！」

突然、スクリーンに映し出されたクレッシェンドの少し鋭い表情に、タクトは驚きの声をあげてしまう。

「何を畏まる必要がある？　お前も俺も少将で、上からはまだ指揮権に関する命令も来ていない。ムーン・エンジェル隊司令であるお前と、この残存艦隊の司令官である俺は同格。違うか？」

確かにクレッシェンドの言う通りで、現時点では現役復帰したタクトと、クレッシェンドの軍内部での序列は一緒であった。
しかも、同じエオニア戦役後に昇進していたために、先任がどちらとも言えない状態で、この不自然な状態にタクトは少し苦手である兄という事もあって、居心地の悪さを感じていた。

「まあ、兄貴の言う通りなんだけど……」

「見当は付いているけどな」

「事情をご存知なのですか？」

レスターは、自分達がここに留め置かれている理由を知っているクレッシェンドにその理由を尋ねる。

「軍のイメージアップキャンペーンさ」

「そんな物があるんですか？」

つい最近まで、辺境で探査に参加していたレスターであったので、他の重要な情報ならいざ知らず、そんな下らない行事を把握しているはずもなかった。
クレッシェンドは、レスターにこの大変な時期にそんな行事を中止にもしないで行う軍上層部の詳細な事情について説明を始める。

「一日司令ですか？」

「艦隊やら、基地やら、新造艦の艦長やらな。アイドルとか、人気俳優とか、お笑い芸人とかが、タスキかけて敬礼してテレビの取材

を受けるんだ。実際、その効果もバカに出来ない部分があるしな」

貴族たるクレッシェンドからすれば、半ば衆愚と呼ぶに相応しい下らない行事ではあったが、効果があるのは事実であったので、これはもう仕方のない事と考えていた。

古来より多くの権力者が利用し、逆に引き摺り落とされる要因となっているメディアの力は、そう簡単に御せるほど簡単な物ではなかった。

「ところで、その一日司令はムーン・エンジェル隊にも来るんですか？」

レスターとクレッシェンドの話を聞いて興味が出てきたアルモが、ムーン・エンジェル隊への芸能人の来訪の有無を情報を知っていそうなクレッシェンドに尋ねる。

アルモやココなどのエルシオール組は、元が白き月の研究者である巫女であった影響で、あまりクレッシェンドに畏まった態度を取る事が少なかった。

それに、彼の方も若い女性が嫌いではないので、比較的素直に話しかけたり質問に答える事が多く、レスターはそういう部分はやはり兄弟なのだなと半ば感心していた。

「勿論来るさ。前の戦いで一番目立った部隊だ。宣伝にこれ以上効果のある部隊は他に存在しない」

「タクトさん、楽しみですねぇ」

同じくココも、やはり普通に芸能人に興味のある人間であったらしく、ここに来るであろう芸能人が誰であるのか非常に気になっているようであった。

「ただ、どの部隊に誰が行くのかは、完全に抽選で決めたらしい。アニーズのリッキー・カートとかの、かなりの有名所も……」

クレッシェンドの口から、美少年アイドルのリッキー・カートの名前が出た瞬間、エルシオールのブリッジに輸送船修理に借り出されていた整備班長のクレーター以下数名の整備班員が雪崩れ込んで来る。

彼女達は、手伝いに行った輸送船が出発したので元の配置に戻る報告をしようとブリッジに上がっていたのだが、そこで偶然にも一日司令の話と、自分達が大ファンであるリッキー・カートの話が耳に入ってしまい、そのまま飛び込んで来てしまったのだ。

「リッキー・カート君は、どこの部隊の一日司令なんですか？　マイヤーズ司令！　あなたでしたら、ご存知ですよね？」

クレッシェンドは、スクリーン越しにも拘わらず、クレーター以下数名の女性達の迫力に思わず、その場から数歩下がってしまう。

彼は、クレーター達がアニーズのファンクラブを結成するほどのファンである事実など、知りようはずもなかったからだ。

「彼は、トランスバール本星にある、中央オペレーターセンターの一日司令に内定していた」

クレーター達の迫力に思わず動揺してしまったクレッシェンドは、出発前に耳に入れていた情報を正直に話してしまう。

中央オペレーターセンターは、二十四時間三百六十五日でトランスバール皇国領内を航行する船の管理を行う戦後に新設・強化されたばかりの部署であり、ここは女性軍人の比率がかなり高い。

軍もバカではないので、せっかくの美少年アイドルを男主体の部

隊に送るような真似はしなかったようだ。

「うちだって、女性の方が多いんですよ！」

「いや、俺にそんな事を言われても……。多分、抽選に外れたんだと思う……」

「？？？」

クレッシェンドはクレーター達に事情を説明するが、タクトは自分の兄の歯切れの悪さに疑問を感じていた。

「何で、うちにリッキー・カート君が来ないのよぉーーー！」

クレッシェンドは、この三日間で多くの整備兵達を指揮して、見事に輸送船の修理を行った、凄腕の美人女性整備班長の思わぬ一面に、ただこの世の不条理を感じるのであった。

「一日司令ですか？　子供の頃にニュースで見た事があります」

ちょうど同じ頃、アキオはムーン・エンジェル隊のフルメンバーとエリオスとエルシオールの医師であるケーラと共に、三日ぶりのまったりとした時間を過ごしていた。

ティールームで、紅茶を飲みながらクッキーやサンドイッチをつ

まみ、他愛のない話をする面々。
ちなみに、紅茶もクッキーに使っている小麦も、サンドイッチに挟まっている鴨の玉子と照り焼きも、全てアキオ宛に下の惑星ロハスから送られて来た物であった。
長々とロハス周辺に待機していたので、予想よりも早く近所の老人達が荷造りをした荷物がアキオの元に届いた結果でもあった。

「この紅茶は、少し苦味が強いようですわね」

「その辺が、元素人の作りって事かな。でも、味のボディーはしっかりしているから、このようにジャムを入れると美味しい」

ミントは、アキオに言われた通りに紅茶にジャムを入れてロシアンティーを楽しむ。
ちなみに、そのジャムもアキオが山から野イチゴを取って自作した物であった。
アキオが自作した食品は、ほとんど彼宛の荷物に入っていて、ちとせとミントは奪い合うように食べていた。

「本当、美味しい」

「繊細なブランド銘柄のお茶とは違う楽しみ方さ」

「でも、驚きましたわ。アキオさんが、こんなに料理をするようになっていたなんて」

「ミルフィーと一緒にクッキーを焼いて、サンドイッチなんて具を挟んだだけだぞ」

「その簡単な作業も微妙なのが、フォルテさんで……「へえ、ラン

ファは鼻の穴が三つも欲しかったんだね。私は知らなかったよ」」

「嫌ですね。冗談ですよ……」

余計な事を行ったランファに、フォルテが笑顔を浮かべながら銃口を向けるのだが、その笑顔の奥の真の表情に恐怖するランファであった。

「大体、ランファは人の事を言えるのかい？」

数少ないつまみくらいしか上手に作れないフォルテであったが、彼女はランファの料理の腕など知らなかったので、『お前に言われたくねえよ』という表情をありありと浮かべていた。

「ランファは、お料理上手ですよ」

「「へえ、意外だ」」

「二人して、私の事をどう思っていたんです？」

思わず同時に本音が出てしまったアキオとフォルテを、ランファがジト目で見つめていた。

ランファは、兄弟姉妹の多い家に生まれて家の手伝いが必須であったために、一通りの家事は全てこなせる。

そして、その事を友人であるミルフィーユも知っていたのだ。

「少なくとも、アキオよりは上手よ。そういえば、ちとせも上手だったわよね？」

「うちは、その……。母の教育方針でして……」

ちとせの家は、古来の伝統を大切にするとの事で、『女性の嗜みとして家事は必須』という家柄であったらしい。
確かに、彼女は料理が上手であったし、しかもアキオの好みである和食が得意であったので、その辺が周囲のアキオ争奪戦でのちとせ優位説の根拠ともなっていた。

「ヴェニラはどうなんだい？」

「私は、ケーラ先生からたまに教わっています」

サンドイッチを美味しそうに大量に食べているヴァニラが、フォルテの質問に答える。
孤児出身で修道院で育ったヴァニラは、奉仕活動の一環としての家事は最低限は出来るのだが、修道院というのが災いして料理のレパートリーが非常に貧困であった。
特に、魚と肉を使った料理や、甘い物などは作った事がなかったらしい。
そこで、ケーラが定期的に料理やデザートの作り方を教えていたのだ。

「となると……」

フォルテの頭の中に、ムーン・エンジェル隊及びその周囲の女性の料理パラメーターが表示される。

ミルフィーユ＞＞（超えられない壁）＞＞ランファ（洋食・辛い物メイン）＝ちとせ（和食・和菓子メイン）＞＞ヴァニラ＞＞自分＞＞ミント？

多分、こんな感じであろうと考えるフォルテであった。
どう考えても、あの舌が痺れそうなほどの合成着色料や添加物を入れたデザートしか作れないミントが、自分よりも下という事は絶対にあり得ないと考えていたからだ。

「フォルテさん、私だって普通に料理くらい作れます」

「えっ！　マジかい？」

フォルテの、頭の中のパラメーターが変化する。
目の前のヴァニラに料理を教えているケーラのレベルはなかり高いと思うので、秘かにアルモやココやクレーターを自分の下に置き、勝手に自己満足に浸るフォルテであった。
実際、彼女達の料理の腕など、聞いてみないと確認のしようも無かったのだが、それを聞かないで精神の均衡を保つのが大人の女というものであると思っているフォルテであった。

「僕も、料理でも習ってみようかな？」

「あのターミネーターのような執事が認めるとも思えないがな」

公爵の跡取り息子として育てられたエリオスが料理をしようなどと考えても、それをあの執事が認めるとは到底思えないアキオであった。

「でしょうね。でも、僕は軍に入って初めてカップラーメンの作り方を知ったくらいの世間知らずの料理音痴ですよ」

「エリオスは、本当にお坊ちゃんね」

「家では食べさせて貰えなかったから、官舎で同期の友人と食べた時は感動したな。『こんなに美味しい物があるなんて』ってね。あとは、レトルトカレーとか」

エリオスが普段家で食べている物の方がよっぽど御馳走だと思うのだが、エリオスからすれば、普段家で食べられない特売品のカップメンの方が御馳走だと言う。

ランファは、アキオとエリオスを交互に見ながら、生まれの違いについて考えてしまう。

「カップメンとかレトルト食品とか、俺は結構長い付き合いだったけどな」

ランファは、同じ父親から生まれた兄弟なのにここまで生活環境が違う事に驚いていた。

それと、アキオはエリオスを見てもあまり嫌な顔をしたり、嫌味を言う事はなくなっていた。

それとなく理由を聞いてみると、『金蔓だから』と嫌みったらしい回答をしていたのだが、極一部ではあるが照れ隠しの部分もあるのであろうと思う、いや思いたいランファであった。

「ヴァニラ、サンドイッチのお替りは必要かい？」

「はい、もう少し欲しいです」

「気に入って貰えて何よりだな。沢山食べて大きくなってくれよ」

ヴァニラは、この三日間はクレーター達以上に多忙であった。

普通ならどう計算しても、三日間で機関部が駄目になったあれだけの数の輸送船の応急修理など終わるはずもないのだが、ヴァニラ

がハーベスターでナノマシンによる修理を懸命に行った結果、どうにか期間内での修理が修了していたからだ。

おかげでヴァニラは、輸送船団の荒くれ船員達に、まるで女神のように崇拝されるようになっていた。

同じ頃、輸送船団に駆逐艦を付随させて修理の指揮を執っていたアキオは、厳つい船員達から、『俺をヴァニラちゃん親衛隊に入れてくれ！』というしょうもない願いを次々と聞く羽目になっていた。

どうやら、以前に勝手に『ヴァニラちゃん親衛隊事務局長』にされてしまっていた情報を彼らは掴んでいたらしい。

アキオのもう一つの業務に、ヴァニラちゃん親衛隊の会員カード作りと名簿作成が加わった瞬間であった。

ヴァニラに許可を取って写真を撮り、自動カード作成機で会員番号と名前を入れた会員証と、簡単な不定期発行の会報を作成する。

普通の軍人であればまずやらない事であったが、それだけであの気難しい荒くれ船員達が効率良く素直に動いてくれるので、アキオは躊躇する事なく、それらの作業を行っていた。

多分、そういうアキオの柔軟な部分を知って、クレッシェンドは輸送船団の修理と管理を任せたのであろう。

それと、これはオマケの類であったが、その会員証の裏にはエリオスの顔写真が貼られていて、『ヴァニラちゃんを狙う不届きな腐れ貴族』と説明が書かれている。

その辺の部分では、毒を発するのが好きなアキオであった。

「ところで、話を戻しますけど、一日司令って誰が来るのでしょうか？」

「私も少し気になります。エルシオールは女性比率が高いですから、男性芸能人の方でしょうか？」

アキオの復帰は突然の事であり、しかもすぐに輸送船団の方に出向いて指揮を執りに行ってしまったので、ちとせやミントはアキオを話をしたくて仕方がなかったらしい。

先ほどの一日司令の件を尋ねてみる。

「そういえば、昨日マイヤーズ司令に聞いたな。有名な若手女優らしいよ」

アキオの言うマイヤーズ司令とは、勿論兄のクレッシェンドの事であった。

ここにいるメンバーは、タクトの方であれば名前で呼ぶのが常であったからだ。

「若手女優？　誰なの？　とっても気になるわ」

「凄いですねぇ。ドラマとかに出ている人なんでしょうか？」

来るのが女優という事がわかって、ドラマ好きのランファやミルフィーユはとても嬉しそうであった。

これが、最新の恋愛ドラマに出演している女優であれば、なお言う事はないという感じであった。

「俺は、ドラマとか見ないからな。ニュースキャスターの、エツコ・コミヤマとかなら大歓迎なのに」

トランスバール皇国で一番有名なキャスターであろう、フリーのニュースキャスターであるエツコ・コミヤマは、歯切れの良い綺麗

な声と黒髪のショートカットが似合う二十代半ばの美女であり、ニュースくらいしかテレビを見ないアキオからすれば、知っている有名人とは彼女くらいであった。

「そういう人は、軍のイメージアップキャンペーンの仕事は受けないと思うよ。兄さん」

「だろうな……。じゃあ、公爵様であるお前は、誰が良いんだよ？」

「前にテレビに出ていた、タレントもしている女性落語家が良かったな。銀河亭小雪だったかな？　名前は」

エリオスが指名したのは、最近美人女流落語家として有名になりつつある、これまたなかなかに美人として評判な銀河亭小雪という芸名の女性であった。

「あんたらも、普通に男なんだね」

意外とミーハー部分を出したアキオとエリオスにフォルテが驚いていたが、それと同時に、向かいの席に座っているちとせとミントから何か負のオーラを感じてしまう。

そして、ヴァニラの方も、サンドイッチを食べる手が止まっていた。

「それで、誰が来るんだっけ？」

何か危険な物を感じたフォルテは、強引に話題をエルシオールに来るであろう女優の方へと持って行く。

「ええと、アグネス・ソワレだったかな？　名前は」

エツコ・コミヤマ以外の芸能人を知らないアキオは、さも興味が無さそうにフォルテの質問に答えるが、その名前にアキオ以外の全員が驚きの声をあげる。

「旬も旬の、超大型新人女優じゃないのよ！」

「と言われてもね……」

その女優の凄さが全くわからないアキオは、ランファの気合の入ったツッコミを軽く受け流しながら紅茶を口に含む。

そもそも、その顔すら知らなかったのだ。

「先々月に放送された、『初恋の君』を見なかったの？　全銀河の平均視聴率５６．７％のお化けドラマじゃないの！」

「うち、テレビ無かったからさ」

「そうでしたね。アキオさん」

ミルフィーユは、アキオ家にはラジオしか無かった事を思い出す。

ノートパソコンもあったのだが、それもたまに自分の会社の数字を見たり、部下達やブラマンシュ会長にメールを出す時くらいにしか使っていないようであった。

「えーーーと、ミントは知っている？」

「はい。そのドラマは、ブラマンシュ財閥の傘下企業がスポンサーを務めましたから」

ミントは、自分もちゃんと見ていたドラマの内容をアキオに説明する。

それは、十五歳の頃に初恋の男性と生き別れになった主人公が、後に始まる内戦に巻き込まれて各地を逃げ回りながらも、懸命にその男性を探し続け、内戦終結後に軍の士官として戦っていた男性と、最後に感動の再会を果たして結ばれるという内容のドラマであった。

「それで、主人を今作初主演のアグネス・ソワレが演じたのですが、最後に二人が初めてキスをした場所での再会のシーンが大絶賛されまして、彼女は僅かこの一作で大人気女優へと駆け上がりました」

「それは、凄いね」

「しかも、多少はプロの作家による校正はされているようですが、このドラマの台本もアグネス・ソワレが持参したらしいです。彼女は、以前から大学で趣味の演劇をやっていたらしく、脚本も書いていたそうですので」

「彼女って、多才なのね。それに、凄い美人なのよ」

ミントの裏の事情まで網羅した説明に、アキオよりもランファの方が感動しているようであった。

「なるほど。ちとせは、そのドラマは見た？」

「はい、私も普段はあまりテレビを見ない方なのですが、この作品は感動しました。主演女優の方の迫真の演技が凄かったです」

「ミルフィーも見た？」

「はい、タクトさんも大感激してましたよ」

ミルフィーユは、タクトと一緒にテレビで直接放送を見ていた。

「ヴァニラは？」

「エリオスさんに、録画されたディスクを貰いました」

「ヴァニラ、凄く良かったわよね？」

「はい」

ヴァニラも、ケーラと一緒に録画された作品を一緒に鑑賞していた。

「フォルテ……」

アキオは、最後の砦であるフォルテにドラマの視聴の有無を尋ねる。

まさか、フォルテが恋愛ドラマなんて見ないであろうと思っていたからだ。

「悪いね。さすがに、これだけ有名な作品となると見ているさ」

「そんな……」

結局、自分だけがアグネス・ソワレという女優やその主演ドラマについて何も知らなかった事が発覚したアキオは、自分の浦島太郎状態の酷さに少しショックを覚える。

テレビっ子になろうとは思わないが、最低限の知識くらいは知っていないと駄目だろうと考えたからだ。

「入るぞ」

アキオが落ち込んでいると、そこにレスターが一枚のディスクを持って現れる。

「どうしたんだ？　レスター」

「レイトン。お前は、『初恋の君』を見た事があるか？」

「無い」

「お前しかいないのか……」

アキオの返事を聞いたレスターは、同じくかなりのショックを受けているようであった。

「マイヤーズ司令からの命令だ。一緒に、これを見るぞ」

要は、明日にも一日司令としてアグネス・ソワレがエルシオールに来るのに、その主演作品を見ていないのはムーン・エンジェル隊の幹部としてどうなのか？　という事であるらしい。

明日、彼女に質問されて、『見てません』と答えた時点で、皇国軍上層部的には懲罰ものであるらしかった。

適当に見たと嘘を付いても、内容を聞かれたらアウトなので、『正味三時間のドラマくらい事前に見ておけ』という事であるらしい。

レスターは、クレッシェンドからディスクを渡されたのだが、他にドラマを見ていない人を探して艦内をうろついて、誰もそんな人

がいない事に同じくショックを受けていた。

「女性が多いからな。この船は」

「それにしても、男二人で恋愛ドラマとは……」

男と二人きりで恋愛ドラマを見る。

さすがのアキオとレスターでも、少し勘弁して欲しいシチュエーションであった。

「いえっ！　アキオさんは、私と一緒にドラマを見るんです！」

珍しく大声で名乗りをあげたのは、ちとせであった。

「なら、私も……」

「ミントさんは、トリックマスターの調整が残っているはずですが」

「確かに、そうでしたわね……」

今日は、交代でクレーター達と長時間の哨戒飛行で酷使した紋章機の整備と定期的な調整を行っていたのだが、マンパワー的な問題と万が一の事態に備えて、それらは交代で二機ずつ行われていた。

ローテーションの関係で、既にちとせはシャープシューターの調整を終えていたが、ミントはこれからトリックマスターの調整を行う予定であった。

つまり、ミントの割って入れる余地は現時点では存在しなかった。

「（フォルテさん……）」

「（いや、そんな目で見られても……）」

フォルテは、出来ればミントに融通してあげたかったのだが、タイムスケジュールの関係からしても、それは不可能であった。

だが、紋章機の性能はパイロットのテンションで決まる。

優しい頼れる隊長であるフォルテは、アキオを犠牲にする事を決める。

「アキオ、このドラマは二回くらい見ておいた方が良いと思うよ」

「何で二回も……「感動大作なんだ！　当然だろう？」」

「そうですね……。フォルテさんの仰る通りですね……」

アキオは、フォルテの今にも人を殺しそうな笑顔を見て、素直に了承の返事をする。

「ミント、ディスクは持っているんだろう？」

「はい」

結局、アキオが同じドラマを二回見るという尊い犠牲で全員が幸せになる事が決定したのだが、その流れをまるで理解できていないバカがいた。

この手の事に全く無頓着な男、レスター・クールダラスその人であった。

「じゃあ、俺もレイトンや烏丸中尉と一緒に見るか」

周囲の、あのヴァニラですら、『お前、マジかよ！　空気読めよ

！』という視線がレスターに突き刺さるが、肝心のレスターは全くその事に気が付いていなかった。

「みんな」

最初に行動を起こしたのは、フォルテであった。
彼女が無言で合図をすると、アキオとちとせ以外の全員が一斉にレスターを取り囲む。

「おいおい、急にどうしたんだ？」

レスターは、自分がフォルテ達に取り囲まれた理由をまだ把握できないでいた。

「アキオ、任務なんだから早く見ておくんだね。ちとせ、付き合ってあげな」

「はい、行きましょう」

ちとせは、これ以上にないほど嬉しそうな笑顔を浮かべながら、アキオの腕を引っ張るようにしてティールームを後にする。

「おいっ！　フォルテ！　俺に一人で見ろって言うのか？」

「一人で見なよ。というか、普通あそこで邪魔に入るかい？」

「悪いが、フォルテの言っている事の意味がわからない」

「わからなくてもいいから、あの二人の邪魔をするんじゃないよ（アルモも、こんな男を好きになって災難というか……）」

フォルテは、男女関係の機微がまるで理解できないレスターの、もはや才能の域に達した部分に驚くと共に、彼へ好意を寄せているのにまるで気が付いて貰えないアルモに本気で同情してしまうのであった。

「復習は完璧か？　レイトン准将」

「二回見ましたので」

「それは上々だな」

翌日の朝、エルシオールの主だったメンバーとクレッシェンドは、もう少しでこの宙域に到着する予定の一日ムーン・エンジェル隊司令アグネス・ソワレの到着を今や遅しと待っていた。

結局、アキオはミントとも同じドラマを見たので、内容をほぼ完璧に記憶する事に成功していた。

「ですが……」

「ですが、何だ？」

「どこかで、見たような……」

それは、ドラマの内容についてであった。

中盤から後半の内戦の部分は、いかにも素人が考えた戦場と言う描写ではあったが、問題なのは最初の部分。

十五歳の男女が、お互いに愛し合いながらも別れ別れになる場面。それは、アキオが以前に経験したシーンその物であったからだ。そして、見た事があるような程度で済まされるレベルではない、芸名らしいアグネス・ソワレの顔。

七年と言う歳月が、その体と顔を大人の女性に変えていたが、見間違えるはずもない。

あれは、自分の初恋の女性であるレイチェル・シャトーその人だと言う事に……。

「本当に、抽選で？」

「いや、彼女に関しては、ムーン・エンジェル隊一日司令ならという事で了承を貰ったらしい。あのドラマの題材的に考えて、宣伝効果がハンパじゃないからな。誰からも反対意見が出なかったんだ」

アキオは、クレッシェンドの交友関係と情報網の広さを再確認すると共に、既に自分と彼女との関係を知っているものと考える事にする。

それと、昨日のクレッシェンドのクレーターに対する返答はやはり嘘であった。

「意地悪ですね」

「そう言うなよ。俺が企んだわけじゃない」

アキオとクレッシェンドがそんな話をしていると、現場宙域にアグネス・ソワレ一行と取材をするテレビクルーを乗せたシャトルが到着したとの連絡が入る。

そのままエルシオールに収容されたシャトルは固定されて、中から一人の若い女性とそのマネージャーと思われる中年女性が降りてくる。

「始めまして、アグネス・ソワレです」

「マネージャーのピスタチオです」

自己紹介後、アグネス・ソワレは出迎えてくれたタクト達と次々と挨拶と握手を交わしていく。

ヒールを履いて身長百七十ｃｍほどの彼女は、ブラウンのショートカットが良く似合う大人の女性であり、珍しくタクトが緊張を隠せないでいるようであった。

「始めまして。皇国の英雄さん」

「今では、あなたの方が有名ですって。それに、美人でいらっしゃるから」

「お世辞がお上手なんですね」

アグネス・ソワレと顔を赤くさせながら楽しそうに話すタクトに、ミルフィーユが少しヤキモチを焼いていて、アキオは後でフォローが大変だろうなどと思っていた。

その後も、レスターやエリオスやムーン・エンジェル隊と挨拶を交わすのだが、特に演技をしているわけでもないのに、軽やかで華麗な彼女の所作に、周囲から賞賛と溜息の声が出ていた。

「フォルテさん、女優さんですね」

「そうだね。ただの美人じゃないんだね。こうオーラが違うというか」

主だった全員と挨拶を交わしたアグネス・ソワレは、最後にアキオの元へと向かう。

現役復帰はしたものの、まだ無任所将官であるアキオは、一番後ろで同じく部外者であるクレッシェンドと一緒にいたからだ。

「久しぶりだね」

アキオは、確信を持って彼女よりも先にその言葉を口にする。

すると、彼女は納得したように一度だけ首を縦に振りながら、自分も言葉を発する。

「あまり変わらないのね。写真では見ていたんだけど」

「ああ、皇国軍の官報でか。背は伸びたんだけどな。君は……、見違えたよ。髪を切ったのを変化に感じないくらいだ」

「女優だからね。どんなウィッグでも装着可能なようによ」

「えっ！　知り合いなのか！」

一転して、誰が見ても旧知の仲であるかのように話す二人に、タクト達は驚いてしまう。

例外なのは、裏の事情を察しているクレッシェンドだけであった。

「積もる話が沢山あるけど、まずは仕事をしてからね」

「「「……」」」

楽しみにしていた大物新人女優のエルシオール来訪であったが、その女優がアキオと知り合いであったために、その後思わぬ騒動が勃発する事となるのであった。

一日ムーン・エンジェル隊司令としてエルシオールに現れた、現在トランスバール皇国で一番有名な大型新人女優であるアグネス・ソワレはアキオの知り合いであり、本名はレイチェル・シャトーというらしい。

この事実に全員が大いに驚いたのだが、中でも一番動揺が大きかったのは、ミントとちとせであった。

二人は、彼女にアキオを取られるのではないかと、有名人に会えた感激すら吹っ飛んで、傍から見てもわかるほどに落ち込んでいた。

「ミント、ちとせ。そう早合点するものじゃないよ。幼馴染程度の関係かもしれないじゃないか」

それでも、アグネス・ソワレはプロの女優であった。

アキオとの再会の感動も程々に、すぐに皇国軍より支給された女性専用のタイトスカート込みの第一種軍装を着用して、テレビ局に提供する映像の撮影に入る。

タクト、レスター、エリオスなどと一緒に、エルシオールの指揮官シートに座って紋章機の訓練に立会い、他にもエルシオールの各部署の紹介映像の撮影など、半日ほどの時間を使って次々と所定の予定をこなして行く。

さすがはプロの女優と言えるほどの、軍服の違和感の無さと、その堂に入った仕事ぶりに、レスターをして、『見た目は遙かに、タクトよりも指揮官をしている』と言わせるほどであった。

一方タクトの方も、『あんな司令官なら、俺が部下でもいいかな？』などとほざいて、ミルフィーユの怒りのパラメーターを一つ上げる結果になっていた。

その後、撮影は半日ほどで修了する。

すると、彼女は撮影クルーを全員最初に乗ってきたシャトルで帰してしまい、自分はマネージャーと共にそのままエルシオールに残ってしまう。

「この仕事が終わったらオフですので、三日間ほどお世話になります」

三日間の休暇を、高らかに宣言するアグネス・ソワレであったが、彼女はその間エルシオールに滞在する事を宣言する。

「そんなに休んで大丈夫なんですか？」

タクトからすれば、これほどの大女優が三日も休みを取れるとは考えていなかったらしく、マネージャーであるピスタチオ女史に尋ねてみるのだが、女優という職業は、タレントよりもスケジュールに余裕を持たせられる職業であるらしい。

それと、この日のために少し過密なスケジュールをこなして来たらしく、『全く問題ないです』と返されていた。

「何か変だな……」

タクトは、この完全に仕組まれた行事があの大女優の計画通りに動いている事を知る。
だが、それを面と向かって彼女に言っても仕方が無いのも知っていた。
多分、彼女は彼女なりにアキオに会いたかったという事なのであろうから。

「ただなぁ……」

全ての仕事を終えたアグネス・ソワレは、ティールームの端の席でアキオと二人きりで紅茶を飲みながら昔話に華を咲かせているようであったが、それを今にも世界が滅びそうなほど暗い表情で見ている人間がいた。

それは、ミントとちとせであった。

「ううっ……。幼馴染で、大女優で美人……」

「全然、敵いそうにないです……」

それと、無意味に激怒している人物もいた。

「アグネス・ソワレと言えば、百年に一度と言われる大女優なのよ！　それを、アキオ如きが！」

ランファの怒りは、表面上は誤解ではあったがアグネス・ソワレに手を出すアキオに向いていたが、フォルテには同じただのヤキモチにしか見えていなかった。

「（ランファも素直じゃないね……）旧友との再会くらい良いじゃ

ないか」

「でも、旧友とか幼馴染よりも、初恋の人らしいぞ」

「「「「「「「嘘っ！」」」」」」」

クレッシェンドの突然の暴露に、ティールームにいた大半の人間が思わず大声で叫んでしまう。

以前に、その話をアキオ本人から聞いた事のあるランファは、余計な事を漏らしたクレッシェンドに冷たい視線を送っていた。

「しかし、マイヤーズ司令殿は良く知っているみたいだね」

「それなりの情報網を持っているからな」

「でも、作戦参加戦力は侭ならなかったわけだ」

「シュトーレン大尉、それを言わないでくれ」

クレッシェンドは、先の輸送船団が惑星ロハス経由で移動する事が決まったり、一日司令がなぜか当初の抽選で決まっていた人気司会者であるノミ・タモンから、アグネス・ソワレに変わった経緯などは知っている。

だが、知っているだけで、己の職責以上の事を軍人は行う事ができない。

ただ、それだけの事であった。

「あの妖怪は何を企むのかね？　初恋の清算？　それとも、ヨリを戻す手伝いか？　まあ、レイトンの奴が大女優と結婚して表舞台に立つとなると、妖怪としては早く引退できるわけか。じゃあ、俺は

そろそろ……」

クレッシェンドが、ウォッカ大将が企みそうだが確証も無い予想を撒き散らしてから、そろそろ自分の艦に戻ろうと席を立とうとすると、急に自分の両肩を押さえる人物がいる。

それは、不気味な笑顔を絶やさないちとせその人であった。

「マイヤーズ司令、まだ茶のお替りはありますから」

「いや……、俺も結構忙しいし……」

つい女性相手に無駄な口を滑らせてしまった事に、徐々に危機感を募らせるクレッシェンドであったが、彼が帰るのを阻止する人間は他にも存在していた。

「マイヤーズ司令、そう仰らずに」

ミントは、クレッシェンドのカップに並々と新しい紅茶を注いでいく。

一杯になったカップから紅茶が溢れて行くが、ミントはお構いなしに紅茶を注ぎ続け、クレッシェンドは底知れぬ恐怖を感じ始める。

「つまりだね。マイヤーズ司令殿」

「知ってる情報、全て話して行きなさいって事なのよ。わかる？」

「マイヤーズ司令、新しいクッキーが焼けましたよ」

フォルテ、ランファ、ミルフィーユにも囲まれ、更なる恐怖を感じたクレッシェンドが、この包囲網に参加していないヴァニラに視

線を送ると、彼女はタクトやエリオスと一緒に『諦めろ』という表情をしながら首を横に振っていた。

「（アッシュ中尉にも見捨てられた！）」

クレッシェンドは、プライベートな時間では女性が好きであったが、軍務の時間にはあまり女性に興味を持ちたくない。

軍人をしている女性があまり好きではないのだが、今この僅か一時間ほどで余計にそれが増進されてしまう事となる。

そして、肝心のアキオとアグネス・ソワレの、七年ぶりの二人きりの会話の方も進んでいた。

「七年は長いよね」

「そうだな」

一方は、英雄タクト・マイヤーズの片腕として有名な、経歴だけで言えばタクト以上の有名人。

もう一方も、最近では多忙を極める有名女優。

もっと色々な話が出ると思ったのに、二人はなかなか話が進まない状態にあった。

「本当、綺麗になったよ」

「アキオ君も、良い男になった。昔から格好良かったけど、ドラマの撮影をしていても、こんなに格好良い俳優さんはなかなかいないわ」

少し大人びたが、昔と同じ声と話し方をする彼女に、アキオは安

心したような表情をする。
午後のティールームで昔話に華を咲かせる美男美女は、まるでドラマのワンシーンを切り取ったようであり、周りの人達をうっとりとさせていた。
だが、相変わらずクレッシェンドにはまだ厳しい時間が続いていて、正直プレッシャーで彼の胃は壊れそうであった。

「お互いに変わったのかな？」

「そうね。変わったというよりは成長したのね」

その後も、二人の話は続く。
アキオは、あの卒業式後の別れから今までに至る簡単な経緯を、アグネス・ソワレこと本名レイチェルも、ジュニアハイスクール卒業以降の事を話す。

「ハイスクールでね。演劇部の友人に劇の代役を頼まれたの。それでハマって、大学でも趣味でやっていてね。本当は、プロになる予定なんか無かったのよ。貧乏演劇サークルだったから、賞金目当てに担当していた脚本部門に応募したら引っかかってね。私に会いに来たディレクターが、『君が、主役をやれ』でそのままよ」

「シンデレラストーリーだな」

「本当、ドラマみたいな展開」

アキオは、さすがにプロは見る目が違うなと思いながらも、ようやくに掴んだ話を進める事にする。

「それで、エオニア戦役の時は大丈夫だったのか？　ご両親とかも」

先に発生したエオニア戦役からまだ半年、億単位の犠牲者を出した戦乱で家族を失った者や、家族ごと一家が全滅してしまった人も珍しくなかった。
アキオは、子供の頃に面識のあるレイチェルの両親について尋ねてみる。

「実は、ハイスクール時代に首都星トランスバールを出ていたの。両親も元気よ」

「そうか、良かった」

ジュニアハイスクール時代に、学校で遅くなった彼女を家まで送った時に、お礼に夕食をご馳走になった事があったので、少し気になっていたのだ。
あの頃は、付き合いと言っても学校から家までの道を一緒に歩いて話をするだけであったが、それでも彼女の父親があからさまに嫌な顔をしていた事を思い出して、思わず笑ってしまうアキオであった。

「えっ？　急に何？」

「ほら、昔にレイチェルの家で夕食をご馳走になった時にさ」

「お父さんね。露骨に嫌な顔をしていたわね」

「昔話で盛り上がってるな。こりゃあ、復縁の線も……」

「マイヤーズ司令、紅茶のお替りはいかがです？」

「遠慮なさらないでくださいね」

その場にフォルテ達に固定されて脱出不能となったクレッシェンドに、既にお腹がタプタプで飲めない紅茶と、お腹が一杯で食べられないクッキーが、ミントとちとせによって盛大に盛られる。

「俺を、糖尿病にするつもりか……」

多少口が悪くて横紙破りとはいえ、それでも軍人の範疇を抜けていないクレッシェンドは、今初めてこの美少女達をちゃんと指揮している弟を少し見直しつつあった。

そして、テーブルの向こうでは話がクライマックスを迎えつつあった。

「事情は聞いたわ」

「有名になりつつあるのか」

ジュニアハイスクールを卒業したアキオが、軍の士官学校に行くためにレイチェルと別れを告げたあの時。

考えてみれば、士官学校に行くだけで二人が別れる理由など無く、その頃は不明であったアキオが別れを告げた理由を、戦後になってから初めて知ったレイチェルであった。

「世間は、そういう話題が好きだから。次第に広まりつつあるわ」

英雄の片腕が皇国貴族の私生児であったなどという事情は、確かに世間の興味を引きやすい話題ではあった。

しかも、これは伏せられてはいたが、その実の父親であった貴族に命まで狙われていたのだ。

それに、伏せられたとは言っても、悪事は千里を走るし、その噂を押さえつける力はフレスコ・シードル前公爵の死によって機能していない。

誰も、既に死んでいる権力者に気を使う者などいないのだから。

「でも、良く一緒にいられるわね」

レイチェルは、ヴァニラの隣に座っているエリオスを一瞥してから、アキオにその真意を問う。

「仕事だからさ。レイチェルも、ドラマの共演者に気に入らない奴がいるからって、仕事をキャンセルしないだろう？」

「ベテランだとする人もいるけどね。私はしないけど」

「そういう事さ」

その後、二人は席を立ってティールームを出るのだが、その際にレイチェルは極めて自然にアキオと腕を組んでいて、それを見たミントとちとせは既に限界ギリギリの状態にあった。

「一日司令のお仕事は終わったのでは？」

ミントが初めて見せる強烈な剣幕に、クレッシェンドはどうにか

そこから逃げ出す方法を懸命に頭の中で模索する羽目になる。

「三日間のエルシオール滞在が、仕事を請ける条件だったんだ。他の船だと、一般女性の滞在は辛いだろうし……」

「誰がどう見ても、アキオさんが目当てじゃないですか！　他の船に行くはずがないです！」

「ですよねぇ……」

「『ですよねぇ……』じゃありません！」

貴族としての威厳と誇りも、これが威張り腐っている無能な上官であれば奮闘もできたのだが、相手が十代の少女達ばかりという事で、その牙も仕舞ったままのクレッシェンドであった。

こんな少女達に真面目に激怒しても、まるで無意味であろうから。

「三日間耐えれば、それで良いと思うんだけど……」

ここまで静かに様子を静観していたエリオスが、ボソっと自分の意見を述べる。

「彼女はいつもは多忙な女優ですし、兄さんもこれから作戦行動には入るエルシオールにいるわけですから」

この三日間さえ何も無ければ、レイチェルのチャンスはずっと先の事になるし、その間にはいくら何でもという意見をエリオスが述べると、ミントとちとせは手を取り合ってお互いを見つめ合う。

「ここは、一時停戦という事で」

「そうですね。あの女の野心を止めなければなりません」

どれだけ続くのかと問われれば、多分三日間だけなのであろうが、ミントとちとせは同盟を組む事に成功する。

「勿論、ランファさんも協力してくれますよね？」

「私？　そうね。あのアグネス・ソワレがスキャンダルで消えるのも惜しいから協力してあげるわ」

ランファの究極の照れ隠しに、フォルテは思わず心の中で笑ってしまう。

「それで、他の皆さん達は？」

ミントは、ミルフィーユやヴァニラにも協力の有無を尋ねていたが、二人は提案には乗って来なかった。

「あの、アキオさんの気持ちが大切だと思うんです」

「私も、そう思います」

アキオにとってレイチェルという存在が、既に終わった初恋の相手であるのか？　それとも、まだ彼女への気持ちが残っているのか？　それは本人にしかわからず、ミルフィーユとヴァニラは外野がどうこう言う事ではないと思っていた。

「ミルフィーさん達には、関係のない話なのでしょうけど」

珍しく角の立つミントの言い方に、フォルテはムーン・エンジェル隊が真っ二つに割れてしまった事を知る。
ただ、ミルフィーユとヴァニラが冷たい人間というわけでもなく、彼女達はここで変な妨害をしても、ミントやちとせがアキオに嫌われてしまうだけと考えての発言であった。
それに、二人が絶対に復縁するという保障もなかった。
ただ、七年前を懐かしんでエルシオールに来ているだけかもしれないのだ。

「私達は、私達の道を行くのみです！」

「スキャンダルは禁止よ！」

ちとせのこの一言によって、ミントとランファは席を立ってアキオ達の監視をするためにティールームを後にする。

「やれやれ、あまり暴走しないように監視しないと」

「私は、アキオさんの意志に任せるべきだと思うんです……」

「若いって良いわね。ヴァニラ、薬品を少し取りに行きたいの」

「はい」

同じく、フォルテがミント達の監視のために席を立ち、アキオの邪魔はしたくないミルフィーユは食堂へ夕食の仕込みに出かけ、ヴァニラも、ケーラと一緒に倉庫に薬品類を取りに行ってしまう。

「助かったぁーーー」

この一時間ほどでムーン・エンジェル隊に対する苦手意識をかなり深い所まで植え付けられたクレッシェンドであったが、彼はその場に残ったタクトとエリオスによって更なる試練を課せられる事となる。

「マイヤーズ司令」

「何だ？　新公爵殿」

あまりエリオスに対して好印象を持っていないクレッシェンドは、ぞんざいな声で返事をする。

「このムーン・エンジェル隊に配備されている紋章機という兵器の性質をご存知でしょうか？」

「確か、パイロットの精神状態で……「事態が解決するまで、エルシオールに残留して責任を取っていただきますので」」

クレッシェンドが自分の迂闊さを呪っていると、今度は自分の弟であるタクトが声をかけてくる。

「兄貴、夕食を食べて行くといいさ。ちなみに、メニューは特別だけど」

「どんなメニューなんだ？」

「いやなに、ランファ専用の特別メニューがあるんだけどね。今、ミルフィーに二人分頼んだからさ」

「そうか……」

クレッシェンドは、心の中で号泣しながら自分の艦であるヒヨウ宛に、『二～三日戻れない』旨のメールを送り始め、それと同時に、自分とムーン・エンジェル隊との相性の悪さは折り紙つきである事を実感するのであった。

「なあ、レスター。現役復帰をしたのはいいが、俺は何をすればいいんだ？」

そして翌日の朝、先の輸送船団の修理監督やら、一日ムーン・エンジェル隊司令であったレイチェルの出迎え準備などの任務をこなしたアキオは、レスターにこれからの自分の仕事を尋ねていた。

「辞令が、『現役復帰せよ』だけで、具体的な物が一切書いてないからな」

さすがのレスターも、この状況には困ったような顔をしていた。

「タクトやミルフィーは、すぐに決まったじゃないか」

タクトのムーン・エンジェル隊司令への復帰はすぐに上層部で可決されたらしい。

それと、ミルフィーユも紋章機が傍にある環境の方が良いであろうという事で、エルシオール付きの主計中尉として、主に得意な厨房関係で腕を振るう事になっていた。

「前と同じで良いと思うぞ。エルシオールの物資管理と補給関連の仕事はお前に任せるよ」

「楽でいいな」

「そうか？」

レスターの視線の先には、補給担当者専用のツナギを着たレイチェルがニコニコしながら立っていた。

軍上層部の解釈では客人扱いであった彼女であったが、何もしないで軍艦に残留するのもという事で、自主的に少し艦内の雑務を手伝う事になっていたからだ。

つまり、彼女の管理はアキオがする事になっていたのだ。

「アキオ君。じゃなかった。レイトン准将、宜しくお願いします」

改めて挨拶をしながら敬礼をする彼女は、見た目だけで言えばムーン・エンジェル隊の面々以上に軍人らしく見えていた。

「さすがは、女優だな」

「お上手ですね。クールダラス副司令は」

いくら鈍チンで男女の機微を理解できなくても、レスターも普通に男であり、やはり美人には弱いらしい。

いつもよりも砕けた態度に、アルモはその表情と態度を自分にも向けて欲しいと切に願っていた。

「じゃあ、行こうか」

「そうね。アキオ君」

二人は、エルシオールの倉庫へと移動してから、そこで荷物の整備を行う。

半年に及ぶ辺境調査で、ほぼ空になりかけた倉庫であったが、また応援の艦隊から補給を受けて、すぐに整理をする必要があったからだ。

「無重力フォークの講習修了証を持ってるわ」

「あれ、意外と難しかっただろう？　ああ、運動神経は良かったよな。ジュニアハイスクールの頃は、体育祭のリレーの選手だったし」

「アキオ君、覚えていたんだ」

二人は、上手に無重力フォークの一人用の運転席に座り、少し練習をしてから倉庫内のコンテナの整理を始める。

「そうそう、上手じゃないか」

「軍人でも食べられるかしらね？」

「給料安いぞ」

二人は、仲良く話をしながら次々と倉庫内の整理を進めていく。

「くっ付き過ぎですわ！」

そして、その様子を伺っているのは、昨日同盟を結んだミントと

ちとせ。
更に、ランファと昨日から不幸ぶりが板に付いて来たクレッシェンドであった。

「私も手伝いたいです」

「いや、これから訓練じゃないか」

実は、これからムーン・エンジェル隊総出で、ヒヨウ以下護衛艦隊を敵強奪艦隊に見立てた模擬戦闘訓練がスタートする予定であった。
だが、これはあくまでも紋章機とブリッジ要員だけの訓練であり、アキオはレイチェルと二人で倉庫の整理を続けるはずであった。
それと、倉庫整理の方は、輸送船団の応急修理の応援で人員を割いた影響で遅れ気味であり、『今の内に何とかしておいてくれないか？』とレスターにも言われていたので、少し急いでいるアキオであった。

「本職でもない女優にあんな仕事を任せるなんて、アキオさんらしくない非合理的な考えです！」

本音は、無重力フォークの一人用の椅子に二人でくっ付いて座って欲しくないのが丸わかりのミントとちとせであった。

「彼女、全然普通に仕事をしているじゃないか。それと、そろそろ訓練なんですけど……」

早くヒヨウに戻りたいクレッシェンドは、ミント達に早く訓練の準備をするように言うのだが、それは余計に彼の立場を辛くする原因となっていた。

「わかりました」

「そこまで仰るのなら……」

不敵な笑みを浮かべるミントとちとせが気にならないわけでも無かったクレッシェンドであったが、ヒヨウに戻れるとあってあまり気にしない事にする。

だが、それから一時間後に始まった訓練では、ミントとちとせによって、ヒヨウが常に撃沈判定を出され続けるという悲運を味わっていた。

いくら訓練でも、エオニア戦役では実戦経験もある鍛えられたクルー達に運用されている艦が、容赦なくトリックマスターとシャープシューターの模擬弾と可視光線を喰らって撃沈される様は、あまり気分の良いものではなかった。

「マイヤーズ司令、これで37回目の撃沈判定です」

「いくらムーン・エンジェル隊でも、あんな娘っ子達に……」

自分の娘のような年齢の少女達が操る紋章機によって次々と撃沈判定を貰い、しかも相手に一発も当てられないヒヨウの艦長以下クルーは、クレッシェンドに対してショックを隠し切れないようであった。

「（すまん、全部俺のせいだ……）」

ただ、それをクレッシェンドが部下達に話す事は絶対になかった。

午後の訓練で、ヒヨウはミントに28回、ちとせに31回の撃沈判定を喰らい、そのプライドを大きく傷付けられてしまうのであっ

た。

「今日の日替わり定食は、ビーフシチューですよ」

ムーン・エンジェル隊の面々は模擬演習を、アキオとレイチェルは倉庫の整理をほぼ終わらせ、食堂で調理担当のミルフィーユから夕食の配膳を受けていた。

「ミルフィちゃんは、お料理が上手なのね」

「私は、料理をするのが好きなんです」

「『好きこそ物の上手なれ』って感じかな？」

「レイチェルさんもですか？　お芝居とか」

「そうね。普段の自分とは違う何かに成り切るって、とっても面白いのよ」

アキオとレイチェルのテーブルで、ミルフィーユは皿にシチューをよそいながら、彼女と話をする。

ミントとちとせの影響で、ムーン・エンジェル隊の面々はレイチェルにあまり近付かない傾向にあったのだが、ミルフィーユはその性格の良さと、レイチェルは悪い人ではないと感じていたので、普通に彼女と話をするようになっていた。

「長時間煮込んだから美味しいですよ」

「いただきます。うん、お肉もトロトロで美味しい」

「ありがとうございます」

「ミルフィちゃんも一緒にどう？」

「はい」

夕食の配膳を終えたミルフィーユは、アキオとレイチェルのいる席に座って、楽しそうに話をしながら夕食を取り始める。

そして、その光景を他のメンバーは驚きの表情で見ていた。

「さすがは、天然娘。あのプレッシャーをプレッシャーとも感じていない」

ランファはミルフィーユに感心しつつ、このまま遠巻きで眺めていてもと思い、自分も三人の居るテーブルへと移動する。

「ご一緒して宜しいですか？」

「ええ、どうぞ。ランファさん」

四人になったアキオ達は、シチューを啜りながら話を進める。

「みんな、私を避けているのかしら？」

レイチェルは、自分とアキオを遠巻きに監視しているミントとちとせや、自分にはあまり興味が無さそうなフォルテや、エリオスと

食事をしているヴァニラや、一人また今日もランファスペシャルを火を噴きながら食べているクレッシェンドなどを視界に入れる。
ちなみに、タクトはもう少ししたらここに来る予定であった。

「みんな、遠慮しているんですよ」

まさか、アキオと仲良くしているレイチェルに敵意を燃やしているとも言えずに、ランファは適当に理由を付けて誤魔化していた。

「遠慮か……。そういう事に、しておいてあげる」

ランファは、彼女が女優として人間観察に優れているのを確認する。
多分、自分はともかく、ミントとちとせの考えなどお見通しという事なのであろう。

「ところで、ミルフィーユちゃんは、タクト・マイヤーズ司令と付き合っているのよね？」

「はい」

レイチェルは、自分の質問に何の躊躇いもなく、表裏の無い笑顔で答えるミルフィーユに好印象を覚え、どうしてアキオが彼女を妹のように可愛がっているのかを理解する。

「彼、良い男だものね」

「そうですか？」

ランファは、レイチェルのタクト評に疑問を感じていた。

勿論ランファは、タクトの司令官としての能力や、友人としての性格や人柄などを認めていたが、それほど話したり接した事もないレイチェルに、タクトの本当の良さがわかるとは思えなかったからだ。

特に、外見だけで言えば、アキオ、レスター、エリオス、クレッシェンドの圧勝であった。

「あら、ランファさんは、マイヤーズ司令の事を信じていないの？」

「いえ、初見の人は、大抵レスターやエリオスやアキオの方を評価しますから……」

「一般的にはそうでしょうね」

レイチェルは、ランファが一番最後にアキオの名前を言った時の彼女の表情の変化を見逃さなかった。

「マイヤーズ司令は、アキオ君に匹敵する良い男だと私は思うけどな」

「女優の人物観察眼かい？」

「ええ、そうよ。信憑性はゼロで、私の勝手な思い込みの可能性も高いけど」

アキオの質問に、レイチェルはそう答える。

「では、レイチェル視点でのタクトの評価を聞きたいな」

レイチェルはアキオの願いを聞き入れ、自分なりのタクト評を話

し始める。

「彼は大きな器なのよ。何でも入りそうな大きな器。でも、その器の中はとても暖かいわ。お兄さんの方は有能だけど、少し器が窮屈なようね」

レイチェルのタクト評に、アキオ達は納得したような表情になる。それと同時に、弟よりも器が小さいと言われたクレッシェンドはそのまま苦笑するしかなかった。

実は、それはクレッシェンドが幼い頃から弟に対して薄々感じていた事だからだ。

碌に勉強もしないで遊んでばかりいた駄目な三男坊であったタクトであったが、それを彼の父親であるマイヤーズ伯爵が怒ろうとすると、必ず屋敷の使用人達や執事などか止めに入っていた。

タクトは、どういうわけか彼らに物凄く好かれていたのだ。

クレッシェンドは、『弟には、人が近寄って来るような才能があるのでは？』と感じ、だが、それを認めたくないからこそ、彼は弟を殺潰しの駄目な奴だと常々口にするようになっていた。

「レスターは？」

続けてアキオは、レスターについて聞いてみる。

「彼も良い男ね。仕事をしている時は、日本刀みたい。でも、女の子の扱いは全然駄目だけど」

「良くわかりますね」

「わかるわよ。あのアルモって子がたまに見せる、縋るような目付

きにまるで気が付いていないみたいだし」

ランファは、この女は侮れないなと思っていた。

僅か二日間で少し話をしただけで、そこまでエルシオール艦内の人間関係にほとんど気が付いているのだから。

「すまん、俺は書類の決裁があるんだ」

「今日はずっと一緒だったから、私一人でも大丈夫よ」

夕食後、アキオと別れたレイチェルは、一人エルシオール艦内の探索に向かう。

すると、トレーニングルームを発見し、中で先ほど一緒に食事をしたランファを発見していた。

「こんばんわ、ランファさん」

「アキオと一緒じゃないんですか？」

「アキオ君にも、私と一緒じゃ駄目なお仕事もあるらしいわ。それよりも、お話をしない？」

レイチェルは、サンドバックを殴るのを止めたランファと、近くのシートに座って話を始める。

「ランファさんは、綺麗だしスタイルも良いから、アクションスターでもいけるかもしれないわね」

本格的に師匠から武芸を習っているランファのトレーニングを見ていたレイチェルは、彼女が物凄い武術の達人であることを見抜い

ていた。

「レイチェルさんは、アクション映画のオファーとかが来たら武芸も習うんですか？」

「そうね。でも、本当にさわりだけだと思うわ。確かに、その役になり切るのが女優という生き物だけど、一本の映画のために何十年も武芸を習うわけにもいかないし。いかに短い時間で、スクリーンの向こう側の人達を納得させる演技をするかなのよ」

「達見ですね」

「でも、私もまだ新人なのよ」

初主演ドラマが過去にないレベルで大ヒットしたために、既に一流の女優の仲間入りなどと報道されているアグネス・ソワレことレイチェルであったが、彼女自身はまだ大学院に籍を置きながら趣味で演劇をしていた二十二歳の普通の女性にしか過ぎず、実はこれからの人生についても考える部分も多かったのだ。

「せっかく才能があるんだから、女優を続けるべきだと思いますよ」

「そうかな？」

「はい」

「じゃあ、アキオ君にマネージャーになってってお願いしたら、彼は引き受けてくれるかな？」

ランファは、レイチェルの言葉に不覚にも表情を崩してしまい、

それを彼女に見られてしまう。
色々と勘の鋭い彼女の事なので、『変な誤解をされてしまったのでは？』などと考えるランファであったが、それこそ彼女も誤解である可能性もあった。
少なくとも、レイチェルは自分がアキオの事を好きだと思っているはずであったから。

「アキオ君は、本当は軍人になんてなりたくなかったんだと思う。だったら、私のマネージャーになって、私と一緒に仕事をすればいいのよ」

「お言葉ですが、それはあなたの勝手な都合じゃないですか。レイチェルさんには既に優秀なマネージャーさんもいるみたいですし。以前にアキオは、エルシオールにいる事が好きだからここに居るって言っていたんです」

「それは、つまり……」

憧れの女優に対して思わず強い口調で言ってしまったランファであったが、まだ一部ではあるが彼女の本音が聞けたと感じたレイチェルは畳み掛けるように次の質問をする。

「私を遠巻きに監視している、ミントさんとちとせさんでしたっけ？　彼女達も、アキオ君がここに残りたいと思う理由の一つなのかしら？」

「はい」

隠しても無駄であると感じたランファは、二人が明らかにレイチェルに対してアキオの件で警戒感を抱いている事を教える。

「アキオ君は、相変わらずモテるのね。ジュニアハイスクールの頃にも、後輩の女の子からラブレターとか貰ってたわね。懐かしいな」

レイチェルが楽しそうに話す昔話を、ランファは少し羨ましく感じていた。

七年前に二人は付き合っていて、レイチェルはランファ達の知らないアキオを沢山知っている。

これは、ミントとちとせにとっては大きな脅威と不安であろう。

「（ミントとちとせも大変よね。私は……、私は関係ないのよ！別にアキオの事なんて……）」

「でも、ランファさんも、アキオ君の事が好きよね？」

「まさか！　私はアキオの事なんて！　とっ、友達ではありますよ」

レイチェルに心の中の本音を突かれたランファは、懸命に彼女の発言を指定する。

「本当に？」

「……」

レイチェルの真剣な表情に、言葉に詰まってしまうランファであった。

「本当なら嬉しいんだけどな」

「それは、どういう事です？」

「だって、ミントさんとちとせさんよりも、あなたの方が手強いライバルなんですもの」

レイチェルは、ランファをアキオ争奪戦の手強いライバルだと思っていた。

昨日からアキオと一緒に話をするのだが、その時に良く話題に上るのがランファの事であったからだ。

その話の内容は、『あの女は凶暴だ』とか、『人をマザコン呼ばわりする』、『味がわからなくなるほど、唐辛子を料理に入れる』、などの悪口が大半であったが、それでもアキオの態度を見ると、彼の心の中ではランファの比重がかなり高い事が容易に銅像できた。

それと、アキオはランファに昔の自分達の事を話してもいた。

アキオは、『ちょっとしたトラブルでつい』と言っていたが、それでもアキオとランファは、腹を割って本音で話を出来る関係にあるらしい。

「レイチェルさんは、アキオの事が？」

「ええ、好きよ。だって、私達って別に嫌いになって別れたわけじゃないのよ」

確かに、レイチェルの言う通りであった。

あのジュニアハイスクール卒業後の別れは、ある意味仕方のない事であった。

アキオは、レイチェルを巻き込みたくなかったのだし、当時十五歳の彼女にアキオの出生の秘密は重過ぎる話だ。

あの場面では、二人は別れるしかなかったのであろう。

何の力も持たない二人が逃げてどこかで生活を始めたとしても、あの残忍なフレスコ・シードルに殺されていただけであろうから。

別れて生き残るか、二人で仲良く死を迎えるか。
当時は、そこまで深刻に考えていなかったと思うが、今となってはそれは正しい選択であったとしか言えない状態であった。

「七年待ったの。私は……」

何しろ、これだけの美人である。
その気になればいくらでも新しい恋人を作れたであろうに、彼女に浮いた話題など皆無であった。

「だから、軍がこの仕事を持って来た時に私は言ったわ。『私は、アキオ君がいない軍の仕事は受けないってね」

それで、ウォッカ大将辺りが、例の輸送船団のルートを惑星ロハス経由にしたのであろう。
何かあれば、そこで強制的にアキオを回収。
無くても、そのまま強制的にアキオを回収で、タクト達は偶然のオマケでまた別ルートで回収するつもりだった手間が省けて良かった。

これが、アキオ、タクト、ミルフィーユ復帰の真相であった。

「ミントさんとちとせさんが、私の事を嫌うのは仕方がないわ。だって、私はアキオ君を奪いに来たのだから。無理に好かれようなんて考えないし、あの二人に譲る気なんてない。だから、ランファさんも自分の気持ちに正直にね」

「私は、別に……「じゃあ、私は明日に備えて寝るわね。うーーーん、お仕事疲れたわ」」

ランファに自分の気持ちを述べたレイチェルは、自室に戻るためにトレーニングルームを出て行ってしまう。

「レイチェルさんは、どうして私にあんな事を……。もう！　私は別にアキオの事なんて！」

ランファは、一人トレーニングルームで叫ぶのであった。

「ふふふっ、まずは、私が直接お手並みを拝見させていただくわ。タクト・マイヤーズ司令」

ちょうど同じ頃、エルシオールから少し離れた暗礁宙域内で謎の艦隊を潜ませているネフューリアは、一人エルシオール襲撃の最適なタイミングを図っていた。

「明日には、綺麗な花火が見れるでしょう。下等な人間の命が燃える花火だけど……」

ネフューリアは一人ほくそ笑み続けていた。

第二部　第二話（後半）

「兄さん、ちょっといいかな？」

「俺は、お前に用事なんて無いけどな」

ランファとレイチェルが二人きりで話をしていたその時、一人自室でノートパソコンを開きながら書類の決裁を進めていたアキオをエリオスが尋ねて来る。

先の大戦の時には、酒専用の大型冷蔵庫を業者と結託して持ち込むほどの酒に関しては無茶をするアキオであったが、今回は突然の復帰だったのでその余裕もなく、室内は最低限のベッドとデスクしか置かれていない殺風景な物であった。

「僕達兄弟の事じゃないよ。仕事の話だ」

この誰よりも複雑で、一時はお互いを完全に憎み合っていた兄弟の関係がそう簡単に修復するはずもなく、それを誰よりも理解していたエリオスは、今は普通に話が出来るだけマシと考えて、性急な関係の修復を望むような真似はしていなかった。

そんな、あからさまな自分の言動に、アキオが引っかかるはずも、情に絆される事もないと思っていたからだ。

ここで変に情に訴えても、それは余計にアキオの怒りを買うだけである。

そう考えたエリオスであり、そしてそれに気が付いているヴァニラも、無理に短時間で二人の関係を修復しようとは思っていなかった。

ゆっくりと、時間をかけてが基本であったのだ。

エリオスは、ただ一言、仕事の件で来た事をアキオに告げる。

「レイチェルの事か？」

「さすがに、わかっているみたいですね。彼女に悪い部分はほとんどないのでしょうが、ミントとちとせがこのままでは戦力になりません」

パイロットのテンションによって大きくその性能を変化させる紋章機を運用しているムーン・エンジェル隊において、今の状況はあまり良好なものとは言えなかった。

確かに、今日の訓練では二人は優秀な成績を収めていたが、あのような怒りの感情で一時的に頑張れても、そんな状態がずっと続くわけではない。

となれば、彼女達を穏やかに安心させておくのが、この船のクルーや司令部幹部の重要な任務でもあった。

「人のプライベートな部分に、口を出して欲しくないな」

「兄さんらしくない発言だよね」

「俺は、昔の……。いや、何でもない」

昔に好きだった女性で、ずっとプラトニックな関係ではあったが、七年前までは事実上は恋人同士だったと思われてた関係であった。

だが、運命の皮肉が二人を引き裂いて、それが今になって再会の運びとなった。

ただ、今でもアキオが彼女と付き合っているのかと言えば、その

答えはノーであった。
どんな理由にせよ、一度二人は別れているからだ。
そして、今回の再会でヨリは戻るのかと言えば、これもまだわからないアキオであった。
確かに再会を果たした時は嬉しかったし、だからこそ今は大して忙しくもない立場だからという理由で彼女と行動を一緒にして、七年間の空白を埋めようとしていて、アキオは、昔の想い出に浸りながら彼女との楽しい一時を過ごしていた。

だが、それが本当に復縁を望んでの事なのか、過去の旧交のみを修復しようと試みているのかは、まだ自分にもわからなかったのだ。

アキオが、恋を恋愛を忘れている。
いや、一度完全に捨てた物をまだ完全に拾い集められていない。

エリオスは、自分の兄の状態をそのように思っていた。

それと、アキオの方も、まだ自分の本当の気持ちを整理できないでいた。
自分のレイチェルに対する気持ちが、ただ過去の懐かしさを共に味わうだけの関係なのか、それともまだ彼女の事を愛しているのか？
それを懸命に心の中で模索している状態であったのだ。

ただ、アキオはこれだけは決めていて、決してエリオスに対して限界を超える発言をしなかった。

『元はと言えば、お前の父親が悪いのではないか？』

言えば、多少はスッキリとしたのかもしれなかったが、それを目の前のエリオスに言っても仕方のない事であったし、それで事態が

解決するわけでもなかったからだ。

「それに、人の事が言えるのか？」

エリオスは、アキオの言う件の見当が付いていた。

自分もヴァニラと一緒にいる事の多い人間であり、それを良く思っていない人達がいる事を知っている。

大半が、『ヴァニラちゃん親衛隊』のメンバーによる嫉妬が原因なわけなのだが、それでも自分の父親から始まる先祖代々の女性に対する悪行は本物であり、彼らはヴァニラの事を本気で心配してもいる。

となると、エリオスもエルシオールのクルー達の和を乱しているとも言えた。

「それこそ、兄さんに言われたくないね」

「ほう、言うじゃないか」

「僕は僕自身の悪行が原因で、そのまま地の底に落ちる予定の男だったんだ。爵位を奪われるか、名だけの破産した貴族として一生辺境で絵を描く生活を送るね。こんな僕だけど、唯一僕に声をかけてくれた女性がいた」

「ヴァニラか……」

詳しく聞いた事がないのでわからなかったが、ヴァニラはなぜかあの時に唯一エリオスを庇った。

アキオは、彼女が修道院のシスターに育てられた過去から、宗教的な寛大な精神でエリオスを救おうとしたと思っていて、その優しさを、目の前の男が自分の野心に利用でもしようとしたら、最悪は

命を奪っても構わないとまで思っていた。

今の財力と交友関係を駆使すれば、この立場の弱い公爵など簡単に潰せるであろうから。

皇国軍に入ってから沢山の人を殺してきたアキオに、今更それを躊躇う理由など存在しなかった。

あの心優しい少女が、優しい少女のままでいられるなら、自分が手を汚すくらいは簡単な事であった。

「兄さんが、ミルフィーを見る目と同じだよ。僕は、あの優しいヴァニラが優しいままでいて欲しい。ついでに、絵も書かせて欲しい。それだけなのさ」

「ふんっ！　綺麗事を」

最近まで、自分は一人っ子だと思っていたエリオスと、兄弟がいる事すら認めたくなかったアキオには、似ている部分が存在している。

自分の気に入った年下の少女を、まるで妹のように可愛がっている点であった。

「でも、兄さんはどうするの？　ちとせ、ミント、ランファ、レイチェルさんと、タクトさんに言わせれば、『贅沢な悩み』なんだろうけど」

エリオスにわざわざ言われなくても、自分で十分に気が付いている事であった。

『自分に好意を寄せている女性達の中から誰を選ぶのか？』

この未だに明確な解答が出てこない現状に、自分に残酷さと優柔不断さを感じているアキオであったが、一つだけエリオスの発言で引っかかる部分が存在していた。

「ところで、ランファが何で入っているんだ?」

アキオは、少なくとも表面上はランファを女としては見ていなかった。

事故とはいえ、彼女の裸を少し見てしまった自分に必殺技を喰らわし、同じく魔が差したとはいえ、エリオスを殺そうとした自分にビンタを喰らわし、エオニアとの最後の戦いで潔く散ろうとした自分に説教をする。

どう考えても、恋愛対象になる女性ではなかった。

フォルテと同じで、悪友になるタイプだと思っていたのだ。

「兄さんの鈍さには、ある意味感動するね」

何でも出来る天才だと思われているアキオであったが、それは周囲の誤解であらしい。

確かに、パーティーなどで女性をエスコートする様や、女性へも接し方は見事であったが、それは表面上の部分だけであるようだ。

意外と恋愛センスに疎く、ミントやちとせからのように、誰から見てもわかるような好意をぶつけられないと、全く人からの好意に気が付かないようであった。

「それこそ、お前に人の事が言えるのか?」

「その辺は、僕なりに事情というものがあってね。ところで、レイチェルさんとはどうするつもりなの?」

「それは……」

アキオは、改めてレイチェルの事を考えてみる。

七年前の悲運の別れから、久しぶりにドラマの映像で見た大人になった彼女と、続いての感動の再会。

これでアキオは、昔に忘れていた人を好きになるという感情が戻って来るものだと思っていた。

ところが、レイチェルに対して懐かしいとは思うものの、なぜか昔に感じた人を好きになるという感覚が全く沸いて来ないで、実は少し焦っていたアキオであった。

嫌いでもないレイチェルと断腸の想いで別れてから再会したので、まさかこんな事になるとは思っておらず、これは間違いで彼女と一緒に居続ければ、絶対に彼女に対する愛情を思い出すはずだ。

アキオは、それを誰にも言わず、更に億尾にも出さずに彼女と一緒の時間を過ごしていたのだ。

「兄さんは、まさか……」

「言うな！」

アキオは、エリオスが既にその事に気が付き、こう言おうとしていると感じて、大声で彼の発言を制していた。

それは、『兄さんにとってのレイチェルさんは、既に過去の初恋の人でしかないのでは？』。

これを言われるのが怖かったアキオは、エリオスに刺す様な視線を送っていた。

「でも、彼女は明後日の朝にはここを出るんだよ。正直に言わない

と、何も始まらない……」

「言うさ……。お前に言われなくても……」

それと、これは口にはしなかったが、自分勝手だと言われるのはわかっていたがこんな事も考えていた。

「（もう少しだけ、昔の美しい想い出に浸っても良いじゃないか）」

アキオは、エリオスから視界を外すと、また残った書類に目を通し始めるのであった。

「エルシオールって、色々な施設があるのね」

次の日の午後、また倉庫整理などの仕事を二人でこなしたアキオとレイチェルは、銀河展望公園のベンチに座って二人きりで話をしていた。

「この軍艦ぽくない部分が、俺は気に入っているんだ」

「アキオ君は、ちょっと天邪鬼な所があるからね」

「世間的には、ひねているとも言うな」

二人は、自販機で買ったコーヒーを片手に色々な話をする。

「お母さんのお墓」

「お墓？」

「うん、前の戦争が終わった直後に、ドラマの撮影で共同墓地を訪れてね。お墓参りをしたら、もう花束が置かれていた。お墓も綺麗になっていたし」

「それは、俺だな」

エオニアの乱が終結して、首都星トランスバールに到着したアキオが最初の休暇で行った事は、自分の母親の墓参りであった。

暫く来れなかった事を詫びつつ、お墓を綺麗にして母の好きだった花を供える。

それともう一つは、偶然にも同じ墓地にあった、自分を陥れようとした伯父のコニャックことマイウス・シェーンベルグの母親の墓に彼の遺髪と僅かな遺品を納めていた。

ただ、これはレイチェルに話すべき事ではないと考えているアキオであった。

「そういえば、同じ墓地にアキオ君の伯父さんのお墓もあるのよね？」

「知っているのか？」

「意外だった？　でも、彼もかなりの有名人になってしまったのよ」

トランスバール皇国貴族としてひと時代を築き上げた偉人に、影としてその偉業を支えていた腹違いの兄がいて、しかも彼は人生の最後に己の身を滅ぼす原因となる、一発逆転の賭けに出た。

最後の最後で自分の弟を裏切り、エオニアに組して故ジーダマイヤ大将を誑かして、自分の甥二人に骨肉の争いをさせたからだ。
演劇関係者や、マスコミ関係者のみならず、これほど人の興味を魅く人間はなかなかにいないはずであった。
演劇的な世界で考えると、『魅力的な悪役』とでも言うのであろうか？

「別に、教えてくれても良いと思うけどな」

「もう亡くなった人だから、静かにしておいてあげたかったんだ」

「でも、あの娘達には話したのよね？」

レイチェルの言うあの娘達とは、相変わらず自分達の様子を伺っているミントやちとせの事であった。
彼女達は、今日は訓練は休みであったが、書類関係の仕事をそれなりに抱えていた。
ところが、なぜかクレッシェンドが『是非に！』と言って引き受けたので、二人はアキオ達の監視をそのまま続けていたのだ。

「それは、彼女達が彼の密葬を手伝ってくれたから、話す義務があったんだよ。それに、あの場にいた軍人なら触れる情報ではある」

また背中が煤けさせながら人様の書類を整理しているクレッシェンドを心の隅で同情しながらも、アキオはレイチェルにコニャックの件を話さなかった理由を教える。

「でも、私にも話して欲しかったな……」

一昨日の再会から、初めて二人の意見が噛み合わなかった瞬間で

あった。
アキオは少し拙いと思ったが、それを誤魔化すように他の話題を振る。
「明日で休暇は終わりだよね？　その後は、やっぱり忙しいんだろうね」
「ええ、新しい映画の撮影に、一年間放送する連続テレビドラマで準主役だって。他にもテレビ番組への出演やら、地方のイベントにゲスト出演もね」
一躍時の人となった彼女は、暫くはアキオとは会えないスケジュールを設定されていて、それを聞いたアキオは少し安心していた。
まだ、考える時間があると思ったからだ。
「っ！」
ところが、すぐにそれが大きな間違いである事を知る。
七年前に未練を残して別れた女性とやっと再会したのに、すぐに元の関係に戻ろうと思わないという事は、それはすなわち、もうアキオの中では、その恋は既に終わっているという事実の証明でもある事に気が付いたからだ。
これから暫く会えないのであれば、普通ならば焦ってでも彼女との関係を取り戻そうと足掻くはずであり、それをしないで昔話に華を咲かせているという部分が、これは既に終わっている関係であると、アキオの真相心理が考えている事の証拠でもあった。
「どうしたの？　アキオ君」
だが、アキオはまだそれを認めたくなかった。

別れ際のあの光景を考えても、それは絶対に無いと、レイチェルに未練が無いなどという事は絶対にありえないと考えていたからだ。

「いや、何でもない……」

「ねえ、アキオ君」

一方、明日にここを離れる予定のレイチェルとしては、ここでケリを着けておきたかった。

アキオに軍を辞めて貰う事か、最低でも自分との関係が戻ったと、アキオとレイチェルがお互いがそう思う事。

これこそが、彼女がここに来た一番の理由であった。

レイチェルは、覚悟を決めてアキオに話しかける。

「アキオ君。軍を辞めて、私のマネージャーにならない？」

「俺がか？　でも、マネージャーなら……」

レイチェルには、ここに同行しているピスタチオという名の中年女性のマネージャーがいる。

昔は大層な美人であったであろう事が予想される彼女は、実は昔はかなり有名なアイドルであったらしい。

だが、アイドルの寿命など短いものだ。

そこで、彼女は早めに芸能人としては見切りを付けてマネージャー業を始め、過去の自分の経験も生かして大成功を収めていた。

大型新人女優であるレイチェルに付いているという時点で、彼女は周囲からは有能なマネージャーだと思われていた。

「あんなに有能なマネージャーの代わりに俺か？」

「名目上だけよ。アキオ君が軍人を辞めて、私に会える口実になればいいの。それに、アキオ君だって、他に仕事があるじゃないの」

今は、かなり人任せにしていたが、アキオには会社の経営という仕事もあるので、別に無理をして軍に戻る事はない。

レイチェルは、そう考えていた。

いくら人の死が見え難い艦隊間の決戦とはいえ、先の敵強奪船団との戦いではクレッシェンドの指揮する護衛艦隊では数十名の犠牲者が出ている。

心理的影響を考えて、この死はムーン・エンジェル隊には見せないようになっていたが、どう繕ってもここは軍で、敵は指揮官以外は無人艦隊だとしても、皇国軍の艦隊は戦って被害を受ければ人が死ぬし、その中にアキオが入る可能性がないとは絶対に言えなかった。

だからこそ、強引にでもアキオを軍から切り離したいと願うレイチェルであった。

「この七年間、私はアキオ君のために何も出来なかった。今も何も出来ないかもしれない。でも、私が悪人になる事で、アキオ君がここを抜け出せるなら、それで構わないから」

レイチェルは、そのままでは優しいアキオが、あのミルフィーユ以下ムーン・エンジェル隊の仲間達を捨てて軍を辞められるとは思っていなかった。

なので、自分が悪人になる事で、有名人である特権を利用してアキオを名目上だけでもマネージャーにして引っ張ってしまえばと考えていたのだ。

いくら有能でも、あの七年前の心の底から申し訳なさそうに自分に『ゴメン』としか言えなかったアキオが軍人を続けていたら、そ

の内に彼は壊れてしまうかもしれない。
ただ、それだけが心配なレイチェルであった。

『その前に！　自分が彼女達に嫌われても！』

そのように考えた、レイチェルなりの覚悟の表れでもあった。

「（アキオさんが、軍を辞める！）」

「（そんな……）」

当然、影から二人の様子を観察していたミントとちとせは、大きなショックを受けていた。
それと、レイチェルがまだ本気でアキオとの復縁を望んでいる事もだ。

「レイチェルさん！　幾らなんでも！」

「強引過ぎですわ！」

さすがに我慢が出来なかった二人は、そのまま二人の元に飛び出そうとするが、それを邪魔するかのように艦内に緊急警報のブザーが流れ始める。

「敵か！」

習慣とは恐ろしい物で、警報を聞いたアキオはすぐに意識を目の前のレイチェルから、まだ見ぬ敵の方に向け始める。
アキオは、さして軍人である自分が好きでもない癖にその染み付いてしまった習性に、我ながら度し難いと思いつつもレイチェルに

声をかけていた。

「アキオ君！」

「話は後で聞くよ。ミント！　ちとせ！」

「「はいっ！」」

三人は、初めての敵襲に呆然としてしまっているレイチェルを放置して、アキオはブリッジへ、ミントとちとせは格納庫へと駆け足で移動を開始する。

可哀想だとは思ったが、軍人がここでボーっとしていたら助かる命も助からないので仕方が無かったのだ。

「ミント！　ちとせ！　遅いわよ！」

格納庫に到着したミントとちとせにランファが文句を言っていたが、実は彼女自体もフォルテやヴァニラよりは到着が遅く、しかも珍しく息を切らせていた。

彼女がどこにいたのか、二人はすぐに気が付いていたが、それは言わぬが華だと考えて、急いで紋章機に搭乗してタクトの発進命令を待つ。

「すまんな、タクト」

「珍しいな。何か、立て込んでいたのか？」

「まあな……」

少し遅れてブリッジに到着したアキオに、タクトはいつもの態度

で質問をして、特に彼を咎めるような事はしなかった。

「また火器のコントロール頼むよ」

「了解！　おや？　レスター君の説教は？」

「そもそも、お前は物資の管理以外では無任所だからな」

レスターとアキオは話をしながらも、手は素早く動かして敵艦隊を迎撃する準備を整えていた。

「アルモ、敵艦隊の数はわかるか？」

「巡洋艦クラスが八隻、駆逐艦クラスが十六隻です！」

「多いな……」

どうやら、噂の強奪艦隊の所属すると思われる敵艦隊は、強力な装甲と火力を持つ戦艦クラスの船はいなかったが、その数は驚異的とも言えた。

「おーーーい、兄貴」

「戦闘中だ！　このバカ者！」

タクトは、エルシオールの護衛として残されている護衛艦隊を率いるクレッシェンドとの通信を繋いでいた。

彼は、今回のレイチェルの件でミントとちとせの怒りを買って、彼女達の書類を代わりにやらされていたのだが、それが終わって、たまたま護衛艦隊旗艦のヒヨウに戻った時に敵艦隊の襲来を受けて

いて、おかげで素早く防戦態勢を取る事に成功していた。

だが、船の数で言えば敵は三倍の隻数であり、いくら紋章機があるとはいえ、苦戦は免れないはずであった。

「それで、その護衛艦隊での勝算は？」

「あるわけないだろう」

エルシオールの代わりに紋章機を運用するために改良された、他に艦載機すら積んでいない改装軽空母一隻と旧式巡洋艦二隻と駆逐艦四隻。

これで、合計二十四隻の敵と戦って勝つのは非常に難しくはあった。

自分の身を守るのが精一杯で、それすら紋章機が無ければ色々と難しい状態になる所であったであろう。

「マイヤーズ司令、本当に艦載機はゼロなんですか？」

「正式には六機ほど残っているよ。ただ、パイロットがいない」

護衛艦隊旗艦として紋章機を運用するために、急いで改装されたヒヨウには、実は六機のシムス高速戦闘機とその武器弾薬と補修用の部品が積まれてはいた。

紋章機を運用可能にする突貫改修の時に、撤去する時間すら惜しいという理由でそのままにされていたのだ。

だが、それを操作するパイロットは一人も存在しなかった。

士官学校では、実技の一環として様々な兵器の操作実習が存在していたが、それはあくまでも、戦闘機部隊を指揮するためにその特性を理解するための物であり、ここにいる士官達がシムス高速戦闘

機で出撃しても、碌に戦果すら挙げずに戦死する可能性が高かった。
動かせるのと、戦えるのは全くの別物であり、それはアキオと言えど同じ事であった。

特に、戦闘機と大型艦船の操縦には、本人の才能と一定時間の訓練期間が必要であった。

「飛ばせますよね？」

「レイトン。お前が乗るのか？」

「まさか」

以前に、岩塊の多い惑星上で小型戦闘艇という名の戦闘機に似た機体に乗っていた事のあるアキオであったが、それは操作系統がシムス高速戦闘機とは違っていたし、そもそもブランクが長過ぎて無理をするわけにもいかなかった。

パイロットは、適正と定期的な訓練によってのみ現役である事を許され、遇される存在であったからだ。
特に空母艦載機のパイロット達は、かならず所定の離発着訓練を受ける事になっている。
勿論、全自動の離発着装置はどの空母にも装備されていたが、そんな物を使わないと空母に着艦できないような奴が空母艦載機乗りに任命される事は、トランスバール皇国軍では絶対にあり得なかった。

「無人で飛ばせば良いじゃないですか」

「お前なら言うと思ったが、シムス高速戦闘機は意外と高いんだぞ」

前戦役では、エオニア軍側のヘル・ハウンド隊も運用していた事のあるシムス高速戦闘機は、紋章機やらダークエンジェルの登場で陳腐化したイメージがあったが、元々特殊な新型試作機であるそれらと比べること自体がおかしいのであり、いまだにパイロット達は厳しい選抜を潜り抜けてきたエリート達であり、シムス高速戦闘機自体も、なかなかに製造コストと維持費の高い新鋭機であった。

それに、今のトランスバール皇国はエオニア戦役終了後に戦時状態を解除されたままである。

通常時に軍人が装備品の破損・損失を行うと、後で上官にお小言を言われたり始末書を書かなければいけないだけなく、下手をすると国家財産の損失に関わったとして処罰の対象にもなりかねなかった。

「始末書くらい、生きていればいくらでも書けますよ」

「俺の始末書は、もう決まっているのかよ……」

「減給だと、恨まれると思うでしょうからね。ウォッカ大将は」

いくらクレッシェンドが貴族家の跡取りでも、彼はまだ給料だけで生活している身であり、アキオの言う通りに減給という事態は避けたかった。

休日に、女性をデートに誘う事が出来なくなるからだ。

「言えてるな。よし！　空いている艦載機に弾薬を満タンに装備しろ！」

決断をしたクレッシェンドは、すぐさま指揮下の艦隊で輪形陣を

作ってその中心にエルシオールを配置し、その隣に位置したヒヨウの格納庫では、パイロットのいないシムス高速戦闘機に、大量の弾薬とエネルギーを装着する作業が行われていた。

敵艦にぶつけた際に、誘爆による被害の増大を狙うためであった。

そしてその間に、エルシオール以下の艦が損傷した際に修理を行うために近くにいるハーベスターを除く四機の紋章機は、エルシオールを目指して突進して来る敵艦隊に攻撃を開始していた。

まるでシャワーのような防衛用の火器と、エルシオール以下の艦を狙う対艦ビーム方が漆黒の宇宙空間に濃密な光を放つが、さすがに紋章機には命中していなかった。

だが、大きさの違う各艦艇には既に被弾をしている艦も存在していた。

「まだ距離が遠いからな。フィールドで十分に持つさ」

それでも、自分の乗っている船にビームが命中して、フィールドと反発して眩い光と振動を放つ光景はいつになっても慣れない物だとタクト達も、クレッシェンドも感じていた。

「艦載機をカタパルトに載せろ！」

クレッシェンドは、六機のシムス高速戦闘機を次々と無人のままでカタパルトから打ち出す。

パイロットが不在で自動操縦なので、あまり精密な行動は不可能であったが、六機のシムス高速戦闘機は、一番近くにいる敵駆逐艦に向けて飛行を開始する。

途中、三機が敵艦隊の砲火を浴びて脱落するが、一隻の敵駆逐艦に二機が、もう一隻の敵駆逐艦にも一機が突入して、前者は爆発の後に撃沈し、後者もダメージを喰らって砲火が弱くなった所をフォルテからの止めの一撃を喰らって撃沈していた。

無人の戦闘機六機で二隻の駆逐艦を沈めたので、これは上出来と考えられる戦果であった。

「さすがですね」

「命は惜しいが、始末書は面倒だな」

無人のシムス高速戦闘機を打ち出したヒヨウは、そのままクレッシェンドの命令でエルシオールの前方に艦を移動させ、そのまま全ての火器を前方に向けて撃ち始める。

だが、たかが軽空母でしかないヒヨウに、大した火器など搭載されているわけでもなく、エルシオール代わりに次々と敵艦隊からの砲撃を受けて、その防御フィールドからビリビリと衝撃音や振動が伝わって来るように感じるタクト達であった。

実際には、宇宙空間の出来事なので、発光現象のみであったが。

「兄貴、親父やお袋には、兄貴は勇敢に戦って死んだって伝えておくよ」

「バーーーカ！　お前はオヤジに、『数年顔を見せるな！』って言われているじゃないか！　この不肖の三男坊が！」

実の父親であるマイヤーズ伯爵に勘当扱いされているタクトの毒

舌に、クレッシェンドは同じ毒舌で返していた。

「ヒヨウも、高いんだけっけ？」

「これも、元は優秀高速輸送船だったからなぁ……。しょうがないな。総員退艦準備！」

既に艦載機を全て打ち出し、碌な対艦装備を持っていないヒヨウでは、この戦場のどこに置いても沈んでしまうだけ。

そう考えたクレッシェンドは、まだヒヨウの足が生きている内に、これも敵艦にぶつけてしまおうと考えていて、タクトもそれに気が付いて上のような会話になっていた。

一見仲が悪そうに見えるこの兄弟であったが、意外と顔を合わせるとお互いの事はそれとなく理解しているようであったし、良く似ている部分もあるらしい。

戦闘指揮を執りながら、アキオもレスターも同じような事を考えていた。

「脱出用のシャトルに当たってくれるなよ……」

ヒヨウの乗員達は、護衛艦隊の司令部要員だけは軽巡洋艦オオイに、残りのメンバーはエルシオールへと移動していた。

特に、紋章機の整備を担当していた整備兵達は、エルシオールに移動した方が、後の補給や修理で役に立つはずであった。

「何でも剥いで敵にぶつけて、まるでタケノコ艦隊だな」

「言い得て妙だな」

クレッシェンドの意見にタクトが頷き、フィールドを全開に張ったヒヨウは、無人のままクレッシェンド達の無線操縦で敵艦隊へと前進を始める。

途中、ヒヨウは多くの敵艦からの砲撃を受けるが、その代わりに紋章機への攻撃が薄まり、その反撃を喰らって数隻の駆逐艦が爆発する。

ヒヨウは、被害担当兼囮として役に立っていた。

「出来れば巡洋艦だな……。フォルテ！」

「あいよ！」

「ランファ！」

「任せてくださいよ！　フォルテさん！」

フォルテは、一隻の敵巡洋艦に攻撃を集中してその足を止める事に成功し、ランファもヒヨウに進路上にいた敵駆逐艦にアンカークローを撃ち込んで見事沈める事に成功していた。

こうして進路をクリアーしたヒヨウは、既にシールドが限界を迎えて各所から炎や小爆発を噴き出していたが、どうにか沈む前に機関部に損傷を受けていた敵巡洋艦に突入して、共に大爆発を起こして沈んでいた。

更に、敵巡洋艦の両脇にいた敵駆逐艦にも損傷を与え、この二隻はフォルテとランファによって止めを刺される。

「ようやく、三分の一だね」

随分と金と戦力の犠牲の多い作戦を実行して、ようやく敵無人艦隊の約三分の一の戦力を無力化する事に成功していたエルシオールと護衛艦隊であったが、戦況はまだ予断を許さない部分があった。

「あと半日しないと、味方の増援が来ないからな」

クレッシェンドの言う通りで、何とか味方増援が来るまで生き残らなければいけなかったのだが、実は戦力比以外にもエルシオールは問題を抱えていたのだ。

「シャープシューターとトリックマスターの動きが鈍いですね」

「おいっ！　タクト！」

この戦いが始まってから、どうもミントとちとせの動きが鈍く、ムーン・エンジェル隊の実力は普段の半分ほどしか出ておらず、この戦力比を考えると、クレッシェンドとしてはその責任者であるタクトに文句の一つも言いたくなっていたのだ。

「いやーーー、原因は何となくわかっているんだけどね……」

タクトの視線は、緊急でエルシオールの火器コントロールを行っているアキオの方に向いていた。

あのアキオの昔の恋人だと噂されるレイチェルが、まだ彼に未練があって危険な軍人を辞めて欲しいと願っている。

この事実を知ったミントとちとせは、無意識に悩んでいたのだ。

彼に軍人を辞めて欲しくないと言うのは、とても簡単な事であった。

だが、実際にレイチェルの言う通りに、アキオが軍人をやっていた事で大きく傷付いた面があるのも事実であった。

ならば、アキオの自由にさせるべきで、もし彼が軍を辞める事を選んだら?

そんな事を考えていて、二人がまともな戦力になるはずは無かった。

「タクト!」

「こういう問題はさ。微妙に個人同士の問題でさ……」

「ええ、そうね。マイヤーズ司令」

「「「「なっ!」」」」

突如、エルシオールのブリッジに姿を現したレイチェルに、タクト達はただ驚くだけであった。

「あの……。レイチェルさん?」

「私は、昔のアキオ君を良く知っているもの!」

レイチェルは、タクトの発言に取り付く島もなく、過去の学生時代のアキオの事を話し始める。

母一人子一人で、顔も母親似であったアキオは、子供頃は良く近所の子供に『女顔』だと言われてからかわれる事が多かった。

苛めとかは無かったが、それでもジュニアハイスクールの一年生が終わる頃までは、アキオは良く女の子に間違われる事が多く、それでも基本的に喧嘩の嫌いなアキオは、それで自分をからかう先輩や同級生に喰ってかかる事もなかった。

「アキオ君は、本当は軍人になんて向いていないのよ！」

レイチェルの叫び声が、エルシオールのブリッジ内に響き渡る。

彼女からすれば、アキオが軍にいて実戦を行っている事自体が信じられないというか認められないのであろうと、タクトは考えていた。

「ミス・ソワレ。悪いが戦闘中だ」

レスターは、珍しく静かにレイチェルの話を聞いていたが、それが今の戦闘に役に立たないどころか、逆ニア害悪だと感じてそのまま彼女に退室を促す。

軍人ではない彼女に、戦闘中にこの場に居られると迷惑であったからだ。

しかも、自分達が有利ならいざ知らず、戦況は決して良いとは言えず、余計にここに居て欲しくはなかった。

更に言えば、このブリッジ内でのやり取りは、紋章機の通信機にも繋がっている。

そうでなくとも、あまり動きの良く無いミントやちとせが、彼女の声を聞いて余計に動けなくなる可能性もあったからだ。

「へえ、レスターも気が付いていたんだ」

「お前は、俺を普段どういう風に思っているんだ……」

「軍機という事で」

「大方の予想はつくがな！」

タクトは、レスターが他人の男女の機微に気が付いている事に驚

きの声をあげ、それにレスターはかなり傷付いていた。

「とにかくだ。今が戦闘中である事は理解して欲しいものだな。ミス・ソワレ」

レスターは、更にレイチェルに退室を促すが、その際にレイチェルのせいでミントやちとせが不調にある事を決して言わなかった。

紋章機の性能がパイロットのテンションで左右する事は、これは皇国軍においては最大の秘密であったからだ。

対外的には、紋章機は未知のロストテクノロジーがふんだんに使用された最新鋭機という事になっていたからだ。

「アキオ君！　あなたは、本当にこのまま軍人を続けたいの！」

レイチェルは、今度は自分に背中を向けて懸命にエルシオールの火器コントロールを静かに行っているアキオ本人へと問いかける。

彼女の昔の思い出では、アキオは決して争い事など好きな人間では無かったからだ。

だからこそ、今のエルシオールの火器管制用のコンソールにしがみ付いて少しでも精密な砲撃を行おうとするアキオの姿が信じられないでいた。

「レイチェル、今は戦闘中だ。後にしてくれ」

たったその一言だけであった。

アキオは、レイチェルに背中を向けたまま、ただ黙々と懸命にエルシオールの火器コントロールを続けていた。

「アキオ君……」

レイチェルは、そのアキオの冷たく感じる一言だけでその場に無言のままで動けなくなってしまう。
やっと七年ぶりに会えた元恋人が、完全に異質な、昔とはまるで違う人間になってしまったような感覚を覚えたからだ。

「ミント、ちとせ。俺はエルシオールを降りないし、軍人も辞めない。でなければ、最初から軍に復帰なんてしないからな」

「「アキオさん……」」

戦闘中ではあったが、ミントとちとせはアキオの答えに安堵し、そのまま一気に自分の担当するエリアの敵艦に向かって突撃を開始する。
敵艦隊は二機の紋章機にも砲撃を集中させるが、突如予想外の方向からトリックマスターのフライヤーからの攻撃を受けて、威力のある火器から沈黙させられて行き、最後はシャープシューターのレールガンで止めを刺されていた。

事前に打ち合わせなどしていないのに、二人は見事な連携を見せていた。

「さっきまでの不調は、目を瞑ってあげるよ」

フォルテは、口ではそう言っていたが、実際には二人のその見事な連携攻撃に感心をしていた。

「申し訳ございませんでした」

「遅れは必ず挽回します！」

二人の復調により、フォルテ達の攻撃が纏まった連携のある物へと変化していき、戦況は少しずつ戦力を減らしていた無人艦隊の方が不利になっていく。

そしてその様子を、敵無人艦隊の一番後方にある巡洋艦の中から、ネフューリアが冷静に観察していた。

「やはり、この程度の戦力ではどうにもならないか……。まあ、ムーン・エンジェル隊の戦力分析が進んだだけでも良しとするか……」

ネフューリアは、前方にいるエルシオールに特に未練を感じるでなく、全く躊躇う事なく撤退を開始する。

損傷の酷い艦艇を殿に集め、それをフォルテ達が撃破している間に、他の損傷の少ない艦艇の全てを逃がす事に成功していた。

いくら相手の力を見るためとはいえ、ネフューリアはわざわざ無人艦隊を全滅するまで戦場に置くような真似はしなかった。

全ての無人艦隊を使い潰しても、紋章機の一機でも落とせる保障も無かったので、再利用可能な艦はすぐに引き揚げる事にしたのだ。

結果、無人艦隊の損害は、全艦隊の半数程度で済んでいた。

「やはり、やるみたいね。さすがは、エオニアを討った連中と言うべきか。目立つ事はあの愚か者に任せて、私はやはりあの計画の遂行に労力を割くべきね……」

撤退の途上で、ネフューリアは誰に語るでなく、一人艦内で呟くのであった。

「みんな、ご苦労様」

敵無人艦隊の撤退後、タクトはアキオを伴ってエルシオールの格納庫でフォルテ達を出迎えていた。

「タクト、俺もなのか？」

「レイトンがいないと、話にならないじゃないか」

タクトは、自分がムーン・エンジェル隊の指揮官として、フォルテ達に信用されている事は理解していたが、ミントとちとせはアキオに対してそれ以上の感情を抱いている。

ならば、彼女達が安定して紋章機を運用できるように、自分の同期の友人を利用するくらいの事は、さり気なく行える器量は持ち合わせていた。

アキオを引っ張り出して、それでミントとちとせの機嫌が良くなって、自分は上司として支持を受ける。

利用しているようで悪いと思ったが、それも指揮官としての仕事だと思って割り切るタクトであった。

「ミント、ちとせ。ご苦労様」

それでも、アキオは彼の思惑に乗って一番最初に二人に声をかけていた。

それに、アキオも朴念仁ではない。

かも知れないが、そうで無いと思いたいし、二人に確実に友情以上の感情は抱いている事には気が付いている。

それが本当の恋愛感情になって、誰にその気持ちが向けられるの

かはまだわからなかったが、少なくともレイチェルよりは二人の方が上であるとは思っていた。

それと、気恥ずかしくて絶対に公言は出来なかったが、二人の後にそれとなくランファにも声をかけ、彼女も妙に素っ気無い振りをしつつも、それに答えていた。

「ミントとちとせを、泣かせるんじゃないわよ」

ランファは、二人の姉貴分的立場から、今回の件で二人の感情を惑わせたアキオに文句を言っていた。

「その部分は反省する。だが、俺は今のところは軍を辞めるつもりはないぞ」

「世間的に見ると、こんなに不自然な事はないけど」

ランファが指摘するまでもなく、アキオが無理に軍に居続ける理由は特に存在していないように感じた。

軍の給料などよりも、会社の経営に全力を傾けた方が遙かに高収入であろうし、危険も全く存在しないからだ。

特にアキオは、士官学校卒業から数年間、軍という組織に裏切られ、その命運を翻弄されて来た。

レイチェルでなくても、『軍を辞めた方が……』という意見を持つ人間も多いはずであった。

「それでも、俺は軍に残るさ。ただし、ここに居る連中と一緒にいられないのなら、とっとと辞めるけどな」

それが、アキオの答えであった。
別に好きでもない、もしかすると嫌いな軍という組織にアキオが残る理由。
それは、生きる目的を失った自分を救ってくれた人達に対する恩返しと、ただそこに居ると楽しいからという理由だけであり、特別難しい事など無かったのだ。

だから、アキオはウォッカ大将、ルフト宰相、ウォルコット大将、タクト、レスター、ミルフィーユ達ムーン・エンジェル隊のメンバーや、エルシオールのクルー以外のために動く事はしない。

これがアキオの結論であり、そのアキオの決意を格納庫の入り口で耳に入れている人物がいた。

「そう……。それが、アキオ君の答えなのね……」

「もう少し話がある。さっきに言った通りにだ」

「わかったわ……」

そこには、アキオが軍を辞める事を何よりも願っていたレイチェルが立っていた。

「あの、お茶とお菓子です」

「ありがとう、ミルフィーちゃん」

アキオはタクト達と別れると、レイチェルと話をすべく、そのまま彼女を連れて従業員以外誰もいないティールームの一番端の席に座る。

そして、戦闘中も食事の準備に没頭していたミルフィーユは、その際にオマケで作っていたオヤツを、これから真剣な話をする二人に、いつものようにニコニコとしながら配っていた。

「悪いな。ミルフィー」

「いえ、では、失礼します」

何となく大切な話をするのだと感じたミルフィーユは、二人の座っている席から距離を離し、ついでにティールームの入り口で聞き耳を立てているタクトを非難する。

「タクトさん、駄目ですよ」

「わかってはいるんだけどなぁ……」

タクトの後方にはフォルテ達もいて、彼女達も、特にミントやちとせは、アキオとレイチェルが何を話すのかが気になって仕方が無いようであった。

そして、その間にも二人の話は続いていた。

「あべ川餅か……。アキオ君、好きだものね」

「覚えていたのか」

「だって、作ってあげた事があったじゃない」

「きな粉に砂糖が入って無かったな」

「あまり、料理が得意なジュニアハイスクール生なんていないわよ」

レイチェルは、昔の事を思い出していた。

アキオと同じ学校に通い、まだ彼の母親が元気で、近所同士で毎日一緒に学校に行く二人は、周囲からは完全に付き合っていると噂されていて、それに二人は違和感を感じていなかった。

それに、当時のレイチェルは、アキオが軍人になるのを止めさせようともしなかった。

彼女の当時の常識では、軍人の仕事は訓練と災害救助くらいだと考えていて、まさかアキオがあれほどの危険な目に遭うとは考えられなかったからだ。

だが、彼の母親が急病になって、さして長くもない療養生活の後に亡くなってから状況は大きく変わっていた。

アキオが自分の父親の存在を知り、今までの安寧な生活が送れない事を悟って、レイチェルの存在が大切であるからこそ、卒業式の後に彼女に別れを告げて距離を置き、その関係をわざと疎遠にしていたのだ。

当時のシードル公爵の権力を考えると、とても彼女と一緒にいられるとは考えられなかったアキオであったからだ。

「アキオ君は、物凄く変わったような気がする」

「俺も、そうは思うよ」

良くも悪くも、七年もの月日が経っていた。
他の人を巻き込まないようにわざと人と距離を置いて、士官学校時代には一人も友人すらいなかったアキオであったが、彼は卒業後もその芝居を続けていて、しかも、『自分の父親よりも、絶対に長生きをする！』と誓ったその時から、彼は全ての人達と表層的にしか付き合わなくなり、ジュニアハイスクールの頃に感じていた、あの女性に恋をするという感情すら忘れていたのだ。

「レイチェルが、俺を心配して軍を辞めさせようとしている事は理解できる。でも、今の俺はそれを受け入れないよ。『受け入れられない』じゃ無いんだ。『受け入れたくない』んだ」

確かに出世は早かったが、碌な思い出も無い軍ではあった。
何度も死にかけたし、逆に人を殺した事もあるし、その数は両手両足の指の数では利かないであろう。

それでも、今の自分はその部分を合わせての自分で、その経験があってこその、タクトやレスター、それにミルフィーユ達との出会いであり、ようやく自分の居たい場所を見つけたとも言えた。

そして、もう一つ気が付いた事がある。
今のアキオとレイチェルの関係は、やはりただ昔の美しき良き想い出に変化していたという事であった。

レイチェルと昔の事を交えながら話すのはとても楽しく、アキオは昔の自分を思い出し、それに戻ったようであったが、それはアキオ自身の大きな錯覚であった。
所詮、想い出は想い出で、今のアキオと七年前のアキオはまるで違う人間であり、七年前のアキオはレイチェルの事を愛していたが、

今のアキオはレイチェルを愛していない。

これが、三日間をかけてアキオが辿り着いた答えであった。

「今の俺は、七年前の俺とは違う。この七年で俺は変わったんだ。それが良いか悪いか？　周囲の人達の評価は知らないが、俺は良かったと思っている」

あの辛い孤独な七年を乗り越えたからこそ、アキオは良き上司・同僚・部下と出会い、親友と呼べる人達とも出会う事が出来た。

それと、自分が生涯を共にしようと考える女性の存在もだ。

まだ、それが誰なのか判断に迷う部分が、あまりアキオらしくはなかったが、これだけは断言が出来た。

その候補の中に、レイチェルがいない事である。

「それは、危険な軍を辞めないくらいの大切な物なのね」

「ああ……」

少なくとも、今のアキオにこの場を離れてレイチェルと一緒に行くという選択肢は無かった。

やはり、軍などあまり好きでは無いのだが、エルシオールに残る事だけは譲れない。

アキオは、その決意をレイチェルに伝える。

「私、余計な事をしたのね……」

レイチェルは、アキオを迎えに行こうと、軍の上層部にその人気を利用して『一日ムーン・エンジェル隊』にするように働きかけ、その結果、強引にエルシオール来訪をもぎ取っていた。

軍上層部は、多忙で、噂では軍関係の仕事を避ける傾向にある彼女が、自分から仕事を引き受ける旨を聞いて歓喜し、計画を変更してでも彼女の要望に答えていたが、レイチェルは、その際に面会した一人の老人が一瞬だけ見せた、挑発的な表情を覚えている。

思えば彼は、『出来るものならやってみるんだな』と思っていたのであろう。

あのエルシオールに完全に溶け込んだアキオをあそこから引き剥がす事など、軍のお偉いさんでも不可能な事であり、アキオはそれが気に入らなければ簡単に軍など辞めてしまうのだと。

それに、多分自分の経歴や事情などは、既に向こうにはお見通しであったという事にだ。

「結局、私は、アキオ君をずっと十五歳の頃のままで見ていたのね。でも、アキオ君はそれを受け入れられなかった」

それと、レイチェルは、過去の前線に居た頃のアキオを無意識にマイナスの感情で見ている節があった。

これは、普通の民間人であれば良くある事であったが、アキオからすれば、いくら悲惨な経験もあるとはいえ、この七年間の全てを否定されるのは、感情的にも気分が良くなかった。

だが、タクト達やムーン・エンジェル隊の面々は違う。

彼ら彼女らは、アキオのそういう過去の部分をほぼ把握していて、その部分を含めてアキオを自分達の仲間だと認めている。

特にタクトは、アキオとレスターが、自分が自由気ままに明るくムーン・エンジェル隊を運営するのに大きく力を貸している事に誰よりも感謝もしている。

レイチェルは、過去に悲惨な経験をしたアキオを可哀想だと感じて、とにかくそこから強引に引き剥がそうとした。

タクト達は、その過去の悲惨な経験も含めて、アキオを得難い友人で、大切な仲間で、人によっては愛する男性であると認めている。

その差が、レイチェルがアキオに拒絶された最大の理由であるのかもしれなかったが、以上の理由から、既に自分の居場所を見つけたアキオは、昔の居場所であったレイチェルの隣に戻るつもりはなかったのだ。

「俺も、最近だよ。今の自分を受け入れられるようになったのは……」

「そうなんだ」

「以前は、あの男より一秒でも長生きする事しか考えていなかったからな」

あの男とは、当然アキオの遺伝子上の父親である故シードル公爵の事であった。

「私、七年もアキオ君に何も手を貸さないで、急にヨリを戻そうとして。悪女なのかもしれないわ」

「いや、それは……」

あの、当時は巨大な権力と財力を持つ大貴族の横暴に、一介の女学生が対抗するなど、出来の悪い漫画やアニメではあるまいし、それは仕方の無い事ではあった。

レイチェルは、ただ自分の運の悪さを呪うしか無く、アキオもそう考えている節があった。

もし、ジュニアハイスクールの卒業後に二人で逃げるという選択肢を選んでいたら、二人で悲惨な最期を遂げる可能性が高かったであろうからだ。

それでも、二人で死んでいたら、本人達だけはそれで満足であったのかも知れないが、それはあくまでも仮定の話に過ぎず、今さら確かめようが無いのも事実であった。

「運命って残酷ね。まるで、ドラマみたい」

「そうだな。時に、人間の努力や行動の及ばない部分に、不確定要素はあるものさ。それが、神の領域なのかもしれない」

「難しい事を言うのね。昔は、駄菓子屋のクジで一等を引いただけで、大喜びしていたアキオ君が」

「男の子供なんて、そんなものだよ」

その後の二人は、『別れる』とか『付き合わない』とか、ムーン・エンジェル隊の面々が気にしそうな話題は一切出さずに、過去の思い出に時間を費やしていた。

『二人は、もう永遠に結ばれる事はない』

この事がわかった以上は、この話題を出してつまらない時間を過ごすよりは、明日のレイチェルの出発までに少しでも楽しかった過去の想い出に浸っていたい。

それが、別れを決意した二人に出来る唯一の事であった。

周囲からは、後ろ向きとか言われそうであったが、人は美しい想い出があるからこそ生きて行ける生き物でもあり、二人はこの限定された楽しい一時を一秒でも惜しむように過ごしていた。

「大人の男女ですわね」

「はい……」

そんなアキオとレイチェルの会話を秘かに伺うというか、ティールームの入り口で大人数で固まっているので、完全にバレバレであったタクト以下の面々であったが、ミントとちとせは、ヨリが戻らなかった二人が楽しそうに話をする場面を見て、まるで大人向けの恋愛ドラマのように絵になるものだと感心していた。

「そうだね。そこを否定されてしまうと辛いかもね……」

フォルテは、自分も孤児であり、皇国軍で対ゲリラ部隊に所属して人を殺して来た過去があった。

だが、彼女はそれを悔いないようにしている。

悔いる事は簡単だが、それをすると自分が殺してしまったゲリラや敵兵達に逆に失礼だと思っていたからだ。

そして、その過去も含めて自分であると感じていて、それをウォルコット大将などは何も言わずに無意識に認めてくれている。

勿論、ムーン・エンジェル隊の他のメンバーもだ。

だから、一般人視点で前線にいたアキオを否定して、彼を軍から引き剥がそうとするレイチェルは、アキオには到底容認できない女性なのであろう。

いくら、過去に付き合っていてもだ。

「私としては、アグネス・ソワレにスキャンダルが出なくて大歓迎ですよ」

ランファは、ただ自分の好きな女優に、身近に知っているアキオとの恋愛報道が出ないで済む事に喜んでいたが、フォルテは、内心ではアキオが居なくならなくて良かったとランファが感じている事に気が付いていた。

「美人なのに、勿体ないよな」

「ああ、お前ならそう言うと思った」

「というか、何でレスターがいるんだ？」

「レイトンがいないと、物資の管理をする人間がいなくなる。他の奴に任せると適当にやるからな。ただ、それだけだ」

いつの間にか、二人の様子を一緒に観察していたレスターにタクトがチャチャを入れるが、その中で唯一誰よりも寂しそうな顔をしている人物がいた。

それは、ミルフィーユであった。

「ミルフィー、どうしたんだい？」

ミルフィーユの様子に気が付いたフォルテが質問をすると、彼女は悲しそうな声で答える。

「あの二人、笑って楽しそうにしていますけど、心の中では泣いていると思うんです。私は、こんなに時間という物が残酷だとは思わなかったです」

「ミルフィー……」

七年という時間の経過。

原因はそれだけではなかったが、二人の関係は結局は元には戻らず、ミルフィーユの指摘によってタクト達の表情は暗くなってしまうが、それを無視するかのように、アキオとレイチェルの話はそれからも夕方まで続くのであった。

「はーーーっ！　やぁーーー！」

そして、その日の夜。

いつものように、トレーニングルームでサンドバックを叩いて汗を流しているランファであったが、急に背後に気配を感じて後ろを振り返ると、そこにはレイチェルが立っていた。

「レイチェルさん……」

「相変わらず、絵になるわね。アクション女優としてデビューしない？　うちのピスタチオなら、上手く売り出してくれるわよ」

「私なんて駄目ですよ。演技とか出来ませんし」

「おっと、そんな話じゃ無かったんだ」

その後、規定のトレーニングを終了させたランファとレイチェルは、ランファの部屋で話をする事にする。

「ドクダミ茶か。健康に良いのよね」

レイチェルは、以前にランファがアキオに出して不興だったドクダミ茶を何食わぬ顔で飲んでいた。

「それ、アキオに出したら文句を言われたんですよ」

「健康とか美容とか、若い男に人にはどうでも良い事だから、味を優先するのよね」

二人は、ドクダミ茶を啜りながら話を続ける。

「あの、これからお忙しいんですよね？」

「そうね。ドラマとか、テレビ番組のレギュラーとか、数年は過密スケジュールよ」

レイチェルの答えに、ランファは売れっ子女優に対する羨望の眼差しを彼女に向けていたが、レイチェルは一瞬だけランファが安堵したような表情をしたのを見逃さなかった。

「アキオ君に、チョッカイをかける時間が無くて良かった？」

レイチェルの突然の質問に、ランファのドクダミ茶を呑む手が止

まってしまう。

「私は、その……。というか、どうして私とアキオなんです。フォルテさんと言い、レイチェルさんと言い、勘違いも甚だしいですよ」

「何てね。冗談よ」

ランファの答えを聞いて、レイチェルは一つの結論に至っていた。

それは、ランファは自分がアキオの事を好きな事実に気が付いていないか、それを認めたくない部分があるのだと言う事に。

同僚であり、年下の後輩であるミントやちとせに対する遠慮なのか？

それとも、以前はあまり仲が良くなかったと聞いているので、そんなわけがないと深層心理で思っているのか？

もしくは、これもミルフィーユに聞いた事があるのだが、彼女の親友たるランファは所謂恋愛系のドラマなどが大好きで、普段から、『ドラマのような恋がしてみたい』と公言して憚らないらしい。

これは、自分の大ファンであった事実を考慮しても多分事実なのであろうが、どうやらランファは、アキオとの関係の変遷をドラマ的とは感じていないようであった。

嫌いから友人になり、次第に恋愛感情に芽生える。

レイチェルに言わせれば十分にドラマ的であったが、ランファはそうは感じていないという事なのであろう。

「アキオ君との関係は、ドラマ的じゃないのか」

「ミルフィーめ！　余計な事を話して！」

ランファは、自分の事を勝手にレイチェルに話したミルフィーユに一人怒っていた。

「あの娘って、本当に不思議な娘ね。食堂で話をしていると、結構スラスラと話をしちゃうのよ。自分の事も」

「ミルフィーは、天然ですから」

確かに、自分の事をレイチェルに話されてしまっても、既に腹も立っていないランファであった。

そういう点においては、ミルフィーユは不思議な娘であった。

「話を戻すけど、恋愛なんてみんなドラマ的だと思うのよ。成功しても、失敗してもね」

七年ぶりに出会った初恋の恋人と再会して、再び結ばれる。

よくよく考えれば、彼女が脚本を書いた『初恋の君』は、レイチェルの願望をそのまま物語にしただけの可能性が高かったが、実際には現実はドラマのようにはいかない。

でも、その失敗も他の人から見れば、ドラマのようなものかも知れなかった。

「世の中って、そうは上手く行かないものね。でも、そんな劇的な展開で面白いドラマよりも、私はつまらないドラマの方が良かったわ」

レイチェルの言う所のドラマとは、七年前にアキオと離れ離れにならず、そのまま一緒に同じハイスクールにでも通い、同じ学校の同級生達に、『レイトン夫妻の登場だ』などとからかわれるような、陳腐でベタで視聴率などまず取れないであろう、ＩＦの現実であっ

たのかもしれない。

それに気が付いたランファは、彼女に何も言う事が出来なかった。

「さてと、そろそろお暇するわね。明日は、朝も早いし」

ドクダミ茶を飲み干したレイチェルは、そのまま椅子から立ち上がると、続けてランファに一つのお願いをする。

「ランファさん、一回ビンタをさせてくれないかしら？」

「いきなり、どうしてです！」

「アキオ君を奪う、泥棒猫に対する一撃だから」

「それは、ミントかちとせにしてくださいよ！」

そもそもランファは、レイチェルがどうして自分がアキオと結ばれると思っているのかを理解できなかった。

フォルテにもそういう部分があるのだが、自分よりもアキオに直接に好意を向けている、ミントとちとせにこそ言うべき言葉であろうと思っていたからだ。

「何てね、冗談よ。それと、私があなたを警戒している理由は簡単よ。女の勘だから」

「それだけの事で……」

「でも、同じ女としてはあり得なくも無いと思わないかしら？　じゃあね、ランファさん。ご馳走様」

そう言い残すと、レイチェルはランファの部屋を出て行くのだが、その後姿を見たランファは、彼女の背中が泣いているような気がしてしまうのであった。

「マイヤーズ司令、三日間楽しかったです。ありがとうございました」

「いえいえ、美人さんなら、いつでも大歓迎……「タクトさん！」」

翌日の早朝、三日間の休日を終えたレイチェルは、迎えに来たシャトルでエルシオールを経とうとしていた。

見送りに着たタクトにレイチェルはお礼の言葉を述べるが、その際に余計な事を言ってミルフィーユに窘められるのは、彼のいつもの事であったので、他の誰もが何も言わないで放置していた。

レイチェルを除いてだ。

「ミルフィーちゃん、こういうマメな男性は意外とモテるから、油断しちゃ駄目よ」

「はい！」

「ミルフィーちゃんは、元気があって宜しい」

結局レイチェルは、アキオを軍から抜けさせる事には失敗してい

たが、唯一の収穫と言えばミルフィーユと会えた事かもしれなかった。
彼女は、どういうわけかミルフィーユを偉く気に入っていて、唯一連絡先を交換していたからだ。

なお、レイチェルは、アキオとは連絡先を交換していない。
既に結論が付いた関係であったからという事と、直接に連絡を取るのは辛いという理由からであり、だからこそ余計に間接的にアキオの様子を知る事が出来そうなミルフィーユの連絡先を交換した理由もあるのかも知れなかった。

「ミス・ソワレ、軍への協力に感謝いたします」

「私の願望もあったからですよ。それよりも、あのご老人に宜しく」

「アレは、煮ても焼いても喰えないクソジジイですからね」

「そんな事を言っても良いのですか？」

「気にも留めないでしょうな」

続いて、レイチェルとクレッシェンドは思わせぶりな会話をするのだが、レイチェルがアキオを口説けなかった事実に、あのウォッカ大将がどんな感想を述べるのか？
非常に気になる部分ではあったが、それは多分クレッシェンドにもわからない事であった。

何しろ、彼はトランスバール皇国軍の妖怪なのだから。

「これから、忙しそうだな」

「ええ、三年は過密スケジュール」

レイチェルは、他のエルシオールの面々とも挨拶を交わし、最後にアキオと話をする。

だが、アキオが口にしたのは仕事の話であった。

既にお互いに終わっていると思っている二人なので、これ以上は余計な会話は双方を傷付けるだけだと感じていたからだ。

「そうか……。また会えるといいな」

「そうね……」

「じゃあ、元気で」

「あなたもね」

二人は、お互いに手を差し出して握手をするのだが、その光景はまるでドラマのワンシーンのようであった。

レイチェルの出演した『初恋の君』では、主演の二人は結ばれるのだが、この二人は結ばれる事は無い。

前者もドラマであり、後者もドラマのようであり、タクト達はただ何も言えずに二人の様子を伺っていた。

あの究極の朴念仁であるレスターですらそうなのだから、それだけ二人の最後の別れは印象的であったのだ。

「（本当のこういうシーンでは、ほとんど言葉すら出ないんだな）」

普段はあまりドラマの類は見ないタクトも、そのなかなかお目に

かかれない光景に珍しく神妙な上々になってしまう。

「そろそろ、時間ですので」

レイチェルは、マネージャーであるピスタチオと一緒に迎えに来たシャトルに乗り込み、そのまま漆黒の宇宙へと発進する。

そして、そのシャトルの個室で女優とマネージャーは、二人きりで話を始める。

「次のスケジュールは？」

「ここから近い惑星レダで、ドラマの撮影が始まるわ。台本は見ているわね？」

「勿論よ」

「でも、見事にフラれたわね」

仕事の話だけかと思ったところに、余計な話を振って来たピスタチオにレイチェルはその表情を不機嫌なの物へと変える。

「余計なお世話よ。彼に女を見る目が無かったのよ。アキオ君は、若い十代の娘の方が良いのかしらね？」

レイチェルは、珍しく不機嫌そうに悪態を吐いていたが、ピスタチオにはそれは彼女が無理をしているようにしか見えなかった。

「あなたも、大概わかってないわね。男の仕事を否定しちゃ駄目なのよ」

「それは、あなたの人生経験上の教訓？」

「そうよ。それと、女って仕事と男の両方を掴める人は極少数。とりあえず、売れっ子女優になれた事に感謝しなさい」

ピスタチオは、二十歳も年齢が下のレイチェルに諭すように慰めの言葉をかけ、同時に人生の先輩としての優しさを見せる。

「レイチェル、惑星レダまで約二時間の移動時間なの。私は、ちょっと別室で雑務があるから」

「年の功かしら？　気が利くわね」

「あなたも、あと二十年もすると会得できるわよ。私と一緒で仕事では大成しても、恋愛運は無さそうだものね。レイチェルは」

「私は、三十歳までには結婚するわよ」

「そういう事にしておいてあげる」

ピスタチオは、そう言い残すとそのまま個室を出て行ってしまい、その場にはレイチェルだけが残された。

「アキオ君……、初恋は実らないか……。でも、私は……」

それから一時間ほど、シャトルの個室の中ではレイチェルの泣き声が響き渡っていた。

「はあ……」

一方、アキオの方もまるで精気が抜けたようであった。

『『アキオさん！』』

レイチェルと別れた後に、ミントとちとせは目に見えて落ち込んでいるアキオを自分達なりに慰めようとしたのだが、それを止めたのは実に意外な人物であった。

『こういう時は、そっと一人にしておいてあげるのが優しさだと思うがな』

レスターのその言葉に、タクトは正直に『似合わねぇ！』と叫んでレスターに拳骨を貰っていたが、続けて出た言葉がレスターらしかった。

『ミントも、ちとせも、今日は紋章機の調整の日じゃないか？』

先の戦闘で酷使した後に整備された紋章機の微調整をなるべく早めに行っておく。

これは、紋章機というロストテクノロジーによって稼動する最新鋭兵器のパイロットとしては、極当たり前の事であった。

『また、何か運に見放されているような』

『私も、同じ事を感じましたわ』

しょぼんとした二人が、整備班長であるクレーターに引きずられるように格納庫へと向かうのを確認したレスターは、同時に片手を挙げながらその場を離れるアキオの姿も確認する。

手を挙げているというのは、アキオなりのレスターへの感謝の気持ちであったのであろう。

その後アキオは、素早く物資の整理と管理の業務を部下達に命令すると、そのまま自動販売機でコーヒーを購入して、その琥珀色の水面をただ見つめながら考え事をしていた。

「俺って、残酷な男だよな」

七年前まではあれほど好きであった初恋の女性を、恋愛感情が無くなったからと言って完全にフったのだ。

これは、世間で言うところの最悪な男なのかもしれないとアキオは考え、買ったコーヒーにも口を付けないで一人溜息をついていた。

すると、そこにいつものように艦内をフラフラと歩き回っているタクトが現れる。

「よう、色男さん」

「何だ、タクトか」

「『何だ』は、酷いと思うけど……」

タクトは素っ気ない態度のアキオに少しだけ傷付いていた。

「慰めてくれるのか？」

「俺に、男を慰めるという選択肢は存在し難いからなぁ」

「少しくらい、オブラートに包めよ」

とは言いつつも、アキオはこれがタクト流の慰め方なのだと理解していた。

「ここでボーっとしてても何だから、何かストレス発散でもすれば？例えば、フォルテの所に銃でも撃ちに行くとか？」

タクトの意見に、『それも悪くないかな？』と考えるアキオであったが、それよりも、ふと別の考えに至るアキオであった。

「それも悪くないが、直接体を動かした方が良いかもな」

これ以上、ボーっとしていても仕方が無いと思ったアキオは、タクトをその場に残してトレーニングルームへと移動を開始する。

タクトを誘わなかったのは、どうせタクトがトレーニングに付き合うはずが無いと考えたからだ。

「まっ、ごゆっくり」

タクトは、その場で手を振ってアキオを送り出すが、その表情は、『してやったり！』と顔に書いてあるようであった。

だが、それにアキオが気が付くのは、更衣室で着替えてトレーニングルームに入った後の事であった。

なぜなら、そこではランファが一人でサンドバックを叩いていたからだ。

「してやられた！」

「あら、珍しい」

「ランファほどじゃないけど、たまにトレーニングには来ているんだよ」

「その程度のトレーニングだと、私には勝てないわよ」

思えば不思議な感覚ではあった。

今までは完全に落ち込んでいたのに、ランファがそこに居て、彼女にいつものように悪態を吐かれると、すぐにいつもの自分に戻れてしまうからだ。

多分こういう部分が、フォルテやエリオスの、自分とランファがお似合い的な発言に繋がるのであろうが、アキオ自身は本当にランファの事が好きなのか解りかねる部分があった。

だが、少なくともレイチェルと別れる前よりは、自分なりに真剣に自分の心に問うているつもりであった。

「別に、勝とうとは思っていない」

アキオの武術は、あくまでも軍用格闘技と今までの実戦経験をミックさせた、自分の身さえ守れれば十分なものであり、ランファのように正式に師匠の下で学んだものではなく、そもそもランファと

互角に戦おうとする事自体が間違いであったのだ。

「この前の借りもあるし、あんたの腑抜けた心と鈍った体を叩き直してあげる」

「そりゃあ、どうも……」

アキオは、なぜかランファとまた模擬格闘戦をする事になった自分を少しだけ呪い、ここに自分を送り込んだタクトも同じくらい呪ってから、準備運動などを終えてから試合場でランファと対峙する。

「まず勝てないな」

「男らしくないわね。覚悟しなさい」

アキオは、ランファとの模擬試合を開始するが、やはり彼女の攻撃を避けるのが精一杯であった。

前の勝負では、たまたま彼女の心の隙を突いただけで、本来の実力で彼女に勝てるはずが無かったのだ。

「相変わらず、避けるのは上手なのね！」

「始めから勝てない相手なんだ。攻撃を喰らわないように、回避に専念して何が悪い！」

「それで、私の隙を突くのね！」

「そうだ、突いて逃走を図るんだ！」

「逃げるの！　卑怯じゃないの！」

「潔く戦って倒されて潔いとか言われても、俺は嬉しくない！」

「そうやって、彼女からも逃げたの！」

「っ！」

突然のランファの一言に、アキオは回避と防御が間に合わずに、彼女の攻撃を喰らってその場に倒れこんでしまう。

だが、実はそれを口にしてしまったランファは、全く言うつもりが無かったにも関わらず、それを言ってしまった自分に後悔していた。

アキオとレイチェルの事情は、二人だけが関係者であり、それにランファが口を出すのは間違いであると感じたからだ。

それに、自分がアキオと同じ立場にいて、その恋人とヨリを戻す可能性が１００％とも言えず、ただレイチェルと復縁をしなかったアキオに対する同じ女性としての嫌悪感から出た発言かもしれなかった。

厄介な事に、心の奥底にそれに安心しているランファも実は存在していたのだが。

「アキオ……」

悪い事を言ったと思っているランファは、いまだに倒れたままのアキオに近付くのだが、今度はアキオが倒れれたままでランファに足払いをかけ、同じく不意を突かれた彼女もその隣に倒れてしまう。

突然の事に、受身をするのが精一杯なランファであった。

「アキオ！　あんたね！」

「勝負に卑怯もクソも無いよな。だけど……」

一度言葉尻を萎めたアキオであったが、すぐに言葉を繋ぎ始める。

「確かに、こんな事は十五歳の頃にはしなかったな。俺は、変わったんだ。大人になったのか、ズルくなったのか。そして、レイチェルへの気持ちも変わっていたんだ。理由は良くわからないけど、それに気が付いた俺は残酷な男なのかもな……」

アキオの独言にランファは何も言えないでいたが、懸命に自分なりにアキオに言うべき言葉を模索してから、それを口にする。

「でも、好きでも無いのに、好きと言う方が偽善よ。そんな気持ちで一緒にいようと考える方が残酷よ……」

「そうか……」

ランファは、自分の言葉でアキオが慰められたとは考えられなかったが、それでもアキオの顔色が少し明るくなったような気がしていた。

「俺はレイチェルと居るより、ここに残る事を選択したかったんだ」

「そう……」

ランファは、アキオの発言にドキドキとしていた。

事前にレイチェルに炊き付けられたという理由もあったが、アキ

オがエルシオールに居るのは、ここに彼の初恋の人であった人物よりも気になる人間が居るという事の証明でもあったからだ。

友情なのか、仲間意識なのか、それとも恋愛感情なのか？

気になって仕方が無くなって来たのは、ランファだけでなくてアキオも同じであった。

『自分は好きでここに居るのだが、では、何が好きでここに居るのか？』

色々と考えながら、完全に倒れた状態からアキオが上半身だけ起き上がると、同じく足払いを喰らった倒れたランファも上半身を起き上げていた。

そしてお互いに目を合わせてみると、アキオの脳裏に過去の出来事が思い出される。

思えば、ミントやちとせとは違って、何かと自分に喰ってかかって来る女であった。

フォルテはお互いを同じ位置にある、性を超越した親友同士なので好き勝手に言い合う仲であったし、ミルフィーユとヴァニラはどこか妹と思わせる少女達であった。

ミントとちとせは、自分に好意を抱いてくれている事は大分前から知っている。

どちらかと結婚でもすると、『結構楽しい人生なのでは？』と最近では考える事もたまにあった。

そして、最後のこのランファだ。

人の事をマザコン呼ばわりしたり、平気で怒鳴り付けて、時にはビンタをかましと、普通に考えれば付き合う可能性などまるで存在しない女であった。

男は良く母親と同じような女性に魅かれると言うが、ランファはまるで自分の死んだ母親とは違うタイプだ。

長期休暇を取っていたこの半年間、ミントやちとせとは定期的に連絡は取ったいたが、ランファは一度だけ『生きてるの？』とメールを送って来ただけであった。

一応、『生きてて悪いか！』と返事は出していたが。

何とも冷たい女であったが、どこか心に引っかかる女で、アキオも実は彼女の事を考える時間が多い。

大半は、あまり良い印象ではなかったが、『まあ、悪い奴じゃないんだよな』とも考えてしまうのだ。

「ねえ、もう一本勝負するの？　……、何よ？　急に黙って……」

ランファも、急に静かに冷静な表情で自分を見つめる、世間一般的にはイケメンなアキオにドキドキとしていた。

ミルフィー達は、アキオを優しくて完璧な男性だと思っているが、ランファに言わせれば、口は悪いし、フォルテと同じで酒に汚い部分があるし、最悪な事にマザコンで、欠点も沢山ある男性であった。

それでも、『悪い奴ではないのよね』とも思っていた。

そして暫く見つめ合っていた二人であったが、そこにまずアキオの方が爆弾を投下する。

「エリオスの奴が言っていたんだが……」

「何をよ？」

「ランファが、どうも俺の事が好きらしいと」

「はあ？　寝言言ってるんじゃないわよ！」

ランファは懸命に否定するが、それでも顔色は完全に真っ赤にであり、あまり説得力が無いと言えば無いランファであった。

「寝言か……」

アキオも、自分で変な事を言っておいて何だと思ったが、同時にそこまでランファに否定されて寂しい気持ちも同時に芽生えている事に気が付く。

確かに、エリオスの言う通りに自分がエルシオールから離れるのが嫌であった理由の一つにランファの存在もあったからだ。

「急に、プレイボーイにでも目覚めたの？　あんたは、表面上のスペックは最高なんだから、騒ぎになるから止めなさいよ」

もしアキオが、エルシオールで手当たり次第に女性を口説き始めたら、それだけで大きな騒ぎになってしまうので、それは止めるように言うランファであった。

「そんな事をするか！」

「ミントとちとせがいるんだから、彼女達の事を見てあげなさい！」

心の奥では引っかかるものがあったが、それでもランファは、二

人の友人兼年上の先輩として、純粋に二人の事は応援をしたかった。

「それとも、他に好きな人でもいるの？」

急にとんでもない事をランファに聞かれたアキオであったが、やはりその答えは完璧には出ておらず、それでも何も答えないと変に勘繰られると感じて、咄嗟にとんでもない回答をしてしまうアキオであった。

「実は、その事なんだが。俺は、ランファの事が好きなのかもな」

アキオからすると、先ほどのランファの言葉に対して性質の悪い冗談を返すくらいのつもりで言った言葉であったが、当のランファの方は、再び顔を真っ赤にさせながらその場に硬直したままになってしまう。

「なっ！　なっ！　何を言っているのよ！」

「そんなに驚く事か？」

「冗談にしては笑えないわよ！」

「これが、あながち冗談でも無くてな」

レイチェルとの事は終わっていると理性的に判断できるアキオは、『では、誰が好きなのか？』と同じく冷静に考えると、本当にそれが恋愛感情なのかは不明であったが、何かと印象に残るランファの事が一番に脳裏に浮かぶという事実に気が付いていた。

ならば、『好きなのかもしれない』は、別に間違ってはいないと思うアキオであった。

「えっ！　マジで？」

そして、二人の様子を実はトレーニングルームの入り口で秘かに覗いていた人物がいた。

このシチュエーションを作り出したタクトその人であったのだが、彼はすぐにその報いを受ける事となる。

「なあ、模擬戦の続きを……「私！　急用が出来たから！」」

こんな状況で冷静に再戦の要求をするアキオも、実はテンぱっていたのかもしれなかったが、急に『好きなのかもしれない』と言われたランファも同じであった。

彼女は、その場から逃げるようにしてトレーニングルームから出て行こうとするが、その入り口にいたタクトに今の精神状態で配慮など出来るはずもなく、タクトは一種の障害物として排除される事となる。

「タクト！　邪魔！」

「ちょっと、待て！　俺の実力じゃ！」

哀れ、タクトはトレーニングルームの外に出ようとしたランファの飛び蹴りを喰らって、その外の壁に叩き付けられて、その場でのびてしまう。

「タクト！　さっき聞いたアキオの発言は忘れるのよ！　わかった？」

そう叫びながら走り去って行くランファであったが、タクトには

それに反論する余裕も、追いかける余裕も存在しなかった。

「何で、俺が……」

「ある意味、自業自得だよな」

タクトの存在に気が付いたアキオは、自分達の様子を観察していた彼に厳しい言葉をぶつける。

「冷たいよなぁ、レイトンは。まあ、元気になって良かったけど。ところで、お前って突然サラリと凄い事を言うんだな」

「そうか？」

こうして、アキオの初恋の人であったレイチェルに関連した騒動は、ようやくに終了するのであった。

「何？　負けただと！」

「はい、相手の実力を測るのが目的だったものですから」

そしてまた同じ頃、エルシオールを襲撃したネフューリアは、無事に残存戦力を纏めて、暗礁宙域にあるレゾムが潜んでいるアジトまでの撤退に成功していた。

そこで彼女は、レゾムに先の戦いについての詳細を語るのだが、戦力を失った部下にレゾムは不機嫌な表情を隠そうともしなかった。

「無人艦とはいえ、苦労して集めた戦力だぞ！」

自分を怒鳴るレゾムを観察しながら、ネフューリアはつくづくこの目の前の男の器量の狭さにある意味感心していた。

自分の野望を成就する過程で使い潰す道具ではあったのだが、道具にしても歪で頑丈なだけが取り得の道具であると、改めて感じていたのだ。

「（あのレイトンなら、長時間使える道具となったであろうか？）多少の戦力は失いましたが、エルシオールの足を止める事には成功しました」

「足を止めるだと？」

「はい」

ネフューリアは、今回の惑星ロハス周辺宙域襲撃での一連の戦闘で、皇国軍に、自分達がエルシオールを脅威と感じて早期に無力化を謀ろうとしていると思わせる事に成功した事と、実際にエルシオール自体の行動の自由を縛る事に成功した件をレゾムに伝える。

辺境宙域からの探査から戻ったばかりで、補給も万全ではない状態であり、しかも数の少なかった護衛艦隊への損害もバカにならずと、暫くエルシオールと紋章機は、整備や補給に忙殺されるであろうと推察できた。

「残して来た無人偵察機からの報告によれば、その護衛艦隊も一時エルシオールを離れるみたいです」

旗艦を失ってしまったクレッシェンド率いる護衛艦隊は、その任を一時終えて再編と修理のためにエルシオールから離れる事になっていたので、エルシオールは暫く大きく動く事は無いはずであった。

もはや、軍艦が単独で航行できるほど、トランスバール皇国の領域は安全では無くなっていたからだ。

「エルシオールは、レダ星系を目指すはずですが、その前に補給を受けるものと思われます」

自分達の身を守るためにヒヨウを犠牲にしたツケは意外と大きく、特に持ち出す時間が無かった紋章機関連の補給部品や弾薬などの不足がエルシオールでは発生しているらしく、これらを補給するためにどこかの惑星に立ち寄る可能性があると、ネフューリアは説明する。

「その惑星を襲撃するのか？」

「いえ、惑星への直接の襲撃は危険です。早期に通報されてしまいますから。それよりも……」

エルシオールが、再び護衛艦隊と合流した直後が狙いだとネフューリアは説明をする。

「敵の数が多いではないか」

「当然、それに見合った戦力は準備いたします。それに、合流直後では艦隊の連携も不十分でしょうし」

それと、新しく来る予定の護衛艦隊の司令官は、ほぼ間違いなく

クレッシェンドでは無かった。
彼は、旗艦を失ったり、損害が大きかったりと、一度首都星トランスバールに召還される予定であったからだ。
ネフューリアは、クレッシェンドを少なくとも目の前の男よりは優秀な軍人だと思っていたので、いないに越した事は無いと思っていたのだ。

「更に、別にこの時点でエルシオールの撃沈に成功しなくても、我々は困りません」

「それもそうだな」

ネフューリアとレゾムは、これから行う作戦計画の事を考えながら、お互いに笑みを浮かべていた。
レゾムは、ネフューリアが自分の役に立ってくれる事と願って。
ネフューリアは、レゾムが予定期間くらいまでは役に立ってくれる事を願ってだ。

そして、その二人の後ろには、何か液体の詰まったガラス状の筒のような物が数本設置されていて、その一本には若い男性が、他にも三十歳前後と思われる美しい女性と、八十歳を越えていると思われる老人が目を瞑ったままの状態で安置されていた。

「新たなる混乱の序曲の始まり、いや、新しきトランスバール皇国の復活の狼煙を今、私の手で！」

一人悦に入って絶叫するレゾムを、ネフューリアは後ろから冷たい目で見つめ続けるのであった。

第二部　第三話（前半）

「じゃあな、不肖の弟よ」

「兄貴、本星に召還された身で、俺の事を不肖とか言えるのか？」

「あんなに不利な状態で、俺はエルシオールを守る事に成功したんだ！　ごちゃごちゃ抜かすようなら、あの妖怪と軍法会議で心中してやる！」

レイチェルが去った翌日、エルシオールを護衛していたクレッシェンド指揮する護衛艦隊は、エルシオールと別れて首都星トランスバールを目指して出発する事となった。

旗艦を失い、他の艦の損傷も酷く、物資もエルシオールを優先していたので不足している。

他にも、艦隊に損害を出したクレッシェンドの責任問題を言い始めた連中がいるらしく、どのみち彼は一旦エルシオールから離れなければならなかった。

多分、ウォッカ大将も、本気でクレッシェンドを罰しようとは考えていないはずであったが、それでも一応はポーズという形で彼を呼び戻す事にしたらしい。

軍法会議を噂されていたが、彼がその場で情け容赦なく上層部批判をすれば、それだけでトランスバール皇国軍はダメージを受ける可能性があるので、簡単な査問会議から始末書の提出くらいで済むであろうというのがレスターやアキオの意見であった。

「しかし、惜しいな……」

クレッシェンドの視線は、タクトの隣にいるレスターとアキオに向いていた。
今のトランスバール皇国軍内では、この二人を部下に欲しいと願う人間がゴマンと居るし、自分もその一人であったからだ。
レスターは、タクトのお守があるので無理であろうが、アキオを欲しいと願う軍人は多く、クレッシェンドも自分の指揮する艦隊の副司令に欲しいと願っていた。

「まあ、無理なんだろうけどな」

どうせアキオが、自分の弟以外の部下になるつもりは無いのであろうと思ったクレッシェンドは、他にもフォルテ達とも別れの挨拶を交わしてから一路首都星トランスバールに向けて出発していた。

「それで、タクト。私達は、これからどうするんだい？」

「近くにある、惑星サンサに寄れだとさ」

タクトは、軍本部からの命令をフォルテ達にも伝える。
この惑星サンサは、特に大きな軍基地などは存在しないらしいが、実はここにはブラマンシュ財閥の拠点支部が存在していて、軍や皇国政府と繋がりの深いブラマンシュ財閥であったので、そこにエルシオールが必要な物資の類が届けられているとのタクトからの話であった。
それに、辺境探査から戻ってから本格的な整備をしていないエルシオールの大メンテナンスを行うという目的もあった。
ここには、軍民併用の宇宙艦船用の大型ドッグがあるらしいのだ。

「そういう事なので、惑星サンサで休暇だな」

「すぐに休暇に繋げるのが、タクトらしいな」

レスターは、タクトにいつもの毒舌を吐いていたが、彼には同じく休暇になるであろうムーン・エンジェル隊の付き沿いという任務があるはずなので、決して休むなとは言わなかった。

下手な事を言って、もし自分が彼女達に付き合えなどと言われても、それはどう考えても不可能な事で、更にまるで休みになどならないはずであり、それならば艦内で仕事をしている方が気楽とも言えた。

「レイトンは、どうするんだ?」

「搬入される物資の確認と、整理整頓の指揮」

レスターは、アキオの返答を聞いて納得したような表情になる。

アキオに任せれば、一時間もかからずに終わってしまう作業であったからだ。

「あの、アキオさん」

とそこに、ブリッジに入って来てから、アキオに声をかけた人物がいた。

それは、物資の補給を請け負っているブラマンシュ財閥当主の一人娘にして、ムーン・エンジェル隊のメンバーであるミントであった。

「ミントか、どうかした?」

「実は……」

ミントは、惑星サンサに自分の父親であるダルノーが、アキオを待っている事を伝える。
何でも、つい先どの連絡を貰ったらしい。

「ダルノー会長が？」

「はい、お仕事のお話だとかで」

アキオは、大量の資源を埋蔵する惑星と、それらの資源を採掘・精錬・加工・輸送する企業体のオーナーであった。
普段の生活が、酒以外には意外と質素なので忘れている人もいるのだが、それでもアキオは定期的にこの企業体の経営を見ているし、それに手を貸しているビジネスパートナーがダルノー氏であった。
お互いに協力する事により、アキオは自分が大々的に手を貸さなくても安定した経営を、ダルノーは先の内戦でダメージを受けた財閥の損失を補填できと、お互いに利益を得る関係になっていた。

そしてダルノーは、アキオが自分の娘であるミントと結婚してくれる事を心から望んでいた。

「何しろ、航路が不安定ですので」

「だよなぁ……」

数ヶ月前からその兆候はあったのだが、強奪船団の影響により現在アキオの所有する企業体の収益は、少しずつ低下している状態であった。
船団護衛に一家言あるアキオなので、アキオの会社の物資を載せた船は一隻も強奪船団からの被害を受けていないが、わざわざ船団

を組んで護衛を頼み、更に世間で強奪船団のニュースが流れ始めると保険会社が船荷や輸送船にかける保険料を上げたりと、次第に利益が減りつつある状態にあったからだ。
多分、同じような被害をダルノーも受けているのであろう。

「一度お会いして、ちゃんと話し合った方が良いな」

利益は多少下がっていたが、それでもアキオの会社やブラマンシュ財閥が潰れるはずもなかった。
だが、ここでお互いに意見交換をしておかないと、後で色々と不都合が発生するかもしれず、その時になって手を打っても手遅れという可能性もあったので、ここで早めに手を打てるトップだからこそ、ブラマンシュ財閥は安泰なのかもしれなかった。

「私も賛成ですわ。それと、お供をさせていただきますので」

ミントは、ダルノーがサンサの首都から離れた場所にある別荘に居る事をアキオに伝え、休みの日にそこまで自分が案内する旨も伝える。

「別荘か。さすがに、そのくらいは余裕か。ダルノー氏は」

諸事情により、現在住所すら存在していないアキオには、別荘という単語は非常に眩しいものであった。
その気になればいつでも購入可能なのだが、彼は生まれ付いての貧乏性であり、そんな物が必要だとは現時点で思っていなかった。
それに、ミントも今のアキオに本宅や別荘など必要ないと思っている。
自分と結婚が決まってから、ゆっくりと選べば良いのだと考えていたからだ。

「温泉なども引かれているそうですわ」

「いいね、温泉。楽しみだなぁ」

無任所提督の余裕なのか？

アキオは、ミントとの別荘行きをのん気に楽しみにしていて、同時にミントは、レスターに『まさか、アキオさんの休暇を取らせないなんて事は？』という無言の圧力を彼に加えていた。

「まあ、物資さえ無事に入れてくれれば……」

レスターは、ミントの後ろにあるブラマンシュ財閥の事も考えて、アキオの休暇を呆気なく認めていた。

どうせ、レスターにアキオの休暇に付いて何かを言う権利など存在しなかったし、アキオが仕事を放置して休むはずも無かったからだ。

「いいなぁ、レイトンは。俺は、ミルフィーと町に買い物に行くけど」

タクトは、アキオの別荘行きを羨ましがりはするが、さすがは『戦機を見るに敏』というか、自分も行きたいなどと空気を読まない発言を言う事も無かった。

それに、タクトは気が付いていたのだ。

これは、勿論仕事の件もあるが、要はダルノーがアキオとミントを二人きりにさせようと計画したお見合いのような、婚前旅行のようなものであると。

多分、タクトの予想通りなら、ダルノーはアキオと仕事の話を終

えたら、多忙を理由に速攻でサンサを出て行ってしまうはずであった。

タクトがどうしてそれに気が付いたのかと言えば、天にも昇るような表情をしているミントを見れば一目瞭然であったからだ。

別に、難しい推理や思考などするまでも無かったのだ。

「（でも、何かひと波乱ありそうな……）」

タクトは気が付いていた、その天にも昇る表情をしているミントを影からちとせが見ている事にだ。

彼女の背後にドス黒い炎が見えるのは、決してタクトの気のせいでは無いのであろう。

普段は真面目なちとせだけに、一旦暴走を開始した彼女はとんでない事になりそうだと思うタクトであった。

「（下手をすると、血が降るな……）」

『触らぬ神に祟りなし』、タクトは休暇はミルフィーと二人で過ごす事と、アキオには近付かない事を心に誓うのであった。

「ふぅーーー」

惑星サンサにエルシオールが到着する直前、エルシオールのティールームで一人考え事をしている人物がいた。

珍しく頼んだケーキにも手を付けずに、ランファは何も無い空中をボーっと見つめていたのだ。

「ランファ、そのケーキ、美味しくないの？」

そこに、ミルフィーユが現れて声をかけてくる。

現在、主計中尉兼厨房担当である彼女は、自分が作ったケーキにランファが手を付けていないので、『まさか失敗したのでは？』と不安になったからだ。

「ううん、ちょっと、別件で……。ミルフィー、その格好は何？」

考え事に夢中のランファであったが、さすがにミルフィーユの変化には気が付いたらしい。

何しろ、彼女はメイド服を着て給支を行っていたのだから。

「えへへ、気分転換。タクトさんにも好評だったよ」

「タクトなら、ミルフィーが何を着ていても似合うって言うわよ」

実際に、ミルフィーユのメイド服姿はタクトだけでなく、他の人達にも好評であるらしい。

何も言わないのは、いつもの通りにレスターだけであったとミルフィーユは話す。

「アキオさんも、『最近流行しているらしいけど、似合ってるな』って言ってくれたんだ」

ミルフィーユからアキオの事を聞いて、ランファは一瞬だけドキっとしてしまうが、それをミルフィーユに勘付かれないように、今

まで手を付けていなかったケーキを食べ始める。

「美味しいわね」

「ありがとう。それで、アキオさんと何かあったの？」

「なっ！　何で、知っているのよ？」

ランファは一人驚いていたが、よくよく考えれば、先日のアキオとのやり取りはタクトに聞かれていたし、ミルフィーユはタクトの彼女でその線で漏れた事は容易に想像がつく。

それに気が付かないランファが、よほど動揺していたという事だけであった。

「ランファ、私は『何かあったの？』って聞いただけだよ」

「ミルフィーの癖に、小賢しい手を……」

更にランファは、自分がミルフィーユの誘導尋問に引っかかっと勝手に勘違いもしていた。

「アキオさんに、愛の告白でもされた？」

「だったら、まだ迷わないかもね」

これ以上隠しても仕方が無いと思ったランファは、先日アキオから、『好きなのかもしれない』と言われた話をミルフィーユにする。

「『好きなのかもしれない』ってどういう事なのよって話よ。本当、変な所で優柔不断なんだから……」

ランファは、煮え切らない事を言ったアキオにブツブツと文句を言っていたが、ミルフィーユには彼女が好きだと言って欲しいという風にしか見えなかった。

「ミントとちとせの件も、あるんだと思う」

そもそも、最初にアキオと知り合って彼を好きになったのは二人であり、ランファはどちらかと言えば後発組である。

恋愛に先発も後発も無いとは思うのだが、あそこまで真っ直ぐな好意を向けている二人の事を、アキオが気にならないはずも無いと考えるミルフィーユであった。

「でも、わかるような気がする」

「何が？」

「アキオさんが、ランファの事が気になるのが」

ミント・ちとせと、ランファのアキオに対する関係を考えると、前者と後者には大きな違いがある。

ミントやちとせは、アキオの事を、あの自分の父親ですら認めた男や、尊敬すべき上官としてから好意を抱くようになっている。

だから、彼女達はあまりアキオに対して批判的な事を言わないし、ある意味『恋は盲目』と同じで、彼に盲追している部分もあった。

アキオも、年下で軍内では部下でという関係からか、あまり彼女達に厳しく注意をしたり、反論をしたりという場面を、少なくともミルフィーユは見た事が無かった。

一方、ランファとは最初から好き勝手に言い合って、常に喧嘩を

している印象が強かった。
ランファは、上官であるにも関わらずアキオに容赦が無かったし、それにアキオもムキになって反論する事も多かった。
お互いに悪口というか、本音を言い合っている関係とも言えるのだ。

となると、実はランファの方がアキオと腹を割って話し合っているとも言えなくはなく、ミルフィーユには、実はアキオの好きな女性のタイプが、ランファのように媚びないタイプなのかもしれないとも考えていた。

「『喧嘩するほど仲が良い』って事かも」

「ミルフィー、あんたねぇ……。恋人同士は、あなた達のように常に仲良くの方が良いのよ」

「そうかな？　恋人同士って、そのカップルによって違うんじゃないのかな？」

「おーーー、おーーー。随分と経験豊富そうに語るわね」

ランファは、タクト以外の男性と付き合った事が無いミルフィーユの発言にしたり顔で答えていたが、実はランファも普段は良く恋愛願望は口にしていたが、実は一人の男性とも付き合った事が無かったので人の事は言えない状態ではあった。

「ランファよりは、経験あるよ」

「うわぁ、素でムカつくわ。それ」

「アキオさんと、休みにどこかに遊びに行けば？」

「何で、せっかくの貴重な休暇にアキオなんかと……」

ミルフィーユの提案に、ランファはすぐに否定的な意見を述べるが、以前は二人きりで無いとはいえ、結構楽しそうに遊んでいたのを思い出すミルフィーユであった。

「それに、アキオはミントと出かけるのよ」

「そうか、アキオさんの会社の大切なお話なんだよね？」

「あんた、そこの大株主だって自覚はあるの？」

「何かね。この前、物凄い金額が振り込まれていたの」

ギャラクシー宝クジ当選から、辺境軍がというかアキオが作った半官企業の株式への投資を経て、アキオの会社にも出資をしと、様々な幸運が重なってミルフィーユは、銀河でも有数な金持ちになっていた。

実は、彼女と付き合っているタクトは、それを知っている人達から逆玉の輿だと思われていて、クレッシェンドも父親であるマイヤーズ伯爵から、『あの娘を、お前の嫁に迎えてはどうだ？』と言われていたという裏話も存在していた。

ただ、クレッシェンドは、最低でもフォルテくらいの年齢の大人の女性が好きなので、ミルフィーユはまるで守備範囲外で、ただの部下としてしか接していなかった。

「いいわねぇ。私も、白馬に乗った王子様が来ないかしら」

「ランファ……」

さすがのミルフィーユも、ランファのあまりの乙女チックな想像に、『それは無い』と感じていた。

そしてランファは、頭の中にその光景を想い浮かべるのだが、その王子様の顔がアキオになって、ついでに高級ワインをガブ飲みしていたので、慌てて頭の上の何かを消す動作をする。

「とにかく、私は、『かもしれない』なんて言う男に振り回されるのは沢山よ。普通に休暇を楽しむわ」

ランファは、残ったケーキを口に入れてから、それを紅茶で流してティールームを後にするのであったが、彼女は翌日の休暇に、思わぬアクシデントに巻き込まれる事となるのであった。

「これが、搬入リストです」

「これで一安心だな。しかし、早かったですね?」

「うちは、軍との取り引きが多いですからね。期限厳守は職業病ですよ」

翌日の早朝に、惑星サンサの軍民併用ドッグに到着したエルシオールはすぐに辺境探査から二度の戦闘を経て劣化したり故障した箇

所の修理に入っていて、同時にヒヨウと共に沈んでしまった紋章機専用の部品や弾薬を、ブラマンシュ商会の担当者から受け取っていた。

「ひぃ、ふぅ、みぃ……。ちとせ、そっちは？」

「はい、大丈夫ですね」

すぐに納品された物資の確認を行い、それを倉庫に搬入するアキオであったが、ちとせが手伝ってくれた事もあって、その作業は二時間ほどで終了していた。

「悪いな、ちとせ」

「いえ、紋章機は豊富な予備部品が無いと稼働率で不安ですから」

ちとせとしては、こうやってアキオと同じ仕事をするだけで幸せであったのだが、今日はいつもと心の奥底で考えている事は違っている。

俗に言うところの、『何かを企んでいる』状態であったのだが、それが暴露されるのはもう少し先の事であった。

「アキオさん、そろそろお迎えの時間ですわ」

「本当だな。ちとせ、じゃあ俺は今から休みだから」

「はい、有意義なご休暇を」

ちとせは、ミントと一緒に出かけるアキオを満面の笑みで送り出す。

「（おかしいですわね？）」

ミントは、ちとせが少しも悔しそうな表情を見せない事に疑問を感じていたが、この休暇には大切な仕事としての側面もあったし、アキオが面会をするダルノー会長は、ある意味この皇国では公人に近い立場の人間であったので、真面目な仕事人間であるちとせにはどうにもならなかったのであろうと考える事にして、アキオとの休暇をいかに楽しむかに神経を集中する。

ブラマンシュ財閥、総合宙路警備保障（株）、アキオの持つ会社と、この三社は、実は軍の利権と大きな繋がりがあり、復帰したばかりのアキオに対して権限が無かったという事情もあったが、レスターがすんなりとアキオの休暇とミントの付き添いを認めたのには、そういう部分も存在していたからだ。

本来、レスターはそういう考えを嫌う男なのだが、個人的な感情より准将という将官としての立場を優先するようになったという事なのであろう。

もっとも、世間では柔軟になったと言われるのかもしれなかったが、本人的には堕落したとも考えそうな感じではあったが。

「そうか、アキオさんは休暇なんだっけ？」

「ええ、半分お仕事もあるようですが」

アキオとミントが倉庫を出た直後に、それとすれ違うようにして倉庫に入って来たクレーターが、ちとせに話しかけてくる。

どうやら、クレーターは早速入荷した紋章機用の部品を取りに来

たようであった。

「でも、お金持ちの家の別荘か。ご馳走とか出るんだろうなぁ……」

クレーターは、純粋にブラマンシュ財閥が保有する別荘に遊びに行けるアキオを羨ましがっていた。

至極当然な、普通の一般庶民的な視点でだ。

「私には、紋章機の整備があるからなぁ。ちとせさん、シャープシューターのレールガン専用の制御基板は入荷しているんですよね？」

「はい、これですよ」

アキオと一緒に搬入作業を手伝っていたちとせは、すぐにクレーターを探していた部品の場所に案内する。

「ありがとう。これが終わったら、私も買い物に行こうかな。今日は、アニーズの新曲の発売日なのよね。ところで、ちとせさんは？」

「これから、女としての尊厳をかけた戦いがあります」

「はあ？」

奇妙な事を言い残して自分の部屋へと戻っていくちとせに、クレーターは頭の上にクエッションマークを浮かべるのであった。

「レイトン様、ミントお嬢様。お迎えに参りました」

アキオとミントが一緒にエルシオールを出ると、既にエルシオールの係留されているドッグの近くでは、ダルノーの執事であるハンスが自家用ジェット機と共に二人を待ち構えていた。

「ハンスさん、お久しぶりです」

「お嬢様もお元気そうでなによりです。それに、お美しくなられましたな」

顔見知りである二人は、お互いに楽しそうに挨拶を交わす。

「レイトン様も、ご壮健で何よりです」

「健康なのが取得ですからね」

「それは、大切な事でございますよ。旦那様が、別荘でお待ちです」

ハンスは、二人を小型ジェット機に案内すると、発進した小型ジェット機は、そのまま一路別荘のある郊外の森林地帯へと向かう。

「意外と、自然が残っているんだな」

アキオは、ミントと一緒に小型ジェット機の窓から見える大自然の風景に心洗われる思いであった。

つい最近まで、惑星ロハスという自然しか無い惑星にいたので、いつの間にかそういう光景が好きになっていたようであった。

「はい。惑星サンサは、まだ開発が始まって三十年ほどです。大規

模な軍民併用の宇宙艦船用ドッグと、それに付随する中心都市の整備は進んでいますが、まだ大半が未開発のままですので」

そこで惑星開発に資金を出しているダルノー氏が、その中心都市の郊外にある大き目の湖と、それに付随する森林地帯一帯を安価で購入して、そこに別荘を建てたのが今回訪問する場所であった。

「あと、もう少しで到着の予定です」

ハンスの言う通りに、小型ジェット機の窓からは、小さめではあったが豪華な別荘とそれに付随する湖や森林地帯と、自家用機専用の滑走路と格納庫が見えていた。

「ミント、あなたがその巨大な実家の力を利用するのであれば……」

アキオとミントが別荘に到着したその頃、エルシオール艦内の一室では、一人大いなる覚悟を決めながら戦いの準備を始めている少女がいた。

先ほど、アキオとミントを送り出したちとせであった。

彼女は、いつもは弓の練習をする時に使っている道着に着替え、矢も実戦向きに鏃を鋭い物に交換していた。

この銃器全盛の時代に何をしているのか、傍から見ると奇妙な光景ではあったが、それだけ彼女も追い詰められていたという事なのであろう。

父親公認で、娘と一緒にその別荘で一日宿泊する。
真面目で恋愛経験のほぼ存在しないちとせからしたら、それは既に新婚旅行にも等しい暴挙であったのだから。
いくら自分が真面目な軍人とはいえ、それは容認できる話ではなかったのだ。

「ちとせ、何をしているんだい？」

だが、そのちとせのかなりズレた準備は、すぐにある人物にとって止められる事となる。
ムーン・エンジェル隊の隊長である、フォルテによってであった。

「フォルテさん。申し訳ありませんが、止めないでください。これは、女の戦いでもあるのです」

ところが、今日のちとせは、ひと味もふた味も違っていて、フォルテの制止を完全に拒絶していた。

「いやね。そんな時代錯誤な格好で、そもそもどうやって現地に行くんだい？」

フォルテは、ちとせの考えなど手に取るようにわかっていて、だから余計に彼女の計画の稚拙さが気になっていたのだ。
一応、センパール士官学校の主席なのだから、もう少し気の利いた策でも考えているのかと思えば、時代錯誤な格好と準備で現地に向かう足の準備もしていない。

これは、あくまでも自分は軍人としてでは無くて、一人の女としてアキオを奪還しようと考えているからなのであろうが、そのまま

ちとせが現地に行っても、何も出来ないままで終わってしまうはずであった。

あまりに真面目過ぎて、エルシオールの装備や自分の軍人としての装備を使わない事に主観を置き過ぎているのだ。

何しろ、相手はブラマンシュ財閥総帥であるダルノー・ブラマンシュなのだ。

警備用のロボットから、果ては元傭兵の警備兵まで、彼がその気になればちとせは別荘の外観すら拝めないでエルシオールに強制送還される事は確実であった。

「そんな格好で、郊外まで公共交通機関でも使うのかい？」

「紋章機を使うなど論外ですから」

「こりゃあ、先が思いやられるね」

そう言いながら、フォルテはちとせに何かを放り投げ、咄嗟に彼女はそれを受け取っていた。

「演習用の迷彩服……」

「ミントの別荘の間取りは調べたのかい？　その周辺の環境は？　ちとせ、まさかミントとあの父君が何も準備をしていないとでも？」

ミントは愛する男性との甘い一日を目指して、父親であるダルノーは既成事実を作るべく、当然アキオを狙うライバルの存在を考慮して完璧な防御体制を取っているはずであった。

「そう言われると……」

ちとせは、歴戦の野戦・対ゲリラ戦闘の名人であるフォルテの指摘に、自分の行動の稚拙さを後悔し始めていた。

「アテンション！」

「はっ、はい！」

突然フォルテの出した大きな呼び声に、ちとせはただ背筋を伸ばして彼女の目を見る事しか出来なかった。

「その服に着替えてから、五分後に第二会議室に集合せよ！」

「はっ！　烏丸ちとせ中尉は、五分以内に第二会議室に集合します！」

さすがは、士官学校で訓練を受けていたせいか、ちとせはすぐにフォルテの命令を復唱してから、迷彩服に着替えて普段は空き部屋の第二会議室へと向かう。

すると、既にそこには迷彩服姿のフォルテが、会議室前方のホワイトボードの前に立っていた。

「ちゃんと、時間内だね」

「あの……。フォルテさんも、その格好なのですか？」

ちとせは、フォルテも迷彩服を着ている事に驚いていた。

「バカだねぇ。ちとせ一人で、アキオの奪還なんて無理に決まっているだろう」

「フォルテさん……」

完全にミントの作戦勝ちで、誰も助けなどいないと思っていたのに、上官であるフォルテが手を貸してくれる。

ちとせは、彼女の優しさに涙が出そうになっていた。

「ちとせ、騙されるんじゃないわよ。フォルテさんは、好きで楽しくてこんな事をするんだから」

そして、少し遅れてなぜか同じ迷彩服姿のランファも会議室の中に入って来る。

ちとせは、フォルテの真意よりも、ランファの参加の方が気になり始めていた。

「ランファさんは、どうして？」

「私だって、普通に休暇くらい楽しみたいのよ！　それを、フォルテさんが無理に引きずり込むから！」

何の貸しか弱味か知らなかったが、今回の休暇を町に買い物にでも出かけようと思っていたランファは、フォルテに無理矢理に今回の作戦に参加させられて、不満で一杯の表情をしていた。

「ランファが先にアキオに辿り着けば、アキオを独占できるのにかい？」

「別に、あんな奴を独占したく無いですよ……」

ランファは、口ではそんな事を言っていたが、実は頭の中で先の

『好きかもしれない』が気になっていて、それを確かめたい気持ちがあるのも確かであった。
ランファは、少し俯きながら顔を赤くさせていた。

「三人でやれば、成功の目があるからね。さて、ブラマンシュ財閥の会長直属の護衛部隊の実力はいかほどなんだろうね？」

目の前で不敵な笑みを浮かべるフォルテを見て、ランファは改めて、ちとせは今、なぜフォルテが今回の作戦を立案したのかを知る。
今回の休暇では、趣味の銃や弾薬に不備は無く、好きな食材も不足しておらず、酒はアキオの違反に便乗していて、ウォルコット大将は忙しくて休暇どころでは無くてここに来れずと、このアキオ奪還作戦こそがフォルテの最大の娯楽でもあったのだ。

「さて、これがミントの別荘とその周辺の写真だよ」

どうやって入手したのかは不明であったが、フォルテは引き伸ばしたミントの別荘とその周辺を上空から写した写真数枚を、ホワイトボードに貼り付けていく。

「正面南側の開けた平原は駄目だね。敵の方が多いだろうから、集中攻撃を喰らってしまう」

「東側の湖はどうなんです？」

最初は無理矢理参加させられた感のあったランファであったが、いざ参加を決めれば普通に士官としての意見を述べていた。

「船や潜水具の調達が間に合わないし、練度不足で失敗の元だね。そもそも、別荘から少し距離が離れているし」

しかも、ここは一般人にも解放されている。
彼らに目撃されるのは、出来るだけ防ぎたいところであった。

「と言う事は、西側と北側にある森林地帯ですか？」

「ああ、そうだよ」

フォルテの作戦では、別荘から少し離れた北西部にある開けた平原にパラシュートで降下し、森林地帯からの進撃をランファとちとせに提示していた。

「森に、数の優位を誇る護衛部隊を引き込んで減らすんですね？」

「そういう事さ」

フォルテは、他にも色々と細かい作戦案を指示した後に、新たな装備の支給を行っていた。
空挺部隊が使っている全自動降下用パラシュート、万能通信機・高性能赤外線センサー搭載のヘルメットとゴーグル、毒ガス専用のマスク、サバイバル装備一式、各種銃器、手榴弾、近接戦闘用の警棒など、次第にランファとちとせから血の気が引いて来る。

「「フォルテさん……」」

いくらアキオを取り戻して休暇を一緒に送るためとはいえ、無意味な殺生の類は勘弁して欲しいと願う二人であった。
最初鏃の付いた弓矢を準備していたちとせには、あまり人の事は言えなかったが。

「バカだねぇ。その辺は、交渉済みだよ」

いくら休暇中とはいえ、軍人と銀河有数の財閥の警備隊が殺し合えば、それはとんでもないスキャンダルになってしまう。

フォルテは、事前にダルノーと連絡を取って、今回の奪還作戦の許可を取っていたのだ。

『私は、部下に平等な隊長だからね。あまり、あからさまな実家の職権を利用した、ミントのアキオの独占は許容しかねる』

『だが、これは現実に、二つの会社の経営リスクを解消するために必要な話し合いなのだがね』

『そんな物は、通信でやれば良いだろう』

『情報漏洩の危険性という物があってね。企業人としては、その辺のリスクは避けたいのだよ。わかるだろう？　シュトーレン大尉』

『町にある支部の会議室ででもやれば良いじゃないか。その後の別荘への招待には疑問を感じるがね』

『とはいえ、既にレイトン准将は了承している』

『アキオの奴……、悪いが強引に奪わせて貰うよ』

『そうだな。実力で来られるが良かろう。私の自慢の警備部隊を抜ければの話だがね』

こうして、半ば演習形式でのフォルテ達による別荘襲撃とアキオ強奪作戦の許可は出ていた。

何のことは無い。
別荘の写真は、ダルノーが送って来た物であったのだ。

「銃は麻酔銃で、手榴弾はトリモチか、熊撃退用のを強化した唐辛子ガス、警棒は痴漢撃退用のスタンガン改造さ。士官学校で訓練は受けているんだろう？」

「そう言えば、そうでした」

「私って、銃の成績が悪いのよね」

演習では主席に相応しい活躍をしていたちとせと、強いのだがすぐに格闘戦に移行して教官に注意されていたランファは、これらの武器に殺傷能力が無い事に気が付く。

「そんじゃあ、行くとするかい」

フォルテは、ホワイトボードの写真を剥いで勢い良くゴミ箱に叩き込むと、二人の前に立ってから、第二会議室を出てエルシオールの出口への通路を歩き始める。
途中、三人の仰々しい格好に、すれ違うクルー達はギョっとした表情を見せるが、三人はそれを気にしないようにしていた。

「クールダラス副司令、あれは？」

フォルテ達の後姿を偶然見かけたアルモは、一緒に居るレスターにその理由を問い質す。

「俺もよくわからないな。というか、最近本当によくわからんよ……」

「はあ……」

レスターはそれだけを答えると、司令官室のデスクの引き出しにある始末書の数が足りていたか？　ただそれだけを気にしてから、三人を記憶の外に追いやって自分の仕事に没頭するのであった。

「ところで、現地までの足はどうなっているんです？」

「ああ、それなら……」

フル装備でエルシオールを出たフォルテ達は、エルシオールの隣の小型ジェット機の離発着場で、レンタルした機体の最終確認をしているタクトとミルフィーユを見つけていた。

二人は、本当は休暇で町に買い物に出る予定であったのだが、ミルフィーユの、『この星って自然が豊かなんですよ。ピクニックには最適です』という意見によって予定を変更していたのだ。

ちなみに、その場所はミントの別荘からさほど離れていない所にあって、フォルテ達を目的地に降ろすのに大した手間は掛からない事になっていた。

もっとも、タクト達はフォルテが自分達を利用しようとしている事も、そもそもアキオ奪還作戦を企てている事も知らない。

「やあ、タクト」

「フォルテじゃないか、それとランファとちとせも……って！」

タクトは、自分に声をかけてきたフォルテ達の異様な格好に、思わず絶句してしまう。

「わぁ、フォルテさん、格好良いですね。ランファもちとせもだけど」

一方、ミルフィーユの方は、フォルテ達の仰々しい格好を興味深そうに見ていた。

過去に何度か見ている格好なのだが、成績はともかく、あまり実技で優秀性を発揮していなかったミルフィーユには、特殊迷彩服は記憶の範疇には無かったようであった。

「その格好で、ピクニックか何かで？」

タクトとしては、もはやそれしか言う事が無いような精神状態であった。

「大体合っているかね。それで、ちょっとここまで飛んで欲しいんだよ」

フォルテは、タクトに一枚の地図を見せる。

それには、ミントの別荘がある場所の北西の地域に赤で印が付けられていた。

「私達が行く場所に近いですね。でも、楽しそうだなぁ」

何も知らないミルフィーユは、フォルテ達が何か楽しい事をしに行くものだと本気で思っているようであった。

確かに、フォルテは何よりも楽しそうな顔をしているので、強ち

間違いでも無いのであったが。

「そんなに手間はかからないから良いけど、降りられるのか？」

「タクト、私達の装備を確認してみなよ。上空にさえ、行って来れれば良いのさ」

「空挺作戦か！」

ビックリしたタクトは、フォルテでは無くてちとせとランファに視線を送るが、ちとせはフォルテと同じくやる気満々な表情をしていて、どこか醒めているのはランファだけであった。

「なあ、ランファ」

「あまり大事にならないように、努力はしてみるわ」

「スマン……」

タクトは、心の中でランファに頭を下げながらも、全員を乗せて準備していた小型ジェット機を離陸させる。

途中、操縦をしているタクトの耳の中には、フォルテ達の物騒な会話が入ってくる。

「フォルテさん、この手榴弾は？」

「テロ鎮圧用の唐辛子成分煙幕の強烈な奴さ。煙を粘膜に入れたら、病院で洗浄して貰うまではまず動けなくなるね」

フォルテは、ランファとちとせに各種装備品の説明をしていた。

「凄いですね。そこって、熊でも出るんですか？」

「そうだねぇ、熊よりも性質の悪いのが出るかもね」

その会話に加わるミルフィーユであったが、タクトには話が噛みあっているのか、いないのかが良く理解できずにいた。

「ちとせ、電磁警棒のバッテリーは大丈夫かい？」

「はい、予備の電池もあります」

「じゃあ、行くかい？」

そろそろ目的地上空という所で、三人は装備品の最終チェックを行い、フォルテはタクトに下部ハッチを開けるように言う。

「くれぐれも、無茶は……」

「わかっているさ」

「タクトさん、これは女としての尊厳に関わる戦いなのです！」

「……」

珍しく出たタクトからの常識的なお願いであったが、それが三人に伝わっているのかどうかはかなり疑問的であった。

それでもタクトは、小型ジェット機のスピードを最小に落としてから、ミルフィーユに機内に巻き込む風に注意するように伝えて、機体の下部ハッチの解放スイッチを入れる。

すると、機内にはかなり強烈な突風が舞い込み始めていた。

「いいかい！　私が降りてから五秒後に降りるんだ。パラシュートの自動展開装置は同じく五秒をセットだよ！」

「「了解！」」

フォルテは、二人に降下時の説明をすると、そのまま躊躇う事無く開いた下部ハッチから飛び降りていく。

「烏丸ちとせ！　参ります！」

「私の休暇を返せぇーーー！」

続いて、ちとせとランファも降下を開始し、タクトは無事に下方に三つのパラシュートが開いているのを確認する。

この時点で失敗して墜落死でもされたら目覚めが悪かったからだが、この時代のパラシュートは何重にも安全装置がかかっていたので、まずその心配は無かった。

でなければ、いきなりフォルテが経験の浅いランファとちとせに使わせるはずが無いからだ。

「休暇なのに、無茶するよなぁ」

「フォルテさぁーーーん！　ちとせぇーーー！　ランファーーー！　お土産期待しているからねぇーーー！」

何かとんでもない事の片棒を担いだような気がするタクトは、珍しく溜息をついていたが、すぐに気を取り直して休暇を楽しむべく本来の目的地へと機体を飛ばしていた。

そしてミルフィーユは、いまだにフォルテ達が何か楽しい所に出かけるものだと勘違いをしていたのであった。
約一名は、その認識でもまるで間違いでは無かったのだが。

「お久しぶりです」

「ふむ、よく来てくれたな。レイトン准将」

フォルテ達が降下をする少し前、アキオとミントはダルノーの待つ別荘へと到着していて、彼直々の出迎えを受けていた。
別荘は、前面の豪華な門を潜ると噴水のある広大な庭が広がり、植えられている花や樹木は丁寧に手入れをされていた。
更に、特注と思われる装飾の施された大きなドアを開けると、内部は高価なシャンデリアと調度品が飾れら、出迎えたダルノーの横では十数名のメイドや執事が恭しく頭を下げていた。

「早々と用事を済ませてしまおうか」

「そうですね」

アキオとミントは、ダルノーに付いてとある一室に入る。
同じく豪華な調度品で飾られた部屋には、既にお茶の準備がされていて、アキオが高そうな応接セットのソファーに着席すると、若い綺麗なメイドがすぐにカップに紅茶を注いでくれる。

「（金持ちの家は、メイドも綺麗なんだな）」

思わずしょうもない事を考えてしまうアキオであったが、すぐに考えを読まれて、隣に座るミントが不機嫌になってしまう。

「レイトン准将、あまりミントの前で他所の女の事を考えない方が良いぞ。ちなみに、この法則は他の女性にも当てはまるがね」

ミントで無くても、お茶を淹れてくれた綺麗なメイドに鼻の下を伸ばせば、一緒にいる女性は良い顔をするわけがない。

そういう事をダルノーは言いたかったのだが、反面、アキオが普通に綺麗な女性を綺麗だと感じて興味を持てるようになった事に一応の進歩を感じてもいた。

「では、本題に入ろう」

ダルノーが自分の前にある呼び鈴を鳴らすと、傍に控えていたメイド達が一斉に退室する。

いくら家内のメイドでも、情報漏洩には気を使っているダルノーであった。

「とは言っても、対応はほぼ一つしかないのだがね」

話し合いは、まずは両社の財務状況の確認から、これからの経営計画の推移と、予想される売り上げと利益の額など、普通の会社の経営会議で行われるのと全く同じ事からスタートしていた。

「運輸コストが増えているが、資源を持っている君は強い。この戦争で、また各種資源の相場が上がっているからな」

強奪船団による資源と船の強奪・破壊と、それに伴う需要の増大で、現在エオニア戦役直後レベルまでにまた資源の相場が高騰している状態であった。

失った輸送船はまた作らなければ足りなくなるし、皇国軍が艦隊の再動員を進めているのと、既に戦没艦が出ているせいで、また軍艦や支援艦艇が一隻でも喉から手が出るほど欲しいという状態にもなっている。

なので、思ったほどの利益の落ち込みを見せていないのが、アキオの会社であった。

「船の外側のチタン系の金属は、君の星ではあまり採掘されないが、電子制御部品に使う金や白金。更に他のレアメタルの値上がりが激しい」

元々、大量に採れる場所が少なく、最近では採り尽くされた感のある資源で廃品からの再生も増えていたので、余計に値段が上がっているとのダルノーからの話であった。

「となると、余計に奪われるわけにはいきませんか」

「運行スケジュールに柔軟性が失われるが、大型の護衛船団を作る必要があるな。ウォルコット大将とも話し合うが、他社との交渉も必要となろう」

二人は、現在がほぼ戦時体制である事を確認し、資源や物資の輸送には船団を組んで護衛艦隊の護衛を付けるべきであるという認識で一致していた。

そして、それに伴う多少の細かい話を含めても、話し合いは僅か一時間ほどで終了していた。

「こんなものですかね？」

「そうだな。あとは実務者レベルの協議となろうな」

そこから二人は、別のお金に関する話題を話し始めていた。

「シードル公爵家は、持ち直しつつあるな」

「正直、破産しても何の感慨も抱かなかったんですけどね」

駄目ならば、担保を奪い取ればあまり損はしない事になっていたので、本当にどうでも良いと思っていたアキオであったが、ダルノーの話によると、シードル公爵家は皇国政府の復興事業を行う会社の社債などに積極的に投資をして、かなの利鞘を稼ぐ事に成功しているとの事であった。

「あのターミネーターのような執事ですか？」

「あれも、かなりの鬼才だからな」

ダルノーは、エリオスに委任されたシードル家の執事長ベルツェルが積極的にアキオかた借りた資金で投資を行って、かなりの利益を稼いでいる事を伝える。

「破壊の後の再生。戦争後に、建設関連の公共投資は確実に行われるし、皇室と繋がりの深いあの家は、その手の情報の速度も質も一級品なのでな」

その情報を元に投資を行って合理的に金を稼いだシードル公爵家は、他の事業などの建て直しにも成功して、既に危険水域からは脱

しているとの話であった。

「うちは、利息で利益が出るから文句は無いですけどね」

「そうかね」

少し余計な話もあったが、それでも一時間半とかからずに話し合いは終わっていて、アキオがこれからどうしようかと考えていると、ダルノーの方が先に提案を始める。

「別荘の東に大きな湖があって、ボートや釣りで遊べるので、ミントと行って来たらどうかね？　それに、面白い移動手段があるぞ」

一瞬だけ時計を見たダルノーは、すぐにでもアキオとミントにこの屋敷から暫く出て行って欲しかった。

そろそろ、昨晩に通告のあったフォルテ達の攻撃がある予定なので、迎撃準備などで忙しく、しかもそれをアキオやミントに見せたくなかったからだ。

「せっかくですから、ご好意に甘えますよ。ミント、行こうか？」

「はい」

「面白い移動手段って何だろう？」

「私も、この別荘は初めてですからわからないです」

「知らない方が、後の楽しみも大きいか」

「はい」

楽しそうに話しながら部屋を出て行く二人を見送ってから、ダルノーは急いで、自分の執事であるハンスに内線で連絡を入れる。

「ハンス、西の空の様子はどうなっている？」

「レーダーに感度ありです。スピードからして、小型ジェット機ですね。あっ！　今展開されたパラシュートを三つ確認いたしました！」

屋敷の一室にある警備員達の詰め所兼通信レーダー室では、ハンスと彼の部下である若い執事が、目を血眼にしてレーダー用のスクリーンを眺めていて、ハンスの替わりにダルノーに敵の襲来を告げていた。

「警備隊に連絡だ。可哀想だが、こちらに来られると困るのでな。上手く戦闘不能にして、我が別荘の豪華なベッドとメイドの献身的な看護を受けて貰うとしよう」

ダルノーの命を受けた執事のハンスの指示で、次々と警備隊員が別荘の外の森林地帯へと小隊ごとに纏まって移動を開始し、パラシュートで降下したフォルテ達を仕留めようと探索と進撃を開始していた。

「しかし、相手はたかが三人では？」

外に出た警備員達にフォルテ達の降下ポイントを教えつつ、通信網の維持に努めている若い執事は、このやり過ぎな感もある迎撃体勢に批判的な意見を述べる。

「執事たる者、ご主人様に口答えは許されない」

ハンスは、厳しい口調で若い執事の意見に反論を述べる。

「それにだ……」

続けて、ダルノーから渡された資料を若い執事にも見せるのだが、そこにはフォルテ達の驚異的な経歴が書かれていた。

「フォルテ・シュトーレン大尉、ムーン・エンジェル隊隊長。元は、対ゲリラ部隊ゴルゴーン隊のベテラン下士官で、惑星サーヴァントでは多数のゲリラを仕留めた」

続けて、ランファの経歴も確認する。

「ランファ・フランボワーズ中尉、ムーン・エンジェル隊所属。トランスバール中央士官学校次席卒業、本格的な武道の使い手。接近戦に要注意」

最後に、ちとせの経歴も確認するが、まだ彼女はこの中では驚異的とは言えないだけマシであった。

「とはいえ、センパール士官学校を主席ですか。エリートばかりじゃないですか」

若い執事は、警備隊員の面々を頭に思い浮かべるが、元軍人はそれなりにいたような気もするが、何かパンチに欠けるような気もしないでもなかった。

「こちらは、訓練ばかりという事情もある。向こうは、実戦を経験

しているからな。分野は違えど、油断はできない」

「はい……」

こうして、無事に降下に成功したフォルテ達と、ブラマンシュ財閥警備隊との戦いは今にも始まろうとしていたのだが、肝心のアキオ達は何も知らないで休暇を楽しんでいた。

「変わった乗り物って、馬だったのか」

「どうやら、別荘の管理人さんがお世話をしていたようですわ」

アキオとミントは、別荘から十分ほどの距離にある湖に向かって、借りた馬を歩かせていた。

その白い馬は、日頃から良く世話と調教を受けているらしく、ゆっくりと目的地に向かって歩いていた。

ただ、馬は一頭しかいなかったので、アキオは自分が馬に跨ってからミントを自分の前に乗せていて、これはちとせが直接に目撃しないで良かったと思われる光景であった。

「（これは、癖になりそうな快感ですわ）」

アキオと一緒に馬に乗っているミントは、今日だけはまだ多少のわだかまりが無い事もない父ダルノーに心から感謝していた。

他の人がどう見るかは知らなかったが、まるで白馬に乗った王子様と王子様に馬に乗せて貰った王女様という想像をかきたたせる光景になっていたからだ。

「大人しい馬だね。軍馬とは大違いだ」

「まあ、馬にお乗りになられた事があるのですか？」

「何回かだけだけど」

昔に僻地に飛ばされていた頃の思い出という奴で、あまりに悪路で車両すらすぐに壊れてしまう場所の移動に、現地の荒地に強い馬を軍馬として使っていたというだけの事であった。

それに、すぐにそれに対応した車両が補給物資として到着してすぐに乗らなくなっていたので、それほど巧に馬を操れるというわけでもなく、これは観光地に居るような大人しい性格の馬なのであろうとアキオは思っていた。

「本当に、大人しい馬ですわ」

ただ、ミントが良くその馬を見ると、その馬は牝馬であった。

『馬でも、イケメンの方が良いのでは？』と思ってしまうミントであった。

「到着だ」

「お待ちしていましたよ」

ゆっくりと白馬を走らせていた二人は、別荘の東側にある湖の畔に到着する。

そこには、ボート小屋や釣り道具屋やレストランなどがあり、どうやらブラマンシュ財閥が、地元への利益還元活動の一環としてこれらの施設の経営を行っているようであった。

今日は平日なので疎らであったが、現地の家族連れや恋人同士と思われるカップルが数組確認できた。

「ミントお嬢様、お待ちしていました」

施設の管理人をしている老人が、アキオとミントを見つけて駆け寄って来て、それと同時に持っていたデジカメで馬に乗った二人の写真を撮っていた。

「まあ、記念と言う事で」

「ありがとうございます」

カメラを用意したいなかったミントは、己の迂闊さを呪っていたのだが、さすがは観光施設の責任者という事で、その辺に抜かりはないようであった。

「ボートなどはいかがですか？」

二人は管理人に勧められるままに、湖に浮かぶボートに一緒に乗る事にする。

「ほら、ミント。手を」

「はい」

先にボートに乗ったアキオがエスコートをしてミントをボートに乗せ、そのまま慣れた手つきでボートのオールを漕ぎ始める。

ボートは湖の真ん中付近まで進み、二人を心地よい風と絶景のロケーションが出迎える。

「いいね。休日って感じで」

「そうですわね」

ミントは、この誰がどう見てもデートな今日の流れに、初めてブラマンシュの娘で心から良かったと思っていた。

「景色が良いなぁ」

「はい、最近人気のスポットらしいです」

二人は、取り留めの無い世間話などをしながら、アキオがボートを漕いで湖の色々なポイントからの景色を楽しんでいた。

「他にも、ボートがあるんだな」

「観光客の方々みたいですわ」

二人の視線は近くにいたボートに移るのだが、そのボートの上にはどこかで見たようなカップルの存在が確認できた。

男性は黒の短髪で、女性は桃色の肩を超える長さのロングヘアと、ほぼあのカップルで間違いないと思われる。

「「「「あれ？」」」」

まさか、お互いに同じ場所で休暇を過ごすとは思っていなかった二組のカップルは、お互いがお互いを指差していた。

「レイトン、ダルノー会長との会議は？」

「もう、とっくに終わったよ。それで、休暇をね」

普通にそう答えるアキオと、先ほど完全武装のフォルテ達を別荘の近くの森入り口付近に降ろしてきたタクトは、表面上は普通に会話をしていたが、心の中では急激に赤信号が点滅していた。

ダルノーは、フォルテ達に警備員達を排除してアキオを取り戻す許可を与えていたが、肝心のアキオが別荘から離れた湖でのん気にミントと遊んでいるのだから、これは見事に彼の策に嵌められたと考えて良いのであろう。

タクトは、一代で銀河一の財閥を創設した男の強かさに驚くばかりであったが、この後に惨劇が訪れる事は確実であり、もしミントに誘われても絶対にその別荘には近付かない事を決意する。

「ちなみに、これからの予定は？」

「昼食は、レストランに予約が入っているらしい。午後から、釣りでもしたいな」

以前の惑星ロハスでの生活の影響で、アキオは何となく釣りが好きになっていた。

釣糸を垂らしてボーっとしつつも、時折り得物がかかってヒキで楽しませてくれる。

それほど釣り方や仕掛けの作成に詳しいわけではなかったが、今や趣味の一つにしても良いと考えるほどになっていた。

「わぁ、いいですね。私も釣りしたいです」

同じく、食べられる魚釣りなら好きになっていたミルフィーユも、アキオの意見に賛同する。

この前の惑星ロハス滞在時に、沢山釣れたのが嬉しかったのであろう。

「何が釣れるんだ？　ここは」

「マスの類が釣れるそうですわ」

タクトの質問に、ここの管理人から聞いた内容をミントが答える。観光用に、ブラマンシュ財閥が定期的に稚魚を放流しているようであった。

「じゃあ、私が持ち帰って料理しようかな」

「明日、食べさせてよ」

「いいですよ。でも、明日ですか？」

「俺、今日は泊まりだもの」

アキオは、ミルフィーユに今日はミントの別荘に泊まる事を伝える。

別に、婚前旅行云々という事ではなくて、アキオは純粋にダルノーの別荘で休暇を楽しむつもりであったのだが、フォルテ達の降下を知っているタクトはアキオが無事に別荘に泊まれるのか疑問に思ってしまう。

「（ミントっ！）」

「（大丈夫です。我が家の警備隊が、フォルテさん達を完全に排除いたしますわ）」

「（いや！　それは、何か拙いんじゃないのか？）」

それぞれに違うボートに乗っているのに、アキオから聞こえないように器用にヒソヒソ話をするミントとタクトであったが、肝心のアキオはまさかフォルテ達がそんな無茶をしている事を知らず、ミルフィーユは三人が何か楽しい事をしに行ったと思っていたので、自分達も休暇は楽しまないとと思っていた。

「そろそろお昼だし、レストランに行くか」

「私達は、お弁当なんですよ」

「半分分けてくれないか？　こっちも、半分分けるから」

「色々食べられて面白そうですね」

裏事情を知ってて隠している二人と、何も知らない二人は、午後からは釣りを楽しんだのであったが、別荘西北部の森林地帯では、この地ではいまだかつて無い戦いが始まっていたのであった。

「降下に成功したら、装備品を全て回収のうえ、森の中に入るんだ！」

「「了解！」」

少し時間を遡って、無事に降下に成功した三人は、すぐにパラシュートを片付けると、装備品を全て回収してから森の隠れられる場所で武器などに故障が無いかをチェックしていた。

「装備品は、全て無事です」

「なら、パラシュートのみをその場に廃棄。全ての装備品を所定の位置に装備してから、私の後に続いて前進だ」

フォルテは、一番先頭に立ってから、慎重に音を立てないように森の中を前進する。

あまり人の手の入っていない森は真っ直ぐ進む事すら困難であったが、それは敵も同じ条件という事で、むしろラッキーだと思うフォルテであった。

「せっかくの休みなのに……」

鬱蒼と草木の茂る森に、故郷の田舎の惑星を思い出したランファは、休暇がこんな事で潰れてしまった事にブツブツと文句を言う。

「ランファ、静かに」

そして、『やっぱり来なければ良かった……』と感じ始めるランファに、フォルテが口を塞いで足を止めるように言う。

同じくちとせも足を止めると、前方から草を踏む音が聞こえる。

どうやら、ブラマンシュ財閥警備隊の偵察小隊が、こちらに向かって歩いているらしい。

次第に草を踏む音が大きくなってくる。

「まだ素人だね。ちとせ、ランファ。三発の発砲音がしたら、それぞれに散って気配を消すんだよ」

「「了解！」」

フォルテは、すぐにゴーグルの暗視装置を作動させてから、敵兵の数を数え始める。
昼間ではあったが、森の中は大きな樹木で光が遮られていて、赤外線ゴーグルが役に立っていて、すぐに三人の敵兵の姿を確認する。
彼らは、辺りを見回しながらゆっくりとこちらに向かって歩いていた。

「数の優位に驕っているね。そんなものは、各個撃破すれば良いのさ」

フォルテは、サイレンサー付きのライフル銃で静かに冷静に敵兵を狙撃していく。
三発放った麻酔針の付いた銃弾は、一発も外れないで警備兵三人に命中し、彼らは短く悲鳴をあげてからその場に倒れてしまう。
倒れた彼らは、小さく呻き声をあげて体を小刻みに動かすだけであった。
即効性の麻酔薬が早速効いたらしい。

「最低三時間は動けないはずさ」

当然、前方に彼らを出していた警備隊は、次々と追加で増援を出すのだが、それはフォルテ達に各個撃破の機会を与えるだけであった。
三箇所に散っていたランファやちとせも射撃を始めていて、フォルテほど上手くは無かったが、無難に敵兵に当てていたからだ。
結果、三十分もしない内に二十名を超える敵兵を倒していた。

「うわぁ、麻酔弾でも当たりたくないわね」

ランファは、自分に撃たれて悶絶する敵兵を見ながら、フォルテの命令通りに前進を続けていた。

「フォルテさん、だいたいこれで全部ですか？」

「多分、そうだと……、障害物に身を隠すんだ！」

フォルテは、森の別荘側の入り口で久々に感じる鋭い殺気のようなものを感じていた。

あのまだ惑星サーヴァントに居た頃に感じた、ゴルゴーン隊のベテラン組や手練れのゲリラ達から感じる、自分を射るようなあの殺気交じりの視線。

どうやら、思ったほどのプロはいないと感じていたブラマンシュ財閥警備隊の中に、自分と同じ匂いのする人間が混じっているようだとフォルテは感じていた。

「お久しぶりですね、シュトーレン少尉殿。今は、大尉殿でしたかね？」

突然、前方から聞こえて来た中年男性の声に、フォルテは聞き覚えがあった。

過去に、惑星サーヴァントで自分に戦いのイロハを教えてくれた、モルト軍曹の声に良く似ていたからだ。

「モルト軍曹なのかい？」

「ええ、実は、退役時には准尉になってましたけどね」

久しぶりに再会した二人は、今が戦闘中である事も忘れて話を続ける。

「退役してたんだね」

「大尉殿は、大活躍ですね。新聞やニュースで見ましたよ。自分は、大尉が転任した直後に足を撃ち抜かれて、暫く療養してましてね……」

数ヶ月の入院生活後、怪我の後遺症は無かったものの、さすがにそろそろ限界であろうと感じて軍を退役し、知り合いの同じく軍を退役していた同期の友人に、この職場を紹介されたとの話であった。

「給料が良いんですよね、ここは。子供も二人になりましたし、上の子も学校に通い始めましたし、金がかかるんですよ。これが」

フォルテは、ベテランの軍人であった実戦の師匠の話に、この世の世知辛さを感じずにはいられなかった。

「軍曹も、色々と大変なんだね。だが、私もここは突破しないと駄目なんだよ。しかし、軍曹の指揮とは思えないほどの駄目さ加減だね」

「残念ながら、自分はいち警備員ですよ。ここには、無駄に元大尉だの少佐だのがいますから。それと、自分は元准尉です」

ブラマンシュ財閥警備隊は、元軍人もかなり多かったが、全員がフォルテやモルト元准尉のように実戦経験豊富なベテランというわけではない。

『軍を辞めてみたものの……』という連中も珍しくは無かったか

らだ。

元軍人は使える奴はいくらでも使い道があるが、駄目な奴は使い潰しが効かないという例の典型であった。

「ブラマンシュの会長も、意外と人を見る目が無いんだねぇ」

「本職の軍人の扱いなんて、会長殿の専門から外れますしね」

ただ誤解と解いておくと、それでもブラマンシュ財閥の警備隊の実力は、そこいらの民間企業の警備隊など相手にならないくらい強力であり、今日は相手が悪かったという他は無かった。

「ともはれ、軍曹一人なら、降伏をお勧めするけどね」

「そうしたいのは山々なんですけどね。お仕事の内容的に無理ですね。それと、自分は元准尉です」

一通り話の終わった二人はすぐに戦闘モードに戻り、フォルテは昔の誼でモルト元准尉に降伏するように伝えるが、彼はそれをキッパリと否定していた。

そして、更に自分の願望までを伝える。

「半分訓練形式で、銃も麻酔弾で人が死ぬわけでもないし。そこで考えたんですよ。『大尉殿と自分。サシでやったらどちらが強いんでしょうかね?』って」

「へえ、面白い事を考えるじゃないか」

二人は、ランファとちとせを完全に蚊帳の外に追いやってから、

お互いにギラギラとした殺気をぶつけ合う。
別段、二人は血を見るのが好きというわけでもなかったが、共にその実力を認めた同士、一度くらい真剣に戦ってみたかったという事なのであろう。
お互いが、自分が隙を見せないようにしつつ、相手の隙をつくためにライフル銃を構えながら、気配を殺して移動を開始する。

「私達は、完全に無視ね……」

ランファは、まるで漫画のような展開になったフォルテ達に真剣に呆れていたが、フォルテは二人の事を完全に忘れていたわけではなかった。
すぐに、ランファ達に次の命令を下す。

「二人とも、別荘まで急いで行くんだ！」

「ですが、フォルテさんは？」

「目の前の男は危険だからね。サシで決着をつける事にする」

「ランファさん……」

フォルテの、『ここは、自分に任せて先に行け！』的な発言にちとせは素直に感激していたが、ランファはフォルテの考えが手に取るようにわかっていた。
久々に再会したこの技量の優れた元部下と、純粋に力比べをしたいだけなのであろうと。

それと、今の時点でフォルテのテンションは最高の状態にあり、既に先の別荘での戦いなどどうでも良くなっている事もだ。

「ちとせ、行くわよ」

「はい！　フォルテさん、ご壮健で！」

いまだに盛大に勘違いをしているちとせと連れて、ランファは森を出て別荘への侵攻を再開する。

「ちとせ！」

「はい！」

ちとせは、準備をしていた軟化カーボンナノ製の弓に特殊な鏃を番えてから、それを森の外で自分達を待ち構えている警備員達の数メートル上空に打ち上げる。

すると、鏃の先に付いていた特殊な爆弾が爆発し、その爆発の下にいた警備員達に強力な唐辛子成分を含んだガスをばら撒き、彼らはその場で目や鼻を押さえてのた打ち回る事となる。

更に、数発の矢が警備員達の上空で炸裂して、待ち伏せ組の戦闘能力をほぼ奪い去っていた。

「うぐっ！」

ランファが、唐辛子ガスを逃れた数名の警備員達を麻酔銃で撃ち倒し、無事に森を出た二人は今度は別荘外苑部の壁によじ登り、無事に敷地内への侵入に成功する。

だが、二人を更なる試練が待ち構えていた。

「うわっ！」

「警備ロボットですか？」

外塀を越えて着地をした二人のすぐ傍を、数発の麻酔弾がすり抜けて行き、後ろの壁に針が突き刺さる。

前方を確認すると、数体の警備ロボットが二人に銃の照準を合わせている最中であった。

「隠れるわよ！」

「はい！」

ちょうど近くにあった、大き目の植木の陰に隠れた二人であったが、警備ロボットは更に数を倍増させて二人に迫っていた。

「この警備ロボットって、軍用じゃないのよ！」

「ブラマンシュ財閥だからです」

「ちとせ、冷静に事実を語らない！」

だが、二人には策があった。

今まで使っていた麻酔銃を廃棄すると、今度は別の銃を取り出して警備ロボットに向けて発射したのだ。

銃からは強電流を流す端子が発射され、それが命中した警備ロボットが次々と感電して動かなくなってしまう。

「これなら効くわね」

「はい！」

その後の二人は、獅子奮迅の働きを見せていた。
次々と電気銃で警備ロボットを行動不能にし、遅れて駆け付けた飛び道具を持っていない警備員達をランファが自慢の武術で、ちとせが電子警棒を使って次々と倒していく。

長く苦しい戦いであったが、空が赤く染まって夕焼けが現れる頃には、ランファとちとせ以外には庭で動く存在は確認できなくなっていた。

「勝ちました。勝ちましたよ。アキオさん」

「だから、何なのよ。私の休暇を返して欲しいわ……」

せっかくの休暇の夕方までの時間を全て無駄にしてしまったランファは、数十体の警備ロボットが煙をあげ、警備員達が痙攣して気絶しているブラマンシュ家の豪華な前面庭園で一人テンションを下げていた。
『結局、今日の自分の休暇は何だったのだ！』と感じていたからだ。

「お昼は、不味いレーションだったし。夕食くらい豪勢に行きたいわね」

しかも、降下以降は碌な物を食べていない。
戦闘の合間に、装備品の中にあった不味いカンパンと水筒の中の水を飲んだだけであった。

「それよりも、アキオさんです！」

「もう、あんな男はどうだっていいわよ」

ランファとしては、フォルテによって強引に実戦形式の訓練に近い物にほぼ一日参加させられ、まだアキオの顔すら見ていないのだから、文句の一つでも言いたかった。

というか、今になってどうして自分がこんな事に付き合ったのかも理解できなかったのだ。

「あとは屋敷の中です！」

一方、ちとせの方は一人まだ闘志を燃やしていた。

あとは、屋敷に居ると思われるアキオを奪えば、今日の夜と明日に薔薇色の休暇が待っている。

一緒に居られるのだ。

ちとせは、改めて気合を入れて銃を構えて屋敷の入り口に立つ。

すると、急に玄関のドアが開いて、中から一人の初老の男性が現れた。

「さすがは、ムーン・エンジェル隊の方々ですね」

「あの……、あなたは？」

丸腰で欠片も戦意を感じられないその男性に、ちとせはその勢いを削がれてしまう。

「ブラマンシュ家の執事長を務めております。ハンスと申します」

ハンスは、今日の戦いがフォルテ達の勝ちである事と、ミントの父親であるダルノー会長は、既に多忙なスケジュールをこなすべく

この星を出ている事。
そして、今日は一晩泊まって行けば良い事などを、ちとせとランファに伝える。

「あの……、アキオさんは？」

いきなり勝ちですと言われても、肝心のアキオがいない事にちとせは不安で一杯になってしまう。

「レイトン准将でしたら……「何だ、これは！　ゲリラの襲撃か何かか！」」

ハンスがアキオの居場所を言うよりも早く、午後の時間を先の湖でミントやタクトやミルフィーユと一緒に楽しんだアキオは、行きに乗って行った白馬にまたミントを乗せて別荘に戻り、正面玄関前の惨状を見て、ここがゲリラにでも襲撃されたのではと一人驚いていた。

「アキオさん……、っ！」

「あんた、楽しそうね……」

ちとせとランファは、フォルテが見事にダルノーに騙されていた事を知る。
アキオを取り戻す許可を与えたとはいえ、別にアキオが１００％屋敷に居る保障など無かったからだ。
更に、こんな無茶な戦闘を行わなくても、湖にアキオが居る事を察知していれば、簡単に彼を奪う事が可能であった。
つまり、自分達は全くの骨折りであったという事だ。

「「ミント……」」

そして、ランファとちとせの視線は、ダブルデートのような形になっていたが、午後の時間を楽しみ、満面の笑みを浮かべながら馬上でアキオにしがみ付くミントに向いていた。

更にその間にも、アキオが馬から先に降り、続けて背の低いミントが馬から降りるのを上手にエスコートしている場面を見て、余計に二人の怒りに火を注いでいた。

ちとせの怒りは激しかった。

自分の今までの努力が、全て無駄になった瞬間であったからだ。

ランファの怒りも激しかった。

自分達が、ミントとアキオがデートをするために利用された事を知ったからだ。

「ええと……。父が、大変な事をしでかしたみたいで……」

自分をジト目で見る二人に、ミントはタジタジになりつつも懸命に言い訳をしていたが、ミントが最初からこうなる事を知っていたのは、二人には完全にバレバレであった。

「（最近、危機管理能力が落ちたか……）」

同じく、周囲の状況やミント達の会話を元に大体の事情を察したアキオであったが、ここで『俺は知らなかった』と言っても、それは火に油を注ぐだけの事になるであろう。

余計な事は言えないので、アキオはただ乾いた笑みを浮かべながら沈黙するだけであった。

「アキオ、さぞかし楽しい休暇だったようね？」

「まあその……、楽しかったです……」

まさか、『そうでもない』などと言ってミントを悲しませるわけにはいかなかったし、実際に楽しかったので、アキオはランファの質問に正直に答えるのだが、ランファは次第に怒りが湧き上がってくるのか、体をプルプルと震わせていた。

「休暇としては何だけど、軍人の訓練としては有意義だったのでは？　ところで、参加はお二人だけで？」

「フォルテさんが首謀者よ……」

ダルノー会長とどんな交渉があったのかは知らなかったが、この奇妙な実戦演習を楽しめているのは、昔馴染みの元部下とガチコンバトルをしているフォルテだけであろう。

ランファは、アキオにモルト元准尉の話をする。

「屋敷にいたのなら、声をかけてくれれば良かったのに。でも、戦死とかしてなくて良かったな。彼は馴染みのベテランでね。俺も色々と教わったんだよ。しかし、彼がいるにしては警備隊が弱いなぁ……。まあ、凶暴なフォルテとランファがいるからなぁ……「誰が凶暴かぁーーー！」」

気まずさから色々と余計な事を口に出してしまったアキオは、前にシャワーを覗いてしまった時と同じく、再びランファの飛び蹴りを喰らって意識を飛ばしてしまうのであった。

そして……。

「はぁっ！」

「えっ！　何？」

同じく激怒していたものの、ランファの凄みに隠れて目立たなかったちとせであったが、いきなり彼女は気絶したアキオを『く』の字の状態で馬に乗せ、そのまま自分も馬に飛び乗ってその場を走り去ってしまったのだ。

いきなりのちとせの凄技に、ミントはおろかランファすらその場で呆然としてしまう。

いや、ハンスは冷静な表情のままであったのだが、内心ではかなり驚いているはずであった。

「烏丸中尉殿は、馬に乗るのが上手ですな」

「あんた、冷静ね……」

ところが、アキオの身柄どころか、この別荘の持ち物である馬まで奪われたのに、ハンスは表面上は冷静なままで、ランファはその事にも呆れていた。

「ジタバタしても、仕方がないという事でして」

「それは、そうだけど……」

「はあっ！」

そして、アキオの強奪に成功して馬を走らせているちとせは、そのまま別荘正面にある門まで辿り着いていた。

普段であれば、屋敷の警備員が門を閉めて阻止戦を張るのであろうが、その警備員達はフォルテ達との死闘でほぼ全員が戦闘不能になっていた。

つまり、ちとせの逃走を止める人間が誰も存在しなかったのだ。

「このまま町に逃げ込んで、どこかに泊まるとして……。はっ！私は何てふしだらな事を！」

まだ正式に付き合ってもいない男性と外泊をする妄想で顔を真っ赤にするちとせであったが、アキオという賞品を得た事ではあるし、その先を考えるのは後でも良いと考えていた。

とにかく今は、無事に正面の門を突破する事だけを考えるのだと。

ところが、不運にもたまたまこの門を潜り抜けようとする人間が二人いた。

「あーーー、今日は楽しかったけど、疲れたね」

「結局、弾切れで決着が着きませんでしたね」

「今回は華を持たせてあげるよ。次だと、軍曹も寄る年波には勝てないだろうからね」

「まだまだ自分は現役ですけどね。それと、自分は元准尉です」

結局、全ての装備を使い尽すまで戦ったにも関わらず決着の着かなかったフォルテとモルト元准尉が、疲れたのでフォルテは屋敷で夕飯でもご馳走になろうと、モルト元准尉は上司に今日の戦闘を報告すべく二人で話しながら正面の門に到着したのだが、目の前には既に全力で走っているちとせの馬が迫っている状態であった。

「ちとせなのかい！」

「あの微妙に攫われているのは、レイトン准将では？」

元はプロの狙撃手であり、とても目の良いモルト元准尉は、ちとせが『く』の字状に馬に乗せている人間が、自分の元上官である事に気が付く。

「ええぃ！　ちとせ！　ストップ！　ストップ！」

フォルテは、このままちとせを逃がすととんでもない事になりそうな予感を覚えて、咄嗟にその身を馬の正面に乗り出して逃走を阻止しようとする。

「っ！」

馬術に巧みなちとせは、いきなり飛び出したフォルテにも反応して、その数メートル前で馬を止める事に成功していた。

「ちとせ、アキオの奪取に？」

「はい！　大成功です！」

フォルテの質問にちとせは満面の笑みを浮かべていたが、真相は

我に返ってちとせを追いかけている、行動可能になった警備員達やミントやランファの『待てーーー』の声であった。

「何か、王子様を攫うお姫様って感じだね。でも、今日はミントの別荘に泊まった方が良いと思うよ。それに、その馬は窃盗罪だし」

「ですが！」

「その功績に免じて、明日はアキオを独占する権利を与える」

「ありがとうございます」

ちとせはようやく納得するのであったが、気を失っていたアキオは今になってやっと目が覚めていた。

「あれ？　ここは？　何で俺は馬に乗せられている？」

「しかし、レイトン准将も、意外と難儀な生活を送っているんですな」

モルト元准尉は、目が覚めたものの視界に地面しか広がっていないで疑問を感じているアキオに、しゃがみ込みながら話しかけていた。

「あっ！　モルト軍曹がいる」

「お久しぶりです。お元気そうでなりよりですな。それと、自分は元准尉です」

「この職場はどうなんだい？」

「まあ、待遇は良いですよ。結構訓練も温いから楽ですし」

「だよなぁ。言うほど精鋭でもないよな」

アキオとモルト元准尉はその後もそのままの姿勢で話を続け、この色々な出来事のあった休日の昼の部がようやく終了するのであった。

第二部　第三話（後半）

「今日は、最後の最後で酷い目にあったな」

「私なんて、休暇なのか訓練なのかわからなかったわよ」

「そのまま聞けば同情物だが、俺にまた気絶するほどの一撃を入れやがって！」

「うるさいわね！　誰が凶暴なのよ！」

昼間、アキオ本人の預かり知らぬ所で発生したアキオ争奪戦が無事に終了し、その関係者達は既に仕事でこの地を発っているダルノー会長の招待で、この別荘に泊まる事になっていた。

ミントとアキオの他に、フォルテ、ランファ、ちとせが、ハンスのもてなしで屋敷の応接室に案内され、豪華な食事を振る舞われる事になっていたのだ。

さすがに、ここままフォルテ達を帰すと不満が爆発するであろうと考えたミントとハンスの考えであった。

「実際に、凶暴じゃないか！　どこの世間に、人を蹴りで気絶させる女がいるんだよ！」

「あれは、失礼な事を言ったアキオに対する天罰よ！」

「まあまあ、ランファさんも、アキオさんも落ち着いてください」

応接間の机を挟んでソファーに座るアキオトランファがレベルの

低い口喧嘩をしている横では、ミントとちとせが懸命に二人を宥めていた。

ミントは、自分の父と企んだ三人を戦闘不能にして二人きりで別荘の夜を過ごす計画が破綻したので、今夜は露骨にアキオの独占を謀らない作戦に切り替え、ちとせは改めて冷静になってから自分の暴走行為を思い出して、『穴があったら入りたい』的な気持ちになってミントと同じく大人しくなっていて、常識的な態度で二人を宥めていたのだ。

特に、アキオを攫って馬に乗せて逃走を謀った話は、あとで確実にエルシオール艦内でネタにされるはずであった。

そしてフォルテは、モルト元准尉と一緒に、食前酒だと言って豪快に高そうな赤ワインを空けていた。

「さすがは、銀河一の金持ち。ワインの質が違うね」

「ですよね。こんな高い酒を飲める機会なんて、そうはないですからね。飲み貯めしないと」

アキオやフォルテの知己であり、一般警備員扱いで入ったにも関わらず、警備隊員で唯一夕方まで戦闘可能な状態にあったモルト元准尉は、ハンスからの好意で今日は一緒に泊まる事になっていたのだ。

二人は遠慮なしに、高級キャビアをクラッカーに載せて食べながら、屋敷所蔵の高級赤ワインをガブ飲みしていた。

「警備隊の副隊長に出世だって？」

「実戦での技量と、人の集団を指揮するってのは、微妙に違います

からね。上が居た方が気が楽ってものですよ」

今回その類稀なる戦闘能力を見せ付けたモルト元准尉は、ハンスの目に留まってその地位と待遇を上げる事に成功していた。

「両方を兼ね備えている奴なんて、そうはいないからね」

「大尉は、比較的その傾向が強いですけどね」

フォルテは一般兵士からの叩き上げであったが、部隊の指揮などでも優秀であった。

それに、周囲から言われているほど脳筋でもない。

でなければ、下士官が対象となっている選抜士官昇進試験に受かるはずなどないからであったし、ムーン・エンジェル隊の隊長など任されなかったであろうからだ。

「そういう話で言うと、アキオは天才だけどね」

「確かに、教え甲斐はありましたよ」

フォルテも、モルト元准尉も、惑星サーヴァントに着任したアキオに実戦的な戦闘技能を伝授していたが、僅かな期間で劇的に成長するアキオには驚いたものであった。

正直、『このまま教えていると、抜かれてしまうのでは?』と考えた事もあったのだ。

「今は、停滞気味だね。それに、他に色々と忙しいし」

「ですね。サーヴァントのジャングルでは、考えられなかった女難の相ですか……」

「みなさん、お風呂の準備が出来たそうです」

そこに、一人の若いメイドが現れて食事前にお風呂の準備が出来た事を伝える。

この別荘の風呂は地下から温泉が出るらしく、露天風呂では無かったがかなり豪華な浴室となっていた。

「いいねぇ。温泉なんだろう？　疲れが取れるよ」

「風呂に入る前に酒なんて飲んで大丈夫か？」

「そんなに飲んじゃないないよ」

アキオの忠告を無視して、フォルテは女性四人でお風呂に入る。

当然、風呂は男女別であり、アキオはモルト元准尉と一緒に風呂に入っていた。

「寒梅の熱燗が美味い」

「何か年寄りくさいですな」

男風呂では、アキオは日本酒の熱燗をお盆に載せてイカの塩辛を肴に一杯飲んでいて、それをモルト元准尉に窘められていた。

まだ二十二歳なのに、どうしてそんなにジジムサイ事をと思われたらしい。

「それは、偏見だと思うけどな」

「ところで、誰なんです？　本命は？」

『久々に会って、聞く事はそれかよ……』と思ってしまうアキオであったが、自分でもまだ良くわからないのに、答えなど出るはずもなかった。

「うちの曹長殿が違うのはわかりますけどね」

「でも、一応いるんだよ。フォルテにも」

「えっ！　あの人、恋愛なんて出来たんですね！」

アキオの衝撃の事実の暴露に、モルト元准尉は大声で驚いていたが、この別荘の男女二つの風呂は換気のために上が繋がっている事が不幸に繋がった。

隣の女風呂から石鹸が飛んで来て、モルト元准尉を直撃する。

誰が投げたのかは、もはや言う必要は無いであろう。

「アキオ！　余計な事を言うんじゃない！」

アキオの言うフォルテの『良い人』とは、勿論ウォルコット大将の事である。

他人が聞くと本人達は必ず否定するのだが、その割りには良く連絡は取っていたし、時間が会えば直接会う事もあるらしい。

既に周りの人達が敢えて言わないほど、ある意味公認な関係ではあったのだ。

「図星ですか。そうですか。自分は、心配していたんですよ。あんなに綺麗で若いのに、部隊で誰も口説く奴がいないから。もし自分が独身で十歳も若ければね……。まあ、もしそうでも絶対に口説きませんけど……」

「やっぱり、口説かないじゃないか……」

最後の一言が気に入らなかったのか、モルト元准尉は再び石鹸を頭に直撃していた。

「相変わらず、勇ましいですな」

頭を摩りながら、モルト元准尉はフォルテの過去を思い出す。

ゴルゴーン隊所属の時には、フォルテは周囲からはまるで女だと見られていなかった。

配属当初に、寝室に夜這いをかけようと考えた不届きな奴もいたらしいが、そいつは両手両足を蓑虫のように縛られて、フォルテの寝ている宿舎の庭の木に吊るされていたとの事であった。

勿論、アキオが転属して来る前の話であったが、この一件以来、ゴルゴーン隊でフォルテを女扱いする人間は一人もいなくなっていた。

「それで、我らの曹長殿は外れるとして、あと三人ですか。贅沢ですな」

容姿は幼いが、美少女でブラマンシュ財閥の跡取りであるミント。

黒髪が綺麗な、過去には大和撫子と呼ばれていたであろう、同じく正統派美少女であるちとせ。

そして、少し元気過ぎるようであったが、スタイル抜群で同じく金髪美女であるランファと、確かに贅沢過ぎる悩みであると言えば悩みであった。

「まあ、長い人生です。焦らないように」

モルト元准尉としては、以前とは違ってアキオが闇を背負っていない今の状況は悪くないと思っていたし、それに貢献したのはフォルテを始めするあの少女達なのであろうとも思っていたのだ。

「あーーー、疲れた体には温泉が一番ね。でも、露天風呂が無いのは致命的ね」

「あるんですけど、一度に二人くらいしか入れないんです」

同じく女風呂では、女性陣が取り留めの無い話をしていた。

ランファは浴槽で体を一杯まで伸ばし、ちとせは今日の戦闘で汚れた髪を丁寧に洗い、ミントはちょこんと浴槽の端に座っていて、フォルテは相変わらず酒を飲んでいた。

アキオが準備して貰った熱燗を、自分も貰って飲んでいたのだ。

「フォルテさん、アル中になりますよ」

「大丈夫だよ。このくらい」

ランファは、よくそんなに酒ばかり飲めるものだと、感心しながらフォルテを見ていた。

「ところで、露天風呂もあるんだね」

「ええ、こちらは二十四時間使えますので、二回目のお風呂に入りたい方にはお勧めですわ」

ミントの初期の計画では、『これにアキオと入れたら、作戦成功だったのに』という気持ちと、『まだそこまでは早いのでは?』と

いう気持ちがせめぎ合っている状態で、結局露天風呂はまだ誰も使っていなかった。

最近どうも、ちとせとの競争が停滞しているような気がしたので一気に勝負をかけてみたのだが、結果は自分の所の警備員の不甲斐無さを知るだけであった。

「ねえ、ミント」

「はい、何でしょう？」

今日一日はある意味ミントのせいで大変であったが、別に全ての責任がミントにあるというわけでもなく、こうして高級別荘に泊めてくれた事もあって、既にランファには彼女に対するわだかまりは存在していなかった。

その辺のサッパリした部分がランファの美徳の一つであったのだが、一つだけに気になっていた事をミントに聞いてみる。

「あの数十体の警備ロボット。高いんじゃないの？」

大半は修理すればまた使えるはずであったが、あれだけの数の警備ロボットの修理費ともなれば、結構な金額になるはずであった。

『力ずくで来れば良い』とダルノー会長からは言われているらしいので責任は無いのであろうが、気にはなっていたランファであり、同じく髪を洗っていたちとせも、気になるのか体をビクっとさせていた。

「案外ランファも良い子なんだね。ちとせは最初から良い子だけど」

「人を子供扱いしないでくださいよ」

フォルテの子ども扱い発言にランファは不機嫌になるが、続けてフォルテが言った事には納得してしまう。

「あの警備ロボットは、私達と戦って経験値を積めたし、データも取れただろうね。警備隊の連中には良い訓練になっただろし、組織の見直しも行えたんだ。少なくとも、マイナスにはなってないね」

「フォルテさんの仰る通りですわ。あの父の事ですから、ただ無意味に損失を出すはずもありません」

警備隊は、モルト元准尉という隠れていた逸材を見つける事が出来たし、警備ロボットに関しては、これは元々試作品の類であった。

一部内戦地帯や紛争地帯の除いて、元々トランスバール皇国軍は次第に人間の歩兵を少なくしたい方向に進んでいて、これはエオニアの乱で改まる可能性もあったのだが、実は全く改まる事はなかった。

エオニアは、一部傭兵を除いて人間の歩兵をほとんど持たずにロボット兵を多用していたが、それでも十分に脅威であったし、それをエオニア戦死後に占領地から駆逐したのは、主にトランスバール皇国軍海兵隊の連中であった。

これも人間の歩兵ではあったが、元々少数精鋭の海兵隊はその養成に時間と金がかかるし、非常にコストパフォーマンスに優れた部隊であったので、削減の対象にはならなかった。

削減の対象となったのは、各惑星政府でも多数を所持している通常に陸軍部隊に所属する兵士達であった。

元々志願者も少なかったし、戦後の復興で人材が民間や官庁などに寄った影響で余計に志願者数も減り、更に軍から転職する人間も

多かったので、その穴を埋めるべく各社でロボット兵士の売込みが始まっている状態であった。
勿論、初期コストはロボットの方が高いが、ロボット兵士に給料など払わなくて良いし、戦死・戦傷保障や軍人年金も必要なかったし、維持費も人間の兵士ほどかからない。
移動の際にも、あまり生活環境に配慮しなくて良いし、壊れても修理すれば使える可能性もあったし、最悪でも部品取りくらいは可能であった。

当然、ブラマンシュ財閥の系列企業も、警備・歩兵ロボットの軍への売り込みを開始していて、この別荘に置かれているのはその試作品の類なのであろう。
ならば、それを戦闘で壊しても経験値が入る事を考えれば、決して損な話では無いと考えるフォルテであった。

「喰えないね。ミントの父上は」

そう言いながらフォルテは浸かっていた浴槽から勢い良く立ち上がった。
あまり長風呂は好きではないらしく、更衣室に向かって歩き始めるのだが、そのスタイルはミントが落ち込んでしまうほどの素晴らしさであった。
ただ、そのオッさんのような歩き方が、全てを台無しにしていたのだが、それにミントは気が付いていないようであった。

「フォルテさんも、ランファさんも、ちとせさんも、羨ましい限りですわ」

アキオが巨乳好きかは知らなかったが、フォルテはムーン・エンジェル隊一の、今までの人生で役に立ったかはわからないが巨乳で

あり、ランファは武術をしているだけにスタイルも良く、フォルテに続いて胸も大きかった。
そしてちとせであったが、これも標準かそれ以上のというか、どうやら彼女は着痩せするみたいで、ミントは余計に、自分のお子様体型が気になっているようであった。

「（アキオさんは、大人の女性の方が好きなのでしょうか？）」

そんな事を考えて暗くなってしまうミントであったが、それに渇を入れたのは、更衣室に向かって歩いていたフォルテであった。

「アキオが、女の外見的な容姿だけで靡くなんて、甘っちょろい考えをしているのなら、勝利は覚束ないだろうね」

「フォルテさん……」

「男を落とすには、母の厳しさと優しさと。そんな物も必要だろうね」

「それを、世間ではマザコンと言うんですけど……」

フォルテの考えに、ランファが静かに反論をする。
さすがに、マザコンな男は恋愛対象外であると考えたからだ。

「男は基本的に全員マザコンなのさ。要は程度問題なのさ」

「本当ですか？　それ？」

ランファは、エルシオールにいる男達の事を想い出してみるが、自他共にマザコンらしいのはアキオだけであると思っていた。

他の三人は、あまり自分の母親の話などしないからだ。
だが、アキオだって人に聞かれなければ母親の話などしない。
ランファが言い過ぎなのであろうと、ミントとちとせは秘かに思っていた。

「深く付き合い始めると、そんな話も出てくるのさ。その時に、無意味に引くと関係崩壊の危機になるね。確実に」

フォルテの、自分の実経験なのか、他所から聞いて来たのか良くわからない忠告ではあったが、ミントの体型に関するコンプレックスが消えたのは事実であった。
だが、ランファには一つだけ気になっている事があった。

「フォルテさん、そこそこ為になる話だったんですけどね」

「そこそことか、ランファも素直じゃないね」

「いえね。いつまでそこで仁王立ちに？　女同士とはいえ、羞恥心くらい持ってくださいよ」

浴場の入り口に近い場所で、真っ裸で仁王立ちになって忠告をするフォルテに、ランファの鋭いツッコミが入るのであった。

「やっぱり、元ゴルゴーン隊組は上手いな」

「これと、カードくらいしか娯楽が無かったですかね」

お風呂から上がった一行には、その後豪華な食事が振る舞われ、食後もデザートやお酒を楽しみながら、たまたま娯楽室に置いてあったダーツを楽しんでいた。
腕前は、フォルテや元モルト准尉はプロレベルの腕前と言っても過言で無いほどであり、アキオもかなり上位の腕前を見せていた。
実はゴルゴーン隊にいた時には、ダーツやカードなども教わっていたからだ。

「フォルテはダーツは上手い癖に、洋弓は下手だったよな」

「直接投げるのは得意なんだけどね。間に一個道具が介在するとね」

「銃はどうなんだよ？」

「アレは、別物なのさ」

そう言いながらフォルテが投げたダーツは、全て的の真ん中のエリアに突き刺さり、アキオの投げたダーツも五本に四本は同じく真ん中のエリアに突き刺さっていた。

「上手く的に当たらないです」

「もう少し利き足を前に出して、それを体の中心線にダーツを構えて……」

「アキオさんは、お上手ですね」

「先生が良かったんだよ」

アキオは、ミントとちとせに手取り足取りダーツの投げ方を教えていた。

フォルテは、自分が教えても二人は喜ばないだろうと思って手を出さなかったし、モルト元准尉もその辺の事を容易に察するほどの人生経験は積んでいる。

ミントとちとせは、アキオと体を密着させながらダーツの投げ方を教わって大満足なようであった。

「私は、セクハラ先生のご教授はいらないわよ」

続けて、ランファもダーツを投げるのだが、彼女がどんな投げ方をしてもダーツは的のど真ん中に近い場所に突き刺さり、全員を驚かせていた。

「上手いな。ランファは」

「技術の問題じゃないのよ。集中力と精神力の賜物ね」

武術の本格的な修行を受けていたランファらしい発言であったが、そんな事を真似できる人間は、少なくともこの場には他に一人も存在しなかった。

「あの娘は、本気で怒らせない方が良いかもしれませんな」

「素手でランファに勝ち目のある人間は、そうはいないからね」

ランファの身体能力と戦闘能力について語る、フォルテとモルト元准尉であった。

一通りダーツを楽しんだ面々は、次の時間潰しの手段を探し始める。

すると、ランファが室内に置いてあった占いの本を発見していた。

「マダムギョクリーの最新刊じゃないの。こんな物も置いておくんだ」

「メイドさんの私物かもしれませんわね」

「ちょっと、借りちゃおう」

「私も興味ありますわ」

思わぬ宝物を見つけたランファは、ミントと一緒にその占いの本でここに居るメンバーの事を占い始める。

「モルトさんは、特に悪くもなく良くもなく。普通ですね」

「だと思いましたよ。家族もいるから堅実が一番ですけど」

特に良くも悪くもないという、占いからすれば盛り上がりに欠ける内容であったモルト元准尉であった。

「フォルテさんは、金運が少し駄目ですね。恋愛運は上昇中。健康運が一番良好ですね。あんなにお酒を飲んでいるのに……」

「酒は百薬の長なのさ」

とはいえ、金運が悪いのは少しショックなフォルテであった。
それと、ランファにアル中認定されつつある事もだ。

「ミントは、金運は最高レベルね。当たり前ではあるけど。ちとせは、仕事運が良いわね。私は……」

ランファは、自分への占いの結果に愕然としていた。
なぜなら、『恋愛運は今年から来年が大ピーク中。運命の人が現れる』だったからであった。
しかも、アキオの分も占うと、恋愛運に関しては全く同じ結果が出ていたのだ。
ちなみに、ミントとちとせの恋愛運は、徐々に上昇してはいるが先行き不明という、『実はマダムギョクリーは、自分達を観察しているのでは?』と考えてしまうような結果が出ていた。

「アキオは、仕事運はマイナスよ」

「プラスを言えよ」

別に占いなど信じていないアキオであったが、マイナスしか言われないの勘弁して欲しいと思っていた。

「金運と健康運は良いみたいですわ。良かったですね」

「そうですよ。人間は健康が一番です」

この占いの結果によると、ミントとちとせはランファにアキオを取られてしまうという結果にもなりかねなかったので、二人は懸命にアキオに恋愛運は伝えないようにしていた。

勿論、ランファにアキオ以外の運命の男性が現れる可能性もあったが、現時点で二人を意識させるのは危険だと感じたからだ。
ランファも、この『好きかもしれない』などと中途半端な事を言う男が運命の男性だとはまだ考えたくは無かった。
悪くはない男であったが、まだ決定的な何かが無かったからであった。

「さて、そろそろ寝るかね」

「考えてみたら、自分は明日は仕事ですし」

「年なんだから、ちゃんと休まないと」

「そこまで年寄り扱いしますか？　普通」

時間も大分遅くなったので、フォルテの提案で全員で就寝する事にするが、部屋は全員に個室が与えられるという贅沢ぶりであった。
アキオ達は、この世の中には想像もつかない金持ちがいるのだと感心しつつも、それぞれに案内された部屋に入る。

ところが、アキオはまだ眠くはなっていなかった。

「何か、眠れるまで……」

部屋を見渡してみるものの、特に本などは置かれていなかったので、適当に新聞を読んでからは暇になってしまうアキオであった。

「そういえば、露天風呂があるって言ってたよな」

窓の外を見ると、この星にも月が存在しているらしく、しかも満月で雲一つ無い星空の真ん中で綺麗に黄色い光を放っていた。

「月見風呂も悪くない」

アキオは、部屋を出て一人露天風呂のある場所へと移動する。

露天風呂用の更衣室には誰もおらず、アキオは一番で露天風呂に入る事に成功していた。

中に入ると、確かにあまり広くはない露天風呂であったが、無理をすれば四～五人は入れる広さであり、ミントの言う二人とは二人で悠々とという意味なのであろう。

アキオは星空に見える満月を見上げながら、ゆったりとお風呂に浸かっていた。

「思えば、俺も平和な生活を送れるようになったものだ」

強奪船団が世間を賑わせているにも関わらず、アキオは今のこの状況を平和だと感じている。

数年前は、世間はほとんどの人たちが平和を感じていたのだが、肝心のアキオは極例外の緊迫した日々を送っていたので、これは、人はその立場によって大きく環境が変化するというやつなのであろう。

それと、先ほど食事の際にモルト元准尉が見せてくれた写真についても考えていた。

彼は奥さんと、今年小学生になった息子と生まれたばかりの娘の写真を見せてくれた。

自分と同じく、かなり長い年月を戦場で生きて来た彼であったが、普通に結婚して子供が出来て、家族を養うのに懸命に働いている。

なら、自分にもそれを行う時期が来るのではないのか？
そんな事を漠然と考えるようになっていたのだ。
もし、それを意図して自分に写真を見せたのなら、彼は相当な策士でもあると感じたのだが。

「子供とかが生まれると、俺も変わるのだろうか？」

戦場では誰よりも冷静で、時には上官である自分にも厳しい意見を言う男であったモルト元准尉であったが、写真を見せた時は誰よりも嬉しそうな表情をしていた。
多分、何も事情を知らない無責任な人に言わせれば、『人殺しの癖に』という意見になるのであろうが、それこそ何の事情も知らない人間のたわ言にしか過ぎない。

と同時に、そういう風に考えられるようになった自分がいる事にも気が付いていた。
だが、ジュニアハイスクールの頃とは違い、どうにも自分の恋愛に関する不甲斐無さにも気が付く。
ミントやちとせにフラフラして彼女達をヤキモキさせ、良く理論的には一番ありえないランファに、『好きなのかもしれない』などと言ってしまう。

もしタクトに相談したら、彼は何と答えるのであろうか？
レスターには聞くだけ無駄であろう。

次々と湧き上がってくる取り留めの無い考え事を、特に答えを出す出なく月を見ながら右から左に流すアキオであった。

「あら、先客がいるのね？」

ふと声がした更衣室のある入り口に視線を向けると、入り口のガラス戸に明らかに女性とわかる人影が映っていたが、その背丈と声ですぐにランファだと気が付くアキオであった。

「悪いな、すぐに上がるから」

この露天風呂は混浴でもないし、アキオとランファは付き合っているわけでもない。

なので、アキオは自分が上がるまで待っているようにランファに伝えるのだが、そこで彼女から意外な言葉が出る。

「アキオ、更衣室を背に後ろを向きなさい」

「えっ？　それは……」

「いいから！」

アキオは答えに至るよりも早く、半ば本能で更衣室のある入り口から背を向ける。

そして、背後から聞こえる布の摩れる音と合わせて、彼女のしようとしている事に気が付く。

ランファは、アキオと一緒に露天風呂に入ろうとしていたのだ。

「（あいつ、何でこんな事を？）」

一言も発しないでアキオがランファの真意を考えている内に、露天風呂の入り口のドアが開き、タオル一枚だけで体を隠したランファは入って来る。

だが、アキオがその姿を直視する事はなかった。

「いい、覗いたら殺すわよ」

「過去の件も考えてそれはしないが、ランファのしている事もおかしいと思うぞ」

「うるさいわね」

ランファは、ブツブツと文句を言いつつも静かに湯船に浸かり、ちょうどアキオと背中合わせの格好で湯船の底に座っていた。

「はぁーーー、露天風呂もいいわね。月が満月で綺麗。故郷を思い出すわ」

「ランファの故郷の星にも、月があるのか」

「ええ、色は赤くて風情は無かったけどね」

「首都星トランスバールは、白き月が見えたからな。色は本当に白かったけど……」

「色は白いけど、アレはもっと風情が無かったわよね」

「そうだな……」

二人は、なぜか本題に入らずに全く関係のない話を始めていた。背中を向けているとはいえ、お互いに裸同士であったので先に気恥ずかしさを紛らわしておこうと考えたのだ。

「それで、何でこんな事を？」

「逆に聞くわよ。『好きかもしれない』って何よ？」

いざ本題に入ると、この二人は微妙に噛み合わない。

ランファが質問に質問で答え、これが周囲から二人が仲が悪いと誤解される原因にもなっていた。

「正直、俺もよくわからないよ。本当は、ランファみたいな女は全然好みじゃないしな」

「言うわね。私もよ」

「じゃあ、フォルテのゲームに付き合わないで、町で買い物でもしていれば良かったじゃないか」

「色々とあるのよ」

そもそも、ランファがフォルテの企みに参加した表面上の理由は、彼女に少し借金があったからであった。

給料日前に、通信販売の限定販売アクセサリーを見つけて、手持ちが少し足りなかったのでフォルテから借りただけの事で、これは給料日になれば簡単に返せる額の物であった。

『額も少ないし、チャラにしてやる』と言われて、節約のために助っ人として参加した。

フォルテの企みを感じないでも無かったが、自分ではそれで納得してあの模擬戦闘に参加したわけだが、心の奥底ではアキオの独占を謀っていたミントへの意趣返しもあったのかもしれなかったし、自分が参加しないでちとせに独占させるのも嫌だったのかもしれない。

だが、自分で独占するのも変だと思ったし、なのでこの結末には

そこそこ満足している。
ミントの別荘での待遇が良かった事もあったからであろう。

「ランファは、俺の事をどう考える？」

「えっ！」

「恋愛は、相思相愛が基本じゃないか。じゃあ、ランファは俺の事が好きなのか？　嫌いなのか？」

「いっ！　いきなりそんな事を聞かれても……」

アキオのストレートな質問に驚いたランファは、思わず背中を丸めてしまうのだが、その反動で二人の背中が引っ付き、その僅かな時間で感じたお互いの体温で二人は心臓の鼓動を速めていた。

「急ぎ過ぎたのかな？　すまん……」

アキオはバツが悪そうに謝るが、普段とは違ってその自信なさ気な態度に、ランファは驚きを隠せないでいた。
いつもの頭がちゃんと回って余裕を持って対処する案件とは違って、彼にこの件に対する余裕が感じられない事に驚いていたのだ。

アキオは、自分に好意を持っているミントやちとせには余裕を持って紳士な態度で接する事ができる。
だが、自分が相手になると平気で口が悪くなるし、良く口喧嘩もする。
どこか、自分にはミントやちとせとは違う感覚というか感情を抱いているようであった。
それが恋愛感情なのかどうかはまだわからなかったが、今はそれ

がわかれば十分だと思うランファであった。

アキオも、普段は自分に対して勇ましい事を言う癖に、核心に迫ると口篭ってモジモジとしてしまうランファに、『可愛い所もあるんだな』と、女性として見直してもいた。

結局、こんな事までしてもお互いに真理には至らなかったのだが、モルト元准尉の『焦らない事ですね』という発言を思い出し、一応の成果はあったのかとも思うアキオであった。

ランファも、この件に対してはこれ以上の事は何も言って来なかった。

傍から見れば、こんなに不器用な二人はヤキモキするのかも知れないが、これもこの二人の個性なのであろう。

「そう言えば、モルト元准尉の子供は可愛かったな」

アキオは、嬉しそうに家族の写真を見せるモルト元准尉の事を思い出していた。

「へえ、アキオは子供なんて好きなんだ」

「大人と違って、目が擦れてないからな」

「アキオが、擦れ過ぎなのよ……」

一瞬、二人の脳裏にミルフィーユの姿が浮かぶのであったが、彼女は数少ない擦れていない例外だなと思う二人であった。

「結婚して、子供が出来て、その子と動物園や遊園地に行って……。

そういうのも悪くないけど、少し不安が残るな……」

その不安の元とは、自分の亡くなった父親の事なのであろう。

いくら親を嫌っている子供でも、その子が大きくなるとその親とまるで同じ行動をする人間がいるらしい。

碌でも無い父親と離婚した母と母子家庭で育った娘が、自分も母親と同じように離婚して母子家庭になる事が多いというデータがあるのだが、アキオは、『自分が、血を分けた子供を殺そうとするのではないか？』と、それだけが心配なようであった。

「あんたの家は、例外中の例外よ。まあ、そんな事を悩めるようになっただけマシなんじゃないの？」

「うちの家系は、子供が生まれ難いのかもな」

「そういう悩みは、結婚してから考えなさいよ」

アキオは、それとなく普段は決して人には話さない心の奥の感情をランファに見せる事があったし、アキオの悩みにすぐに気が付き、それに気安く答えるランファは、やはりどこかミントやちとせとは違う存在であるらしい。

それを再確認し合った二人は、暫く背中合わせで取り留めの無い話を続け、それを満面の月が見下ろしていたのであった。

「というわけで、楽しかったんだが、疲れもしたんだよ。これが…

…」

次の日の夕方、休暇を終えてエルシオールに帰還したアキオは、食堂のテーブルに突っ伏して、珍しくレスターと一緒に話をしていた。

勿論、ランファと露天風呂に入った事は内緒であったが、他の事はそれなりに話していた。

「俺は、艦内に居て正解だったようだな」

「それもどうかと思うが……。ところで、タクトはどこにいるんだ？」

アキオは、こちらに物悲しそうな視線を送るアルモに同情しつつ、いつもは艦内をフラフラとしているタクトの所在を尋ねる。

「あいつなら、始末書を書いている」

「装備品紛失の？」

「正解だ」

フォルテとダルノー会長が企み、タクトが半ば黙認して行われた『アキオ争奪杯模擬戦闘大会』とでも名付ければ良いのか、昨日の模擬戦闘でフォルテ達は多くの訓練用の物資を紛失していた。

専門的な部隊でも無いので、その装備品は滅多に使用される事もなかったのだが、まさか無いままで済ませるわけにはいかないのが軍隊という組織であり、対テロリスト用と訓練用を併用している麻酔銃の弾薬と電気銃用の電子端末弾や、消費された携帯食糧や飲料水など、これらは当然申請を行わないと補充されるはずもなく、本

来は申請書なのであろうが、どうにも使用理由が曖昧なのと、軍上層部に真相を報告する事が躊躇われたので、結果的に責任者であるタクトがお上に怒られないように、辻褄を合わせて始末書を書いている所であった。

さすがに、これには手を貸さないレスターであった。

「あいつ、そういうのは得意そうだな」

「人を喰ったような男だからな」

アキオとレスターは、始末書の文言を唸りながら考えているタクトを記憶の外にやってから、次の話題を始める。

「お前、そんな私服を持っていたんだな」

「ちとせのコーディネートさ」

今日の休暇二日目では、賞品のアキオは見事ブラマンシュ警備隊の殲滅に成功したちとせに手渡され、彼女とアキオは町で買い物や食事を楽しんだのだが、その際に私服を数着見繕って貰ったのだ。

アキオの私服の少なさは、レスターですら呆れるレベルであったので、多少は服のレパートリーが増えて素直に良かったと思うレスターであった。

「ちとせに、金を出して貰ったのか？」

「俺はどこのホストだよ。金は俺が出したよ。コーディネートは頼んだけど」

これも、アキオの古臭い部分ではあった。
良くランファやフォルテに集られて文句を言っている癖に、いざ女性と出かけると、全て自分が金を出さないと済まない性分なのだ。
前時代的とは言いつつも、遠慮なく奢って貰うランファやフォルテと、それに感謝しつつも少し申し訳ないと思うミントやちとせやヴェニラやミルフィーユというのが良くある光景であり、今日も午後からランファとミントに会ってしまい、そのまま主にランファに容赦なくオヤツだの、生活物資だのの代金を集られる事となっていた。

『昨日の迷惑料よ！』

そう言い放つランファに、多少の覚えがあるアキオは苦笑するしかなかったのだ。

「それは、災難だったな」

空になったサイフを自分に見せるアキオに、レスターは改めて女という生き物の難しさを実感していた。

「レスターは、どこかに出かけるとか無いのか？」

「たまにはあるさ。ちょっとした資料や、参考文献やら、専門書で勉強もしないといけないからな」

「いや、遊びでだよ」

「そんな物は、任務には不用だな」

以前はあまりレスターの事は言えなかったアキオであったが、改めて彼の行動パターンを聞くと、その異常性に驚いてしまうアキオであった。

「じゃあ、給料はほぼ貯金か？」

「そう言う事になるな」

「結婚資金とかで貯めているのか？」

アキオの質問内容に、二人の様子を伺っていたアルモが反応するが、レスターの答えは彼女の期待を裏切るものであった。

「老後の資金だな」

「老後なのか？」

「今は仕事が全てとはいえ、軍には定年という物があるからな。年金も支給されるだろうが、老後は色々と物入りだ。多少の蓄えがあった方が安心だ」

「間違ってないけどな……」

レスターの全く隙の無い回答に、アルモは明らかに気落ちしていた。

彼が、結婚願望の欠片も持ち合わせていない事を知ったからだ。

というか、アキオに言わせれば恋愛感情すら皆無であり、頭の中ではひょっとしたら仕事の事しか考えていない可能性もあった。

「まあ、まだ若いんだし、結婚くらい視野に置いたら？」

そんな事が言えるようになったアキオは、大きく進化したとも言えるのだが、それもレスターの凄さによって見事にかき消されていた。

「ええと、それでこれからの予定は？」

「レダ星系への移動だけだな。ただ……」

話題を変えて、これからのエルシオールの行き先について聞いたアキオにレスターが軍上層部からの命令を伝える。

惑星サンサを出て、このままレダ星系の主星である惑星レダへと向かい、そこで改めて命令を受けるようにという命令文であったらしい。

「強奪船団の掃討でもさせるのかね？」

「いや、もっと大規模な作戦が立案されているという噂もある」

どこから聞いて来た噂かは知らなかったが、レダ星系に強奪船団の拠点が存在していて、現在軍の偵察部隊が全力を挙げて、これを精意捜索中との事であった。

「エルシオールも含めた、それなりの戦力で討つと？」

「可能性は高いな」

「そうか……」

アキオもレスターも、これから始まるという噂の軍の作戦に改め

て身が引き締まる思いであったが、後にこの作戦がトランスバール皇国軍の戦史に残る悲劇として記載される事になるのであった。

第二部　第四話

「敵戦力は、巡洋艦クラスが二隻、駆逐艦クラスが六隻です！」

「少ないな……」

「陽動か？　いや、今の時点でそんな事をする意味が無い……」

アルモからの敵発見の報告に、レスターとタクトは暫し考え込む。

惑星サンサでの修理と補給を終えたエルシオールは、トランスバール皇国軍本部からの命令により、レダ星系への道を急いでいた。

途中、強奪船団の奇襲を心配する声もあったのだが、エルシオールの通る航路は比較的安全とされていたし、定期的に哨戒艦隊の通る場所でもあったので、エスコートを呼ぶ時間的損失と合わせて単独航行となっていたのだ。

だが、なぜかこういう時には嫌な予感は的中するもの。

レダ星系まであと少しという所で、エルシオールは強奪艦隊と思しき所属不明艦隊の襲撃を受けていた。

「ムーン・エンジェル隊、発進！」

「「「「「了解！」」」」」

タクトの出撃命令で、五機全ての紋章機が出撃するが、この時点で敵艦隊の運命は既に決まっていた。

その程度の戦力では、エルシオール指一本触れる事すら出来ずに、

無駄に損害を増やすだけであったからだ。

ムーン・エンジェル隊に攻撃を受けた敵強奪艦隊は、僅か十分ほどで全滅して戦闘は終了する。

「最近、連携も良くなって来たね」

「そりゃあ、結構私達も長いですからね」

フォルテの、ムーン・エンジェル隊隊長としての総評に、ランファがすぐに機嫌よく答える。

現在、紋章機の性能と各パイロット達の習熟度が相まって、ムーン・エンジェル隊の戦闘力はトランスバール皇国軍屈指であるとまで言われるようになっていて、それは決して誇張ではなかった。

ムーン・エンジェル隊の創設以来、新しいロストテクノロジーの塊であり、全くの未知数であった紋章機を一から根気良く運用して来た成果であり、彼女達の相応の努力が報われたという結果でもあったのだ。

「ミントも、フライヤーの使い方が上手くなったし」

「昔は、『私の攻撃の邪魔だ！』って怒られましたわね」

トリックマスターのフライヤーは、どこにでも展開できるのが利点であったが、逆に他のメンバーが攻撃をする際に邪魔になるという欠点も持っていて、的確な攻撃のポイントとタイミングを掴むのにミントは苦労していた部分もあった。

「ヴァニラの支援のタイミングが良くなった」

「ありがとうございます」

ナノマシンによる修復が売りのハーベスターであったが、これも常に自分の居場所に気を付けないと、いざ修復の時にモタついて間に合わなかったり、時間差で二機の修復を行おうとした時に混乱したりと、その辺のタイミングも、ベテランのフォルテが根気良く指導していたのだ。

「ちとせも、シャープシューターの取り回しが良くなったよ」

「いえ、フォルテさんのご指導のおかげです」

遠距離砲撃能力が売りのシャープシューターは、敵に入り込まれると脆いという弱点を抱えている。

そこで、常に敵に近寄らないように動く事を口が酸っぱくなるほどフォルテは言い続けていて、その成果もちゃんと出ているようであった。

「うん、良かった、良かった」

「ところで、私はどうなんですか？」

「まあまあなんじゃないのかい？」

最後に、『自分には褒める所は無いのか？』と尋ねるランファであったが、フォルテから言わせればこの隊の二番目の年長者で、その辺は踏まえて動いているランファに何も言う事などなかった。

ある意味、最高の褒め言葉かもしれなかった。

「ここは、部下を褒めるのが上司の仕事ですよ」

「ランファは、偉いねぇーーー」

「私は、どこの幼稚園児ですか」

二人の掛け合い漫才に、他のムーン・エンジェル隊のメンバーや、エルシオールのクルーからも笑い声が聞こえ始めるのだが、この中で唯一暗い表情をしている人物がいた。

「……」

戦闘後にブリッジに飲み物を持って来たミルフィーユであったのだが、その彼女の変化に気が付いたのは、今の時点ではアキオだけであった。

「悩みでもあるのかい？」

「えと……、私は別に……」

戦闘後、それに付随する後始末の手伝いを終えたアキオは、一人食堂で天ぷら蕎麦を啜っていた。

まだ夕食には早かったのだが、小腹が空いたので軽く軽食を取っていたのだ。

アキオは、頼んだ蕎麦を持って来たミルフィーユに、さっきの暗い表情の理由を尋ねる。

「私は、いつも元気ですよ」

「そうか……」

だが、ミルフィーユはアキオに悩みを話そうとはせず、アキオも深く聞こうとはしなかった。

ミルフィーユ本人が話せないというのであれば、あまり込み入ってはいけないとアキオは感じたからだ。

「あの……」

アキオは、『自分に話せないのであれば、タクトにでも話すのかな?』とも思ったのだが、ミルフィーユもタクトに話をするという選択肢を考え、それを断念してしまったらしい。

申し訳なさそうに、アキオにまた声をかけていた。

「悩めよ、十代。それが、君の人生の糧になる」

「アキオさん、オジさん臭いですよ」

アキオの冗談を笑いながら、ミルフィーユは自分の悩みを話し始める。

それは、これからまた厳しい戦争が始まるかもしれず、エルシオールのクルー達やフォルテ達は、一生懸命に自分が出来る事をしているのに、自分は主計中尉などという中途半端な立場で、全く役に立てていないばかりか、『もしかしたら、足を引っ張っているのでは?』と考えてしまったとの事であった。

「それは、大きな誤解だな。前線部隊でも、後方の主計将校でも、

軍人の仕事に差なんて無いんだから」

「でも、私ってご飯を作っているだけで……」

「いや、兵隊が飯を食えないと死ぬけどな」

軍という組織が生きて行くのに一番重要な要素は、確実に補給であるとアキオは考えている。

その補給でも一番大切な事は、兵士を食わせて生かす事にあった。兵器の質だの量はその後であり、いくら最新兵器を多数備えた部隊でも、飯が食えなければ、兵士はその兵器を使う事が出来ずに負けてしまうからだ。

現に、アキオも何回か経験したり、聞いた事があった。

故郷の料理が食えないという理由で衰弱死したり、精神を病んで後方に移送される兵士や、まだ使える武器は沢山あったのに、先に食糧と水が尽きて全滅をし、その遺棄兵器をゲリラに取られてしまった部隊など。

せっかくの武器で、味方同士で残った食料の取り合いをして全滅した部隊なども。

良く訓練された兵士達は、飯さえ食わせていれば棒切れしか装備していなくても使い道はあるものだが、逆に飯が食えなければただの飢餓戦線か、下手をすると山賊の群に転落する可能性もある。

戦争の勝敗を予想するには、両軍の補給状況を確認すべきだと言う有名な話もあるし、特にパイロットのメンタル部分が重要なムーン・エンジェル隊では、約一名を除いてうら若き少女達ばかりで、色々と食にうるさいメンバーもいたので、その食事の準備をしているミルフィーユの役割は非常に重要であった。

「だから、気にする事ではないと思うけどな」

「でも、私のせいでラッキースターが動かないですし……」

ミルフィーユが再びエルシオールに配属された理由は、とても簡単であった。

先の大戦では、最後に奇跡を起こして大活躍したラッキースターであったが、唯一のパイロットであったミルフィーユから凶運が消えてしまった結果、誰にも使えなくなってエルシオールの倉庫を塞いでいるだけになってしまったからだ。

勿論、軍も他のパイロットを探したのだが、あんな無茶な機体を動かせる人間など一人もおらず、というか起動させる事すら困難であり、ならば、『いつかまた、桜葉中尉が使えるようになるかもしれない』という考えで両者は常に一緒にされていたのだ。

「凶運が無くなったんじゃくて、無茶し過ぎてエネルギー切れって可能性もあるし、焦っても仕方がないんじゃないのか？」

「その可能性もあるんでしょうか？」

「絶対とは言えないが、ただ気に病むよりはプラス思考だと思うし、それなら準備をするという手もある」

「準備ですか？」

「そうだ」

そして夕食後に、時間の空いているアキオはミルフィーユと一緒にシミュレーションルームに来ていた。
前に、アキオがムーン・エンジェル隊の相手をして、彼女の凶運のせいで敗北した訓練であった。

「シミュレーションですか？」

「ああ、最近改良がされて、適正の無い人でもシミュレーションは動かせるようになったからな、その時に備えて訓練すればいいさ」

二人はシミュレーション機器を挟んで座り、アキオはエオニア軍のデータを基にした艦隊戦力で、ミルフィーユはラッキースターを選択して双方が戦いを始める。

シミュレーションの画面には、迫力一杯の戦闘シーンが映し出される。

「さあ、勝負だ」

一個艦隊ＶＳムーン・エンジェル隊で、ミルフィーユはラッキースターを操縦して、残りはコンピューターが請け負う。
この条件で勝負が始まったのだが、ミルフィーユは予想に反して大きく苦戦する事となる。
リミッター解除なし、凶運のスキルなしでも、ラッキースターは万能型で紋章機でも随一の性能を持つ機体であったが、肝心のミルフィーユがラッキースターをまるで使いこなせていなかったのだ。
自分では上手く動いたつもりでも、連携プレーを取る他の五機の邪魔になって、そこをアキオに突かれて損傷を蓄積させ、遂には撃

墜判定を出されてしまう。
ミルフィーユの乗る擬似コックピットの中では、赤い警報ランプと撃墜ゲームオーバーの表示が流れ続けていた。

「どうして……」

「こりゃあ、今動かせなくて正解だな」

アキオは、今の戦闘からミルフィーユの悪い部分を指摘し始める。
まずは、彼女自身の操縦技量の低下と、コンピューター制御とはいえ味方五機との連携の悪さで、これは彼女の半年のブランクが影響している。
この半年、ケーキ屋勤務で紋章機の訓練などしていなかったので、実戦の勘と今までの練度が落ちている上に、この半年でフォルテ達が決めた隊形や戦法なども聞いていないのであろう。
ラッキースターは、孤立したまま敵の大艦隊と戦って自滅する事となっていた。

しかも、この他の五機の行動データは、実際のフォルテ達の動きを参考に作られている。
ミルフィーユは、他の五機との連携が理解できなかった。
打ち合わせ不足というか情報不足で、しかも技量の面で純素に半年で進化した五人に付いていけていないという事であった。

五人は、特にヴァニラは、半年もの間を辺境調査に費やしていたし、他のメンバーも常に一緒にいたわけではない。
強奪船団対策でバラバラに運用される事も多かったのだが、その分機動力を生かして偵察機として運用されたり、他の艦隊や戦闘機部隊との連携を取る必要があったので、比較的短い期間で今の連携力を獲得している。

やはり、半年もの間ずっと紋章機に乗っていたのが技量の上昇に繋がって、課題の早期克服に役に立ったのであろう。

一方、ミルフィーユにはその蓄積がほぼゼロであった。

これで、いきなり一緒に戦えるわけが無かったのだ。

「半年でミルフォーユはマイナス。フォルテ達はプラス。余計に離されているのには気が付いたかな？」

「はい……」

このままラッキースターが動いても、自分が足手纏いでしかない事にミルフィーユは大きなショックを受けているようであった。

「それに気が付けば、勘を取り戻すのは早いさ。まずは、ランファと組んで前に出た時の連携だ」

「はい！」

それから数日間、アキオは空いた時間でミルフィーユの訓練に施し始めるのであった。

「えっ！　強奪艦隊の討伐ですか？」

「敵強奪艦隊の主戦力ではないと思われるが、小規模ながらも既に

二つの輸送艦隊が被害を受けている。位置的にもここからはそれほど離れていないし、捜索中の本拠地に居る主艦隊に合流をさせるのも癪なのでな」

既にレダ星系の主惑星に到着していたエルシオールであったが、ここ二日間ほど待機を命じられていて、少し暇を持て余し気味のタクト達であった。

どうやら、敵強奪艦隊の本拠地の割り出しに思ったよりも苦戦しているらしい。

レダ星系周辺にある、多数の暗礁宙域や小惑星帯などを順番に当たっているらしいのだが、いまだに本拠地への特定には至らず、おかげで、集まった討伐艦隊とその助っ人であるエルシオールは、軍の宇宙艦船用のドッグに係留されたままであった。

ところが、ここに来て一つの変化が訪れる。

敵の本隊ではないらしいのだが、それなりの規模を持つ強奪艦隊の一部が発見され、その討伐任務にエルシオールが指名されたのだ。

「その任務は、エルシオール単艦で行うのですか？」

「まさか。一個分艦隊を出すので、共同してこれに当たってくれ」

レダ星系駐留艦隊の司令官が、スクリーン越しにタクトに今回の作戦を説明する。

他の艦隊と合同でなるべく被害を出さないようにこれを討伐して欲しいとの言葉であった。

実際に、推定される敵戦力には少し過剰な味方の数ではあった。

「それで、分艦隊の司令官は？」

「コチジャン少将だ」

タクトは、その分艦隊司令の顔と名前を知らなかった。

レスターも記憶に無かったのだが、まさか良く知らない人だからという理由で命令を拒否するわけにもいかなかったので、了承の返事をしてから、アキオとエリオスも呼んでミーィティングをする事にする。

「コチジャン少将？」

「確か、第1方面軍艦隊に、同名の戦隊司令をしていた大佐がいたような……」

アキオと一緒に呼ばれたエリオスは、前に第1方面軍艦隊で副官をしていたので、その名前に聞き覚えがあった。

「という事は、戦時昇進組か……」

これは別段珍しくもない。

というか、タクトも、レスターも、アキオも、エリオスも、全員そうであったからだ。

ただ一つ問題があって、共に司令官が少将なのでどちらが指揮権で優先順位を持つかという問題があった。

下らないという人もいるが、これで揉めて過去に有能な司令官が味方との連携を欠いて戦に負ける事もあったので、その辺の調整はちゃんとする必要があったのだ。

「アルモ、データはあるのか？」

「はい、昇進の時期は、タクトさんと同じですね」

「まずいなぁ……」

アキオは、これで優先指揮権が向こうに持って行かれてしまうと考えていた。

元々、タクトは貴族とはいえ二十二歳の若造で、向こうはデータを見る限りでは四十歳を超えている。

せめて、階級差なりタクトの方が先任であれば、こちらの優先権を主張できるのだが、所持している戦力から考えても、向こうの方が優先権を主張するであろう。

ここで変に優先権を主張すると、余計に拗れておかしくなる可能性もあった。

人間は誰しも、自分の息子のような同僚に命令など受けたくないであろからだ。

「優先権を持って行かれるとマズいんですか？」

「マズくなる可能性がある」

ココの質問に、アキオは簡潔に答える。

まずは、向こうがエルシオールと紋章機をどう使おうと考えているのかが不明だ。

助っ人程度に考えているのか、最前線に出して味方の損害を少なくしようと考えるのか、功績を奪われるのが嫌で後方で万が一の事態に備えて待機だけさせるのか。

これは、向こうの司令官の出方を待つしかなかったのだが、勝っても損害が大きければ意味が無いし、変にムーン・エンジェル隊の投入を躊躇って敵を取り逃がしたり、最悪負ければもっと意味が無かった。

その辺の難しさが、特殊な戦力と指揮系統を持つムーン・エンジェル隊と正規軍との共同作戦には存在していた。

「向こうに言われた通りに、紋章機を出すしかあるまい。それに、皇国軍将官ともなれば、そこまで無能もいないだろうに」

「この場合、敵戦力を全て把握・補足してなるべく全力で討つだけの単純作業ですしね」

レスターは、ここで悩んでも仕方が無いと言った話をし、エリオスは、そう言いつつもアルモの操作しているコンソールを弄って、コチジャン少将とやらの細かい経歴を探し始める。

すると、意外な事実が判明していた。

「レゾムの元上官か……」

レゾムは、元は第1方面軍に所属している突撃艦の副長だった男であり、エオニアに降る際には自分の上官である突撃艦の艦長を殺害している。

そして、当時大佐であったコチジャン少将は、十数隻の突撃艦を束ねる戦隊の司令であったらしい。

エオニア軍とトランスバール皇国軍の首都星トランスバールを巡る戦いで、部下に裏切られ、自分の乗っていた艦を失って脱出する羽目になり、再編でまた戦隊司令になったもののエオニアやレゾムと直接戦う機会は無く、いまだにレゾムは元気に活動をしている。

元上官としては、腹立たしい気持ちで一杯であろうし、肩身の狭い思いもしているのであろう。

比較的早くに昇進している点からしても、なかなかに優秀な司令官なのかもしれないが、レゾムのせいで色々と思う所があるのかもしれず、暴走の危険性が皆無でもない。
なるべく、無茶だけはして欲しくないと願うタクト達であった。

「実際に話してみないと、どうにもならないけどな」

「確かにな」

タクトの考えに、レスターは短くそう答えただけであった。
エルシオールは、別に軍港に停泊していた味方分艦隊と合流して、一路指定された暗礁宙域へと向かっていた。

「マイヤーズ司令か。宜しく頼むよ」

「こちらこそ」

敵強奪艦隊の一部が潜伏していると思われる暗礁宙域の近くで、無事に合流を果たしたエルシオールと、コチジャン少将指揮の分艦隊であったが、コチジャン少将はこちらの懸念が無駄に感じられるほど普通の軍人であった。
少なくとも、表面上はレゾムに対して過剰な敵意は表していなかった。

「それで、敵強奪艦隊なのですが……」

「作戦は、さほど難しい事は無いな」

そう言いながら、作戦地図をエルシオールのメインスクリーンに転送するコチジャン少将であったが、確かに面倒な事は一切なかった。

敵強奪艦隊が潜んでいる、カイパーベルト帯と呼ばれる暗礁宙域の中心部に向かって二つに分けた艦隊を進撃させるだけであり、このカイパーベルト帯で宇宙艦隊規模の戦力が出入り出来るのは二箇所だけと、前後からの挟み撃ちで簡単に終わってしまう予定であった。

「戦力の分散は下策かもしれないが、一箇所からの侵攻では逃げられる恐れがあるのでな」

「別に下策とは思いませんが……」

分艦隊を二つに分けても、一方と敵強奪戦隊の戦力比は1．5対1であり、これにエルシオールと紋章機を合わせれば二倍を超えるであろう。

それに、片方が足止めに徹して、もう片方が後ろから攻撃を開始すれば、あっという間に敵の方が苦境に陥ってしまうので、特に下策だとは感じないタクト達であった。

「周囲の偵察を強化しているが、援軍の気配もないしな」

「なら、それで良いと思いますが」

結局、コチジャン少将の作戦で暗礁宙域に篭る敵強奪艦隊を討つ作戦がスタートする。

分艦隊と一部艦隊の応援を貰ったエルシオールが、前後というか

左右というか、暗礁宙域に潜んでいる敵強奪艦隊を挟み撃ちにするのだ。

エルシオールに巡洋艦を旗艦とする八隻ほどの艦隊が応援として回され、事前に打ち合わせをした時間にそれぞれに反対側の入り口から侵攻する。

それと、コチジャン少将側の分艦隊にフォルテとちとせが応援に回っていて、敵強奪艦隊の規模は最高でも六隻ほど。

まず負ける事などあり得ないと言われていた戦いであったが、エルシオールは思わぬピンチに見舞われる事となる。

「ふんっ！　かかったな！」

エルシオールと分艦隊が突入を開始した時、その情報を聞いて小躍りしていた人物がいた。

それは、強奪艦隊全軍の指揮を取るレゾム本人であった。

彼は、別のまだ見付かっていない秘密の根拠地にほとんどの艦隊を置いて、小型の高速艦艇で敵偵察部隊の探査に引っかからないように現場に待機していた。

エルシオールを呼び寄せるためにわざと残していた少数の艦隊が視界に入る、デブリ地帯に身を隠していたのだ。

他にも、レゾムは多数の罠を仕かけている。

彼は、アキオにもトランスバール皇国軍上層部にも、上に立つ器量の無い人物だと思われていた。

それは間違いの無い事実であったが、本来叩き上げの軍人で以前

の所属が突撃艦であったので、現場での仕事は得意にしている。
小艦艇の運用と細かな戦闘技術などであり、その部分に関してはあのネフューリアも認めていたが、それ以上の戦略的な部分では駄目であるというのが本人以外の意見であった。

「二重三重と罠を張らせて貰った。せいぜい、慌てふためいてデブリの仲間入りを果たすがよい！」

レゾムが自分の勝利を確信したその時、それぞれに反対方向から暗礁宙域に侵入した両艦隊は、レゾムの手荒い歓迎を受けていた。

「岩塊にブースターが取り付けられています！」

コチジャン少将も、タクトも、突然岩塊が動き出してこちらに向かって来るという罠に掛かっていた。
直接艦艇に向かって来るようにセットされたもの。
近くの岩塊やデブリに激突して、玉突きのように動く障害物を増やして艦隊の進路を塞ぐものなど、ベテランであるレゾムに相応しい厭らしい戦法であった。

「冷静に対処せよ」

「純粋に時間稼ぎだな」

両艦隊のトップは、特に慌てる事も無く、冷静に障害物を排除していた。
通常の回避運動と最終手段としての砲撃で、簡単に切り抜ける事が可能なものであったからだ。
二人は特に連絡を取り合う事もなく、冷静に状況に対応する。

「続けて……、自動機雷です！」

「そんな物が通用するか。順番に撃ち落せ！」

「誰だか知らないけど、古典的な手だな。レイトン、撃ち落してくれ」

「了解！」

今度は、大量に仕掛けられた機雷が両艦隊の艦艇に殺到して来る。その数は膨大で、同じく対応は面倒であったが、やはり想定の範囲内であり、コチジャン少将やタクトに時に慌てた様子は見られなかった。

「やれやれだね」

「我々の消耗を狙っているのでしょうか？」

コチジャン少将指揮の分艦隊に派遣されているフォルテとちとせが、自分の前に来た機雷を次々と撃ち落していく。

この程度の事は紋章機ならば余裕であったが、その数の多さに辟易する二人であった。

「面倒よね」

「少数の優位を生かすために、蛸壺のような暗礁宙域に篭って罠を仕掛ける。良くある手ですわね」

「三十七基目を撃墜」

ランファ達も、次々に来る自動機雷を流れ作業で撃ち落していた。

「偵察によると、この近辺なんだがな」

「艦艇の反応あり！　隻数は六隻です！」

「当たりは、我々か……」

大量の自動機雷を排除しつつ、初期の偵察情報に基づいたポイントに到着したコチジャン少将は、そこで索敵担当の士官から敵艦隊発見の報を受ける。

「距離は３００！」

「近いな……」

確かに近かったが、これは大量の岩塊やデブリがあるのである程度は仕方のない事であり、コチジャン少将は冷静に指揮下の艦隊に迎撃命令を下す。

各艦隊は命令通りに準備をするのだが、その時敵艦隊を映すレーダースクリーンに大きな変化が現れる。

「敵艦隊が消えた？　違う！　分裂したのか！」

巡洋艦から駆逐艦クラスの敵艦反応を映していたレーダーの輝点が突如消滅し、代わりに大量の数え切れないくらいの小さな輝点が映り始めたのだ。

しかも、前からある岩塊やデブリなどと大差がなく、正確な数を

測定する事は不可能であった。

「どういう事なんだ？」

コチジャン少将の疑問はすぐに解消される事となる。
なぜなら、自分の艦隊に向かって大量の偵察型プローブに良く似たロボットが迫って来たからであった。

「偵察型プローブとは似て異なる物か……」

形は非常に良く似ていたが、そのプローブは戦闘機の半分くらいの大きさはあったし、光学迷彩装置は搭載していないらしく、その本体を曝したままで、器用に岩塊やデブリの間を潜り抜けながらこちらの艦隊に迫っていた。

当然、分艦隊は多数の火器を展開するのだが、プローブは次から次へと増殖していて、しかも被弾したプローブが機雷のように爆発する様子を見て一つの結論に至っている人物がいた。

「こりゃあ、自動機雷よりも性質が悪い」

フォルテが、再び始まったプローブの波状攻撃に眉を潜めていたが、更に追加の報告で、先に発見された艦隊の詳細が判明する。
これは、敵艦に偽装をした暗礁宙域に捨てられていた古い軍艦であったらしい。
その古いスクラップに、大量の機雷型プローブが張り付いていたのを艦隊と誤認していたのだ。

「あからさまな時間稼ぎだな」

いくらプローブが改良されていても、所詮は機雷に多少の機動力が付いているだけであった。
正規艦隊にどうこう出来る物ではなく、自分達の足止めが目的であろうと推察された。

「エルシオールが襲われているな」

コチジャン少将は、立て続けに発生するプローブの爆発の光に顔を照らしながら、このような姑息な策を取る敵司令官の思考を推察する。

昔は叩き上げで、それなりにその技量を認めていたのに裏切ったあの男。
それほどの力量を持たない癖に、常に自分が中尉止まりである事を不満に思っていた男。
そして、最後に自分の可愛がっていた後輩を殺害して裏切ったあの男をだ。

「偽装艦隊の後方１５０に、突撃艦クラスの反応！」

「本当か？」

「はい、敵側のものと思われるジャミングが凄いのですが、辛うじて確認できました」

索敵担当の士官は、大量のプローブを貼り付かせていた偽装艦隊の後方に一隻の小型艦を発見する。
そしてそれと同時に、その艦からだと思われる通信が入って来る。

「おや、これはお久しぶりですな。大佐殿」

通信の主は、コチジャン少将も良く知る男であった。
自分の部下であった、今回の強奪艦隊騒動の首謀者だと思われるレゾム・メア・ゾムが、その首謀者に相応しい派手な格好でスクリーンに映っていたのだ。

「レゾム……。今さら、何の用事だ？」

コチジャン少将は、顔見知りであったレゾムに対して冷たい視線を向ける。

「おやおや。将官ともあろう者が、降伏の有無くらい聞いてはどうなのかな？」

「お前の罪状で死刑以外にあり得るか！　それに、お前を生かして捕らえる手間で部下が死んだら本末転倒だ！」

「その自信がいつまでも続くと良いがな。この暗礁宙域のあちこちにあるデブリの仲間入りをするが良いわ」

レゾムの通信が切れると共に、コチジャン少将は左側に連続して発生する閃光を感じていた。
艦隊の端を守る駆逐艦が、大量に迫って来るプローブの対処にモタ付いて機関部の外壁に小さな穴を開けてしまい、そこから数基のプローブが侵入してエンジン部分で自爆。
そのまま、駆逐艦は誘爆していた。

「サギリか？」

「はい！　生存者はいない模様です……」

味方艦の爆沈で艦内に重い空気が立ち込め、それに危機感を抱いたコチジャン少将は新たな命令を指揮下の艦隊に下す。

「このままプローブの数を減らしつつ、後方の小艦艇を沈めるぞ！あれにレゾムが乗っている！」

「「「「「おっーーー！」」」」」

味方艦撃沈の恐怖を、コチジャン少将の命令で晴らす格好となった艦隊のクルーであったが、それに違和感を感じている人間も当然存在していた。

「フォルテさん、本当にその小型艦にレゾムが乗っているんですか？」

「さあてね。通信は、予め撮っておいてから転送という手もあるからね。だが……」

フォルテは、今のところはコチジャン少将の命令通りに動かなければいけないだろうとは思っていた。

ピラニアのようなプローブを全て排除しないと、艦隊は前に進む事すら難しい状況であったからだ。

と同時に、自分達が敵の策に嵌って半数の戦力を足止めされている事にも気が付いていた。

いや、コチジャン少将も気が付いていないはずがないのだが、そう動くしか方法が無かったのだ。

「しかし、厄介な兵器だね！」

「こういう地形では有効な兵器です」

フォルテとちとせは、味方艦に迫っているプローブを次々と撃ち落しながら、エルシオールの安否を心配し始めるのであった。

「敵艦隊です！　数は六隻！」

少し遅れて、エルシオールと応援の艦隊も、敵強奪艦隊と思われる所属不明の艦隊と遭遇を果たしていた。

だが、その数は六隻と、事前の偵察情報とは違う結果になっていた。

最初は多くて六隻と言われていたのに、先にコチジャン少将が敵艦隊と遭遇して戦闘を開始し、次に自分達も敵艦隊と遭遇する。

しかもその数は六隻と、どう考えても計算が合わない。

どうやら、敵の偽装工作に引っかかったらしいと感じるタクト達であった。

「つまり、六隻の艦隊が二つあったんだろうな」

「初期的な偽装工作ですね。しかし、引っかかるかな？」

つまり、これは相手の思い込みを利用した罠であった。

周辺の輸送船団を襲う謎の敵強奪艦隊がいて、その数は多くても六隻であるという情報がある。

その艦隊が逃げ込んでいる暗礁宙域に偵察部隊を送ると、その六隻の艦隊の反応を発見した。
接近しての確認は自殺行為なのでそれを行うはずもなく、反応だけを確認して、事前の情報通りの敵戦力を見つけて上層部も満足してしまい、結果、敵の数を間違えるという初歩的なミスを犯していたのだ。

「むしろ、真面目な初心者は引っかからん」

レスターも話に加わるが、これはベテランだからこそ引っかかる罠の類であった。

「それで、敵艦隊の構成は？」

「巡洋艦……。いえっ！　軽空母を含みます！」

「情報が錯綜しているな……」

タクトは、敵戦力の偵察に失敗した軍上層部に呆れながらも、ランファとミントを前に出していた。
それと、応援の八隻の艦隊も前に出て強力な火線を張っている。
敵の戦力の分析は誤っていたが、別にそれで味方が全滅するという事も無さそうであった。
上層部もバカではないので、戦力の準備は余裕を持って行っていたようであった。
多数出撃している敵のシムス高速戦闘機は無人らしく、動きに精細さを欠いて、こちらへの攻撃ではあまり戦果を得ていない様子でであった。
特に、ランファやミントの手にかかると簡単に撃墜されていて、彼女達のスコアを増やす役割しか果たしていなかった。

「だが、引っかかるな……」

エルシオールの火器管制の担当ではあったが、大量の岩塊とデブリに、密集した敵味方の艦隊と戦闘機。

更には、そこを器用に飛び回る紋章機がいるので艦砲の発射は控えているアキオは、『まだ何かがあるのでは？』と一人考え込んでいた。

「敵強奪艦隊は脆いな。戦果を稼ぐぞ！」

「ミント、味方艦隊には負けられないわよ」

「はい、私も同じ考えですわ」

敵強奪艦隊の発進させた無人戦闘機の脆さで、味方艦隊は手柄である残された敵強奪艦隊の撃沈を意識するようになり、ランファとミントは自分達も負けていられないと思ったのか？

次々と前に向かって追撃を開始していた。

結果、エルシオールは応援艦隊やハーベスターを除く紋章機に後方に取り残されてしまう事となる。

「あいつら、そんなに戦果が欲しいのか？」

味方艦隊が追撃をかける様子に、レスターは一人呆れていた。

仮にも軍で士官の地位にある者達が、些細な戦果に惑わされてエルシオールを後方に残してしまったからだ。

「タクト、戻さなくて良いのか？」

「連中の反発を考えるとな……」

ランファとミントはともかくとして、味方応援艦隊の司令は准将であったし、その行動にタクトが掣肘をかける事は指揮権の問題から考えても不可能な事では無い。

だが、急造の指揮系統の上に立っている若造の少将タクト・マイヤーズの存在が、彼らの暴走を誘発もしていた。

『俺達も、功績を挙げれば英雄タクト・ヤイヤーズのように……』

軍内部では、タクトはムーン・エンジェル隊を指揮して多数の敵艦を撃墜した司令官として評判が高い。

『彼は、敵艦を沢山沈めて出世した！』

なので、そう考える彼らは敵艦の撃沈数に拘っていたのだ。

更に、『まさか、マイヤーズ司令が自分達が功績を挙げるのを邪魔しないであろう』という一部都合の良い解釈も合わせてであった。

「急造艦隊の欠点か。統制が利かないな」

「もう勝ちは決まっている。誰が一番パイを多く取るかで競争しているんだ」

レスターとアキオは、冷静に競争をするように敵強奪艦隊に追撃をかけている味方応援艦隊の考えを述べていた。

「だが、油断とも言えるな」

「油断というか、敵の策である可能性も高い。エルシオールを落とすべく、穴倉に我々を誘い込む」

「穴倉には、出入り口が二つあります。艦隊を割る必要がある」

レスターとアキオの話に、エリオスも自分の意見を付け加える。

「更に、割った艦隊に涎が出そうな餌をぶら下げ……」

「それを追いかけて行くのは良いが、ここは地形も最悪だからな」

「追撃でエルシオールから離れれば離れるほど、エルシオールに何かがあった際に戻るまでの時間がかかりますよね？」

「三人とも、それって俺を微妙に責めてる？」

タクトは、三人の鋭い指摘に冷や汗が出る思いであったが、タクトとてその可能性はまるで考慮していないわけではない。

だからこそ、ヴァニラを残したとも言えたのだ。

そして、レスター達の予想は現実のものとなる。

後方から急速に迫って来る敵影が、複数確認されたからだ。

「アルモ！　艦種の照合を急げ！」

「はい！　探査結果を情報ライブラリーと照合……。エクルワイエスト級局地魚雷艇です！　数は六隻！」

レスターの指示に、アルモは素早く後方から迫って来る敵艦の種類を照合・報告する。

「懐かしいな……」

エクルワイエスト級局地魚雷艇は、極めて特殊な船舶であった。
いや、大型爆撃戦闘機のカテゴリーにも入る、乗員二人でデブリ帯などを高速ですり抜けて搭載している光子魚雷で大型艦艇すら行動不能にする能力がある艦艇であった。

そしてこの船は、アキオが士官学校卒業後に初めて着任した任地で搭乗した船であった。
これで、反政府派の密輸船や敵の高速魚雷艇などと交戦していたのだ。

「拙いな……。後方か」

エルシオールは、機動力はともかく耐久性はそれなりにある船であった。
だが、戦艦よりも丈夫かと言えばそれはあり得なかった。
エルシオールは儀礼艦で、本来戦場に出る事を想定していない船であったからだ。
多分、機関部に二発以上の魚雷を喰らうと、その場で行動不能になるはずであった。

「レイトン、やられたな」

「ああ、俺も勘が鈍ったかな?」

レスターとアキオは、この会話だけでほぼ全ての状況を把握していた。
敵強奪艦隊がここに居るのが、軍上層部に見付かったのも。
派遣された艦隊を二つに割らないと、討伐作戦が進まないように

したのも。
味方艦隊が、手柄を稼ぐべくエルシオールを後方に残してしまったのも。
そのエルシオールに止めを刺すために、デブリ帯でも小回りの利く特殊小型艦艇の艦隊が後方から迫って来るのも。
そして、その艦隊の司令官があの人物である事もだ。

「ふはははは っ！　後がガラ空きだぞ！　しかも、護衛は紋章機一機のみ！」

この艦隊を直接指揮しているレゾムは、自分が得意な小型船舶による雷撃でエルシオールを沈めようとしていた。
味方艦隊とヴァニラ以外の紋章機は、全て本命だと思われていた通常の戦闘艦艇部隊に引き寄せられ、エルシオールは無防備な背中をレゾムに曝していた。

「雷撃戦用意！」

六隻の艦隊の内、一番前に出ている艦に乗っているレゾムは、久々の雷撃戦闘に心躍らされていた。

「やはり、戦艦などは性に合わんな」

大規模な艦隊の指揮よりも、駆逐艦や魚雷艇の操作や小規模艦隊の指揮に有能である。
これが、レゾムの本質であった。

「通しません！」

「ふんっ！　小娘が！」

後は自分しかないという義務感から、ヴァニラはレゾムの指揮する雷撃艦隊の阻止に向かうが、それはレゾムにとっては想定通りの行動でしかなかった。
なぜなら彼女は、すぐに二隻のエクルワイエスト級局地魚雷艇にその行動を阻まれてしまったからだ。

「そんな……」

「バカ者めが！　デブリ帯におけるエクルワイエスト級局地魚雷艇は、旋回性能以外ではシムス高速戦闘機とさして性能が変わらないのだ！　せいぜい振り回されるのだな！」

行動を阻まれてしまったヴァニアを抜きながら、レゾムは残った四隻で更にエルシオールへと接近する。

「レイトン」

「うーーーん、難しいな。砲を後方に振り向けているけどな……」

アキオは、エルシオールの搭載火器をなるべく後方へと向けるのだが、構造的に考えても全てを振り向けられないし、やはりデブリが邪魔をして砲撃の効率を落としていた。

一隻に砲撃を集中させて脱落させる事に成功したが、まだ三隻が残っていて、しかも今にの向こうの魚雷の射程圏内に入ろうとしていた。
いくらエルシオールでも、三発以上の魚雷を機関部に食らえば撃沈されてしまう可能性があった。

「（試しに、俺が紋章機に……）」

ミルフィーユのお願いで、アキオは自分で考え付く訓練を彼女に施していたが、いまだにラッキースターは微塵も動く気配がなかった。

彼女に動かせないのならば、万が一、億が一、兆が一。

『少し前に、そんな事を言った記憶があるな』などと思いながら、アキオはタクトに許可を取ろうと決意をする。

だが、その前に状況は大きく動いていた。

「紋章機の発射口が開きます！」

「何だって！」

アルモの報告に、タクトが信じられないと言った表情をする。

なぜなら、彼にはすぐにわかってしまっていたからだ。

この状況下で、紋章機で飛び出すなどという無茶をしそうな人物。

それは、間違いなく彼女であったからだ。

「タクトさん！　私が行きます！」

「ミルフィー！　無茶だ！」

案の定、勝手に出撃したラッキースターのコックピットモニターには、ミルフィーユの姿が映し出されていた。

そして、無茶をした自分の部下兼恋人に、タクトは珍しく真面目な表情で止めに入る。

「大丈夫です！　アキオさんに訓練も受けましたし」

「俺は、合格の許可を与えていないぞ」

アキオも、珍しく憮然とした表情でミルフィーユに抗議をする。

そもそもそのアキオの訓練も、ラッキースターがちゃんと起動してからの事である。

現に、射出されたラッキースターはいまだに動いていなかった。

射出は自動なので、それは別に誰にでも出来る事であり。

問題なのは、そこからちゃんと紋章機を動かせるかが問題だったからだ。

「アキオさんは、前に言っていました。少しでも可能性があるなら挑戦するって」

「確かに、それは前に言ったが……」

「今、ここでラッキースターが動かないと、エルシオールが沈んでしまいます」

確かに、ミルフィーユの言う通りであった。

後ろがガラ空きのエルシオールに三隻のエクルワイエスト級局地魚雷艇が迫り、今にも魚雷を発射しようとしていた。

それをアキオが懸命に砲撃するのだが、やはり的が小さいのと向こうの速度や周囲のデブリの影響で、沈めた船は一隻だけになっている。

ヴァニラも、二隻のエクルワイエスト級局地魚雷艇の意図的な妨害で、エルシオールに戻る事が困難であった。

「ミルフォー！　とにかく危険だ！　すぐに俺が！」

居ても立ってもいられなくなったタクトが、ミルフィーユを助けに行こうと司令官席を立とうとするが、それを止めたのはレスターであった。

「司令官が容易に席を立つな！　それに、間に合わん……」

レスターの言う通りであった。

今からタクトが格納庫に向かって、シャトルを動かしても艦外に出た時点で戦闘は終了しているであろう。

それに、その前にエルシオールが沈んでいる可能性もあったのだ。

「それに、レイトンは諦めていない。あいつは、諦めていないんだ……」

レスターの言う通りで、今までに何度も死線を潜り抜けて来たアキオは、この状況でも諦めないで懸命にエルシオールの火器コントロールを行っていた。

一門でも多くの砲を後方に向け、一発でも多くの砲弾やビームをレゾム指揮の艦隊に向けて撃ち出していたのだ。

「敵の魚雷を、火線で作った阻止エリアで粉砕するしかないな」

通常、魚雷は人の目に見えるほど遅い物ではない。

なので、コンピューターでその動きを予想し、的確なタイミングでその場所にビームなり砲弾が到着していないと阻止には成功しない。

アキオは懸命にコンソールを走らせながら、その位置の特定に入る。

だが、最後の最後でコンソールを叩く指が止まってしまう。

「……」

「レイトン、どうかしたのか？」

アキオの指が止まった理由をレスターが尋ねる。

「一番良い場所があるのだが……」

「なら、そこに火線張れば」

「ミルフィーが居るけどな」

アキオが一番最適だと予想したエリアの真ん中には、いまだに起動に至らないラッキースターが沈黙を保ったまま鎮座していたのであった。

「魚雷装填！　発射準備完了！」

一方、エルシオールに迫るレゾムは、あとは魚雷の発射スイッチを入れるだけとなっていたが、その進路上にラッキースターの姿を発見していた。

「あれは……。前に我々を散々に苦しめた紋章機か！　よかろう！　魚雷でコナゴナに砕いてくれようぞ！」

三隻で六発を二回。

合計で十二発の魚雷が発射される。

小型ではあったが、これがエルシオールの機関部に突き刺されば被害は甚大となるであろう。
当然、いまだに動けないラッキースターには言うまでもなかった。

「ミルフィー！　逃げるんだ！」

タクトは、ミルフィーユにそこから脱出するように叫ぶ。
アキオも懸命にビーム等で魚雷を狙うが、やはりラッキースターに当てないように角度を変えているいるので、ほとんど命中しなかった。

「私は……」

ミルフィーユは、迫り来る魚雷から目を反らさないように懸命に前を見据えていた。
今はまだ動かないラッキースターであったが、ここで怖気づいたり逃げようなどと考えたら、絶対に二度とラッキースターは動かないと考えたからだ。

「ミルフィー、あとは任せる」

そして更に、エルシオールからの砲撃が全て止まってしまう。
アキオが魚雷の迎撃をミルフィーユに任せてしまい、コンソールから手を離してしまったからだ。

「どのみち、ミルフィーのいる位置が迎撃に最高なんだ。そこに陣取った以上は、ミルフィーが責任をもって迎撃してくれ」

「おいっ！　レイトン！」

コンソールから手を離してしまったアキオに珍しくタクトが声を荒げるが、意外にもレスターは黙ったままであった。

彼は、アキオを観察していたのだ。

今までに生き残って来た男が、実は自分の運や努力だけではなくて、同じ戦場にいる仲間に運命を任せてしまうような真似をする事もあるのだという事を。

アキオが、惑星サーヴァントでフォルテを信用したように、今ここではミルフィーユを信用しているのだという事にだ。

そして、アキオの真意にタクトもすぐに気が付いていた。

「（お前は、本当にミルフィーを信用しているんだな）よし！　ミルフィー！　そんな魚雷は全て打ち落としてしまえ！」

「はいっ！」

ミルフィーユがタクトの命令に元気に答えたところで、ラッキースターも巻き込んで周囲に大爆発が発生する。

そのあまりの威力に、エルシオールのクルーからはミルフィーユの安否を心配する声があがる。

「ふはははははっ！　あのクサレ紋章機め！　粉々になりおったわ！」

宿敵の死に、魚雷を発射した側のレゾムが高笑いをする。

だが、彼が喜んでいられたのは僅かな時間だけであった。

突如、爆発の中心部から、その爆発を引き裂くようにビーム砲が発射されたからだ。

そのビーム砲は、まるで鞭のようにしなりながらヴァニラを翻弄していた二隻のエクルワイエスト級局地魚雷艇を粉砕し、続けてレゾムの指揮する三隻にも次々と命中する。

「なぜ、あれだけの魚雷を受けて動ける！」

簡単に言うと、ラッキースターが全弾を撃ち落してその爆発を強力なシールドで防いだ後に反撃しただけなのだが、それをレゾムが悟った時には、彼が乗るエクルワイエスト級局地魚雷艇ではコックピット内部で警報やアラームが鳴り続けていた。

ラッキースターからの攻撃を受けてしまったからなのだが、他の同型艦の最後を考えると、今レゾムに生がある事自体が奇跡とも言えた。

そして、どうにか船が動く事もだ。

「ぬうぅ！　もう少しだったのに！　覚えてろよ！」

レゾムは悪役には定番の捨て台詞を吐いてから、逃げるように戦場から離脱をしていく。

「逃げられたか……」

「罠を食い破れた事だけで儲けだったな。それに……」

レスターとアキオの話している横では、タクトが再び紋章機を動かせるようになったミルフィーユに嬉しそうに通信を送っていた。

結局レゾムの罠ではあったものの、討伐艦隊は大した損害も出さずに所定の戦力の殲滅に成功していたし、エルシオールも紋章機パ

イロットとしてのミルフィーユの復帰という嬉しい出来事もあった。

「ふーーーん、絶対絶命の危機に反応して復帰か。もう少し追い詰めてみましょうか？」

エルシオールに戻って来たランファは、ミルフィーユが再びラッキースターを動かせるようになった経緯を聞いて、物騒な発言をしていた。

「ランファ、それをしてまたラッキースターが使えなくなったらどうするんだい？」

「そもそも、ランファがエルシオールに戻って来なかったのがいけない。カンフーファイターが一番スピードがあるのに、敵艦狩りに夢中でエルシオールの事を忘れた癖に」

「しょうがないじゃない。現場に強烈なジャミングがかかっていたんだから」

もしエルシオールを丸裸に出来ても、それに紋章機が。

特に、一番スピードがあるカンフーファイターに勘付かれれば、すぐに戻って来てしまうだろう。

そう考えたレゾムは、ランファ達に強烈なジャミングをかけてエルシオールのピンチを知らせないようにしていた。

「アキオさん、申し訳ありません」

「いや、あれは不可抗力だしさ……」

アキオは、ランファが相手なので毒を吐いていたが、それはラン

ファも十分に承知しているので軽く聞き流していた。
それに、エルシオールとの通信が途絶した時点で、ランファはエルシオールに何かがあった事は理解していた。

だが、そこで問題となるのが一緒に作戦を行っていた正規軍の存在であった。
彼女はエルシオールに戻りたい旨を具申したのだが、艦隊を率いる准将からそれを拒否されてしまったのだ。
通信が繋がらない以上は、中尉でしかないランファやミントはその准将の命令に従わないといけない。
これが、急造で正規軍と共同作戦を取った際の最大の弱点とも言えた。

「実際に、難しいところなんだよ。下手にランファとミントを戻して、途中で他の罠に嵌るという可能性もあるし。何にしても、正規軍との共同作戦には宿題が多いという事だな」

「そうですわね。では、想定される事態を一緒に研究したしましょう。新しい茶葉が送られて来たので、それを試飲しながら」

「私も行きます」

アキオは、ミントとちとせに両腕を引っ張られながらエルシオールのブリッジを後にする。
フォルテは、『それは、私の仕事でもあるんだがね』と思いながらも、友人がある意味女難な事に苦笑していた。

「あいつも、気苦労が多い事だな」

「そうなのですか？　アキオさんは、みんなに慕われていると思い

ますが」

タクトの発言に、今まで静かにしていたヴァニラが自分の意見を述べる。

「上官として慕われている以上に、他の面であの二人は積極的だからなぁ」

「そうですよね。ちとせなんて、昔とは別人のようですよ」

ミルフィーユは、昔のクソ真面目なちとせの事を良く知っていたので、余計にその変化に驚いているようであった。

「今回は、ラッキースターの復活に助けられたな。エルシオールはほとんど無傷ですよ」

更にそこに、戦闘中はエルシオールのダメージコントロールを行うために艦内を動き回っていたエリオスが戻って来る。

タクトの復帰後、また彼は副長としてエルシオールのダメージコントロールの任務に回っていた。

「今回は、そんなに提出する書類は無さそうです」

「そうか。修理関係の書類は数が増えて面倒だからな。そういうのは無い方がいい」

レスターは、偶然が重なったとはいえ、エルシオールの損害が皆無であった事に安堵していた。

仕事に真面目に取り組む彼とて、エルシオールが損傷して修理関係の書類が増えるのは良しとしていなかったからだ。

それと、アキオに物資搬出の手間を取らせると、ミントとちとせの機嫌が悪くなりそうだという理由もあったのだが。

「さてと、僕もそろそろ休憩に入るかな。新しく買った画材の確認もまだしていないんだよな」

「いいなぁ。インテリジェンス溢れる趣味を持っていて」

「どうなんでしょうね？　別に、好きだからやっている事なんで」

これから休憩に入るエリオスは、タクトにそう答えながらブリッジを後にするが、その彼にはヴァニラが付き添う事が多くなっていた。

「あの兄弟は何で自分から何も言わないのに、女の子がくっ付いているんだろうな？」

「顔が良いからだろう」

タクトの疑問に、レスターが『何を当たり前の事を聞いているんだ？』という風に答えるが、そのレスターに視線を送るアルモを見てその回答に納得してしまうタクトであった。

その後、エルシオールは再びレダ星系の主星へと戻る事となる。敵強奪艦隊の罠には嵌ったが、敵の殲滅には成功したという事で、また敵強奪艦隊の本拠地が割れるまでは、その場にて待機という事になったからだ。

エルシオールのメンバーは、これからまた激しい戦いが始まる予感を感じていはいたのだが、とりあえずはミルフィーユの復帰祝い

のパーティーやら休暇で町に降りる事などを考えていた。
司令官であるタクトの方針で、戦う時と休む時の切り替えが素早いのがムーン。・エンジェル隊の特徴であったからだ。

だが別の場所では、逆に暗い感情を燃やしている男も存在していた。

「レゾムめ！　必ずや戦場で討ち取ってくれるわ！　お前に殺された部下達の恨み思い知るが良い！」

一人司令官用の個室で、コチジャン少将は決意を固めるのであった。

そして、別の場所でも……。

「最後の最後で、またしてもあの小娘達に邪魔されるとはな！」

自ら魚雷艇部隊を率いてエルシオールに攻撃を仕かけたにも関わらず、最後の最後でラッキースターに阻まれて命からがら逃げ延びて来たレゾムは、アドミラル・レゾムの艦内で一人激高していた。

「落ち着いてください。レゾム様」

「これが落ち着いてなどいられるか！　あの作戦は、私の渾身の策だったのだぞ！」

副官のネフューリアがレゾムを宥めるが、彼女は心の中では彼をバカにしていた。

あのような小細工と自分の得意分野だけを用いた策などで、あのエルシオールが沈むとは思わなかったからだ。

だが、彼女がそれを億尾にも出さない。

自分の準備が整うまでは、まだこの頭の軽い神輿に働いて貰いたかったからだ。

せっかく利用しているのだから、なるべく最後まで効率良く使い切りたい。

ネフューリアは、冷静にそう考えていた。

「それと、ご安心ください。遂に我らも本格的に動く事となりましょう」

ネフューリアは、まだ機嫌の悪いレゾムにこれからの作戦を説明する。

今までに強奪した資源で大量の艦隊が完成したので、これで一時強奪行為を中止して本格的な作戦を進めようと考えていたのだ。

少なくとも、ネフューリアはだ。

「まずは、レゾム閣下による重大な宣言をトランスバール全土に放送しましょう」

先のエオニアの乱でその結成が宣言された正統トランスバール皇国軍は、既にその戦力の大半が撃破されるか、極少数が逃げ回っているのみであった。

そこでレゾムが、トランスバール全土に正統トランスバール皇国軍の復活と、先に戦死したエオニア元皇太子の意思を継ぐ旨を宣言し、旧正統トランスバール皇国軍のみならず、反皇国の意思を持っ

ている各組織の蜂起を促すのだとネフューリアは説明する。

「そしてその対応に皇国軍が追われている間に、我らはここを目指します！」

ネフューリアが、航路図の一点を指差す。

そこは、皇国復興のための資源を大量に供給している資源衛星レナミスであった。

「ここを占拠して、例のクリスタルを使います」

先のエオニアの乱の際に、エオニアがその力の源泉としていた《黒き月》は、エルシーオルのクロノブレイクキャノンで破壊されてしまったが、そのコアを成していたクリスタルの回収に、ネフューリア達は成功していた。

もし、これと資源衛星レナミスが組み合わされば、《黒き月》は再び復活を遂げるのだ。

「勿論、資源衛星レナミスも重要防衛拠点でしょうが、トランスバール皇国軍には他にも守る場所が沢山あります」

「当然、戦力を分散せねばなるまい。ならば、宣言をした方が楽なのか」

それと、少しでも多くの反政府勢力が呼応してくれた方がありがたい。

その対応にも、当然トランスバール皇国軍は戦力と手間を割かなければいけないからだ。

「ならば、ワシが一世一代の演説をしてくれようぞ」

先ほどまでの不機嫌ぶりからすぐに上機嫌となったレゾムであったが、ネフューリアはそんな彼を心の中でまたバカにしていた。

「（本当に単純なバカ者だな。下等生物と呼ぶに相応しい生き物だ。その演説が、お前の最初で最後の最高の晴れ舞台となるのだから、せいぜいマシな文句でも考えておくのだな）」

遂に、正統トランスバール皇国軍が本格的に動き出そうとしていた。

だが、その彼らの暗躍の中身に気が付いている者達は、まだ誰も存在しなかった。

一人ほくそ笑む、レゾムの副官ネフューリアを除いて……。

第二部　第四．五話

『ここに誓おう！　志半ばで倒れたエオニア閣下の意思を継ぐべく、閣下の一番の忠臣であったこのレゾム・メア・ゾムが、新しいトランスバール皇国を作る事を！』

レゾムの罠であった敵強奪艦隊討伐の任を終えたエルシオールが、再び惑星レナにある軍港へと戻ると、テレビではその強奪艦隊を率いていると目されるレゾムが、全トランスバール皇国支配領域に向けて宣戦布告の放送を行っていた。

『幼い、しかも女如きに過酷な国家の政治を任せる事は危険である！　現に、今のトランスバール皇国は、人気取りで即位した幼い女皇を操る魑魅魍魎達の巣窟と化しているのだ！』

「言うほど、あいつも頭は良く無いよな」

「言えてる」

きっと懸命に考えたのであろう演説を続けるレゾムであったが、その様子をタクトとアキオは半ば呆れながら眺めていた。

「うわぁ、暑苦しいわね」

髭モジャの服装だけは整えている中年男性が、エルシオールのブリッジにある巨大スクリーンにアップで映っていて。

しかも、レゾムは特に顔が良いわけでも、威厳があるわけでも、演説が特別に上手いわけでもなかった。

なので、彼の演説は、特にムーン・エンジェル隊を始めとする女

性達には不評であった。

というか、この放送を見て彼を支持する輩がいるのかすら疑問であった。

世間の人達の大半は、基本的にはシヴァ陛下の今の治世を支持しているからだ。

『我輩は、ここにエオニア閣下の正統トランスバール皇国軍を継ぎ、新しく真・正統トランスバール皇国軍を発足させる事とする！　トランスバール皇国内で、傀儡の皇王シヴァとその取り巻き達に苦しめられている民衆よ！　共に立ち上がって、新しい国を作ろうではないか！』

最後に拳を振り上げて演説をする暑苦しいレゾムのアップが映った後に、放送は切れてしまう。

その後は電波ジャックが終了したのか、放送は普通のテレビ番組へと戻っていた。

「レイトン、どう思う？」

「蜂の巣を叩いたんだろう」

レスターの問いに、アキオは一言だけ答える。

つまりは、エオニア軍の残党や、前トランスバール皇王以前から続く反皇国の機運の高い連中の暗躍や蜂起を促して皇国軍の戦力を分散し、何かしらの作戦を行うつもりなのであろう。

アキオはそれを言いたかったのであり、タクトもエリオスもフォルテも、アキオの意見に賛同していた。

「問題は、どこで何をするかだな。レイトンは、どう思う？」

「どうもこうも。候補なら沢山あるからな。皇国には、守るべき場所が多過ぎる」

向こうは好きに目標を設定できるし、こちらは全てを守らなければならない。

皇国軍に出来る事と言えば、なるべく候補を絞り、もし予想外の場所に敵が来てもすぐに対応可能なように体勢を整えるだけであった。

「そうだよな。候補が多過ぎるんだよな」

タクトも腕を組んで考え込んでいたが、レゾム達の次の襲撃予想箇所などそう容易にわかるものでもなかった。

「軍本部からは、ある程度の絞り込みが終了するまでは待機を命じられている」

レスターが、先ほど軍本部から送られて来た命令をみんなに伝える。

ほど単艦で大きな成果が出せるエルシオールは、本命と見なされる場所に配置したいというのが軍上層部の考えであるようであった。

暫く、補給と修理をしなが待機するようにという命令をエルシオールは受けていたのだ。

「じゃあ、俺は休憩だな。ミルフィー、お茶でも飲みに行こうよ」

「はい」

タクトは、ミルフィーユを連れてブリッジを出て行く。
だがいつもの事なので、レスター達は特に何も言わなかった。

「僕は、艦内の補修関連の部品などの搬入を監督しますよ。兄さん、他の物資はどうです？」

「それなりにある。いつ作戦命令が下っても大丈夫なように、多めに申請を出しているからな」

補給将校として有能なアキオは、軍の規定している在庫量を超える補給品を誤魔化して搬入させるのが上手であった。
昔に、軍の定める１００％の量がまるで実情に沿わずに、大変に苦労した経験があるからだ。
違法ではないが、脱法行為で規定量の１２０％から多い物で１５０％を上手く納品させてから倉庫に収めさせていた。

当然、そんな事が公になれば、以前の軍であれば処罰される可能性もあったのだが、大半のベテランがそんな事はとっくにやっていたので、これが公になる可能性はほとんど存在しなかったのだ。

いかに、書類上に出ない多くの補給物資を集めるか。
これが、補給将校としての腕前の見せ所であった。

「半年前に、実情に沿わないと言って問題になっていなかったか？」

レスターも脱法行為は良くないとは思っていたが、律儀に軍法を守って物資が足りなくなるのは本末転倒だと思って、アキオの行為を半ば黙認していたのだ。

「軍官僚もお役人だからさ。決めるのに、時間がかかるんだろう？」

「何とも、救われない話だな」

「とは言え、この程度の不満でレゾムに付くってのもな」

「あんな奴の下でやるくらいなら、自分で反乱でも起こした方がマシだな」

レスターの毒舌にアキオは苦笑するが、確かにアレの下で戦うくらいなら自分で反乱軍を率いた方が精神衛生上好ましい結果となるはずであった。

あくまでも、仮定の話にしか過ぎなかったが。

「一応、補給廠の方に催促をかけておくか」

レスター達との話を終えたアキオは、エルシオールのブリッジを出るのだが、その際にフォルテとお互いに目配せを交わしていた。

アキオのレナ星系主星衛星都市への上陸を利用して、今艦内に存在しない酒の入手を試みようとしていたからだ。

「（アキオ、最低でもワイン。焼酎、日本酒、ブランデー、ウィスキー……。とにかく手に入れて来るんだよ）」

フォルテの期待の表情を背に、アキオはエルシオールを降りてから主星衛星軌道上にある補給廠へと向かう。

そしてそこで、補給担当の将校と話をしていた。

「追加の物資ですか？」

「そうだ」

「えーーーと、特に書類に不備は見受けられませんね」

アキオが書類を渡すと、担当将校はすぐに判子を押してからそれを事務担当の兵士に渡していた。

書類が無事に通った事にアキオが少し安心していると、補給廠には次々と各艦の補給担当者達が詰めかけ、受付は大混雑の状態になっていた。

「急にどうしたんだ？」

「実は、コチジャン少将の命令です。レナ星系各地に駐留している艦隊に集結命令を出しているのです」

先に、強奪艦隊を討伐するために編成された分艦隊司令であったコチジャン少将が、ここに自分の権限が及ぶ限りの戦力を集めているとの話であった。

「コチジャン少将は、星系駐留艦隊の副司令ですから」

しかも、司令の中将は軍政畑出身であまり艦隊指揮に慣れていないらしい。

更に引退間近の老齢とあって、副司令の彼が実質的に駐留艦隊を牛耳っているとの担当将校からの話であった。

「艦齢の新しい、足が早くて航続距離の長い船を集めているな」

「はい、コチジャン少将は即応艦隊の編成を急いでいるのです」

いくらレゾムに恨みがあるからと言って、トランスバール皇国軍

で将官にまで上りつめたコチジャン少将が無謀な復讐など挑むはずもなかった。

彼は、把握している全ての艦隊戦力から、速度と航続距離に優れた船を中心に即応艦隊の編成を進め、残った船を上手にレダ星系各地の防衛拠点に配備し直しているようであった。

多くの補給担当者が詰めかけているのは、速度と航続距離に優れた船は多くの物資を必要とするからである。

航続距離が優れているという事は、それだけ乗組員達が長い間船を運用するという事なのだから。

どうやら無謀な復讐は考えていないようであったが、軍人らしく合理的な復讐の機会は狙っているようであった。

「みんな、溜め込むのに必死なんだな」

「ええ、レイトン准将と同じように」

どの船の補給担当者も、みんなアキオと同じ事を考えているという事であった。

もし戦闘や航行の途中で何かが足りなくなっても、広い宇宙空間ではそう簡単に補給など出来ないので、なるべく多くの物資を溜め込もうとする。

勿論、一部には在庫の関係で奪い合いをする必要がある物資もあるので、受付は大変に混雑している状態であった。

ちなみに、アキオはこの際に将官としての権限を上手く利用していた。

他の船の補給担当者は上位階級でも佐官クラスであったし、アキオは申請のスピードの面でも他を圧倒していたので、エルシオール

には必要な物資が既にちゃんと集まっていたのだ。

「ですが、暫くは待機でしょうね」

レゾムによる、真・正統トランスバール皇国軍設立の宣言。
これにより、一部辺境で反政府組織の蜂起はあったが、まだレゾム達の目標は知れず。
よって、皇国軍はいつでも出撃できるように準備を整えて待機するというのが軍本部からの命令であった。

「ただ、近衛と第1方面軍艦隊は、ピリピリしてますけど」

「ああ、陛下が行幸中だったな」

《エオニアの乱》終結より半年。
そろそろ皇国政府としては、シヴァ陛下に皇国領内の行幸を行って貰い。
皇国政府の安定化の証明と、本音を言うと下々の市民達への人気取りを行って欲しいという事で、少し前に首都星トランスバールを出ていたという情報をアキオは聞いていたのだ。

「本当は、明後日にはここに来る予定だったのですよ」

当然、そのスケジュールはレゾムの宣戦布告によって中止となっていた。
彼らの標的になる可能性がある、このレナ星系の首都星《惑星レナ》の衛星軌道上にある大規模軍港にスケジュール通りに彼女を寄せるわけにはいかないからであった。
もし寄るにしても、それは非公開の物となる予定であった。

「防諜の関係で、陛下のスケジュールは一切不明になりました。あーーーあ、直接お会いしたかったな……」

シヴァ陛下に直接会えなくなり、ガックリと肩を落とす担当者を慰めてから、アキオは補給廠をあとにする。

次にアキオが移動したのは、同じ衛星軌道上にある軍の保養都市も兼ねた衛星都市レブンであった。

ここには、普通の地上にある都市にある設備が大半は整っていて、勿論ショッピング街もあったので、アキオはここで酒を購入しようと考えていたのだ。

「ありがとうございました。またのご利用を」

高級な酒を置くリカーショップで大量の酒を注文したアキオは、それを本日の夜に所定の場所に届けるようにお願いをしてからカードでお金を払う。

いきなり直接にアキオがエルシオール艦内に酒を持ち込んでは、悪事がバレてしまう可能性があるので、事前に連絡を取っていたこの星にいる懇意にしている企業の担当者に、軍の補給品だと偽ってこれを冷蔵庫と一緒に納品させるのだ。

相変わらずの、酒に関しては妥協しない横紙破りな性格のアキオであった。

それと、失敗はフォルテの制裁を食らう可能性があったので、余計に慎重であったという説もあったが。

リカーショップの主人は、アキオの持っている使用額無制限のブラックカードを見て、大喜びで秘蔵の酒まで出して勧めていた。

このブラックカードは軍を退役した直後に作ったのだが、実はまだほとんど使用した事がなかった。
せいぜい、移動の交通費を清算したくらいだ。
あとはずっと惑星ロハスに滞在していたので、あの星でカードなど使う必要も無かったからだ。

「思ったよりも、良い酒を入手できたな。さて、もう少し買い物でも……」

リカーショップの入り口で次に買い物に行く店を考えていると、不意に軍服の背中の部分を誰かに引っ張られる。
何者かと思って後を振り返ると、そこには意外な人物が立っていた。

「陛下ですか……」

アキオは一旦両手で自分の口を塞いでから、小さな声で彼女に話しかける。
とても驚いたのだが、ここで大声を出すわけにはいかない事も理解していたからだ。

「久しぶりだな、レイトン。それと、今はお忍びという状態なので、余を陛下と呼ぶのは勘弁して欲しい」

そこには、私服姿のトランスバール皇国皇王シヴァ・トランスバールが立っていたのであった。

「数日中に、ここを訪れる予定だったとか？」

リカーショップの前で立ち話というのも何だったので、アキオは近くの喫茶店に入り、誰もいない端の席でシヴァ陛下との話を始める。

「色々とあった予定が、アレで全て中止になってな」

アレとは、勿論レゾムの宣戦布告の事であった。

彼が何を目的としているのはわからない以上、公に公表されているコースでシヴァ陛下を行幸させるのは危険という事になり、シヴァ陛下一行はそのまま所在不明の状態になっていた。

「それで、どうしてここに？」

「簡単な事だ。エルシオールも含めた、かなりの戦力があるからだ」

確かに、この状況でレゾムに攻撃を受けても、最悪シヴァ陛下を逃す事くらいは可能なはずであった。

それと、シヴァ陛下が僅かな随伴で動いているはずもなく、当然この宙域には彼女を護衛する艦隊が存在するはずであった。

やはり、普通の惑星に滞在して貰うよりはという事で、結局この軍港に寄ったらしい。

ただし、彼女の居場所は依然として極秘のままであったが。

「それで、抜け出して来たと？」

「まさかな。予定が無くなってしまったので、たまにはプライベー

トという物を楽しんでいるのだ。ルフト宰相も、賛成してくれたのでな」

という事は、当然シヴァ陛下には秘かに護衛が付いているという事であり、自分と接触した事実もルフト宰相にはお見通しのはずであった。

どうりで、先ほどから監視の目があるのを感じるはずだと思うアキオであった。

「（あれ？　という事は、俺の酒の購入がバレている？　いや、何もエルシオールに持ち込むと断定されたわけではないんだ！）」

ところが、そんなアキオの考えをあざ笑うかのように、シヴァ陛下がアキオに忠告をする。

「余は、まだ酒を飲める年齢にないので良くわからないのだが。ルフト宰相が、『レイトンに会ったら、ヴィンテージワインの二～三本も送るように伝えてください』と言っていたぞ」

「（何だよ、バレてるじゃないか……）わかりました……」

『違反は見逃してやるから、お裾分けを寄越せ』というのが、いかにもルフト宰相らしかった。

アキオは、上手く見繕って彼に酒を送る事にする。

「それでだ。余は、これからプライベートな時間を楽しむのだが、エスコート役がいないのだ。レイトンは、時間は空いているのか？　空いてなければ、強引に空けさせるが」

「これは、なかなかに独裁性が強くなられましたな」

「安心しろ、ただの独占欲だ。いつもは、ムーン・エンジェル隊のメンバーに独占されているからな」

「言うほど独占されてはいませんよ。時間は空いています」

今日は、補給関係の業務で一日エルシオールの外に出ている事になっているので、これからシヴァ陛下のエスコートをする事は可能であった。

アキオは、エスコート役を引き受ける事にする。

「それは良かった。ところで、何か忘れておらぬか？」

シヴァ皇子の質問に少し考え込んでしまうアキオであったが、すぐに彼女の服装の変化に気が付く。

いつもの皇族の着る服装ではなく、白いワンピース姿で、頭にも装飾品などを一切付けないで普通のショートカットであった。

本当に、普通の市民の少女のような格好をしていたのだ。

だが、生来の気品やらオーラは隠せないものらしい。

彼女が、とても家柄が良い家の娘に見えるアキオであった。

「とてもお似合いです」

「女性に対する褒め言葉は、早い方が良いと聞くがな」

「これは、一本取られましたね。まさか、ここで陛下と会うとは思わなかったので、驚きの方が強かったのですよ」

「それとな、今日はお忍びなのだ。陛下などという称号と、謙った

言葉は禁止だ。周囲にバレてしまうからな」

いつもの服装と装飾のイメージがあるので、今のところはシヴァ陛下の正体に気が付いている人はいないらしい。

だが、確かにいつもの口調で話せば、それを聞いた人達にあらぬ疑惑を呼ぶ事となるであろう。

シヴァ陛下は、アキオに普通に話しかけるように命令する。

「えーーーと、ミドルネームとかは無いんですか？」

「最近、余の名前を付ける市民の親がいるそうではないか。普通にシヴァと呼ぶがよい」

陰気で皇国の腐敗を撤廃できなかった前皇王や、殺戮の反逆者となったエオニア元皇太子の市民達の人気は最悪であったが、シヴァ陛下に対する人気は高かった。

それにあやかって、戦後に生まれた娘の名前に彼女の名前を付ける人が多かったのだ。

「わかりましたよ。どこに行きたい？　シヴァ」

アキオは、不敬物だなと思いうつつも、シヴァ陛下を呼び捨てにする。

「そうだな。遊園地という場所に行ってみたい。余は、行った事がないのだ」

「わかりました……、じゃないな。わかった」

アキオはシヴァ陛下と手を繋ぐと、そのまま遊園地へと移動するのであったが、そのアキオの顔を見上げながらシヴァ陛下は今までにないほど嬉しそうな表情をしていた。

「何に乗りたい？」

「遊園地には、ジェットコースターという乗り物があるらしいな」

「あるよ。ここには、特に大きいのが」

シヴァ陛下を連れて遊園地に到着したアキオは、彼女の要求通りに一緒に乗り物やアトラクションを楽しんでいた。

この近辺の惑星にある遊園地では、最大規模のジェットコースターに乗り。

他にも、多くの絶叫マシーンのハシゴを行っていた。

「レイトン、ジェットコースターとは楽しい乗り物だな」

「もう一回乗りますか？　じゃなかった。乗るか？」

「ああ、レイトンは目を回さないのだな」

「タクトと一緒にして欲しくないな。訓練もしているし、鍛えているから」

「アレは、駄目らしいな。以前に、ルフト宰相から聞いた事がある」

トランスバール皇国軍でも珍しい実戦経験者であるアキオは、士官学校在籍中から実技においても優秀な成績を維持していたし、卒業後は更に過酷な環境に身を置いていた。
なので、ジェットコースターにもう少し派手に動いてもという感覚があったのだが、タクトだとそうはいかないらしい。

ミルフィーユが楽しんでいる横でグロッキーになる事も珍しくないと、アキオはミルフィーユ本人から、シヴァ陛下もルフト宰相から聞いているようであった。

なぜルフト宰相がそんな事を知っているのか？
やはり、皇国の英雄ともなればそれなりに監視が付くという事であろう。
彼に何かがあっては困るのだから。
ただ、普段のタクトは、本当に監視し甲斐の無い人物であったが。

何とも締まらない皇国の英雄であった。

「次は、アトラクションという物に挑戦したいな。お化け屋敷か？これにも、入りたいな」

「お供しましょう」

アキオは、勇んで中に入ったものの、予想外の怖さに自分の腕にしがみ付くシヴァ陛下を微笑ましく思いながら、お化け屋敷を楽しんでいた。

お化け屋敷を出ると、お昼の時間を過ぎていたので、二人で遊園地に入っているハンバーガーショップで遅めの昼食を取る事にする。

「一度食べてみたかったのだ」

「どこで知ったんだ？」

「前に、ミルフィーが教えてくれたのだ。ここの特大重ねバーガーが美味しいと」

前にミルフィーユが、エルシオール艦内でシヴァ陛下のお世話をしていた時にそんな話をしていたらしい。

シヴァ陛下は、大人でも苦戦しそうなハンバーガーを美味しそうに食べていた。

「レイトンは、お化け屋敷を楽しめたか？」

「ええ、まあ」

「ハッキリしないやつだな」

アキオのお化け屋敷を楽しむ要素は、作りが精巧だとか、中にいるスタッフの演技が上手だとかそういう種類の物を楽しむという、少し他人とは違った楽しみ方であったからだ。

それと、もう一つ楽しみ方はあったのだが……。

「陛下の……。おっと、シヴァの歳相応の女の子らしい悲鳴が聞けたのは新鮮だったな」

「言うと思ったぞ。相変わらずの天邪鬼め」

「だけど。いくらやんごとなき身分にいても、そういう部分は大切

にした方が良い」

いくら皇王でも、彼女はまだ十一歳の少女にしか過ぎない。

支配者に年齢は関係ないかもしれないが、たまには等身大の自分を確認しておかないと人生も楽しめない。

そんな話を、アキオはシヴァ陛下にしていた。

「私も、十五歳までは普通の少年でしたよ。男は女性よりも成長が遅いから、本当にただのバカガキでしたね。なので、十一歳にならたばかりの陛下は、たまにこういう時間を持たれた方が良い。おっと、なかなか普通の話し方にならないな」

「なるほど、忠告は謹んで受け入れよう。だが、その際にはなるべく付き合えよ。ルフト宰相にも頼んでおくからな」

昼食後も、乗り物やアトラクションを楽しんでいた二人であったが、続けてゲームコーナーにも足を運んでいた。

そこには特設コーナーがあり、今時珍しいコルクの弾を撃ち出す射的コーナーが設置されていた。

「落とせば、どれでも差し上げますよ」

店主の言葉に、シヴァ陛下の視線は大きなピンク色のヌイグルミへと向いていた。

「勿論知っていますよね？　最近、流行のやつですよ」

それは、最近高視聴率の番組の中に出てくる。

ノーマッドという、毒舌が売りのキャラクターのヌイグルミであった。

しかも、その大きさからして、これが一番の宣伝商品なのであろう。

店主は、棚の真ん中にデンとノーマッドのヌイグルミを置いていた。

「人気過ぎて生産が追い付かないらしく、これは本当に貴重品です」

確かに、この射的場には多くの親子連れやカップルが詰めかけ、ほぼ全員がノーマッドのヌイグルミを狙って銃を撃っていた。

ところが、ヌイグルミが大き過ぎるようで、いまだにノーマッドのヌイグルミを獲得した者は存在しなかった。

「レイトン、銃は得意か？」

「フォルテには負けるけど、そこそこには」

「余も最近は習っておる。落とすぞ」

「やっぱり、挑戦するんだ」

二人は、それぞれにヌイグルミを狙ってコルク銃を撃つ。

コルクの弾は次々とヌイグルミに命中するが、やはり標的が重過ぎるらしく、ヌイグルミは少し動いたくらいであった。

「おっちゃん、これ本当に落ちるのか？」

「落ちるよ。全員、狙っている場所が悪いんだよ。上手くバランスを崩さないと」

とはいえ、そんな事が出来る人はいまだに現れておらず、ノーマ

ッドのヌイグルミを獲得した者はゼロであった。

「バランスか……。良い手を思いついた」

アキオは、懸命に銃の狙いを付けているシヴァ陛下を手招きで呼ぶと、そっと作戦を耳打ちする。

突然の事に彼女は顔を真っ赤にしていたが、アキオはそれには気が付いていないようであった。

「おっちゃん、二人同時でも良いんだよね？」

「勿論だ。だが、本当にタイミング良く同時にポイントに当てないと落ちないぜ」

「なら、問題ないさ。いくぞ」

「任せろ、レイトン」

「「せーーーのっ！」」

二人が掛け声と共に同時にコルク銃を撃つと、ノーマッドのヌイグルミは棚から落下して、周囲から歓声があがる。

「初の成功だね。おめでとう」

「悪いね。目玉商品を」

シヴァ陛下が嬉しそうにヌイグルミを受け取るのを確認しながら、アキオは射的屋の店主に話しかける。

「目玉が一つだと、こういう事もあるからな。実はもう何個かあるんだよ」

「それは、良かった」

すぐに二個目のヌイグルミが棚にセットさせると、再び多くの人達がノーマッドのヌイグルミを狙ってコルク銃を撃ち始める。

成功者が出た途端に、現金なものだなと思うアキオであった。

「兄ちゃんは、軍人さんなんだろう？」

「良くわかるね」

さすがに軍服で遊園地というわけにはいかなかったので、今のアキオは遊園地の途中にある店で購入したTシャツとGパン姿という非常にラフな格好をしていた。

なので、職業がバレるとは思わなかったのだ。

「銃の腕が素人とは思えないよ。それに、これでも客商売だしね」

「なるほどね」

大きなヌイグルミを抱えるシヴァ陛下と一緒に射的場を離れるアキオを店主は見送るが、彼にはもう一つ気が付いている事があった。

「（あの少女は、シヴァ陛下だよな。それで、格好良い軍人さんは護衛か何かで……）」

完璧な確信は持てなかったが、『偉い人にも、プライベートは必要だよな』などと思いつつ、店主は新しいお客さんの対応に回り始

めるのであった。

「今日は楽しかったな」

「そうですね」

「まだ、プライベートの時間は終わっておらぬぞ」

「そうだな」

その日の夕方、二人は遊園地近くの公園でベンチに座って話をしていた。

シヴァ陛下に突如発生した楽しかった休日も、残りあと僅か。

彼女は、日が暮れるのを惜しむかのようにアキオと話を続けていた。

「プレゼントも貰ったしな」

シヴァ陛下は、射的で獲得したノーマッドのヌイグルミを嬉しそうに抱きしめていた。

「ですが、正直あまり可愛くないヌイグルミですね」

「ちまたでは、ブサ可愛いと呼ぶらしいな」

「随分と、市井の流行に詳しいね」

「余は皇王だからな。市井の事も勉強しておるぞ」

「それは、結構な事で」

アキオは、『シヴァ陛下でも、大きなヌイグルミをベッドに入れて眠るのかな？』などと不謹慎な事を考えていた。

「ところで、一つ聞いて良いか？」

「答えられる事なら」

「誰が一番好きなのだ？」

「それは、ストレートな」

わざわざ説明する事もなく、アキオにはシヴァ陛下の聞きたい事が良くわかっていた。

前にエルシオールに乗っていた頃から、彼女は良くアキオがムーン・エンジェル隊の女性陣に振り回されている現場を目撃していたからだ。

つまり、その中の誰が好きなのかを聞いているのであろう。

自分にシャトヤーン様のように食事やオヤツを作ってくれたミルフィーユは、趣味が悪い事にタクトと付き合っているらしい。

シヴァ陛下からすれば、タクトは軍人としても優秀であり、人間としても信用できる、友に成りうる人物であったが、男としては周りにレスターやアキオやエリオスがいる影響からか？

恋愛対象にはならないと感じていた。

「まだ良くわからないのが本音ですね」

アキオは、少し前にランファに『好きかもしれない』などと言っていたが、それで決定という保障もなかった。
何とも無責任な意見であったが、何しろ一生の問題である。
慎重に考えなければと思うアキオであった。

「うら若き乙女達を、四人も惑わすのか？」

「四人ですか？」

ランファ、ちとせ、ミントと。
アキオは指折り数え始めるが、シヴァ陛下はそれを遮るように次のだいへと話を移す。

「余も、人の事は言えないがな……」

「何かお悩みで？」

「余の母親が、シャトヤーン様だったのだ……」

アキオはそれとなく気が付いていたし、実際にシャトヤーンと話をして真実も聞いていたので知っている。
なので、この件では全く驚かないで彼女からの話を聞いていた。

「そなたは、驚かないのだな？」

「ええ、何となく気が付いていましたから」

実の母親が傍で自分の面倒を見ていたのに、彼女はそれを娘である自分に十年以上も話さなかった。

その件で、彼女は実の母親に多少の不信感を持っているようであった。

「本当は、嬉しかったのだ。でも、もっと早くに話して欲しかった……」

「そうですね。その件に関しては、シャトヤーン様に罪がありますね。事情はあったのでしょうが」

シヴェ陛下は、アキオが素直に自分の話に賛同した事に驚いていた。

「珍しく、素直に余の意見に賛同するのだな」

「『言い出せなかった彼女も辛かった』とか。そういう事は今更なので言いませんよ。実の母親が傍にいる娘に名乗り出なかった。悪い事です。陛下は、素直に十一歳の娘として文句を言えば宜しい。正直に自分の考えを伝えるのです」

「でも……」

それで、もし二人の関係が崩れてしまったら？

そう考えると、弱気になってしまうシヴァ陛下であった。

「大丈夫ですよ。名乗ってはいなかったとはいえ、生まれた頃から一緒に生活して来た親子じゃないですか。私も、昔は母に色々と我侭を言ったものです」

アキオとて、昔から聞き分けの良い子供というわけでもなかった。色々と母親に迷惑をかけたし、怒られた事も沢山あった。

それでも、二人の関係は崩れたりはしなかった。
なぜなら、二人は親子であったからだ。

「本当の親子というものはそういう物です。腹を割って話し合えば、絶対に大丈夫です」

アキオは、シヴァ陛下に優しげな笑みを浮かべながら持論を述べる。
そして遠くを見つめながら、もう一言付け足していた。

「陛下は……。いや、シヴァはまだこれからいくらでも話が出来る。もう俺は、話をする事すら出来ない……」

アキオの母親の話については、彼女も色々と情報は聞いていた。
十五歳まで母子二人が人間関係の中心であった彼が、その母の死によって運命が流転してしまった事をだ。
多分、アキオの母親が死んでいなくても、彼の運命は同じであったろう。
アキオが今生き残っているのは、母が死んで孤独になり自分の身だけを考えれば済むようになったからとも言えた。

だが、そんな事実は関係なかった。
彼は、母の死と突如知った父の背信によって数年の孤独を余儀なくされた。
おかげで、いまだに心に傷を負っている部分がある。
あれだけ複数の女性に好かれているのに、最後の決定が出来ないでいたのだ。

アキオは無意識に、あの十五歳の頃に失った母の面影を女性に探しているのかもしれなかった。

世間的に言うと、ランファの言う通りにマザコンなのであろう。
既に亡くなっている相手なので、それを面と向かって指摘したのはランファだけであったのだが。

「そうだな。話してみないとわからないか」

「そうですよ」

「わかった。さて、そろそろ時間のようだ」

シヴァ陛下が、覚悟を決めたようにベンチから立ち上がって目線を正面に向けると、公園の入り口には一台の黒塗りの公用車が待っていた。
彼女のプライベートな時間は、これで終了という事らしい。
公用車の後部座席の窓が開くと、そこにはルフト宰相がいてアキオに手を振っていた。

アキオは、軽く敬礼をして返す。

「余は、明日に公式にここを訪れるというスケジュールになっているのだ。それに、エルシオールに届け物もあるらしい」

そのせいで、彼女のレナ星系への公式来訪が遅れたらしい。
つまり、今日の事はあまり外部には話さないでくれという事を彼女は言いたいらしい。

「タクトや、ムーン・エンジェル隊の連中には話しても構わないぞ」

シヴァ陛下は、アキオにしてやったりという笑顔を浮かべていた。
いくら名目は公務での外出でも、一日アキオがエルシオールにい

なかったので、機嫌の悪い女性が複数いるであろうという理由からであった。
ただ、今日の行動は人から見ればデートとも言えなくもない。
幼い彼女は、彼女なりにライバル達に宣戦布告をしているとも取れた。

「今日は楽しかった。また誘うからな」

シヴァ陛下が公用車に乗り込むのをアキオが見送っていると、外にいる護衛から一通の手紙が渡される。
どうやら、車内にいるルフト宰相からの手紙らしい。

「あとで、エルシオールに戻ってから見て欲しいそうです」

「了解だ」

シヴァ陛下を乗せた車が遠ざかるのを、アキオは暫く見送っていたが、車内の彼女も遠ざかるアキオをルフト宰相に話しかけられるまで見つめていた。

「今日は、いかがでしたかな?」

「楽しかった。だが……」

彼女は、大きなノーマッドのヌイグルミを強く抱きしめながら話を続ける。

「我が身が幼いのが恨めしいな。せめてあと三歳。いや四歳大人であったならな」

確かに今日のデートは楽しかったと思う彼女であったが、自分とアキオの認識に大きな差がある事にも気が付いていた。
自分からすれば男性との初デートなのだが、アキオからすれば妹分を遊びに連れて行った感覚でしかない。

だが、それでアキオに文句を言うわけにいかなかった。
年齢差から考えても、それが至極当然な認識なのだから。

「初恋は、実らぬものです」

「経験があるのか？」

「ええ……」

ルフト宰相の、学校の先生が好きだったという話を聞いて納得しながら、最後のこう締め括る。

「とはいえ、三人で泥沼の試合を数年間続けてくれるかもしれない。淡い期待を込めて、早く大人になるのを待ちたい気分だ」

この国のトップ2を乗せた公用車は、そのまま極秘裏に宇宙港へと入って行くのであった。

「いいね。この最強のラインナップ」

「だろう。意外と良い酒が置いてあるショップだったんだよ」

「午前に酒買って、そのまま午後はお忍びのシヴァ陛下のお供か。サボリなのか？　大変なのか？　良くわからん日だったな、レイトン」

その日の夜遅く、様々な手段を用いて自室に酒を持ち込む事に成功したアキオは、秘かに呼び寄せたフォルテやタクトと今日の話をしていた。

「ネオリヴザルトの三百六十四年物の白がある！　飲もう！　今すぐに飲もう！」

「ラトゥールの三百二十七年産があるな。こんな高級品、うちの実家でも手に入れられないぜ」

フォルテは、他のムーン・エンジェル隊メンバーや艦内のクルーの目を逸らし、タクトは最大の障害であるレスターの目を眩ませる事に成功して、それぞれにアキオの悪事に加担していた。

全ては、美味しいお酒のためである。

そして、今回の成果である高級な酒瓶達を眺めながら、『今日はどれを飲もうかな？』などと期待に胸を膨らませるのだが、アキオはその中でも最も高級そうなヴィンテージワインを数本取り除き、宅配用のケースに急いで収納していた。

「アキオ！　それほどの高級品をなぜ飲まない？」

フォルテの抗議に、アキオは一枚の手紙を差し出す。

その手紙は、先ほどルフト宰相が認めてアキオに渡された物であった。

「ルフト先生の手紙か。何が書いてあるんだ？」

士官学校の校長から、皇国を支える宰相へとなったルフトが手紙に何を書いているのか？

今日の、アキオへの感謝の気持ちなのか？

明日以降の大切な機密情報なのか？

予想をしながらタクトが便箋を開けると、手紙には数本のワインの名前が書いてあるだけであった。

「レイトン、これは？」

「それを送れという事なんだろうな」

ルフト宰相は、ご丁寧にもアキオの購入リストまで押さえていたらしい。

購入した中でも、希少性の高い最高級のワインのみを紙面に書いていた。

「よりにもよって、この機会を逃すと二度と飲めない逸品ばかり……」

フォルテは悔しがるが、本来艦内への酒の持ち込みは禁止である。

勿論、違反者は後を絶たず。

実はルフト宰相も、若い頃には通常動力シャトルの推進剤タンクにウィスキーを入れて密輸し、軍艦の中で販売したなどという逸話の持ち主であった。

あくまでも噂という事になっていたが間違いなく事実であり、要するに一度も違反を見付かった事が無かったという事だ。
一度も、決定的な証拠を掴ませていなかったのであろう。

軍上層部にはそれなりの比率でいる違反者達であったが、やはり上手くやっている人ほど有能で、出世が早い法則があるようであった。

「抜かったな。軍港や補給廠の連中は、上手く誤魔化したんだが……」

ルフト宰相がここにいた事自体が突発事態なので、これはアキオのミスというよりは運の悪さが原因なのであろう。
どちらにしても、全てを暴露されないように幾つかの酒を提供する必要があった。

「意外とセコイ宰相閣下だねぇ」

「いや、レイトンの方が遙かに金持ちだから」

資源惑星一個とそれに付随する様々な資産を有しているし、普段は大して金も使わないので特に金の面では惜しいとも思わないアキオであったが、ヴィンテージワインは次にいつ入手できるかという点でヴィンテージなわけで、それだけは惜しいと感じるアキオであった。

「最後の詰めでミスったな。教訓だなぁ……」

それでも、他のヴィンテージワインで乾杯をする三人であったが、そこに突然一人の男性が乱入して来る。

アキオの個室のキーロック解除を行い、レスターが強引に乱入して来たのだ。

「レイトン！　お前、酒の持ち込みは軍規で禁止されていて……」

最初は威勢の良いレスターであったが、次第に視線は多数置かれたヴィンテージワインへと向いてしまう。

レスターも酒好きであったが、今までに飲んだ事もない高い酒ばかりが並んでいたからだ。

「よう、クールダラス副司令殿」

「レスターも、一杯やるか？」

「ムーン・エンジェル隊の司令と隊長が、同時に買収されるなよ！」

レスターのツッコミがタクトとフォルテに入るが、真面目で謹厳実直な彼でも、目の前に置かれた高級酒には目を奪われてしまっていた。

多分、このまま真面目に働いていても、この中の何種類しか自分の給料では買えないであろう。

それを考えると、『没収！』という言葉が喉から出かかっては消えて行くレスターであった。

彼の頭の中では、『規則ですよ！』という天使と、『秘密にして、一緒に飲んでしまえよ』という悪魔が鬩ぎ合っていた。

「なあ、レスター。もしお前が違反を告発したとしよう。当然、酒はゴミ箱に直行だよな？　誰にも飲まれないで捨てられる酒は可哀想だし、惨めだよな？」

アキオは、レスターの肩に手を置きながら彼を説得する。

「それにだ。こうも考えられないか？　どうせ、捨てるならゴミ箱じゃなくて、俺達の胃袋の中に捨てた方が良いと」

とんでもない屁理屈であったが。

更にアキオは、レスターの片手にグラスを持たせると、そこに栓を開けたワインを注ぎ始める。

その芳醇な香りと、視界に入る至高の液体の色にレスターは目を奪われてしまう。

「ちょっと若いけどな。三百九十八年産のシャトーの白だよ。飲んでみな。美味しいから」

「……、ああ……」

エルシオール酒飲み同盟にレスターが加わった瞬間であったが、彼はこの日の日記に一言だけ記している。

『私は、悪魔の囁きに乗ってしまった。ただし、味は至高の限り』

と。

第二部　第五話（暫定版）

「シヴァ陛下の御成りぃーーー！」

アキオとシヴァ陛下が秘かに遊園地での休日を楽しんだ翌日、エルシオールが駐留している、レナ星系主星の軍ドックに一隻の高速戦艦が入港していた。

先の大戦で活躍をしたファラーメ級高速戦艦の新造艦を臨時のお召し艦にして、シヴァ陛下とルフト宰相や、その他随員達が入港した船から降りると、軍港にいる軍の幹部や駐留艦隊司令部の将官達が揃って彼女達を出迎える。

更にその横では、召集した軍楽隊がトランスバール皇国の国家を演奏していた。

普通にテレビなどでよく見る、要人の出迎え風景であった。

ただ、今ここで初めて入港したシヴァ陛下一行を出迎えているこの光景は完全にフェイクであった。

実際には一昨日の夜には到着していて、昨日はアキオと隣接する衛星都市内の遊園地で遊んでいたのだから。

「相変わらずの古臭さですね……」

シヴァ陛下の来訪を告げる宮廷儀典局の老貴族に、珍しく同じく貴族であるエリオスが文句を言っていた。

エオニアの首都星トランスバール侵攻の際に、それを絶望的な状況で迎え撃つオイゲン大将が、珍しく愚痴を零していたのを思い出していたからだ。

一秒でも惜しい時にも関わらず、古臭い儀礼を経ないと前皇王に謁見できず。
オイゲン大将にみならず、前皇王すら宮廷儀典局の貴族に自嘲的な表情を浮かべていたとの事であった。

だが、それを前皇王は改めなかった。
時間も無かったが、どこか自分はこの古臭い因習と滅びるものと覚悟していたのであろう。

ところが、シヴァ陛下が即位してもこの儀礼は廃止されていなかった。
ルフト宰相は、新しい皇国のためになるべく貴族優先の官職を減らす動きに出たわけだが、その際になるべく実利や権力の及ばない名誉とされる役職を残す事にしたらしい。

実際に、この宮廷儀典局長の老貴族も、さして仕事があるわけでなかった。
シヴァ陛下来訪の際に彼女の名前を叫び、宮廷内にいる彼女の元に来客があった際に、その独特な叫び方で来訪者の名前を告げる。
それほど給料の良い役職ではなく、権限があるわけでもない。
これは、名誉に付属するものであったからだ。

この貴族は辺境ではなかなかの財力を持っていて、先の乱では積極的にルフト達を支援していた。
既に家の事は跡取りの息子に任せているので、あとは中央で名誉を得るだけという事で。
こうやって堅苦しい儀典用の服を着て、時代錯誤で堅苦しい仕事を続けていたのだ。

先代皇王ですら、どうして続いているのか理解できない慣習であったが。
そんな古臭い事が続いてこそ、国家が長期に渡って安定している証拠という事らしい。

シヴァ陛下は、ルフト宰相をお供にこの近辺の宙域を担当する軍高官達などの歓迎を受け。
テレビ向けのパフォーマンスをしてから、先の大戦でお召し艦にしていたエルシオールに急いで駆け込んでいた。

「ふう、何とも堅苦しい事だな」

「みな、陛下のお姿を見たいのですよ」

「そうか、客寄せパンダとしては役に立っているのか」

シヴァ陛下の毒舌に、タクトのみならずルフト宰相も顔を苦くしていた。
そして、彼女に影響を与えたと思われる人物の方に視線を送る。

すると、アキオはブリッジにある探査機器を使って何かを調べているようであった。
通信担当のアルモの横で、ちとせと一緒に何かの話をしていたのだ。

「発信源の特定は可能かな？」

「ええと……。かなり遠方にあって、正確な位置の特定が難しいですね」

実は先ほど、タクトがエルシオールに住まう宇宙クジラを世話する少年クロミエから、宇宙クジラ特殊な通信を感じたと連絡して来ていて、その確認を行っていたのだ。
結果、過去の通信ログに特殊な周波数で発進された通信記録が残っていたのだが、距離と電波の強さの関係でほとんど何を言っているのがわからない状態にあった。
ただ、一つの単語だけは無事に傍受する事に成功している。
《ＥＤＥＮ》という単語であった。
それは六百年ほど前に全銀河を襲い、トランスバール皇国がロストテクノロジーによって復興するまで人類を宇宙から追いやったクロノ・クウェイクによって滅んだ先代文明の名前であった。
「そうか……。他の内容は？」
「通信は、かなりの高周域波で本来人間には聞こえないものです。それを臨時で分析したので、あれが精一杯で……」
特殊な周波数にのった通信の解析と傍受など、本来はプロの情報部の解析員が行うものであり、もしアルモがこれを行うにしても、かなりの時間を要するものであった。
「あの……。私が出来る限りで分析しましょうか？」
そこに、ちとせが手を挙げる。
アキオは、以前にセンパール士官学校の生徒であったちとせが通商護衛艦隊に実習に来た際に、彼女が様々な分野で才能を発揮して主席である事を知っていた。

特にこの手の分野では、皇国軍戦略情報部からスカウトが来るほどであったらしい。

卒業以来、常にドサ周りのアキオからすれば、眩しいくらいの成績と実力を持つ女性士官がちとせだったのだ。

「そうだな。お願いしようかな。俺も、手伝おう」

「はいっ！　宜しいですね？　クールダラス副司令」

「そうだな。強奪船団とは関係ないかもしれないが、捨てておくのもどうかと思う案件だ。うちは上級士官が余っているから、レイトンに任せるか」

「了解しました。行きましょう、アキオさん」

アキオを一緒に仕事をするオフィシャルな理由を得たちとせは、満面の笑みを浮かべながらアキオを情報分析を行えそうな部屋への移動を開始する。

だが、それを止めようとする存在もいた。

「レイトン」

「おや、シヴァ陛下でいらっしゃいましたか」

「色々とあって大変なのはわかるが、主君である余を無視するとは不敬だな。少し付き合うがよい」

シヴァ陛下はアキオとちとせの間に入り込み、そのまま彼の手を

掴むとティールームに向けて早足で歩き始める。

「えっ！」

「私も行きます！」

突然のシヴァ陛下の行動に驚くちとせとミントであったが、二人はすぐにアキオ達を追いかけ始め、ミルフィーユはならばお茶の準備をしようとブリッジから退室する。

他にも、集まっていた他のムーン・エンジェル隊のメンバーも後を追うように退室をし。

最後には、唖然とするタクトとレスター。

そして、ルフト宰相が残された。

「ルフト先生」

「まあ、陛下もお年頃という事かの。ただ、ご自分でもお分かりになられておるのじゃ」

アキオと自分が将来的に結ばれる可能性はかなり低く、それでもなるべく会った時には一緒にいたいのだと。

ルフト宰相は、そう言った趣旨の発言をする。

「複雑な乙女心ですか」

「レスターが、そんな乙女心の機知に詳しいとは思わなかったな」

「タクト、何気に失礼な気がするがな」

レスターは、自分を鈍感男扱いするタクトに毒舌を吐いていたが、確かにレスター自身はアルモの気持ちにまるで気が付いていなかったので、それはあながち間違いでもなかった。

というか、人の事は少し離れた場所から冷静に観察できるのだろうが、自分の事は良くわからないというのが本音なのであろう。

タクトとルフトは、レスターの背中を見ながら溜息をつくアルモに同情的な視線を送る。

だが、これにもレスターは気が付いていないようであった。

「タクト、お前もシヴァ陛下から話を聞いてきてはどうだ？」

「ええ、そうですね」

上司の命令で大っぴらに仕事をサボれるとあって、タクトは一目散にエルシオールのブリッジを出て行く。

そして最後には、レスターとエリオスが残されていた。

「ルフト宰相。シヴァ陛下は、タクトに何かをさせるつもりなのですか？」

「タクトというよりは、アキオとエリオスかの……」

「エリオスとアキオにですか？」

ルフトはレスターに、シヴァ陛下がわざわざエルシオールにまで来訪した理由を伝えるが、ちょうど同じ頃にティーラウンジでもシヴァ陛下がアキオに同じ事を話していた。

「昇進ですか？」

「アキオは、以前にその話を断っていたな」

「はい」

いくら最悪な上官だったとはいえ、アキオはジーダマイヤ大将を他の軍人達が大勢見ている前で力一杯ぶん殴っている。

それは、大人としても組織人としても決して褒められた事ではない。

なので、元々軍人としての栄達に興味がないアキオは、昇進を断り続けてる状態であった。

「そなたにしては、えらく律儀なのは結構な事だが。正直に言うと、そんな事を気にしている人間など誰もいないのだ。それに、指揮官が不足している」

多発する輸送船などに対する強奪・襲撃事件で、皇国軍は予備役や退役した将校まで召集して、警戒態勢を強化している状態であった。

ところが、それでも全く数が足りず。

そこにルフト宰相が、『エルシオールには、指揮官クラスの人材が四人もいます。半分抜いても大丈夫かと思いますが』と発言していて。

その結果、アキオとエリオスが引き抜かれる事となっていたのだ。

「少し変則だが、コチジャン少将が率いるレナ星系に所属する艦隊に、追加で二つの任務部隊を下に置く事にしたのだ。それに伴い、コチジャン少将は中将に昇進し、アキオは少将に、エリオスは准将

に任じる事にする」

これにより、コチジャン中将の指揮する一個艦隊クラスの戦力と、アキトとエリオスの指揮するそれぞれ半個艦隊レベルの戦力で合計二個艦隊レベルの戦力が、エルシオールと共同して強奪艦隊の動きに対応する事になっていた。

「コチジャン中将の戦力と、アキオがエリオスの戦力を統率すれば一個艦隊が二つになる。分割が容易となれば、多数ある強奪艦隊の次の襲撃候補地の察知も楽になるはずだ」

シヴァ陛下は、そう説明しながらミルフィーユの準備したチーズケーキを年相応の女の子らしく食べていた。

「……」

「どうかしたのか？　烏丸中尉」

シヴァ陛下は、自分に対して複雑な表情を見せるちとせに気が付いていたが、やはりすぐにちとせの機嫌が悪い原因も掴んでいた。

「今までは、レイトンと呼んでいたからな。だが、ここではアキオと呼んでも差し支えはないと思うが」

「いえ……、その……」

ちとせは、アキオを平気で呼び捨てで呼べるシヴァ陛下やランファやフォルテの事が正直羨ましいと思っていたのだ。

「ところで、タクトはアキオをレイトンと呼ぶな」

「ええ、別に他意はないんですけど、何となく呼び易いというか合うような気がして」

「アキオも、男から呼び捨てにされるのも嫌だろうしな」

「別に、嫌でもないんですけどね……」

アキオやタクト達は、暫く見ない間に大分皇王らしくなったシヴァ陛下に喜んで良いのやら、少し複雑な気持ちであった。

特にちとせトミントは、シヴァ陛下が一人の女として本気でアキオを狙っているのではないかと、少しヤキモキとしてしまうのであった。

「目標宙域まで、まだ時間があります。例の宇宙クジラが傍受した特殊な電波の解析を進めましょう」

「ああ、俺も協力する」

数時間後に到着する合流ポイントにおいて、昇進したアキオとエリオスは、新しい任務艦隊の司令としてエルシオールを降りる事になっていた。

ちとせとしては非常に残念ではあったが、憧れのアキオが昇進して臨時とはいえ艦隊を預かる身分になった事には素直に『おめでとうございます』を言っていて、それと同時に生来の生真面目さから、

先ほどの電波の発信源だけは突き止めておこうと思っていたのだ。

二人は一緒に通信機や、暗号解析機の前で作業を行い、その通信がある方面から来ている事実を掴んでいた。

「この方面には、資源衛星レミナスが存在するな」

「はい」

資源衛星レミナスは、皇国にとって復興と皇国軍戦力の建て直しに必要な最重要戦略拠点の一つであり、それなりの防衛戦力が派遣されているはずであった。

ところが、彼らが無事にレミナスを防衛できているかは、もう暫くしないと通信が届かないので何とも言えなかったのだ。

「戦力の増強に、これほど便利な目標もないか。ストレートに狙いを絞ったんだな」

「はい」

「本当は、もう少し精密に解析を行いたかったんだがな……」

「あの……。アキオさんがエルシオールを降りると言っても、常に行動は共にするわけですし……」

「なあに、臨時の指揮官だ。すぐにエルシオールに戻るさ」

ちとせは、自分に笑みを浮かべながら話しかけてくるアキオに顔を真っ赤にしていた。

そして、同時に悟ってもいた。

やはり自分は、このアキオ・レイトンという男性が好きなのだと。
最初は、優秀な上官に対する憧れであったのかも知れない。
能力が優れていて、尊敬からアキオへの好意に至ったのだと。

だが、こうやって色々と一緒にいて話をしてみると、意外と子供っぽい部分もあったし、ランファに言わせるとマザコン気味で実際にそうであったし、決してただの完璧超人というわけでもなかった。

それでも、こうして一緒に仕事をしているだけで離れたくないと感じてしまうのだ。
この半年、メール等のやり取りはしていたが、その間にアキオから返事が来るのをどれだけ楽しみにしていたか。

更に今では、なるべくアキオと離れたくないとまで感じるようになっていた。

「でも、この電波の詳しい解析も進めたいですね」

「時間はかかりそうだが、何か他に情報が詰まっている可能性もあるからなぁ……」

「そうですよね。そこでなんですけど……」

そして数時間後、エルシオールはレナ星系を少し資源衛星レミナスの方向に進んだ宙域で正式に昇進の辞令を受けて、コチジャン中

将指揮下の第3任務艦隊へと合流を果たしていた。

この艦隊は、大体戦艦か高速戦艦が二～三隻に、空母か軽空母が一隻に、重・軽巡洋艦が三隻から四隻、駆逐艦が二個戦隊に、その他突撃艦やミサイル艦、補給艦や工作艦などで編成されている分艦隊を四つ持っていて。

その内二つをコチジャン中将が直率し、一つを少将に昇進したアキオが、もう一つを准将に昇進したエリオスが指揮する事になっていた。

そしてそれと同時に、タクトが大将に昇進している。

僅か二十代の若者としては驚異的な昇進速度であったが、実はエルシオールに再びシヴァ陛下が座上する事となり、今回行動を共にするコチジャン中将の指揮する艦隊に命令を出す事もあり得たので、陛下の御召艦を指揮する司令も上階級者の方が良いという事で、タクトもシヴァ陛下の命令で昇進し、同じくエルシオールの艦長兼ムーン・エンジェル隊副司令のレスターも少将へと昇進する事になっていた。

当然、艦内のクルーもそれぞれに一階級ずつ昇進している。

アルモやココは大尉に、整備班長のクレーターが少佐へ、軍医のケーラも中佐へと昇進していた。

勿論ムーン・エンジェル隊のメンバーも全員がそうで、フォルテが少佐に、他の五人も大尉へと昇進していた。

「何とも、昇進の大安売りだな」

「戦死を考慮した、前売りも可能性があるな」

互いに毒舌を吐きながら引継ぎを行うアキオとレスターであったが、すぐに時間が来て、アキオとエリオスはエルシオールからそれぞれの船へと移動していた。

第三分艦隊旗艦であるザーフ級戦艦『スオウ』にはアキオが、第四分艦隊旗艦であるザーフ級戦艦『ナガト』にはエリオスが移動し、すぐに艦隊を指揮する準備を始める。

「アキオさんも、エリオスさんも行ってしまいましたね」

「あいつらは優秀だからな。むしろ、今までが異常だったんだよな」

一隻の儀礼艦に四人の司令候補という方がおかしかったので、タクトは『仕方がないよ』と言った感じでミルフィーユに説明をしていた。

「でも、行動は一緒なわけですよね？」

「それはね。シヴァ陛下の座上する、エルシオールの安全こそが重要なわけで」

「あの、お一つ宜しいですか？」

いきなり背中から恨めしそうな声が聞こえてタクトは思わずのけってしまうが、後ろを振り返るとそこには暗い表情をしたミントの姿があった。

「ミント、どうかしたの？」

「良くぞ聞いてくいださいました。実は……」

ミントは、ある人物がシヴァ陛下に直接に直訴して、アキオの副官として《スオウ》に一緒に行ってしまった事実を話し始める。

「それって誰なの？」

「ああ、ちとせの事ね」

そこに、ランファも姿を現して話を始めていた。

ランファは、ちとせがシヴァ陛下に直訴してアキオに副官になっていた事実を知っていたのだ。

「でも、シャープシューターの運用はどうするんだい？」

続けてフォルテも姿を見せて、タクトに新しい質問をしていた。

「軽空母ヒヨウがヒントだろうな」

急遽、紋章機を運用するために改良を加えられた軽空母ヒヨウであったが、実はこの船は現在シムス高速戦闘機の部隊を運用するために、第三任務部隊の所属となっていたのだ。

当然、紋章機を運用するために改良した部分は全て外されていたが、その外された部品や、紋章機専用で余った補給物資の類は予備の倉庫で埃を被っていたので、それを引っ張り出して、スオウの偵察機専用スペースでシャープシューターを運用可能なように、現在急ピッチで改良中との話であった。

「確かに、シャープシューターの修理と補給が可能な船が二つある

と、戦術的には幅が広がるんだよな」

「だからって！　どうして私ではないのですか！」

「いや、その……。ミントが、自分で言わないからさ……」

ミントの勢いにタクトはタジタジであったが、それよりもあのちとせが自分で志願してアキオの副官を兼任した事実の方こそ、タクトにとっては驚きであった。

あの生真面目で、少し男性に対しては引っ込み思案な部分のあるちとせからしたら、それは清水の舞台から飛び降りる覚悟であったのであろう。

「別に、そんなの誰の副官でも関係ないじゃない。ちなみにエリオスのナガトにも、私のカンフーファイターが着艦可能なように改造中だそうよ。私は副官任務なんてゴメンだけどね」

ランファはいつもの口調で話してはいたが、やはりちとせの事が気になるのであろう。

少し目線が、うわの空なままであった。

彼女も、自分の紋章機であるカンフーファイターをエリオスの艦隊旗艦ナガトでも使用可能なように、ヒヨウの格納庫から外した部品を使って緊急工事を行っている。

だが、これはランファが命令したわけではない。

全てシヴァ陛下からの命令でもあった。

他にも、数隻の戦艦の偵察機を運用するスペースにヒヨウから取り外された部品がセットされ、各紋章機はエルシオールを含む二隻

の艦に着艦できるようになっている。

これも、万が一の事態に備えた安全策であったのだ。

「ちとせは、アキオの方をメインに使うみたいね。私は、エルシオールの方が慣れているしね」

更に、今回の補給ではクロノ・ブレイク・キャノンが再び白き月から送られていて、これをエルシオールに装備する事になっていた。

当然、それに許可を出したのはシャトヤーンであったので、彼女は今回の事件の背景に何か大きな脅威を感じているであろう。

「紋章機は、なるべくエルシオールに集中させた方が良いと思う。各艦に急遽設置された着艦・補給・修理用のスペースと設備は、もしエルシオールの設備が使えなくなった時。軍事作戦における、『最悪の事態を想定して』設置されたのだからな」

「それを、シヴァ陛下が考えたのか？」

「ウォッカのジイさんが教育したのかもしれないし、陛下の元家庭教師はレイトンだしな」

「そういえば、そうだったな」

タクト達が話をしている間に、コチジャン中将が統括指揮をする四つの分艦隊が前後左右と中心にあるエルシオールのガッチリと防御する輪形陣の体制になっていた。

補給や、修理や、艦の改造なども終わり、いよいよ艦隊は出発する事となる。

「何か、大仰な艦隊編成だな」

「シヴァ陛下がいらっしゃるからな。前のように、エオニアから逃げるために隠密というわけでもない。当然、その身分に適した護衛艦隊の量となるわけだが」

「陛下、護衛艦隊の準備が全て整いました。移動目標を教えていただければ幸いです」

ブリッジのメインスクリーンに敬礼をするコチジャン中将が映し出され、その下にも画面が分割されて准将に昇進して将官用の制服に着替えたエリオスと、同じくエルシオールにいる時にはツナギと略章しか付けていないアキオも、将官用の第一種制服に着替えていた。

「先ほど、エルシオールが傍受した謎の電波が気になる。それは、資源惑星レミナスの方面から流れているようだ。まずは、そこから当たって行こうと思う」

「畏まりました」

シヴァ陛下のシッカリとした口調に、コチジャン中将もエリオスもアキオも、恭しく一旦頭を下げてから敬礼を行っていた。

「イケメン兄弟ですか」

「本当、将官用の制服姿が様になっていますね」

「アルモとココの言う通りだな。世の中って、少し不公平な気がす

るな。まあ、というわけで、エルシオールは資源惑星レミナスへと移動を開始する」

何か『まあ、というわけで』なのかはわからなかったが、エルシオールとコチジャン中将が指揮する第3任務艦隊は、シヴァ陛下の命令とタクトの号令によって、資源衛星レミナスへと移動を開始するのであった。

「シードル司令」

「はい、何でしょうか？」

急遽艦隊司令に任命されたエリオスであったが、彼はその任務をどうにか無難にこなす事に成功していた。

思えば、今までに艦隊司令などした事がなかったのだが、辺境探査でエルシオールの艦長と司令であったレスターの補佐役に徹していた経験を生かして、やはりあの故シードル公爵の息子という事もあったのか？

少なくとも、年上の部下達に舐められない程度には指揮官らしく振舞う事に成功していた。

旗艦ナガトのブリッジにある指揮官用のシートに座り、エルシオールの左翼を固めながら航行を続けていると、彼に年配の艦長が声をかけてくる。

「やはり、血ですかね？」

「と、言いますと？」

「いえね。士官学校では有名な話なんですよ」

皇族とも血の繋がりがあるシードル公爵家の当主には、なぜか軍人の素質を持って生まれてくる者が多いという話を、艦長は学生の頃に教官から聞いた事があるのだとエリオスに説明していた。

「他にも政治家や商売人として有名な人物も多いのですが、その代わりなのでしょうか？　その分、なかなか世継ぎが生まれない家系でもあるそうです。それで、父は晩節を汚しました」

現在の皇国における、故シードル公爵の評判は最悪であった。

エオニアの乱の影響で多くの情報が流出してしまったので、黒幕・フィクサー・子殺しなどの悪評が、その手の話が好きなマスコミなどによって雪崩のように広まっていたからだ。

ところが不思議な事もあるもので、その息子で跡継ぎであるエリオスへの評判はそう悪くなかった。

軍事法廷事件の件があったので、あまり市民階級出身の軍人達からの評判は良くなかったが、意外と大衆への受けは良かったのだ。

やはり、顔が良いというのは、決して損ではないという事なのであろう。

人は見た目が九割というのも、あながち嘘でもないと艦長は思っていた。

それに、実際に話してみるとなかなかに好青年ではあるし、まだ

経験不足の部分もあるが、艦隊指揮官としても申し分ない能力を有しているように見えていた。

「親の悪事を、子が反省しても無意味ですからな」

「それは、わかっているのですがね。それと、やはり兄さんは素晴らしい才能の持ち主ですね。私と違って、余裕で艦隊指揮をしていますし」

エルシオールの後方を担当しているアキオの艦隊は、全く艦列が乱れる事なくしっかりと後方を守っていた。

それに、コチジャン中将は、アキオの艦隊指揮官としての才能を認めているらしい。

自分の子飼いの分艦隊司令ではなくて、アキオを重要な後方に配置している事から見ても、それは一目瞭然であった。

エリオスは、一度打ち合わせで通信を入れてみたのだが、アキオはテキパキと部下達に命令を出しつつ、副官として付いて来たちとせに先ほどの特殊な電波の詳細な解析まで頼むほど余裕があったのだから。

「あの若さで、意外と経験豊富らしいですな」

既に数度、艦隊指揮と艦隊戦闘まで経験しているアキオであったので、今回もそう苦労も無く艦隊を指揮しているようであった。

「ええ、私と違いまして」

「人には何事も初めてがありますからな。司令は、初めてにしては上手にやっている方ですよ」

ベテランである艦長は、今までに沢山の指揮官を見てきている。優秀な者、普通としか言い表せない者に、貴族出身なのを鼻にかけて無能の代名詞のような者まで。

それに照らし合わせると、エリオスはあまり手間のかからない優秀な司令官という評価に落ち着いていた。

「それに、レイトン司令は……」

「彼がどうかしたのですか？」

「あんなに可愛い娘を副官にして、うちの若い連中が嫉妬して怒っているんですよ。職権乱用だって」

「はあ……」

エリオスが人の集団を指揮する難しさを実感していたその頃、同じく艦隊司令となって着任し、最初の顔合わせから、資源衛星レミナスまでの大まかな指示を出し終えたアキオは、司令官用の個室で大量の書類を早速裁いていた。

新しい司令官が着任する前に、スオウにはシャープシューターが着艦できるように偵察機専用のスペースが改良され、現在整備兵達が懸命に整備マニュアルを見ながら、シャープシューターの整備を行っている。

他にも、新たに積み込まれた大量の補給物資など、これらの状況に付随する書類の量は膨大になるのがこの世の常であった。

「失礼します」

とそこに、ちとせがお盆を持って入室してくる。

お盆の上には、アキオの大好きな安倍川餅と茶碗に入った緑茶が二人分載っていた。

「少し休憩をなされては？」

「そうするか」

初めてちとせと出会った頃から思っているのだが、やはり彼女は優秀な士官学校出の軍人であった。

それに、こういう丁寧にお菓子を作ったりお茶を淹れたりというような女性的な部分もあり、彼女がこのまま軍に残れば確実に女性初の将官になれる可能性があったのだ。

『軍人の出世と、お茶を上手く淹れる事に何の関係があるのか？』と思う人も多いであろうが、このトランスバール皇国において女性軍人の出世の道はかなり狭く、アキオも数人の優秀な女性軍人何人か見ているが、どうにも少し肩肘を張り過ぎて、男性軍人達に倦厭されている節があった。

要するに、あまりに頑張りすぎて、かえって引かれてしまっていたのだ。

人の多く集まる組織では、いくら優秀でもそういう人物が上に立てる事は少ない。

ただ優秀ならば、どこかしらの部門で責任者になるくらいが限界であったからだ。

昔のちとせにもそんな部分があったようであったが、ムーン・エ

ンジェル隊に入ってからはその傾向も大分薄まったようであった。

「うん、これは美味しい。皇都にあった和菓子屋《霧乃》に劣らないな。あの店は、結局再建できなかったからな」

エオニアが皇都を砲撃した際に、経営者や従業員の家族ごと全員が死んでしまったらしく、戦乱終了後にも跡地は更地のままで、アキオはえらく悲しんだ記憶があったのだ。

「喜んで貰えて何よりです」

新しく編成された艦隊の指揮に、それに付随する多くの事務的な処理に、エルシオールから持ち込んだあの特殊な電波の解析と、自分で志願したとはいえちとせとアキオは仕事ばかりで、勿論色っぽい話題や言動などは皆無であった。

それでも、こうやって僅かな休憩時間に二人きりでお茶を飲めて、自分の作ったお菓子を褒めて貰えて、何よりアキオの仕事を手伝えるのがちとせには何よりも嬉しかったのだ。

「正直、助かったよ。コチジャン中将が準備した、本来の副官はなぁ……」

ちとせが副官となった事で、その彼は現在別の部署で任務に就いていたが、どう見てもあまり優秀なタイプには見えなかったからであった。

コチジャン中将に悪気は無いのだが、やはり急いでその場にいる候補者から選んだのが良くなかったらしい。

「アキオさん」

「何だい？」

「もし、ムーン・エンジェル隊の他のメンバーもアキオさんの副官を希望していたら、アキオさんは私を選びましたか？」

「あのメンバーだと、間違いなくちとせだろうな」

まずフォルテであったが、彼女は軍人としての素養はかなり高い。士官学校など出ていなくても、裏で真面目に努力して勉強も怠っていなかったので、今回少佐に昇進したのもアキオは当たり前だと思っていた。

だが、彼女は生来の姉御気質で親分肌の強い人間である。指揮官の補佐をする副官には、一番適正がない人物であった。

次にランファであったが、彼女はああ見えても士官学校次席の秀才であった。

ところが、アキオはどう考えても、彼女が自分の副官として任務を細かく補佐をする姿が想像できなかった。

ミルフィーユも、副官というカテゴリーでは駄目であろう。彼女はヒラメキ型で、思い付くとすぐに動いてしまうタイプの人間なので、こういう人に副官はあまり適さないのだ。

お菓子作りが得意なので、オヤツの時間は楽しみになるのであろうが。

ミントとヴァニラは、頭は決して悪くないどころかかなり良い部類に入るのだが、如何せん白き月で技術者兼テストパイロット兼巫女としてやっていたために、本来軍人として必要な基本的な知識が少し抜けているという欠点が存在していた。

半年間ほど教育を受けてからならば十分に務まるのであろうが、今の時点ではやはり色々と難しい点も多かったであろう。

以上のような説明を、アキオはちとせに話していた。

「ちゃんと士官学校を出ていて良かったです（おかげで、ミントやランファさんを出し抜けたのですから）」

この宙域から資源惑星レミナスまでは三日間ほどの距離にあり、とちせはその三日間で何かチャンスが訪れないかと本気で考えていた。

ある意味、とても逞しくなったちとせであったが。

やはり、今のこの状況であまりそんなチャンスは訪れないようであった。

それに、ちとせ自身も例の宇宙クジラが察知した特殊な電波の解析で急がしい。

それでも、真面目な彼女は自分に与えられた課題を順調にこなしていき、遂に例の電波の解析に成功している。

『ＥＤＥＮの子らよ、時を越えて大きな災いが再来した。白き月をもって無限と有限を繋げ、古より定められたその大いなる使命を果たせ。世が災いに覆われる前に、我が元へ急げ』か……」

「はい、これ以上の解析は難しいかと」

「俺から見ても、これが精一杯だと思う。さすがは、ちとせだな。ありがとう」

「いえ、どういたしまして」

アキオからのお礼の言葉に、ちとせは少し顔を赤くさせながら嬉しそうに答えていた。

「早速に、この内容はタクトにも送るとして。このＥＤＥＮの子らって、俺らの事だよな？」

「はい」

他にも、『大きな災い』とか、『白き月』とか、『古より定められた大いなる使命』とか。

何となく自分達へのメッセージだとはわかるのであったが、これが何を意味するのかは、詳しくは白き月にいるシャトヤーンに聞いた方が早いと感じるアキオであった。

「それとも、シヴァ陛下がシャトヤーン様から何か聞いているかもしれないな」

「はい、そうかもしれません」

とはいえ、これ以上の解析作業はもう無意味であろうと考えた二人は、他の書類仕事なども一息ついたので、艦長などと一緒に食堂で夕食を取る事にする。

ところが、その席でとんでもない話が飛び出していた。

「幽霊ですか？」

「ああ、この艦には幽霊が出るんだ」

ちとせは、この近代的な軍艦で幽霊が出るという話を信じられないでいたが、ベテランである艦長の目を見て決して冗談で言っているのでは無い事を理解していた。

「エオニアの乱では、この船は大破したからな。私の前の艦長以下かなりの人員が戦死しているんだ」

とはいえ、その幽霊に害があるわけでもないらしい。

ただ、新しく着任して来る軍人に興味があるらしく、一度は必ず様子を見に来るとの話であった。

「えらく、物見遊山だな」

「はい、いい加減に成仏すれば良いものを。それと、この艦が大破する前から一人幽霊が出ていたそうですが」

幽霊なので一人という表現は間違ってはないのだが、とにかく何かが確実に出る事は間違いないらしい。

「大抵は初日に済んでしまうので、普通は着任したばかりの新人は一緒の部屋で一夜を明かすんですけどね……」

艦長は、困ったような顔をしていた。

なぜなら、アキオは男でちとせは女なので、一緒に部屋で寝るわけにもいかなかったからだ。

「部屋は、隣同士にするとか？」

「いえ、一晩くらい一緒でも大丈夫です」

アキオは隣同士の部屋に泊まる事を提案したが、ちとせの方はそれを否定していた。

「これは、この艦に私達が受け入れられるかの試練なのです。男と女とかは全然関係ないはずです」

「烏丸大尉の言っている事は、正しくはあるな……」

人生経験豊富な艦長は、ちとせがアキオと同じ部屋で泊まれる事にワクワクしているのが丸わかりであった。

というか、誰が見てもわかるほど、ちとせは嬉しそうな顔をしているのだが。

「何かあったら、司令が責任を取れば済む問題ですかね」

「何かって、俺は全然信用がないんだな」

「司令の問題というよりは、これは烏丸大尉の問題なのでは？」

そう発言する艦長の横では、何を想像しているのか？

顔を真っ赤にさせながら、下を向いて閉まらない笑みを浮かべているちとせの姿があった。

「着任早々で、何も荷物がないのが良かったか」

その日の夜二人は、アキオが割り当てられた司令官専用の個室で夜を明かす事になった。
ちとせは準備してあったベッドに、アキオはその下の床にマットと毛布を敷いて眠る事にする。

「しかし、幽霊ねぇ。本当に出るのかね？」

アキオに、霊感の類などは存在しない。
それに、性格的にそんな物の存在自体を信じていないので、本当にそんな物が見えるのか？　疑問は増すばかりであったのだ。

しかも、あの真面目な艦長からの報告であったのだから、無下に否定するわけにもいかなかった。

「とにかく、寝るか……」

アキオは毛布を被ると、僅か数分で寝付いてしまう。
士官学校を卒業以来、アキオは優秀な軍人の必須スキルである、早飯・早トイレ・早寝付きを完璧にマスターしていたのだ。

「さすがですね……」

当然、それを知っているちとせは、すぐに寝息を立て始めたアキオの顔を飽きる事無く眺めていた。
改めて見入ると、寝顔には等身大の二十三歳の若者のどころか、まるで子供のように無邪気な部分があって、それだけでも収穫であると思ってしまうちとせであった。

「（いつか、このような任務上の理由ではなくて、同じ部屋で一緒に寝られたら……。って！　私は何を考えて！）」

ちとせがそんな事を考えている間に、時間は夜中の三時となっていた。
草木も眠る丑三時。
世間では幽霊の出る時間だと言われていて、実際にちとせも背筋に冷たい空気を感じていた。

「まさか、本当に……」

そして、異常な気配を察したのか？
アキオは、日頃の訓練の賜物もあってすぐに目を醒ましていた。
二人の視線が部屋の入り口のドアに向かうと同時に、ドアの前に白い靄のような物が複数立ち上がり、そこから人型が徐々に形成されていく。

その人型は、最後にはトランスバール皇国軍の軍服に身を包んだ、複数の様々な年齢の人間へと変化する。
だが、それらの人型は全体的に半透明で、アキオもちとせも初めて幽霊の存在を見る事となる。

「ちとせ」

「何でしょうか？　アキオさん」

「いや、俺は呼んでいないぞ」

「でも、私の名前を」

「あの中佐の階級章を付けた人だろう？」

後ろから出てきたその人物は、三十歳くらいであろうか？
ちとせの名前を呼びながら、二人の前に姿を現していた。
しかも、その人物は信じられない事に、半透明で部屋の後ろの壁などが透けて見える状態であった。

様々な資料や文献などから聞く幽霊に酷似した姿に、アキオはただ驚くばかりであった。

「お父様！」

更に驚く事に、どうやらその男性は、ちとせの亡くなった父親であるらしい。
偶然に乗り込んだ船で、自分の父親の幽霊に出会ってしまう。
もしかすると、これもミルフィーユの強運のおかげなのかもしれないと思うアキオであった。

「お父様！」

「ちとせは、綺麗になったな。それに、大きくもなった」

ちとせの父親の幽霊は、嬉しそうに目を細めながら成長した自分の娘を眺めていた。

「ちとせが、ここに来る事はわかっていたよ。私が唯一心残りで、成仏できなかった理由だから」

久しぶりに会話をする人間の娘と、幽霊の父親。
非科学的な光景ではあったが、これは夢ではなくて現実である。

そして、ちとせを話をしている父親の後ろには、一人また一人と

トランスバール皇国軍の軍服に身を包んだ軍人達の幽霊が姿を見せていた。

みんな笑顔を見せながら、久々に実現した親娘の再会を見守っていたのだ。

「私もだが、みんなも脅かすつもりはなかったんだ。私に付き合ってくれていたんだよ」

「お父様……」

「ムーン・エンジェル隊というのは凄いものだ。このままだと、数年でちとせの方が上官になってしまうかもな」

ちとせの父親である烏丸中佐は、殉職後に二階級特進で准将になっているというわけではない。

軍人が戦死したり殉職すれば必ず二階級特進するというのは、これは映画やドラマの見過ぎという物であった。

普通は昇進などしないし、しても一階級というのが普通であったからだ。

エオニアの乱の際に乱発されたのはあくまでも例外で、しかも烏丸中佐はその大分前に殉職していた。

「お父様、でももっと凄い方がいらっしゃいますので」

そう言いながら、ちとせは後ろを向いてアキオを父親に紹介する。

その後ろにいる他の軍人達も、噂の故シードル公爵の庶子に興味深々なようであった。

アキオは、寝巻き代わりのTシャツ姿で悪いと思いながらも、彼

らに敬礼を返していた。

「あなたが、ちとせの上官ですか」

「他に、見た目はともかく、実力がある男もいますけどね」

何気にタクトの事であったが、確かにタクトは見た目が冴えないという意見も多かったので、一応烏丸中佐がガッカリしないように釘を刺しておくアキオであった。

彼が、タクトを見に行くのかは知らなかったのだが。

「綺麗に成長した娘にも会えましたし、あなたのような上官がいて安心しました。目的を果たした以上は、もはやこの船に幽霊として出るつもりはありません」

「ええと、成仏なさるので？」

「ええ。他のみんなも、成仏するのを待って良かったと言っていますよ」

どうやら、烏丸中佐を除く幽霊達は、烏丸中佐の娘に興味深々だったらしい。

それと、彼女の上官でもあるアキオにもだ。

「レイトン少将閣下、私の娘を頼みます」

その言葉を最後に、烏丸中佐を始めとする幽霊達は徐々にその姿が薄くなっていく。

どうやら、本当に成仏をしたようであった。

「ああ、それと……。娘と結婚をするのであれば、私は大賛成ですから」

最後の不意打ちで烏丸中佐から衝撃的な発言が飛び出し、二人は敬礼をしたままその場に直立不動になってしまうのであった。

「私とアキオさんが結婚……」

そして案の定、ちとせは頭から湯気が出そうなほど顔を真っ赤に染めていたのであった。

「烏丸中佐の件は、ちょっと言い出し難かったので黙っていたんですよ」

幽霊騒動の翌日、食堂で朝食を取りながら、艦長は申し訳なさそうにちとせに謝っていた。

自分の父親が幽霊となって艦内を騒がせているという事実を、実の娘に伝えるのを躊躇っての事だったらしい。

「いえ、父とは久しぶりに話が出来ましたし、もう成仏したので二度と幽霊になって出る事もないでしょうし」

「しかし、他の連中も野次馬根性で残っていたのか。幽霊の世界ってのは、色々と退屈なのかもしれませんな。ところで……」

艦長を始めとして、食堂内にいる全員の視線がアキオとちとせに向いていた。
昨晩の経緯を説明する過程で、どうしても烏丸中佐のあの発言を黙っているわけにはいかなかったからだ。
「娘の父親に認められたとなると、二人の結婚も近いので？」
「えっ！　どうして急にそうなる！」
「いえね。世間一般的に言うと、結婚に反対するのって娘の父親じゃないですか」
その日を境に、エルシオールも含めた艦隊全体にある噂が広がる事となる。
それは、アキオとちとせの結婚に父親が賛成したという物であった。
ちとせの父親である烏丸中佐が故人であるという事実などはあまり関係がないらしく、更にその噂に極端に不機嫌になる人物も複数存在していた。
「レイトンの奴、余が任じた司令官職をなんと心得るか」
「ですが、任務に何の影響も与えていませんよ」
「そこが、あの男の小憎たらしい部分だ」

シヴァ陛下は、どんな用事でアキオを呼び出そうとかと考え始め。

「ちとせさん、色々と動かれたようですわね。ですが……」

それから暫くして後に、トランスバール皇国中にブラマンシュ財閥やその関連企業から、ダルノー会長がレイトン少将を婿として受け入れたがっているという噂が流れ。

「アキオの奴、ちとせにフラフラ、ミントにフラフラと。男の風上にもおけない奴だわ！」

ランファは、一人自室でアキオに怒りをぶつけていたのだが……。

「私の事を好きかもしれないんしょう？　ハッキリさせてよ」

最後に、弱々しく女の子らしい声で愚痴を零すのであった。

第二部　第六話（暫定版）

「また小規模な敵艦隊か……」

「はい、現在トランスバール皇国全域で多数出没している、明らかに陽動が目的の、規模が小さい無人艦隊のようです」

エルシオールに座上したシヴァ陛下から出された、資源惑星レミナス方面への移動命令を実行する第3任務艦隊であったが、クロノ・ドライブを使わなくても三日ほどの行程のはずが、その間に数度の敵艦隊からの襲撃を受けて、その予定を大きく狂わせていた。

戦艦など存在せず、無人操縦のシムス高速戦闘機を積んだ軽空母、軽巡洋艦、駆逐艦、突撃艦などで編成された比較的小規模の艦隊が進路を塞ぎ、その度にムーン・エンジェル隊が出撃をして、それらを撃破する羽目になっていたのだ。

急遽編成された艦隊なので、シヴァ陛下のいるエルシオールを守る輪形陣の訓練と、ムーン・エンジェル隊の練度の維持には役に立っていたが、この明らかに時間稼ぎを目的とした敵の策に、アキオは不機嫌そうな表情を隠さないでいた。

「あの……。レイトン司令……」

これで三度目の小規模無人艦隊の撃滅に貢献して戻って来たちとせは、アキオのそんな表情を見てその態度を萎縮させてしまう。

この第三分艦隊に二人で着任して以来、エルシオールと同じ風にというわけにもいかなかったので、『レイトン司令』、『烏丸大尉』という普通の軍隊と同じ呼び方に戻していた二人であったが、ちと

せはアキオのこんなに気難しい表情を見たのは初めてであった。

「ああ、すまん……。烏丸大尉が、せっかく被害をほとんど出さないで戦果を挙げてきたのにな。ただ、トランスバール皇国軍があの敵に完全に乗せられていると感じてね」

アキオはすぐに笑顔を浮かべて、ちとせに労いの言葉をかけていた。

だが、心の中ではある人物の事が引っかかっていた。

前に惑星ロハスで車に乗せてあげた、あのネフューリアという女。

彼女が、この時間稼ぎを仕かけているのではないかと思っていたのだ。

今までに、輸送船を襲って集めた資源を元に作った無人艦隊をトランスバール皇国の各地に送って、そこで現地を警戒する皇国軍と戦闘を行わせる。

勿論、この無人艦隊の規模では各地に駐留する皇国軍艦隊の勝ちであったが、逆に小規模な艦隊という事で、『すぐに本命の艦隊が来るのでは?』と思わせて彼らを現地に釘付けにしていまい、しかも戦闘を行えば全くの無傷というわけにもいかない。

損傷には修理も必要であるし、武器・弾薬・食料・各種物資に、軍人への戦時・外地手当てなど。

今回の大規模出兵によって、既に皇国が受けた財政的なダメージも大きかった。

相手は、自分達が小コストで相手を翻弄できるのを良い事に、その身が大きく、沢山予算と資源と物資を食べるトランスバール皇国

という巨人を振り回していたのだ。

「（あの単純バカのレゾムに、これほどの策が思い付くとも思えん。一度、シヴァ陛下やコチジャン中将に話をした方が良いか……）」

アキオは暫くはそんな事を考えていたのだが、すぐにまたいつもの表情に戻ってから、副司令を兼任している艦長に話しかける。

「一度、エルシオールに主だった人間を集めて、ミーティングでもしようかと思うが」

「意見交換などもなされるのですか？　ならば、宜しいかと。ところで……」

「どうかしたのか？　艦長」

「せっかく活躍をした烏丸大尉に、もう少し優しくするのも男性として必要かと思いますが」

「それはだな……」

人生経験豊富な艦長に窘めれ、アキオはそのまま言葉を詰まらせてしまうのであった。

「数時間で終わると思うが、戦闘が発生した際にはすぐに戻る。こういう時に紋章機があると便利だな」

「目的地まで半日ほどの距離となりましたが、ここ二十四時間は敵の襲来がゼロです。どのみち、随伴している高速輸送船から弾薬等の補給を受けなければなりませんし、連続戦闘で疲れた兵達に交代で休養も取らせたいので、十二時間はご自由にどうぞ」

「三日の予定が、もう五日か……。今さらこれ以上遅れても問題はないか……。了解した」

本来三日間の予定であった資源惑星レミナスへの移動は、それを邪魔するレゾム率いる真・正統トランスバール皇国軍の物と思われる小規模な無人艦隊の襲撃を数回受けていた。

肝心の無人艦隊の方は、すぐにムーン・エンジェル隊が出撃して撃破していたが、問題は彼らのやり口が明らかに陽動や時間稼ぎの一旦であるとわかってしまう部分にあった。

当然、それに気が付かないシヴァ陛下やタクトではなかったので、二人は一度情報の交換を行った方が良いであろうと、アキオ達をエルシオールに呼んでいたのだ。

アキオは、副官であるちとせを連れてすぐに出かける準備を始める。

とはいえ、その足はちとせのシャープシューターなので、あまり手間もかからなかったのだが。

「アキオさん」

「何だい？　ちとせ」

飛行するシャープシューターの中なので、二人はいつもの呼び方

に戻して話をしていた。

「このまま、資源惑星レミナスに向かうつもりなのですか？」

「会議でも話すけど、行くしかないだろうな……」

そして十数分後、二人はエルシオールに到着するとすぐに普段は空き部屋になっている会議室へと移動を開始する。

中に入ると、既にコチジャン中将と第二分艦隊を率いているユッケ准将が副官や参謀と共に着席していて、他にもエリオスも若い男性士官と共に席に座っていた。

多分、その若い士官がエリオスの副官なのであろう。

アキオとちとせは、彼らと無言で敬礼を交わしてから指定された席に座る。

すると、すぐに会議室のドアが開いて、ミルフィーユとヴァニラがトレイの上にコーヒーカップとケーキ皿を載せて現れる。

普通の軍人が行う会議ではお茶が精々であったが、ケーキまで準備してしまうところがエルシオールらしいと言えばらしかった。

「エリオスさん、どうぞ」

「すまないね、ヴァニラ。元気にしていたかい？」

「はい」

「早く、また絵を描く日々に戻りたいものだけどね」

エリオスにお茶とケーキを持って行ったヴァニラは、彼と数日ぶりに話をしたようであった。
それと、エルシオールでは自由時間に絵を描く事も多かったようだが、今ではそんな余裕も無く、彼は始めての司令官任務に全精力を傾けているようであった。

「たまには気を抜かないと、倒れてしまいます」

「アッシュ大尉もそう思いますよね？　是非、司令に言ってあげてください」

どうやら、エリオスは副官に心配されるほど、司令としての任務にまい進しているようであった。

「資源惑星レミナスに到着すれば、もう少し状況も変わるさ」

「ですが、そこは真・正統トランスバール皇国軍艦隊が狙う可能性が高い拠点候補の一つにしか過ぎないのでは？」

「その辺の新しい情報が……」

そこまで話したところで、室内にシヴァ陛下とタクトとレスターが入って来る。
すると、座っていた軍人達は一斉に立ち上がり、彼女に敬礼をし始める。

「此度の、緊急の呼び出しに答えて貰ってご苦労であった。時間も無いので、早速に始めたいと思う」

シヴァ陛下の一言でミルフィーユとヴァニラは退室し、欠伸をす

るタクトではなくてレスターが最新の情報を伝え始める。

「実は、二日ほど前から資源惑星レミナスとの通信が途絶したらしいのです。更に、状況を調べにレミナスに向かった近隣の偵察艦隊が、敵大艦隊襲来の報を最後に通信途絶。つまり……」

「資源惑星レミナスに、レゾム達はいると？」

「その可能性はかなり高いでしょう」

コチジャン中将の質問に、レスターは全く表情を変えずに答えていた。

更に、あの宇宙クジラの感知した特殊な電波や通信は、全て資源惑星レミナスのある方角から流れているらしい。

要するに、そこに重要な何かが絶対にあるという事だったのだ。

「つまり、これまでの小規模な艦隊は、全て資源惑星レミナスを落すための囮であったと？」

「その可能性も大です。それと、皇国軍の目を本命から逸らし、更には戦力の拡散と我々の消耗を狙っての作戦かと」

レスターの指摘に、コチジャン中将はそのまま頭を傾げて考え込んでしまう。

だが、すぐに小さな声でアキオに質問をしていた。

「レイトン少将、君ならどうする？」

「現状の戦力で勝てるかと言われると、あの小規模無人艦隊の襲撃

でこちらの戦力をとっくに把握しているでしょうから、他の増援を待つという手もあります。下手に偵察して情報をなんて欲を張ると、蟻地獄のように引き込まれて全滅という可能性も。何しろ、我々には……」

アキオの視線が一瞬だけシヴァ陛下へと向かい、それだけでコチジャン中将は理解をしたようであった。

この艦隊が、シヴァ陛下自らがレゾムを討伐するという目的を抱えている以上、絶対に負けは許されなかったからだ。

負けるくらいならば良いが、シヴァ陛下に万が一の事があったら、それだけでトランスバール皇国は再び皇王不在となって混乱してしまうであろうからだ。

彼女を連れて来たルフト宰相が、『くれぐれも、陛下の御身だけは……』と言いながらエルシオールを降りていたので、余計にそれには注意する必要があった。

『ならば、自ら戦場に出なければ良い』と思う人も多かったのだが、実は順調に復興を遂げているように見えて、皇国は実力さえあれば、ルフト宰相やウォッカ大将のように市民からも人材を登用するというシヴァ陛下の考えに異を唱える者達もそれなりの勢力を誇っていた。

エオニアの乱であれだけ数を減らしたにも関わらず、というか中央で消えた彼らの代わりに頼みもしないのに貴族派の派閥を作って、『古き良きトランスバール皇国の復活』というお題目を唱えている連中が、皇都には存在していた。

その多くが、辺境から中央に上がって来た連中だと言うのだから、

喉元過ぎればというか、呆れて物も言えない連中ではあったのだが。

そんな理由もあり、表面上はシヴァ陛下に媚びへつらっているように見えて、実は彼女を子共扱いしている彼らを黙らせるための、『皇王としての戦果』という物を挙げるのために、彼女はエルシオールに座上している状態であった。

「第1と第4の任務部隊と合流すれば、さすがにそうおいそれとは負けないと思うのですが」

「クールダラス少将、どうなっているのだ?」

「あと半日ほどで、こちらと合流は可能です」

「ならば、三個もの任務艦隊とムーン・エンジェル隊で少なくとも負けはしないと思う。他にも、第2と第5の任務艦隊も編成済みだと報告は受けているしな」

「位置的に、一度退いても、タイミングを図った三方からの挟撃も可能です」

レスターは、資源惑星レミナスを中心とした宙域地図をスクリーンに映し出し、時系列的にそれぞれに配置された艦隊を動かして、レゾム達を挟撃可能である事を説明する。

「各個撃破されないかな?」

「通信を阻害でもされれば、時間的な齟齬が発生する可能性も大きいが、ご覧の通りに通信は順調だからな。それに、彼らが一個の艦隊に戦力を差し向けると、その間に守りの薄いレミナスを奪還する

事も可能だ。各個撃破は、連中がレミナスを抑えた時点で成立しない」

タクトの疑問にも、レスターは澱みなく答える。

アキオも、レスターの意見に賛成であった。

敵の意図は、明らかにレミナスに皇国軍を引き寄せるためであろうが、事この状況になると、とにかく動いてみないと状況が何も進まなくなると予想されていた。

相手よりも、多数と思われる戦力を準備する。

もし勝てそうになかったら一度退いて、さほど離れていない味方艦隊と合流する。

戦うにしても、逃げるにしても、シヴァ陛下への危険は極力減らせるはずだ。

「では、三個任務艦隊合同で、通信が途切れたレミナスに向かう。そしてその際には戦闘が発生する可能性が高い。以上がこの会議で出た結論かと」

「皆の者、暫しの休息を」

シヴァ陛下の締めの言葉によって、会議が僅か三十分ほどで終了するのであった。

「私は、先に旗艦に戻っているよ。レイトン少将は、暫くエルシオールに残りたまえ」

「はあ……」

「その方が、陛下の機嫌も良かろうからな」

そんな事を言われてコチジャン中将にからかわれつつも、アキオはその言葉通りにエルシオールのティールームでお茶を飲んでいた。

「今日は、アールグレイのファーストフラッシュが手に入りましてよ」

「砂糖とミルク無しで頼むよ」

「はい」

ちとせがフォルテ達に捕まっている間に、アキオはミントに捕まって彼女が準備した今年の新茶を二人で楽しんでいた。

「ロハスのお茶は、あれはあれで味が濃くて美味しいんだけどな。こういう名産品の洗練された新茶も、種類は違うが美味しいものだね」

アキオはそう言いながら、新茶の芳醇な香りを楽しんでいた。

「父から贈られて来たのです」

「ダルノー会長からか。最近、直接にお会いしていないな」

定期的なメール等のやり取りだけで大丈夫だったので、アキオとダルノー会長は半年以上も顔を合わせていなかった。

それでも、お互いの会社の業績は順調なので、暫くは偶然でもなければ顔を合わせないかもしれない。

今回の、レゾム率いる真・正統トランスバール皇国軍艦隊による物資の強奪事件が経営リスクになってはいるが、それは今はまだ深刻なレベルにまで至っていなかった。

中には一部倒産した企業などもあるらしいが、それはリスクを計算できなかったその会社にも悪い部分はある。

どんな大不況も、潰れないで残る会社は残るのがこの世の中であり、会社を残せる優秀な経営者こそが、好景気の時にも効率的に利益を確保する事が可能であったからだ。

「とはいえ、事件の影響で資源価格が高騰しているのが拙いか……。出来るだけ安定させないとな」

高ければ儲かるから良いのではないかと思うミントであったが、あまり高いとかえって皇国の経済をおかしくしてしまい、逆にアキオの会社の将来の利益を奪ってしまう可能性もあった。

それに、あそこまで規模の大きい会社ともなると、自社利益の他にも社会的な地位に相応しい公共の利益に配慮する必要もあったからだ。

何にせよ、今は対処療法が限界なのは事実で、やはり解決策としてはレゾムを生死を問わずに捕まえるしかなかった。

「（むしろネフューリアこそ、捕らえるか殺すべきか……）」

「アキオさん？」

「ああっ、すまない。考え事をしていた」

アキオはいつの間にか、ミントの呼びかけにも気が付かないくらい集中して考え事をしていたようであった。

「お時間があるのであれば、海水浴など如何ですか？」

「海水浴？」

「はい、とても良い場所があるのです。アキオさんは、前は近付きたくなかったと思いますが」

お茶を飲み終わったミントとアキオは、水着に着替えるとその足でクジラルームへと移動していた。

海水浴に相応しい場所とは、宇宙クジラが生活するために大量に海水を湛えたクジラルームの事であったのだ。

昔のアキオは、自分の出生の秘密やら、心の中に抱えている暗い感情を人の心の中を読む宇宙クジラに悟られたくなくて、一度ここの管理人であるクロミエと挨拶をした程度であった。

「お久しぶりです。レイトンさん」

「本当に久しぶりだな。クロミエ」

「そうですね。前のレイトンさんは、どうも宇宙クジラが苦手なようでしたし」

「今は大丈夫だと思う。普通の人と同じで、時に晴れやかに、時に

暗雲とするだけさ」

「そうですね。宇宙クジラは、レイトンさんが普通の悩みだけを抱えた人間になったと言っていますよ」

クロミエとの話を終えたアキオは、エルシオール内のコンビニで購入した水着に着替えてから、準備運動の後に宇宙クジラが泳いでいるプールへと飛び込んでいた。

「久しぶりに泳ぐな」

それでも、士官学校の体育のメニューにもあった水泳なので、生来運動神経の良いアキオは素早くクロール、平泳ぎ、バタフライ、背泳ぎと、久しぶりの水泳を満喫していた。

「へえ、器用に泳ぐじゃないの」

アキオがノンビリと背泳ぎをしていると、横から話しかけてくる人物がいた。

ここのところ、全く話をしていなかったランファであった。

ランファも、アキオと併走するように背泳ぎをしていたのだ。

「そちらこそ。陸上では運動神経完璧でも、実は泳げないとか言うオチじゃないんだな」

「どこの漫画よ。それは」

お互いに憎まれ口を利いていたが、前にアキオは『ランファの事を好きかもしれない』と言っていたし、ランファも実はかなりその発言を気にしている。

なので、二人はそのまま並走しながら二人きりで話を続けていたのだ。

クジラルーム内は夏の気候に設定されていて、そこではクロミエが宇宙クジラと他の生物達の世話を行っていて、今日は水着姿のタクトとミルフィーユとヴァニラとエリオスが、四人で宇宙クジラの体をブラッシングして苔やフジツボなどを落としてあげていた。

ちとせは、アキオとランファの会話に入り損ねてしまい、同じ立場のミントになぜか泳ぎを教えていて、フォルテはノンビリと砂の上に寝転がって日光浴をしていた。

「平和ね」

「ああ、平和だな」

僅か半日後には戦闘状態になる、戦闘艦の中とは思えない長閑な風景であった。

「レゾムを倒したら、もう大きな戦争は終わるのかしら?」

「多分な」

ところが実際には、アキオの中ではあのネフューリアと言う女の正体を計りかねていた。

あのバカなレゾムの副官として、あれだけの規模の無人艦隊の製造・維持・秘匿などに活躍しているのに。

彼女自身がどこの誰なのかを、全く掴めないでいたからだ。

エオニアの腹心であったシェリーのように、士官学校でも出てい

て元軍人とでもいうのであれば、どこかにデータが残っているはずであった。

なのに、そんな女は辺境惑星の場末の士官学校にも在籍しておらず、『では、彼女がどこから来たのか？』という疑問だけが残ってしまう。

今回の事件で中止となってしまった辺境探索ではまだ引っかかっていなかったが、実は辺境にトランスバール皇国以外に国があって、彼女がその国の政府の命令で動いていたとしたら？

混乱したトランスバール皇国の隙を突いて、敵性国軍艦隊が侵攻してくる可能性もあっからだ。

とはいえ、それは実際に動いてみなければわからない事であった。

シヴァ陛下の権力を安定させるために、ルフト宰相は出来る限りの艦隊戦力を準備して彼女に親征を行わせている。

だが、どんなに準備をしても、１００％の勝利など誰も保障できない。

よって、後は覚悟を決めて戦いに臨むだけであった。

資源衛星レミナス宙域においてだ。

「早く戦争が終わって、紋章機も訓練だけで使えるようになればいいのに」

「そうだな」

「えらく素直なのね」

アキオは、今までに色々な任務の過程で戦力の編成や、兵士達の指揮や訓練などを行っている。
みんな一生懸命に訓練して、船や戦闘機を動かせるようになり、クロノ・ストリング・エンジンを修理・操作できるようになり、他にも通信機などの各種操作やメンテなども覚えていく。

ところがそんな苦労も、艦が被弾すれば戦死する人間も出るし、沈めば下手をすれば何百人も死んでしまう。
みんな苦労して、あれだけの事が出来るようになったのにだ。
更に、彼らには家族などもいる。

アキオが、その心の奥底で軍隊を嫌悪している理由の一つでもあり、そんな自分の考えをランファにも話していた。

なぜか、ちとせもなくて、ミントでもなくて、ランファになのは、自分でも理由は良くわかっていなかったのだが。

「アキオは、矛盾そのものね。軍人として、あんたほど優秀な人ってそうはいないと思うけど」

「仕事だからと、割り切っているからだ」

「（その癖、一度任されると妙に頑張るのよね。変な奴……）でも、これで終わりなんでしょう？」

「そうしたら、今度こそ退役して会社経営にでも専念するか。死んだ人の供養のために坊主になるというのは、俺的に一番あり得ないな。結婚でもして……。奥さんが働く人だったら、俺が主夫でもしようかな？」

「いいわね。アキオも、世間の主婦やお母さんの苦労を知るといいわ」

「自分だって知らない癖にな」

「五月蝿いわね。アキオの癖に生意気よ」

また売り言葉に買い言葉になってしまったが、アキオは久しぶりにランファと話をして心が落ち着くような感覚を覚えるのであった。

「資源惑星レミナスが視界に入ります！」

そして半日後、出来る限りの戦力を結集したエルシオールに座上するシヴァ陛下は、三個任務艦隊という大戦力で堂々と資源惑星レミナスに進撃をしていた。

他にも別方向から二個任務艦隊が同時に侵攻する予定であったので、いくら無人艦隊を多数用意しているレゾムでも、これで終わりであろうという意見が大半であった。

「敵艦隊は補足できたのか？」

「はい。資源惑星レミナスを囲むようにして、合計で二個任務艦隊規模です」

「こちらの半分以下か。タクト、どうする？」

エルシオールのメインスクリーンに映し出された、黒色を主体とする敵無人艦隊への対処を、シヴァ陛下はタクトに尋ねていた。

「レミナスの様子が良くわかりません。もしかすると……」

資源惑星レミナスには、資源を運び出す戦艦よりも巨大な輸送船を多数係留する港もあったし、それを護衛する軍艦も修理可能なドックも複数装備している。

つまり、すぐにでも援軍が出てくる可能性もあったのだ。

「援軍か。敵の数が増えると、こちらの損害も増えるな」

単純な、ランチェスターの法則であった。

出来るだけ味方の数を用意した方が、損害もそれに比例して減る。

軍人でこれを知らない者など、一人も存在しなかった。

「援軍が出てくる事を想定して、それが奇襲とならないように討つしかありません」

「タクトの言う通りだな。あの艦隊を排除しないと、我々はレミナスに辿り着けない」

シヴァ陛下の決断によって、三方向から五個任務部隊という大戦力が資源衛星レミナスを囲む敵艦隊に叩き付けられる。

「陛下は決断されたか……。戦闘機部隊も、交代で出すぞ！」

分艦隊を率いるアキオは、他の艦隊と共にローテーションを組んでシムス高速戦闘機による攻撃隊を出撃させつつ、遠距離からの砲撃によって徐々に敵の艦隊を外側から削っていく。

「レミナスは、大丈夫ですかね？」

「シールドエネルギーが強力だから、この距離の砲撃なら大丈夫だろう。それに元々月のような衛星なわけだし」

敵艦隊への攻撃は順調に進み、僅か数時間ほどでその数を大幅に減らしていた。

「こちらの準備が出来るまで卑怯だぞ！」

なぜか変な通信が全艦に入っていたが、それは一隻のザーフ級戦艦に座上しているレゾムからの物であった。

「卑怯もクソもあるか」

「やっぱり、バカだな。あいつ」

「ああ」

アキオ、タクト、レスターの三人に散々に扱き下ろされるレゾムであったが、彼は個艦の操艦技術はさほど悪くはなかった。

さすがは叩き上げと言ったところであろうが、やはり艦隊指揮はお話にならないようであった。

自分の艦隊が全滅寸前になると、そのままレミナスのシールド内に逃げ込んでしまう。

「ふんっ！　小娘にしてはやるではないか！」

「レゾムとやら、そなたに褒められてもな……」

レゾムは、まだ幼いシヴァ陛下の艦隊指揮を一応は褒めていた。

だが、彼に褒められてもちっとも嬉しくないと答えるシヴァ陛下であった。

「小娘が！　人が下手に出ていれば！」

「なあ、タクト。このレゾムという男は……」

「陛下、バカが染りますので、これ以上は話しかけない方が宜しいかと」

「タクト・マイヤーズ！　お前までもがワシをバカにするのか！　はんっ！　だが、時間稼ぎもそれまでだ！　出よ！　本命の艦隊よ！」

レゾムは、資源惑星レミナスに温存していた無人艦隊を多数出撃させる。

その数はほぼトランスバール皇国軍艦隊と同レベルであり、多分レゾムはこれの生産が終わるまでの時間稼ぎとして、先ほどの艦隊を盾にしていたのであろう。

「それに、数時間の戦闘と弾薬・エネルギーの消費もある！　我らの勝ちだな！」

自分の勝ちを確信して、また全艦に不愉快な高笑いを通信で送る

レゾムであったが、艦隊全体を統括しているコチジャン中将に隙は存在しなかった。

彼は指揮下の艦隊に細かく移動命令を次々と送り、資源惑星レミナスから出て来たばかりの反応が鈍い艦隊を、複数の味方艦船のクロスファイヤーポイントに誘い込み、次々とビームやミサイルや光子魚雷等で仕留めていく。

「なぜだぁ！」

「突撃艦の副長風情が、いきなり艦隊の指揮だと？　笑わせてくれるわ！」

艦長、参謀長、司令官。

勿論個人差もあったが、まともに養成しようと考えれば普通は十年以上は軽くかかる代物であり、たかが突撃艦の副長であったレゾムには荷が思い任務であった。

当然、彼の不足分をコンピューターに代用させるのだが、コンピューターの悪い癖は均一的な指揮しか執れず、ベテランのコチジャン中将や才能のあるタクト達には通用しなかったのだ。

他にも、交代で攻撃隊を送り続けるシムス高速戦闘機の部隊に、これを補佐する紋章機の姿もあって、レゾムが新規に繰り出した艦隊はまた次々と数を減らしていた。

彼も新しい大型戦艦に乗り換えて戦場に出ていたが、再びその指揮の下手さで苦戦しているようであった。

「ぬぅおーーーっ！　こんなはずでは！」

「レゾム、部下達の仇を取らせて貰うぞ！」

レゾムに大規模艦隊の指揮などまず不可能であり、相手のコチジャン中将は冷静に仇であるレゾムを追い込んでいく。

「コチジャン！　たかが、駆逐艦隊司令如きの癖に！」

「そういうお前は、たかが突撃艦の副長風情だったな！　さて、そろそろ年貢の納め時だな」

増援の無人艦隊はその半数以上が戦闘不能となり、レゾムもその旗艦がコチジャン中将の旗艦の射程に入ろうかというその時。

思いもしなかった出来事が発生する。

突然、資源衛星レミナスの表面が、色は黒く、その表面は以前に見た事がある外見へと変化し始めたのだ。

「あれは、黒き月……」

エオニアに無尽蔵に艦隊を補給し続け、彼の戦力の元となったあの《黒き月》が、資源衛星レミナスを材料として再び復活を遂げていた。

「しかし、黒き月は……」

エオニアの乱の際に、エルシオールのクロノ・ブレイク・キャノンによって完全に破壊されたはず。

シヴァ陛下も、タクト達エルシオールのクルー達も、まさかの《

黒き月》の復活に驚きを隠せないでいた。

「アキオさん……」

「また破壊すれば良いんだ。深呼吸して落ち着くんだ」

「はい」

敵艦への攻撃を続けている、シャープシューターに搭乗しているちとせから不安混じりの通信が入って来るが、アキオは自分に言い聞かせるように返事をしてから、また艦隊の指揮に専念していた。

「（だが、まだ何か企んでいるはず……）」

やはり何かを企んでいたようで、完全に色が黒くなってしまった資源衛星レミナスから追加の無人艦隊と、最後に一隻の超巨大戦艦が姿を現していた。

「おおっ！　良くぞやったぞ！　ネフューリア！」

どうやら、その巨大戦艦にはレゾムの副官という事になっているネフューリアが乗っているらしい。

レゾムは部下の行動を褒めていたが、肝心のネフューリアからは意外な言葉が飛び出していた。

「《黒き月》と化した。本当はもっと前から化していたレミナスで、私は新たな力を手に入れた。さて、これ以上は下等生物に用事はないな」

「ネフューリア、お前は何を……」

レゾムが最後まで言葉を言い終わる前に、彼の旗艦である大型戦艦アドミラル・レゾムの周囲にいた巡洋艦や駆逐艦が、その巨大戦艦からの砲撃で一撃で爆沈させられていた。

「なっ！　貴様は！」

「今まで、お前のような下等生物と接して疲れた。特に、お前の部下として接するなど、私からすれば虫ケラの部下になるに等しかったのだ」

「何だと！」

ネフューリアは、突然レゾムの忠実な副官から、彼を虫ケラ以下だと断言する存在へと変貌していた。

そのあまりの豹変ぶりに、レゾムは驚きを隠せないでいた。

「えらく威勢が良いが、もう一匹の下等生物がお前に用事があるらしい。なので、お前の処分はソレに任せる事にする」

ネフューリアがそう言い終わると同時に、レゾムの旗艦は突然彼のコントロール下を離れてコチジャン中将の艦隊へと単艦で進み始める。

「ワシの操作をなぜ受け入れない！」

「下等生物の創作物にあったであろう？　仇は討たれるもの」

その言葉を最後に、アドミラル・レゾムのスクリーンに映っていたネフューリアからの通信が切れ、艦はそのまま真っ直ぐにコチジ

ャン中将が指揮する艦隊へと進み始める。

「バカな！　戦うにしても、間合いというものが！」

「レゾム、気でも狂ったか？　あの単独でこちらに向かって来る大型戦艦に砲火を集中だ！」

ネフューリアの裏切りを把握していなかったコチジャン中将は、これがチャンスとばかりにレゾムの戦艦に砲火を集中させていた。

「司令！　行けますね！」

「ああっ！　第1方面軍艦隊所属、第二十七駆逐艦戦隊の最後の生き残りとして、レゾムはこの手で討つと決めたのだからな」

コチジャン中将は、味方艦隊から集中砲火を浴びて既に各所から火を噴いているアドミラル・レゾムを見ながら、昔の事を思い出していた。

一応は士官学校を出たとはいえ、その成績はビリから数えた方が早く。

まさか、自分が中将などという雲の上の階級になれるとは思っていなかった。

実際に、エオニアの乱の前には自分はしがない駆逐艦戦隊の司令であり、このままあと十年は大佐のままで、退役間際にお情けで准将にして貰ってから退役という人生が待っていたはずであった。

ところが、エオニアの乱がコチジャン中将の人生を変えてしまう。

あの絶望的な戦力差で挑んだ、エオニアの指揮する無人艦隊との

決戦。

当時は大佐で駆逐艦隊司令であったコチジャン中将は、自分の死を覚悟していた。

それでも、彼はこの第二十七駆逐艦戦隊が好きであった。

戦艦などの大型艦とは違い、艦が狭くて乗組員の少ない駆逐艦はすぐに乗組員達と仲良くなれてしまう。

乗っている他の連中も、何でも規則と規律が重要視される大型艦よりも、戦闘訓練は常に真面目にやっていたが、普段は軍服を着崩すなど当たり前なこのアットホームな雰囲気が大好きであったのだ。

『ライム大尉、この雪駄は?』

『司令殿、偉いさんの視察の時には履きませんから勘弁してくださいよ』

『アホ、そんな事を聞いているんじゃない。どこに売っているのかを知りたいんだ。最近、水虫が酷くてなぁ』

『ちゃんと病院に行った方が良くないですか?』

『行っているに決まっているじゃないか。この前のインキンはちゃんと治ったんだ』

『汚い話ですねぇ』

『お前のヒゲ面よりはマシだろう?』

『俺のヒゲ面は剃れば済む問題ですけど、司令の水虫は治りませんぜ』

そんな話をする司令である自分と、今は自分の参謀長を務めている元旗艦駆逐艦サギリの艦長であった当時は大尉であったライム大佐。

他にも、その会話を聞いて笑っている気の良い仲間は沢山いたし、それは他の艦でも同じ事であった。

そして訪れた、あの悲惨な艦隊決戦の日。

第二十七駆逐艦戦隊は、その損害を徐々に増やしていきながらもどうにか戦線の維持に貢献している状態であった。

『（負け戦ではあるが、逃がせる者達も多いか……）』

多少の希望が見えてきたコチジャン司令であったが、その淡い期待は仲間の裏切りによって費えてしまう。

後方にいた突撃艦ヘイローの副長であったレゾム中尉が艦長を殺害して艦を乗っ取り、後方から攻撃を仕かけて来たのだ。

前方の敵に集中している状態での、まさかの後方からの攻撃に、第二十七駆逐艦戦隊は僅かな時間で壊滅してしまう。

『レゾム！　貴様ぁーーー！』

『司令！　第二十七駆逐艦戦隊の生き残りはこの艦だけです！　ここは、捲土重来して！』

その後、錯乱しかけた自分達がどう逃げ延びたのかも良く覚えていなかった。

多分、長年の訓練によって体が勝手に動いたのであろう。

旗艦駆逐艦サギリは、満身創痍の状態で戦場からの離脱に辛うじ

て成功している。
そして逃げ延びた第2方面で、このまま万年大佐で終わる予定であった自分は、指揮官不足という事もあってすぐに准将へと昇進して普通の艦隊を預けられていた。

昇進に、戦艦を含む正規艦隊の司令官として抜擢される。
士官学校卒業直後ならば、素直に喜んでいたのかもしれない。

だが今となっては、あの狭苦しい駆逐艦と、むさ苦しい出世とは無縁な部下達との駆逐艦隊勤務が好きになっていたのだ。
とはいえ、軍人である自分にとって上からの命令は絶対であった。

それに、裏切り者のレゾムのせいで、失った部下達の仇を取るのに戦力は必要である。

コチジャン中将は、生き残ったベテラン組を上手く艦隊の各所に組み込んでから厳しい訓練を開始する。

すぐに、自分の手でレゾムを討てると信じていたからだ。

更に、自分がレゾムを討つ事に拘っている理由の一つに、彼が配属されていた突撃艦ヘイローの艦長の事もあった。
その艦長であるナムル大尉は、自分の妹の夫であった。

レゾムは、自分の義弟の仇でもあったのだ。
他にも、あのエオニア艦隊による砲撃で、自分の家族も妹と甥や姪達も全員が行方不明で、その生存は完全に絶望視されていた。

戦後に、自分で焼け野原と化した首都へ探しに行ったのだが、その時は彼女達の死体すら見つかっていない。

自分の家族を全て奪った憎い男。
コチジャン中将は、極力冷静に普段に任務に精を出しつつ、いつか来るであろうレゾムを討つチャンスを伺っていたのだ。

心に、その激しい激情を秘めて。

エオニアの乱が終了した時に、肝心のレゾムが逃げ延びて指名手配を受けたその時からであった。

「反撃、来ます！」

「撃ち返せ！　巡洋艦はもう少し下がって、あの巨大戦艦の気を引くように動け！　駆逐艦は突撃準備！　雷撃戦用意！」

「司令！　行きますか？」

「ああ、レゾムめ！　己の得意分野で死んでいけ！」

レゾムの乗る巨大戦艦は、最後の抵抗でもするかのように辺り構わず搭載火器を発射し続けていて、それに巻き込まれた数隻の味方艦艇が撃沈されてしまう。

それでも、コチジャン中将は攻撃の手を緩めなかった。

「突撃する駆逐艦隊を援護するんだ！　参謀長、あいつら良い動きをしているな」

「苦労して訓練しましたからね」

本当はあの攻撃に加わりたかったところであったが、自分には司令官としての責任があったので、それは自重していたコチジャン中将であった。
だが、その心は一緒に攻撃に参加していた。

「そうだ……。もう二十秒後に、光子魚雷の最終安全装置を外すんだ」

「おや、勘は鈍っていないようですな」

「参謀長、誰に物を言っているんだ。とはいえ、それを一番心配したけどな。最終セーフティー解除だ」

駆逐艦戦隊に所属する八隻の駆逐艦と、八隻の突撃艦の光子魚雷発射準備が完了し、あとは出来るだけ接近してそれを発射するだけであった。

「司令、突撃艦オスロー、ハマーが脱落」

「粘るな、レゾムめ。だが……」

レゾムの生への執念も、それが限界であった。
生き残った十隻以上の駆逐艦と突撃艦から大量の光子魚雷が発射され、それらがほとんど巨大戦艦に突き刺さって爆発したからだ。
いくら戦艦でも、何十もの光子魚雷を受けて生き残れるはずもない。

「まさか、こんな所で！」

上官を裏切って権力を握ろうとした男レゾムは、同じく部下の裏

切りと元上官の復讐によってその生を終えるのであった。

「お見事」

「さすがは、雷撃戦の名手であるコチジャン中将と言ったところですか」

アキオが艦長と共にコチジャン中将の艦隊指揮の巧みさを褒め、本人もようやくに成し遂げた仇討ちを達成してその余韻に浸っていると、急に全艦艇のスクリーンにネフューリアからの通信が入ってくる。

「やはり、下等生物だな」

「随分な言い様だな。お前は、そんなに偉いのか？」

自分以外を全て下等生物だと断言するネフューリアに、一番最初に反論したのはシヴァ陛下であった。

「数のみを頼りとする下等生物を、下等生物と呼んで何がおかしい？　お前達も、地面を歩くアリや、大量に増えるハエやゴキブリを下等生物だと思っているのであろう？　それと同じ事だ」

「人間を虫と一緒にするな！」

「虫と同じだと思っているのだがな。さて、こんな話をしていても

話は平行線のまま。私にも計画があるので、先に行かせて貰う事とする」

ネフューリアは、レゾムの死に何も感じていないようであった。すぐに出撃させた超巨大戦艦を、とある方角に向けて発進させる。

「まさか……」

彼女が、ネフューリアが、超巨大戦艦を発進させた方角。その進路上には首都星トランスバールが存在していて、つまり彼女はトランスバール皇国の中枢を押さえて、この国を完全に占領しようとしている証拠でもあった。

「しかし、いくら超巨大戦艦とはいえ……」

「侮るなよ、下等生物。この黒き月の全てと、我がヴァル・ファスクの技術が融合した《オ・ガウブ》に、そんなポンコツ艦隊が何の役に立つ？」

「それは事実かもしれないな。だが、お喋りが過ぎたようだな」

スクリーン越しに、ネフューリアに対して不敵な笑顔を浮かべるコチジャン中将であったが、次の瞬間にはエルシオールが装備していたクロノ・ブレイク・キャノンが《オ・ガウブ》に向けて発射されていた。

「ほう、私の隙を突いたつもりかい？　だが……」

トランスバール皇国側の全ての人間が、その超巨大戦艦とネフューリアの最後を確信していたが、必殺であるはずのクロノ・ブレイ

ク・キャノンは呆気ないほど簡単に、《オ・ガウブ》のシールドによって弾かれてしまう。

「少しお痛が過ぎたようだね」

クロノ・ブレイク・キャノンを喰らっても全くの無傷であった《オ・ガウブ》は、すぐに搭載されている巨大ビーム砲や、ミサイル群を盛大にぶっ放し始め、それによりエルシオールは大地震でも来たかのような衝撃を受けていた。

「うわっ！」

「アルモ！　ココ！　損害は！」

「エルシオールは大丈夫です！」

エオニアの乱でリミッターが外れ、更に戦後に新たな改装まで受けていたエルシオールにほとんど損害はなかった。

ところが、他の艦隊はそうはいかなかった。

次々と爆沈・損害の報告が上がってくる。

「第二分艦隊旗艦アイオワが撃沈されました！　分艦隊司令ユッケ准将以下幕僚は全滅です！」

「軽空母ラングレーが撃沈されました！」

「巡洋艦ラミリーズ、ベルリン、キエフから総員退艦命令が出されました！」

「第二分艦隊の駆逐艦で生存している艦は、僅か四隻のみです！」

「コチジャン中将直率の第一分艦隊も、既に七割が戦闘不能です！」

距離と方角的な関係で、レゾムを討つために前に出ていた第一・第二分艦隊の艦は、その大半が被害を受けて大混乱していた。

他にも、エリオスとアキオの指揮する艦隊にも損害が出ている。

「巡洋艦ノーフォークが撃沈！　第二駆逐艦隊も二隻を除いて全滅です！」

「ちっ！」

「ですが、うちはまだマシな方ですよ」

《オ・ガウブ》は、その巨大な船体に多数搭載されてる火器を、これでもかと周囲の艦隊にぶちまけるように発射していた。

実は、無人艦隊とはいえまだレゾム艦隊の残存戦力もあったのだが、それすら巻き込んで、次々と艦が傷付き、沈んでいく。

その結果、僅かな時間で五個も揃っていた任務艦隊は、その数を半数近くにまで減らしていた。

エオニアの乱後に懸命に再建を行っていた艦隊戦力が、再び大損害を受けてしまったのだ。

「完全にしてやられたか！　だが！」

あまりの大損害に悔しさを隠せないコチジャン中将であったが、彼はそれでも勝利を確信していた。

いくらあの超巨大戦艦が強力なシールドを保持しているとはいえ、火器を撃ちながらそれを使えるはずもない。

既にクロノ・ブレイク・キャノンの第二撃目を準備していたエルシオールは、躊躇うことなくその引き金を引いていた。

「クロノ・ブレイク・キャノン！　撃てぃ！」

「ふっ！　愚かな」

第二撃目のクロノ・ブレイク・キャノンを撃とうとしたエルシオールであったが、それは突然から発せられた黒い衝撃波（オ・ガウブ）のような物を食らうと、エルシオールの護衛を行っていた紋章機と共にその活動を停止させてしまう。

「これは、前に《黒き月》が使った攻撃！」

「クロノ・ストリング・エンジンでは、動けなくなる！」

先のエオニアの乱の時に使われたクロノ・ストリング・エンジンを停止させる攻撃に、タクトもシヴァ陛下も苦渋の表情を浮かべていた。

もはや《黒き月》は滅んだものと考えて、全く対抗策を練っていなかったからだ。

「何の対抗策も無しに、この《オ・ガウブ》だけで私が戦場に出るとでも思ったのかい？　しかも、この《オ・ガウブ》はこれで完成ではない。もっとも、あの無能なレゾムは、それにすら気が付いていなかったけどね」

余裕の態度を見せるネフューリアが指をパチンと鳴らすと、《黒き月》化していた資源衛星レミナスの巨大な中心部に穴が開き、《オ・ガウブ》はその穴に突入していく。

「させるか！　この機会を逃すな！」

使っている装備はムーン・エンジェル隊よりも古かったが、過去にこの攻撃を受けて大損害を受けていたトランスバール皇国軍は、一応はこの戦訓を元に対抗策を練ってはいた。

クロノ・ストリング・エンジンだから止まるのだと、新造艦へは新規に、異既存艦へは改装という形で、古い核融合エンジンを補機として積んでいたからだ。

とはいえ、エネルギー出力は半分以下に過ぎず、しかも推進剤をバカ喰いするので活動限界は三十分ほど。

ようするに、逃げて次の機会を待つためのライフラインの一つに過ぎなかったのだ。

更に、船体の大きさの関係で、この補機と積んでいるのは巡洋艦以上の艦だけとなっていた。

現在この宙域において、トランスバール皇国軍に所属する軍艦で動けるのは、僅かに四十隻程度であったのだ。

「コチジャン司令！　補機で戦闘は不可能です！」

「バカ者！　確かに無謀な賭けだが、エルシオールは現在停止中なんだぞ！」

しかも、その護衛を務めている紋章機も停止中であった。
このままではシヴァ陛下が危ないと感じたコチジャン中将は、満身創痍ながらも生き残った艦隊を、容赦なくレミナスへと向けて攻撃を行わせる。

「後の事など考えないで、ありったけの火器を叩き付けるんだ！」

黒いレミナスが《オ・ガウブ》を完全に飲み込んだどころで、その表面に大量のビームやミサイルが叩き付けられて大量の岩盤などを周囲に撒き散らしていた。

そして、攻撃によって塞がれた視界が晴れた時。
コチジャン中将も、エリオスも、アキオも、絶望を味わう事となる。

完全に表面が破壊されたレミナスから、今まではとは比べ物にならない大きさになった《オ・ガウブ》が出現したからであった。

その大きさが衛星規模の、戦艦と呼ぶものおこがましいとてつもなく巨大な艦に成長した《オ・ガウブ》に、攻撃に参加していたアキオ達も絶句している状態であった。

「ははははは！　少しくらい数を揃えて余裕ぶるとはね。所詮は下等生物なのさ。これで《オ・ガウブ》は、レミナスを材料に完全に《黒き月》のテクノロジーも吸収した。あとは《白き月》も吸収して、その力を更にパワーアップさせれば……。私達が、いえ私がこの宇宙の支配者となる」

「貴様！　《白き月》も吸収するだと！」

「動けない船に乗っている小娘が五月蠅いわね。お前を黙らせ……、それよりも、もっと面白い物を見せてあげるわ」

ネフューリアがそう言うのと同時に、《オ・ガウブ》から先ほどとは比べ物にならない数のビームやミサイルが発射され、更に多数のシムス高速戦闘機や、以前に《黒き月》で製造され、ヘウハウンド隊の面々が使っていたダーク・エンジェルまでもが多数射出される。

「拙いぞ……」

「ええ、動けない小型艦艇やエルシオールが……」

アキオの危惧は、現実の物となっていた。

無人操縦機とはいえ多数の敵機の来襲に、これに一番役に立つはずの紋章機は一機残らず動けない状態にあったからだ。

クロノ・ストリング・エンジンを搭載していないシムス高速戦闘機は移動可能なので、敵味方入り乱れて戦闘を繰り返している。

だが、今までの戦闘での疲労の蓄積と、やはり数に圧倒的な差があって味方のシムス高速戦闘機部隊は徐々にその数を減らしていく事となる。

「第一駆逐艦隊が全滅しました！」

「ちっ！　これでは駄目だ！」

アキオは、誰が見てもわかるほどにイライラとした表情をしていた。

今回の作戦行動においてアキオは一個の分艦隊を預かってはいた

が、その行動はとなると、どうしてもコチジャン中将のコントロール下を離れる事が出来なかった。

彼が無能な司令官であれば手があったのだが、彼はベテランで有能な司令官である。

だが、逆に有能なので、アキオは彼の手足となって動く事だけを要求され、その結果、今までに見せたような臨機応変さを発揮できないでいた。

タクトほどではなかったが、アキオは軍事教練の教科書通りにも、一見定石を無視したかのような策も実行可能な、思考パターンが柔軟な指揮官でもあったのだ。

後世の人達から、『能力の性格的に、タクト・マイヤーズとレスター・クールダラスの中間にいる男』と評される理由であった。

アキオはエリオスと一緒に、コチジャン中将の忠実な分艦隊司令として動き、今は半数の戦力を失ってイライラしている状態であった。

それでも、矢継ぎ早に命令を出してなるべく戦力の損失を押さえている部分はさすがであったが、今回は誰がどう見ても負け戦であり。

それどころか、どうやってこの宙域から撤退するのかを考えなければいいけない状態にまで追い込まれていたのだ。

「逃げるしかないですね」

「だが、駆逐艦以下の小型艦艇の乗員達はどうする？」

どうするも、ベテランの艦長にも実戦経験のあるアキオにも理解

できている事であった。
脱出しろと命令するのは簡単だ。
収容先も、大型の艦船であれば余裕は十分にあるであろう。

ところが、その脱出に使うシャトルもクロノ・ストリング・エンジンを搭載していたし、装備していない小型脱出艇では、艦の外に出ただけで《オ・ガウブ》からの火器と艦載機群によって全滅させられてしまうであろう。

残るも地獄、逃げるも地獄で。
しかも、大型の戦艦に乗っているアキオ達には、『部下を捨てて逃げ出した卑怯な指揮官』として、一生汚名を背負わなければいけなくなる可能性もあったのだ。

「そうこうしている内に、核融合エンジンの推進剤がヤバいな」

「ふふっ、だから下等生物だと言うのだ」

「言ってくれるな。ネフューリア」

エルシオール以下、生き残ったトランスバール皇国軍艦隊への攻撃の手を緩めないまま、ネフューリアは余裕のある態度を崩さないでアキオに通信を入れてくる。

「下等生物の中でも、お前とあのタクト・マイヤーズは使える方なのに。組織という幻想の集団を気にして、自分よりも能力の劣る上官の命令に従い。部下という、自分が庇護しければいけないと思ってしまう身分に固執して自分も動けなくまってしまう。その頚木のせいでお前は使えない男になっているのよ」

「わからない理屈でもないが、そんな事を友達が一人もいなさそうなあんたに言われてもな。俺も、人の事は言えないけど」

先ほど、ネフューリアは自分をヴァル・ファスクだと名乗っていた。

それと、この極端に仲間との団結を嫌って自分一人で動いてしまう性分。

もしかすると、彼女は外見は人間と同じであったが、中身が決定的に違うのかもしれない。

心の中で考え事をしていると、ネフューリアが再び通信を入れて来る。

「あと十分動けると良いわね」

「ほう、どうしてそう思うんだ？」

「下等な生物の死のダンスも見飽きたわ。そこで、次の余興を出そうと思ってね」

彼女の宣言と同時に、砕けたレミナスの一部であった巨大な岩塊に輝が入り、その中から二隻の巨大戦艦が出現する。

その大きさは、レゾムのアドミラル・レゾムと最初の《オ・ガウブ》との間くらいの大きさであった。

「下等な生物が戦闘艦を作る時に良く言う、機動性・火力・装甲をバランス良く備えた新造戦艦という奴ね」

『あれだけの無人艦隊や、《オ・ガウブ》を所持するネフューリアが、今さらどうしてこんな物を？』と思うアキオであったが、それに答えるかのように彼女は言葉を続ける。

「コンピューター操作の単純性を排除した試作品よ。これまでに集めた様々な戦闘データを反映させた自動思考ＡＩを装備していて、他にもお前達下等生物の一番の弱点を突くようになっているわ」

「一番の弱点？」

「実際に見てみると良いわ。そして、絶望しなさい。アキオ・レイトンにエリオス・シードル」

「なぜ、私もなのですか？」

その疑問に答えるかのように、その二隻の巨大戦艦から通信が入り、同時に二人は言葉すら出せないまま絶句する事となる。

「っ！」

「……」

ところが、彼らの部下達には二隻の無人戦艦のブリッジに立っている人物の正体が良くわからなかった。

なぜ、二人が絶句しているのかわからなかったのだ。

「シードル公爵……」

コチジャン中将と、司令部の数人の高級将校を除いてだ。

「ふんっ！　トランスバール皇国軍も質が落ちたらしいな。経験不足の若造に、小汚い市民風情の男か」

その人物とは、先のエオニアの乱で殺されたはずのシードル公爵であった。

彼は、死ぬ直前の老人の姿で、アキオ、エリオス、コチジャン中将などをスクリーン越しに観察するように見つめていた。

「そんなバカな！　父は死んだはずなんだ！」

「しかし、こうして現に生きておる。エリオス、お前は悪い子だ。実の父親に逆らうなんて」

全く同じ姿格好で、声も喋り方まで同じな実の父親であるシードル公爵のせいで、エリオスは既に指揮官として完全に使い物にならなくなっていた。

「卑怯な」

「タクト。奴らは、死者を蘇らせる事が可能なのか？」

「そんなわけがあるか。冷静に考えろよ、レスター」

エオニアの乱においても、敵軍の情報収集能力には侮れない物があった。

多分あれは、集められる限りのデータを参考に作られたロボットの類なのであろう。

「エリオスだって気が付いていないはずがない。だが……」

「そこまでリアルだと、討つのも躊躇われるか」

ネフューリアが言っていた人間の弱点。

それは、家族や身内との繋がりとであった。

現にエリオスはシードル公爵の姿に動揺し、指揮官として全く命令を出せない状態になっていたからだ。

「エリオスは、実の父親か。ところで、レイトンは誰なんだ?」

分割されたエルシオールのスクリーンには、ネフューリアとシードル公爵ともう一人若い女性が写っていた。

歳はかなり若く見えていた。

二十代の半ばくらいかもしれないが、実はもっと年上かもしれない。

黒い瞳に、黒い髪を肩まで伸ばしたとても美しい女性で、しかもタクトはこの女性をどこかで見たような記憶があった。

「あれ? 誰だったかな?」

「タクトさん! あの人は!」

とそこに、ミルフィーユから緊急で通信が入る。

彼女は、その女性の正体を知っていたのだ。

「タクト、私も知っているわ」

「私もです」

「私も知っています」

「タクト、私もだわ」

「あの、私も……」

他の五人も、その女性の正体を知っていた。

なぜかと言えば、ある人物がその女性の写った写真を何よりも大切にしていたからだ。

「まさか……」

タクトがアキオのいる《スオウ》に通信を送ると、彼は今までの見た事がないほどの、冷たい能面のような顔をしていた。

更に良く見ると、拳を握るのに力を入れ過ぎてしまったのか指の隙間から血が流れていて、体も全体的に小刻みに震えているのを艦長は確認してしまう。

そのあまりの怖さに、倍以上の年齢で軍に長年奉職してきた艦長ですら、彼に話しかけるのを躊躇うほどであったのだ。

「艦長」

「マイヤーズ司令、レイトン司令は……」

アキオの母親の顔など見た事が無い艦長は、なぜアキオがその女性を見ただけでそうなってしまったのかを理解できないでいた。

「彼女は……」

タクトが艦長に説明をする前に、その女性はまるで女神のような笑みを浮かべながら優しくアキオに話しかけていた。

「アキオ、あなた大きくなったわね。お母さんは、あなたの事だけが心配だったのよ」

「なぜだ……」

せめて声さえ違えばと思うアキオであったが、どうやらデータ収集は上手く行ったらしく。記憶に残っている母親の声とまるで同じであった。

「なぜって、私はあなたの母親なのだし」

「ネフューリア！　これが、お前の戦い方なのか！」

「だから言っただろう？　お前ほどの男でも、絶対に逃れられない肉親への感情という幻想。これがお前達人間の最大の弱点なのだと。私は、そんな物は最初から持っていない。だから、私達ヴァル・ファスクは最強なのよ」

「アキオ、お母さんに顔を良く見せてちょうだい」

「嘘だぁーーー！」

「ははははは！　ここでお前は、肉親の愛情という幻想に溺れて死ぬのよ！」

ネフューリアの策で指揮官として機能しなくなってしまったアキオの無様を、ネフューリアは大喜びで観察しながら高笑いを続けていた。

未だに、エルシオールや紋章機を始めとする、多くのクロノ・ストリング・エンジン装備の艦艇は動けないままで、それらは次々と《オ・ガウブ》の砲火やダーク・エンジェルによって沈められてい

る。

タクトやアキオ達は、絶対絶命の危機に陥っていた。

第二部　第七話（暫定版）

「どうして、こんな事になったんだ……」

「タクト、お前……」

シヴァ陛下自らが艦隊を率いて行われた、資源衛星レミナスを占拠している真・正統トランスバール皇国軍艦隊討伐作戦は、大損害を受けて敗北・全滅寸前の状態にまで追い込まれていた。

復活した《黒き月》が持つ特殊な攻撃によって、クロノ・ストリング・エンジンを装備した艦艇は行動不能となっていて、現在辛うじて動いているのは、核融合炉の補機を積んだ一部大型艦艇のみであった。

だが、それもあと十分もしない内に動かなくなるであろう。

更に、自分の上官であるレゾムを殺害し、衛星とほぼ同じ大きさの巨大戦艦（オ・ガウブ）を有するネフューリアは、その搭載火器と、艦載機である無人操縦のシムス高速戦闘機や、ダーク・エンジェルによる攻撃も続けていて、既にトランスバール皇国軍は組織としての体を成していなかった。

「シムス高速戦闘機隊、損害率は八割を超えました」

「戦闘可能な戦力は、もはや二十隻程度です……」

「完全にしてやられたか……。ナガトとスオウは無事かな？」

「はい。あの二艦は、艦長がベテランですから」

「『城を攻めるは下策、敵将の心を攻めるは上策』か……」

「司令、それは？」

「士官学校の試験に出た事があったな。孫子だったと思う」

コチジャン中将は、自分の息子のような年齢の二人の若者の身を案じていた。

いくら優秀な軍人でも、あんな風に露骨に肉親と似たロボットを敵将として出されてしまえば。

というか、間違いなくアレは偵察型プローブかインターフェイスを改良した物であろう。

ただ綿密に調べた偽装相手の個人データを参考に、膨大なプログラムデータを元に動いている人形にしか過ぎないのだと。

だが、この策の恐ろしい部分は、そんな事はあの兄弟自身にもわかっているという部分にあった。

わかっているのに、敵の策に嵌められてしまう。

軍人として、これほどの屈辱はなかったのだから。

「もはや、艦隊・戦隊レベルでの防御も難しいな。個艦ごとに自己の生存を一秒でも図って貰うしかない」

「はい……」

なまじ五個もの任務艦隊が合同して戦っているせいで、そのほとんどが動けない戦場は大混乱に陥っている。

しかも性質の悪いのは、そこに戦力を投入しているネフューリアの方は、少しくらい稚拙な戦闘で戦力を失っても、すぐに再生産可能な点にあった。

相討ちならば、無人艦艇や戦闘機などもミサイル代わりに使えて良かったくらいにしか感じていないのであろう。

「エルシオールの方はどうなっているか？」

「駄目です！　相変わらず動けないままです！」

「ならば、行くか……」

コチジャン中将は、旗艦ミズーリーをエルシオールの前方へと向けるのであったが、補機の稼働時間はもはやさほど残されていなかった。

「クソっ！　この状況で何が出来る！」

「レスター、落ち着け。まだ何か手があるはずだ」

エルシオールのブリッジで、ムーン・エンジェル隊の司令官タクト・マイヤーズ大将は、一人冷静に戦況の観察と把握を続けていた。

口で言うのは容易いが、この絶望的な戦況下で全く動揺する事なく戦場全体の様子を見回す。

普段は鈍いとか抜けていると評される事もあるタクトであったが、

実はその肝の太さは、歴代の皇国軍将帥の中でも群を抜いている存在であった。

そして、彼はまだ諦めていない。

その心の強さこそが、後世の人々が彼を将帥の中の将帥《皇国の英雄》と呼ぶ理由にもなっていたのだから。

「レイトンも、エリオスも駄目か……」

「ああ……」

完全に心が折られてしまった二人は、既に指揮を執れるような状態になく、現在残存艦隊と旗艦の指揮はベテランの艦長に任せている状態であった。

「珍しく怒らないんだな。レスターは」

「相手の心を攻める。確かに、これほど有効な策はないと思う。だが、実際にそれやられたら、俺でも正気を保てるかどうか……」

レスターは、そこまで綿密に調べて準備を行っていたネフューリアにある意味感心すると共に、心の中では恐怖すら感じていた。

なぜ亡くなった肉親の偽者を使った策を、あの兄弟に用いたのか？

タクトやコチジャン中将や自分にはそこまで心を乱す存在対象がいなかったし、シヴァ陛下にしても、故ジェラール陛下の偽者を出したとて、そこまで動揺するとも思えなかった。

もしいても、タクトやベテランのコチジャン中将ならば、あまり動揺を見せない可能性もある。

つまり彼女は、ちゃんと見極めてからあの兄弟を選び、動揺させる偽者を作り出したていたのだ。

実際にそのおかげで、コチジャン中将は使える戦力を減らしていたし、エルシオールの盾となってくれるはずの二人が動けずに、自分達は絶体絶命の危機に陥っている。

もしアキオが普通の状態であったのなら、必ず動いてエルシオールを守ろうとするはずであったからだ。

「（さてと……、これはどうしたものかな）」

実は手が無くて困っていたのだが、タクトはそんな事は億尾にも出さないで正面の《オ・ガウブ》を見据えていた。

「みんな、まだ必ず手はあるはずだ！　あれ？　これは？」

「クロノ・ストリング・エンジンを始めとするエルシオールと紋章機の全機能が回復しました！」

「同時に、友軍全艦艇の機能も回復！」

タクトが何か異変に気が付くのと同時に、エルシオールの艦内から白い光が発生し、それと同時にエルシオールと紋章機の全機能が回復する。

更に、友軍艦艇などの、クロノ・ストリング・エンジンを使用している全ての船や兵器も普通に動けるようになっていた。

「ネガティブ・クロノ・フィールドを解除したわ。早く逃げなさい。エルシオール」

「急にどこから？　それと、この声は……」

急な発光と同時に、全てのクロノ・ストリング・エンジンが機能を回復したのは、どうやらこの通信を入れて来た人物のおかげのようであった。

更にタクトは、いやアルモやココを始めとするブリッジにいるクルーや、アキオとちとせはこの声に聞き覚えがあるはずであった。

なぜなら、以前からレミナス方面より流れて来ていた、特殊な通信電波の声の主だったのだから。

「どこから聞こえるんだ？」

「八時の方向です！」

タクトがアルモにその後方に探知カメラを向けさせると、そこには赤い宝石のような物体が浮かんでいた。

「タクトさん、これは……」

「ああ、黒き月のクリスタルに良く似ているな」

それは、エオニアの乱においてタクト達が破壊した黒き月のクリスタルにソックリであった。

エオニアの乱の際に、クロノ・ブレイク・キャノンで完全に破壊したと思ったのに、どうやら残った部分があって、それがレミナスを黒き月化させたり、こうしてタクト達に通信を入れているようであった。

だが、その相反する行動が余計にタクト達を混乱させていた。

味方なのか？

敵なのか？

判断に迷う状態であったからだ。

「早く逃げないと、ここで全滅するわよ」

赤いクリスタルは、急かすように通信を入れてくる。

確かに、いくらクロノ・ストリング・エンジンが再び動くようになったとはいえ、この状態で戦いを挑む方が無謀とも言えた。

「マイヤーズ大将、シヴァ陛下の御身もある。ここは、一旦退くとしよう」

コチジャン中将も、無謀な攻撃などは具申して来なかった。

現状で半数が戦闘不能なうえに、先ほどの全機関停止の混乱から完全に抜け切っていないので、一旦退いて体制を立て直さないと全滅してしまう危険に変わりはなかったからだ。

「エルシオールと紋章機各機は、クロノ・ドライブを準備！」

「全艦隊！　各個にクロノ・ドライブで脱出！　ポイントは、演習マップナンバーＢ－２５５７－Ｂ！」

タクトとコチジャン中将が、同時にクロノ・ドライブを使った撤退を命令する。

タクトは、敵の策である事を懸念しているレスターを制して、あの黒き月のクリスタルの付いて行き。

コチジャン中将は、多数の艦艇でそれに付いて行って敵に探知さ

れる可能性と、既に味方の暗号通信が敵に筒抜けである可能性を恐れて、事前に全艦艇に、戦闘シミュレーションのマップナンバーで緊急時の撤退先を準備していたのだ。

これはアキオの献策でもあったのだが、肝心の本人は未だに顔面蒼白でスオウのブリッジ立ち尽くしている状態であった。

エリオスも似たような状態らしく、二人はこのままでは使えない事は確実であった。

「シナモン大佐、ターメリック大佐」

「はっ！」

「何でしょうか？」

コチジャン中将は、旗艦の艦長と分艦隊副司令を兼任している二人のベテラン艦長を通信で呼び出す。

「貴官達は、エルシオールに付いて行け。そのくらいの戦力ならば、逃走先は特定できないだろう」

最初は他の艦隊よりも被害の少なかった二つの分艦隊であったが、友軍援護のために無茶をしたのと、司令官の心神喪失による混乱よって、既に半数近い戦力を失っていた。

「司令は、如何なされるおつもりで？」

「戦力を再編して、再び戦いを挑む」

「しかし！　あの攻撃の前には！」

機関部を停止させてしまうような敵に対して通常戦力で挑むなど、無謀であるとしか考えられない両大佐であった。

「勝てるとは思っていない。時間稼ぎだ」

《オ・ガウブ》は、確実に《白き月》と首都星トランスバールを標的にしている。

そしてこれを唯一防げる可能性があるのは、シヴァ陛下の座上するムーン・エンジェル隊を擁したエルシオールだけであろう。

ならば、今は一秒でも長く彼らに時間を与えるべきなのだと。

「他の星系の戦力も組み込んで、とにかく時間稼ぎに終始して五日が限界だ。両大佐は、二つの分艦隊の残存戦力を再編して、レイトン少将に引き渡せるようにして欲しい」

「閣下……」

両大佐は、気が付いていた。

コチジャン中将の抵抗は無謀な物であり、間違いなく生きて戻るつもりなど無い事に。

それと、今は完全に自失しているアキオが、必ず復活するのを信じているのだという事にだ。

「若い内は色々とある。色々とあるが、不思議と若いと何とかなってしまうものだ。では、私の命令通りに」

部下の仇であるレゾムも討てて、目的を達した達成感もあったのであろう。

コチジャン中将の顔は、これから死に行く者とは思えないほど晴れやかなものであった。

「クロノ・ドライブ開始！」

エルシオールと、紋章機と、第三・第四分艦隊の生き残りは、黒き月のコアの誘導によって戦場から離脱し、他の艦隊の残存戦力も、事前にシミュレーション用のコンピューターに設定していたポイントに向かって逃走を開始する。

「マイヤーズ司令、シヴァ陛下、レイトン少将、あとは任せたぞ」

まるで覚悟を決めたように小さく呟くコチジャン中将であったが、彼は撤退先の宙域で援軍も含めた戦力を再編し、《オ・ガウブ》の進路を特定すると、そのまま勝率０％の遅延戦闘を開始していた。

「司令も、こんな死にかけばかり良く残したのぉ」

「巡洋艦レミューではなくて、養老院レミューか」

コチジャン中将は、大戦後に生産された無人操縦か、高度の人員の省力化が可能な艦船だけを選び、しかも残している最低限の人員も全て退役間際の老人ばかりという状態にしていた。

軍艦はその性格上、余剰の人員をかなり乗せている。

艦の損傷などで戦闘不能になった人員の、予備としての役割があったからだ。

だが、彼は若い兵士達は全て最寄りの惑星に降ろしていた。

『こんな勝ち目もない無茶な戦闘で死ぬのは、自分達だけで十分。残った年寄り連中には悪いのだが』と発言している。

「本当に下等生物ね。まるで寄って来るハエでも追い払うようだわ」

《オ・ガウブ》のブルッジで、これで十数回目になるトランスバール皇国軍艦隊の迎撃を行いながら、ネフューリアは珍しく内心ではイライラとしていた。

まさか、下等生物だと思っていた人間に、ここまで時間稼ぎを許してしまうとは思わなかったからだ。

彼らは定期的に小規模な艦隊で来襲し、一部大型艦艇はネガティブ・クロノ・フィールドを使っても、短時間ならば使用可能な補機によって最後まで戦いを挑んでくる。

勿論、全ての艦艇は完全に破壊していたが、全てを破壊するからこその弊害も発生していた。

いくら《オ・ガウブ》が、《黒き月》の技術と生産力、レミナスの資源を受け継いだ存在とはいえ、度重なる戦闘で大量のビームエネルギーと弾薬を消耗すれば、それを補給しないといけない。

それに機械という物は、作動させれば一定の時間毎にメンテナンスが必要である。

特に軍事兵器という物は、民生品とは違って性能を優先させるために耐久性やメンテナンスの利便性が劣る物も少なくない。

多分、この戦闘の後には大規模な補給とメンテナンスが必要なはずである。

いくら自分以外は無人で、それらはロボットや機械に任せるにし

ても、それで時間を食うのは確実であった。

「下等生物の癖に、自分の目的を達したのね」

ネフューリアは既に二十回近い遅延戦闘を指揮し、最後の攻撃でこちらの攻撃を食らって爆発を繰り返すコチジャン中将の旗艦を視界に入れていた。

「出来うる限りの遅延戦闘は行った。シヴァ陛下、タクト・マイヤーズ、レスター・クールダラス、アキオ・レイトン。後は頼んだぞ」

炎に包まれるブリッジの中で、コチジャン中将は付き合いの長い参謀長であるライム大佐と共に笑顔で敬礼を続ける。

数秒後、彼らは先に逝った仲間達の元へと向かうのであった。

「助かったか……」

コチジャン中将が戦死する二日ほど前、彼に遅延戦闘を任せて逃げ出したエルシオールは、レミナスのあった宙域よりは首都星トランスバールと《白き月》に近い場所にドライブアウトしていた。

「ムーン・エンジェル隊のみんなは？」

タクトが通信機で呼びかけると、全員の無事が確認される。

それと、他にもコチジャン中将からエルシオールの護衛として付いて行くようにと命令された二個分艦隊の生き残りの姿もあった。

「戦艦は四隻、軽空母二隻、巡洋艦六隻、駆逐艦十六隻、突撃艦六隻、その他工作艦、病院船、高速輸送船、強襲揚陸艦か……」

レスターは、エルシオールの隣で艦隊の再編成を行っているこれらの艦隊を見て溜息をついていた。

普通に考えれば、頼りになるかなり大規模な艦隊ではあったが、あのネフューリアの《オ・ガウブ》を見てしまうと、非常に頼りなく見えてしまうのだ。

それにどんな大戦力を用いても、あのクロノ・ストリング・エンジンを止めてしまう攻撃の前には無力であったし、クロノ・ブレイク・キャノンが通用しないとなると、効力のある攻撃手段さえ今は存在していない状態であった。

それと、二つの分艦隊がこの規模になったのには理由があった。

五つある任務艦隊の内、司令官を失った艦隊が三つも存在していて、強引にコチジャン中将達に合流して戦場をかき乱すよりはと、一部他艦隊の艦艇がエルシオールに付いて来ていたのだ。

現実には命令違反でもあったが、これら他艦隊の艦艇を指揮する艦長達の判断は間違ってはいない。

むしろ、優秀な状況判断能力であった。

なので、シヴァ陛下によって彼らはなし崩し的に二つの分艦隊に編入されていた。

ただ、連携には少しの課題を残している状態であったが。

「それでも、生き残れた事に感謝しつつ、その恩人である黒き月のコアに会いに行くか」

「そうだな。迎え入れた以上は、顔を合わせるに越した事は無い」

エルシオールと一緒にドライブアウトして来た黒き月のコアは、心配するレスターを制して、タクトがエルシオールの格納庫に入れていた。

レスターからすれば、敵かもしれないそんな胡散臭い物を艦内には入れられないと考えての反対意見であったが、タクトは、『本当に敵なら、そんな面倒な事はしないで、レミナス宙域で俺達を全滅させているさ』と断言してコアを格納庫に受け入れていたのだ。

「あのネフューリアを倒す、何か良いヒントがあるかもしれない」

「お前は、本当に大胆だよな。鈍いのかもしれないが」

タクトは、自分に毒舌を吐くレスターとシヴァ陛下、それに格納庫にいたムーン・エンジェル隊の面々を連れてクリスタルの前に立っていた。

「本当は、二人も呼びたかったんだけどな」

タクトの言う二人とは、アキオとエリオスの事であった。

ドライブアウト後にどうにか普通に話せるようには回復した二人であったが、とても危なっかしくて任務は任せられないという事で、両大佐からエルシオールに送り返されていたのだ。

謂わば、一時的に艦隊司令をクビになったとも言えたのだが、その後の二人は完全に自室に篭ってしまったままであった。

二人からならば良いアドバイスも出るのになとタクトは残念がり

つつも、この意見は口に出さないようにしていた。

ムーン・エンジェル隊の中でも、ちとせは副官にまで志願していてあの時に何も出来なかった自分を責めていたし、ミントもヴァニラもどう言葉をかけて良いものかわからないで落ち込んでいたからだ。

隊長であるフォルテも表には出さなかったが、親友であるアキオの心配はしていたし、ミルフィーユも『後でアキオさんに何か差し入れでも』と考えながら心配している。

先ほど様子を見に行ったら、酒などは飲んでいなかったが、ただベッドに寝転がって天井を見上げているだけであったからだ。

「あの兄弟は、肝心なところで役に立たないんだから……」

憎まれ口を叩きながらも、ランファの表情は暗かった。

まさか、あれだけタフだと思っていたアキオがこうも簡単に折れてしまうとは思わなかったからだ。

ちとせもミントもランファの発言の真意に気が付いたので、特に反論する事もなく黙っていた。

ああ見えて、実はランファはみんなと同じくアキオの心配をしているのだと。

「待たせたな」

「すいません、心配をかけました」

「レイトン！　エリオス！　大丈夫なのか？」

まさか来るとは思っていなかった二人の登場に、レスターは思わず驚きの声をあげてしまう。

「これも仕事だ」

「いつもまでも、部屋に篭っているわけにもいきませんし……」

とはいえ二人の表情は暗いままで、詳しく問い質すのも躊躇われる状態であった。

暫くはあまり色々と構わない方が二人のためだと思いつつ、タクトは赤いクリスタルに声をかける。

「それで、この中に白き月の管理人はいるのかしら？」

「まさか、ノアなのか？」

クリスタルからようやく出て来たのは、何とエオニアの乱の時に彼と一緒にいたノアという少女であった。

見た目は金髪の美少女である彼女は、前はエオニアを唆していたかなり厄介な存在で、タクト達に緊張が走る。

「前は敵で、今度は私達を助けたんですね。その意図は何なのです？」

ところが、このノアは前とは全く態度や口調が異なっているようであった。

ミルフィーユ達女性陣全員に、白き月の管理人かを尋ねてそれが存在しない事を知ると、出て来て損をしたという感じの表情になっ

ていたからだ。

「誰かと思えば、先ほど役立たずだった艦隊司令官ね」

ノアは、エリオスの疑念を彼に対する非難の言葉で返していた。先ほど、亡くなった自分の父親のインターフェイスに動揺して艦隊を指揮できなくなった愚か者。

同じく隣に、自分の死んだ母親のインターフェイスに狼狽して艦隊が指揮できなくなった大バカ者と。

それがノアの、エリオスとアキオに対する最初の評価であったからだ。

「とにかく、白き月の管理者に会わせて」

「シャトヤーン様ならば、白き月まで行かないと会えないんだけど」

「はあ？　ここに白き月は来ていないの？」

「白き月なら、首都星トランスバールの衛星軌道上にあるけど……」

タクトは、ノアに現在この場所には白き月は存在しない事を伝える。

「白き月の管理者は一体何を考えて……。黒き月を撃ち破っておきながら、それを吸収する事もなく。今回の件にしても……。一体、白き月の管理者は何を考えているのかしら？　全く情報を引き継いでいないじゃない……。わかったわ、あんた達にもう用はないわ」

そこまで言うと彼女は再びコアの中に戻ってしまい、後には残さ

れたタクト達が事情を理解できないまま立ち尽くすだけとなっていた。

「ガキの癖に、失礼なやつね」

「外見は子供でも、あの黒き月の管理人だからなぁ。しっかりしているという事かな？」

「タクトは、甘いわねぇ……」

「まあ、何にしても急いで白き月へと戻らないと」

ランファとの話を最後に一旦ここで解散となり、タクト、レスター、アキオ、エリオスの四人はエルシオールのブリッジへと上がっていた。

「あの……」

「ココっ！」

何とかタクト達と一緒にはいるが、相変わらず暗い表情なままのアキオとエリオスに声をかけようとしたココをアルモが制する。

と同時に、ルフト宰相からの通信が入っていた。

「ルフト宰相」

「何とか全員無事なようじゃの……」

ルフトは、暗い表情のままの兄弟にも視線を送りつつ話を続ける。

「さて、あのとてつもなく巨大な戦艦なのじゃが……」

現在、白き月と首都星トランスバールに向けて進撃中であるとの話であった。

「それはもう、最短距離で正々堂々とらしい。その進路上にある艦隊はひとたまりもないであろうがな」

エルシオールのクロノ・ブレイク・キャノンすら通じない相手なので、通常の軍艦では新・旧関係なく瞬く間に撃破されてしまうはずであった。

ところが、この絶望的な状況にコチジャン中将は懸命に立ち向かっているのだ。

なるべく省力化させて、乗せている人員も五十歳以上の者ばかりの小艦隊で嫌がらせを続けながら、《オ・ガウブ》の進路上にある軍・民の拠点や艦艇や船舶などに避難勧告を出す。

一部間に合わないで攻撃を受けてしまっている場所もあったが、それでも被害は大分抑えられているとの話であった。

「絶対に、勝てない戦いなのに……」

「それは、コチジャン中将が誰よりも理解している。だから、攻撃に参加させている船からは、なるべく人員を降ろしているのだ」

「でも、それだと艦隊の操作や連携などに……」

「同じ事だと言っていた。どうせ、小型艦船はあの攻撃で動けなくなる。補機を積んだ大型艦でも、精々全力で動けて三十分」

コチジャン中将は、それら準備した艦隊をただ敵に攻撃させているだけであった。

報告によると、なぜかネフューリアは立ち塞がる艦隊を全滅させないと気が済まない性分らしく、それを利用しつつ、出来る限りの遅延行動で少しでも《オ・ガウブ》の白き月への到着時間を遅らせる。

最初から勝てないとわかっていて、最後には自分も阻止に出るつもりらしい。

タクト達は、ベテランの指揮官であるコチジャン中将の決意を感じ取っていた。

「それなら、俺達も……」

「いや、タクト達は一秒でも早く白き月へと向かって欲しい」

「ですが……」

「現在の我々の唯一の希望が、エルシオールとムーン・エンジェル隊なのだ。それに、コチジャン中将の件で責任を感じる事はない。その責任ならば、彼の行動を認めたワシの方が重いのだからな」

なるべく一人でも多くの人を救うために、少数のコチジャン中将達を犠牲にする。

これは、トランスバール皇国宰相となったルフトが背負うべき責任でもあった。

「これに関しては、ウォッカ大将も、ジンロ大将も、ウォルコット大将も同じ事だ。それとは別に、ウォッカ中将はこうも言っていたがな」

『ルフト宰相閣下、この遅延行動は長年駆逐艦隊で飯を食っていた自分だからこそ出来るのです。才能よりも経験と実地。謂わば、ベテランの意地とでも申しましょうか。それに、タクト・マイヤーズも、レスター・クールダラスも、アキオ・レイトンも、エリオス・シードルも。今の時点で、こんな自殺戦法を覚える必要はありません。彼らは若い。ただ懸命に戦って勝てば良いのです。彼らは、私にレゾムという仇を取らせてくれました。それに感謝していたとお伝えください』

これを最後に、コチジャン中将は通信を遮断してネフューリアに対して絶望的な抵抗を始めていた。

「申し訳ありません。分艦隊司令失格です」

今まで無言でルフトからの話を聞いていたアキオであったが、コチジャン中将の最後の言葉に責任を感じてしまったらしい。
暗い表情のまま、搾り出すような声で頭を下げて謝っていた。

「若者よ、暫く悩む事じゃの」

ルフト宰相は、アキオと同じく責任を感じているエリオスにも視線を送ってただ一言だけアキオにアドバイスしていた。

アキオには生まれの不幸と、その後実の父親から命を狙われるという不幸があった。
だがアキオはそれを、生まれ付いての才能と、弛まぬ努力と、様々な人の影ながらの支援と、それによって引き寄せた幸運によって跳ね除けている。

実際に経験した本人には堪った物ではないのかもしれないが、ある人から見れば、アキオは今までにあまり失敗をして来なかった人物とも取れる。

それが今回、初めて敵の心理戦に嵌って任務に失敗している。

隣のエリオスもそうだが、彼は前に執事のコニャックのせいでも失敗しているので、その点ではアキオよりもショック状態からの回復が早かった。

それに、彼は自分の父親の罪についても理解している。

その点が、何の罪も無い母親を利用されてしまったアキオと比べてマシであるとも言えたのだ。

「ミスや挫折をしない人間はいない。白き月までは数日ある。艦隊の任務は両大佐に任せて、お前達はエルシオールの艦内で好きにしておれ」

「はあ……」

「ですが……」

「悩むのも若者の仕事じゃよ。もっとも、タクトは悩んだ事があるのか？」

「ルフト宰相も、意外と失礼ですね。今日は、ミルフィーに何を作って貰おうかとか、今日のデートはどこに行こうかとかですね」

「わかった、わかった。タクトは平常通りで素晴らしい事じゃの。では……」

ルフトは、別にタクトに呆れたわけではない。

このある意味絶望的な状況下でも、普段と変わらない態度でいる。
更に、彼は見抜いていた。
タクトがまだ何か懸命に、この状況を打破する策を考えているのだと。

この精神的なタフさこそ、その絶大なカリスマと戦略的思考能力と合わせて、ルフトが彼を重用している最大の理由でもあったのだから。
ウォッカ大将の、アキオとレスターがトップに向かないという以前の話を、最近になってますます理解するルフトであったのだ。

「じゃあ、俺はこれで……」

「失礼します」

「重症だな」

先にブリッジから退室する二人に、ルフトはかなり状況は深刻だと考えていたのだが、タクトはやはり楽観したままであった。

「あの二人なら、絶対に大丈夫さ」

「ほう、断言するんだな」

「理由は簡単さ。俺にはミルフィーがいるのと同じだからさ」

「なるほどね……」

ルフトの脳裏に、アキオを奪い合うちとせ、ミント、ランファのが姿と。

長閑な銀河展望公園の芝生で、ヴァニラをモデルにデッサンをしているエリオスの姿が思い浮かぶのであった。

「うーーーん、今日は少し上手く行かないね」

「あの……、エリオスさん」

「何だい？　ヴァニラ」

レスターの予想通りに、エリオスはヴァニラをモデルに銀河展望公園のに芝生の上で絵を描いていた。
だが、今日はどうにも筆が乗らないらしい。
何度も描き直しをしているようであった。

「人間には、その日によって調子に差が出ると……。そんな時に無理をしても、絶対に上手く行かないとケーラ先生が……」

そう言いながら、ヴァニラは持参していたバスケットと水筒に入った紅茶を差し出していた。

「これは、ヴァニラが作ったのかい？」

「はい。ミルフィーさんに教わりました」

これでもヴァニラは、ケーラやミルフィーユに料理などを教わっていたので、かなり腕前を上げていた。
少なくとも、フォルテやミントよりは遥かに上であった。

バスケット中身は、手作りのサンドウィッチに鳥の唐揚げやウィンナー炒めや卵焼きなどで埋められていた。
それと、デザートにカットフルーツなども用意してあるようだ。

「うん、とても美味しい」

「良かったです」

二人は一緒にお弁当を食べ終わり、食後の紅茶を楽しみながら話を続ける。

「ヴァニラは料理が上手だね。でも、紅茶なんだね。ケーラ先生はコーヒー党だからコーヒーかと思ったけど」

「エリオスさんは紅茶の方が好きですから。ミントさんに良い茶葉を貰ったんです」

「わざわざありがとう。ヴァニラは優しいんだね」

「いえ、そんな……」

この時点でエリオスは今日の写生は諦めて、スケッチブックを芝生の上に放置して、公園の景色を見ながらヴァニラとの話を続けていた。

「あの……。実のお父さんと同じ姿のインターフェイスを討てなかったエリオスさんは間違っていないと思います」

「ヴァニラ、しかし……」

「アキオさんにも、他の人達にも、お父さんは悪い人だったと思います。でも、エリオスさんにはお父さんは優しかった。お父さんは良い人だった。そのお父さんを、世間の評価と合わせて討って当然の悪人だと全面的に思うのは良くないと思います」

「ヴァニラ……」

ヴァニラの発言に、まるで雷にでも打たれたかのような衝撃を受けるエリオスであった。

エリオスの調子が、未だに元に戻らない理由。

それは、自分の感情と理性との間に出てくる認識の差が大き過ぎるからであった。

確かに自分の父親であるシードル公爵は、世間で言えば大悪人なのであろう。

実の息子を殺そうとして、それを成し遂げるために沢山の悪事を裏で行っている。

世間の人々は、『死んで当たり前の老害』、『長生きして晩節を汚した』とボロカスに彼を批判していた。

そしてエリオスであったが、表の新シードル公爵としては彼を非難しなければいけない立場にあった。

それでもエリオスは、本音では彼を嫌いになど絶対になれなかったのだ。

『エリオスの描いたワシの似顔絵は良く似ておるの。宮廷画家の描

いた自画像など、これに比べたら落書きではないか』

五歳くらいの頃、始めて幼稚園で描いた父の似顔絵に、彼は満面の笑顔でエリオスを褒めてくれた。

『エリオス、十歳の誕生日おめでとう。プレゼントは、本当に絵画セットだけで良いのか？』

歳を取っても忙しい立場にある父であったが、誕生日などには必ず盛大なパーティーを開いて祝ってくれた。

『すまんの。シードル公爵家の跡取りは、絶対に士官学校に行くという先祖代々の決まりでの。絵描きになりたいのであれば、大人になってから空いた時間にでも……。昔には、そんな貴族もいたのじゃが……』

自分の夢である絵描きを本業一本に出来ない現実を、父は心から申し訳なさそうに謝っていた。

確かに兄であるアキオなどからすれば、『ふざけるな！』とでも言いたい父の自分への接し方なのであろうが、それでもその優しさは本当の物だと信じてあげたい。

それは、人にどう非難されても絶対に変えたくないと、エリオスは心の中で思っていたのだ。

「お父さんが本当の悪だけの人ならば、エリオスさんがあの偽者を討つのを躊躇う理由はないと思うのです」

「……。ありがとう、ヴァニラ」

ヴァニラの言葉で、エリオスは今までの悩みが全て吹き飛んだように感じていた。
まるで曇り空が、雲ひとつない晴天に変わったかのようにだ。

「そうだね。世間の人がどう思おうと、父は僕にとっては素晴らしい人だった。それは、僕の心の中で絶対に揺るがないんだ」

「はい」

「だからこそ、決意したよ。偽者とはいえ、あんな物がまた暴れ回れば、ますます父の悪評のみが広がってしまう。ならば、僕はあの父を討つよ。それこそが、僕に出来る父への最大の親孝行なのだから」

自分の決意を述べるエリオスに、ヴァニラはまるで慈母のような笑みで答えていた。

「でも、今は色々とあって疲れたなぁ。ちょうどお腹一杯になったし」

そう言うと、エリオスは芝生に横になって目を閉じてしまう。
そして一分と立たない内に、静かな寝息を立て始めていた。
レミナスでの戦闘から脱出と、心休まる暇がなくて疲労が溜まっていたのであろう。

「エリオスさん」

エリオスの安らかな寝顔に安心したヴァニラは、自分も疲労が溜まっていたらしい。
同じように睡魔に襲われて、広げていたエリオスの腕を枕にその

まま一緒に寝入ってしまうのであった。

「何だい、全然真ん中に命中しないね」

「おかしいな？」

「的には全弾命中か。まだ本調子じゃないみたいだね。無理するんじゃないよ」

一方、アキオの方は、エルシオールの艦内をフラフラと歩き回っていた。

この点がエリオスとは違って、特に趣味を持たない生来の貧乏性であるアキオらしいといえばらしかったのだが。

まずは、フォルテと一緒に射撃訓練に参加したアキオであったが、これはストレス発散の意味合いもあった。

「アキオさん、珍しいお茶を飲みませんか？」

射撃場を出たアキオは、次にミントの誘いを受けていた。

何でも珍しいハーブティーを手に入れたらしいのだが、そのハーブティーが精神の安定に物凄く効果があるらしいのだ。

「へえ、少し変わった香りが……」

「これが精神の安定に……」

ところが、ティールームでそのハーブティーを淹れた瞬間に、室内に異様な香りが広がり始める。
何と言ったら良いのか、とにかく物凄い香りだったのだ。

「おかしいですわね、こんなはずでは……」

ミントはそのハーブティーの説明書を読み始めるのだが、そこに書かれた内容に絶句してしまう。
なぜなら、『これは、ジョークグッズです』と書かれていたからであった。

「まさか、父がこんな物を……」

「いや、さすがはダルノー会長だな。しかし、酷い香りと味だな」

とは言いつつも、ミントはアキオが笑っているのを確認していた。
他にも、ティールームにいるエルシオールの他のクルー達が、そのハーブティーを敢えて淹れてから、その味と香りの酷さを確認している姿を目撃していたのだ。

「本当に物凄い味と香りね」

「ミントさん、少し貰っても良いですか？　他の人にも飲ませたいから」

「構いませんけど……」

拙いハーブティーを積極的に貰いに来るクルー達を、ミントは不思議そうに見ていたが、アキオはその理由には気が付いていた。

「つまりさ。不味いから逆に話が進むんだよ。精神安定云々は、仲間同士でこのハーブティーが話題になって盛り上がるからさ」

「なるほど、そうでしたか」

年長者で人の心の機微に詳しい、ダルノー会長ならではの贈り物というわけであったのだ。

「でも、何の材料を使っているんだろうね？」

「本当、硫黄と山椒でも混じったような匂いがしますわね」

二人は、久々に笑いながら暫く話を続けていた。

「今度は、本当に美味しい紅茶をお淹れしますから」

「ギャグは一回だけ聞くから面白いからね。アレの二度目は勘弁だ」

「言えてますわ」

ミントと別れたアキオ、今度はちとせの部屋へと向かっていた。約束をしていたからなのだが、時間通りにちとせの部屋の前に行くと、ドアが開いて中から着物姿のちとせが出て来る。

その水色を基調とした着物の可憐さに、アキオは少しだけ顔を赤く染めていた。

「良く似合っているな。昔に母から聞いた事があるよ。その昔に、大和撫子と呼ばれている女子がいたって」

「やはり、アキオさんのお母さんは、私と祖先が同じ民族なのですね」

部屋に通されたアキオは、彼女から本格的にお茶を淹れて貰っていた。

味のある天目茶碗に抹茶とお湯を入れて、茶筅で小刻みに丁寧にかき混ぜる。

確か、古い昔にそんなお茶の淹れ方があったのをアキオは知識として思い出していた。

「茶道か……。ウラセンケだっけ？」

「はい、練習不足で俄かですけど、師範の免状も持っているんです」

「俺には、優雅な所作に見えたけどね」

アキオはちとせを褒めてから、自分の前に差し出されたお茶を手に取り、丁寧に三回回してから口を付けて飲み干していた。

他にも決まりがあったような気もしないでもなかったが、そこまでは記憶が明確ではなかったので、そこは適当にそれらしく対応する事にする。

「結構なお手前でした。だったよね？」

「お詳しいのですね」

「昔に何かの本で見たんだよなぁ。でも、この抹茶は渋みがマイルドで美味しいな。お茶請けの和菓子も美味しいし」

アキオは、早くこのショックから立ち直らないといけないなとま

ずます感じるようになっていた。
自分にはこんなに心配してくれる人達が増えていて、そんな人達との普段の生活を壊す存在こそが、あのネフューリアであると感じていたからであった。

「たまには、練習しないとと思ったんです」

茶道用の茶器を片付けてから、ちとせはアキオに普通の煎茶を淹れながら話を続けていた。

「どこかで、割り切らないと駄目なんだろうがな……」

ショックだったとはいえ、今のアキオは自分の心理状態を正確に推し量っていた。
あの母の偽者は誰がどう考えても偽者で、しかもあの外見なのは、明らかにタクトの有力な部下である自分を使い物にならなくするための、事前に準備していた策だったのであろう。

レゾムにくっ付いていた頃から、ネフューリアはタクトを危険要素の一つだと断定していたのは確実で、でなければわざわざ母の偽者など準備しないはずであった。

タクト自身の弱点を準備しなかったのは、彼は両親が生存しているし、心を掻き乱す亡くなった友人達なども存在せず、恋人もミルフィーユなので目の前に偽者が出ても何も感じないはずであった。

それよりも、アキオは確信していた。
多分、タクトであったら彼は自分とは違ってあの偽者の母を討ったのではないか？と。
勿論それは、タクトが冷徹な人物であるという事を意味するので

はない。
誰よりも優しいからこそ、自分の大切な人達のために討ったのではないかと考えるのだ。

「（俺は、思っていた以上に心が弱いのかもな……）」

アキオは、静かに茶柱が立っている茶碗の中を見つめていた。

「アキオさん、茶柱が立っていますね」

「そう言われるとそうだね。確か、縁起が良いんだっけ？」

「はい、きっと良い事がありますよ」

昔に母にそんな事を言われたような気もするのだが、実際に茶柱が立っている所を初めて見たので、どう解釈して良いのかわからないアキオであった。

「良い事か……。一体何だろうね？　っ！」

と、そこで急に艦内に敵襲来訪の警報が鳴り始める。
どうやら、ネフューリアがエルシオールを追跡する艦隊を送り出していたらしい。
何も聞かないでそこまで理解できたのは、まさか白き月を目指しているネフューリアが、エルシオールに寄り道をするとも思えなかったからだ。

だが、一つだけアキオには懸念があった。
もし、あの自分の母親の姿をしたインターフェイス型のＡＩが来ていたら、果たして自分がちゃんと戦えるのであろうか？

それだけが、心配のタネであったのだ。

「ちとせ、頼みがあるんだけど」

「はい、何でしょうか？」

それから数分後、アキオはちとせのシャープシューターに送って貰い、戦艦スオウに帰還していた。

突然の司令官の復帰に、副司令兼スオウ艦長のシナモン大佐以下ブリッジのクルーは驚きを隠せないでいた。

「大丈夫なのですか？」

「さあな？　という冗談は置いておいてだ。戦力は？」

「機動力重視の無人艦隊らしいですね」

まるで自分を値踏みでもするかのように観察しながら報告を行うシナモン大佐であったが、それも致し方ないとアキオは思っていた。

またここで自分が駄目になれば、このスオウばかりか艦隊全体に迷惑がかかってしまうからだ。

もし駄目だと判断したら、彼は容赦なく自分の指揮権を奪うであろう。

シヴァ陛下に具申してでもだ。

「巡洋艦十六隻、駆逐艦三十二隻です」

「多いな……」

とはいえ、エルシオールとムーン・エンジェル隊と、自分とエリオスの艦隊を全滅させるには少な過ぎた。
明らかに、自分達の白き月への到着を遅らせるのが狙いなのであろう。

「すいません、遅れました」

そこに、ヴァニラにでも送って貰ったのか？
ナガトからエリオスも通信を入れて来る。

「大丈夫なのか？」

「普通の無人艦隊らしいので大丈夫かと……」

エリオスは少し自信なさげに答えていたが、アキオとて自信があるわけでもない。
アキオの最初の質問である『大丈夫か？』は、実は自分に発している部分もあったし、『無人艦隊なので……』というエリオスの答えも、半ば自分の発した答えでもあった。

今さらながら、『こんな所も兄弟なのか』と思ってしまうアキオであった。

「とにかく、エルシオールとミルフィー達の援護に回る」

「時間が勝負ですか」

アキオは、すぐにエルシオールに通信を入れてタクトと話をする。
後ろにいたレスターは、『大丈夫なのか？』という表情をしてい

たが、タクトはすぐにアキオの指揮する艦隊に、ムーン・エンジェル隊への支援を命令していた。

何も聞かないで信用してくれる。

やはりその辺が、タクトが普通の指揮官とは違う点でもあったのだ。

「指揮系統は、少将のレイトンが握るべきだな。副司令には准将のエリオスか。とにかく時間が勝負だな」

タクトも、エリオスと同じ事を言っていた。

とにかく早く突破して白き月へと向かわないと、ネフューリアの思う壺であったからだ。

「ならば、急ぐか……」

それからの展開は速かった。

相手があのインターフェイス型ＡＩでなかったので、アキオもエリオスも特に動揺する事なく、普通に艦隊の指揮を執れていたからだ。

すぐに艦列を整えてから、敵無人艦隊への攻撃を開始する。

足の速い駆逐艦は紋章機と僅かに残ったシムス高速戦闘機部隊に任せて、戦艦と巡洋艦の火力を順番に大型の巡洋艦に叩き付けていたのだ。

「戦艦を準備しなかった不幸だな。敵さんは」

「ザーフ級戦艦は、少し足が遅いですからね。追撃には不向きでしょう」

次第に磨り減っていく敵無人艦隊の様子を冷静に眺めながら、アキオはシナモン大佐と話を続けていた。
彼も、どうやらアキオがまだ完全な本調子ではないと思いつつも、回復基調にはある事に気が付いていた。

「（とはいえ、あの司令の母親の姿をしたインターフェイス型ＡＩか……）」

シナモン大佐はまだ課題が多いと思っていたが、その間に敵無人艦隊は比較的早期に全滅をしてしまう。
主に紋章機の活躍によってであったが、ベテランの軍人としては少し複雑な気持ちになるシナモン大佐であった。

「紋章機ってのは凄いんですね」

「パイロットのテンション次第っていう欠点もあるけどな」

紋章機の戦闘力は、主にパイロットのテンションで決まる。
だからこその、一見するとパイロットの女の子達と楽しそうに話をしているイメージしかないタクトが、あれだけの出世をしていたのだ。

それに、タクトに普通の艦隊を指揮させても、戦略的思考能力に優れた彼は十分に合格点は与えられる指揮を執れるはずであった。
逆に、シナモン大佐がムーン・エンジェル隊の司令になっても、多分戦力化は不可能であろう。

ジェネレーションギャップ等を考えると、正直勘弁して欲しいところであったが、世の中上手く出来ているものだなとも感じるシナ

モン大佐であった。

「左様ですか。では……」

「なっ！　俺は大丈夫なのに、何で戦いの後始末の指揮を執らせない！」

アキオとエリオスは、戦闘終了後二人の大佐に追い出されるようにしてエルシオールへと送り出されていた。

「（パイロットのテンション次第なのでしょう。ならばあなた達兄弟は、エルシオールで他に誰にも出来ない任務にまい進してください）」

アキオはちとせに、エリオスはヴァニラによって、引き摺られるようにしてエルシオールへと連行されていき、両大佐は気分的にはハンカチでも振るかのように二人を送り出すのであった。

「負け犬司令官達か……。今回は、普代点だったらしいわね」

エルシオールに戻ったアキオは、この一日ほど碌に食事を取っていなかったのでお腹が減っていて、エリオス、ヴァニラ、ちとせと共に食堂へと移動していた。

するとそこには。タクトとミルフィーユに食事を出して貰っているノアがいて、早速アキオを見るなり先ほどと同じような毒舌を飛ばしていた。

「えっ！　どうして飯なんて食べるんだ？」

「何か文句でもあるの？　私には、まだこれから成長する余地があるのよ」

「成長？」

アキオは、ノアの毒舌にただお返しをしたわけでもないらしい。タクトは、どうやらアキオがノアに対して何か誤解をしているのだと気が付いていた。

「レイトン、ノアはコールドスリープを繰り返しているが、肉体的には人間だぞ。当然、食事を取る必要がある」

「そうなのか。俺は、インターフェイスだと思っていたんだ」

よくよく考えてみると、白き月の管理人でもあるシャトヤーンはシヴァ陛下を生んでいるので肉体的には完全に人間でもあった。となれば、黒き月の管理人でもあるノアが人間でも、何ら不思議はなかったわけだ。

「あんた達の言うところの《エオニアの乱》で彼と話をしていた私は、そこの負け犬司令官の言う通りにインターフェイスだけどね」

ミルフィーユが持って来たサンドウィッチを頬張りながら、ノア

はタクト達の質問に答えていた。
どうやら、出されたミルフィーユの料理が相当に気に入ったようであった。

「最近は、栄養剤ばかりで味気なかったからね」

更に、ノアは話を続ける。

あのネフューリアが由来は不明であったが、自らを《ヴァル・ファスク》と呼んでいる存在である事。
外見は人間その物であったが、生身で同時に多数の機械を操る事が可能な存在である事。
六百年前にＥＤＥＮと呼ばれていた、自分達の祖先である超近代星間文明を滅亡寸前にまで追い込んだのは彼らであるという事。
白き月と黒き月は、彼らに対抗するために作られた存在である事などであった。

「こんな重要な事を忘れて、白き月は後方に篭って出てこないし、代替わりして白き月の管理者も劣化したわよね」

ノアの説明によらなくても、白き月と黒き月が作られてから六百年あまり肉体が人間である管理者が存続し続けるには、ノアのように必要な時以外はコールドスリープをするか、シャトヤーンのように代々月の聖母と呼ばれているように代替わりをするしかなかった。
その代替わりの過程で、色々と重要な情報が失われてしまったのであろう。

「名ばかりの管理人でない事を祈るけど。お替り」

「はいはい」

本当に久しぶりの食事だったらしく、ノアはその体に似合わない量を食べ続けていた。

それに、ノアは口が悪いままではあったが、ミルフィーユに心を許しているようにも見えた。

だからこそ、白き月の管理者が来るまではコアから出ないと断言していたのに出て来ていたし、負け犬司令官であるアキオにも色々と事情を話してくれているのであろう。

この点が、ミルフィーユのなかなか人には真似できない優しさと魅力なのかもしれなかった。

「先ほどから聞いておれば、失礼な事を！」

ところが、そこに水を差す人物が現れる。

それはシヴァ陛下であったのだが、実の母親であるシャトヤーンを批判されて娘としては黙っていられなくなったのであろう。

他にも、言いたい事があるようであったが。

「そなた、先のエオニアの乱で彼と行動を共にしていたのは、あくまでもインターフェイスだと言うのだな」

「ええ、そうね。私の意図を汲み取って動いてはくれるけど。その意図とは、あくまでも黒き月に自己進化を促す刺激でないと駄目なんだけどね」

「その刺激とやらが、あの沢山の犠牲だというのか！　お前のその無責任な行動で、一体何人が死んだと思う！　今も沢山死んでいる

んだぞ！」

ノアの発言に我慢できなかったのか？
シヴァ陛下は、ノアに対して批判的な言葉を立て続けにぶつけていた。

「先ほど、あのネフューリアによって受けた被害の最新情報が入った！」

ラングート星系の防衛艦隊が全滅、資源惑星アルテナが奪取。
ボルトム星系の防衛艦隊が全滅、資源衛星バクートが奪取。
第４方面軍艦隊が阻止に出るも、戦力の八割を失って敗退。

コチジャン中将の決死の遅延・阻止行動と、現状でまともに戦っても勝ち目が無い事から、艦隊戦力は出来る限り人員を排除していたし、その侵攻ルート上に存在する拠点などに住んでいる民間人の避難などを最優先してはいたが、それでも被害者は万単位で発生している事は確実であった。

全ての臣民の安全に責任を持つ立場にあるシヴァ陛下からすれば、きっと身が裂かれる想いなのであろう。

「でも、その事態への責任は、長年敵の脅威を忘れて剣を研がなかったあなた達にもある。そして最大の責任があるのは、皇王というトップにいるあなたなのよ。年齢なんて関係ないわ」

「それは……」

ノアの正論に、シヴァ陛下は言葉を詰まらせてしまう。
だが、同じ見た目は子供でも、黒き月の管理人として多くの知識

を持つノアと、本当に十歳でしかないシヴァ陛下では元々論戦では勝負にならないのが現実であった。

完全に理論で武装しているノアと、まだどうしても感情的になり易いシヴァ陛下であったからだ。

「まあまあ、ここでお互いの責任を責め合っても仕方が無いではないですか」

「タクトの言う通りだな。話によると、ネフューリアに黒き月を奪われた管理者にも責任はあるのだし」

「言ってくれるわね。負け犬司令官」

ノアの鋭い視線が、アキオへと向かう。

アキオからすれば、先の大戦以来懸命に統治者としての努力を続けるシヴァ陛下と、この得体の知れないノアという小賢しいガキとでは、どうしても前者を感情的に庇ってしまうのだ。

「だが、黒き月を融合されなければ、ここまで苦戦する事もなかった」

「それは、あんた達が黒き月を破壊するままに放置したからよ」

実際には放置してはいなかった。

クロノ・ブレイク・キャノンで破壊されなかった部分は全て回収され、兵器や艦船の生産設備などは新規に建造された軍事工廠などに移設去れて、今では多数の軍艦などを低コストで吐き出していたからだ。

もっとも、その復興財源を圧迫しない優しい軍艦類も、次々とネフューリアによって撃破されていたのだが。

「こちらは、白き月と黒き月の真実なんて知らなかったからな。ただ為政者として軍人として、民間人まで大量に殺戮する黒き月や、あのネフューリアに嫌悪感があるんだ。ただ、それを君に言っても仕方が無いのか……。ただのシステムの代弁者でしかない君に」

「清々しいまでに正解ね。改めて言われてみると、かなりムカつくけど」

「というけです、陛下。色々と食い違いや意見の対立もあろうかと思いますが、こういう時こそ耐えて平静を装うのが、優秀な為政者でもありますので」

「わかった。食事は部屋で取る事とする。付き合え、アキオ」

「了解しました。ああ、腹減った……」

少し機嫌の戻ったシヴァ陛下は、アキオを食事に相伴させるために彼を食堂から連れ出してしまう。

その結果、残されたちとせは少し理不尽さを感じていた。

一緒に食事を取れると思っていたからだ。

「ちとせはまだ良いと思う。というか、同じ負け犬司令官でも僕は無視されているみたいだし」

「あんたが目立たないからよ。あの男ほど毒舌でもないし」

「それは、褒められているのかな？」

エリオスは、ノアの意見に何とも判断がし難いと言った表情をしていた。

「陛下からの、『食事を共にせよ』って命令に逆らうのはねぇ……」

タクトは、一応はちとせにフォローを入れておく事にする。

「負け犬司令官にしては、頭が回る男なのね」

「あの戦いを見たのが最初だからレイトンへの評価が低いのはわかるけど、あいつは本当に優秀な男だからな」

「そうね。最初のイメージで断定し過ぎたのかもしれないわ」

「でも、ノアは彼と仲良く出来るかもね」

「あの男と？」

タクトから見たアキオは、レスターほどではないが理論派が基本な男で、実はノアと話が合う可能性があった。

それと、アキオは初対面の人間と酷く対立する事が多い。

シヴァ陛下もそうであったし、ランファもそうであった。

もしかすると、そういう相手の方が深く仲良くなれる性分なのかもしれないとタクトは思っていたのだ。

「何にしても、事情がわかったところで、まずは白き月の管理人と会わないと話にならないわ」

「到着は三日後だね」

「なら、私は英気を養わせて貰うわ。あのコアの中は狭いから嫌いなのよ。部屋を準備して」

「わかったよ」

タクトは、ノアの滞在する部屋の準備をミルフィーユに頼んでいた。

一方、退出したアキオとシヴァ陛下は、彼女の個室で一緒に食事を取りながら話をしていた。

「どうにも、あの女は好かない」

「向こうには、向こうの考え方と立場がありますからね。それに……」

昔の滅んだＥＤＥＮに住まう人々を救うための防衛システムであった黒き月が、トランスバール皇国の内乱に利用され、今度は倒すべき敵であるヴァル・ファスクに乗っ取られて利用されている。

ノア本人としては、色々と腹立たしい部分もあったのであろう。

「彼女の怒りは、不甲斐ない自分にも向かっているんですよ」

「そなた、先ほど散々に扱き下ろしていたではないか」

「あそこで変に慰めても、逆に無意味ですから。それと、陛下のお怒りは最もだとは思うのですが、ここは抑えていただきたく」

「なぜそう思うのだ？」

「彼女は、シャトヤーン様と対を成す存在。上手く煽てて利用するのも為政者の手段です。少なくとも対立だけは避けてください」

そのために、アキオはわざとノアの怒りに触れそうな発言を繰り返している。

自分の目を向けさせて、憎ませようと思っていたのだ。

アキオは、自分が憎まれ役になれば良いのだと考えていた。

「臣下が嫌われても、陛下が仲良くすれば宜しいのです。それが例え、表面上だけでも」

「そなたは、相変わらずよなぁ」

シヴァ陛下は、アキオの相変わらずの底意地と口の悪さだと思ってはいたが、それがアキオの本性だとは思っていなかった。

むしろ根本では、母親の偽者に動揺して艦隊の指揮が執れなくなってしまうほど、肉親への情が深いという部分も内包している男であったからだ。

そして何よりも、アキオは自分の忠実な臣下であるとも言える。

自分を皇王に相応しい人物だと考え、その考えを曲げる事なく自分を支えてくれるのだ。

久しぶりに会ったアキオであったが、やはりこの男は一番の自分の忠臣であると考えるシヴァ陛下であった。

口の悪さは、相変わらずではあったが。

「この三日、余は度々入る被害報告に心を痛め、しかも何も出来ぬこの身を不甲斐ないと思う」

「受け入れるしかございません。そして、未来にそれを覆す動きをすれば良いのです」

「ならば、この三日間は余がアキオを独占するとするか。皇王という立場も、色々とストレスが溜まるからな。久々の家庭教師と生徒の時間だな」

「これは、なかなかに独裁者になられましたな」

「褒め言葉として受け取っておこう」

こうしてシヴァ陛下は白き月に到着するまでの間、アキオをずっと傍に置き続けていた。

一緒に被害報告を聞き、それに総評を述べて自分なりにルフトなどに指示を通信で送り、食事やオヤツを共にして、アキオから色々な話を聞いたりもしていた。

「あの男は、奸臣なの？」

「まさか、陛下が一番信用している家臣だろうね（助かった。シヴァ陛下からの信用度から言えば、俺なんて全然比べ物にならないし）」

タクトは自分のシヴァ陛下からの評価を、信用できる軍司令官で家臣で年上の友人くらいだと思っている。

ところが、アキオはそれに加えて兄のような存在でもあり、友人以上恋人未満のような感情すらシヴァ陛下は抱いていた。

もしかすると、一人の女としてアキオに恋心を抱いている可能性もあったのだ。

とても敵わないと思うタクトであったが、ここ数日立て続けに入って来る被害報告を考えると、彼女の怒りを反らす事が出来るアキオはとても重宝されていたのだ。

『タクトさん、アキオさんはいつ陛下の御付きの任務から開放されるのですか？』

『そうですわ。いくら陛下でもあまりに独占が過ぎると思うのです』

『俺にそれを言われても……』

ただ、その分ちとせとミントに不満が出ていたので、そのフォローにタクトは奔走する羽目になっていたのだが。

「ふーーーん。きっと、見た目は良いから女性からの好意を得やすいのね」

エルシオールの通路を歩くシヴァ陛下に、半歩下がって付いて行きながら会話を続けるアキオを見ながら、ノアはその外見からは想像もつかない大人の意見を述べるのであった。

そして翌日。

エルシオールは、予定通りに白き月へと到着する事となる。

「敵先遣艦隊と思われる艦隊は、完全に反応を消失」

「今回も、比較的楽に勝てたか。敵艦の残骸に調査団を送るのを忘れるなよ。損傷状態が少ない敵艦は、鹵獲して白き月に曳航しておくように」

エルシオールとその護衛艦隊が、白き月に到着した翌日。

アキオは自身の艦隊を率いて、ネフューリアが新たに製造したと思われる無人の先遣艦隊と交戦を行っていた。

戦闘自体は、敵新型艦はかなり性能が上がっていて苦戦はしたが、それでも数の優位とムーン・エンジェル隊の活躍によってほとんど被害も出さないで壊滅させる事に成功している。

アキオは、敵新型艦の性能判定を行うために残骸などの調査と回収を命じてから、スオウを白き月にある大型軍艦停泊用の港へと移動させていた。

「問題は、本命の到着時期と、あと何回嫌がらせがあるかだな」

「ですね」

准将の階級章が新しいシナモン元大佐に、アキオは話しかけていた。

エオニアの乱における貴族出身者士官の大量戦死に、今回のネフューリア絡みにおける将官の大量戦死。

特に資源衛星レミナスにおける戦いでは、中将三名、少将五名、准将七名、大佐二十一名が新たに冥府の門を潜りっている。

そして、そのせいでますます将校の不足に悩むようになったトランスバール皇国軍では、再びベテラン下士官の士官昇進や、臨時昇進の乱発などで平均年齢の若い将軍が多数生まれていた。

それと若くは無いのだが、シナモン大佐のように大佐止まりであったベテラン軍人を多数准将にして、不足する将官の定員を満たしている状態であった。

ところが、その昇進した将官もその数をすぐに減らす事となっていた。

ルフト宰相、ウォッカ大将、ジンロ大将、ウォルコット大将などは、まともに《オ・ガウブ》を迎撃する事を諦めて、なるべく無人にした艦隊での意地の悪い遅延作戦を行っている。

《オ・ガウブ》やネフューリアが新たに量産した無人艦隊は、トランスバール皇国軍側が艦隊を出すと、なぜか戦力でそれらを全滅させるまで戦ってしまう。

しかも、最初は慎重に使用していたネガティブ・クロノ・フィールドも使用せずに、火力の翻弄でこちらの艦隊を力技でねじ伏せている。

報告をした軍人は、『まるで象がアリを踏み潰すかのようだ』と言っていたらしいが、つまりは力を見せ付けてこちらを降伏させようとしているのであろう。

だからこその容赦のない攻撃なのだが、そこを突いて挑発の後に

艦隊を分散させたりして時間を食うようにしていたのだ。

それに、盛大にビームやミサイルを撃てば補給の頻度も増え、その分それを得るために補給基地や資源衛星やエネルギープラントの占領や、必要な物資の生産で時間を食う事となる。

今は時間こそがこちらに残された唯一の救いであり、そのためにトランスバール皇国軍は多数の軍艦と少数の軍人の命を使って、ネフューリアに下等生物扱いされながらも、我慢を重ねている状態であった。

「司令、ゾンハルト星系でコチジャン中将が戦死なされました」

突如入った通信文を、シナモン准将は珍しく狼狽しながら持参していた。

覚悟はしていたのだが、お世話になった上官に戦死に色々と思うところがあるのであろう。

「そうか……」

ただネフューリアの進撃速度を落すためだけに、命を張った絶望的な遅延戦闘を行ったベテラン軍人の生き様。

アキオは、ただ頭が下がる想いであった。

「コチジャン中将と、その司令要員に対して敬礼！」

アキオが、出撃していた全兵員に対して敬礼を命令していたその頃、そのコチジャン中将を戦死させたネフューリアは、ゾンバルト星系にあるエネルギープラントの近くで《オ・ガウブ》以下の艦隊を一旦停止させて、補給と修理を行っている状態であった。

「ふん、下等生物に相応しい愚かな最後ね」

何度も姿を見せながら一回としてまともに戦おうとはしないで、ただ指揮下の艦隊で嫌がらせを続けて来た忌々しい艦隊とその司令官に、ネフューリアは吐き捨てるように文句を言っていた。

《オ・ガウブ》と無人艦隊に損傷はほとんど無いのだが、どうしても無駄に動くせいで、整備と補給に時間がかかってしまうからだ。

とはいえ、彼女におざなりに敵を撃破しつつ前進という選択肢は存在しない。

圧倒的な力でねじ伏せてから、全滅させて恐怖を与える。

これこそが、トランスバール皇国占領への最終的な近道だと信じていたのだから。

「予定よりも二日遅れね。泥臭く粘ったわりには、ささやかな成果ではないの」

コチジャン中将の成果を鼻で笑うネフューリアであったが、彼女がバカにした二日間は、そのまま彼女自身に跳ね返って来る事となるのであった。

「やはり、代替わりをして重要な情報が欠落しているわね。それに、月の聖母ですって？　煽てられて惚けでもしたの？」

白き月に到着したタクト達は、ノアを連れて急いでシャトヤーン

との面会を行っていたのだが、ノアは相変わらずの口調で初対面のシャトヤーンに文句を言っていた。

「とは言っても、今のこの白き月の姿は、トランスバール皇国には必要なもの」

「内部も、変に宗教的で無駄なスペースが多いわね。しかも、つい最近まで兵器の生産設備を全部封印しているし。そんなんだから、また大ピンチに陥るのよ」

「ロストテクノロジーは、何も兵器ばかりではありませんから」

文句ばかり言っているノアと、それを優しく受け流すシャトヤーン。

なるほど、二人は対を成す存在なのだなと納得するタクト達であった。

「……」

「陛下、反論はいたしませんので？」

「何か言う気も失せた」

一通り論戦を終えたノアとシャトヤーンは、まずは情報交換に入るのであったが、二つの月の歴史などはタクト達も聞いていたのでこれは省略する事とする。

次に、ノアが話をしたのは二つの月が互いに進化を続けながら、まるでシミュレーションのように戦いを続け、最後には勝った方が負けた方を吸収して最終的には別の存在へと進化するのだと言う話になっていた。

『番人たる双子、楽園を囲み輪舞を踊る。漆黒は確か、されど有限。真白（ましろ）は不確か、されど無限。双子は絶つ者。時を越えて災厄を断つ者。双子は待つ者。時の果ての結びを待つ者』

これが双方の月に残された伝承の一説であったが、という事は後半の双子は一つとなった存在を指しているのかもしれない。

災厄を断ったり、時の果ての結びを待つためにだ。

「でも、二つの月って何か決定的な差があるのですか？」

「何を言うか、シードル。白と黒で相反する存在ではないか」

エリオスの質問に、シヴァ陛下は一緒にしてくれるなといった態度を取っていた。

「ですが、陛下。強力な防御フィールド、ロストテクノロジーを多用した各種兵器の生産設備、我々が勝手に崇拝の対象にしているだけで、超科学軍事要塞としての性格はソックリです」

「そう言われるとそうだが……」

「負け犬司令官その2の言う事にも一理あるわね。でも、白き月は、人間という不確定要素による進化や突然変異を取り入れ、その変動の振れ幅を利用して最大値を引き出すことをコンセプトとしていて。黒き月は、兵器としての不変性を重視し、人間の感情のような不確定要素を徹底的に排除して、変動の振れ幅を最低限に抑え常に安定した出力を目指ことをコンセプトとしているの」

「その代表格が、白き月は高性能ながらもパイロットのテンションという軍事兵器しては不安定な要素もある紋章機で、黒き月は安定した性能と数で敵を押し潰す無人艦隊なのか」

「そういう事よ。その2も思ったほどバカではないのね」

「その2って……」

ノアにその2扱いされて、エリオスは少し落ち込んでいた。

それと、実はヴァニラも少し機嫌を悪くしていたのだが、彼女はなかなか感情を表に出さないので、それに気が付いたのはエリオスだけであった。

一番長い時間を接していて、何回も写生等につき合わせていたので、彼女の細かい感情の変化に気が付くようになっていたのだ。

ただ、タクトから言わせると、『そんな特技を覚えて、ますますモテそうで羨ましいな。弟の方も』などと言っていたのだが。

「あんた、アキオの弟なんでしょう？」

「まあ、そうなんですけど」

「だったら、その2で正解じゃない」

それよりも、なぜかノアに勝手に名前で呼ばれている事実に驚いてしまうアキオであった。

しかもそっと横を見ると、明らかに『アキオ』とノアが言った瞬間だけ、ミントとちとせの表情が僅かに歪むのを確認できてしまっていた。

ちなみに、ランファの方は全く表情が読めなかったのだが。

「ノアとやら！　誰が勝手に私の家臣の名前を呼んで良いと言ったのだ！」

ちとせとミントは、ノアがシャトヤーンと同格の立場である事を理解して不愉快なのを黙っていたのだが、シヴァ陛下は勝手にアキオを名前で呼んだノアが許せなかったらしい。

エオニアの乱や今回の戦乱における黒き月の行った行為を許せないとは思いつつも、責任のある為政者の立場として、ノアがへそを曲げて協力しないような事がないようにと今までは我慢していたのだが、どうやらこの件では絶対に引けなかったようであった。

「はあ？　名前なんて、呼んでも別に減るわけがないじゃない」

「減る！　コレは、余の家臣なのだ！　ムーン・エンジェル隊の皆は仕方がないとして、お前はアキオを負け犬司令官として軽蔑していたではないか！」

「最初はね。でも、ここに到着するまで暇だったから、色々と調べたのよ。案外優秀で使える軍人だったのね。これから色々と大変だから、必要だったら使ってあげるわ」

「誰がお前に使用許可など出すか！」

「酷く横暴な女皇陛下ね」

二人は暫く言い争いを続けていたが、その内容は最初は少しは王

としての資格に関してや、黒い月の管理者としての責任云々と言った内容も含まれていたが、次第にに悪口の材料がなくなったのか？　少しだけ大人の階段を登り始めた、見た目通りの少女同士の口喧嘩に発展していた。

「アキオに女として興味があるのなら、もう少し可愛い格好でもしたら？」

「うるさい！　この格好こそが、皇王として相応しいものなんだ！」

「そうかしら？　昔でも女王とかは、その美しさも支持率アップに利用していたのよ。これだから、世間知らずのお子ちゃまは」

「お前も、大して見た目は変わらないじゃないか！」

「そんな事はないわよ。どっちが将来成長したら女として期待が持てるのか？　アキオに聞けば一目瞭然ね。それで、どっちかしら？」

「俺にそんな話を振るな……」

「アキオ、どちらなのだ？　トランスバール皇国皇王シヴァ・トランスバールからの命令だ！　答えろ！」

「こうなるんだから……」

その後も下らない言い争いは続くが、不気味なほどに笑みを絶やさないシャトヤーンと、渋い顔をするルフトを見てさすがにこれ以上は拙いと思ったのか？

双方が引いて、話を本題に戻していた。

「話を元に戻すが、あのネフューリアとやらの超巨大戦艦に対抗する手段はないのか？」

「無い事もないわ」

「あるのだな？」

「ええ、まずは簡単に説明するけど。あの黒き月が持つ、クロノ・ストリング・エンジンを止めてしまった攻撃は知っているわね？」

勿論、知らない人などいるはずもなかった。

エオニアの乱の時の衛星都市ファーゴと、今回の資源衛生レミナス。

二回も、エルシオールは絶体絶命の危機に陥れられていたからだ。

「ネガティブ・クロノ・フィールドは、ネガティブ・クロノ・ウェーブという特殊な時空波を利用した兵器なの。これを照射されると、せっかくクロノ・ストリング・エンジンで作られたエネルギーがクロノ・スペースという別次元に飛ばされてしまうわ」

「つまり、この空間ではエネルギーが発生していない事になっている？」

「そういう事よ。でも、トランスバール皇国軍では一応は補機を準備して対策はしたのね」

だが、補機である核融合炉は既に陳腐化した出力面ではお話にならない装置であった。

更に、この装置は推進剤をバカ喰いするという欠点も存在している。

大型艦には積めるが、小型艦には搭載スペースが存在しないのが現状であった。

また、稼働時間が極端に低いという欠点も有している。

あくまでも、予備で臨時のシステムという事になっていた。

「ＥＤＥＮ時代だったら、核融合炉なんて危険なだけの石器時代の産物と言われるわね。どのみち、あの《オ・ガウブ》には強力なネガティブ・クロノ・フィールド発生装置が搭載されているの。これをどうにかしないと、少しくらい動けてもこちらの攻撃は一切通用しない」

「となる、それを撃ち破る何かが必要というわけだ」

「そこで、理論上はあのフィールドを撃ち破れる方法があるのよ」

ノアの言う方法とは、《オ・ガウブ》を包むネガティブ・クロノ・ウェーブに全く反対の波長の時空波をぶつけて相殺するという案で、彼女はそれ以外に方法は存在しないと断言していた。

ところが、その理論には一つの欠点が存在していた。

その時空波を発生する装置を動かすには、莫大なエネルギーが必要であったからだ。

「弱いエネルギーだと、あの膨大なエネルギー量を誇る《オ・ガウブ》に勝てないから」

「問題は、エネルギー源か……」

一応、対抗手段が理論上は存在する事を知ったタクト達であった

がそこにレスターが通信を入れて来る。

「急にどうしたんだ？　レスター」

「非常に面白くない事件が発生している。あのネフューリアが星間ネットワークを乗っ取ったようだ。胸糞の悪い演説をしているぞ」

「エオニア、レゾム、ネフューリアと。演説が好きな連中だな」

「もしかして、他国侵略マニュアルとか、内戦勝利マニュアルに演説は必ずしなさいって書いてあるのかもな」

タクトの意見に、アキオはいつもの毒舌で対応する。

「ルフト、放送を繋いでくれ」

「御意」

シヴァ陛下の命令でルフトが放送を繋ぐと、そこには見た目は麗しい美女ネフューリアが、トランスバール皇国臣民に向かって落ち着いた声で演説を行っていた。

だがその内容は、声の威勢だけは良かったレゾム以上に不愉快な内容となっていた。

「これを聞いている力弱き人間のみなさん、私は別にあなた達を滅ぼそうというわけではないのです。使える物は使う。人間も、道具を使って生活しているでしょう？　それは、私達にとっても同じ事。ただ使う物が機械か有機体か。その程度の違いでしかありません」

「なるほど、こいつは碌でもない内容だな」

「ある意味、突き抜けていて清々しいほどだな」

いくら征服を試みる圧倒的強者でも、もう少し言葉を選べば良いにと、冷静な状態にあるアキオは思ってしまうのだ。

いきなり被征服民を道具扱いして、不愉快な思いにさせてしまう。

ハッキリと言えば、エオニアなどがマシに見える最低な連中ではあるが、実際に彼女の持つ戦力は圧倒的であった。

よほど自信があるのだろうと考える、タクトとアキオであった。

それに、ヴァル・ファスクは人間とは違う種族らしい。

我々人間の思考論理など、実はあの女には通用しないのかもしれなかった。

「あなた達のような弱小種族は、よりすぐれた存在によって使役される事で、初めて意味を与えられるのです」

「俺達は家畜かい」

「本当、良く言うよ」

ここまで徹底していると、昔にあった人種差別や宗教差別など可愛くなってくるほどだとアキオは思っていて、フォルテもそれに賛同している。

「我々への帰属を望まぬ者、意義を申し立てたい者、逆らいたい者はご自由に。ただし、あなた方のオモチャでは私の《オ・ガウブ》は止められませんので。せめて無駄な命を散らさないように、私か

ら最後の忠告です。私も、使える道具が減るのは我慢なりませんので」

そこまで言うと、彼女はよほど楽しいのか？
笑いながら、通信を切ってしまう。

「全く相容れない存在だな。悪いが殺さないと駄目だ」

「えらく物騒な結論じゃが、それが出来ないから困っているのじゃが」

アキオの見立てでは、ここまで人間を見下すヴァル・ファスクとの講和は難しいであろうと考えていた。
戦争である以上、どちらかが全滅するまで戦うか、どこかで講和なり停戦をしないといけないのだが、それをあのネフューリアに語りかけるだけ無駄であろう。

向こうは、こちらを完全に支配しなければ気が済まないのだから。
となれば、あの女を《オ・ガウブ》ごと討たなければいけないのだが、それは非常に難しかったし、あの女以外にもヴァル・ファスクは存在しているはずだ。

考えるだけで頭が痛くなって来るアキオであったが、それでも今は目の前のネフューリアに集中するしかなかった。

「私の稚拙な指揮のせいで、多くの臣民に犠牲が出ているな」

「それを言うと、私にも責任があります」

「いや、余が皇王である以上は、一番の責任は余にある」

ネフューリアの演説を見て更に落ち込んでしまったシヴァ陛下は、ルフト宰相とどちらに責任があるのかという下らない言い争いを始めてしまう。

だが、それを止めたのは意外にもノアであった。

「そんな、終わった事を嘆いても仕方がないわ。時間の無駄よ」

「何だと！　今もこうして実際に！」

「知っているわ。私の黒き月の生産能力と、ネガティブ・クロノ。ウェーブを使って多くの人を殺している。私の本来守るべき人間をね！　それも、倒すべきヴァル・ファスクがよ！」

シヴァ陛下は、前にアキオが言っていた通りに、ノアもこの沢山の人が殺されている現実を誰よりも気に病んで後悔しているのを知って驚いてしまう。

「ノア、お前……」

「ノア、あまり自分を責めてはいけません」

「そうですね。責任云々なんて言っていたら、みんな責任はあるわけだし。それを探して落ち込んでいても仕方がないですよ」

「そうです。マイヤーズ司令の言う通りですね」

タクトの言い方はかなり乱暴な物言いであったが、それは事実でもあり、シャトヤーンも彼の意見に賛同していた。

「レイトンもそう思うだろう？」

「俺は貧乏性だからな。ここで実りのない話し合いをしても仕方が無いと思うんだ。どうせ駄目なら、足掻いてから駄目になりたいと思う」

座して滅ぶなら、その前に足掻いて相手に蹴りの一発でも入れてやる。

士官学校卒業以来、何度か死の危険に曝されたアキオらしい考え方であった。

「わかったわ。責任がどうこう言っても何も進まない。ただの時間の無駄ね」

「そうだな。ここは、建設的に次の行動を考えるべきか」

「そういうわけだから協力させていただくわ。シヴァ・トランスバール皇王陛下」

「協力に感謝する。黒き月の管理者ノア」

つい先ほどまで喧嘩をしていた二人であったが、これがタクトのカリスマの力なのか？

すぐに同年代の少女同士、仲良く協力する事を約束していた。

「いや、俺のおかげじゃないさ（レイトンも本当に罪な男だよな……）」

要するに、これが恋愛感情なのかは不明であったし、ノアが男性に興味を持つのかは不明であったが、少なくともアキオ・レイトン

という人物に深い興味を持ったという事実には気が付くタクトであった。

そしてこの瞬間より、シヴァ陛下はこの白き月を絶対防衛ラインと認定してここに総司令部を設置して自分も常駐する事とし、軍から技術者などの応援も呼んで、ノアと白き月の技術者達にネガティブ・クロノ・ウェーブを打ち消す装置の開発を命令していた。

他にも、前の戦いでは間に合わなかった紋章機のリミッターを解除する事をシャトヤーンが決め、ルフト宰相はエルシオールを護衛していた二個分艦隊を第十三任務艦隊と新たに命名して、アキオをその司令官に任命していた。

他にも、副司令官エリオス・シードル准将、半分の第一分艦隊司令にナガトの艦長から昇進したターメリック准将を、第二分艦隊司令にはスオウ艦長であった同じく昇進したシナモン准将が横滑りしていた。

更に、白き月の警備に当たっていた艦隊なども合流して、結果的にアキオは本来であれば中将か大将クラスの指揮官が指揮する量の艦隊を任されている。

「ところで、ウォルコット大将はどこにいるんですか？」

アキオは、まだ姿を見せない自分の元上官の行方をルフトに尋ねる。

「強奪船団事件と無人艦隊の襲撃事件。それに、ネフューリアの侵攻でこの近辺に宙域にはおらんよ。ジンロ大将も同じじゃな」

「ウォッカ大将は？」

「書類の山に埋もれている最中じゃの」

それよりも問題だったのは、資源惑星レミナスでの戦闘前に発生した無人艦隊の襲撃事件の応援で、実は首都星トランスバール周辺宙域の防衛戦力が手薄であったという事になった。

エオニアの乱の前であれば、近衛艦隊という最後の切り札があったのだが、この艦隊はエオニアによってほぼ全滅した後に、シヴァ陛下の命令で解体されて第1方面軍に編入されてしまっていた。

なので、実はこの近辺で一番戦力を持っているがアキオという皮肉な現実となっていたのだ。

「そんなわけでな。アキオを戦時昇進させる事にしたのじゃ。前に少将に昇進したばかりだからの。前例が無いという事で、本昇進は見送りとなったわけじゃが……」

「もう何でも良いですよ」

戦時昇進で中将に任じられたアキオは、戦力の再編成と新しく加えた艦隊の連携訓練。

更には、数回発生した敵小規模艦隊の来襲への対応と、かなり忙しい日々を送る事となるのであった。

「アキオ、無事に敵を撃退して戻ったか。さすがだな」

「相変わらずの、小規模な艦隊でしたから」

アキオがこれで三度目の敵艦隊を迎撃して第十三任務艦隊の司令部が置かれた白き月へと戻ると、そこにはシヴァ陛下が待ち受けていた。

「すまんな。本当は、中将にしてやりたかったんだが」

「この年齢で将官なんて、普通は無いですからね。構いませんよ」

それに、任務艦隊を率いる中将とはなかなかに忙しい存在であった。

実戦指揮は勿論、訓練の指揮に、大量の書類の処理に、様々な雑務と。

ここ数日は、ただ部屋に戻って寝るだけの日々を送っていたのだ。

それでも、敵艦隊の来襲を探る偵察システムが充実しているせいで、常に軍艦に常駐しなくても良かったのが救いであった。

大型軍艦専用の港の近くにある狭い部屋であったが、ここをエリオスと交代で使える余裕は存在していたのだから。

「実は、援軍が増えたのだ」

「それって、上官ですか？」

アキオとしては、こんな首都星近くの艦隊を自分が率い続けて周囲の嫉妬を受けるのは嫌だったので、早く別の大将クラスの指揮官に司令官職を押し付けたい心境であった。

「空母四隻、軽空母六隻からなる機動艦隊だな。第七機動艦隊で、

司令官はクレッシェンド・マイヤーズ少将だ」

「タクトの兄貴でしたか」

この艦隊の合流が早かったのは、まだ編成途中で応援に借り出されなかったからという理由が存在していた。

「大丈夫かな？」

「戦時昇進とはいえ、上官の命令には従うぞ」

とそこに、噂をしていたクレッシェンドが現れてアキオに声をかけていた。

「シヴァ陛下も、ご壮健でなにより」

「タクトには会って来たのか？」

「いつの間にか階級で二つも抜かれた弟ですが、可愛い弟ですので」

ところが、とてもその言葉を額面通りには受け取れないアキオであった。

多分、タクトは色々と言われて、今頃はゲンナリとしているのであろうからだ。

決してタクトが嫌われているという事もなく、ただ構われているだけであるのは事実だったのだが。

「ところで、レイトンとシードル准将を呼び出して欲しいとタクトに頼まれてな。何でも、あの巨大戦艦に対抗する新兵器が完成したらしいのだ」

「遂に完成ですか。どんな新兵器なんだろう？」

「プロの軍人としては、安易に新兵器には頼りたくないのが事実なんだがな。早く艦隊の練度を少しでも上げたいよ」

ところがそれから数時間後、ある事情により呆気なく艦隊司令を解任されしまうアキオであった。

「これが、新兵器？」

「そうよ。あまりに急造品だから、色々とゴチャゴチャ付いて美しくないけど」

タクトの命令で、新兵器製造用の特別工廠に到着したアキオとエリオスは、そこで巨大なクロノ・ブレイク・キャノンの砲身と、その上にちょこんと乗っている戦闘機らしき機体を視界に入れていた。

この場には、ノア、シヴァ陛下、シャトヤーン、ルフト、タクト、それにムーン・エンジェル隊の面々と、数日ぶりに全員が揃ったような気がするアキオであった。

「これって、つまり？」

「クロノ・ブレイク・キャノンの砲身に、ここでシャープシューターと一緒に発掘された七番目の紋章機と、ネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーを搭載した物だ」

確かに七番目の紋章機らしき機体は、クロノ・ブレイク・キャノンの砲身の上に乗っかっているようにしか見えないタクト達であった。

「あの、これだと機動力に問題がありませんか？」

「そうね。でも、時間が無いからこれで行くしかないのよ」

エリオスの懸念に、ノアは仕方が無いと答えるしか術を持たないでいた。

「この決戦兵器は、エルシオールに搭載して紋章機の援護を受けながら《オ・ガウブ》まで接近。そこで切り離して攻撃開始という使い方をするしかないわ」

何しろ機動力に難のある機体なので、なるべく自走距離を減らすしか落とされる確率を少なくする手段が存在しなかったのだ。

「それで、これって有人ですよね？」

「決まっているじゃない。ネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーも、クロノ・ブレイク・キャノンも、紋章機のＨ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムのエネルギーを利用するのが前提なんだから」

となれば、パイロットは当然ムーン・エンジェル隊の中から選ばれる事となる。

それが誰なのか、誰に決まるのかはまだ不明であったのだが。

「正直に言うと、六人の中なら誰でも良いと思うわ。成功率はほと

んど変わらないと思う」

「かえって決め難いじゃないの！」

無責任な説明をするノアにランファが軽く文句を言ってしまうのだが、それによって彼女は大きく運命を変化させる事となってしまう。

「じゃあ、あなたに決定ね」

「えーーーっ！　そんな適当に決めて良いの！」

いきなりノアからパイロットに指名されてしまったランファは、誰が見てもわかるほどに狼狽していた。

「だから、誰でも同じなのよ。ただ……」

「ただ、何よ？」

「この機体は複座なのよ。操縦はパイロットがするとして、パートナーとしてパイロットのテンションを上げて、Ｈ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムの出力を最高潮に出来る人間。それが、望ましいの」

「そんな急に言われても……」

急にパートナーを決めろと言われて困ってしまうランファであったが、ノアは全く迷う事なくある人物を指名していた。

「アキオが適任じゃない？」

「どうして、アキオさんなんですか！」

「そうですわ、アキオさんはパイロットではありませんし！」

今度は、ちとせとミントがノアに反対意見を述べ始める。

もしここで、二人がパートナーになって作戦が成功したら？

それこそ、ランファの完全勝利となってしまいそうな気がしたからであった。

「アキオさんには、艦隊の指揮もありますし」

「アキオは優秀な艦隊司令官だけど、代役が全くいないわけでもないし。例えば、さっきのタクト2号でも構わないじゃない」

ノアの言うタクト2号とは、先ほど挨拶に来たクレッシェンドの事であった。

確かに彼ならば、アキオの代わりに艦隊を指揮しても何の不安もないはずだ。

「そこの、負け犬2号でもいいし」

「まだその呼び方なんだ……」

ノアに変なあだ名を付けられてガックリと肩を落すエリオスであったが、それをヴァニラが慰めているのを全員が見ないフリをしてあげていた。

「でもさ、そなならタクトとミルフィーとか、ヴァニラとエリオスとかでも構わないのでは？」

「それだと戦力的に駄目じゃないかな？」

エリオスの言う通りで、まずムーン・エンジェル隊の司令官であるタクトが決戦兵器に乗るのは拙かったし、ミルフィーユのラッキースターが紋章機中一番総合性能に優れている。

なるべく戦場に出したかったのだ。

それに、ヴァニラもナノマシンによる修理が行えるハーベスターという特殊な紋章機に乗っている。

これも、何があるかわからない戦場では必ず出したい機体であった。

「カンフーファイターには、装甲が薄いという欠点があったからね」

戦場では多くの敵味方が入り乱れて戦うはずなので、いくら機動力に優れていてもという理由も存在している事に、フォルテは気が付いていた。

不意の流れ弾で致命傷という可能性も、絶対に無い事もなかったからだ。

「あの、私のシャープシューターは……」

シャープシューターは遠距離砲戦専用の機体であり、エルシオールにくっ付いて、脅威となりそうな敵を順番に排除するという戦法で役に立つので使わないわけにもいかず。

「私のトリック・マスターは？」

それこそ、シャープシューターでも対応できないような不意な死角からの敵に対応するのに、装備しているフライヤー以上に適任な

兵器も存在しなかった。
なので、ミントの志願も却下されていた。

こう見えて、やはりタクトは色々とちゃんと考えていたのだとその場にいる全員が思っていた。

「というわけで、ランファとアキオに決定だな」

「「……」」

約二名には少し不満があったようであったが、シヴァ陛下の裁定によって決戦兵器のパイロットはランファとアキオに決まっていた。

「仕方がないですね。ですが、指名されたからにはこのランファ・フランボワーズ。一世一代の活躍をして見せますよ」

「こうなると、ランファが一番適任だったのかもね」

それから全員で夕食を一緒に取ったりしている間も、ランファはいつもよりもかなりハイテンションな状態で、皆に決戦兵器のパイロットに任命された件での抱負などを元気に語っていた。

「私に任せなさい！」

「ランファなら、安心して任せられるわね」

「色々な意味で図太いですからね」

「ミント、少し棘を感じるんだけど……」

「あら、気のせいですわ。気のせい」

「本当かしら？」

ところが、そのランファの様子に違和感を感じている人間がいた。

それは、あの母の偽者騒動以来、周囲からは完全に回復したと思われているアキオ・レイトンその人であった。

「……」

夕食後、ムーン・エンジェル隊はそれぞれに休憩や手伝いなどがあったので解散となり、アキオは哀れにも、クレッシェンドから『後は任せてくれ』と言われて、簡単な引継ぎで再び白き月の住民となっていた。

特に何もする事が無いので、アキオはあの妙にハイテンションになっているランファが気になって尋ねていたのだ。

なぜ気が付いたのかと言えば、これはもう勘としか言いようがなかった。

どこか不自然で、無理に元気な姿と、特別な任務に選ばれた嬉しさを装っているように見えていたからだ。

「とはいえなぁ……」

ここでランファの部屋を尋ねるオフィシャルな理由も存在しないアキオは、ランファの部屋のドアの前で無駄に葛藤していた。

そもそも、『ここで俺が無理に気にしないでも……』とか、『本当は、何でもないかもしれないし……』とか。

なぜかランファの事になると、アオキは色々と躊躇ってしまう事が多かったのだ。

気恥ずかしさを、どうしても感じてしまうのだ。

「挨拶だけでもいいんだ。うん、挨拶だ」

一緒の機体に乗る予定なので、『親しき仲にも礼儀あり』という理由をデッチ上げたアキオは、意を決してドアをノックする。

「……。どうぞ……」

妙に暗い返事だなとは思いつつ、アキオはランファの部屋に入る事にする。

思えば、普段のランファがいきなり相手も確認しないで人を自分の部屋に入れるはずもないので、やはりランファはどこか様子がおかしいらしい。

もっとも、完全に緊張しているアキオは、全くそれに気が付いていなかったのだが。

「俺だ、レイトンだ、入るぞ。……って、明かりくらい付けろよ」

「悪かったわね……。占いをしていたのよ」

どうやら部屋が暗いのは、ランファが趣味の占いをしていたせいであった。

「またそんな非科学的な事を……」

「五月蝿いわね。結構当たるのよ。これ」

ランファは、水晶に手を翳しながら何かを占っているようであった。

「何を占っているんだ？」

「勿論、作戦が成功するかどうかよ」

「それで、結果は？」

何気に聞いてみたアキオであったが、そこでランファの声が止まってしまう。

良く見ると、彼女は少し困っているかのような表情をしているようにも見えるアキオであった。

「何だよ、良くない結果でも出たのか？　でもな、占いは当たるも八卦で、当たらないのも八卦でな……」

そんな事を言いながらランファに声をかけるアキオであったが、次の瞬間には彼女はまるで飛び出すようにして、突然アキオに抱き付いて来る。

あのランファのまさかの行動に、アキオはただ驚くばかりであった。

「おいっ！」

「ねえ、本当にこんな作戦、上手く行くの？」

それは、とても弱々しい声であった。
普段の自信に満ち溢れていて、負けず嫌いなランファが出したとは思えないほどの、蚊が鳴くような声でアキオに尋ねていたのだ。

「笑ってくれてもいいわ。不安なのよ……。このまま逃げ出したいくらいに……」

「ランファ……」

アキオは、今になってランファも普通の女の子である事を再確認していた。
こんな絶望的な状況下で、あんな急ごしらえな色物の決戦兵器に自分達が乗って敵を打ち倒す。
しかも、その作戦の成否にトランスバール皇国の存亡がかかっているのだ。
これで、不安にならない方がおかしかった。
何しろランファは、まだ十九歳の少女でしかなかったのだから。

「別に笑わないさ。俺だって実戦の時にはいつも不安を感じているし、怖くて逃げ出したいと感じる事も多い。ただ、俺は男だからな。見栄張って隠しているんだよ。結構苦労しているいるんだけどな。みんなは、俺が図太いとか肝が据わっているとか、勝手に思っているけど……」

「でも、アキオは特に何も言わないでパートナーになるのを受け入れたわよね？」

「そこが俺の小ずるいところだな。実は、ちょっとだけ安心していた」

それは、またあの母の偽者と戦う事になったらというか、確実にそれは現れるはずであったからだ。
その時に、もし自分が艦隊を率いていたら？
また指揮官として完全に機能しなくなる可能性もあったからだ。

「でも、みんなはもう立ち直ったって……」

「それは、まだあの偽者が出て来ていないからわからないよ。みんな、勝手に俺が立ち直ったと思っている。でも、決戦でまたあの偽者の母が出てきたらと思うと、俺も逃げ出したい心境だな……」

ネフューリアは、弱い種族である人間を道具として使役する存在にすると宣言した。
その支配がどの程度の物になるのかは不明であったが、いきなり鎖を付けられて奴隷のような扱いを受ける事も無いであろう。

意外と言葉だけ不遜で、トランスバール皇国統治時代と大して変わらない可能性もあったのだ。

「会社とか資源惑星を奪われても、何とか仕事を探して生きていけるさ。何なら、ランファも来るか？　一人や二人くらい扶養家族が増えても、何とかするし」

「えっ！　それって？」

「いや！　物の例えで、居候なんだから料理くらい作れよ！」

それって、もしかしてプロポーズなのでは？
そう考えるランファに、アキオは『しまった！』と思って強引にそれを否定していた。

「それなら、私も働くわよ。しかし、時代錯誤な考え方ね」

「余計なお世話だ」

それでもランファは、そんな風に言ってくれるアキオの気持ちが嬉しかった。

それに、何でも器用にこなしてシヴァ陛下の信用も厚いアキオでも、ここまで悩んでそれを心の中に押し潰して見栄を張っているのだという事も知った。

多分こんな事は、アキオを好きなだけではなくて尊敬もしているちとせとミントには決して言えないのであろう。

「それで、どうする？　選択肢が一つだけなんて自分を追い込む必要は……」

「冗談よ」

ランファは、抱き付いていたアキオを突き放すと、いつもの態度と声に戻って自分の意見を述べ始める。

「シヴァ陛下の信用を裏切ったら駄目よ。それに、私が怖気づいて逃げるなんてあり得ないし」

「おい、ランファ……」

「アキオのお母さんの偽者は、私が一緒に乗っているんだから大丈夫よ。大船に乗ったつもりで安心しなさい」

元気に今までの不安を否定するランファであったが、やはりアキ

オはどこか彼女が無理をしているようにしか見えなかった。
それでも、彼女は決戦兵器に乗る事を決意していた。
ならば、自分も覚悟を決めるしかなかったのだ。
「俺も『何てな』だよ。今までにこんな危険は何度でもあったんだ。それに、母の件もケリを付けないとな……」
「アキオ……」
何も悪い事をしてない母の姿を使って悪行を働くネフューリアに対して、アキオはただ怒りの感情しか沸いてこなかった。
それに、ここでアレを討たないで何が母親孝行だとも思っていたのだ。
母のおかしな評判が出る前にアレを討って、全てにケリをつける。
アキオは、ランファのおかげでこれを決意できたのだと感じていた。
「うちには、頼りになる司令官殿もいるしな。ムーン・エンジェル隊も……」
そこまで言ったところで、またアキオはランファに抱き付かれていた。
まさかの二度目の出来事に、アキオは再び驚くばかりであった。
「ねえ、聞いて良いかしら？」
「何だ？」

アキオは強がって鋭い声で返事をしていたが、今度のランファの声はかなり艶気の混じった声で、実は心臓をバクバクとさせていたのだ。

「前に、私の事を好きかもって言ったわよ？」

「ああ」

「それで、実際のところはどうなの？　考えてみたら、これを聞かないと気になって決戦になんて出られないわ」

「それはだな……」

いや、実は迷う事などなかったのかもしれない。

アキオは、間違いなくランファの事が好きなのだから。

始めは、本当に気に入らない、エリートや三高好きを隠しもない嫌な女であった。

更には、アキオを完全にマザコン扱いして、何かがあるとすぐに口喧嘩になってしまっていた。

それでも、エリオスとの関係修復に余計な口と手を出して来たり、アキオが死のうとした時には説教までかましたり。

次第に、『悪い奴じゃないんだな』とまで思うようになっていたのだ。

他にも、間違えてニアミスでキスをしてしまった事もあったし、舞踏会でそんなつもりもなかったのに、偶然に顔を合わせてしまってラストダンスを踊った事もあった。

ランファの事を考えれば考えるほど、色々な思い出が浮かんでくるのだ。

「思えば、初めてあった頃には喧嘩ばかりしてたような気がする」

「そういえば、そうだったわね」

「でも、それは好きの裏返しだったのかも。昔に誰かが言っていたんだ。好きの反対は嫌いじゃなくて、無関心だって。好きと嫌いは表裏一体なんだって」

「それで？」

アキオに抱き付いたまま、潤んだ瞳で聞いてくるランファに、アキオは意を決して自分の気持ちを伝えていた。

「この悪女め。俺の心を惑わしやがって。俺は、もう恋愛なんてしないって決めていたんだぞ」

「ふん、引っかかった方が悪いのよ」

どこか不器用な二人は、ランファがいつも思い描いているドラマのような綺麗で感動的なセリフとは無縁で、アキオもやはりいつのように毒の入った発言をしている。

だが、この二人の気持ちは本物であった。

「なら、このまま引っかかっておいてやる。俺は、ランファの好きだよ」

「もう、素直じゃないのね。私もアキオの事が好きよ」

抱き合いながら見詰め合っていた二人は、そのまま静かに唇を重ねると、そのままランファの薄暗い部屋のベッドに倒れこんでしまう。

「えっ！　マジで！」

そして実はアキオと同じく勘でランファの異変に気が付いたフォルテは、ランファの様子を見に彼女の部屋を訪ねようとしていたのだが、アキオが部屋に入るのを偶然目撃してしまい、更にいつまで経っても出て来ない事にまさかと思いながらも、『邪魔しては悪いか』と思いながらその場を一時あとにするのであった。

「（とはいえ、おいおい……）」

実は、見た目よりも圧倒的にその手の経験の少ないフォルテは、自分が考えてい以上に動揺していたらしい。

「フォルテさん。顔が赤いですけど、熱でもあるんですか？」

「いや、別に体に異常はないさ」

「そうなんですか？　あっ、そうだ。ランファって部屋にいますかね？　デザートを作って……」

「えっ！」

「ランファも、大変な任務を受けてしまったじゃないですか。タクトさんが、『何か差し入れでもしたら？』ってアドバイスをしてく

れたんです」

「えーーーと！　ランファには勿体無い！　私が全部食べる事にする！」

「あーーーっ！　フォルテさん！」

フォルテは、何も知らないでランファに差し入れを持って行こうとしたミルフィーユからデザートの入ったバスケットを奪うと、そのまま逃走してしまうのであった。

全く柄でもないと思いながら……。

第二部　第九話（暫定版）

「ううん……。あれ？　ここは？」

アキオは、いつの間にか眠っていたらしい。

意識を覚醒させて眠る前の状況を思い出そうとすると、すぐにそれを思い出していた。

決戦兵器のパイロットに任命され、それが理由で無理をしているように見えたランファの様子を見に彼女の部屋に行ったら、そのままなし崩し的とういか、成り行きでお互いに好きだと告白してしまい、そのままそういう関係になってしまったのだ。

まさかすぐにそんな事になるとは思わなかったのだが、やはりお互いにあの決戦兵器への搭乗に不安を抱いていたらしい。

軍人が命を落すかもしれない戦場に出ようとすると、生物の本能としてそういう気持ちなってしまう事があるらしい。

命の危険を感じて、早く次世代の子孫を残そうと本能で性欲が増すらしいのだが、これによって兵士が悪さをする事もあるので、近代的な軍はその対策に労力をかける事が多かったのだ。

アキオは、士官学校時代にも辺境任務の時にも、そんな話を良く聞いた経験があった。

だからなのかと考えながら寝ていたベッドを見ると、そこには裸のままで毛布を被ったランファが気持ち良さそうにスヤスヤと寝息を立てていた。

同じ不安があるパートナーの存在と、お互いに気持ちを確かめ合

ったせいで安心して眠っているのであろう。
『その前に、運動をして疲れたのだろう』とかは、どこかの中年オヤジが言いそうな発言ではあったが。

「アキオ……。今、何時なの？」

「夜中の三時だ。まだ寝ていた方が良い」

部屋が暗かったせいで時間がわからなかったのだが、時計を見るとまだ夜中の三時であった。
余裕でもう一眠りできるはずであった。

「さてと、俺は……」

朝にランファの部屋から堂々と出ると、それを誰かに目撃されてしまう可能性が高く、アキオは早めに彼女の部屋を出ようとしていた。
さすがに夜中なら、人の行き来はほとんどないはずなのだから。

「待ってよ……」

だがそれは、ランファによって止められてしまう。

「私達は、誰に憚ることなく恋人同士になったの。違うかしら？」

まさかいきなりこんな事になるとは思わなかったが、確かにランファの言う通りにそれは間違いのない事実であった。

「ああ、そうだな」

「じゃあ、泊まって行きなさい」

「わかったよ」

結局アキオは、ランファと同じベッドで眠る事になってしまう。

一つのベッドで隣り合わせで、お互いの体温を感じながら横になり、アキオは今日急に二人の関係が進展した件を反芻するかのように思い出していた。

「ねえ、アキオ」

「何だ？」

「あんた、経験あったの？」

「そこそこにな」

何の経験かは尋ねるまでもなかったが、アキオは実はその手の事に多少の経験がある。

士官学校卒業後に派遣された辺境の地で、毎日過酷な戦闘に曝されているとストレスを発散する手段が必ず必要であったからだ。

本人に最初はその気がなくても、必ずベテランの先輩が新人をそういうお店に連れて行くのは、これは軍では当たり前の光景となっていた。

それと、顔の良いアキオは、どうしても女性軍人に色目を使われてしまう事が多い。

上官の誘いを断れなかったという事情も存在していたのだ。

もっとも、男の上官からの誘いはさすがに上手くかわしていたが。

それでも、キスをした経験はあのレイチェルとランファだけだったので、やはりアキオは今までは恋愛を忘れていた男であった。

女性上官も、別にアキオに恋人になる事を求めているわけではなかった。

一時のストレス発散に力を貸して欲しいという理由が、大半であったのだ。

「そういうランファは？」

「あるわけないでしょう」

となると、明日は歩き方がぎこちなくなるのであろうか？

ただ、『迷信という可能性もあるな』などと考えるアキオの心を読んでか？

ランファは、続けてアキオに話しかけていた。

「少し歩き方がぎこちなくなるかもね。士官学校時代に、同期生から聞いた通りなのね」

やはり、少し足の付け根の部分が痛いらしい。

ランファは、ミルフィーユとは別の同期生に、初めて彼氏が出来て外泊をするのでアリバイ作りを手伝って欲しいと頼まれた事があった。

そんな話は学生時代には良くあるのが普通だったのだが、後でその同期生から、『そういう行為』の後の感想を半ば武勇伝的に聞いていて、他のアリバイ作りに参加した同期生達と顔を真っ赤にしていたものであった。

ちなみに、この件にミルフィーユは絡んでいない。
ランファも、さすがにあの娘にはこういう話題は不向であると思っていたからだ。
あの強運が絡んで、えらい事になってしまう可能性も考慮していたのだが。

「大丈夫か？　男にはわからない痛みだから、何ともフォローのしようもないが……」

「そこまで酷くないし、明日はあの決戦兵器のコックピットでの仕事が大半じゃない」

外装は未だに急ピッチで製造中であったが、紋章機自体は普通に稼動可能なので、明日は七番目の紋章機のＨ．Ａ．Ｌ．Ｏ．システムをパイロットであるランファに合わせて調整する必要があって呼ばれていたのだ。

補助をするアキオも、紋章機とクロノ・ブレイク・キャノンとネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラー関する基本知識から、それらを連結したシステムに関するマニュアルのレクチャーなどを受けないといけないので、明日は二人ともコックピットに篭りきりになると思われる。

あまり動かないので、問題にはならないと考えるランファであった。

「じゃあ、明日に備えて寝てしまうか」

「そうね。ねえ……」

「何だ？」

「腕枕して」

「ああ、いいよ」

アキオは急に素直で可愛くなったランファに驚いていたが、それに違和感は感じてはいなかった。

むしろ、これがランファの本当の性格に近いらしく、アキオもそんなランファの事が愛おしいと思うようになっていたのだ。

「（明日の朝は、腕が痺れるだろうけどな……）」

アキオはランファに腕枕をしてあげながら、自分ももう一眠りしようと目を閉じるのであったが、前にエリオスがヴァニラに腕枕をしてあげながら銀河展望公園で寝ていたという話を思い出して、『皮肉な事に、兄弟して同じ事をしているな』などと思いながら、そのまま眠りについてしまうのであった。

「アキオ、誰もいないわよ」

「お前なぁ、誰憚る事なくなんじゃないのか？」

それから、数時間後の早朝。

ランファは自分の部屋のドアからそっと顔を出して、前の通路に他の人が歩いていないのを確認していた。

アキオが自分の部屋から出るのを目撃されないためであったが、アキオは『数時間前と、言っている事が違うじゃないか』と思いながら、ランファの合図を待っていた。

「あの時は、そう思ったのよ。でも、よくよく考えると今は拙いのよ」

「拙い。ああ、確かに拙い……。俺もそれに気が付いた」

ランファもアキオも、今の時点で二人がこんな関係になった事実を周囲に知らせるリスクについて、今さらながら思い出していた。

「そうだねぇ。ちとせとミントに知られると特に拙い。シヴァ陛下だって、あまり機嫌は良くなくなるだろうし」

「フォルテさん！「しぃーーーっ！」」

誰もいないと思っていた部屋の前にいきなりフォルテが現れ、ランファは思わず大声を出してしまうのだが、後ろにいたアキオは懸命に彼女の口を両手で塞いでいた。

もしその大声で人が集まって来たら、大変な事になってしまうからだ。

「若い男女がお泊りした部屋に入るってのも、ちょっと嫌だけどね。ムーン・エンジェル隊隊長として話がある」

フォルテは、すぐに二人と共に部屋に入って来るが、すぐにその顔を顰めさせていた。

その手の経験が少ないとはいえ、男女の情事の後に発生する匂い

が鼻を突いていたのに気が付いていたからだ。

「他の人を入れる前に、ちゃんと脱臭しなよ」

「えっ？　何がですか？」

「ランファは……。ああ、そうか」

フォルテは、ランファに男女がそういう事をすると発生する匂いについて説明をする。

それと、アオキとランファは長時間同じ部屋に居たために、鼻がその匂いに慣れてしまっている事もだ。

そして、その話を聞いたランファはまた顔を真っ赤にさせていた。

「本当に……。どちらもそんな成りして、経験不足も甚だしいね」

「フォルテも、人の事は言えない……」

「シャラップ！」

フォルテにその手の経験が少ない事を前に聞いていたアキオが反論するが、すぐに銃を突き付けられて無言で首を縦に振っていた。

「とにかくだ。最終決戦も迫っているこの時期に、ヤバい事は理解して欲しいものだね」

最終決戦で主力となる紋章機は、パイロットのテンションによって性能が左右する。

もしアキオとランファは完全に恋人同士になった事が、同じくア

キオに好意を抱いているちとせとミントに知られたら？

フォルテとしては、頭が痛くなる未来しか想像できなかった。

「全く……。ムーン・エンジェル隊の隊長が、なんでこんな事にまで気を使わないといけないとは……」

「すいません」

「スマン」

さすがに勢いに身を任せ過ぎたと思った二人は、本当に申し訳なさそうにフォルテに謝っていた。

だが、すぐに彼女は二人に笑顔を向けていた。

「それでも、私からはおめでとうを言わせて貰うよ」

「フォルテさん」

「フォルテ」

フォルテは、惑星サーヴァントで出会った頃から親友であるアキオの将来について真剣に心配していた。

せっかく顔も良くて、軍人としても優秀でなのに、どこか人生について諦めている風にしか見えなかったからだ。

女でもいれば変わる可能性もあったが、自分はあくまでも友人で。

それに、出生の不幸を抱えているアキオに、女として接するのを躊躇している部分もあった。

それと、アキオの方もフォルテをそういう風には見ていなかったのだ。

それでもアキオは、自分の親友になってくれたフォルテには感謝していたし、フォルテもこの新しい親友には友情を感じていた。

だが、それだけではまだ足りないのだとも思っていた。

だからこそ、ちとせやミントのようにアキオへの好意を隠そうともしない二人を影ながら応援もしていたし、素直にアキオへの好意を表現できないランファの事も色々と心配していたのだ。

その中で誰を選ぶのかはアキオ次第であったし、フォルテも誰かに意図的に誘導しようとは思っていない。

ただ、さすがに早過ぎるだろうとは思っていたのだが。

「実は、私はちとせとミントの事も応援はしていたんだが、心のどこかで違和感のような物を感じていてね……」

フォルテは、彼女達のアキオへの好意の種類を尊敬から発した物だと分類していた。

ミントのされは、あの逆らいつつも巨大な偉人である父と張り合う事が出来た優秀な経営能力も持つ軍人さんであるアキオからであった。

いくら表面上は父親に隔意があっても、やはり娘は無意識に父親と似たようなタイプの男性に魅かれるからであった。

ちとせは、自分の父親のようにか、もしくはもっと優れた軍人で

あり上官でもあるアキオへの尊敬から発生した好意によってであった。

別にこれが間違っているわけではなく、そんな理由で恋人同士になったり、結婚して上手く行く男女など沢山存在していた。

だが、アキオのこの手の女性では上手くいかない可能性があった。

アキオは、あくまでも自分と対等の立場の女性を求めている節があった。

その点、ランファはアキオが遥かに上官でも最初から普通に喧嘩をふっかけていたし、二人はアキオの事など批判した事もないのに、ズバズバとその欠点を突いていた。

多分、ムーン・エンジェル隊でアキオをマザコン呼ばわりしているのは、間違いなくランファだけであったのだ。

一方アキオも、ランファを『テレビで言うところのイケメンやら三高に露骨に惚れる俗物』だと批判した事もあった。

ランファにそこまで言ったのも、多分アキオだけであろう。

「だからかもね。あんた達は常に対等で、気に入らなければ口喧嘩ばかりだったし」

『喧嘩するほど仲が良い』を実践しているというか、それがお互いに腹を割って話し合って相互理解に繋がったのかもしれないとフォルテは思っていたのだ。

「おめでたいとはいえ、作戦終了までは黙っておいて欲しいのが本音だね」

「わかったよ」

「じゃあ、早めにアキオは撤収しな」

「了解、隊長殿」

まだ他の人が起きて来ない内に、アキオはとそそくさとランファの部屋から出て静かに自分の部屋へと走り始める。

それを見送ってから、フォルテはランファと二人で更に話を続けていた。

「ランファ、あいつを頼むよ」

まだ知り合ってさほど経っていないのに、フォルテとアキオは強い友情で結ばれている事に、ランファは改めて気が付いていた。

「でも、アキオってシッカリしていますよ。それに、そんな急に特別な事なんて……」

「そんな、特別な事をする必要は無いのさ。今まで通りに、仲良く喧嘩して。それで良いんだよ。その程度で、アキオは臍なんて曲げないし」

あくまでも対等で、言いたい事があったらハッキリと言ってやればいい。

アキオはそれを必ず受け入れて、たまに意地の悪い返球を送って来るのだから。

そしてそんな関係を、アキオ自身は心から心地良いと思っているのだからと。

「その辺が、ちとせとミントの失敗した部分なのさ」

「はあ、そうなんですか……」

外から第三者的な目で見たフォルテにはわかるらしいが、当事者であるランファにはいまいち良くわからない理屈ではあった。

「とはいえ……」

フォルテはここで一旦話の流れを切ってから、改めて真面目な表情でランファと向かい合う。

「ミントとちとせを騙しているようで悪いんだけどね。この戦いが終わるまでは、わかっているね？」

「はい」

二人の関係を黙っている事と、勿論みんなの前でイチャイチャするなよと釘を刺されて、ランファは少し残念な気持ちになるのであった。

「まあ、フォルテの言う事には一理も二理もあるか」

「それは、そうなんだけど……」

数時間後、アキオとランファは七番目の紋章機に乗り込んで、昨日ノアから言われていた様々な調整を行っていた。
ランファは特殊なヘッドセットを付けて、主にH．A．L．O．システムの最終微調整を。
アキオは携帯用の小型液晶端末を周辺機器に差し込んで、自分とランファ用に細かい設定の変更を行っていたのだ。

ランファは、主に脳波などのデータ収集が主であまり手間がかからないのを良い事に、アキオに暇を見ては話しかけていたのだ。
沢山の端末の操作が必要なので無視されるかと思ったが、アキオはちゃんと端末の操作を続けながらランファの話しかけにも答えていた。

「（相変わらず器用ね……）私としては、大きな声で今にも発表したい気分なのよ」

「おいおい……」

とは言いつつも、それ関連の話はここで終わりとなっていた。
調整作業中なので、いつ外から通信が入って二人の話が漏れるかわからなかったからだ。

「H．A．L．O．システムの調整完了よ」

「はい、大丈夫ですね。ランファさん」

特別工廠に付随しているコンピュータルームの中から、責任者であるクレーターから通信が入って来ていて、彼女は作業が無事に終了した事を告げていた。

「でも、今日はランファさんのテンションは最高潮ですし、何か良い事でもありましたか？」

「クレーターさん、私は常に絶好調ですから」

「はあ、そうですか……。レイトン少将……じゃなかった。中将の方はどうですか？」

艦隊指揮をしなくなって戦時昇進の意味が無くなっていたアキオであったが、やっぱり戦時昇進無しというわけにもいかず、結局そのままこの戦争が終わるまでは中将のままになっていたアキオであった。

中将で決戦兵器のパイロットという、かなり奇妙な状態にはなっていたのだが、さすがにタクトを行かせるわけにもいかないので、これが運命だったのであろうと考えるアキオであった。

それに、悪いがこの手の分野では、自分の方がタクトよりも遥かに才能は上ではあったし。

「もう少しで完了するけど、やっぱり旋回性能がいまいちだな」

「それは仕方が無いですよ。あんなに重たい大砲と、試作品でバカデカイキャンセラーを搭載していますし」

他にも、効率的な配線とか改良も不可能なので、色々とゴテゴテとくっ付いていて普通に戦場に出たら数分保つか疑問になる兵器でもあった。

「あの巨大戦艦に肉薄するまでは、みんなに任せるしかないか」

「そういう事ですよ」

十数分後、数時間かかった調整も完了して二人は紋章機から降りて来る。

ところが、その様子を監視用のスクリーンで確認していたクレーターは、何か違和感のようなものを感じていた。

「ランファ、大丈夫か？」

「ええ」

アキオも無意識にやってしまったのだろうが、ランファが紋章機から出る時に手を差し出して彼女をそっと引き揚げていたのだ。

『そのくらい、レディーへのマナーとして普通にやる事では？』と思う人も多いのであろうが、ランファはいつもはそんな補助を絶対に必要としない人であったし、今までの関係から考えてアキオが手を差し出しても、『いいわよ』で済ませて断ってしまう方がシックリと来るはずであった。

ランファ自身が、昨晩のアレでまだ体の一部に痛みがあったので、遠慮なく引き揚げて貰ったという真相もあったのだが……。

「腹減ったな。今日は何を食べようかな？」

「そんなに動いていないじゃない」

「頭脳労働で、頭に栄養が足りないんだよ」

「何よそれ」

「肉体労働派のランファさんには、わからないと思うけどね」

「知らなかったの？　私も頭脳労働派なのよ」

「全く知らんかった。というか、それ嘘だろう？」

「失礼な男ね」

しかも、その後二人は、いつもと同じような感じで話をしながら食堂へと歩いて行く。

その話の内容も特に浮ついているわけでもないし、この二人はいつもこんな感じで色気も無い、半分口喧嘩でもしているかのように話を進める事が多かった。

だが、どう説明して良いのかわからなかったが、クレーターの違和感は更に増大の一途を辿っていた。

「何か良い雰囲気なのよね」

「どうかしましたか？　クレーター班長」

「（私の思い過ごしか……）ううん、何でもないわ。最終チェック急いでね」

「了解」

クレーターは、部下達と共に区切りの良いところまで作業を進めてから、自分も昼食を取りに最寄の食堂へと移動を開始していた。

すると、いきなり後ろからささやくような声で話しかけられる。

「クレーター班長の疑念。それは、口に出してはいけないものなのだぁ」

「いきなり驚くじゃないですか！　フォルテさん！」

その声の主は、今までそんな事などした事も無いフォルテであり、それも含めてクレーターは驚いていた。

「さてと、冗談はおいておいてだ。クレータ班長の疑念は本物なので、この戦いが終わるまでは口にしないで欲しいね」

「という事は……。アレですよねぇ……？」

実は、フォルテよりも年上で大人の女なクレーターだったので、敢えて口の出さなくても、アキオとランファがどうにかなったのが事実であるのは理解していたのだ。

それよりも、自分の女としての勘の鋭さにある意味感心し、それが自分の恋愛ではない事に密かにショックを受けていた。

趣味であるアニーズのメンバーとはどう考えても結婚など出来ないので、やはり最低限普通に彼氏くらいは欲しいと常に思っていたからだ。

「幸い気が付いたのは、私とクレーター班長だけだからね」

「年の功ってやつですか？　それとも、経験が物を言ったのか」

実は言うほどその手の経験も無かったのだが、そこは敢えてお互いに何も言わないのが華であった。

「ちとせとミントにバレると、最悪のタイミングで戦力が落ちてしまう可能性があるんだよ」

「まあ、そうでしょうね……」

紋章機を含むロストテクノロジーの専門知識を買われて整備班長の責務にあるクレーターであったので、二人が失恋が原因でテンションを下げてしかもしれない事に気が付いていたのだ。

「よりにもよって、このタイミングでですか？」

「おかげで、ランファの方は絶好調じゃないか」

「確かに……」

先ほどの調整でも、ランファのテンションの高さは他のムーン・エンジェル隊のメンバーの中でも群を抜く存在となっていた。

しかも、昨日までは全くその兆候すら見せていなかったのにだ。

「何があったんです？」

「ナニがあったんだね」

「えっ……、マジでですか？」

フォルテのまるでどこぞの中年オヤジのような回答の仕方に、クレーターは目を点にしつつ、顔を赤くさせてしまうのであった。

「敵超巨大戦艦及びそれに付随する多数の艦隊は、十二時間後に最終防衛線に到達する予定。このまま偵察を続行するが、膨大な数の艦隊だ。宇宙の漆黒がほとんど見えない！」

決戦兵器の準備や、味方戦力の再編成などを開始してから五日後。遂にトランスバール軍の偵察ラインの端に、ネフューリアの《オ・ガウブ》の艦影が目撃されていた。

更に、それに付随する大量の無人艦隊の姿に、偵察機の通信士の声が興奮していた。

「繰り返す！　艦隊が八割で宇宙が二割だ！」

「いよいよだな」

「出し惜しみは無しとする。全戦力を迎撃に出す」

白き月に置かれた総司令部からシヴァ陛下が全軍に迎撃命令を出し、それに従ってエルシオールだけではなく、機動艦隊もその指揮下においたクレッシェンドに第十三任務艦隊や、他の近隣星系から間に合った艦隊戦力なども同時に出撃していた。

「ふう、最後の最後で何とか間に合いましたか」

「間に合っても、無条件で喜べませんね」

ただ、その艦隊の全体指揮を執るのは、任務で他星系に出かけていた大将クラスの人材の中で唯一間に合っていたウォルコット大将であり、それを補佐するのは、第2方面軍時代からの女房役で参謀長でもあるマッコリ少将であった。

「戦力比的には厳しいですけど、そこを何とかするのが用兵というやつですので」

「その用兵に詳しいレイトン中将は、あんな色物大砲付きのパイロットになっていますけど……」

「アレは切り札らしいので、仕方がないのでは？」

つい半日ほど前に到着した二人は、アキオがまさかそんな決戦兵器のパイロットになっているとは思わず、指揮官の不足をどうしようかと真剣に考える羽目になっていた。

まさか、宰相をしているルフト予備役大将を復帰させるわけにもいかず、なぜならこれは、軍人が政治家を兼ねるという悪しき前例を生んでしまうからであった。

そのために、わざわざ彼は宰相になる時に軍を辞めているのだから。

かと言って、ウォッカ大将からは、『もう年寄りを前線に出さないでも何とかせい。後ろでのケツ持ちは責任を持つ』と言われて断られてもいたのだ。

「まあ、マイヤーズ少将がいますし、エリオス・シードル准将もいますからね。若い力主体で何とかするしかないですね」

そんな話をしながらも、ウォルコット大将はマイヤーズの兄の方であるクレッシェンドに通信を入れていた。

「指揮割りを如何なさいますか？」

ここで問題となるのは、ウォルコット大将が正規の艦隊の司令ではなくて、同格とはいえ別組織の通商護衛艦隊に所属していた事であった。

なぜなら、厳密に言うとクレッシェンドは彼の命令に従う義務などなかったし、その逆も然りであったからだ。

「この中で、最上級者はウォルコット大将閣下でいらっしゃいますから。エルシオールのマイヤーズ大将もそうですが、彼は決戦兵器を敵の鼻面まで送り込む重要な役割があります」

「エルシオールの進撃を、ムーン・エンジェル隊が支援する。更にその二つが無事にあのバカ女の元に到着するのを我々が支援するわけです」

文字通り、死闘になるはずであった。

何しろ、エルシオールが目的を達成するために、なるべく被弾させないようにしないといけないので、その盾となるのは当然自分達であったからだ。

「ちなみに陣形は？」

「エルシオールを中心にした、鋒矢（ほうし）の陣形で宜しいかと。この戦闘に華麗な艦隊機動とかは必要ありませんよ。最初は、矢の根元の中心にエルシオールを置いておきます。何しろあの敵の数なので、いきなり前方に配置しても無駄に損傷していざという時に使えないでしょう」

ウォルコット大将の説明に、クレッシェンドは納得してから賛同もしている。

とにかく敵が多いので、分散している左右の敵が反応する前に早めに総旗艦である《オ・ガウブ》に肉薄してしまおうと考えていたのだ。

素早く《オ・ガウブ》の前方に配置されている中央敵無人艦隊を撃破し、その空白地に全艦隊を押し込む。

当然、周囲にいる敵無人艦隊から攻撃を受けるので、それは鋒矢（ほうし）の陣形の外側に配置した艦艇で防ぐ事が前提になっている。

どうやらウォルコット大将は、外側に装甲の厚い戦艦や失っても惜しくない無人艦艇すら持参して配置する予定のようであった。

とにかく、まともに艦隊同士が戦力を磨り潰し合っていたら、それは無限に近い再生能力を誇るネフューリアの勝ちとなってしまう。

時間だけが最優先される、多少の損害の多さは諦めるしかない戦法であるとも言えた。

「機動部隊に所属する、シムス高速戦闘機部隊の投入タイミングが難しいですね」

「ムーン・エンジェル隊の突撃の前で宜しいかと思いますが。向こ

うも、無人戦闘機部隊を出してくれればかえって好都合かと……」

戦闘機部隊同士の乱戦の隙を突いて、紋章機に援護されたエルシオールが突入を開始する。

それに、ある程度戦場に敵味方が入れ乱れていれば、《オ・ガウブ》も無茶な大火力攻撃は行わないであろうからだ。

さすがに味方まで一緒に吹き飛ばせば、それはエルシオールの付け入る空白地帯を作る事になるからであった。

「それと、これは純粋な戦術とは違いますけどね」

ウォルコット大将は、必ず途中で味方艦隊による援軍が来るであろう事を知ってもいたのだ。

「今のこの時点でいない重鎮といえば……。ジンロ大将ですか？」

「まさか、彼ほどの人物が援軍を間に合わせないはずがないじゃないですか」

正規艦隊のボスであり、ウォッカ大将の正統な後継者とまで言われている彼であったので、その用兵に隙があるはずもなかったからだ。

外地に応援に行っていたので、決戦に間に合わないなどというヘマを犯すはずもなかった。

彼はウォルコット大将と事前に謀って、敵にとって最悪のタイミングで最悪の位置から攻撃を仕かける事になっていたのだ。

「そう聞くと、何だか勝てそうですね」

「ところが、戦力比から言うとまだ半々くらいです」

「厳しいですね……」

「とはいえ、ムーン・エンジェル隊もいますし、レイトンさんも珍しく現場で汗かきですからね。上手く行くのではないでしょうか？」

二人の軍司令官がそんな話をしている間にも、戦闘準備は着々と進んでいたのであった。

「鋒矢（ほうし）の陣形で行くと？」

「はい。戦力的に考えますと、我々があのネフューリアに挑む立場ですので、最初のスタートダッシュで逃げ切るしかありません」

「最悪の場合を考慮して、もう少し粘れる陣形と戦法でも良いような気もするがな」

《オ・ガウブ》到着予定時刻の一時間ほど前。

総司令部の置かれている白き月で、シヴァ陛下はウォルコット大将から味方艦隊の配置完了報告と、決戦で使用される作戦案と艦隊陣形について説明を受けていた。

「粘っても、こちらの戦力はさほど増えませんしね。下手に粘ってエルシオールが損傷でもしたらアウトですから」

それはつまり、あの決戦兵器を《オ・ガウブ》の鼻面に送り出せなくなるという事実を意味していた。

「我らの勝機がただそれ一つにある以上は、艦隊の防衛力など過剰に考えるだけ無駄です。陛下、我々はチャンピオンではないのです。挑戦者なのですから」

「なるほど。我々は挑戦者なのか」

ウォルコット大将の言葉が気に入ったのか？

シヴァ陛下は、不敵な笑みを浮かべてから作戦案の許可を出していた。

「タクト・マイヤーズ、レスター・クールダラス、エリオス・シードル、アキオ・レイトン。この四名は、何らこの作戦案に反対意見を述べていないからな」

「ほう、皇国の英雄が認めてくれたのですか。ならば、私は彼の乗るエルシオールを、あの《オ・ガウブ》まで無事にエスコートするのみです。ところで、陛下……」

「まだ他に何かあるのか？」

「この作戦の名称をまだ聞いていません……」

「ああ、それならば……」

ウォルコット大将は、シヴァ陛下から今回の作戦名を聞いて大笑いする事になるのであった。

「エンジェル・スラップ（天使のビンタ）か。命名した奴の顔が容易に浮かぶな」

「ええ、間違いなくタクトよね。この大ピンチに、こんな大胆な作戦名を思い浮かべるのは」

ちょうど同じ頃、エルシオールに装着された決戦兵器のコックピットの中では、細かな最終調整を終えたアキオとランファが話をしながら作戦開始を待っていた。

お互いに好きだと告白してそんな関係になってしまった二人であったが、そこは作戦中という事で、あくまでもトランスバール皇国軍の同僚同士として普通に会話をしていた。

いきなり、『ダーリン』とか『マイハニー』とかなるはずもないので、当たり前と言えば当たり前だし、フォルテからも少なくともこの作戦が終わるまでは黙っていてくれと言われていたのもあったからであった。

多少黙っている事に罪悪感を感じないでもなかったが、ちとせとミントがこの作戦で機能しないという事は、ある意味致命傷でもあったので仕方がなかったのだ。

「緊張する？」

「しないと言えば嘘になるな」

思えば、こんな風にいちパイロットとして戦場に出るのは本当に久しぶりの事であった。

末端のいち兵士は、ただその軍を指揮する上官が優秀である事を信じて生き残れるように最善を尽くすだけである。

ここ最近では、自分は兵士達を指揮する方に回っていたが、今度はまた司令官の作戦通りに一つの駒として戦場に出るのだ。

とはいえ、この作戦を指揮している面子を考えると特に不安はなかった。

タクトやウォルコット大将ならば、まずおかしな作戦は取らないはずであったからだ。

「でも問題は、私達が無事にあの超巨大戦艦の目の前に辿り着けるかよね？」

「それは、大丈夫だと思う」

アキオなりに今回の作戦を分析してみると、簡単に言えばこの作戦は『兵は、神速をもって尊ぶ』を実現したに過ぎない。

いくらネフューリアの《オ・ガウブ》が多くの艦隊を引き連れているとはいえ、その多過ぎる艦隊は実は全て戦場に入りきれていない。

鋒矢（ほうし）の陣形で密度を増した味方艦隊が、スピード優先で《オ・ガウブ》の前方の無人艦隊のみを排除し、その穴を敵が埋めるまえにそこに味方艦隊を割り込ませる。

当然、前後左右から埋められたエリアを取り戻すために、敵艦隊から集中砲火を浴びるはずであったが、それは出来うる限り防ぐという事なのであろう。

「三方からの集中砲火……」

「その時間を短くするための全軍最速進撃だろうな。それに……」

「それに？」

明らかに、距離的には間に合うはずの援軍の姿が少ない。

三方からの集中砲火を反らすために。いきなり戦場に現れて敵艦隊の死角から攻撃をする可能性が高かった。

その戦力比は、やはり洒落にならないレベルにまで開いてはいたのだが。

「犠牲が、かなり出るわよね？」

「とはいえ、このくらいしか作戦がない。犠牲を少なくするには、一秒でも早くエルシオールがネフューリアに肉薄するしかないんだ」

そもそも、防衛主体の受身作戦などまず成立しなかった。

ここで時間ばかり稼いでも、エルシオールがというかあの決戦兵器が《オ・ガウブ》の鼻先にまで到着しないと意味がないからだ。

それに、防衛作戦で時間ばかり稼いでも、その巨大な艦内に《黒き月》と同レベルの生産設備まで有する《オ・ガウブ》は次々に生産した戦力を投入してくる可能性が高い。

もしそうなれば、トランスバール皇国軍は次第に消耗して敗退するだけであった。
犠牲も、余計に出るであろう。

「勝てるのかしら？」

アキオからの説明を聞いて不安になるランファであったが、さすがは恋人同士になったというべきか？
すぐに自分なりの考えを述べて、彼女の不安を取り除こうとしていた。

「戦力比、作戦案、使用兵器については、もう将校の視点では言う事はないよ。となると、ここでもう一つ重要な要素が出てくる」

「重要な要素？」

「ああ」

それは、この作戦を指揮している司令官の力量の事であった。
確かにヴァル・ファスクなる存在で、生身で多くの艦隊戦力を操り、資源さえあればほぼ無限の生産力を誇るネフューリアは最強に近い存在かもしれない。

だが、彼女にはある欠点があった。

「人間を下等生物・種族扱いして完全に舐め切っている。獅子は兎を倒す時にも全力を出す。彼女のそういう部分が油断を生んで、それが思わぬ敗北に繋がる可能性が高い」

それに、まだ彼女は、こちらのネガティブ・クロノ・ウェーブキ

ャンセラーの存在に気が付いていない可能性が高い。
相手に突き刺さる矛さえ持っているのであれば、あとはそれを上手く相手の喉元まで持っていけば良いのだ。

「最後に、俺とランファで組んでいるんだ。ランファの腕と俺の悪運が組み合わさされば大丈夫さ」

「アキオにそう言われると、成功しそうな感じに聞こえるわね」

「心配するな。絶対に成功するから」

二人が良い雰囲気でそこまで話したところで、エルシオールのブリッジや他の紋章機から通信が入ってくる。
そこには、いつもと変わらない表情のタクト達が映っていた。

「すまんな。中将閣下に汗かき仕事を」

「いやいや、大将閣下のご心労に比べれば」

タクトとアキオは、お互いに軽口を叩き合いながら作戦前の最後の会話を楽しんでいた。

「タクトよりも、レイトンの方が腕は上だしな」

「レスター、そんな事実を語って楽しいか？」

レスターもいつものように毒舌を吐いて、それをタクトに突っ込まれていた。
実はタクトもなかなか器用にシャトルなどは動かすのだが、そこは超小型高速魚雷艇などで実戦経験もあるアキオの方が、この分野

では一日の長があった。

「こちらとしては、タクトのエスコートに期待するだけさ」

「タクシー料金は高いぞ」

「『まな板の上の鯉』から徴収するなよ」

「ああ、それと……」

タクトは、他のムーン・エンジェル隊のメンバーとも通信を繋げると、この戦いが無事に終わったら祝勝会を開く事を提案していた。

この決戦前に、勝った後の事を言える度胸。

簡単に誰にでも言えそうであったが、いくらアキオでもそれを高らかに宣言できるほどの度胸はなかった。

勝って帰るのが当たり前なのだが、やはり実戦経験のある軍人としては、どうしても自分の身に何かがあった時の事を考えてしまうからだ。

勿論タクトも実戦経験を持つ軍人であったが、その不安を億尾にも出さないで勝った後の事まで言えるというのは、やはり彼が非凡で精神がタフな証拠でもあった。

「俺は、酒さえ良いのが出ていれば問題ない」

「その辺は、ルフト先生持ちだから大丈夫」

「そいつは結構」

「あの……、アキオさん」

アキオがタクトとの話を終えると、今度はちとせが話しかけてくる。

「援護の方は頼むよ」

「お任せください、必ずやアキオさんはお守りします」

「私は守ってくれないの？」

「勿論、ランファさんもです」

「何かオマケみたいな扱いね……」

「そんな事はないですよ！」

確かにフォルテの言う通りで、今の時点でアキオとランファの関係が進展した事を知ったら、ちとせは戦力にならないかもしれないと思ってしまうアキオであった。

それと、やはり彼女に対する罪悪感のような物も沸いて来ていた。

アキオは、一番最初にちとせから告白までされていて、その返事を彼女に待って貰っていたからだ。

自分が再び女性と共に人生を歩もうと考えるまでとか言っておきながら、とうに世間一般の男とさしてやっている事に変化がなかったというオチ。

それに、客観的に見て、ちとせほどアキオの恋人候補に相応しい人物もいなかったであろう。

自分の亡くなった母親と同じく長い黒髪を靡かせる美少女であり、性格も真面目で可愛らしくて大和撫子が再臨したかのような娘であり、料理・掃除・洗濯などの家事全般が得意で、軍人としても優秀でアキオの副官を良く務めてくれてもいた。

先の戦艦スオウにおける父親の幽霊騒ぎのせいで、アキオとちとせが親公認で付き合っているという噂まで流れていたのだ。

「（ミントもヤバいか？）」

ミントは、世間の下馬評では少しアキオの恋人候補としては不利であると評されていたが、アキオは愛らしい見かけと反して実は頭の良い彼女の事が気に入っていたのだ。

ちとせほど軍人として広い範囲での才能を有しているわけではなかったが、彼女はあのブラマンシュ会長の一人娘であり、その方面での才能は折り紙つきでもあった。

アキオも、良く彼女と一緒に紅茶などを飲みながら自分の会社の事を相談したり、または気分転換に色々な世間話をしたりと。

特に駄菓子については、アキオは子供の頃から駄菓子屋の常連であったので、同じ趣味とまではいかなくても話は非常に合っていたのだ。

「（あれ？　二人とも物凄い美少女で、もしどちらと付き合う事になっても不思議はなくて……。でも、俺はランファなのか？）」

とはいえ、ここでランファの方に視線を送ってしまうとそれだけでバレてしまいそうなので、アキオは悪いとは思いつつも最初に二人と話をしていた。

「（気分的には浮気でもしたような……。でも、俺は正式に付き合っていたわけでも……。ああっ！）久々にこういう物に乗るよなぁ」

「アキオさん、大丈夫なのですか？」

「この決戦兵器には、Ｇキャンセラーもあるからね。それに、メイン操縦者はランファで、俺はちょこっと細かい端末の操作をするだけだし」

「あの、ご無事の帰還をお待ちしています」

「本当に、無事に帰って来てくださいね」

真剣な表情でミントとちとせに心配されてしまい、この決戦終了後に正直にランファと付き合う事を話さなければならないアキオは、少しだけ無事に帰って来なくても良いような気がしてしまう。

「相変わらずモテるねぇ」

アキオとランファの事情を知っているフォルテは、わざとやっているのか？

敢えて、アキオをその方面の話でからかっていた。

多分、反論するとボロが出る可能性を考慮して、アキオが余計な事を言わないの知ってやっているのであろう。

「（俺をからかって楽しんでいるのか？）　フォルテ、ウォルコッ

ト大将とは話はしたのか？」

「（反撃かい……）今生の別れってわけでもないんだ。祝勝会に呼べば良いじゃないか」

二人は暫くそんな腹の探りあいを続けていたが、アキオは不利を悟ると早めに切り上げて、今度はヴァニラと話をしていた。

「ところで、ヴァニラは大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

ヴァニラに関しては、エリオスが正規艦隊に所属して前線で迎撃を行う予定なので、色々と心配しているようであった。

「あの血を引く者は、軍人として優秀な者が多いそうだ。そう簡単にはくたばらないよ」

「はい」

アキオからすれば、ヴァニラがなぜエリオスなど心配するのか未だに良くわからなかったが、それでも彼女を安心させるために敢えてシードル公爵家の軍人の血の話をしていた。

「アキオさん」

「祝勝会のケーキを頼むよ。タクトにもう頼まれているとは思うけど」

酒飲みだが甘党でもあるアキオとしては、ミルフィーユの作るケ

ーキは祝勝会では外せないメニューでもあったのだ。

「はい、大きなケーキを作りますね」

ミルフィーユは、アキオからのお願いにニコニコと笑顔で答えていた。

「さてと、そろそろ時間だな」

いよいよネフューリアの指揮する艦隊が、味方の最終防衛ラインまであと少しというポイントに近付いていた。

「全員で祝勝会を楽しむぞ！」

「「「「「「「「「「おーーーっ！」」」」」」」」」」

タクトが全員で掛け声をかけた次の瞬間に、ネフューリアが率いる無人艦隊の前衛艦隊が味方策敵網に引っかかり、急遽ウォルコット大将指揮の元で陣形の再編を行っていた全迎撃艦隊が、一斉にその準備を終えつつ前方を目視していた。

「勝って帰ってからも大変そうだが、まずは無事に帰って来る事だな」

「そうよ。他の事になんて構っていられないのよ」

「ランファも、当事者の癖に」

「それはそうなんだけど……。その時は、一緒に謝ってあげるわよ」

最初は『アキオ如き』などと言っていた癖に、今ではこういう関係にまでなっていたので、ランファもちとせとミントにかなり罪悪感を感じているようであった。

「さてと、我が友軍艦隊に所属しているみなさん。そろそろ始まりますよ」

総大将であるウォルコット大将のいつもと同じ口調での通信の後に、アキオもランファも前方に物凄い数の無人艦隊を確認していた。

そして遂に、トランスバール皇国の命運をかけた決戦がもう少しでスタートする。

第二部　第九話（暫定版）（後書き）

この普通に書ける状態の内に、第二部は完成させるんだ！

という目標ですｗ

「物凄い数の敵艦隊ですね」

「まともに戦ったり、ましてや防衛主体の作戦なんてジリ貧ですね。ウォルコット大将の言う通りに、スピード優先策は間違いではないのですね」

「実は正解でもないですけどね。これしか策がないのが実情なんですよ。だから、私程度にでも思い付くのです」

《オ・ガウブ》の中央前方に位置する敵無人艦隊だけを限定してスピード優先で撃破し、その穴に入り込んでからはひたすら左右の敵からの攻撃に耐える。

そしてその隙に、《オ・ガウブ》へとエルシオールと決戦兵器を送り出す。

この作戦に備えて出来る限りの準備を整えたウォルコット大将は、参謀長であるマッコリ少将と共に話をしながら、前方の敵大艦隊をまるで社会見学でもするかのようにスクリーンで見ていた。

彼らは指揮を執るために中央のエルシオールの近くに、通常のザーフ級戦艦イセを総旗艦に座上していた。

だがこの作戦では、別にどこにいようとさして戦死する危険に変わりはなかった。

敵の大火力に包囲されているので、時間の問題だけで全滅してしまう可能性があったからだ。

「守りに守って時間を使っても、短時間で全力を出して攻撃しても、

最終的な損害数はさほど変わらないと思うのです。ならば……」

「あの決戦兵器を送り出す事に、ただ全力を尽くしますか」

この作戦で《オ・ガウブ》を的確に倒せば、ウォルコット大将の功績は大きい物となるであろう。

逆に失敗すれば、彼は貴重な戦力を無駄に潰した無能な司令官の代名詞となるはずであった。

マッコリ少将は、自分の上官が既に覚悟を決めている事に気が付いていた。

「レイトンさんも、特に何も言って来ませんしね。彼にも他に策が無いのなら、これは間違いではないのでしょう」

「通信は入れませんので？」

「密室に女性と二人きりです。まさかとは思いますけど、恥ずかしい事とかしていて目撃したら気拙いじゃないですか」

例の決戦兵器に通信を入れたら、その中でアキオと女性パイロットがキスをしていた。

ところが、マッコリ少将にはその光景がどうにも想像付かなかったのだ。

彼が任務中にそんな事をするであろうかという疑問と、一緒に乗っている女性パイロットと面識が無かったからであった。

このまま独身で居て貰って、数年後に自分の娘と結婚でもしてくれればなという願望を密かに抱いていたせいもあったのだが。

「でも、烏丸大尉じゃありませんよ。ブラマンシュのお嬢様でもありませんし」

ちとせがアキオに気がある事など、通商護衛艦隊に所属していた人間で知らない人など一人もいなかった。

それにマッコリ少将は、ブラマンシュのお嬢様であるミントがアキオに気がある情報も知っていた。

最近、輸送船や商船の船員達の間で、ブラマンシュ会長が婿を入れたがっていて、その最有力候補があのレイトン中将であるという噂が流れていたからだ。

「そこはほら、レイトンさんにも選ぶ権利がありますし、彼がその気になれば、複数の女性と浮名を流せるでしょうし」

確かにマッコリ少将は、『自分もレイトン中将の半分で良いから、イケメンに生まれていればなぁ』などと思う事も多かったし、彼がそのせっかくの顔の良さを今まであまり使用していない事にも、正直勿体無いとさえ思っていた。

「ただの同僚だからこそ、その彼女ですか？」

「ランファ・フランボワーズ大尉ですか。これは、なかなかに……」

そっと資料の写真を隅の端末にび出し、なかなかに綺麗な女性ではあるなと思ったマッコリ少将であったが、現時点ではアキオとの関係は不明であったし、そういう感情が無いからこそ、一緒に組んで決戦兵器に搭乗している可能性もあったのだ。

「レイトンさんが誰に気があるのかは、後で酒の肴に聞くとしてで

すね……」

ウォルコット大将は、陣形を形成している各戦隊や艦隊司令などに次々と挨拶を確認を取っていた。

「シードル少将、前衛部隊の準備は大丈夫ですか？」

「はっ！　準備完了しました！」

「そこまで緊張しないでも大丈夫ですよ」

アキオと腹違いの弟で、あのシードル公爵の後継者でもあるエリオスは、ウォルコット大将から前衛艦隊の司令官に任命されていた。誰がどう見ても一番危険な場所に配置されていたのだが、彼はそれを否定する事もなく気合も十分に入っているようであった。

それに、ウォルコット大将が今さら彼に隔意でも抱いているというわでもなく、まだ若くて経験不足のはずなのに、ここ数日で上手くアキオの指揮する第十三任務艦隊の補佐を遺漏なく行うとういう手腕を発揮していたからだ。

『若い才能の台頭』

エリオスだけではない。

他にも貴族・市民階級を問わずに、若い才能が人手不足を理由に多数抜擢されている。

ウォルコット大将としては、この中から早く自分を楽隠居させてくれる人物が現れないかと真剣に思っていたりもしていたのだ。

「仕掛けのタイミングを外さないようにしてください」

「兄と同じとまではいきませんが、私もそこそこはやれるつもりですから」

エリオスは、最前線に配置したある仕掛けの操作と、最初に敵艦隊に喰らわす駆逐艦や突撃艦による光子魚雷攻撃の指揮を執る予定になっていた。

戦隊には准将の指揮官も複数いたので、彼はそのために兄と同じく戦時昇進で少将に昇進している。

当然、周囲からのやっかみも多かったが、彼の配置された場所を聞くと自然とそれはすぐに無くなっていた。

つまり、それほど危険な位置に彼は配置されていたのだ。

「あまり気負わないようにしてください」

ウォルコット大将のエリオス対する評価は、それほど悪い物でもなかった。

アキオに関する件では全て父親の方に問題があったのだし、あの軍事法廷の事件も、それだけ彼が若かったのであろうという感想しか抱いていなかったからだ。

勿論アキオが実際に処罰されていたら、また別の感情を抱いてのではあろうが。

彼を煽ったコニャックとジータマイヤ大将が既にこの世にいないので、他に文句を言うべき存在もいなかったのだ。

「では、任せますので」

「お任せください」

続いて今度は、大半の空母を含めた機動部隊を指揮するクレッシェンドへと通信を繋げていて、そして彼も、他の機動部隊の司令官に命令できるように戦時昇進とはいえ中将に昇進していた。

「マイヤーズ中将、攻撃隊発進のタイミングは任せます」

「エオニアの乱以前のベテランはかなり減りましたが、練度からすれば十分にいけますよ」

エオニアの首都星トランスバール進攻がもたらした、第1方面軍と近衛艦隊における航宙戦力の壊滅と、その後の戦闘では他方面軍艦隊の航宙戦力も少なからず消耗をした。

前者は、故ホップス元帥の英断で多くの空母や空母専用の乗員と整備兵などが逃がされていたおかげで、これらの戦力はパイロットの訓練と補充だけでどうにか戦力になるようにはなっていた。

パイロットをベテランにするのには時間がかかるが、それでも戦闘機類の教育コンピューターが進化していたので、昔よりは時間がかからなくなっている。

実は、優秀な空母の乗り組員や整備兵の方が、教育には手間がかかるようになっていたのだ。

それにイメージの問題もある。

もし成れるなら、人はどうしても格好良いイメージのあるパイロットになろうとする。

好んで整備兵や空母の乗組員になる人は少なく、これらの人員確保が新たな問題になりつつあった。

「とはいえ、犠牲は一番多いでしょうね」

「そこが、指揮官としては一番辛い部分ですけどね。では……」

ちょうど一通りの確認が終わったところで、今度は前方の敵艦隊から通信が入ってくる。

とはいえ、あの中で普通に話しがで出来る者といえば《オ・ガウブ》に座上するネフューリアだけであり、予想通りに通信を入れて来たのは彼女自身であった。

「御機嫌よう。己の分も理解できない下等種族のみなさん」

ネフューリアは、前と同じように相手を完全に見下したような口調と態度を崩さないでいた。

「ご自信がおありのようですね」

いつもと同じような表情でネフューリアに話しかけるウォルコット大将であったが、彼は心の中でこのヴァル・ファスクと呼ばれている連中の性質の悪さにすぐに気が付いていた。

普通、人間が所属する二つの勢力間における戦争は、ある程度犠牲が出たことろで理性のある者同士がそれを止めようと動き始める事が多い。

だが、その前提にはお互いが同じ人間で、話せば相互理解も可能であろうという土壌が存在しなければならなかった。

ところが、ヴァル・ファスクのネフューリアという存在は、人間を家畜と同じ程度にしか思っていない節が存在している。

こんな人物とは交渉などまず不可能で、となればこの人間とは相

容れない存在であるネフューリアをどうにか殺さないといけなかったからだ。

それも、一秒でも早くだ。

「自信ではありません。これは、定められた運命なのです。とはいえ、何の障害もなく事態が進むのも退屈というもの。数だけは準備しているようですし、少しは楽しませてくれるのかしら？」

「ええ、地獄への片道キップという娯楽ですけどね。最初に言っておきますが、行くのは私達ではありませんよ。あなたです」

「……。面白い冗談ね」

まさか、見た目は温厚な初老の軍人でしかないウォルコット大将がこんな毒を吐くとは思わなかったようで、ネフューリアは少しだけ顔を歪ませてから、またいつもの口調と態度に戻っていた。

「戦争ってのは、水物ですからね。やってみないとわからない部分もあるんですよ」

「年配者の経験というやつね。それに、その顔は笑っていても、私に対する目付きが気に食わないわ。『お前になんて、死んでも従わない』と目に書いてあるもの。あなたも、他の軍人達も、そしてタクト・マイヤーズ。あなたも」

ネフューリアは、エリオスやクレッシェンドやタクトも。

いや、この作戦に参加している全員がそういう目をしている事に気が付いていた。

特にタクト・マイヤーズは、先の資源衛生レミナスでの戦いで止めを刺し損ねた人間でもあり、だからこそ余計にその記憶に残っていたのだ。

「あの男は、さすがに艦隊指揮からは外れたようね」

あの男とは、同じく止めを刺し損ねたアキオ・レイトンの事であった。

「さあ？　それはどうでしょうか？」

「まあ、どちらでも構わないわ」

アキオが指揮官として戦場に出ればまた母親の偽者が使えるし、出なくても絶対に負けない戦力を準備していたからだ。

「では、みなさん。ご臨終までの僅かな時間をお楽しみください。あなた達を倒せば、残りは逆らう事など考えもしない従順な羊達ばかりでしょうし」

更にそうさせるために、ネフューリアはこの戦場にいる人間を全て狩り尽くすつもりなのであろう。

彼女の目は、まるでウサギを狙う猛禽類のようであった。

「女性とは、おっかない物ですね」

「うちは、女房で実感していますけどね」

「では、行きましょうか？　全軍、発進及び戦闘開始！」

ネフューリアからの通信が切れると同時に、ウォルコット大将は全戦力を《オ・ガウブ》の前方に位置する艦隊へと全総力で進撃させる。

「陣形は、何が何でも維持してください！」

鋒矢（ほうし）の陣形のまま物凄いスピードで突撃するトランスバール艦隊に向けて、右前、中央前方、左前に配置された敵無人艦隊から、バケツに入った水をひっくり返したような、ビームやレールガンやミサイルが容赦なく叩き付けられる。

一部不運な艦艇は、次々に炎上して一瞬で爆沈してしまうが、そのほとんどは最前線に配置された戦艦によって防がれていた。

しかも、その戦艦もまるで狂ったように全火器をぶっ放していたので、敵中央前方の艦隊は前衛を次第に崩させつつあった。

「アキオ」

「あの最前線にいる戦艦は、全て無人艦艇だな」

最前線部隊に、相手から大量の火器が叩き付けられるのは当然だったので、ウォルコット大将が事前に手を打っていたのであろう。

アキオは『さすがだな』と思いつつ、スクリーンで戦況を観察していた。

どのみち、エルシオールが目標地点に到着しないと自分達には出番すらなかったので、今は体を休めてリラックスするしかなかったのだ。

「これは、意外と短時間で終わるな」

「そうなの？」

「ああ、後先考えないで突進しているうちが勝つか、ほぼ全滅して負けるかさ」

そのまま敵中央艦隊の前衛に辿り着いた味方の無人戦艦部隊は、スピードを止めるどころか、そのまま損傷すら気にしないで、今度は中央や後衛部隊の陣形を掻き乱して攻撃を続行していた。

操作にミスがあったのか？

十数隻の味方無人戦艦が敵巡洋艦や空母や駆逐艦に突っ込み、大爆発して更に周囲の敵艦艇に損害を与えていた。

「そろそろだな」

「そろそろ？」

ランファがアキオの発言に首を傾げていると、無軌道な無人戦艦部隊の突入で混乱している敵中央艦隊に容赦の無い後方味方艦隊からの砲火が浴びせられる。

敵中央艦隊は、更に被害と混乱を拡大させていた。

「意外とやるわね。少し援護を増やさないと駄目ね……」

大損害を秒単位で量産している前中央の艦隊に、ネフューリアは左右から援軍を出すように指示を出していた。

全てが無人艦艇なので、それはまるで将棋の駒でも足すかのようなつもりで命令していたし、彼女は一人なのでそれに異を唱える参

謀などもいなかった。

もしウォルコット大将がそれをすぐに実行しようとすると、間違いなくマッコリ少将から反対意見が飛んだであろう。

なぜなら……。

「シードル少将」

「ああ、頃合だ。左右からの援軍が正式に陣形を整える前に！　各駆逐艦戦隊と突撃艦戦隊は、事前に定められたエリアの敵艦艇に対して光子魚雷攻撃を実施せよ！　シナモン参謀長！」

「はっ！」

「ナガト以下のザーフ級戦艦部隊は、援護の砲撃を開始！　一隻でも無事に、光子魚雷を発射可能なように援護するんだ！」

最初の突撃で、味方無人戦艦や同じ艦隊の巡洋艦や戦艦の陰に隠れていた駆逐艦戦隊と突撃艦戦隊はほぼ無事で、彼らはエリオスからの命令で一斉に、未だに混乱の続く敵中央艦隊に突入を開始していた。

当然、それに気が付いた敵艦艇から反撃の砲撃が行われ、戦場は更なる混乱に陥る。

「駆逐艦キョウト、シガ、ブリスベーン脱落！」

「旗艦駆逐艦コペンハーゲンが脱落！　ロイヤル准将が戦死しました！」

「まだ損害は3%にも達していない！　ひるむな！」

エリオスは、喉か枯れるかと思うほどの大声で指揮下の艦隊に命令を出し続けていた。

とにかく今は、一秒でも早く敵中央艦隊のいる場所に穴を空けて入り込むしかないのだと。

「ですが、これが成功しても三方から袋叩きです。無茶苦茶な作戦ですな」

「本当です。こんな作戦、この状態だから容認されるんでしょうね」

必死の努力が実り、数分後には九割の味方突入艦艇が装備していた全ての光子魚雷を発射していた。

数百発の光子魚雷は、損傷していたり無人戦艦の突入で混乱していた敵艦艇に容赦なく突き刺さり、その破壊力でほとんどの敵艦を爆沈させていく。

「今だ！」

エリオスは、指揮下の戦艦部隊と巡洋艦戦隊を引き連れて、残った敵中央残存艦艇の掃討と、この宙域の確保に入る。

予想通りに、《オ・ガウブ》の近くにいる中央の艦隊や、援軍には行かないで混乱していない左右の敵艦隊から容赦のない攻撃が行われ、エリオスの艦隊は徐々にその数を減らしていた。

「戦艦サガミ撃沈されました！」

「巡洋艦アオバ、キタカミも撃沈！」

「耐えてくれ！　装甲の厚い戦艦を外側に、駆逐艦には生き残っている無人戦艦や大型艦艇の残骸を障害物にして、一秒でも耐えるようにと！」

「了解しました！」

「（ヴァニラ、どうかこの僕に幸運を！）」

エリオスの必死の努力は、三十分後に味方本艦隊の到着によって報われる事となる。

「シードル少将、ご苦労様です」

「何とか生きていますけどね」

だがその合流した本艦隊も、敵の三方からの攻撃によって最初から苦戦の渦中にいた。

「最初から予想していたとはいえ、これは酷いですね」

次々と沈む味方艦艇の多さにウォルコット大将とマッコリ少将は顔を顰めさせていたが、それでもこの作戦しかなかったので今は淡々と状況を進めていくしかなかった。

「該当エリアの確保と、味方艦隊の配置が終了しました！」

「では、次の段階へ！　マイヤーズ中将！」

「了解しました！」

どうにか味方艦隊の全てが配置可能な中央前方のエリアを奪取したウォルコット大将は、次の作戦を開始する。
厳重に防衛していた機動艦隊を指揮するクレッシェンドを通信で呼び出し、そのまま全艦載機を射出するようにと命令を下していたのだ。

「まだ《オ・ガウブ》の前には、我々が撃破した艦隊の数倍の戦力がありますけど」

「頭の痛くなる話ですな。となると、出し惜しみは無しですね。全艦載機発進！」

「ああ、それと補給に戻った戦闘機も順次再出撃させてください」

「当然です」

「これは、言うまでもなかったですな」

クレッシェンドの命令で、二十隻を超える正規・軽空母から千機を越えるシムス高速戦闘機部隊が射出される。
そしてその半数に、艦船攻撃用の小型光子魚雷がセットされ、これによって少しでも《オ・ガウブ》への道を切り開く事になっていたのだ。

「立ち塞がる敵は、容赦なく排除せよ！」

光子魚雷を装備していないシムス高速戦闘機と、ネフューリアの操る無人のシムス高速戦闘機改とダークエンジェルが激突し、双方から多数の火球が発生する。

「隊長！」

「機体性能は、向こうに分があるようだな」

「それと、数もでしょう？」

「だが、腕前と戦法じゃ負けねえよ」

トランスバール皇国軍側のシムス高速戦闘機を率いるサーターアンギー大佐は、これで七機目の敵機を落しながら冷静に戦闘指揮を執っていた。

乱戦によって敵戦闘機部隊がこちらに向かっている隙に、残りの小型光子魚雷を装備したシムス高速戦闘機部隊を敵艦隊へと突入させたのだ。

小型とはいえ、突撃艦では一発で致命傷となる光子魚雷に気が付いた各敵艦艇から激しい防衛用の砲火が上がり、それによって次々と被弾したシムス高速戦闘機が一際巨大な火球となっていく。

光子魚雷の誘爆によってであったが、その爆発位置によっては火球に巻き込まれた敵艦艇も損傷してしまうという事態に陥っていたのだ。

「へんっ！　数の多さが、かえって不利になる事もあるんだ。艦隊を密集させ過ぎればこういう事態もありえるし、一部火器の使用が制限される事もある」

それに、艦艇の防衛火器では全ての戦闘機を落せるはずもなかった。

数は八割ほどに減っていたが、彼らは無事に小型光子魚雷の発射に成功。

その六割ほどを命中させて、敵中央艦隊に更なる損害と、小型光子魚雷発射後にはドックファイトにも参加して、敵無人戦闘機部隊への損害を増やしていた。

「どうだ？」

「突入可能な地点は幾分か増えましたかと。あとは、マイヤーズ大将の決断でしょう」

「そうだな」

シムス高速戦闘機部隊の攻撃によって、どうにか突入には成功しそうな敵艦艇の少ない通路の確保には成功していた。

勿論、万全な体制など絶対に不可能ではあったが、穴をこじ開ける事には成功している。

あとは、エルシオールとそれを護衛する紋章機に任せるだけであった。

「任せたぞ！　エルシオール！」

そしてその発言の数十秒後、タクトは遂に紋章機を護衛にエルシオールを前方に繰り出し始める。

「今までの友軍の奮闘を無駄にするな！　ムーン・エンジェル隊突入！」

エルシオールは、最速で前方の戦艦の残骸の隙間からまるで敵艦

隊を潜り抜けるかのように《オ・ガウブ》に向けて突進を開始していた。

「マイヤーズ大将」

「ウォルコット大将ですか？　どうかしましたか？」

突然エルシオールのスクリーンにウォルコット大将から通信が入り、タクトは普段はあまり面識のなかった彼と話し始める。

「ファラーメ改級高速戦艦四隻、タカチホ級高速装甲艦八隻からなる第二直衛艦隊を護衛に回します。この艦隊ならば、機動力でエルシオールに十分に付いていけますし」

「ですが……」

そうでなくても、残ったウォルコット大将の艦隊は、敵に三方から袋叩きにされて防衛で精一杯のはずであった。

そんな彼らから、また貴重な戦力を奪ってしまう。

ファラーメ級改は白き月にあった建造ドッグで量産が開始された最新鋭の戦艦であったし、タカチホ級高速装甲艦はミニ戦艦とでも言うべきの、惑星防衛艦隊の旗艦として建造がスタートしている、同じく非常に戦闘能力が高い艦でもあった。

そんな虎の子を苦戦しているウォルコット大将から奪ってしまう結果となったタクトの心の中は、申し訳なさで一杯になっていた。

「閣下のご心情に感謝いたします。必ずや作戦は成功させますので」

「レスター！」

「（ここで、この戦力を残して艦隊を三十分保たせるよりも、俺達が二十分早く《オ・ガウブ》を落とした方が犠牲が少ない。閣下の気持ちを察するんだ！）」

「……レスター……。わかりました」

「そうそう、お若い方は素直が一番です。もっとも、私の知己の若い人達は素直とはほど遠いかもしれませんが」

「言ってくれるね。ウォルコット大将閣下」

地獄耳で、ウォルコット大将の悪口を聞きつけたのか？
すぐ通信に、フォルテが割り込んで来ていた。

「ウォルコット司令、私は基本的には素直なんですよ。軍人として将校として嘘はついていますけどね」

続いて、決戦兵器に搭乗しているアキオからも通信が入り、仲の良い三人は久しぶりに顔を合わせ事になっていた。

「三人して、難儀な作戦に出ていますね」

「まあ、しゃあないさ。こういう難儀を乗り越えた後の酒は上手いと相場が決まっているんでね」

「ルフト宰相が、良い酒を準備してくれるそうですよ。三人で飲みましょうよ」

「そうですね。お二人ともご無事で」

プロの軍人であるためにさっさと通信を終えてしまった三人であったが、タクトはこの三人が強い信頼関係で結ばれている事に気が付いていた。

フォルテからしたら、ウォルコット大将は親代わりの存在であり、もしかすると少し異性としても意識しているかもしれないかった。

アキオからすれば、ウォルコット大将は自分を実父の陰謀から引き揚げてくれた人物であり、年齢は違うが同志のような関係であり、自分を心穏やかに見守ってくれる父親代わりのような人物でもあった。

ウォルコット大将からすれば、二人はその成長を見守る血の繋がらない子供のような存在であったのであろう。

さすがに、この関係には立ち入れないなと考えてしまうタクトであった。

「行くぞ！　エルシオール発進！」

タクトは、遂にエルシオールを《オ・ガウブ》がいる宙域へと向けて発進させる。

予想通りに戦場は混乱はしていたが、敵艦隊はすぐにエルシオールの存在に気が付いて攻撃を開始する。

だが、それは直衛を引き受けているムーン・エンジェル隊と第二直衛艦隊が引き受けていた。

「前方に敵巡洋艦……」

エルシオールの進路を塞ぐように敵の巡洋艦が配置されていたが、それをアルモが報告しようとする前に、四本の太いビームの火線が飛んで一瞬でその巡洋艦をスクラップにしてしまう。

そのあまりの速さに、アルモばかりかレスターやタクトすら唖然としていた。

「まだまだ先は長い。こんなんで驚いてどうする？」

その敵巡洋艦を破壊した第二直衛艦隊の司令から通信が入って来るが、その人物に二人は半ば反射神経的に姿勢を正していた。

「ウランフ教官殿！」

「教官殿だったのですか」

現在少将の地位にあるウランフは、タクトやレスターが士官学校時代に畏敬の代名詞とまで言われていた鬼教官であった。

専門は高速艦隊機動戦で、当時の階級は大佐。

浅黒く焼けた肌と、短く刈り上げた黒髪の短髪。

そして、身長二メートル、体重百十キロと鍛え上げられた肉体が特徴の軍人の中の軍人と呼ぶに相応しい人物であった。

だがそんな彼も市民階級の出身で、エオニアの乱が発生した時には第四方面軍に所属していて戦死は間逃れている。

その後は、戦艦部隊などを統率する指揮官として、数回の転任を繰り返し、今はウォルコット大将の下で働いていた。

「マイヤーズ大将閣下、ご無事でしたか？」

「止めてくださいよ。背筋がウズウズしますから」

「お前は、相変わらずだなぁ。クールダラスも相変わらずで苦労してそうだが」

「性分ですから」

「お前なら、そう言うと思ったがな」

ウランフは、この変わらないコンビを面白そうに眺めていた。

「あとは、中将閣下になったレイトンか」

「はい、いますよ。教官殿」

在学中からの癖なのかもしれなかったが、アキオも半ば反射的に通信を入れていて、ランファはその素早さに驚いている状態であった。

「おっ、うちの嫁には負けるが、綺麗な娘じゃないか。軍人なんてな。職場結婚くらいしか縁が無いんだ。上手く口説いて嫁にするんだな」

そう言いながら豪快に笑いつつも、ウランフは手信号で矢継ぎ早に指示を出し続けていた。

エルシオールを被弾させないように、細かな機動進路変更と攻撃目標への選定を繰り返していたのだ。

ウランフの発言にランファは顔を真っ赤にしていて、それを音声だけで聞いていたミントとちとせは密かに腹を立てていた。

そしてタクトは、そういえばアキオが以前にこれと同じような事をしていたのを思い出していて、その器用さに改めて驚いていたのだが。

「教官殿は、お優しくなられた」

士官学校時代には、『鬼の方がまだ優しい』とまで言われていた彼であったが、既に卒業した生徒達とは砕けた口調で話をする事が多い。

『卒業した以上は、同じ立場の軍人だから』というのが彼の口癖であったのだ。

「俺はこれしか能がないけどな。お前らは優秀で言うことも無いし、エスコート役は任せてくれ」

その言葉を最後に通信は切れ、再びエルシオール以下の突入部隊は厳しい機動戦闘を半ば綱渡り的に繰り返していた。

「ホダカ、損傷大で追い付けないそうです！」

「早めに総員退艦をするように。艦を操作する人員はそう簡単には作れん！」

「ミズホ、もう保ちません！」

「ちっ！」

第2直衛艦隊は、紋章機と協力して予定進路の八割を突破していたが、既に半数の戦力が脱落していた。
ハーベスターに紋章機の損傷修理を優先させていたので、追い付けなくなった後に総員退艦するパターンが増えていたのだ。

妨害の排除して、損傷の後に修理。
このパターンを数度繰り返していたが、タクトが時間を見るとまだ三十分ほどしか時間は経っていなかった。

だが、この突進に参加している者からすれば、その時間は何時間にも感じられるほどの激闘であった。

「意外と粘るわね……」

一方、《オ・ガウブ》で全軍の指揮を執るネフューリアは、敵の予想外の粘りに苦慮している状態であった。
相手が後の事を考えない攻勢を行っている事には気が付いていたのだが、戦力の再配置が遅れてそれを防げないでいたのだ。

だがこのまま放置していても、あのウォルコットなる総司令が指揮する艦隊は、徐々に三方から攻撃を受けてそう時間をかけずに全滅するであろう。

こちらへと肉薄しているエルシオールも、防衛する小艦隊は数を半数に減らしていたし、紋章機も全機が無事ながらも最初から五機しか存在していなかった。

唯一気になるのは、紋章機が一機足りないような気がするのだが、後で切り札で一機だけ出て来ても、それが決定打になるとも思えな

かった。
多分、交代要員として今は温存しているのであろう。
「愚かな……。人間が操らないと動かせない兵器など、安定性に欠けるというのに。さて、もう少しあの艦隊への攻撃を強化して……」
ところが、ここで戦場の様子に変化が現れていた。
三時の方向と九時の方向から、二つの艦隊が出現して左右の艦隊の隙を突くように攻撃を開始していたのだ。
「ふう……。何とか間に合った……」
それは、ジンロ大将が指揮する艦隊であった。
彼は他の星系や方面軍から使える艦を集めて編成し、二個の艦隊に分けてからこのタイミングで攻撃を開始していたのだ。
思わぬ方向からの不意の攻撃と、ここまでの味方の犠牲に耐えて絶妙なタイミングでの攻撃開始に、ネフューリアは珍しく相手の司令官を褒めていた。
「意外とやるわね。下等種族の癖に……」
とはいえ、この戦力が加わっても、数の差がひっくり返るはずもなかった。
戦略的に見れば、ただ全滅するまでの時間が増えただけであったからだ。
「時間を稼げれば、エルシオールが何とかするだろう」
そう達観して攻撃を続行するジンロ大将であったが、確かにその

間にもエルシオールは徐々に《オ・ガウブ》へと突進を続けていた。

「あんな船一隻くらい、どうという事もないけれど……」

ネフューリアからすれば、エルシオール一隻が眼前に迫っても蚊に刺された程度の脅威しか感じなかった。

火力の差で、まず向こうに勝ち目など存在しないからであった。

「とはいえ、あの切り札を使うのも面白いわね」

人間相手に心理戦というお遊びを行うために作った、あの大型戦艦の付属品であるＡＩインターフェイスは、レゾム経由で手に入れた二人の人物のデータを使っている。

一人は、あのエリオス・シードルの実父であったシードル公爵で。

もう一人は、アキオ・レイトンの実母であったキョウコ・レイトン。

共に普段の言動を膨大なデータを参考に真似をしているオモチャでしかなかったのだが、前回二人は面白いように狼狽して、碌に艦隊指揮すら出来ない有様となっていた。

「あのエリオスとかいう坊やは……。前衛にいるのね」

敵艦隊の行動パターンや通信の傍受からエリオスのいる位置を察知したネフューリアは、ちょうど右翼に置いていた偽者のシードル公爵にの攻撃命令を下す。

そして、ここまで全く姿が見えないアキオはエルシオールにいると断定して、左翼に置いていた母親の偽者を自分の傍に来るように

と命令もしている。

「あの二人の混乱振りが目に浮かぶようね。これでしぶとく粘っている下等種族もすぐに崩壊して終わりね」

ネフューリアは己の勝利を、それも楽しめる勝利を一分も疑わないまま、次第に数を減らす敵艦隊を楽しそうに眺めるのであった。

「シードル司令、敵右翼艦隊に動きがあります」

「陣形を変えるのか？　それとも、遂に最終局面か……」

「かなり大型の戦艦が、向かっているようです」

戦闘開始から二時間あまり、前衛部隊を指揮するエリオスは懸命に三方向からの攻撃に耐え続けていた。

既に所属する戦力の三割が戦闘不能となり、残りも無事な艦艇など一隻も存在しなかった。

とにかく、保持している無人艦艇を盾にして有人艦艇への損害を減らし、一秒でも現場に留まって時間を稼ぐしかなかったからだ。

幸いにして、エルシオールは順調に《オ・ガウブ》の目前にまで達している。

ところが、そんなエリオスの元に右翼から迫り来る大型戦艦の姿があった。

「司令、まさか……」

「同型艦ですね……」

それは、前に自分と兄を混乱させたあの偽者ＡＩが操作する船に他ならなかった。

「いくら巨大な戦艦でも、第５７戦隊の光子魚雷攻撃で……」

いつまでも、あんな偽者のために味方に迷惑はかけられない。

決意したエリオスは、その偽者の顔を見る前に数隻の戦艦による砲撃の集中と、ナガトの近くにいて比較的損傷が少なく、既に光子魚雷の次弾装填を終えている駆逐艦隊に命令を出そうとするが、その前に彼はまたスクリーンに姿を現していた。

「やはり悪い子だな、エリオスは。ネフューリア様の世界こそが、大半が愚かな人間を管理するのに最適な世界なのだから。さあ、エリオスよ。今の内に降伏するが良い。ネフューリア様とて、この膨大なトランスバール皇国を一人で全て面倒見るのは大変なのだ。と、そこまで言えばわかるな？」

歴史的に、少数の異民族や異種族が多数民族や種族を支配する際には、間に中間管理を行う者を置く事が多かった。

つまりネフューリアは、エリオスに裏切ってこちらに付けと促していたのだ。

ネフューリアは、先のエオニアの乱でその数と権限を減らした皇国貴族の間に多くの不満が渦巻いているのを知っている。

なので、公爵であるエリオスが裏切ってネフューリアの支配に協力すると断言すれば、いまだに無視できない貴族勢力を支配に利用

できると考えていた。

上手く利用して自分との間に置けば、今の皇国に不満のあるバカな貴族達は自らボロを出して民衆に嫌われるし、本来自分へと向かう不満をかわす事も可能だ。

何しろ、バカな貴族達が勝手に民衆から嫌われてくれるのだから。

この作戦を思いついたネフューリアからすれば、やはり人間は下等な種族ではあったのだが。

「さあ、エリオス。あとは決断するだけだ」

昔と同じ声で同じ話し方をするシードル公爵に、エリオスはやはり一瞬だけ動揺してしまう。

だが、彼はすぐに脳裏にあの少女の姿を思い浮かべていた。

『お父さんは、アキオさんや他の人には悪い人だったのかもしれません。でも、エリオスさんには良いお父さんだったはずです』

「……」

「さあ、エリオス」

「語るに落ちましたね」

「エリオス、お前は何を？」

「ですから、語るに落ちたと言っているのです」

まさか、反論されるとは思っていなかったのであろう。
ＡＩなので元々緊急事態や予想外の反応に弱いという弱点を有していたのだが、エリオスが自分に反抗的な口調で口を利くとは思っていなかったので、シードル公爵のＡＩは暫く言葉を選ぶのに苦慮してその動きを止めてしまっていた。

「やはり偽者は、本物を越えられないのですね」

思わぬ悪行が次々と出て来ていた父であったが、彼にはある信念が存在していた。
それは、自分はトランスバール皇国建国以来の大貴族の家系から出た人間であり、長年恩のある皇国を裏切る事は絶対にないという事実であった。

実の兄に汚れ役をさせて飼い殺しにしたのも、庶子である長男を殺そうとしたのも。
被害者から言わせれば堪った物ではなかったが、それでも皇国の重鎮であるシードル公爵家の安定化を考えてという事情も存在していたのだ。

その彼が、以前に故ジェラール皇王や故シーダマイヤ大将と組んでエオニアまで追放した彼が、簡単にトランスバール皇国を裏切るはずがない。

それが簡単に理解できると、今度は偽者の父に全く動揺しなくなっている自分に気が付くエリオスであった。

「エリオス、私は……」

「それに見苦しいです。先代のシードル公爵は……。私の父が悪事

を働いても、そんな言い訳がましい事など絶対に言いません。ナガト、ペンシルバニア、エゾは砲撃を開始！　第５７駆逐艦戦隊！　光子魚雷を発射！」

「待て！　待つんだ！　エリオス！」

相手を心理戦で動揺させるためにその容量を裂いているＡＩインターフェイスであったので、それが破られればさほど普通の無人艦艇と変わらなかったらしい。

次第に被弾数が増え、艦内に火災も発生して偽者シードル公爵はその対応に追われる事となる。

「それに、説得が無駄なら僕をすぐに討てば良かったんだ。その辺の対応の遅さも父とは違う。やはり、偽者は偽者だった」

「エリオスぅーーー！」

エリオスを動揺されるために接近し過ぎていた敵巨大戦艦に数発の光子魚雷が容赦なく突き刺さり、これが止めとなり巨大戦艦は誘爆の炎に包まれながら次第に崩壊していく。

その際に、偽者は本物の人間と同じように断末魔の声をあげていて、その変は妙に上手く出来ているのだなと感心するエリオスであった。

「ふう、思ったよりも動揺しないで討てたな。ありがとう、ヴァニラ」

「おや、恋人ですか？」

エリオスが、同じく懸命に戦っているエルシオールのいると思われる方向に視線を向けていると、参謀長であるシナモン准将が声をかけてくる。

「僕の幸運の女神かな？」

「それは、結構な事で。ところで、今回は普通に討てましたね」

レミナスでの戦いでシナモン当時大佐は、その隣でアキオが顔面を蒼白させ、そのまま指揮不能になっている現場を目撃している。なので、エリオスがあまり動揺もしないで、実父の偽者を討てた事に驚いているようであった。

「いくつか理由はあるけど……」

やはり、どう見ても細かな言動から偽者は所詮偽者であるという事実に気が付いたのと。

ヴァニラの励ましによって、自分にとって良い父は自分の心の中でのみ生きている事に気が付いたのと。

既に死んだ父のために、大切な女神を危険に曝したくないという理由からでもあった。

他にも、彼は父親であったという理由も大きかった。

もし兄のように母親を出されていたら、やはりその動揺は比ではなかったのかもしれない。

「レイトン司令は大丈夫でしょうか？」

「その点は少し心配だね」

男の子供にとって、やはり父親よりも母親の存在の方が大きい。
それに彼女は、父親の顔など知らなかったアキオの唯一の大切な肉親であり、彼女も純粋に自分の息子の身を案じるような人であったらしい。

それを考えると、あの偽者の母親は自分よりも遥かにアキオを混乱させる存在なのであろう。

「でも、大丈夫だと思います」

「ほう、どうしてそう思うのです？」

「兄にも、僕と同じく女神が付いていますから」

エリオスは、まだアキオとランファの関係が進展した事を知らなかった。
だが今までの経緯から、二人がくっ付く可能性を一番に感じていて、その彼女が決戦兵器のパイロットである事に本気で安心してもいたのであった。

「決戦兵器！　突入開始！」

ウォルコット大将から預けられた第二直衛艦隊と共に、敵陣深く《オ・ガウブ》からかなり近い宙域に到着したエルシオールであったが、どうやらここら辺が限界であったらしい。

既に十数回の被弾を受けて中破という判定を受け、その盾となっている
ウランフ中将の第二直衛艦隊は、ファラーメ改級戦艦一隻が沈没、一隻が大破の後に総員退艦していて、ウランフ少将の旗艦チンギス・ハーンも僚艦と共に中破の判定を受けている。

タカチホ級高速装甲艦については、残存艦艇が三隻にまで激減していた。
沈没が二隻で、大破後の総員退艦三隻と。
残った艦も中破以上の損傷を受けていて、これ以上の進撃は艦隊の全滅を意味していた。
勿論、エルシオールもそれと運命を共にするであろう。

「《オ・ガウブ》までの距離は？」

「２０００まで詰めました」

「タクト、ここまでで十分だ。ウランフ教官、ありがとうございました」

決戦兵器のコックピットに詰めていたアキオは、タクトとウランフ少将にここまで送って貰ったお礼を述べていた。

あとは、紋章機と組めば、十分に《オ・ガウブ》へと辿り着けるであろうからだ。

「すまんな、エルシオールはこの辺で限界らしい」

「シヴェ陛下の大切な御召艦だ。沈めると怒られるしな」

「言えているな。レイトンとランファの帰りを待つさ」

タクトは、早速にウランフ少将やその幕僚達と連絡を取ってその場での待機を決めていた。

とはいえ、ここはまだ敵艦隊の勢力下にある。

自分の身を守るのが精一杯で、時間をかければやはり全滅の危険性もあった。

「マイヤーズ、俺の艦隊も駄目だな。この半年で鍛えに鍛えて半分か。総員退艦が出来て、犠牲者の少ない艦があったのが救いだな」

大型艦艇の、それもウランフ少将のように高速機動戦闘を得意とするようなプロの軍人達を育てるには時間がかかる。

いくらコンピューターの類が発展しても、静止していても１００％当たらない砲撃を高速で動いていても当てられるようにするには、血の滲むような訓練が必要であったからだ。

エオニアの乱で枯渇した、その手のベテラン軍人をこの半年でどうにか訓練して揃えたウランフ少将としては、半数以上の艦が脱落という事態に頭を痛めていないわけがなかった。

「また一から鍛え直しか……。レイトン！」

「はい」

「お前、持っているらしいな？　後で進呈しろよ」

「了解しました。極上のブツを進呈します」

ウランフほどのベテラン軍人ともなれば、アキオが酒に関する横紙破りの名手である事は当然知っていた。
つまり、今日のお礼にそれを進呈しろ。
進呈するまで絶対に死ぬなと、彼は言いたかったのだ。

「しかし、教官殿は昔から変わりませんね」

アキオは、士官学校時代に鬼教官と呼ばれていたウランフ大佐殿を良く覚えていた。
それでも、彼は実習以外では意外と話のわかる面白い人で、士官学校の生徒達の中で彼を嫌っている人はほとんど存在しなかったのだ。

「お前は変わったな」

「そうですか？」

「ああ、良い方向に変わった」

ウランフは、士官学校開校以来の天才であるレスター・クールダラスに、次席ながらもその才能が他の生徒達を凌駕するアキオ・レイトン。
それに、成績はビリに近い癖にどこか掴みどころがなくて常人には評価が難しかったタクト・マイヤーズの事を良く覚えていた。

他の年次の主席など霞むほどの、才能と個性の固まりのような三人であったが、その三人の中でアキオは、表面上は社交的ながらもどこか人を避けるような態度が気にはなっていたのだ。

ウランフはすぐにその事情を知る事となったが、今久しぶりに顔

を合わせた彼は、同年代の友人も出来ていて、その表情が見せ掛けではない明るさを持つようになった事に気が付いていた。

「同年代の友人……。他に女か？」

ウランフは、アキオと一緒にスクリーンに映っていたランファを一瞥して意味あり気な笑顔を浮かべてから通信を切っていた。

「アキオ、私達って気が付かれていない？」

「あの人、見た目とは違って結構鋭いからなぁ」

筋骨隆々で三十代半ばの大男なのに、意外と恋愛の機微に詳しい。噂によれば物凄い美人の奥さんがいるそうなので、見た目とは違って女性の扱いなどではアキオよりも長けているという事なのであろう。

「さてと……。色々と課題も多いから、さっさと行くか」

「ええ」

「と、その前に……。ランファ」

「何よ？」

アキオは、後部座席に座っている自分の呼びかけで後ろを向いたランファの下顎にそっと手を添えると、素早くキスをしていた。

そのあまりの素早さにランファはただ呆然としてしまい、すぐに恥ずかしさで顔を真っ赤に染めていた。

「ああっ！　アキオっ！」

「気合入ったか？」

「入ったけど……」

ランファはそう答えつつも、実に手馴れた感じでこんな事をしたアキオも顔が赤い事に気が付いていた。

きっと自分も精一杯なはずなのに、無理をして気を使ってくれているのだと。

それと、やっぱりこの分野では意外と不器用で、まず浮気とかは無理そうなアキオに、ランファはなぜか嬉しくもなってもいた。

「さあ、行くわよ！」

「ああっ！」

ランファの合図で遂にエルシオールから決戦兵器が離脱し、フォルテ達の援護の元、全速力で《オ・ガウブ》へと突進を開始する。

勿論、その姿はすぐに敵艦隊の探索に引っかかり、まだ数のある敵無人艦艇が決戦兵器を撃ち落そうとその進路を妨害したり、過剰なまでの砲撃を繰り返していた。

だが、それはムーン・エンジェル隊の懸命の防御によって阻止される事となる。

「悪いが、落とさせるわけにはいかないね！」

ハッピートリガーのストライクバーストが、敵の戦艦を一撃で破壊し。

「最後まで守り通させていただきますわ」

トリックマスターのフライヤーダンスが、一度に五機もの無人戦闘を撃ち落とし。

「行かせません！」

シャープシューターのフェイタルアローが、決戦兵器の進路を妨害しようとした二隻の巡洋艦の機関部を遠距離から正確に撃ち抜き。

「損傷は軽微です。リペアウェーブ」

ハーベスターは、軽微ながらも損傷を負った決戦兵器を一瞬で修理し。

「ランファ、アキオさん。もうすぐですよ」

ラッキースターが、ハイパーキャノンで敵の駆逐艦や突撃艦を一斉に薙ぎ払う。

「よし！　行けるぞ！」

「待ってなさい！　ネフューリア！」

ムーン・エンジェル隊の活躍により、決戦兵器は《オ・ガウブ》をもう少しでネガティブ・クロノ・ウェーブ・キャンセラーの有功射程圏内の納めようとしていた。

ところが……。

「下等生物の癖にヒヤっとさせてくれるわね。でも、私には切り札があるのよ」

眼前に迫る決戦兵器を見ながら、ネフューリアはその指を一度だけパチンと鳴らす。

すると、《オ・ガウブ》の影から一隻の巨大戦艦が出現していた。

「これを撃てるものなら撃ってみなさい。アキオ・レイトン」

ネフューリアは、自分が賭けに勝った事を確信していた。

下等生物の中で油断ならないカテゴリーに入れている、タクト・マイヤーズとその腹心達。

特に、アキオ・レイトンの姿がこの戦いで見えない事に疑問を感じていたネフューリアは、あの偽者の母親を自分の手元に引き寄せて待機させていたのだ。

そして、アキオもその戦艦に見覚えがあった。

資源衛星レミナスにおける戦いで、自分を激しい動揺と屈辱に誘ったあの偽者の母。

その彼女が、いや正式に言えば偽者のＡＩインターフェイスが操作している艦であったからだ。

「まさか、こんな小物に向けて来るとはなぁ……」

いくら自分が戦場で確認できなくても、あれほどの火力を持つ戦艦ならば普通に戦場に出しても役に経つはず。

そんなアキオの甘い考えを一瞬で撃ち砕く、策士としての性格も強いネフューリアの容赦の無い作戦であった。

巨大戦艦は、《オ・ガウブ》の真正面に移動してアキオ達を待ち構えていた。

「その巨大戦艦ごと私を撃てるかしら？　撃ったとしても、無駄である事には変わらないけど」

ネフューリアはまだネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーの存在には気が付いてはいなかった。

だが、アキオ達が攻撃に躊躇すれば、すぐに気が付かれてしまうであろう。

そして彼らが落とされれば、その時点でトランスバール皇国軍から勝機は消えてしまう。

アキオは、再び危機に陥っていた。

「悪辣だな」

「ああ、わかっていても引き金を引く手を止めてしまう」

《オ・ガウブ》の真正面に位置した巨大戦艦は、接近する決戦兵器に砲撃を加えながら、ブリッジにいる偽の母親の映像を近辺の全てのトランスバール皇国軍艦艇に発信していた。

「レイトンが折れて、こちらの希望が消える瞬間を実況放送か……」

「そうなれば、こちらもウォルコット大将の艦隊ももう保つまい」

タクトとレスターは、その放送を受信しながらネフューリアの悪辣さを再確認していた。

「アキオ、こんな戦いは止めてお母さんに顔をみせてちょうだい」

悲しそうな表情で、実の息子に戦わないようにと説得を続ける母親の姿。

いくら偽者でも、これは辛いと感じてしまうタクト達であった。

「だが、引き金を引くのはフランボワーズ大尉だろう?」

「そこがまた悪辣なんですよ」

放送を見ていたウランフ少将がタクトに疑問を呈していたが、タクトにはわかっていた。

アキオの事を本当は好きなランファが、いくら自由に引き金を引けるとはいえ、アキオの許可もなく勝手に引き金など引けないのだという事に。

普段は強がっているが、ランファは本当は誰よりも優しい女の子であるという事にもだ。

「そうか……」

「でも、大丈夫ですよ」

「どうしてわかるんだ?」

「まあ、ミルフィーも戦場にいますし」

「お前なぁ、こんな時にノロケか？」

タクトとミルフィーユの関係などとうに理解していたウランフ少将だったので、こんな時にノロケてしまうタクトに文句の一つも言いたくなっていたのだ。

「レイトンは、ミルフィーを幸運の女神だと信じていますしね」

「自分の彼女でもないのにか？」

「まあ、そこは複雑なんですよ」

アキオとミルフィーユとの関係は、実は少し複雑でもあった。アキオはミルフィーユを妹のような、友人以上恋人未満のような関係だと思っていて、ミルフィーユの方も同じように考えていたからだ。

それにアキオは、彼女を自分を不幸から引き揚げてくれた幸運の女神だと思ってもいる。

だから彼女のお願いはすぐに聞いてしまうし、何かミルフィーユが不始末を起こしても絶対に怒るような真似はしない。

その辺が、タクト、ランファ、ミント、ちとせなどをたまにヤキモキとさせるのだが、これはもう諦めるしかない部分もあったのだ。

「なるほどな」

そして肝心のアキオであったが、やはり体が震えて体中から冷や汗を流している状態であった。
更に端末を操作する指も震えていたが、二度も同じ手を食らうかと勇気を振り絞ってランファに自分の意見を伝えていたのだ。

「ランファ、撃て」

「アキオ、でも……」

「早くしないと間に合わなくなる……」

そうこうしている内に、決戦兵器は巨大戦艦の目前にまで到着していたが、その頃にはアキオ達への砲撃を止めて偽者の母親が説得をというか、声かけを続けている状態になっていた。

「アキオ、お母さんと二人で暮らしましょう」

「うるさい！　偽者がほざくな！　ランファ！」

「でも……」

ランファは、心の中で迷い続けていた。
あのアキオの母親は偽者で、ただのデータを再現する機械でしかない。
だが、それでもアキオは動揺していて、もし彼女を撃ったらせっかく相思相愛になったアキオに嫌われてしまうのでは？
そう考えると、不安で一杯になって引き金を引けないでいたのだ。

「撃つんだ！　ランファ！」

「撃てないわよ！　いくら偽者でも、アキオは心の奥底では納得していないかもしれない！」

「それは……」

ランファの意見は、まさに図星という他はなかった。

確かに、自分は操縦桿を握っていないからこその強気の発言であったが、もし目の前でランファが母親の姿をした物を討ってしまえば……。

何らかの隔意を感じてしまう可能性はあったからだ。

「ランファ……」

「あははははっ！　下等生物は悩みが多くて大変ね」

完全に足を止めてしまった決戦兵器を見て、ネフューリアは己の作戦がズバリと当たった事に喜び、大声で笑いながらアキオ達を見下していた。

「感情なんて不要な物なのよ。だからこそ、我がヴァル・ファスクは最強。下等種族を支配する権利がある」

「違います！　そんな事はありません！」

そこに、突然ネフューリアの発言を遮る人物が現れる。

それは、辛うじてアキオ達に追いついたミルフィーユであった。

「ネフューリアさん、あなたにはお父さんとお母さんはいないんで

すか？　一緒に食事をしたり、休みの日に公園や遊園地に出かけたり。そんな想い出は無いんですか？」

「小娘が、何を言うかと思えば……。そんな昔に終わった出来事に何の意味があるの？　あのバカな男は、終わった過去の幻想に縛られて他人の足を引っ張っている。常に一人の私達は、絶対にそんなミスはしないわ」

「そんなの悲し過ぎます」

常に一人で、それでいて多数の人間を支配しようとしているネフューリアという人物が、ミルフィーユには全く理解できなかった。

何かを成し遂げて、その成功を分かち合う仲間すらいないのにどうしてこんな事をするのか？

ミルフィーユは、まだ自分に付いて来てくれた者達のために反乱を起こしたエオニアの方が、心情的に理解できると思っていたのだ。

「大きなお世話よ。何を言っても常に一人の私が勝って、肉親の情などという幻想を抱いているお前達が負ける」

「違います！　アキオさんにとってのお母さんは、何者にも替え難いとっても大切な人なんです！　そんな大切な人との想い出が、それを理解できないあなたになんて負けるはずがありません！」

「おやおや、意味不明な妄想を吐く小娘だね」

「アキオさんのお母さん！　目を醒ましてください！」

「ははははっ！　いよいよバカも本格的になったわね！　アレはあくまでも姿・形・声を似せた偽物の機械なのよ！」

「アキオさんのお母さん！」

「（ミルフィー、いくら何でも無理よ……。こうなれば……）」

ミルフィーユとネフューリアとのやり取りを聞いていたランファは、ある決意をしていた。

このまま何もしないで負けるよりは、自分がこの引き金を引く。

この距離ならば、先にネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーを使えば、巨大戦艦ごと撃ち抜いてネフューリアを殺せるはずであった。

「（もしアキオに嫌われてしまっても……。それでも、これ以上アキオが苦しむのを止める事が出来れば、私は……）」

決意したランファが、ネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーのスイッチを入れようとした瞬間、今までは中身の無い言葉でアキオを翻弄していた偽者の母親が、急に黙り込んでしまう。

「？？？」

ネフューリアは、急に機械の故障でも発生したのかと密かに疑問を感じていたのだが、その答えはすぐに判明する事となる。

あの幸運の女神であるミルフィーユが、再び奇跡を起こした瞬間でもあった。

「……っ、アキオ」

一度動きを止めて再起動を果たしたＡＩであったが、その様子は以前とは少し違っているように見えた。

今までのように中身の無い言葉ではなく、まるで本物のアキオの母親が声をかけたような雰囲気になっていたからだ。

「暫く見ない内に大きくなったわね。それに、格好良くもなったわ」

「母さん？」

「ごめんなさい。私は、あなたに迷惑をかけたくないのに……」

「まさか……」

この発言で、アキオもランファもこの人物というか幽霊というか、とにかく彼女が本物のアキオの母親であるキョウコ・レイトンに切り替っている事に気が付いていた。

いくらヴァル・ファスクでも、既に何年も前に死んでいる人間の、それもまだ実在が証明されていない魂のデジタル化などまず不可能であった。

それなのに、この見た目と声だけが似ている偽者には、なぜか本物のキョウコ・レイトンが宿っている。

こんな奇跡を発生させられるのは、間違いなく強運の持ち主であ

るミルフィーユだけであろうと、アキオもランファも考えていたのだ。

「バカな！　あれは外見と声だけ似せてある機械のはず！　言動パターンも膨大なデータの解析結果にしか過ぎないのに！」

ネフューリアは、今生まれて初めて恐怖という物を感じていた。

それも、自分に匹敵するかそれ以上の戦力を持つような敵に対してではない。

簡単に捻り潰せるはずの、幼い小娘が起こした得体の知れない奇跡によってであった。

「本当に、ごめんさない」

本当に申し訳なさそうに謝る母を見て、アキオは彼女が本物である事を確信していた。

あの八年前の臨終前に、最後に会話をした時と全く同じように見えていたからであった。

「違うんだ……。母さんは、悪くないんだ……」

「アキオ……」

久々の母親と会話が出来る嬉しさと、母に謝らせてしまった悲しさとで、アキオは涙を流しながら彼女との貴重な会話を続けていて。

そしてそんなアキオを、ランファはただ静かに見守っていた。

「まさか、大人になったアキオと話が出来るとは思わなかったわ。もうこれで思い残す事はありません。また会えるのは何十年後かし

らね？　アキオ、絶対にまだ私の元に来てはいけませんよ」

「はい……。母さん……」

キョウコの口ぶりだと、あの世という場所は存在するらしい。
そしてアキオは、それを本気で信じても良いとまで思っていた。

「それと、ランファさんでしたっけ？」

「はっ、はいっ！」

まさか自分が話しかけられるとは思わなかったランファは、完全に上ずったままの声で呼びかけに答えていた。

「アキオのために、決心をしてくれてありがとう」

「いえ、私は……」

「それでも、ありがとう」

キョウコの言う決心とは、例えアキオに嫌われる事になっても、彼をこれ以上苦しめないためにネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーのスイッチに手をかけた事であった。

キョウコは、アキオの事が好きな他のミントやちとせの事は知らなかった。
だが、好きな相手に嫌われる覚悟をしてまで、その相手のために行動しようとしたランファを、自分の息子に相応しい女性だと感じていたようであった。

多分、ミントやちとせでは、絶対にスイッチに手をかけようとは思わなかったであろう。

「あの……。私は……」

「ランファさん、私はアキオの過去の思い出でしかないの。アキオの未来の思い出を作るのはランファさんを中心とした人達。ランファさん、アキオをお願いします。そして……」

今まで笑顔を浮かべていたキョウコの顔が一瞬にして真面目な物となり、その矛先はまさかの奇跡に動揺して何も出来ないでいたネフューリアへと向かっていた。

とはいえ、今の彼女に何かをする事など不可能であった。

ネガティブ・クロノ・ウェーブで囲われている《オ・ガウブ》に傷を付けられる物は存在しなかったが、逆に《オ・ガウブ》も、ネガティブ・クロノ・ウェーブを作動させている間は相手を攻撃できない。

そのための巨大戦艦でもあったのだが、もはや完全に彼女は敵に回っていたのだから。

「ネフューリアさん」

「バカな！　なぜコントロールが奪えない！」

普段はＡＩが操作している巨大戦艦であったが、当然上位指揮権はネフューリアが有している。

ところが今は完全にコントロールをキョウコに奪われていて、それにネフューリアは更に恐怖していたのだ。

自分の頭では理解できなかったのが、余計に恐怖として増幅されていたようであった。

全く考慮していなかったピンチに弱いのは、どうやら人間でもヴァル・ファスクでも全く同じ事のようであった。

「撃ち落せ！」

ネフューリアからの半ば悲鳴のような命令で、周囲にいた数隻の敵艦が一斉に攻撃を仕かけるが、巨大戦艦は決戦兵器に向かっていた分までそれを余裕で防ぐと、搭載している大量の火器で一瞬の内に全てを破壊していた。

「バカな！」

「この艦は、本来（オ・ガウブ）の最後の守り。ただの無人艦艇では勝てませんよ。それは、あなたが……」

「近寄るなーーー！」

完全に錯乱状態となったネフューリアは、今までの余裕な態度すら忘れて《オ・ガオブ》を転進させようとする。

だが、それをそのまま見逃すつもりなど、アキオにもランファにもキョウコにも存在しなかった。

「ランファ！」

「わかったわ！」

ようやく元の状態に戻ったアキオは、素早くランファにネガティブ・クロノ・ウェーブキャンセラーのスイッチを入れさせる。
すると、《オ・ガウブ》の周囲から無事にネガティブ・クロノ・ウェーブの反応が消えていた。

「アキオ、私は自分で自分の身にケリを付けます。あなたに親殺しはさせません」

「母さん！」

「アキオ、ランファさんと幸せにね」

その言葉を最後に通信は切れ、巨大戦艦は逃亡しようと回頭中であった《オ・ガウブ》の機関部へと突入し、そのまま自爆して大爆発をする。

全てのスラスターを破壊された《オ・ガウブ》は、これで完全に逃げる手段を失っていた。

「母さん……。すいません。そして、ありがとう。ネフューリア！これでチェックメイトだ！」

「ええ、アキオの言う通りね。覚悟しなさい！」

二回目の母親の最後を見てしまったものの、アキオにもランファにも、もう迷いは存在しなかった。
既に死の世界に存在していて何の力も無いはずの母が、息子である自分のために自分の身を自分で処した。

彼女は孤児に生まれて、特に高等な教育を受けているわけでもな

い。
それでも、自分が今行える最良の行動で自分の息子を救った。
何かの利益のためでもなく、ただ一人の母親として息子の身を救うためにだ。

「そんな！　あんな下賤な女にぃーーー！」

まさか、碌な軍人訓練すら受けていない、非科学的な幽霊のような存在に敗れたネフューリアは、間髪入れずに発射されたクロノ・ブレイク・キャノンによって、その体を原子の単位にまで分解されてその生涯を終えるのであった。

これにより、《オ・ガウブ》は撃沈して崩壊し、ようやくにトランスバール皇国軍の勝利が決定するのであった。

そしてその様子は、この決戦が行われている宙域全てに流れていた。

「おい、タクト……」

「陳腐な言葉だけど、母の力は偉大だな」

エルシオールのブリッジで、タクトとレスターは『久しぶりに母親と連絡でも取ってみようかな？』などと考えていた。

「ウォルコット司令……」

「偉大な方ですね。さすがは、あのレイトンさんを生んだ女性という事ですか……」

総旗艦イセのブリッジで、完全に停止した敵無人艦隊に囲まれているのを確認したウォルコット大将とマッコリ少将は、初めて顔を見たアキオの母キョウコに対して尊敬の念を表していた。

「母上……」

「シヴァ、私はこの世で一番素晴らしい母親を見たのかもしれません」

「はい……」

「ですが、あの方を超えないと、今のシヴァではレイトン中将は相手にしてくれませんよ」

「それは言わないでください。母上」

白き月の総司令部で、二人きりのシヴァ陛下とシャトヤーンは親子としての会話をし、シヴァ陛下は自分が女としてアキオに好意を抱いている事実がシャトヤーンにバレている事を知って、少しショックを受けていた。

「ですが、見れば誰にでもわかりますし」

「それよりも……」

戦況の最終局面も気になっていたが、キョウコの最後の言葉である『アキオ、ランファさんと幸せにね』が実はかなり気になって仕方が無いシヴァ陛下であった。

「終わったか……」

「ええ」

自分の母親が機関部に突入・自爆して機動力を失った《オ・ガウブ》を決戦兵器のクロノ・ブレイク・キャノンで撃ち抜いたアキオとランファは、スクリーンで《オ・ガウブ》の残骸や、主を失って漂流している敵無人艦艇や戦闘機などを眺めながら、コックピットシートの背もたれに体重をかけて横になっていた。

さすがに肉体的にも精神的にも疲れたていたし、《オ・ガウブ》の爆発の余波でエンジンが故障していたので、素早く救援信号を出してから休む事にしていたのだ。

「良いお母さんだったわね」

「まさか、また話せるとは思わなかった……」

死んだ人間が、偽者のＡＩインターフェイスに憑依するなど前代未聞な出来事であった。

実際に、白き月にいるノアから、『後で報告書を送りなさいよ！』という通信も入って来ていて、あの黒き月の管理者であるノアが驚

くくらいなのだから、そのくらい奇跡に近い出来事であったのだ。

それにあの映像は、この作戦に参加していたトランスバール皇国軍艦艇の全てに通信映像として流れている。

多くの人達が、実際に目撃した奇跡でもあったのだ。

「あんたがマザコンなのも良くわかるわ」

「まあな……」

今さら人にマザコンと言われても何も感じないアキオであったし、別にそれを否定しようとも思わなかった。

生まれてから十五年間を一緒に過ごしたかけがえのない家族であり、アキオの人生観や女性観に大きな影響を与えた人物なのだから。

「だが、母も言っていたけどな。確かに母との想い出は美しくて素晴らしい物だ。でも……」

「でも、何なの？」

「これからは、それ以上に新しい素晴らしい思い出を作れば良い。過去に縛られるな。未来を楽しめってさ」

「あっ、アキオっ！」

そう言うとアキオは、ランファを前の座席から見た目以上の力で自分の後部座席へと引き上げ、そのまま膝の上の乗せて肩と腕にそっと手を回していた。

「手馴れているわね？」

「気のせいだろう」

「でも、いいの？」

「フォルテの言う作戦終了までだ」

「そう言われると……」

アキオは、そのままそっとランファの唇を自分の唇で塞ぐ。

もう誰に隠す事もなく、誰に見つかっても構わないと思っていたからだ。

そして、ようやく決戦兵器の救援信号を探知した多くの仲間達から通信が入って来るのだが、彼らはコックピット内で長々とキスをしている二人に絶句する事となる。

「おい、レイトン……。えっ！」

「レイトン？」

「そうだ、レイトン。譜代点をやる」

まずは、タクトとレスターが珍しく動揺して、ウランフ少将は珍しく一発目で元の教え子を褒めていた。

「兄さん？」

「あちゃーーー」

「若いって素晴らしいですね」

続いて、エリオス、マッコリ少将、ウォルコット大将もそれに続き。

「いや……、私も作戦終了までとは言ったよ。でも、早過ぎないかい？」

「タクトさん、私達もこんな感じで」

「あの……、エリオスさん」

フォルテ、ミルフィーユ、ヴァニラは驚いてはいたが、こんな事があっても、特に不思議ではないと心の中では密かに思ってはいた。

だが……。

「私、フラれたんですか……」

「アキオさん……」

あまりのショックに、勝利の余韻さえ吹き飛んでいたいたちとせとミントは絶望の淵に立たされ。

「アキオの奴！　不謹慎ではないか！」

「いいんじゃないの？　もう勝ったんだし」

「ノアは黙っていろ！」

「あら、暴君ね。シャトヤーンはどう思う？」

「シヴァ、ここは持久戦でチャンスを待つくらいの度量を見せないと」

「そうよ、この世には『あなただけ』なんて言って、すぐに別れるカップルとかも存在するじゃない」

「お前、変な事に詳しいな」

「大きなお世話よ」

シヴァ陛下、ノア、シャトヤーンの三人は女同士の会話を続けていたが、その近くでハブられたルフト宰相は一人地味に戦闘後の処理を命じ続けていた。

こうして、ひと波乱もふた波乱もあった第一次ヴァル・ファスク戦争は防衛側のトランスバール皇国軍の勝利で終了するのであった。

第二部　第十話（暫定版）（後書き）

次は、第二部のエピローグです。

またスラスラ書けるといいな。

第二部　第十一話（暫定版）（第二部終了）

「終わりましたね」

「ええ、終わりました。久しぶりに随分と疲れましたよ」

トランスバール首都星と白き月の占領を目指して、超巨大戦艦オ・ガウブ以下多数の無人艦隊を率いて侵攻して来たヴァル・ファスクのネフューリアは、己が下等種族扱いして見下していた人間によって討たれ、その身を宇宙に散らす事となっていた。

戦場は《オ・ガウブ》の撃沈と同時に、ネフューリアがコントロールしていた多数の無人艦艇や無人戦闘機などが一斉に停止し、それを見たジンロ大将やウォルコット大将は、指揮下の軍人達に対して攻撃を控えるように命令していた。

既に動かなくなった無人艦艇に攻撃を加えるなど、弾薬やエネルギーの無駄だけではなく、せっかく鹵獲すれば僅かな改良で使える最新兵器類を無駄にする行為であったからだ。

先のエオニアの乱でもそうであったが、皇国としてはなるべく国内の復興や新規開発に国家予算を使いたいところであり、それでも軍備の増強は対ヴァル・ファスク戦を考慮して必須課題となっていたので、これを埋めるのに鹵獲した敵兵器類は非常にありがたい贈り物でもあったからだ。

「この短時間で、戦力を３２％も喪失しました」

お互いに、旗艦のブリッジ内で通信をするウォルコット大将とジ

ンロ大将であったが、次第に入って来る正確な損害報告に、二人とも正直頭痛がしてくる思いであった。

いくらある程度予想されていた損害とはいえ、実際に報告を聞くとやはりガックリと来てしまうのが事実であったからだ。

「ジンロ大将の艦隊は、まだ良いじゃないですか」

「僅か二時間で、死角からの奇襲攻撃。これで８％の損害って……。あのネフューリアという女はデタラメですね」

いくら時間を最優先したとはいえ、ウォルコット大将の艦隊でも僅か五時間ほどしか戦闘をしていないのに、これだけの損害を受けてしまっている。

資源衛星レミナスから始まり、侵攻途上で五箇所の資源衛星やそれに倍するエネルギープラントなどを占領し、そこにあった資材を使用してトランスバール皇国宇宙軍全軍に匹敵する艦隊を揃えたネフューリアに対して、ジンロ大将はあの世に文句でも言いに行きたくなっていた。

軍の損害は、最近人員の損耗が激しいので無人艦艇の有効活用や、既存艦を改良しての人員の省力化によって、思ったほど戦死者は出ていなかった。

とはいえ、それでもゼロではなかったし、こんな損害は無ければ無いに越した事はなかったのだから。

また、それに比例して艦艇なども多く失っていたが、これは現在停止して宇宙を彷徨っている敵無人艦隊を鹵獲する事によって大分埋め合わせが可能であろう。

全艦、黒き月によって改良が施された新規設計艦艇ばかりで、同型艦が多くて運用が楽であるというもの良かったし、もう既に生産されているので軍の予算を圧迫しないで済むという利点もあった。

そうでなくても、今回の後に第一次ヴァル・ファスク侵攻戦と名付けられた今回の戦争では、再びトランスバール国内が荒廃してしまったのだから。

なるべく軍事予算を抑えて国内の復興に使いたいが、また攻めて来る可能性が高いヴァル・ファスクのために軍事予算を増額もしたい。

このジレンマに、これらの鹵獲艦艇群は非常に役に立つはずであった。

ただこの無人艦艇の材料は、本来トランスバール皇国では民需用とされて貯蔵されていた物であったので、これらの手配は確実に行わなければいけなかったのだが。

驚異的な外敵は一時的には排除できたものの、多くの技能を持つ軍人と、予算をかけて揃えた艦艇などと、本来民需に回されて経済成長に使われるべきエネルギーや資源などをただ食い潰しているという今の現実に。

皇国の政治家・官僚・高級軍人などは、明日から頭が痛くなってくるに違いなかった。

「戦場の整理は、私が責任をもって行いますので」

「悪いですね」

「実働時間が短いですし、うちの艦隊の方が被害は少ないですからね……」

更に、本来であればウォルコット大将ではなくて自分がこの戦いの総指揮を執るべきであったのを、こちらの都合で遅れてしまっている。

しかも、ウォルコット大将は護衛艦隊側の人間であったし、せめて戦場の後処理くらいは、自分が総指揮を執るべきであると考えてもいた。

他にも、この戦場に停止している敵無人軍艦の優先権は正規艦隊である自分達にあるので、余計に回収は自分達ですべきであったのだ。

「それに、呼ばれているのでしょう？」

「ええ、まあ」

この戦いの前に、タクト・マイヤーズはルフト宰相に対して戦勝後の祝勝会を行う旨と、その費用負担をシヴァ陛下に対してもお願いしていた。

軍人は戦いの勝敗を聞かれると勝利を口にするが、それを全く疑う事なく、しかも厚かましくも祝勝会の予算まで要求できるタクト・マイヤーズという男の肝の太さに、ジンロ大将はとても自分には真似できないと思っていたのだ。

「ムーン・エンジェル隊メインの祝勝会に呼ばれる、ウォルコット大将ってのも凄いですね」

「まあ、知人がいますから」

敗色濃厚とまで言われていた戦いでの勝利だったので、後で他の軍人達も祝杯を挙げるのであろうが、やはりその最大の功労者であるムーン・エンジェル隊の祝勝会には出てみたい。

何しろ、みんな美少女揃いらしいし。

という将兵達の噂を、ジンロ大将も聞いていた。

だが、実際にはそこに顔を出せる者はほとんどおらず、いくらジンロ大将が職権を乱用しても難しいのが実情であろう。

現実には後片付けが急がしくて、そんな物に出ている時間がなかったのだが。

自分の艦隊や、ウォルコット大将から指揮権を返して貰う正規艦隊に所属している艦隊の、損害報告や再編。

それに、敵無人艦艇や無人戦闘機の鹵獲・曳航作業の指揮に、破壊されたネフューリアの母艦であった《オ・ガウブ》の残骸を出来る限り回収して、調査を行う白き月や軍の技術者達に引き渡さなければいけなかった。

「（本音では、出てみたいがな）後処理は、私にお任せください」

「すいませんね」

一通り話を終えた後で、ウォルコット大将は総旗艦イセを祝勝会が行われる白き月へと向けながら、マッコリ少将と話をしていた。

「たまたま、ジンロ大将が遅れてしまったせいで執った指揮ですか

らね。ここはすぐにお返しするべきでしょう」

それに、アキオとウォルコット大将が雛形と基礎を作り、遂には正規艦隊と同格の組織にまで成長した護衛艦隊ではあったが、いくら必要な組織とはいえ、そのせいで予算や人材の配分で割を喰っている正規艦隊に所属する将兵達から色々と非難される事も多く、ここは素直に指揮権を譲っておこうとウォルコット大将は考えていたのだ。

ウォルコット大将自身、自分が大将にまでなれたのは運が良かったせいだと思っている。

ここで数年頑張れば年金も豪勢になるであろうし、あまりイメージは良くないが天下り先にも事欠かないであろう。

次期軍務大臣の呼び声高い、しかも貴族出身のエリートであるジンロ大将と張り合うつもりなど元々なかったのだ。

一方ジンロ大将の方も、勝手に『目指せ次期軍務大臣、打倒ウォルコット大将！』と勝手に騒いでいる周囲で勝手にシンパを名乗っているゴマスリ連中には辟易としていたのだが。

貴族にも、それなりに悩みはあるという事なのであろう。

「私も、中央の高級軍人さんの空気って苦手ですしね。早く祝杯でも挙げたい気分ですよ。レイトン中将に聞きたい事もありますしね」

何しろ、無事を確認するために決戦兵器に広域通信を入れたら、そのコックピットの中でメインパイロットを膝の上の乗せてキスをしていたのだから、何も聞くことなどないという方が嘘であろう。

「ですよねぇ……（でも、ちとせさんでも、ブラマンシュのお嬢様

でもないのですね）」

ウォルコット大将としては、アキオがもし恋人を作ったり結婚するとなると、前の二人が最有力候補だと勝手に思っていた節があった。

それがいざ蓋を開けてみれば、大穴のランファにキスをしていたのだ。

その辺の事情を聞きたいのは、普通の人間として当然の心理でもあった。

「（フォルテさんは、知っていたのでしょうか？）良いお酒が出るそうですから」

「楽しみですなぁ」

いまにだその戦場跡では軍によって戦いの後始末が進められていたが、それでもようやくに、トランスバール皇国にひと時の平和が訪れていたのであった。

「ねぇ、祝勝会に行かないの？」

「ノア、先に行っているが良い」

「そうね、ミルフィーユの料理とかケーキがもう少しで出来るそうだし」

「お前、ここは『私は残るわ』とか気を使えないのか？」

「気を使うとかって、ただの他人の色恋沙汰じゃないの。それに、アキオはもう決めてしまったんでしょう」

作戦が無事に終わり、エルシオールはエンジンが故障してしまったために紋章機によって回収された決戦兵器と共に、白き月へと戻っていた。

タクト達はその足でシヴァ陛下、シャトヤーン、ルフト宰相に勝利の報告を行い、約束通りに祝勝会を行うためにミルフィーユ達は料理を作ったり会場の飾り付けなどのためにその場を辞していたが、そこから辞せなかった人間がいた。

あのキス騒ぎの主犯であるアキオと、共犯者であるランファ。

それと、それに大ショック受けてしまっているちとせと、ミントの二人であった。

そんな一人の男と三人の女を、唯一部外者というか傍観者としてノアが観察していたのだが、簡単に言えば『私達を振るの！』と心の中で叫んでいるに等しい状態でもあったのだ。

なおタクトは、『触らぬ神に～』を実践して既に姿がなく、エリオスは『あまり覗き見は良くないよ』と言って、ヴァニラを連れて祝勝会の手伝いに行ってしまっている。

レスターに関してはあの通りの性格なので、居ても仕方が無いと思われてとっとと撤退に成功していた。

「アキオ。お前には余がトランスバール皇王として、『戦時昇進を、

ネフューリアを討った褒美として本昇進にしよう』とか、『勲章もだな。形だけでも、褒賞が良いかも』とか、『お前は、祝勝会に出るのか？』とか色々と考えていたのだ。一つ聞く。お前は、フランボワーズ大尉を……」

シヴァ陛下は、自分でもわかっていた。

いくらアキオの事が好きになっても、自分の年齢では到底それは実らぬ初恋に終わってしまうであろう事をだ。

それでも、やはり彼が他の女性と仲良くしていると、悲しくなったり、腹が立ったりする事も多い。

だが、自分がそれを理由に、他人を叱責したり罰する事が出来ない立場にあるのを知ってもいたのだ。

トランスバール皇王である自分は、とてつもなく大きな権力を持っているのだから。

「シヴァ様は、以前に私に尋ねられましたね。『恋人はおらぬのか？』と。前は、『いません』と答えました。今は、『います。ランファです』と答えるのみです」

他の家臣や貴族であれば震え慄くシヴァ陛下の半ば怒りの篭った視線に、アキオは全く動ずる事もなく、それを真正面から見据えて答えていた。

勿論アキオとて、『シヴァ陛下が、自分に恋心を抱き始めているのでは？』という疑念は持っていたのだが、今この場でそれを確信するに至っていたのだ。

だがどう考えても、アキオには彼女は妹のような存在にしか見えなかった。

他の権力志向の高い連中のように、彼女を妻とし、自分が権力者としてトランスバール皇国を支配・統治するという野心は思い浮かばない。

アキオの忠誠心は、安定した平和なトランスバール皇国の政治体制と、その生い立ちのせいで大嫌いな皇族や貴族達の例外として忠誠を誓っている、シヴァ陛下にしか向いていないのだから。

「そうか……」

この一言で、彼女はその表情を元に戻していた。

確かに自分は、アキオの事が好きなのであろう。

勿論これは初恋なのであったが、この恋は実る事はないし、これを察している人間は周りに複数存在していたが、正直に話をしたのはルフト宰相とシャトヤーンだけ。

それに、その人数を増やす事は永遠にないであろう。

見れば、ランファ・フランボワーズ、烏丸ちとせ、ミント・ブラマンシュ、ノアなどは気が付いているのだが、それを認めて口外するつもりはなかった。

ただ惜しむのは、自分がもっと歳を取ってからアキオと知り合えれば良かったという事実のみであった。

「前にエリオス・シードルにも言ったが、アキオも、顔の造作が良いからな。さぞや、世間の女性の関心を引くのであろうな」

「はい」

「言い切ったな」

「ご存知だとは思いますが、私は士官学校卒業以来、そんな感情とは無縁の生活を送って来ました。それが、ムーン・エンジェル隊と行動を共にしてからは、世の普通の男と同じになっただけの事です」

でなければ、ランファに告白までしてあんな関係になるわけがない。

実際に、今のアキオは自分の怒りでランファが萎縮しないように、彼女を庇うようにして自分と向き合っていたし、ランファの方もただ穏やかな表情でアキオを見守るようにして立っていた。

「アキオも、良い歳をした男だという事か。本当にタクト・マイヤーズといい、良い男はすぐに予約が埋まってしまうものなのだな」

「陛下、私は高級なホテルではないんですけど……」

アキオの冗談は置いておいて。

シヴァ陛下は、アキオの次にタクト・マイヤーズを一人の男性として優れているのではないかと思っている。

もしアキオがいなければ、彼を好きになっていたかもしれなかったが、そんなタクトにもミルフィーユという恋人がいた。

やはり、幼い自分では届かないのだ。

「（全く、この世とは上手くいかないものだな。アキオが余の夫として支えてくれれば、余も楽が出来たのかもしれないのに……）」

とはいえ、自分はこの皇王としての重責を放り投げるつもりはない。

それだけを確認してから、次の話題へと話を進める。

「そなたの母の事だが、名誉なり恩賞は必要か？」

「いえ、それは勘弁してください」

孤児として生まれ、勤め先のシードル公爵家で望まない妊娠をしてひっそりと自分を生んだ母。

それでも彼女は、息子の自分を病で若くして死ぬまで懸命に育ててくれた。

そんな、他にも似た人が沢山存在していそうな母が、なぜかあのネフューリアによって利用され、一歩間違えれば大悪人の代名詞になってしまうところであったが、それはミルフィーユが再び起こした奇跡と、一時的に蘇った彼女自身の行動によって防がれている。

それに彼女は、大人になった一人息子である自分と、一緒にいたランファの姿に安心してまたあの世へと旅立って行ったのだ。

これ以上の何かは不要で、ただあとは彼女の安らかな眠りさえあれば良い。

アキオは、そのように考えていたのだ。

「母は、また安らかに眠りにつきました。私も、絶対にあり得ないはずの死者との再会も果たし、母の名誉も守られました。これ以上の何かは必要ありません」

それにあの母が、皇族や貴族からお褒めの言葉だの恩賞だのを欲しいとは思わないであろうとも考えていた。

母は自分の事は可愛がってくれたが、あの故シードル公爵の事など絶対に愛してはいなかったばかりか、憎い存在でしかなかったはずだ。

それに血が繋がる皇族に対しても、決して良い感情を持っていたはずはなかったのだから。

「そうか……。シャトヤーン様が褒めていたのだ。『母親としては、自分は彼女の足元にも及ばない』と」

シャトヤーンは、今までシヴァ陛下の実の母親である事を名乗れなかった事をかなり悔いているようで、更にあの己の身を捨ててまで自分の息子のために動いたキョウコを見て、『自分は、母親失格なのでは?』と思い込んでしまっているようであった。

「そんな事はありませんよ。私の母はとうの昔に亡くなり、あとはその思い出だけです。陛下とシャトヤーン様は、あと何十年も親子なのです。その時間は、尊く貴重で楽しい時間のはずです」

更に冷静なアキオは、思い出は時が経つにつれて美化されるという事実も理解していた。

生前の母とは下らない事で喧嘩になった事もあったし、普段の母はもっと抜けている部分もあった。

たまの出番だったので、あの時は気合が入っていたのであろうと今となっては思っていたのだ。

ランファにその事を言ったら、『あんたの口の悪さは、相変わらずね……』と言われてしまったのだが。

「世の中には、様々な親子関係があるか」

「そういう事でございます」

「わかった。タクトやムーン・エンジェル隊への沙汰と一緒に、アキオにも後で昇進と褒美を出そうと思う。休暇もあるので、ちゃんと母君の墓参りに行くが良い」

ここでシヴァ陛下からの話は終わったのだが、問題はその場にいたちとせとミントにどう接すれば良いのかという事に移っていた。

二人は過去に、アキオへの好意を正直に伝えている。

アキオは、その時点ではまだその想いに答えられるのかがわからなかったので答えを保留にしていたのだが、現時点では保留どころかそれをすっ飛ばしてランファを選んでしまっていた。

更に最終決戦で、二人が失恋のショックでテンションを落としてしまわないようにと、フォルテと謀ってそれを隠してまでいたのだ。

アキオも申し訳ない気持ちで一杯であったが、ふと横を見るとランファも同じく申し訳なさそうな顔をしていた。

今まで散々にマザコン扱いして、喧嘩ばかりしていた男と付き合ってしまっていたのだから。

「アキオさん」

「アキオさんは、本当にランファさんと？」

二人は、確認を取るために敢えてアキオに質問をしていた。

だが、実はこうなる可能性を一番危険視もしていたのだ。

ちとせは、アキオを巡る恋のライバルとしてミントをさして危険

視はしていなかった。

ミントも、同じくライバルとしてはちとせをあまり危険視はしていない。

お互いに一番危険視していたのは、始めは喧嘩ばかりで、今も喧嘩ばかりしているようにも見えたが、実は本音で腹を割って話をしているランファであったからだ。

「そうだ。俺は二人の気持ちには答えられない。なぜなら、俺はランファが好きだからだ」

アキオは、ここでグダグダと言い訳をするつもりはなかった。

恋愛で三人全員を選ぶわけにはいかないので、ただ自分の気持ちに正直になってランファを選び、その態度に一切の迷いを見せない。

ある意味、素早く決断をしてそれに迷いを見せないのは軍人としては職業病かもしれなかったが、それは別に間違っているわけではない。

結局一人を選ぶしかなく、選ばれなかった人に『あなたは二番です。残念でしたね』と言うわけにもいかなかったからだ。

「ランファさん、あなたはどうなのですか？」

「アキオさんの事を、どう思っているんですか？」

アキオもランファも、正直なところ二人に泣かれでもするのではないかと思ったのだが、気丈な態度でランファにも質問をしていた。

「ちとせ、ミント、ごめんなさい。私は、アキオの事が好きだから」

初めてランファの口から第三者に出た『好き』という発言に、ちとせもミントもガッカリとした表情をしていた。
二人はランファの欠点として、恥ずかしいのと、天邪鬼的な性格からアキオの事が好きなのを表に出さないかもしれないという、半ば淡い期待を持っていたからだ。

だが現実は、同じランファとは思えないほどの素直さであった。
この謁見の間に来るまでをアキオと手を繋いでいたので、密かにムカっと来ていたのは、ちとせもミントも秘密ではあったのだが。

「わかりました。ですが、私は諦めるつもりはありません」

「当然ですわ。私はまだ勝負は終わっていないと思っているのですから」

この世の中には、好き合って付き合い始めていてもすぐに別れてしまうカップルなど珍しくも無い。
それに、ちとせもミントも最終目標はアキオの『お嫁さん』になる事であった。

ランファとアキオがまだゴールインしていない以上は、絶対に諦めるつもりなどなかったのだ。

「あんた達、良い根性しているわね」

「ランファさん、もしアキオさんと別れる際にはご連絡をお願いしますわ」

「しないわよ」

ランファは、諦めの悪いミントやちとせと火花を散らしながらお互いに視線をぶつけ合い、その様子を見ながらシヴァ陛下も、『全く可能性がゼロという事もないのか』と思いながら、その様子を暫く観察するのであった。

「昨日は、色々と大変であったな」

「まあ、私は謂わば『まな板の上の鯉』ですからね」

アキオを巡ってまだ戦いは続く事が決定し、お互いに火花を散らすランファ、ミント、ちとせの三人と、それがなるべく長く梃子摺って自分にもチャンスが来ないかと期待するシヴァ陛下という取りあえずの構図が決定し、その後はタクトが企画をし、レスターが幹事で、ルフト宰相がスポンサーの祝勝会が盛大に行われた翌日。

アキオは、再びシヴァ陛下から呼び出されていた。

「実は、そなたのこれからの事なのだ」

シヴァ陛下の隣にはルフト宰相がいたので、アキオは『何か仕事を任されるのでは?』と想像したのだが、それは現実の物となっていた。

今回の恩賞で、タクト以下ムーン・エンジェル隊の面々には特別ボーナスと三十日間の有給休暇が進呈される事になっていたのだが、後者の有給休暇に関してはその対象からアキオは外されていたから

だ。

なお、あの仕事人間のレスターがそんなに長期の休暇を与えられてもありがたがるはずもないので、彼は有給休暇分を軍から買い取って貰って、タクトが戻るまでのエルシオールの管理を。

エリオスは色々とシードル公爵家の雑務が溜まっているとかで、素直にその特別有給休暇を受け取っている。

そしてアキオは、ルフト宰相から二通の辞令を受け取っていた。

「アキオ・レイトンを中将に任じるですか。昇進があったのですね」

「昨日に言った通りだ。戦時昇進を本昇進にしただけの事だ。何しろアキオは、あのネフューリアを直接に討ち取っているのだからな」

「アレを直接討ち取ったと言うのですか？」

確かにネフューリアを殺す一撃は放っていたが、再びあの偽の母親の翻弄されてしまった部分もあるので、アキオはそれを功績だとは思っていなかったのだ。

「それでも、結果は結果だ。普段なら、アキオもそう言うのであろう？」

「これは参りましたな」

シヴァ陛下の物言いに、苦笑しつつも納得してしまうアキオであった。

「それともう一通は……。軍務省戦備部第一部長に任じるですか……。こんな若造を良く……」

軍務省戦備部第一部長とは、皇国軍の戦力配備に責任を持つ、制服組ではもしかすると三本の指に入るかもしれない顕職でもあった。

ここ最近では、多くの人材損失によって若い軍人が現場では将官などに任じられる事は多い。

だが、後方の制服組では、いまだに平均年齢の高い年寄りがこれらの職をほぼ独占している事が多かったのだ。

「それで実際に弊害が出ているしな。ウォッカ大将が仰っていたんだ。ワシも含めて、老害が沢山いると」

しかも、エオニアの乱で根こそぎ優秀な軍官僚が吹き飛ばされてもいる。

一部は事前にオイゲン大将が逃がしていたが全員というわけでもなく、彼らだけでは定員の関係で仕方なしに補充された無能な連中の尻を拭うまでには至っていないようであった。

「短期間で構わない。後方の重職も、実力次第という前例を作りたいそうだ」

「ウォッカ大将も食えませんね」

ウォッカ大将は、もはやアキオが長年トランスバール皇国軍に居残るとは考えていないらしい。

ならば、その短い期間を有功に活用しようと思っているようであった。

「それに、アキオは実際に有能だからな。とにかく今は敵が判明しているのだ。それに対応する準備をして欲しい」

確かに、皇国にはヴァル・ファスクという強大な敵の存在が確認されているが、彼らがどの程度の国力や戦力を有していて、どこを根拠地にしているのかは未だにわかっていない。

それに今回の戦いを考えても、いちいち彼らに侵攻される度に国内に被害を出すわけにもいかなかった。

いくら撃退に成功し続けても、その度に皇国の財政に負担を与えていれば、戦争の前に財政破綻で皇国が滅んでしまうからだ。

「鹵獲した無人艦艇や、オ・ガウブから回収した生産設備。それとノアの協力で、黒き月の技術も取り入れた戦備をなるべくコスト重視で量産する計画だ。軍務省戦備部第一部長ともなれば、それらの製造現場の最高責任者とも言えるな」

何をどのくらい作るのかを最終決定するのだから、大きな権限を有する職なのだが、同時に巨大な利権とも切っては離せないので、以前は派閥抗争の道具や汚職の温床とまで言われてもいた。

なので、調整型の老練な年寄りに一番向いている職でもあるのだが、それに敢えてアキオを任じるという事は、波風が起こらないという保障もなく。

というか、アキオならば絶対に波風を起こす事を期待しているのであろう。

昔のアキオとは違って、今の彼は軍に未練などさしてないのだから。

それと、今の状況ではなるべく早くにある程度の戦力の増強が必要である。
謂わば戦時体制なのだが、そんな時に色々な方向に顔色を伺って作る艦艇の種類や数、どこに部品や仕事を発注するかなどを考えてしまう連中では話にならない。
今は、平時ではないのだから。
そのための、アキオの起用なのであろう。

「それで、編成した実戦も考慮に入れた艦隊を複数辺境に派遣するのですか？」

「辺境宙域は、百年前から碌に調査すらされていないからな。まずは、状況把握と……」

「航路図の作成ですか？」

古来より、地図の作成は軍の担当になっている。
正確な地図は戦争で敵を圧倒する情報の大本であり、優秀な地図を作成できる国家は古来から強大であるか、将来強大になる事が多かった。

何があるかわからない自国の力が及ばない場所で地図を作るので、軍がそれに関わる事は必須でもあった。
特に、敵の勢力圏と被っている場所での測量には大きな危険が伴う。

敵勢力に見つかって無為に殺されても文句は言えなかったので、それに携わる人間は当然軍関係者という事になっているのだ。

「辺境への、測量と調査を兼ねた強行偵察ですか？」

ネフューリアが現れた経緯を考えても、いきなり辺境でヴァル・ファスクの艦隊と鉢合わせしてしまう可能性がある以上、実戦を考慮した強行偵察艦隊の派遣と、万全なバックアップ体制の構築は必須でもあったからだ。

「それらの戦備を統括する、軍務省戦備部第一部長だ。アキオの手腕に期待するぞ」

「了解しました」

そのまま二通の辞令を受け取ってから、アキオは首都星トランスバール首都郊外にある軍本部に着任するべく、準備のためにシヴァ陛下の元を辞していた。

「アキオに任せておけば大丈夫でしょうか」

「アレの事だ。短い期間と割り切ったら、ついでに大掃除もしてくれるであろう」

最近入れ替わりの激しかった現場とは違って、構成要員平均年齢と在籍期間が長い後方では、先の非常時においても妙な足の引っ張り合いや、中には汚職などに手を染める者もいて、ウォッカ大将やルフト宰相やシヴァ陛下などを激怒させてもいたからであった。

とにかく今のトランスバール皇国に余裕が無い以上は、それらの掃除も厳格に行わなければならず、それには軍に未練の無いアキオは最適任者とも言えた。

「我ながら、為政者として汚くなったものだ」

「アキオならば、陛下も成長なされたと感心するでしょうな。それに、軍を辞めれば大企業体のオーナーで悠々自適の生活です。陛下を恨むはずもございません」

「そうであったな……」

ところが、それとは別にシヴァ陛下は一つの願望を抱いている。もし今のアキオの仕事が数年間続けば、その間彼は激務に曝される事となる。

それに不満を感じたランファと別れてしまう可能性もあり、『そうなれば、結婚可能な年齢になった自分と……』という野心も心の中では抱いていたのだ。

「ともかく、これから数年間が勝負だな」

「左様ですな」

そう語るシヴァ陛下とそれに賛同するルフト宰相であったが、二人の認識には大きな隔たりが存在しているのに、双方共に気が付けないでいるのであった。

「軍務省戦備部第一部長とは……。こらまた、とんでもない物を押し付けられたな」

シヴァ陛下の元を辞したアキオは、その足でエルオシールの自室にあった荷物の配送を手配すると、ブリッジに上がってタクトやレスターと話をしていた。

そして、アキオのまさかの大出世に驚く二人であったが、では『それが自分なら喜べるのか？』という思いを抱いていたのだ。

能力はともかく、ある程度本人の力量で認めてくれる現場とは違って、あの軍本部ビルはある程度軍という組織に慣れた老練な人間でなければ勤まらない部分があったからだ。

若い副官や、高級士官の随員や、ヒラの一般職員ならば、そこまで悲観する事もない。

与えられた仕事をこなしつつ、ただキャリアを積めば良いだけの話だ。

ところが、いきなり軍務省戦備部第一部長では、若造のアキオに抜かれた自分の倍以上の年齢の佐官や准将クラスの軍人達に足を引っ張られる可能性があったからだ。

彼らは軍人ではあったが、同時に官僚でもある。

現場オンリーからいきなりそこに回されてノイローゼになってしまう軍人も決して少なくなく、タクトもレスターも正直ゴメン被りたい転任人事となっていた。

「お前、良く引き受けたな」

「最後のご奉公だな。俺はこれ以上上とか目指さないから、気に入らないバカや、時代の変化を理解できないアホは容赦なくクビを刎

ねてやるし」

アキオは、別に軍務大臣やトランスバール皇国軍最高司令官や、総参謀長を目指しているわけではない。

むしろ、早く退役して自由に暮らしたいわけだが、その前にあのヴァル・ファスクに対する対策にある程度目処を付けておきたい。

それに、シヴァ陛下の新しい治世にまだ反抗する古い連中に引導を渡すという役割もあった。

別に、アキオがそれを行わなければならない理由は無い。

それでも、こんな自分を忠臣だと思ってくれているシヴァ陛下への最後のご奉公。

アキオはそんな風に考えて、この役職への就任を受け入れていたのだ。

「多分、そう時を置かずにムーン・エンジェル隊にも出撃命令が下る」

「そうだろうな」

「でなければ、ネフューリアを討ったくらいで三十日間も有給は出ないか」

それはレスターも、あのタクトでさえも理解している事であった。

いずれムーン・エンジェル隊は間違いなくヴァル・ファスクとの戦争に巻き込まれる。

それが何ヶ月・何年先なのか？

どの程度の規模の紛争に巻き込まれるのかは不明であったが、尖兵扱いであったネフューリアが討たれた以上は、必ず何か反応を示すはずであったのだから。

「俺は戦備を整えつつ、辺境に実戦も可能なレベルの艦隊を複数送り出して、彼らとの連絡と補給も完全に確保しないといけない。これは、忙しくなりそうだな」

「そうか。俺も手伝おうか？」

「いや、レスターは、エルシオールをいつでも万全の状態で出せるようにしておいてくれ」

レスターの好意は嬉しかったが、それではエルシオールの留守を守る者がいなくなってしまう。

プロの軍人であるアキオは、エルシオール一隻では戦況は変わらないという認識と同時に、エルシオールは最後の切り札であるという矛盾した考えを持っていた。

なので、エルシオールは常に万全の状態である必要があり、それにはレスターが必要だと思っていたのだ。

「アキオさん」

「おや、まだそんな大仰しい格好なのかい？」

とそこに、これから休暇に入るミルフィーユ達が入って来るのだが、フォルテなどはまだアキオの転任を聞いていないようで、休暇に入るはずの彼が第一種の将官用軍服姿である事に疑問を抱いていた。

「俺はお仕事だからなぁ」

「ええっ！　そうなんですか？」

「有給は、軍に金で買い取られてしまったよ」

おかげで懐には余裕が生まれていたが、多分それを使う機会は暫く訪れないであろう。

そのくらい、アキオが任命された軍務省戦備部第一部長の仕事は激務であったからだ。

「残念です。アキオさんをピクニックに誘いたかったのに。ねえ、タクトさん」

「そうだな。残念だ」

アキオは、不思議な感覚でミルフィーユを見ていた。

あの最終決戦で偽の母にまるで本物の母に語りかけるように叫んで、本当に彼女の魂を呼び寄せるという奇跡を起こした彼女であったが、その直後にネフューリアからの攻撃で被弾して戦場の外に弾き飛ばされるという失敗も同時にしている。

凄い娘なのに、どこか抜けていて普段はとてもそうは思えないミルフィーユであったが、やっぱり彼女がいなければアキオはもう死んでいたのかもしれない。

多分、彼女をタクトから奪いたくなるほどの恋愛感情を彼女に抱く事はないのであろう。

それでもミルフィーユは、アキオにとって大切な女神か天使であ

ったのだ。

「アキオさん、どうかしましたか？」

「何でもないさ。こんなにクソ忙しい仕事は何年も続かないよ。暇になったら是非に誘ってくれ」

自分を見つめるアキオを不思議に思ったミルフィーユがその理由を聞いてくるのだが、アキオは笑顔で上手くそれをかわしていた。

「ランファと一緒に招待しますね」

「アキオ、あんたせっかく私という恋人が出来ながら、勝手にこんな仕事を引き受けちゃって……」

「しょうがないじゃないか」

ミルフィーユの後ろにいたランファは、せっかくこのお休みに色々とデートなどを楽しもうかと思っていたのに、アキオが多忙な仕事を引き受けてしまったので文句を言っていた。

「この国難の時にこそ、何も言わずに難事を引き受ける。さすがは、アキオさんです」

ちとせは、ランファとは違ってアキオの軍務省戦備部第一部長就任を心から祝っていた。

彼女自身が真面目な軍人でもあったし、女性という物は好きな人が仕事に全てを賭けようとしている時には、自分も静かにさり気なく手を貸すべきだと思っている。

それなのに、逆に文句を言っているランファを見て、一瞬ほくそ笑むような表情を浮かべていたのだ。

「（いけます。これならば、すぐにアキオさんはランファさんに呆れてしまうはず。その後は、アキオさんを……）」

「ちとせさんの言う通りですわね。一生というわけでもないのですから」

「あんたらねえ。それじゃあ、まるで私が侭女みたいじゃない」

ランファは、ちとせとミントに大人気なく反論していたが、心の中では『たまには食事でも作りに行かないと駄目ね。アキオは、忙しくなると途端に日常生活を捨てに入るんだから』などと考えていた。

何だかんだ言っても、実は良くアキオの事を理解していたのだ。

「ところで、新公爵はどうするんだ？」

「僕は、この皇国の古臭い部分の担当ですから。ベルツェルではこなせない雑務で休みは終わりですよ」

ミルフィーユ達と一緒に入って来たエリオスは、新公爵として必要な雑務に休暇を使うようであった。

確かに他の貴族の誕生日パーティーなど、普通に考えれば雑務の類であろう。

それでも本人が出ないと失礼にあたるので、なかなかに煩わしい雑務ではあったのだが。

「俺は、金さえ返してくれれば問題ない」

「あと二〜三年ですかね？　返済計画は順調ですから」

「あっそう」

以前よりは話すようにはなったが、まだ素っ気無い部分も多い兄弟の様子をヴァニラはただ静かに見つめていた。

早く仲良くなって欲しいが、それは徐々に時間をかけてとヴァニラは考えていたのだ。

そしてそれを、自分はエリオスの側で見守ろうと。

「ヴァニラは、休暇中はどうするんだい？」

「シードル公爵家の領地と屋敷に招待しようかと思いまして」

アキオの質問にヴァニラではなくて、代わりにエリオスが答えていた。

多分、あのターミネーターのような執事とその嫁がヴァニラをえらく気に入っているので、エリオスに余計な助言を吹き込んだのであろう。

アキオが周囲を見回すと、『ヴァニラちゃん親衛隊』に所属しているブリッジ要員がこの世の終わりのような表情をしていた。

「ヴァニラ、エリオスが何かして来たら撃ち殺しても構わないからな。俺が全力でもみ消してやるから」

「……」

「そんな事はしませんし、発言が不謹慎過ぎる……」

アキオの発言に、ヴァニラは何を言えず、エリオスは本気で引いているようであった。

「さてと、俺はもう行くわ。夕方には前任者との引継ぎがあるんでね」

「何というハードスケジュール」

「そうでもないさ。昼飯を食う時間くらいはある」

「本当か？　それ？」

アキオは、荷を梱包している軍務省から来た軍人達に支給される予定の官舎の住所を聞くと、そのまま駆け足でシャトルの発着場へと向かう。

エルシオールが停泊している、白き月にある大型艦船専用の港の隣にある、首都星トランスバール向けの定期シャトル発着場は予想以上に混雑していた。

シャトルは、他にも異動命令などが出た軍人達で混んでいて、それだけ対ヴァル・ファスク戦の準備が急がれているのであろう。

「あれ？　隣は空いているな」

乗るようにと指定されたシャトルはほぼ満席状態にも関わらず、唯一アキオの隣の席だけが空いている状態であった。

不思議に思っていると、発射直前になってそこ誰かが駆け足で飛

び込んでくる。

「ランファか？」

「えへへ、色々とツテを使って割り込んじゃった」

「だろうな……」

シャトルの窓から外を見ると、タクトが如何にも企んだ後のような怪しい笑顔を浮かべていたからだ。

「忙しいから相手をしてやれないぞ」

「素直じゃないわね。一秒でもこのランファさんと一緒に居たいって言ってみなさい」

「一秒でもランファと居られれば、俺はそれだけで幸せだな」

「ちょっ！」

自分からからかったのに、アキオが真面目な表情でそう言ったので、ランファは顔を真っ赤にしてそのまま俯いてしまう。

「その切り替えは卑怯よ……」

「そうか？　ところでお嬢さん。シャトルでの移動が三十分ほどで、地上の発着場から官舎までが三十分ほど。途中で昼食を取ってから軍務省のビルに行くまでの時間の余裕が二時間か……。非常に短い時間となっていますが、宜しいでしょうか？」

「お休みが取れたら、ちゃんとデートに出かけるからね」

「了解しました。お嬢様」

それから数分後に、シャトルは首都星トランスバールに向けて出発していたが、その機内でアキオとランファは楽しそうに手を繋いでつかの間のデートを楽しむのであった。

第三部　前夜（暫定版）

「アキオ、朝よ。起きて」

「ああ……」

「相変わらず、寝起きは良いのね。起こす方としては、張り合いがないんだけど……」

「この辺は、職業病だな」

ネフューリアとの壮絶な死闘と、彼女の戦死によって終了した第一次ヴァル・ファスク戦役から約一ヶ月弱の時が経過していた。

首都星トランスバールの首都トランスバール郊外にある官舎の一室で、アキオ・レイトンは同居人であるランファ・フランボワーズに起こされて目を醒ましていた。

あの戦いの後、タクト・マイヤーズとムーン・エンジェル隊の面々は、シヴァ陛下から直々に特別賞与と三十日間の有給休暇を貰ってそれぞれの時間を過ごしていたのだが、唯一の例外として、アキオ・レイトンはシヴァ陛下とルフト宰相から軍務省戦備部第一部長の職に任じられ、士官学校卒業以来初の中央勤めを経験する事となっていた。

とはいえ、以前の王宮を中心とした官庁街はエオニアの乱以降未だに再建途中であり、ここは臨時の移転先で元は新規のビジネス街として開発が進んでいた場所でもあった。

官舎も、元はそこに勤めるビジネスマン向けの高級マンションであり、その広さは主にファミリー向けとあって、４ＬＤＫとなかなかにゆったりとした作りになっている。

だが、今のアキオは毎日が仕事で忙しい時間を過ごしていたので、せっかく貸し出されたこの高級マンションも、ただ寝に戻っているだけであまり意味がない物となっていた。

高級な広い部屋とか、豪華な内装や備え付けの家具とかも、『ベッドが広くて寝易いかな？』位の感覚しかなかったのだ。

それでも、独身のアキオにこんなに広い官舎が与えられた理由はただ一つ。

ネフューリアを討った功績で、戦時昇進から正規の昇進で中将となったアキオに、狭い官舎など宛がえないという軍部の面子によってであった。

だが実は、そんな広い官舎を持ち主以上に有効活用している人物がいた。

三十日の有給休暇で暇を持て余している、ランファ・フランボワーズ少佐その人であったのだ。

彼女は、アキオの軍務省戦備部第一部長職就任と、それに伴う官舎への引越しに便乗して、そのまま居候というか同棲状態を作り出してしまっていたのだ。

『私はこれでも、家族への仕送りとかあるし。アキオが使わない無駄なスペースを有効活用してあげるわ』

低額だが、官舎に住んでいても家賃や光熱費はかかるのが実情で、それを節約するために、ランファは空いた部屋に荷物を運び込んで、

そのまま住み着いてしまっていたのだ。

とはいえ、アキオも惚れた弱みと、せっかくランファと付き合い始めてはみたものの、仕事が忙しくて全く相手が出来なかったので、これに特に文句を言う事もなく認めている。

ランファは、朝にアキオを起こして朝食を食べさせ、お昼のお弁当も作って持たせ、夜も夕食を準備してアキオを待ちと。

誰が見ても、まるで奥さんのような事をしていたのだ。

『ランファって、まるでアキオさんの奥さんみたい』

『違うって。あいつは忙しいから、私が面倒を見てあげないと駄目なのよ』

朝、アキオを送り出したランファは、夕方までの暇な時間で自分のための買い物に出かけたり、トレーニングジムに体を鍛えに行ったり、他の休暇中のムーン・エンジェル隊の隊員達と出かけたりしていたのだが、その時にミルフィーユからそんな事を言われたりしていたのだ。

『あんたこそ、タクトと楽しい毎日なんでしょう?』

『えへへ、この前はミントが格安で紹介してくれた高級リゾートホテルに泊まったんだ』

『羨ましいわねぇ。アキオなんて大忙しなのに』

『タクトさんがね。(俺は、ああうい小難しい仕事とか無理だから。そのために、優秀なレスターとかレイトンがいるんだ)だって』

『何か、納得できるわ』

アキオに言わせると、タクトは有能な怠け者なので指揮官に最も向くが、指揮官にしか向かない人物であった。

有能な働き者であるアキオ、レスター、エリオスなどを下に置いて暇な時は踏ん反り返っていれば良いのだと。

その代わりに、有事の際にはこれほど役に立つ男もいないのだから。

なので、『今は、せいぜい休んでいればいいのさ』と夕食を用意してくれたランファに語っていたのだ。

アキオがルフト宰相の勧誘に乗って、中央の重責に就いた理由はただ一つ。

今はネフューリアしか姿を現していなかったが、あのヴァル・ファスクとかいう敵種族に対応するためであった。

ヴァル・ファスクとやらが、どこに本拠を置いていて、その人口や国力など未だに不明な点が多く、そのためにシヴァ陛下は、軍備の増強と辺境宙域へのかなりの規模の艦隊派遣などを実施している。

ここ百年ほど停滞していたトランスバール皇国の版図拡大と、辺境のいまだに調査の進んでいない宙域に何があるのか？

それと、次にまたヴァル・ファスク側の侵攻があった際に、いちいち国内に敵の侵入を許して損害を受けるわけにはいかなかったからだ。

『柔らかいお腹を掻き乱されては、皇国の復興と発展も侭成ります

まい』

これが、ある将官級レベルの会議でアキオが述べた意見でもあった。

ルフト宰相はこれを受け入れて白き月の生産施設をフル稼働させ、アキオとランファが爆沈したオ・ガウブの残骸調査と、まだ使える部分を他の軍事工廠に移転させたり、黒き月の管理者であるノアの協力を受けて、新兵器の開発から既存兵器の改良・量産などを行い、辺境に送り出した艦隊に補給を行ったりと。

護衛艦隊に顔が利くアキオが戦備部第一部長の職に任じられたのには、ちゃんとした理由が存在していたのだ。

「朝食を準備してあるわ」

「自分だと、今は作れないからなぁ……」

ランファに起こされたアキオはそのままリビングへと向かい、準備された朝食を食べ始める。

トースト、サラダ、スクランブルエッグ、ベーコン、スープ、コーヒーと言った普通のメニューであり、アキオが最初に警戒していた物凄く辛い料理とかは、この三週間ではまだ出て来ていなかった。

普通に辛い料理とかはたまに出ていたが、そのくらいならばむしろアキオも好きな方だったので文句は無い。

味の方も、ミルフィーユに比べると少し落ちるのかもしれなかったが、惑星ロハスでの休暇で料理を習ったばかりの自分よりは、よほど上手に調理が出来るようであった。

「うん、美味しい。朝からちゃんとした料理が食べられるとは」

ランファがここに押しかけた理由は、とても簡単であった。

中央で顕職に就いて、広い官舎を宛がわれたのは最初に確認していたのだが、数日後に半ば物見遊山目的で再び様子を見に行ったら、官舎から眠い目を擦りながら、焼いてもいない食パンにマーガリンを付けた物を咥えたアキオが出て来たからであった。

アキオも普段であれば普通に食事くらい作るのであろうが、今の仕事は朝が早くて夜もかなり遅くなるほど忙しく、とてもそんな事をしている暇はなかったからだ。

『おはよう、ランファ。三日ぶりくらいか？』

『おはようじゃないわよ。パンくらい焼きなさいよ』

『慣れると、この組み合わせもなかなか。冷たい蝋みたいなマーガリンが癖になる』

『私は、一生慣れたくないわ……』

いつのように話をしながらも、ランファの心の中ではある疑念が渦巻き始める。

ようやく恋人同士になったものの、肝心のアキオは碌に休暇も取れないほど忙しい身分になってしまった。

更に、高級将官専用の官舎に一人暮らしとなって、自分の食事の準備すら侭なっていない。

アキオは、背・顔良し、エリートで仕事が出来て、金持ちで、家

柄まで良い事が判明した王子様である。

そんなアキオが、軍本部内で生活に不便さを感じているのを他の女性軍人などに気が付かれたら？

たちどころに、官舎に押しかけてくる者が存在するかもしれなかった。

女性軍人だけではない。

他の高級士官にしたって、自分の娘や姉妹などを押し付けようとする可能性も否定できないだけではなく、一旦はその身を引いたちとせやミントがこの隙を利用しないと誰が言えるであろうか？

『（軍人だけあって、髪型や服装は整えているけど……）』

アキオが毎日の忙しい仕事のせいで生活に支障を来たしている事など、ランファと同じ女性から見ればすぐにバレてしまうであろう。

そうなれば、話は簡単だ。

『お弁当でも作って来ましょうか？』とか、『夕食を作りに行って良いですか？』とか、『お部屋の片づけを手伝いましょうか？』とか。

すぐにそういう流れになるのは、確実であろう。

ランファも同じ女なので、すぐに気が付いてしまったのだ。

そんなわけで、生活費の節約も兼ねてなどという理由をデッチあげて、ランファは強引にアキオの官舎へと転がり込んでいた。

その話を聞いて、『もう手を打たれてしまったとは……』と残念

がる二人の少女がいたらしいのだが。

「さすがに、明後日はお休みらしい」

「二十五日ぶりくらいかしら？」

「具体的な数字を言わないでくれ……。悲しくなるから……」

この約一ヶ月間、丸々と休みを取っているタクトとはまるで違う境遇ではあったが、さすがにルフト宰相に悪いと思われたのか？

臨時ボーナスと、本来貰うはずであった有給は全て買い取られていてお金には余裕があったので、久しぶりに二人でデートでもという話しをアキオはしていたのだ。

「久しぶりって言うか、初めてじゃない？」

「そう言われると……」

決戦前夜になし崩し的に告白からそういう関係になってしまった二人であったので、実は二人きりでデートをした経験という物があまりなかったのだ。

一緒に住んでいて、見た目は新婚のように見えなくもない二人であったし、まだ付き合い始めたばかりで若いので、夜には当然そんな事も定期的にはある二人であったのだが、とにかくこれが初めての二人きりでの本格的なデートでもあった。

「どこに行きたい？」

「アキオ、あんたねぇ……。普通こういう時には、下調べくらいしておくべきよ」

「すまんね。そんな余裕が全くなかった」

ランファも、別にこの件でアキオを本気で責めているわけではない。

見た目とは違って意外と不器用な二人だったので、こうする事で会話を増やして円滑なコミュニケーションを取るようにしていたのだ。

この辺がフォルテをして、『仲良く喧嘩している』と言われる部分でもあった。

「仕方が無いから、ここはランファさんが良いアイデアを出してあげるわ」

「ありがたくて涙が出るよ」

「言ってなさいって」

ランファは、エオニア軍からの砲撃によって壊滅・復興中の首都とは別に、白き月の聖母であるシャトヤーンが、そこに勤める職員や家族達のためにスペースを提供して同じく開発が進んでいる、白き月の内部にある商業施設へのデートを提案していた。

空の上の白き月は遠いような気もしたが、実は官舎の近くに乗り場がある定期シャトル便を使えば、三十分とかからずに到着できる。

最近では、なかなかに人気の観光スポットとなっていたのだ。

「じゃあ、白き月の商業施設でデートだな」

「それでね。ここの施設にしかないブティクで、限定販売のアクセサリーがあるのよ」

「言われると思った……」

アキオは朝食を食べた後に、『そのくらいの出費ならいいか』と思いながら官舎を出て、ランファから貰ったお弁当を持って、軍務省本部ビルのオフィスへと出勤して自分のデスクに座る。

すると、すぐにデスクの上にお茶が出されていた。

「おはようございます」

「おはよう。ライチ大尉」

以前のようにちとせを副官とするわけにはいかなかったので、アキオは中央に戻ったお祝いだと言われて、ウォッカ大将から優秀な副官を推薦されていた。

身長は１７０ｃｍほどの、ブラウンのショートカットが良く似合うスタイル抜群の美女で、しかも士官学校を第三位卒業している才媛でもあった。

そして何よりも、彼女はあのウォッカ大将の孫娘という事で、その辺がやはりあの老人の喰えない部分だなと感じるアキオであったのだ。

年齢は二十歳で、アキオの三期下で、エリオスの一期下の後輩であるらしい。

多少エリオスと面識があると、彼女は自己紹介の時に話をしていた。

『あいつとね……』

『とても、女子生徒に人気がありましたけど。閣下と同じで』

多少ウォッカ大将の職権乱用の気があるような気もしたが、彼女自身はは掛け値なしに優秀な軍人だったので、アキオからは特に何も言う事はなかったし、軍服のタイトスカートから出ている白く細い足も悪くないと思えるなど、自分も俗物に近付いたなと感じるアキオでもあった。

「本日のスケジュールと、まずはこの書類を決済して欲しいそうです」

アキオは、一見のん気にお茶を啜りながらも、真剣な目付きで書類に目を通していた。

護衛艦隊、兵器工廠、造船局、人事局、白き月の技術管理部など。

様々な部署から集まる様々な書類の内容を確認して、特に問題がなければサインをする。

あれば、少し詳細を煮詰めてから後で決済をするために横に除けておく。

そのスピードはライチ大尉からすれば驚異的で、実際に歴代の戦備部第一部長の中でもトップクラスであった。

それでも、なかなか休みが取れないで帰宅時間も遅くなるのだから、この職がいかにハードなのかを示す物でもあったのだ。

「またシエル大佐か……。自分が調達している素材の単価計算が間違っている。書き直すように伝えてくれ」

「了解しました」

「まあ、彼ほどの男がこんなミスをするわけもないか。いい加減にしないと、そろそろ首筋も寒いのにな」

アキオは首に自分の手で作った手刀を押し当てながら、そのシエル大佐の書いた書類を苦笑しながら見つめていた。

「とはいえ、彼も古いタイプの人間ですので」

「家電製品とは違って、人間は改める事も可能なんだけどな。次にやったら更迭だな。追い出す証拠と、後任候補のデータを準備しておいてくれ」

「了解しました」

更に、スピードだけではなくて仕事も正確であった。

書類の細かなミスや矛盾点などもすぐに見つけてしまうし、シヴァ陛下の即位以降容赦なく摘発されるようになった汚職などにも気が付くのが早く、この一ヶ月間で既に数名の佐官クラスの人間が更迭されていたのだ。

「あの……。中将閣下は、明日はお休みだとかで？」

「久しぶりに休めるな」

書類を決裁する作業がひと段落したアキオに、ライチ大尉が話しかけていた。

「何かご予定でも？」

「ランファにデートをせがまれたからね。白き月の商業施設にでも行く予定さ」

「あそこは、今は人気のデートスポットですからね」

ライチ大尉から見たアキオは、物凄い優良物件で出来れば恋人にしたいし、祖父もそれを狙って自分を彼の副官へと推薦したのであろう。

だが、アキオは自分には恋人がいる事を堂々と宣言していたし、お昼は彼女特製のお弁当まで持って来ていたので、見事にバリアーを張られているとも言えた。

実際、このビルで勤務している女性軍人達の大半が、その事実を聞いてガッカリとしている。

しかも、アキオ・レイトン中将の恋人である、ムーン・エンジェル隊ランファ・フランボワーズ少佐は、スタイル抜群のなかなかお目にかかれない美女でもあった。

更に、いまだに彼の事を諦めていないムーン・エンジェル隊の同僚もいるとかで、どう考えても自分が入り込む余地はなかったのだ。

「昼休みに、ネットで情報でも集めとくか」

そんな事を言いながら頭をポリポリとかくアキオを見て、ライチ大尉は『彼も普通の男性なんだな』と思いつつ、同時にランファの事を羨ましいと思っていた。

「中将閣下は、お忙しい身ですからね」

「本当に、俺だけなぜか忙しいんだよなぁ……」

ここで言う『俺だけ』とは、主にムーン・エンジェル隊の関係者を指し示すのだが、実際にタクトとムーン・エンジェル隊のメンバーは全員が三十日間の有給休暇に入っているし、レスターはエルシオールの留守番と管理をしてはいるが、アキオほど忙しくは無いはずであった。

まあ彼の事なので、自己鍛錬などに余念がないのであろうが。

エリオスは、同じく休暇を取ってシードル公爵家の溜まった雑務などをこなしているらしい。

あれほどの規模の公爵家ともなれば、付き合いだけでも色々と大変なので今はちょうど良い機会なのであろう。

それでも当主が代替わりした時に、大分その手の事を減らしてはいたらしい。

主にあのターミネーター執事であるベルツェルが行ったのであろうが、それでも全くこの手の事をやらないわけにはいかなかった。

アキオはそんな物は仕事に関わらなければ無駄だと思っているので、あんな糞みたいな公爵家を継がされずに済んで、本心から清々しているくらいであった。

ただ少しでも隙を見せると、あのベルツェルがアキオをシードル公爵家側に引き込もうとするので、その辺の注意は大いに必要ではあったのだが。

「でも、残念ですわ。デートでなければ、私も連れて行って欲しいくらいですのに」

祖父に言われてアキオの副官になったライチ大尉であったが、その発言は本心から出ている。

自分の上官であるアキオはやはり評判通りの人物であったし、仕事中の外部へのお使いや、休日でのレジャーで同期の友人などと会うと。

『いいなぁ、レイトン中将様と一緒に仕事が出来て。ライチ、替わってくれない？』などと良く言われていたからであった。

実際にライチ大尉から見ても、アキオはかなり好みの男性のタイプである。

祖父もそれを知って、余計に自分を彼の元に送り出したのであろう。

万が一にもアキオが孫娘の婿にでもなれば大ラッキーなわけで、自分の祖父が軍部で妖怪扱いされているわけが良くかわるライチ大尉であった。

「悪いが、未婚の美女と二人きりで出かけてランファに疑われるのは嫌なのでね」

「美女扱いされて光栄ですが、それならば誘っていただきたかったですわ」

「大人数で、ランファが良いって言ったらだな」

ライチ大尉は、こんなに女性にモテそうなアキオが思ったよりもすっと一途で、しかも浮気など微塵も考えていないのを見て、ランファの事を更に羨ましいと思っていた。

「（お爺様、横取りはまず無理です。精々、仲良くするのが限界ですね）」

ライチ大尉は、いまだにアキオの事を諦めていない女性達の存在も知っていたので、それに巻き込まれるのは御免だと思ってしまうのであった。

「さてと、どこから回る？」

「まずは、ブティックからね」

「何だ？　あまり着る機会のないドレスでも増やすのか？」

「違うわよ。アキオの服を買うの！」

「なぜに？」

「あんた、本当に驚くくらい服を持っていないじゃないの！」

そして翌日の休日。

アキオとランファは早めに起きてから、ここ白き月の内部にあるショッピングモールに定期シャトル便で上がって来ていた。

シャトルを降りて商業街の入り口をくぐると、そこには多くのお店が立ち並び、更に多くの人達で賑わっていた。

噂通りに観光スポットとなっていて、首都星トランスバールばかりではなく、周囲の惑星からも多くのお客さんが訪れていたからだ。

「どうせ、休みが少ないから着る機会もないし」

今日のアキオは、一応は高級ブランド製のスーツに身を包んでいた。

とはいえ、これは第2方面軍通商護衛艦隊時代に経費で購入した物であったし、他数着のスーツ類もほぼ同じ理由で存在している。

あとは、以前の暇な時にミントやちとせが服選びに付き合ってくれたので、同じく数着のカジュアル系の服装のみと。

ランファから言わせると、どうしてこんな服に無頓着な人間が実生活を送れるのだろうかと疑問を感じてしまうほどであった。

「だから、昔はプライベートな時間とか少なかったし」

「休みの日は、何してたのよ？」

「昇進が妙に早かったからな。色々と必要な勉強したり、体を鍛えたり。夜は酒飲んですぐに寝た」

ランファは、アキオがレスターの普段の生活を見て、『良く息が詰まらないよな』などと言っているのを聞いていたので、『良く人の事が言えたわね』と思っていたのだ。

「アキオをモデルに使った店の人が聞いたら泣くわね」

これも、ランファが官舎に押しかけた頃に聞いたのだが、アキオは士官学校の学生時代にアルバイトでモデルのような事をしていたらしい。

アキオ本人からすればただの小遣い稼ぎなわけだが、ランファか

らすれば『モデルのアルバイトが出来るような男の癖して、どうして服に興味が無いのよ?』と思ってしまうのだ。

実際に当時のチラシを見た事があるのだが、アキオは何を着ても似合うし、素人とは思えないくらいポーズなども様になっていた。その辺が、やはり何でも出来る天才家系という事なのであろう。

ちなみに当時のチラシは、やはり当時は士官学校の校長であったルフト宰相が何枚か持っていた物であった。

当時、『目溢しはしたが、あまりやり過ぎるなよ』とアキオに釘を刺すために入手した物で、『面白い物を見せてやろう』と言って、何枚かコピーしてランファ達に渡していたのだ。

「いらっしゃいませ（残念、良い男だけど恋人付きか……）」

店内に入ったアキオを見て、まるで砂糖に群がる蟻のように近寄って来る複数の女性店員達を見て溜息をつきながら、ランファはアキオの着る服を何着かコーディネートして購入していた。

勿論、支払いはアキオの担当であったが。

「これだけあれば、ヴィンテージワインが何本か……」

「フォルテさんと考え方が良く似ているわね……」

請求書を見てそんな事を呟くアキオにランファは心から呆れていたが、二人はそのまま買い物を続けていた。

「ねえ、どっちの色が似合うかしら?」

「そうだな。ランファは赤が良く似合うと思うけど、あまり同じ色の服ばかり持っていてもな。でも、若い女性に黒系統はどうかと思うし……」

「服に興味が無い癖に、私の持っている服は良く覚えているし、妙にファッションセンスは良いのね」

「その辺は、ある意味職業病だな。参謀時代が長かったせいだ」

「何よそれ……」

上官から求められて、素早く正確に助言を行う。

それの応用と、ランファの服に関しては毎日それとなく見ているだけであったが、記憶力が優れているという事なのであろう。

ランファも何着か気に入った服を買い、更にはアクセサリーショップで限定品のイヤリングの購入にも成功していた。

「間に合って良かったぁーーー」

「いや、そんな高い物が一日で売り切れるとは思えん……」

アキオは三十万ギャラを超える何枚かの請求書に絶句しながら、手に入れたアクセサリーのケースに頬ずりするランファを呆れながら見ていた。

とはいえ、アクセサリーに関しては自分でお金を出して購入していたので、アキオからは何も言えなかったのだが。

「それと、このラブリングください」

「えっ？　俺もそれを付けるのか？」

「当然よ」

「お客様、このリングは非常にシンプルな作りとなっていまして、お仕事中にでも邪魔にならない作りとなっています。現在、無料でイニシャルを入れるサービスを行っておりまして……」

結局、ランファと店員が二人で勝手にリングの購入を決めてしまい、アキオの右手の薬指には、プラチナ製のリングがまるで奴隷の足枷のように付けられてしまうのであった。

「何とも、世間一般のカップルという感じだな。気分的には悪くないけど」

「そうね。こういう事をすると、本当に恋人同士って感じがするわ」

アクセサリーショップを出て、二人でそれぞれに指に填めたリングを見せ合いながら歩く二人であったが、その様子はお互いにとても幸せそうであった。

だが、そんな二人を影から伺っている人物もまた存在するのであった。

「ああ……、二人の関係が着々と進行していく……」

「ですが、まだひと波乱もふた波乱もあるはずですわ」

その人物こそ、一旦はその身を引いた事にしたものの、やはりアキオを諦められないでいる烏丸ちとせとミント・ブラマンシュの二

人であったのだ。

二人はいまだに休暇中ではあったが、ここのところ忙しいアキオが今日に休暇を取る事を知って、慌てて尾行を開始していたのだ。その情報源についてはあの老人絡みなので、やはり彼は碌な事を考えていない可能性もあったのだが。

「さてと、お腹が減ったな」

「どこに連れてってくれるのかしら？」

「レストランに予約を入れてあるんだ。そのために、スーツ姿のわけだし」

アキオが予約を入れた店はかなりの高級店で、男性はノーネクタイ禁止で、女性の服装にも支配人のチェックが入るほどであった。二人は、お店の支配人らしき人物から『ご予約ありがとうございます。奥の席にどうぞ』という案内を受け、店の奥の予約席へと案内されていた。

「お勧めのコースと、それに合う赤ワインを」

「かしこまりました」

「随分と簡単な注文ね」

「素人が知ったかぶりしても失敗するだけさ。こういうのはプロに任せるに限る」

そんな話をしながら料理が来るのを待っていた二人であったが、

ランファはアキオの背後の席からにこやかに手を振る、正装姿のミントとちとせの存在に気が付き、そっと溜息を漏らしていた。

どうやって情報を得たのかは知らなかったが、二人は確実にこちらの予定を知ってここに来ていた事は確実であったからだ。

「お久しぶりです。アキオさん、ランファさん」

「ちとせとミントじゃないか。久しぶりだな」

僅か一ヶ月ぶりとはいえ、あまりの激務で時間の感覚が鈍っていたアキオはムーン・エンジェル隊の仲間との再会に心から嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「やはり、軍務省戦備部第一部長の職は大変なのですか？」

「ミントの想像通りに大変だな。俺は敵も増やしながらやっているし」

今までの軍務省戦備部第一部長ならなあなあでやって来ていた部分にメスを入れ、これまでに数名の更迭者まで出しているので、それで一部勢力から恨まれているのは当に理解しているアキオであった。

それでも、別に軍に未練など無いのでアキオは容赦なく、無能な軍人に左遷通告をしたり、汚職に手を染めている軍人の摘発を進めている。

それには貴族も市民も関係はなく、アキオは幾つかの小派閥やグループに恨まれる存在となっていたのだ。

とはいえ、彼らにアキオを暗殺などする度胸は無かった。
どうにか失脚させられないかと、ジンロ大将やウォルコット大将に話を持ち込んでいるらしい。
二人は、『度し難いバカども』だとアキオに報告を入れていたのだが。

「軍務省戦備部第一部長としてのアキオさんの評判は、世間ではとても良好です。私は、アキオさんが上司である事に誇りを持っています」

アキオへの好意と、同じ軍人としての尊敬の念と。
ちとせもアキオに話しかけていたが、先のミントと合わせてランファはまだこの二人が全くアキオの事を諦めていない事を知る。

「……。二人とも、こっちの席で一緒にどう？」

「宜しいのですか？」

「お邪魔ではないのでしょうか？」

「あんたらねぇ。どこで情報を得たのかは知らないけど、こうなったら午後から四人で商業施設でも回りましょう。私とアキオは目的の物はもう買い終わっているし」

ランファは、この絶妙なタイミングで二人きりのデートを邪魔した黒幕の存在には辿り着けないでいた。
それでも午前中は二人でデートが出来たのだし、二人は依然として親友でもあったので、あまり怒る気持ちが沸いてこなかったのだ。

なお、これらの情報を流したのはアキオのスケジュール管理を行

っているライチ大尉であり、その影にはウォッカ大将の存在があったのを記しておく。

「では、乾杯！」

「あら、ボルドーの赤ですのね。ネオムートン・ロスチャイルドですか」

「ミントは、やっぱり詳しいんだな」

未成年とはいえ、ブラマンシュ財団の一人娘であるミントは紅茶の他にもワインにもある程度詳しかった。

パーティーなどで、色々と出されているからなのであろう。

「ミント、具体的にどのくらい凄いワインなんですか？」

焼酎とか日本酒なら少しは有名な銘柄も解るのにと思ってしまうちとせであったが、それでもめげずにミントにグラスに入ったワインの事を聞いていた。

「多分、十万ギャラくらいかと」

「えっ！」

「こういう高いワインを飲むのも勉強だから。値段なんて気にしないで飲んでくれ」

「そうよ。アキオの言う通りよ。アキオ、お替り」

「ランファは、少しは遠慮しろ」

月収の半分近くが消えてしまうほどの値段のワインに、ちとせはただ絶句してしまうのだが、アキオほどの酒道楽者からすれば、これはそこまで高い酒という事もなかったのだ。
四人は、ソムリエお勧めのワインで乾杯しながらコース料理を楽しみ、午後からは四人で商業施設を回っていた。

「首都星トランスバールは、もう何年かしないとここまで賑やかにはならないか」

「そうね、懸命に復興はしているんだけど」

何しろ、外宇宙用の軍艦からの艦砲射撃で吹き飛ばされていたので、その復興は容易な事ではなかったからだ。
実際に白き月が賑やかになったのも、首都機能の代替という側面も大きかったのだから。

「深刻な話を休日にしてもか……。さてと、どんなお店があるのかな？」

四人で商業施設を詳しく見ようとしたその時、アキオ達は見慣れたカップルが目前の小物屋で商品を選んでいるのを目撃していた。
それは、私服姿のミルフィーユとタクトであったのだ。

「あれ？　アキオさんとランファ？」

「ミントとちとせもか？　何気にハーレム？」

「タクト、誤解を招く発言をするな」

アキオは最初にタクトに釘を刺してから、今日は休日でランファとデートをしていた事を話し始める。

「なるほどな。約一ヶ月ぶりの休暇って事か。俺は、週に二日は休まないと駄目な性分でな」

「軍人の言うセリフじゃないな……。まあいい、四人から六人になった事だし、どこかでお茶でも飲むか？」

アキオは、ここ一ヶ月間が毎日平均十五時間労働だった自分と、一ヶ月間丸々休みであったタクトとを比べて多少の理不尽さを感じつつも、せっかくの休暇を楽しむために次に行く場所を提案していた。

「いいですね。ここなんて、お勧めですよ」

アキオがミルフィーユが持ってたチラシを覗き込むと、そこにはケーキバイキングの文字が躍っていた。

「味よりも量のような気が……」

「大丈夫ですよ。ここのオーナーパティシエって、銀河鉄人コンテストの優勝者ですし」

「それなら、色々と食べられて良いかな」

タクトは、昼食直後でも女性はデザートは別腹という事実は知っていたが、アキオに対しても良く付き合えるよなと思っていた。

「なあ、レイトン」

「何だ？　タクト」

「お前、良くそんなにケーキを食えるな」

「疲れているからな。甘い物が無性に欲しくなるわけだ」

アキオ達はミルフィーユの案内で、チラシに書かれたカフェへと移動していた。

そこでは、多くの女性グループや家族連れがケーキやお茶を楽しむ光景が展開されてたが、更にそこで知り合いと出会う事となる。

「お久しぶりです。みなさん」

「やあ、マイヤーズ司令と兄さんではないですか」

奥の席で、エリオスとヴァニラがケーキとお茶を楽しみながら話をしていたのだ。

「公爵様が、食べ放題のお店に？」

「兄さん、これも仕事の一部なんですよ」

「どんな仕事だよ……」

アキオと同じように高級ブランドスーツ姿のエリオスは、今度シードル公爵家でパーティーを行うのだが、その時にパーティー料理のデザートを作るパティシエをここのオーナーに頼もうとしているらしい。

そこで、女性であるヴァニラの意見も聞きたいので、彼女を連れてここに遊びに来ているのだと説明していた。

「何でも、銀河鉄人コンテストの優勝者だとかで」

「私達も、その評判でここに決めたんです」

「そうなんだ。僕はお菓子の味見については素人だけど、十分に合格点だと思うよ」

「エリオスは、生まれが良くて舌が肥えているからね」

ランファの言う通りで、生まれの関係で子供の頃から良い物を食べているエリオスは、実はアキオ以上に食べ物の味に敏感であった。敏感な分、軍人になってから味の濃いカップラーメンやレトルト食品もお気に入りになっていたのだが、これは初めて食べた物だったので余計に印象に残ってしまったのであろう。

「せっかくの食べ放題だし、早く皿に取って食べるか」

合計で八人に増えたアキオ達は、団体用のテーブル席に移動してから各々で好きなケーキを取りつつ、その味を堪能していた。

確かにエリオスの言う通りで、その味はとてもこんな庶民的なカフェに出て来る物とは思えない味であった。

「なるほど、混んでいるわけだな」

タクトは、このカフェが常に満席である理由を口に入れたケーキの味からすぐに理解していた。

「兄さんは、忙しいみたいだね」

「一部の軍人からは物凄く嫌われてな」

「カルドネ予備役大佐とかですよね？　この前、プロヴァンス子爵家のパーティーで吼えていましたよ。小賢しい庶子のレイトンを、軍から追放する運動を始めるって」

「その前に、自分が追放されたけどな」

プロヴァンス大佐はアキオの部下だったのだが、あまりに職権乱用が酷かったので、アキオが一番始めに更迭した人物であった。

それでも予備役編入で済んでいるのは、プロヴァンス子爵家の跡取りであるからなのだが、それで中途半端に生き残ってしまった彼は、他の貴族達にアキオの追放運動に参加するようにとパーティーで勧誘をしていたらしい。

「貴族って嫌だね。パーティーでしょうもない政治工作を」

「うちは、普通のパーティーにする予定なんだけど」

「お前がそのつもりでも、参加者達が勝手に政治を語るんだよ。だから、密室だって嫌われるんだ」

とはいえ、その影響力はエオニアの乱で貴族自体が減っていたので、数年前から比べればその影響力は微々たるものではあったのだが。

「今日のヴァニラ、可愛いわね」

「そのワンピース、似合っているわよ」

アキオとエリオスとは別に、女性陣はあまり見た事がないワンピース姿のヴァニラを褒めていた。

「そうですわね。とてもセンスが良いだけではなくて、愛らしさも出ている良いワンピースですわ」

「どこで購入したの？」

「カマラさんに選んでいただきました」

ちとせの質問にすぐにヴァニラは答えていたが、どうやらエリオスの執事であるベルツェルとその妻であるカマラは、ヴァニラを本気でエリオスの嫁にしようとしているらしい。

使われている素材やデザインの良さなどからして、相当に高い品物なのであろうが、それをポンと買ってあげている辺りが、前にランファが見たヴァニラの占いの結果である『王子様が迎えに来るでしょう』が現実となりそうな証拠でもあると、ランファのみならず女性陣は感じていたのであった。

「しかし、久しぶりに揃いも揃ったか。フォルテはいないけど」

「フォルテさんは、ケーキはあまり得意じゃなから」

「酒と酒の肴が好きだからな。ケーキ屋とかに来る姿を想像できない」

失礼な物言いをするアキオとランファを、『思っていたよりも似

合っているのかも』などとタクトが思っていると、またそこに知り合いが姿を見せていた。

「タクトさん、みなさん、お久しぶりです」

タクト達に声をかけて来たのは、現在はエルシオールでレスターと共に留守番をしているココであり、更にアルモも彼女と一緒であった。

「ココ、元気にしていたかい？」

「はい。今はあまり忙しくもないですし、お休みも定期的に貰えますしね」

元気そうに答えるココに、アキオはやっぱり自分がオーバーワークである事実を再確認していた。

「でも、意外です。ランファさんと二人きりでデートしないんですね」

「ああ、午前中はそうだったのよ。午後からはみんなと再会したから団体行動だけど」

「そうなんですか。でも、同棲しているから良いんですよね」

「何で知っているの？」

ランファとアキオの同棲を知っているのは、ムーン・エンジェル隊のメンバーと、首都星トランスバールの軍務省本部に勤めている者達だけだと思っていたので、まさか白き月までその噂が流れてい

るとは思っていなかったのだ。

「アキオさんから決済を貰いに、数名の管理職の人が軍務省本部に行っていますから」

基本的に白き月に在籍している巫女である技術者達は、全員が女性である。

元軍人である人も多く、お使いで軍務省本部を訪れた際に知り合いの女性軍人と会って噂を聞き、それが白き月へも漏れたというのが真相なのであろう。

アキオもランファも、別に隠しているわけでもないのでどうでも良かったのだが。

「アキオは忙しいから、ちょっと面倒を見てあげているだけなのよ」

ただ一言言い訳を忘れないのは、意外と恥ずかしがり屋のランファらしいとアキオは思っていたのだが。

「いいなぁ。仲の良い夫婦みたいで」

「まだそこまで考えてないって……」

恥ずかしそうに顔を赤らめるランファであったが、その表情は満更でもないように見えるココであった。

「ところで、アルモは何も話さないのね？」

ランファは、元気そうなココとは違って彼女の後ろで陰鬱な表情を隠そうともしないアルモの存在に気が付き、彼女に声をかけてい

た。

「ランファさん……」

「何か悩みなの？」

「はいっ！　相談に乗ってください！」

アルモはランファの前に駆け出すと、そのままるで藁にでも縋るかのように彼女にしがみ付くのであった。

「実は……」

「容易に想像が付くわ。レスターの件でしょう？」

「はい……」

ランファは取りあえずアルモを席に座らせ、その間にミントが紅茶を、ミルフィーユが取って来たケーキを乗せた皿をアルモの前に置くが、彼女はそれに全く手を付けないで下を向いたままであった。

暫くしてようやく声を出したのだが、ランファを始めとしてムーン・エンジェル隊に所属する女性陣で、彼女の悩みの内容に気が付かない者は存在しなかった。

アルモはレスターの事が好きで、それなりに頑張ってアプローチ

はしているものの、肝心のレスターが全くそれに気が付いていない。
ランファ達の頭に思い浮かぶのは、それしかなかったのだ。
「今は幸いにして、少し時間に余裕があるじゃないですか。それで、色々と頑張ってみたんですけど……」
手作りのお弁当とか、お菓子とか。
他にも、今日の休日に一緒に出かけたいとアピールをしてみたりと。
懸命に努力をしているのに、全く効果が出ていないのとアルモからの話であった。
「さすがに、お弁当は気が付くと思うけどな」
「いや、レイトンは甘い！　レスターとの付き合いが長い俺にはわかる！」
「つまり、レスターの思考回路に恋愛関係の項目は一切ないと？」
「そうでもないんだな。これが」
タクトは、レスターが自分の恋愛には無関心で鈍感でも、人様の恋愛関係には意外と敏感であった事実を指摘する。
そういえば、前にレイチェルの件でもレスターは鋭い分析能力を見せていたのを、アキオは思い出していた。
「でも、ならなぜ自分では……。そういう事か？」
「ああ、そういう事だ」

つまりレスターは、基本的にクソ真面目で、仕事が何よりも大事な『仕事第一人間』であった。
当然、軍人である彼は軍の任務が第一であり、それに勝る価値観など存在しない。

だから、レイチェルがアキオに好意を未だに抱いていた事実を、これはエルシオールの和を乱すかもしれない要素だと仕事レーダーが感じて警戒していたし、すぐに気が付けもしていたのだ。

「難儀な奴だなぁ……」

「少し前までは、レイトンも同種類の人間だったのにな」

「いや、それは違うから」

アキオは、別に恋愛自体を否定していたわけではない。
自分の今の状況的では、無理であったと思っていただけなのだから。

「お弁当を作って持って行ったら。クールダラス副司令が、『ありがとう。食費と食堂に行く時間が節約出来たよ』って言ったんです」

「わぁ……、最悪」

「私もちょっと……」

「噂通りの仕事人間ですのね」

「一生懸命に気持ちを込めて作ったのに、それでは私でもショック

です」

アルモが話す、『手作り弁当差し入れ事件』の悲惨な結末に、女性達は素でレスターの言動に引いていた。

「何か、昔より酷くなっているような……」

「じゃあ、余計に恋愛とか無理だろう。普通は、人間は進歩するからな」

いくら好意を相手に伝えても、相手がその気持ちに気が付かなければ意味が無い。

まるで別の思考回路を持つ異生物か、二進法で動いているコンピューターにでも話しかけているようだなと思ってしまうアキオであった。

「私は、一体どうすれば良いのですか？」

「ええと……、他の人を探したら？」

「そんなに簡単に諦められたら、とっくに諦めています！　私はクールダラス副司令が好きなんです！」

タクトの無責任な回答にアルモは大声で反論して、そのせいでアキオ達の座るテーブル席は一斉に他の客達からの注目と視線を集めてしまう。

「タクト、いくら何でも酷すぎ……」

「そうですよ、アルモさんに謝ってください！」

「女心を理解しなさ過ぎですわ」

「いくらタクトさんも酷いです」

「ううっ、完全否定か……。すなまい、アルモ」

タクトはアルモに謝っていたが、かと言ってそれで妙案が出るわけもない。

タクトは、レスターと付き合いが長いので期待されていたようだが、考えてみると、レスターが女の子とデートしている光景など一度も見た事がなかったからだ。

きっとあの頃から、恋愛に関心が薄かったのであろう。

いや、無かったのであろう。

タクトに言わせると、ほぼ治療方法がない病気のように見えてしまうレスターの鈍感さであった。

「そこで、参謀としての才能に優れたレイトン君」

「そこで、俺に振るかね？」

タクトは、ちゃんとアルモの話は聞きながらも既に二十個目のケーキに突入しているアキオに話を振っていた。

実は意外と大食いなアキオであったのだが、そんな彼をして驚きを隠せない人物がいた。

それはちとせで、彼女はアキオを上回る二十五個目のケーキを美味しそうに食べていたからだ。

「アキオさんは、ランファさんをちゃんと口説いたじゃないですか」

「それは、そうなんだけど……」

かと言って、アキオとランファがお互いにしたのとまるで同じ方法が通用するわけもなく、レスターがその方法を敢えて実行しなければいけない理由もない。

というか、レスターはそんな行為は無用だと思っている人間だ。結局、完全に手詰まりとなってしまうアキオとランファであった。

「正攻法は無理だろう」

タクトの言う通りで、アキオも、レスターが普通にアルモを好きになり、告白し、デートをしてという光景が、どう足掻いても頭の中に浮いて来なかった。

多分このままでは、何年経ってもレスターは恋愛すらしないで永遠に独り身のままであろう。

給料を貯金する理由が、老後の資金の蓄えだと真剣に言えてしまう男なのだから。

「うーーーん、無い事もないけど。お勧めはしない」

「本当ですか？」

アキオにアイデアがあると聞くと、瞬時に目を輝かせるアルモであったが、アキオ自身はあまり実行しない方が良いかもと思ってしまうのも事実であった。

「聞かせてください」

「レイトン、俺もお手上げだから頼む」

「そこまで言うのなら……」

アキオは自分で思い付いた意見を言うのだが、それは『まずレスターでは気が付けないし、するつもりもない恋愛関係を全部すっ飛ばして、とっとと結婚してしまえ』という、かなり乱暴な方法であった。

「多分、どんなに手を変え、品を変えても。レスターは、アルモと恋愛するなんて事は無い。何しろ、あいつの辞書には恋愛なんてワードは入っていないからな」

アキオの意見に、タクト達は確かにその通りだなと感じていた。あのレスターが、休日にアルモを連れて映画や遊園地にデートで出かける光景がどうしても結び付かなかったからだ。

というか、休日にレスターが私服で出かける姿すら一度も見た事が無いミルフィーユ達であった。

「それで、いきなり結婚なのか？」

アキオは、レスターがとてもというか、常に仕事を最優先にする人間である事実を指摘し、大人の男が仕事で大成するためには、プライベートでそれを支える存在。

つまり、奥さんがいた方が良いに決まっているのだという意見を述べていた。

ようするに、それを口実に結婚させてしまってから、改めて夫婦で仲良くしてねという作戦であったのだ。
恋愛は、結婚してからやれば良いのだと。

「仕事のために、いきなりアルモと結婚しろって言うの？」

女であるランファは、アキオの作戦に不満があるらしい。
恋愛から結婚。
ランファとしては、女性はこの線は譲れないと思っていたからだ。

「だからさ。その最初の恋愛に、あのレスターでは辿り着けないんだよ。あいつにその力量が無いわけがない。何しろ、あの容姿だからな。普通にしていれば、黙っていても女性が付いて来るほどのイケメンだ。ところが、本人にそんな気が全く無いんだ。０％だと断言しても良い」

「だから、いきなり結婚なの？」

「まずは形を作ってしまうんだよ。そうすれば、レスターもアルモと向き合うようになるだろう」

まるで昔にいきなりお見合い結婚した夫婦のようであったが、その方法でも関係が良好で幸せな夫婦は多数いたはずであった。
それに結婚してしまえば、一緒に生活して顔を合わせる時間が増える事は避けられない。
その時間でゆっくりと、二人の関係を構築していけば良いのだと語るアキオであった。

「ふぇーーー、いきなり結婚ですか」

「少し強引な気もしますが、他の妙案がないのも確かですわ」

「結婚ですか。でも、そんないきなり……」

ミルフィーユ達の反応は様々であったが、肝心のアルモはアキオの意見を真剣に検討しているようであった。

「俺も少し強引な手だとは思っている。しかも、かなりの奇策だ。だから、お勧めしなかったんだよなぁ」

「あの、一つ良いですか？」

「いいよ」

アキオはアルモに、『質問には、いつでも答えるよ』という表情をする。

「つまり、先に形を作ってクールダラス副司令がその状況を事後承認するように仕向けると？」

「勿論、それだけでは弱いからな。幾つか補強を行って、レスターを結婚へと追い込む。それで、この策を実行するか？」

もしかすると、アキオは激務でストレスが溜まっていてその発散先を求めていたのかもしれない。

アルモはすぐに承認しつつも、その時に見せたアキオの邪な笑顔に後でそんな風に感じるのであった。

「ライチ大尉、これから陛下と謁見してくる」

「予定に入っていない……。あの、陛下からの許可は？」

「当然、貰って来たさ。一時間ほどここを空ける」

久しぶりであったお休みの日の翌日。

結局、あの後はアルモとレスターを結婚させてしまうという陰謀……。

ではなくて、善行のために夕方まで密談……。

ではなくて、打ち合わせを続けるアキオ達であったが、大まかな作戦案は纏まったので、大半の仕事は休暇中のタクト達に任せて、アキオは自分にしか出来ない担当部分を早く終わらせようとしていた。

昨日の話し合いで、レスター本人には内緒で勝手に計画している結婚式直前までは全て秘密という事になっていたので、なるべく事前にバレるリクスを軽減すべく、アキオはとっとと自分の仕事を終えようとしていたのだ。

「昨日の今日で、いきなり陛下に謁見可能なのは、ルフト宰相閣下とレイトン中将閣下だけだと思いますが……」

「そんな事は無いだろう。とにかく、俺は行くから」

「私もお供します！」

とはいえ、今のライチ大尉では、アキオとシヴァ陛下の謁見に立ち会えるはずもない。

当然別室で待たされていたが、彼女を初めて実際に見たルフト宰相は、またアキオに綺麗な女性が付いているとシヴァ陛下の機嫌が悪くなるので、急いで彼女を別室に案内させていたのだ。

ところが、その姿を一瞬だけ彼女に見られていたらしい。

アキオが謁見室に入ると、そこではまだウォッカ大将と話を続けていたのだが、一瞬だけアキオに鋭い視線を送っていたのだ。

「陛下？」

「待つが良い、ウォッカ大将よ。アキオよ。今見たが、なかなかに綺麗な副官のようだな」

「はい。さる人物の血を引き、有能な副官で助かっています」

アキオは、自分の孫娘を副官に押し付けたウォッカ大将に仕返しをすべく、何食わぬ顔で怒気の混じった声で質問をするシヴァ陛下に答えていたのだ。

「ほう、誰の娘か？　それとも、孫か？」

「そこにおわす、ウォッカ大将閣下の孫娘殿です」

相変わらず一切の動揺を見せずに涼やかな表情で答えるアキオに、シヴァ陛下は勿論、ウォッカ大将ですらその肝の太さに驚いていた。

「ウォッカ大将、初耳だぞ。余は」

まさか、またライバルは増えたのはないかという疑念に、シヴァ陛下は今度はウォッカ大将の方に鋭い視線を向けていた。

だが、アキオ以上に老練なウォッカ大将は、その視線を静やかに受け流してしまう。

「わが孫は、一介の大尉にしか過ぎず。しかも、軍務省戦備部第一部長であるレイトン中将の副官人事とはいえ、そんな細かい人事までお伝えしていたら陛下に多大な心労を与えてしまうとか臣は心配してしまったのです。それに、身びいきではなくてわが孫は士官学校を第三位の成績で卒業した逸材ですから」

自分の孫だから副官にしたのではなくて、優秀だから副官にした。しれっとそう答えるウォッカ大将は、やはり皇国の妖怪のあだ名に相応しい人物であった。

あの故シードル公爵に続く二代目であったが、本人は少し不満があるようであったが。

「もう良い。その副官が、優秀な副官の仕事だけしていればな」

「それは、勿論（プライベートまでは責任は持てませんが）」

そう心の中で答えながら、同じく心の中で舌を出すウォッカ大将であった。

「では、私はこれで（アキオ、うちの孫娘はどうだ?）」

「お疲れ様です（残念ながら。ランファの前に知り合っていれば、わかりませんでしたけど）」

「……（まだ若造じゃの。嘘が下手じゃ。お前が、あのムーン・エンジェル隊以外の女に興味など持つものか）」

「……（はて、これからの長い人生ではわかりませんよ）」

「……（まだまだじゃの）」

謁見の間の玉座に座るシヴァ陛下の元から辞したウォッカ大将と、今度は彼女と謁見するアキオはすれ違いざまに小声でそんなやり取りをしていたが、アキオの返答にウォッカ大将は『やはり駄目か』という表情をしていた。

「全く、余計なライバルを増やすでない」

既に退室したウォッカ大将に対してブツブツと文句を言うシヴァ陛下であったが、アキオはすぐに名目上の理由である今の仕事の進捗状況を簡単に説明してから、本題である昨日思い付いたレスターの結婚についての報告を行う。

「あのクールダラス副司令がか？　子供の余が言うのは何だが、あの男は恋愛とか全て範疇外のような気がするが……」

「そこでです。そんなレスターが公私共に幸せになるように、ここは陛下にお力添えをお願いしたく」

とは言っても、その内容はレスターを勝手に結婚させるので式に出席して欲しいという物であった。

レスターの結婚は、勿論軍のいかなる上官でも強制など出来るはずもない。

だが、ここで企画された結婚式にシヴァ陛下が出席する事になったら？

皇国軍人としても、皇国臣民としても、直前になってまさか嘘で

したとも言えるはずもなかった。

まあ、直前までレスターには一切知らせないので、『嘘でした』と言う暇も与えないつもりであったのだが。

「アキオも、相当に悪辣だな」

シヴァ陛下は、まるで流れるように、しかも意地悪そうな笑みを浮かべて理論整然とレスターの結婚式を行う理由を説明するアキオに、不謹慎ではあるが少しおかしくなっていた。

「ですが、最終的には二人が幸せになる結婚です。相手のアルモは全く嫌がっていないどころか、私の案を受け入れましたし。レスターも、あれだけ可愛い子と結婚できるのです。後で必ずや私達に感謝するでしょう」

「わかった。余も、その悪巧みに参加してやる」

アキオは、後日に正式な式の日程を伝えると言い残してから謁見の間を辞していた。

これで最大の仕事は終わったので、あとはタクト達の担当となるわけだが、タクトはノリノリで結婚式の準備を進めていた。

会場の予約と、飾り付けや酒食などの手配。

参加者へ招待状を送る準備。

それぞれの両親に挨拶を行って、ついでに婚約も行わなければいけないのだが、これもレスター不在のまま勝手に進めてしまうタクトであった。

なお、この極秘結婚式についてアルモの両親は、『アルモ本人の

意思に任せる』と言っていたし、レスターの両親に至っては、『あの子は、そのまま結婚できないかと思っていましたが。アルモさん、息子を宜しくお願いします』と逆に頭を下げられてしまうタクト達であった。

どうやらタクト達以上に、自分の息子の恋愛感情と結婚願望がゼロである事を心配していたようなのだ。

以上のように準備は着々と進み、先の休日からちょうど一週間後。遂に結婚式が行われる事となり、レスターは軍本部から呼び出しだと言われて、軍務省ビルの一室に呼ばれていた。

「よう、レスター」

「レイトンか。久しいな」

短い挨拶を交わしてから、アキオはレスターに将官用の式典用軍服を渡す。

「これは？」

「レスターも将官だからな。お偉いさんに会うのに、時には面倒な正装も必要なわけだ」

「お堅い話だな」

ここで結婚式用の礼服など渡せば、一発で陰謀が……。

ではなくて、サプライズパーティーがバレてしまうのだが、幸いにもレスターは軍人であったので軍服で式に出れば良く、ここでバルる心配は一切なかった。

勿論アルモは花嫁なので、今急いでウェディングドレスに着替えているはずであったが。

「じゃあ、行くか」

「急にお偉いさんが何の話だろうな？」

アキオは懸命に笑いを堪えつつも、レスターをある大会議室へと案内していた。

タクトは大胆にも、ここを借りて式場としていたのだ。

「何だ？　会議でもするのか？」

アキオに続いて大会議室に入るレスターであったが、彼はそこでその体を瞬時に硬直させてしまう。

なぜなら、軍のお偉いさん達が席に座っていると思っていたのに、室内はまるでチャペルのように飾り立てられ、議長席側には牧師が立っていたからだ。

他にも、よく見ると本来会う目的であった軍のお偉いさんであるウォッカ大将などはいつも通りに軍服姿であったが、女性達は色鮮やかなドレス姿が大半であり、よく見ると本来ならば休暇中のミルフィーユ達や、ケーラやクレーターなどの、今日は仕事のはずなエルシオールのクルー達の姿まであった。

「これは？」

全く状況が掴めないレスターは軽く混乱状態にあったが、それでもどうにか隣にいるアキオに何が起こっているのかを尋ねていた。

「レスター、結婚おめでとう」

「はあ？」

「だから、結婚おめでとうだよ」

「おい、待て！　というか、タクトがなぜここにいる！」

いつの間にか自分の近くにいたタクトに、レスターは結婚の話をひとまず置いて大声で質問をしていた。

「そりゃあ、友人の結婚式だし」

「だから、なぜ俺が！　というか、誰と！」

いきなり結婚式だと言われて更に混乱するレスターであったが、よくよく周りを見渡すと、なぜかここ数年会っていない両親の姿を見つけていた。

そして最後に、極めつけの最終兵器が現れていた。

「クールダラス少将、本日はめでたいな。おめでとう」

「なっ！」

全く予想だにしなかったシヴァ陛下が、綺麗なドレスで着飾って現れていたのだ。

しかもその隣には、シャトヤーンまでもがいつもとは違うドレス姿で現れていた。

「私もいるぞ。結婚式というのは初めてだな」

ノアの姿まで見付けてしまったレスターは、いまだに混乱しつつも次第に冷静さを取り戻しつつあった。

さすがは、実戦経験者と言ったところであろうか？

いきなりワケもわからずに、お前の結婚式だと言われていて、しかもそこにはシヴァ陛下の姿まで。

なので、これは冗談でしたなどと言えるはずもなく、つまり自分は誰かと結婚しないといけない事に気が付くレスターであった。

「なぜだ？　それと、俺は誰と？」

「ほれ、式を始めるぞ」

レスターが牧師のいる方向を見ると、そこには既にウェディングドレス姿の若い女性が立っていた。

ブーケのせいで髪型が見えなかったので、レスターは急いで牧師の前に移動する事にする。

到着すると、早速に牧師がレスターに声をかけていた。

「汝、悩める時も健やかなる時も、妻であるアルモ・ブルーベリーを愛しし……」

「アルモだと……」

そこからはもう完全にグジャグジャであったが、レスターは鍛え上げられた軍人としての勘と身体能力を駆使して、このリハーサル

すら無しの結婚式を続けていく。

変に情報を与えない方が、式に集中して疑問をぶつけたり考える時間が奪えると判断したであろうと考えた、やはり策士であるアキオとタクトを一瞥しながらだ。

それに、この時点で式に対する不満や、それを妨害するような言動を取るのは危険であった。

何しろ、ウォッカ大将やシヴァ陛下まで参加していたので、ここで不興を買えば、自分の軍人としての経歴に大きな傷が付く可能性があったからだ。

レスターは顔を真っ赤にしながら宣誓にイエスで答え、アルモと誓いのキスをしてから、指輪の交換を行っていた。

良く初めてにしては順調に出来たと思うレスターであったが、本当にギリギリで二人に文句すら言う暇というか、精神的な余裕が与えられなかったのだ。

その後は、軽い立食形式のパーティーも行われ、その時になって初めてレスターは二人の下に駆け込んでいた。

「おい！」

「いやあ、おめでとう。レスター」

「先を越されたな。レスター」

これだけの事をしたのにのん気そうに返事をする二人に、レスターは今にも蒸気を噴出しそうな表情になっていた。

「悪いとは思ったけどな。こうでもしないと、お前は結婚しないだろう？」

「だからって、いきなり人を結婚させるな！」

レスターは、いきなりとんでもない事をやらかしたタクトとアキオに文句を言いつつ、同時にこんな無茶で自分と結婚させられてしまうアルモの事が気になりだしていた。

「俺はともかく、アルモの気持ちを考えてだな……」

「アルモさん、おめでとう」

「ありがとう」

ところがそのお相手のアルモは、ミルフィーユ達からお祝いの言葉を受けて満面の笑顔を浮かべていた。

「まあ、人生は長いから少しずつ相互理解を深めるんだね」

「さすがはフォルテさん、伊達に歳は取って……」

「何か言ったかい？　ランファ？」

「いえ、空耳かと……」

途中から陰謀に参加したフォルテも人生の先輩としてアルモにアドバイスを贈ったりと、女性達はレスター、アキオ、タクトを放置して楽しそうにパーティーに参加していた。

「……」

「アルモは嫌がっていないどころか、お前の奥さんになりたいわけだから、ここは女性に優しいタクトさんが力を貸したわけさ」

「タクト。ちなみに、この性質の悪い策は？」

「レイトンが考えた」

「お前なぁ……」

「いいじゃないか。アルモはお前が好きなんだから。そこで、お前が普通の男のように彼女と向き合っていれば、俺もこんな事はしないさ。でも、気が付かなかったし、出来ないだろう？」

確かにアキオの言う通りに、自分はアルモからの好意になど気が付いていなかった。

というよりも、女性から好意を持たれるという事実すら自分の認識に中に入っていなかったのだ。

それに、自分が果たして世間のカップルのように休日にデートなどに出かけるであろうか？

その前に、女性から好意を寄せられてそれに気が付いたり、それを受け入れたりもするのであろうか？と。

いや、間違いなく無いと断言できるレスターであった。

「そんなわけなので、レスターとアルモは今日から夫婦です。文句があるのなら陛下に、『今日の式は間違いです』と言って来るんだな」

「……。覚えてろよ、レイトン」

その後のパーティーでは、アルモは女性達と楽しく話をしていたものの、最後に彼女が投げるブーケを巡ってひと波乱あったり。

レスターは、ウォッカ大将達に玩具にされ、その際に夫婦の心得のような物を伝授されたりと。

多分、『その日の夜に、色々と考える事が多くなるのでは？』というような展開になっていた。

優秀な軍人でカミソリのように切れると評判のレスターであったが、全く予想しなかった方面からの奇襲には相当に弱かったらしい。

たまに文句は言っていたが、パーティー終了まで見事にタクトとアキオに言い含められ、丸め込まれて結婚式に望臨む夫婦を演じていた。

「新婚旅行とかはどうするのじゃ？」

「そういう物は、もう少し夫婦で落ち着いてからとの事で」

「なるほどの（この男は、たまにとんでもない事をするの。とはいえ、ここでライチとサプライズ結婚式をしても二番煎じ……。いや、もう引っかかるまいて）」

半分引き攣った顔をしながら式の参加者に挨拶をするレスターと、満面の笑みを浮かべるアルモを一瞥してから、ウォッカ大将は自分が最初にこの策を実行しておけば良かったと後悔はしていなかった。

そんな無茶をというか、アキオ絡みであのシヴァ陛下から認められるとは思わなかったからだ。

「それでなんだけど」

「まだ何かあるのか？　タクト」

なぜか突然結婚させられて半分憔悴しているレスターに、タクトは追い討ちをかけるかのような決定を彼に伝えていた。

「エルシオールの部屋割りなんだけど、レスターとアルモは同室ね」

「なっ！　お前！」

「軍法５６３条２項、就業時間以外における軍人のプライベートの確保と、個室内における不干渉についてだっけか？」

「その入れ知恵は？」

「勿論、レイトン」

レスターは、タクトの視線の先で式の参列者達に引き出物を渡しているアキオに青筋を一本増やしながら、ますますその表情に憔悴感を増していた。

「夫婦なんだから、同じ部屋で仲良く相互理解を深めたまえ」

「……」

レスターは、もう何を言っても無駄なんだなと思いながら、式を終えた後に夫婦二人でエルシオールへと帰還するのであった。

「……（いきなり、夫婦にされて何を話せと言うんだ！）」

「……（いきなりこんな事をしたから、クールダラス副司令、怒っているよね）」

突然の結婚式を終えてエルシオールに戻った二人であったが、式の間にもタクトは色々と企んでいたらしい。

レスターは急遽部屋を移動となり、現在エルシオールで空いている一番広い部屋へと荷物を運び込まれていた。

そしてその部屋の表札には、『レスター・クールダラス、アルモ・クールダラス夫妻』と見事に毛筆で書かれていて、それを書いたのは勿論書道にも精通しているちとせであった。

ただ最初に練習で、『アキオ・レイトン、ちとせ・レイトン夫妻』と書いて、ランファとミントが青筋を立てていたりもしたのだが。

その一番広い部屋にはまだ未開封の二人の荷物が置いてあり、他にも式に出られなかった知人・友人・親戚などからの贈り物の箱や、テーブルの上にはリボンが付いた箱入りの『マムシドリンク』が一番目立つように置かれていた。

その箱には、『タクト・マイヤーズより、親友のレスター・クールダラスに愛を込めて』と書かれていて、レスターは明日タクトを殴りに行こうと決意していた。

「「あの……」」

「「いや、お先にどうぞ……」」

新しい部屋のリビングにおいて、二人はお互いにどちらが先に話をするかで見事に声をユニゾンさせていた。

「レディーファーストだ。アルモからだ」

「では、すいません！」

アルモは、レスターをこんな謀略めいた結婚式に参加させてしまったk件で素直に謝っていた。

最初は、いくら好意を寄せても気が付かないレスターへのちょっとした怒りからであった。

その感情が、アキオからの突拍子もない提案と見事に融合し、同時に『それでも、他の女に取られないで結婚できるなら悪くないかも。確かに、付き合いは結婚後でも十分に可能だし』などと上手く自分の気持ちを整理して、タクト達と一緒に式の準備に邁進していたのだ。

途中、多くの人達から祝福を受け、レスターの両親とも会って好印象を持たれる事にも成功している。

以上のような事もあって、式の時には嬉しさで一杯であったのだが。

やはり祭りは祭りの内が楽しいのであって、祭りが終われば次第に冷静にもなってくる。

そうなって来ると、次第にレスターに悪いという感情が徐々に浮かび上がっていたのだ。

「それでも、私は嬉しかったんです……」

そう言いながら目に少し涙を溜めるアルモを見て、レスターは不覚にも『可愛いかもしれないな』などと思ってしまっていた。

古来より、女性の涙には色々と効能があるものらしい。

「いや、俺は別にアルモに怒っているとはではなくて……」

勿論タクトとアキオには、いつか制裁をくれてやるつもりでいたが。

「笑わないで聞いてくれると嬉しいのだが、俺は本当に今まで生きて来て女という生き物に興味を持った験しがないんだ」

子供の頃は、学校での勉学やスポーツに。

士官学校時代には、やはり学業と軍人として必要な実技的なスキルを得るために訓練に余念が無く。

士官学校卒業後には、優秀な軍人としての職務に邁進すべく仕事をメインに生きて来ていた。

そして、その間に女に関する事など微塵も存在していなかった。

さすがに、中学生を超えると同級生達などがそんな話を始めるのだが、それに全く耳を貸さないで生きていたのだ。

正直、少し自分でも変わっているなと思ってはいたのだが、それでも自分はその生き方を変えるつもりなどない。

この世の中で、仕事一筋で生きる人間がいて何が悪いのだと。

「恋愛とか、結婚とか。まず自分ではしないと思っていた。特にタクトに出会ってからな。そういうのはアレに任せるに限ると。後で知り合ったレイトンは、あんなに色々な女に追われて難儀だなとも思っていた」

ところがそのアキオは、電光石火でランファを選んで彼女と同棲まで始めている。

それを見て、『女と一緒に居るのは楽しい物なのか？　あんなに感情的なのにな。いや、感情的だからなのか？』などと、少し考えさせられていた事も確かではあった。

「ただ、正直よくわからん」

「……」

レスターの回答にガックリとしてしまうアルモであったが、その直後に彼は言葉を続けていた。

「とはいえ、今回の件はある意味運命だったのかもしれないな。このまま生きていても結婚などするつもりもなかった俺が、なぜか結婚してしまった。果たして何とかなるのか？　ならないのか？　暫く二人で生活してみるもの悪くないか」

「はいっ！」

それから、『クールダラス副司令は、激怒して婚姻を破棄するのでは？』という一部周囲の予想に対し、ぎこちないながらも、二人が一緒にいる時間が室外でも増えたような気がするエルシオールのクルー達であった。

ただ実際の夫婦と比べると、やはりどこかまだぎこちなさが続いていくのであったが。

それとレスターは、多数贈られていた婚姻祝いの中からアキオからの物を見付けていて、その中身に激怒する事となる。

「レイトンの奴！（それは、爛れた同棲生活を送っているお前達で使いやがれ！）」

リボンの付いた箱に入った高級避妊具（コンドーム）に、アルモは顔を真っ赤にし、レスターは恥ずかしさからか余計に激怒してそれを誤魔化すのであった。

「アキオも相当に悪辣よね。あんなお祝いって……」

後に、アキオがレスター達に贈ったお祝いの内容を聞いて、ランファは心から呆れるのと同時に、やはり激務でストレスも溜まっていたのだなと実感するのであった。

「まあ、私達にはいらないんだけど」

何気にバクダン発言をするランファと、既にアキオは彼女から逃げられないかもしれないと感じる、その日一緒にランチを食べていたフォルテであったのだが。

第三部　プロローグ１（暫定版）

アキオが軍務省戦備部第一部長の職に任じらてから、もう既に二ヶ月近い時間が経っていた。

その間に、タクトやムーン・エンジェル隊の面々が貰っていた三十日間の特別休暇も終了していて、彼らは白き月に係留されたエルシオールへと戻り、そこで紋章機の訓練や、ノアが欲する紋章機やエルシオールに関するデータ収集などの任に当たっている。

両者はロストテクノロジーの塊なので、なるべく実際に動かした際のデータが欲しいとノアに懇願されていたからだ。

何でも、常に安定性を求めて兵器を開発する癖のあるノアからすれば、パイロットの感情一つで性能が大きく変化する紋章機は、非常に研究し甲斐のある相手であるらしい。

紋章機が最高潮の状態からデータを集めてそれを既存兵器に応用したり、逆に性能が落ちた時のデータを集めてそれを弱点克服に使う。

黒の月の管理者であるノアは、アキオと並ぶくらい忙しい存在になっていた。

そしてその成果は既に出ていて、アキオは小規模の改造で済む物はすぐに新造・改良艦艇に採用している。

更に遂数日前ほどから、その第一陣が辺境を調査する艦隊に配属されたり、既に辺境域で活動している艦隊に交代や応援のために出発させていた。

この二ヶ月ほどで、皇国は積極的防衛策として既に十五個を超える艦隊を四方八方の辺境宙域に向けて出発させていて、そこでは三十六個のまだ皇国へと帰順していない独立した惑星国家などを確認している。

いきなり出現した皇国軍艦隊に彼らは戸惑いを隠せないでいたが、すぐに派遣された外交官との交渉によって、彼らは今の自分達の技術力では抵抗は無意味である事を知り、すぐにトランスバール皇国に参加する旨を伝えている。

皇国は、その所属する惑星国家の政治には出来るだけ干渉しない。

この伝統のおかげで、皇国は一気に支配する星系の数を増やしていたのだ。

当然、これらの任務を行う艦隊の補給。

勿論物だけではなくて情報や人材なども必須であったが、それはアキオが十分に心得て支援を行っていた。

何しろ、そのためにアキオが軍務省戦備部第一部長になったのだから。

アキオは、ウォルコット大将と綿密に打ち合わせを重ねてから、辺境で任務中の艦隊に十分に補給を行っていた。

「しかし、いまだに蛇は出ませんか」

今日も打ち合わせのためにアキオの執務室を訪れていたウォルコット大将は、アキオと同じくライチ大尉から淹れて貰ったお茶を啜りながら、これまでの辺境探査に関するレポートを捲っていた。

「それなりの距離がないと、我々はとっくにあのヴァル・ファスクの支配下でしょうし」

「そうですね。一世紀前の皇国の支配者達が、どのような情報から判断して領域拡大を止めたのかは不明ですが、案外この判断は正しかったのかもしれません」

ヴァル・ファスクの領域と、トランスバール皇国の領域との間には広大な距離が存在する。

だからこそあのネフューリアは、一人でまるでスパイのように皇国へと潜り込んで、侵略に使う兵器類ですら皇国内で調達していた。

彼女は自分の才能に自信があり、それを順調に行って実際に皇国軍を大苦戦に陥れていたが、もし彼女並みのヴァル・ファスクが複数存在していたら、皇国は今頃ヴァル・ファスクによって支配されていたのかもしれなかったのだ。

「向こうにも、それなりに事情があるのかもしれません。例えば、この宇宙は広い。皇国以外に征服したい場所が多いのもかもしれませんし」

「複数の方面に同時侵攻ですか……」

普通に考えれば無謀の局地であろうが、一人で多数の艦隊を操れるヴァル・ファスクならばあり得るかもしれない。

アキオも、皇国軍の上層部もそのように考えていた。

「可能性としては、あるかもしれませんね。上手くその国家と対ヴァル・ファスク同盟でも結べれば御の字かもしれませんが……」

「何にしても、まずは辺境の情報収集ですか」

「ええ、艦隊派遣を続けるしかありません」

そんな話をする二人であったが、事態はその日の夜に急展開する事となる。

「ううん……、こんな夜中に何よ？」

「どうやら、俺のらしいな」

「緊急事態かしら？」

「ほぼ１００％そうだろうな……」

その日の夜中、アキオの官舎の寝室でランファは急に鳴った緊急コールで目を醒ましていた。

彼女は、三十日間の休暇中はずっとここに住んでいたのだが、今は白き月が生活の拠点となっている。

それでも書類上の住居はまだこの官舎となっていて、本当に必要最低限な荷物以外はまだここに置いたままで、しかも定期シャトルで一時間とからずに通勤可能だったので、数日に一度はここに戻って来て、アキオの食事の支度などは続けていたのだ。

勿論毎日は不可能だったので、普段はまたコンビニ惣菜やお弁当に戻っていたアキオであったが。

いつものように帰りが遅いアキオに夕食を準備をし、一緒にベッドに入ってその日は就寝した二人であったが、寝入って数時間後の真夜中にアキオの通信端末に緊急アラームが入っていたのだ。

「俺だ」

アキオが通信端末のスイッチを入れると、相手は副官のライチ大尉であった。

「こんなお時間に申し訳ありません」

「辺境に送った艦隊に何かあったな？」

「良くご存知で……」

「想像はつく。詳しい話は軍本部で聞く」

アキオはベッドから素早く起き上がると、そういえば自分が真っ裸あった事を思い出し、しかも色々と残り香もあると思ったので、すぐにシャワーを浴びてから軍服に着替えていた。

そしてランファも、アキオに続けてシャワーと着替えをする。

「そうだな。ムーン・エンジェル隊にも、待機命令が出るかもしれないか」

「ええ」

「でも、上に上がる手段はあるのか？」

「最悪、ミルフィーにでも迎えに来て貰うわ」

「紋章機をタクシー代わりか。剛毅な事だな」

今は夜中で、勿論定期シャトルは運行されていない。

だからと言って、軍人であるランファがこの緊急時に原隊に戻らないというのはおかしく、緊急事態なのだから例えコストの高い紋章機を使って戻っても何ら不都合はなかった。

むしろ、ランファがいないとカンフー・ファイターが動かないので、その方が色々と問題になるであろう。

こういう話を書くと、良く視野狭窄な人が軍人の特権云々と書くのだが、彼女はちゃんと軍の許可を貰ってアキオの官舎に来ているのだし、多少紋章機を長く稼動させるくらいの行為は目を瞑っても構わないであろうとアキオは思っていた。

何しろムーン・エンジェル隊は、これまでに何回も彼女達だけで敵の大艦隊と向き合って来たのだから。

「一緒に部屋を出るわ」

「そうだな」

素早く身支度を終えた二人は、急いで官舎の外に出ていた。

その時に少し遅れて出て来たランファは、アキオにお弁当と水筒

を手渡していた。

「サンドウィッチだけだけどね。夜食代わりよ」

「ありがとうな」

二人はエレベーターで一階に降りてから、その正面玄関でいつものように抱き合い、そのまま軽くキスをしていた。

いつの間にか、こんな事が自然と出来るようになっていた二人なのだが、これを進歩と呼ぶのか？

それとも堕落と呼ぶのかは、それは直接に見た人が個々に判断する事であろう。

「早くこういう忙しい仕事は終えて、二人で旅行にでも行きたいな」

「ええ」

キスを終えた二人は、まだ軽く抱き合いながらそんな話をしていたのだが、すぐに耳に複数の女性達の咳払いが入ってくる。

その方向に視線を送ると、そこにはアキオを迎えに来たライチ大尉と、ランファを迎えに来たちとせの姿があったのだ。

「お楽しみのところを、大変に申し訳ありませんが……」

「ちょうど良いタイミングだな。今、終わったところだ」

アキオはライチ大尉の皮肉を笑顔で流し、そのまま彼女の運転する車へと乗り込んでいた。

そしてその車を見送ったランファとちとせであったが、ちとせの方はあまりこういうシーンに耐性が付いていなかったらしい。

顔を真っ赤にさせながら、その場に硬直していた。

「ちとせ、迎えに来てくれたのよね？」

「キス……。抱き合って、キス……。いいなぁ……、私もアキオさんに……」

「無意識にとはいえ、とんでもない事を口走っているわね……」

結局、ちとせの復活に少し時間がかかってしまい、ランファが白き月へと辿り着けたのは、それから約一時間後の事であった。

「陛下、夜中に突然親近を騒ぎ奉る事をお許しくださいませ……」

「何事かあったのか？」

緊急コールによって軍務省ビルへと到着したアキオであったが、彼が呼び出された理由はとても簡単な物であった。

辺境に送り出した艦隊二つと、既に連絡が途絶えているという報告によってであった。

「二時間前に、チョリス中将の第四調査艦隊が。それから二十分後に、今度はデニッシュ中将の第五調査艦隊がだ。『敵らしき艦隊を発見！　これより戦闘を開始する！』という通信を最後に……」

「反応も途絶えたのか？」

「はい……」

急いで執務室に入ったアキオはそこで最新の報告を受けていたが、二つの艦隊が通信途絶という事態に、すぐに軍の最高幹部達とシヴァ陛下を参加者とする緊急対策会議が召集される事となる。

ルフト宰相は急いで就寝中のシヴァ陛下を起こしに行き、アキオは途中の通路でウォッカ大将、ジンロ大将、ウォルコット大将と顔を合わせながら会議室へと向かう事となる。

「しかし、何で逃げないかね？」

この緊急対策会議のホストであるシヴァ陛下の支度が済むまで少し時間があったので、アキオは席に座ってランファの準備したサンドウィッチを夜食代わりに食べていた。

すると横からシワが多い手が伸びて、サンドウィッチを一つ横取りしてしまう。

その手の主は、ウォッカ大将であった。

「すまんの、腹が減っておってな」

「奥様に作って貰えなかったのですか？」

「こんな夜中じゃしの。のん気にグースカ寝ておるわ。まあ、レイトンももう何年かすればわかると思うが……」

つまりは、夜中に夜食を準備する恋人や奥さんなど付き合い始めた頃だけであり、だからこそのランファの気の使い様と言いたいウォッカ大将であった。

「何だか、身に詰まされるお話ですね」

「今の内に、新鮮な気分を味わっておくのじゃな」

数分間で夜食を済ませて会議室の席に座っていると、そこにルフト宰相をお供に、シヴァ陛下が現れる。

この年齢でこんな時間に叩き起こされて大変そうではあったが、彼女には責任があるのだと考えて、アキオ達は何も言わなかった。

「さて、我々が緊急に召集された理由は今さら言う事もないと思うが……」

司会役を務めるルフト宰相からもう一度詳細が説明され、次に皇国はこの事態にどう動くべきかを、シヴァ陛下が直々に軍幹部達に問い質し始める。

「二つの調査艦隊はどうなったと思う？」

「かなりの確率で、壊滅的被害を受けたものと思われます。もしくは、どこか暗礁宙域に逃げ込んでいるのかも」

とは言いつつも、ウォッカ大将はほぼこの二つの艦隊の生存を絶望視していた。

なぜなら彼らは、『戦闘を開始する！』と通信を入れてから消息を絶ったからだ。

「だが、ほぼ絶望なのだな」

「はい」

理由は、ここ二回行われた戦争によってベテランの将官が不足しているという理由からであった。

調査艦隊なので、万が一に事態に備えてかなりの戦力を保持しているわけなのだが、他にも調査の過程で幾つかの惑星国家を発見し、それらを皇国の支配下に置くべく相手を威圧するための物でもあったわけであり。

そう簡単に、戦力を無駄な戦闘で失って貰っては困るというのがトランスバール皇国軍の本音でもあった。

ちゃんと出撃前にウォッカ大将が釘を刺していたのだが、彼らはまだ若い准将や少将から艦隊司令官になった者達で、敵艦隊の姿を見て血気に逸られてしまったのであろう。

「一度退いて、正確な情報を上げて欲しかったのですが……」

「その暇が無かったのでは？」

ジンロ大将は自分も若い将官だったので、自然と二人の中将を庇う発言をしていた。

それに軍人の本能として、現れた敵と戦うなというのもなかなかに難しい事ではあったのだ。

「新型の探知機器を搭載していたし、敵がそこまで高性能な探知妨

害機器を装備しているとも思えないのぉ。それにだ……」

辺境で発見した多数の惑星国家は、いまだに宇宙に出られないレベルの科学技術しか持たない所が大半で、彼らが調査艦隊に仇成す可能性はほとんど存在しなかった。

実際に、彼らはすぐに皇国への帰順を表明している。

もし調査艦隊と戦う事が可能な戦力を保持する敵となると、これも事前にウォッカ大将が口を酸っぱくするほど念を押していた、あのネフューリアと同じヴァル・ファスクである可能性が高い。

ならば、余計に慎重に事に当たるべきだとウォッカ大将は思っていたのだ。

「とはいえ、ここで両中将を責めても仕方が無いでしょう。これからをどうするかです」

「何か意見があるのか？　ウォルコット大将」

シヴァ陛下が、ウォルコット大将にこれからどう動くべきかを質問する。

「あの辺境宙域には、まだ三つの調査艦隊が存在していたと思いますが……」

「ああ、第六～第八じゃの。ちなみに、司令官全員が中将だったと思う」

実は、全ての調査艦隊の司令官は中将で統一されていた。

理由は、軍本部にいる大将がコントロールし易いのと、ほぼ全員

が艦隊司令見習いとも言うべき新米中将であったからだ。

辺境調査で一個艦隊クラスの指揮に慣れて欲しかったのと、他の惑星国家と政治的な交渉をしたり、一部軍政の経験をするという、これから軍幹部として皇国に貢献できるように軍政面でも経験を積んで欲しいというウォッカ大将の考えによって、そのような編成になっていたのだ。

「こうなると、彼らにバラバラに動かれるとかえって混乱を助長しますよね？」

「そうじゃの……。一時、未踏破宙域への前進は止めて、少し後方に下がるようには命令は出しておるのじゃが……」

とはいえ、これは一時的な命令であった。

二つの調査艦隊が行方を絶った以上は、その原因となった敵に対する対抗処置と、少なくとも情報収集だけは進めて欲しかったのだから。

「現地に、政治も出来る大将クラスの人材を送り出すべきです」

「ウォルコット。お前の言う事は正しい。じゃが……」

ウォッカ大将は、現状におけるトランスバール皇国軍の大将クラスの人材を想い出しながら溜息をついていた。

そのほとんどが、自分も人の事は言えなかったが老人ホームの体を成していて、しかも彼らの大変は既に退役をしている。

この人材不足でも呼ばれないのだから、その能力は容易に想像可能であった。

それに、彼らの大半は貴族である。

既に終わった彼らに変に期待をさせて、皇国本国の政治を混乱させるわけにはいかなかった。

現地で向こうの政治状況も理解しないで貴族の傲慢さを発揮して、彼らの反発を買う危険もあったのだ。

「ジンロ大将には、全艦隊の統率がある。ウォルコット大将は、この緊急事態ともなれば、余計に補給関連で動いて貰わないといけない。ワシも、軍務大臣なのでここから動けない。困ったものじゃな」

「タクトはどうなのです？」

アキオはもう一人の大将であるタクトを思い出し、『彼を応援として送るべきなのでは？』と意見していた。

「駄目だ。アレは最後の切り札で、ムーン・エンジェル隊はタクトにしか動かせないからの」

アキオの意見はルフト宰相によって否定されてしまい、これで遂に候補者は潰える事となってしまう。

「中将の戦時昇進で対応できないのか？」

「問題は、それで現地の司令官達が反発する可能性ですな。元は同じ階級の同僚に頭ごなしに命令されるわけですから」

勿論軍における階級差は絶対ではあったが、軍人も人間で感情を持つ生き物という事であり、しかもここ首都星トランスバールと辺

境には広大な距離の差が存在する。

もし何か緊急事態が発生しても、そう簡単に次々と手を打てるというわけでもないのだ。

それに今残っている中将クラスの人材も、端的に言えば能力不足で左遷されている者か、経験不足ながらも昇進した見習い連中ばかりで、彼らを辺境に送り出しても事態が解決するとは思えなかった。

「つまり、現地の司令官達が納得する大将レベルの人材を送り出せと？」

「左様でございます、陛下」

「ならば、そこにおるではないか」

シヴァ陛下の視線は、大将クラスの将官が主役の会議において、中将なので発言をなるべく控えていたアキオへと向かっていた。

続けてウォッカ大将達もアキオに視線を送るのだが、彼らも『その手があったか』という表情を変化させてしまう。

アキオは、本能的に嫌な予感を感じていた。

「そうじゃの。レイトンに任せるか」

「なぜ、よりにもよって若造の自分なのです？」

才能的にも経験的にも大将クラスの人材を送り出さないといけないのに、なぜか中将になったばかりの若造で、全くの経験不足の自分が指名される。

アキオは、そんな無茶があるかと反論していた。

「お前は、良くも悪くも有名人じゃからだ。多少経験不足じゃが、能力は折り紙付きじゃからな」

「経験不足で見習い艦隊司令ばかりとはいえ、私は彼らよりも遥かに年下の若造です。反発が増えても、素直に指揮に従ってくれる保障もありません」

広大な宇宙を支配する星間国家の、軍隊ならではの悩みでもあった。

もし新しく送り出した人材に反発して余計にコントロール不能になっても、また新しい人材を送り出すまでの時間が戻って来るわけではない。

ただ時間を無駄にして、余計に事態を悪化させるだけであったからだ。

「その点については大丈夫じゃの。それに、もう一つ理由があるのじゃ」

ウォッカ大将は少し言い難そうに話を進めるが、それはアキオがあのシードル公爵家と血縁があるという点にあった。

ここ最近では、市民出身者と貴族出身者で公職における出世にあまり差が無くなっていたとはいえ、やはり数百年の優位という物が存在していたし、それに今でも皇族や貴族などの高貴な血という物に憧れたり、それに従い易い人種も多数存在していたからだ。

アキオは、シードルを名乗ってはいないが公爵家の血縁であり、シードル公爵家は過去に何回も皇族の血が入った貴族家でもあった。

それに、シヴァ陛下がアキオをお気に入りの家臣として扱っている事実を知らない軍高級士官は存在しない。

なのでアキオが現地に赴けば、すぐに三人の中将はその指揮下に入るであろうとのウォッカ大将の予想であった。

「嫌な事を思い出させてくれますな。しかし、それならばエリオスでも十分では？」

「いや、アレはいくら何でも経験不足で若過ぎであろうな」

たった二つ違いなのだが、その二年の軍歴をアキオは非常に有意義と言うか、濃密な時間を過ごしている。

それに、今のエリオスは少将なので、いくら戦時昇進でもいきなり大将にするのは難しかったのだ。

「となると、レスターでも駄目ですか？」

アキオは最後の望みで、この前強引にアルモと結婚させてしまったレスターを推薦する。

「悲しいかな、レスターは市民出身者じゃからの。それに、今まで下の階級であったレスターがいきなり大将になって『指揮下に入れ』と言ったら、三人の中将達はどう思う？」

「……」

「まあ、言うまでもないの」

余計に事態を混乱させるだけだと語る、ウォッカ大将であった。

「それに、素質の問題もある」

レスターは、カミソリとあだ名される怜悧な頭脳と、その豊富な知識が売りの参謀寄りの高級軍人であった。

軍政分野での知識も豊富ではあろうが、問題辺境宙域で既に押さえている幾つかの惑星国家への対処となると、生真面目過ぎる彼はトップにはあまり向かず、軍政司令官の補佐に一番適した人物であった。

つまり、タクトと組ませると最高の結果を出すはずであったが、タクトを今は動かせない以上、レスターを切り離してもあまり良い事はなかったのだ。

次に、エリオスは完全に経験不足であった。

生まれた家の血と教育が原因なのか？

才能的には、むしろアキオよりも軍政家や政治家方面への才能があったし、亡くなった母親に似ていると評判で、彼は温和で敵を作り難い性格をしている。

だが今の彼では、肝心の三人の中将を押さえる事は出来ないであろう。

結果、必然的に司令官と参謀の能力、軍人と政治家や官僚方面の才能もバランス良く有しているアキオに白羽の矢が立っていたのだ。

「レイトン、一つ聞くぞ」

「はい」

「確か、あの方面では複数の惑星国家がトランスバール皇国に帰順してくれたはずじゃ。もし彼らの惑星まで、まだヴァル・ファスクと決まったわけではないが、こちらの艦隊を撃破した敵が迫ったらどうする？」

「そうですね。惑星政府の首脳達に正直に事情を話して、取りあえずは彼らの占領を受け入れるしかないと言うでしょうね。無防備宣言を出して、ヴァル・ファスクから攻撃を受けないようにも言いますが」

アキオの返答に、ウォッカ大将は満足そうな笑みを浮かべていた。

「そうじゃの。まずはなるべく敵の情勢を得ながら、少しずつ戦力を温存しながら後退する。それでも皇国の領内に敵を入れないようにして応援を待つ。多分、三人の中将達では無理じゃ」

能力的な問題はともかく、彼らが真に軍人であるのなら、一度帰順させて功績とした惑星国家を見捨てて逃げるという選択肢を取るのはかなり難しい。

見習い扱いながらも中将となり、そこで更に経験と功績を積んで大将となって軍の要職から最終的には艦隊司令長官、総参謀長、護衛艦隊司令長官、軍務大臣などを目指す。

一度軍人となったからには、彼らとて人並みに野心が存在するはずで、せっかく得た功績を捨てるという判断は、いくらエリートな彼らでも躊躇するはずであった。

「近場の惑星反乱ならば、それでも大したダメージにはならないのじゃがな。この距離感をこそ、ワシは危険だと考えるのじゃ。お前に裁量の大半を委ねる。頼まれてくれるかの？」

ウォッカ大将は、軍内はおろか王宮や政府内でも妖怪扱いされている人物であった。
それでも彼は、アキオの才能にいち早く気が付き、同時にその生まれも知ってまだ立場の弱い尉官の頃から影に日向にと目をかけ、常に最悪の立場にならないように気を配ってくれていた。

謂わば恩人であったし、どのみち今回の事件で自分は戦場に出なければいけないとも思っていた。
まだ確定はしていないが、ほぼ間違いなく敵はヴァル・ファスクなのだから。

「わかりました。援軍を率いて辺境に出撃しましょう。ですが、軍務省戦備部第一部長職の方はどうするのですか？」

「ワシが預かる」

書類上はアキオを現職に留めたままにして、そこに複数の将官を補佐として入れ、ウォッカ大将が彼らをコントロールをするつもりらしい。
アキオもこれから大変なのだが、ウォッカ大将はもっと大変になってしまう事に気が付くアキオであった。

ならば、自分も子供のような我が侭を言うのは止めようと決意していた。

「明後日には出撃して貰うぞ。戦力はさして準備できないので、一部即応用の艦隊を率いて現地に赴き、そこで三中将の艦隊を再編成して対応してくれ。それだけの戦力が纏まってあれば、追加の援軍が到着するまでは何とかなるはずじゃ」

「了解しました」

夜中の緊急対策会議はこれで終わりとなり、アキオは素早くウォッカ大将が連れて来た部長補佐職に就く数名の少将や准将達と引継ぎを行ってから、同時に出撃時に率いる艦隊の司令官とも顔を合わせていた。

とはいえ、その人物とは先のネフューリアとの戦いでエルシオールを護衛したウランフ中将の高速戦艦を主体とした艦隊であったのだが。

「よう、戦時大将殿」

「教官殿、ぶっちゃけ艦隊の練度の方は大丈夫ですか？」

先の戦いで半数の艦を失って、軍事の定義では全滅している艦隊だったので、それだけが心配なアキオであった。

「総員退艦が間に合った艦も多かったからな。人員の方は予想よりも大丈夫だ。側（ガワ）の艦の方は、新鋭艦の割には故障や不都合は少ないな」

基本的に軍艦ほどの多くの機械やシステムを搭載している物は、新品の状態では多くの故障や不都合が発生する。

慣熟訓練とは、乗員を新しい艦に慣れさせると共に、それらを洗い出して改善する作業でもあったのだ。

昔の軍艦は、最低半年はこれを行わないと戦力にならなかった。

一方ウランフ中将が、新造艦艇の慣熟訓練にかけた時間は約二ヶ月。

どうにかギリギリ戦力化に間に合ったと言える状態であった。

「注文通りに駆逐艦を艦隊編成から外したが、本当に大丈夫なのか？」

「俺も、出来れば外したくないんですけどね……」

とにかく急いで現地に向かわないといけないので、航続距離が短くて補給を頻繁に行わなければならない駆逐艦は、スピードを落すという理由で全て艦隊編成から外していたのだ。

「現地の三艦隊には、少し多めに配備されています。そこから遣り繰りしましょう」

「泥縄だな」

「でなければ、俺が指名されるはずがないじゃないですか」

「それもそうか。わざわざご活躍の軍務省戦備部第一部長殿を前線に出す判断をしたわけだからな。上層部は」

急に呼び出されてから丸一日。

ようやく全ての準備をどうにか終えていたアキオであったが、翌日の朝には出撃予定だったので、官舎には戻らず、そのまま白き月へと上がっていた。

ウランフ中将が指揮する軍本部直衛の即応艦隊は、白き月の大型軍艦用のドッグに係留されていたからだ。

彼が率いる、ファラーメ改級高速戦艦四隻、タカチホ級高速装甲艦八隻、フィラデルフィア級高速重巡洋艦十二隻からなる、ようやく数だけは再建した高速艦隊は訓練を急遽中止して急いで出撃準備にとりかかっている。

最近妙に艦の数が増えているが、これは昔のようにあまり一隻にマンパワーをかけなくなったせいでもあった。

ここ一年ほどで戦乱が頻発しているので、大型軍艦一隻が爆沈すると数百人の数年から二十年近くをかけて訓練した艦長以下の乗組員達を失うリスクを避けるためでもあった。

外側の艦の方も、同型艦を大量に白き月や前に破壊された黒き月、オ・ガウブなどの残骸からも回収したら無人生産設備なども使って極端に建造コストを落としている。

壊れたら、とっとと総員退艦をして新しい艦を使えば良い。

艦と最後を共にする艦長や司令官など、問題外で絶対に禁止だ。

これが、最近のトランスバール皇国軍の常識となっていたのだ。

「フィラデルフィア級高速重巡洋艦の初期ロット十二隻が揃い踏みですね」

「使い勝手は良いな。まあ、突出した能力は無いが、バランスが良くて連携が楽に出来るし」

「そういうコンセプトの艦ですからね」

フィラデルフィア級高速重巡洋艦は、アキオがその量産に相当な労力を割いた艦でもあった。

ノアに言わせると、『言うほど重巡洋艦でもないし、特徴が無いのが特徴であまり面白味のない艦だけどね』との話であったが、以前の一隻を建造するコストと時間で三隻を建造する実験に使った艦なので仕方がなかったし、それでも白き月と黒き月の技術を使って建造しているので、少し前までトランスバール皇国軍の主力であったバーメル級巡洋艦などとは、比較にもならない性能を有していた。

「居住性能が良くなって、乗組員達には好評だけどな」

「乗員数が減って、一人当たりの居住面積が増えましたからね」

アキオは、応援派遣艦隊の旗艦も兼任している高速戦艦チンギス・ハーンのブリッジで、バインダーに挿んだ書類を見ながらウランフ中将と話を続けていた。

これだけの規模の艦隊が、実戦装備で僅か一日の準備期間で出撃するので、当然それに伴い多数必要な書類の確認やサインに追われていたアキオであったからだ。

ウランフ中将も、アキオの参謀長兼この高速艦隊の司令官として出撃準備に忙しかったので、二人は戦闘食であるハンバーガーを齧りながら、その場から一歩も動かずに出撃準備を進めていたのだ。

「レイトン、あの綺麗な彼女さんには会わないのか？」

「時間が取れますかね？　教官殿こそ、奥方とはお会いにならないので？」

急遽出撃で休憩すら侭ならない状態であったし、ランファも同じ白き月にはいるものの、ムーン・エンジェル隊で任務中であったの

で、運が良ければ出撃前に見送りに来てくれるかもくらいにしか思っていなかったからだ。

「うちのは、見送りに来てくれる予定だ。しかし、お前も色々と大変だな」

「こんな生活はもう何年も続きませんよ。謂わば、最後のご奉公のわけです」

今のアキオは、敵であるヴァル・ファスクに対応するため。一旦正式に戦争が始まれば、これが何年で終了するかは知らなかったが、それでも財政的な物などを考えると何十年間も続くはずはなく、戦争にケリが着けばアキオは晴れて退役する事が可能であった。

あとは、自分の会社を管理しながらノンビリと暮らす予定で、その際に『ランファにプロポーズしても良いかな?』などとも思っていたのだ。

「そうだな。士官学校卒業以来、お前ほど忙しい人生を送っていた男も世間にはそういないだろうからな。状況が落ち着いたら、好きに生きても誰からも文句を言われる筋合いもないか……」

そしてそれから数時間後、遂に応援派遣艦隊は出撃する事となる。泥縄的に準備を進めたので艦隊の乗組員達には一部疲労も見えていたが、それでも大半の乗組員達には家族などの見送りが来て、白き月にある軍港はそれなりに賑わいを見せていた。

「へえ、噂通りか」

ウランフ中将も奥さんらし女性や幼い娘二人と話をしていたのだが、噂通りになかなかの美人で、娘二人も将来は綺麗になると思われた。

「やっぱり、ランファは任務で忙しいようだな」

共に軍人という事で、それも仕方ないのであろうとアキオが思っていると、そこに賑やかというか、非常に騒々しそうな団体が姿を現していた。

タクトを先頭とした、ムーン・エンジェル隊メンバーとエルシオールのクルー達が、アキオを見付けてこちらに近寄って来たのだ。

「レイトンも、色々と大変だな。見送りに来たぞ」

「人事のように言うなよ。お前達にも、絶対に出番があるぞ」

アキオは、そんな事は本人も当に承知だとわかっているタクトに念を押していた。

今回、いきなりムーン・エンジェル隊を派遣しなかった理由は簡単だ。

前回の戦いで最後の切り札として機能した彼らを、まだ詳細が良くかわっていない辺境宙域にいきなり派遣するというリスクを犯したくなかったからだ。

まずは、アキオ達が詳しい情報を収集してからという、軍上層部による判断であった。

「出番になったら、それはそれで頑張るさ」

「お前も大概のん気だな。まあ、そういう部分も指揮官としての資質ってやつか。細かい事は、レスターに任せるとして……」

「おいおい、俺を過労死させるつもりか」

「新婚生活で大変だものな」

「お前が、それを言うのか？」

途中でレスターも話に加わり、三人はさり気なくこれからの事も打ち合わせながら出発前の最後の会話を続けていた。

「そういえば、いきなり人を妻帯者にしてくれたよな」

「ああ、そんな事も過去にはあったな。俺は、あまり後ろは振り返らない性質でね」

「抜かせ、まだ一ヶ月と経っていないだろうが」

いきなり夫婦にされてしまったレスターとアルモであったが、ここ一ヶ月間は同じ部屋で寝起きし、食事を取り、家事を二人で分担しと。

少しずつぎこちなさが解消はしているとの、タクトからの報告であった。

ただ、勿論まだ実質的に夫婦になったわけではないし、部屋の外ではアルモは『クールダラス副司令』と呼ぶのを変えてはいない。

『室内では？』と聞くと、なぜかそれは秘密という事になってはいるようであったが。

二人は、今は必死に相互理解を深めているようであった。

「早くキスくらいしてあげるんだな」

「なあ、夫婦だもな」

「お前らな……。特にレイトンは、最近タクトに似てきている部分があるぞ」

「えっ、本当に？　それは、気を付けないとな」

「酷いな。レイトンは」

「指揮官は、常に平常心という点では見習うべき点は多いけど」

レスターに最近タクトに似てきたと指摘されてギョっとしてしまうアキオであったが、実はタクトの性格を羨ましいと思っている部分もあったのだ。

「アキオさん、ランファのためにも無事に戻って来てくださいね」

「大丈夫さ、俺は悪運が強い男だからな」

男二人との話を終えたアキオは、今度はミルフィーユ達と出撃前最後の会話をしていた。

「ところで、差し入れとかは？」

「アキオさん、今はそれを私に最初に頼んじゃ駄目ですよ」

「それもそうか」

今回、ミルフィーユはアキオへの差し入れを準備していなかった。こういう時に、アキオの恋人でもない自分がそれをしてはいけないと思っていたし、間違いなくちゃんと準備をしている人物がいたからだ。

「そうだね。そういう事は、自分の恋人に頼むんだね」

「おや、随分と久しぶりというか、最近ほとんど顔を合わせていなかったフォルテさんじゃないですか」

「アキオ、何が言いたいんだい？」

「別にぃ」

「何かムカ付くねぇ……」

前の、三十日間の特別休暇の間。

フォルテは、たまにミルフィーユ達と会ってはいたようだが、そのほとんどが所在知れずという事になっていた。

とはいえ、実際にはウォルコット大将の宿舎でランファと同じような事をしていたらしいのだが、そこはあまり突っ込まないでおくのがルールというか自分達の身の安全のためでもあった。

あまりからかって、目の前に銃口が突き付けられるのも嫌であったからなのだが。

その成果なのか？

この前、珍しくフォルテがムーン・エンジェル隊の面々に食事を

作ったらしいのだが、前よりも大分腕前が上達していたとのランファからの話であった。

「俺は、鼻の穴を増やす趣味は無いので。ああ、でもこの前のウォルコット大将……」

彼は軍人には珍しく、あまり自分の格好に固執しない人物であった。

多少汚れたり解れたりしている軍服でも平気で着ているし、それを指摘されてもすぐには直さない人なのだが、ここ二ヶ月ほどは随分とそれが改善されていて、軍本部内で『女でも出来たのか？』などと噂になっていたのだ。

アキオは、すぐに誰の仕業か理解していたが。

「余計な事を言うんじゃないよ」

「言わないけどね」

「アキオもランファと付き合うようになって、少しはそういう部分に気を使うようになったのかね？」

「さあね？」

二人は、いつもように握手をしてから話を終えていた。

「兄さん」

「アキオさん」

次にエリオスとヴァニラが声をかけて来るが、休暇をシードル公

爵家の雑務で過ごしたエリオスはエルシオールの艦長職に復帰し、空いた時間でノアの仕事の手伝いなどをしていた。
勿論彼は技術者ではないので、彼女が色々と何かをする際に必要となる書類の決裁や雑用などを主に行っていたのだが。

そのせいか、『弟の方も、兄と同じで使えるようね。顔も良いし』などとノアに気に入られ。
最近は白き月のドッグに係留されたままであるし、暇なレスターがすぐにフォローを入れるので、エルシオールの艦長職はほぼ開店休業状態となっていて、余計にノアの手伝いに傾倒するようになっていた。

ただそのせいで、少し機嫌が悪くなっている人物もいたのだが……。

「噂に聞いたぞ。えらくノアに気に入られているらしいな」

「連れていると便利な駒使いのようなものですよ。ノアは可愛いし優秀だけど、どこか浮世離れしていますしね」

「黒き月の管理者が、浮世離れしていない方が変だと思うがね」

アキオはそう言いつつも、エリオスがノアの話をすると僅かに表情が曇るヴァニラに『彼女も成長したんだな』と感心していた。
ノアがエリオスを良く連れ回すために会える時間が減って寂しいのと、ノアに対してヤキモチを焼いているヴァニラに気が付き、そういう感情を表せるようになった彼女を成長したなと感じていたからだ。

「ヴァニラ、まあその大丈夫だろう」

「そうでしょうか？」

「こいつに、そんな甲斐性はないと思う」

「二人とも、何の話ですか？」

それに、どうみてもシヴァ陛下と同じくらいの年齢にしか見えないノアに手を出すほど、エリオスもロリコンではないであろうとアキオは思いたかった。

世間的に言うとヴァニラも少しヤバいような気がしたのだが、彼女はこう見えても軍人として独り立ちしている存在であったし、今の彼女に手を出すほどエリオスもバカではないであろうともだ。

「ところで、ミントとちとせは……」

出発までの時間が差し迫り、アキオはまだ話をしていない他のムーン・エンジェル隊のメンバーの所在をタクトに聞くのだが、その前にタクト達に軍港横の人気の無い通路に、今まで静かにしていたランファと共に押し込まれていた。

要するに、タクト達に気を使われたのであろう。

「やあ」

「やあじゃないでしょうに……。本当に、急なのね」

二人以外に人気の無い資材搬入用の通路で、アキオとランファは二日ぶりに話をしていた。

急に色々とあったので、感覚的にはもっと時間が経っているよう

な気がしたのだが、それでも実際には僅か二日間しか時間は空いていない。

つまり、それほどこの二ヶ月ほどで二人は一緒に居る事が普通になっていたのであろう。

いや、一緒に居る状態が心地よくなっていたのだ。

「断らなかったのね」

ランファは、ここ最近の軍の任務に邁進するアキオに対して少し疑問を感じていた。

今までは、ムーン・エンジェル隊に居る以外にはあまり軍が好きでは無かったアキオが、あの大変であったネフューリア討伐以降も敢えて自分を苦難の立場に置いていたからだ。

「まあな、俺は軍人なわけだし。それに……」

「それに？」

「早くヴァル・ファスク関連の事を終えて、とっとと平穏な日々を送りたいのさ」

そのためには、今軍を抜けても意味が無く。

対ヴァル・ファスク戦で一定の状況の進歩を見せないと退役してもすぐに呼び戻されてしまう可能性が高い。

そう考えて軍で頑張っているアキオに、ランファは相変わらず合理的に動くのだなと感じていた。

「平穏な日々ねぇ」

「俺は、晴れて無職になれるわけだ」

「無職って……。急に怠け者になるのね」

アキオは大きな企業グループのオーナーでもあるのだが、それは今までと同じで数字しか見ないつもりらしい。

一生懸命にやろうと思えばいくらでも忙しくなるのだが、他にやりたい事があるのだとアキオはランファに話していた。

「俺は、主夫を目指す」

「主夫？」

「俺も、いつまでも一人ってわけでもないからな。ここ数年、軍人家業で多くの業を背負ったような気もするし、今度は人を育てる方に回るさ」

「アキオ……」

つまり将来的には結婚する予定で、その相手は今の所は間違いなく自分なのであろう。

それにまだ付き合い始めたばかりなので、今はプロポーズはしないらしい。

ランファは、アキオの態度と口調からそういう意図を受け取っていた。

「だったら、絶対に戻って来ないと」

「おいおい、ランファまで人を勝手に殺すなよ」

「でも……」

ランファは、タクトから今回アキオが辺境に派遣される経緯を聞いていた。

既に謎の敵戦力によって全滅した味方艦隊が二つもある宙域に自分の恋人が派遣され、間違いなくその謎の敵、ほぼ間違いなくあのヴァル・ファスクとの戦闘に巻き込まれるであろう。

僅か一人であったネフューリアの強さを直に経験しているランファは、アキオの身が心配で堪らなかったのだ。

「俺は大丈夫。何しろ、俺は悪運が強いからな」

「それは、前に聞いたわよ……」

「そうか、なら別の根拠を」

そう言うと、アキオは有無を言わさずにランファを抱き寄せ、その耳元にこう呟いていた。

「こんなに良い女が待っているんだ。勿体無くて死ねるか」

「アキオ……」

「安心したか？」

「うん」

「そうか、良かった」

二人はそのままキスをしてから別れを済ませ、ランファはタクト達の元に戻っていたのだが、なぜかミルフィーユ達の顔は真っ赤なままであった。

「ミルフィー、覗き見したわね？」

「ええと……」

ランファの追求に、ミルフィーユはすぐに顔を反らしてしまう。

「フォルテさんも！　ヴァニラも！　エリオスも！」

ランファが誰に聞いても顔を真っ赤に染めながら視線を反らしてしまうのだが、タクトだけはいつもと変わらない様子で彼女と対応していた。

「いやあ、あんなドラマみたいなセリフを吐いて、全く違和感ないどころか物凄く格好良いと思えてしまうんだからな。レイトンって、やっぱり凄いわ」

「やっぱり見てたんじゃないのよ！」

ランファは恥ずかしさのあまり絶叫していたが、もう一方のアキオの方もほぼ状況は同じなようであった。

チンギス・ハーンのブリッジ内が妙にソワソワとした空気になっていたのと、発進準備を終えた各艦艇から通信が入って来るのだが、なぜか全艦長の様子がおかしかったのだ。

「教官殿？」

「お前、やっぱり凄いよ。俺には一生あんなセリフは吐けん」

「覗き見とは趣味が悪い……」

アキオの呟きに、ブリッジのクルー全員がバツが悪そうにアキオから視線を反らしていた。

「各艦長達も、お前を総司令官として完全に認めたみたいだしな。怪我の巧妙とでも言うのかな」

「そんな理由でですか……」

ドラマの二枚目俳優みたいに女にクサイセリフを吐いても、それを目撃していた人達に違和感を全く感じさせなかった。

変な理由ではあったが、確かにそれで各艦の艦長達はアキオにある種の尊敬の念を抱いたらしい。

結果的には良かったのであろうが、少し眩暈を感じないでもないアキオであった。

それと、派遣艦隊は無事に出発したのだが、この泥縄的に出発した艦隊にやはり泥縄的に配属された人物が複数居て、更にそれをやはり直前になったから知らされたウランフ中将によって今教えられていたからだ。

「艦載機ですか？」

「ああ」

高速戦艦、高速装甲艦、高速重巡洋艦と。

この派遣艦隊には、偵察機以外に航空機の類を搭載していなかった。

勿論艦の設計的に最初から搭載されていないし、もし偵察機のスペースを改良して搭載可能にしても、シムス高速戦闘機が二機や三機あったところで碌に戦力になどならない。

かと言って空母など艦隊に揃えていたら、それこそ出発など一週間は先になってしまうであろう。

空母とその艦載機とは、それほど整備と戦力化に手間がかかるものなのだから。

『それなのになぜ?』と考えていると、アキオは一つ大切な事を忘れていた事に今になって気が付いていた。

「そういえば、見送りにミントとちとせが……」

「さすがはアキオさん、正解ですわ」

「アキオさん、また宜しくお願いします」

バツの悪そうな表情のウランフ中将の視線の先には、見送りには全く姿を見せないでいたミントとちとせが立っていたのだ。

要するに、一緒に付いて行くので見送りに参加する意義を感じなかったのと、急にこの艦に紋章機を搭載する事になったので準備が色々と忙しかったのであろう。

「全くの初耳なんだが……」

そういえば、今回の派遣艦隊にその手の報告をするライチ大尉は同行していない。

脈が無い事がわかったアキオと前線に同行させてもと、祖父のウォッカ大将が気を回したという事もなく、単純にアキオが代行者達でも軍務省戦備部第一部長の職が勤まるように置いてきたからであった。

当然後任の副官が必要なわけだが、艦隊内に適当に若い男性の尉官が居ればその人物に任せようと思っていたし、最悪特にいなくても大丈夫だとアキオは思っていたのだ。

「紋章機であれば、二機でも大きな戦力となりますから。現在、偵察機のスペースでエルシオールから派遣されたスタッフが緊急工事をしていますわ」

「そうなんだ……」

アキオは、『俺って、一応はこの艦隊の総司令官だよな？　報告が無かったけど』などと思いつつ、『少し面倒な事になったな』とも思っていた。

「副官の任につきましては、私が行いますから」

「ちとせさんだけはなく、紋章機のパイロットと兼任なので、私もちとせさんを手伝いますので」

「あの……、ウランフ中将」

まさかの展開に、アキオは一言文句でも言おうかとウランフ中将の方に視線を向けるのだが、既に彼はブリッジから見回りと称して姿を消していた。

さすがは、高速機動戦闘のプロというところであろうか？
アキオは密かに、青筋を立てていたのだが。

「ところで、この人事って……」

「はい。かなり急なお話だったので、タクトさんやミルフィーさん達はほんの少し前に知ったものかと（この艦隊への補給物資の件で、父に便宜を図って貰って正解でしたわね。見事に潜り込む事に成功しました」

ミントはいつもように笑顔を浮かべながら、今頃はタクト達もこの人事を知って驚いているであろうと話していた。
それと、この人事をウォッカ大将が承認したのは、もしこのまま派遣艦隊の準備をしていたら出発は間違いなく三日は遅れていたところであったが、その辺の便宜を主に物資関係でブラマンシュ財閥が請け負ってくれて、便宜を図って貰った責任者のウォルコット大将からウォッカ大将に話が密かに行っていたというのが真相であった。

この件に関しては、『なるべく急いで』と少し無理な命令を出したウォッカ大将にも責任があるので、アキオはウォルコット大将に文句を言うのは可哀想だと感じてしまい、ただ皇国軍の老人達の底意地の悪さに苦笑いを浮かべている状態であった。

「しかし、ムーン・エンジェル隊を割ってしまって」

「ウォッカ大将は、『どうせ、すぐに合流するからの』と仰っていましたが」

偵察機以外で機動戦力を持たない艦隊が脆弱な事実に変わりはな

いし、紋章機なら空母一隻分の艦載機以上の働きが可能で、その割には手間がかからずという事で、このムーン・エンジェル隊の分派が決定したらしい。

それに今のままで状況が進めば、すぐにタクト達も現地に派遣される事は確実で、すぐに合流が可能なのも事実ではあった。

「というわけでして、暫くお願いします（危険な戦場で、アキオさんは本当に好きなのは身近に居てくれる私だと……）」

「副官の任は任せてくださいね（危険な戦場で、アキオさんは本当のチャンス。危機迫る戦場で、アキオさんは真実の愛に気が付き私を……）」

明らかに怪しげな、何かを企むような笑顔を浮かべているために、ブリッジのクルー達は誰一人としてアキオ達と顔を合わせようともせず、己の職務に邁進したままであった。

そしてアキオは、これから始めるであろう二人のアタックに本当に浮気をせずに行くのもなのかと、かなり不安を覚えつつ、早速心の中でランファに謝ってしまうのであった。

それと、見送りを終えた白き月の軍港内では……。

「ちょっと、タクト！　何でミントとちとせがあの艦隊に配属されているのよ！」

「ちょっ！　ランファ、ギブ！　俺も今知らされたんだよ！」

「嘘つきなさい！　大将のあんたが知らないわけがないでしょうが

！」

「本当なんだって！」

見送りに来ないで変だと思っていた二人が、アキオの艦隊に配属された事実を出発後に知らされたランファは、その怒りをタクトにぶつけていて。

逆上したランファにネックハンキングで吊るされたタクトは、呼吸が遠のいて命の危機に曝されるのであった。

第三部　一話（暫定版）

「この辺境宙域において二つの調査艦隊が全滅した報を受け、シヴァ陛下、ルフト宰相、ウォッカ大将から命じられて派遣されたアキオ・レイトン戦時大将です。戦時階級ながら、最上級者の自分がこの宙域における様々な問題の対処を一任されていますので、もしそれに不満等があるのであれば、速やかにトランスバール首都星に戻ってから軍本部に異議を申し立ててください。ただし、それぞれが率いている戦力は置いて行って貰います。何しろ、今この宙域にある全ての戦力を持ってしても、謎の敵戦力に対抗し得るか際どい所ですので」

アキオがウランフ中将を副司令として、先に調査艦隊が全滅した宙域に艦隊ごと到着したのは、白き月を出てから五日後の事であった。

とにかく必要な物だけを積み込んで出発し、その航路の大半がクロノ・ドライブを使っての移動だったので、その間に同じく急遽総旗艦チンギス・ハーンに乗り込んで来た、ミントのトリックマスターとちとせのシャープシューターが発着可能なように、偵察機の整備・発進スペースの緊急工事も行っていた。

幸いにして、白き月から数名の技術者も派遣されていたので、彼女達は艦内の整備兵達と協力して、何とか目的地に到着するまでに無事に工事を終えている。

それに、最初は手間とコストがかかって何かと大変であった、紋章機をエルシオール以外の艦で運用するための改装工事をも含めた方法は、既に完全にマニュアル化され、他にも予備で数隻の艦でも運用可能なようになっている。

この辺境の宇宙で、僅か一隻のみ紋章機が運用可能な艦が沈んでしまったとしたら？

アキオでなくても、万が一の際の保険は掛けておきたいところであったのだ。

本人達以外ほとんど思わなかった、まさかのムーン・エンジェル隊を分割してまでの二人の参加ではあったが、それでも彼女達が戦力として使えるのであれば、それは計算に入れておきたい。

その辺は、冷徹で合理的な艦隊司令官でもあるアキオらしい決断でもあった。

そして無事に、辺境宙域のトランスバール皇国領から未確定宙域に侵入したアキオ達は、そのまま急ぎ三つの調査艦隊と合流している。

彼らも、このまま無理に分かれたままで調査を続行したりすれば、先に連絡を絶った二つの調査艦隊と同じ結末を迎えるだけと、かなり後退して急いでアキオ達との合流を無事に果たしていた。

だが、それは彼らが従順にアキオの命令に従うという事を意味しているわけではない。

やはりアキオは自分達の半分以下の年齢の若造であり、これに不満が無いわけなどまずあり得なかったからだ。

もしかすると、上手くアキオを煽てて自分が影の司令官として動こうなどという野心を抱いている可能性もあり、今の時点でそんな事を企まれては困ると感じたアキオは、一番最初に『ガツン！』と自分の意見を述べていたのだ。

『文句があるのなら帰れ！　不満があってこちらの命令通りに動けないとなると、俺達まで巻き添えで死んでしまう可能性もあるのだから！』

そう暗に仄めかして、最初に舐められないように釘を刺しておく事を忘れなかったのだ。

「いえ、レイトン大将の命令には従います」

「小官にも、特に異議などありません」

「自分も同じです」

ところが、アキオが拍子抜けするほど彼らは素直にアキオの命令に従っていた。

四つの艦隊の合同・再編成作業から、彼らが保有している空母艦載機と偵察機なども使った偵察ローテーションの作成、今までに集めたこの宙域に関する情報を刷り合せての詳細な地図の作成、今までに帰順させた惑星国家の政府首脳達に対するトランスバール皇国の行動指針の通達や、シヴァ陛下からの親書を届けて貰ったりと。

三人は特に文句を言うわけでもなく、命令通りに行動をしていた。

「何だ、意外そうな顔をして」

ウランフ中将が不思議そうな顔をしているアキオに気が付くのだが、ベテラン扱いのウランフ中将ですら彼らよりも十歳近く若かったので、もし自分が若造だと舐められた時に重石としては機能しないと思っていて、余計に心配していた部分もあったのだ。

「俺も、彼らから言わせれば若造だからな。もう何年かで四十歳になる俺が言うセリフでもないが」

本来貴族や皇族でもなければ、四十歳までに将官になる事すらエオニアの乱以前ではあり得ない人事であり、それだけ今が非常事態だという事でもあった。

いくら市民階級の者達を多数皇国内で要職に就かせるにしても、やはり普通に考えればそれは大分年配になってからで。

少なくても五十歳を超えていなければ、まずそこまで急に抜擢されるはずもない。

何しろ皇国の人事は、ＳＦ映画やスペースオペラ小説ではないのだから。

ましてや、二十三歳のアキオが戦時昇進ながらも大将になるなど、皇太子か若くして爵位を継いだ大物貴族でもなければ、まずあり得ない人事でもあった。

貴族のタクトでも、少将程度が精々であったであろう。

「連中がお前に従順な理由は……。まあ、お前は嫌がるだろうけどな……」

アキオは庶子ながら先代シードル公爵の長男であり、シードル公爵家は皇族とも血の繋がりのある、というか公爵という爵位が皇族と血縁関係が無いと与えられない地位なので、アキオは遠縁ながらも皇族の血を引いているのであった。

ちなみに、タクトの実家であるマイヤーズ伯爵家も、僅かながらに皇族と血縁関係があるらしい。

とはいえ、その程度の血縁関係など大半の貴族が同じなので、や

はり公爵であるシードル公爵家は宮廷内では別格という評価が成されていた。

「皇族とも血縁がある俺だから、ここではシヴァ陛下の代理人として振舞っても文句は無いという事ですか」

「それと実際に、お前はシヴァ陛下のお気に入りだからな」

最初の出会いは、生意気な家臣としてシヴァ皇子が神輿として使えるのかと値踏みするアキオと、長年一緒に暮らしていたシャトヤーンと別れて不安になっていたので、食事を取らずに周囲の大人達を警戒するシヴァ陛下という、あまり良い関係ではなかったのだが、後に他の家臣達とは違って耳に痛い事でも平気で言えてしまうアキオをシヴァ陛下が気に入り、彼を家庭教師に任命し、次第に信用できる家臣として時間があれば連れ回すようになり、今では少し拙いような気もしたが、シヴァ陛下は一人の女としてアキオに恋心を抱いていた。

ただ、それはシヴァ陛下自身は普段は表には出してはいけないものだと感じていて、それでももし自分が結婚可能な年齢になった時にアキオが独身であったら、容赦なく婿にしてしまうつもりらしい。

その話をルフト宰相から聞いたアキオは、その可能性はゼロに近いなと感じながらも、まあそれも人生であろうと達観はしていたのだが。

それに、『まず自分は、間違いなくランファと結婚するんだろうな』とも思ってもいたのだから。

「お前に変に逆らって、陛下の不興を買いたくも無いんだろうな」

「この辺境においてまで、陛下の威光に縋る俺達ですか」

「まあ、お前の仕事に文句もないからだろうな」

ここに到着してからのアキオは、再び副官となったちとせと、新しく副官になったミントをフルに使って若造とは思えない仕事ぶりを発揮している。

三人の中将は、もしアキオがシヴァ陛下の寵愛を傘に着る無能な大将であったら容赦なくサボタージュでもしようと思っていたらしいのだが、そんな事をする必要は無かったというのが事実なようであった。

なるほど、多才のレイトンは嘘ではなかったのだと思っていたのだ。

「お前が、一番バランスが良いからな」

「一番ですか？」

ウランフ中将も、故モルト元帥のように士官学校同期の三人組の実力を早くから認めている人物でもあった。

タクト・マイヤーズは、余人にはまず真似が出来ないカリスマを秘めていて、そのせいで多くの有能な人物が集まり、そんな彼らを上手く使いこなす度量を秘めた大鉈のような人物であると評している。

ただ今回のような状況だと、もしレスターのような参謀がいないと最初の立ち上げに時間を食う危険性があった。

レスター・クールダラスは、切れ者で参謀としての能力に長けている人物であり、彼を一番上にするとその生真面目さと冷静さが一部の人達の反発を買ってしまう可能性があった。

彼もそれは自分で十分に理解していたので、自分をちゃんと使いこなす事が可能なタクトの下で十分だと考えていたし、敢えて真面目で厳しいナンバー2を演じている部分もあったのだ。

ただムーン・エンジェル隊の場合だと、エオニアの乱後に少し隊を預かった時に、ランファとミントに振り回されてかなり精神をやられたりもしている。

戦力にはなるが隊員が個性的過ぎるので、司令官はゴメンだと思っているのも事実なようであった。

「お前は能力的にも性格的にも、二人のちょうど中間地点にいるからな。マイヤーズほどではないが、お前にも人を統べ、引き寄せる力がある。今回の任務には適任だったわけだ」

それに、タクトならば面倒だと思ってしまう最初の立ち上げという作業を、アキオほど得意としている人間はいないのだと。

各方面軍の通商護衛艦隊を纏める護衛艦隊、ノアと協力してのコストと量産性に優れた省力戦闘艦の量産の立ち上げと。

ウランフ中将は、戦闘バカの自分では到底真似は出来ない才能だなと感じていたのだ。

「まあ、そんなわけだから頑張れや」

「ええ、タクトに引き継ぐまでは頑張りますよ」

アキオは、自分達が露払いの先遣隊である事を自覚していた。
今は出来る限り、戦力と今までに押さえた領域を確保しつつ、なるべくこの辺境宙域の情報と、もし敵と遭遇したらその情報もなるべく調べておく。
この際、戦闘は最後の手段だと考えていた。

もしヴァル・ファスクである敵がこの宙域に侵攻すれば、今の自分の戦力で全滅させる事は難しいであろう。
それに下手に全滅なり撤退させて、更に強大な援軍を呼ばれてしまう方が驚異でもあった。

何しろ、それを行ったとしたら自分達も相応に被害を受けているであろうし、この辺境宙域ではその損害を回復する手段がないからであった。

更に減った戦力で、敵はもっと数を増やして戦いを挑んでくる。
明らかに敗戦フラグという物であった。

今はとにかく集められるだけの情報を集めつつ、時間を稼いで敵の足を止める。

後は、本軍を率いて来るであろう最高司令官と、タクト達に任せるのが良いのだとアキオは考えていたのだ。

「あまり戦闘は出来ないわけか。理解はしているがな」

元々勇猛果敢な性格をしているウランフ中将は、今回のアキオの方針に少し残念そうな顔をしていた。
とはいえ、彼は猪武者でもなかったので、無理に戦おうとは考え

ない冷静さも持っていたのだが。

「味方の戦力が揃えば、嫌でも派手にやる事になりますからね。今は、静かにその牙を研いでおきましょう」

「お前も言うな」

「士官学校時代の教官殿の影響ですかね？」

「そうかい」

ウランフ中将は、本人はあまり好きではないと公言しているのに妙に軍人としてはハマっているアキオに苦笑しつつも、自分も懸命に彼の補佐を行うのであった。

ただ、やはりアキオでもどうにもならない事が存在はしていた。

「レイトン司令、指定された宙域の偵察を完了いたしました。暗礁宙域を含む詳細なデータはすぐに航法担当者に転送して、地図の作成の参考にして貰います」

アキオは、とにかくこの宙域は勿論なるべく先の宙域まで出来る限りの正確な地図を作成しようとしていた。

この宙域をトランスバール皇国の領域として支配するにも、ここで敵と戦うにしても、詳細な地図が無ければ話にならない。

まだ詳細が良くわからない敵と戦うからこそ、アキオはクドイほど各種の情報収集に拘っていた。

その昔、国家で地図を作成する部署の多くは軍であった。

まだ良く知らぬその地を支配するにも、この地を巡って他の国家と戦う時にも正確な地図が無ければ話にならず、しかも自国の力が及ばない地域での情報収集や測量には大きな危険が伴うのが普通であったからだ。

そんなわけでアキオは、後発で来る味方のために少しでも役に立つようにと、辺境宙域の地図と航路図などの作成を急がせていた。

「ちとせ、ご苦労様。紋章機のH．A．L．O．システムを利用した探知システムは、本当に優秀だな」

「レイトン司令のお役に立てて光栄です」

そしてその中でも、アキオは紋章機のシムス高速戦闘など比べ物にならない精度を誇る探知システムに目を付け、ミントとちとせを交代で積極的に偵察に出していたのだ。

二人は交代で偵察とアキオの副官の任をこなし、とにかくアキオと少しでも一緒に居ようと努力を続けていた。

二人はライバル同士だったのだが、この艦隊で暫く過ごしていると、実は他にもライバルが多数存在している事実に気が付いていた。

紋章機の運用のためにこの艦隊に着任した白き月の技術者と整備兵の全員が女性であったし、元もこの艦隊にも女性士官などは存在している。

航行中の軍艦とは所謂閉鎖空間であり、そこに男女が混合して存在していると時に色々と問題が発生する。

一番多いのが身近でくっ付いてしまう事なのだが、これには今までの恋愛関係を捨て去っての結果だったり、もしくは不倫関係だっ

たりと。

余程の事でも無ければ、軍は軍人のプライバシーには口を挟まず、その余程の事とは任務に影響が出てしまった場合であった。

要するに何が言いたいのかと言えば、アキオは恋人がいる事を公言しているが、この過酷な辺境任務で自分に靡くかもしれないと、邪な野心を抱いている者が複数存在していて、彼女達をアキオに近付けないために、常にどちらかがアキオの傍にいるという状況になっていたのだ。

アキオからすると、他の女性士官に色目を使われても困るので、知己である二人の存在はありがたかったが、二人も未だにアキオの事を諦めていないのも事実で、正直なところ『何も起きなければ良いけど……』などと真剣に思っていた。

偵察を終えたちとせが、屈託のない笑顔でアキオに報告を行うのだが、その一方でミントと協力して他の女性軍人達をアキオに一切近付けないようにも動いているし、しかもアキオはランファを選んだ過程で自分への好意を告白した彼女をフッてもいたので、その辺の事情と合わせて少し申し訳ないような気分に襲われてもいたのだ。

他の女性を近付けない強かさと、未だに諦めていない男性への献身的な貢献と。

二人は、ただ副官やいち部下としてアキオを懸命に支えて何か代価を求めるわけでもなく、周囲の軍人達は『健気な娘達だな』という評価と、『レイトン大将、我慢できるかねぇ』という下世話な噂話をしていた。

ところが確かに下世話なのだが、恋人を故郷に置いて艦隊で長期

間宇宙を航行していると、その間に艦隊内の女性とくっ付いてしまうなどという事は特に珍しくもなかったのだ。

多分、二人もそれを理解して密かにウォッカ大将に謀って、今回の同行を決めたのであろう。

「レイトン司令、お茶を淹れますね。それと、和菓子も作ってみたんです」

「悪いね……」

やはり屈託の無い、可愛らしくそれでいて艶のある笑顔をちとせはアキオだけに向けていて、ウランフ中将以下ブリッジに詰めている軍人達はアキオの様子を興味深そうに観察していた。

他の女を選んだがためにフッた事になっている女性と、再び司令官と副官の関係で任務を行っていて、しかも司令官が選んだ恋人は遥か遠方で司令官を待っている身でもありと。

しかも、もう一人そういう女性が同じく副官として働いている。

何か恋愛ドラマのように衝撃的な展開でも起こらないかと、特に妻帯者で自分は平穏な方が好きな軍人達が野次馬根性で観察していたのだ。

「あの、ウランフ中将……」

「総司令、書類仕事があるんだろう？　なら、副官殿に手伝って貰えば良いじゃないか。場所も、司令官用の執務室で行えば良い」

次第に巨大化していて、しかも省力化の影響で大型軍艦ともなると、司令官専用の書斎や執務室までが完備されているのだが、ウランフ中将はアキオを巡る女同士の争いを少し離れた場所で見るのは好きだったのだが、近くで巻き込まれるのはゴメンだと考えているらしい。

適当にアキオが心の中で冷や汗をかく光景を見て楽しめたので、後は当事者同士だけでと、二人を執務室へと追いやっていたのだ。

元々この艦隊は、ウランフ中将が自ら鍛えて直率している艦隊なので、この艦隊に関する業務はアキオに一切存在していなかった。

なので、アキオが引き篭もって書類仕事をしても、ウランフ中将達は一向に困らなかったのだ。

「レイトン司令、執務室に行きましょうか」

「ああ……」

まさか直接手を引かれているわけではなかったが、ウランフ中将達はビリッジを後にするアキオに間違いなく手綱が付いているように感じてしまうのと同時に、『こんなにモテているのに、全く羨ましくない』とも思ってしまうのであった。

「ほう、予想通りに援軍を出して来たか。しかし、コッソリとか……」

アキオが率いるトランスバール皇国軍が、辺境宙域に展開していた三つの調査艦隊との合流に成功し、その後静かに密かに主に情報収集活動をしていた頃、遠く離れた同じく辺境宙域で、一人の男性が座上する戦艦のブリッジの中で最新の偵察情報を確認していた。

彼の名はロウィルといい、その正体はヴァル・ファスクで、トランスバール侵攻艦隊総司令官でもあり、ヴァル・ファスクのＮＯ．２の地位にもある人物であった。

彼は、先に部下であったネフューリアを一人トランスバール皇国に送り出しながら、その間に多くのヴァル・ファスクとトランスバール皇国の領域の間にある、この未確定辺境領域の平定作戦と、その足元固めに奔走していた。

彼は幾多の戦いで功績を挙げている人物であったが、同時に沈着冷静で合理的な判断が出来る人物でもあり、今までに多数占領している惑星国家群に一切の反抗と反逆を許さないで、効率的に自分の指揮する艦隊の補給維持や、新規の艦艇建造に必要な物資を接収する事に成功している。

簡単に言えば支配と搾取を効率良く行っているわけなのだが、生かさず殺さずに上手くその搾取を行っていたのだ。

とはいえ、人数が極端に少なく、その戦力のほぼ全てが無人艦艇で占めているヴァル・ファスクは、食料を大量に徴収して惑星国家群の住民達を飢えさせたりはしていなかった。

それに財貨なども基本的に必要が無いわけで、彼らは主に各種の金属類やエネルギーなどを定期的に徴収していた。

当然、主に兵器の材料を奪われた惑星国家群は、その牙を見事に奪われている。

惑星国家群の政府や元首達は、ここで無理に彼らに反抗するための武器を準備してもまず技術力と戦力比で敵うはずもなく、しかも彼らにも生活があるので残った金属やエネルギーなどは民需に回さなければいけなかった。

強引に兵器類を整えるという手も無い事も無かったのだが、それをして住民達を飢えさせても意味が無い。

下手をすると、民衆の不満が自分達に向かう可能性が高かったからだ。

それに、次の選挙で負けてしまうという現実的な理由もあったのだが。

そんなわけで、ロウィルはこの未確定辺境領域のほぼ半分を押さえたわけだが、つい少し前に分割派遣していた艦隊が謎の敵艦隊と遭遇し、これを無事に撃破したという報告を受けていた。

後の残骸調査で、この敵艦隊は自分達をも撃破可能な技術力を持っているらしく、しかも兵士の死体が着ている軍服から、彼らが前にネフューリアに侵略の先鋒を任せた、トランスバール軍の物である事が確認されている。

つまり、ネフューリアは捕まるか、死ぬかしたのであろう。

でなければ、トランスバール皇国軍がこれほどの規模の艦隊を複数辺境宙域に派遣などするはずがなかったからだ。

『そうか、あの女は死んだか』

ネフューリアの死に、ロウィルはただ一言だけ呟いていた。

ヴァル・ファスクには一応国家と軍事組織があり、そこでは各員

の序列が存在していたが、基本的に彼らは個人で動く事を好む。
無人艦艇を一度に何百隻も動かせるので、他の者など基本的には邪魔者でしかなかったからだ。

それに、彼らは自分が良ければそれで良しという部分もあり、他者が失敗をしても、それはその人物が無能だったからで特に何も言う事は無く、むしろ自分に迷惑をかけないで欲しいくらいにしか思っていなかった。

「この全滅させた二つの艦隊は、功を焦って前に出過ぎただけのようだな」

既にネフューリアの事などとっくに記憶に無いロウィルは、新しい敵の司令官があの下等な生物にしては、冷静に動ける人物である事を理解していた。

こちらの策敵範囲には全く入らず、少しずつ自分達が抑えた宙域の地図を作成しているらしい。
つまり、彼らは自分達が戦力の要だとは思っておらず、いずれ到着する本軍のために少しでもこの辺境宙域の情報を集めようとしているのだと。

「下等種族の中にも、少しは考える脳を持っている個体もあるのだな。だが……」

まず、自分にとっての脅威にはなり得ないであろうと考えるロウィルであった。
完全な敵艦隊に関する情報はまだ距離の関係で無かったが、推定される戦力では自分達を撃破する事など困難であり、しかも所詮はあの下等生物でしかない。

あの惑星国家群制圧時に、自分を後ろ盾に独裁政権を維持しようと、揉み手で下衆な笑みを浮かべて挨拶に来たあのクズ達。
同じ場所で息をするのも気分が悪くなる、無能で救い難いバカ達と、そんなバカ達に統治を任せてしまうもっと下衆で使えない住民だの市民と称する部品達もだ。

このような無能な連中は、ヴァル・ファスクで管理してようやく生きていける真の意味における下等生物でしかないのだから。

「こいつらを最初に撃破して、これから来る援軍と本軍の意図を挫くか……」

ロウィルは、急ぎ自分が指揮する艦隊を割ってアキオ達の元に向けていたのだが、その戦力比は二対一ほどであり、アキオ達は大きなピンチに見舞われようとしていた。

「お茶のお替りはいかがですか？」

「うん、貰おうかな……」

艦隊の運用をウランフ中将達に任せ、その他に必要な書類仕事を含む雑務などに取り掛かるアキオであったが、ここ数日間、彼は精神的に針の筵状態であった。

突然付いて来る事を宣言したちとせとミントは、交代で二人きり

でいる時にも、別におかしな色仕掛けなどをしてくるわけでもないし、ランファと別れて自分となどと無理を言ってくるわけでもない。

そんな事をすればアキオに呆れられてしまうのは良くわかっていたので、そんな無駄な事は一切しないでいたのだ。

ところが彼女達は、交代で甲斐甲斐しく紋章機による偵察・情報収集と副官としての任務をこなし、このようにニッコリと笑顔でアキオにお茶を淹れたり、簡単な料理などを作ったりもしていた。

何も代価を求めない美少女二人の献身的な行動に、元々この方面の経験が薄いアキオは、次第に少々の罪悪感を感じるようになっていた。

ところがウランフ中将などに言わせると、『良く考えられた巧妙な手だな』という事になるのだが。

彼は意外とその手の経験が豊富で、二人に翻弄されているアキオを見て苦笑していたのだ。

ただ、それでも実務に何の影響も無かったので、彼が口を出すという事はなかったのだが。

「やはり、駄目か……」

「あの、何が駄目なのですか？」

「敵が来ても、戦闘は不可だなという話さ」

アキオは、お替りをお茶を差し出しながら自分に質問をしてくるちとせにドキドキしながら、それでも自分を保って意見を述べていた。

この辺境宙域における、唯一のトランスバール側の戦力である自分達はとにかくここで消耗をするわけにはいかなかった。
多分、この戦力ならばヴァル・ファスクが送り出す先遣隊を一度や二度は撃退可能であろう。
敵の多少の数の優位も、紋章機があれば何とかなるはずだ。

ところがこの辺境宙域で損害を受けても、それを回復する手段が存在しない。
帰属させた惑星国家群の技術力では、これらの艦隊の簡単な修復はともかく、大規模な修理や、ましてや新造艦の建造など不可能であったし、いきなり失った人員の補充なども不可能であろう。

それに彼らに頼るという事は、必然的に彼らを絶対に守るという義務すら発生する。
艦隊の、行動の自由を奪われてしまうのだ。

「援軍がいつ来るのか、わかっている状態でなら戦闘も可能なんだがな。敵を減らすという目的と、本軍への負担を減らすという意味でも十分に理に叶った行動だ」

「つまり、敵が来たら逃げるという事ですか？」

「そういう事さ。さすがは、ちとせだな」

いつものように柔らかい笑顔を浮かべながら答えるアキオに、ちとせは軍人なのに平気で逃げるという作戦案を提示する彼を素直に凄いと感じていた。

昔の自分であれば、せめてひと当てしてからとか言ったのであろ

うが、そういう無意味な軍人のプライドが二つの調査艦隊の全滅に繋がっている事も理解しているちとせは、ただ彼の意見に納得するのみであった。

それに、一時的に敵に今まで押さえた惑星国家群を委ねるにしても、事前に彼らには事情は話してあったし、ヴァル・ファスク艦隊の先遣隊なり、場合によっては本軍がそれらを押さえに走れば、その分彼らに負担をかける事も可能だ。

戦力さえ残しておけば、本軍と合わせて彼らを撃破するという作戦も十分に可能であった。

何しろ、本軍には間違いなくエルシオールと他のムーン・エンジェル隊が配属されているはずなのだから。

「そのための、辺境宙域の調査だったのですね？」

「まあな」

そこまで話をしたアキオであったが、その直後にブリッジから緊急通信が入って来る。

「レイトン、不味いぞ。敵の大艦隊だ。今、偵察中のブラマンシュ少佐から通信が入った」

どうやら、今ちとせに話した逃げるをすぐに実行しなければいけないのだと感じるアキオであった。

「数は、ちょうど二倍か……」

「無人艦隊とはいえ、戦闘は無謀だな」

数分後、アキオはすぐにブリッジに戻り、そこでミントからの通信を聞きながらウランフ中将達、司令部の要員達と話をしていた。

「まあ、勝てない事は無いだろうがな」

敵の数が二倍なのに、ウランフ中将は自信満々にまず負ける事は無いだろうと宣言をしている。

理由は、敵の無人艦隊は本当に完全に無人らしく、なぜか彼らは艦隊のみで機動戦力を運用していなかったからだ。

なので、こちらが上手く空母艦載機を使えば、少なくとも負ける事はないであろう。

それに紋章機も二機あったので、これは大きな戦力となるはずであった。

「ところが、それで受ける損害を考えるとな。追加で援軍でも送られたら、俺達はアウトだな」

そして全滅後に、この宙域の制宙権を完全に押さえたヴァル・ファスク艦隊に本軍は大きく苦戦する事になる。

多分、辺境宙域への侵入だけでも大きな損害をなるであろう。

制宙権を完全に失うという事は、そういう事なのだ。

「ですが、逃げても戦況は同じなのでは？」

こちらに戻りながら、トリックマスターから通信を入れて来るミントであった。

「これだけの規模の戦力が、自分達が抑えようとしている宙域に潜伏し続ければ、それは彼らに大きな負担を与える事となる。ミントも急いで帰還して欲しい」

「なるほど、そうでしたか」

つまり、本軍到着まで海賊やゲリラとなってヴァル・ファスク艦隊に負担を与え続ける。

もしくは、敵にこちらがそれを行うと思わせて警戒させる。

それを理解したミントは、急いで通信を切ってアキオとの合流を目指す。

高速で飛行を続けるトリックマスターは、先に発見した敵艦隊を完全に振り切り急いで味方へと合流していたのだが、すぐにも味方艦隊は敵艦隊と交戦距離に達してしまうはずであった。

「ところが、その前に逃げる！　全艦隊転進準備！」

アキオは、全艦隊に転進命令を下していた。

あくまでも『転進』なのは、『撤退』だと不満もある血の気の多い軍人達も多かろうという理由からであった。

艦隊は一度秩序を失って完全にバラバラになったように見えたが、

彼らは事前に合流先を指定されていたので、別に艦隊が崩壊したわけでもない。
敵に『こちらの数の多さに、恐れを成して崩壊した』と思わせるためでもあったのだが、これは成功すれば儲け程度にしか考えていなかった。

バラバラに逃げてしまえば、敵が無人艦隊の場合は対応に手間がかかるはず。
そう考えて、敢えて小戦隊規模でバラバラに撤退させていたのだ。

「いきなり逃げってのも凄いな」

総旗艦チンギス・ハーンは、数隻の駆逐艦やまだ着艦していないトリックマスターと共に、目標であるとある暗礁宙域に向けて移動中であったが、ここで思わぬ刺客がアキオを襲う事となる。

なぜか、艦載機を運用していないはずの敵艦隊から、数機の戦闘機レベルの反応が飛び出し、こちらに向かって来ていたのだ。

「艦載機？　いや！　偵察機の特攻か！」

無人艦隊ならではというか、これはロウィルが半ばお遊びで細工した、相手が有人艦隊だからこその『司令官抹殺プログラム』でもあった。
無人艦隊なので正確に敵司令官の座上する旗艦を特定できるわけはないのだが、とにかく大型艦のブリッジを狙うようにプログラムされているらしい。
合計で五機の偵察機は、碌な武装などないのに一直線にチンギス・ハーンのブリッジを目指していた。

「私がシャープシューターで！」

「間に合いませんわ！」

たまたまだ着艦していなかったトリックマスターに、チンギス・ハーン他数隻の駆逐艦戦隊が狂ったように対空火器を撃ちまくり、すぐに偵察機は残り一機まで撃ち減らされてしまう。

やはり、そこまで期待しての作戦でもなかったようだ。

ところが、たまたま運良く一機の偵察機がこちらの目前にまで迫っていた。

「アキオさん……」

至近にまで迫った敵無人偵察機の特攻攻撃にちとせは恐怖し、すぐに隣のアキオへと視線を送っていたのだが、彼は特に動揺する事もなく真正面から敵を見据えていた。

「ミントの腕前を信じているからな」

「ええいっ！　フライヤーダンス！」

アキオの言葉通りに、トリックマスターはギリギリのタイミングで最後の敵偵察機を撃ち落す事に成功していた。

その事でブリッジ内に安堵の溜息が複数広がるのだが、ここで思わぬアクシデントに見舞われる事となる。

撃墜には成功したのだが、あまりに至近で爆発したために大量の破片がブリッジに飛び込んで来たのだ。

大半はシールドで弾かれていたが、一部が外壁に突き刺さって貫通して内部の喰い込み、そのままブリッジ内に搭載されている機材を爆発させ、その破片が複数の司令部要員達を襲っていた。

「っ！」

「危ない！」

ちとせは、自分の近くにあった予備の大型通信機が大爆発したのを感覚では感じ取っていたが、それに対応できる時間はなかった。

間違いなく大怪我か、もしくは死を意識した彼女であったが、その前に半ば本能的に動いていた人物がいた。

アキオが、ちとせを抱きかかえるようにしてその身を庇ったのだ。

「（アキオさん……）」

爆発の衝撃でアキオを共に倒れてしまったちとせであったが、幸いにも怪我などはしていないようであった。

周囲から、女性通信士のうめき声や、ウランフ中将の『軍医を呼べ！』という怒鳴り声などが耳に入って来ているので、怪我をした人がかなりいるらしく、自分はその点ではツイているようであった。

ところが、いまだに倒れながらも自分を抱きかかえているアキオがいつまで経っても倒れたままで動こうとしない事実に気が付くのに、ちとせはそう時間をかけなかった。

「アキオさん！」

起き上がってからいまだに倒れたままのアキオの様子を見ると、彼の背中には多数の機材の破片が突き刺さり、そこから大量に出血している状態であった。

ちとせは、その大量の破片が本来であれば自分に突き刺さる運命であった事に気が付く。

アキオは、自分の代わりに大怪我をしたのだと。

「軍医！　司令官殿が負傷された！　急げ！」

幸いにして無傷であったウランフ中将は、すぐに負傷したアキオに気が付き、そこに軍医を引っ張ってくる。

軍医である中年の中佐は、すぐにアキオの脈を取ってから背中の傷の確認を開始する。

「おい！　急いで止血だ！」

軍医は、比較的軽傷者の多い他の軍人達の包帯を巻いていた若い女性の看護兵を呼び、彼女に急いで傷の止血を開始するようにと命令する。

「軍医長、大丈夫かな？」

「ああ。若いし、見た目以上に鍛えているようだな。すぐに止血して手術はするが、死ぬような怪我じゃない」

「そうか……」

軍医の診断結果を聞いていたようで、アキオは急に目を開けてか

らウランフ中将と軍医長の話に加わっていた。

「手術は、麻酔無しというわけにはいかない。三日間は指揮を執るのは不可能だ」

「良い軍医長殿だな。その後なら良いらしい」

「言っても聞かないだろうからな。首から上が動けば命令は出せるしな」

「というわけなので、所定の暗礁宙域への避難と、戦力の再編、偵察ローテーションなどの実行は、ウランフ中将に一任します」

「三日間だけの総司令官代理か。わかった、引き受けよう」

三人で話をしている間にも、女性看護兵は躊躇い無く医療用の大型カッターでアキオの軍服の背中の部分を切り裂き、傷が深く出血している部分から順番に応急止血を行っていく。

そしてその間、ちとせは自分のせいで負傷してしまったアキオの傷と血を見て顔を青ざめさせていた。

「アキオさん……」

「少佐殿！　そこに居るだけなら邪魔です！」

女性看護兵は、ただ呆然としてアキオの傍から離れないちとせに容赦なく邪魔だと怒鳴っていた。

確かに傷自体は命の別状は無いのだが、このまま出血を放置していると出血多量で重篤になってしまう可能性があったからだ。

「っ！」

「止血箇所が多くて手が足りません！　少佐殿は応急看護の経験は？」

「講習のみです」

「それを思い出しながら、ゆっくりと落ち着いてお願いします」

「はいっ！」

ちとせは自分で自分を奮い立たせると、女性看護兵と一緒に初めてとは思えない手付きで傷口の止血を行い、すぐに二人で自動式のストレッチャーに乗せて手術室まで運んでいた。

さすがに手術の手伝いまでは出来ないので、あとは結果待ちではあったが、そこにトリックマスターを着艦させたミントが血相を変えて飛び込んで来る。

「ちとせさん！」

「アキオさんは、命に別状はないそうです」

「そうですか……。でも、私がもっと早くあの無人偵察機を撃墜していれば……」

「本当ならば、私が大怪我をするはずだったんです。それを、アキオさんが庇ってくれて……」

手術中のライトが輝く手術室の入り口で、ちとせとミントは祈るように早くアキオの手術が無事に終わる事を願うのであった。

そしてその後、ウランフ中将が指揮を代行したチンギス・ハーン以下少数の艦隊は、無事に目的地であるまだ現地の惑星国家ですら把握していない暗礁宙域へと到着。

他の艦も、ほとんどが無事で合流に成功している。
ほとんどと言っているのは、やはり他の大型艦艇数隻にも特攻機が突っ込み、それで艦長や中級指揮官や司令部員達などが戦死したり、負傷したケースがあったからであった。

それでも艦自体の喪失はゼロに終わり、これより艦隊は本軍が来るまで通信を一切遮断して、敵の出方を伺う事となる。

なお、トランスバール皇国軍本部は、これを持って正式にアキオ・レイトン総司令が指揮する艦隊が所在不明になった事実を確認したのであった。

「どういう事か、説明せよ！」

アキオが指揮する先遣艦隊が消息を絶ってから数時間後、派遣する本軍の編成と出撃準備に忙しいウォッカ大将は突如シヴァ陛下から呼び出され、そこで珍しく叱責を受ける事となる。

「レイトンの艦隊が消息不明になった件ですかな？　陛下」

「他にあると思ったか？」

確かに、彼女がそこまで激高する理由は他には存在しないなと考えるウォッカ大将であったが、彼は当然の如く落ち着いていた。

なぜなら、事前にアキオからこうなる可能性が高い事は聞いていたからだ。

『現状の戦力で対抗不能の場合は、そのまま逃げて隠れていますから』

いくら敵との対比では不利な戦力ではあったも、何処かの暗礁宙域にでも逃げ込んでいれば、それだけで相手に警戒感と捜索や補給艦隊への護衛の手間という負担を与えられる存在となる。

敵の、制宙権の完全把握を阻止する嫌らしい手でもあった。

一見すると、普通の軍司令官であれば誰にもで考えられそうな手ではあるが、実際にこれを行うとなると、とにかく戦う事が全てという考えの部下のからの反対やら、上手く逃げ込む隠れ場所の確保など、しかもこれは一箇所ではすぐに見つかってしまう可能性があったので複数の確保が必要でもあった。

現地に到着したばかりの僅か二十三歳の司令官が、年上ばかりの部下達を上手く御して紛れの一手を打った。

もっとも、その際にアキオが負傷した事実はさすがにウォッカ大将でも掴めていなかったのだが。

ウォッカ大将は、やはり自分の人選は間違っていなかったのだと改めて再確認する事となる。

「（ワシの二十三歳の頃とは大違いじゃの。天才とは、本当にいるものじゃ……）陛下、秘密は守って貰いますぞ」

ウォッカ大将は、ルフト宰相とシヴァ陛下にだけ事前に聞いていたアキオの作戦を説明していた。

なぜこんな回りくどい事をするのかと言えば、これから派遣される本軍に緊張感を持たせるという事と、万が一にも敵側に機密が漏れてはという可能性のためでもあった。

先のネフューリアはたった一人でトランスバール皇国に侵攻して来たが、彼女が作った諜報網などが宮廷内にも張り巡らされていないと誰かが保障できるわけでもなく、ならばアキオの艦隊が消息不明になってシヴァ陛下が自分を叱責している状態の方が敵を油断させるであろうと、ウォッカ大将は考えていたのだ。

「そういう事だったのか。では、早く援軍に向かわないとな」

今回の本軍の侵攻には、トランスバール皇国の存亡がかかっているという理由から、シヴァ陛下が親征を行う事が決定している。

他にも、ウォッカ大将、ジンロ大将、ウォルコット大将などの軍の重鎮は粗方出陣する事となっていて、その戦力も空前絶後となる予定であった。

「はい、一日でも早く準備を整えますので」

「頼むぞ。ところで、この件はムーン・エンジェル隊には伝えてあるのか？」

「いえ、万が一でも情報漏えいの危険がある以上は……」

ウォッカ大将は、アキオと比べても決して引けを取らないタクト・マイヤーズが、彼の紛れに気が付かないわけはないと考えていた。
だが、今の彼にそれを伝えるわけにはいかなかった。

彼と副司令のレスター・クールダラスくらいならば機密を守るであろうが、部下のムーン・エンジェル隊ともなればそうはいかない。
何しろ、普段はお話好きの普通の女の子達でしかないのだから。

「レイトンの努力を、万が一にも情報漏えいで無駄にするわけにはいきません。彼の、陛下への忠誠心から出た必死の行動なのですから」

「そうか、余への忠誠心からか」

先ほどまでは激高していたのに、今ではアキオが無事だと知ってニコニコしているシヴァ陛下を見て、『乙女の恋心』とは凄い物だなと考える、既に自分は枯れてしまっているウォッカ大将であった。

「タクト！　すぐに出るよ！」

「なっ！　無茶を言うなよ！　しかも、何でフォルテが！」

ちょうど同じ頃、アキオが指揮する艦隊の消息不明の報を来たタクトは、ウォッカ大将の予想通りに彼の意図を理解しつつも、もうさして出撃までに時間が残されていない事を知る。

タクトが隣にいたレスターにいつでも出撃可能なように準備を頼み、それを了承した彼が司令室を出たところで、入れ違いにフォルテが血相を変えて飛び込んで来たのだ。

「アキオの無事を、早く確認しないと駄目だからに決まっているからじゃないか！」

普段は誰よりも冷静なのに、あのフォルテをして冷静さを失わせてしまう親友アキオ・レイトンの存在。

タクトは彼の凄さを改めて再確認すると同時に、あくまでもオフレコ扱いでフォルテに自分の考えを語って聞かせていた。

「そんなわけで、レイトンはどこかにコソコソと逃げ隠れているから大丈夫。それよりも、他の隊員達も動揺しているに違いないんだから。せめて隊長のフォルテだけは落ち着いていてくれないか？」

「わかったよ……。しかし、コソコソ逃げ隠れるか。えらく棘のある発言に聞こえるね」

「そうかな？　もし俺がレイトンの立場でも同じ事をしたと思うけどね」

コソコソ逃げ隠れて何が悪い？

戦力さえ残っていれば、後でいくらでも挽回可能じゃないか。

それをすぐに考えられるタクトは、やはりアキオに引けを取らない優秀な軍人でもあったのだ。

「あいつが無事ならそれで良いんだけどね。でも、ランファに伝えられないのが辛い……」

フォルテは、先ほどその報告を聞いたランファが動揺しないどころか、逆に元気であったのを見て余計に心配になっていたのだ。

『大丈夫ですよ。アキオは悪運が強いし、殺しても死ぬようなタマじゃないじゃないですか』

みんなの前ではそんな事を言って虚勢を張っていたのだが、やはり心配で堪らなかったらしく、その後すぐにミルフィーユの部屋に押しかけて泣いていたらしいのだ。

『ミルフィー、アキオが死んでいたらどうしよう……。私……』

『大丈夫だよ。アキオさんは、そこら辺にいる軍人さんとは全然違うんだから。上手く切り抜けているって』

『本当に？』

『本当に大丈夫だから。ランファ、ケーキでも食べる？』

『うん、食べる』

自分に泣き縋るランファを、ミルフィーユは宥めるのに懸命だったらしい。

内緒だと言って、ミルフィールがフォルテにそっと教えてくれたのだが、あのランファをそこまで女の子らしくしてしまう所が、自分の親友の凄い部分でもあるとフォルテは思っていた。

「とにかく、もう辺境への出撃は本決まりらしい。フォルテも準備の方を頼むよ」

「わかったよ」

その会話から数日後、いよいよトランスバール軍は本格的に戦力を派遣していた。

さすがに千隻クラスの大艦隊を同時に出撃させるのは不可能だったので、エルシオールはジンロ大将が指揮する先遣隊に一時的に配属となり、シヴァ陛下が直率する本軍の先陣として出撃していたのだ。

「宜しくな、タクト・マイヤーズ大将殿」

「こちらこそ、お手柔らかに」

ジンロ大将が指揮する二百隻を超える先遣隊に混じり、遂にエルシオールは辺境宙域へと発進するのであった。

「何だ？　この書類は？」

「嘆願書です。総司令官代理」

「嘆願書？」

「はい、何でもレイトン司令の看病をしたい女性軍人が多いそうで……」

アキオへの緊急手術が終わった翌日、代理司令官となったウランフ中将は早速厄介な書類という敵と戦う事になるのであったが、その中にかなりの数頭が痛くなるような種類の書類が混じっていた。

「総司令官代理になって早々にか……」

総司令官であるアキオの負傷という予想外のアクシデントはあったが、それでも彼から無事に指揮権の一時委譲を受けたウランフ中将は、事前に調べてあった暗礁宙域に艦隊を隠す事に成功していた。

ウランフ中将は、暗礁宙域の外苑部に無人で作動する探知危機を設置し、念のために有人の偵察機や戦闘機などを配置してヴァル・ファスク側からの奇襲を防ぎつつ、一時的にバラけていた艦隊の再編成を行っていた。

それと同時に、敵が来襲した際の逃げ道の確認や、他に数箇所確保している潜伏先への調査と受け入れ準備のための一部戦力の派遣など。

これでなかなかに忙しい時間を過ごしていたのだが、彼は副官から渡された書類の束に絶句する事となる。

なお、彼の副官は普通の男性士官であった。

「嘆願書なところが、駄目元という気持ちを代弁していますね」

「こんな時に、転任要請書なんて出したら顰蹙物だからな……」

無人偵察機の特攻によって少なくない人的損害が出ていて、それで看護兵が不足してはいたので、上手くアキオの看護担当になれな

いものかという気持ちが、この書類の束に出ているらしい。

「レイトンめ、余計な手間かけさせやがって」

ウランフ中将は恐ろしい速度で全ての嘆願書に『不許可』の印を押しながら、今度は別のちゃんとした書類を見始める。

艦隊の総司令ともなるとこの手の書類が大量に発生し、これらの仕事が苦手なウランフ中将を苦戦させていたが、アキオが手術とその際に打たれた麻酔で眠っている以上は、嫌でもこの手の仕事をこなされなければならない。

早くアキオに復帰して欲しいと願うウランフ中将であった。

「あいつの世話なら、ムーン・エンジェル隊のお嬢様方がいるからな。というか、他の女性士官になんて怖くて任せられん」

それに、ウランフ中将は見ていた。

まだ十代で、人の血を見たら本来なら卒倒するような可愛らしいちとせが自分を庇って負傷したアキオの止血を懸命に行い、同じくミントが手術室に運ばれる既に気絶したアキオに泣いて縋っていたのを。

あれを見てしまったら、『運が良くれば玉の輿』などと考えている不埒な女性士官などこの艦に入れたくなかったのだ。

ミントは、敵無人偵察機の撃墜が遅れたからだと自分を責めていたのだが、あの状況では彼女は一番的確な動きをしていたし、他にアレを止められる者など一人も存在しなかった。

もしあのままブリッジに突っ込まれていたら、ブリッジのクルー

と司令部要員で生存している者はほとんど存在しなかったであろう。
アキオは、ただ不運なだけだったとウランフ中将は思っていたのだ。

「レイトンは別に死ぬわけでもないし、もうさすがに本国も動いているだろうからな。動く時は、上手く連動するとしてだ」

「今は、モグラのように篭っているしかないですね」

「ああ。何にせよ、総司令官が少なくても首から上は機能してくれるようにならないとな」

大量の書類仕事のせいで、ウランフ中将がアキオに毒舌を吐いていた時。
肝心のアキオは手術も無事に終わり、いまだに完全に醒めない麻酔のせいで意識をまだ少し朦朧とさせていた。
それでも最低限の話くらいは出来たので、彼は自分を心配そうに覗き込むちとせとミントに声をかけていた。

「すまん、どのくらい時間が経ったのかな?」

「ちょうど二十二時間ですわ」

「そうか……」

背中を負傷したためにうつ伏せでベッドに寝かされているアキオは、ミントから自分が意識を失っていた時間を聞き、『まあ、そんな物か』くらいに考えていた。
丸一日くらいなら、指揮権の委譲が無事に済んでいるので大丈夫

だと朦朧とする意識の中で考えていたのだ。

「アキオさん……」

「どうしたんだい？　ミント」

麻酔のせいもあって、どこかボンヤリとしているアキオであったが、そんな彼を驚かせるような出来事が発生する。

もう一度声をかけて来たミントが、泣きながらアキオの腕に縋り付いてきたのだ。

「ごめんなさい、私がもっと早くに敵を撃ち落していれば……」

ミントはアキオが意識を失って手術室に運ばれている時にも同じ事を言ってウランフ中将から慰められていたが、やはり彼の言葉では納得がいかなかったらしい。

アキオが目を醒ました事で感情に火が付いてしまい、また泣き始めてしまったのだ。

「ミント……」

ちとせは、アキオに縋り付くミントを少しずるいと思いながらも、原因が原因なので何も言えない状態になっていた。

「俺は大丈夫さ。ミント」

アキオは、ミントに優しそうな笑顔を浮かべながら彼女の頭を優しく撫で始め、先ほどのウランフ中将と同じような事を言い始めていた。

「あのまま敵無人偵察機に突っ込まれていたら、俺もちとせも死んでいたさ。それがこの程度の負傷で済んで儲けなのに、みんな暗く考え過ぎなんだよ。それにこの程度の怪我、処置さえ間に合えば死ぬ事なんてないさ。後で来る援軍にヴァニラがいれば、傷も早く塞がるしな。こんなの軽傷扱いさ」

アキオの言葉を聞きながら彼に頭を撫でられていたミントは、すぐに泣くのを止めてしまう。

その様子を外から見ていた軍医は、先ほど同じ事を言ったのに全く効果が無かった同年代のウランフ中将に心から同情し、同時にアキオの天然ジゴロぶりを羨ましいと思っていた。

「ところで、無事に潜り込めたのかな？」

「はい、ウランフ中将が代理で全てをこなしています」

こんな状態でもアキオは、総司令官の義務としてちとせに艦隊が無事に暗礁宙域に逃げ込めたのかを確認していた。

「そうか、良かった」

アキオは今の状況に満足すると共に、今度はやはり麻酔の影響なのか？

また睡魔に襲われ始めていた。

「烏丸少佐、ブラマンシュ少佐。司令を寝かせてあげないと」

次第に瞼が重くなるアキオを見て軍医が言葉をかけるのだが、彼は同時にとんでもない事を言い始めていた。

「俺も看護兵達も、他の負傷者への対応で忙しいからな。この宙域では、紋章機を使っての偵察は不可なんだろう？」

「「はい」」

紋章機はエネルギー量が他の偵察機などと比べても大き過ぎるので、隠れての監視や隠密偵察などの任務に全く向いていない兵器であった。

なので、艦隊がここに潜んでいる間は、彼女達への出撃命令はよっぽどの事が無ければ出ない事が決まっていたのだ。

「なら、交代で司令の面倒を頼む。三日から五日もすれば、ブリッジに上がって指揮も執り始めるだろうからな。看護兵を専属で付けるほどこっちも人出はないからな」

総司令が負傷していて人手がないはずなどなく、これはそれなりに人生経験のある軍医長の配慮というものであった。

「お任せてください」

「アキオさんは、責任を持って私達が」

三人の会話を聞いていたアキオは、ランファという恋人が待っている普通の男として、薄れいく意識の中で何か少し嫌な予感を感じてしまうのであった。

「はい、あーーーんしてください」

「あのさ……。おやつくらい普通に……」

「駄目ですわ。先生の許可が出るまでは、体を動かさないでください」

アキオが意識を失っている間にどういう取り決めが成されたのかは知らなかったが、とにかく言える事は、アキオは背中などを負傷した患者用に作られたベッド付きのストレッチャーに乗せられ、医務室の端の入院用のスペースに移動していたという事実であった。

そしてこれが一番問題なのだが、暗礁宙域に居る間は紋章機の定期的な整備とチェックくらいしか用事が無いちとせとミントが、数時間おきに交代でアキオのベッドの隣に座って面倒を見ているという事実であろう。

アキオは、一度見舞いに来たウランフ中将に小声で聞いてみたのだが、彼は『君子危うきに近寄らず』を実戦しているらしい。

ウランフ中将としても、入院中のアキオの世話のほとんどをこの二人が見てくれれば、軍医長や看護兵達を他の負傷者に回せるし、わざわざ独身の若い女性看護兵をアキオに近付けて、紋章機という万が一の際には切り札になる兵器のパイロット達に恨まれたくもなかった。

『こう見えても、自分は女性には優しいのだ』とウランフ中将はアキオに力説し、最低三日間は絶対安静で体も動かせず、その後もベッドにうつ伏せのままでも出来る所から実務に戻る予定のアキオの補佐と世話を、二人に任せるつもりであると彼は力説していた。

それを聞いたアキオは少し気が遠くなるような気がしたが、それでも自分が碌に動けないのも事実で、ある程度傷が塞がるまでは二人に面倒を見て貰うしかなかったのだ。

アキオは、こういう時にヴァニラがいない事のみを不幸だと感じていた。

「今日は、葛餅を作りましたのよ」

アキオはオヤツの時間に彼女が自作した葛餅を食べさせて貰っていたが、その材料の高級さと最近お菓子作りの腕を上げたらしく、その美味しさにうら若き女性に食べ物を食べさせて貰う恥ずかしさを一瞬で忘れてしまっていた。

「本物の葛なんて、軍の補給物資に無いよなぁ」

「はい、私物ですから」

ミントは軍人で、しかも個室を貰える士官なので、自室に色々な食材などを持ち込んでいるようであった。

多分、今回の出撃は急だったので、実家であるブラマンシュ財閥の力を借りたのであろう。

でなければ、いきなり本物の葛が入手できるはずはなかったからだ。

「それは貴重な物を済まないな」

「いえ、アキオさんが喜んでくれるのなら」

そのために料理の腕まで上げているのだから、ミントはやはりアキオの事をまるで諦めていなかったようだ。

「しかし、昼食はちとせの手作りだったし、結構忙しいんじゃないのか？」

「紋章機は、完全に開店休業状態ですから。定期的なチェックと、シミュレーションでの規定訓練だけです」

「そういえば、そうだった……」

実はアキオが自分が負傷していなかったら、小規模高速艦隊を編成して敵無人艦隊の輸送艦隊の補足・攻撃などを行うつもりでいたのだ。

別にアキオでなくてもウランフ中将なら出来る作戦であったのだが、アキオに総司令代理にさせられて精神に余裕が無くなっているらしく、それと『軍人は縁起を担ぐものだ。お前が負傷したという事は何かを知らせる前兆と俺は考える。悪いが、今回は味方が来るまで大人しくしているさ』と、これらの嫌がらせ作戦は延期となっていたのだ。

ウランフ中将の考え方は、基本的に間違っていない。

ここで指揮下に入れた三中将との連携問題もあったので、負傷したアキオやウランフ中将が一人で行うというわけにもいかなかったのだから。

「まあいいか。俺達がどこかに潜んでいつ襲ってくるかもしれない。これだけで、敵に負担を与えられる」

いくら無人艦隊でも補給を受けなければ動けないし、その補給艦

隊が攻撃を受けないという保障もなく。
せっかく占領宙域を増やしている最中にも、彼らは警戒レベルを最大にしてこちらの動きを探っているのであろう。

何しろ、これら辺境宙域にある惑星国家群は、科学技術レベルではヴァル・ファスクどころかトランスバール皇国にも遠く及ばない状態で、つまりまだ自力で宇宙に出られないほどだったので、巻き添えが無いという理由で余計に攻撃を受ける可能性があったからだ。

「一応、小細工もしましたわよね」

「一隻でも損傷すれば上等くらいの罠だけど」

アキオは、事前に敵の通りそうな場所に機雷を設置していた。
一部は紋章機を使ってまで行っていたので、その数は大した物ではなかったが、これは敵戦力を減らす事を意図しているわけではない。
機雷は見つかって破壊されるのが前提であり、いくら無人操縦の艦艇でも機雷に注意しながら進むという手間で、敵に負担を強いる作戦であったからだ。

それに、運良く敵艦を損傷させられる可能性もあった。

実際にアキオは知らなかったが、新たな占領宙域を求めて前進した敵艦艇数隻がこれに触雷して損傷し、これを後方に下げる手間で敵に負担を与えている。

しかも、損傷した艦を単艦で下げると奇襲を受ける可能性があったので、これに無傷の艦艇を護衛として付けなければならず、前線から報告を受けたロウィルは露骨に顔を顰めさせていた。

何とも、嫌らしい手を使う敵司令官だと思っていたのだ。

「ご馳走様。やっぱり、こういう時には和菓子かな？」

「喜んで貰えて何よりですわ」

「悪いけど、少し眠くなって来た」

「はい、おやすみなさいませ」

入院中のアキオは、交代で二人に面倒を見て貰いながら、投与されている薬の影響で睡眠と覚醒を数時間おきに繰り返していた。

独占しても言うほど話が出来るわけでもなかったのだが、それはあと数日の事であったし、それでもアキオの穏やかな寝顔を見るだけでミントもちとせも満足であった。

「こう言っては不謹慎かもしれませんが、このまま永遠にアキオさんが入院していて、ずっとお世話をしていたい気分ですわ」

そう言いながら、ミントは空になったお皿を下げてから、アキオの髪をそっと手で優しく撫で始める。

「（この部屋には、私とアキオさん以外には誰も居ない……。これは、チャンス！　いえ、ブラマンシュの娘たる私が何てはしたない！）」

他の患者への定期巡回で軍医が不在の医務室で、ミントはこのままアキオの頬にキスをしてしまおうかと、心の中で葛藤を始めていた。

「（ランファさんに悪いですし……。ですが、アキオさんがこの事実に気が付くはずも……。そう、これは私自身へのご褒美なのです！）」

何とも奇妙な理屈ではあったが、勝手な解釈の後に納得したミントが静かな寝息を立てるアキオの頬にそっと自分の唇を押し当てようとしたその時、不意に人の気配を感じて医務室の入り口に目を向けると、そこには顔に青筋を立てたちとせが立っていた。

どうやら、もう交代の時間が来てしまっていたらしい。

「ミント……」

「おほほほっ、アキオさんの顔にゴミが……」

「言い訳がベタ過ぎます！」

ちとせの怒鳴り声のせいでもあったが、時間的にも交代で早速紋章機の定時チェックの任務があったので、ミントは逃げるようにして医務室から出ていた。

だがちとせは、ミントの『残念でしたわ。今度は、アキオさんの意識のある時に』という独り言を聞いて、彼女の強かさを再確認していた。

ミントは、生まれのせいもあったのかもしれなかったが、とにかくアキオがランファと結婚するまで決して諦めないというスタンスを貫いていて、その見かけからは想像もつかないバイタリティーに、ちとせはある意味感心していたのだ。

ちとせが看護を交代して数時間後、投与された薬が切れて目を醒ましたアキオは、今度はちとせの作った夕食を食べていた。
毎食と三時と十時のオヤツが全て二人の美少女士官達による手作りという事実に、他の怪我をしている男性軍人達はただその一点のみで、『レイトン大将、死ね！』と怨嗟の声を上げていた。

アキオからすれば、ベッドの上から動けないので静かにちとせとミントの看護を受けなければいけなかったのだが。

「美味しそうだな」

「和食なら、ミルフィーにも負けませんから」

病人用という事で、ちとせは煮魚と茶碗蒸しを作って来たのだが、アキオはその味に満足していた。
そういえば、昔に風邪を引くと良く母が作ってくれたメニューだったのだ。

「そうだったのですか。私も子供の頃に風邪を引くと、良く母が作ってくれたんです」

そんな話をしながら夕食を食べ終わったアキオであったが、やはりまた薬の影響ですぐに眠くなってしまう。
この時代にはポピュラーになっている、細胞修復薬の副作用のせいであった。

この薬を使うと、本来の四分の一。
アキオは全治二ヶ月を診断されているので半月という事になるのだが、それでもやはりヴァニラのナノマシンには遠く及ばないのが

実情ではあった。

だが、ナノマシンは使用方法が難しく使える人も少ないので、こちらの薬の方が一般では遥かに普及している状態であった。

「食っちゃ寝の生活か……」

また瞼が重くなってウトウトと始めるアキオであったが、その彼にちとせは急に予想外の事を質問する。

「あの時……」

「あの時？」

「どうして、私を助けてくれたのですか？」

「どうしてか……」

眠気と戦いながら、アキオはあの時咄嗟にちとせを庇った理由というものについて考えていた。

大切な部下だから。

貴重で最後の切り札となる紋章機のパイロットだから。

女性だから。

かけがえのない友人だから。

それとも、実は大切な女性だと心の奥底では思っている？

正直、アキオには良くわかっていなかった。

ただ、本能的に体が動いてしまった。

そうとしか言いようがなかったのだ。

「今、アキオさんはランファさんを選びました。私は諦めたくないとは思いつつも、心のどこかで駄目なのかもしれないと……。でも、あの時にアキオさんに庇われてその身を抱かれてしまったら……」

「ちとせ……」

何かとんでもない事になっていると考えながらも、アキオは遂に薬が完全に効いて意識を失ってしまう。

後に目を醒ました時には、アキオはちとせの発言でそこまでしか覚えていなかった。

「まだアキオさんの事を諦めたくありません。それに、私の方が先にアキオさんに愛していると言ったんです。お願いします。まだ諦めさせないでください」

ちとせは目から一筋涙を流しながら、そっと眠っているアキオの顔に両腕を回してからその唇に自分の唇を押し当てるのであった。

ただ、このファーストキスが幻とならないように願いつつ。

「（拙い……、非常に拙い光景に出くわしたぞ……）」

ようやく、傍受されないように複雑な過程を経て送られた『トランスバール皇国軍本軍出撃！』の通信電文をアキオに見せようと医務室まで来たウランフ中将は、己の不運を呪うと共にまたアキオにはひと波乱ありそうだという予感を感じるのであった。

主に女難方面であったが……。

「もう少しで、アキオに会える。アキオが元気なら、ちとせもミントも大丈夫よね？」

「みんな。また無事で会えるよ」

辺境宙域に向けてクロノ・ドライブ航行を続けるエルシオール内のミルフィーユの個室で、不安で眠れないと言って押しかけて来たランファと同じベッドに入りながら、ミルフィーユは全員での無事の再会を期待しながら目を瞑るのであった。

第三部　第二話（暫定版）

「ほう、道案内ね。レイトンはやはり、卒がないな」

「巡洋艦カムイ艦長、チコリー中佐であります」

シヴァ陛下が発進させたトランスバール皇国軍艦隊の先遣隊を率いるジンロ大将は、トランスバール皇国領と未確定辺境領域とのギリギリの宙域で、一隻の味方巡洋艦の出迎えを受けていた。

彼らはアキオ達が敵艦隊に襲われる前に、アキオの命令でこの宙域へと秘密裏に脱出していて、後発の部隊に今まで集めた情報の提供と道案内とが主な任務になっていた。

「ただ今、全データをジンロ大将閣下の旗艦バッカスのコンピューターに転送中です」

その内容は、自分達が押さえていた宙域の航路図から、逃げ込める暗礁宙域、基地を置くと最適な場所、補給中継点の候補、点在する惑星国家群の詳細な実情など。

トランスバール皇国がこれから敵と戦っていくのに必要な、長期にこの宙域に根を張るための物や、この辺境宙域を最終的には領地化するための物まで。

おかげで、まるで手探りで辺境宙域に侵入する事がなくなって、正直ホッとするジンロ大将であった。

「これだけ情報があれば大丈夫かな。まずは、先にレイトンが押さ

えた宙域を回復して、そこに恒久的な拠点を……」

「あの……」

ジンロ大将がこれからの事を考えていると、チコリー中佐が心配そうな表情で話しかけてくる。

「どうしたんだ？　中佐」

「実は、この宙域まで急いで逃げ込む時に……」

アキオが率いる艦隊が、敵艦隊に襲われる。

この件は事前に聞いていたし、どうせ逃げて適当な暗礁宙域に潜むとも聞いていたので特に驚かなかったのだが、一つ気になる通信を傍受したのだとチコリー中佐は話し始める。

「総旗艦チンギズ・ハーンのブリッジに無人の特攻機が飛び込んで損傷し、指揮権を一時的にウランフ中将に代行するとの緊急通信が……。距離的に我々がこの通信が拾えたのは偶然でしょうし、大損害ならレイトン大将閣下と同じ場所にいたウランフ中将閣下が、すぐに指揮権を継承できるはずもないのですが……」

つまり程度のほどはわからないが、アキオが負傷している可能性が高いという事実をバジル中佐は語っていたのだ。

「それとも……」

「敵を油断させるための罠とか？」

同じ敵地に潜むにしても、もしその直前に総司令官が負傷して別

の人間が指揮権を代行していると通信が入れば、敵も相手の動きが鈍くなると感じて油断するかもしれない。

何にせよ、実際にアキオに会って見ないとわからない事でもあった。

「確認のためにも、早くレイトンと合流しないとな。中佐、道案内を頼むぞ」

「了解です」

ジンロ大将は、全ての指揮下にある艦隊に辺境領域へ『侵入せよ！』と命じると共に、自分の旗艦バッカスの隣にいるエルシオールへと通信を送っていた。

「マイヤーズはいるか？」

映し出されたブリッジには、ムーン・エンジェル隊の副司令レスター・クールダラスと、エルシオール艦長のエリオス・シードルしか映っていなかった。

相変わらず妙に高級士官の多い艦ではあったが、エルシオールは武勲艦でもあったし、シヴァ陛下が再び御召艦の一隻として指定していたし、ムーン・エンジェル隊は先にシヴァ陛下が近衛艦隊を解散した現在では、数少ない近衛部隊でもあった。

なので、将官の多さは特に気にされてはいなかったのだ。

「すぐに呼び出しますので……」

レスターの返事から十数秒後、確かにすぐにタクトは姿を現していた。
少し眠気眼であったようだが。

「昼寝か？」

「ええ、少々。知っていますか？　お昼の十分の睡眠は、夜の一時間分に匹敵すると」

「お前は、夜も普通に寝ているじゃないか！」

「レスター、それを言うなよ」

相変わらずの掛け合いに、ジンロ大将はこの同階級の後輩にただ苦笑するのみであった。
だが不思議な事に、この男に『サボるな！』などと無粋な発言をする気にもならず、この辺がアキオやウォッカ大将などをして彼を英雄だと言わしめる部分かもしれなかった。

それと妙に底が知れない部分もあって、もし自分と彼が艦隊を率いて戦ったら、『もしかすると、自分は負けてしまうのではないか？』などと考えてしまうジンロ大将であったのだ。

「良い夢をみたか？　俺なんて、夢でも書類の洪水に襲われているさ」

何しろこの規模の艦隊なので、ジンロ大将に押しかかる負担は尋常なものではない。
普段からタフで有名な彼でも、さすがに辟易しているようであった。

「夢ですか？　それなら、俺も……」

タクトは、先ほど変な夢を見たという話をし始める。

突然レスターから敵艦隊来襲の報が告げられ、多くの艦隊と交戦を行って何とか勝つ事に成功したという夢を見たのだと。

「夢ですけど、敵の艦艇が妙にリアルでして……」

先のネフューリアが製造して率いていた、今ではトランスバール皇国軍でも性能を把握しているデラス・ジオ駆逐艦、クルザ・ジオ巡洋艦、レグス・ジオ戦艦、ラムス・ジオ突撃艦などから、それらの強化版であると思われる重巡洋艦、重戦艦、戦闘母艦などの新型艦艇まで。

確かに、夢で適当に見たとは思えないほどのリアルな話であった。

「予知夢か？　まあ、それは後で考えるとしてだ。遂に未知の宙域へと侵入するぞ。詳細な航路図は、既にレイトンから入手済みだがな」

「わかりました。ムーン・エンジェル隊に待機命令を出しておきます」

アキオの負傷から五日後、遂にトランスバール皇国軍は大戦力をもって辺境宙域への再侵入を開始するのであった。

「と、侵入してからまだ半日と経っていないんだがな……」

ジンロ大将が指揮する先鋒艦隊と共に、先にアキオが押さえたものの、今ではヴァル・ファスクと思われる敵無人艦隊に占領されている辺境宙域に侵入したエルシオールであったが、早速に敵に感付かれてしまっていた。

「アルモ、敵の数はわかるか？」

「はい、私達の艦隊の半数程度かと」

法的には夫婦になっていたし、一緒の部屋に住んで最近ではようやく砕けた話をする事も多くなったアルモとレスターであったが、やはり任務中はそうも行かないらしい。

アルモは、神妙な表情でレスターの質問に答えていた。

「駄目だな、レスターも」

「お前の、『嫁に気を使え！』というセリフは聞き飽きたわ！」

そして、そんな二人の真面目なやり取りを聞くと必ず同じツッコミを入れるタクトであったが、そんな事を言いつつも、彼は頭の中でこれから発生するであろう艦隊戦について考えていた。

「エリオスはどう思う？」

「兄さんが送ってくれた情報によると、敵はサファイア平原と呼ばれる大戦力を展開し易い宙域にほぼ全軍を配置していますね。完全に決戦を意図しているようです」

別に宇宙に平原があるわけでもなかったのだが、特に小惑星帯や隕石群があるわけでもない、宇宙船の航行に適した場所だったのでアキオが適当に名付けていたのだ。

現地の惑星国家ではまだそこまで到着する技術力がなかったので、この手の命名は最初に見付けたというか、トランスバール皇国側で初めて到着したアキオが付け放題となっていた。

だがさすがに数が多過ぎたので、最初だけは喜んで名付けていたが、今では部下達に順番に命名作業を振っている有様であった。

「でも、バカ正直に決戦をしてもなぁ……」

「そうだな。いらぬ損害ばかり増える」

とそこに、ジンロ大将から通信が入って来る。

彼も、タクトの考えに賛成であった。

「後発の本軍には、ルフト宰相もシヴァ陛下もウォッカ大将もいらっしゃるからな。あまりバカバカと味方に損害を出すわけにもいかない」

それでなくても、向こうは無人艦を運用している敵なのだ。

落としても資源さえあれば建造可能なので、余計に無駄な損害を増やすわけにはいかなかった。

何しろ、こちらの人材は補充が難しいのだから。

「とはいえ、策は決まっているか」

「ええ」

「そうですな」

「そうですね」

偶然ではなく、軍の指揮官として一定以上の水準にあるジンロ大将、タクト、レスター、エリオスの四人が考えている戦い方はほぼ同じであった。

「そういうわけで、あまりフォルテ達も深追いしないように」

「ああ。上手く距離を開けて、相手の気をこちらに引けば良いんだろう？　ミルフィーは遠距離から適当に射撃で、ランファは敵を牽制するだけで良い。ヴァニラは、味方が損傷したら直してくれ」

「はい、わかりました」

「距離を置いてとか、カンフーファイターには一番苦手なのに」

「ナノマシンを使っての回復は任せてください」

フォルテもタクト達の作戦に気が付いたようで、テキパキとミルフィーユ達に個別に命令を下していた。

そして約一時間後、敵味方合計で三百隻を超える艦隊が、サファイア平原の真ん中で戦力を並べてかなり遠距離から砲撃戦を開始していた。

陣形は普通に戦力を横に並べただけで、作戦はとにかく遠距離砲撃に徹する。

損害をあまり考慮しないで良く、敵無人艦隊が前進して距離を縮めようとすると味方はその分下がり、敵が押し込み過ぎたらポケット状の半円陣に追い込んでから、火力を集中させて攻撃する。

味方はその状態でも撃沈に拘っていなかったので、敵無人艦隊は損傷艦と共にまた少し後方に下がるという展開になっていた。

このような展開を数箇所で複数回繰り返す両軍の艦隊であったが、その火力と戦力に割に、損害はあまり発生していようであった。

「何とも締まらない戦いだね」

偶然、ハッピートリガーの必殺技ストライクバーストで一隻の戦艦を撃沈したフォルテが、作戦通りに行っているがダラダラと続く艦隊戦に愚痴をこぼしていた。

「あの、フォルテさん……」

「そういう事さ。こんなダラダラとした戦いを続けているのはね」

ランファも、味方がこんな戦いを続けている理由に気が付いていた。

それは、こうやって敵を自分達に引き付けている間に、この辺境宙域に潜んでいるであろうアキオ達と挟み撃ちにして全滅させる作戦であったのだと。

唯一の懸念は、この作戦案を全くアキオに伝えていない事であったが、彼がこの作戦に気が付かないはずなどないし、こちらの位置も最低限の偵察くらいは潜伏中でもしているはずであったので、ジ

ンロ大将もタクトも全く心配していなかったのだ。

「もう少しで、ランファの大切な旦那様が来るさ」

「フォルテさん、私は別に……」

ランファは顔を真っ赤にして反論していたが、彼女が間違えて放出したアンカークローが予想を超える射程距離を出して敵巡洋艦を打ち抜いて戻って来たので、やはり相当にテンションが上がっているようであった。

そして、遂に戦況に大きな変化が現れる。

「五時の方向、ポイントＸ３６７に向けて火力を束ねるんだ！　撃てぃ！」

突然、敵艦隊の左斜め後方から何十条もの高出力ビーム砲が発射され、射線上の十隻ほどの艦艇と、三十機ほどの無人戦闘機をなぎ払っていく。

「来たか！」

「レイトン！」

「久しぶりだな」

エルシオールのブリッジに、アキオの艦隊の総旗艦チンギス・ハーンからの映像が流れるが、タクト達はアキオの姿に驚く事となる。

ようやくある程度の傷が塞がって常にうつ伏せ状態からは脱していたが、背中の負傷なので車椅子の背もたれに体重をかけるわけに

はいかず、普通のストレッチャーの上に座りながら指揮を執っていたのだ。

同じく傷のせいでキッチリと軍服を着れなかったので、上半身に包帯をグルグル巻きにして、そっと軍服の上着を羽織っている状態であったのだが、その隙間から見える筋肉質な胸板と割れた腹筋に、ココなどは顔を赤く染めながら『ちょっと良いかも』などと思ってしまう。

『良い男は、どんな格好をしていても……』とも思ってしまっていたのだ。

「お前、本当に怪我したんだな……」

「その辺の話は、後にしよう」

とはいえ、敵無人艦隊は倍以上のジンロ艦隊に全力で対応していたので、絶妙のタイミングで死角から攻撃を仕かけて来たアキオ達に全く対応が出来なかった。

しかも、艦隊編成と無人艦隊故に必要なコントロールの要となる基幹艦を既に複数沈められていて混乱が続いていてたし、それを回復するにはやはり無人艦隊では少し時間がかかってしまう。

更に……。

「命令の傍受と、データリンクをしている総旗艦を発見しました！
フェイタルアロー！」

ロウィルから受けた司令を元に他の艦艇の指揮を執っていた総旗艦をちとせに沈められて、敵無人艦隊は更なる混乱を迎える事とな

る。
　これが軍人が指揮していたのならば、すぐに生き残った最上級者が指揮を引き継ぐのだが、生憎とこの艦隊は無人で、しかも人間よりも非常時には弱いという欠点を有している。
　アキオも、ジンロ大将も、タクトも。
　その僅かな隙を見逃すような軍人ではなかった。
「全火器のコントロールをフリーに！　このまま包囲網を形成して全て沈めるぞ！」
「レイトンやムーン・エンジェル隊に負けるな！　撃ち続けるんだ！」
「ムーン・エンジェル隊！　敵を殲滅せよ！」
　全戦力が揃ったので、味方艦隊は全力で敵無人艦隊を殲滅させるべく攻撃を強化し、数時間後には最後の一隻が沈んで戦いは終わっていた。
　やはり無人艦艇には、降伏をするという選択肢は存在しないようであった。
「やれやれ、ようやく全滅させたか……」
「なあ、レイトン」
「タクトも、ジンロ大将も。まずは、本軍到着までに行うべき事があるかと思いますが……」
「そうだな。これより、奪われた領域や惑星の再奪還作戦を行う！」

タクトは、アキオとの再会の喜びを話す時間すら無いままに、ジンロ大将の指揮で最初にアキオが押さえた辺境宙域の奪還作戦を開始し、他にも敵無人艦隊が使っていたと思われる無人工廠や補給基地なども占領していた。

更にその領域内にある惑星国家群に対して、敵艦隊を撃滅してこの宙域の支配権を奪い返したと使者を送り、彼らを再びトランスバール皇国に帰順させる事に成功している。

これにより、再びこの方面の辺境宙域の支配権はトランスバール皇国とヴァル・ファスクによって二分され、両者は本格的な戦争状態へと突入するのであった。

「やれやれ、これでようやくシヴァ陛下が率いる本軍を受け入れる下地作りに成功したわけだな」

辺境宙域の半分を再び制圧し、アキオが事前に渡していた航路図を参考に鹵獲した敵ヴァル・ファスク側の無人基地や無人工廠のみならず、持参した設備などを使ってトランスバール皇国軍は、長期に渡る戦争に耐えられるように現在駐留・防衛体制を整えている最中であった。

『この宙域を抜かれて、再びトランスバール皇国領内に絶対に敵を入れてはらない』

シヴァ陛下の厳命により、トランスバール皇国軍先鋒艦隊は全軍

をもってしてその準備に取りかかっていたのだ。

とはいえ、戦力の要であるエルシオールとムーン・エンジェル隊をそうあちこちに動かすわけにもいかず、現在エルシオールはヴァル・ファスク側領域との境界線近くにある、とある惑星近くで待機中であった。

「クールダラス副司令も、ご活躍のようですし」

「あいつは、本当に優秀だもの。当たり前と言っても良いな。まあ、あんな事もあったし……」

敵ヴァル・ファスク艦隊を殲滅して戦後処理を行った後、実はトランスバール皇国軍でひと波乱発生していた。

とは言っても、その内容はただの痴話喧嘩の類で。

要するに、消息不明を装って潜伏していたものの、先鋒艦隊に呼応して敵艦隊撃滅に貢献したアキオの負傷姿を見たランファが、数日間の軍務最優先に我慢できなくなり、タクトの静止を無視してチンギス・ハーンへと向かったのだが、そこで彼女をキレさせる光景が展開していたのだ。

ランファは最初はすぐにでもアキオの元に行きたかったのだが、今は全軍がそんな私情は後回しにしなければならないほど忙しく、しかもランファのカンフーファイターは、直接総旗艦チンギス・ハーンに着艦が出来なかった。

紋章機は一機毎に大きさから形状がまるで違うので、改造済みとはいえシャープシューターとトリックマスターしか着艦が出来なかったからだ。

当然焦ったランファは、急いでタクトにアキオの元に向かわせろと通信を入れたのだが、その時はまだ他に仕事が大量に残っていたし、ウランフ中将からは、『悪いが、先にヴァニラ・アッシュ少佐を寄越してくれ』と言われていて、タクトは彼女を優先するしかなかったのだ。

何しろ、アキオの艦隊では重軽傷者を合わせて三桁近い怪我人が発生している。

ランファの『早く恋人に会いたい』という希望は、悪いが後回しにするしかなかったのだ。

それに、辺境宙域の再制圧作戦にアキオの艦隊は貴重な戦力もであった。

ランファは、歯軋りしながらチンギス・ハーンへと向かうヴァニラを見送りつつ、自身もタクトから告げられる様々な任務に借り出される事となる。

ランファに命令を出すタクトは、内心かなりビクビク物であったが……。

『あのさ……。ヴァニラがいれば、怪我くらいすぐに治るし……（ううっ、ランファの視線が怖い……）』

タクトも大将なので、その気になれば職権を乱用してアキオとランファをすぐに会わせる事も可能であった。

だが、そのようなエコ贔屓は後に大きな批判に繋がる可能性でもあったし、事はタクト自身の問題だけではない。

アキオやランファは勿論、父や兄のクレッシェンド達から、果てはシヴァ陛下にまで迷惑をかけてしまう可能性があったのだ。

タクトは実家を出ている身なので父や兄達はどうでも良いような気もしたが、別に破滅させてやろうと恨んでいるわけでもないので、あまり迷惑をかけるわけにもいかなかった。

お互いに、非干渉で行くのが一番良かったからだ。

『ランファ、明日にはもう怪我が治っているアキオに会えるわけだし』

『そこが変なんですよ！　普通なら、すぐに会わせてくれますよね！』

『ランファ、私達は軍人なんだしさぁ……』

激高するランファを宥めながら、フォルテは偵察の任務を続行していた。

もう既に敵が存在している可能性は低かったが、万が一にもエルシオールが攻撃されないようにと、紋章機を使って警戒をしていたのだ。

『全く、アキオは心配ばかりさせて……』

カンフーファイターを飛ばしながらブツブツと文句を言うランファであったが、それでも明日には恋人に会えるとあって、たまに微妙に笑顔が浮かんでいるのをモニターで確認するフォルテであった。

そしてその翌日、やっとまた合流した総旗艦チンギス・ハーンにシャトルで乗り込んだランファであったが、肝心のブリッジにはア

キオはいなかった。

『あの、ウランフ中将？』

『フランボワーズ少佐か。レイトンなら、食堂だと思うが……』

恐ろしい速度でブリッジに飛び込んできたランファに、ウランフ中将は『ギョ！』っとしつつも、いつもと変わらない態度でアキオの居場所について答えていた。

『食堂ですか？』

『ああ、アッシュ少佐のナノマシン治療で全快はしたんだがな。軍医長が、念のために最終診断をしたいって昼飯の時間を奪ってしまってな』

そのために、遅めの昼食を取っているはずだと答えるウランフ中将であった。

『わかりました、失礼します！』

再び突風でも起こるのではないかという速度でその場を去るランファであったが、ウランフ中将は何か大切な事を忘れているような気がしていた。

『ええと……。思い出せんから良いか』

そのウランフ中将が思い出せない内容であったが、それはアキオの怪我は三日も前に全快していたのに、そのままミントとちとせが彼の世話を続けていた事にあった。

実際、今日もヴァニラが艦隊の他の船の負傷者を治しに行っているのに、アキオ自身はちとせの作った昼食と、ミントの作ったデザートに舌鼓を打っている状態であったのだ。

『アキオさん、今日の最終診断で異常なしが出て良かったですね』

『今日のは、念のための類だからなぁ。しかし、ヴェニラのナノマシンは本当に凄いな。あの怪我だと、普通は傷跡くらい残るものなんだが……』

今のアキオの背中は、怪我をする前とほぼ同じであった。

痛みもまるで無かったし、筋肉が突っ張るような症状も無かったので、それを聞いた他の艦の軍医達が、『早くアッシュ少佐を寄越してくれ』と矢のような催促をするようになっていたのだ。

おかげで、また『ヴァニラちゃん、親衛隊』のメンバーが増えていたようであったが、今回はアキオではなくて他の幹部達がせっせと会員証を発行して新しい会員達に、会報と共に配っているようであった。

『今日のお昼も美味しいな。デザートは、水羊羹か。これも、美味しそうだな』

人間の慣れとは恐ろしい物であった。

最初はランファに悪いかもと思っていたのに、今では怪我がもう治っているにも関わらず、二人に食事だのデザートを作って貰うのが当たり前のような状態になっている。

まさに餌付けをされたような状態であり、ミントとちとせからす

れば『作戦大成功』なのであった。

『（男性は、胃袋から落す。母の言葉は正しかった……）アキオさん。はい、『あーーーん』してください』

『おいおい、俺はもう健康体なんだが』

ちとでも冗談でやってはいるのだが、やはり慣れとは恐ろしい物で、無意識に口を開けてしまいそうになるアキオであったし、そう言われるのも悪くないとまで思ってしまうアキオであった。

『ならば、私も……。はい、『あーーーん』してください』

『ミントまで。俺は健康体だっての……って！』

だが、いくら健康になって浮かれていたとはいえ、恋人も持ちの男性が他の女性達とそんな会話をして楽しんでいれば、いつか必ず罰が当たるもの。

ふと食堂の入り口に目を遣ったアキオは、そこで憤怒の表情と共に体から本来人には見えるはずもないオーラを湧き上がらせているランファの姿を見付けてしまっていた。

正直、気が付かなければ良かった。

気が付かなくても結末は同じであったが、この全身が震え上がるような、今までにどこの戦場に派遣されても感じなかった恐怖感を感じる時間が短くて済んだからであった。

『ランファ……さん……』

突然冷や汗を流し、硬直するアキオを見て奇妙に感じるミントとちとせであったが、彼女達もすぐにランファを視界に入れてから、同じく身震いするほどの恐怖を感じていた。

『（ランファさん……。ですが、私は！）』

『（ここで引いたら……）』

ところが、女とは男が思っている以上に度胸のある生き物であるらしい。

完全に恐怖で体が動かないアキオとは違って、逆にランファを挑発するような行動に出ていた。

『アキオさん、また体が動かないんですか？　では、もう一度『あーーーん』してください』

ちとせは、硬直して口を少しだけ開けているアキオに、自分が作った肉じゃがを食べさせていた。

その昔に、ちとせの先祖である民族の『お袋の味』として有名な料理であったソレを敢えてアキオに食べさせる辺り、彼女はまだ本当にアキオの事を諦めていなかったのだ。

こんな事で諦めるのなら、それは本物の想いではないのだと。

『では、私も。アキオさん、はい『あーーーん』してください』

続けてミントも、自作した水羊羹をアキオの口に入れていた。

彼女もまだアキオの事を諦めてはおらず、ようするにランファに宣戦布告をしたに等しい行動であったのだ。

『小豆は、大納言の高級品ですのよ』

『……』

と言われても、この状況で味などわかるはずもない。

明らかに、ランファに対する宣戦布告も兼ねた行動であった。

以前のように当たり障り無く友人としてアキオと一緒に居ても、それでは勝ちを拾えない。

そう考えて、彼女も度胸でわざとランファを挑発していたのだ。

『ふーーーん、そう来るわけ。アキオの事も心配だったけど、同じ艦隊の事だから、ちとせとミントの事も心配していたのに……』

次第にその量を増すオーラの量であったが、勿論普通の人間にこんな事が出来るわけがない。

故郷の星で、シ・ショーから格闘技を習っていたと以前に聞いた事があったのだが、それと他の複合的な原因が合わさっての事なのであろう。

詳しい原理は知る由も無かったが、唯一言える事はこの後は確実にアキオが不幸になるという事であった。

『アキオっ！』

『ひゃい！』

とても二十三歳で戦時階級とはいえ大将になったとは思えないほど、アキオはビクビクしながらランファの呼びかけに答えていた。

『人が死ぬほど心配したのに、あんたは他の女の子とイチャイチャしてたんかぁーーー！』

『すいません！』

『罰を受けなさい！』

なお、その後の出来事であったが、これは後のいかなる資料を持ってしても正確な事実を知る事は出来なかった。

ただ言える事は、どういうわけかこの艦隊の人事異動が急遽戦場なのに成されたという事で、とはいえ、アキオの負傷中に総司令官代理を務めていたウランフ中将が戦時大将に昇進して艦隊の正式な司令官になっただけでもあった。

ジンロ大将が来て、この辺境宙域における最高責任者になったので、無理に若いアキオが最高責任者を続けなくても良かったからでもあるのだが、それと同時にウランフ戦時大将は、エルシオールから一人の将官を借り受けていた。

少将の地位にあったレスターを戦時中将に昇進させて、自分の副司令兼参謀長として呼び出していたのだ。

実質的にアキオとトレードしたとも言えたが、ウランフ中将から言わせると『こいつにも、そろそろ普通の艦隊で経験を積ませたい』という理由からであった。

レスターは、なぜか一旦頭を抱えてからウランフ中将の申し出に従って、チンギス・ハーンへと転任している。

その際に彼から副官を好きに選んで良いと言われ、彼は迷いつつもやはり自分の奥さんであるアルモを選んでいる。

『まあ、少しは砕けて来たようだな』と、その人事を聞いたウランフ中将は笑みを浮かべていたのだが。

そしてレスターと交代でムーン・エンジェル隊副司令に就任したアキオであったが、彼はその際にまた負傷して腕と頭に包帯を巻いていたとも、タクトが『レイトンも、意外と好きなのな』などと言って、ミルフィーユにお尻を抓られたとも噂が出ていたのだが。

とにかくもアキオの功績は大きく、戦後には正式に大将に昇進する事は確実であるようであった。

その彼が、なぜ烏丸ちとせとミント・ブラマンシュを連れてエルシオールに戻ったのかは、後世で様々な説を歴史学者が唱える事となるのであったが……。

そんなわけで、レスターは珍しくタクトの補佐ではなくて普通の参謀として、士官学校開校以来の天才的な頭脳を遺憾なく発揮し、ウランフ戦時大将を満足させていた。

「そして、その代わりにエルシオールに戻って来た兄さんですか……」

「何だ？　文句あるのか？　エリオス」

「いえ、別に無いですけど……」

かつてレスターの立っていた場所に立つムーン・エンジェル隊新

副司令のアキオであったが、彼は大怪我ではなかったが、両腕、両足、頭に包帯を巻き、他にも体中にガーゼとテープを張っている状態であった。

誰にやられたのかと聞くだけ野暮で、聞かなくてもわかるので誰も聞かなかったのだが、エリオスでなくても気にならない方がおかしかったであろう。

しかも前ほどの重症というわけでもなく、アキオは普通にレスターの代わりにムーン・エンジェル隊副司令としての任務をこなしている。

むしろ、以前から比べれば楽な任務で治療の時間も沢山取れたのだが、生憎とヴァニラはまだ他の艦隊の負傷者の治療でエルシオールを離れてい状態であった。

予定では明日には戻って来るのだが、それまではアキオはこの状態を続行しなければならない。

とはいえ基本的には、打ち身、軽度の打撲、引っかき傷が大半なので、騒ぐほどの怪我でもなかったのだが。

むしろこれは、アキオに包帯を巻いたケーラ先生の彼に対する罰というか見せしめのためでもあったのだ。

「でも、もうランファは怒っていないんですよね？　無事に仲直りしたと」

「妙な誤解をされては困る。俺は、ランファと喧嘩なんてしていない」

ある意味、アキオの言は間違ってはいなかった。

何しろ、ランファが一方的に激怒して、アキオは一方的に謝っていただけなのだから。

「それで、どうやって仲直りしたんです？」

「どうして、お前がそんな事を気にする？」

「まあ、将来に備えての教訓集めですかね」

アキオからすれば、あのヴァニラがランファのようの激高するとも思えないのだが、人生には何があるかわからないので、エリオスの考えに心の中では賛同していた。

とはいえ、その答えを素直に教えてあげるほどお人好しでも無いアキオでもあったのだが。

「引いて駄目なら押してみるわけだ」

「はあ？」

ところが、そんな解決策もアキオ自身が考案したわけでもない。プリプリと怒りながらエルシオールに戻って来たランファを見て心配したタクトが、ミルフィーユに様子を探りに行かせて事情を知り、ランファの方はミルフィーユに任せてしまっていたのだ。

『ランファ、アキオさんは浮気はしていないと思う』

『でも、ちとせとミントは！』

『浮気なら、二人同時は無いと思う。どちらかと二人きりで、コソ

コソしているんじゃないのかな？』

普段は天然だが、時に鋭いミルフィーユの意見に、ランファは感心してすぐに怒りを静めてしまっていた。

『それに、そこで怒ってばかりだと、ますますミントとちとせの思う壺だよ』

確かに、少しくらい女の子と楽しそうに話しているからと言ってすぐに浮気を疑っていたら、あのアキオ相手ではキリが無いのは確実であった。

それに、自分の女としての器まで疑われかねない。

ランファは、アキオを許す事を決意する。

『そうよね。タクトとは違ってアキオは格好良いから、女の子が寄って来るだけだものね』

『……、ランファがわかってくれたのなら……』

ランファに微妙にタクトを貶されたような気がするミルフィーユの顔に青筋が一瞬走るが、とりあえずは説得に成功して良かったと感じるミルフィーユであった。

一方、アキオの方はミルフィーユから情報を得たタクトから忠告を受けていた。

アキオは、正直なところこの手の経験が薄かったので、彼の忠告は非常にありがたかったのだ。

「そこで、変に卑屈になって謝っては駄目だな」

「浮気を認めるようなものだからか？」

「正解だ。レイトンも、冷静になればすぐに答えが出るんだな」

「現場では無理さ。完全に体が硬直していたし」

タクトは、続けてこれからアキオが取るべき行動を示唆する。

「とは言っても、さして難しい事も無いさ。普通に恋人同士の再会を楽しめば良いんだよ」

「普通にか？」

「まあ、詳しい内容は恥ずかしいから伏せるけど」

そんな話があった翌日、アキオはなぜか首筋にもう一箇所ガーゼを当てる場所を増やしていて、それを見たココが顔を真っ赤にしながら正面のモニターに注視していた。

それとランファの方であったが、彼女もなぜか首に包帯を巻いている状態であった。

「ランファ、またアキオさんと喧嘩したの？」

「いやぁ。これは、仲直りの証拠でしょ」

と言いながらポリポリと頭を掻くランファであったが、その近くではフォルテが頭を抱え、ちとせとミントがランファの反撃に更なる闘志を燃やすのであった。

「それで、敵の数は？」

レスターとアルモがウランフ戦時大将の艦隊へと転任し、逆にアキオとちとせとミントが戻って来たエルシオールであったが、今は本軍の到着を待つために敵ヴァル・ファスク側領域との境界線近くで、敵を警戒しながら待機をしている状態であった。

タクトは、アキオと協議して偵察なども実行していたのだが、敵本軍もまだ本格的に前線には出ていないらしい。

数日ほど、エルシオールは退屈な日々を送る事となる。

ところが、先ほど急に敵艦隊襲来の報が流れ、タクトは急ぎムーン・エンジェル隊に待機命令を出しつつ、アキオと作戦について話し合いをしていた。

「でも、おかしいな？　敵の侵攻にしては、数が少な過ぎる……」

合計で十隻ほどであろうか？

大半が駆逐艦や突撃艦であり、あとは戦闘機類と旗艦に巡洋艦が存在するだけで、正直なところこの戦力では偵察すら難しかった。

「何か特殊な作戦でも？」

「そういう感じにも見えないな。陣形が少し歪だし、慌ててこの戦力を出したようにも見える……」

「へえ、良く見ているじゃないか」

タクトは、アキオの観察眼の良さに改めて感心する。

「あの、タクトさん」

「どうかしたのか？　ココ」

「あの艦隊は、一隻の小型船を追っているようです」

距離が近付くにつれて、ココはレーダーに映っていた戦闘機の中に一隻だけ、こちらに向けて逃走中の小型船の影を捉えていた。

「こちらに逃げて来る小型船か……」

「なら、作戦は簡単だな。その小型船を守る事が最優先だ」

やはり、タクトは非凡な指揮官であった。

普通の司令官だと、いくら小型船を守れという命令を出しても、やはり十隻の敵艦艇や戦闘機群などの撃墜を優先してしまう事が多い。

何が一番大切な目標で、そのために何を優先すべきか。

これを適切に部下に伝えるのは、実は思っているよりも遥かに難しい事なのだ。

「というわけで、ムーン・エンジェル隊発進！」

タクトの命令で出撃するムーン・エンジェル隊であったが、戦闘

自体は十分とかからずに終了していた。

フォルテがヴァニラに小型船の護衛に付くようにと命令し、他の五機で敵艦隊の阻止に入ったのだが、敵は全く退かずに攻撃を仕かけて来たので、結局全滅させてしまったからだ。

この時のムーン・エンジェル隊メンバーのテンションであったが、先にアキオを巡って激しく火花を散らしたランファ、ちとせ、ミントが一番高いという皮肉な結果となっていた。

どうやら、『好きな者は必ず奪う！』という意思が、紋章機の性能を格段に引き出しているようで、彼女達は競うようにして敵艦を容赦なく沈めていた。

タクトは、『女っておっかないな』と思いながら、戦闘指揮を執っていたのだ。

「タクトさん、小型船は無事です」

戦闘終了後にヴァニラから通信が入るが、どうやら小型船は被弾する事も無く無事なようであった。

タクトは、小型船の船員達に詳しい話を聞きたかったので、小型船をエルシオールまで案内するようにとヴァニラに命令していた。

「さて、亡命者なのか？　それに偽ったスパイなのか？」

「レイトンは、話が飛躍するなぁ」

「お前は、『遠路はるばるご苦労様』と良い人を演じてくれよ。ナ

ンバー2の俺が穿った目で見て、部隊のバランスが取れるわけだ」

小型船が係留された格納庫に向かいながら、タクトとアキオはそんな話を内緒でしていた。

いくら敵に追われていたからとはいえ、それだけで相手を１００％味方だと思うのは軍人としては早計であったからだ。

とはいえ、いきなりスパイ扱いでも情報は出て来ない。

この場合は、タクトが彼らを歓迎して、アキオが穿った目で見るのが一番効率が良かったのだ。

「あっ、タクトさん、アキオさん。今、船から降りて来るようですよ」

格納庫で先に小型船を見ていたミルフィーユがタクトとアキオに話しかけるのと同時に、小型船のハッチが開いて中から二人の男女が降りて来る。

どうやら若い金髪の男女のようで、その容姿はまるでモデルのように整っていた。

「綺麗な人……」

特に女性の方は、同性のミルフィーユから見ても絶世の美女であり、それを見たアキオは彼女が危険な美女ではない事を祈りつつ、タクトと共に彼らを出迎えに向かうのであった。

第三部　第二話（暫定版）（後書き）

もしかすると、会社で人事異動があるかも……。

そうなると更新が遅くなりそうです。

第三部　第三話（暫定版）

ようやく先陣の調査艦隊やアキオが指揮していた艦隊が押さえていたものの、それからすぐにヴァル・ファスク側に奪われていた辺境宙域の奪還に成功し、次の作戦に備えて待機をしていたエルシオールであったが、そこに急遽敵の小艦隊が出現して戦闘になっていた。

まるで勝ち目の無い戦力比なうえに、どこか行動に統一性を欠いたその小艦隊に首を傾げるタクト達であったが、その艦隊は一隻の小型船を追いかけてここまで来てしまっていたらしい。

タクトは、その小型船を守りつつ小艦隊を全滅させる事に成功し、小型船は無事にエルシオールの格納庫へと着艦していた。

突如トランスバール皇国の領域外から現れた逃亡者の存在に、小型船が収容された格納庫には多くの野次馬が詰め掛けていたのだが、小型船の開いたハッチからは金髪のまさに絶世の美少年と美少女の二人が降りて来る。

「綺麗な人……」

ミルフィーユはその美少女の美しさに見とれてしまうのと同時に、恋人であるタクトが彼女に惹かれてしまうのではないかと少し心配してしまうのだが。

「遠い所から、エルシオールへようこそ」

タクトはその二人を笑顔で歓迎していたが、その後方ではアキオ

がわざと訝しげな表情を彼らに向ける。

その表情はなまじアキオの顔が整っているだけに、余計に周囲にいたランファ達の印象に残ってしまうのであった。

「ケーラ先生」

「簡単な検査の結果だけど、別に異常は無かったわね。二人とも、健康体よ」

小型船から降りた二人は、実の姉妹であるらしい。

その言動が少しおっとりとしている姉のルシャーティーと、落ち着いたシッカリ者に見える弟のヴァインは、かつてこの宇宙の大半に根を張り繁栄していた先史文明ＥＤＥＮの名を受け継ぐ星系の中心惑星ジュノーから逃れて来たと、少なくとも本人達はそう話をしている。

かつては広大な領域を支配していたＥＤＥＮ文明の中心であった惑星ジュノーは、時空震後（クロノクェイク）はその名残であるＥＤＥＮ文明の情報全てが蓄えられている巨大施設『ライブラリ』の生き残りであったのだが、先日活動を活発化させたヴァル・ファスク軍にジュノーを占領され、逃れるようにここまで来たとの話であった。

タクトは二人に警戒や畏縮をさせないように、穏やかに、時に道化まで演じて上手く情報を聞き出し、それから簡単な健康診断を行った後に、二人に割り当てる部屋に案内していた。

それと、ミルフィーユ達が二人の歓迎会を開く準備をしているらしい。
それまでは、タクトが慣れぬ手付きでコーヒーなどを出して更に話をしているようであった。

「見事な役割分担ね」

「レスターなら、俺と同じような事をするでしょう」

懸命に逃げ回った後に、ようやく受け入れて貰えた自分達とはまるで別の場所に住んでいて、別の組織に所属している人間しかいない軍艦。
当然、二人は警戒感をヒシヒシと感じたままであろう。

そのために、タクトは彼らを心から歓迎する素振りを見せていたのだ。
いや、基本的に優しいタクトは、二人を心から歓迎しているのであろう。
軍人としては甘いのかもしれなかったが、こういう優しい部分も含めてタクトはこれまでムーン・エンジェル隊の司令として活躍して来ていたのだ。
それに、いつも人を疑うようなトップというものもかなり考え物である。
部下に慕われてこその司令官でもあったので、そのために司令の負担を軽減し、司令の替わりに嫌われるナンバー2という存在が軍のみならず組織には必要でもあった。
まあ、レスターは生真面目なだけで別に嫌われてなどいなかったのだが、とにかく外部からの突然の客人に対して、アキオは嫌われてでも嫌な奴を演じる必要があったのだ。

それと、全員が無条件にニコニコして二人を歓迎していれば、逆に二人は不安を感じてしまうのも事実であった。

向こうも、自分達が部外者である事は百も承知なわけで、『何か謀略の類なのでは?』と思ってしまうからだ。

なのでアキオのように、いかにも歓迎どころか疑いの目を常に向けている人物も必要なわけで、なのでアキオはタクトとは違って少しキツく尋問のように質問をしたりし、ミルフィーユ達が準備している歓迎会にも出席しない事に決めている。

全てはムーン・エンジェル隊のため。

現在そういう役割をしていたレスターがいない以上は、アキオがその役割を代行する必要があった。

どんなに嫌われてもだ。

「損な役割でもあるわ」

「とはいえ、必要な役割ですよ」

アキオはケーラに淹れて貰ったコーヒーを啜りながら、彼女との話を続けていた。

いくら本当にヴァル・ファスク艦隊に追われているように見えた二人だからとて、無条件にこちらの味方という保障などどこにも無かった。

二人の追跡のために、ヴァル・ファスク側は小艦隊を一個全滅させられていたが、あの艦隊は完全な無人でもあった。

自らを優秀だと自負するヴァル・ファスクが、策のために人が乗っていない艦隊を犠牲にして、二人がスパイであるという疑惑を消

す事に成功したら？

それと、アキオはどこか二人に違和感を感じていた。

なぜと聞かれると難しいのだが、二人はＥＤＥＮ星系の開放でタクトに力を貸して欲しいと懇願していた。

なぜタクトかと言えば、ジュノーでも英雄タクト・マイヤーズの名前は有名であるからだと言っていたのだ。

しかし、そんなに簡単にＥＤＥＮ星系の人間が、タクトの情報を知る事が可能なのであろうか？

彼らはヴァル・ファスクに占領・支配されている被征服者達であり、そんな彼らに簡単に外部の情報を知る環境を、のん気にヴァル・ファスク側が与えるとも思えない。

最低限の生活は保障するだろうが、外からの都合の悪い情報などは遮断するのが占領統治の基本であったからだ。

自分達が住む宇宙の遥か遠くに、ヴァル・ファスクが密かに派遣した、トランスバール皇国には大きな被害を与えたが、結局は尖兵の一人にしか過ぎなかったネフューリアを倒しただけの下等種族。

これがヴァル・ファスク側の認識であろうし、そんな瑣末な情報を支配されていたルシャーティーとヴァインが知るのは相当に難しいはずだ。

少なくとも、逃げながら簡単に知れるような情報でもないであろう。

このように状況証拠の積み重ねではあったが、アキオはほぼ１００％二人をヴァル・ファスク側のスパイだと踏んでいた。

とはいえ、ここでいきなり二人をスパイ扱いして拘束しても意味

が無い。
それどころか、ムーン・エンジェル隊のメンバーにいらぬ不安を与えてしまうだけであろう。

なので、アキオは密かに彼らの監視を続け、ボロを出した瞬間に捕縛しようと考えていたのだ。
さすがにコレと断言できる証拠があれば、彼女達も心の中で納得するであろう。

「レスターがこの船に居たら、確実に俺と同じような行動を取っていたでしょう。ならば、今は俺がそれを行うべきなのです」

「損な役割ね」

「こりゃあ、ランファ達に嫌われますかね？」

「それは無いわね」

ケーラは今のアキオの異様なモテ方を知っていたし、浮気を疑われてランファにボロボロにされた彼の治療までしていたので、その程度の事で目の前の若い将官があの少女達に嫌われるはずはないと確信していた。

「女って生き物は、レイトン閣下が思う以上に鋭いのよ。あなたの考えくらい、ランファさんやちとせさんやミントさんが気が付かないはずはないわ」

「鋭いというか、行動的ではありますよね」

自分が長期休暇で、しかも恋人を一人にしたくないという理由か

らアキオと同棲までしてしまうランファ。

既に恋人がいるにも関わらず、未だに諦めないで健気にアタックをかけてくるちとせとミント。

普通に男として、美少女達に好意を寄せられたり、女の子らしく料理やデザートを作って貰ったりと。

そういうのが悪くないと思ってしまうアキオではあったのだが、それと同時に彼女達はテンションが性能に左右する紋章機のパイロットでもあって、彼女達にテンションと落さないように気を使わないといけない部分もあった。

何しろ今の自分は、ムーン・エンジェル隊の副司令なわけなのだから。

「さてと、少し雑務があったんだよな。ケーラ先生、ご馳走様」

アキオはコーヒーを飲み干すと、そのまま医務室を出てからエルシオールのブリッジへと歩き始める。

途中、銀河中央公園でミルフィーユが中心となって準備したルシャーティーとヴァインの歓迎会の様子が視界に入って来ていた。

だが、アキオはそのパーティーに加わるつもりはなかった。

アキオはあくまでも二人への警戒を解かない方針であったし、せっかくタクト達がいつものように楽しそうにパーティーを開いていたので、そこに水を差すような真似をしたくなかったからだ。

アキオは、少しだけ二人を一瞥してからまたブリッジへと歩き出す。

ところが、ふと他人からの視線を感じてその方向に視界を送っていた。

「あれ？」

その方向とは銀河中央公園の芝生の上でパーティーをするタクト達であったが、その中でパーティーの雰囲気に戸惑いながら姉のルシャーティーの世話をするヴァインの姿があった。

ヴァインはアキオに見られている事を知ると、本当にほんの一瞬だけ驚きと同時に、とある人種だけが見せる鋭い表情を見せてしまう。

その表情とは、普段はただのお人好しや昼行灯や道化を演じつつも、実はかなりの策士である者が見せる、本当の本性とも言える物であった。

多分、ヴァイン自体はどうにか隠す事に成功したと思っているのであろうが、アキオは気が付いてしまった。

それでも別に今のところは、彼を捕らえてスパイとして尋問しようとかを考えているわけでもない。

まだその証拠が、まるで上がっていないのだから。

「……」

「……（あのヴァインという人物は……）」

何となく目が合ってしまったアキオとヴァインであったが、アキオは姉のルシャーティよりも弟のヴァインの方こそが危険人物であろうと、頭の中で彼に対する危険度を計算し始めるのであった。

「エルシオール艦内の整備状況は完璧、備蓄物資も規定量の１５０％で……。おっと、これは秘密だったな」

ＥＤＥＮから亡命していたルシャーティーとヴァインの姉弟がエルシオールに保護されてから数日後、アキオは一人エルシオールのブリッジで、いつもの宿直とついでに様々な書類の整理などを行っていた。

あの姉弟はタクトやミルフィーユ達が心から歓迎をしていたし、色々と気を使ったりもしていたので既に艦内に上手く溶け込んでいるようであった。

だが、アキオは相変わらずだ。

ほぼ１００％スパイ扱いしていたので、最初に挨拶を交わした程度で普段はまるで接触していない。

実は、姉弟がまだ顔を覚えていない乗組員達に交代で密かに監視までさせていた。

傍から聞けば何とも厭らしいアキオの行動であったが、ここは別に仲良く倶楽部ではなく、正式な軍艦で乗組員達は全員が軍属か軍人でもある。

外から流れて来た正体の良くわからない人物に対して警戒を怠らないのは、これは定められた義務であったのだ。

とはいえ、それを他の人間に知られては意味が無かった。

監視の要員達も、表面上はウランフ中将からエルシオールの警戒

強化用に借りて来た、一見すると普通の整備員や保安要員達であったし、彼らは普段は普通に任務に邁進している。
それに、何か異常でも無ければアキオに報告しても来ないので、今のところはその本来の任務は全くバレていないはずであった。

以上のような仕事と合わせて、ムーン・エンジェル隊の司令であるタクトは、テンションで性能が左右する紋章機のパイロットであるミルフィーユ達に色々と気を使わないといけなかったので、エルシオール艦内で発生する様々な仕事は、今まではレスターにほぼ一任されている状態であった。

それに、単艦でもエルシオールはムーン・エンジェル隊の旗艦でもあった。
複数の艦艇が所属する艦隊ほどではなかったが、実質タクトの分と合わせて二人分なので実は結構忙しいはずなのだが、今までが今までなアキオはそこまでの忙しさを感じていない。

それに、レスターには悪い癖があった。
自分が出来ると感じてしまうと、何でも一人で全て済ませてしまおうと考えてしまうのだ。

その点、面倒臭がりの面もあるアキオは、容赦なく仕事をエルシオールの艦長エリオスにも割り振っていた。

「また、規定量以外の物資を分捕って来たんですね。兄さん……」

同じブリッジ内の艦長席に座るエリオスは、自分も書類を捌きながら、アキオの独り言を聞いて一人また呆れていた。

確かに昨日、アキオは今までの行軍や戦闘などで危機的なまでに

消耗した物資の補給を到着したばかりの大規模輸送船団から行っている。

アキオは、これらの任務を取り仕切るウォルコット大将と親しいし、輸送船団の司令官も、第2方面軍時代に面倒を見ていた人物だったので、その少将は気前良くアキオやウランフ戦時大将に物資を補給してくれたのだ。

「抜かせ、育ちの良いエリートが。こんな事は、ベテランの補給担当がいる艦ならどこでもやっている事だ」

アキオもしつこいくらいに上申していたし、いい加減改まっても良いはずなのだが、トランスバール皇国軍の補給物資規定量は、いまだに実戦には対応し切れていなかった。

今まであまり実戦が無かったので、まだ訓練や演習を想定した規則が幅を利かせていたのだ。

予算の関係で、その方面の連中が良い顔をしないと言う事情もあったのだが。

なので、現場のベテランは上手く書類を誤魔化して多く溜め込む癖を付けていたし、それを上層部も黙認している節があった。

軍法を変えるとなると色々と手続きが面倒であったし、その手の労力は省力艦艇の試作・量産、新規の工廠などの建設、新規の艦隊を作るにも莫大な書類上の手続きなどが発生するので、どうしても後回しにされていたからだ。

「それに、輸送船は早く空にしてトランスバール領の補給廠に戻した方が効率が良い」

「次の補給も、迅速に行うためですか？」

「ああ、こんな場所にいつもまでも輸送船を残しているだけで非効率だ」

とはいえ、それなら新たにこの宙域に設置した補給廠に収納すれば良いわけで、実際にもう何回分かの物資はそこに収納されているので、これはアキオの屁理屈という側面もあったのだ。

だが、とにかくトランスバール首都星とこの辺境宙域は距離が離れている。

その距離は、そのままトランスバール皇国軍の補給能力に制限を与え続けるはずで、物資はいくらでもあった方が良いのが本音でもあった。

「現地で調達可能なのは、水と食料と生活雑貨くらいですか」

「それも、いきなりは調達できないさ」

他の武器弾薬・消耗部品などは、規格の違いを言う前に技術格差があまりに杜絶しているせいでまるで無理であったし、水や食料なども、検疫の問題や、まだ正式に貿易協定などを結んでいないので気軽に買うわけにもいかなかったのだ。

何ともお堅い話というか、役所仕事のような気もしたが、第一お互いの通貨のレートすら決まっておらず、金貨や宝石で払うにしてもお互いに信頼関係が無くて揉めれば、双方に禍根を残してしまう。

この件については、あと数日で白き月と到着するであろう、ルフト宰相に任せるのが一番であろう。

そのために、政治家である彼もシヴァ陛下に同行しているのだから。

「これは、思った以上に手間ですね」

「戦争だからな」

これからの予定としては、白き月に座上するシヴァ陛下とトランスバール皇国軍本軍がこの宙域に到着次第、残り半分のヴァル・ファスク側が押さえている辺境宙域を奪還し、それからはルシャーティーとヴァインから得た情報を元に他のＥＤＥＮ宙域へと徐々に浸透していく。

積極的な攻撃と進撃をしながら、トランスバール皇国領へのヴァル・ファスクの侵入を防ぐというのが戦略の骨子となっていた。

ただ、あのヴァインの言うように、いきなりＥＤＥＮの中心惑星であったジュノーへの侵攻は不可能であろう。

奇襲ならともかく、軍事において後方と補給を確保しないでの拠点占領にさして意味など無いからだ。

最初に成功しても、そこで補給すら受けられないで全滅してしまえば意味が無い。

少しずつ、徐々に前に押して行く。

当たり前の作戦だが、その当たり前の作戦で軍人達は大きく苦労しているのだから。

「それに、まだ敵の司令官が姿を見せていない」

「そうですね。その人物を討つなり、捕らえるなりしないと……」

ヴァインからの情報で、ヴァル・ファスク軍のこの方面における司令官の名前は判明している。

ロウィルという人物で、ヴァル・ファスクの中でもなかなかの大物らしいのだが、それだけ彼らはこの方面を重視しているという証拠にもなり、余計に無謀な行動は慎まねばならない。

いくら紋章機が優れた兵器でもそれは上手く使っての事であり、いきなり敵中に放り込んで良いわけでもないからだ。

「暫くは、静かにコツコツとやるしかあるまい」

「ですね」

そんな会話をしながら書類のチェックを続けるアキオとエリオスであったが、その二人をココは安堵の表情で見つめていた。

一時は最悪なまでに拗れた二人であり、それからもどこか素っ気無い態度を主にアキオが取っている事が多かったので、どうにか兄弟が仲良くなれないかと気を揉んでいる乗組員も多く、ココもその一人であったからだ。

アキオなどから言わせれば、『このお節介どもめ！』という事なのだが、この件ではなぜか一番熱心なヴァニラに絆されたのか？

一応は、知人以上友人未満くらいの対応はするようになっていたアキオであった。

「だが、アレだな」

「何ですか？」

「あのルシャーティーという娘は、物凄い美人だな」

「ええ、ヴァニラと良い勝負ですね」

そんな話をするほど砕けてきたアキオの性格と、二人の仲という事かも知れなかったが、まさかエリオスが対応するとは思わなかったココは目を点にしてしまう。

だが二人も普通の男なので、それはある程度は致し方ないとも言えた。

「ヴァニラは、美人さんだからな」

ムーン・エンジェル隊において一番の美人はと言えば、間違いなくヴァニラであろう。

まだあの年齢なのに神々しいまでの美しさで、可憐で優しくて、献身的に負傷者をナノマシンで治療までするとあって、今では『ヴァニラちゃん親衛隊』は、エルシオール以外にも軍内部に四桁の信者を獲得している。

つまり、それだけ彼女がアイドルの資質を秘めているという証拠でもあったのだ。

他にも、基本的にムーン・エンジェル隊のメンバーは軍内では人気が高い。

自分達の危機を救ってくれる天使でもあり、しかも一人を除いて全員が美少女揃いという事もあって、特に男性軍人達に絶大な人気があったからだ。

まあ、その一人は美少女ではなかったが、美女ではあったので、

別に貶しているわけでもなかったのだが、本人にバレると顔に穴が開く可能性があったので、アキオもエリオスもノーコメントを貫く事にしている。

女性に年齢の話はタブーであったし、どうやらいつの時代でも、基本的に男の考えや行動にさして変化は無かったという事なのであろう。

「その美人さんのルシャーティーだが、大丈夫かね？」

アキオの心配事は、『彼女が、このエルシオールに馴染めるか？』という風にも取れたが、昔から男の高級軍人を誑かして情報を得るのは美人スパイの役割という方が実は本命でもあった。

「その辺は、マイヤーズ司令に任せるしかないですね」

エリオスも、アキオの危惧をその発言だけで理解していて、更にそれに自分の見解も加えていた。

もしルシャーティーが女スパイだとして、一番に狙われるのは間違いなく司令官であるタクトであったからだ。

タクトがその辺を上手く処理しないと、特にタクトの恋人であるミルフィーユの精神状態に影響を及ぼしてしまう。

大切な時に、彼女が戦力にならない可能性もあったのだ。

勿論、他の隊員達にも影響はあるであろう。

とはいえ、そんな当たり前の指摘を今更タクトにしても仕方が無い部分もあり、二人はただ今は静かに普段の任務に邁進するしかなかった。

「でも、兄さんにも色々と問題はありますよね？」

「言われると思ったけどな……」

ランファ、ちとせ、ミント。

この三人は、アキオの奪い合いでここ最近常に争いをしているかの印象を周囲に与えている。

そしてそれが、ムーン・エンジェル隊に後にどう影響するのか？

アキオは、もう一つの爆弾を抱えていると言っても過言ではなかった。

「ここのところ、待機ばかりでつまらないわね」

「そう言うなよ。ランファも士官学校は出ているんだから、理解はしているんだろう？」

「それはそうだけど……」

敵ヴァル・ファスク軍の追跡部隊を撃滅してルシャーティーとヴァインの姉弟を保護したエルシオールであったが、相変わらず領域境にある惑星の衛星軌道上で待機を続けていた。

タクトは、ムーン・エンジェル隊の面々の心のケアを行い。

とは言っても、いつものように楽しく話をしたり、一緒に食事や遊んだりしているだけであったし、ムーン・エンジェル隊の面々も規定の訓練以外では、それぞれに自分の時間を過ごしていた。

要するに全く状況は動いていないわけだが、トランスバール皇国軍としてはいくら初戦で敵に勝利を収めたからと言って、いきなり進撃するわけにもいかなかった。

ヴァル・ファスク軍がこのまま引き下がるわけなど絶対になかったし、トランスバール皇国としても、ただ食い散らかすようにヴァル・ファスクのみを狙って攻撃すれば勝てるという戦略は採用していない。

徐々に情報が入って来ていたのだが、今エルシオールやトランスバール皇国軍先遣艦隊のいる辺境宙域とその先は広大な宙域は、実はＥＤＥＮと呼ばれた先史文明の中心宙域であり、現在ヴァル・ファスクの軍隊が戦力で制圧をしている状態にあった。

ならばトランスバール皇国軍としては、少しずつでも着実にこれらの宙域をヴァル・ファスクから開放し、開放した惑星政府などの協力の元、徐々に彼らを孤立させて講和か降伏に持って行くべきであったからだ。

なので現在、エルシオールとその護衛に付いている艦隊以外は、懸命に再奪還した辺境宙域を飛び回り、現地の惑星国家をトランスバール皇国に帰属させたり、この地をＥＤＥＮ本宙域奪取とヴァル・ファスク軍殲滅のための前線基地として長期持久戦闘が可能なようにと、懸命に駆け回っている状態であった。

ウランフ戦時大将と、アキオを交代したレスター戦時中将は、今懸命に動いていたのだ。

特に、この手の根気も必要な任務とあっては、これは元ムーン・エンジェル隊副司令でタクトの補佐で名を挙げたレスターの独断場とも言えた。

それと、もう一つ。

予定では、明後日にもシヴァ陛下が白き月と共にこの場所に来訪するので、その警備というか防衛体制に万が一にも不備があっては問題となってしまう。

レスターは、今頃更に増えた仕事に心の中で悲鳴をあげているはずであった。

彼の事なので、表面上は涼しい顔をしているのであろうが。

「そんなわけで、余計にエルシオールは動けないわけだ」

現在のムーン・エンジェル隊とエルシオールは、トランスバール皇国軍の切り札であり、シヴァ陛下の近衛でもある。

彼女の来訪に、姿が見えないというわけにはいかなかったのだ。

「でも、そのおかげでこうして二人でいられるわけだし」

ランファの言う通りに、そのおかげで二人は彼女の自室でお茶を飲みながら話をする余裕くらいは十分に取れる状態にあった。

何しろ、ここのところやけに忙しかったので、久々に取れた二人きりのゆったりとした時間という物であったのだ。

「アキオは、ルシャーティーとヴァインと碌に顔すら合わせないし」

「忙しいからな……」

アキオは、二人をほぼヴァル・ファスク側のスパイだと断定している。

証拠が無いので、その事実を知っているのはタクトとエリオスくらいであったが、もし万が一スパイでなくても『警戒しているぞ！』という姿勢を見せる幹部は一人くらいは居た方が良い。

何度でも言うが、ここは仲良し倶楽部ではなくて軍艦なのだから。

それに、いくらスパイでもすぐに捕まえてどうこうというのは知恵の浅い素人のする事であった。

どうせ二人は、エルシオールの重要区画には近付けないのだし、彼らの欲する物が情報だと考えれば、逆にこちらで流出させる情報の量をコントロールすれば良い。

要は、こちらが得た情報よりも少なければ、ヴァル・ファスクとの情報戦ではこちらが勝利する事になるのだから。

「それで、そのお二人さんは？」

「それが、あのルシャーティーって娘が、妙にタクトに近付くから……」

当然、ミルフィーユが少しおかしいと感じているようであった。

外部からいきなり知人・友人ゼロの環境に放り込まれたのだから、不安になって一番偉いタクトに縋ったというのが真相かもしれなかったが、やはりどこか媚びのような態度を混じらせて対応するルシャーティーという少女に、ランファも少し違和感を感じているようであった。

「世間一般的に言うと、あれほどの美少女に頼られたり縋られたりすればか……」

「……」

アキオとしてはいつものように軽口を叩いただけなのだが、今の情況では言わない方が良かった類の発言であったらしい。

ランファは、明らかに不機嫌そうな表情を彼に向けていた。

「あくまでも、世間一般の話なんだけどな」

「どうかしら？　タクトもアキオも、世間一般で言えば普通に男なわけだし」

ランファは、前日に行われたルシャーティーとヴァインの歓迎パーティーの席でタクトと初見から仲良く話をするルシャーティーの顔を想い出していた。

ミルフィーユを差し置いてケーキを切り分けて貰ったり、『タクトさんとは話をしやすい』とか言われて上機嫌になるタクトと、それを見て少し不機嫌になるミルフィーユを思い出していたからだ。

ルシャーティーとしては、弟以外誰も知り合いが居ない軍艦の中でただ優しく接してくれるタクトに縋っているだけなのかもしれないが、何しろ彼女はアレだけの美少女なので、『それに、タクトが参ってしまったら？』などとも考えてしまうのであろう。

そしてそれは、同じ男であるアキオにも同じ事が言えたのだ。

「残念ながら、俺はああいう女は好かない」

「（そういえば、そうだったわよね……）」

ルシャーティーの芯の部分についてはまだ判別していないので何も言えなかったが、ランファはアキオの好みの女性のタイプが芯の強い女性である事を思い出していた。

先のネフューリアとの最後の戦いで、まさかの幽霊となって現れたアキオの母親は、穏やかな笑みを浮かべつつも、毅然と自分の姿形を利用したネフューリアに対して拒絶と反撃を行っていた。

更にその情況下でも、実の息子であるアキオの事を誰よりも気遣い、それは一緒に居た自分にも向いている。

それに、生まれた頃からあれだけの美人と生活を共にしているだけあって、アキオがただ美人なだけの女に動揺したり、惑わされたりするはずもないのであろう。

とここまで書くと、アキオが女性を見かけだけで判断しない素晴らしい男性だと思ってしまうのだが、要するにただのマザコンとも言えた。

今も続いているが、自分を含む三人によるアキオ争奪戦で、ミントとちとせがいまいち勝ちきれない理由もそこにあった。

いくらアキオの事がが好きでも、ただ彼に好意を寄せていれば良いというわけではない。

しかも二人の心の奥底では、尊敬する年上の優秀な上官という感情も混じっていて、その部分も実は恋愛に関しては経験が浅いアキオに違和感を感じさせている部分もあった。

対等な立場を貫いて前は口喧嘩ばかりしていた自分が、アキオに選ばれた理由もそこにあったのだ。

「アキオは、ルシャーティーを疑っているの？」

「それは、俺の態度で理解してくれ」

いくらランファが恋人でも、軍人でムーン・エンジェル隊のナンバー2の立場として行動している自分の真意を彼女に伝えるわけにはいかなかった。

ランファにその気がなくても、何が原因でアキオが二人を疑って監視している事実を本人達に知られるのは拙かったからだ。

多分、間違いなく向こうは気が付いていると思うが、その証拠をわざわざ暴露されたら、向こうが弱者を気取ってどんな反撃に出るかもしれなかったからだ。

そして、そんな軍人としての役割を忠実に演じるアキオに気が付いたランファは、これ以上の追求は行わない事にする。

「全く、アキオも貧乏籤を引くわね」

「かもな。もうその話は終わりにしよう」

「ええ」

それからの二人は、時間まで恋人同士の時間を過ごすのであった。

だが、白き月に到着するまでの間に、タクトは銀河展望公園で二人きりでルシャーティーと一緒にいたところをフォルテ達に問い詰められたり、その釈明というわけでもないのであろうが、ミルフィーユと二人で居る時にルシャーティーが来て、結果的に邪魔するようになったりと。

傍から見ればただの恋の鞘当てなのかもしれなかったが、ムーン・エンジェル隊の隊員として紋章機を操縦する際のテンションに関わるメンタル面でのアクシデントの多さに、アキオはどこか嫌な予感を感じるのであった。

そしてあの一瞬だけ鋭い表情を見せた、現在表向きは全く疑われるような行動をしていないヴァインの存在。

「（もしかすると、俺が手を下す必要があるのかもな……）」

ランファとの二人きりの時間を過ごして彼女の部屋を出たアキオは、ブリッジに向かう途中の通路で、ホルスターに仕舞ったレーザー銃の存在を撫でるように確認するのであった。

「始めましてかな？　ムーン・エンジェル隊の諸君」

「初めましてですね。とは言っても、閣下は私達の事は良くご理解しているようで」

「なあに、いくら下等種族相手でも、情報は極力集めてから対処するのが知性ある我がヴァル・ファスクの流儀なのでな」

白き月との合流まであともう少しというところで、エルシオールは敵ヴァル・ファスク艦隊と遭遇していた。

とはいえ、その規模は意外と小さい。

一応、この宙域がトランスバール皇国側の勢力圏にあったので、ヴァル・ファスク艦隊側も小規模の戦力でしか侵入に成功していなかったという可能性が高い。

それと、この小規模な艦隊には今まで一度も姿を見せなかったヴァル・ファスク側の司令官も座上していて、その見た目は眼鏡をかけて学者然とした若い男性がタクトに挨拶をしている。

ただその挨拶の内容は、彼の見た目と口調とは違ってかなり失礼な内容ではあった。

タクトは、彼が以前にヴァインから教えて貰ったロウィルであろうと思っていた。

「その辺が、あのネフューリアとは違うと？」

「ネフューリアか……。あの女は、自分の作り出した力に酔って敵を侮り、最後は自滅したバカ者であったがな。ヴァル・ファスクの良い恥さらしでもある。おかげで、私がどれだけ後始末に翻弄したか」

タクトの隣にいたアキオからの、先の戦いで戦死したネフューリアに関する質問に、ロウィルは口にするのも憚られるという風な表情で答えていた。

アキオはその答えで、彼がヴァル・ファスク側でもかなりの権力者である事を知る。

「知ってはいると思うが、先に自己紹介をさせて貰おうか。我が名は、ヴァル・ファスク軍トランスバール方面軍総司令官であるロウ

ィル。お互い短い時間であろうが、我が名を記憶に刻み、その死の瞬間まで覚えておくと良い」

「その戦力で大した自身ですな。ロウィル閣下」

「タクト・マイヤーズ司令、君の時間稼ぎには引っかからんよ。ああ、それと、先に君達が確保している二匹の下等種族だがね。追撃していた艦隊も全滅した事だし、これ以上はコストが無駄になる。一緒に死んで貰う事にする」

ロウィルが冷徹で合理的な判断を下した直後に、双方による戦闘が始まる。

タクトは、ロウィルと話をしている間には既に紋章機の出撃とその展開を終えていて、更に各方面への援軍要請もアキオに命令して出していた。

位置的に白き月が近い事もあり、エルシオールの他にもシヴァ陛下と謁見するためにいくつかの艦隊が現地に向かっている事もあって、戦闘開始から十分もしない内に、エルシオールの隣ではあのウランフ戦時大将が指揮する艦隊が展開して遠距離砲撃を既に開始していた。

「マイヤーズ、お前は敵の司令官に好かれ易いようだな」

エルシオールブリッジのメインスクリーンには、素早く的確にまるで怒鳴るような声で指揮下の艦隊に命令出しているウランフ戦時大将の姿が映っていた。

それと当然、その隣にはその補佐をするレスターと、彼の近くで専用の端末を弄りながら、彼に矢継ぎ早に報告を行うアルモの姿もあった。

タクトは二人が元気そうな様子に安堵しつつ、ウランフとの話を続ける。

「でも、またハズレですよ。敵の司令官が可愛い女の子なら良かったのに」

「アホか。もしそうなったら、お前はわざと負けてしまうんだろうが」

「いくら何でも、それでは負けませんって」

タクトとウランフ戦時大将の下らない会話に、エルシオールでも向こうの総旗艦であるチンギス・ハーンでもブリッジ要員達に笑みが広がるのだが、その間にも援軍の艦隊とエルシオールはまるで申し合わせたかのように完璧な防御陣形を展開し終えていた。

だが、向こうもただ小規模の艦隊で侵入に成功したわけではない。次第に小規模な艦隊が次々と現れては合流に成功し、ほぼ同規模同士の艦隊による決戦になってしまったからだ。

これにはさすがに、タクトもレスターもウランフ戦時大将も驚いていたようだ。

「なるほど、ただ優れた技術と戦力比に驕っていたネフューリアとは違うか……」

アキオは、ロウィルが使った策を瞬時に見抜いていた。

多分、自身の持つ戦力を大量の小規模艦隊に分割し、かなりの部分を勢力圏の堺で警戒を続ける皇国側の艦隊を釘付けにし、残りを

警戒の薄いクロノドライブポイントから次々と侵入させたのであろう。

それに彼の艦隊指揮を見ていると、明らかにネフューリアよりも理に叶っていて一種熟練の技さえ感じてしまう。

ネフューリアは、あのバカなレゾムを上手に操って資源を集め、あのオ・ガウブ建造まで漕ぎ着けた、ロウィルがバカにしていたが優れた指揮官ではあったのだが、肝心の艦隊指揮では力押しの面が強かった。

あれだけ数を揃えられる力量を持っていたので、あまり艦隊陣形などは関係ないのかもしれないが、このロウィルはネフューリア並みのそれらの才能と一流の将帥としての実力を有しているらしい。

油断は禁物であろうと、アキオもタクトも判断していた。

「あれは、ロウィルの艦隊では？」

「知っているのか？」

「ちっ！」

双方が激しい砲撃戦を続ける最中、突然ブリッジにヴァインが姿を見せていた。

どうやら、彼はあのロウィルの事を知っているらしく、タクトはすぐに彼から更に集められるだけの情報を集めていたが、アキオはこのタイミングで姿を現す彼にますます違和感を感じている。

「情報提供には感謝するが、軍人でもない君が無断でブリッジに入らないで欲しい」

「おい、レイトン」

「悪いが、これがルールなのでな」

ヴァインへの警戒感を隠しもないアキオと、それに上手く宥めるタクト。

内心ではどうかのかは知らないが、ヴァインはアキオに謝意を表すとタクトに更に自分の知っている詳しい情報を提供し始める。

タクトは、アキオがわざとそういう態度を見せている事に気が付いていたが、ココや他の女性軍人達は少し彼に畏怖というか恐怖のような物を感じ始めていた。

アキオはなまじ顔が良いだけに、冷たい表情や口調をすると余計に効果が大きかったという理由もあった。

「責め切れなかったか。君達の命は暫く預ける事にしよう。我らが抑えている宙域で、冷たい骸を曝すのだな」

まるで捨て台詞のようであったが、暫く戦闘を続けていたロウィルは素早く指揮下の艦隊を纏めると、そのまま近くのクロノドライブポイントへと撤退してしまう。

「ふん、口先だけの逃げ腰司令官が！」

後から援軍に現れた中年の少将が撤退するロウィルを嘲笑っていたが、彼が言うほどロウィルの指揮する艦隊はダメージを受けたわけではない。

無人と思われる大型戦闘機部隊は、ムーン・エンジェル隊の活躍

によって半数以上が落とされていたが、艦隊に限っては５％も損害を受けておらず、これはトランスバール皇国軍側も同じあった。

つまり全くの互角だったのだが、実はこの後に後味が悪い損害をトランスバール軍側は出している。

一部別宙域にいた艦隊が、戦果を求めてクロノドライブポイントから出てくるロウィルの艦隊を待ち伏せしたらしいのだが、それを見事に読まれて逆に待ち伏せを喰って少なくない損害を出している。

「兄さん、ロウィルの本当の目的は、我々の数を削る事ですかね？」

「いや、それならこんな回りくどい真似はしないだろう……」

エリオスがアキオに意見を求めるが、彼はそんな表面上の戦果よりもある可能性について考えを張り巡らせていた。

ＥＤＥＮより逃亡して来たヴァインとルシャーティーの姉弟を、アキオは間違いなくスパイであると思っている。

今は証拠が無いので監視だけに留めているが、もしそれが上がればアキオは二人を始末する事も躊躇わないつもりであった。

ところが、二人は全くボロを出さないうえに、ルシャーティーの方は上手く女として武器を使ってタクトを翻弄し、ミルフィーユをやきもきさせている部分もある。

そして今回の戦闘で、ヴァインは嫌らしいタイミングでタクトに敵将ロウィルに関する情報や、後にはいまだにヴァル・ファスク側に押さえられている宙域に関するデータなども追加で提供している。

これでエルシオールの乗組員の大半は、彼がスパイなどではなくて味方だと見るようになっている。

勿論、正規の軍艦に乗っている正規の軍人ではそう簡単には信用されないのであろうが、彼女達は戦争は経験しているが、普段は白き月の巫女という技術者としての本質が強く、この手の謀略に疎い面が強かったのだ。

「仕方が無い。暫くは、俺が悪人になるしかない」

「僕も彼を無条件では信用していないのですが、１００％スパイとも思いたくないんです」

「（ロウィルの今回の作戦が、ヴァインとルシャーティーをこちらに信用させるための物だとしたら？　そして、皇国軍で最大の戦力を持つムーン・エンジェル隊の力を落すためだとしたら？）」

ただこちらの正面戦力の削減だけではなく、紋章機という兵器の内情をよく理解して、それを操るパイロット達の精神面テンションへの攻撃を行おうとしている可能性が高く、それを考え付いたヴァル・ファスク軍の司令官ロウィルの存在に、アキオは今までに無い緊張感を感じるのであった。

更に、アキオのヴァインへの変わらぬ態度に一部のエルシオールのクルー達が違和感を感じ始めていて、これもルシャーティのタクトへの行動とも合わせて、今まで鉄壁の信頼感で結ばれていたエルシオールの結束に僅かながら皹が入り始めている。

どんなに固い物でも一旦皹が入ると、補修をしなければそれはその物が砕ける要因にもなってしまう。

ムーン・エンジェル隊は、静かにその危機を迎えつつあったが、大半の者達がそれに気が付かないまま、エルシオールはようやく白

き月へと合流を果たす事となるのであった。

第三部　第四話（暫定版）

「あれ？　珍しいですね？　何か用事でもあるのですか？」

「まあ、そんなところだ」

エルシオールがようやく白き月へと合流する数時間ほど前、アキオは一人珍しくクジラルームとそこを管理するクロミエの元を尋ねていた。

クジラルームのスペースのかなりの部分は、巨大なプールによって占められ、そこには海水が並々と注がれて人口の海として希少な生物である宇宙クジラの生活スペースとなっている。

クロミエは、他にも様々なトランスバール皇国領内に生息する生物の飼育と繁殖などを行う管理人でもあった。

なぜ軍艦であるエルシオールにそんなスペースがあるのかと言えば、これはエルシオールが儀仗艦で皇王の御召艦でもあったからだ。

宇宙クジラほどの、希少ながら巨大な生物を保護飼育し、それを暇な時間に眺めるというのは、これは全宇宙でも限られた人間にしか出来ない甲斐性でもあった。

ただ、エルシオールに宇宙クジラが保護された頃に皇王であったジェラールは、さしてこの部屋に興味は無かったらしい。

一度だけ十分ほど滞在してから、さして興味も無いと言った表情で次の公務のために立ち去ってしまったとの、このクジラルームの管理棟に残っている日誌からの情報であった。

とはいえ、彼は別に『こんな物はいらない』などとは言わなかったらしく。
そのまま続けて構わない旨の発言をして、当時このクジラルームの管理人になったばかりのクロミエを安心させていた。

もし彼にクジラルーム不要論を唱えられたら、彼も宇宙クジラも、他の飼育されている生き物達もどうなっていたかわからなかったからだ。

皇王ともなれば、たかが一隻の儀仗艦の中にある生物の飼育室とその維持費に執着しなかったというのが真相であったであろうし、宇宙クジラという生物は人間の心が読めるという特殊な能力を持ってもいたので、『これはもしかすると様々な分野の、特に軍事兵器に転用可能なのでは？』という白き月からの要請によってという事情も大きかったらしい。

実際に、紋章機の起動プロセスの解析にも役に立っていたようだ。
何しろ紋章機は、操縦者のテンション（精神状態）によって性能が大きく左右されるのだから、その心の状態を読める宇宙クジラと、その宇宙クジラと話が出来るクロミエはなかなかに貴重な人材でもあったからだ。

「そろそろ、お見えになる頃だと思っていましたけどね」

「やはり、読まれていたか」

クロミエは宇宙クジラから教えて貰ったのだと話すが、アキオは宇宙クジラのみならず、クロミエも見掛けとは違ってなかなかに侮れない性格と能力を持っていると思っていた。

一見すると少年とも少女とも見える中性的な容姿をしているうえに、一部では両性具有だという噂まであった彼であったが、彼はこの歳で様々な希少な生物の飼育と繁殖。
それに、生態研究などで大きな成果を挙げている。

その成果は、エオニアの乱の際に砲撃で吹き飛ばされて現在再建中である、首都星トランスバールの王宮近くにある『トランスバール皇王恩賜記念動物公園』にいたプロの生物学者や飼育員でも敵わないほどであったからだ。

それと宇宙クジラと交信が出来るとはいえ、それを軽々しく周囲に漏らすほど軽薄な人間でもない。
むしろ、かなり慎重な部類に入る人間だとアキオは思っていた。

「あの二人の件だ」

「先ほどタクトさんもお見え名になっていたんですけど、少々の心の揺らぎがある程度で、特に怪しい部分もないのです」

「少々の心の揺らぎか。人間なら、誰にでもある事だからかな？」

「はい、そういう事です」

どうやら、宇宙クジラからあの二人がスパイであるという証拠は掴めなかったらしい。
まあ、宇宙クジラから二人がスパイである確証を得ても、それが決定的な証拠ともならないので、あくまでもわかれば対応は可能であろうと言う程度のつもりで来たのであったが。

「それと、宇宙クジラはあなたの事も心配していましたよ」

「俺が？　別に、今のところは……」

長年の懸案であった、あの憎いシードル公爵はとっくに墓の下であったし、別に今は人生に悲観して生きる目的があるわけでもない。軍務も順調で常人には得られない栄誉も受けていたし、プライベートでも多くの資産を得ている。

しかも、ランファという可愛い恋人まで出来た。

他人から見れば、こんなに恵まれた人間も存在しないであろう。

なので、心配されるような事も無いような気がしていたのだ。

「先ほどの心の揺らぎです。それは、誰にでもある事で、勿論エルシオールに居る全ての人にこれが当てはまります。となると、この僅かな揺らぎが連動・共鳴すると思いもしなかった頑強な物すら壊れてしまう。宇宙クジラは、念のための老婆心とも言っていましたが」

「なるほど、宇宙クジラは慎重なんだなぁ。俺よりも、指揮官とかに向いているかも」

「そんな面倒な仕事はゴメンだそうですよ」

アキオは、以前は自分の心の闇を読まれるのが嫌であまりこのクジラルームには近付かないでいた。

だが、それはエルシオールに居る大概の人間の心を読んでしまう宇宙クジラには、防御にもならない行為で結局は無駄だったのだが、今のアキオは特に気にする事もなく宇宙クジラと接する事が出来ている。

それだけ、アキオも砕けてきたという事なのであろうとクロミエなどは思っていたのだ。

「敢えて嫌われ役になろうとする気持ちはわかりますけど、本当に大切な人には時には全て話す事も重要だそうです」

「宇宙クジラは、雑誌で人生相談のコーナーが持てるかもしれないなぁ」

アキオは、アキオの心の中を全て読んでしまう宇宙クジラの能力に驚きつつ、クロミエに挨拶をしてからクジラルームを後にする。

「さてと、もう少し時間が……」

「アキオさん」

もう少し時間が空いていたので、特に目的もなく艦内を歩いていたアキオであったが、そこにちとせが姿を現す。

「アキオさんは、もうお怪我の方は？」

「大丈夫。というか、ちとせに言われるまで忘れていたよ。そういえば、まだ負傷してからそんなに日数も経っていなかったんだよな」

「本当に、私のためにすいませんでした」

「だから、気にするなって。まあ、その……。世間一般的に言って、嫁入り前の女性に跡が残りそうな怪我をさせるわけにはな……」

「という事は、もし私が跡が残るような怪我をしていたら、責任を

取って貰ってくれるのですか？」

「いやあ、そのぅ……」

我ながらいくらあまり経験がないとはいえ、変な事を言ってしまったなとアキオが思っていると、それを見越したようにちとせは笑みを浮かべながら話を続ける。

「冗談ですよ。ところで、大切なお話があるのです。勿論、軍務に関しての事ですよ」

「軍務に関して？」

「あのＥＤＥＮから来た、お二人に関してです」

「そういう事か……」

ここでもしちとせの言う軍務が二人の事ではなくて通常の任務の件であったら、アキオはこんな浅はかな行動はしなかったのかもしれない。

だが、今の時点でアキオが二人を公式にスパイだとほぼ断定して監視をしている事実が知れるのは良くないと考え、その話し合いはティールームや空いている会議室などではなくてちとせの私室でする事になる。

二人はそのまま近くにある彼女の部屋に入るのであったが、何の運命の偶然か？

それを、たまたま通路を歩いていたランファに見られてしまっていた。

「えっ？　アキオがどうしてちとせに部屋に？　それも、二人きりで？」

ランファの心の中に疑念の感情が沸き、それは次第に彼女の心の中を黒く染めていく。

そしてそれは、ムーン・エンジェル隊の結束に更なる小さな揺らぎをもたらすのであった。

「アキオさんは、あのお二人を疑っているのですね」

「これはランファにも言ったんだが、それは俺の態度で察して欲しい」

「はい、わかりました」

ちとせの私室に入った二人は、彼女が淹れた緑茶を啜りながら話を始める。

だが、軍務に関しての話は僅かこれだけであった。

アキオは二人を、ヴァル・ファスク側の送り込んだスパイだと断定している。

とはいえ、そういう態度を見せて二人に警戒感を抱かせるのはアキオだけで十分で、タクトやムーン・エンジェル隊の面々は誰も知り合いのいないエルシオールに逃げて来た二人に、素で優しく接して欲しい。

もし疑念が本物であればアキオの警戒が役に立つであろうし、ただの考え過ぎであったらアキオが二人に嫌われるだけで済む。

そしてこういう言動は、レスターの代わりにムーン・エンジェル隊の副司令になったアキオが果たすべき役割なのだと。

アキオは『俺の態度で察して欲しい』とだけしか答えなかったが、ちとせはランファよりも素早く、正確にアキオの意図を見抜いていた。

ランファもちとせも、同じく士官学校を優秀な成績で卒業している才媛であった。

だがその成績の内容には、かなりの差があるのは誰の目から見ても明らかであった。

紋章機の操縦テクニックや格闘戦闘などの、勇に優秀さに偏っているランファと、座学や情報解析や機材の取り扱いなどの、智に偏っているちとせとでも言えば良いのか？

それにちとせの家は代々軍人家系で、父も祖父もその前も、ほぼ全員が佐官クラスにまで出世していた軍人でもあった。

将官になれなかったのは、最近は改まっていたが、以前は軍内では貴族が幅を利かせていたせいであり、決して能力のせいではない。

話が少しずれたが、そんな優秀な父や祖父を見て育ったちとせは、アキオが高級士官の責任として、敢えて嫌われ役をやっている事にすぐに気が付いていたのだ。

「でも、さすがですね」

辺境宙域裁定のための司令官としても、ムーン・エンジェル隊のナンバー2としても、ちとせは何ら躊躇う事なく的確に動くアキオを、特に打ち合わせをしたわけでもなさそうなのに一瞬で役割分けを行って行動するタクトと共に、尊敬すべき素晴らしい指揮官だと感じていたのだ。

「この程度の事は、佐官クラスの人間なら誰でも思い付くさ」

「それでも凄いです」

「なあに、ちとせならこのくらいは出来るように……」

だがアキオは、これ以上発言する事が出来なかった。

なぜなら、突然ちとせが自分に抱き付いて来たからだ。

「でも、アキオさんは意地悪です……。私はこの宇宙で一番アキオさんの事が好きで、アキオさんもそれを知っているのに。アキオさんは、ランファさんと……」

まさかというか、これはタクトならば容易に想像がつく事でもあったのだが、やはりアキオは恋愛という物に慣れていないらしい。

突然ちとせに抱き付かれて、完全に舞い上がってどう対応して良いのかわからなくなっていた。

これが軍務や戦闘時ならばと考えてしまうのは、これはもう職業病とでもいうべき悪癖であろう。

思えばアキオはランファを選んでいたが、ランファが自分も気持ちをというか、アキオが自分の気持ちに気が付く前に、ちとせもミントも自分への好意を伝えて来ている。

結果的にその気持ちには答えられなかったわけだが、そこで二人が素直に身を引く保障などどこにもなかったのだから。

アキオは今になって、ちとせの私室に入ってしまった事を迂闊であると感じ始めていた。

「ちとせ、俺は……」

「言わないでください！　その先、ランファさんの名前は出さないでください！　私を好きだと言ってください！」

「ちとせ……」

こうなるとアキオには完全にお手上げ状態というか、どう動いたり言ったりしたら良いのかわからなかった。

アキオは暫く、自分に抱き付きながら泣いているちとせの成すがままにさせるしか術を持てなかった。

「すいません、取り乱して」

「いや、俺の方も……」

ルシャーティーとヴァインに関する話だったはずなのに、ちとせに再び告白されるという事態に陥ってしまったアキオであったが、暫くアキオに抱き付いて泣いたせいで気が晴れたのか？

ちとせは、『こんな時に、私情を優先して申し訳有りません』と

アキオに謝っていた。

とはいえ、これで彼女が自分を諦めたわけではないはずで、かと言って今のアキオはランファを選んでいるのでちとせの気持ちに答えるわけにもいかず、更に紋章機のパイロットである彼女にあまりテンションに影響を与えるような言動を取るわけにもいかなかったので、今のアキオは心の中でムーン・エンジェル隊副司令の責務と、私人アキオ・レイトンとしての気持ちが鬩ぎあっている状態であった。

「とにかく、そろそろ白き月に到着するな」

「はい」

とにかく表面上は何事もなかったかのように部屋を出る二人であったが、その姿をランファのみならずある人物にも目撃されてしまう事になる。

その人物は、二人に見付からないように咄嗟に物陰に姿を隠したのと同時に、驚きと共に心の中でとある思考を巡らせていた。

「アキオさんは、ランファさんを選んだのはないのですか?」

その人物とは、ミントであった。

彼女もアキオが辺境裁定のための司令官に任命された時に彼に同行し、負傷の際には甲斐甲斐しく面倒を見ていたが、心のどこかではアキオの事は諦めないといけないかもしれないなどと考え始めていた。

それほど、アキオのランファへの気持ちが強いと感じていたのだが、そのアキオが、あの慎重な性格をしている彼がなぜかちとせの

部屋から二人で出てくる場面を目撃してしまっていた。

「（アキオさんは、ちとせさんに心が揺れている？）」

となると話は別で、ミントはランファはアキオ争奪戦の手強いライバルであると思っていたが、ちとせに負けるとは思っていない。

もしアキオの心に揺らぎがあるのなら、それは自分にもチャンスなのではないのか？

「（ミント・ブラマンシュ！　ここは、最後の勝負のかけどころですわよ！　気合を入れるのです！）」

ミントの新たな決意により事態は更なる混乱を迎え、それは後にムーン・エンジェル隊最大の危機となってしまうのは、今の時点では誰しもが想像できなかったのであった。

「うわぁ、物凄い数の艦隊ですね。タクトさん」

「どうやら、ルフト先生もシヴァ陛下も本気らしいな」

「この大戦力って、アキオさんとノアさんが頑張ったおかげですよね？」

「レイトンも、前は忙しそうだったからなぁ」

ようやく白き月との合流ポイントに到着したエルシオールであっ

たが、ミルフィーユはブリッジから見える大艦隊の姿に珍しく興奮していた。

男の子ではなくて女性であるミルフィーユから見ても、この宙域に浮かぶ衛星規模の白き月と、それを守るようにして付き従って来たり、先にこの周辺宙域の奪還作戦に参加していたジンロ大将指揮下の艦隊などと合わせて、四百隻規模の艦隊の姿には目を見張る物があったからだ。

タクトも戦争の道具とはいえ、これだけの規模の大艦隊にこれから始まる戦いもどうにかなりそうだという安心感を得ていた。

先のネフューリアとの戦いで大量に鹵獲された無人艦艇の改装艦に、白き月でノアによって設計図が引かれて建造された新造艦が大半で、それらは以前の十分の一以下の人員によって運用されていた。

あまりの艦艇の数の多さに、艦を動かす人員の確保が間に合わなかったので省力化がかなり進んでいたのだ。

結果、艦長や副官、各種運用長のポストが異常に増えていたが、それは民間の予備士官や、辺境艦隊などにいた士官学校を出ていない叩き上げの技量優秀者。

同じく増えた戦隊や分艦隊司令ポストなどは、最近では数もかなり増えた市民出身の将官などによって補われている。

他にも、トランスバール皇国各地にある士官学校の募集人員の増員や、募集条件の緩和、成績優秀者への奨学金制度などの拡充によって対応していたが、これはエオニアの乱からまだ一年も経っていない事もあって、その第一期生が世に出るのは少なくとも二年後の事であった。

他にも、偵察機、戦闘機、爆撃機、小型艦艇や輸送船のパイロッ

トや、艦長を養成する専門学校や、通信士、整備士、機関士などを要請する専門学校の増設。
民間に通う大学生や専門学校生を対象にした、予備士官制度の拡充など。

対ヴァル・ファスクのみならず、これから支配領域が拡大して戦備増強が必要なトランスバール皇国は、軍民を挙げてこれらの政策を立案・実行している。

これは、一時の停滞を超えて再び領域を拡大させようとするトランスバール皇国には必要な処置でもあった。
領域ばかり広げても、それを守れなければその支配も空洞化であり、世間一般では否定的な意見もある軍備の増強も、今は必要であったからだ。

「そうじゃの、レイトンは良い仕事をしてくれた」

「ウォッカ大将、お久しぶりです」

「言うほど久しぶりでもないような気がするが……。タクトも、レイトンも、ムーン・エンジェル隊のお嬢ちゃん達も元気そうじゃの」

白き月の大型艦船用のドッグに近付いたエルシオールに、突如軍港に詰めていたウォッカ大将から通信が入る。
彼は、タクトやアキオに労いの言葉をかけるが、ミルフィーユ達をお嬢ちゃん扱いするのはいつもの事であった。
既に七十歳を超えている彼からすれば、現在二十三歳のフォルテなど『お嬢ちゃん』でしかなかったからだ。

「私も、負傷はしましたが元気ですよ」

「詳細な情況は聞いているが、少々の不運であったかの？　戦死よりはマシじゃと考えるしかないの」

ウォッカ大将は、それでも生きているアキオの悪運の強さを改めて確認すると共に、半ば奇手の類ではあったが柔軟に作戦を立てて攻撃を行ったヴァル・ファスク軍のロウィルという男の手強さを感じていた。

最近では戦術的才能に優れた叩き上げや市民出身者の指揮官も増えていたが、同時に以前では考えれないレベルの若年者も分艦隊司令官などに登用されていて、そんなまだ経験不足である彼らには、そのロウィルとか言う男の相手は辛いであろうと感じている。

自分、ウォルコット大将、ジンロ大将、ウランフ戦時大将、タクト、レスター、アキオ、エリオス、他に数名。

大戦力を準備したとして何とか互角に戦えそうなのは、上に挙げたメンバーくらいであろうと考えていた。

「ところで、ジンロ大将やウォルコット大将は？」

「あの二人なら、この近くにある無人工場やプラント再稼動確認に向かっておるよ」

この宙域は、ちょうど辺境宙域の中心地近くにあり、つまりは支配領域を二分しているヴァル・ファスク側との境界線近くにあったのだが、ここには多数の無人艦艇を建造するドッグや、各種の兵器類を製造する工場、エネルギープラント、資源を調達する岩塊惑星や小惑星などが揃っている。

どうやら、ロウィルはここを辺境宙域支配のメイン拠点にしていたらしいのだが、トランスバール皇国軍は上手くこの宙域を奪う事に成功していた。
とはいえ、彼は撤退時にこれらの施設を破壊する事なく撤退していて、それはつまり、すぐに取り返すつもりであるという事なのであろう。

確かに、現在の情況を考えると一回の艦隊戦の勝敗で簡単にこの宙域の支配権はひっくり返る可能性があり、それを防ぐために艦隊の補給・修理拠点として使える白き月と、一秒でも早く生産施設を再稼動させるための両大将の派遣でもあった。

「シュトーレン中佐もウォルコットに会えんで辛かろうが、辛抱してくれんかの？」

「いえ、私は……」

普段はどんな厳つい高級将校と話をしても動揺一つ見せないフォルテであったが、さすがに妖怪とまで言われているウォッカ大将には敵わないらしい。
ウォルコット大将の話しを出された事もあって、顔を少し赤く染めながら小さな声で返事をしていた。

「他にもいくつか話があるんじゃが、後は陛下やシャトヤーン様に会ってからかの。では」

通信が切れると同時に、白き月の大型艦艇用ドッグに入港したエルシオールであったが、すぐにタクト達はヴァインとルシャーティーを連れて謁見の間へと移動する。

するとそこには、シャトヤーンとルフト宰相とシヴァ陛下に、あのノアも一緒に待ち構えていた。

「みなさん、ようこそいらっしゃいました」

「皆の者、この辺境宙域での活動大儀であった」

「あら、遅れないで来たのね。アキオとエリオスがいるからかしら？」

「事実だけど、それを敢えて指摘しないでも……」

優しく労いの言葉をかけるシャトヤーンに癒され、シヴァ陛下から直接にこれまでの作戦行動に対して評価の言葉を貰って士気も上がり、最後にノアからズバリ真実を指摘される。

いつも通りの展開に微妙に精神面にダメージを受けるタクトであったが、彼はノアが悪意を持ってその言葉を吐いているわけではない事を知っていた。

長年コールドスリープを行いながら黒き月を管理していたせいで、あまり人と接して来なかったノアはどこか世間の常識に欠ける部分があり、どうしても年相応の話し方が出来ないでいた。

だが、別の彼女が悪人であったり冷たい人間というわけでもない。

彼女は自分のインターフェイスが起こした事とはいえ、エオニアの乱で多数出たトランスバール市民への犠牲に心を痛めていたし、これ以上の犠牲を出さないためにこうして手を貸してくれているのだから。

「シャトヤーン様、こんな辺境の地までようこそ」

「タクト、私とシャトヤーンとえらく態度が違わないかしら？」

これがタクトなりのノアへの反撃かもしれなかったが、これも別に悪意の表れでもなく、彼女を自分達の仲間だと認めての言動でもあった。

それと、ノアの中では同じ月の管理者として自分とシャトヤーンは同等という考えがあるのだが、やはり数百年間をトランスバール皇国の民から尊敬を集めていた代々のシャトヤーンとノアでは、自然とその対応が違ってくるというものであった。

「これは、黒き月の管理者であるノア様もご機嫌うるわしく」

「アキオはアキオで、それはわざとやっているの？」

とは言いつつも、ノアはアキオが自分に恭しく頭を下げながら挨拶をする姿を見ながら笑っていた。

ここ二ヶ月ほど、ノアはトランスバール皇国軍の戦備を整える仕事をしていたので、その実務を軍務省戦備部第一部長として取り仕切っていたアキオと意外と接点が多かったからだ。

それと、普段は強がって大人びた口調をするノアではあったが、この六百年近くを一人で過ごして来たせいもあってか？

やはり年相応の少女としての面を持っていて、それはシャトヤーンが上手にフォローしていたのだが、アキオも仕事で白き月に上がった際にはノアにさり気なくフォローを入れるようになっていた。

今は天涯孤独の立場とはいえ、昔は母親という存在がいたアキオからすると、周りに気にかけてくれる人がいるのといないのとでは大きな違いが出る事を知っていたからだ。

『アキオ、新造戦艦の大型メインスラスターの材質強度が少し低いわよ』

『この程度なら問題ないさ。そのために交換を簡単に出来る構造にして、コストも以前の半分にしている。劣化したら、すぐに交換すれば良いのさ。変に強度を増してコスト計算すると倍になる。だが、それで使用限界時間が倍になるわけでもない。良くて1．5倍だろう？　なら、予備部品の在庫を倍持った方が良い』

『この装甲板は不要よ。デッドウェイトになる』

『これがあると、機関部部への致命的な一撃を一回だけ防げる。0．7％の機動性の低下なら、俺は機関部に居る人員の生存率を上げたい』

ノアは黒き月の管理者として、高性能で安定している兵器の設計には自信があった。

ところが、そんな自分の自信に、たまに鋭い別方向の視点で意見を添えてくるのがアキオという人物であった。

最近、無人使用を前提とした兵器ばかりを資源のみを集めて設計・製造していた自分に欠けている、コストや人員の安全に関する面で特に指摘を受ける事が多かったのだ。

『お優しいアキオさんね』

討論をしていたので、つい心にもない一言を言ってしまって後悔するノアであったが、アキオは別段気にしている様子もなかった。

『俺はそこまで善人じゃないよ。今この新造戦艦が戦闘で沈むとする。新しい船は、量産データと材料が揃えば早くて二週間で建造可能だ。ところが、機関部の人員は最低でも二年は教育しないと駄目だからな。長い目で見ると、兵器よりも人間の方が高いんだよ』

ノアからすれば、目から鱗が落ちるようなアキオの指摘ではあったし、彼は自分の暴言にフォローまで入れてくれる大人の面を見せている。

彼女は少しだけ悔しいと思いながらも、アキオの気遣いを悪くはないと思っていた。

それに、見た目は子供なのに知識は天才科学者や技術者顔負けの自分を、まるで腫れ物にでも触れるかのような態度で接する白き月や軍の技術者も多く、そんな自分と対等に接してくれるアキオの事をノアは徐々に気に入りつつあったのだ。

『省力化を進めれば良いじゃない』

『進めているよ。徐々にコンピューターや工作ロボットやプローブに対応可能な場所を増やす計画だ。最終的には、戦艦は五十人以下で運用可能にしたいね』

『完全に無人にはしないのね』

『それが不思議な事に、時に訓練された人間の能力は高性能な機械

を超える事があるんだよ。それに……』

『それに？』

『それでも、時に人間は愚かになる。完全に無人で戦争可能にすると、今度は戦争の痛みを忘れて戦争へのハードルを下げるからな。この辺の考えは、ノアには理解できなかったかな？』

『何となくわかるような気がする……』

それは、まだ自分がコールドスリープの最中にあり、インターフェイスがエオニアに手を貸していた頃の事だ。

戦後にエオニアという人物の言動に関するデータを得る事に成功したノアであったが、最初は国を憂いてクーデターを起こして辺境に追放された彼も、黒き月から大量に吐き出される無人艦隊を見て、元は自国の住民達への虐殺に心を動かさなくなっていた。

強大で、簡単に行使できる力に酔ったとでも言うべきか？

ノアは、どこか効率化と人間の心との折り合いに手間をかけるアキオに、エオニアとは違う優しさのような物を感じていたのだ。

『さてと、仕事の話はこれで終わりにするか』

そして打ち合わせを終えると、アキオは持参したお菓子を広げ、自らお茶を淹れてくれる。

後は一時間ほどを、取り止めのない世間話などで潰すのだ。

『ノア、今日は良い事があったんだ』

『良い事？』

『首都に和菓子の桐乃が復活してな。生き残った弟子が店を再建したんだよ。あそこの餅類と団子は絶品でな。まあ、主人ではなくて弟子だから味がこなれるのに、もう数年はかかると思うけど』

『あんたも好きよねぇ。それに、暇人』

『たまには息抜きをしないとな』

アキオはそう言っていたが、ノアは忙しい時間を縫ってアキオが自分のためにこういう時間を作ってくれている事を知っていた。

この週に一度一時間ほどの時間のために、アキオはその倍余計に仕事に時間を拘束されてしまう事もだ。

表だって感謝の言葉は言えなかったが、それでもノアは心の中で感謝はしていた。

『でも、シヴァに会いに行かなくても良いの？』

ノアは、シヴァ陛下がアキオを一人の女として好きな事実を知っていた。

シヴァ陛下とノアは同じ生活スペースに一緒にいるのですぐに気が付いたのだが、それを表立って言うほどノアは浅はかな性格はしていなかったのだが。

『それが、謁見の許可がなかなか出なくてな』

元家庭教師であった手前、というかまだその職を正式には解任されてはいないアキオは、白き月に上がる際には必ず謁見の申請を出

している。
だが、それはまだ幼いので政務の大半をルフト宰相やウォッカ大将に一任している身とはいえ、その支持率をなるべく上げるために様々な人達との謁見に追われる日々を送っていたシヴァ陛下の過密スケジュールによって却下されていた。

そのくらいしか今は幼い自分には出来ないからと頑張っているらしいのだが、そうなると当然いくらアキオでも大した用事もないのにそう簡単に彼女に謁見が出来るはずもなく、それは心を鬼したルフト宰相によって弾かれていた。

『私と会っている頻度の方が多いものね』

ノアとは仕事の打ち合わせがあったので、その後にお茶会をしていたし、シャトヤーンとは違ってノアはトランスバール皇国の市民達にほとんどその存在を知られてはいない。

すぐに会えてしまうノアと顔を合わせる機会が増えるのは、これは当然の結末とも言えた。

『まあ、シヴァも、あんたに会えたからって何かあるわけでもないけどね』

ノアは、アキオに恋人が居る事を当然知っている。
でなければ、あのネフューリアとの決戦の時に七番目の紋章機の運用をアキオとランファに任せたりはしなかった。
今もアキオは、その日の仕事が終わればランファの居る官舎に帰っているので、ノアからすればシヴァ陛下のしている事は無駄な行為にも見えてしまうのだ。

『まあ、その辺はね……』

アキオは言葉を濁していたが、それはすなわち、彼女はそれでも出来るだけアキオと一緒に居たいという気持ちの表れであり、ノアはそれをシャトヤーンから密かに聞いている。

理解できるようで、出来ないようで、やはりまだ自分は子供の部分があるのかもしれないと感じるノアでもあったのだ。

それは、絶対に表には出さない気持ちであったが。

『（私も、こうしてこいつと話していると楽しくはあるのよね……。って！　私は別にこいつなんて！　タクトとエリオスと同じで、使い勝手が良いからなのよ！）』

頭に思い浮かんだ予想外の考えに、ノアは慌てて頭を振ってそれを否定する。

『どうかしたのか？』

『べっ、別に！　それよりも！』

アキオからの余計な詮索を避けようと、彼女は白き月の一部設備に関して文句を言い始めていた。

謁見の間や一部施設などの、神殿や教会風の合理性とは遠い造りに文句を言い始めたのだ。

『こんな無駄なスペースよりも、少しでも生産設備などを組み込むべきよ』

『ノアの言う事にも、一理あるんだけどな……』

確かに、これらの施設は生産性や合理性とはかけ離れた物だ。
だが、ここ二百年ほど白き月と代々の管理者であるシャトヤーンは、兵器製造などとは無縁で一種宗教的権威の象徴としてトランスバール市民達から崇拝を受けていた。

白き月も、宗教施設的な扱いで絶大的な崇拝の対象になっていたのだ。

その権威は、表立っては言えなかったが最近ではトランスバール皇王や貴族達などよりも圧倒的に上で、そのために先代の皇王ジェラールは武力を持ってして白き月を支配下に置き、シャトヤーンを強引に后にしている。

人気のないジェラールが無理に白き月の権威を組み込もうとしたのだが、それは更に市民達の反発を招き、更にはエオニアなどの怒りを買い、後のクーデター未遂事件と、その事件で追放したはずの彼によって手痛い逆襲を受ける事となる。

言わば自業自得でジェラールは死んだわけだが、その彼とシャトヤーンの娘であるシヴァ陛下に圧倒的な市民達からの支持と人気が集まったのだから、これは皮肉としか言いようがないであろう。

『俺も、ある程度は効率化を進めるべきだと上申はしてみるよ。でも、一部は残した方が良い。特に謁見の間は、色々と効果があるからな』

黒き月の管理者として、様々な艦艇や兵器類の開発・改良・量産計画を立てるノアであったが、それを担当者に発表する際にたまに不快な気分にさせられる事が多かった。

見た目が子供なノアを見て、計画案の内容すら見ないで否定的な意見を述べる軍人や技術者が多かったからだ。

ノアとしては腹立たしい気分だったのだが、それもアキオの献策によって解決している。

彼らを謁見の間に呼び出して、後ろにシャトヤーンを置いて説明をする。

ただこれだけで、彼らは同じ計画なのに諸手を挙げて賛成していたからだ。

『まあ、要するに一見非効率な権威も使い様というわけだな。無駄に被る施設は、シャトヤーン様に掛け合って撤去する』

『当然よ』

とは言いつつも、ノアは出来る限り自分の意見を取り入れてくれるアキオに感謝していた。

実際に白き月は、アキオからの上申で一部シヴァ陛下の御所もあるという理由で荘厳な施設も残されたが、他の部分には艦船用のドッグや兵器工場、エネルギープラントなどが増設され、かなり効率の良い軍事拠点へと変貌を遂げている。

ノアからすれば、アキオと一緒に仕事をしていると楽しいし、成果も上がるので気分も良かった。

恥ずかしくて、ついぞんざいな口を利く事も多かったのだが、それを気にもしないでくれる大人の面も持っていて、『これからも、一緒に仕事をしてくれないかな?』などと思う事も多かったのだ。

『最低でも、軍事拠点として相応しいように整備する』

アキオの言う通りに、実際に白き月は移動軍事拠点として最低限の整備が成され、それは辺境宙域に到着後も続けられている。
その能力は、生産・補給・防衛なども面で現地に駐在するトランスバール皇国軍の役に立っていたのだが、それはノアの提言とアキオがそれを認めて実行したという理由があったからなのだ。

とこのように、定期的に会っていた二人であったが、思わぬ所から苦情が出る事になる。
それは、誰であろうシヴァ陛下からであった。

『余でも滅多に会えないのに、なぜノアとばかり会うのだ！』

『仕事の打ち合わせですので』

『美味しいお菓子を食べて、お茶を飲んで、楽しそうに話をするのが仕事なのか！』

シヴァ陛下は、自分よりもノアと会う回数が増えたアキオを突然呼び出し、珍しく激怒する事となる。

『仕事だって言ってるじゃない。というか、なぜ私が呼び出されたのかしら？』

『お前も、同罪だからだ！』

『知らないわよ……』

シヴァ陛下はルフト宰相を狼狽させるほど激怒していたが、アキオは特に動揺した様子も無かったし、ノアは軽く流していて、シャ

トヤーンは自分の娘のヤキモチに笑っていた。

『（やれやれ、私とした事がとんだミスを。アキオの謁見申請は断らないようにするか……）』

そしてルフト宰相は、密かにこれからのシヴァ陛下の謁見スケジュールの変更を決めたのであった。

「ノアは、あの二人に会いたいんだろう？」

「そうよ。何しろ、タクトからの報告だけでは色々と情報不足でね」

「白き月の記録には無かったのか？」

「シャトヤーンと、洗いざらい探したつもりなんだけどね。決定的な物は、見付からなかったのよ」

ノアはタクトやアキオと話を続けていたが、その間になぜかシヴァ陛下は一人アキオの隣に移動して手を繋ぎ、満足そうにしていた。

「あの陛下……」

「そなたは、余の家臣なのだ。心して余を護衛せよ」

「手を繋いでですか？」

「そのくらい出来て当然だ」

「はあ……」

アキオは顔を赤らめながら無茶を言うシヴァ陛下に困惑し、それをランファは苦笑しながら、ミントとちとせは羨ましそうに見つめる。

ノアは、『しょうがないわね』というような表情をしつつも、早く話を進めるようにタクトを促していた。

「ええと、ＥＤＥＮより来た二人を紹介します」

「ルシャーティーと申します」

「弟のヴァインです」

「そこの色呆け陛下はどうでも良いとして、証拠はあるのかしら？あなた達がＥＤＥＮの民である証拠が」

「誰が色呆けか！」

ノアの発言に憤慨するシヴァ陛下であったが、彼女はそれを無視して自己紹介をした二人にいきなり本命の質問を叩き付けていた。

「ノア、この二人は実際にヴァル・ファスク艦隊から追われていた身で……」

「あんたには聞いてない。私は、二人に聞いているの」

タクト自身、ただこの二人がヴァル・ファスク艦隊から追われていたという事実だけで、二人をＥＤＥＮから逃げて来た哀れな亡命

者だとは１００％思っていない。
あの規模の艦隊に追われていたにしては、二人の乗って来た宇宙船はほぼ無傷であったので、そう見せかける芝居であるかもしれなかったからだ。
実際にアキオは、それにも疑いを持っている。
とはいえ、タクトまでが二人を疑っている態度で接したら、得られる情報も得られなくなってしまうであろう。
だからこそ、なるべく親切に接していた面もあったのに、それをノアは完全に無視してしまっていた。
「ＥＤＥＮより生み出された黒き月の管理者として、私はそれを確認しないといけないのよ。さあ、どうなの？」
「ヴァイン」
「ええ、姉さん。みなさん、これが私達の身の証を立てる証拠になるかどうかはわかりませんが……」
ノアから強い口調で質問をぶつけられた二人は、お互いに何かを決意したかのような視線を交わす。
更に、ルシャーティーが何かの詩のような物を、目を瞑り集中して一字一句間違えないように詠い始める。
「楽園より生まれし、白と黒の愛し子よ。無限と有限の間にたゆたい、時を超え時を待つ者。我が意に答えよ。我、汝らの母ＥＤＥＮ」
ルシャーティーがその詩をような物を詠い終えた瞬間、その場にいた全員の視界に宇宙空間の映像が広がる。

「宇宙ですよね？　どうして？」

ミルフィーユは、突然視界に広がった映像に驚いていた。

「これには覚えがあります。以前にシャトヤーン様とノアさんが見せてくれた白き月と黒き月の記録」

ミントは、これと似た映像に良く似た物を以前に二人の月の管理者達から見せて貰った事を思い出す。

「あの時とは、ちょっと違うようだね」

「確かに、あの時はあんな惑星は無かったわ」

「それに、あの星の周りに見えるのは、白き月では？」

「黒き月も一緒です」

フォルテ、ランファ、ちとせ、ミントは続けて以前に見た映像との違いを語り始める。

「ＥＤＥＮ」

更に、あれだけ証拠を見せろと迫っていたノア自身が、ただ一言だけ呟いてその映像を喰い入るように見つめていた。

どうやら、あの二人は本当にＥＤＥＮから来た人間で、しかも初めて来たはずの白き月のデータバンクに入っている、二人の管理者達も知りえない情報を引き出す事にも成功している。

アキオは、この二人が思った以上に重要な情報を知っている事を知る。

「あの星は、私の生まれたＥＤＥＮ……。六百年前の、私が最後に見た、私が生まれた所……」

「ノアさん？」

「あんた、もしかして泣いているの？」

ミルフィーユとランファは、その映像を見ながら涙を流すノアを心配していたが、それもそうであろう。

いくらその期間の大半をコールドスリープで過ごしていたとはいえ、六百年間も見ていなかった自分の故郷の星の映像を見てしまったのだから。

どんな人間でも、望郷の念が出て来るというものであった。

「これは、白き月の太古の記録。このような情報が、まだ白き月に残っていたなんて……」

シャトヤーンも自分すら知りえなかった情報に驚いていたが、アキオもタクトもそれよりも、いきなりこの記録を引き出したヴァインとルシャティーの正体の方が気になってしまっていたのだ。

「私やシャトヤーンですら知りえない情報を、自由に引き出せるなんて……。あんた、何者なの？」

ようやく元の状態に戻ったノアも、タクトとアキオが先に気が付いた事実に辿り着いていて、さすがにその正体に少し危機感を感じ

始めていた。

「はい、私はシャトヤーンさんやノアさんと同様、管理者と呼ばれています？」

「それはつまり、もう一つ月が存在するのか？」

もしそんな物があって、その管理者がここに逃げて来ている状態で、残されたそれがヴァル・ファスク側に利用されでもしたら？

軍人として感じた危機感を我慢できなくなったアキオは、突然ルシャーティーにその質問をぶつけていた。

「いえ、私は月ではなくてライブラリーの管理者です」

「ええ、そうね……。確かに、それしか考えられないわね」

「ノアさん、ライブラリーって何ですか？」

「ライブラリーとは、ＥＤＥＮの全ての情報とテクノロジーの集積地よ。そこに無い物は何一つ無い。謂わば、銀河全ての英知が終結する場所。白き月と黒き月のデータベースはそこから構築されているから、産みの親と言っても過言ではないし……」

ミルフィーユの質問に答えるノアであったが、その表情はあまり明るい物ではなかった。

「情報量から見ても、向こうの方が上だと？」

「タクトにしては頭が回るわね」

ノアはタクトに答えつつ、その視線を深刻そうな表情で考え込むアキオとエリオスの兄弟に向ける。

トランスバール皇国でも、ＥＤＥＮでも、ヴァル・ファスクの国家でも、とにかくどこのどの時代の国家でも、その命運を握るのが情報収集能力であった。

特にトランスバール皇国とヴァル・ファスクは、戦争をしているのだ。

いくら白き月と黒き月の管理者の協力を受けているとはいえ、相手はＥＤＥＮを制圧して二つの月の情報の源であるライブラリーを抑えていて、しかもその情報は確実に引き出されているであろう。

アキオはノアと協力して、懸命に二つの月の技術を応用した戦力を整えてきた。

だが、それが全て無駄になってしまう可能性があり、それにエリオスも気が付いてというか、これに気が付けない人間は少なくとも士官以上になるべきではないであろう。

確実に、適性と能力が無い証拠でもあるのだから。

情報の重要性を理解できないトップなど、存在するだけで害悪なのは今までの歴史が証明している事実でもあった。

「ライブラリーの管理者だからこそ、さっきみたいに白き月のデータベースに干渉できたのね」

「その通りです。みなさん、ご理解いただけましたでしょうか？」

淡々と結論を語るヴァインであったが、その冷静な表情を見てアキオは、その背筋にまるで素肌に刃物を押し付けられたかのような

冷たさを感じていた。

この一見哀れなＥＤＥＮからの亡命者達は、ノアやシャトヤーンをも上回る情報閲覧能力を持ち、もしかするとその知識を用いてこの白き月で何かを企む可能性があったのだから。

「とはいえ、それはもう昔の事です。今では……」

ルシャーティーは、既にライブラリーはヴァル・ファスク軍の手に落ちている事実を公表する。

その話に、タクトなどはこの二人にもうそこまでの力は無いものと安堵してようであったが、アキオは余計に二人に対する疑念を強くしていた。

この二人が、もし占領されたＥＤＥＮでの待遇改善を餌に、こちらに情報を流したり、何か謀略を行わないという保証は何も無かったからだ。

特に弟のヴァインの方は、一旦その危険性に気が付かせてから、それを敢えて否定してタクト達に安心感を与えている。

スパイなどが周囲から疑われないように使う、話術の常套手段でもあった。

この二人の監視は続けないととアキオが決意を新たにした直後に、ルシャーティは更に話を続ける。

ＥＤＥＮはクロノ・クェイクによってズタズタにされた宇宙がようやく落ち着きを見せた頃、突如飛来したヴァル・ファスク艦隊によって一夜にして占領されてしまったらしい。

だが、この話をおかしいと感じる人間も複数存在していた。

「ちょっと待って！　いくらクロノ・クェイクで衰退していたとはいえ、今まで互角に戦ったいた相手に、そこまで簡単に負けるものなのかしら？」

ノアは、自分の故郷である星の脆さを信じられないでいた。

「ノアさんの仰る通りですわ。それに……」

「そうだね。ヴァル・ファスクも、当然クロノ・クェイクの影響を受けて衰退しているはず」

それにミントやフォルテが考えるように、クロノ・クェイクの影響は当然ヴァル・ファスク側も受けていると考えるのは常識でもあった。

となれば、余計にＥＤＥＮの一方的な敗北は信じられない事実でもあった。

というか、衰退後に惑星間国家に遠征を行う国力が残っている事からしておかしかったのだから。

「それについては、考え方を変えてみてはいかがでしょうか？」

「考え方を変える？」

ヴァインの回りくどい話し方にちとせは困惑した表情を隠せないでいたが、アキオは彼の考えている事に気が付いていた。

「つまり、自作自演のマッチポンプであると？」

「その言い方には、語弊があるかもしれませんね」

「それもそうか。ヴァル・ファスクは、別にクロノ・クェイクから受けた被害を悲しく世間に公表したわけでもないからな」

「ちょっと、ヴァインとアキオも。ちゃんと詳しく話しなさいよ」

「はい。つまりですね……」

今までの見解では、自然災害であると認識されていたクロノ・クェイクが、実はヴァル・ファスクによって人為的に起こされた可能性が高いという結論をヴァインは語り始める。

「アキオさん、それって……」

「自分達が原因なら、事前に被害を受けないように準備が可能だからな。数百年を待ってから、保持していた戦力で完全に衰えた相手を蹂躙する。こうなると、戦いすら碌に無かったんだろうな」

一個一個の惑星国家に分断され、宇宙に出る手段すら失っている惑星国家も多く、そんな彼らが大宇宙艦隊を擁するヴァル・ファスクに勝てるはずもない。

きっと赤子の手を捻るようにして、ヴァル・ファスクはＥＤＥＮを制圧したのであろう。

「数百年間もの時間をかけた戦略なのですね？」

「ええ、何しろヴァル・ファスクは恐ろしく長命ですから」

ちとせの疑問に、ヴァインは冷静に答える。

人間であれば、数百年の歳月は世代が幾度も交代してその間に立てた戦略を次世代以降の人間が確実に実行する保障すらない。

だが、数百年後も普通に生きているヴァル・ファスクからすれば、少し待っていれば良い程度の感覚なのであろう。

ネフューリアを撃退した後に、彼女の座上していたオ・ガウブの破片や、停止した後に鹵獲された無人艦隊などを調べた白き月の技術者や、トランスバール皇国が臨時で編成した軍・民混合の調査団は、断片的ではあるがヴァル・ファスクという種族についての知識を得ている。

まずは、あれだけの規模の艦隊を保持していながら、それを運用していたのはネフューリア一人だけである事。

一人でどうやってあれだけの艦隊を動かすのかが不思議ではあったのだが、調査団はそれを可能にするＶチップと呼ばれる機械を発見している。

この装置は、機械と精神をリンクさせて同時に複数を操るという人間にはまず使用不可能な代物であったので、当然鹵獲した無人艦からは外されていて、トランスバール軍は改良を重ねたＡＩと、アキオがエオニアとの最終決戦で使った複数の人員で運用するテーブル型の操作装置を改良して使っていた。

「ヴァル・ファスクは恐ろしく長命で、Ｖチップなる装置を用いて多数の艦隊をまるで手足のように扱う。その戦闘能力は驚異的ではあるな」

アキオは軍務省戦備部第一部長であった関係上、トランスバール皇国内でも数少ないヴァル・ファスクについての知識をかなり有している人間であった。

「だが……」

「だが、何でしょうか？」

「だからと言って、絶望までする必要もない」

アキオは同時に、ヴァル・ファスクという人種の弱点も見抜いていた。

まずは、いくらそれほどの能力と寿命を持っているとはいえ、これはあのロウィルも同じようだが、彼らは自分一人で何でもこなしてしまおうとする癖があった。

完全に利己的で個人主義というか、思えばネフューリアも前に友人云々という質問をされた時に、『そんな、弱者同士の馴れ合いに興味はない』という趣旨の発言をしていて、もしトランスバール皇国を攻め落せたとしても、それは自分だけの功績であると思いたかったのであろう。

唯一の部下であったレゾムも人間という下等種族だと言う理由で使い捨てにしたし、他のヴァル・ファスクと連絡を取り合って協力したという痕跡も見られなかった。

つまり、人間ほど他者と共同しない種族なのであろう。

一人で何百隻もの艦隊を自由に駆使できるので、今まで必要なかったのかもしれないが。

「少ない人数で戦っている理由の一つに、長命な分、人間ほどの繁殖力がないという事情もあるのでは？」

「ええ、ヴァル・ファスクが人間を下等種族扱いする理由の一つです」

ヴァインはアキオの問いに、『その通りです』と答えていた。

ヴァル・ファスクは長命で驚異的な能力を持つが、やはり生物学上そういう種族は極端に繁殖能力が低い。

その人口は、人類とは比べ物にならないほど少ないのであろう。

「となると、話は簡単とも言える」

「あの、それはつまり？」

「可哀想な話だが、戦力を操るヴァル・ファスクだけを討てば良いんだ」

話はそう簡単ではなかったが、アキオはネフューリアが死んだ直後に操作していた無人艦隊がすぐにその動きを停止した事実から、ある部隊の創設をノアと図って密かに準備していた。

とはいえ、それは既存の技術と、足りない部分は黒き月のコアからノアが引っ張って来た技術を使用しただけの代物であった。

鹵獲したVチップの解析から、そこに届くヴァル・ファスクの精神派の強さと飛んでくる方位を解析する装置。

これは、紋章機のH・A・L・Oシステムの周辺技術の応用であったが、それと小型化した量産型クロノ・ブレイク・キャノンと高速小型艦艇や大型戦闘爆撃機と組み合わせ、相手の指揮官を一撃で

抹殺する戦法を行う部隊であった。

事前に準備はしていたのだが、前に無人機の特攻で負傷したアキオがその有効性を改めて確認できたので、準備は着々と進んでいるらしい。

とはいえ、今はこの話をするつもりはない。

アキオはやはり、ヴァインとルシャーティーをどこか怪しいと感じている。

敵かもしれない連中に敢えてこちらの手の内を明かす必要はないと思っていたからだ。

「それは、敵の旗艦を早期に想定した後に、その艦に攻撃を集中するという事でしょうか？」

「まあ、そんなところだな。実際には、もっと細かい戦術のシミュレートが必要だが」

ちとせからの質問に、アキオはその策はあくまでも新しい戦術として実行する旨の話をする。

わざわざ怪しい人間に、新装備の情報を流すほど愚かではなかったからだ。

アキオはヴァインの方を見やるが、彼は表面上は特に顔色などに変化はなかった。

「数百隻もの艦隊を操れるヴァル・ファスクは、人間の軍人十万人に相当するかもしれない。だが、向こうが人間を十万人殺すには、艦隊を全滅させる必要がある。こちらは、一人殺せば十万人を全滅させたに等しい。一方的に、こちらが不利というわけでもない。ヴァル・ファスクは、別に生身でビームを弾いたりはしないんだろう

？」

「ええ、身体構造的には普通の人間と同じですから」

その後も、ルシャーティーとヴァインからの情報提供は続く。

ノアからの質問により、ヴァル・ファスクの指導者が六百年以上前からゲルンという人物である事や、長老的な地位にある彼が絶対的な王権を駆使してヴァル・ファスクのトップに君臨している事実などであった。

「げっ、そいつ、いくつなのよ？」

「それだけの期間、ずっと権力を維持しながら戦争を行ってきた人物ですか」

ランファは、『よくそんな長期間、政権を維持して飽きないわね』などと思っていたし、ミントからすれば、実家のブラマンシュ財閥が永遠に続く事を願って働いている父を見ていたので、そのゲルンという人物は驚異的に見えていた。

「好戦的なのは感心できないが、安定した政権の長期運営という点では見習うべき点も多いのか？」

「とはいえ、陛下が参考に出来る事も少ないでしょうね」

数百年をあっという間であると言えてしまうヴァル・ファスクと人間との、時間に関する考え方には大きな隔たりがある。

もしかすると、人間の王が数十年間の政権を維持する事の方が大変な労力なのかもしれないとアキオは考えていた。

「数百年は長いですが、同じ面子で戦争と戦争準備以外に大した変化もない生活ですからね。人間ならば世代交代による意識の変化とかもあるでしょうが、彼らはずっと同じような日々を送り続けている。意外と大した労力でもないのかも」

「なるほどな……」

シヴァ陛下は、アキオの手を握り続けながら彼からの話を興味深そうに聞いていた。

「それに、彼らにも誤算はありました」

「この、白き月と黒き月よね？　まあ、黒き月は誰かさん達が壊してしまったけどね」

ルシャーティーは、自分達がＥＤＥＮの中心惑星であるジュノーに侵攻する前に、彼らが白き月と黒き月を辺境に向けて送り出し、更にはその存在を利用して広大な版図を築いたトランスバール皇国という新たな敵に警戒していると語り始める。

「彼らにとって、あなた達の存在は想定外だったようです。なので、ライブラリーにはすぐにあなた達に関する情報が収められました」

「えっ？　ライブラリーって、そんなに色々な場所の情報をすぐに察知できるんですか？」

ミルフィーユの質問はもっともであったが、まさかライブラリーにそのような機能が付いているはずもない。

この情報は、本来テクノロジーの解析を得意とするライブラリーにトランスバール皇国側の情報を解析させるためにヴァル・ファス

ク側が入れたのであろう。

「元々彼らは、ＥＤＥＮその物よりもライブラリーの方をそこ欲していました。手に入れた以上は、有効に活用するつもりなのでしょう」

「ふん、あのネフューリアといい、ヴァル・ファスクってのは人様の物を奪って使うのが好きよね。長生きし過ぎて性根が腐っているのかも」

ヴァインの言う通りに、文明が衰退して資源を奪うくらいしか価値の無いジュノー以下の惑星よりも、ライブラリーの方がよほどヴァル・ファスクの版図拡大には有効な道具となるはずで、ノアは泥棒行為をした彼らを口汚く罵り始める。

「……」

「どうかしたのか？　ヴァイン」

「いえ……」

「戦争の基本は、相手からの収奪だからな。ある意味、基本に忠実なのか」

ノアのヴァル・ファスク批判を聞いたヴァインはなぜかそのまま黙り込んでしまい、それをタクトによって指摘されてしまう。

アキオは上の発言で誤魔化しつつ、彼のその態度を見てますます怪しさを感じていた。

「すいません。ですが、これでますます確信しました。あなた達こ

そが、ＥＤＥＮをヴァル・ファスクから救ってくれるのだと」

「物心付いた時からライブラリーによって拘束され、外の世界を見る事も無かった私にとって、それは最後の希望に見えたのです」

「では、ルシャーティーさんは、小さい頃からずっとライブラリーに？」

「はい、管理者の一族である私しかライブラリーを扱う事が出来ませんから」

「僕は人質として、ヴァル・ファスクに囚われていたのです」

ヴァインとルシャーティーの二人は、自分達の今までの境遇と、どうして危険な逃走劇を行ったのかを続けて話していた。

それと、タクト達にＥＤＥＮを開放して欲しいという要請も合わせてであり、更にはこれ以上ヴァル・ファスクを放置していると、彼らの野心は全銀河にも向けられているので、これは早期に阻止しなければならないという意見も合わせてであった。

「確かに、ＥＤＥＮだけ満足する連中でもないか」

「調査壊滅は、その第一歩というわけだったんだね」

ランファもフォルテも、もはやヴァル・ファスクとの戦いは避け得ぬ物と理解していた。

そして一旦始まった戦争は、講和を結ぶかどちらかが降伏するまで終わらない。

しかも、ヴァル・ファスク側は人間を下等生物扱いまでしているのだ。

もはや、彼らを屈服させる以外にトランスバール皇国が生き残る術は存在しなかった。

「どの道、避けられる戦いでもない。私は急いで準備を進める事にするわ」

「頼むぞ、ノア。それと、ルシャーティーとヴァインであったな。情報提供に感謝すると同時に、ＥＤＥＮの開放作戦については、なるべく早くに開始する事にしよう」

この場にシヴァ陛下が居た事で、即座にトランスバール皇国軍によるＥＤＥＮ解放作戦は決定はしていた。

だが、相手の戦力を考えるとまだ本国からの援軍は必要であろうし、他にもやらなければいけない事も多い。

「陛下、そんな突然に軍事侵攻作戦を決められるのは……」

「ルフト宰相、話は聞いていなかったのか？　どちらにせよ、討って出ないと我がトランスバール皇国は再び、単独惑星国家に転落するのだぞ」

「それはどういう……。そういえばっ！」

今までは静かに話を聞いていたルフト宰相であったが、さすがに大規模軍事侵攻作戦を勝手に決めてしまったシヴァ陛下に苦言を呈していた。

だが、この場合においては他に選択肢などない。

いや、それを選ばない王など統治者たる資格など無いと断言でき

るであろう。

「ヴァル・ファスクは、クロノ・クェイクを自由に起こせる……」

その事実を持ってしても、トランスバール皇国は不利な立場に置かれていると言っても過言ではなかった。

もしトランスバール皇国が手強いと感じれば、もしかするとまたクロノ・クェイクを発生させて、衰退した数百年後に侵攻を行うという選択肢も取れたからだ。

「となると、同時にクロノ・クェイクに対する対抗策を考える必要があるわね。それには、ライブラリーの情報を閲覧する必要があるけど……」

このノアの意見により、トランスバール皇国軍はなるべく早期にＥＤＥＮの中心惑星ジュノーを開放する必要に迫られ、その準備のために邁進する事になる。

ミルフィーユ達やシャトヤーンは、自分達の行動指針の元になったルシャーティーとヴァインに感謝の言葉を述べていたが、やはりアキオの脳裏からは二人に対する疑惑の念が消えず、その監視を続ける事を決意していた。

それと、また任務内容の変化があると確信もしていたのであった。

「とまあ、そんは話があったんですよ」

ＥＤＥＮからの亡命者達とタクト達に、シヴァ陛下、ルフト宰相、シャトヤーン、ノアとの会見が終わってから数十分後、アキオは白き月に設置されている士官専用のラウンジで酒を飲みながら、数十名の将官クラスの軍人達と話をしていた。

白き月とシヴァ陛下の到着と同時に、この宙域を守るために終結したトランスバール皇国軍の艦隊司令官などが大半であったが、彼らは先の会見には呼ばれていない。

若くて儚そうな美少女であるルシャーティーが萎縮しないようにとの、シャトヤーンやルフト宰相からの説明ではあったのだが、その代わりにアキオがこうして他の軍人達に説明する羽目になっているのだから、不敬にも『二人も良い根性しているよな』と感じてしまうアキオであった。

とはいえ、今日のこのラウンジにおけるアキオの飲み代はルフト宰相が出してくれるそうなので、その点においては感謝しているアキオではあった。

「それで、俺も呼ばれなかったのか……」

「その眼帯が怖いと思われたのかもな」

「そんな単純な理由でか？」

アキオの隣の席に座るレスターが、ブランデーのロックを呷りながら話しかけてくる。

戦時中将として、ウランフ戦時大将と共に戦闘を繰り返していたレスターは、久しぶりに酒を楽しんでいるようであった。

普段は仕事人間である彼であったが、やはり大人の男として酒は大好きであり、アキオも以前に奢った時に味にも五月蠅い事を確認している。

今日も、アキオがボトルキープした高級ブランデーを遠慮なく飲んでいた。

「お前達が謁見をしている間に、昇進辞令の交付とか、勲章の授与とかがあってな」

ウランフ戦時大将は、その功績が認められて戦時の字が取れて正式に大将に昇進したらしい。

他にも、レスターも正式に中将に、他の将官達も昇進や勲章の授与などが行われている。

「昇進の大安売りですね」

どこかのドラマや漫画では、『戦死昇進の前売り』と呼ばれる行為であり、つまりこれからそれくらい厳しい戦いが始まるという事なのであろう。

「今までの皇国は、内戦以外には戦功による昇進なんて無かったからな。それが今では、戦争ばかり起こっている」

アキオは、故シードル公爵のせいでそんな任地ばかりだったので、その昇進スペースは異常に早かった。

だが、他の士官達はそんな人間も少なく、しかも以前は貴族出身者が箔付けにスピード昇進するのでその枠が奪われ、定時昇進以外に昇進などほとんど存在しなかった。

更には、市民出身というだけで将官になれる人間はほとんど存在

していなかったのだ。

それが、エオニアの乱における貴族出身将官の大量粛清と戦死に、先のネフューリアとの戦闘でも多くの将官が戦死している。

当然、大幅な軍拡も行われているトランスバール皇国軍なので人数が足りるはずもなく、それは優秀な市民出身者をスピード昇進させる事で解決していた。

「しかし、将官の平均年齢が大幅に下がりましたね」

「まあな。分艦隊司令クラスの准将には、二十代後半から三十代前半の連中も多い」

「若いですね」

「それを、二十三歳のお前が言うのも何だけどな」

とはいえ、アキオ、タクト、レスター、エリオスなどはあくまでも例外であり、普通は三十代後半から五十代で少将か中将。

六十代で大将になれるくらいなのが、今のトランスバール皇国軍の常識でもあった。

「ここに、平均年齢を大幅に上げているジジイもおるがな」

アキオと同じテーブルの一番上席には、皇国軍の生き字引、第二の宮廷に生きる妖怪と称されるウォッカ上級大将が座っていた。

「ご年配の経験は組織に行きますからね。まあ、多過ぎると世間では老害とも言われますが。遅れましたが、ご昇進おめでとうございます」

「昇進は、給料と退役後の年金の額が上がるから良しとしよう。しかし、上級大将とは変な階級を新設したものじゃの」

将官の大幅昇進における弊害で、増えた大将クラスの人材に大御所から命令を出せる存在として、ルフト宰相は過去の歴史書の記載から上級大将という役職を発見し、それをウォッカ大将とウォルコット大将とタクトに与えていた。

ちなみにタクトにも与えられたのは、今回の辺境宙域における戦功と、これからの作戦において、同じく戦時が取れて大将に昇進する予定のアキオを無理なく使えるようにとの、シヴァ陛下からの命令でもあったのだ。

アキオはこの昇進人事を聞いた時に、『いくら何でも早過ぎじゃないか？』と思ってしまっていたが。

「ならば、元帥でも良かったでは？」

「若造よ。元帥は、称号で階級ではないぞ」

ウォッカ大将は、不意に話しに加わってきた若い准将に元帥システムの説明を始める。

そもそも元帥とは、階級ではなくて大将で功績著しい者に対して与えられる称号であった。

とはいえ、エオニアの乱以前に功績著しい者など存在しなかったので、これが与えられるのは一部皇族や大貴族で大将になった者だけである。

あの故シードル公爵すら持っていなかった元帥号であったが、最近ではあの故ジェラール陛下の弟であるザックス元帥が数少ない保持者でもあった。

ただ彼は、昔から故ジェラール陛下の有力な支持者であった事と、以前にエオニアが起こしたクーデター未遂事件で故ジータマイヤ大将と共にその排除に動いた功績で、半ば取り引きのように与えられたというのが真相であったようだ。

実は、故ジータマイヤ大将も退役前に貰える予定であったのだが、それは彼の戦死とその後の政治状況の変化で完全に立ち消えとなっている。

「あの究極の猪武者ザックスは、あくまでも階級は大将じゃからの」

「閣下は、貰えないのですか？」

「退役前に貰えるらしいがの。まあ、固辞するほどの人格者でもないし、これも年金の額が増えるからの。喜んで貰うとするかの」

「つまり、現役世代では貰えないのですね」

「現役の軍人が元帥号を振りかざすと、あのザックスのように迷惑にしかならないからの。老人専用の名誉称号と考えた方が早いの。なので、ワシは早く退役して、リゾート惑星に購入したコテージで釣りをしながら音楽を聴いてノンビリと過ごしたいのじゃ。いつもまでもこんな死にかけのジジイに頼らずに、若いお前らで頑張ってくれよ」

「はあ……」

ウォッカ大将の欲の無さに、その若い准将は毒気を抜かれてしまっていた。
一応下級ながら貴族の生まれで一時は中央にも所属していた彼は、いくつになっても権力に酔ってそれを手放さない老害の典型例のような軍人や政治家を多数見ていたからだ。

「それよりも、そのＥＤＥＮの中心惑星かの。それを攻略するためにも、下準備が必要かの」

その惑星ジュノーは、文字通りにＥＤＥＮの中心地にあるらしい。
となると、その前にかなりのヴァル・ファスク側の宙域を攻略しなければいけないのだが、クロノ・クェイクの脅威を考えるとそこまで時間をかけるわけにもいかなかった。

だが、ただ中心惑星をある程度の精鋭で占領しても、その兵站が維持できなければ意味が無い。
いくら一時的に占領に成功しても、敵中に孤立して全滅してしまえば意味が無い。
となれば、か細い補給線が危険に曝される危機をどうすれば良いのか？

それは、外苑から間断なき戦力の投入を行い、それを迎撃に来るヴァル・ファスク側の戦力を各個撃破して、中心惑星へ目を向けさせない必要があった。

「ほぼ、これからの行動指針と作戦は決まっておるのじゃが」

中心惑星への強襲と占領は、間違いなくエルシオールとそれを護衛する足の速い小規模護衛艦隊と、一部新兵器などを装備した部隊

が担当する事になる予定であったが、その出発準備が終わるまでにローテーションで複数の艦隊をヴァル・ファスク側の宙域へと侵入させ、出て来た戦力を次々と撃破する必要があるとウォッカ上級大将は語り始める。

「駒は揃っておる。ジンロ、ウランフ、クレッシェンドの大将三名。これの下に、他の将官を分配して分ける事にする」

「今回は、俺も現場で汗をかくぞ」

「当たり前じゃ。ジンロ、お前はまだ若いんじゃからな」

三つの艦隊戦力で、攻撃、万が一の際の応援、休養をローテーション方式で交代して行い、これによって相手側の消耗を促進する予定であると、ウォッカ上級大将は説明をしていた。

「マイヤーズ大将も、いよいよ軍幹部の仲間入りですね」

「いつまでも、弟に階級で負けている兄貴だけどな」

とは言いつつも、別に彼はタクトに隔意があるわけでもなかった。そのくらいの冗談が言える程度には、兄弟の関係も改善していたのだから。

それに、アキオから見たクレッシェンドは十分に大将クラスの働きが可能な有能な指揮官でもある。

特に空母部隊の有用手腕では、皇国でもトップクラスの逸材であった。

「それにしても、我が愚弟はこの集まりに来ないんだな」

「タクトのお仕事は特殊ですからね」

こんな酒しか楽しみが無いラウンジで年上の野郎達と駄弁るくらいなら、ムーン・エンジェル隊のメンバーと仲良く食事でもしていた方が皇国にとっては有益であるというのが、あの部隊の特殊性でもあったからだ。

アキオがそれを説明すると、クレッシェンドは納得したような表情を浮かべていた。

「何だ、今日はタクトは来ないのか。後で、顔でも見に行くか」

そしてクレッシェンドの隣の席には、見慣れないが見た事があるような若い男性将官が座ってワインを飲んでいた。

年は、少しクレッシェンドよりも若く、タクトよりも年上に見えて、しかもその雰囲気はタクトにも似ている。

つまり、彼がタクトの二番目の兄なのであろう。

「レイトンの御察しの通りだ。俺の弟でタクトの兄でもある……」

「次男のフォルツァンド・マイヤーズだ。宜しく、レイトン大将閣下」

アキオから見たフォルツァンドは、中庸というか平均的な人間見えた。

一番上の兄であるクレッシェンドよりは温和であり、末弟のタクトよりは弾けてもいないのであろう。

階級将を見ると中将ではあるので、この家の兄弟は全員が有能な

軍人としての素養を持っているようであった。

「大将閣下は止めて下さい」

「でも、実際に大将閣下だからな。最近は、若い世代に期待の新人が多い。これも、国が発展・拡張する前触れかもしれない」

内戦による古い価値観の完全破壊と、それを信奉していた古い考えを持つ保守層たる貴族階級の没落。

いまだに情況は困難ではあるが、これは新しいトランスバール皇国が経験する産みの苦しみかもしれない。

そう語るフォルツァンドに、どこか哲学的な物を感じてしまうアキオであった。

「こいつはどこか飄々としている癖に、仕事は真面目に器用にこなすからな。今回は、下で使う事にしたんだ」

兄ほど厳し過ぎでもなく、弟ほど柔らか過ぎでもない。

きっと子供の頃から上と下の兄弟二人を見て、上手くその間に収まるようにと自然となっていたのであろう。

アキオは一人っ子なので兄弟の事は良くわからなかったが、真ん中の子供とはそういうものなのかもしれないと思ってしまう。

本当はエリオスがいるのだが、アキオとしては彼と接した経験が少なく、感覚的には自分は一人っ子であると思っていた。

「役割としては、兄の緩衝材ですかね？」

更に色々と話を聞くが、彼は軍人としてはかなり器用な部類に入

るらしい。
ある程度は何でもこなせるし、兄ほど尖っていないので上に噛み付くような真似もしないし、タクトほど柔らか過ぎるという事もないので生真面目な軍人にも嫌われず、両者の調整役としても上手く動ける人間らしい。

なるほど、大将になって部下が増えたクレッシェンドが呼び寄せただけの事はある人材ではあった。

「レイトンは、今はムーン・エンジェル隊の副司令だったよな？」

「悪いが、また転任じゃ」

「急に決まった作戦でしたから、覚悟はしていましたよ」

アキオは、自分に転任を告げるウォッカ上級大将に、それは予想していたと返事をする。

「正式な辞令は、明日に昇進の辞令と共に渡す。第一直衛艦隊という、所謂タスクフォースを臨時に編成してお前に任せる。任務は……」

「惑星ジュノーを強襲するエルシオールの護衛。占領後のジュノーに安定した軍政を敷く。ライブラリーの無傷での確保と、その情報を無事に吸い上げて送る。補給路をジュノー側から出来る限り守る。他にもありますか？」

「いや、その内容で概ね大丈夫かの。さてと、明日から忙しくなるからの。今の内に寝ておけよ」

ウォッカ上級大将の締めの言葉によって集まりは解散となっていたが、その間にアキオはキープしていた大量の酒類を全てみんなに飲まれてしまっていた。

「御代は、ルフト先生だから問題はないか……」

ところがそのあまりの金額に、ルフト宰相は翌日目の玉が飛び出るほど驚く事となる。

だが払うと言った手前、彼は泣く泣く黙って支払う事となるのであった。

「辞令を交付するぞ。アキオ・レイトン大将を、第一直衛艦隊の司令に任命する。なお、副司令にはレスター・クールダラス中将を任命する」

翌朝アキオは、昨晩の話通りにウォッカ上級大将から昇進と転任の辞令を同時に受け取っていた。

隣には、やはりウランフ大将が指揮する艦隊から転任してきたレスターも同席していて、彼も同じ辞令を受け取っている。

「さてと、お互いに見慣れた顔同士だが宜しくな」

「ああ、でもタクトは大丈夫か？」

お互いに着任する艦隊は、あくまでもエルシオールを護衛するために急遽編成される予定の艦隊で、彼らは常にタクトの傍にはいる事になっている。

だが、今までタクトの怠け癖に対応してきたレスターからすれば、その役割をエリオス一人だけに任せる事に一抹の不安を覚えているらしい。

「あの甘ちゃんだと、タクトに怠け放題にさせてしまうかもとか考えているのか？」

「大丈夫だとは思うんだが……」

ところが、その心配は無用かもしれなかった。

昨日の関係者一同を集めて行われたヴァインとルシャーティーからの情報提供の後、どういうわけかタクトに勤勉の虫が沸いたらしく、昨日も夜遅くまで戦略プランを練っていたとのランファからの話しであった。

どういう風の吹き回しかと思ったアキオであったが、思えば最近の彼はルシャーティーと接している事が多い。

ミルフィーユという恋人のいる彼であったが、あの儚い美少女に頼られるというのは、一人の男としては奮起せざるを得ない情況なのかもしれなかった。

ただ、そのせいで微妙にミルフィーユは不機嫌になっているらしいのだが。

「そうか、俺は先にタクトの様子でも見に行くよ」

「アルモも連れてか？」

「ああ、アルモも久しぶりにみんなと会いたいだろうしな」

「じゃあ、ゆっくりして来てもいいぞ。どうせ今日は、ノアから艦隊の装備の概要を聞くだけだし」

アキオの指揮する直衛艦隊は、彼が軍務省戦備部第一部長をしていた時にノアと共同で計画した、新型省力化艦艇や兵器類の最新バージョンを装備する予定になっていた。

人員を極力減らして補給の負担を減らすのと、言い方は悪いが作戦内容が内容なので、シビアに人員の損失を極力減らすための処置でもあった。

人員が五十人以下で運用可能な高速戦艦、三十名以下で可能な高速装甲艦と巡洋艦、十五名以下の駆逐艦に、その他にも雑多な艦艇類も付属する。

それと、数隻の小型空母部隊も追加で装備されるらしいのだが、この艦載機の大半は無人で運用させる事になっていた。

一部、ベテランパイロットも転任してくるが、その人数は十名ほどであり、残りは彼らや空母からコントロールされてシムス高速戦闘機の最新改良バージョンを動かす予定になっていた。

実は、あまりの戦力の拡大に空母を運用する人員やパイロットが極端に不足していたからであった。

パイロットの養成は年単位で時間がかかるが、それをバカ正直にヴァル・ファスクとの戦いで普通に使い、大量の無人コントロールで飛んでいる敵戦闘機群にポロポロ落とされては堪らない。

アキオは、これに対抗すべくＡＩと外部からコントロールする無人戦闘機部隊の運用と、今回のような作戦に合わせて、鹵獲兵器などをすぐに使えるように修理可能なロボット類の配備も決定してい

た。

現地で敵から奪った兵器を素早く修理して、次の戦いで使う。どうせ無料で得た鹵獲兵器なので、いくら無人コントロールで特攻などをさせても惜しくは無いし、費用効率の面でも優秀である。

アキオは、自分を無人戦闘機の特攻で負傷させたロウィルに何倍もの規模で仕返しをするつもりでいた。

それと他にも新兵器類はあるのだが、これらは基本的には既存品の流用や改良で済ませていて、コストや整備性に極力負担をかけないようになっている。

とはいえ、実は辺境に派遣されていたアキオはノアの最新の成果を良く知らず、これから説明を受ける予定であった。

「どうせカタログは配布されるから、レスターはそれを見れば問題ないさ」

「そうか。では、遠慮なく」

エルシオールに向かうレスターを見送ってからノアのいる艦船建造用のドッグへと向かうアキオであったが、その前方に意外な人物の姿を確認していた。

「ちとせじゃないか。エルシオールにいなくて大丈夫なのか？」

「はい、今日は非番ですから」

「非番なのか？」

「ええ、作戦前に交代で休暇を取ろうという事になりまして」

それに、緊急時にはすぐにエルシオールに駆け付ければ問題はないとちとせは答えていた。

「あの、お付き合いします」

「でも、非番じゃないか」

「私は、アキオさんといると落ち着くんです」

「なっ！」

ちとせは、そのままアキオと腕を組んで一緒に歩き出してしまう。

さすがに、これには動揺を隠せないアキオであった。

「昨日ですが……」

「昨日？」

「はい。昨日のアキオさんは、自分の胸に仕舞い込んで、自分だけが泥を被れば良いと考えている事が多かった。違いますか？」

「……」

アキオは、ルシャーテォーとヴァインを疑っている。

昨日の二人からの話で、シャトヤーンなどは彼らをシロと判定していたが、アキオはかえって彼らに対する疑惑を深めている。

なので密かに監視は続けていたし、もしボロを出せば最悪殺す事

も躊躇わないつもりでいた。

それと、対ヴァル・ファスク戦における旗艦に座上するヴァル・ファスクのみを殺す戦術。

アキオは、自然とそれをノアと準備した新兵器類で実行しようと考えていた。

どういうわけか、彼女は白き月の天使達で、彼女達にいくら他種族とはいえ人殺しはさせたくないと感じてしまったからだ。

人殺しは、自分か本職の軍人達で行えば良いと思ってしまったのだ。

だが、その考えはちとせに見破られていたらしい。

アキオは彼女にその件で追求を受けて、もはや腕を組んできたちとせに何かを言う余裕すら無くなっていた。

「確かに人を殺す事は良くないと思いますし、それを私のような年代の女性にさせたくないと思うアキオさんの気持ちは理解できます。でも、少なくても私はそれを覚悟して軍人になったのです。アキオさんがその件で私を除外するのであれば、それは私に対する侮辱です」

何でも嫌な事から大切な人だけを除外して、自分だけが泥を被れば相手が喜ぶと思ったら大間違いである。

ちとせは、大切な物を守るために人を殺す覚悟をして軍人になったとアキオに告白する。

勿論、殺さないで済めばそれで御の字なのであろうが、世の中がそう甘くはない事もちとせは十分に理解していた。

「それに、私達はエオニアの乱で直接的にも間接的にも人を殺しました。ネフューリアとの戦いの時もそうです」

エオニアを直接討ったのはクロノ・ブレイク・キャノンを発射したエルシオールのクルーと命令を出したタクトであったが、その情況に持っていくまでに手を貸していたし、ヘル・ハウンズ隊やエオニアに組した兵士達なども複数殺しているはずで、ネフューリアに関してもそれは同じであろう。

なので今更だと、ちとせは考えていたのだ。

「ランファさんは、何も言わないのですか？」

「ランファは、俺の行動を見守ってくれている」

ちとせは、出来る限り自分で何でも背負い込もうとするアキオが心配で堪らなかった。

ランファも同じく心配はしていたが、彼女はアキオを信じていて、もしその手に負えなくなれば無条件に手を貸すつもりでいた。

正直なところ、どちらのタイプがアキオに相応しい女性なのか？

それは、誰にもわからないというのが実情であった。

「私は、ランファさんと考え方が違うのかもしれません。それに、いくらアキオさんが今の時点でランファさんを選んでいたとしても、私はアキオさんが心配です。お願いです、変に全てを背負い込もうとしないでください。私に少し荷を分ける狡さを選んでください」

「ちとせ……」

「そろそろお時間ですね。では、ノアさんの元に行きましょうか」

今日は完全にちとせに翻弄され続けているアキオであったが、今も彼女に手を引かれながらノアの待つ艦船建造用のドッグへと移動する。

するとそこでは、どこか不機嫌そうな表情を浮かべるノアと、そこにもう一人ミントの姿を確認していた。

「ミントもか？」

「ええ、今日はちとせさんとお休みをいただきましたので」

「ノアは、なぜかご機嫌斜めか……」

「そんな事は無いわよ」

ノアとしても、実はミントの来訪は痛し痒しの部分があった。

実は、大分先まで軍艦の建造計画が存在していたので、アキオが指揮する艦隊の装備に使っているレアメタルやレアアースの一部が不足して困っていたところに、それを知ったミントが実家であるブラマンシュ財閥から在庫分を吐き出させて解決していたので、彼女をこの場に呼ばないわけにはいかなかったのだ。

「（アキオと二人きりで装備の説明を……って！　私は何を考えて！）ええと、まあそういうわけよ……」

「なるほど」

アキオはノアから、この艦隊が予定通りに準備可能になったのはミントのおかげであると聞き、改めて彼女が究極のお嬢様である事

を思い出していた。

それと、もう一つ。

今までのミントは、自ら実家に関わる事を良しとしなかった。実家を出て白き月で巫女をしていたのも、ブラマンシュ財閥の影響力から逃れたいと考えていたからであり、今では没交渉状態であった父親ともある程度は関係を修復させていたが、それもまだ完璧とは言えない状態にある。

それでも、彼女は己の信念を曲げてアキオのために実家にお願い事をしていた。

勿論、エルシオールを守る楯となる艦隊であったので、タクト達のためであったのだが、メインは間違いなくアキオ本人のためであろう。

「ミント、君のお父君に無理なお願いをさせて済まなかった」

「いえ、父は溜め込んで相場の上昇を狙っていたようですけど……」

「ダルノー氏は、そんな狭量な方ではないさ。一時的に全ての在庫を放出しても、後でその資源が無くなれば、相場は狂乱的に上昇してしまうからね。それは、混乱しか生まない」

それらのレアメタルやレアアースは、アキオが保持している惑星ウニからは産出しない種類の物で、トランスバール皇国領内でも既に産出する鉱山は少なかった。

更に、ここのところの軍拡と復興でその需要は高まっていて、ブラマンシュ財閥としても必要量の確保に苦労しているはずであった。

皇国がここ暫く領域を広げないで停滞していたツケをモロに受けている資源であり、どのみち皇国は外部辺境宙域に進出する必要があったという事なのであろう。

「最近新たに抑えた宙域に、複数産出する鉱山や小惑星などがあったはずだ」

多分、抜け間の無いブラマンシュ財閥であったから、既に調査と試削は行っているはずであった。

だが、まだ完全に安定していない宙域なので、まだ実際に掘り出された量は少なく、とても需要を満たせるほどではない。

それでも在庫を軍に放出してくれたのだから、それは間違いなくダルノー氏の善意から出ているのであろうと感じるアキオであった。

「父は、アキオさんの軍人としての力量に賭けたのだと思います」

それに、もしこのままトランスバール皇国がヴァル・ファスクに敗北して占領されしまえば、今まで築き上げた財産も、大事に保管していた資源も全て奪われてしまう可能性がある。

ならば、ここで賭けのチップとして放出する事に異存は無く、放出する先は娘が好意を抱いている男性が使う戦備のためにと限定する不公平も、時には許されるであろうと。

ダルノー氏は、快くミントからのお願いを聞き届けて資源をノアに渡していたのだ。

「俺にか？　タクトではなくて？」

「いえ、アキオさんにです」

ダルノー氏は巨大な財閥の当主であり、多くの従業員達とその家族を支える義務も存在している。

そのためには、時にはまだ幼い娘に嫌悪されるような決断も下して来ていた。

そんな世間の現実と接して来た彼は、皇国の英雄と称されるタクトを高く評価はしていたが、どこか醒めた目で見ている部分も存在していた。

確かにタクトは、庶民的で、カリスマがあって、戦略家としても一流の力量を持っている。

まさに英雄としての力量を持つ人物であり、ダルノーは人並み上に好感も持っている。

だが彼はやはり貴族の生まれで、その生まれの良さからどこか苦労を知らない部分があり、一代で成り上がったダルノーからすれば、どこか自分とは違う人種であると感じていたのだ。

『タクトさんは、堅苦しい貴族の実家から半ば勘当の身とか？』

『ミント、確かにそれは事実だ。だが、彼にはその境遇を選べる幸福が存在しているのだ。別に私は、彼を嫌悪しているわけではない。むしろ、素晴らしい人物だと思う。だが、私にはもっと素晴らしいと思う人物がいるのだ』

『アキオさんですか？』

『ああ、そうだ。私は、お前が彼を好きになったと聞いて、嬉しく思っている』

ダルノーから見たアキオは、若い頃から常人では到底乗り越えられないか、もしくは乗り越えても人格が歪みそうな苦労をしながらも、それを乗り越えて来た部分にあった。

少し前まではたまに見え隠れする影が気になっていたのだが、あのタクト・マイヤーズやムーン・エンジェル隊と接したせいであろうか？

良い意味で性格が砕けて来たと、ダルノーは感じていたのだ。

『私は、決して彼がタクト・マイヤーズに劣る人物だとは思わん。人には、それぞれ役割がある。だが、時にはその能力を駆使して飛雄する時があるのだ』

ＥＤＥＮの中心惑星であるジュノー攻略作戦は、つい昨日その実施が確定したばかりの作戦であった。

それを昨晩通信を入れて来たダルノーが知っているとは思わなかったし、実際に資源が送られて来たのは数日前の事であった。

ミントはせっかくアキオが立案した戦力の建造が遅れるのを個人的な感情で嫌だと思っていて、更にはこの戦力を後にアキオが指揮する可能性が高いと予想して、ダルノーに備蓄物資の供給を頼んでいたのだ。

「ＥＤＥＮの中心惑星の開放ともなれば、その功績は後世に残ります。アキオさんにとっても踏ん張り所だと思いますわ。この作戦はタクトさんが総大将ではありますが、アキオさんの活躍も必要なの

です」

ミントは昨晩の父親との通信を思い出しながら、アキオに発破をかけるように励ましの言葉をかけていた。

ヴァル・ファスクとの戦争が終わらなければ軍は辞められないと思っているアキオにとって、この作戦は最後の大きな仕事になるかもしれない。

ならば、最後はその実力を遺憾なく発揮して欲しい。

そんな風にミントは考えていたのだ。

「そのために、私は狡くも父にエコヒイキをお願いしました」

「だが、ミント。俺は……」

アキオは、彼女をフってランファを選んでいる。

なので、その好意を受け入れる資格がないと感じていた。

「別にブラマンシュ財閥が損をしているわけでもないのですら、気にする必要はありませんわ。私は、アキオさんが好きで自分の勝手で動いているだけなのですから。それと……」

いつまでも任務とは関係ない話をしても仕方がないと思ったミントは、最後の懐からお守りのような物を取り出していた。

「幸運のお守りですわ。私に直接かけさせてくださいな」

「ああ……」

ちとせにミントにと、今日は完全に女性陣に押されっはなしのア

キオは、小さい声で了承の返事をしていた。
背の小さいミントは、椅子に上がってから持参したお守りをアキオの首に掛けていたが、次の瞬間あっという間に目を閉じてそのまま唇を重ねていた。

「（えっ！）」

「なっ！」

「まさか……」

まさかの展開に、アキオのみならずノアやちとせすら絶句してしまう。

「幸運の、乙女からのキスですわ」

その後は、真面目にノアから新装備に関する情報を聞くアキオであったが、ノアはかなりご機嫌斜めで、結局実物のご披露は明日以降に延期されてしまっていた。

更に、アキオもその日は意識が上の空のままで、夜にはランファから心配されてしまうほどであった。

だが、そこで真実を語るわけにもいかなかった。

恋人とは別の自分以外の女性にキスをされたなどと言って、それでそのまま無事に終わるはずもなかったからだ。

「今から疲れてどうするのよ」

アキオは、そんな事があったとは微塵も思っていないランファから、まるでからかわれるようにそう言われてしまうのであったが、ただ一つ言える事は、ちとせもミントもまだ全然自分を諦めてはいないという事と、そのためには手段を選ばなくなっている事実であった。

そして、その三人による感情の交錯が、今まで強固であったムーン・エンジェル隊の結束に皹を入れる事になるとは、今の時点では誰も気が就いていなかったのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1163g/

恋を忘れた男

2011年12月18日15時07分発行